

パンツ脱いだら通報された

烈火1919

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無職となのはちがてんやわんやする物語です。

※自サイトにも連載中

# 目次

無印

01.	俺、無職	1
02.	ちよつとこい	4
03.	おっさんと過ごす夜	9
04.	無職の朝は早い	16
05.	たのしいお昼	20
06.	おっさんで遊ぼう	25
07.	MとMと ときどきSと	29
08.	コイキングなのは	34
09.	高町なのはの憂鬱	39
10.	白パン大好き スカリエツテイ	43
11.	円環の理に導かれたガジェットドローン	51
12.	墓前に捧げる一つの酒	55
13.	六課へおでかけ!	66
14.	コイキングの本気	71
15.	マスコット作戦	76
16.	「速報」 スカさんが生還した	80
17.	キレルはやてにご用心	86
18.	犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン!	
92		
19.	犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン!	
	(裏側)	
20.	スカさんとお話し	97
21.	初恋語	108

2 2. 幼女ヴィヴィオ | 121

2 3. 恐怖するヴィヴィオ！ ギャラドスなのは黒い影っ!?

128

2 4. それでも俺はやってない。 | 132  
          というのは嘘だ

2 5. デッドorデッド | 137

2 6. 聖水 | 144

2 7. ターニングポイント | 155

2 8. 背中で語れ | 162

2 9. ギャラドスでもわかるリリカル昔話 | 170

3 0. おそばつくるよ！ | 178

3 1. おそば準備してよ！ | 183

3 2. おそばまだ!?! | 187

3 3. 食べる前にスパイスを | 194

3 4. 彼が此処にいる理由 | 203

3 5. 最後はサツパリと | 218

3 6. 脱・無職 | 224

3 7. ゲリピーはエントロピーを凌駕する | 228

3 8. ラブホテル・性王教会 | 232

3 9. バイト一回目 | 237

4 0. おっさん、事件です！ | 250

4 1. 新しいバイト先 | 260

4 2. 視察？ | 270

4 3. キャツサリ〜ン！ | 277

4 4. ホモと女装と深夜のテンション | 290

4 5. ホモ疑惑 | 309

46.	サーカス団	318
47.	ありがとう	327
48.	英霊になったとしても誰にも呼ばれないと思う	343
49.	ひよつとこの命をかけた一発ギャグ	346
50.	五歳児 v s 十九歳児	355
51.	ヴィヴィオ！ ヴィヴィオ！ アプラック！	363
52.	新しい家族が増えました！	371
53.	パパと呼んでくれた日	383
54.	朝ですよ！	405
55.	S+のディフェンス	410
56.	朝の一コマ	417
57.	お祖母ちゃんだと年寄りだけど、ママのママだと若いイメ	424
	ジがあるよな	
58.	リンディメツシュ	431
59.	ロリ	438
60.	おっさん久しぶり	449
61.	パパ力はまだ高くない	456
62.	恋の病	463
63.	帰省の朝	475
64.	少しの休憩	482
65.	翠屋	490
66.	高町なのはのパーフェクト教導教室	499
67.	ガークンにも苦手なものは存在するみたいです	508
68.	俺の股間がカンピオーネ	517
69.	69だけでもう、えらいことを妄想するよな	526

9 4.	曲芸 6	803
9 3.	小休憩 3	793
9 2.	小休憩 2	786
9 1.	小休憩 1	779
9 0.	曲芸 5	764
8 9.	曲芸 4	755
8 8.	曲芸 3	743
8 7.	曲芸 2	736
8 6.	曲芸 1	728
8 5.	開幕	705
8 4.	浴衣店 2	691
8 3.	浴衣店	680
8 2.	一難	668
8 1.	海鳴初の男	662
8 0.	夜の騒ぎ	648
7 9.	はやてスウィートデビル	626
7 8.	風邪	613
7 7.	ヴィヴィオの冒険②	601
7 6.	ヴィヴィオの冒険	593
7 5.	動き出す歯車	583
7 4.	甘くはない	577
7 3.	翠屋で頑張ります！	569
7 2.	意気地なしのあなた	557
7 1.	男たちのビーチフラッグ	543
7 0.	サメきたらしいよ	535

A, s 17.	ぺろぺろ	1064
A, s 16.	休日(後編)	1046
A, s 15.	休日(前編)	1036
A, s 14.	カルピスの化け物	1026
A, s 13.	あなたはあなたのままだから	1008
A, s 12.	一撃必殺ホワイトブレイカー	1001
991		
A, s 11.	ショックだったリンディさんと秘密のレイハさん	
A, s 10.	お風呂なの	979
A, s 9.	ヴィヴィオの小学校はどこ?	958
A, s 8.	ヴィヴィオ可愛いよヴィヴィオ	943
A, s 7.	犯人はヤス	934
A, s 6.	熟女ははしやぎメール打つ	922
A, s 5.	ストロベリーパニック	914
A, s 4.	高町なのははDKらしい	903
A, s 3.	500円のお買い物	892
A, s 2.	ソファーでの出来事	884
A, s 1.	逃げられない	877
A, s		
	あとがき	875
	最終回・葉	869
	98. 閉幕	843
	97. 曲芸9	833
	96. 曲芸8	825
	95. 曲芸7	814

A,	S 4 2.	健康診断、午後部	
A,	S 4 1.	健康診断、午前部	
A,	S 4 0.	シグナム先生のムフフな授業（後編）	
A,	S 3 9.	シグナム先生のムフフな授業（前編）	
A,	S 3 8.	よーでた	
A,	S 3 7.	問題解決？	
A,	S 3 6.	疑問多々	
A,	S 3 5.	一家崩壊1秒前	
A,	S 3 4.	一家崩壊5秒前	
A,	S 3 3.	ツーカーの仲2	
A,	S 3 2.	ツーカーの仲	
A,	S 3 1.	ご褒美	
A,	S 3 0.	ようせいさん目視できる人多発警報	
A,	S 2 9.	ぺろぺろさん	
A,	S 2 8.	キミの想い、魔力にのせて	
A,	S 2 7.	なのはスネる	
A,	S 2 6.	オムライス	
A,	S 2 5.	ご褒美試験	
A,	S 2 4.	ヴィヴィオ、初敗北	
A,	S 2 3.	球技大会 — 終 —	
A,	S 2 2.	球技大会⑤	
A,	S 2 1.	球技大会④	
A,	S 2 0.	球技大会③	
A,	S 1 9.	球技大会②	
A,	S 1 8.	球技大会①	



A  
S  
4  
3.  
取材

## 無印

### 01. 俺、無職

「時というものは残酷なものである。9歳でロリロリでツインテールで天使のような幼馴染も昔は“魔法少女”といわれみんなに可愛がられたものだ。バリアジャケットだって小学校の制服を参考にしたらしく9歳という年齢も相まってそれはそれは可愛いものであった。しかしどうだろう……10年の歳月が過ぎ、その幼馴染も随分とかわってしまった。あの純粹無垢だった幼馴染はいまは19歳にもなるのにいまだに“少女”と信じて疑われないらしい。本当に俺と3年間高校に通ったのかと疑いたくなくなってくるほどである。髪型にしてもそうだ、いつもはサイドテールにしているのにここぞというときにはツインテール。確かにツインテールはかなりの萌えポイントであるがいかかなものかと思う。極めつけはあのバリアジャケットである。あれっていまだに小学校の頃の制服をモデルにしているみたいだし正直コスプレにしかみえない。いいのか、管理局。おまえらのエースこれでいいのか?」

「二トの人には言われたくないんだけど……」

一人さびしく家でゲームをしながら、幼馴染のことについて考えているとどうやら口から出ていたらしくたったいましたが帰ってきたであろう高町なのはに聞こえてしまった。ここ、俺の部屋なんだけど……

「というか、この家は私とフェイトちゃんが一緒に借りたんだからね。あまり変なことしないでね?」

「変なことって、なのはやフェイトの下着を洗濯すると見せかけて実は俺の部屋に隠してるとかのこと?」

「ちよつとまって、いまの議題について3時間ほど話し合おう」

「オーライオーライ、まずはその魔力弾を消してくれ」

ちよつとした冗談のつもりだったのだが、意外になのはは怒ってきた。

「もう……そういう冗談は禁止だつて言ったでしょ？ まったく、高校を卒業してもかわらないんだから……」

「19歳にもなつていまだにいちごパンツ履こうとする奴に言われたくないよ」

「ちよつとなんで知ってるのッ!?!」

なんかすんごい勢いでこちらに近寄りその情報を流したのは誰かと問い詰めてくる。地味に首が絞まって痛いのですが……。それにいちごパンツの件なら桃子さんが嬉しそうに話してましたよ。

みなさんお察しかと思いますか、この可愛い女性、高町なのは俺は幼馴染である。俺の親となのはの親——士郎さんと桃子さんがとても仲がよかったのである。その関係上、小さい頃から二人でよく遊んだり、なのはで遊んだりしていてももそういつた関係が続いている。

「そういえばなのは、何しに来たんだ？ 今日19時に帰ってくる」とメールがきたのを覚えているんですが」

「うん、その予定だったんだけどちよつと帰りが遅くなりそうだからそれを伝えようと思って」

「そんなことでここまで？ あいかわらずやることがすげえな。えーと、帰りが遅くなるっていうとあれか、はやてが設立した部隊のこと？」

「そうそう、機動六課だよ。ようやくスタートしたし少しの間だけバタバタしそうなんだよな」

「いつもバタバタしてるじゃん。俺からバタなのなんて愛称で呼ばれてるし」

「うるさい。まあ、そういうことからだからちよつとの間だけ遅い帰りが続きそうなんだ。ごめんね！ 夕食用意しようとしてたんでしょ？」

「べ、べつにあんたたちのために作ろうなんて考えてないんだからねッ!?!」

申し訳なさそうな顔でなのはが謝ってくるもんだからとりあえずツンデレ系で返してみることにした。恐ろしいほどに無表情でこ

ちらを見返している。ゾクゾクするぜ……！

「まあ、事情はわかったよ。ほんじゃ、夜に食べても次の朝に胃がもたれないような夜食置いておくから適当にフェイトと食べておいてくれ」

「ふふっ、ありがと。それじゃ私行ってくるね」

「あいよー」

なんだかわからないが笑顔でお礼を言われたあと、なのはは手を振りながら俺の部屋をあとにした。そして丁度、玄関が開いて閉じられる音を確認する。さてさて……スーパ―にでもいつて食材買ってこようかな。俺の分は適当にカップ麺でいいや。一人分って作るとなるとどうもやる気が沸いてこないんだよな。

10畳ほどのフローリング部屋に、ベットや本棚、クローゼット、机、パソコン、テレビなどの生活感あふれるものが並んでいる。クローゼットから適当に服を着てサイフをジーンズのポケットに突っこんでから部屋を出た。

「あ、そうだ」

部屋を出たところとあることを思い出して戻る。机に置いてある写真立ての中で静かに微笑んでいる女の子に向かって優しく挨拶をした。

「行ってくるぜ、ミクちゃん」

ミクちゃん、無職だけど頑張るからね

## 02. ちよつとこい

「しまった牛乳買うの忘れてた」

夕食の買い物も終わり、さっさとカップ麺を食った俺はなのは達が帰るまでの間をゲームしながら過ごしていた。画面内ではポニーテールの女の子が頬を赤らめながら俺の名前を愛おしそうに呼んでいるところであったのだが――

「牛乳がないとなのはが怒るもんない。どんなに頑張ったところでフェイトの胸には勝てないというのに。あーでも行きたくないなー」

その場でぐずぐずすること3分、とりあえずゲームをセーブしてしようがなく牛乳を買ってくることにした。落ち度は自分にあるんだししようがないよな。

「あ、そうだ。このひよつとこ仮面を装着していかない」と

机の上に無造作に放り投げられていたひよつとこのお面をつける。そういえば昔はこれで泣いているなのはに追い打ちかけたっけ。

ひよつとこのお面をつけた俺は寝間着に黒のコートだけを羽織り家を出た。

このとき、素直に牛乳なんか買ってこなければあんなことにはならなかったのに……

☆

「あ、あの！なのはさん！」

「ふえ？」

ポツキーを食べながら仕事をやっている、新人であるスバルが声をかけてきた。スバルは熱血という言葉がよく似合うボーイッシュな女の子だ。いまはまだ経験も足りないけど磨けば光る素質をもっている。ちなみに私の直属の部下にもあたる。

「どうしたの、スバル。もしかして書類仕事でわからないことでもあったかな？」

「いえっ……その……あの……」

やはり上司と喋るのは緊張するのかスバルはちよつと言いくそ  
うにしていた。その気持ちは私の体験してるからよくわかるよ。  
自分より立場が上の人や目上の人と話すときって緊張するもんね。

なのははスバルが何か言うまで優しくほほ笑んで見守ることにし  
た。やがて意を決したようですバルはその口で大きな声でとんで  
もない爆弾発言をなのはにかました。

「なのはさんとフェイトさんが男の人と同棲してるって本当ですかっ  
!?!」

「ぶっ!?!」

思いもよらない発言になのはは唾を飛ばした、というか噴出した。  
そして慌てたようにスバルの口を塞ぐか時既に遅し。その場で  
残って仕事をしていた面々は面食らったような顔をしてなのはと  
フェイトのほうを交互にみていた。みるとフェイトのほうも驚き  
のあまり書類にいちご牛乳をこぼしたようで慌てて拭いている最中  
であった。

「あのッ、本当なんですかなのはさんッ！もしそうだとしたら私は  
どうすればいいんですか!?!」

どうすればいいのかはこっちが教えてほしい。なのははそう  
思った。一応、なのはの身内ならば彼のことを知っているのだが  
……いかんせん此処はつい先日できたばかりの部隊であり、そんな周  
辺のことの話よりもまずは書類などを片付けることが優先だと思っ  
ていたのだが――

「って、ちよつとまって！ どうしてスバルがそんなこと知ってるの  
!?! 誰から聞いたの!?!」

「そ、そうだよ！ 私もなのはも喋ってないんだからこの中に犯人は  
いるはずだよ！」

いちご牛乳まみれになった書類をドライヤーにかけながらフェイ  
トはこの場で仕事をしていた知人たちを振り返った。

ヴィータ・シグナム・シヤマル・ザフィーラ・はやて・リインフォー  
スの計6人に視線を走らせるフェイト。そして一人の女性に目

を止めた。

「は、はやてだね！」

「ちよつとまちいな!? なんでもいきなりわたしって決めつけるん!?」  
「だってはやてはなのはのポッキー食べようとして回避されてたじゃん」

その一言ではやての体が固まる。　どうやら凶星のようだ。

「ちよ、ちよつとまちいつ！　いずれわかることなんやし、1年間ともに過ごす仲間なんやで？　やっぱりあまり秘密にするものどうかと思つて、私はスバルに言つたんや。　わたしもスバルがあんな行動に出ると思つてなかつたんよ」

「ほんとうに？」

「ほ、ほんとや！」

立ち上がりながら必死に弁解するはやて。　なのはとフェイトはそんなはやてに疑惑の目を向けながらもひとまず落ち着くために座ることにした。

「まあ、いずれわかることだからいいのはいいんだけど……ねえ、フェイトちゃん」

「うん……それはいいんだけど……」

二人して溜息を吐く。

そのとき、フェイトの袖を誰かが引つ張る。　フェイトが引つ張られたほうに目を向けると自分の子どもたちであるエリオとキャラコが立っていた。

「どうしたの二人とも？」

「あのフェイトさん。　もしかしてひよつとこさんのことですか？」

キャラコがそう聞いてくる。

「えーつと、うん。　ひよつとこさんだね」

苦笑いしながら答えるフェイト。　確か自分が高校生るときに二人とも別々に彼に合わせたんだっけ。

彼は『宇宙一カッコイイ俺が会いにいったらその子たちが惚れてしまうではないかっ』とかなんとかいいながら、そばに置いてあったひよつとこのお面をかぶって会いにいったんだ。　それが二人にも

受けたのを覚えている。意外と彼って子どもには優しいところがあるんだよね。

そうそうその他にも思い返せばいろんなことが――

「僕もひよつとごさんに女の子がいっぱいいるゲームをもらったことは覚えてますよ」

「わたしはメイド服をもらったこと覚えてます」

――いろんな悪夢よみがえってくる

そう、確かに彼は渡していた。もちろんメイド服は私が回収、ゲームのほうはその場でたたき折ったことを覚えている。

『おいおい……そんな男大丈夫なのか？』

どこからかそんな声が聞こえてくる。……そして言い返せない自分が悲しい。というかもつと言ってほしい、あわよくば誰かに説教をお願いしたい。

お兄ちゃんとはなんだかんだで仲がいいし、ユーノに至ってはしよつちゆうメールしてるみたいだし。母さんはお買い物もまで一緒にいく始末。ほんと、誰かに止めてもらいたい。

とりあえず、わざわざわしだしたみんなを落ち着かせるためになのはと二人で説得してみよう。

フェイトは目配せでなのはに合図して、みんなに着席を促した。

☆

「お前、その手に持っているブラを渡せ」

「そうやってクンカクンカする気だろう。貴様に嗅がせる匂いではない！ 去れ」

迂闊だった……。あ のとき、家を出るときに気付くべきであった。

フェイトのブラを装着してたことを

何かがおかしいと思っていた。まず店内に入ってからの他の客が俺のことを露骨に避けていた。そして店員もどこかに連絡をしていたのだが……もちまえのポジティブさで地下アイドル（大嘘）の俺



が来たことで騒いでるのかと思いきや……まさか管理局員のおつきんに通報していたとはな。 やることがえげつないぜ

「お前さあ、いまの自分の状況わかってるか？ 俺も捕まえたくないの。 今月でお前のこと何回捕まえたと思ってるんだ？ こうやって俺とお前が職務質問するの何回目か知ってる？ 今月で10回目だぞ？ なんで3日に1回はお前のふざけたひよつとこお面を見なきゃいけないんだよ。 顔面粉砕するぞ、ミンチにすんぞ」

「奇遇ですね、俺もなんで3日に1回の割合でおつきさんと密室で過ごさなければいけないのかとずっと思っていたんですよ」

「それは俺だつて同じだよ。 いまからお姉ちゃんたちと遊ぶんだからさつさとこい」

おつきさんは溜息をつきながら俺のほうににじり寄る。

そもそもなぜ俺がこんな目に合わなければいけないのか？ 俺はひよつとこのお面をつけて黒のコートを羽織って、間違えてフェイトのブラをつけて牛乳を買いにきただけなのに。

おつきさんの足に合わせてこちらも下がっていくと、電柱のところに不審者の張り紙が貼ってあった。

『不審者に注意!! 黒のコートを羽織り、奇天烈なお面をかぶった下着泥棒が多発しております！ 住民の皆様はみつけたらこちらの番号までご連絡お願いします！』

「ほーう……なるほどね。 こんなところに同志がいるとはな。 もっとも下着泥棒はしないけど」

そしてこいつのせいで俺はおつきさんと密室で夜を過ごすことになるんだな。

俺は名前もしらない、顔も知らない相手に向かって呪いをかけることにした。

### 03. おっさんと過ごす夜

「はい、それじゃ椅子に座れー」

健闘むなしくおっさんに捕まった俺は交番へやってきた。そこではおっさんと二人きり。 みなさん、ちよつとだけ考えてほしい。

深夜におっさんと二人きりだぞ？ なにか間違いが起こるにちがいない。 ……そう、いつもは俺に冷たい態度をとるおっさんだつて深夜の密室という魅惑増量世界によつてその皮を脱いでしまうわけだ。

「あのな……いつもはお前に冷たい態度をとつてるんだけどよ……」

「ちよ、まてよ。 俺ら男同士なんだぜ……？」

「そんなことわかつて……！ だけど、俺のこの胸の高鳴りは抑えられないんだよー！」

「おっさん……！」

「……今日はまた随分と頭がおかしいな。 ついに蛆虫沸いたか？ 相談くらいはのつてやるぞ？」

おっさんが菩薩のようなほほ笑みでこちらをみていた。 なんか死にたくなってくる。

「いえ、持病が発症したんで。 もう大丈夫」

「そうか。 まあ若いときは色々あるもんだからな。 恋しかり友情

しかり」

「おっさんが言うときモイですね。 そういえば、おっさんは結婚してたよね？ 娘さんもいた気がするんだけど」

とりあえず話題をそらしてなのはたちが帰ってくるまでの間、退屈しのぎにおっさんと話しをすることに。

「まあな、これでも結婚してるぞ。 娘は二人いる。 長女が16歳

で次女が7歳だ」

「離れてるな。 でも長女はいい年だし、恋人の一人や二人いるんじゃない？」

「やっぱお前もそう思うだろ!!」

いきなりおっさんが身を乗り出しながらこちらに近づいてきた。  
近寄るなハゲ

「どうも最近おかしいんだ！ 家に帰ってくるのだって19時だし、この頃は化粧もしてる。それに服だってミニスカートやニーソとか萌え萌えで受けでいいのを買ってくるようになった！ これは絶対男がいる！ 毎日毎日学校でプレイしてるぞ、絶対そうだ！ もしかしてお前か！ お前がその男か！」

「落ち着けよおっさん、後半好きなシチュエーションが混じってるぞ」  
まあ、確かに学校でのプレイは興奮するよね、うん。しかしおっさんが娘さんをこんなに溺愛してるとは……、どことなく士郎さんを感じ出す。

士郎さんもなのはこのことになるとおかしかったからな。授業参観のときや合唱コンクールのときだってはしゃいでたし。父親というものはそういうものなんだろうか。

「だけど娘さんも17歳なんですよ？ だったら19時に帰ることや化粧なんて当たり前じゃないの。ミニスカやニーソだって可愛いから履こうと思っただけかもしれないじゃん。あんまり心配なら娘さんに聞けばいいだけの話だろ？」

「……この頃、口をきいてくれないんだ……」

「……ごめん」

項垂れながら絞り出すように呟いたおっさんはとても小さく見えて、たまらずそう返してしまう俺であった。

☆

「つまりや、その同棲まがいなことをしている男性はなのはちちゃんとフェイトちゃんの奴隷みたいなもんなんや」

『なるほど〜』

フェイトちゃんと二人で説明すること30分、身振り手振りを加えながら話していたのだがどうやらちちゃんと伝わらなかつたらしい……

「やつぱりそうですね！　なのはさんは女の子が好きなんですから、好き好んで男と同棲するなんておかしいと思っただけなんです。やはり奴隷用として置いておいたんですね！」

嬉々として私の手を握りしめながら離さないように話すスバル。この子の中で私がどういった位置に存在しているのかとても気になるのだが……聞いたら予想通りの答えが返ってきたので聞けない。「ち、違うってばスバル！　わたしやフェイトちゃんが管理局の仕事で忙しいから家事をお願いするかわりに住まわせてるだけだって！　ほんと奴隷みたいな扱いなんて断じてしてないから！　ねえ、フェイトちゃん!？」

「そ、そうだよ！　どちらかという奴隷より主みたいだよ！」  
確かにそれは間違っていないかも。我が物顔で家を占領してるし。いつも間にか家を改造してコスプレ部屋とか撮影スタジオ作ろうとしてたし。あの奇行に慣れてきた自分もアレだけど。

「そんな……だったら私はなにを信じて1年間頑張ればいいんですか！」

むしろ何を信じていたのかこの娘に問い詰めた。

「やめなさいよスバル。なのはさんたちも困ってるでしょ。それになのはさんたちは大人なのよ？　男性と同棲くらいするわよ！」

「そんな、ティア!?　ティアまでそんなことなの！　ティアだってなのはさんたちのこと信じてたじゃない！」

「ええ、信じてるわよ。けどね……だからってなのはさんたちに当たったら元も子もないでしょ？」

スバルの肩に手を置きながら優しく説得していくオレンジ髪をツインテールにした女の子、ティアナ・ランスター。この娘もスバルと同様私の直属の部下にあたる。魔力は低いが冷静な判断力と視野を広くみる目があり努力を怠らない娘である。

将来の夢はフェイトちゃんと同じ執務官らしいが、きつとこの娘なら立派な執務官になってくれるにちがいない。げんに、暴走してるスバルを正気に戻そうとしているし。

「——だからその男性のほうをコロコロすれば私たちのなのはさんは

戻ってくるのよ」

「その手があったか！」

訂正、この娘も暴走していた。　　というかい加減私の疑惑もどうにかしてほしい。

「あのね、二人とも。　　一つだけいいかな？」

「はい、なんですかなのはさん」

「ちよつとまってください、こういうことは部屋に入った後にいうのがセオリーなんだと思うのですが……」

「うん、そんな不安そうでありながら羞恥に悶えている表情なんてしなくていいよティア。　　絶対に思っていることと正反対のことという自信があるから。　　あのね、私はべつに女の子だけを好きってわけじゃないんだ」

「な、なのはその言い方だと……」  
「え？」

フェイトちゃんがオロオロした様子で話しかけてくる。　　なにか間違ったこと言ったかな？

「なるほど、男性も女性もどちらもいけるといわけですね。　　流石なのはさん……これがエースというものなんですね……」

「私勘違いしてました……！　　やはり女の子もいいですけど、それなりに男性の方もお付き合いしないとダメなんですね！」

「とりあえずいままでエースのなんたるかをわかってもらわれたら困るんだけど?!　　二人とも私が言ったことちゃんと理解したの!?!」

質問しようとした私だが二人ははしやぎながら席に戻る。

「ねえ、フェイトちゃん」

「うん、言いたいことはよくわかるよなのは」

顔を見合わせて、ひしつと抱き合いながら二人で呟く

「なんでわたしたちが女の子好きになってるの……」

こんな絶対おかしいよ

(・ω・)(・ω・)

／　　つ　　＼

「ただいま〜って、なんだ二人ともまだ帰ってきてないのか」

おっさんを慰めた後、速攻で帰ったのだが二人ともどうやら帰宅していないらしい。日付だって変わったというのにまだ帰ってきてないなんてお兄さん怒っちゃうぞ。

「と、いうわけで疲れているであろうあいつらを溺れさせるために風呂を沸かしました。温度は38°で二人をバカにするためにアヒルの遊び道具もいれておきます」

小さい子どもの遊び道具であるアヒルくんが何故この家にあるのかはわからないが、おおかた世間でアヒル口というけつたいなものが流行ったからだと推測する。

それはともかく、目の前には熱々の風呂。何故、俺がこんなものを用意したかというと……

「まずあいつらを風呂に入れて溺れさせます。すると二人のうちどちらかが悲鳴を上げるはずですよ。そこで俺が颯爽と登場するわけですよ。介抱という大義名分があるわけだから、世の野郎どもがうらやましくなるようなことだっただけでできてしまうわけである。流石だな、俺」

「ただいま〜、やつと帰れたよー」

「ほんと、大変だったよね〜……。あれから職場の空気がへんな空気になるし」

「ほんとほんと」

「おー、おつかれさん」

丁度風呂が沸きあがったところで二人が帰ってきた。二人とも、いかにもぐったりとした表情をしいている具合に弱っている。

「いまから夜食作るから、その間に風呂でもはいってこいよ」

「うわー！ お風呂沸かしておいてくれたの！ ありがとう！」

「べ、べつにアンタたちのことが好きで沸かしたわけじゃないんだから！ ただ、暇だったから沸かしただけなんだからっ！」

「フェイトちゃん、早く入ろう！」

「うん！」

見事にスルーされた。

さっさと風呂場に行く二人。俺はそれを見送ったあと、夜食を作るべく冷蔵庫へと向かう

「まあ、胃もたれしない食べ物だから……うどんでもいいか」

ふたり分のうどんとネギを冷蔵庫から取り出す。ネギを刻んでうどんを茹でる。とても簡単な作業のように思えるが茹でる時間で固さがかわつてくるから意外に難しい。いまだに完璧なゆで時間にあつたことがないのである。

キャーーーーー！！！！！！！！！！

ミクちゃんへのポエムを考えながら茹でてっていると、風呂場から叫び声が聞こえてくる。

これを……まっていた!!

火をとめ急いで風呂場へと直行する。あくまで人命救助である。

幼馴染が大変なことになっているんだ。俺は悪くないはず。

「どうした二人とも、倒れたか倒れたのか！ そうだといってくれ！」  
ガラリと開けたその先には、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンがアヒルではしゃいでいた。……あれ？

「……なにしにきたの？」

「……知ってた？ 俺って前世アヒルだったからさ、仲間を助けにきたんだ」

「へー……そうなんだ」

「うん。あとさ……この状況でいうのもなんだけど、フェイトのブラ壊しちゃった。ごめんね、フェイト」

アイドルばりのスマイルを出したつもりが、ひよつとこのお面をはがすの忘れていたため失敗に終わってしまった。というか、フェイトが指鳴らしながらこつちをみてるんですけど。だったらこつちも貴様も胸を凝視してやるよ。そう思ったところで、なのはの顔がドアップで目に映し出された。

「なにか言い残すことある……？？」

「うどん伸びるから、早めに食べてください……」

俺は目をつぶった。

直後訪れる鈍痛

叫ばれる罵声

そのすべてを受け入れながら、俺はアヒルさんを胸に抱く。頭の  
中にはそんな俺を見ながらも優しくほほ笑んでくれるミクちゃんの  
姿。

ああ……やっぱり俺にはミクちゃんが必要みたいだ。



## 04. 無職の朝は早い

『おはよう、ひよつとご。起きて、朝だよ』

「……………んあ？ ……もうこんな時間か。せつかくミクちゃんにす巻きにされる夢をみていたというのに……………」

ミクちゃんの抱き枕をそばに置きながら可愛い声でなく我がエンジェルが目覚ましを止める。おはようミクちゃん、今日も可愛いぜ。

「さて……………きようはジョギングにしとくか」

クローゼットからランニングシャツとハーフパンツを取り出して手早く着替えを済ませ、玄関でランニングシューズを履き外へ出る。うん、今日もいい朝だな。

☆

突然だが無職の朝は早い。というより俺の朝は早い。まず起床時間からして頭がおかしいと思う。なんといつても5時起きだ。といつてもこれにはちゃんとした理由があつてだな……………まず幼馴染の二人が6時には起きてくるのだ。仕事だとぬかしながら。

お前ら高校のときは寝坊して遅刻ギリギリだっただろうと言いたいところだが、これは成長の証なんだと思う。なのはの胸は成長してないけど。毎朝牛乳飲んでるのにな。

まあそれはおいといて……………二人が6時に起きるものだから俺は必然的に二人よりも早く起きて朝ごはんの準備や弁当の準備をしなければならぬ。ならもう少しだけ遅くおきてもいいじゃないかと思うだろう？ けどさ、体動かしておかないと太ったりするし、それが嫌なんだよね。だからこうやって5時に起きてジョギングしたり散歩したりしているわけですよ。

「おうおう……………ひよつとこくんじゃないかえ……………。おはような……………」

「じいさんおはよう。そろそろ天国へのカウントダウンがはじまりそうだけど犬の散歩して大丈夫なの？」

「えーえー、これはわしの唯一の楽しみじゃけんのう……………」

ワンワン！ ワンワン！

「……言ってるそばから犬逃げ出したぞ、jeeさん。 jeeさんが持つてるのリードじゃなくてTバックだからね」

「なんとっ!? わしとしたことがうっかりばーさんのテーバックを持つてきてしまった!」

ばーさん無理すぎだろ。 流石に若作りとかのレベルじゃねえよ。

「まあ、あんまり無理しないように気を付けてな」

あまり話し込んでいるのもなんなんで軽く手をあげて走り去ることにした。 jeeさんはjeeさんで楽しんでるようだし。

「さて、シャワー浴びて朝ごはん作るか」

適当に走って帰ってきた俺は、汗でべたべたしているシャツとハーパンを洗濯機にかけるとシャワーを浴びることにした。 べつにシャツもパンツもいま洗わなくても俺的にはいいのだけどなのはたちが嫌がるのでこうやって一人寂しく洗うことに。

あ、なのはとフェイトの下着発見。 とりあえず分泌液でもつけておくか……。 いや、さすがにそれはやめておこう。 本人たちが見ている前のほうが気持ちいいいな。

「それにしても弁当どうすっかな。 意表をついて逆日の丸弁当にでもするか」

シャンプーで髪を洗い、リンスをした後バスタオル一枚でそう決意した。 どんな反応をするか楽しみである。

☆

「というわけで台所につきました。 まずは弁当を作ります」

着替えたあと地底人と書かれているエプロンを着こなして台所に立つ俺。 気分はすっかり奥さんである。 新妻である。 裸エプロンでなのは達のベッドに飛び込みたい。

「さて……まずはなのはの弁当ですが、弁当箱いっぱい梅干しを敷き詰め中央に白米をそつと置いた愛情たっぷり逆日の丸弁当です」

作り始めて1分。 これは俺の中でも最速のタイムである

「お次にフェイトの弁当ですが、ミートボールとからあげとポテトサ

ラダにミニスパゲツテイ、そしてごはんを敷き詰めます。 とりあえずフェイトは太らせるために別の箱におにぎりを2つほどいれておくでしょう」

作り始めて20分。 なかなかの出来ではないだろうか。

結構ポテトサラダはうまく作れたと思う。 まあ、作り方は意外と簡単です。 まず材料はジャガイモときゅうりとハムと卵。 コツはしっかりと粉吹きのとときに水分を飛ばすことと半熟卵のとろとろかのである。 これが意外と難しい。 それにジャガイモだつて茹でるのに結構時間がかかるんだぞ？ お兄さんの秘密の魔法でそこは短縮できるけど。

そんなこんなで弁当を作り終えてお次は朝ごはんである。 食パンをトーストへ、冷蔵庫からバターといちごジャムを取り出す。 お次はハムと目玉焼きを作つて、ちぎったレタスやスライスしたにんじんなどをいれ自家製のドレッシングできれいに仕上げたサラダを3人分テーブルの上へのせる。 ふう……お次は二人を起こしにいかないとな

☆

「ウルフリー 目標地点へ到着した」

なのはとフェイトの二人部屋に足を踏み入れた俺は、ポケットにいれていた携帯を耳に押し当てながら届かない電波を発信する。

「というかアレだよな。 こんな姿してたらそりや世の人たちに女好きと誤解されるわ」

眼前で二人して抱き合つて寝ている光景をみながらそう呟く。

なのはとフェイトの間で押しつぶされているウサギになりてえ。

だが、そうはいつてられない時間帯になつてきた。 そろそろ二人を起こさないと大変なことになる。

「というこで、官能小説を朗読しながら二人を起こしたいと思います」

一度部屋に戻り持ってきたのは妹系女の子がのっている官能小説。

これで爽やかなモーニングをお送りすることに。

「宗谷の腰がズンズンと真奈美を突いていく。『いやんっ！ 宗谷、

もつとハゲしくう!!』」

「……なにやってんの?」

「……朝の発声練習かな」

身振り手振りを加えて熱弁しようとしたところで、なのはから冷凍ビームが飛んできた。あまりの冷たさに息子が縮み上がる。

「まあ、それはそれとして。朝ごはんできてるからさっさと食べるぞ。そろそろ時間帯なんだし、隊長二人が遅刻なんて恰好悪いぞ」

「うん、そうするよ。ほら、フェイトちゃん朝だよ」

「ううん……もつとお願い……」

「任せろ! 『真奈美、僕も限界』」

「いや、そつちじゃないから」

フェイトからのアンコールに応えようとしたただけなのにバタなのは本を取り上げてしまった。まったく、これで参考書が一つ消えてしまった。

なのはは寝ぼけているフェイトを起こすと、その場で本を破り捨て部屋から出ていこうとする——とところで振り返った。

「おはよう、今日も一日よろしくね」

「はいはい」

さて……送り出したあとは遊びに行くか



クイックルワイパーで床のホコリを取りぬいぐるみには専用のスプレーをかけて丁寧に拭いていく。ついでに靴下などが入っている場所から黒のストッキングを拝借し、頬擦りする。

その心地よさにうっとりしているのと洗濯機が俺を呼んだ。まったく……可愛がつてあげないとすぐ鳴くんだから。まったくそんなこんなで1時間30分ほどで家事を終わらせる。さてと……今度こそ遊びにいくか

☆

「それじゃ訓練終わりだよー、みんなお疲れ様ー」

『お疲れ様です!』

「おつかれ、なのは」

「あ、フェイトちゃん。おつかれさまー」

長い訓練が終わると同時に別の仕事をしていたフェイトちゃんがやってきた。

「それでどうだったの新人たちは」

「うん、みんな光るものをもっているよ!」

まだ経験が少ないけど、きつと此処にいる新人たちは将来管理局を支える子たちになると思う。 私たちのように。

「あ、そうだ。 みんなにこれ渡すの忘れてたよ」

「なんですか?! もしかしてラブレターですか!」

「落ち着きなさい、スバル。 まだ早いわ。 もっと好感度が上がってから……伝説の木の下で恥じらいながらなのはさんが渡しにくるはずよ。 ハア……ハア……テンション上がってきたわ……!」

「安心して、一生ないと思うから」

どうしてわたしの直属の部下は二人揃っておかしいのだろうか。 家には頭おかしいを通り越して狂ってる男性がいるというのに。

「それよりも、はいこれ。 今日から一年間使うノートです。 えーっと、これはですね——」

「なのはさんの手垢!」

「汗が染みついてるわ!」

「ちよつと話を聞いてっ!」

ノートに頬を摺り寄せる二人をヴィータちゃんが後ろから殴ってくれる。ありがとう、ヴィータちゃん。

「こほんっ。これは訓練のたびに感想を書いて提出するものです。見る人は私とフェイトちゃん和ヴィータちゃんとシグナムさん。毎回毎回その感想についてコメントしていきます」

「なるほど、文通というわけですね？」

「なのはさん……いじらしく可愛いです……」

どういった解釈をすればそこにいきつくのだろうか。というか、この娘たち絶対聞いてなかったでしょ。

「まあ、そんなわけですからちゃんと提出すること。それでは解散！」

「あ！なのはさん、一緒にシャワー浴びましょう！」

「肌と肌をこすり合わせましょう！大丈夫、なのはさんにならなにされても大丈夫です！」

「ちよつとまって、私の意見は!?!」

「わーい、フェイトさんお昼ごはんですよ！」

「うんそうだね、キャロ。訓練でお腹すいてるだろうからいっぱい食べようね！」

「はい！」

私の可愛い娘であるキャロが可愛く頷く。

「あれ、なのはさんとフェイトさんはお弁当なんですか？」

「うんそうだよ。彼が毎朝作ってくれるんだ。これがなかなかおいしいくて結構楽しみにしてたりして」

「そうそう、頭はおかしいけど料理は大抵できるよね」

家事もそれなりに出来るし、頭はおかしいけど。

「なのはさんのお弁当……なのはさんのお箸、なのはさんのお箸||間接キス。 間接キス……!」

「ちよつとまってスバル!! なにいきなり私のお箸を舐めようとしてるの!?!」

「スバル、まだ早いわ! 食べ終わってからにしないと」

「あ、そうだった。ごめんね、ティア」

「あれ？ 私には？」

「なのは大変だよ、家にいても六課にいても誰かに振り回されるような気がする……」

「さて……とりあえずお腹すいたしお昼にしようよ！ それじゃいた  
だきまーす！」

パカッ

オープン↓逆日の丸弁当

パタンッ

クローズ↓逆日の丸弁当

「あの……なのは？」

「……フェイトちゃん。一応、聞いておくよ？ 今日のお弁当の中身  
なにかな？ (#・▽・)」

「えつと……からあげとミニスパゲッティとポテトサラダとミート  
ボールだけど(\*・▽・\*)」

それを聞いた瞬間、なのはがものすごい勢いで携帯を取り出し誰か  
に電話をかけはじめた。

「ちよつと！ 逆日の丸弁当ってどういうことなの!? なんでフェイ  
トちゃんのはちゃんとしていてなのはのは嫌がらせなの!」

「うわー、本当になのはさんのお弁当梅干しがほとんど占領している」  
「ごこまでくると、中央にのせてある白ごはんが怒りを倍増させるわ  
ね」

「ちよつと聞いているの！ なんで逆日の丸弁当なのか聞いているの！

私の質問に答えて！ ——って、留守電じゃん!」

「落ち着いてなのは!?! 一人でノリツツコミしてるよ!」

怒りのあまりなのはが変になる。 というか、彼は留守電になんて  
いれてあるんだろうか？

「ん？ もう一つ箱がある。 あ、おにぎりが二つ。 それになのは  
が好きな具だ」

もしかして彼かな？ とうるか彼しかこんなことする人いないけ  
ど。 それにしても——

「許すまじ……!」



「なのはさん、私のごはんどうぞー!」

「むしろ私をどうぞー!」

——タイミングが少しだけ遅かったかも

## 06. おっさんで遊ぼう

「さて、俺の予想だと今頃なのはが電凸してきて留守電と会話したあげくノリツツコミをしている頃だと思う」

なんでわかるかって？ だってなのはだもん。 バタなのなめんなよ、小さいころなんか手足バタバタさせてダダこねてたんだからな。 そのたびにアメ玉あげて黙らせてたけど。

昔はね、愛玩動物みたいで可愛かったんだよ？ いや、いまも可愛いけどさ俺のこと殴ってくるもん。

「まあ、それを見越して俺は携帯を置いてきたから問題ない。 帰ったら怒られそうだけど俺のトークスキルでなんとかしてみよう。 まずは遊びにきたんだから精一杯遊ぶぞ」

少し大きな広場にきていた。 中央には噴水、そこから東にちよつといくと大きな芝生の遊び場があって、噴水の近くには他より一段高いへんな面積がある。 いまは大学生のあんちゃんたちがダンスの練習中である。

俺はそれらを横目にみながら持ってきたサッカーボールでリフティングを開始する。 コ○ンくんにも負けないぞ！

「しかしこのままリフティングというのも悲しいものだから、ここはひとつゲームをしようと思う。 ストラックアウトというものをご存じだろうか？ 9つのマス野球ボールやサッカーボールを使つてぶち抜くゲームである。 一昔前に流行つたような気がする」

かくいう俺も中学校時代にしたものだ。 いまだ6枚抜き記録は破られていないらしい。 いまの俺なら9枚抜きいけそうな気がするぜ。

しかし残念ながらここにはマスとなるものが一切存在しない……。 いったいどうしたものか。

「しょうがない、この前を通った人にぶち当てよう」

俺の餌食になった者は運がなかったということだ。 顔がバレないようにひよつとこのお面もつけることに。

一人目……女子高生

「推定膝丈20cm、生足をいかんなく見せており寄せてあげるブラを着用しているな」

俺の透け視力により基本的な情報を得る。高校生というものは一生のうちで一番のブランド品であり人生の中でも輝けるときだと思っている。現役という肩書が大事なのだ。高校を卒業してしまってもどうしてもコスプレにしか見えなくなる。

そう……なのはやフェイトのように。

女子高生とはいわば熟したリングゴなのだ。アウトかセーフかギリギリのラインにいるからこそ、輝きを放つ。それはまさしく線香花火のごとく、消え去る一瞬を華やかに彩るのだ。

「こう書くとなのはやフェイト、はやてたちがババアだと言っているみたいを感じるがそんなことはない。線香花火が終わったあとにやってくるのが打ち上げ花火だからである。いろんな人と出会い、好きな人と結婚し子どもを産み、育児をして子どもを成人になるまで責任をもって育て、その子どもの孫を抱き、孫の成長をめじりにシワを寄せながら見守り孫の成人を見届ける。それが終わったあとに彼岸の川で待っているであろう夫の元へと逝く。お別れのときは沢山の人が涙を惜しんで泣くまいと上をみる。それはまさしく打ち上げ花火と同じじゃないか」

此処になのは達がいたのなら感涙しながら俺に抱きついてくるはずだ。残念なことをした、その一瞬ならば胸を揉みしだくことができたというのに。あ、ちなみにフェイトの胸ね。

「しかしながらさすがに女子高生に向かってサッカーボールをぶつけるのはためらわれる。もつとこう……ぶつけても怒られなさそうなのはいいものか。ん？ あそこにいるのおっさんじゃね？ いい的発見したぜ」

女子高生より右におっさんを発見した。なにやら書類を手に持っているぞ。

いや、まてよ？ おっさんって管理局員だよな、日本でいう警察官みたいなものだろう？ そのおっさんに向かってぶつけるということ、すなわち現行犯逮捕につながってしまうのではないだろうか。

ただでさえブラックリストにのっている俺だ。こんなしようもないことで捕まるのはいただけない。それにおっさんには何かとお世話になっていいるはずだ、そんなおっさんにサッカーボールをぶつけることなんてできるのだろうか？

「それでも——男にはやらなければいけないときがある。こんなことしたくないけど、食らえおっさん！ 死にさせ!!」

『うおッ!? なんだいきなりボールが——』

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

全力で蹴ったボールは吸い込まれるようにおっさんの顔面へと熱いキスをしにいった。おあついねえお二人さん。ひゅーひゅー俺はそのままダンス練習をしていた大学生の中に突っこんでいく

「ついに全国制覇だぞ、おまえらー！」

『うおおおおおおおおおおおおおおお!!』

「次は国際大会だ！ てめえら、気合は十分かッ!!」

『よっしやああああああああああ!!』

「おい！ その中学生、胴上げするからちよつとこいー！」  
「えっ!？」

ノリのいい大学生に捕まって胴上げされる中学生。なんか忘れていいるような気がするがいまはこの幸せな気分を味わっておこう

「みんなありがとう！ みんなのおかげで俺はここまでこれた！ 本当、おまえらは最高の仲間だったよー！」

「……そうかそうか、よかつたな最高の仲間ができて。大切にしろよ?」

「うんー！」

「いい返事だ。ところで、なにか重要なことを忘れていいる気はしないか?」

「いや全然ー！」

「そうかそうか、それなら教えてやろう。——貴様の現行犯逮捕の瞬間だ、ひよつとこー！」

振り向くと鼻血を垂らしながら怒りのあまり角が生えたおっさんが立っていた。おっさんいつの間にか人間の皮を脱ぎ捨てたん？

「ごめんなおっさん、足が滑って」

「嘘つけ！ 貴様のセリフは聞こえとったわあ!!」

「きゃあああああああ！ おっさんが俺のケツ穴を狙ってくるう  
うううううううううううううう!!」

「逃げながらお前は何言ってるんだっ!?!」

そこからはじまるおっさんと俺の追いかっこ。 残念だったな、  
おっさん。 これでも俺は50m走で5.7を叩きだした男だぜ？

「待てといっておるだろうがああああああッ!!」

アメンボ走法で走ってくるおっさんに恐怖を感じた瞬間であった。

へ（、旦那）ノ

≡（「」ノ

／

## 07. MとMと とぎどぎSと

「まさかおっさんがあそこまで速いとは思わなかった。鼻血垂らしながら全速力で走るから余計に怖かったぜ」

おっさんと嬉しくない青春の汗を流した俺は帰宅早々シャワーを浴びながら先ほどのことをふりかえる。道行く人が振り返ってたけどこれからおっさんの信用が下がらないことを祈る。

「さて、シャワーを浴びましたので夕食の用意でもしますか。今日の夕食はなのはが好きなものにします。でない俺の頭からザク口が飛び出してしまうからです。ごめんねフェイト。絶対フェイトが好きなものも近日中に作るから」

案の定、携帯をみると着信が入っておりなのはのノリツッコミがはいつていた。これはパソコンのなのは専用フォルダに入れておくことにしよう。

それはともかくまずは夕食作りである。愛用の地底人工プロンをつけ台所へ

「今日は薄切り肉のゆば巻きとわんこそばと煮物でいこうと思いません。では助手のミクくん、説明を」

「は〜い！ まずは材料の説明です！ ゆば巻きは豚でもいいのですが折角なので牛の薄切りを使用します。お酒とお塩に包むための大葉と一緒に食べるためのカイワレ大根を用意します。あ、べつにカイワレはなくてもいいです。そしてちよつとしたスパイスとして黒胡椒やわさびをいれるのもありますね。湯葉巻きはお湯でもしゃぶしゃぶできるので、今回は豆乳でしゃぶしゃぶしましょう！ 豆乳は美肌効果やダイエットにもいいそうです、それと生活習慣病の予防にもなるみたいです。ミクには関係ないですけど！」「はっはーミクちゃん。そんなことしなくても君は十分可愛いぜ」「そ、そんなっ！ て、照れちゃいます……」

もちろん俺の一人芝居である。あまり料理を作っている最中に喋るのはよろしくないけど勝手に口が動くのだからしょうがない。

「さて、同時並行で煮物もやっていますますが、シンプルに大根だけにし

ときましよう。　　いつそのことふろふき大根にするのもありだな」

ふろふき大根にするためには米のとき汁が必要なんだけどたつぷりの水と少しのお米で代用しちゃおう。

「わんこソバは二人が帰ってきてから作るとして、ゆば巻きも二人が帰ってきてから最終段階にはいれればいいからもうやることはないな。

久しぶりに靴磨きでもしよう」

たしか革靴が汚れていたようなきもするし

「というわけで玄関である。　とくになにもない玄関なのだが、靴箱の後ろに年上系エロ本が挟まっていたりする。　正直俺も取ることができなくて焦っているのが現状だ」

さっさと読んでおけばよかった。

しゅこしゅここと革靴を磨きながら、ゲームの攻略法を考えていると外からふたり分の話し声が聞こえてくる。　どうやら帰ってきたようだ。

「ただいまー」

「おかえりんこ」

「ただいまん——あっ！　くくく!!」

フェイトが顔を赤くしながらなのはの胸に顔をうずめる。　フェイト、埋める人選間違えてるぞ。　あまりの可愛さに写メってしまう。　今週の待ち受けにしよう

「あ、そういえばなのは、俺の愛情弁当どうだった？」

「ごめん、嫌がらせしか感じなかったんだけど……、それより今度したらほんとうに怒っちゃうからね！」

「それじゃ明日はもつと愛情こめて縦一列にちくわ並べていくわ」

「人の話聞いてたっ!？」

「ごめん、フェイトの胸見た。　ほんとムツチリしてるよな」

見かねたなのはが手に持ったバックで顔を叩いてきた

「スーハースーハー、いい匂いだ」

「フェイトちゃん！　リセットシユ取って!!」

「うん！」

「ちよっ!?!　なのはかけるとこ間違ってる！　俺じゃなくてバックだ

ろ、そういうときは!？」

俺の存在をリセットしたいとでもいうのかこいつは。

「わ〜!・　なのはが好きな料理だ!・　やったあ!」

「へ、へ〜!　あんた、この料理好きだったんだ。　わ、わたしはそんなの知らなかったし……ほ、ほんとうよ!　し、知ってたら……も、もっと早くに作ってたわよ……」

「だ、大丈夫?　無理しなくていいんだよ?」

「……うん、僕大丈夫」

フェイトの優しさが心にくる

「ほらほら!　二人とも早く食べようよ!」

「うん、そうだね!」

「それじゃ手を合わせて、いただきます」

「いただきます!」

みなんでしやぶしやぶすることに。

「そういえば、この豆乳にはなにか隠し味入れた?」

「俺の分泌液」

「……」

「いや、冗談だから二人とも咽喉に指つつこむのはやめてくれ」

おまえら管理局の看板娘なんだろう。

それから今日一日のお互いのことを報告することに

「絶対おっさんは本部でも活躍できると思うんだ。　犯罪者とかバツ

タバツタと捕まえられるぞ」

「だから犯罪者の君を毎日捕まえてるんじゃないの?」

「失敬な、まだ予備軍だよ」

「ねえなのは。　私はインタビューでるときなんていえばいいのかな

?」

「とりあえず友達未満他人以上の関係ということにしておこうよ」

「なんで俺が報道されること前提で話し合いをしようとするの?」

報道される奴は俺から言わせれば二流に決まってるんだろ。　そん

なヘマ犯すものか

「それにしても六課って明らかな人選ミスじゃね?」



「君は人生ミスだけどね」

「そのドヤ顔やめろ」

湯葉巻きを食べながらキリツとこちらをみてくるのは。ちよつと誇らしそうにしてるけど、いま俺の人生否定したということわかってるのか？

「それにしても今日は疲れたからお風呂入ってもう寝ようかなー」

「そうだね、私もちよつと疲れたかも」

「それじゃ俺は二人のベッド温めてくる」

席を立ったところで二人に袖をつかまれそのまま背負い投げさせる。疲れはどこいったんだ。

「後片付け、お願いね♪」

「まかせろ、舌で丁寧に舐めとるから」

グシャ

「なのはが履いているスリッパなら舐めればなのは味がするかもしれない……」

「フェイトちゃん！ 変態がいるっ!?!」

「こつちに振ってこないでよ!?!」

そんなにかいっばい手で払わなくてもいいじゃないか。

「まあ、いつまでもこんな恰好だと近所に俺となのはの関係がバレてしまうのでそろそろ足をおろしてくれ」

「どういった関係なの?」

「M・Mプレイをする関係かな」

「それ成り立たないよねっ!?!」

「ちなみにフェイトはSね。自慢のザンバー俺のスイカバーを叩いてくるんだ」

「フェイトちゃん……」

「ちよつとまってっ!?! いまの話信じる要素どこにあるのっ!?!」

フェイトがムキーンってなってる間になのはが足を引っ込める。パンツみえた！ パンツみえた！ 速報！ なのはの今日のパンツは水玉！

「それじゃ風呂はいつておいで。俺は片付けしてベッドの周辺に盗

撮カメラ仕掛けておくから」

「片付けだけお願いね」

「ま……まかしとけ……」

「返事頼りなさすぎだよっ!？」

一歩ごとに後ろを振り返る二人に溜息を吐きながら俺は台所へと向かう

「さて、箸を舐める作業にはいるかな」

これも立派な後片付けだと思っている。



「六課は大丈夫なのっ!？」

なのはの悲痛な叫びが木霊する。

「それはともかく朝ごはんできてるぞ。今日はフェイトに合わせてサンドウィッチにしてみた」

「やったー!」

寝間着姿のまま、なのはは1階へと降りて行った。

☆

フェイトは朝の新鮮な空気を胸いっぱい吸いながら我が家へと帰宅していた。朝早くから駆り出された仕事のほうも一時のケリはついたので自分はこうして帰っているわけだ。あの宗教団体が私をみたときに呟いた『あと10歳若ければなく……。チツ、ババアか……。』という言葉は忘れない。そんなことを考えているうちに見慣れた我が家へと到着、持っていたカギで玄関を開けリビングのほうへと顔をだす。

「ただいま、二人ともいま帰ったよ——って、どうしたの?」

「おう、フェイトおかえり。サンドウィッチどうだった?」

「うん!。すごくおいしかったよ!」

「おかえりフェイトちゃん!。……そろそろ答えてくれないかな?君」

「え?。なにが?」

「とぼけた顔しないでっ!。なんでコイキングになのはの名前をつけてるのか聞いているのっ!」

テーブルを思いっきりなのはが叩く。フェイトはそのままなのはの向かい側にいるひよつとこのところまでいき後ろから画面を覗き込むことに

なのは／コイキング LV31

「ぶっ!」

「あゝゝゝ! フェイトちゃんいま笑ったでしょ!」

「ぶっ、ごめんねっなのはっ!」

「う〜う〜！ ふんっ！ どうせフェイトちゃんもわたし同様にへんなポ○モンに名前つけられてるもんっ！」

「ねえ、ちなみに私のポケモンは？」

「ピチューだけど」

「納得いかないんですけどっ!？」

寝間着姿のままなのは彼に抗議する。 あ、飴玉あげたら若干おとなしくなった。 もしかして不思議なアメかな？

「それよりフェイトは仮眠する？ いまだったらオプシオンとして俺がついてくるけど、ちなみに寝させないぜ」

「仮眠の意味を辞書で調べてきたほうがいいよ。 そのオプシオンはいらぬかな。 う〜ん、あまり眠くもないし私もゲームに参加しようかな」

「オツケーオツケー。 ほんじやなのはサクツと倒すからその間にとってくればいいよ」

「ちよつとまって。 いまのは聞き捨てならないかも。 なのはだつてずつとやってきたんだからね！」

「いっけー、なのは！ はねる！」

「えッ!? えつと……こう?」

「なにしてんの？ コイキングに決まってるじゃん」

「だましたねっ!？」

今日もなのはのキレは健在で安心した。

「あれ？ 二人の戦いは終わったの？」

「うん、俺の圧勝で」

「コイキングを手持ちにいられてる人に負けるわたしって……」

どうやらフェイトがゲームを取りにいっている間に二人の勝負は終わったみたいだ。

「うわああああああん！ フェイトちゃああああん！」

「だ、大丈夫だよ！ 次は勝てるから！」

「わーい！ フェイトちゃーいん！」

「ちよつと、近寄らないでっ!?! いやあっ!?! 質量のある残像残しながらこつちにごないでっ！」

あまりの恐ろしさにフェイトは泣き目になりながら後ずさる。

「同じ幼馴染なのにこの対応の違いは大変遺憾に思います。遺憾の極みです」

「妥当だと思います」

「その認識こそが間違っているのだっ！ もっと二人とも俺に優しくしてくれ！ パフパフさせてくれ！」

「願望が漏れてるよっ!?!」

「……ごめん、なのは」

「胸みながら言わないでくれるかなっ!?!」

二人で抱き合っているとその差がわかる。ミルタンクとコイキング、なんて世界は残酷なんだろうか。

「んで、バタなのがポ○モンやる気なくしたので俺とする？ 大人のゲームする？ つるのムチとか使っちゃう？ いまならつるぎの舞もやっちゃうよ?」

「普通にパーティーゲームしよっか」

「あ〜〜！ それじゃなのはマ○オテニスしたい！」

なのはの提案でマ○オテニスをすることに。

「あっー！」

なのは 右へ

ボール 左へ

「今度こそ！」

なのは 前へ

ボール 後ろへ

「サーブなら！」

なのは ダブルフォルト

ボール ジュゲム回収

「っ、次こそは！」

ガッ！ ↑コードをひっかける音

ビターン！ ↑なのはが転ぶ音

「……」

「もうやめるもん！」

「な、なのはっ!? つ、次こそはできるから! 私も一緒に手伝うからっ!」

「こいつスポーツゲームできなさもSランク並みだよな」

フェイトに泣きつくなのはをみながら思わずそう呟いてしまった。

とりあえず俺はお昼の準備でもしてこようかな。

## 09. 高町なのはの憂鬱

昼間のゲームを終えてフェイトと二人で出勤してきた高町なのははいつも通り自分の机で仕事をしていた。

「なのはさん、これお願いします!」

「は〜い。二人ともお疲れ様〜」

すると自分の部下であるスバルとティアナが二人揃って一冊のノートを持ってきた。なのはが一番はじめに訓練のときに渡した感想を書くためのノートである。

ふと隣をみるとフェイトのほうにもエリオとキャロが二人揃って提出しにいつてるところであった。もともとこの感想を企画したのは理由がある。それは隊長陣からみた新人達の動きや様子と新人達が思っている動き方などを、このノートを通してみることによってちよつとした意見交換会の役割を果たせればと思つて企画したのだ。

少しでも早く新人たちとの距離が近くなればと思つていたのだが、どうやらそれはなのはの杞憂に終わった。

それがなのはにとつて嬉しいのかどうかは別問題だが。

それはさておき、なのははふたり分のノートをめくる。どんな小さなことでもしつかり答えてあげようと思いなながら。

スバルノート

『私は小さくても大丈夫ですから気にしないでください!』

ティアナノート

『なのはさん、シグナムさんに胸で負けてますが大丈夫ですか?』

「余計なお世話だよっ!? なにこの嫌がらせ!」

小さなところに対する励ましと質問に叫び声を上げながらなのはは席を立つ。

「どうしたんだ、なのは? 隊長がそんなことじゃ新人に示しがつかないぞ?」

「あ、ヴィータちゃん! ちよつとこれみて! 新人に示すどころか盛大に心配されてるんですけどっ!」



「どれ……。 ……大丈夫、なのはより小さい人もいるからさ。 ま、どんまい」

「ヴィータちゃんにだけは言われたくないんですけどツ!」

優しいほほ笑みでなのはの肩を叩くヴィータ。 ヴィータは成長することがない（ひよつとご命名・ロヴィータ）ので永遠に10歳程度の体なのだが本人はそれをポジティブに受け取ることになっている。俗にいう諦めの境地に達しているのだ。

「そういえばはやてちゃんはどうしたの？ 見かけないけど……」

なのはは仕事場を見渡すが親友である八神はやての姿は確認することができない。 六課設立のときは、『みんなと一緒に仕事せなサボってしまおう!』そう言ってここに机を置いたはずなのだが……。

「ああ、はやてならゲームしてるけど？ なんでもボスが強くてなかなか勝てないみたいだな」

「いやいやいやッ！ みんなとか関係なくサボってるじゃん?!? なんで、ゲーム<>仕事なの?!?」

「違うぞなのは。 ゲーム<><>「越えられない壁」<><>仕事だろ。 はやての中では」

「なんのために六課を設立したのさっ!」

今更ながらまともな友人が少ないことに頭を抱えるなのは。

「もういや……。なんで私だけこんな目に……」

「なのはさんが泣いてるっ!」

「スバルっ！ なのはさんの涙をビンに詰めて！ 一滴もこぼすことは許させないわよ!」

「わかった!」

「それでなのはさん、どうしたんですか？ なにか嫌なことでもあったんですか?」

「現在進行形で起きてるよっ!」

ヴー！ ヴー！

そんなときなのはの携帯からバイブ音がする。 名前を確認する

と彼の名が。 何事かと訝いぶかしむが、とりあえず電話に出ることに。

「はいもしもし?」

『おお、なのは。唐突にバナナ・マンゴー・ランドを作ろうと思ったんだけど、どう思う?』

携帯を床に叩きつける。

「うるさいよッ!!」

「お、落ち着いてなのはっ!? 深呼吸、深呼吸だよっ!」

駆け寄ったフェイトに抱かれながら、なのははゆっくり深呼吸する。

「ふう……ありがとうフェイトちゃん。フェイトちゃんだけだよ、なのはの味方でいてくれるのわ」

「そんな……味方なら此処にだって沢山——」

「スバル……なのはさんの泣き顔みてイキかけたわ」

「甘いね、私はイツたよ」

「どこにいるの? フェイトちゃん?」

「……ごめんね」

なにかを悟ったように笑う彼女にフェイトはそう返すしかできなかった。

☆

リンデイ・ハラオウンは大型デパートの地下食料品売り場に来ていた。隣にはフェイトがお世話している彼がエスコートするかたちで手を取っている。

「それにしてもなのはちゃん怒ってたけど、大丈夫なのかしら?」

「はっはっは、大丈夫に決まってるじゃありませんか。俺となのはの仲ですよ? 困難な事件に立ち向かった俺たちですよ?」

「ふふっ、よく覚えているわよ。プレシア・テスタロッサにシャンパンファイトしたあげくアリシア・テスタロッサにまでかけてプレシアを本気で怒らせたのよね」

「あのときは死ぬかと思いましたね」

「いつそ死んでもよかったのよ?」

「え」

フェイトやクロノが仕事で忙しくなってからというもの、彼はこつやつてよく買ひ物に誘つてくる。大半は食材の買ひ込みなのだが、たまに服や下着を見に行くことも。

正直なところ、彼が下着売り場に行くとき警備が最大級にまで上がるのでこちらとしては勘弁願いたいところなのだが。

「それより、クロノのほうはどうですか？ 最近会ってないですけど」「エイミーと絶好調よ」

「明日速達でBL本を送りつけてやる」

「まって、なんであなたが持っているのか問い詰めたのだけど」「それは聞かないお約束で」

この子はまったく変わらないわよね。初めて会ったときもいまでも、変わることはない。

フェイトやなのはちゃん、はやてちゃんが変わる中でただ一人変わることなく過ごしてきた彼はある意味凄いのかもしれない。

「ちなみに今日の夕食はなにかしら？」

「そうですねー、フェイトが好きなドックフードにしようかと」

「人の腕とは簡単に千切れるものなのよね……」

「ごめんなさいリンディさんっ！ 冗談ですから、冗談ですから腕を引き千切ろうとしないでくださいっ!?!」

やっぱり、彼に限ってそんなことはないか。

## 10. 白パン大好き スカリエツテイ

仕事が終わりに就寝前ののんびりタイムをなのはとフェイトは女性雑誌を眺めながら楽しんでいた。それでも花も恥じらう19歳。いろいろと思うところがあるのだろう。

「あ、なのはの恋人はすぐ近くにいますかもだつてよ?」

「フェイトちゃんこそ、ずっと傍にいた人だつてよ?」

「けど私たちの近くにそんな人いたっけ?」

フェイトの疑問によつてなのはは考える。すぐに浮かんできたのは神様が人類に苦しみを与えるために生み出した存在であろうひよつとこのお面を被った男だつた——のだが

「うん、ないよね」

「そもそもあれつて人間なのかな?」

「分類上人間に入るかな。残念ながら」

ずつと傍にいた……というのもあるのかもしれないが、彼は恋愛対象にはいらぬのではないだろうか。だつて無職だし、頭おかしいし。

「けど意外に高校のときとかモテてたよね。 バレンタインのチョコとか女子全員から貰つたつて聞いたよ?」

「そのうちの9割が至近距離からチロルチョコ投げつけられたという結果だけだね。 あときは別の意味で鼻血だしてたよ」

「残りの1割は?」

「遠くからアンダーローでチョコパイ投げられてたよ」

「……それバレンタインを口実に日頃の恨みを晴らしてるだけなんじゃないのかな?」

少しだけ不憫に思うフェイト。

トントントント

そんなとき、2階から彼が降りてくる音がした。あとは就寝だけであるがまたゲームでもするのだろうか?

「ご機嫌な蝶になったから、きらめく風によつて彼女の元へといつてくる」

「はいはい、捕まらない恰好でお願いね」  
「まかせろ」

なのはは六課の猛攻撃によって疲弊しており、うんざりした顔で手を振った。

彼も19歳だ、さすがにへんな恰好で深夜徘徊なんてしないだろう。そう思っただけ振り向いた先に文字通り蝶がいた。黒の触覚に黒い翅<sup>はね</sup>。鱗粉を真似ているのだろうかところどころラメがはいっている。口には曲げたストローを咥え、足には黒のニーソ。

どつからどう見ても360°全方位で変態である。

「なんで自信満々に返事したのっ!? 捕まる気満々じゃんっ!? とうかそれ私のニーソだよねっ!?」

「なのははだけだと不公平だと思っただけでフェイトの髪を結びボンで蝶ネクタイを作ってみました。蝶だけに」

「そういう問題じゃないからっ! いままで一気に不機嫌になったよっ!」

「それお母さんに買ってもらったのに……。ひどいよ! あんまりだよ! もう捨てるしかなくなったじゃないのっ!」

「そこまですぐのっ!」

流星のひよつとこも驚きのあまり声を上げる。フェイトは泣き目でなのははによしよしされている。

「もういいもん! 二人が構ってくれないから遊びにいくもん! このペチャパイ!」

「それ個人攻撃してるよね!? 二人じゃなくて一人に言ってるよねっ!?! とうかペチャパイじゃないもん! ちゃんとあるもん!」

「っ、捕まっても引き取りにきてあげないんだからねっ!」

「はっはー!! そこらの二流と一緒にするではない!」

そういつてひよつとこは勢いよく玄関から飛び出したのだった。

☆

「とはいったものではないんだよな、これが」

深夜の道を一人で歩く。歩くたびに翅がヒラヒラ、鱗粉パラパラ、触覚フヨフヨ、うざいことこの上ない。

「ん？ あそこにいるのは誰だ？」

ひよつとこからみた真正面の家の周辺で黒コートを着て天狗のお面を被った男がウロウロとしていた。じきにその男は家へと侵入し、白のフリルつきパンツを手にとって頬ずりする。どっかみても変態である。

やがて何かに気付いたかのように男はそつと家を出てひよつとこのほうへと歩いてくる。

すれ違う二人

その瞬間、ひよつとこは声をかけた。

「まちな、あんた」

「……なにかね？」

男は足を止める。その手には白パンツ

「白パンツをとるとはいただけじゃないな。何故その横にある縞パンを取らなかつた。白と水色で可愛かつたはずだ」

「ふんっ、縞パンだど？ 君は何をいつているのかね？ そんな前時代的な遺物にまだ未練を感じているのか？」

「なんだと……！」

ひよつとこは思わず距離を詰める。蝶ルックスで

「君のような者がいるから時代は足を前に出しあぐねているのだよ」

「ほう……その言い方。まるでお前が時代を先取りしているかのような口ぶりじゃないか」

「当たり前だよ。これでも私は天才なんだ。時代を読むことなんて動作もないよ」

黒コートの男は一步詰め寄る。白パンツを手を持ったまま

「何を言ってるんだ。縞パンはその人自身を若干幼くさせロリに魅せる効果があるんだぞ。白パンツごときができると思っっているのか？」

「甘いね、君は白パンの凄さをわかっていない。純白な白から生み出される染みがどれほど興奮するものなのかわかっていないようだ」

「ふんっ、まだそんな段階とはな。その段階ならば俺は5歳のときに幼馴染がおねしよをしたことによつて到達しているぞ」

「幼馴染……だとツ!？」

男の目の色が変わり、体をプルプル震わせる。

「……君には幼馴染がいるというのか。それこそ人類が生み出した究極にして至高の存在である幼馴染がツ！ モーニングでは勝手に自分の部屋にはいつてきて寝顔を見ながらクスリと笑う幼馴染がツ！ 一緒に登下校したりお弁当を食べたりして、ちよつと可愛い子に目がいってると膨れっ面になって怒ってくる幼馴染がツ！ 夜には夕食を作りに来てくれ、そのまま夜の営みまで逝っちゃう幼馴染が君にはいるというのかねツ！」

「はっはっは、うらやましいか?。」

「うらやましい!!」

なんとも素直な男である。しかしながら、この男が彼の現状を知ったらどんな顔をするのか……それもまた興味深いものがある。

「しかしなんだね……、ここらへんにも君のような若者がまだいるとは、世界もなかなか捨てたものじゃない」

「それは俺も思うよ。あなたのような人がいるとは、あなたとなら趣味が理解できそうです」

「ふむ、まったくもって同感だ」

およそ人類の底辺のような二人がまるで人類の代表者かのように話す姿はみていて頭が痛くなってくる。

「そういえば、あなたのお名前を伺ってもよろしいでしょうか?。」

「私の名前は、ジェイル・スカリエツィだよ。みんなからはアンリミテッドデザイン、無限の欲望と呼ばれているよ」

「なるほど、無限の性欲ですか」

「君の欲望は性の一方通行なのかい?。」

およそ正解と喋っていいのではないだろうか。

「して、君の名前は?。」

「俺は正義のヒーローですからね。名前は伏せています、みんなからはひよつとこと呼ばれていますね」

「ひよつとこくんか。 それではひよつとこくん、ともに道を極めていこうとではないか」

「ええ、あなたとなら極められると信じています」

そういつて、二人は固い握手を交わす。 決して途切れることのない、消えることのない、男と男、変態と変態が交わした約束であった。「よかったな、ひよつとこ。 お前にも友達ができて」

「それに趣味も合ってるからな。 さて、今日は思いもよらない収穫もあったし俺は帰ることにするよ」

「そうかそうか、なら——ちよつと交番でお茶でもせんか？」

「おっさんつて忍びの家系だったっけ？」

☆

『はい、もしもし。 高町ですけど』

「あ、なのは？ 俺だけど……」

『ん？ なんで家の電話？ つて、携帯置いていったのか。 それでどうしたの？』

「いや〜……うん。 大変言いにくいことなんだけどさ、交番まで迎えに来てくれないかな？」

『さよなら』

「まってええええええええええええッ！ お願いだから電話を切らないでええええええええええええッ！」

深夜の交番にひよつとこの声が木霊する。

どうしてだ……一流の俺が二流のような失敗を犯すとは……！

隣にいる友、スカリエツティに目を向けると

「あ、ウーノかい？ そう、そうなんだ。 管理局の人に捕まってしまつてね。 え？ いやいや指名手犯だからとかじゃないんだけどさ。 えつと……白パンツを盗んじやつて。 あ、待ちたまえっ！

ウーノ、これには深い訳があるんだっ！」

「パンツを盗むのに理由もないだろう」

「そして俺が捕まったのにも理由はないんだがな」



「お前は存在するだけで理由になるからいいんだよ」

「……世界が俺の敵というわけか」

そんなこんなでおっさんとお茶を飲みながらまったりと過ごすことに

☆

「どうもうちのバカがご迷惑をおかけしました」

高町なのはは目の前にいる男性に深々と頭を下げた。連絡がきってから1時間。本気で来なくなかったのだがもしこなかったら交番の人にどれだけ迷惑をかけるか分かったもんじゃないので、嫌々ながら引き取ることに。

ちなみに水色の短パンに白のTシャツ姿である。

「いやいや、こちらも慣れたもんですからね。ただもう少しおとなしくなってくればこちらとしてもありがたいものですよ」

「とか言っちゃって、本当は俺と遊ぶの嬉しいんだろう?」

「黙ってて」

「ぐふうっ!」

なのはのヒジがひよつとこのミゾに入る。体を前に傾けながら必死に酸素を取り込んでいる幼馴染を冷たい目で見ながらも一人捕まっていた人物の所へと向かう。

「あの………すいません。私の幼馴染がそちらを巻き込んでしまったようで……」

「いえ、こちらもドクターがそちらに迷惑をおかけしたようで………本当にすいませんでした」

「まともだっ! まともな人にやっと出会えたような気がするっ!」  
「?」

女性の対応になのはは感動して手を取る。目にはすこしだけ涙を浮かべていた。

「あ、あの……何があったのかわかりませんが、その……頑張ってください。えっと、これも何かの縁ですし、お互いの連絡先でも交換し

ますか?」

「是非!」

嬉々として携帯を取り出し互いの連絡先を交換する。

「え〜つと、ウーノさんですか。なんだか知的な名前ですね」

「ふふ、そちらもなのはとは可愛らしいお名前ですよ。あなたにピッタリな名前ですね」

「当たり前ですよ、なのははコイの王様になるほどの素質をもっていますからね」

「話に加わってこないでよっ!?!」

「いや、さびしいじゃん」

「後で付き合ってあげるからっ!」

「そんな……こんなところで告白なんて……」

「どんな思考回路してたらそうなるのっ!?!」

いつきにペースを乱され憤慨するなのは

「それよりスカさん大丈夫なんですか?　なんかひどく打ちひしがれてるんですけど」

『……せっかく取ったパンツなのに……ウーノ、なにをしてくれるんだ……』

「気にしないでください。それとパンツのほうはこちらで弁償することになりましたので」

スカリエッティは泣きながらその場に立つ

「ひよつとこくん……今日はもう立ち直れそうにないから話はまた後日にしよう……」

「お……おう」

ひよつとこが軽く引くくらい意気消沈しているスカリエッティはウーノと呼ばれた女性に手を引かれながらその場を後にした。

「それじゃ俺らも帰るか」

「とりあえずニーソは弁償してよね?」

「わかったよ。それじゃこのニーソは俺が責任をもって処分しとくよ。……なのはのニーソ……ハア……ハア……」

「もう嫌だよ、この幼馴染っ!?!」

きっかりニーソを回収しながらなのは交番の前で叫ぶのだった。

## 11. 円環の理に導かれたガジェットドローン

「あ、スカさん？ どうしたのいきなり電話なんかしてきて？」  
『うむ、ちよつと遊びにこないかと思つてさ。 君が喜びそうなものがたくさんあるぞ』

昼も少しばかり過ぎたころ、友人であるスカさんから電話がかかってきた。 内容は自分の家に遊びにこないかという誘いであるのだが、いまからエツチなビデオを視聴したいので丁重にお断りをすることに。

「あゝ、ごめんね。 いまから大事な用事があつてだな」

『その用事とはよもやエツチなビデオを視聴することではないかね？』

「スカさん、エスパーになれるよ。 アンタ」

『ふつ、君の思考回路からすればそんなことだろうと思つていたよ』

どうやらスカさんには俺の思考回路がわかるらしい。 普段幼馴染たちから頭がおかしいと言われている俺だが、本当はあいつらのほうがおかしいのではないか。

『まあ、そんなエツチなビデオよりか面白いものがみれるから期待するといい』

そう言つて、スカさんは電話を切つた。

「いやいや、スカさんの家の場所わからないって。 ……しようがない、全知全能森羅万象の理を操るGoogle先生で調べるか」



「すいませーん、スカさんに御呼ばれしてきたんですけどー」

「はい、お待ちしております。 こんにちは、ひよつとこさん」

「あ、ウーノさん」

先生で調べること10分、あっさりと場所が見つかったのでバイクを飛ばしていくことに。 これでもバイクの免許持つてるんだぜ？



「待ちたまえ、あれは私の最高に抜けるものなんだ。返してくれないか?」

「床オナでもしとけ」

ウーノさんとスカさんができてると知ったいま、俺はスカさんに容赦などしない。つい先日男と男の約束をした気がしないでもないけど。

「ごっちはエッチなビデオ見ながらなのはやフェイトの下着を嗅いで自慰をするという大切な用事があるんだぞ」

「君とあの娘がいまだにあんな関係でいられるのかがとても不思議なのだが」

「普通ですとなのはちゃんのほうが縁を切ってもよさそうですね」

「二人に寄生しないと生きていけないからな。二人ともなんだかんだで俺を見限れないんだよ。どうだ、うらやましいか?」

「誇ることはないぞっ!」

「あなたのためにマダオという言葉がある気がします」

マダオ＝まるでダメな男

「ま、まあ、いいだろう。それで今日君を呼んだのはほかでもない。

これを見てくれないか?」

「ふにやちんですね」

「そこではないわっ!」

そういつてスカさんは何かのスイッチを押した。すると大きな鉄の扉が開けられる。どうやら格納庫のようだ。ちよつとワクワクしながら中をのぞいてみるとそこかしこに機体があった。なんだこりや?」

「驚いたかね? これはガジェットドローンといってね。私が可愛い女の子を盗撮したいがために作った機体だよ。完全ステルス製で、どんなところでも侵入できるよ」

変態に技術力をもたしたらここまでのものが完成するのか。

格納庫自体がとても大きいので数も尋常じゃないほど多い。

「うっわ、ちよつとこれ面白そうじゃん! スカさん遊ばして遊ばしてー!」

「あ、これっ！　ここらへんには緊急用に自爆スイッチが置いてあるのだからそこらへんを変に触ったら……」

ポチッ

ゴゴゴツゴゴゴゴゴゴゴツ!!　↑ガジェットたちが自爆する音

「……」

「残念だけど、ガジェットたちは先に逝ったわ。　円環の理に導かれて……」

「導いたのは君だろうッ!?!」

スカさんが泣きながら訴えてくる。

「どうしてくれるのだっ!　私が研究に研究を重ねて作った可愛い子供たちを壊してくれて!」

「まあまあ落ち着けよスカさん。　ほら、エロ本やるからさ」

「それはもともと私のだろうッ!?!　なに君が家からもってきたみたいになってるんだっ!?!」

「オーケーオーケー、かわりに俺が地道に盗撮した秘蔵のファイルをあげるからそれで許してくれよ」

「……さっきの件は見なかったことにしよう」

流石スカさん、話の分かる人だ

「あ、もしもし?　警察ですか?　ええ、ここに二人ほど変態がいるので逮捕をお願いしたいのですが……」

「やめてくださいっ!?!」

ウーノさんが連絡した直後、おっさんがものすごい速さでこちらに向かってきた

「ええい、最終防衛システムはどうなっているんだっ!?!」

「スカさん、おっさんの前ではそんなもの無意味に等しいっ!　ここは自力で逃げるしかないぞっ!」

「化け物にもほどがあるぞっ!?!」

「おいっ!?!　おっさん多重影分身してないかっ!?!」

多重影分身をしながら俺とスカさんを追い詰めるおっさん。　この人は管理局の影のエースと呼ばれているに違いない。

## 12. 墓前に捧げる一つの酒

カタカタカタ

「……」

カシヤカシヤカシヤッ！

「……………」

カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤッ！

「ティア、フィルムなくなっちゃったよ？」

「え？ もうなくなつたの？ ちよつとまって、替えのフィルムあげるから」

「それより二人とも仕事してよッ!? なんで上司の私が仕事してる横で平然と写真撮ってるわけっ!?!」

「なのはさん！ その表情いいですよ、もう一枚！」

「なのはさん、こっちにもお願いします！」

「フンガーッ!!」

なのはが両手を上げて猫のように威嚇のポーズをとる。今日も六課は平和である。

それを一番遠い席からオレンジジュースを飲みながらみているのは六課の部隊長である八神はやて。

高校時代に、ひよつとこと色々やらかした伝説がある女性だ。はやては横でペロペロキャンディーを頬張っている自分の家族であるロリっ娘ヴィータに話しかける。

「そういえば、スバルはなのはちゃんに助けられたからあんなに慕ってるのはわかるけど、ティアナはなんであんなに懐いとるかしつとる？」

「いや、全然。 大方なのは萌えとかの狂信者じゃない？ ほら管理局にもいるし」

「ああ、そういやおったな、あの変な団体。 絶対に接触することなくなのはちゃんの危険になる存在であろう者たちを排除する、ある意味管理局の負の遺産やな。 けど、おかしいでアイツが排除されてないやんか」



「アイツはそんなものを超越する存在だからな」

「流星はミッドが嘆くエースだけある」

思い浮かぶのはなのはのパンツやフェイトのブラに命をかける男の姿。

「それにしても気になるな……」

はやてはオレンジジュースを飲み終わりながら一人顎に手をおいた。

「いやあああああアツ!? ちょっと、それ私のリップ!？」

「か、間接キスに……!」

「私が左でスバルが右だからね」

「まあ、楽しそうでなによりやな」

はやては眼前で繰り広げられる光景を見ながら彼に送りつけようと写メをとった。

☆

翌日

ティアナ・ランスターは一人なのはを待っていた。今日の服は黒の服に黒のタイトスカートというおおよそ六課では似つかわしくない服装である。

若干緊張気味に自分の上司を待つティアナのもとにコツコツと一つの足音を響かせながらとある人物がやってきた。

「あ、ティア。きょうは早いねって……その服装は?」

そこまで言うとなのは何かを思い出したような顔をして、納得したように頷く。

「あ、なのはさんおはようございます。その……今日はどうしても外さない用事があつて」

「そっか……月日が経つのは早いね。うん、わかったよ。あとで私も行くからお兄さんにはよろしくね?」

その優しいほほ笑みがティアナの胸に浸透して、ゆつくりと広がる。そんな感覚を胸に抱いたままティアナは一礼して六課を後に

した。

タクシーで目的地に着くまでの間、ティアナは昔を思い出す。自分が変わった日のことを、なのはに出会った日のことを、そして——兄の親友と名乗った男が現れた日のことを

☆

兄が死んだ

それは小さな幼き日に起きた突然の出来事だった。

息を切らせながら自分に報告を告げた人の胸倉を掴んだのは覚えて  
いる。

そして変わることのない情報を前に崩れ去ったことも覚えている。  
そこからはまるでタイムワープしたかのように一瞬に何もかもが  
過ぎていった。

「おにいちゃん……」

ティアナは知らず知らずのうちに兄の名前を呼んだ。しかし墓  
の中にはいつている兄は可愛い妹の声に反応することはない。ど  
んなに呼んでも叫んでも自分が狂ったところで、兄ティード・ランス  
ターが殉職したという事実はかわることはないのだ。

空は兄の死を悲しむかのように嘆くかのように泣いていた。自  
分の頬から伝わる雫が雨なのか涙なのか、もう判別できないほどだ。  
ティアナが悲しみに打ちひしがれているとき、後ろから声が聞こえ  
てきた。

「情けない」

その一言で関を切ったかのようにさまざまな人たちが兄に言われ  
もない罵倒をしだした。なかには諫めようとした者もいたが、しか  
しながらその全てが無駄に終わる。

腹が盛大に出たいかにもな男性がその全ての言葉をかき消すのだ。  
ティアナは幼いながらも悟った。この人がこの中で一番偉い人  
なんだろうと。誰もが彼に逆らえない。場を収めようとした男  
性もいまは黙って唇をキュツと結んで耐えているだけであった。

世の中は不条理だ

ティアナはそう思った。

そんなとき、やけに間延びした声が辺りを支配した。

「あ、すいませくん。ちよつと通してください。あ、ダメツ！そんなところ揉んだらアヒンツ！おっさん、いい趣味してるじゃねえか……。なかなか受け入れられない道だけど頑張れよ」

「揉んどらんわ!? いまの一瞬で私の地位を落としたことがわかっているのかね!?!」

恰幅のいい男性がなにか抗議するが少年はどこ吹く風で笑っていた。端正な顔立ちの少年である。

「よお、ティータ。期末試験受けてる間になに死んだよ、ダツセーな。一緒に酒飲める年齢になるまで待つてくれるんじゃないのかよ」

それはそこにいるもの全員を驚かせる言葉だった。

少年は右手で持っていたウイスキーを開け墓に上からかける。

ドボドボと音をたてながら落ちる酒は処理する者が誰もおらず地面へとゆっくり浸透していく。

やがて半分ほど減ったところで少年は注ぐのをやめ、かわりに自分が呷り——

「おえッ！俺酒飲めないんだっ……、おじさんその服かして……」

「ま、まちたまえっ!? もう少し我慢するんだ、すぐにエチケツト袋をもってくるから!」

「もう無理……」

オロロロロロロロロロロロロロロツ!

恰幅のいい男性の服の中にむかって盛大に吐いた。

それからは阿鼻叫喚の図であった。男性は急いで帰るし、それに付き従う形で参列者は帰って行った。何人か貰いゲロした人もいた。

「さて……スッキリした。士郎さん、もっと度数が少ないのください

いよ……」

「あの……」

「ああ、こないほうがいいよ。俺ゲロったから、臭いきついと思うし。それよりそのおっさんは帰らなくていいの?」

少年が問いかけた先には、先程一人だけ場を鎮めようと頑張っていた男性がさつきと同じ位置にかかわらず立っていた。

「此処に市民がいる限り、俺はこの場を動くつもりはない。それより水をやるから口をゆすげ」

「おっさん気が利くじゃん」

「おっさんじゃねえよ、まだ若いに決まってるんだろ」

やがてこの二人がミッドの名物追いかけてこの主役を演じる二人になるのだが、それはまたの機会のお話にでもしよう。

「それじゃ未成年の飲酒も見逃してくれ」

その言葉に男性は答えない。答えることができない。少年もそれをわかつているのか笑いながら楽しんでいるようだ。

「あの……!」

「ん? お、すまんすまん。つい話し込んでしまった」

少年はティアナの頭に手を乗せる。そして子どもをあやすようによしよしとする。

「俺はティーダにお世話になった身でさ。ビックリしたぜ……いきなり亡くなるなんて」

「殉職だ。違法魔導師との交戦でさ」

「そっか……」

「ちなみにどんなお世話になったんだ?」

「パンツ盗んだときにちよつと」

「お前これ終わったあと、交番までこい」

「そんなあつ!」

それは墓前で繰り広げられるコント劇、観客はティーダ一人だけ。

やがて少年は墓の前にどっかりと座りこむ

「なあ、嬢ちゃん。お兄ちゃんは好きか?」

「……はい」

「そっか」

隣に座ったティアナは小さく答えた。

やがてぐすぐすと小さな嗚咽が辺りを支配する

「悔しいか？ 大好きなお兄ちゃんがあんなに言われて」

「悔しいです……！！ ものすごく！ お兄ちゃんは、優しくて強くて！ 私の憧れの人で……」

「俺もだよ。 あそこでおどけてなかったらあいつらぶちのめすところだった。 でもさ、そんなことティーダは望んでいないんだよな。それで、嬢ちゃんはこれからどうすんだ？ 言っとくが、俺が引き取るなんてエロゲ的な展開にはならないからな。 そんなことしたら、俺が幼馴染に殺される」

「……私は一人で生きていきます」

「金は？」

「なんとかします」

「一人はさびしいよ？」

「大丈夫です」

「今日のパンツの色は？」

「おまわりさん、この人です」

「おう」

「冗談ですからっ!? 手錠取り出さないでくださいよっ!?」

少年は慌てたように男性を静止させる。

「私……」

「ん？」

「私、大きくなったら管理局に入って……お兄ちゃんをバカにした人達を見返したいです……！ 執務官になって……見返したいです！」

ボロボロ泣きながら、ティアナはふたりの前で喋った。

「魔力とかまったくダメだけど、それでも見返してやりたいです！」

「いい心意気じゃねえか。 だったら俺が天才に勝つ方法を教えてやるよ」

「……え？」

「天才つてのは99%の努力と1%の才能で成り立っている。 それに引き替え凡人つてのは100%の努力で成り立っているものだよ」

「……そうですね」

「だったら、120%の努力をすればいいだけなんだよ。10%の才能をもつ奴には200%の努力をすればいい。50%の才能をもつ奴には1000%の努力をすればいい。100%の才能をもつ奴には10000%の努力をすればいいのだけの話なんだよ。」

理論上はこんな簡単なことなんだ。単純明快、ゆえに難しいんだけどな。そもそも上限が100%なんて誰が決めたんだよ。そんなもん100%までしかできなかった奴が決めたことだ。俺はそんなもの認めねえよ、そんなクソみてえなくならないものに自分の尺度を合わせる気はさらさらねえよ」

それはおどけることが得意な少年が見せた珍しい姿であった。

「まあ、それを嬢ちゃんができるかどうかは別問題だがな」

いつものように肩をすくめて、ちよつと挑発する。

「できますー！」

その挑発にティアナは大声で宣言した。少年がニヤリと笑う。そんなとき、遠くのほうで少女の声が聞こえてきた。

「あ、見つけたよ俊くん。もうなのはのケーキだけタバスコ味にしたでしょっ！……って、これは」

「よお、なのは。前に話しただろ？ ティーダさんのこと」

たったそれだけでなのははすべてを悟ったように深く頷いた。

「そっか……大変だったね」

「へっ……」

なのはは少年の傍らにいたティアナをそつと抱きしめる。それはまるで優しい母親に抱かれたときのように暖かった。

なのはは抱きしめたまま、そつと自分のもっていた傘をティアナに渡す。

「風邪引いちゃうから、ね？」

微笑んだ後、男性の元へと向かったなのはは敬礼しながら喋る

「時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班 一等空尉の高町なのはです。故人の死因及びお名前を教えてください」

「ハッ！ 時空管理局 首都航空隊 一等空尉 ティーダ・ランス

ターであります。死因は違法魔導師との交戦による殉職であります。なお、犯人は捕まった模様です」

「そうですか……ありがとうございます」

なのはは頭を下げてお礼をいうと、墓へと向き直る。

そして声高らかに宣言した

「勇気ある管理局員！ ティーダ・ランスターに敬礼！」

「……え？」

「あなたの勇気ある行動を忘れません！ あなたのおかげで沢山の市民が笑顔で日々を暮らせます！ ほんとうに、ありがとうございます！ た！」

少年が少女が男性が、自分の兄の墓に向かって真剣な表情で敬礼する。

まだ会って間もない人間が、会ったことすらなかった人が、自分の大好きな尊敬する兄に対して敬礼する。

憐みでもなく、憐憫でもなく、同情でもなく、嘲笑でもない。

そのことが嬉しくて、それがなによりも嬉しくて、ティアナ・ランスターは先ほどとは違う涙を流していた。

あれから10分後、二人が帰る時間がやってきた。

「それじゃ、ティアナちゃん。ティアナちゃんがくるの楽しみにしてるからね？」

「あの……」

「ん？」

「ティアって呼んでくれませんか……？」

モジモジと恥ずかしそうに眼をしながらもまっすぐとなのはに言っていくる

「うん！ それじゃバイバイ、ティア」

なのははひと撫でして立ち上がった。傍らには少年が、ニヤニヤみながらティアナをみていた。

「お前って、天然ジゴロにもほどがあるよな。まあ、それはさておき嬢ちゃん——ガツカリさせんなよ？」

ニヤリと笑いながら少年は少女とともに、一つの傘を使って帰って

行った。

これがティアナ・ランスターの記憶  
全てが変わった日の出来事である

☆

「お客さん、到着しましたよ?」

「あ、すみません」

過去を振り返っている間にどうやら目的地にはきたようだ。

ティアナはタクシーを降りながら思う。

初恋の人は? そう聞かれたら高町なのはと自信満々に答えるだろう。

一番の親友は? そう聞かれたら恥ずかしながらもスバル・ナカジマと答えるだろう。

一番会いたい人は? そう聞かれたら兄のティード・ランスターと瞳を潤ませながら答えるだろう。

では……一番気になっている人は? そう聞かれたらティアナは、思案顔になりながらあの日に会った少年と答えるだろう。

あれから一度も会ってないのだ。しかしながら毎年毎年、ウイスキーと花が墓前に置かれているところからみると毎年来てくれることはわかる。

コツコツコツ

墓への道を歩き、もうすぐ兄の墓が見えてくるあたりから男性の声が聞こえてきた。

何事か? そう思いながらティアナは少し足を速めたどり着いた先には――

「悪霊退散ッ! 悪霊退散ッ!」

ひよつとこのお面を被った男性が兄の墓に向かって塩を投げつけていた

「なにやってるんですか……っ!?!」

「おうわっ!?!」



男性は驚き大きくのけぞる。 ティアナは駆け寄り胸倉を掴みながら問いただす

「人の兄のお墓でなにしてくれてるんですかっ！ 訴えますよ！」

「ち、違うんだよっ！ スカさんから貰ったスカウターで悪霊がみえたから俺が退治しようと思って——」

「その前に私があなたを退治しますよっ!!」

スカウターを取り上げながらティアナは睨みつける。

「ビックリした〜…：嬢ちゃんと鉢合わせするなんて」

「え？」

小さくつぶやいた声をティアナは聞き逃さなかった。

「あ、俺そろそろ行かないと。 スカさんとマ○オカートする約束なんだよね」

「…：…へ？」

男性は慌てたように早口でそうまくしたてると、スルリとティアナから抜け出し来た道に戻る——寸前でふと何かを思い出したように振り返る。

「嬢ちゃん、どうだ？ あのときと比べると？」

心配するような挑発するような声に先ほどまで振り返っていた過去の少年と重なった。

いまでも少年は心配しているのだ。 きつと、これからも心配するのかもしれない。

だからこそ——いまの自分がどんな状態にいるのか、どんな気持ちを持っているのか、この心配性な少年に伝えよう

「はい！ とっても幸せです！」

兄は失ってしまったけど、かけがえのない友と、大好きな人と一緒にいる。

そんな私はいま幸せだと実感できる。

「そっか。 まあ体のほうははまだガツカリボディだがな」

「なっ!？」

少年から青年へと姿を変えたあの人は、そう笑いながら颯爽と私の前から姿を消した。

「なんか……かわってないなあ」

「あれ？ ティア、まだしてなかったの？」

「あ、なのはさん！」

青年が消えたところから、大好きなのはさんが顔を出す

「えへへ……はやてちゃんが体動かしたいから、代わってほしいって頼まれてさ」

「はやてさんも凄い人ですよね」

「ティア、世の中にははやてちゃんよりヒドイ人がいるんだよ？」

「あつ……そうなんですか」

「というかこの人、さりと幼馴染をヒドイ扱いしなかった？」

「それより、ティーダさんがティアの報告を聞きたそうにまってるよ」

「あつ、そうでした！」

そうしてお墓の前でなのはさんと二人手を合わせる。

お兄ちゃん、お元気ですか？

私は元気でやっています。 かけがえのない親友と、大好きな人。

厳しくも私を支えてくれる人達に囲まれて執務官になるべく勉強中です。 いまはまだ、経験も技術も足りませんがいつか立派な執務官になりたいと思います。 だから、だから安心してください。

あなたの妹は、10000%の努力で頑張っています

カランツ！

そのときティアナの耳には確かに聞こえた。

ウイスキーをいれたグラスに浮いている氷が溶けた音

青年が墓前に捧げた一つの酒の音、そこから嬉しそうにはしやく声  
が。

### 13. 六課へおでかけ!

『ユーノ、飯食い行こうぜ!』

『う〜ん……行きたいけど仕事で忙しいんだよねー』

『まじか〜……お前が欲しがってたケモナー御用達の写真集を手に入れたんだけど』

『命に代えても時間を作ろう。でも僕が本当に欲しいのは……キ』

「さすがユーノ、話しの分かるやつが友人で助かったぜ。でも何故だろう、悪寒で体が震えてきた」

なのは達が仕事にいっている間に、暇だったのでユーノとメールすることに。ユーノは管理局の無限書庫で働いているエリートだ。

そして俺は自宅警備のエリートだ。

「ひよつとこ君、ユーノ君とはどのような人なんだい?」

「え〜つと、ケモナーですね。小さい頃に俺が色々調教してたら変な方向に進んでました」

「ふむ……なかなか興味深い」

家に遊びにきていたスカさんがお茶を飲みながらそう呟く

「というか、スカさんは何しにきたの? 言っとくけど、なのはのパンツとかフェイトのブラは俺のだから渡さないよ?」

「いまのセリフがどれほど矛盾するセリフかわかっているかね?」

「ドクター、人のこと言えませんか?」

スカさんの横で紅茶を飲んでいたウーノさんが冷やややかな声で言ってくる。どうしてスカさんにはウーノさんのようにきれいな人が振り向いているのに俺の場合はなのはとフェイトに魔力弾を撃たれているのだろうか。

「それにしても暇ですね」

「暇だね」

掃除も洗濯も終わったのでやることがない。ポ○モンのほうもあまり進め過ぎると二人が怒るし。はっはっは、可愛いやつらめ。

俺がネタバレしまくったせいだろうけどな。

そういえば、フェイトにネズミをペンキで黄色にしてピカチューと

嘘をついて誕生日プレゼントにあげたことがあったな。バレてリンディさんにフルボッコにされたけど。あまりにもボコボッコにされたんでクロノは怒る気がなくなつて逆に介抱してくれたっけ。

誕生日といえばアレだ。なのはの誕生日ケーキにオリーブオイルかけまくつて出したら美由紀さんが横から掠め取った事件もあったな。あれ取った美由紀さんが悪いのにボコボッコにされたし。

「……おれ、ボコボッコにされた記憶しかないんだけど」

どうなつてんだ、俺の記憶

「お暇でしたらなのはちゃんか務めているという仕事場に行かれては？」

「それだツ!!」

ウーノさん、ナイスアイディアですよ！　いまのままで気付かなかったけど、俺はなのはやフェイトの仕事場に行ったことがなかった。これは……幼馴染として行つておく必要があるのではないだろうか!!

「そうときまれば早速電話しよ」

携帯を取り出しはやてに電話をかける。

『久しぶりやな、宇宙一のカカ』

「久しぶりだな、銀河一のアホ」

「この場合、どちらがアホなのだろうか……」

『ん？　なんや、誰かおるんかいな？』

「んー、友人がな」

『どんな関係なんや？』

「なのはとフェイトの関係かな」

『それは大変やで』

「いったい、はやての中であいつら二人の関係はどうなっているんだろうか？」

『それにしてもどうしたんや？　わたしいま仕事してんねん』

はやてが仕事してる……だどっ!?

「おいおいおいおいおい、冗談は変態性だけにしとけ。　部隊長が嘘なんてみつともないぞっ!」

『ほんとうにしてるんやって。 シグナムの喘ぎ声を編集中心や』  
「zipでくれ」

『だったらなのはちゃんとフェイトちゃんのパンチラ画像と交換やな』

「くっ……！」

あの二人を人質にとるとは……いい度胸してるじゃねえか……！

「あの……ドクター。 何故彼がそんな画像もっているのかは訊いたらいけないのでしょうか？」

「彼だからだよ」

そこの二人、うっさい。

『まあ、シグナムの喘ぎ声はちゃんと送るで。 それよりどうしたんや？ 捕まったん？』

「お前らって、俺見るたびにそれ聞くよな。 そんな頻繁に捕まるわけないだろ」

といつつ、この頃のおっさんとの勝率はそこまで誇れるものじゃないのが現状だ。 どうしたものか。

「まあいいや。 いやまあさ、今日友人と六課に遊びにいかうと思ってるんだけどいいかな？ ちょっとサプライズ的な感じにしたいくて」

『サプライズ？ どんな感じ？』

「俺がニップレスだけ装着した状態で登場するとか？」

『わたしは友人を一つなくすんやな……』

「一つと言ってる時点で友人のカテゴリーから逸脱してるだろ」

『性奴隷？』

「いやらしい牡犬ですっ！ 思う存分ぶってくださいっ！」

まあ、なんとか六課へ行く許可は下りましたとき。

☆

八神はやては耳から携帯を離し終了ボタンを押した。

「ふう……久しぶりやなあ、アイツと会うんわ」

「ただいま〜！ ケーキ買ってきたよ〜！」

「おっ？　なのはちゃん、ちょうどいいところに」

ジャンケンで負けてケーキを買いに行っていた高町なのは他多数が帰ってきた。ちなみに六課は訓練0.5割、あとは好きなことと適当に書類仕事をする事になっている。

何かがおかしい気がするが現状で外からの不満も内からの不満もないのでこれでいいだろう。そのかわり一人一人が訓練してくれるのはやフェイト、ヴィータやシグナムに質問しているようだし、なんとかなるだろう。

「ん？　どうしたの？　はやてちゃんが頼んだパフェならスバルがたべちゃったけど……」

「スバル、四つん這いになりいや」

「なにする気ですかっ!?!」

愉悦を含んだ表情のはやてを前にしてスバルは恐怖を覚えなののは後ろに隠れる。

「助けてくださいなのはさんっ!」

「素晴らしいながら胸揉まないでよっ!?!」

わしづかみしようとするスバルの手を振り払う。

「おくい、なのは。あとがつつかえるから早く入ってくれよ」

「あ、ごめんね。ヴィータちゃん」

後ろのヴィータに言われてようやくやく部屋に入る。その後ろからゾロゾロと新人や副隊長陣も。まるでカルガモ隊みたいだ。

全員が入って、席に座りシヤマルとなのはで人数分の紅茶を配り各々選んだケーキを食べ始めたところで、なのはがはやてに先ほどの続きを促した。

「それではやてちゃん。さっきの話なに?」

「いやあね、なのはちゃんとフェイトちゃんに会いたって人がいるんや」

「え？　私にも?」

チヨコレートケーキをエリオとキャロにあげていたフェイトが驚きながら振り返る。

「そうそう、ちなみに男性やで」

「男性ですとっ!!」

男性の単語を聞いた瞬間にスバルとティアが席を立つ。

「ダメです、純粹で純白なのはさんに男性なんて似合いません!!」

「そうですよ、なのはさんはランスターの名を継ぐんですから!!」

「継がないよっ!? いつの間に決まってるのっ!?」

「そ、それで……なんで急に?」

フェイトが少しだけ視線をキツくしてはやてを射る

「いや〜……わたしは拒否したんやけど相手側が聞かなくて……うちの権力ではどうすることもできなかったんや……」

「はやてちゃん……」

「はやて……」

顔を伏せるはやてになのはとフェイトは近づいてそつと抱きしめる。

「ごめんな、二人とも……」

「大丈夫だよ。相手側にはわたしとフェイトちゃん断るから」

「うん、大丈夫だよ」

「そうですよ、なのはさんに何かしたら私とティアがぶちのめします!!」

その瞬間、部屋にいる皆の心は一つになった

「ちなみに、その人の職業はなんなの?」

「やっぱり、はやてより権力強いならそうとうだよね……」

その二人の問いかけにははやては軽く涙ぐみながら答えた

「性奴隷や」

「それ職業っ!?!」

その瞬間、部屋にいる皆の心は恐怖でいっぱいになった。

## 14. コイキングの本気

機動六課——それは八神はやてがあらゆる知人の後押しによって作られた少数人数で動ける精鋭部隊である。

SSランクの八神はやてをはじめエースオブエースの高町なのは、その相棒とまで言われているフェイト・T・ハラオウン、一騎当千の力を持つといわれる守護騎士などなど、おおよそ通常では考えられない高ランクの面子が揃っている。まさに管理局のエース部隊であり、看板ともいえるであろう。

というのは、建前であり実態は180。違うものだ。

まず機動六課の立ち位置というのは一言でいえば「萌え担当」である。世界というのは驚くほど広く、その広さの分だけ犯罪は絶えない。そうするとどうだろう？ お偉い人たちは毎日毎日眉間に皺しわを寄せ、空気は悪くなるばかり、局員も人員不足によって疲労困憊しわのブラック企業並みの勤務時間。

あげくのはてには管理局員の身でありながら違法行為に走ろうとするバカも出てくる。

だがしかし——そんな管理局にも楽しみというものがある。それが六課の部隊長である八神はやてが週一で発行する六課の新聞『乙女の秘密を覗いてみよう♪』

である。何故週一かというと、単純にはやてが面倒なだけである。ちなみに六課の人達は知らない。理由は簡単、怒られるからである。ふざけている？ そう思う者もいるかもしれないが、これを取り入れたことよって管理局の中も大きく変わった。まず肥えただけのデブのお偉いさんの顔が優しくなっていたのだ。そしてダイエツトするようになった。後者はどうでもいいので前者のことだけ述べると、激務の最中、ちよつとうたた寝してしまったせいで書類が終わってない管理局員Aさんは叱られるの覚悟でお偉いさんの所へと向かう。

するといつもは怒鳴ってばかりのお偉いさんが菩薩のような笑みで失態を許し、あろうことかAさんの仕事すらも引き受けたのだ。



お偉いさんの心境としては娘が頑張っているのだから、自分もがんばろうとかそんな感じだろう。

それだけではない。絶体絶命でいまにも瀕死の局員が新聞読みたさに生還してきた、なんて事例もある。

それに伴い犯罪者逮捕率はうなぎ上りだ。

さあ、ここで問題になってくるのが当事者というか被害者になっている六課の面々なのだが、管理局員の全員が暗黙の了解・約定としてこう血判してある。

『イエス六課・ノータッチ』

たまたま出会ったときには話してもよい。しかしながらその体に触れた瞬間、社会的抹殺と身体的抹殺の二つがまっているということだ。そして驚くことに全員がこれに納得している。

本当に管理局は大丈夫なのだろうか？

☆

「だくかくらく、俺たちははやてから了承貰ってるんだってば！このすつとことつこい！」

「そうだね、私たちは正式な客人として招待されている身だよ。君は門番程度の権力でたてつこうというのかね？」

「いや、ですから……そのお面を外していただかないかぎりにも中へ入れることができないわけでありまして……」

目の前で繰り広げられている光景を見ながらウーノは溜息を吐いた。

正直なところ、この門番の言っていることは正しいと思う。

上半身裸でニップレスをつけた状態の男と白衣を着て頭に紙袋を被った男を六課の敷地に通すのはとても危険すぎるだろう。

「なんでだよ！ズボンだって履いてるだろ！」

その調子で服も着てくれるとありがたいのですが……

「いや、それはわかっているのですが……ここはあの有名な六課ですので次元犯罪者が来る可能性も……」

「何を言っているんだね、君は。 わざわざ管理局に突っこんでいく  
バカな次元犯罪者がどこにいるのかね？」

ドクター鏡みてください。

ワーワーギャーギャーと騒ぎ立てる二人を横目にウーノは携帯を  
取り出す。

「あ、なのはちゃんですか？ いま六課の前にいるんですが——」

「えっ!? 俊くん六課に来てるのっ!?」

ウーノから電話をもらったなのはは思わず普段は口にしない幼馴染  
染の名前を口にだした。

「なのはちゃんがあのバカの名前言うなんて……よっぽどのことやで  
……」

長年一緒にいるはやては冷静にそう認識する。 普段は名前すら  
言わないのだから。

そんなはやてをよそに慌てた様子でなのはは部屋を動きながら早  
口で電話の相手と話す。

「え〜……ちよつと本当に困るってば……」

『すいません……私が提案したばかりに』

「えっ!? いえいえ、ウーノさんなら大歓迎なんですけど……あのバ  
カだど何やらかすかわかったものじゃなくて……」

なのはは、う〜ん、と唇をとがらせて考える。

「ちなみにいまなにしてますか？」

まあ、六課の警備は嚴重だからおとなしく待っているとおもうけど  
……

『警備員殴って侵入したところですよ』

「本物のバカがいたっ!」

なのはの叫び声と同時にけたたましく警報が鳴り響く

「え? え? なになに、どうしたの?」

「いやいやフェイトさん、呑気に紅茶飲んでる場合じゃあないですつ  
てばっ! 誰かが六課に侵入してきたんですって!」

クッキーを食べつつのんびり紅茶を飲んでいたフェイトにスバル  
が叫びながら答えるのだが——

「う〜ん……なのはが指鳴らしてるから大体侵入してきた人はわかるかな。まあ、のんびりと紅茶でも飲みながらみてるといいよ。私となのはがお世話している相手がいると思うから。……それより、なのはと私に会いたいわって人遅いね。一刻も早く断りたいのに」  
そのはやてが言った男性が警備員を殴って侵入してきたバカだと知ったらフェイトはどうするのだろうか。

「は、はあ……お世話ですか?」

「うん、お世話かな」

納得したような納得してないような表情で頷くスバル

その時、やけに慌てたような声と足音。その後ろから何かを叫ぶふたり分の声が届いてきた。

なのはに視線を移すと、右ストレートを打ち込むために極限まで腰をひねっていた。

バタンツ!!

「みんな、大変だツ!! 侵入者が出たみたいだぞ!!」

「アンタだよツ!!」

「ぶへあツ!!」

『スカさー………んツ?!』

「……え? スカさん?」

ドアを開けた瞬間、なのはは顔面に向かって打ち込んだ。それを食らった男性はわけのわからない声を出して部屋から消えたのだが、自分の予想した相手と違ったので、おそろおそろ自分が殴った相手を確認することに。

「スカさんっ! 大丈夫か、誰にやられたんだっ!」

「ドクターっ! しつかりしてください!」

みると泡を吹いて倒れている男性に必死に呼びかけている幼馴染。泣き目でゆすつている友人。幼馴染が自分の存在に気付いたのか、こちらをみていた。

「い、いらっしやい。機動六課にようこそ♪」

「気をつけろー! コイキングがギャラドスに進化したぞおおお  
おおおおお!!」

「ち、違うもんっ！ 不可抗力だもんっ!!」

片足を上げウインクしながら指をピンつと立てて可愛らしく言っ  
たなのに対して、ひよつとはスカリエッティを抱きしめながら大  
声で叫ぶのであった。

## 15. マスコット作戦

「えー……っ!? それじゃ、はやてちゃんがさつき言ったわたしたちに会いたい男性ってコレ!?!」

「そうやで」

スカさんがギャラドスによってKOされてから10分、俺は床の上で正座をさせられていた。こいつらがいうには反省の意味も兼ねてらしいのだが……真に反省すべきはなのはだと思っただ。だつてスカさん殴ったじゃん。泡吹いて鼻血流してたじゃん。流石の俺も警備員に鼻血は流させてないぞ。

「いや、おかげでなのはちゃんが本気で殴った映像も撮れたしよかったです」

「うう……あれは不可抗力で……その……本当はコレを殴るつもりだったのに……」

もじもじしながら怖いことを言わないでください。スカさん、俺を救ってくれてありがとう。

「まあまあ、ええやないか。コレも本気でなのはちゃん達を心配してきてくれたんやで?」

「そうだそうだ! もつと言ってやれ、はやて!」

「ごめんな、下から必死こいてパンツ覗こうとしている奴を弁護できんわ」

地に伏せながらなんとかスカートの中の楽園を覗こうと土下座体制でなのは達をみているひよつとこにはやては冷徹な目を向ける。

その視線に気づきひよつとこは瞬時に正座の体制へと戻る。そして周囲を2・3回見回した後、袖を拭いながら溜息をついた。

「ふう……危ない危ない、バレるところだったぜ……」

「もう遅いよ、なにもかも遅いよっ!? はやてちゃんのセリフ聞こえなかったのっ!?!」

「え? どうしました、高町なのはさん。そんなに大きな声を出してはいけませんよっ!」

「誰のせいだと思ってるのっ!?!」

「ちなみに、そろそろいちごパンツは卒業しましょうね?」

「個人の勝手じゃんっ! というか、いつの間にパンツみたのっ!」

「ごめん、当たるとは思わなかった」

「zzzうえxrdcty9おいkjゅhygrてsxdcfv!」

なのははバインドでひよつとこの両手両足を縛り、近距離から魔力弾を放つ。

「なんだか……なのはさん嬉しそうですね」

「これがそう見えるなら病院行ったほうがいいぞ、スバル。 どうみてもあいつを抹殺しようとしてる途中だろこれ」

横にいるヴィータに話しかけるスバルだが、ヴィータはうんざりしたような様子で答える。もしかしたら、今回のようなことがしよつちゆうあるのかもしれない。

「けど……どうしよう。 ねえ、ティア、あの人と同棲相手なら私たちはやるしかないんだよね……」つて、ティア?」

みると友人であるティアが指をワナワナ震わせてカタカタと体を動かす。

「あれ……もしかしてお兄さん……? お面も一緒だし、声も一緒。

え? うそ? あんな人類の最底辺をいつてるような人が私が気になっていた人……?」

「あの……ティア?」

相方の様子がおかしいのに気が付き、そつと触れようとする——とここでティアがいきなりひよつとこのお面をつけている人に向かって駆け出した。

「あの! お兄さんですよ、ティアです! お墓で会った!」

「ちよつとまってくれ、いきなり妹感覚で話されても困る。 君が妹を名乗るなら縞パンをはいてフリフリのスカートを履き、ネクタイで可愛らしくきめてからまたきたまえ」

「いや、そうじゃなくて……お墓の前で会いましたよね!」

「なのは、なのは、いま俺ナンパされてる?」

「はいはい」

「ヤキモチ焼く?」

「モチ焼くくらいならパン焼くよ」

「こいつ……こんなときまで高度な下ネタを……!?!」

「いやいやどこがツ!? いまのどこが下ネタだったの!?!」

荒ぶるティア、しかしひよっとこはそれをひらりとかわし、なのはで遊び始める。ティアはがっくりと肩を落とし、とぼとぼとスバルたちの所へ戻っていった。

「……よかったの? 俊くん」

「いいんだよ、これで。嬢ちゃんの中では恰好いい男性なんてイメージが出来上がってるかもしれないしな。それを壊したくないんだ」

「でもお墓に塩撒いたんでしょ?」

「寺生まれのTさん直伝の方法だぞ」

「知らないよ、そんなの。もう……そんなことしちやダメでしょ。」

「次やったら私が塩撒いちゃうよ?」

「潮吹いてくれるの?」

「死を撒いてあげようか?」

レイジングハートを機動させながら俺の頬にペチペチと当ててくるのははやくザそのものです。ギャラドスからレックウザに突然変異したぞ、こいつ。とりあえずバインドを解いてくれたので、ひとしきり見渡すことに。

「なんというか……アレだよな。六課って女多いな」

「せやなく、わたしがじきじきに選んだからなく」

「ああ、なるほど。それは女が多くなるわけだ」

はやてなら無駄な男なんていらぬし、いれないだろうな。

「しかしはやて殿、こう女子おなごが多いとマスコットなるものが必要ではないか?」

「マスコットならなのはちゃんがおるで。毎日毎日、かわいすぎて萌え死にそうや」

「まあ、なのはがマスコットなのは認めるかな」

「ねえ、それって喜んでいいんだよね? ちなみにそのマスコットはどんな役をするのかな? みんなに笑顔を振りまいちやうとか……」

「？」

「オチ担当かな」

「ひどいよ二人ともっ!」

まあ、いいじゃないか。 見る分には面白いし。

「どうせ、アレやろ？ 自分がマスコットになりたいとかいうんやろ？」

「べつにそんなこと思ってないけど、マスコットにしてください  
いかん、願望が少し漏れてしまった。

はやては溜息をつく。

「ほな、わたしが満足するようなマスコットの案をだしてみい。 それで判断するで？」

「こんなのはどうかだろう？ ひよつとこハム太郎とか」

「鳴き声は？」

「デウクシ」

「18禁verは？」

「ひよつとこハメ太郎」

「喘ぎ声は？」

「ヒギイツ!」

「わたしの負けや、採用」

「大反対だよツ!!」

はやてと互いに肩を抱き合いながら健闘を讃えているところではからストップがあった。 やはりなのは遊ぶのはめっちゃくちゃ楽しい。 俺も息子も嬉しすぎて反り返っている。

「ところでスカさん、目を覚まさないね」

「それだけなのはちゃんんの右ストレートが強かったんや」

やはりギャラドスは伊達じゃなかった。



## 16. 「速報」 スカさんが生還した

「スカさんが気絶してから1時間。そろそろスレ建てようと思うんだけど」

「ほうほう、どんなスレタイにするん？」

「コイキングの逆襲」 スカさん余命1時間 「はねるコイは竜になり飛翔する」 みたいなスレタイでいこうかなと」

「よし、わたしが建ててくる」

「やめてよっ!？」

はやてとウキウキ気分でスレを建てようとしたところ、横から悲鳴混じりのなのはの声が聞こえてきた。

「え？ どうしたの、なのはさん。 もといギャラドスよ」

「ちっ、ちがうってば！ だ、だから……アレはそもそも間違いで……」

「ほんとは俺を殴る予定だった？」

「うん」

「おーい、スレ建てよろしく」

「あいよー」

はやてが自分のPCでスレを建てようとする——が、それをさせまいとなのはもはやての机に迫ってくるので後ろから俺が羽交い絞めすることに。

「もうよせ……!! 戦いは終わったんだ……!! お前は頑張らなくていいんだよー!」

「ここで頑張らなかったら私は大変なことになっちゃうよ!？」

「胸揉んでいいっ!？」

「人の話し聞いてよっ!？」

「ハア……ハア……なのはタソのおっぱい……——って、あぶなあっ!?! 後ろからレバ剣飛んできたっ！ おっぱい魔人がレバ剣飛ばしてきたっ!?!」

「貴様を葬ればミッドの平和を守るような気がしてな」

あながち間違いじゃないから反論できない。 そうこうしている

間になのはははやての元にいつて、PCの電源を切ってしまった。  
くそっ……！　このおっぱい魔人め！

「俺となのはのスキンシップを邪魔するなっ！」

「それはセクハラというものだ」

「シグシグのおっぱいだってセクハラもんだろうが——謝るから、レバ剣を投擲しようとしないでっ！」

昔から守護騎士たちは冗談が通じないんだよな。　とくにシグシグなんて全く通じないし。

ふいにフェイトと視線が合う。　逸らすフェイト、見つめる俺。

「……我が家のおっぱい魔人は俺と視線を合わすのも嫌なのか……」

「ち、違うよっ!?　でも、ここで目線を合わせると面倒なことに巻き込まれそうだったしっ！」

そういいながら、キャロとエリオを後ろに庇うフェイト。　お前は  
どっだけ警戒してるんだよ。

「べつにー、ちよつとシグシグにフェイトの胸囲の脅威を教えてあげようと思っただけなのに。　なー、ロヴィータ」

「ここであたしに振るのは宣戦布告と受け取っていいんだな？」

守護騎士一のロリっ娘は俺に向かってアイゼンを構える。

「まあまで、ロリにはロリの魅力があると高校時代に——もう言わな  
いから振りかぶらないでくれ」

ブンブンと空を切り俺の頬にまで届いてくる風を受け、両手を上げ  
降参の構えを取る。

「そういえば、お前はさつきからコイツのこと「スカさん」って呼ん  
でるけどダレなんだ、結局のところ」

そういつてスカさんを指さすヴィータ。　人に向かって指を指し  
ちやいけないって習わなかったのかコイツは。

「こーら、ロヴィータちゃんダメでしょ。　人に指を指しちゃ——」  
「うるさい」

ボキッ

「指がああああああああああ!!」

おかしい、あいつ絶対おかしい。　思考がなのはと一緒だもん。

絶対おかしいぞ。

急いでシヤマル先生の元へ

「シヤマル先生、助けてくださいっ！ おっぱいとロリの相乗効果が襲ってきますっ！」

「ま、まあ……二人とも会えて舞い上がってるだけですよ。 たぶん……」

「ロリ巨乳なんて認めないんだよっ!!」

「そういう話じゃないですよね？」

困惑しながらもシヤマル先生は指を治してくれる。 やつべえ……シヤマル先生、便利すぎ。 シヤマル先生いればフルボッコにされても大丈夫なんじゃね？

シヤマル先生から治してもらい、いまだに構える二人に向かってしゃべる

「スカさんはスカさんだよ。 下着泥棒してるんだ」

「おいちよつとまで、その紹介文がすでにおかしいだろ」

「発明者なのかな？ なんか家に行ったとき大量のロボットがあった。 全部壊しちゃったけど」

「よく仲良くできてるよな」

まあ、変態同士だからな。

ロヴィータの隣にいたシグシグが疑惑の念を向けながらスカさんを見る。 どうしたんだらう？

「どしたの、シグシグミシル」

「今度言ったら前歯折るからな」

「お前らは苦痛以外で俺とコミュニケーションができないのかっ!？」

絶対アレだ。 はやてがアレなせいで守護騎士たちも頭がアレになってるんだ。

「けどよく…… “スカ” って聞いたら次元犯罪者のジェイル・スカリエツティを思い出すんだよな」

ロヴィータの眩きにウーノさんの肩が一瞬ビクリと動く。 ロヴィータはそのまま視線をフェイトのほうに

「そういえば、フェイトはスカリエツティのことに関して調べてるん

「だよな?」

「う、うん」

「まじで? フェイトタソちよつと教えてよ」

「あ、ちよつとまってる」

フェイトは自分の机に戻ると大きなファイルを引出から取り出し、戻ってくる。それは大きく大きく膨れ上がっておりそれだけでフェイトがこれに真剣に取り組んでいるのだとわかる。ロヴィータはスカさんのことを次元犯罪者だと言っていたが……あのスカさんがそんなだいたいそれたことできるのだろうか?

フェイトはファイルを一枚めくって紙に書いてあることを読み始めた。

「え〜つと、ジェイル・スカリエッティ・・・google検索で、間抜けな次元犯罪者は? つと打ち込むとgoogleさんからもしかしてジェイル・スカリエッティ? と質問される。ミッド調べ俺でも捕まえられそうな次元犯罪者 殿堂入り。つい笑ってしまふ次元犯罪者調べ 殿堂入り。ワンパンで捕まえられそうな次元犯罪者 殿堂入り」

『ぶふうっ!』

そこにいた全員が思わず笑ってしまった。なのはとはやてに至っては痙攣を起こしてるほどだ。かくいう俺も笑いを抑えられない。いや、流石にgoogle攻撃は卑怯すぎるだろ。

なのはが痙攣しながらフェイトに問いかける

「フェ、フェイトちゃん……それを追いかけてるの? あ、ダメ、笑いすぎてお腹痛い……!」

「う、うるさいなあっ! 私だってこんな人だとは思ってなかったよっ!」

むしろそんな奴がどうやったらか次元犯罪者になれるんだ? フェイトが調べてるってことはアレ関係かな?

脳裏に浮かぶのは黒髪で俺のことを坊やと呼んだ女性。手を伸ばし、掴んだはずなのにそれを振り払われた女性。俺たちをフェイトに会わせてくれた女性であり、一瞬なほどの痛々しいほどの娘への

愛情を魅せていた女性。あれからどうなったか分からない……けど、きつと幸せな夢を見てるんだと思う。娘さんと一緒に。

「どうしたの、気分悪い?」

「へ? いや、なのはとフェイトとやってるところを想像してたんだ」「頭力ち割るよっ!?!」

「なにいつてるんだよ。あんなにも可愛い声で鳴いてたじゃないか」

「それ夢のことだよねっ!? なんで夢のことを現実であつたかのように話しちやうのっ!?!」

みるとフェイトのほうも、必死に誤解だと主張している。ほんとかいつらの困った顔をみるのは面白い——けど、脈がないというのも考え物だ。ここらで一発イケメンなところを魅せないといけないのではないだろうか?

ということは置いていて、どうやらみんなには気付かれてないようで安心した。ほら、なんか主人公みたいになっちゃうじゃない?

ウーノさんが顔を赤くして俯いている。そりやそうだよな、スカさんの世間に対するアレが180。別ベクトルで有名になってる人だしな。ウーノさん頑張れ!

皆が笑っている最中、突然ドアが開いて声が室内を支配した。

『大変です! ミッド郊外にて犯罪者が出た模様! なお犯人は六課に対する侮辱を行い、六課が出動するのを狙っている模様です! どうしますか?』

「侮辱って具体的にどんなことなん?」

冷静に聞くはやて。流石は部隊長

『はい、六課はババアが多すぎる! とのことです!』

「全員、出動用意! 塵一つ残さへんで!」

『了解!』

声を荒げながら叫ぶはやて。流石部隊長、目が殺意に満ちている。

俺が女性たちの並々ならぬ殺意に震えていると、その殺意に当てられたかのようにスカさんが起きてきた。

「ん……ここは？」

「おはよう、スカさん。いまから六課による犯罪者公開リンチが始まるけど、どうする？」

「……どうやったら管理局の萌え担当を怒らせることができるんだい？」

「まあ、乙女には色々踏んではいけない地雷があるんだよ」

ギャラドスなんか逆鱗に触ったようなもんだからな。

とりあえず比較的冷静だったシャマル先生に頼んで、見学することに。

「スカさん、そろそろ紙袋取ってくれない？ 袋全体に血がこびりついてて怖いんだけど」

いまのスカさんは下手なホラーより怖いです。



犯罪者は使われていないビルに閉じこもっていた。窓ガラスはどころどころひび割れており、扉は錆ついてて閉められそうにない。そんなビルの3階で犯罪者は叫んでいた。

『かかってこーい、六課のババア！　へーい、六課はビビってる、ハイハイハイ!!』

「……あいつ頭トチ狂ってるんじゃないの？」

「うん、普段の俊くんを見るようだよ」

正直、俺がコイツと同レベルとか納得いかない。俺のほうがギリギリ下回ってるだろ。

「それにしてもフェイトちゃん。俊くん抱いてて大丈夫？　重くない？　わたしが持とうか？」

「うん、大丈夫だよ」

なのはが俺を抱いたまま空中制止してくれてるフェイトに声をかける。フェイトはそれに笑顔で答える。

「ごめんなー、フェイト。どうしても近くて見たかったんだよ」

俺はこんな時じゃないとこいつらの活躍とか仕事ぶりとか見ることでできないしぎ。フェイトもそれがわかってきているのか笑顔で首を横に振った。

「ううん、きにしないでいいよ。けど、あんまり無茶はダメだよ？」

「バリアジャケット着てないんだし」

「ユニクロのジャケットなら貸してもらったんだけど、それじゃダメなの？」

「いや、根本的に間違ってるから。ジャケットならなんでもいいわけじゃないから」

「というか、9歳の頃から俊くんジャケットがつけばなんでもいいと思ってるよね。ほんと成長しないよね」

「お前の胸もな」

「フェイトちゃん、落としていいよ」

謝るんで本気で離そうとするの止めてください。





「ほら、犯罪者なんか命乞いしだしたぞ」

「ちよつとーーーー!?　なんでわたしが執行になった途端土下座して  
るのーーーーっ!?!」

「……人間は賢い生き物だからな」

「納得いかないよおっ!」

もう!　なんでわたしだけいつもからかわれるのかな。　だいた  
い女の子に向かってギャラドスとかおかしくないっ!?　わたしまだ  
19歳だし、あんなに怖い顔してないんだけどっ!

なのはは一人犯罪者と対峙しながら幼馴染に憤慨していた。　後  
ろからはフェイトとひよつとこの能天気な会話が聞こえてくる。

だいたいなによ、ちよつとフェイトちゃんのアレが大きいからって  
フェイトちゃんに抱っこされちゃって。　ニヤニヤしちゃって。  
そんなにわたしは嫌なんですかー!　すいませんねー、大きくなく  
てー!　って話だよね。

それはアレだよ?　フェイトちゃんよりか大きくないけどはやて  
ちゃんよりかはあるもん。　絶対平均だと思ふもん。　いや……は  
やてちゃんって身長割には大きいんだよね……。　普通にわたし  
より大きいし、でも認めない!　それになにかにつけてわたしのこと  
苛めてきてさ、ほんつと小さい頃から変わってないんだから!

3歳の頃からずつと一緒なんだよ?　もつとこう……わたしに  
頼ってくるものじゃないの?　無職なんだよ?　普通わたしのこと  
を頼ってさ、こう……『お願い、なのは!　お前しか俺にはいないん  
だ!』　みたいな感じじゃないの?

釈然としない想いがなのはの中でふつふつと沸いてくる。

高町なのはという女性は俊がはじめて女の子と遊んだ相手である。  
そしてそれからもずつと付き合っている関係だ。　だから  
こそ知っている。　世界で一番彼のことを知っているのはだから  
知っている。　彼の泣き顔も怒り顔も笑い顔も膨れっ面も死のうと  
思っていたときの顔も絶望の中にいた顔も——全部知っている。

だからこそ、俊は自分を一番に頼ってくると思っただが——蓋を  
開けてみればそうでもなかった。　それは幼馴染として嬉しいこと

であるのだが……どうにも面白くなかった。

あー、止め止め。 あんなデリカシーのない相手のことなんて考えでも無駄だよ。 さっさと終わらせてシャワー浴びよ。

なのはは気付いていなかった。 溜息をついている隙に犯罪者が泣きながら聖母に祈りながら魔力弾を撃ったことに。

「避ける!! ナッパ!」

「へっ? うわあっ!」

後ろからの声で現実に戻ったのはは目の前の魔力弾を慌てて避ける。 これでもエースオブエースだ。 これくらい造作もないことだ。

ズガガガガガガガガガガガガガッ!! ↑ひよつとこ全弾命中

『アンタが当たるんかー!ー!ー!』

「……………わ、私は悪くないよ?」

遠巻きに見ていた新人たちの突っこみと、後ろを振り向いて冷や汗を流すのは。

やがて煙が晴れ、顔を下に向けているひよつとこと困惑したまま抱きかかえているフェイトが姿を現した。

ひよつとこは何もいわずフェイトの肩を叩き、シャマルがいる地点を指さす。

シャマルの所に降ろすフェイト。 シャマルは既に治療の準備をしていた。

『え? 本当は恰好よく避けて、ベータータみたいになのはに言うつもりだった? けど、フェイトと喋ってたらタイミングを逃して当たった? そう……それは大変だったわね。 予想以上に痛かったの? ユニクロ訴える? うん、確実に負けるからそれはやめましょうか』

どうやら本当に痛かったようでその後もシャマルが通訳のような形で会話をすることに。

『そもそもなのはは避けるとは思わなかった? へっほこの癖に?』  
「……………わたしも魔力弾当てちゃおっかなく……」

小さくつぶやくなのはに聞こえないはずのひよつとこが小刻みに肩を震わせる。

それが少しだけ面白くて、なのははひよつとこに聞こえるようにしゃべりだした。

エースオブエース 高町なのは。 犯罪者すつぽかして幼馴染に日頃の恨みを晴らすことに専念する。 これが本当にエースオブエースで大丈夫なのだろうか？

一方犯罪者は――

「誰かババアか言ってみいや！ おお？ はよ、いってみい！ 言った瞬間わたしがその唇引き裂いてミンチにしてぼっこぼっこにしたるで!!」

キレたはやてにフルボッコにされていた。

## 18. 犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン!

六課の初出勤が終わり、ほとんどなにもしていない新人達や一方的に犯罪者をフルボッコにしたはやてたちがにこやかな笑顔を浮かばせながら職場で菓子を食っていた。

「いや、初出勤もちゃんとできて六課も幸先がええな」

「お前が一方的にボッコって、新人たちはそれをみていただいただけだな」  
「そういう俊くんは自滅して、シヤマルさんに泣きついてただけだどね」

……出勤から帰ってきてからというもの、どうもなのはからキツイ言動が飛んでくる。あれか？ りゅうのまいで攻撃力でも上がったのだろうか？

俺がシヤマル先生に泣きついたことはかわらないのでここは黙って受け取っておくけど。

「にしてもあれだよな。魔力弾ってやっぱ痛いわ。19歳になったからもう大丈夫だろうと思ってたけど……これは成長するとかの問題じゃないよな」

「俊くんの頭は成長しないけどね」

……俺にはサツパリ理由がわからない。しかし……しかしだな。こう……好感度が下がっているような気がするのには確かなんだよな。

そつぽを向くのはにどうしたもんかと頭を悩ませていると、トツポを独り占めしていたはやてが急に顔を上げた。

「そや！ みんなで祝賀会やらへん!? 初出勤達成おめでとう祝賀会や！」

『おおー！ 部隊長がはじめて真面目なこと言った気がする！』

「ちよつとまちいな。わたしはいつだって真面目やったで？」

『……』

「なんで黙るっ!？」

それはまあ、普段のお前がおかしいからに決まってるだろ。

「でも、祝賀会ってどこでやるの？ 私たちは19歳だからまだ大丈夫だけどキャロやエリオはまだ子どもなわけだし……お店を貸し切ってやるのは反対だよ?。」

「大丈夫や、フェイトちゃん。場所はなのはちゃんとフェイトちゃんの家でやる! 二人のペットが一匹おるけど大丈夫やろ」

「おい、誰がペット。もつとこう……愛玩動物とか別の言い方があるだろ」

「いや……そういう問題じゃないよね? 遠まわしに俊は人間じゃないって言われてるんだよ?。」

フェイトが可哀相な目で俺を見てくる。

「はっは、君と一緒にいられるのなら俺は人間なんてやめてやるさ」

「でも人間じゃないなら結婚とかできへんで?。」

「やっぱいまのナシでお願いします」

それは困る。めちやくちや困る。どれぐらい困るかという俺の息子が勃たたないくらい困る。この頃使ってないから最近スネてるんだよな、こいつ。

「というか、okを出すのは俺じゃないからなんともなく。フェイトとなのはがok出すのなら俺は何もいわないよ」

あくまで俺は居候の身。色々部屋を改造したり至る所に盗撮カメラを仕込ませたりしてるけど家長はフェイトとなのはだ。

「うくん、私は別にいいよ。キャロとエリオも行きたかっただろうし。なのはは?。」

「そうだね、わたしも別に——」

『なのはさんの部屋に侵入できるなんて!! やば、私この場で絶頂しそう!!』

『落ち着くよ、スバル!! まだ早いわ! なのはさんが使っている枕やベット、小物用品で絶頂したほうが遥かにイけるわよ!!』

『流石だよ、ティア!』

「……わたしとフェイトちゃんの部屋に行くのは禁止でお願い。と

「……一階だけ開放ということだ」

「……妥当なところやね」

狂喜乱舞中の新人二人を見ながらはやては溜息をついた。

☆

「え〜っと、なのはとフェイトとはやてとシヤマル先生とロヴィータとシグシグとザツフィーと新人4人にスカさんとウーノさん。うひゃ〜……結構な量を作らないといけないのではないか」

場所は移動して我が家の台所で、俺は人数を確認して悲鳴を上げていた。

家に帰るまでの間にも色々と問題が起こったのだが面倒なので省略することに。

後ろのほうではパーティーゲームで盛り上がっている女の子たちの声が聞こえてくる。

『なのはちゃん、負けたら脱衣やで!』

『えっ!? そんなこと聞いてないよ! あ、ダメ負けちゃう!? あ〜~~~~!』

『ぐふふふ……さあ、脱ぐんや!』

「その役目、俺が受け持とう——おい、なんで部屋に結界張ってんだよ!! これじゃ見れねえじゃねえか!!」

鍋とか皮抜きとか千切りとか料理のこと全てを投げ出してエプロンを投げ出しズボンを脱ぎパンツを脱ぎ捨てながら部屋に突撃したところ、はやてがそれを先読みしていたかのように結界を張っていた。

「うおおおおおおおおお! 燃えろ、俺の小宇宙!」

力いっぱい殴るが結界はビクともしない

『さあさあ、フェイトちゃんも脱衣の時間やで〜!』

『ちよ、ダメええええええ!』

「なんで俺には魔導師としての力がなかったんだ!! なのはとフェイトが裸で俺のことをまっついているというのに……! こんなことじゃ、

男失格じゃないか!」

「その前に人間失格じゃないのかね」

「服を着ろ」

「ひよつと(こ)さん……」

結界の前で全裸になったまま膝から崩れ落ちていると、傍で呆れ声と悲しそうな声が聞こえてきた。前者はスカさんとザツファイー。

後者はエリオである。

「ああ、結界張る前に追い出したんか。そこらへんはぬかりないんだな」

「さて、全裸のままこちらにくるな。ぶら下がっているモノが左右に揺れて気持ち悪い。まず人間として最低限の誇りを取り戻してからこちらにこい」

「そういえばザツファイーの毛でオナニーしたらどうなんだろう?」

「話を聞け馬鹿者っ!」

ワンコ姿のザツファイーに怒られた。あとザツファイーの毛でオナニーしたらチンコが絡まって大変なことになるかもしれない。こ……飲み物を飲んだときに対外に出す所からスルリと毛がはいつてきそうだよな。

脱ぎ捨てたものを拾い履く。流石衣服。聖母マリア様に包まれているような気がして落ち着くぜ。

「にしても久しぶりだな、エリオ。元気にしてた?」

「あ、はい!」

赤髪のエリオは子ども特有の笑顔で俺の質問に答える。うんうん、この笑顔を見る限り大丈夫そうだな。

「ところでエリオはなに食いたい? 夕食作るの俺だし、特別に食べたいもの作ってあげるよ」

「えっ? いいんですかつ!」

「うむうむ、可愛いエリオのためならお兄さん頑張っちゃうよ」

「あの……それじゃ……」

少し恥ずかしいように顔を赤くするエリオ。ごめん、エリオ。俺、そっちの気ないんだ。



やがてエリオは何かを決断したように言う。

「僕、お肉がいっぱい食べたいです！」

「そっかー、肉かー。俺も好きだよ、肉。うまいもんな」

もしかして肉を沢山食べたいことを言うのが恥ずかしかったのかな？

「うーん、それじゃ手羽先とトンカツにでもするか。おっし、お兄さんに任せなさい！」

ドンと胸を叩く。それを聞いてエリオが嬉しそうな声を上げる。

まあ、流石にそれだけでは健康に悪いので洋風パスタやカルパッチョとかも作ってみようかな。

「ところでエリオ。ここにゴスロリ服とウィッグがあるんだけど……ちよつと着てみない？」

一瞬にしてエリオの顔が戸惑いの表情に変わる。

「いや、ちよつとだけちよつとだけ。ほんと数秒でいいから、ね？」

「あの……ひよつとこさん、顔が怖いんですけど……」

右手にゴスロリ服、左手にウィッグをもってハアハア言いながらエリオに迫るさまは立派な犯罪者である。

「いやさ、なのはやフェイトに着てもらおうとわざわざ買ったのにあいつら俺の前ではきてくれないしさ。このさい、エリオに着てもらおうかと」

「ザフィーラさん、助けてくださいー！」

ザフィーラの助けもあえなく、ひよつとこに捕まったエリオはゴスロリ服を着せられたのだった。

## 19. 犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！（裏側）

時は少し前に遡る

「いや、ありがとうな。なのはちゃん、フェイトちゃん」

「べつにこれくらい大丈夫だよ。わたしもフェイトちゃんもこういうことしたかったし」

「うん、こういうのって面白いよね！」

ひよつとこが台所で食材の確認をしている頃、大きな部屋に集まってはやてはなのはとフェイトに頭を下げていた。三人のほかにもエリオやキャロ、ティアナやスバルや守護騎士の面々、そして何食わぬ顔で参加してきたスカリエツティとウーノがいた。

「それにしてもみんなお疲れ様！ 初出勤は全員怪我也せず終わってよかったね！」

「……なのは、ひよつとこのこと忘れてねーか？」

「え？ 何言ってるの、ヴィータちゃん。そんな人いないに決まってるじゃん！」

にこやかな笑みを浮かべるなのはにヴィータはそれ以上なにも言えずに黙るだけだった。

「もしかして、なのはさん怒ってるんじゃないの？」

「……それはあるかもしれないよ。どうしようティア。なのはさんの機嫌がよくなないと部屋に侵入する機会チャンスがなくなっちゃうよ」

「いや、それより雰囲気自体が暗くなっただな……」

新人二人とヴィータがコソコソと集まって会議をする。他の者は困ったように苦笑い。そんな空気をどうしようかと思案するはやて。

「あ、気にしないで。普段もこんな感じの扱いだから」

そして事実を告げるフェイト

『もう少し扱いよくしましょうよっ!？』

「一般人のランクにまで上がったたらわたしたちも扱い方をかえるんだ

けどね〜」

「どうやら高町なのはという女性の中では彼の人間性は一般人以下のランクに位置しているらしい。　といつてもそれはなのはだけに限ったことではない。」

「おおよそ、ここにいる女性陣は彼のことを一般人ランクだとは思っていないだろう。　せめてミカツキモランクが打倒なところだ。」

「けど、ひよつとこさんってなのはさんやフェイトさんのことが好きなんですすよね?」

「どうせ口だけだよ、口だけ。　わたしがなんと俊くんの口車に乗せられたか」

「そういえば、なのはって子どもものうちにビスコ食べてたら魔力量が上がるって嘘話を一人だけ信じてたよね」

「うっ……フェイトちゃん。　それはいわないでよお……」

顔を赤くしながらフェイトを睨むなのは。　その視線を受けて自分がどれほど迂闊なことをしたのか悟ったフェイト。

「なんですか、その話っ!　詳しく聞かせてくださいっ!!」

『私たちも聞きたーい!!』

ハイエナのようになのはの周囲をまわりながらインタビュアーのように手をマイク代わりにして押し付ける新人に、困った顔をしながらもなのははかわす。

「ふくむ……それならちよつと試してみる?」

『ビスコを?』

「いやいや、ひよつとこのことや」

「頭に?　マークを浮かべる全員にはやてはどこからか取り出した伊達メガネを装着して女教師のように説明しはじめた。」

「あのバカは夕食の準備をしている最中や。　そこでわたしがこの部屋全体に結界を張る。　当然魔力を持たないアイツは結界に入ることができないわけや」

「あれ?　でも俊くん微量だけで魔力あるよ?」

「大丈夫大丈夫、あれは、ある、うちに入らんで。　ランクにすらできんし。　説明を続けるで、その結界の中であたかもパーティーゲー

ムをしているふうにみせかけるんや。そしてあいつがわたし達の  
楽しそうな声に気付いた瞬間に一芝居うつ！ わたしがなのはちや  
んやフェイトちゃんに脱がそうとする芝居や！ あ、もちろん芝居だ  
から声だけでええで。 もつとも……脱ぎたいなら別やけど」

『ぬーげ！ ぬーげ！ ぬーげ！ ぬーげ！』

「ちよつ!? 脱ぐわけないよつ！ しかも仮にも上司に向かってそれ  
はあんまりじゃない、スバルとティアっ!」

なのはの脱がない宣言に絶望しきった表情でフローリングを転が  
るスバルとティア。 いったい彼女たちはどこに向かおうとしてい  
るのだろうか。

「まあ、そんなわけで演技に色をつけるために男には退散してもら  
うで。 もつとも、退散しなかつたらあのバカが厄介なことになるけ  
ど」

「ふむ、同士を怒らせるのは私としても反対なのでね。 ここは素直  
に従っておくとしよう。 では……エリオ君にザフェーラ君いこう  
か」

「さて貴様、いま卑猥な単語を口にしなかつたか？」

スカリエツティに手を引かれながら部屋の外へ出ていくエリオと  
自分の名前の一字が変わっただけで卑猥な単語に早変わりしたザ  
フィーラがスカリエツティを睨むながら出て行ったのを見届けては  
やてが結界を張る。

「さうて、まずは……本当にパーティーゲームしよつか!」

演技をするのにも限界がある。 今回は音をあちらに届けないと  
いけないのでどうしても本当にゲームをする必要がある。

「それじゃスマブラやろうよ！ わたし強いんだよ!」

やる気満々ななのはにはやては挑発的な笑みで返す。

「ほく……なのはちゃんがねー。 まあ、それならわたしが軽く捻つ  
てあげようかな」

「へく、はやてちゃんがなのはに勝てるんでも?」

バチバチと火花を散らす二人。

かくしてパーティーゲームのはずが二人の真剣勝負へとかわって

いった。

3分後、そこには自分のゲームの弱さを痛感しているエースオブエースの姿があった。

『えげつねえ……いつさい手を抜かなかったぞ……』

『……なのは涙目じゃないか……?』

「な、泣いてないもん！」

うつすらと目元に雫をためながらなのはが言う。

「な、なのはは頑張ったよ！ うん、すっごく頑張った！」

なのはの姿をみてフェイトがすかさずフォローする。なのははそんなフェイトの胸に飛びついていく。頬に当たる豊満で豊潤な胸。それを顔面全体で味わいながら、なのははそっと自分の胸に手を当てる――

「フェイトちゃんの裏切り者っ！」

「ええっ!？」

「ちよつとまで、なのは。なんであたしの所に真っ先にきた。自分の一部の膨らみを確認してからここつちにきたよな？」

「ヴィータちゃんがいるからまだ大丈夫だもんっ！」

「どういう意味だコラッ！」

自分より下の者のところに行く。人間の賢い知恵である。

「まあ、それはそれとして。そんじゃ実験はじめようか」

「そういえば、この実験でなにがわかるの?」

「……あいつの人間としての最低度かな」

その時、この場にいる誰もが思った。

『元から最低の部類だけどな……』

その空気を肌で感じたのかはやてが努めて明るい声でなのはに呼びかける。

「ま、まあなのはちゃん。とりあえず実験しとこか。色々面白いもんが見れるかもしれないし」

「え〜……それじゃあ」

「おっし、いくで〜。』なのはちゃん、負けたら脱衣やで!』 はい、このセリフ」

「う、うん。『えっ!? そんなこと聞いてないよ! あ、ダメ負けちゃう!? あくくくく!』 えくつと、これでいいの?」

「おっけおっけー、上出来や。それじゃ、結界でわたしら側だけ見れるように操作してあいつがどうしてるか見物しよか」

はやてが軽く指パッチンする。

そしてクリアになる視界。映し出される幼馴染の姿

オープン

ひよつとこ↑パンツを脱ぎ捨てようとしている最中

クローズ

「ごめんみんな! あいつ予想以上にバカやった!!」

一瞬で結界をもどしたはやてがみんなに向かつて土下座する。

それはまさに視界に映し出された化け物。凶器を持ちながら狂喜し幼馴染の裸を見れるということ

狂気した変態の姿。

それはか弱い少女たちを絶望へ恐怖へどん底へ叩き落とすには十分であった。

ある者は自分の母の元へと飛び込み涙を流した。

ある者はハンマーを取り出して彼の息子を叩き折ろうとしていた。

ある者はこれにかこつけて最愛の人の胸を揉みしだこうとしていた。

ある者は顔を赤くしたまま自分の幼馴染がここまでの男だったのかと嘆き、悲しんでいた。

そうして彼が知らないうちに彼女たちの彼の認識が評価がかわっていった。

## 20. スカさんとお話し

大人三人がゆうに入れる台所で、男性3人とゴスロリ服を着た男子1人の声が聞こえてくる。

指示を出しているのは黒髪に日本男子の平均身長をわずかばかり超えている男性である。その男は自分も手を動かしながら淀みなく他の者に指示を出していた。

「スカさん、トンカツ用の肉にはハチミチを塗っておいて。そうすることによって冷めてもおいしく出来上がるから。ザツファイ、手羽先は二度揚げでよろしく。エリオはパスタもってきて」

自身はサーモンのカルパッチョを作りながら指示を出すと、そこに恐る恐るといった感じで、スバルとティアが近づいてきた。

「あのー……はやてさんが手伝ってこい、というので来たのですが……私達にできることありますか？」

「ああ、それはちようどいい。それじゃ、このカルパッチョを運んでくれ。おい、そろそろテーブルのほうに移ってくれ！」

『はいー！』

「うわあつ！ ティア、このカルパッチョおいしそうだよ！」

「ほんとだ……！」

あくまで男性との距離を取りながら皿を受け取ると、二人は喜色満面でテーブルへと皿を運んでいく。男性から呼ばれた者たちはゾロゾロとテーブルへと席についた。

普段はなのはとフェイトとひよつとこしか座らないのでそこまで大きいのを買っておらず、テーブルには6人しか座れないのだが——「えくつと、来客ようにもう一つだそっか。フェイトちゃん、どこにあるっけ？」

「え？ 私知らないよ？」

『なのはく、右奥の部屋に来客用のあるから取ってきてー』

「あ、はいー！」

二人でクエスチョンマークを台所から男性の声が飛んでくる。

その声でようやくどこに置いたのかの場所がわかり慌てて取りにい

くことに。

「……なんで自分の家のことなのにわからないんだ？」

「まあ、家のことは大抵アイツがやってるし。アイツのほうが詳しいやろ」

ヴィータの呟きにはやてが答える。

「おまたせく、テーブルもってきたからみんな座ってー！」

「ところで、なのはちゃん。席順はどうするん？」

「あつ……どうしよつか」

ここでようやくなのははその考えに至った。主席のテーブルは6人までしか座れない。そして今日来ている者たちは合計で14人。引き算すればわかると思うが、半数以上の者が主席テーブルには座れないのだ。

「まあ……こういうときは大抵年上に主席を譲るのが当然なんやけど……」

「なのはさんの横がいいです！」

「なのはさんの上がいいです！ もしくは私がなのはさんの下で！」

「といってるように、新人二人が譲らんのでなく」

はやて自体はこのことを嬉しく思っている。六課は自分の身内で固めた部隊だ。隊長陣たちは身内なので仲がいいのは当たり前なのだが新人たちとの温度差がはやてには気がかりだったのだ。

それもいまでは雲散霧消しているわけだが。なのはには悪いが、なのはに感謝しているはやてである。なのはには悪いが、

「えつと……とりあえずティアとは一緒になりたくないかな」

「ひどいなのはさんっ!! あの一夜はなんだったんですかっ!!」

「どの一夜っ!?!」

ティアがなのはに突撃して抱きつく。

そうこうしているうちに、ザフィーラとスカリエッティが料理がのった大皿を運んでくる。

『おおー!』

思わず漏らす感嘆の声。



「へく、前みたときより結構レベル上がってそうやな」

「あいつ、料理にかんしては真剣に勉強してたもんな」

テーブルに置かれた料理をみながらはやとヴィータが話し合う。

「……もしかして、ここまでの料理が作れるひよつとごきさんて凄い人なんじゃ……?」

「うん……それは思ってきた」

新人二人が料理をみて呟くと、何人か首を縦に動かして同調する。

「こ、これっ！ か、カルボナラーです！」

『おいしいぞー、エリオ。 カルボナラーだよ』

「あ、カルボナラーです！」

若干緊張気味でぎこちない足取りで、エリオがカルボナラーを運んできた。

ゴスロリ衣装を身に纏いながら

「……もしかしなくても、ここまで見境ないひよつとごきさんって頭がおかしい人なんじゃ……?」

「うん……それは知ってた」

新人二人がエリオの姿をみて呟くと、全員が首を縦に動かして同調した。

ひとまず料理を作り終えたので俺もテーブルに着くことに。

「……あれ？ 俺の席がないんだけど」

「ああ、あっちにあるぞ」

律儀にみんなが待っている中で、ヴィータが窓の方を指さす。

そこにはダンボールで作られたテーブルがポツンと置いてあった。

コップに入ったお茶と一人分取り皿に乗せられたご飯が哀愁を誘う。

「いやいやいや、せめてそっちのテーブルに……」

『こないてくださいっ！』

「ええっ!? 俺なにかしたかなっ!?」

料理を手にとってなのは達が出したテーブルに移動しようとしたところで、そのテーブルに座っていたキャロ・フェイト・ヴィータ・エリオ・ウーノさん・スカさん・ザツファイーに却下された。

……あれ？　いまさつきまではここまで拒絶されてなかったのに。そんなことを思っている間にはやてから、いただきますの音頭が行われる。それを皮切りに各々が嬉しそうに料理を食べてくれるのだが――

「……うくん、スバルとエリオの食欲は予想外だな」

勢いよく食べる二人を前に、俺が作った料理がどんどんなくなっていく。料理がなくなること自体はともうれしいことだ。　　んたつて、料理は食べられてこそ意味があるんだし。　　しかしながら、ここまでの勢いで食べられると……

「……料理を作るほうに徹しようかな」

すでに消えつつある料理を眺めながら台所へと向かう。　　今回の主役は六課の面々だし、楽しんでもらえらるならそれでいいや。

食べる側から作る側に早々シフトチェンジした俺のところにスカさんがやってきた。

「どうしたの、スカさん？　酒とかタバコとかないよ？」

「いや、そういうわけじゃないんだがね。　　君一人では大変そうなので手伝おうと思つてね。　　それに、色々とあそこにいたら私も危ない身なのだよ」

「窃盗したから？」

「もつと大きなことさ」

　　そういいながらスカさんは隣にたつて、俺のかわりにジャガイモの皮をむいてくれる。　　それにしても窃盗より大きなことつてなんだろう？　　盗撮？　　それとも小さい女の子に声をかけたとか？

手を動かしながらも思案する俺の頭の中に、スカさんの声が届く。

「君からみて、フェイト君やエリオ君はどうみえるかい？」

「どうみえるつて？」

「こう……なんといいばいいのだろうか。　　その……人生を謳歌している、みたいな感じで」

「そうだなあ……二人の表情を見ればわかると思うけど、毎日楽しそうに過ごしてるんじゃないのかな？」

「そうか……」

スカさんはそれだけ言っただけで、作業に徹する。先ほどまでとスカさんの態度が違うのでこちらとしては驚くばかりである。何か悪い食べ物でも食べたのだろうか？

「スカさんどうしたの？ なにか悪い食べ物でも食べた？」

「いや……ちよつと思つて場所があつてね。君は考えたことないかい？ 〴〵もしここでくならば違う生き方もできたんじゃないのか」と。

今日、六課のみんなを見ていたらそう思つてしまつてね」

「まあ、それは考えたことあるけどさ」

そんなこと考えていても、仕方がない気がするけどね。セーブやロードがついてるような生易しいゲームじゃないんだから。

「そんなこと言つてたら前になんか進めないよ。それに実際、神様が出てきて『君は不幸な人生だったね。私が昔に戻してあげるから、いまよりよりよい未来になるように、よりよい人生になるように頑張らたまえ』なんて言われても困るよ。単純に面倒くさいし、思ひ出補正もなくなつてしまう」

「ふむ……そんなもんかね。それにしても、君にも思い出というものがあつたのかね？」

「失敬な、これでもなのは達と過ごしてきたんだ。色々な思い出はあるよ。嬉しかつたこととか、悲しかつたこととかね」

「ほう……差支えなければ教えてもらうことは可能かい？」

冗談なんか一切ない気配でスカさんが聞いてくる。

「よしてくれよ。野郎の過去話ほどつまらないものはないさ。どうせ聞くんだったらお話し大好きな女性陣の過去話でも聞くことだね。ぶつ飛ばされる覚悟は必要かもしれないけど」

肩をすくめながらおどける俺にスカさんは苦笑を漏らす。さすがのスカさんもあの女性陣のお話に突撃するようなことはしないみたい。

「確かに野郎の男性の過去話なんて私たちにはそこまで関係ないことだね」

そのとき、ウーノさんがスカさんと呼ぶ声が聞こえてきた。どうやらウーノさんが質問攻めにあつてゐるみたいだ。流石は女の子だ

よな。

「ほら、ウーノさんがお待ちかねだぜ。　頑張ってくるんだ、スカさん」

「ううむ……私はこういったことにあまり強くないのだが……」

トボトボと歩くスカさんの背中では少しだけくたびれたような、ゲソツとしてるように感じた。

広い台所に一人きり。　後ろには華やかな女性陣の声。

もしも神様がいたら、神様は管理局の局員以上に忙しい身なんだと思う。　だからこそ、あのときだって忙しかったからこそ、あんな事件が起こったのだ。

いまでも覚えている、白黒の世界から色を取り戻してくれた彼女の笑顔。

いまでも覚えている、元気に手を振りながら飛行機にのった両親のことを。

いまでも覚えている、栗色の髪の子に恋をしたあの日のことを。

## 21. 初恋語

これは——恋に魅入られた物語だ

『白黒の世界でも、彼女だけは変わらずに俺の前で笑っていた』

祝賀会も時間が経つにつれ、終わりムードに達してきた。　　とか、一部の者から眠たいという意見が出たのでなし崩し的に終わりをむかえた。　　まだ眠らない者たちはゲームをしたりトランプをしたり好き勝手にしている。　　俺はそれを背中で感じながら食べ終わった食器を回収し、片付けることに。

今日はなんだか一人芝居をするのも面倒なので、ちよつとだけ昔のことを思い出してみよう。　　べつに誰に話すことでもないの、どこかにいる宇宙人に怪電波でも飛ばしながら。

☆

突然だが魔法使いつて信じるか？　　少なくとも俺は信じるね。

俺の両親は魔法使いだった。　　正確にいうと父親が。　　「魔法使い」、そう言つてもなのはやフェイト、はやてのようにデバイスで魔法を使えるわけでもなく、かといつて漫画のような不思議な超常現象を起こせるわけでもない。　　誰もが持つている、誰もが出すのできる魔法——ありたいにいえば笑顔なんだ。

父さんは色んな国や色んな世界の人達を笑顔にしていた。　　紛争地帯でもパンツ一つで突っこんでみんなを爆笑の海に巻き込んでくならない争いを止めさせてきた。　　いつも豪快に笑って失敗したときだつて手を叩いて笑っているひとだった。　　そんな父さんが俺も母さんも大好きだった。

当然、父さんは世界中のスターであつたのでその分嫌われてもいた。　　戦争が起こることで儲けが出る者や、戦争を引き起こした連中からみれば当然のことだろう。　　父さんは目の上のたんこぶなわけなんだからな。

父さんはそんなことを気にするほどの心を持ち合わせていないの

で、〃好き勝手にやらせればいい〃。そう言っていた。

そんな時らしかった、士郎さんと出会ったのは。父さんも母さんも士郎さんも桃子さんも詳しく話してくれなかったからわからないけど……結果的に士郎さんの説得もあって俺たち家族は海鳴に引越すことになったんだ。はじめてきたときは驚いたのを覚えている。ほどほどに自然があつて空気がうまくて人柄の良い人たちが集まっていたのだから。

引越してからすぐ、俺たち家族は高町家族に挨拶にいった。その時、なのはと出会ったんだ。

☆

「こ、こんにちは……たかまちなのは……です」

「え？ なに？ きこえないんだけど？」

「ひゃうっ……」

「怯えさせてどうすんだよ、バカ」

父さんが俺の頭を叩いてくる。いやいや、まじで声が小さくて聞こえないんだって。

「ごめんなー、なのはちゃん。ビックリさせちゃったよな。こいつは俺の息子で俊っていうんだ。なのはちゃんと同じ3歳だから仲良くしてくれるかな？」

「う、うん……」

父さんは、腰を下ろしてなのはと呼ばれた女の子と目線を合わせた後、頭をなでながらゆつくりと話す。なのはと呼ばれた女の子のほうも小さく頷いていた。

「えー、おれおとこのとあそびたいよ。ここらへんにもおとこのこいるんでしょっ？」

「男つてのはそこらへんにでも転がってるもんだが、女の子つてのは手を伸ばさないと届かないものなのさ。いいからお前も大事にしとけ」

ニヒルな笑顔で俺の頭をぐしやぐしや撫でる。この大きな手が

俺は大好きなんだ。

「はっはっ、まあ俊君も遊びたい盛りなんだろうな。俊君、うちの恭也と遊んできたらどうだい？」

向かい側にいた静観な顔つきのカッコイイ人が後ろに立っていた兄ちゃんを前に出しながら問う。

「恭也、俊君と遊んでくれるかい？ 私たちはちよつと話し合いをしてくるから」

「はい、わかりました」

「あー、だったら私もなのはと一緒に遊ぼう。ねえねえ、みんなで遊ばない？」

恭也と呼ばれた兄ちゃんの隣でニコニコと見守っていた女の人が、あの小さい女の子の肩を抱きながら話しかけてきた。

「ん？ まあ、べつにいいが。俊君もそれでいいかい？」

「うーん、まあいいよ」

正直なところ、俺は恭也さんと男だけで遊びたかったけどここで俺だけが反対しても空気が悪くなるだけなので止めておいた。そして俺たちは何やら真剣に話す親たちを横目に公園に行つて遊ぶことにしたんだ。

☆

「もーいーかい？」

『まーだだよー！』

公園に遊びに来た俺たちはなのはのお姉ちゃんだという美由紀さん提案の元、かくれんぼをすることになった。

「もーいーかい？」

恭也兄さんの声が響いてくる。早く隠れ場所を見つけないと……！

そう思いながら辺りを見回すと、中が空洞になっている可愛らしい猫の遊具を見つけたので急いで入ることにした。絶好の隠れ場所だ。

「……あ？」

「あーつと……ごめんさい、たかまち。すぐです」

「あ、いいよ。もうおにいちやんさがしはじめてるし。いまでたらつかまつちやうよ？」

どうやら、美由紀さんがサインを出したのだろう。きよろきよろとしながら恭也さんが公園内を散策していた。俺はそれに目を離さないように注意してゆっくりと遊具の中にはいった。

「おじやます……たかまち」

「あ、うん……」

高町が座つていたところに座る俺。二人とも何も喋らず、喋ろうともしない。

どれくらい時間が過ぎただろうか。ふいに横からか細い声が聞こえてきた。

「ねえ……なのはってよんで？」

「え？」

「おなまえで……よんでほしいの」

……ああ、苗字じゃなくて下の名前で呼べということか。確かに考えてみたらそうだよな、今後とも家族ぐるみでのお付き合いをしそうだし、それなのに高町なんて呼んでたら誰がだれだかわかんなくなっちゃうもんな。

「ああ、ごめん。その……きづかなくて」

「う、ううん。べつにいいよ。その……こんどからきをつけてくれるんなら……」

「お、おう」

会話終了

この町にくるまでは全くといっていいほど女友達がいなかったのが祟ったのかまつたくこの子との会話ができない。

焦る俺。なんとなくこの空気が嫌で状況を打破しようとなのはのほうを見る。なのはは胸の前で大事そうに猫のぬいぐるみを抱えていた。耳は茶色で全身の色は白と黒で統一されている、可愛いけどちよつと配色がおかしくないか？ そう言いたくなるような猫



だった。

「あのさ……ねこ、すきななの？」

勇気を出して聞いてみる。もしかしたらここから会話が広がるかもしれない。

俺の願いが叶ったかのようになのは大きく頷いた。

「うん。このねこちゃんはね、ママとパパがなのはのたんじょうびプレゼントにかつてくれたの。かわいいでしょ？」

猫のぬいぐるみを俺のほうに持っていき手を足をふりふり揺するのは。ぬいぐるみはふわふわの毛並をしていてこれを抱いて寝たらさぞ気持ちよく寝れるんだろうなー、というのが率直な感想。

「うん、かわいいね。なんかふかふかもふもふしていきもちよさそう」

「でしょ！ なのはもいつもこれだいてねてるんだ」

「へへ、そうなんだ。なまえとかあるの？」

「しろちゃん！」

「……どこらへんが？」

俺の疑問を無視してなのは口を軽快に饒舌に動かす。

「あのねー、このしろのところか、ふかふかつとして、もふもふつとしてるからしろちゃんなの。かわいいでしょ？」

「……せやな」

それからもなのはのしろちゃん談義は続いた。やれ、どこらへんが可愛いだの、ここが気に入ってるだの。正直、同じことの繰り返しだったけど、嬉しそうにはしゃぎながら、楽しそうに笑いながら喋る姿をみているのはとても心地よかった。

それと同時にこの子といると自分の心が温まるような、そんな……不思議な感覚にも陥った。

やがてなのはの談義が一段落すると、砂ジャリを踏みしめる音が聞こえてきた。見つかった……！ そう思ったときには時既に遅し。

美由紀さんと恭也さんが優しい眼差しで俺たちを見つけていた。

「みつけたぞ、二人とも。これでかくれんぼもお終いだ」

「あう……みつかっちゃった」

「まあ……しょうがないよ」

あれだけはしゃいでいたんだし。見つかるのもしょうがないよ  
うな気がする。もしかしたら恭也さんは俺たちの話をずっと傍で  
聞いていて頃合いをみて出てきたのかもしれない。そう子ども心  
に思ってしまった。

それから俺たちは4人で手をつなぎながら帰った。恭也さんと  
美由紀さんを端に置きなのはと二人で仲良く手をつないだ。

公園での一件いらい、俺は高町家族が好きになった。父さんの友  
達である土郎さんは剣道？ 剣術？ をやっているらしく、恭也さん  
と美由紀さんもそれを習っていた。何度も何度も、俺となのは通  
い詰めた。というか、なのはの場合は俺が引っ張りだしたんだ。

木刀を振り交差に交わる姿は素直に恰好よかった。憧れてもい  
た。土郎さんはそんな俺の心境に気付いたのか、よく誘ってくれ  
た。自分にはそんなことできないよ。そういう俺に土郎さんは  
笑いながら『できないのは当たり前だ。練習しなければ、握ってみ  
なければできるとかどうかなんてわからないからね』そう言っ  
て背中を押ししてくれた。

恭也さんと美由紀さんが模擬戦をしている横で一生懸命見よう見  
まねで木刀を振ったことを覚えている。はじめは振り方すら満足  
にできず木刀を落としたことも覚えている。それでもなんどもな  
んどもなんどもなんどもなんども挑戦して、ようやく振れたのを覚え  
ている。振れた瞬間に土郎さんの拍手、恭也さんと美由紀さんか  
らの言葉。

なのはのしやしぎ方、そして少し前から観戦していた父さんと母さ  
んの笑顔を覚えている。

いつまでも、こんな日が続くと思っていた。

家では父さんと母さんと遊んで笑っておしゃべりして、朝になつて  
家にまで迎えに来たのはと公園で遊んで家で遊んで、土郎さんや恭  
也さん、美由紀さんと一緒に稽古して夜には両家族一緒に夕食を食べ  
る。

そんな幸せがいつまでも続くと思っていた。

ただ、運命は残酷で小さい子どもの些細な幸せもいと簡単に奪ってしまった。

☆

それは唐突に呆気なくなんの連絡も知らせもなく合図もなく準備もなくやってきた。

遠い国で飛行落下事故、乗客全員行方不明

そんな文字に起こすと19文字程度の文で、幸せは音を立てて音もなく見る隙も与えず見せびらかしながら崩れ去った。

5歳の誕生日を迎えるときだった。

この瞬間、俺は孤独になったのだ。

なにもが茫然と佇んでいる間に終わった。遺体なんて見つかるはずもなく、葬儀は形だけ執り行われた。それでも、葬儀にはいろんな人が駆けつけてくれた……みたいだ。ありえないほど多くの信頼関係と交友関係をもっていた父さんは色んな人に悔やまれながらお墓が建てられた。

そして問題は俺をどうするか、という議題になった。

正直どうでもよかった。父さんと母さんがいない世界なんていてもいなくても同じだった。その証拠に俺の世界は白と黒で染まっていた。モノトーン越しから色々な人が俺に言葉を投げかけてくれた。

そのどれもが醜悪で醜くて見境なくて穢れていて俺は首を黙って横に振るだけだった。子どもはビンカンに何かを感じれるときがあると聞く。まさに俺はそのときその状態だったんだと思う。

そんな俺の肩を強く離さないように抱いてくれた人がいた。全てを取り仕切ってくれた土郎さんだ。

土郎さんは一言

『くるか?』

そう言ってくれた。それに黙って頷いたのを覚えている。

「やだよ、士郎さん。家に残りたくないよ！」

士郎は困惑しながらも冷静に俊に悟らせる。

「俊君、君の気持は痛いほどわかる。けどね、君が高町家にくるといふことはあの家には住めないということなんだ」

「なんで？　ねえ、なんで？　俺があの家に残っていないと父さんと母さんが困っちゃうよ？」

小さい子どもは一つ一つのことを理解しても前後の繋がりを理解していない場合が多い。まさに俊がその状態である。

自分が高町家に行くことはわかっている。しかしそれが家にいられなくなる。ということにつなげられないのだ。お泊り会のとくと同じように思っているのだ。2・3日行けば家に帰る。その頭の中で作られているのかもしれない。

士郎はゆつくりと優しく俊の目線に合わせてしゃべる。

「いいかい、俊君。君のお父さんとお母さんはもういないんだ。

この世にはいないんだ。世界中どこをさがしたってもういない。

君もみただろ？　葬式を」

「けど父さんも母さんもお墓の中にはいなかったよ……？　それに約束したもん、父さんも母さんも必ず帰ってくるって。ほら、このひよつとこのお面をもつて待ってれば帰ってくるって」

士郎は思わず目をそらす。非常な現実には耐えられない子供に自分はどう説き伏せればいいのか。このギリギリのところまで正気を保とうとしている子供になんといえればいいのか。

『俊を頼むわ。俺はちよつくら笑わしてくるからさ』

そう言って出て行った友人。自分だって友人を失ってしまったんだ。だが、この子の場合は家族を失ってしまったんだ。一人で独りになってしまった子どもに自分はなんと声をかければいいんだろ？　なんと声をかけることが正解なんだろう。

「……そうだね、そう……しようか。お父さんが帰ってくるまでしばらくは高町家にいよう」

「うん！」

答えなんて出せるはずがなかった。こうして騙すことしかできなかった。大人は騙す生き物だ。昔TVで言われた言葉だったが、今日ほどこの言葉がしみ込んでくることはなかった。

☆

父さんと母さんがいなくなってから世界がおかしくなった。机もテレビも電柱も車も食器も床もガラスも色画用紙も本棚もミカンもゲームもなにもかも、白黒の世界になってしまった。会う人会う人、白と黒でできていてまるで化け物と会話しているような気分になった。土郎さんも桃子さんも恭也さんも美由紀さんも——全て平等に均等に化け物だった。

やはり自分は守られていたのだ。偉大な父さんと母さんに。だからその二人がいなくなつて守ってくれる人がいなくなつて、世界は弱い自分に牙を剥いてきた。

子どもながらにそう考えていたのを覚えている。なにもかも嫌になった。いっそ死にたいと思った。自分には辛すぎる。独りで生きていくのは辛すぎる。

だからひよつとこのお面片手に部屋の中でうずくまつた。こうしていれば、父さんと母さんが来てくれるかもしれない。優しい目で俺のことを抱きしめてくれるかもしれない。

土郎さんは喫茶店を作ると言っていた。桃子さんたちが喜んでいたのを覚えている。自分には関係ないことだ。

コンコンと誰かが自分の部屋をノックする。返事は返さない。正確にはいうならば返事を返せない。ここのとこころ喋つてなかった。すつかり声の出し方を忘れてしまった。

どうやったら声を発することができるのか？ どうやったら横隔膜を震わせることができるのか？ 今の自分には全くわからなかった。そして興味もほとんどなかった。

人間と人形の違いは“形”か“心”の違いだけと聞いたことがある

る。もしそうならば、いまの自分はまさに人形だろう。

ゆつくりと瞼をおろす。今日もまた眠ってしまおう。そうすれば夢の中で二人に会えるかもしれないから。

そのとき、下を向いていた俺の前に白と黒で体を統一された、茶色の耳の猫が現れた。

「にゃーにゃー、こんなところでねているとかぜをひくにゃー?」  
「……」

「どうしたにゃ? だいじょうぶかにゃ?」

それは調子はずれの声だった。

その娘は、白黒の世界にいてもなお——あのときの姿のまま、俺に笑顔を向けていた。

変わらない笑顔で不変の笑顔で、どんな闇も明るく照らすようにどんな氷も溶かしてしまうように、笑顔で俺の正面に座っていた。

「……あ……」

「どうしたにゃ?」

「なんで……」

「ん?」

「……なんでかわらないの? なんでなのはだけは……かわらないの……?」

死んでいた声が驚きによって戻ってきた。もう発することができな思っていた声が戻ってきた。

なのはは首をかしげる。

「かわらない……? しゅんくんなにいつてるの?」

「だって……だって……」

この世界はモノクロで、全てが化け物になっていて生きる希望なんてなくて——

震える手が、なのはへと近づく。その存在を確かめたく、その存在に触れたくて震える手でなのはへと近づく。そんな俺の手をなのははゆつくりと抱きしめてくれた。離さないように、守るように、強く強く握ってくれた。

「どうしたの? なんでないてるの? どこかいたいの?」

「ううん……だいじょうぶ……だいじょうぶだから……もう少しだけこのままに……」

なのはに触れるたびに触るたびに、暖かいものが体に浸透していく。

世界に色が満ちていく

世界が鮮やかに染められる

なのはを強く抱くたびに、握るたびに、感じるたびに、世界に色が戻っていく。

零れ落ちる涙のしずく

溢れ出る想いの結晶

もう届かぬ親へと愛情

その全てがぐちゃぐちゃになり泣くという行為に終着される。

それでも、なのははずっと抱きしめた。泣き叫んでも喚いても

黙って相槌を打ちながら聞く。

どれほど泣いただろうか、目は赤く腫れ声はかすれ鼻水で汚れている。やがてどちらからでもなく、そつと体を離す。

「おちついた?」

「……うん」

今更ながら恥ずかしくなって顔が赤くなるが、それを悟られたくない一心で顔を下に下げる。

「そのひよつと……」

なのはが指を指す先には父さんからもらったひよつとのお面。

いまならすんなり受け入れることができる。——父さんと母さ

んは行方不明になったんだと。

決して死んだわけじゃない。だから、いつか会えると待っている。

「そのひよつとご、おもしろいよね。なのははすきだよ、そのひよつとご」

「そうなんだ。でも、おかしくない? 例えば……おれがおめんつけたりしても?」

「ううん、まったくおかしくないよ。だって、そのおめんだけでわら

えるひとがいるんだもん。それって、とってもすごいことだとのはおもうの。わらえるっていい

うこういはいかんたんなようでとってもむずかしいの。そのむずかしいことをこんなにかんたんにできるんだもん。それっていつしゆのまほうみたいだよね」

「まほう……」

『いいか、俊。俺たちはな、魔法使いだ。人が幸せになったとき、そこには笑顔が発生する。だが、笑顔ってのは存外難しいものなんだ。自分では笑顔を出すことは難しいんだ。だからこそ、俺みたいなやつが必要なんだよ。シリアスだってコメディーに変えて悲劇だって喜劇にかえる。そんな奴が世界には必要なんだ』

昔、父さんが言っていた言葉を思い出す。

いまならわかる。父さんの言いたかったことが。

いまの俺にはそこまでの技量なんてないけども——

「まほうつかい……なってみようかな」

「うん！　なのはもねこちゃんといっしょにおうえんするよ！　がんばれー！　しゅんくん！」

——せめて目の前にいる、初恋の相手くらいは笑顔にしようと思っ  
た

☆

と、まあこれが俺の思い出であり、高町なのはという女の子を好きになった瞬間なんだよな。なのはは覚えていないかもしれないけど、俺の中では大切な思い出の一つでもある。

君の中の正義のヒーローはだれか？

そう聞かれたら俺は迷わず、『高町なのは』そう答えることができる。それくらいのことをしてくれただ。例え気まぐれだとしても、彼女が俺を救ってくれた事実はかわらない。

「あれ、俊くん。まだ洗い物してるの？」

「結構な量をみんな食べたしなく。もうしばらくはかかるかもしれ



ない」

「ふくん……手伝おつか？」

「まじで？ それなら頼む」

ゲームをしている連中から抜け出してくれたのはありがたい申し出をしてくる。 ちよつと洗い物が多いのでこれは素直に嬉しい。

カチャカチャと食器を洗う音だけが二人を支配する。

「なあ、なのは？」

「ん？」

「昔持ってた、猫のぬいぐるみってまだ持ってる？」

あのときから、猫のぬいぐるみを見る頻度が少なくなり、ついには見なくなってしまったからな。 いまなにしているんだらうか？

「ちゃんと実家のほうに飾ってあるよ。 誰かさんの涙と鼻水でべとべとになってるけどね」

振り向き笑顔を浮かべるなのは。

「しろちゃんも大変だな」

「まったくだよね」

お互い顔を見合わせながら、どちらからともなく肩をすくめる。

やっぱり、この思い出はスカさんに話すのは勿体ない思い出だな。

——いまはまだ二人で肩を並べているけども、いつの日かその真ん中に一人増えてくれればいいな。 無邪気で明るい——なのはみたいな女の子がさ

## 22. 幼女ヴィヴィオ

わたがし雲が青色の海を悠々と泳いでいる。海には鳥が自由に滑空しており燦々と降り注ぐ太陽が肌を焦がす勢いで容赦なく襲ってくる。

俺はそんな太陽を眺めながら、庭で洗濯物を干していた。

「今日も二人のパンツはかわいいなあ……一つくらいとつてもバレないのではないだろうか？」

この頃は色々と不幸が重なり、なのはとフェイトの警戒が強くなってきたという……のだが、それをかいくぐって得られる下着こそ興奮するというものではないだろうか。そうに違いない。しかしここにあるものは既に洗濯してしまった下着だけ。こんなものでは俺の迸るパトスを抑えることなんてできやしない。そう……使用済みの下着でない……！ 溢れ出るパトスは抑えることはできないのだ……！

そうと決まれば早速行動である。残りの洗濯物は自分のものだけなので適当に干す。ある程度シワを伸ばして洗濯バサミを使って物干しざおにかけたら、さっそく二人の部屋に行くことに。

ヴーヴー

「ん？ スカさんからじゃん。なんでこんなタイミングで。はい、もしもしスカさん？ いまから世界の滅亡よりも大事な用事があるから後にくれる？」

『おお、ひよつとこ君。突然だが幼女に興味はないかい？』

「詳しく聞こうか」

スカさんから興味をそそる単語が聞こえてきたときには知らないうちに口が開いていた。

『うむ、ちよつと電話ではあれなので私の家に来てほしいのだが……』

「んー、オツケーオツケー。すぐ行くよ」

スカさんの声が少しだけ重かったけど、どうしたんだろうか？

家の戸締りを済ましてからバイクに跨りスカさんの家へとやってくる。

インターホンを押して数分、いつぞやと同じようにウーノさんが出て迎えてくれた。

「お邪魔します、ウーノさん。スカさんはなにしてるの？」

「ちよつと外せない用事がありました……」

スリッパを差し出してくるウーノさんに頭を下げながら、スカさんって暇人じゃなかったのかと考える。おかしいなあ……俺と同じ無職だと思っただけだ。

スカさんの部屋へと移動中、別の部屋から大きな丸メガネをかけた女性で困った様子ででてきた。

「あ、ウーノ姉様。私の一人亀甲縛り用の縄知りませんか？ どこかにいってしまったんですけど」

「クアットロ、お客様の前ですよ。そういった発言は控えてください」

「これは失礼しました。あまり他人のことなど気にしない性格なので」

「そんなことだから、真夜中に一人亀甲縛りを路上でして大変なことになったのでしよう」

ウーノさんが溜息とともに額に手をおく。なのはやフェイトが俺のときにやる仕草と同じだ。それが意味すること、それは『ダメだ、こいつ』というわけである。……なんだか無職

「この方がドクターがよく話に出す男性ですか。……なんだか無職のような顔をしていますね」

「そつちこそ、DMっぽい顔してるな。調教でもしてやろうか？」

「ご心配なく。あなたじゃ役者不足ですわ」  
「まあまあ、そこらへんにして。ひよつとこさん、ドクターがお待ちですよ。クアットロ、あなたは夕食の買い物にでも行ってください。縄は私が探しておきますから」

ウーノさんの言葉に納得した様子で、クアットロと呼ばれた女性は

玄関のほうへと歩いて行つた。まさかウーノさんにあんな妹？がいたとは……。

「ではひよつとごさん、行きましょう」

ウーノさんの言葉に頷きながら、スカさんの部屋へ歩いていく。

スカさんの部屋の前につくと中から1オクターブほど低いスカさんの声が聞こえてきた。

『レジアス、これ以上人造魔導師や戦闘機人の戦力運用はやめにしないかい？』

『何を言っているスカリエツティ。これ以上地上の戦力がなくなつていいと思つているのか？』

『地上の戦力が危ないことは知つているよ。でも……ほんとうにこれでいいんだろうか？　これが正しいことなんだろうか？』

『何を世迷言を。貴様がそれを言える立場にあると思つているのか？　私利私欲のために動いたお前が』

ここからでは誰と会話しているのか、どんな会話をしているのかわからないが……真剣な様子であることだけは声の低さでわかった。

ほんとうに入つていいのだろうか？　思わず躊躇つてしまう俺とは反対にウーノさんはトビラを軽くノックし、スカさんに俺がきたことを伝える。

『おお、ひよつとご君。入つてくれたまえ』

『お邪魔するよー、スカさん。……どしたの？　なんか疲れているみたいだけど』

「これくらい、盗撮目的で完徹して作り上げたガジェットのときと比べればどうということはないよ」

そういうスカさんの表情は少しだけ暗かった。

「ふくん、そつか。それでさ、電話の件なんだけど」

「おおつ！　そうだ、そうだ！　そのことなんだけどね。君に……というよりも六課の人達を信じて頼みたいことがあるのだ。簡単に言つてしまえば、幼女を一人預かつてほしい。いや待ちたまえ、ひよつとご君っ!?　そのいますぐプッシュしそうな携帯電話をまずは置くんだけ！」

スカさんから幼女の単語が出た瞬間に、携帯を取り出しおっさんの携帯にかけようとしたのだが……そこはスカさん、俺が打ち込むよりも早く制止させる。

「え〜……だつてアレだろ？ 俺に犯罪の片棒を担がせようという魂胆だろ？」

「いやいやいやっ!? 君は私が幼女を誘拐してきたというのかねっ!?!」

なにを当たり前のことを。

『ねーねー、チンク。 あそこにいるひとだくれ？ なんだかおしごとしてなさそうなかおしてるね』

『いくら無職そうな顔をしているからといって、指を指しながら言うのはどうかと……』

「……スカさん。 もしかして俺を攻撃するためにわざわざ呼んだの？」

「いや……そういうわけではないのだが。 チンク、ヴィヴィオ君と一緒にこつちにきてくれないかい？」

『はい』

俺とウーノさんが出入りした扉から小さい女の子の二人組が入ってきた。 赤と翡翠色の厨二チックな目の色をした天真爛漫という言葉が似合いそうな幼女がどたどたと俺のほうに向かってくる。

「こんにちはー・ ヴィヴィオですー！」

「こんにちは、ひよつとこです。 えらいね〜、自分のお名前が言えるなんて」

ついつい頭を撫でてしまう。 ヴィヴィオと自己紹介してくれた幼女は気持ちよさそうに目を細めて笑っている。 なんだか小動物とコミュニケーションをとっているような気分になる。

「え〜つと、ウーノさんの妹かな？」

「そこのチンクはウーノの妹だけど、君がいま撫でているヴィヴィオ君は違うよ。 そしてこの娘がいまさつき話題に出した女の子だ」

「この娘が？」

「うむ。あまり長々と話しをしたくないので単刀直入にお願いするよ。——この娘を預かってくれないかね？」

その時のスカさんの目にはいつも遊び心なんて微塵も感じなかった。スカさんは真剣なんだ、真剣に俺に対してお願いしてきたのだ。やがて頭をゆっくりと下げる。それにつられる形でウーノさんたちも頭を下げる。正直、なにがなんだか全くわからない。一人だけ感じる疎外感。俺だけがフィールドに立っていないような……そんな感覚を覚える。

「なあスカさん。理由は話してくれないのか？」

「いまはまだ……話せない。ただ——私達というよりもよっぽど幸せになれると思うんだ。だって私は犯罪者なんだからな」

「幸せの定義なんて人それぞれだと思うけどね。それに俺だってなのはとフェイトがok出さないことには無理だよ。あいつらのことだから、絶対にok出ささうけどき。それにこの娘自体はそれに納得してるのか？」

「それは大丈夫だよ。なんにも会えないわけじゃないんだ。会おうと思えばいつでも会える距離にいるんだしね」

どうにも要領を得ない会話が続く。スカさんが何かを隠したい気持ちは伝わってくるのだが……

「ねーねー、ヴィヴィオおなかすいたー」

「ん？ あー、わるい。ビスコしか持ってないんだけど」

ポケットからビスコを取り出す。それをヴィヴィオは嬉しそうに受け取ると思いつきり袋を開けた——ことよってビスコが床へと落ちる。

止まる刻

ヴィヴィオの頬に伝わる一筋の涙。

あ、もう決壊寸前だ。

ここで泣かれても困るので予備にもってきたビスコを袋から破って手渡すことに。嬉しそうに受け取るヴィヴィオ。やはり幼女の笑顔というのは何よりも勝る宝である。

それにしてもどうするか……。これは俺一人では決めることが

できないし、一度帰ってから三人で話し合うとしよう。

「ちよつとだけ時間をくれ。三人で話し合うから——」

腰かけていた椅子から立ち上がったところで、なにかが自分の手を引つ張る違和感を覚えて振り返る。

「ねーねー、かえるの？ ヴィヴィオもつとほしい」

「あー、ごめん。それ家にしかないんだよ」

「だったらヴィヴィオもいく！」

「……………ん？」

なんだろう……いま三段飛ばしくらいで話が進んだような気がする。

「えーつと、君が欲しがってるビスコは家にしかないのはわかるよね？」

「うん！」

「それじゃ、俺が一旦家に帰ることもわかるよね？」

「うん！ ヴィヴィオもついていく！」

「まって、そこがおかしい。俺が君を連れて帰ったりなんかしたらおっさんが瞬時にやってくるから。撲殺どころの話じゃなくなるから」

流石のおっさんも釘バットで治せないから。

なんとかして言い聞かせる。しかしそこは子ども特有の力、話をまったく聞いてくれないパワーで俺が根負けしてしまうことに。

どういう教育をしたらこんな娘になってしまうんだ。この娘の将来が本気で心配になってきた。とりあえず、なのはとフェイトの二人に電話することに。

フェイトは仕事中心なかつながらないので、なのはにかける。1  
コールの後に口になにかを入れたままの幼馴染の声が届いてくる。

『もふえもふえ？ ほうしたの？ 仕事中心あんだけど』

「菓子を食うのが仕事ってある意味すごいよな。まあ、それはいいとして大変なんだ、なのは。真面目に聞いてくれ」

『へ？ あ……………うん。どうしたの？』

「目の前に将来が心配で心配でたまらない子がいるんだけど」

『現在が詰んでる俊くんよりかは大分マシだね』

「はあ……」

『えっ!? なにその溜息っ!? 溜息つきたいのは私とフェイトちゃんのほうだよっ!』

「誰のおかげでお前らの下着が盗まれずに済んだと思ってるんだ?」

『誰のせいで私たちの下着がなくなってるか知ってる?』

たぶん家出でもしてるんじゃないだろうか? 俺の部屋に

「まあ、それは置いておいて。今夜は少しだけ早く帰ってきてくれ。

ついでにビスコも買ってきて」

『あー、うん。 それじゃなるだけ早く帰ってくるね』

通話終了ボタンを押して一息つく。

なのはたちが帰ってくるまでビスコもつかないかな?



## 2.3. 恐怖するヴィヴィオ！ ギャラドスなのは黒い影っ!?

携帯の通話終了ボタンを押しながら、私はたっただいままで会話していた人物を思い浮かべる。真面目な話だから帰ってきてほしい……そう言っていたがいったいどうしたんだろう？ もしかしてついに就職する気になったのだろうか？ いやいや、彼に限ってそんなことはない。だとしたらなんだろうか？

「うくん……大事なお話しか。もしかして私達に関係することかな？」

私達に関係することならば大分絞られてくる。夕食のこととか、月1で開催される大掃除とか、実家に帰ってゆつくり過ごすとか。

でも……声色からしてそれは無いと思う。それにそれらのことなら家に帰ってきたときに言えばいいのだし。

「うむむ……余計にわからなくなっちゃったよ」

「ね、なのはちゃん。カービーのエ○ライドせえへん？ 丁度いい暇つぶしになると思うんやけど」

「わ〜！ やるやる！ ——って、違うよねっ!? ついつい流されそうになったけど、仕事場にゲーム機持ってくるなんておかしいよねっ!?!」

「ぼくつと携帯のディスプレイ眺めてたなのはちゃんに言われたくないで」

「眺めてないもんっ！ 誤解を招くような言い方やめてくれるっ！」

ゲーム機をセットしながらからかうはやてに、なのはは思わず席を立ちながら否定する。

『な、なのはさん……困りますよ。お仕事の最中に私が写ってる待ち受け画像をみるなんて……』

「顔を赤くしながらこっちにこないでよっ!? 私そっちの趣味がないっていつてるでしょっ!?!」

「大丈夫です。私が教導してあげます！ 愛の共同作業で教導しま

しよう！」

書類を投げ捨てて迫ってくるスバルに、なのはは全力で逃げる。

ドタバタと慌ただしい音が仕事場に響く

「ただいまー、いま帰ったよ」

「フェイトちゃん助けてっ！」

執務官の仕事から帰ってきたフェイトに勢いよく飛びつくなのは。

フェイトは全身の体のバネを使いながら必死に受け止める。顔を上げたなのはには若干ながら涙

を流した痕跡が残っている。エースオブエースに涙を流させる

ほどの部下の迫力と真剣度。なぜこれを訓練で発揮しないのか甚

だ疑問を覚えるフェイトである。

「ど、どうしたのなのはっ!？」

「もういやだよおっ! おうち帰りたいよおっ!」

「なのはさんの泣き顔カワユス……。ペろペろしていいですかっ!？」

「落ち着いてスバル!? それもう犯罪者の域に達しようとしてるから!」

「フェイトちゃん、おうちかえろうよっ!」

フェイトの胸に顔を押し付けるなのは。ふとみると、はやては面

白そうに自前のカメラでこの様子を撮っている。ここにその他の

者がいなかったことだけがなのは

にとつての救いだったかもしれない。もしこんな姿をみられた

ら——べつに見られてもいまままでと変わらないかもしれない。

幼子のようにフェイトに抱きつくなのはに、フェイトはトドメの一撃を食らわせた。

「でも、家に帰ったら俊がいるよ……。?」

フェイトの かいしんの いちげき

エースオブエース 高町なのは たおれた

「さすがフェイトちゃんや。なのはちゃんに向かって効果抜群の一撃をためらいなく与えるなんて……。恐ろしい娘やっ!」

倒れたなのはを必死に介抱するフェイトをみながら、はやてはそう  
呟いた。

☆

なんとか管理局員に見つかることなくヴィヴィオを家に迎えるこ  
とができた。 いや、ほんとうはダメなことだと思っただけ。

「わあ〜！ おうちおつきいね！」

「だろ〜？ なのはとフェイトが頑張ってくれてるからな！」

「それじゃあ、おにいさんはなにしてるのお？」

「おにいさんは夢を追っかけているんだよ」

いまだたどり着かないどころか、見えてこない夢だけ。

それでもヴィヴィオはこのフレースが気に入ったらしく、手を叩い  
て喜んでくれた。

「ヴィヴィオもゆめをおいかけろ〜！」

「ヴィヴィオ、夢つてのは追いかけるものじゃないんだよ。 叶える

ためのものなんだよ」

「でもおにいさんはおいかけてるんでしょ？」

「俺の夢はツンデレだからな」

いまだにデレを魅せてくれたことはないのだけど。

「まあ、夢はいいじゃないか。 それよりビスコ食べるか？ うまい  
ぞ、ビスコ」

「たべるたべる！ ヴィヴィオ、ビスコだいすき！」

「そうかそうか。 ビスコを食べるとなのはみたいになれるからな。

頑張るんだぞ！」

「ん〜？ なのはってだ〜れ？」

ビスコを口に含んだまま、ヴィヴィオが首をかしげてくる。 こう  
いった仕草が似合うのもこの娘のすごいところだな。 しかし、なの  
はがダレなのか、か。 これは難しい。 なんととっても自慢の幼馴  
染である。 下手に貶してイメージをそこねたくないし、夕方には会  
うことになるのだからここはヴィヴィオが喜ぶような内容に脚色し

ないと……！

俺はゲームを取り出しポ○モン凶鑑を選択し調べる。 幼馴染のイメージを貶すわけにはいかない……！

「えーっと、タイプは水・ひこうで入手方法はすごいつりぎおかコイキングから地道に育てるのもアリかな。 ものすごく凶暴でヴィオオみみたいな娘が悪いことをすると、どこからともなくやってきて全身を引き裂いて帰っていくんだよ。 口からはビームが出てきて、そのビームはミッドを破壊するほどの力をもっているんだ」

なのはのイメージを貶すことなく、どちらかというを持ち上げる形でヴィオオの目線に合わせて話したのだが——話し終えた瞬間にヴィオオに泣かれてしまった。

ごめん、なのは。 ヴィオオが求めてたのはギャラドスなのはじゃなくて、高町なのはだったみたい。

24. それでも俺はやってない。　　というのは嘘だ

ヴィヴィオに色々な服を着せて遊んでいたら我が家のお姫様二人が帰宅する時間が近づいてきたので、すぐ隣で楽しそうにお絵かきしているヴィヴィオに確認を取ることに。　　なんの確認かというところから行動する予定の確認である。

「ヴィヴィオー、さっき言った通りにするんだぞー」

「うん！　えっと、きんぱつのおねえちゃんのところにかけてあげようねー」

「そうそう。　決して栗色の髪のお姉ちゃんには近づくなよ。　触れた瞬間溶けるからな」

「あう……ヴィヴィオきをつける……」

ヴィヴィオの中ではすでになのはが、空を飛び街を破壊し目と目が合った者を虐殺していくクリーチャーへと変貌していた。　幼馴染の俺としては小さな子どもにこんな恐ろしい誤解などしてほしくないのだが……しようがないよな。　俺もたまに殺されそうになるし。　ヴィヴィオが俺のズボンを掴んだところで携帯からメールを受信する音が聞こえてきた。

『もうすぐかえるよー！　あと3分くらいかな』

「よーし、それじゃヴィヴィオは先に玄関先で待機しておいてくれ。

俺は着替えてくるから」

「はーいー」

手をあげて元気よく駆け出すヴィヴィオ。　やっぱ幼女はかわいいいな。

そんなヴィヴィオを見送りながら俺は衣装部屋へと移動して、金髪長髪のカツラに青色のカラコンをつけ黒と白のフリルつきミニスカートを履き、黒ニーソで絶対領域をつくる。

ちなみにカラコンは目を悪くするので長時間つけることはオススメしないからな。

次に軽くファンデーションを塗り、口紅で可愛さを増していく。

つけまつげで目を大きく魅せて、最後にゴムでツインテールにする。

よくツインテールにすれば「ロリ」なんて言い方をしているが俺は絶対に認めないからな。おまえらだよ、18禁ビデオの出演者たち。

さてきてそれは置いといて、俺も準備ができたので玄関に向かうことに。

「じゃーん！ どうだ、ヴィヴィオ！」

「うん！ すっごくきもちわるい！」

ですよねー。若干ながら俺も思っていました。だってべつに女顔でもなんでもないからね。イケメンだつて何しても似合うわけじゃないもんねー。

ニコニコ笑顔で言葉の暴力を飛ばしてくるヴィヴィオに、冷静になりながら返事を返す。あかん、股間に変な汗かいてきた。

その時、グッドタイミングなのかバッドタイミングなのか分からないが、玄関の向こう側から二人の話し声が聞こえてくる。とても楽しそうな声だ。その声を聞いただけで俺の心は温まってくる。

ドアノブが回る音がして二人の女性が顔を出した。一人は可憐な光翼、フェイト・T・ハラオウン。六課のアイドル担当だ。そしてもう一人は恐怖の権化、高町なのは。六課のオチ担当だ。

「わくわくしい！ おかえり〜！〜！」

「えッ!? な、なに!? なんなのいきなりッ!?」

「わくわくしい！ あいたかったよ〜！」

「ええッ!?」

フェイトが見えた瞬間に駆け出し飛びつくヴィヴィオ。フェイトはヴィヴィオをしつかりと柔らかく受け止めながらも盛大にテンパっていた。

「ママー！ ママー！」

「えっ!? ちょっと!? ど、どうなってるのっ!?」

テンパりながら回りをわたわたと見回すフェイトは、そのまま待機していた俺と目が合った。俺はそれを確認して、目に涙を浮かべながら『よよよ……』と泣き崩れる。

「かなしいわっ、フェイト。 私達の隠し子を忘れるなんて……私と

ともに過ごした情熱でイスカンダルな一夜を忘れたというの!」

「な、なのはっ!? どうすればいいのかなっ! も、もしかして迷子とかっ!」

「うくん……迷子なのかな。でもこの娘、フェイトちゃんに懐いてるみたいだけど」

「あなたは私の大切な初めてを奪ったのよっ! その罪、償ってもらうしかないのよっ!」

「ちよつと、まっつてよなのはっ! ほんとうに私はこんなの知らなくて……」

「うくん……ねえ、もしかしてママとパパとはぐれちゃったのかな?」  
「ひいつ!? さわったら、ヴィヴィオとけちやう! たすけて!」

「………そのバカ、いったい何をこの娘に吹き込んだのかな?」

「シカトされたあげく、いきなり俺が犯人扱いされるの!」

渾身の演技を全て無視されたあげく、勝手にヴィヴィオに吹き込んだ犯人にされてしまった。まったく……なのはも仕事で疲れてるんだな。

フェイトに飛びつき抱きついたヴィヴィオはフェイトの足に引っ付いて離れず『ママ! ママ!』そう連呼し、フェイトはフェイトでそんなヴィヴィオに対して慌てふためくだけであった。そんなフェイトをみてなのは助け舟を出したわけだが差し伸べた手を触れるどころか避けられて怒りの矛先がこちらにきている。

「まあ落ち着け。俺とお前の仲じゃないか。可愛い可愛いひよつとこちゃんからのラブコールなんだから笑って済ませるくらいの度量を調子こいてすいませんでした! お願いですからバインドで磔にするのは勘弁してください!」

外国人のようにスマイル満点で足を踏み出した瞬間になのはのバインドによって両手を左右に広げ足を投げ出してように広げられた状態のバインドにかかった。

「……フェイトちゃん。その娘と一緒にリビングに行ってくれかな? 私はお話しするからさ」





とだって可能だ！ 下着もズボンも突破して貴様にかけるぞ、この一撃！』

痛みのあまり彼がへんなことを口にしはじめた。

「ねえねえ、ホワイトブレイカーってなくに〜？」

「うん、もうちよつと大人になったら教えてあげるからね〜」

よしよしと頭を撫でると、猫のように気持ちよさそうに目を細める。

『はっはっはっはっはっ、流石のお前も女の子、これで近づくことができなくなつただろう……！ ……ちよつとまって、タイムアウト！

この距離からの魔力弾は洒落にならないって。ただでさえ、魔力弾

がトラウマになりそうなんだから。マジゴメン。なのはちゃん

世界一可愛いから許して！ いたいいたいっ!? これ以上食らっ

たら俺の中の何かが天元突破しちゃううううううううううううう

うううううううううううううううううううううううう！』

「ねえねえ、てんげんとっぱってなくに〜？」

「使い方が正しいと銀河を守るほどの力と恰好よさがあるんだよ〜。

アレは完全に使用例が間違ってるから、マネしちゃダメだよ〜」

「うん〜」

ヴィヴィオが可愛く元気に頷く。

そんなヴィヴィオを片手であやししながら、この娘が何故家にいるのか後で問いただそうと思う私であった。

## 25. デツド or デツド

現在俺たちは夕食のすき焼きを食べていた。俺の顔はアソパソマン並みに腫れあがっており手なんて肩から上にあがらない状態になっっている。

おかしい。絶対におかしい。

幼馴染というものは素敵でエロエロな展開になると相場が決まっているはずなのにこの二人はデレというものが一切ない。これは俺がエロエロなことをするゲームの世界ではなかったのか？

だがそんなことを言ってもはじまらない。いまにこのテクニクでこの二人が乱れる姿が目に見えぬ。そう……俺に懇願する姿がな！

「白菜の追加はまだかな？」

「あ、いますぐにもってきます」

……もう少しだけ、もう少しだけの辛抱だ……！

冷蔵庫から白菜を取り出して食べやすい大きさにカットし、食卓へと戻ってくる。

「白菜もってきました」

「ねえ、たまごもないんだけど」

「あ、少々おまちください」

向かい側のなのはがテーブルでコンコンと卵を割る仕草をしながら、低い声で言ってくる。俺はその声に反応してすぐさま冷蔵庫に向かい卵をとってくる。

「どうぞ、なのは大明神さま」

「……はあ。ちゃんと反省してるの？」

「それはもう、猛反省してます。フェイトの砂丘よりも高く谷間よりも深く」

「……君の中の反省が何なのか知りたい」

卵を受け取ったなのは頬杖をつきながら上目使いで俺を見てきたのに対して、俺も誠心誠意答えたのに溜息が返ってきた。あんまり溜息ばかり吐くと幸せが逃げるぞ？

「はいヴィヴィオ。 熱いから気をつけてね？」

「うん！ ヴィヴィオ、きをつける！」

なのはの隣にいるパツキン二人が仲良しそうにする光景が視界にはいる。 パツキン（大）がパツキン（小）のお椀をとって鍋の中から肉と野菜を均等によそって渡す。 パツキン（小）はそれを両手で受け取りながらニコニコ笑顔で復唱する。 なんとも微笑ましい光景である。

「完全にハブられてるな」

「は、ハブられてないもん！ ちょっと君の相手をしていただけであって……本当はわたしにもこれくらい懐いてるもん」

「ほく。 さっきは溶けるとまで思われていたの？」

「そ。それは誤解だから大丈夫なの！ みててよね！ ヴィヴィオく、わたしが卵割ってあげるよ？」

「あう……あ、ありがとう……」

ニコニコ笑顔でヴィヴィオのお椀に俺からもらった卵を割ろうとするなのにはヴィヴィオはお礼を言いながら、少しだけお椀を自分のほうに引き寄せた。 これが意味

すること、それはヴィヴィオがなのはから卵を受け取りたくないということだ。

ヴィヴィオの態度を見て、笑顔を張りつかせたままなのははゆつくりと体を引いた。 まあ、あんな態度みせられたらしようがないよな。

「……いまの光景は見てなかったことにしといたらいいの？」

「……うん」

消沈したまま首を縦に動かすなのは。 ちなみにフェイトはそんな二人のやりとりをみてオロオロするばかりである。

そもそも席順からして避けられてるということに気付かないのか？

いまの席順はこのようになっている。

☆

ヴィヴィオ・フエイト・なのは

どう考えてもヴィヴィオはなのはを避けているだろ。俺？俺は安定の一人だよ。みんなどう思う？家という空間で考えるなら両手に華だよ。でも横という空間で考えるならスツカラカンだよ。

まあ、そんなことは置いといて。

「エースオブエース破れたり、だな」

「こんな負け方嫌なんだけど……」

具が何も入っていない空のお椀をカツカツと刺しながら、なのはは一人で愚痴り始めた。

とりあえずそつとしておくことにして、冷蔵庫からうどんを取り出してくる。

「そもそも、俊くんがヴィヴィオにへんなことを吹き込まなければこんなことにはなっていないんだよね。そう考えるとわたしの不幸はいつも俊くんが絡んでるような気がするんだ。ううん、べつに俊くんを責めるつもりなんて全くないんだよ？でもさ、たまに思うよね。俊くんはなんでなのはをイジメるんだろうって。毎日毎日、意地悪ばかりしてさ。頭おかしいよね。ううん、でも俊くんが頭がおかしいのは知ってるよ？子どもの頃からの付き合いだからね。一番長い付き合いだもんね。でもさ、たまに納得いかないことってあるんだよ。こっちにも意地つてもものがあるしね。これでもね、大変なんだよ？あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、怒つてもヘラヘラしちゃってさ。どれだけわたしがデイバイン・バスター撃とうと思ったことか。けど、俊くんはそんなことおかまいなし。そもそもデリカシーがないんだよね。いまだきデリカシーのない男なんてモテないんだよ？」

台所から戻ってきたところで、ちょうどなのはの愚痴が一段落したみたいなので声をかけることに。

「なのは、うどん食う？」

「たべるー」

さつきとは打って変わった表情で目をキラキラさせながら肯定するなのは。 うんうん、わかるぞその気持ち。 すき焼きのうどんって美味しいよな。 ところで愚痴ってどんな愚痴なんだろうか？ どうせ俺に対する嫌味なんだろうけどさ。

うどんを三玉いれて蓋をすることに。

その間に俺は二人に話しをすることにした。 もちろんこれからヴィヴィオをどうするかについての話だ。

「さて、二人とも。 まずはヴィヴィオがここにいる理由を話す。 そのうえでこれから俺たちのする行動を決めていくことにしたいんだけど、異論はないよな？」

「うん」

二人が肯定する。 ヴィヴィオだけは器に残った食べ物に一生懸命で話に参加していない。 けど、それが一番いいのかもしれない。

「それじゃ、まずなんでヴィヴィオがいるのかだが——」

かいつまんで、要約してわかりやすく話していく。 スカさんから預かったこと。 ビスコの魔力でここについてきた。 案の定、なのはもフェイトもビスコ辺りでもって微妙な顔をしていたのだが。

「まあ、俺が話せることはこれくらいかな。 俺自身もスカさんからそこまで聞いてない、っていうか聞こうとしてもダメだったよ」

「もしかしてスカさんって多忙な人なのかな？ てつきり俊くんと同じ無職だと思ってたけど」

「というか、スカさんってスカリエツティに似てるよね」

「フェイトの気のせいじゃない？ それって次元犯罪者なんだろう？ スカさんにそこまでできるとは思わないけど」

「……それもそうだね」

「とにかく、ヴィヴィオは此処で預かるってことで異論はないんだよね？」

俺の問いに二人とも頷く。 わかってはいたけど……ほんと二人とも優しいよね。

だがここで大きな問題が一つでてくる。

その問題とは――

「士郎さんやリンデイさんになんて説明すればいいんだろうか……」

「あっ……」

預かっているだけとはいえ、ヴィヴィオはここで生活していくことになるんだ。スカさんは期限については何も述べなかつた。ということは、最悪の場合、一生なんてことにもなりかねない。だもしたら様々な問題が出てくる。

やはり早めに話しておくべきだろうか……。

「やっぱり、話しておかないとまずいよね。最悪でもリンデイさんには話しておかないと」

「いやいや、リンデイさんだけじゃダメだろ。士郎さん達だって俺たちのこと心配してるんだから。だからこそ、俺たちはしよつちゆう海鳴にも帰って無事であることを伝えてるんだし。それに子供の頃からどれだけ背中を押されたことか。あんな人が出来た人たぢいないぜ?」

「でも……お母さんになんて説明すればいいの?」

フェイトの言葉で軽くシユミレートしてみることに。

☆

「あら、なのはちゃんとフェイト、久しぶりね。ついでに無職の君も」

「いつも思うのですが、俺にはリンデイさん厳しいですよね」

「あなたが死んでくれたら優しくするわよ」

まったく意味ないですよ、それ。

玄関の前で軽くはない世間話をする。なのはとフェイトのおかげで若干リンデイさんの顔にも優しさがある。俺単体のときは般若のような顔してるのにな。

「それで? なにか困ったことでもあったのかしら? 三人で訪ねてくるなんて」

「あ、そのことなんだけどね、お母さん? ちょっと話しておきたいこ

とがあつて……」

フェイトのよそよそしい態度にリンデイさんもなにか違和感に気付いたようだが……フェイトが喋っているので口を挟まないようだ。「えっと——子どもをね、紹介しようと思つて」

☆

「死ぬな、俺が」

「うん、俺は死んじやうね」

「フェイトちゃんの言い方も悪いとは思うけど」

三者三様の言葉を述べながらも俺たちが到達した答えは一つ。俺がリンデイさんに殺されるという結末だ。俺自身もそんな未来が容易に想像できるわけで、死ぬしかないわけで、なんとも困つたことになった。

「それじゃなのはのほうは？」

「うちもダメだと思ふよ？　ねえ、俊くん」

なのはが俺に振つてくる。俺はそれに大きく頷いた。

「そもそも髪からして違うしな。それにもしそんなこと言ったものなら、流石の俺も土郎さんと恭也さんに殺されるよ。なのはのことが溺愛してるし。ヴィヴィオの年齢はだいたい5歳くらいだろ？　逆算すると14歳だぞ？　そんなこと土郎さんや桃子さんが許すはずない。どこの14歳の母だよつて話になつてくる」

「……それじゃいつそのこと、話さないつていう選択は？」

「それはもつとダメだよ、フェイト。俺たちはまだ19歳。日本では未成年の部類に入つてしまうから、やっぱり土郎さんやリンデイさんには話したほうがいいと思うんだ。ヴィヴィオはペットとは違うんだ。やはりそれなりに報告とかも必要になつてくるよ」

「う〜くん……でも、報告した先に待つてるのは俊くんの死」

そこが一番の悩みだよな〜……。もつとこう……。ギャルゲやエロゲみたいに簡単にいけばいいんだけど。

「「う〜くん……」」

三人が悩む中で、当人であるヴィヴィオだけが  
「うどんたべようよ〜!」  
元気に発言をしてるのであった。



## 26. 聖水

『子どものサインはとても小さい。だから見過ごしてしまうことがある。それを反省し次に繋げるか、そうでないかで器が違ってくるのかもしれない』

結局のところ、俺たちの答えは『時期をみて話す』という無難な答えに落ち着いた。いま話したって混乱するだけだろうし、もしかしたらヴィヴィオだつてすぐにスカさんたちが引き取りにくるかもしれない。

それにいま話にいったところでヴィヴィオとの生活だつて日が浅い。そんな状態で先方に報告したところで何を言われるかわかったもんじやないしな。

……いや、俺がボコられるのは確定事項なあんだけどき。兎にも角にも、これが俺たち三人が決めたことだ。

夕食を食べ終わった俺たちは俺だけを残して女子三名ともども風呂で体の疲れをゆつくり癒している最中だろう。

「それにしても、なのはがハブにされなくてよかったな」

風呂に入ると言い出したとき、ヴィヴィオは若干強張った顔をしたがフェイトの助力となのはの粘りでどうにかこうにか入浴へとこぎつけたのだ。それにしてもなのは怖がられ過ぎだろ。

洗い物を終えた俺はそのまま、マンガでも読もうと自室へ行く途中、あることに気が付いた。

「……そういえばヴィヴィオの服つてないよな。今晚のパジャマは俺が昔作ったメイド服でなんとかなるけど……さすがにメイド服で外に出すわけにはいかないよな」

そんなことすれば俺がおっさんに捕まってしまう。流石にそれだけは避けたい。

「ちよつとヴィヴィオに聞いてみようかな」

足を180°方向転換させて風呂場へと進むことにした。

風呂場へと訪れた俺を待っていたのは、先程まで衣服とした着用していたブラやパンツ、スカートにシャツ、といった聖骸布であった。ほのかに残る香り、若干嗅ぐことのできる汗、生暖かい感触。そう——桃源郷は此処にあったのだ。ちらりとすりガラスをみると、三人ともこちらに気付いている様子はない。

シルエツトからして、なのはとフェイトがヴィヴィオの体を洗ってあげているようだ。チャンス——到来

すばやくしやがみこみ、あちらの視界にはいる面積を狭くする。そして自分の中で体内時間の操作を行う。これにより、殺し屋でもないかぎり俺の気配を察知することは難しくなる。しかしこれにだって限界はある。だからこそ——最新の注意を払いながら最高の速度で獲物を——狩る！

『えへへ〜！　こんどはヴィヴィオがフェイトママをあらってあげる！　ヴィヴィオこれでもてコスコスするのじょうずなんでよ！』

「それならばお兄さんの息子もコスコスしないかヴィヴィオ!!」

ドスー！

「ぎゃあああああ！　目があああああああああ！」  
「まったく……油断も隙もあったもんじゃないんだから！」

一瞬だけ見えた光景から推測すると、タオルで体を隠していたのはから目つぶしつを喰らったようだ。指だけならまだいいが、今回は泡までつけてきたので失明しないか心配だ。全身の感覚を研ぎ澄まし心の目でこの場を視る。徐々に浮かび上がってくるシルエツト。前方になのは。横にヴィヴィオとフェイトか。

肌がチリチリと焦げるような錯覚を覚えるので、どうやら二人ともかなり怒っているようだ。フェイソンなんてチエーンソー取り出してきそうである。

しかしながらここは長年付き合ってきた仲だ。軽いジョークの一つでも飛ばせば許してくれるはず……！

「フェイト、ほんといい体してるよな。なのははもう少し頑張れ！」  
まさかなのはが風呂場でサマーソルトしてくるとは思わなかった

です。

☆

サマーソルトを食らった俺はフルボッコにされながらもなんとか逃げる事ができた。息子のほうはフルボッキだ。しかし此処には現在ヴィヴィオだっている。紳士として幼女がいる空間で抜くのは斬首に値する行為なのでなんとか我慢する。

しょうがないので自室に引きこもってゲームでもやろうとしたところで風呂場の方向からドタドタとした足音が聞こえてきて

「おふろよかったよー!」

ヴィヴィオが飛びついてきた。いったいどうしたんだ? ちよつとテンション高くない? お姉さんたちにイケナイことでも教えられたのか?

などなど、思考しているとパジャマ姿のフェイトとなのはがタオルで髪についている水滴を縛りながら困った顔を浮かべていた。

「どしたの、ヴィヴィオ」

「たぶん眠くなってきたからテンション高いんじゃないかな? ほら、たまにあるじゃない。小さい子特有の」

「ああ、たまに魔法少女(笑)もなるよな」

「ねえ、魔法少女(笑)ってわたしのことかな? 知ってる? 乙女つてね、いつまでも少女なんだよ?」

「……ぷっ」

「落ち着いて、なのは!? 鈍器はダメだつて!」

「離してフェイトちゃん! こいつに乙女の鉄槌を!」

「お兄ちゃんどいて! こいつ殺せない! (裏声)」

「バカにしてるでしょ!? わたしのことバカにしてるでしょ!」

なにをいませら。

なのはがロヴィータ化している様はみている面白。俺がニヤニヤとフェイトがオロオロとしながらなのはを止めていると俺の膝でぐるぐる遊んでいたヴィヴィオが失速し、やがて動きを止めた。

その様子に俺たちは動きを止めてヴィヴィオの顔を覗きこむ。

「……寝てるね」

「幼女の寝顔ってかわいいな」

「うーんと……今日はもう寝よっか?」

「うん、そうだね」

なのはとフェイトがあらかた拭き終わったタオルを受け取る。

二人は洗面台のほうに足早に駆け出してドライヤーをかけるとクシで髪を梳きながら手を差し出してくる。

「はい、ちょうだい」

「ごめん、キャットフード手元じゃないんだ」

「いらぬいよっ!? そうじゃなくて、ヴィヴィオを預かるって言うてるの!」

「ああ、ヴィヴィオね。でも……離さないんだけど」

シツカリとズボンを握ってるヴィヴィオはなかなか離れてくれない。強引にほどくことも可能んだけど……それはなんか嫌なので実行には移したくない。

「それじゃ、俊くんの部屋に寝せる?」

「だめだよ、なのは。俊だよ? 危ないことになるのは明白だよ」

「あ、そうだね。やっぱいまの発言取り消しね」

俺の幼馴染たちがこんなにつんしかないわけがない。

といっても、俺はこれからやらなければいけない作業があるわけで部屋にヴィヴィオをいれることはできないんだよな。さて、どうしたもののか。

考えこんでいると、ヴィヴィオが一人で俺の手を離し目が開いていない状態にもかかわらずトコトコと抱きついていく。——もちろん、フェイトのほうに。

「俊くん、歯くいしばって?」

「……え?」

いや……うん。なにかに当たりたい気持ちはわかるんだがな?

そこでサンドバックとして俺を起用するのはどうかと思うぞ?・

☆

なのはとフェイトの間に挟まれて寝ているヴィヴィオをみる。

「あんまりジロジロみないでよ。セクハラだよー」

「俺のセクハラはもつと大々的だから大丈夫なの。それよりヴィヴィオってトイレいったっけ？俺のイメージでは小さい子って夜寝る前はトイレに行くイメージがあるんだけど……」

小さい子どもって夜は一人でトイレに行くのが怖いから、親と一緒にトイレに行ってから寝ると思っていたのだが……。実際、小さい頃のなのはがそれで漏らしたので強く思ってしまう。それにヴィヴィオって考えてみれば家にきてから一回もトイレにいったってないよな？それって健康的にも問題があるんじゃないか？

「うくん……どうなんだろう、フェイトちゃん」

「えっ!? 私に振るの？ えーっと、行くときはなのはか私を起こすんじゃないかな？」

親指で顎を押しながら答えるフェイト。言われてみれば確かにそうだな。

「それじゃ問題ないか。んじゃ、おやすみ。風邪引かないようにな」

「はーい、おやすみー」

電気を消して部屋を出る。今日だけは盗みは勘弁しておこう。

部屋に戻り、電気を点ける。蛍光灯の人工光が部屋全体を支配して俺の娯楽グッズを起こす。それらを全部一か所の所にまとめておき、棚からコスプレ衣装用の布を取り出す。色は青と水色と白。これでとある人物をモチーフにした衣装を作ることしようと考えている。できるだけ可愛く、外を歩く誰もが振り返るような——そんな服を作ろう。

道具一式を近くに置き、いざ開始する。ヴィヴィオは喜んでくれるかな？

☆

カッチコッチと時計の針だけども聞こえてくる。何時間もしたよ  
うな、それでいて何分しか経っていないような、そんな時間の感覚が  
あやふやになった錯覚に陥る。時刻を確認すると深夜1時を若干  
過ぎたあたりである。

出来として30%。本当に終わるのか？ そう一抹の不安がよ  
ぎるわけだか、まだまだ時間的には余裕があるしなんとかなるだろ  
う。立ち上がり、伸びをすると背中からバキバキと固まりをほぐす  
ような音が聞こえる。

「うくん……ヴィヴィオの様子でも見てくるか」

あの笑顔をもう一度みて、英気を養おう——そう思った瞬間に家中  
に響くような声で誰かが泣いた。

『うわあああああん!!』

この声はいったい誰だ？

こんな高い声で泣く奴なんて家にいたっけ？

そもそもなんで泣いてるんだ？

疑問が頭を埋め尽くす。体は勝手に動き出す。

ドアを勢いよく開け、なのはとフェイトの相部屋のドアを蹴り開け  
る。

「あ、俊くん……起きてたんだ。　　というか、起きちやったのかな……  
？」

部屋に入ってきた俺を見てなのはは困った笑みを浮かべた。

「え〜つと……もしかして？」

「うん。　　そのもしかして」

「だいじょ〜ぶだよ、ヴィヴィオ。　　こんなこと、誰にでもあることだ  
から」

なのはとフェイトに抱かれたまま、グズグズと泣いているヴィヴィ  
オ。　　そして少し視線をずらした先には白いベッドが不自然なほど  
黄色くなっていた。

早い話が——ヴィヴィオが間に合わなかった、ということである。  
考えてみれば当然なことである。　　そう、これは当然な結果なん

だ。だって、ヴィヴィオは一回も行っていないんだから。この家に来て、何時間が経った？ かなりの時間が経ったはずだ。夕食だつて食べた。お茶だって飲んだ。もよおさないほうがおかしいのだ。

ヒックヒックと泣くヴィヴィオ。

なのはそんなヴィヴィオを優しく抱きしめ、背中をトントンと叩く。安心させるように、落ち着かせるように。

「私、ヴィヴィオをシャワーにつれていくね」

その言葉に俺はただ頷くだけしかできなかった。

☆

パタンと閉じるドア。 トントンと降りていく一人分の足音と、一人分の話し声。

それを聞きながら、俺はベッドに足を運んだ。

「きづいて……いたんだ。 ちよつと考えればわかることだよな。

だってヴィヴィオは小さい女の子だぜ？ それが突然俺たち大人3人の中に放り込まれてき、緊張しないほうが無理な話なんだよな。

主張できないのは当たり前じゃないか。借りてきた猫のようになるのは当然じゃないか。 用意周到なスカさんのことだ。 『迷惑をか

けちやいけないよ？』そう言い聞かせたんだと思う。 だからさ、賢いヴィヴィオはその言いつけを守ってたんだ。 ヴィヴィオにとつ

て、トイレに行く、ということは迷惑行為につながったのかもしれない。 誰かが案内しないとイケない。 誰かが付き添わないといけない。

だから、ヴィヴィオは言い出せなかったのかもしれない。 本当は、本当は——もつとわがまま言いたかったのかもしれない」

俺が渡したお絵かきより、アニメを視たかったのかもしれない。

考え出したら止まらない。 あいつが主張したのなんて、うどんを食べたい”なんてささいなものだけだったんだぞ。

情けない

幼女を泣かせた自分が情けない

黙ろうとしても黙れない。小さい女の子の小さな小さな自己主張を流してしまった自分が情けなくて、ヴィヴィオの泣き顔が頭から離れなくて、スカさんにウーノさんに申し訳なくて、マシガンのように喋ることなどでなんとか保とうとする。

「紳士が聞いて呆れるぜ。だって——」

喋る口が強制的に止められた。

「いまは、後片付けが先でしょ?」

俺の口元に自分の人差し指を置いて、ほほ笑みながら強制終了させるフェイト。

その笑顔でようやくわれにかえることができた。

「…………ごめん。ちよつと取り乱しちゃって…………」

「うん、大丈夫。私だってなのはだつて気付かなかつたんだもん。しょうがない、なんて言葉で片付ける気はないけど、優先事項がどれかくらいはわかるよね?」

その言葉に頷く。

「そうだ、まずはここを片付けよう。そうでないと、ヴィヴィオが安心して寝れないじゃないか。」

☆

ヴィヴィオのメイド服を脱がしたわたしは、いまだ泣いているヴィヴィオを抱いてシャワーのノズルを回した。お湯にかわるまで数秒。この時間がちよつと寒い。

「よっし、お湯にかわったね。ヴィヴィオく、体流そうね」

「…………うん」

下を向いたまま首だけで返事するヴィヴィオ。

まあ、それもそうだよな。よく考えてみれば此処は他人の家だもんね。ヴィヴィオだって家で生活するようになってできないだろうし、ましてそこでもよおしたら…………。

借りてきた猫のように黙ったままのヴィヴィオの体をスポンジで



丁寧に洗う。するとヴィヴィオが少しだけモジモジしはじめた。

「くすぐりたい？」

「うん……」

「うにやにやー！」

「やー！ くすぐりたいよー！」

そこを重点的にこすると、ヴィヴィオは笑いながらこっちにスポンジを押し返してくる。ようやく笑ってくれたのが嬉しくて、ついついヴィヴィオで遊んでしまう。

そんな笑いの中で一瞬だけ訪れる無音の空気

「ごめんなさい……おもらししちゃって……」

それはとてもとても細かい声で

「ううん。 わたしたちもごめんね、気付いてあげることができなくて」

わたしはたまらず抱きしめた。

抱擁に嫌がることなく、身を任せるヴィヴィオ。

「あのね……？」

「なくに？」

「スカさんがいってたの。『いまから行くところはとつてもいい人がいるから大丈夫』って。 ヴィヴィオのことをまもってくれて。 だからヴィヴィオ、いいこにしようとおもって、めいわくかけちゃいけないっておもって」

「そっか。 偉いね、ヴィヴィオ。 その年でいい子にしようなんて。

うちには19歳になってもお子様のままの男性がいるから余計に思っちゃうよ」

「でも……ヴィヴィオだめだったよ？ いいこにできなかつたよ？」

心配そうに不安そうに見上げるヴィヴィオ。 だからわたしはそれに満面の笑顔で答えることにした。

「いい子になんてしなくていいんだよ。 飾らない言葉で、飾らない行動で、飾らないわがままで、わたし達を困らせてくれたらいいんだよ」

わたしだつてそうだったんだから。

わがまま言っつて、さんざん困らせて生きてきた。それでも、まわりの大人たちは笑って許してくれた。

大人になるにつれて、わがままなんて言えなくなる。これも生きてきた中で身につけたことだ。約数名、それに縛られない人たちもいるけど。とにかく、こんな子どもときからわがままを言わない人生なんて、言えない人生なんてどこかで破綻するに決まっている。「だから——もつと甘えていいんだよ?」

「なのは……ママ?」

「ん? どうしたの?」

「えへへ……なんでもない! なのはママ!」

その後ヴィヴィオはわたしに抱きつきながら、「ママ」と連呼し続けた。ようやく言ってくれた言葉。聞きたかった言葉。こんなにも、ママと呼ばれることが嬉しいなんて思わなかったのが正直なところ、ヴィヴィオをこのまま自分の娘にしたいと思っつてしまひ、その考えは心の底にしまつておくことにした。

もう……そんなにはしやいだら眠くなつちやうよ?

☆

新しいシーツをかけ、ベッドメイキングを完了させる。

これでヴィヴィオが帰つてきたときに不快な印象を抱くことはないはずだ。

「あの……ありがとうフェイト。助かつたよ」

「こちらこそ、ありがとう。私一人じゃこんなに早くは終わらなかつたよ」

フェイトと二人でペコペコと頭を下げ合う。

これから三人はまた眠るんだろうな。俺は作業の続きをするわけだが——

「えつと……俺もういくよ。二人によろしく」

なんとなく居心地が悪く感じ、早々と退散を決め込むことにする。手をあげてドアノブを回そうとしたところで、腕を引っ張られる感

覚。 ついで誰かの胸に顔が当たる感触を感じた。

「えつと……フェイト？ その……胸が当たってるんだけど？」

「当ててるの。 まったく……俊はすぐ思いつめるんだから。 俊の悪い癖だよ、それ」

「そうはいつでも……俺の責任なんだし」

そこまでいったところでデコピンされた。 地味にうまくて痛い「違うでしょ。 私達」の責任だよ。 もっと頼ってよ、私となのはを」

いつもは息子が起きるはずなのに、こういうときに限って起きてこない。 ほんと拗ねてるよな、こいつ。

ほんとうはいつも通りバカをやりたいのに、作業で疲れて元気がでない

だから、首を縦にも横にも振らなかった。

その後、なのはとヴィヴィオが帰ってくるまでフェイトと俺はこの状態のままだった。

## 27. ターニングポイント

「できた……い！」

長かった夜も終え、ついにヴィヴィオの服が完成した。個人的にはなかなかの出来なので、いまからこれをヴィヴィオが着てくれると思うとなんだか頬の緩みが止まらない。

さて、三人が起きてくるまで1時間ちよつとくらい。朝食の用意をしてまっしておこう。

味噌汁を作っていると、二階からトントンと階段を踏む音が三人分聞こえてくる。

『おっはよー！』

「うーい、おはよー。あれからよく眠れた？」

「ぼっちりー！」

「ぼっちりぼっちりー！」

なのはのVサインに合わせてヴィヴィオもVサインを作る。なんだか二人とも一気に距離を詰めたな。うらやましい。

「それじゃ、顔洗ってちょ。もうすぐできるから」

『はーい！』

三人娘の姦しい姫様たちは今日も元気なようである。

そんな三人を見送って、俺は最後の仕上げにとりかかった。

いつもの三人の光景にもう一人小さい姿が加わった。いうまでもなくヴィヴィオである。ヴィヴィオはその小さい体を一生懸命使って必死に味噌汁の中に入れてうどんを食べようとしている。

ヴィヴィオがうどんを掴むと、うどんはそれをあざ笑うかのようにプツリと音をたてて箸から離れる。

「あう……」

「頑張つて、ヴィヴィオ。優しくだよ、優しく」

「大丈夫、ヴィヴィオならできるから！」

両側にいるフェイトとなのはが必死に声援を送る。ヴィヴィオはそれに頷いて、優しくそつと両手で水をすくうように掴みあげ、その大きく開けた口でうどんをすすった。

「うまいか？ ヴィヴィオ」

「うん！」

それはよかった。

両側にいる二人もパチパチと拍手を送る。 ヴィヴィオは照れ隠しのつもりなのか、フェイトやなのは手をしきりに掴んでは離す。といった謎の行動をしていたりする。 子どもって見とくと面白いよな。

そうしてにぎやかな朝は過ぎていった。

朝食を食べたあとは、仕事に行くのはとフェイトを二人で見送ることにする。

俺が作った弁当を手には二人は元気よく手を振ってくる。

「いってきまーす！」

「いってらっしやーい！」

俺とヴィヴィオもそれに負けじと手を振り返す。 世間一般的にこの立ち位置が逆のように感じるのだが、そんなこと俺には関係ないことだ。 というか、無職の俺が元気に外に出ると大抵おっさんと追いかけてこくなるのでいただけない。 いまはヴィヴィオだつていいわけだし。

「さて、ヴィヴィオ。 君にプレゼントがある！」

「ほえ？ なくに？」

寝間着として渡した予備のメイド服を現在は着ているヴィヴィオだが、流石にご近所さんから変な目でみられそうだし、ヴィヴィオにはまだコスプレとか教えるのは違うような気がする。 もう少ししてからの方がいい……かな。 そこらへんはスカさんと相談でもしよう。

「まあまあ、それは見てからのお楽しみである。 さき、家に戻るぞ」

ヴィヴィオの背中を抱きながら、俺はいそいそと家に戻るのであった。

☆

「あ、おかあさん？ うん、なのはだけど」

『あら、この時間に電話なんて珍しい……ことでもなかったわ。お仕事はどうしたの？』

「ふっふっふ……もちろん、サボってる」

このドヤ顔を並行世界の高町なのはが見たら頭を抱えるかもしれない。

『ダメよく。お仕事はちゃんとしないと。それで、きょうはどうしたの？ そろそろ海鳴に帰ってくる頃だったかしら？』

「うくん、それは少し延期かな。ちよつと色々とバタバタしてて」

『へへ。 なにかあったの？』

「うん。 子どもを預かってね」

そこまで言つて、なのはは昨日三人で決めたことを思い出す。その内容は——時期をみて両親に話す——ということであった。そして今日は、預かって二日目。

いくらなんでも早すぎる。

そのことを思い出したなのはだが時既に遅し。

『へへ、どんな子かしら？ 教育的には大丈夫？ 彼がへんなことしない？』

既にマシンガンのように喋りだした母を止められることはできなかった。

——30分後

そこには茫然とした表情でトツポをかじっているなのはの姿があった。

そこに沈んだ様子で、フェイトがなのはを訪ねてやってきたのだが

「ああ、なのはもなんだ……」

「……うん。 どうしようか……」

素直な二人には隠し事は難しいようである。

一方その頃、ひよつところはとうとう――

「なあひよつとこ。近所の通報で此処で夜中小さい子の叫び声が聞こえたらしいのだが……」

「塩でも喰らえ！」

「ちよつ!? お前、逮捕するぞ!」

安定の下種であった。

玄関の前で押し問答ともつかない、わけのわからないことを5分ほど繰り返している。

ヴィヴィオを一人にしているのか? そう疑問を覚えるかもしれないが、様子を見に来たウーノがヴィヴィオのそばにいたのでそこは安心である。

「そんなことないってば。だいたい、俺が家にはいるんだぜ?」

「だからこそ警戒してるんだ」

「あ、それはわかるかも。ところでさ……仮に家に小さい子どもがいたらどうするの?」

「お前を逮捕するかな」

ギリリと光るおっさんの瞳。その瞳にひよつところは冷や汗を流す。

……あかん。ここでヴィヴィオが出てきたら――

「ねえねえ! ウーノがこのふくかわいいってよ!」

玄関から勢いよく飛びつくヴィヴィオ。

「おっさん……言い訳をさせてくれ」

「とりあえず手錠かけてからな」

手早く右手に手錠をかけ、近くの鉄柵にもう一方をかけたおっさんは指を鳴らしながらひよつとこの話を聞き始めた。

ちなみにヴィヴィオは――

「ウーノ! あそば――!」

さっさとウーノのところに遊びに行くのだった。

☆

俺の話聞き終えたおっさんは、俺を怒るわけでもなく顎に手を当てて考えはじめた。いつもはフルボッコにしてから考えるのに、この逆順序は珍しい。

「どしたの、おっさん」

「いや、お前らだけで大丈夫かなと思ってな」

「大丈夫大丈夫。きつとうまくしてみせるさ。なんたって、預かっている身なんだからね。責任重大だし」

頭をかきながら、肩をすくめてみせる。細心の注意を払っているつもりだ。なにも問題はないはず。

けどおっさんは、そんな俺の頭に思いつきりゲンコツを落とすた。

「いつつ?!? なにすんだよ、おっさん!?!」

睨む俺に対して、おっさんはそれよりも怖い顔で睨み返してくる。

「ばかもん。そんな『預かっている』なんて感覚捨てろ。いいか? 此処の家にいる間はお前たちが親みたいなもんだ。絶対にその子の目の前で、『預かっている』なんて口にだすなよ?」

「……うん。ごめんなさい」

おっさんは俺の返答に満足したのか、うんうんと首を縦に何回も振る。

「そういうえば……今日は非番の日だったよな。丁度暇だし、俺がお前に子育ての極意を教えてやろう」

「おっさんの子育てなんて特殊すぎてアテにならねえよ」

おっさんからアツパーが飛んでくる。こいつ……いつか泣かせてやる!

「けどさ……なんか小さい子どもっていいよな。家が明るくなる」

朝の光景をずっと見ていた俺としてはそう感じるよりほかなかった。ヴィヴィオが笑うことで、二人も笑う。その笑顔はとても自然で、たった一つの笑顔だけで家中が明るくなるような——そんな錯覚に陥った。

「ああ、子どもはいいぞ。子どもに会うだけで疲れがぶつとぶ」



おっさんはうんうんと大仰に頷く。 流石既婚者、話に重みがあるぜ。

「それにな、子どもがいると姿勢すらかわってくるんだよ。 よく言うだろ? 『子どもは親の背中をみて育つ』って。 あんな迷信信じるつもりないけどよ……どうしてもシヤンとしてしまうんだよな、これが」

「……それほんとう?」

「ああ、本当だ」

「へく……。 あ、おっさんここタバコ禁止だから」

「まじか? すまんすまん」

一服しようとするおっさんに声をかけると、片手で謝りながらすぐにポケットに戻す。

「お前、どうすんだ?」

「どうするって……?」

「ここがお前のターニングポイントかもしれないぞ」

おっさんは全てをわかつているかのように、俺に誘導尋問してくる。

「そうだな……ちよつとヴィヴィオに恥ずかしげなく魅せれるような大人になってみようかな」

「まあ、いうのは簡単だがな。 いつとくが、お前は一般人なんてもんじゃないからな? 世間的に言えば犯罪者だ」

うつ……! このおっさん、ズバズバと言ってくるな。

「まあ、否定しないよ。 というかできないね」

「うむ。 お前が否定したらぶつとばすところだったぞ。 確かにお前は犯罪者だよ、でもな犯罪者には良い犯罪者と悪い犯罪者がいる」

「犯罪者に良い悪いなんてあんの?」

「わからん。 なんとなく言ってみただけだ。 でも……俺はそう思ってる」

「ふくん……それじゃ、良い大人と悪い大人の違いは?」

「さあな。 それがわかれば苦労しないぞ。 良い大人がなんなのかわかれば、他の奴はそのレールの上を走ればいいだけの話だからな。

「良い大人がなんなのか？」それは死ぬ寸前に答えがでるんじゃないのか？」

確かに……そんなものなのかもしれない。

「それじゃ……ヴィヴィオに誇れるような大人になるには俺はなにすればいいと思う？」

「とりあえず変態的なところを治せ」

「それ……俺という個性が死ぬくない？」

致命的だぞ、それ。

それを聞いたおっさんはチツチツチと人差し指を左右に振り、頭を振った。正直なところ、この人差し指を折りたいです。

「バカだな、お前。頼み方ってもんがあるだろ。俺の場合嫁さんに土下座すれば大抵のことはしてくれるぞ？」

「……たしかに、俺は頼み方つてものを心得てなかったかもしれない」  
神妙にしきりに頷くひよつとこ。

正直、問題はそこではないのだが、彼ら二人は気付かない。

俺がどうやって頼み込もうと考えていると、横にいたおっさんが首をポキポキとならし、立ち上がった。尻についた草を叩きおとし俺のほうを向いてしゃべる

「まあ、それなりに頑張れよ。ひよつとこらしくな」

そう一言だけ言っておっさんは帰って行った。

おっさん、手錠は？

尿意がそこまできてるんだけど。

## 28. 背中で語れ

『現実には小説よりもいっただって刺激的だ』

ミッド市内の大きな一軒家の外でたったいま19歳男性の人としての尊厳が失われつつあった。

「やばいってやばいって！ もうすぐそこまできてるぞ、尿意っ!? ヴィヴィオが間に合わなかったならまだわかるが、俺が間に合わなくて洒落になんねえぞっ!？」

足を気持ち悪いほどにくねらせながらひよつとこは叫ぶ

「だれかー！ー！ 誰か返事してくれー！ー！」

10秒たってから小さい足音が聞こえたかと思うと、玄関から俺が徹夜で作った不思議の国のア○ス風衣装を身に纏ったヴィヴィオがチユツパチャツプスを口にくわえ

たままでてきた。

「うゝ？ どしたの、おにいさん？」

「おおヴィヴィオ！ とりあえずチユツパチャツプス食いながら走るなよ、危ないからな。 まあ、それはおいといて——いますぐウーノさん呼んできてくれ！」

この手錠を解除できるとしたら、それはもうウーノさんくらいしか残ってない。 ヴィヴィオがなのはやフェイト並みに強ければ話は別だがそんなことありえないわけで、必然的にウーノさんになるわけ……でも俺は信じてる。 ウーノさんは良心の塊だ。 きつと俺を助けてくれるに違いない！

「あ、すみませんひよつとこさん。 ドクターから電話がありました……なんでも『過去に戻るマシン作り続けるのも嫌だからメダ○ツト作ろうと思うんだ。 ちよつと手伝ってくれないかね?』とのことなんで、すみませんがこころへんで失礼します。 引き続き、ヴィヴィオのことをよろしく願いますね」

「まって良心の塊さん!? 俺のメタバビーもメダフォー○ス発射寸前なんですけどっ！ とうか、暴発寸前なんですけどー！」

冗談じゃないっ！ いまこの機会を逃したら、大変なことになる



のは。そしてもう一人は泣いてるヴィヴィオを抱き上げてあやしているフェイト・T・ハラオウンである。

勝利の女神ははまだほほ笑んでいた。

絶望的な状況にもかかわらず、自然に息子の波状攻撃を止めることに成功する。このメダフォース、放つ場所はここではないのだ……！

「助けてくれなのは!? もうすぐくまずい状況なんだっ！ 俺のメタビーからメダフォースが発射されようとしている寸前なんだよ！ お前も嫌だよな、幼馴染が漏らしたところをみるなんて!」

それまでジト目で「なにしてんだ、このバカ」みたいな眼差しでみていたなのは『漏らす』という単語を聞いて合点がいった様子で俺のことをみてきた。 どうでもいいので早く助けてください！

「べつに〜？ わたしは小さい頃、誰かさんに見られたしね〜。あの時はと〜と〜と〜つても、恥ずかしかったけど。 ……誰かさんは笑ってたよね〜?」

あ、勝利の女神が俺に中指立ててる。

「だ、誰だ!? 俺の可愛いなのは笑うなんて!」

「いや、勝手に恋人みたいな感じにするのやめてくれる? まあ、それはそれとして……あのときはわたしも誰かさんも5歳だったよね。

でもいまは19歳。 この差はかなり大きいとおもうんだよね」  
なのは俺の周辺をぐるぐると回りながら、DSじみた顔で俺のほうをみる。 こいつ……絶対楽しんでやがるなっ……!」

「く……! なにが望みなんだ!? 謝罪か!? それなら既にしたはずだろ!」

「え〜? べつにわたしは、君」とは一言もいってないんだけどな〜。 まあ、勝手に謝罪したければどうぞ? それでね、わたしちよつとだけ今日は失敗しちやっただの」

「失敗なんて誰にでもあるさっ！ 俺なんて人生が失敗続きだからなら!」

「うんうん、やっぱり失敗は誰にでもあるよね? それじゃ、ほんの些細な失敗なんだけど……それで被害が被ったとしても怒らないよね

？」

「うんうん！ 絶対に怒らないから！ 俺がなのはを怒るわけないだろっ!? だから、早く手錠を解除してください！」

「……ほんとうに怒らない？」

「本当に怒らないってば！」

「それじゃ——」

なのはは指を一つ鳴らす。すると、手錠は簡単にその役目を終えたかのように軽く爆発して消えてしまった。ちよつとだけ、なのはがカツコイイと思った。

なにはともあれ、手錠を解除してもらった俺はトイレに向かって全カダツシュ。無事にメダフォースを発射し、身も心も爽やかになってなのはたちがいるリビングへと向かうのであった。

☆

「桃子さんと……リンデイさんに……バレた……だっ!?」

「うん。おかあさん凄かったんだよ。すぐなのはから情報聞きだしたの」

「うちだって負けないよっ！ なのはより数分くらい早く聞き出したんだから！」

「いや、おかあさんのほうが——」

「落ち着け二人とも！ いまは俺の命のほうが優先だろ!」

「別段どうでもいいかな」

なんとというコンビネーション。鮮やかすぎて涙が出てくるぜ。

「まあ、ぶっちゃけ桃子さんのほうはきっちり話をすればわかってくれるはずなんだ。問題は……リンデイさんだよ」

「そういえばリンデイさんにはかなり嫌われてるよね」

「16歳のとき、俺とリンデイさんの仲をどうにかしようと考えて、クロノが色々頑張ってくれたんだけど……俺がリンデイさんの顔面にお茶をかけてしまつて最悪の関係になつてしまった」

「あの後大変だったんだよ？ 反省してるの？」

「うん。まさかあんなところにコードがあるとは思わなかったよ。家中掃除したのに……」

嫌な思い出でも蘇ってきたのか、苦虫を10ほど噛んだような顔をするひよつとこ。

「それより、どうするの？ このままじゃ死んじやうよ？」

「うくむ……ここまできると、いつそのこと諦めの境地に達してきた。

もうでたとこ勝負でいいや。いまはそれよりも重大なことがあるんだから」

「重大なこと？」

「うん。俺さ、まともな大人になってみようと思うんだ」

真剣なまなざしで、なのはとフェイトをみる。二人はそんな俺の様子をみて――

「フェイトちゃん。頭の病院の電話番号ってわかる？」

「ちよつとまって。 いますぐ調べるから」

とても失礼な行動をとりはじめた。

「いやいやいや、ちよつとまてよ。 なに？ そんなに俺の発言っておかしいの？」

「おかしいどころじゃないよ。もしかして別人？」

タウンページを取りにいったフェイトを見送ってから、なのはが俺に懐疑な視線を向けてきた。 大変遺憾におもいます。

「いや、俺だつてな、ちゃんと考えたんだよ？ ヴィヴィオのために良い大人になろうつてさ。 それでこうやって答えを出したわけよ」

そりゃあ、俺は犯罪者ですよ？ キチガイですよ？ まったく良い大人とか良い犯罪者とかなれるかどうかわからないけど、それでも俺なりに考えたわけで。

……あれ？ よく考えてみれば、俺みたいな奴が良い大人とか無理じゃね？

「あのねえ……良い大人になろうと思つてなれるんだつたら苦労しないよ。 そもそもだよ？ 君は息を吸うように迷惑行為をしてくる人物でしょ？ それが良い大人になんてなれるわけないじゃん」

「……それは一理あるかも」

いや、一理どころじゃなく百理はあるかもしれん。

そもそも、よくよく考えてみれば……俺がいま述べた言葉って一般人が述べるような言葉じゃないか？

俺みたいな奴が述べる言葉じゃないよな？

俺みたいな奴はもつと……ろくでもないようなことをするよな。

例えば日常的な覗き、盗撮。セクハラ発言にパイタッチ。うん、ざつと考えてみてもこんなところだ。さてさて、こんなことをしている奴が良い大人を演じる……？

何度も何度もイメージする。想像する。

良い大人を演じてる俺。仕事をして、ヴィヴィオを養って休日には四人で遊びに行く俺。

うん。実に良い大人だ。『世間一般的な』良い大人だよな。

……これって俺的には苦痛じゃないか？ セクハラもできない、なのはやフェイトとイチヤイチャもできない。仕事という檻に囲まれて好き勝手にできやしない。そんなこと、俺に耐えられるか？

答えはN oだ。そんなことできないのは、俺が一番わかってる。

おっさんが言うように俺は犯罪者。そんな『世間一般的な』ことなんてできない。

じゃあ……どうすればいい？

「そもそも、君が良い大人になるなんて天地がひっくり返っても無駄だよ。できっこないよ」

そうそう……俺が良い大人なんて天地がひっくり返っても……ん？ ひっくり返す？

そのとき、俺の頭の中で一つの考えが浮かんでくる。

そうだ。俺は何を勘違いしていたんだ？ 俺みたいな奴が良い大人を『演じる』なんて土台無理な話だったんだよ。俺のような男にはもつとふさわしい役職があるだろ。もつとふさわしい席があるだろ。

俺は目の前にいるなのはの肩を思いっきり掴んだ。なのははそれに驚いているがいまの俺にはそんなこと関係ない！



「なのは！ 俺、ヴィヴィオの反面教師になるよ！」

「……へ？」

「そうだ！ そうだよ！ 俺が良い大人なんてできるわけないだろ!? 俺にふさわしいのは悪い大人だよ！ だって俺は息を吸うように迷惑行為を行う人間なんだぜ!? これ以上、ふさわしい奴なんて次元世界中探してもいないぞ！」

「良い大人を演じるんじゃない！ 悪い大人を演じるんじゃない！ いつも通りに行動して、そんな俺のいつも通りをヴィヴィオに見てもらうんだ！ なのはは言ったよな？ 俺は息を吸うように迷惑行為をする男だって？ だったら、それを実際にやればいいんだよ！ 良い大人じゃなくて、ミッドで一番の迷惑野郎を思う存分みせつけてやればいいんだよ！」

これはいわば発想の逆転だ。 成○堂龍一もビックリだよ！

いい大人なんかになれはしないけど、悪い大人なら演じるまでもない！ だって、それが通常時の俺なんだから！

「あーっはっはっはっはっは！ あーはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」

「ど、どうしたの……いきなり笑ったりして……!?!」

「これが笑わずにいられるか?!? 俺は肝心なことを忘れていたんだよ！ 俺がヴィヴィオを良い方向に導くつ!?! はっ！ バカも休み休み言えつてもんだろ！ 俺の近

くには、こんなにも立派な人間がいるんだぜ、それに二人も！ 管理局に勤めて、人々の平和を守る、そんな立派で愛嬌のある主人公気質な奴が二人もいるんだ！ 俺はなにか勘違いしてたよ！ 俺がヴィヴィオを良い方向に導くんじゃない！ なのはとフェイトが良い方向に導くんのだ！ 俺はいつも通りに生活するだけでいい！ それだけでヴィヴィオは立派になつていくんだからな！」

おっさんは言った。

『子どもは親の背中をみて育つ』と。 それはなにも良いところばかり魅せるのではないのか？

逆に悪いところをみせれば魅せるだけ、子は『こうはなりたくない』

そう思って自分とは違う方向を歩むのではないだろうか？ 仮に  
ヴィヴィオがそうだとしたのなら……ヴィヴィオは俺の背中をみて  
『こうはなりたくない』と思い、自然になのはとフェイトの道を歩ん  
でいく。

俺が惚れた人達の方向へまっすぐに歩いていく。

何も心配なんてしない。だって、その両側にはなのはとフェイト  
がいるんだから。

「主人公なんてやめだやめだ!! そんなちっちゃえ器に俺が収まるわ  
けないだろ! 俺は誰の息子だ!?! あの世界中を爆笑の渦に巻き込  
む、上矢<sup>かみや</sup>一<sup>はじめ</sup>の息子だろ!?! ろくでもねえ男の息子だろ!?! このろく  
でなさはDNAにまで染みついて離れねえだ! だったら、俺だつて  
ろくでなく生きようじゃねえか、ヴィヴィオに見せつけようじゃね  
えか! 下種を見せつけようじゃねえか! 俺がちよつとだけ真面  
目になればシリアスになるんだからよ!」

俺の中で何かが吹っ切れる。葛藤とか、責任とかそんなすべても  
のが泡と消える。

俺はただただ笑い転げる。

なのはがオロオロするのを尻目に笑い転げる。

何事かとフェイトとヴィヴィオが来るのを見ながら笑い転げる。

そして一緒になってヴィヴィオも笑い転げる。

——これは 俺こと、ひよつとこが 悲劇 深刻劇 哀話 悲話

悲運 不幸 などなどを無かったことにしてお送りする 非日常が

日常的な 喜劇 気楽 喜話 幸運 幸福 な物語である。

## 29. ギャラドスでもわかるリリカル昔話

前回までのあらすじ

19歳無職が幼馴染たちとミッドで暮らしているときに、友人から一人の女の子を預かることに。その女の子のために真面目に良い大人になろうと努力する無職。しかしそんなことできるはずもなく、良い大人は幼馴染たちに任せて、自分は一人だけ好き勝手にするのであった。

☆

「ねえねえ、むーじゅんってな〜に〜?」

「ほえ? むーじゅん?」

リビングで彼から借りたマンガを読んでいると、彼の部屋で遊んでいたヴィヴィオが2階から降りてきて私の足に飛びつきながら質問してきた。聞き返す間に膝に登って正面向きで座るヴィヴィオ。

「ねえ、フェイトちゃん。 むーじゅん、って誰?」

「え〜とと……ムー大陸の兵士の名前……とか?」

そんな一個人はさすがの私でも特定できないんだけど。

「ねえねえ、なのはママ、フェイトママ、むーじゅんってどういうこと?」

『え〜とと……』

頭だけ私とフェイトちゃんの方に向きながら首をかしげて聞いてくるヴィヴィオ。私も首をかしげたい気分です。いや、本当にむーじゅんさんって誰なの?

「むーじゅん、じゃなくて矛盾な。 ほら、高校のとき勉強しただろ?」

「あ、なんだ。 矛盾のことね。 一個人のことを聞かれてるのかと思っただけだよ」

2階から降りてきた彼がゲーム機をもちながら台所へ向かう。

冷蔵庫からリンゴジュースを取り出しコップに4つ分注ぐと私たち

に渡しながら椅子に座る。 ……ところで、いまのどうやったの？

「ヴィヴィオと弁護士が主人公のゲームしてたんだけどさ。なんか色々と気に入ったみたいで——」

「むーじゅん！　なのはママはむーじゅんしてますー！」

「と、まあさつきからこんな感じなんだよな。指さすヴィヴィオカワユス。パソコンの中にヴィヴィオフォルダ作っついてよかったぜ」

彼の戯言はいいとして……うーん、ヴィヴィオも色々と影響を受ける年ごろだしねー。私としてはあまり彼の近くについてほしくないんだけど……。

「ところで、ヴィヴィオ。わたしのどこが矛盾してるのかな？」

「なのはママはむーじゅんしてるの！」

「ふふんっ。いい、ヴィヴィオ。そういうのはね、証拠品がないと意味ないんだよ？」

「……しよーこーひん？」

ヴィヴィオが首を60°傾けて、頭に？マークを浮かべる。

ちよつとだけからかつちやおうかな。

「そうだよ。証拠品がないとヴィヴィオが言ってることはなんにも意味ないの」

「でも、おにいさんがなのはママはむーじゅんしてるって」

……カレが？

「フェイト裁判長！　この証拠品をみてくださいー！」

「えっ!?　ここで私にふるの!?!」

ヴィヴィオと目を合わせている隙に、彼はフェイトちゃんに何かを差し出していた。 ……ちよつとまって、あれって——

「これは、高町なのはの部屋から押収したブラです」

「……で？」

「気付かないんですか？　フェイト裁判長。それ、明らかに矛盾してるんですよ。——高町なのはのサイズと。いいですか？　本来高町なのはのサイズはそれよりももう少しダウンしてます。それなのに、彼女は見栄を張って一段階アップしたブラを引出の中にい



かけ、軽く笑ったあとに人差し指を立て

「ここで俺の登場ですよ。ギャラドスでもわかるリリカル昔話でヴィヴィオに説明しようと思う」

あれ……？　ちよ……つと、不思議な単語がでてきたんだけど。

頬がヒクツと動くのがわかる——が、ここは我慢することに。そんなわたしの心境など知らずに彼はヴィヴィオに絵本を読み聞かせる要領で話しはじめたのだった。

☆

むかしむかし、大きな大きな大陸に大陸全土を支配しているといっても過言ではない国がありました。その国の名は、パン・ツヌイダと呼ばれる国で男女比　4：6　きれいな水にのびやかな空気、あふれる木々に穏やかな気候。　とてもとても過ごしやすい国であったのです。　王様の名前は、ひよつとこ王。　とってもカッコイイ王様でモテモテで毎晩毎晩給仕の者とアバンチュールな一夜を過ごすナイスガイでありました。

王の右腕と呼ばれる女が王に唐突にいいました。

「なあ、王様。　わたし……胸をおつきくしたいんやけど……」

「諦めろ」

女は仕事をする王様の背後にまわり、バックドロップをきめます。

「すいません。　調子こいてました。　まじすんません。　ちよつと

王様の役割になったくらいで調子こいてました」

土下座でペコペコと謝るひよつとこ王。　なんとも弱い王様である。

「わたしもきにしてるんやで。　やっぱ女の子は胸が大事やし。　生

命力といつてもいいくらいや」

「んじやお前もうすぐ死ぬな。　セミとどつちが早いかぐばツ!」

「今度いつたら歯折るで」

王様の側頭部に回し蹴りをきめる女性は、痙攣する王様を尻目に兵に命令しました。

「ほなら、その商人とやらを呼んでもええで。 王様の了承はとれたみたいやし」

「いや……主はやて……じゃなくて、はやて様。 それって了承とったというのですか?」

「ちやんととってるで。 なあ、王様?」

「……もう、好きにしてください」

いじけてポケットから携帯ゲーム機を取り出すひよつとこ王。

「よし、それじゃ了承もとれたし……その商人を王間に通すんや!」  
ノリノリなはやてに溜息をつきながら、兵士は商人を通すのであった。

「あーはいはい、商人ね、商人。 ぶっちゃけどうでもよくなってきたから早めに済ませようぜ」

玉座に座りながらも、めちやくちややる気がなくなった王様はどうでもよさそうに、兵士に銘じて商人を自分の前に登場させることにした。

右側にロリっ子の兵士を、左側にポニーテールの兵士が付き従うなか、二人の商人が王様の前に片膝をつきながら話し始めた。

「お会いできて光栄至極にございます。 わたしの名前は、ギャラドスなのは……ギャラドスなのは——あれ? ちよつとお! ギャラドスって言おうとするとギャラドスに変換にされるんだけど! どうなってるの! これ!」

「お、おちついてなのは! 王様の前だよ! えっと、失礼しました。

私の名前は、フェイソンと申します。 ……フェイソンと……フェイソ……もうフェイソンでいいです」

栗色の髪をツインテールした女性、ギャラドスは一人で空中にむかって抗議をはじめ、金髪のツインテールの女性、フェイソンはすでに悟りをひらいたように事務的な目をしていた。

そんな二人を目の前にして、はやてが一步前にでて軽やかな笑顔を浮かべる。

「まあまあ、こっちの王様はすっかりやる気なくしたみたいやし——」  
「商人、スリーサイズと愛用のパジャマ、シャンプーと石鹸のメーカー

にパンツの色とシミの数、周期はどれくらいで訪れるのかを原稿用紙10枚で書いてくること」

「お前だまっとれや」

「ほむッ!？」

王様の顔面にためらいなく膝蹴りをするはやーて。鼻血で床が汚れるが、おつきの者も慣れているのかほんわかおっとりした女性、シャ・マールがモップをもって床

に落ちた血を拭きはじめる。それを横目にはやーては話す。

「ほんで、きょうはどんな要件できたん？ 商人なんやろ？」

はやーての声にフェイソンは答える。すでに二人ともちゃんと姿勢を正しているところを見ると、根は真面目なのかもしれない。

「今日は私たちの国に伝わる最強のバストuppブラを是非王様にお見せしたく馳せ参じた次第です」

恭しく頭を下げるフェイソン。

「いや、そんなことどうでもいいから君のパンツが現在シミを作っているのかについて小一時間ほどはなそうじゃ——」

「だまっとれ言ったやろ！」

ゴキツと肩を脱臼させるはやーて。王様はあまりの痛さに床を転がり、シャ・マールが置いたバケツをひっくり返す。シャ・マールはにこにこ笑顔でひよつとこ王の顔面をモップで綺麗に磨いている。

「ふむう……個人的にそのバストuppブラはきになるな。 どんなものなんや？」

「はい、既に私達は二人とも身に付けております」

『おい、それって……もしかしたら合法的にあの二人のアレをみれるんじゃないか？』

どよどよ……ざわざわ……と王間が揺れる。

「おちつくんやッ！ アホども！ わたしかてブラは着けとるで！ わたしかて美少女やないか！」

『……………』

「なんで黙るッ!？」



「ひっこめー！ 無乳ー！ 偽乳ー！」

「ぶちのめす！ お前だけはぶちのめす！」

シャ・マールによってきれいに磨かれたひよつとこ王は、男兵士たちの集まりの中へ紛れ込みながらはやーてに向けて禁句を叫ぶ。

追いかけるはやーてに、逃げるひよつとこ王。

突如現れた魔法の糸に足を絡め捕られ転ぶひよつとこ王に、はやーては馬乗りになって顔面を中心に殴っていく。その表情はもはや機械的で思わず男衆が3歩さがるほどであった。

やがて満足したのか、はやーては顔についた血を拭きながらフェysonに改めて話す。

「それじゃ、いま二人とも最強のバストupブラはつけとるということか。……うーん、確かにわたしより胸が大きいし、これは買いかもしれへんや」

「まった!!」

思案顔のはやーての後ろにいたひよつとこ王が部屋全体に震えるほどの声で叫んだ。ひよつとこ王は鼻血を垂らしながら、立ち上がりフェysonをまつすぐみつめる。

「ちよつとまつてほしい。——フェyson」

「は、はい。……なんですか？」

「二ついいかね。その最強のバストupブラは、どれくらい最強なんだ？」

射るような視線でフェysonを見るひよつとこ王。その視線にたじろきながらもフェysonは答える。

「えーつと……私の見た目どおり、大陸で一番大きくなります」

「……それは誰にでも効果があるのか？」

「はい、間違いなく」

フェysonの答えを聞いてひよつとこ王は肩をすくめる。

「ふう……。それは嘘だな。だって——大陸一の大きくなるのなら、横の女性も君ぐらいの大きさになってなきやおかしいじゃないか！」

「……ッ!? そ、それは……! たまたまこの女性の胸がブラをつけ

てもかわらないだけで……!」

「ねえ、フェイトちゃん。もちろん冗談だよな？　ほんとうはそんなこと思っていないよね？　どうしていつもこういうときはなのはに攻撃が集中砲火で飛んでくるの？」

「異議あり!!　フェイソン、それはおかしいよ。　君は先ほどどう証言したじゃないか。『間違いなく、大陸一の巨乳になれます』と！」  
フェイソンに向かって指さすひよつとこ王。

「……ぐッ！」

「さあ、君はこれをどう説明するんだい？　無乳であるはやーてに夢をもたせて罪は重いぞ？」

『ひよつとこ王が恰好よくみえるぞ……、流石王様だな……!』

『でも、はやーて様が釘バットもって素振りはじめたぞ……』

『……さらばひよつとこ王』

男衆がざわめく中、フェイソンは一言つぶやいた。

「私の負けですね……」と。

こうして世の中に一つの言葉がうまれた。

☆

「と、まあこんなもんかな。　——つて、どうしたの？　二人とも。

すんごい微妙な顔してるけど」

「いや……そりや微妙な顔にもなるよ。　なに、この茶番」

「いやいや、これはあくまで昔のお話だから俺たちとは一切関係ないよ。　いや、本当だつてば」

必死で首を横に振るひよつとこ。

それでも二人の顔はキツく、いつの間にか膝に座っていたヴィヴィオはとても楽しそうにニコニコと笑いながら指さすのであった。

「おにいさんにいぎありー!」

### 30. おそばをつくるよ!

三人にわかりやすく矛盾のお話しをしたら、二人からは微妙な顔をされ一人からは異議を申立てられる始末。　　いったいどうなってるんだろうね。

それはそれとして、いまは16:00。　　夕方とも呼べずお昼ともいえない時間帯なのだが、俺たちは四人なかよくTVをみていた。

内容はグルメ旅番組でミッドの美味しい料理屋を紹介しているみたいだ。

『このお店のおそばはミッドで一番おいしいと断言できるでしょう!　　それに作る主人も20代後半の天才イケメン主人!　　これはお客様が絶えることがないのも領けます!』

画面内では化粧気の強いリポーターが主人と蕎麦を交互にみながら何やら興奮している最中である。

「な〜にがミッドで一番だ。　　蕎麦庵のおやっさんの蕎麦のほうが美味いに決まってるだろ」

「あそこはおいしいよね。　　あそここのえび天大好き!」

「私はかきあげとか好きかな。　　キャロとエリオにも食べさせたいんだけどな〜……」

蕎麦庵とは俺たち三人が見つけた、蕎麦専門のお食事処だ。　　蕎麦一筋30年のおやっさんが一から作る蕎麦は普段料理を作る俺でも惚れるほどの腕前で、何度か店にお邪魔して習いに行ったほどだ。

「そういうえば、あそこの主人って私達と同じ日本出身なんだよね?　　なんかいまでも疑問に思っちゃうよ。　　地球には魔法技術とかないのに……よくミッドに来れたよね」

「さあなく。　　俺たちだって全部知ってるわけじゃないからな。　　俺たちが知らないだけで、おやっさんめちゃうやくちや凄い人かもしれないぞ?」

「う〜ん……もしかしたらなのは達の先輩なのかもしれないね」

まあ、おやっさんのことだからそれはないかもしれないけど。

正座してるフェイトの膝の上に座っていたヴィヴィオが、俺の足を

トントンと叩いてくる。 いちいち仕草が可愛い子だ。

「ヴィヴィオ、おそばたべたい！」

「え？ このイケメン主人の蕎麦？ 俺が気に入らないから此処には絶対いかないけど」

「ちくがくうく！」

「単純にお蕎麦食べたいんじゃないかな？ ヴィヴィオお蕎麦食べたことないだろうし」

ヴィヴィオの頭を撫でながらフェイトが喋る。

ああ、なるほどね。 そういうことか。

「でも、蕎麦庵って定休日じゃなかった？」

「ふえ……」

「ああ！ だ、大丈夫だよヴィヴィオ！ なのはママがなんとかするから！」

なのはが告げた残酷な答えにヴィヴィオは泣きそうになる。 それに慌てたなのははできもしない約束をすることに。 おいおい……定休日だっていっただろうが。

「あとはこの人がなんとかしてくれるから！」

「投げやりにもほどがあるだろうっ!? 数秒前の約束どうしたっ!?」

「うう……やっぱ、ダメ？」

ぐはっ!? 上目使いのなのはに思わず吐血する。 やはりいうかなんというか、可愛い子がこういった仕草をすると効果抜群で死んでもいいとさえ思えてしまう。

それが惚れた相手ならなおさらだ。 なのはの場合、狙ってやっけないから余計に刺激が……。 ちなみに狙ってやってるのがはやてだ。 あいつは自分が可愛いのをわかってやってるからタチが悪い。「まあ、おやっさんに電話して材料だけわけてもらえば、あとは家で作れるだろ。 簡単なものしかできないし、おやっさんの足元にも及ばない出来にはなるけどさ」

「うんうん！ それでもいいよ！ ね、ヴィヴィオ！」

「うん！」

なのはとヴィヴィオが二人してはしゃぐ。 それをフェイトと見

ながら、肩をすくめたあと携帯でおやっさんの番号にコールした。

☆

「いや、ほんとすんません。 定休日なのにお邪魔しちゃって」

「まったくだよ、バカ男が。 こちとら新しい蕎麦を作るのに忙しいんだぞ。 ほら、何人分だ？」

「え〜つと」

「いまなら20人特価で安くできるが？」

「……足元みやがって。 おいくら？」

おやっさんは手をパーの形にして前に出す。 しかたなく持ってきた金額を手のひらに置くことに。

「足りないぞ」

「出世払い」

「お前、死んでも職につかないだろうが」

足りない金額はおっさんに請求させることにした。

蕎麦庵から大通りに移った俺は、大量の荷物を眺めながらどうしようかと頭をひねった。

「それにしても、20人分は重いぞ。 流石の俺でも持てない……」

魔法でも使えれば楽なんだろうけど……いかんせん魔法を使えない身なので頼むことはできない。

俺が材料をみながら、どうしようかと悩んでいると奇跡的かつ偶然的に警官ルックスのおっさんが、見回りしながら歩いていた。 おっさん、家に請求書くるけど頑張

って！ しかしこれは素直に嬉しい。 おっさんの超人的パワーなら20人分くらい軽くもてるはず……！

「あ〜！ こんなところでミッドの一市民が困ってるぞ〜!」

おっさん、こちらを振り向き俺の姿を確認して見回りに戻る。

「うわ〜！ 20人分の蕎麦の材料を抱え家に帰るなんて無理だよー！ だれか助けてくれないかなー?」

おっさん、シカトしてタバコに火を点ける。

「こんな幼気<sup>いたいけ</sup>で可愛い男が困ってるんだけどなく？ 誰か助けてくれないかなー？」

おっさん、笑いながらこちらを指さす。

プチンツ——

「学校で制服プレイが大好きな局員とつとこいやボケ！」

「まったく、都合のいいときだけ市民を名乗りおつて」

「これぞほんとのご都合主義というやつさ」

「黙れ、ゴミ」

瞬歩できたとしか思えないが、俺が言葉を放った瞬間にはおっさんが傍にいて、やれやれ……と頭を抱えていた。 ところでさ、いまためらいなく俺のことゴミっていったよな？

「それで、どうしたんだ。 かなりの大荷物じゃないか」

「うちの姫が蕎麦をご所望だからさ、たったいま材料買ってきたんだよ」

「それにしても多くないか？ かなりの量あるぞ？」

「ついに子どもができたんだ。 可愛い子どもたちが」

「逮捕する」

「いやあああああ！ おっさんが俺の胸を愛撫してるううううううう！」

「どう考えても手を握ってるだろ!？」

いや、それも聞きようによってはイケナイ場面になっちゃうんだけどな。

——閑話休題——

「んじや、運んでくれ。 俺はポケットに手をつ突っ込んで家まで歩くから」

「お前ももたんか、バカもん。 まったく……やはりお前は変わらんかったな」

「やっぱ俺には、これが合ってるからさ。 良い大人はなのはとフェイトに任せることにしたんだ」

「お前が良い大人になってくれればミッドも平和になったんだがな」  
「とか言っちゃって、本当はおっさんには分かってたんだろ？」

俺がこの答えを出すことが。

おっさんは何も言わず、肩をすくめるだけにとどめた。

「まあ、それはそれとして。おっさんも食ってかね？ 20人分もあるからさ、人呼ばないと食べきれないんだよ」

俺となのはとフェイトとヴィヴィオ。ヴィヴィオが一人分食べれるとは思えないしなく……。あ、スカさんとかはやてとか呼ぼうかな。嬢ちゃんとスバルも、なのはを通して呼んでみよう。フェイトもエリオとキャロに食べさせたいとかいつてたし。腕は違うけど、材料は一緒だからなんとかなるだろう。

ここまで考えて、おっさんには家族があることを思い出す。帰ったら奥さんと娘さんとイチヤイチャしながら夕食食べるんだから、俺が誘っちゃダメじゃん。いまの誘いなしの方向にもつていかないよ。

「あー、悪い。おっさん家族で夕ご飯食べるよな。やっばいまの誘い——」

「なあ、ひよつとこ。嫁さんと娘が俺を置いて旅行に行ったんだけどよ……。どっかに独りで食べなくて済むところ知らないか……？」

「——いまの誘い、ありの方向で」

おっさんがどんどん惨めになっている気がしないでもない。

### 31. おそば準備してよ!

「おっさんが後ろからピクミンのようにストーカーのようにヤンデレ彼女のようについてくる。瞳の濁った狂喜の瞳で、紫色に変色した唇を舌なめずりし、凶器をもちながら狂喜に身を包まれながら狂気に体を預けながら俺の後ろをゆっくりとつかず離れずの距離を保ちつつ歩幅を合わせるように、手足を合わせるように呼吸を合わせるように瞬きを合わせる。次第に距離は詰められていく。彼の瞳は心は既に俺にしか向いていなかった——」

「なに言ってるんだお前」

「……この人物をなのはとフェイトに変えるだけで俺はすごく幸福になれるのにな。おっさん物語にでてくんよ」

「お前が唐突に喋りだしたんだろうがッ!」

「そんなことより、しりとりしようぜ。しりとりの『し』」

「しね」

「ネカマ野郎」

「はげろ」 ヒジ打ち

「黙れ、円形脱毛ハゲ野郎」 足の小指踏む

おっさんがローキックを繰り返すので、俺も膝蹴りで応酬する。

次第に互いの小競り合いは強くなり、ついには大きく振りかぶりながらの応酬となり、

『やんのかてめえ!』

「あのー……家の前でリアルファイトはやめてくれる?」

丁度家の前でリアルファイトしようとする俺たちを、玄関からなのはがめんどくさそうな目でみていた。そんな目で見つめられると素直におしやべりできなくなるぜ。

「というか、その大量にある材料はなに? もしかして全部蕎麦?」

「もしかしなくても全部蕎麦」

なのはがサンダルを足にひっかけながら俺のほうに向かってきたので、おっさんとともに材料を置く。なのはは20人分の蕎麦の材料をみながら



「なんでこんなに買ってきたの……？」

とつても怒った顔で俺のほうをみてきた。まあ、当たり前だよ  
ね。事前になのはから貰ったお金じゃこんなに買えないし、そもそ  
もこんなに食べようとは思わないし。

なので俺は道中考えていた言い訳をすることに。

「違うんだ。灰色の蕎麦の妖精さんが潤んだ瞳でこちらをみてきた  
のでごめんなさい。つついとおやつさんにのせられました」

なのはさんが頬をヒクつかせながらこちらをみてきたので、即座に  
謝ることにした。なのはさんは基本的に謝ったら許してくれる人  
だ。覗きは許してくれないけど。

「まあまあいいじゃん。また祝賀会のときみたいに人呼ぼうぜ。

ヴィヴィオもウーノさんにスカさんに会いたいだろうし。という  
か、スカさんの場合は俺が会いたい。六課の面々も呼んで盛大に蕎  
麦パーティーしようぜ」

蕎麦パーティーなんてちよつと年寄くさいかもしれないけど、これ  
はこれはなかなか乙だと思う。問題は、大喰らいなスバルとエリオ  
だ。蕎麦は20人分しかないので、全員に渡らせると残り少なく  
なってしまう。……うーん、おにぎりでも作るか。

「なのは、おにぎり作るの——やっぱいいや。はやて先に呼んであ  
いつに手伝いさせよ。あいつ料理作るのうまいしな」

「ねえ、それって言外にわたしがおにぎりも作れないっていいたいの  
？」

「なのはちゃんに問題です！ おにぎりを作る際に手につけるものな  
んでしよう？ 1 お酢 2 胡椒 3 コーンポタージュ！」

「4のお砂糖！」

なにいつてんだこいつ。

☆

荷物を家の中にいれたおっさんは、見回りに戻るといつて早々と来  
た道に戻ってしまった。ほんと、仕事大好きだな、おっさん。こ

の周辺は変人奇人が多いから大変だろうに。

ちなみになのははちよつと恥ずかしそうに顔を赤くさせながら、フエイトと二人でパソコンを使ってなにか調べていた。砂糖と塩を間違えるなんてカワユイやつでしょ？ ヴィヴィオを二人の間に座らせて『おいしそう〜！』なんて言いながら画面をみる二人。なのはとフエイトもおいしそうです。あ、よだれが……。

「あぶねえあぶねえ。まだセットアップには早い時間だ。それはそうとはやてに連絡取らないと……」

携帯に入れてある電話帳を開く。

携帯の電話帳はフォルダごとに分けてある。何分、知人が多いもので。

「え〜つと……はやての番号は『偽乳』にいられたよくな。あ、発見」  
携帯のカメラに向かってアイドルばりのスマイルで横ピースをきめてるはやての顔写真を眺めながら、俺はコールした。

「コールのあとにははやての声が聞こえてくる。ん？ ちよつと騒がしいな。もしかして、移動中か？」

『おー？ どしたん？ いま、ヴィータとイケナイことしとるんやけど』

「パンツ脱ぎ捨てた」

「きやあああああああああ!!? なのはの頭に何か温かいものが!?

フエイトちゃんにとって！ お願いとって！」

「む、無理だよなのはツ!! これは特A級のロストロギアだよつ!!」

「パンツであれだけ騒げるなんて可愛いなあ。あ、あいつら俺の幼馴染なんすよ！」

『だまつとれ、動くロストロギア』

「私の愛馬は凶暴でね……」

『ちつさ……』

こいついつか絶対泣かす。ヒイヒイ泣いて懇願させる。

「それはそれとして、ちよいと家にきてくださいええ。今日大量に蕎麦買ってきたから六課やスカさんたち呼んで蕎麦パーティーしようと思ってるんだ。でもエリオとスバルいるじゃん？ このままでは

絶対に足りないから、なんか作ってくれ」

『なるほどなく。ほなら今すぐ行くで。食材も一緒に買ってくる。蕎麦ってことは和風に仕上げるんやろ？今日の夕食は』

「流石はやて、話が早い。頼めるか？」

『オツケーオツケー』

それだけ聞いて電話を切る。するとちようどいいタイミングでヴィヴィオが俺の足にしがみついてきた。なにこの可愛い小動物

……あれ？ヴィヴィオ？

「なあ、なのはにフェイト。六課の面々にヴィヴィオのこといつたっけ？」

『……あ』

パソコンの前で固まる二人。

そんな二人と俺の体を使って遊んでるヴィヴィオをみながら俺はあることにきがついた。

ヴィヴィオ金髪だし、フェイトと俺の子どもとかいけるんじゃない？

### 32. おそばはまだ!?

なのは達が固まるのは見ながら俺はヴィヴィオの耳をつまむ。こうするとヴィヴィオはこしょぐつたいのか肩で耳をさする仕草をとる。これがなんとも可愛い。

さて、そろそろはやてが此処にくる頃合いだと思っただが——  
ピンポーン

「おー、ちょうどいいタイミングじゃねえか。 はいはーい！」  
足早に玄関に赴く。 ヴィヴィオも来客に興味あるらしくその小さい足で俺と一緒に併走しながら玄関までの距離を走る。

玄関のドアノブをひねり開けた先には、幼馴染にして一番ウマが合うかもしれない女、八神はやてが片手を上げながらこちらをニコニコとみていた。 黒に近い茶で、なのはやフェイトよりも短く揃えられた髪だからか明朗快活というイメージをもつ。 実際明朗快活なのだ。

なのはやフェイトたちが所属している機動六課の部隊長でありながら、一番仕事をサボる女である。

「わるいな、付き合ってもらって」

「ええでー、それくらい」

手に持っていた買い物袋を受け取る。 野菜や肉、魚など色々を買ってきたようだ。 人数が人数なのでかなりの量であるが……はたしてこれで足りるかな？ 足りなかつたら買いに行くか。

ドアを全開まで開け、はやてを中に招き入れる——ところではやての視線が俺の下腹部に注目されていることに気が付いた。

「おいおい、はやて。 いくら俺とお前の仲だからって会ってすぐ合体はマズイって。 俺にはなのはとフェイトという心に決めた二人がいるんだからさ。 いや、はやてがどうしてもっていうのならしようがないんだけどね？ 俺もさ、なのはとフェイトのことを考えると心が痛いけど、しょうがないような気がするんだ。 うん。 ヤろうぜ？」

スマイルを浮かべてはやての手を握る——直前に気付いたのだが、

いつの間にか5本ともが指が反対方向に曲げられていた。

「うおおおおおおおおおッ!? いつの間にか指が大変なことになった!?!」

「え? どしたん? あゝ、それ痛いぞ」

「お前だろっ!? お前がやったんだろ!? 頭おかしいんじゃないのかっ!?!」

「あんにただけは言われたくないわ」

はやてが溜息を吐きながら、俺の指に自分の手を包み込む。それから数秒包み込んだあと、はやてがその手を離すと指はすっかり元通りに戻っていた。おかえり、俺の指。

「……魔法ってすげえな」

「わたしが凄いや」

まあ確かにそうだけどさ。

「それより……さつきから気になってるんやけど……その娘、だれ?」  
はやてが俺の下腹部を指さす。正確に言えばその近くにニコニコと俺の手を握りながらはやてを見ているヴィヴィオを指さす。

「ああ、この娘はヴィヴィオ。俺とフェイトの子どもでさ。ついにできたんだ!」

「時空管理局本局 古代遺物管理部 機動六課所属 八神はやて二等陸佐です。拉致監禁の罪で逮捕します。同行してもらえますかね?」

「予想通りの反応ありがとう。そういうところ好きだぜ、はやて」

それと冗談だから手錠つけないでくれるかな?

「まあ……なんというか……新しい家族……かな? ヴィヴィオ、このママたちよりもおっぱいが残念なお姉ちゃんに挨拶は?」

「こんにちは! ヴィヴィオです!」

「こんにちは。なのはちゃんとフェイトちゃんの幼馴染の八神はやてです。ヴィヴィオちゃん、よろしくなく。えらいなくその年であいさつなんてできて。なのはちゃんとフェイトちゃんの教育がいいんやな。ミジンコ以下のゴミがいる家なのにこんなニコニコした笑顔を浮かべれるなんて……はあゝ、もらってええ?」

「その前に謝れよ、俺に」

「……え？」

「なんでこいつは不思議そうな顔で俺のことを見ることができるんだ。」

「残念ながら、ヴィヴィオはうちの天使なのであげられません。なのは&フェイトとガチで戦う覚悟があればどうぞ」

「うっ……ガチはあかんで、ガチは。アンタとならガチで戦うけど」

「……俺も一応、お前らが守る範囲の中にはいつてるからな？」

「管理局は人々の平和を守ります（ひよつとは攻撃対象で）」

「どんな方向だよっ!？」

「か弱い俺がすぐに負けちゃうじゃないか。」

「はっは。まあ、冗談や。ひよつとこの場合、周りがアレすぎて戦おうとも思わんで。人外やら化け物やら変態やら魔物やらが攻めてくるかもしれないな」

「その内の7割が父さんの知り合いだけだな。主に人外やら化け物やら魔物やら。本当にすごいのは俺じゃなくて父さんだよ」

「世界は広い。なんて言葉があるが、あまりにも広すぎる。そしてその中にはもちろん人じゃないモノたちも多く存在してる。吸血鬼や龍。食人植物や人の姿をしてるけど明らかに人とは異質な存在。そんな奴らが世界には堂々と跋扈していたりする。俺が地球からでなければ知らなかったことだ。そしてもっと知らなかったこと。それは、父さんがそんな存在とも知り合いで友達だったということである。色々と規格外だった存在だけど、どこまで規格外なら気が済むんだ……。というか、父よ。比喩ではなく本当に魔法使いなんて存在じゃなかったのか？」

「ひよつとこより規格外な存在なんてわたしには扱えんで……」

「……母は偉大だな」

「笑顔を浮かべながら父さんにクラッチをきめていた母さんを思い出す。もしかしたら母さんSSSランクだったかもしれない。」

「まあそれはそうと……ずっと思ってたんやけどな？ そろそろパンツ履けよ」

「あれ？ やっぱズボン越してもパンツ履いてないのがわかる？」  
「当たり前や。 そんなもん一般常識やで」

彼と彼女の常識を世間一般的な常識にされると困るのが大半の意見である。

「いや、でもさ。 ミッドに来て驚いたことの一つだよ。ズボン履いたままパンツだけ脱ぐ方法をみんなが会得してないってこと。

中学のときに男子は必修だったんだが……」

「わたしはスカートやからな。 そんなスキル必要ないで。 まあ、習うのは自由だったけど」

「好んで習うほどでもないからなく、女子の場合」

うんうん、とふたりして頷く。

そんなとき、俺の袖をクイクイつと引く娘がいた。 言うまでもなくヴィヴィオである。 はやてと話し込んじやつたし……: 退屈させたかな？

「あ、ごめん。 もう中にはいるから」

「ううん、ちがうの。 ねえねえ、スカさんたちくるー?」

ああ、そういえばヴィヴィオはスカさんには会ってないもんな。

そりゃスカさん達に一番会いたいのはヴィヴィオだよな。

無垢な瞳を見ながら、俺は携帯を取り出しスカさんの番号にかける。 ちなみに顔写真は幼女のパンツをとって狂喜乱舞している姿である。

「あ、もしもし? スカさん?」

『おお、ひよつとご君か。 どうしたのかね?』

「あー、ちよつとまって。 いま代わるから。 はいヴィヴィオ。

スカさんだよ」

スカさんの声がいつも通りなのを確認し、ヴィヴィオに携帯を渡す。 ヴィヴィオは携帯を受け取ると? マークを浮かべながらパンツをもって狂喜乱舞しているスカさんの顔写真をマジマジとみている。

「いやいや、ヴィヴィオ。 あんまり見るとスカさん可哀相だから。 ヴィヴィオに見せたくない一面がスカさんにもあるからさ」

例えば幼女のパンツをとって狂喜乱舞している姿とか。

俺はヴィヴィオの耳に携帯を当てる。

『ひよつとこ君？ どうしたんだい？ 返事がないなら私が書いた官能小説をだね——』

「あ！ スカさんのこえがきこえるよ〜！」

『うおっほん！ やあ、ヴィヴィオ君。ちゃんと良い子にしてるかな？ 私のほうは偉大な研究のレポートを書いていてね』

スカさん今更遅いよ。偉大なレポート＝官能小説という式が成り立ったよ。

「ほら、ヴィヴィオ。スカさんに、来てくれるか聞こうぜ」

「うん！ ねえねえ、スカさん？」

『なんだい、ヴィヴィオ君。おもちゃが欲しいのかい？ ちよつとまっつけてくれないか。いま幼女が使っても問題ないおもちゃを作るから。大丈夫、ウーノが運んでくれると思うだろうし』

「い〜ら〜な〜い〜！」

スカさん少し黙ってくれよ。そう思った瞬間、俺の願いが届いたのかスカさんの電話口から床に倒れるような音が聞こえてきた。たぶん、ウーノさんあたりが黙ら

せたんだろうな。

「ほら、ヴィヴィオ。いまがチャンスだよ」

「うん！ ねえねえ、スカさん。おそばたべるー？」

『ん？ 蕎麦かい？ いや、今日の夕食で蕎麦は食べないが……。』

ウーノ、今日の夕食は？』

スカさんが隣にいるであろうウーノさんに献立の内容を聞く。

なんだかヴィヴィオが泣きそうなんだけど……

俺はヴィヴィオの耳に当てていた携帯を自分の耳に当て、スカさんにヴィヴィオの真意を説明することに。

「違うよ、スカさん。ヴィヴィオが蕎麦を食べたいらしくてね。

俺が大量に買ってきたんだ。その量があまりにも多いので知り合いい呼んで蕎麦パーティーしようと思ったのさ。それでヴィヴィオは真っ先にスカさん達に来てほしくて電話したのさ」



『ヴィヴィオ君が私に……?』

「そうだよなー、ヴィヴィオ」

「うん!」

そりゃ俺なんかよりもよっぽど会いたいよな。家族みたいなものだし。

「それでスカさんの返事は?」

俺の問いに電話越しからは沈黙が返ってくる。と、思った瞬間――

『うっほおおおおおおおおおおお!! 行く! ヴィヴィオ君のお土産もって絶対にいかせてもらおう!! ウーノ! すぐに準備だ! まずは清潔感を出すために風呂へ!』

「いったあゝ……!」

スカさんの大音量に俺とヴィヴィオは思わずうずくまる。スカさんはしやぎすぎ。気持ちはとてもわかるけど。

「それじゃスカさん、まってるよ」

『まっけてくれたまえ! 最近開発した自立型移動ロボットで颯爽と登場してくるから!』

管理局員がいるのによくやろうと思うな。押収されて終わるぞ。それがおっさんが破壊して終わるぞ。

はしやぐスカさんの声を聞きながら終了ボタンを押す。

「よかったなヴィヴィオ。スカさんたち来てくれるってよ!」

「わーい! なのはママー! フェイトママー!」

なのは達がまつ所へ走っていくヴィヴィオ。ヴィヴィオの笑顔を見ると、こっちまで嬉しくなってくる。

そんなヴィヴィオの姿を見ながら、はやてをすっぽかしていたことに気が付いたのだが、とくに慌てることもなくはやてのほうに視線を向ける。

「どうだった? ヴオルケンのみんなは来れるって?」

「もち。たったいま電話で確認とってきたで。エリオとキャロも一緒につれてくるから心配なしや。スバルとティアはなのはちゃんに電話させよ。面白いことになりそうやし」

ピースするはやてにこちらもピースで返す。用意がいいはやてのことだから、あの間に電話で確認してると思っていました。そして同じことを考えてました。

「んじや、中にはいつてくれ。期待してるぜ、はやて」「まかしときぎー」

はやての手をとって中へと招く。

さてさて……あまり時間もないので早く作らないとな。

### 33. 食べる前にスパイスを

台所にはやてと二人、材料の確認をしながら世間話をする。ちなみにヴィヴィオはなのはとフェイトの元へと一直線に走り、そのまま帰ってこない。大方、二人の間に挟まれながらパソコンでもしてるんだろうな。

「さて……作るものも決まったな。手打ち蕎麦だから蕎麦以外の料理ははやてに任せるけど、よろしくな」

「誰に言ってるんねん。わたしか腕は落ちてへんよ」

腕まくりしながら力強く答えるはやて。はやてがここまで言うのだから実際に落ちてないんだろうな。むしろ上がったたりして。

はやてが準備する横で俺も蕎麦の準備をすることに。

買ってきた材料を台所にのせ、大きな大きな鉢をもってくる。

昔から蕎麦の基本は、一鉢、二延し、三包丁と呼ばれているそうで、その名前からもわかるとおり蕎麦の手順は大きく分けると3つからなる。

1つ目が鉢にそば粉と水をいれ、こねまくって玉にすることだ。

なんでも、このはじめの作業で蕎麦の良し悪しは決まってくるそうなので俺も一番気合がはいるところだ。ヴィヴィオとなのはとフェイトの喜ぶ顔がみたいしな。

次に延しだが、延しは鉢で玉にしたものを麺棒を使って延ばしていく作業にあたる。このとき出来るだけ細くしておくといいみたいだ。しかしここで問題になってくるのが、玉のほうである。玉が均等に綺麗に丸くなってないと延しの作業でうまく延ばすことができないみたいだ。やはりそういう意味でも、1の工程である鉢の作業はかなり重要なものだといえる。

そして最後にまってるのが包丁でのカットである。これは一定の長さ太さになるように計算して切らなければいけない。

総合的にいうと、どれもこれもなかなか難しいわけで、それに加えて20人分をいつぺんに作るわけになるのだから――

「こねるのが果てしなく難しい……！」

職人でもなんでもない俺は苦戦するわけですよ。 いやはや、ちよつと分量が多すぎたかな……やはり四人分のほうがよかったかも……。

「わたしには視えるでー。 みんなが誰かさんの作った蕎麦をおいしそうに食べる姿がなー」

「うっ、うるさいな。 ちゃんとやりますよ！ いまのでコツ掴んだからー！」

くそっ……今度もう一回習いに行こう。

水を足しながらこねていく。

はやては横で買ってきた魚の身を蒸らしたり、刺身、茶わん蒸し、ナスの山椒焼きに簡単浅漬け、冷奴、なんでもものを作ってる最中である。

たぶんかき揚げとか天ぷらとかの揚げ物系は食べる寸前で揚げるんだろーな。 出来立てが一番うまいし。

それにしても……あいかわらず料理の腕前やべえ……。

はやてを横目に必死にこねて玉にしていく。 ここを失敗したら後の作業が全てダメになってしまうので流石の俺も真剣にならざるおえない。

「なー、ひよつとこ？」

「後にしてくれ。 お兄さん真剣中なんだから」

「真剣に玉なんか転がして……」

やめろ、その表現

「なーなー、暇やから話でもしようや」

足で俺をつついてくる。 こいつ……！ 余裕があるからって好き勝手してくれるな。 いや、余裕がなくても好き勝手するけどさ。 あくまで目線と意識は玉に集中したままはやてとお喋りすることに。

「なんだよ。 片手間で話せるような話題にしろよ？」

「えく……。 それじゃ、最近どうなん？ なのはちゃんとフェイトちゃんとは」

「子どもも出来て順風満帆な生活を送っております」

「という夢を見たひよつとこであった」

否定できないのが悲しいところだ。

「まあ、ぶつちやけ進展ないなく……。いつも通りにヴィヴィオが加わっただけだよ」

「ふくん……。それにしてもよくもつなく。なのはちゃんとフェイトちゃんへの愛情」

「残念ながら、この想いだけは偽りたくないのね」

「それで進展は？」

「……ないです」

「どんだけへタレなんや」

はやてが溜息を吐く。

「俺だつて困つてるよ、俺の未来予想図では今頃ギャルゲー主人公のようにモテモテで家族公認で周囲公認のカップルになつてはるはずなんだからさ」

「現状をみると可哀相すぎて涙が出てくるで」

「けど、俺だつて告白してるぜ？」

「TPOつて知つとるか？」

「それくらい知つてるよ」

はやてが恐怖するように俺のことをみてくる。いや、TPOくらい知つてるから

「知つててそれなら真正のバカやで。まったく……。そんなことじゃ

乙女心もわかつてないやろ？」

「ぶっ……。はやてが乙女心とかいいと思いますから、その手に持っている包丁をどうかしまってください」

つつい笑った瞬間はやてが無表情で包丁を俺に向かって投擲しようとした。なにこの人。なのはより危ないぞ。

はやてはバカを見るような目で可哀相な目でイケメンの俺に説教でもするかのように指を突き付けて言ってきた。

「ええか？ 女の子ってのはとっても繊細なんやで。アンタみたいなバカとは違うんや。もっと女の子の気持ちとかも汲み取らなあかんねん」

「たとえはっ？」

「え？ え〜つと……そうやなあ……例えば、なのはちやんとフェイトちゃんVS次元世界の全員とかになるとするやろ？ それならどっちの味方をする？」

「勿論、なのはとフェイト」

「そういうことや」

「どういふことだよ。」

「すいません。乙女心のわからない俺に誰かはやての言いたいことを理論的に説明してください。」

「そういつたことに乙女は弱いんやで。よく覚えておき」

ふむ……ようはアレか。味方がいないときに助けたら好感度が上がるぞ！ つてことでもいいのか？ なるほど、乙女心つてちよろいな。そんなんで落とせるなんて随分と股がゆるい女みたいだな。

「キヤー！ この人私を助けてくれた！ 抱いて！」つてことだろ？ だとしたら乙女心なんてわからなくていいや。まあ、俺自身は当てはまってるかもしれないけどさ。

「けど、自分で考えてなんやけど……次元世界丸々相手取るとなるとかなり大変なことになるな。これを自分に置き換えるとかかなり苦しくなるで」

ふむ……確かにそうだよな。いくらはやてが強くても流石に次元世界相手はキツイだろ。けど、

「そのときは俺呼べよ」

「……は？」

「いや、だからさ。次元世界相手取るときは俺呼べよ。戦闘なんざできないけど、お前の隣で飯食うくらいはできるだろ？」

ハトが豆鉄砲喰らったような顔でこちらをみてる。

「……なんで？」

『……なんで？』つてことはないだろ。なにその反応。ちよつとショックなんですけど」

「いや、だって。次元世界やで、次元世界。恐ろしいで？」

「ようはアレだろ？ 喧嘩相手が犬とか猫から次元世界にソフトチェンジしたただけだろ？ 言つとくがな、はやて。俺はお前と、相手が

変わったからといって手のひら返すような……そんな薄っぺらい関係を築いたなんて思っていないぞ」

「……へ、へ。 そうなんか……。 ふくん……。 次元世界を相手取るんかー！ それは大変やな〜！」

挙動不審でワタワタしてるところ悪いが、戦うのお前だからな？

俺は後方で洗濯物でも干しとくから。

「そ、それは嬉しいな〜！ ということはアレやろ？ 相手になのはちゃんとフェイトちゃんがおつてもこつち側にいてくれるわけやろ？」

はやてが前かがみになりながら、下から見上げる形で聞いてくる。

……あ、そういえばそうだな。 そんなことしたらなのはとフェ

イトと敵になるんじゃない。

「あ、やっぱりいまの話なしの方向で」

「ぺらっぺらの関係やんかっ!!」

「ほぐうっ!?!」

はやてのラリアットで俺の頭がカチ割れそうになる。 流石管理

局員……。 生身でも十分強い。

だってしようがないじゃん。 なのはとフェイトがあっち側にいるんだもん。

打ちつけた頭をさすりながら、はやてに文句言うことに。

「いつてえーな！ バカ女！」

「バカはそつちやで！ いまの行いは最低や！ 脳みそ引きずり出すぞー！」

怒気のコもった声ではやてが俺を睨みつけてくる。

え？ ちょ、え？ そこまで怒ることなの？ いつもこんな感じのやり取りしてるじゃん!?!

怒りが収まらない様子のはやて。 このまま魔力弾でも撃つのか——と思いきや、一度冷静になるためなのかコップに水を汲んで一息で飲みほし、さつきまでの玄関でみたときの表情を浮かべながら近づいてきた。

「まあ……。 わたしがアンタに乙女心を期待したほうがバカやったで。

うんうん、人間モドキに人間のことを教えるのはとても難しいことやからね。けどな？ このままじゃ、いかんと思うで。幼馴染からのありがたい忠告やで？」

「ちよつとまって、人間モドキってどういうことだよ。ちゃんとした人間だよ、俺は」

「そうやな、うんうん。ちゃんとした人間やもんな。でもな？」

乙女心は理解できてへんやろ？」

「甘く見るなよ。ギャルゲーで鍛えたこの力があれば——」

座ったまま、左手をグツと握りしめ自分の胸にもっていく。

その拳をはやてがそつと包み込むように握りしめた。

「ゲームだけじゃわからないことがあるんやで……？ たとえば——この心臓の鼓動の高鳴りとか」

「……え？」

はやての心臓に俺の手が触れる。ドクンツドクンツと脈打つ音が否応なしに聞こえてくる。心臓の高鳴りが届いてくる。

「はや……て？ ちよつ、おまつ、それは洒落にならないって!?! 俺にはなのはとフェイトという心に決めた人がいて——」

「ブー。女の子の前で他の女の名前を出すのも禁止タブーの一つやで？」

はやての腕が俺の首に絡まる。離そうとしても引き離せない。

そのままはやてはゆつくりと俺に覆いかぶさる。手は俺の指を

恋人のように一本一本絡ませた状態になっている。

「いやっ!?! ちよつ、まじでダメだつてば!?!」

「そんなに嫌なら引きはがせばええよ。わたしは魔法なんて使わずにただ乗ってるだけやし」

「いやでも……女性を引きはがすのは紳士じゃないというか……」

「ほんと、都合のいい脳みそやな。いつもは紳士とは逆ベクトルに位置するくせに」

クスクスと蠱惑的に笑うはやて。

「でも、これはわたしを引きはがさないっていう証拠として見てもええんやな？」

「いや……だから！ そもそも、お前のなんかじゃ力不足というやつ



「でな——」

「でも——ここはしっかり大きくしとるで?」

恋人絡みの左手を離し、俺の下腹部をなぞり、ふくらんでいる部分を触る。

「ふくん……力不足でも大きくなるんや? 随分と分別のない子やな  
〜」

ゆっくりと指を這わせるはやて。それが気持ちよくて、ちよつとだけムラムラしてくる。

おちつけっ! 俺の息子! そして俺! お前には好きな人がいるだろっ!

「なあ、俊? キス——してみようか」

「……え?」

はやての顔がゆっくりと俺の顔におりていく。潤んだ瞳にわずかに震える唇。軽く朱がさしたその顔はいつもより数段可愛くみえて——

「へー……はやてちゃんとキスするんだ。へー……。ヴィヴィオのことで相談しようと思っただけだ。へー……キスするんだ。

へー……」

「おかしいなー。俊って、はやてと夕食作ってるはずだよ。それがなんで二人して床に倒れ込んで、そんな指の絡め方までしてるんだらう。おかしいね、なのは」

「うん。おかしいよね〜。わたしはべつに俊くんがだれとキスしても構わないけどさ」

二人の登場に体が強張るのがわかる。

「や、やあ……なのはにフェイト。いつからそこに……?」

「さあ? ベつにいつからでもいいんじゃない?」

なのはよりも優しいフェイトから、心なしか冷めた声が発せられる。

「いや、二人ともこれは誤解なんだよっ!? 俺はべつにやましい気持ちなんかまったくなくて——」

「なんでそんなに慌てるの？　べつにわたしもフェイトちゃんも俊くんが誰となにしようが構わないよ？　むしろ祝辞を贈っちゃう」

「いや、だから聞いてくれ——」

「だけどき、此処にはヴィヴィオがいること忘れてない？　小さい女の子がいるのにそういったことをするのはよくないと思うんだよね。わたしはべつに構わないけど、あくまでヴィヴィオの教育上問題がでてくるよね？」

「いや——」

「ヴィヴィオが悪い子になったら俊は責任取ってくれるの？　とれないよね？　ただでさえ人間的にダメな俊がヴィヴィオの責任なんて取れるわけないよね？　べつに俊がそういうことするのはいいよ？　私もなの。はも俊のことなんかどうでもいいから——」

あくまで機械的になのはとフェイトは淡々と告げる。俺のことなど、どうでもいいということを強調して。

「あの——二人とも俺の話を聞いてください——」

「話を聞く？　誰の？」

「いや、だから俺の話を——」

「それが話を聞いてほしい人の体勢なのかな？」

そこで気付く。いまの俺の状態を。端的かつ客観的にまとめると

はやてに馬乗りの体勢で乗っかられている

「いや、ち、違うんだっ!?　これは——その——」

スルリと抜けてなのはとフェイトの前に立つ。

そんな俺になのはとフェイトは優しくほほ笑み

「どうぞご勝手に。私達はヴィヴィオと一緒にお風呂に入ってきますから——」

バシンツ！と平手一発。

それを置き土産に二人はその場を後にした。

二人が去った空間には、ぶたれたところをさすりながら去ったであろう方向を見る俺と——

「ふむ……なんか大変なことになったな〜」

呑気にそんなことを言うはやてだけがいた。

はやての方に歩き、胸倉を掴む。

「どうしてくれんだよツ!? お前のせいで振り向くどころかそっぽ向いたじゃねえか!?!」

「いや……わたしも二人があそこまで怒るとは思ってた……」。

やっぱあれやな。 ヴィヴィオちゃんの教育上よくなかったみたいやで」

「知ってるよ! そんなこと! どうすんだよ、下手したら家を追い出されるかもしれないだぞツ!?!」

「まあ……」愁傷様やな。 でも、それはわたしを断ればよかったわけやしな〜。 それができんかったアンタが悪いとちやうか?」

「うぐ……ツ!?!」

確かに俺があっさりはやてをどかせることができればよかったのは確かだけど……。

はやての言葉にそれ以上反論できずに俺はただただ手をプルプルと震わすばかりである。

そんな俺をみてはやては小悪魔のように意地悪い笑みを浮かべてニヤニヤしていたのだった。

### 34. 彼が此処にいる理由

『この身、この心、すべてをささげよう』

水がタイルを穿つ音が聞こえてくる。大きな家の中にこれまた大きな風呂場。

その中に大人二人と、子どもが一人。とても仲好きそうに洗いっこしたりはしゃいだりしていた。大人の二人の名前は、高町なのとフェイト・T・ハラオウン。表面上はとつてもにこやかだ。そして子どもの名前はヴィヴィオ。碧眼と深紅な瞳のオツドアイが特徴的な天真爛漫な女の子。この家のアイドルである。

「ねえねえなのはママー？」

「なあに？ ヴィヴィオ？」

「どうしてそんなにおこってるの？」

メキツ！

なのはがもっていたアヒルの人形が深海に放り込まれたかのように圧縮される。

「べ、べつに怒ってないよ？ ねえ、フェイトちゃん？」

「う、うん。 なのはと私を怒らせたら大したもんだよね！」

湯船につかっているフェイトに同意を求めるとフェイトも首を縦に動かして、努めて明るく振る舞う。

そんな二人の様子をヴィヴィオはおかしそうにみていた。

☆

なのははヴィヴィオの体を泡で満遍なくコーティングしながら先程の光景を思い出す。

自分の幼馴染が親友である八神はやとキスする直前までいつていた光景を。

「べつに……なのははアレが誰とキスしても……関係ないからいいもん」

けど、普通に考えておかしくない？ 家にはヴィヴィオがいるんだ

よ？　これはあくまでヴィヴィオの教育上で問題がでてくることだ  
と思うの。　あくまでヴィヴィオの教育上でだよ？　じゃないと、わ  
たしがこんなに怒るはずないもんね。　だって、相手はあの俊くんだ  
よ？　社会不適合者で人間的に問題があつて、いっつもわたしやフェ  
イトちゃんにちよつかいとかセクハラとかかけてくる。　デリカ  
シーの欠片も存在しない男なんだから。

まあ、そんな人だからなのはやフェイトちゃんが引き取つてあげよ  
うと思つて、一緒に住んでるのに……俊くんつてば、よりによつては  
やてちゃんの誘惑にかかつてき。　なに？　いつもの『はやてとか恋  
愛対象にはいららないわ』とか言つてるくせに、ちよつと女の子っぽ  
いところ見せたらすぐに落ちるんですか？　随分と弱い心ですね。  
なに？　いつも私やフェイトちゃんのこと『好き』とか言つてるく  
せに、あれも全部ウソつてわけですか？　だって、そうですよね。  
はやてちゃんには『好き』なんて言葉かけてないもんね。

それなのに、あんなことになつたつてことはそういうことですよね  
？　あー、なんか腹立つてきた。　家追い出そうかな……。

メキメキメキツ……!!

ギエピーー！　ギエピーー！

「な、なのはママ!?　アヒルさんがきもちわるいこえをあげていのち  
ごいしてるよっ!?!」

おっと、いけないいけない。　なにアレのことで熱くなつてるんだ  
が。　私としたことが、もっと精神の訓練しないといけないね。

「ねえー、ねえー。　ママ?」

「ん？　どうしたの?」

「おにいさんつて、どうしておうちにいるの?」

とつても答えづらい質問です。

「いや、それは……その……フェイトちゃん!」

「えっ!?　ここで私!?　えーつと、それは……その……ねえ?」

誰もいない空間に同意を向けるフェイトちゃん。　そこには誰も  
いませんよ。

「あのね、ヴィヴィオ。　俊くんは普通の人じゃないの。　だから家

にいるしかないの」

「うー、そうなの？」

「うん、そうなの」

「それじゃ、なんでここにきたの？ ママたちはおしごとなんでしょー？ おにいさんがそういつてたもん。 それじゃ、おにいさんは？」

「えーっと……それは……」

ヴィヴィオの質問に答えられない。

そもそも、なんで俊くんって此処にいるんだっけ？

「なのは。 俊が此処にいる理由だったら、アレだよ。 私たちがミッドに行くことになってそのパーティーが開かれたあとに——」

ああ、そうだった。 今のいままでずっと忘れてきた。 いや、忘れようとしていた。

フェイトちゃんの言葉で思い出す。

——あれは、高校生活も終わりを迎えるときだった

☆

「いやー、それにしてもなのはもついにミッドに行くんだねえ。 毎日会えなくなるんだねえ」

「や、やめてよお姉ちゃんっ?! 髪ぐしゃぐしゃするの禁止っ!」

サイドポニーにした髪の毛を乱暴に触る姉を払いのける。 嬉しい気持ちでいっぱいだが、髪の毛をいじるのはやめてほしい。

わたしこと高町なのははもうすぐ高校生活も終了して、ついに本格的に时空管路局にお勤めになります。

たぶん……高校時代とか変わらずそこまで仕事が終わってくるとは思いませんが。 どうしてか、いつもわたしの前であらかた片付いてたりするんです。 あとに残ってるのは細々として書類仕事だけ。 これは親友のフェイトちゃんにも言えることみたいです。 うーん

……とつても不思議です。

「それにしても良かったわね、なのは。 ミッドのほうで住む家も見

つかつて。大きな二階建ての家なんですって?」

「うん! リンディさんが頑張ってくれたの!」

「ほんとありがとうございませうリンディさん。大変だったでしょうに……」

「いえいえ、大事な娘であるフェイトも一緒ですし、なのはちゃんには数々の恩義がありますわ。私としても、是非二人には立派な家に住んでもらいたかったの」

フェイトちゃんのお義母さんであるリンディさんが、フェイトちゃんの頭を撫でながら言う。フェイトちゃんはちよつと恥ずかしそうに、でも嬉しそうにしている。

「そういえば、グレアムさんとこのはやてちゃんと他の皆もミッドに一斉に移動するのよね」

「うん、そうだよ。なんでもはやてちゃんが設立した部隊に皆ではいって頑張るみたい。これから楽しみだねー!」

「でも……そうになると俊君は此処でお留守番かしら?」

「あつ……。そう……なるね……」

いつもふざけた、しかし極稀に真面目な自分の一番付き合いの長い幼馴染を思い出す。

上矢俊。海鳴一の問題児で、小中高と私は散々な被害を被ったことを覚えている。中学はまだ男女別だったけど、共学の高校になつてからがもうすさまじかった。私もどれだけ黒歴史を作ったことか……。

でもなんだかんだて、皆には人気がありクラスの破壊役にしてみとめ役なんてこともしていた。他の生徒たちからも人気はあったみたいだ。先生からも人気があるらしくよく職員室で名前が出ていた。処理対象として。

それはずつと傍にいたわたしだから胸を張っていえることなんだけど……そもそままで人気があつたんだろう?

前に、お父さんがお酒の席で『そういう星の元に生まれてるんだよ。

上矢という家系の人たちはね。俊君のお父さんなんてもつと凄かったさ。あいつのカリスマ性は誰もが羨んだよ』そう俊くんに聞

かせていたのを覚えている。 俊くんのお父さんは俊くんが小さいときに飛行機事故で行方不明になった。

それ以来、俊くんは高町家と自分の家を行ったりきたりしている。 そんな中でもお父さんとお兄ちゃんには懐いてた。 翠屋でバイトもして、たまに稽古したりして……俊くんは俊くんで人生を謳歌していた。 だから……わたしもフェイトちゃんも皆も俊くんは海鳴に残ると思っていた。 俊くんとお別れなのは少しさびしいけど、べつに今生のお別れってわけでもないし……会いたいときはすぐ会えるし。

だから、わたしはずっとミッドの家に住んでからの家事分担とか家の仕方について頭の中で考えていた。

ヴィータちゃんが呼びに来るまでは。

☆

突然、ヴィータちゃんが念話でわたしとフェイトちゃんを呼び出した。 呼び出した先は道場で、その道場には既に先客がまっていた。

「あっ……はやてちゃん」

「おー、なのはちゃんにフェイトちゃん。 いま面白いところやで」

面白そうにはやてちゃんが笑いながら指さした先には、お父さんと彼が正座で向かい合う形に座っていた。 距離はおよそ1mくらいだろうか？

「なんで俊がいるの？」

「まあまあ、フェイトちゃんそれはすぐにわかるで。 ほら、そろそろ口にするで。 バカのバカなりに考えたバカな答えが」

はやてちゃんが喋った瞬間、彼はお父さんに向かってこういった。

『俺をミッドにいかせてください』

その言葉は耳を疑うような言葉だった。

☆



俺の前には真剣な表情で威圧感たつぷりの土郎さんが正座で俺と対面していた。正直、めっちゃくちゃ怖い。学校の先生なんかよりも1000倍怖い。

それでも、どうしても、この学校の先生よりも1000倍怖いこの人に言わなければいけないことがあった。伝えなければいけないことがあった。だからこそ、俺はこうして土郎さんを誘ったんだ。俊君。それで、話つてのはなんだい？」

「はい」

心臓の鼓動が嫌になるくらい響いてくる。いまにも口から出そうなほど、吐き出しそうなほど、もう……なんというか心臓が痛い。でも、それでも、それだからこそ、この痛みを抑えて俺は土郎さんに言わなければいけない。

「俺をミッドにいかせてください」

「ミッド……というと、なのは達がこれから行く新天地だね」

「はい。俺も二人についていきたいんです」

その俺の懇願を――

「それはできない、俊君。残念だけどね」

土郎さんは跳ね除けた。それもあっさりと迷うことなく。『なにをいってるんだ、こいつ』とでも言いたげに。

「やっぱり……ダメ……ですか？」

「当たり前だよ。君をそんなところへは行かせることはできない」

「ッ……！ど、どうしてですか？」

「はじめ一との約束で俺は君を頼まれたんだ。そう簡単に頷くことはできないよ」

「で、でも――」

なおも食い下がろうとする俺に、土郎さんは問う。

「では逆に俊君はどうしてそんなにミッドにいきたいんだ？べつに友達がいないわけじゃないだろう。勉強がついていけないということはない。君の成績だって親代

りである俺が確認してるんだからね。それに君は翠屋でバイトだってしてる。大学だって、友人であるアリサちゃんとすずかちや

んが一緒にいるみたいだし、一人で寂しい思いなんてしないはずだ。なのに、どうしてそこまでして君は行きたがる？」

士郎さんの問いはもっともであった。普通に考えてみればそうだろう。バイトもして、友達関係も交友も広い。大学ではアリサとすずかと一緒になつて色々と大学生らしい生活を送ることだってできる。でも——それじゃダメなんだ。そんな「普通」じゃダメなんだ。

「それにミッドは魔法があると聞いた。なのはやフェイトちゃん、それにその他の友人の人たちも魔法があるから行くのだろうか？」

「たしかに……なのはやフェイト、はやてやヴォルケンの皆は自分の力を世界に役立てたい。世界を平和にしたい、という志と信念でミッドに行くみたいです」

「それで？ 君は？ 世界の平和とか、世界の役に立つためにミッドに行くのかい？」

「いえ……それは……その……」

世界の平和。それはとつても素晴らしいことで、できるなら俺もやりたいものだ。なんせそこには親父が見てきた世界が広がってるだろうから。規模は違つかもしれないけど。

でも、俺の力ではそんなことできるはずもない。

だから俺は口ごもる。 士郎さんに言えなくて口ごもる。

「職はあるのかい？ 住む家は？ お金は？ まさか、その全てをなのはやフェイトちゃんに出してもらおうわけじゃないだろう。 だとしたら、それは男として最低の行為だぞ。 俊君」

「なっ、なんとかします！ 職も家も金も！ なんとかしてみせますから！」

「言うは易し行うは難し。 君にそんなことができるのか？ たしか、君は学校からこんな評価を受けているようだね。 『いざというときにはやる男』。 大層な信頼されっぷりだね。 でもな、それは裏を返せば『いざ、というときがくるまでやらない男』なんだよ。

そんな一本竹の橋を渡るような男をどう信じればいいんだ？ 俺は君のことは大抵知っているつもりだ。 でもね——だからこそ、君を

ミッドにやることはできないよ」

「……」

「俺は君には真つ当な人生を歩んでほしいと思っっているし、願っっている。そして望んでいる」

ああ……この人に言っっていることは痛いほどよくわかる。

「なのははたまたま魔法の素質があつて、魔法と出会い、自分の道を決めた」

体の奥底まで士郎さんの心配している声が届いてくる。『君も自分のために人生を歩んでみてはどうだ?』そう聞こえてくる。

「君はたぶん、後悔しているのかもしれない。悔やんでいるのかもしれない。 適当な言葉でなのはの味方をしたことを。でも、俺はそうは思わない。君の言葉がなくとも、なのははこの道を歩むと決めていたはずだ」

いつもいつもそうだった。肝心な時に、ふらつと横にきて俺に助言をしてくれたのはこの人だ。だからこそ、この人はこんなにも心を押し込めて冷徹に機械のように話しているんだろう。

「もう……いいんじゃないか? 誰かのためじゃなく、自分のために生きてみても……いいのではないか? 俊君。誰も君に何も言わないだろう。それに、なのは達は言ったじゃないか。『休みの日や、時間が空いたときは帰ってくる』と。何も離れ離れになるわけじゃないんだ。知っっているだろう? なのはのことは。君が一番よく知っっているはずだ。なのはは約束を破らない。こと、君も関係ある約束ならなおさら。——もう、休んでもいいんじゃないか?」

もう休め

その言葉が俺の体を支配する。

ああ……確かにそれもそうだ。もともと、俺が勝手に決めた誓いと約束なんだから。誰も困ることなんてないじゃないか。そう

——誰も困らない。

いや、一人だけ——困る男がいたな。確かそいつの名前は上矢俊なんていつたっけ? ストーカーのように犯罪者のように執拗に高

町なのはとフェイト・T・ハラオウンに引付く輩だったな。

けどまてよ？ 上矢俊なんて奴は死んだんじゃないか？ 確か小学校に上がるまえに両親の飛行機事故と同じタイピングで死んだだよな。人から人形へと成り下がったんだよな。

いや、思い出した。そんな出来損ないの奴を救ってくれた少女がいたんだ。たしか名前は高町なのはだったような気がする。そいつが上矢俊という人物を立ち上がらせ、背中を押したんだ。けど上矢俊はそれでも道に迷っているかのように、フラフラと亡者のように自分のやるべきことを見つけれないでいた。いや、それが本当に正しいのかわからなかったんだ。そして、そんな上矢俊に答えをくれた少女がいた。それが、フェイト・テスタロッサだったな。そうだ、道を示してくれたんだ。決して迷うことのない道を。フェイト・テスタロッサは示してくれたんだ。

そんな彼女達をみて、俺はどんな想いを抱いたんだっけ？

憧れ？ 羨望？ 嫉妬？ 憎しみ？ 憎悪？ 嫌悪？ 愛？ 羞恥？

彼女達に何を見た？

理想？ 絶望？ 未来？ 過去？ 妄想？ 願望？

彼女達の何が見たい？

悲しみの顔？ 羞恥に悶える顔？ 泣いてる顔？ 恋人のような笑顔？

「士郎さん……。男って、脆い生き物ですね。バカな生き物ですね」

「本当に、自分でも怖いんですけど——あの二人のためなら死んでもいいと思えるんです」

士郎さんの目がキツくなる

「一度は死んだこの身を、絶望の淵に堕ちたこの身を掬い取って、救い上げてくれたのは高町なのはです。死ぬしかなかったときに、人間から人形へと堕ちていくときにその手をしっかりと握ってくれたのが高町なのはなんです。震える背中を、怖くて竦みそうになる足を

手を、そつと握ってくれたのが高町なのはなんです。 あいつは俺に生きる希望をくれました。 だけど俺は、ビビリで臆病で弱虫だから……それでも自分の歩む道が正しいのかわからなかった。 そんなとき、フェイトに会い、進む道をもらいました。 進む道を示してくれました。 なにもできなかった自分に、お荷物だった自分に、あいつはそれでも進む道を示してくれたんです。 あいつだって、大変だったはずなのに」

口が自分の制御下を外れて喋りだす。

「いま、あいつらは前に進もうとしています。 新しい一步を踏み出しています。 本当は……本当は俺もあの中に混ざりたい！ なのはやフェイトやはやての横で肩を並べて歩きたい！ 二人のために戦って、二人を戦闘から守りたい！ その身に降りかかる火の粉を全て払いたい！ 嫌われても！ 疎まれても！ 蔑まれても！ あいつらを守りたい！ ……でも、俺には魔法の才能なんてなかった。

ほんのかすかな使い物にならない魔力しかなかった。 だから俺は、魔法で戦って守ることを諦めた。 それと同時にあいつらの横を歩くのを止めました。 だって、あいつらは前だけ向いて歩いていけばいいから。 その横列に俺がいたら皆心配して前に進むことができないから。 だから俺は一番後ろにすることにしました。 誰よりも後ろの最下位に、誰よりもみんなをみることが出来る最後方に行くことにしました。 悔しくないわけじゃなかった。 泣きたかった。 嘆いたりもした。 どうして俺には魔力がなかったのか。

魔力があつたら、マンガやゲームのような主人公になれたかもしれないのに。 そう思いました。 でも——俺はそんなことよりもなのはとフェイトの笑顔を見たかった。 結局、俺の中にはそれしかなかったんです。 自尊心なんてものは存在しなくて、ただただ、笑顔にしたい、という意味のない醜く自己中心的な答えしか残っていなかったんです。 でも、俺にはそれだけあればよかった、十分だった。

その答えがあれば俺は堂々と自信をもって後ろにいられた。 なのはとフェイトが困ってれば、いつかされたように優しく背中を押して導けるように。 なのはとフェイトが泣きそうなときは、後ろから

叩いて振り向きざまに指をほつぺたに押し付けることができるように。なのはとフェイトが無意識に手を握る動作をすれば必ず握り返すことができるように。なのはとフェイトが膝を抱えてしゃがんだときは、後ろから声をかけることができるように。俺は後ろにしようと言いました」

「なにも、戦って守ることはしなくていいんだ。」

「あいつらのためだったら、神でも悪魔でも魔王でも妖怪でも天使でも女神でも管理局でも相手になります。あいつらがいるなら、なんだってします。できることなら、全てやることができます。ただ

——あいつらのいなくなった世界になんてなんの興味もありません。その時は、1秒でも二人に会えるように舌を噛み千切って死ぬでしょう」

「ああ……こりや士郎さん引いてるな。まあ、そりやそうか。こんな奴、はたからみれば頭のおかしい奴だからな。でも、それでもいい。それだってかまわない。」

「だから宣言しよう。士郎さんの前だけでは素直になれるから——」

「あいつらが死んだときー。俺の命はそこまで構わない!!」

長い長い、俺の独壇場のスピーチが終わる。気持ち悪い、犯罪者予備軍まつしぐら。訴えられたら勝ち目なしのスピーチが終わる。

「士郎さんはなにも言わない。黙ったまま、目をつぶるだけだ。やがて口を開く。その答えは

「やはり許可はできない」

先程と変わらないものだった。

「けど、俺には落胆もなにもなかった。」

「そうですか。だったら俺は——」

「ただし。当人たちからの許可が下りればそれは仕方がないことだ。こちらとしては止めようがないからね」

「……は？」

「せいぜい、頑張るんだぞ。俊君。しっかりな」

士郎さんは謎の言葉を残して、俺の肩を2・3叩くと道場を後にし

た。

そんな中、俺は一人ポツンと残された道場で呟いた。

「…………許可…………下りるわけないじゃん…………」

☆

八神はやてはおもむろに口を開いた。それは関心なのか、感嘆なのか嘲笑なのか落胆なのかわからなかったが、とにかく口を開いた。「自分の恋愛面のことになると、性能とかその他もろもろ一気に落ちていくヘタレキング代表のくせに二人がいないときにはこんなに言えるんやなく…………。まあ、二人ともいたわけなんやけど。それで？　なのはちやんとフェイトちゃんはどうすんの？　まあ、もちろんあいつを連れていくなんて選択肢はないと思うけど——」

こんな気持ち悪い男のストーカー気味で危ない発言をした後で、ついてきていいよ、なんてことはいくらなんでも言わないだろう…………そう思いながら二人のほうを見たのだが、

「ま、まあ…………あそこまでいうなら…………連れて行ってあげてもいいかな？」

「そ、そうだね…………。幼馴染が死ぬのもなんか嫌だしね！」

「そ、そうそう！　私たちのせいで死なれちゃ困るもんね！　うん、これはいわば人命救助だよ！　時空管理局の局員としては当たり前のことだよね！」

「……………………え？」

二人の親友の反応はとても予想外なものだった。

視線はまったく定まっておらず、あちらこちらに目を移し顔は若干先程よりも赤く、手なんか指を絡ませている始末。

どこかよかったのか？　先ほどの男の独りよがりのスピーチのどこが良かったのか？　あいつの気持ちは知っている。だけど、正直言っていてあそこまで言い切ってしまう

と一般人の常人の感覚からすればちよつと引いてしまうわけなのだが…………

「る、留守番の犬くらいはできるだろうしね！」

「そ、そうそう！ 留守番の犬くらいはできるね！ あくまで犬だけど！」

二人はまったく引かずにいた。

どうしてこうなった？

そんなとき、はやての腕をヴィータがちよんちよんとつつく。首をひねるはやてにヴィータは全てをわかっているような顔で言った。

「やっぱり女の子はうれしいもんだぞ。 あそこまで言ってくれると。 若干犯罪チックだけど」

そのヴィータの答えに、はやては首をひねるだけであった。

そして隣で打ち合わせをしてる二人を見て思う。

またミッドでもあいつの世話をすることになるのか……と。

☆

当日、わたしたちは高町家に集まってからミッドに行くことになった。

アリスちゃんにすずかちゃんも駆けつけてくれた。 もつべき者は友達である。

わたし達はそれぞれ言葉を交わしながら、楽しく喋っていた。

その傍らで、彼だけがぎこちない笑みを浮かべていた。

「どうしたの？ 俊くん」

「いや、なんでもないよ。 これからの新天地では大変だろうな……と思つてさ」

確かに彼の言うとおりにこれからとても忙しくなるだろう。 なんせ、仕事と同時進行で家事もしていかなければならないのだから。

けど、それはとつても難しいことで、仕事で疲れたフェイトちゃんとうわたしではできないかもしれない。

「確かに家事は大変だよね。 手だつてただれるだろうし、洗濯だつて毎日しないといけないんだから。 仕事と同時進行はきつそうだね。 ねえ、フェイトちゃん？」



「うん、きつそうだよね」

そばにいたフェイトちゃんが同意する形で頷く。

「でも……しようがないだろ。家事だって洗濯だって誰かがやらな  
いといけないんだからさ。頑張って二人で分担しながらやるしか  
ないだろ」

「えく……でもなんか嫌だー」

「うん、私も家事とかしたくないかな。お仕事だけに専念したい」

「まあ、その気持ちはわかるけど——」

「だから——」

さらになにか言おうとする彼の手をフェイトちゃんと二人、握りし  
めながら言った。

「私達と一緒にきてくれない？」

「……………ほわい？」

「だーからー、一緒にきてもいいよ、ってことー！」

状況を呑み込めてない彼に、私とフェイトちゃんは若干声を大きく  
して言った。

「……ほんとに？ほんとにきてもいいの……？」

「ま、まあ……死なれても困るしね。あくまで死なれたら困るから、  
わたしとフェイトちゃんは連れて行くことにしたんだからね！そ  
こ勘違いしちゃダメだよ！」

「う、うん……」

「絶対だよ？わたしやフェイトちゃんが違う理由で連れていく、な  
んてことありえないからね！」

「お、おう……」

そしてその30分後、私達はミツドの家に行くことになったのだ。  
これが、彼が家にいる理由である。

☆

「なのはママ!? フェイトママ!? タイルにあたまうちつけたらとっ  
てもいたいよ!?!」

「うわああああああああああん！　今まで封印していたわたしの黒歴史がああああ！」

どうしてあのとき、あんな発言をしてしまったのだろうか？　いや、べつに彼が来るのはよかつたのだが……それにしてもあんまりなセリフではなかつたか？　これで

は、まるで――

「わたしは俊くんのこと好き、みたいなことになっちゃうじゃん!?　いま流行のツンデレみたいじゃん?!」

「うー……なんであのとき、もうちよつと考えて発言しなかつたんだろうね……」

あの時、あの場所で、あの場面を見なければ、彼が此処にくることはなかつただろう。いつもはダメダメで、でも極稀に真面目になって、日常的にセクハラ発言するのに、肝心なときには全くといっていほど言ってくれない。魔導師じゃなく、魔法使いの彼。あの場面はいまにもレイジングハートの中に入っている。フェイトちゃんもバルディッシュの中に入れていられない。あんなことを言うてくれた彼だから、わたしもフェイトちゃんもまだ家に置いてあげてるんだよ？　本当なら追い出しているのに。でも――

だからこそ、鼻の下伸ばしてはやてちゃんの誘惑に耐えれなかつた罪は重いよね？



「あ、そろそろお食事会の誘いがあると思って勝手にきました」「うちにたかるのやめてくれないっ!？」

☆

下着を身に着け、衣服をちゃんと着替え、皆が待っている大きな畳部屋へと私達はやってきた。

「おー、なのはちゃんたち。もう出来とるで。あとはこれを並べるだけや」

エプロン姿のはやてちゃんが茶わん蒸しを置いて席につく。

「えくつと、それじゃ私達は——」

周りを見渡す。ウーノさんやスカさん、交番のおじさんにエリオとキヤロ、ヴィータちゃんにシグナムさんにシャマルさんにザフィーラさん。みんな並んで座っており空いてなさそう。

「あ、スカさんだ〜！ わーい！ スカさ〜ん！」

「おお……ヴィヴィオ君。また会うことができうれしいよ……」

「ん〜？ スカさんどうしたの〜？ 元気ないよ〜？」

「いやなに……私が開発に成功した自立型移動ロボットを一管理局員に指一本で壊されるとね……。 やっぱり、科学者として心に傷が……」

「安心しいや。 おじさんは奇人変人が多いここらへんの担当やで？」

戦闘能力もズバ抜けとるで」

「……なら何故、ミッドでおまわりさんなんかを……？」

「逆に考えるんや。 そんな戦闘能力が高い人を配置しないといけな  
いほど、ここらへんの奴らは手強いんよ」

「いったい、私たちの住んでいるここらへんの近隣は魔窟か何かなん  
だろうか。」

まあ、魔窟なんだろうけど。

それはそれとして——

「ねえ、フェイトちゃん。 席が彼の横しか空いてないよ？ ど、どう  
するっ。」

「ま、まあ、行くしかない……よね」

先程自分の黒歴史を思い出したのでかなり恥ずかしかつたのだが……これはしようがない。席が空いてないなら彼の隣に座るしかないわけで、べつに彼なんかどうでもいいけど、しようがない彼の横に座る。

ちょうど、彼を挟んで私とフェイトちゃんが座っている状態だ。

これもしょうがない。わたしとフェイトちゃんが隣になると怪しい噂が飛び交うのでしょうがない。

「よっし！ みんな席についたねー！ それじゃ、かんぱーい！」

『かんぱーい!!』

フェイトちゃんが乾杯の音頭を取ると、みんなもあらかじめ用意されていたグラスを手に取り隣の人なんかとカチンツと合わせていく。

「それじゃ、フェイトちゃんかんぱーい！」

「かんぱーい！」

彼の目の前でフェイトちゃんとグラスを合わせる。彼はずっとキョロキョロと辺りを見回していた。

☆

「あいつはどここのキョロちゃんなんや。いくらなんでもキョロキョロしすぎやで」

「というか、あの人あんなキャラでしたっけ？ キャラがブレブレじゃないですか？ ナックルボール並みにブレてませんか？」

「あいつ真剣真面目な雰囲気だと戦闘力5のゴミになるしな。いつもは53万くらいなのに一気に5になるしな」

「なるほど。銀河の不動産屋から一気にランクダウンしますね」

「高校時代はヘタレキングと呼ばれていた」

「ヘタキンですか。なんか霊とか呼び出せそうですね」

「悪霊くらいしかこんと思うけどな」

三人の動向を見守りながら、ティアと二人で話す。うくん、自分で作ったからかもしれないけど茶わん蒸しがなかなかの美味だ。

「それにしても、ひよつとごさんって料理や家事とか得意なんですよ  
ね?」

「まあなー。 なかなかうまいもんやで」

「それじゃ、その力をなのはさんとフェイトさんのために役立てたい  
から、仕事をしないんですか?」

「いや、面接で全て落とされる」

ティアの顔が歪む。 あいつに限って、そんな美しい話になるわけ  
ないやろ。 第一、家事は午前中に終わらせることができる。 って  
豪語してたのあいつやから、ただ単に仕事先がないだけやな。

「まあ、あいつは『変態的キチガイ病』やからな。 社会もそんなに甘  
くないで」

六課の部隊長が『社会は甘くない』と語ってもそこまで説得力はな  
いのだが。

「ただまあ、なのはちゃんの実家である喫茶店翠屋ではちゃんとバイ  
トしてみたみたいやね」

あれも確か士郎さんがいたからだだった気がする。 なんと  
……あいつは高町家の犬なのではないかと疑いたくなる。

「はあ……色々と可哀そうな人なんですね」  
「とくに頭がな」

☆

隣には、なのはとフェイトが座っている。 先ほどまで風呂にいた  
せいだろう、ほのかに香る石鹸の香りが鼻孔をくすぐってし  
ようがない。

けど、このままでは埒があかない。

「な、なあなのはとフェイト? その……さっきのことなんだけ  
どさ……?」

「ああ、誰かさんが鼻の下伸ばしてたやつ?」  
関係を修復できそうにない。

ここからどうすれば、あの関係に戻れるんだ。

「いや、あれは……だから……アレだよ。誤解なんだ」

「へー、そうなんだ。でも、はやてちゃんみてニヤニヤしてたよね？もしかして、はやてちゃんがタイプなの？」

「それはねえわ」

前のほうからフォークが飛んでくる。だが甘い！それを予測していた俺はすかさず顔をずらし——小さい魔力弾を喰らった。

「おう……おう……!?!」

たまらず顔を押しさえ、土下座の体勢で痛みが引くまでまつ。なんともんぶつけやがるんだ、あのポンポコ女！

「だ、大丈夫!?!」

「だ、大丈夫……。もう、アレだから。全然平気だから。べつに泣いてないよ？俺泣かせたらいしたもんだから。あ、まって、タンマ。そこ、魔力弾を展開させない」

ヴォルケンやスバルやティアなどが魔力弾を展開させていたのでやめさせる。どういう神経してたら俺に魔力弾をぶつけようと思うんだ。

「そういえばさ、この蕎麦1から作ったんでしょ？」

なのはが聞いてくるので

「まあなー」

明後日の方向をみながら返事を返す。

「ふーん」

なのはも力ない返事で返した。

会話終了

これが恋人なんかだと、そのあとに『おいしいよ』なんて言葉があるんだろうけど、そこはほら。あるわけないじゃん？言ってる悲しくなるけど。

ふとみると、なのはとフェイトがもじもじしだした。……もしかしてトイレ？

「あ、二人とも。トイレなら——」

「『その……お蕎麦、おいしいよ』」

「僕の口にかけてください」

また症状が発症した。しかも今回は一人称が俺から僕に変わるというなかなかの力である。

そして二人は、なんだかもう……いますぐにでも俺をぶち殺しそうなほど睨んでいた。

「いや、違うんだ。　　違わないけど違うんだ。　　確かにそういったプレイもしてみたいけど、いまは違うんだ。　　もっと具体的にいうのであれば、トイレを清掃中において二人が漏らすか漏らさないかの瀬戸際を楽しみたい、なんて欲求もあったりするけど違うんだ」

正直、捕まってもおかしくないと思った。

二人は無言で立ち上がった後、立ち去り際にビンタを一発づつかまして、はやてたちの輪の中にはいつていく。

……まあ、悪いのは俺だよな。



### 36. 脱・無職

怒涛のような一年が過ぎ去った——気がする。まあ、実質一か月とちよつとしか過ぎ去ってないわけなんだけど。

俺はいまだに無職を続けている。まあ、俺みたいな人間を雇ってくれる酔狂な人物なんていないだろうからそれはいいんだけど、いま俺の目の前で起こっている出来事を見るならばそろそろ本格的に仕事を見つけなければと思ってきた。

「へー、『幼馴染と結婚！ 二人の純愛に乾杯ッ！』かー。素敵だねー、この二人」

「ほんとだねー。さぞかし素敵な幼馴染だったんだろうね。お金もあつて優しくて甲斐性があつて。やつぱり……幼馴染つてすごいなく。この人、お嫁さんのために一生懸命頑張ったらしいよ」

大好きなのはとフェイトが雑誌をみながらそう呟く。それは本当に二人だけの会話であつて、声量も俺に遠慮してくれているのかとつても小さかつたわけなんだけど、

「が……は……ッ!?!」

無職で金なくてキチガイで甲斐性もない幼馴染には痛恨の一撃だった。即死系の技にもほどがある。

「きゃあー!?! どうしたの、いきなり吐血なんかしてッ!?!」

なのはが駆け寄ってくる。

「いや、ちよつと……いま銀行強盗のプランを練つてて……まっつてね。君たちに素敵なプレゼントを用意するからさー!」

「いやいやいやいやいやっ!?! そのプレゼント絶対に君の保釈金の手紙だからっ!」

あ、捕まったら保釈金払ってくれるんだ。それはそれで嬉しいかぎりです。

「あ、なのは! もう仕事に行く時間だよっ!?!」

「え、ほんとっ!?! それじゃ仕事行ってくるから、捕まっちゃダメだよっ!」

「善処する!」

この会話が世間一般的にみてズレているのは承知である。

「さて、ヴィヴィオ。——つて、ヴィヴィオ〜?」

さつきまで俺が貸したゲームで遊んでいた小さな姫君は、ちよつと目を離れた隙に見失ってしまった。だが、もうそんなことで慌てる俺ではない。

「ヴィヴィオの体から発せられるフェロモンをたどっていけば……」

ヴィヴィオのフェロモンを頼りに庭へと出ると、ヴィヴィオがしがみこんでいた。

「おいヴィヴィオっ!? どうした!? 気分悪くなったのか!?!」

「あー、おにいさん! ほら! なんかネコさんみつけたよー!」

慌てて駆け寄る俺に、こちらを向いたヴィヴィオはお日様のような笑顔を浮かべながら、なにかを俺にみせてきた。それはヌイグルミのようであり、色は白、確かにネコと言われればネコだが、ちよつと違うような気もする。なんだ、これ?

俺がヴィヴィオの手からその物体を受け取ると、

「やあ、キミがこの子の親なのかい? ボクはQべえ。さつそくだけど、この子を魔法少女にしたいんだ。どうか君からも言っただけで——」

「ほおおおおおおおおお おお おお おお おお おおつ、わちやあ——————!!」

渾身の力で、腰を使って、腕にうねりを加えて、喋るネコもどきを庭に叩きつける。

めり込む物体。 喜ぶヴィヴィオ。 冷や汗を流す俺。

やがて額の汗をぬぐった俺は、ヴィヴィオに向き直って目線を合わせながら言った。

「ヴィヴィオ、いまの見なかったことにしよう。 な?」

「え? なんてー?」

「あいつに絡まれると厄介だから。 もう、なんか色々とメンドイことになるからさ」

「はーいー」

ヴィヴィオの聞き分けがよくて本当に助かった。

「ああ、そういえばヴィヴィオ。いまからはやてお姉ちゃんの所に行くぞー」

ちよつと用事ができてしまった。これははやてにしか頼めない用事である。

「えー？ おしごとじゃないのー？」

「大丈夫。 たぶんゲームかパソコンしてるから」

こうして俺とヴィヴィオは、ミッドにあるはやての家に行くことになった。

☆

「はやえもん。 僕に職を恵んでください」

「シヤマル、塩」

「はい」

「まって!? 俺の話聞いてからにして!」

予想通りはやては家でパソコンをしていた。 といっても、なんか書類をしているみたいだったが。 俺はそんなはやての目の前で土下座をしながら職をくださいと叫んでいた。

家の中心で職探しを叫ぶ

まったくもって意味がわからない。

ちなみに俺も親として、ヴィヴィオにこの姿を見られたくないと思いい、ヴィータの部屋で遊ばせている。 あの二人が隣に並ぶと姉妹のようでもとても可愛らしい。 そうヴィータにいたら『きめえんだよ、ロリコンが』と唾を吐かれながらいわれた。 お前の貧弱ボディーには興味ねえよ。

「まあ、とりあえず理由を聞こうか」

はやてがテーブルにヒジをつきながら女王様のように、俺を見下す。

「あの……俺には椅子ないの?」

「ほし〜?」

「うん」

「ほら、ここに空気があるやろ？」

「誰が空気椅子が欲しいといったっ!?」

なんなの、この子。 まじでなんなの。

「まあ、アレだよ。 ほら、俺ってば、シャイボーイじゃん？」

「ヘタレやな」

「シャイボーイね、シャイボーイ。 ジャリボーイでもいいよ。 俺はなのはとフェイトが好きなのよ。 けど、どんなに好きでも言ってるだけじゃダメだと思うんだ。 やっぱり行動したほうがいいと思う。 けど俺には金がない。 はじめは銀行強盗も考えたけど、二人に迷惑はかけたくないんでやっぱり地道にバイトしようと思った。 まあ、モノで釣るのはよくないと思うけど、目に見える形で感謝の気持ちを実現したいんだ。 だからこそ、俺はプレゼントを買って二人のお礼を言いたい」

「ほんで？」

「バイト紹介してください」

はやてが溜息をついた。 後ろにいたシャマルさんも困った顔を浮かべている。 あれ？ 二人ともどうしたんだろうか？

「ま、まあ……少しは成長したみたいですから。 はやてちゃん、ここは協力してあげても」

お、シャマル先生良いこといった！

「うくん……まあ、そうやな。 こいつがバイトをするだけでも海鳴にいる人も私達も少しは安心するか。 よし！ お姉さんが一肌脱いだろ！」

「あ、できるならパンツだけずりおろした状態で、スカートはミニ。 服は下半身が隠れない程度の長さの服を着てくれるとうれしいんだけど——」

「だれが本当に脱ぐっていった！」

はやて、この頃攻撃力上がってない？

ズレた顎を直しながら、そう思わざるおえなかった。

### 37. ゲリピーはエントロピーを凌駕する

「腹が……とてつもなく痛い……」

はやえもんからバイトを紹介してもらおうように頼んでから二日が過ぎた。色々と俺よりもちゃんとした人脈があるはやえもんのことだ。きつと俺がそれなりにサボれてお金がもらえる仕事を探してくれているに違いない。でも、やっぱり一生懸命バイトして沢山金集めたほうがいいかもしれない。

まあ、それはそうとしていまの俺は大変危険な状態である。なにが危険かというと主に腹が危険なことになっている。

それは朝のことだった。

俺が冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注いで飲んでる途中、二階から降りてきたのはが言った。

『あ、その牛乳腐ってたよ。 ヴィヴィオが飲もうとしてたから止めただけ。 もー！ ちゃんとしてよね！ 冷蔵庫の管理、キミの仕事でしょ！』

指を突き付けるのははそれはとてもとても可愛かったのだが、

「いまの俺にはその可愛さを楽しむ余裕が全くないわけで……」

もう30分はトイレにいるような気がする。 このままではトイレのひよつとこさんになってしまう。 七不思議として語り継がれてしまう。

ぐぎゆるるるるるるるるるるるるる

「はうっ!？」

何度目かの余波攻撃がくる。 既に体の中の排出物は全て出したはずなのに、それでもこのじゃじゃ馬は鳴き止んでくれないらしい。

コンコン

「……はい。 ただいま俺が占領しております」

『その……大丈夫?』

「……ああ、フエイトか」

『うん……。 その、朝ごはん私となのは……私一人で作ったから。 お腹が痛くなくなったら食べてね?』

「ああ……ありがとう……」

フェイトの声を聞けただけで少しはよくなった気がする。けど、ちよつと食べれそうにないかな……。いや、でもせつかく作ってくれたんだから食べたいな。でも

なんで自分一人つて言い直したんだろう。まあ、なのははおにぎりに砂糖だから戦力にならないと思うけど。

『それじゃ、私達はお仕事行ってくるからね。……その、がんばつて』

「うん、がんばる……」

応援はとても嬉しいが、場所が場所なだけに顔を覆いたくなる。

なんで俺は普通の場所では応援されねえんだよ。

やがて玄関から二人のそろそろとした声が聞こえ、ヴィヴィオの元気な『いつてらっしやーい!』の声が聞こえた。ヴィヴィオは元気だな。俺の穴は騒ぎすぎて疲れているのに。

どうしたものか……そう思っていると、突然二日前庭に埋めたネコもどきが俺の前に立っていた。いや、しゃがんでいたのほうか正しいかもしれない。

「やあ、奇遇だね。こんなところで会うなんて。ボクとキミとは縁があるような気がするんだ」

「そうか。だったらお前も腐った牛乳飲んでこい」

「というかネコもどきは庭に埋めたはずじゃ?」

「それは遠慮しておくよ。そういえば、キミがボクを埋めたところなんだけど、そのままだと庭が可哀相だからちゃんと元に戻しておいたよ。それでもボクは優しいほうなんだ。なんだったらキミの願いも叶えてあげてもいいんだよ?」

「それじゃ俺の下痢をかわってくれ」

「キミの願いはエントロピーを凌駕したよ」

「ゲリピーはエントロピーを凌駕するのか」

そりゃ学生がもっとも恐怖することだもんな、下痢。

「というか何しにきたんだ? ヴィヴィオやなのはやフェイトに手出したらマジで殺すからな」

「そこは大丈夫だよ。ボクの対象はキミに移ったからね」

それはそれで嫌なだけで。お前にかかわると碌なことにならねえだろ。

「そもそも、ボクは間違っていた。魔法少女だからといって、少女にこだわることにはなかつたんだよ!」

「いや、こだわれよ」

男がやっても意味ねえよ。ゾンビ狩るしかできねえよ。

「だから、ボクはキミと契約を結ぼうと思うんだ!」

「人の話聞いてた?」

我が家の姫様が被害を被るくらいなら俺が被害を被るほうがいいだけどき、トイレの中で叫ぶな。

「はいはい、考えとくよ」

嘘だけど

「それじゃダメなんだ! ボクはいますぐキミと契約しないとダメなんだよっ!」

「えー……なんでそんなに焦ってるの?」

俺の問いにネコもどきは、首を項垂れながら小さくボソボソと喋りだした。

「ボクの先輩にケルベロスのケロちゃん先輩っていう人(?)がいるんだ……。ケロちゃん先輩はとってもエリートですぐに魔法少女と契約して、大活躍。それに比べてボクは「紙とって」はいどうぞ。

それに比べてボクは、まったく違う魔法少女とばかり契約して……ついにケロちゃん先輩に怒られちゃってさ……。だからボクは決めたんだ。ケロちゃん先輩を超えるために旅に出ることにした!そしてボクはキミにたどり着いたんだ!」

「大丈夫大丈夫。それただの通過点だから、本当の終着点に案内してやるよ」

「ほんとうっ!?!」

尻を拭き、流して手を洗いトイレから出る。ただいま、そしてただいま。

「さて、お前が目指した終着点につれてってやるよ」

俺はネコもどきを抱き上げながら、ヴィヴィオとともに家を出た。

☆

フエイトの手作り朝食を食べた俺は、ヴィヴィオと手をつなぎながらとある店にやってきた。

「猫井兎ねこらうとぎさん。珍しい動物つれてきましたよ」

「あら、いつもいつもありがとうとおねえ、ひよつとこくん。あら、この娘が噂の女の子?」

「こんにちは! ヴィヴィオです!」

「えらいわねえ〜! あいさつできるなんて! なのはちゃんとフエイトちゃんフエイトちゃんの教育の賜物ね!」

緑髪をドリル風にし、年もそろそろ三十路まじかなのにもかわからず、ふりふりピンクのスカートを履いているこの女性。この人の名前は猫井兎さん。ミッドでペットシヨップを営んでいる。猫のお姉さんの愛称で親しまれている(小さい子たちから)。

俺は抱き上げていたネコもどきを猫井さんに預けることに。

「ほら、ここがお前の終着点だ。あ、猫井さん。こいつは非売品のしといてくださいね」

「あら? そうなのねえ。わかったわね」

まあ、誰かが間違つて買うと大変だしな。

「ねえねえ! ヴィヴィオ、いぬさんいぬさんさわりたい!」

ジャンプするヴィヴィオの頭をよしよしと撫で、俺はそのままヴィヴィオと犬と戯れることにした。

『ちよつとまつてつ!? このままじゃ、ケロちゃん先輩に怒られるよっ!』

知らねえよ。



### 38. ラブホテル・性王教会

はやえもんからバイト紹介の電話がついにきた。流石ははやえもん、頼んで5日目にはもうみつ付けてくれたみたいだ。やはりもつべきものは友達だな。

だが、ここでひとつだけ問題ができてきた。端的にいうのであれば、はやえもんが紹介してくれたバイトの名前がありえないほどに、100%の確率で、18歳未満禁止の場所であった。

むしろ俺は何故、どうして、どのようにして、はやえもんがこの場所に接点をもち、この場所を用意したのか気になるところであった。もしも、それ相応の理由があるとするのなら俺ははやえもんを更生させなければならぬ。

一度深呼吸して、携帯に届いたメールをみる。

「……」

うん、やはり何度読んでも――

『バイト場所決まったで。性王教会や』

ラブホテルじゃねえか。



ミツドの道をバイクで飛ばす。性王教会の場所はミツドの北部にあるらしく、歩いていくにはちよつと遠い場所である。ちなみに今回は俺一人。

流石にヴィヴィオをラブホテルなんかには連れていけないし、そもそも俺がそんなところでバイトなんかできるはずもなく（なのはとフェイトの二人が怖い）はやえもんには悪いのだが、今回のバイト紹介は断るろうと思ひ、バイクを飛ばしているところである。いやはやしかし……はやえもんのことにも気になるのでやはりどうしたものか……。

そんなことを思いながら飛ばしていくと、なんとも緑溢れる自然のいい場所についた。 možy、性王教会は野外プレイが一番人気なの

かもしれない。

「……いや、でも……これ……ラブホテルっぽくはないよな……」

目の前には普通に教会が建ってあった。もしかこれもカモフラージュの偽造工作なのか？ ミッドの変態たちはどこまでエロに正直なんだ。だが、ここまで教会っぽいと――

「あ、あなたが騎士はやての紹介できたひよつとこさんですね。はじめまして、私はシャツハ・ヌエラと申します」

「マップ・ヌーブラとは流石ラブホテルですね。もうなんか、エロトークが当たり前ですよ、って感じですね」

マップさんが青筋を立てて笑顔を浮かべている。もしか、この人はただの受付嬢だったのか？ いや、普通に考えて受付嬢だよな。

いかんいかん、謝らなければ。

「すいません、マップ・ヌーブラさん。まだマップにもなっていないのに……挨拶なんかしちゃって……」

「どんな謝り方なんですかつ!? 私はシャツハです！ マップではありません！」

「え？ でも、ここってラブホテルじゃ……?」

「……は?」

どうやら、俺とこの人ではかなりのズレが生じているらしい。

「いや、だって、はやてから『性王教会』だと教えられたんですが……」

「ええ、此処は『聖王教会』ですよ？ 騎士はやてからも、あなたが来ることを聞いております」

うん、だよな。 やっぱり、性王教会だよな。

「ちなみに、はやえもんいます?」

「騎士はやてですか？ ええ、あなたを待っていますよ」

「部屋の番号を教えてください」

「え?」

「え?」

俺の言葉にマップさん改めシャツハさんが困惑したような顔を浮かべる。正直、困惑しているのはこっちも同じだった。

友人である八神はやてがこんなラブホテルの人達とも知り合いで、あげくの果てには部屋で俺のことを待っているだなんて。いや、後半にかけては最高なんですけど。ほら、なのはとフェイトが怒るかもしれないじゃん。というか、確実に追い出されるんだよね。

「まあ、とりあえず二人が待つ部屋へといきましょうか」

マツパさんが俺の手を引いて、性王教会へと入っていく。

いきなり30とは……。俺のカルピスが枯れなきやいいけど。

☆

「騙しやがったな!? レズ女!」

「いや、レズやないし。騙してもないし。ちゃんと聖王教会って送ったやろ」

マツパさんと廊下を歩き、たどり着いた先は他の部屋の扉よりも一層綺麗な扉であった。こんなところではやてが待ってるのか。

などなど思いながら、男として女を悲しませちやいけないという義務もあり、ズボンをおろした状態で扉を開くと——なんか見知らぬ人とはやてが普通に楽しく談笑していた。

裸とかじゃなくて私服で。テーブルには紅茶をクツキーを置きながら。なんかエロイ雰囲気なんて微塵もない状態であった。

そんな中、はやえもんは見知らぬ女性よりも一足先に俺に気付き「なにしてんの?」

そう冷ややかな目で聞いてきた。

「いや……あの……ここ、アレだろ? バイト先なんだろう? 性王教会なんだよな?」

「そうやで、此処があんたのバイト先の聖王教会や」

「なんか教会っぽいよな。ベットもないし」

「は? だって、教会やで? それに此処にベットとか意味わからんやろ」

普通に考えればそうなんだけど、なんせ此処はラブホテル。そのラブホテルという枠組みからとらえればこの様子のほうがおかしい

光景ではないのだろうか？

はやえもんとテーブルを挟んで座っている金髪の女性に目をやる。  
なんだかおっとりとしていて the・お姉さんという感じである。  
まさに教会で賛美歌なんか歌っていきそうだ。ただまあ、こんな人でもラブホテルにいるのだから世の中とはなかなかどうして……わからないものである。（こんなでたらめな嘘を並べている俺が言えた義理じゃないけれど。）

「……はやえもん、一つ聞いてもいい？」

そろそろ、なんとなくだけでも、此処がもしかしたらラブホテルじゃないということ懸念がでてきた。ので、早速頼れる女、はやえもんに聞くことに。

「此処、ラブホテルじゃないの？」

そして、あのセリフへとつながるのである。



「ごめんなく。なんかわたしとコレとでちよつとした手違いがあったみたいや」

「いえ……それはいいのですが……あの人、大丈夫なんですか？」

「まあ、頭は大丈夫やないけど。そこそこ使えると思うで」

正座しながら二人の話を聞く。はやえもんの話によると、性王教会の誤字は単なる打ち間違いらしい。お前はそもそも日常生活でそんなにメールに性を打つのか。と聞きたくはなるのだが……まあ、あいつのことだから日常生活で使っているだろう。主にヴォルケンに向かって。

「えつと、ひよつとこさんですね。はやてから話は聞いているのですが、なんでも幼馴染にプレゼントを渡したい……とのことです」

「ええそうなんですよ。なのはとフェイトとって言うんですけど、これがもうめちやくちや可愛くて、なのはなんて鯉の中の鯉なんですよ。いわゆる鯉の王様なんですよ。いや、最近進化したので竜に

なりましたね。それにフエイトなんですけど、これがまた可愛くつて、もうなんというか嫁にしたい女性No. 1に輝くと個人的に思ってますよ」

「それで、此処にバイトにきたんですね？」

「はい。けど、すっかりラブホテルと思つてまして……その、本当は断るつもりで来たんですよ」

「あははっ……。ら、ラブホテル……ですか」

女性が冷や汗を流しながら笑う。まあ、たしかにちゃんとした教会がラブホテルなんて思われてたらたまつたもんじゃないよな。そんなたまつたもんじゃないことを、いま俺はさらりとぶちまけたわけだけど。

「え〜つと……それじゃ、どうします？　はやての紹介ですから、私達のほうはあなたを受け入れる体制はできているのですが」

なんともまあ、これはありがたい。ラブホテルなんて誤解していた男を受け入れてくれるなんて。

だがここで俺はある問題に直面した。

ヴィヴィオ……どうしようか。

いや、誰かに預けるって選択もないことはないが……う〜ん。なによりヴィヴィオの姿をみれないのが俺の心に多大なダメージを与えるわけだし。

「すみません。ちよつとしたお願いがあるのですが……」

そろりそろり……といった感じで手をあげる。いやはや、どういえばいいものか。

「はい？　なんですか？」

女性は優しい笑みで、教師の真似事のように指をさしてくる。

「えつと——バイトに娘を同伴させてもよろしいでしょうか？」  
女性の笑みが消えた瞬間であつた。

### 39. バイト一回目

『ふむふむ……ひよつとこ君がついにバイトか。なんかさみしくなるね』

「アンタは俺の父親か」

『まあ、同士であることにはかわりないがね。それはともかく、ヴィオ君はどうするのだい？ 私は君が無職で暇人だとばかり思っていたので、バイトをされるとヴィヴィオ君の面倒をみてくれる者が……』

「ああ、そのことなんだけどき。バイト先の人がヴィヴィオも同伴していいよって許可くれたんだ。ほんと、話がわかる人だよな〜」  
まあ、これもどれもなにもかもはやえもんのお陰なんだけどな。

アイツにはいつかちゃんとお礼でもしようかな  
さてさて、現在の時刻は午前9時。

愛する二人も仕事という名の遊びに行き、愛しのヴィヴィオは隣でアニメを鑑賞中。アニメの中身は、頭にアンパンのつけたパンが自分の自己犠牲精神で自分の顔を引き千切りながらそれを他人食わせるという残酷な話だ。訂正、正義の英雄アンパンマンが人間の敵であるバイキンの親玉を倒すアニメである。

俺も小さい頃になのはと二人で見たのを覚えている。そしてなのはが俺に向かってアンパンチしたのも覚えている。あいつは忘れていたかもしれないが、俺はいつまでも覚えているからな。

そして俺はというと、そんなアニメをヴィヴィオがみている横でスカさんと携帯でお喋り中。友達っていいな。

『ほう……ヴィヴィオ君も同伴していいところか。中々に緩い規制などところであるね。……面白い、私も同席しよう』

「いや……俺バイトしにいくんだってば。マジで人生かけてるんだって。遊びにいくわけじゃないんだよ?」

『無論、ひよつとこ君の邪魔はしないよ。私はヴィヴィオ君と遊んでおくからね』

ただ遊びたいだけじゃねえか。

性王教会改め聖王教会。これが俺のバイト先である。ミツドの北部に位置しており、昨日の説明によると次元世界でも最大規模の宗教らしい。そして『聖王教会』とあるように、なんでも『聖王』と呼ばれていた人物が実在するらしい。キリストみたいな感じだろうか？ にはともあれ、この聖王教会、何故そこまで次元世界最大規模の宗派にまで発展したかという点、ひとえに規制が緩い……というのが挙げられている。

確かに宗教に属している身でありながら、規制が緩いつてのはいいよな。そしてこの聖王教会。管理局とも良好な関係を築いているらしく、たびたび管理局の局員が教会へと足を運びにくるみたいだ。ほとんどはやえもんの受け売りだけだ。

「さて……準備はいいかヴィヴィオ。バイト先、いわば俺の命を握っている人なんだから間違っても怒らせちゃダメだぞ？」

「うん！」

「スカさんも大丈夫？」

『ふむ……ここが聖王教会か……。ちようどシスター服を生で見たいと思っていたのだよ！ あわよくば！ 私は修道服を持ち帰るぞー！』

「まあ、持ち帰るのは勝手だが、後でウーノさんと謝りこいよ」

三回転半ひねりで教会へと逝くスカさんを見送って、俺はヴィヴィオと手をつなぎながら、店長ともいえる方。カリムさんの所へ向かった。

『すいません、そこの方。ちよつと、裏のほうでお話しを伺っても？』

スカさんは兵士に連れられてその場を後にした。

三回転半ひねりで教会へ向かうという奇行を見過ごすはずがねえよな。

「あの……えっ……!? ちよっ……!? えっ……!? ひよっとこさんの仰っていた娘さんってこの娘なんですか……?」

「ええ、そうですよ。 フェイトとの間に出来た子どもなんですよ。 ヴィヴィオ?」

「ちがうよー」

この頃ヴィヴィオが俺の言うことを聞いてくれなくなってきた。これが噂の反抗期というやつか……! なのはとフェイトもすっかりとヴィヴィオを教育しているようで安心である。

ヴィヴィオは俺の手を離れ、金髪にヘッドバンドをしているカリムさんの所までトコトコと歩いていくと、

「こんにちは! ヴィヴィオです! おにいさんがお世話になります!」

と、丁寧なお辞儀とあいさつを述べた。 ……なんだろう。 年上として立つ立場がなくなってきたのだが……。 なのはとフェイトはちよっとならヴィヴィオに真面目に教育をさせすぎているようになってきた。 これでは俺の家での居場所がなくなってしまう。

カリムさんは、頬をヒクつかせながら、けれども大人の対応で歌のお姉さんを彷彿とさせる笑顔を浮かべて

「こんにちは、カリム・グラシアです。 こちらこそ、お兄さんをお世話しますね」

なんだか会話がおかしいような気がする。 まるで俺がペットのようだ。 ところでカリムさんってガンダムにはのつてないのかな? 教会の地下にガンダムがあったり。 でもイギリス代表候補生のようにもあるし……俺はいったいどうすればいいのか?

「そういえば、カリムさん」

「はい?」

「カリムさんって、ガンダムパイロットとかイギリス代表候補生とかにはならないんですか?」

「……えっ」



引かれた。 思いつきり引かれた。 具体的に言うならば、3歩後  
ずさりするほどの引かれっぷりである。 これが惹かれっぷりなら  
ば俺はハーレム主人公になれたのに。

「ところでカリムさん。 ヴィヴィオをみて驚いていましたが、どう  
したんですか？ もしかして生き別れの妹とか？ それとも、誰かと  
の子ども——」

「ひよつとごさん。 そういった冗談は命を短くするので気を付けた  
ほうがいいですよ？」

「すいません、マツパさん……。 全力を尽くします、セクハラの」  
「いやいやいやっ!? 方向が間違ってますよっ!? それに私はシャツ  
ハです！」

後ろから暗殺者よろしく俺の咽喉元にナイフを置いたマツパさん  
に、若干かすれた声で返事をする。 マツパさんはわかってくれたの  
か、ナイフを仕舞いながらも律儀に突っこみまでしてくれた。 なに  
この職場。 面白い。

マツパさんと遊んでいると、ヴィヴィオに目を向けていたカリムさ  
んがこちらに目を向けていた。 それも真剣な表情で。

「……ひよつとごさん。 この娘は、大丈夫ですか？」

「えーつと……質問が質問になってないみたいなんですけど。 そ  
の、どういうことですか？」

頭のほうなら大丈夫だと確信している。 俺の頭は既に終わって  
いると確信している。 なんとも嫌な確信であるが。

「ですから……とにかく！ 大丈夫なんですか！」

「……え？ なんで俺が怒られるの？ か、どうかはともかくとし  
て、どうやらカリムさんはヴィヴィオのことが心配らしい。 確かに  
その心配はもつともだと思おう。 なんせ連れてきたのが俺なんだか  
ら。」

これがなのはやフェイトが連れてきたんなら安心して任せること  
ができると思うんだけどね。

「安心してください。 ヴィヴィオは大丈夫ですよ。 こいつの笑顔  
をみれば一発でわかると思います」

俺がそういうと、カリムさんは一度ヴィヴィオをみた後に何か呟いた。その声はまるで自分に言い聞かせるようで、まったくこちらまで声が届かなかったが、読唇術を心得ている俺にはわかる。カリムさんはこういったはずだ。

『……トイレしたい』

カリムさんはどれだけ我慢していたんだろう。あまり溜め込むのもよくないのだが、これは女性のデリケートな問題だ。深くは追及しないでおこう。六課の面々の場合、話は変わってくるのだが。とくにいつもツンツンしているロヴィータ辺りに、『も、もう……漏れそうなんだけど……』とか言わせて、それでもトイレに行かさないで置くとどんな表情を浮かべるのかとても見物である。

#### 閑話休題

「それでカリムさん。俺の仕事ってなんですか？　あまりできそうなおことがあるとは思えないのですが……。それこそ、修道服を直すとかシスターをミスターに変えるとか。チップスターに変えるとかできないんですよね」

「女性を男性やお菓子に変えないでください。　　というかそれできたら人間の域超えてますよね？」

「いつから俺が人間だと錯覚していた？」

「なん……ですって……!?!」

「カリムさん。死神バトルマンガ読んでるんですか」

「いやっ、これはその……!?!　えっと、私は教会から週3の割合でしか外へ出られなくて……」

「結構出てますよ、それ」

「その……ほとんど……マンガを買いにいくんですよ」

「照れられても困るんですが」

「いいのか、聖王教会。　　トップが週3の割合でマンガ買いにいつてるぞ！　お前らそれでいいのかっ!?!」

#### 閑話休題

「それで、仕事のお話に戻りますが。　　ひよっところさんには聖王教会の清掃をやってもらおうとおもいます」

「あ、俺でもできそうな簡単なお仕事ですね」

「終わったらシャツハが順々に見ていく予定となっております」

まあ、軽い検査くらいならどうとうという事は――

「なお、シャツハの確認方法は顕微鏡を使つての検査となります」

「なにその検査?!? どう足搔いても絶望じゃねえかつ?!?」

鬼姑もビツクリだよ。

「ええ冗談です。 姑のように血眼になってホコリを探すだけですから」

「はっはっは、カリムさんも冗談がうまいですね〜!」

「……………」

「か、カリム……………さん?」

「……………え、ええ。 もちろん、冗談ですよ……………」

「だったらなんで顔を背けるんですかつ?!?」

☆

さて、ここからが俺のバイト一回目である。 ヴィヴィオが来てからひよつとこのお面は極力つけないようにしていたのだが、いざつけてみるとやはり落ち着く。 さかなクンがさかなを乗せているのが正装であるように、俺の正装はひよつとこのお面のようだ。 なんとなく安心する。

「それではひよつとこさん。 今日には廊下の掃除をしてもらいます」

「まあそれはいいんですけど…………… ヴィヴィオ? カリムさんと一緒にまってるんじゃないかな?」

「いや〜! ヴィヴィオもあそびたい〜!」

遊びじゃないんだけど……………

「ヴィヴィオ? お兄さんはこれからお仕事しないといけないんですよ。 スカさんみたいに三回転半ひねりとかして遊んでる場合じゃないの」

……………そういえば三回転半ひねりして華麗な退場を決めたスカさんは今頃何をしているんだろうか。 ウーノさんが溜息を吐いている

光景が目には浮かぶ。

「おしごとお？　どんなおしごとするのー？」

「お掃除だよ、お掃除」

「おそうじするの？　ヴィヴィオもする！」

「だめ」

「あう……」

両手を上げて、“掃除するアピール”をするヴィヴィオ。　俺はそんなヴィヴィオのなんとも健気で可愛らしい要望を却下することに。

却下されたヴィヴィオは、上げていた両手をゆつくりとおろし、目に涙をためながら俺の方を見つめる。　目が物語っている。

『だめ？』

と。　小さい女の子の、それもなのはとフェイトと同じくらい可愛いヴィヴィオの頼みは俺だって領きたいところであるが……それはいくらなんでも都合が良すぎる。　これがミッドの知り合いの店ならどうとでもなるのだが。

ヴィヴィオの同じ目線まで膝を折り、ゆつくりと喋ることに。　なのはやフェイトのようにゆつくりと優しく話しかけることを心掛けて。

「あのな、ヴィヴィオ。　お兄さんはいまからバイトをすんだよ。

此処を一生懸命お掃除して、その報酬をしてお金をもらうんだ。

ここまではわかるか？」

「うん……」

「よっし。　それで、お兄さんはいまから一生懸命バイトすることになったんだ。　だから、ヴィヴィオがいると——」

「……ヴィヴィオ……じゃまなの……？」

「——ヴィヴィオも一緒にお掃除するか？」

「うん！　ヴィヴィオもする！」

たまにはヴィヴィオと一緒に掃除するのもいいよな。　うん、べつにヴィヴィオが泣きそうだからとかの理由じゃないから。　ただ、ちよつとだけヴィヴィオと掃除したくなつたんだ。

喜ぶヴィヴィオの頭を撫で、マツパさんと向き合う。

「え〜つと……その……ヴィヴィオもよろしいですか？」

「ええ、かまいませんよ」

マツパさんはとても慈愛に満ちた、まるで自分の子どもの成長を喜ぶ母親のような笑顔でこちらをみていた。

「ははっ……。 すいません」

「ふふっ、よく懐いているようですね」

「そりや家族ですから」

家族。 改めて口に出すと、なんともこっぴどく思えてきて頬が若干赤くなる。

「おにいさん、おかおまつかだよ？ どうしたの？」

「なんでもないよ。 ほら、ヴィヴィオもお掃除するんならこのメイド服に着替えておいで」

「はーい！」

トタトタとメイド服をもって手近な部屋へ入るヴィヴィオ。

「……あの、どうしてメイド服が懐から出てきたんですか……？」

「それは聞かないお約束ですよ」

☆

さてさて、ヴィヴィオも私服からメイド服へとメタモルフオーゼして、ついに俺らは本当に清掃をはじめた。 といっても、仕事自体はなかなかシンプルでありモップで床を往復したり、箒でゴミを掃くくらいなものである。 ヴィヴィオもこの作業にすぐに慣れ——そして飽きた。

「おにいさん、あそぼー！」

「だーめ。 ここを終わらすのが先だ」

「うー！」

俺の足をぼかぼかと叩くヴィヴィオ。 はっはっは、かわゆいやつめ。

それにしても、ヴィヴィオはあっさり飽きてしまった。 個人的にはもうちよつとだけでもつと思っていたのだが……やつぱり子ども

だなく、なんて実感させられる。

そういう俺もこう単調な作業ばかりだと飽きがくる。掃除も6割ほど終わったのでここらでヴィヴィオで遊ぶことにしよう。

「まあ、確かにこう単調作業だと飽きがくるな」

「えっ!? それじゃあそぶの!」

「でも、何して遊ぶ? 二人だからしりとりとかしかできないぞ?」

「うん! いいよー!」

「それじゃあ……リンゴ」

「えーつと、えーつと……ゴミむし!」

「……し、しまうま」

「えーつと、マダオ!」

「……お酢」

「スチールかんのようにかかるいおとこ!」

「……こ、コアラ」

「らしくてせいかつしているヒモおとこ!」

「ちよつとまってヴィヴィオ。そんな言葉の数々をどこで覚えてきたの?」

おかしい。色々とおかしい。具体的に言うと、ヴィヴィオがこんな言葉を覚えているのがおかしい。誰だ、愛しいヴィヴィオにこんな言葉を教えたのは。

そんな俺の胸の内を知ってか知らずか、ヴィヴィオは笑顔でこう答えた。

「えつとね! なのはママとフェイトママ! ぜんぶおにいさんなんだって!」

「へー……そうなのか……。なのはとフェイトがねー……」

あの二人が普段俺のことをどう思っているのかがわかる有効な時間であった。

☆

バイト始まりから3時間。

指定された場所の掃除が終わったわ

けどが……やはりここは好感度upをはかって他の場所もしたほうがいいかな？

なんてことを思いながら、ヴィヴィオと二人床に座って頭をひねりながら考えていると、コツンコツンと床を鳴らしながらマップパさんがやってきた。

「ども、マップパさん。とりあえず指定された場所は終わりましたよ」「シャツハです。今度間違えたら首折りますよ。それにしても、結構お早いんですね。普通はもう少しかかるはずなんですけど……」

「俺は普通じゃないですしね。それに掃除なら毎日家でやっていますし。そこそこ自信はありますよ」

「ふむ……どれどれ」

俺の話を聞いたマップパさんは、床に正座で座りハチミチを壺から取るように指で床をなぞる。ちよつとだけエロスを感じる。

指でなぞったマップパさんは、その指をじっくりと見て

「うん！ これならこれから掃除を頼んでも大丈夫そうですね！」

と、許しをくれた。よかった、顕微鏡で見られなくて。

「ヴィヴィオもがんばったよー！ えへへ、えらい〜？」

「ええ、とつてもえらいですよ！ よく頑張りました！ あ、お礼にアメあげます」

「わーい！ みてみて、おにいさん！ アメもらったよー！」

「よかったな。ちゃんとお礼いうんだぞ」

俺の言葉に頷いて、ヴィヴィオはマップパさんに頭を下げる。マップパさんはそんなヴィヴィオの行動が可愛くてしようがないのか、執拗に頭を撫でる。……俺も息子

も執拗過多で撫でてほしいものだ。

「あ、ひよつとごさん。昨日の部屋にきてください。そこでお話しがあるようですから」

マップパさんに連れられてまたしてもカリムさんのところに行くことに。

コンコンとノックしてカリムさんの返事をまつ。

『あ、はい。 ひよつとごさんですね。 どうぞ入ってきてください』  
「いつから俺がひよつとごだと錯覚していた」

「なん……ですって……?!」

いつまでやるんだ、このくだり。

「そういえば、ひよつとごさん、ひよつとごのお面つけてますね。 似合ってますよ」

「お面に似合ってるものにもあるんですか？ でも——カリムさんのような綺麗な人に言われると、嬉しいですね。 カリムさんも似合ってますよ。 その金髪に綺麗なド

レス。 まるで有象無象のゴミの山から出てきたまばゆい光を放つダイヤのようだ」

「そ、そんな……。 もう……照れちゃいます。 でも、そう言ってもらえたのははじめてで……。 あ、あれ？ やだ、私ったら顔が熱く……」

「可愛い人だ」

「あつ……。ダメ……。！」

「楽しいですか？ ひよつとごさん」

「それはもう」

「……辛くなったら、いつでも此処に来てくださいね。 私はあなたの味方ですから」

幼子を抱くようにカリムさんに抱かれた。 味方を得たと同時に何かを失った気がしないでもない。 もとからそこまでもってないんですけどね。 それにしてもカリム

さんはとてもいい匂いがする。 なのはやフェイトほどではないが、クラクラと脳を犯すような刺激をうける。 夜に会ったら暴走するかもしれない。

「ところで、俺に何の用ですか？」



いつまでたつてもカリムさんは俺を抱きしめてそうなので要件を聞くことに。

カリムさんは、ハツと何かに気付いたように俺から離れた。……  
おいしいことをした。あと一秒ほど時間があれば完全に完璧にカリムさんの匂いとサイズをインプットできたのに。

「そうそう、ひよつとこさん。あなたの給料のことでお呼びしたのです」

「ああ、確かに給料のことは大切ですよ。俺もこれはシビアにいいかないと」

まあ、俺がシビアになったところで何も意味はないわけだけだが。カリムさんは頷いて、指を一本たてた。

「これでどうでしょう？ 一応、はやてとは月一の契約なんですけど」  
はやては俺のマネージャーか何かなのか？

「一万ですか。無理を承知でお願いしたいのですが、せめて五万に——」

「あ、いえ。十万という意味ですよ？」

「結婚しよう、カリムさん」

「お断りします」

カリムさんはビックリの早さで即答した。もう少し具体的に言うのなら、「結婚」という単語が出てきた瞬間にカリムさんは「お断りします」と言い放った。実質、俺が言い終わると一緒のタイミングでカリムさんも言い終わった形だ。そこまでして俺と結婚したくないんですね。

まあそれはおいといて、

「週何で働けばいいんですか？ 基本的に午後からならあいてますけど」

午前中に家事を終わらせて、午後からバイトなら問題ない。

「そうですねえ……一応、週4〜5を予定しています。全部平日で」

「まあ、月10万ならそれくらいしなさいといけませんよね」

勤務時間的にそれでも足りないくらいなんだけど。

「内容は今日やつてもらったのと変わりません。基本的に掃除で、あとは細々とした誰にでもできる雑用をやってもらいますね」

「わかりました」

カリムさんの言葉に頷く。掃除と雑務なら俺でもできるし、これで月10万ならそこそこの貴金属だって買える。ヴィヴィオにだって何か買ってあげたいし、これから頑張るか。

そのあとは、俺とカリムさんで取り留めもないアニメや漫画の話をしてヴィヴィオと二人で教会を後にした。

その途中――

「あ、ウーノさん。スカさんの引き取りですか？」

「ええ。まったく……あの人は何がしたいんだが」

「発明のストレスでもたまってるんじゃないですか？」

「あー……確かにありそうですね」

苦笑するウーノさんに一礼して、俺とヴィヴィオは今度こそ教会を後にしたのだった。

## 40. おっさん、事件です！

バイトをはじめてから一週間が経った。仕事にも慣れ（といっても掃除なので、慣れるもないのだが）聖王教会の人達ともコンタクトを取る機会が増えたりと、順風満帆とんとん拍子で仕事場との距離も詰めることとなった。

中でもマツパさんとカリムさんはヴィヴィオの面倒をよくみてくれ、なおかつヴィヴィオもそれに嫌がることなく逆に嬉しそうに遊んだりしているので、俺としても仕事に集中できた。二人には本当に感謝しっぱなしである。

現在俺は聖王教会の図書室にいる。いや、流石に図書室というと幼稚になるから……書庫とでも言い換えようか。広さとしては学校の図書室と大差ないし、書庫と呼べるほどのものではないのだが。しかしながら聖王教会だけあって扱っているものが違いすぎる。ざっと見た感じ、古代ベルカのことについての古文書なんか沢山あった。

今日の俺の仕事はその古文書やらなんやらのホコリをとったり、渡された紙のとおりになを並べていたり……と、あんがい簡単なことものである。ちなみにヴィヴィオは小さなテーブルで家から持ってきたマンガ（俺のものである）を一生懸命読んでいる。（その隣にはヴォルケンで一番まともかもしれない人がいるので安心だ）読書をするのはいいことだ。それがマンガであろうと、かわらない。そう思いたいものだね。

まあ、それはいいとして――

「どうしてお前がいるんだよっ！ 仕事はどうした、仕事はっ!？」

「大丈夫。わたしの部下たちは優秀やからな。そして六課の仕事もそこまでないし」

「それが異常なんだよっ！ なんでお前ら仕事ないのっ!？」

「う〜ん……萌え担当やからかな？」

「……前から思ってたけど、お前ら異常だよな。 並行世界のおまえらブチキレルぞ」

「戦いとか面倒やで。 アンタもよく言ってたたる? 『戦うこと自体が何かを失うことだからダメ』だって」

「……そんなこと言ったかな?」

「言ったで」

最近物忘れが激しくて覚えていない。 うくん……言ったような気がしないでもない。 ……いや、やっぱいってねえよ。

この会話からもわかるように、俺の前には、いや『前』というのは正しくないな。 俺の『横』には親友である八神はやてと一緒になつて本の整理を行っていた。

「それでバイト開始から一週間やけど、どんな感じなん?」

「どんな感じっていわれてもなあ……。 まあ、好感触ではあると思うよ。 ミスもしてないし、ヘマもしてないし」

「変態行動は?」

「したいけどマップさんがナイフでチラチラと脅してくるので行動できねえ」

「ダウト」

「正解」

流石はやて。 あっさり俺の嘘を見抜いてくるな。

はやてはやれやれ……。と言わんばかりに肩をすくめ、

「アンタがナイフくらいでビビるわけないやろ。 大方、給料に響くから、なんてことを考えているとみただ」

「大正解。 とりあえず最初の一か月間はおとなしくしておくよ」

バイトの場合、本当ははじめの一か月間は給料が出ないのだが……。 カリムさんの好意とはやえもんの尽力で、一か月間働けばすぐに給料がでることになった。 まあ、

あくまで一か月間続いた場合なんだけど……。流石の俺でも一か月間くらいは余裕である。

「それにしてもがんばるな。 三日くらいで終わると思っていたんやけど……」

はやては少しだけ意地悪そうな顔でこちらを見る。

確かに普段の俺なら、そうなんだけど……

「はやえもんが俺のために折角セットしてくれたバイトだからな。ここでクビなんてことになったら、俺はお前に顔向けできないし、お前もお前で立場が悪くなるだろう?」

俺のせいではやての立場が悪くなるのはいただけない。こいつは俺と違って管理局員なわけだし、下手したら管理局の信用も若干ながら落ちるかもしれない。それだけはなんとしてでも避けたいしな。あそこには、なのは・フェイト・はやて・ヴォルケン・嬢ちゃん・スバル・エリオ・キャロ・ユーノ・クロノ e t c . . . 沢山の知り合いが働いているわけだ。全員が俺と関係者なわけだし、トバッチリとかごめんだぜ。

「……ふくん。一応、考えてはいるんやな」

「まあな。お前の顔に泥を塗ったりはしないよ」

「それなら日常的に逮捕されるのもやめてくれへん? いつもなのはちゃんとフェイトちゃんが頭抱えてるで?」

「あいつらの困った顔大好きなんだ」

怒った顔も笑った顔も大好きだ。泣いている顔はちよつと——だけど。

俺とはやては話しながらも、どんどんと本を整理していく。要領のいいはやては俺より倍のスピードでどんどんどんどん片付けていく。……こいつやべえ。

「それにしても、こういった古文書とか昔の伝記物とか、どこまでが真実なんだろうな」

「うくん……6割嘘つてとこやない? きつと真実のところはしよーもないところやと思うで」

「例えば?」

「遊び人だった。とか」

確かにそれはしよーもない。精子が枯れて死ぬ。いや、既に死んでるか。

「まあ、三次元なんて当てにならないしな」

「でたな、二次元大好きキモオタ野郎」

「三次元でも好きな奴らはいるからな？」

確かにミクちゃん大好きだけど。一人で一心不乱にギャルゲーとかするけれど。なのはとフェイトに土下座してお金貰って好きな声優さんのライブとかいくけど

さ。

はやてはそんな俺を横目で疑わしそうに見る。これが本場の捜査官の疑いの目か。 やってもいないことを喋りたくなってくるな。

「ふくん……例えば？」

「は？」

「だから、例えば好きな人ってダレなん？」

こいつは何をそんなに詰め寄っているんだ。俺に詰め寄る前に本を棚に詰めこめ。なんてことは言えるわけもなく、はやての要望通りに列挙することに。

「なのは・フェイト・ヴィヴィオ・両親・はやて・高町家・おっさん・スカさん・ウーノさん・ヴォルケン・リンディさん・クロノ・ユーノ・とかかな。 まあ、結構知り合いはいるし、そいつらも全員好きだけどな。 ざっと上げた感じ、そんなとこだな」

「それ列挙は、どういう順番であげられたん？」

「……あん？」

「だから、いまの列挙順はどういった法則に基づいてあげられたのか、聞いてるんや」

すまん、はやて。 お前の言いたいことがいまいちわからない。

いや、わかったところでわからないと思うけど。

「えーっと、頭に浮かびあがってきた順かな」

その言葉に満足してきれたのか、はやては一人でに頷いていた。うちの幼馴染たちはよく摩訶不思議な行動をとることが多い。なのはしかりフェイトしかしはやてしかり。一番まともな俺はそれを外野から楽しむわけだ。 嘘だけだ。

はやては自分の世界に入ったようで、無言で手だけを動かす。

と、思いきや、たまに拳をこちらに飛ばしてくるので何がしたいのかわからない。 無言だからって俺を殴っていいわけじゃないからな

？

そんなこんなで1時間後。

だいたいの本の整理も終わり、ヴィヴィオがシャマル先生に抱かれながら寝ている様子を眺めながら俺は一冊の本を手を取った。ちなみにはやてはシャドーボクシングをしている。書庫でシャドーボクシングをするな。それとも少しスカートをヒラヒラにしろ。ピッチリタイトスカートとか似合わないから。

なのはとフェイトのは俺が勝手に魔改造してフリルのついた可愛い感じのスカートにしたから。『恥ずかしく履けない！』なんて言って仕事場には履いていけないけど。あれ絶対、こういう意味だぜ。

『私がこれを履くのは、君と二人だけのときだよ……？』絶対こうに決まってるだろ！ マジ可愛すぎ！ すんごい幸せものだぜ！

……最近俺のことを、『ゴ……ねえ、キミ』とか呼ぶようになったけど。それ明らかに、『ゴミ』って言うおうとしたよね？ そう突っこみたけれど、肯定されたら二人の下着を甘辛煮にして食べてしまいたいようになるので、聞くことができない。無論、いつか甘辛煮はチャレンジしたいが。

#### 閑話休題

俺は本を手を取って、パラパラとめくっていく。本当に偶然発見したのだが、ありえないことなのだが、あつてはならないことなのだが、不可能なことなのだが、世界の法則を無視したあげく、神に喧嘩でも売っているようなものなのだが――

「この人物だけ、他の文字と違って読めるんだよね。しかもありな苗字が」

その人物の名はK A M I Y Aと書かれていた。父さん、明らかにこれアンタだろ。過去とか未来とか笑いながら飛びこえていく奴なんてアンタくらいしかいねえぞ。

なんとも微妙な気持ちである。書いてあることはまったくもってわからないが、どうせロクでもないことが書かれているに違いない。おかしい。こういったものって、普通はめちやくちや誇れる

ことだと思うのに。

「KAMIYAって、あんたのことじゃないの？ あんたの性も上矢やろ？」

はやてが唐突に復活してきた。 シャドーボクシングはどうした。

「まあ……そうなんだけど。 これはきつとおそらく確定的に不変の理をもって、父さんなんだろうけどな」

「けど、なんでローマ字で書いたんやろ。 漢字でもいいと思うのにな。 ほら、案外カッコイイで、上矢って。 なんか妖怪の山にある神社のパチモンみたいやけど」

「俺だって早苗ちゃん大好きだよ。 それとお前は褒めてんのかバカにしてんのかどっちなんだ」

「上矢は褒めるけど、ひよっとこはバカにしとるで」

「タチ悪いなおいつ!」

「でも、陰口なんてマネ絶対せんで。 わたしは堂々と言う。 この

ゴミ虫が」

「堂々と言えば許されると思ってんのかお前つ!」

こいつも昔は可愛かったのに……。 いまも可愛いけど。 悔し

いのであまり口に出したくない。 まあ、俺もイケメンだけどな!

海鳴一のイケメンと呼ばれたくらいだぜ! そしてこいつとだけは付き合いたくないランキングNo. 1に輝いた男でもあるんだぜ。

……………涙が出てきた……。

まあそんなことはどうでもいいとして(どうでもよくないが)、多分きつとおそらく、このKAMIYAは――

「昔のかみやなんだと思う」

だから父さんは、わざわざKAMIYAと書いたのかもしれない。

いつの日か、俺がこの本をみてもわからないように。 あの旧姓を俺に見せないように、きつとローマ字にしたんだと思う。

「昔のかみや? なんなん、それ」

「まあ、俺も詳しくは知らないし、知ろうとも思わないけどさ。 上矢になる前に、別のかみやがあったらしいよ」

「…………謎かけ?」



「さあ？　本当に俺も知らないんだって。　10年前に少しだけ教えてもらった程度だよ」

理想を追い、醜く歪んだ世界で、力だけを求め、少女の手を拒み、独りで生き、絶対に勝てない存在達に立ち向かう、絶対的な敗北者にして、バットエンドを決められた最大の被害者――

「アイツに教えられたくらいだよ」

「ふくん……。　その人とはそれ以来会ってないの？」

「うん。　なんせ俺と違って忙しい奴だからな」

変な方向に忙しい奴だよ。　アイツの考え方も理解できなくはないけどな。

「まあ、アレだな。　古文書なんて信用するに値しないし、べつにどうでもいいけどな。　10割嘘なんてこともあるわけだしさ」

「たしかになー。　アンタならどうするん？　こういつた本を書くとき。　10割嘘の二次元大好き人間なら」

「2割真実で2割嘘。　残りの6割は真偽不明かな。　それと、三次元だって大好きだからな、俺は」

なんで俺が二次元しか興味ないみたいになってんだよ。　いらぬ誤解を与えるんじゃない。

「なのはちちゃんとフェイトちゃんが大好きの間違いちゃうんか？」

「あとお前とヴィヴィオな」

本を棚に戻し、伸びをする。　そろそろバイトを終わるとするか。　……それにしてもあの金髪、ヴィヴィオに似ていたな。

☆

カリムさん達とはやて・シャマル先生と別れを告げ、スヤスヤ寝ているヴィヴィオをおぶったまま家路につく。　流石にバイクを使うわけにもいかず、タクシーを使用することに。　バイクは明日にでも回収すればいいや。

タクシーの運ちゃんに料金を渡し、見慣れた場所に降り立つ。

「うくん……。　夕食の買い物しようか、それともヴィヴィオを家に運





『たしかになー!』

おっさんに皆が同意するように叫ぶ。うるさいな、と思う反面、嬉しいと思った。

だから俺は自然に笑顔を浮かべた。いつの間にか、笑顔を浮かべることとなっていた。

素直にありがとう、なんて、おっさんや皆に対して言いづらいから、いつもの冗談めかしてみんなに言う。

「まったく……覚悟しとけよ! 俺のバイトが終わったら、全員の家宅配テロしてやるからな!」

そしてその三日後、俺はバイトを辞めることになった。

## 4-1. 新しいバイト先

俺がバイトをはじめたきっかけは、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンにお礼がしたいからである。

そのために、はやえもんに頼み、此処聖王教会を紹介してもらった。バイト経験は高校時代なのはの両親が経営している喫茶店くらいなものであったが、バイト内容が清掃及び雑用だったので、そこまです苦勞することなく、客観的にみればかなり楽にバイトできていると思う。

雇ってくれた人がとてもいい人であったのもそれに拍車をかけている。

聖王教会のトップにして、管理局にも多大な影響力をもつらしい、アニメとマンガ大好きな女性、カリムさん。いつも素っ裸で堂々と教会内を歩いているマツパさん。

この二人は、とても優しく非常に見習いたいほどの人格者である。ヴィヴィオが懐いているのがいい証拠である。教会内でたまに会う人も、いい人ばかりで、バイト始めてから10日しか経ってないが、俺は少しだけ愛着とでもいうか、なんというか、ともかくそういういたものが芽生え始めていた。

まあ、そろそろなのはとフェイトが俺を疑いの眼差しでみているわけだが。

それはともかくとして、そんな良い人達ばかりの聖王教会——で、終わればよかったのだが、そうはいかないものである。これから起こることに関しては、誰が悪いわけでもない。強いていうなら、運が悪かった。と、言うべきである。

☆

いつものように、バイトの清掃を終えた俺は、いつまでも来ないマツパさんのことが心配ではないけど、なんとなく心配という体を装って、ヴィヴィオと二人でカリムさんの私室に行こうとしていた。

カリムさんの私室にはすぐついた。何分、ここでは問題行動など起こしていないのでガードが甘いなんてもんじゃない。いまなら顔パスも余裕である。

さてさて、そんなこんなで私室についた俺の耳に入ってきたのは、カリムさんと初老の男くらの話し声。初老の男のほうがカリムさんに怒っているようで、それをカリムさんはかわしている、といった感じだ。

「ん〜？ どうしたの〜？」

「んー。なんか話し合いをしているみたいだね。ちよつと待つてな。お兄さんはもう少し詳しく聞いてみるから」

詳しく聞いて、なんだか面白そうなことになってたらパイ生地もつて乱入でもしにいこう。

そう思いながら、耳を扉に近づける。そこから聞こえてきたのは、なんとも面白くないものであった。

曰く、ヴィヴィオを引き取らせろ。

簡潔かつ簡単に言ってしまうえば、そんな感じの内容である。

なんとも面白くない。ちつとも面白くない。誰がそんなふざけたことをぬかしているのか。どうせ愛玩にでも使うんだろ、このロリコン野郎が。

カリムさんはずっとこの言葉を述べていた。却下します。

それはいつもと違う声色で、なんだか天使が魔王にでもなった瞬間を目撃したときのようなであった。

どうしたものか、と俺はここで考える。

もしも俺がここに残っていたら、いずれこのロリコン野郎とヴィヴィオが会う可能性がでてくる。しかしながら、俺がここでバイトを辞めてしまうと、二人へのプレゼントが渡せなくなる。

「ねえねえ、まだダメなのー？」

待ちかねたヴィヴィオが俺の袖を引っ張りながら、そんなことをいってくる。

ヴィヴィオは俺の袖が伸びるのを気にせず、むしろ楽しそうに袖を

伸ばして遊んでいた。その笑顔を見た瞬間、俺の行動は決まった。その前にヴィヴィオの許可を取ることしよう。

「なあヴィヴィオ？」

「なーにー？」

「お兄さん、無職に戻っちゃうけどいいかな？」

「ん〜？ いいよー！」

自分自身、卑怯な手を使ったと思っている。ヴィヴィオが断るわけないとわかって、こんなことを言っているんだから。だけど、それでも、最低限の言質は取った。

俺はヴィヴィオを後ろに下がらせて、確実性を出すためにそばに置いてあった結構な値段のしそうな壺を思いつきり、力の限り叩きつけた。

ガシャンツ！！

と、音をたてて壊れる壺。そして扉の内側から現れるカリムさんとマツパさんと初老のロリコン野郎。啞然とする三人をよそに、俺は笑いながらこういった。

「すんませくん、壺割ったんで、責任とつてこのバイトやめます。

あ、請求書はこの住所にでもお願いします」

おっさんの住所をカリムさんに渡し、俺はヴィヴィオを連れてその場を後にすることに。ヴィヴィオは、ただただ変わらない笑顔でカリムさんとシャツハさんに手を振っていた。

外に出てバイクに乗る直前、思い出したかのように、はやてにメールを送っていた。

文面は簡単なものだ。

『バイトやめたったww』

なんともふざけたメールである。

☆

今日は大事な来客の日だというのに、あいつからメールがきた。こんな忙しい日に限ってなんでメールしてくるんや。もつと暇な

日にでもメールしてこい。なんてことを思いながら、メールの文面を見る。

『バイトやめたったww』

「ふざけんなこら!!」

「はやてちゃんどうしたのっ?! いきなり携帯床に投げつけたりして!?!」

「あんたの夫、屑過ぎるで!!」

「夫なんていないんですけど!?!」

隣で一緒に来客の用意をしていたのはちゃんに向かって叫ぶけど、なのはちゃんはそのより大きな声で叫んだ。

「ふう……まあ、なんとか落ち着いた」

「いやこっちは落ち着かないんですけどっ?! 夫ってだれなのっ?! もしかしてうちのペットのこと言ってるのっ?!」

今度はなのはちゃんが盛大にオロオロする側になったけど、見ていて楽しいので止めないでおこう。

「まあ、べつになのはとフェイトのペットとかどうでもいいけどよく。

それより大丈夫なのか? ミゼットのばーちゃん此処にくるんだろ? 卒倒するかもしれないぞ」

「まあ、それは大丈夫やと思うで。毎回、報告書出してるし、ちゃんとokもらつとるし。今回は日本の昔からの遊びを教えてほしいらしくて来るみたいやで」

「ふうん……。それじゃゲートボールでも教えようかな」

ヴィータもすっかり乗り気みたいやな。まあ、可愛がってもらってたし、ヴィータも嬉しいか。

それはそれとして、あいつのメール文面なんなん? バイト辞めたって、よっほどのことがない限りやめないと思うし……。

でも――

「あいつにあそこはむかんし、ちよつとだけ安心したかな」

はあ……聖王教会に謝りにいかなんとな。

☆



「やつべ……給料もらえねえじゃん。いまから聖王教会に給料もらいに襲撃しようかな」

そんなことしたら俺が返り討ちにあうわけだが。

それにしてもどうしよう。出て行っただけいいけど、既にバイトのアテがない。Ⅱなのはとフェイトのプレゼント買うお金がない。

これはなんというか……銀行襲撃フラグじゃないか？

信号をまちながら、ヴィヴィオと二人ネズミの国のテーマ曲を歌っている、横にいたばあさんが持っている荷物をぶちまけた。

「……あの、大丈夫ですか？」

「え、ええ……。ちよつと、荷物が多かったみたいね」

「えつと、手伝いますよ。ヴィヴィオはお婆さんと一緒に信号渡ろうなー。俺は荷物運ぶから」

「はいー！」

「おやおや……お若いのにえらいねえ」

「お婆あちゃん、おててつなごう！」

「はいはい」

ヴィヴィオがお婆さんと手をつないで、青信号を手をあげながら渡るのを確認して俺もぶちまけられた荷物を持って信号を渡る。

ちよつと時間がかかって赤信号にな

っちやっただけど、車に乗っている人達もクラクションを鳴らすことなく黙って待っていてくれた。なんともありがたい限りである。

渡りおえて、お婆さんはこちらを振り返り一礼する。

「お若いのに感心だねえ。助かりましたよ」

「いえいえ、女性に優しくするのは当たり前ですよ」

「あら、口がうまいのね。こんな年寄にまで色目を使うのかしら？」  
「僕の守備範囲はゆりかごから墓場までなので、問題ないです。ただ、そちらは絶頂した瞬間に卒倒して黙祷することになりそうですが」

そんなことになったら、俺が殺人犯として逮捕されてしまう。

お婆さんの口が若干引き攣っている。

「あら、もう時間だね。私は行くところがあるので失礼することにするよ。ありがとうね、おじょうちゃん」

「ヴィヴィオだよー!」

「あら、ヴィヴィオちゃんっていうの？ 私はミゼットですよ」

「あくしゅー!」

「はい、握手」

うちの天使の力でお婆さんも骨抜きである。それにしても……ヴィヴィオが名乗ったからには俺も名乗らないといけないよな。

「えっと、俺の……僕の名前は上矢俊です」

そのとき、すこしだけお婆さんの目に力がこもった。

……まあ、見なかったことにしよう。お婆さんも追及する様子もないし。

「それで、ミゼットさん。目的地まで送りましょうか？ これからずっと暇でして」

「あら、お仕事はしてないのですか？」

「残念ながら、いましがたクビになったところです。もともと、彼女たちに養ってもらっている身ですから、生活には苦労しませんが……ちよつと買いたいものがあつただけに無念だなー、なんてことは思っています」

「買いたいものですか」

「ええ、彼女たちにプレゼントをと思ひまして。まあ……折り紙で作ったネットクレスでもあげるとしますよ」

こういうのは心がこもっていれば大丈夫。ただの現実逃避なんだけどな。

お婆さんは、そんな俺をみながら笑った。そして、

「二人も幸せ者ですね。そして、一坊やもいい息子をもったものです。あなた自身も、はやてちゃんから聞いたとおりの人でした」  
そういった。

『ミゼットさまー!』

前から管理局の制服を着た男どもがこちらに走ってきた。正しくはミゼットさんに向かって走って走ってきた。男たちは息を切らせな

がらやってくる、2・3ミゼットさんと話したあと、ミゼットさんを囲む形で歩き出した。そのときに、俺に一礼することも忘れていない。紳士にもほどがあるぜ。

☆

ミゼットさんを見送ったあと、本格的に家に帰ることにした——のだが、

「俺を笑いにきたのか、おっさん。笑いたいなら笑えよ！ さあ！」  
「なにを自暴自棄になってるんだ、気持ち悪い。ヴィヴィオちゃん  
が危ない人を見る目でみているぞ」

おっさんに捕まった。パトロール中のおっさんに捕まった。

「離してよ！ あなたとの関係はもう修復できないのっ！」

「修復もなにも捕まる側と捕まえる側だからなっ!? 修復もなにもねえよっ!」

「そうやってあなたは私達を騙してきたのよ！ ヴィヴィオだつてまだ小さいのにつ！ あんな女と浮気したあげく、私達を捨てるなんて！」

『うわあー……最低な人』

『おいおい、あれがこころへんを守る管理局員だつてよ』

『まだ子どもも小さいのに、サイテー』

『あんな大人にだけはなりたくない』

『制服プレイが大好きらしいぞ。もしかして円光とかもしてんじやねえか?』

「このケダモノ！」

「黙っとけお前!?! なんなんだよ、この市民の連帯感!?! 普通に考えて俺とコイツでは子どもなんて無理だつてことがわかるだろっ!?!」

「魔法も奇跡もあるんだよ?」

「いるかこんな奇跡!」

まあ、俺もこんな奇跡いらないけどな。でも、おっさん。密かにあんたの趣味嗜好がバレてるぞ。

閑話休題

「それで、お前バイトは？ まだバイトの時間じゃないのか？」

「俺のバイト時間まで調べてるなんて……。 ごめんな、俺には心に決めた人がいるから」

「そっちにもっていくな。 お前の顔面粉砕するぞ」

みなさん、これがミッドの平和を守る男の言葉ですよ？ どう思います？

俺は頬を搔きながらバイトについての質問にこう答える。

「辞めたった」

「は？」

「だーかーらー、バイト辞めたった」

「……どうして？」

「セクハラして、高価な壺割ったから、辞めたった」

「……………給料は？」

「ないよ」

なるだけ感情を出さないように勤めて機械的に平坦に喋る。 壺を割ったのは事実だし、カリムさんにセクハラしたのも本当のことなので、俺は喋っていいはず。 ——なのに、おっさんは自分の息子が試験に落ちたときのような顔をしていた。 有大抵に言えば悲しい顔をしていた。

「……………そっか。 それなら、しょうがないな。 セクハラして、壺

割ったならしょうがない」

「うん、しょうがないよ」

それでもおっさんは、俺の頭を無造作に乱暴にグリグリと搔きまわす。 せっかくセツトした髪もこれでは台無しだ。

おっさんは続けて言う。

「もともと、お前のような犯罪者で人格ひん曲がっている奴をバイトとして採用したほうがおかしいんだよ。 お前には向いてない。 好き勝手にできないバイトなんて向いてないさ。 お前の個性を殺してまでするバイトなんて——つまらない」

「……………うっさいな。 それは俺の勝手だろ……。 個性を殺したって

いい、俺は金を稼げればよかったんだよ。バイトをお膳立てしてくれたはやてにも申し訳ないことしたさ」

「そうか？ たぶん、お膳立てした奴も内心では喜んでるぞ？ お前のバイトの現状をみて、そう確信すると思うけどな。一度でも来なかつたか？ その子が」

……そういえば、きたな。はやて。あいつがそこまで俺のことを思っているのか？ ——いや、思ってるんだろうな。あいつなら、きつと。

「……でも、俺は結果としてあいつの信頼を裏切ったよ。バイト辞めたんだし」

どんなことを言っても後の祭りだ。バイトを辞めた事実が変わらない。

「バイトなら、またやればいいだけの話だろ？」

おっさんは優しく諭す。

「わかってるさ、でも……俺を雇ってくれる狂ってる人なんてそうそういないもん」

もし俺を雇ってくれる人がいるというのなら——それはきつと変人であり、奇人である。

そう言った俺の顔を、正しくは頭を掴み——後ろに向けた。

首をひねったとか、完璧に変な音がしたとか、そんなことが気にならないほどの光景が目の前に広がっていた。そこには、ありえない光景が広がっていた。

『やっぱりクビになったかひよつとこ！ お前これから暇だろつ！』

俺の店手伝わねえか!？」

『ひよつとこ君、君は高校は卒業しているらしいね。ちよつと地球式の勉強法というのを教えてくれないか？』

『ひよつとこくくん！ 赤ペン先生やる気ない？』

『ひよつとこ！ お前パン好きだろ！ ちよつくら手伝え！』

『君の交友関係の広さを活かしたバイトを頼みたいのだが』

そこには、ミッドの——俺の知り合いの人達が、変わらない笑顔で、当たり前前の笑顔で、俺のことを指さしながら笑って、それでいて——

バイトの勧誘をしてくれていた。

茫然と唾然とする俺に、おっさんは笑いながら言う。

「驚いたか？ 皆、お前が家事に専念してるのかと思って、バイトの勧誘できなかったみたいだぞ？ 昨日お前の知り合いの人達に話したら、こぞつてお前を引き抜こう」としていただき」

「はっは……ありえねえだろ……」

「ありえない？ おいおい、お前はさっき言っただろ？ ——魔法も奇跡もあるんだぜ？ 魔法や奇跡に比べれば、お前のバイト先なんて簡単に見つかるぞ。ちなみに、俺もお前にバイトを頼んでやるよ。お前にピツタリのバイトがあるんでな」

とんつと押された背中。それによろけながら、俺はミツドの皆の前に立った。

『よおー クビ男！』

「はは、うっせーよ」

ほんと、こいつらなんで俺がクビになったのに、嬉しそうにしてるんだよ。

まったく……俺はこんな初歩的なことを忘れていたらしい。説明書の一番初めに書かれていることを読み飛ばしたらしい。だって——

「あー……その……俺を雇ってくださいー！」

『馬車馬のように働けよ！』

『休憩したらぶちのめすからな！』

『ゲイバーにも来なさいよ！』

『目指せ！ 無職脱出！』

勝手気ままにそれぞれが言う。それをまったく不快とは思わないし、それよりも先に自然と笑みが零れていた。

まったく……忘れていたよ。

だってミツドは——奇人・変人が多いんだった。

## 4.2. 視察？

「少年、本当にダイエットしたいのであればコカコーラからダイエット  
トコココーラに変えたくらいでは痩せんぞ。せめて、一日1kmで  
もいからランニングすることからはじめろ」

「え……。でも、ランニングとか苦手で……」

「それならば朝の女子高生とかOLとか追いかけとけ。結構いける  
もんだぞ」

「はあ……」

聖王教会のバイトを辞めたのが二日前。現在の俺は、ミッドでバ  
イトを転々としているのが現状である。日給はその店によって決  
まっており、給料が高い店もあれば微々たるところもある——が、聖  
王教会のときとは違い、自分を隠すことなどせずにバイトできるので  
結構楽しい。

「まあ、というわけでこのコーラは没収だ。お前は水でも飲んでけ」  
そういつて、カゴに入っていたコーラを取り出しそれと引き換えに  
“おいしいみず”を入れて、金額を表示し、金をもらい、おつりを返  
す。少年はなにか釈然としない顔ではあるものの、俺が手を振ると  
振り返して店を後にした。

「ふっ……また一人ミッドの少年を救ってしまったか……」

「営業妨害だ馬鹿者。なんで店側のお前が営業妨害してるんだ。  
いい加減、ちゃんとしねえて目ん玉抉るぞ」

今日のバイト先はコンビニ。そこで一日中レジ打ちをしている。  
レジ打ちは高校時代に散々やってきたので慣れたものだ。もう  
一秒間に12万連打くらい余裕である。今回はヴィヴィオをスカ  
さん宅に預けてます。

流石にコンビニはヴィヴィオには早すぎる。なんせ18禁本が  
平然とあるのだから。ヴィヴィオの教育的に、俺の生命的に、二つ  
の意味で二人から殺される。

「それにしても……コンビニって儲かるのな。チラつと帳簿みただ  
ど、結構金あったぞ」

「なんでお前はそうやってすぐに人の帳簿とかみるかなあつ!?」  
金髪ドレッドヘアーのコンビニ店長、あんがいいい 餡貝善々さんがワナワナ震えながら叫ぶ。

あ、そろそろポテト揚げる時間だ。

ポテトを油の中にいれて、時間を計りながら餡貝さんとお喋りを続ける。

「しかし、アレですね。ほんとありがとうございます。バイトの件」

「……まあ、動機がなんにしてもお前が働こうと思ったのなら、手伝いくらいはしてやるさ。それに、お前がバイトしてくれるならその分ミッドも平和になるだろうしな」

俺はミッドの負の親玉かよ。

「ところで、お前はどれくらい金がいるんだ?」

「え〜と……10万ほどですかね」

「それはまた結構な大金だな。一か月じゃ無理じゃねえか?」

「そこが問題なんですよね〜……」

あんまりバイト期間が長いと二人に勘付かれる。(というか、既に二人は疑惑の目を俺に向けているのだ。近々、なにかアクションを起こしてくるかもしれない) これ以上、時間をかけると俺のビックリドッキリプレゼント大作戦が泡と消えてしまう。それだけは避けないと。

「一気に稼げるバイトがあればいいけどさ」

「キャサリンの所で稼げば?」

「いや、キャサリンはちよつと……。俺が喰われかねない」

キャサリンまじで恐ろしいから。リアルで怖いから。キャサリン見た後だと並の犯罪者とかマジで可愛くみえるから。可愛い女性がちよつと部下に怒ったくらいで魔王とかマジ甘いから、そんなの魔王じゃねえから。そんなのゴブリンもいいところだから。

「まあ……確かにキャサリンはねえな」

「万単位で給料くれるなら考えるけどさ。流石にキャサリンも万単



位では出さないだろう」

「いや……わかんねえぞ？　もしかしたら……なんてこともあるかもしれない」

うーん……確かにありそうでこわい。

ヴーヴー！

「ん？　メールだ。　誰だろう」

「裏で弄ってこい」

「裏でオ○ニーしてこいとかアンタ最低だな！」

「お前の考えのほうが最低だ!?!」

☆

「まったく……バイト中にメールなんてKYな奴だな」

バイト中に携帯持ち歩いている俺が言えた義理じゃないのだが、というより俺はこのメールの送信者を1%も怒ることができないわけだが。　とはいうものの、俺にメールをしてくる人物なんて限られてくる。

知り合いは人外が多いし、変態共はあまり携帯をもたないし、管理局の本部の奴らは仕事だろうし、ミッドの市民は俺がバイトということを知っているの、このメールの送信者はきつとおそらく六課の誰かだと思う。　そして六課の面々で俺にメールを送る人物なんてなのはかフェイトしかありえないわけで、きつとその内容は甘いものだと――

送信者・はやえもん

内容・ちよつと話があるんやけど

「さーて、バイトバイト」

開いた携帯をパタンと閉じる。

『おーい、ひよつとこー！　飲み物の補充たのむー！　倉庫から取ってきてくれー！』

「うーいー」

鮎貝さんからの指示に返事を返し、裏の倉庫にいき飲み物のダン

ボールを取る。

ヴーヴー!

ポケットにいれた携帯がバイブ音と振動で俺の股間のすぐそばで暴れまわる。とんだじゃじゃ馬ファンシーベイバーだぜ。

一応、携帯を取り出して確認することに。

着信あり・はやえもん

「さーて、飲み物を運んでいれればいいんだよな」

大き目のダンボールを三箱取り出して、店内に戻る。

そこで待っていたのは、受話器片手にレジをみている館貝さんの姿であった。

館貝さんは俺に受話器を差し出しながら言った。

「おー、ひよつとこ。お前の友達が呼んでるみたいだぞ。どうでもいいけど、店にまでかけてくるような彼女とは……お前も案外ラブじゃねえか。ただ、店まで

かけてくる奴は面倒だからな。店を巻き込まないでくれよ〜?」

俺は黙って受話器を受け取ることに。館貝さんは仕事をしに、裏へと引っ込む。

「……はい、ひよつとこだけど」

『お、やっと出たか。どした?なんか声が暗いで?』

「お前のせいだよつ!! 昨日メールでバイト中はメールしないって約束しただろつ!」

『だから電話してるんや』

「意味わかんねえよつ!! どんな理屈だよつ!! それに店長にお前が俺の彼女だと誤解されてるんですけどつ! どうしてくれるんだつ!?!」

『なんなら、本当になつたげよつか〜? 料理もできて、気立てもいい、管理局でも一目置かれてる、こんなに可愛いお嫁さんそうそうおらんでき〜?』

「確かにお前は料理もできて、おだてもよくて、管理局でも一目置かれて、可愛いけど、俺にはなのはとフェイトがいるんで他を当たってくれ! それに俺は彼女と言ったはずだ、なんでお嫁さんにランクアツ

プしてるんだよっ!？」

『責任……とってよね……?』

「なんの責任っ!？」

受話器越しに、はやての笑い声が聞こえる。

『それで? なんで出てくれなかったん? ちよつと傷ついたで。』

真面目なところ』

「うっ……すまん。 いや、俺もお前とは例え電話越しだとしても、文面のみの会話だとしても、お前とならいつまでももしていたいけど……」

『……けど?』

「その……聖王教会のこと……さ。 若干ながら罪悪感が」

おっさんは気にしなくていいとは言ったけど。 やはりはやてには申し訳ない。

「とある人に “気にしなくてもいいんじゃないか?” とは言われたけど、やっぱり罪悪感はあるわけよ」

『まだそんなこと考えてたん? それについては昨日話したのに』

ええ、確かに話したとも。

『聖王教会側も、 “申し訳ない” って謝ってるし、こっちは大丈夫や』  
「そっか……。 それじゃ、なんで電話してきたんだ?」

『……暇だから』

「仕事しろ」

『え〜……いやや』

「子どもかお前はっ!？」

なんでこんな奴が魔導師ランクSSなんだろうな。 世の中狂ってやがる。

『いや、私もね? 仕事しようと思ったけど、そもそも仕事がないんですよ。 ほら、六課って基本的に遊んでるし、その分他の、主に上層部の方達が頑張っているわけだから』

「聞きようによっては、お前らの部署最悪の部署だな」

『人間最悪のアンタに言われたくないで。 まあ、そんなわけで暇なんよ』

「ふくん……、まあ俺は暇じゃないから。そろそろ切るぞ?」

『え〜! もう切るん!? もつとお喋りしよーや! じゃないとアンタが私の純潔を奪ったってなのはちゃんとフェイトちゃんに言いふらすで!』

「なにその限定仕様っ!? 俺が死ぬからやめて! そしてデマをこれ以上言わないでくれっ!」

『それじゃ、もつと喋ろうよー』

「う〜ん、まあ客が来るまでの時間だけなら融通利くと思うけど。それまででいい?」

『オツケーオツケー。それじゃ——』

はやてが話を振るところでトビラが開き、客が入店してきた。

「あ、悪い。客来たから切るな」

『はっ!』

ガチャン——と、受話器を置いたところで、タイミングを見計らったかのように客がカゴと一緒に商品を提出する。俺はそのカゴにはいつていた商品名を口に出しながら、はやてには悪いことしたなく、なんて考えるのであった。

☆

電話の向こうから、あいつの冷静な声が返ってきたと思ったら、つぎの瞬間には電話は切られていた。

「……………」

携帯をじっと見つめること1分。どうせ見ても折り返してかかってくることはないので、そつと閉じることにした。

「……………おもしろくな」

あいつがバイトだってことはわかっている——わかっているけど、こっちは暇なんだから少しくらい遊んでもええやん。いつもはあっちがひっかきまわすのに。

「はやてちゃん。書類ここにおいときますよー?」

シヤマルが書類をわたしの机に置く。うへえ……丁度いいタイ

ミングで仕事が……。

目の前の書類に辟易する——が、ふと頭の中にあることを思いついた。

「なあシャマル」

「はい？　なんですか？」

「あいつのバイト先って、あそこのお巡りさんに聞いたらわかるかな？」

「うん、そうですね。たぶんわかると思いますけど」

「そっかそっか」

ポケットに入れた携帯を取り出して、電話帳から魔導師ランクSS Sだろうと名高いあの人を選びコールすることに。

2コールのあと、電話に出た人物に挨拶して、さっそくあいつの明日のバイト先を聞きだした。

明日はちょうど、蕎麦庵というお食事処みたいやし……昼休憩にでもいこうかな。

「どうしたんですか、はやてちゃん？　なんだか嬉しそうですけど……」

「んー？　なんでもあらへんよー」

### 43. キャツサリ〜ン!

今日のバイトは依然にもお世話になった蕎麦庵である。レジ打ちと給仕が俺の主な仕事となる。蕎麦庵は日本出身の店長がから本格的に作るだけあつて味は抜群、のどごしも最高で、昼にもなる常連さんでいっぱいになる。

蕎麦庵のいいところは、静かにゆったりとした気分でうまい蕎麦を食べるところにあると個人的には思っているし、光景としても概ねそんな感じの光景が広がっているのだが——今日ばかりは違っていた。なぜなら——

「おそばもつてきましたよー!」

「ほっほ、お嬢ちゃん。ありがとうねえ。これはお礼だよ」

「やったあー! みてみて、おにいさん! ヴィヴィオ、アメさんもらったよー!」

「よかつたな〜ヴィヴィオ。ほら、おばあちゃんとおじいちゃんにお礼言おうなー」

「うん! おばあちゃん、おじいちゃん、ありがとうございます!」

「ほっほっほ、ひよつとこくんにはもったいないほどできた娘さんだね」

「はは、母親が次元世界一最高だからだと思えますよ。さき、冷めないうちにどうぞ」

「そうだねえ、それじゃおじいさん、いただきとしようかね」

「そうじゃなあ」

熱々の月見そばを二人で食べるのをみて、俺はもう一つの席に向かう。ヴィヴィオはというと、そんなご老人二人の様子をずっとみていたら、小さい子用のお椀に蕎麦を移して頂いてちやつかりご馳走になっっている。

う〜ん……これが男性なら殴るけど、ご老人の方だと完璧にお祖父ちゃんお婆ちゃん孫の図式が成り立っているので、微笑ましい光景にかわるな。まあ、お二人が迷惑でないのであればいいんだけど。

あーヴィヴィオは天使だな〜!

「ちよつと店員さん？ わたしの山菜蕎麦がまだなんやけど」

「三歳でも食ってる」

「いや、ヴィヴィオちゃんまでが限界やな」

向かった先のテーブルでいい感じの作りの笑顔を浮かべている（俗にいう営業用笑顔）八神はやてが俺に向かってクリームをいれてくる。

「まあまあはやてちゃん。 お店も混んでますし、ゆっくり待ちましようよ」

「それもそうやねー。 まあ、わたしも食べてすぐ帰るわけじゃないし……店員さん、いつまでもまってあげるでー！」

「……………いや、席が詰まるから食ったら早くでていけよ。 というか、なんでお前とシヤマル先生が此処にいるわけ？ 仕事は？」

「今日の朝終わらせてきた」  
「サボリで有名なお前がっ!？」

思わず驚く。 いや……………だつて……………サボリで有名なお前が……………ねえ。

八神はやてとシヤマル先生。 いずれも俺の友人であり、なにかと俺のことを手伝ってくれる人達で、関係は良好（そう思いたい）。 たまにゲームのことやマンガのことで喧嘩することもあるけど、それ以外はいたって普通の交友関係である。 しかしながら、この二人、管理局のエリートだといふのだから驚きである。

二人だけじゃなく、幼馴染の高町なのはにフェイト・T・ハラオウンも同じエリートだといふのだからもうなにがなんだが……………もつと言えば、俺の知人の皆さん、管理局で働いている奴ら全員がエリートみたいなものである。

これがアニメの世界ならば、『この集団って勝ち組すぎるよな』とか言われるに違いない。 まあ、ぶつちやけその通りだと思っただけだね。 可愛くってエリートとか反則級だろ。 だが、俺だって無職のニートだ。 『だからなんだよ』そう突っこみが入ることくらいわかってる、わかっているが言わせてくれ。 語感的にはエリートもニートもそう変わらないので、俺も勝ち組ではないか？

案外俺とこいつらがここまで関係を持っているのも当然かもしれない。同族的な意味で。本当は逆ベクトルなのだが。

などと、長々とツラツラと怪電波を飛ばしたのはいいのだが――  
「で、なんできたの?」

こいつらの意図が全くわからない。ので、何度目になるかわからない質問をするのだが、決まって答えは――

「ん〜? お昼食べに来ただけやよ〜」  
という解答である。

まったく……なにを考えているんだか

ふとおやつさんが俺を呼ぶ声が聞こえてくる。　　どうやら注文の品ができたみたいだ。

「とりあえず、話はあとで聞かせてもらおうからな」

そうはやてに指さして、俺はピークを捌くのであった。　　ちなみに天使はお戯れ中である。

☆

「で? なにしにきたわけ?」

ピークも過ぎ、ようやくおやつさんから休憩の許可をもらったのでその足ではやての正面に位置する席に座りながら話しかける。　　ちなみに天使は奥の部屋でお昼寝中である。　　もう好き放題のやりた放題だ。　　でもヴィヴィオだからそれでオツケー!　　だって可愛いもん!

「アンタがサボってないか見に来たんよ」

「あー、なるほどなー……」

確かによくサボるもんな俺。

「でも、今回はサボるわけにもいかないからな。　　これでも本気でやってるぜ?」

「まあ……それはさつきから見えてわかったけど。　　そろそろなのはちゃんとフェイトちゃんを騙しながらバイト続けるのも難しくなってきたんとちゃう?」



「うっ……！ それは……ちよつと思つてきた。この頃、妙に二人の目も厳しいし……」

なにも悪いことしていないのに罪悪感が発生するんだよな……。恐るべし、二人のパワー！

はやては、山菜蕎麦を食べながら、シヤマル先生は天ぷら蕎麦を食べながら考える。

「もういつそのこと、お二人には話したらどうですか？ そのほうがひよつとごさんも気楽にバイトをすることができそうですし——」

「シヤマル、それは無理やで。こいつの性格上、二人には秘密にしておいて、最後の最後にプレゼントを渡す——みたいなプランがでているはずや。最後の最後に種明かしをするのが大好きな人種やもんな、自分」

「まあな。最後の最後に『おいおい……うそだろ……』とか、『ふざけんなよ』みたいなとか結構好きだぜ。だからはやてが言ったように、二人には秘密にしておいて最後の最後に種明かしみたいなのが好きなんだよね。そうしたほうが、なんかいいような気がするし」

「うくん……そういうものなんですか？」

「そういうものなんですよ」

「でも、ひよつとごさんがいきなりプレゼントなんかくれたりしたら、まずは夢じゃないかと疑ったあと、どこから盗品してきたのか、又はどこから強奪してきたの

か、そういうったことを先に考えそうですね！」

『……………』

「えっ!? あれっ!? お二人ともどうしましたっ!?!」

シヤマル先生の話でふと思った。……いや、シヤマル先生が述べたことはあくまで一例ではあるんだが、必ずしもそうなるとは限らないんだが——そうなる確率が結構高い。なんとたつて渡す相手があるか、十分にありえる話である。ありえない話ではないどころか、十分にありえる話である。

「……………どうしよう。そこらへん全く考えていなかった……」

「うくん……確かにシヤマルの言っていることはもつともやな」

認めたくはないが……。

「ま、まあ……なんとかなるさ！ うん、勢いでいけばなんとかなるよ！」

「な〜んか怪しいな〜。——でも、久しぶりやな。アンタのこんな頑張ってる姿をみるのわ」

ふいにはやてが呆れた声から、優しい声色にかわった。みると顔もほほ笑んでいて、一瞬だけ胸の鼓動が早くなったのを自分でも自覚した。

「今日な？ 本当はアンタの頑張ってる姿を見に来たんよ。無職で

カスでゴミなアンタが頑張るところなんて滅多にみられないしな」

「喧嘩売ってるのか、それとも褒めてるのか、そうとう迷う言葉だな」

「大丈夫、バカにしてるから」

「表でろっ！」

アへらせてやる。

でも、とはやては続ける。

「こうやって頑張ってるときのアンタ、やっぱりカツコイイで」

そういつて、笑ったはやての顔は、あまりにも普段のときとギャップがありすぎて、なんだか戸惑った後、俺はなんとも思わずネタに走ってしまった。

「バーカ。俺が普段から頑張ったから、物語的にハーレムになつてしまっじゃないか」

「ふ〜ん。それじゃ、わたしも隣におるん？」

「……………まあ、そこは考えておく」

ついつい直視することができずに、頬を掻きながら視線をそらす。いや、玄関の入口のほうに目を向ける。

——そこには携帯をこちらに向けながら、一心不乱に写メをとるスバルと嬢ちゃんがいた。

『——あ』

『やばいバレたよっ!? ティア逃げよう!』

「ちよっ!? お前らまってっ！」

逃げる二人をなんとか捕まえて帰ってくる頃には、俺の休憩時間も

終わっていた。

……飯、食いそびれたな

☆

「なるほどなるほど。プレゼントですか、頑張りますねひよつとごさんも」

「まあ、なのはちちゃんとフェイトちゃんのためやしなー。ところで、スバルとティアどうしておったん？」

「えっと、ティアとたまにはお昼外で食べようか、って話になりました。そしたらなのはさんとフェイトさんからおいしいお蕎麦屋さんを教えて頂いたので、寄ってみたところ……はやてさんとひよつとごさんがいい雰囲気でしたので……つい写メを」

「ついで写メをとってらいかんぞー」

「いたいいたいいたいっ!? ごめんなさい、はやてさんっ！ 写メは消しますからっ!」

「私たちは管理局員やぞー?」

「でもはやてさんだつて十分局員にあるまじき行為を平然とやってる気がいいですっ!? もういいませんからヘッドロックは勘弁してくださいっ!」

メキメキと音をたてていたスバルを離すはやて。隣のティアはその光景をみながら、冷や汗をかいた。

「(流石はやてさん……。あのひよつとごさんをフルボッコにするだけの力はある……)」

そう思いつつ、後ろに隠れるスバルの相手をすることに。

「まあいまのはアンタが悪いわね」

「いやいやいやっ!? 写メ撮ったのティアじゃんっ!? なにすまし顔で自分は関係ないですアピールしてるのっ!? ティアばりばり関係者だからねっ!」

なんのことだかサツパリわからない。ついに友人は頭までアレになってしまったのか……。

「おーい、注文とりにきたぞー。なにがいい？ あ、そういえばはやて。 シヤマル先生はどこいった？」

「シヤマルならヴィヴィオちゃんのとこ行つたで」

「あーなるほどな。 まあ、もうすぐしたらお昼寝中のヴィヴィオ起きだすから、それまではすることないと思うけど。 シヤマル先生には感謝し尽したりないな」

「わたしにはないの？」

「勿論あるぜ？ 聖王教会紹介してくれたしき。 まあ……お前とカリムさんには悪いことしちゃったけど」

「それはべつにええよ。 私も聖王教会側も気にしてないし。 それより、聖王教会側がまたバイトにきてくれだつてき。 今度は日給で」

「まじで？ それならヴィヴィオ預けて行くのもアリだな。 あー、でもメンドイことになりそうだしなく。 考えておくよ」

注文をとりにきたひよつとこさんは、そのままはやてさんと話し込む。 あの……私たちの注文は？

「えーつと、すいません。 注文いいですか？」

「あつー。 わるいわるい、ささつ注文どうぞ」

手を軽くあげて、挙手の形で質問してみるとひよつとこさんは、いま気付いた様子で困った顔をしながら注文を促してくる。 この人、完全に忘れてたな……。 もしかしてひよつとこさんは、飲食店のバイトだと話し込んだじゃうタイプなのかも。

「えーつと、私はざるそばをお願いします。 スバルは注文決まった？」

「えーつと、ここからここまで全部」

そういつて端から端まで指さすスバル。

これには注文をとるひよつとこさんの手も止まる。

「えーつととき、スバル。 金はある？」

「あ、はい！ ほら、このとおり！」

「うーん……これじゃ三つまでしか頼めないぞ？」

スバルのサイフを覗き込んだひよつとこさんは金額を確かめると、

諦めろといわんばかりに言った。ちなみにスバルのナイフの名刺入れにはなのはさんが笑顔で写っている写真がはいつている。もつと言うのであれば、私のサイフにはその写真は入っているし、合同部屋にはなのはさんのプロマイドやポスターも張ってある(全て自作)。

「まあ、その中で好きなものを三つ注文してくれ」  
「うー……」

泣く泣く三つ注文するスバル。しかしながらこればかりはしようがない。

『おやつさーん！ あれ？ おやつさーん？ クソツッパゲー！』

『死にてえのか、お前』

『うおあつ!? いるなら返事しろよ!? いきなり文化包丁で刺すことないだろ?!』

『お前をみるとついな……』

……あの人もあの人で色々とすごいなあ。

☆

「おにいーさん……だつこー」

「はいはい」

お昼寝から目覚めたヴィヴィオが両手を上げながら、俺に抱っこをせがんでくる。なんとも可愛らしいかぎりである。もちろん俺は断ることなく、その小さな体躯を抱き上げ背中をトントンと軽く叩いていく。

そしてそうしながら、付き添ってくれたシャマル先生にお礼をいうことに。

「すみません、シャマル先生。ヴィヴィオのおもりもさせてしまつて……本当なら俺がこんな状態ですから、スカさんかなのは達に預けるべきなんです……。スカさんのほうはこのところ発明に忙しいらしく、頼りになるウーノさんもそれに付き添う形で。なのはたちのほうは、まあ……俺のことがありまして。はあ……ヴィヴィオ

にも迷惑かけるな、ごめんなーヴィヴィオ」

「うー……トンボさんだよおー……」

ヴィヴィオは二度目の眠りの旅にいったみたいだ。

シャマル先生はクスクスと笑う。

「いいんじゃないですか？ 六課で預かるよりも、此処の方たちのほうが色々個性があつてヴィヴィオちゃんも面白いでしょうし。

この年ではなかなかお蕎麦屋さんの給仕なんてできませんよ？」

「……言われてみれば、そんな気がしますね。 うーん、ヴィヴィオが楽しんでくれるのならそれでいいか」

うん、それでいいや。

『ひよつとこさーん！ 注文追加お願いしまーす！』

「あ？ あいつ金ないのに、なにしてんだ？ すいません、シャマル先生。 少しの間だけヴィヴィオをみていてもらえませんか？」

「ええいいですよ。 いってらっしゃい、ひよつとこさーん」

手を振るシャマル先生にこちらも振り返しながら、俺を呼ぶスバルの元へ。

「注文つてお前……金は？」

「はやてさんが一食だけおごってくれみたいですよ！」

「口止め料や。 いっとくけど借しやでこれわ。 いつか返してもらうから」

「はいはい。 それで注文は？」

スバルの注文を紙にボールペンを走らせおやつさんのところにもつていく。

昼のピークを過ぎると、客もほとんどいなくなりこちらとしても仕事をしなくて済む……なーんてことにはならないのだが、それでも、少しばかりの時間はとれるようになるのでこちらとしてもありがたい。

なんてことを思いながら、注文の品の出来上がりをまっついていると此処で見かけるには珍しい人物が暖簾をくぐりながら姿を現した。

その人物は誰かを探すそぶりをみせながらキョロキョロとしたあと、俺の姿を確認して真っ先にこちらに向かってきた。

「よお、おっさん。 遅い昼飯でも食いにきたのか？」

「いや、ある人からお前を呼ばれてな。 ほれ、携帯」

そういつて自分の携帯を投げ渡すおっさん。 今日のバイト先、蕎麦庵では携帯をポケットにいれたままバイトなんてしてたらおやっさんに殺されるので、携帯は家に

置いてきたのだ。 万が一バイブ音が鳴ろうものなら俺の命もそこで尽きてしまう。

携帯を耳に押し当てながら、俺に用があるやつなんて誰かいるかな？ そう自問自答して返事する。

「はい？ お電話代わりました。 どなたですか？」

『あつらくん！ その声はダーリンね〜！♪』

ピッ

「おっさん……いまの声って……」

「その……すまん……。 一応、先輩にあたる人だしな。 あの人も昔はすごかったんだぞ」

自然に声のトーンが下がる。 おっさんも俺の声のトーンに気付いたのか、気まずそうに、バツが悪そうに、珍しく言い訳じみたセリフを吐く。

「それは過去の栄光だろうッ！ いいんだよ、過去の栄光なんてさっ！ 大事な今は現在なんだよっ！」

「いや……でも……お前のことを心配してるみたいだしさ……」

「知らねえよっ!? 俺はこいつに喰われかけたんだぞっ!？」

おっさんに詰め寄ったところで、手のひらに振動音の感触が。

放置したいけども、それをすると後が怖いのでしぶしぶながら電話にでることに。

「……はい。 なに？」

『もう！ 電話切るときは一言いわないとダメなのよっ！ ダーリンってばそういうところはまだまだお子様ね!』

「アンタにダーリンと呼ばれる筋合いも言われる筋合いもねえよっ！ というか何しに掛けてきたっ！ しょーもないことなら電話切るぞー!」

『あら、そんなこといいのかしら？　ダーリンっていまお金に困ってるんじゃないのかしら？』

「……………誰に聞いた？」

『その携帯の持ち主さん』

おっさんを睨む俺。　睨まれたおっさんは何故か注文の品を運んでいた。　いや、まじでなにしてんだよ…………

近くにあった椅子に座りながら足を組む。

「それで？　確かに俺は金が要り様だけど、アテはしつかりと確保してますので」

『ふくん…………。　ところで、現在何万貯まったのかしら？』

「…………3万くらい」

『なかなか厳しいわね〜』

「まあ、残り7万だからな。　なんとかしてみせるよ」

俺は早々と早急にいち早く誰よりも早く風よりも光よりも早くこの電話を切れたかった。

なぜならば、キャサリンがこの後言うであろうセリフがなんとなくわかっていたから。

確信のない確信。　しかしながら、俺のこの予感——

『それじゃ、ウチのお店で働こうか』

「お断りします」

あつさりと当たるのであった。　勿論、このキャサリンの提案だけはなんとしてでも却下しておきたい。　これだけは却下しなければ、俺の穴が大変なことになるからだ。

『あら、どうして？　ダーリンはお金が必要なんですよ？』

「必要だけど、かなり必要だけど、アンタの店だけでは働きたくないんだよー」

『5万』

「ぐっ——!?!」

『ダーリンの働きしだいでは、もっと増えるからしれないわよ〜。』

夜の10:00から深夜00:00まで働くだけで5万。　ダーリンとしても咽から手がでるほどいい仕事だけ思うんだけど☆』



「た、確かにいい仕事だけだな……」

『それに今回は、ダーリンを襲わないって約束するから。　ね?』

「本当だろうか?」

『もちろんよ♪』

「……護衛を一人、つけさせてもらう」

『もう! 私達のこと信用してないのねっ!　もう怒っちゃうわ!』

ぷんぷん!』

だれがお前みたいな変態野郎を信じるか。　それにぷんぷんなんてぶりっ子アイドルみたいなことやめろ。　アンタはどう考えてもぷんぷんよりぶりよぶりよのほうが似合ってるから。

「はあ………。　まあ、これも金のためだ。　いくよ、バイト。　いかないと、ヤンデレよろしくアンタの裸付きメールを延々と送られそうだし」

『心配しないでダーリン!　バイトにきても裸メールは送ってあげるから!』

「いるかボケ!」

キャサリンと軽く仕事の内容を聞いたあとに、携帯を閉じておっさんに返す——途中でおっさんに依頼することに。

「おっさん、明日のバイトはお前もこい。　道連れだ」

「うえっ?!　なんで俺までっ?!」

「俺が喰われるかもしれないだろっ?!　相手はキャサリンだぞ?!　いまは引退したけど、現役時代は魔力量Eでありながら魔導師ランクAAAの『砕き鉄塊の拳(トロールハンマー)』と呼ばれたキャサリンだぞ?!　俺には荷が重すぎる!」

「……まあ、確かに俺にも責任はあるしな……。　しょうがない、逝つてやるよ」

おっさんは何か諦めの境地に達しながらも頑なに頷いた。　表情は死地に赴く戦士である。

そんなとき、嬢ちゃん俺の袖を引っ張りながら質問してきた。

「あのーひよつとこさん。　その……キャサリンって誰ですか?」

まあ、その困惑した顔と恐怖している表情は至極真つ当な反応とい

えよう。　しかしながら、俺自身もそこまでキャサリンのことを知っているわけではない。　知っていることとすれば、魔力量はEでありながら、魔導師ランクはAAAという、時空管理局でも異彩を放ち異才を用いていた男である。

「なんというか……お前らの大先輩だよ。　下手したらカリスマという点では、はやてやなのはやフェイト以上の力をもつ人かもな」

まあ、その人は現在、ゲイバーというかオカマバーを開いているわけだけど。

#### 44. ホモと女装と深夜のテンション

最近、彼の様子がおかしい。いや、おかしいという点だけを抜き出せば彼は元からおかしいのだが、もつと言えば彼の存在自体おかしい話なのだが——とにかく、最近の彼はおかしいのである。料理・炊事・洗濯・家事どれか一つでも劣っているわけでもなく、むしろこの頃前よりもうまくなっている気がするけど……それでも直観的に幼馴染の坎的に長年隣に傍にいる身としては、最近の彼はおかしい気がする。何故私がかうもおかしいと思うのか、それにはいくつか理由がある。

一つ目は、彼が部屋に籠り出したこと。

べつに引きこもりの心配をしているわけじゃなく、というか部屋から出なくてもべつに問題はないのだが、最近の彼は部屋に籠ってノートに何かを写したり、パソコンで何かを調べたり、電卓で執拗に何かを計算したりと、一人で作業していることが多い。

必然的に私たちと遊ぶ機会も減っているわけだ。べつに遊ぶ機会は減つてもいいけど……それがいつまでも続いたり、一人で何かコソコソしてるのを見るとそれはそれで寂しい気がする。そう——尻尾を振っていたペットがある日を境に突然よそよそしくなつたみたいな感じだ。

なくんか……私とフェイトちゃん以外の人に尻尾を振っている気がしなくもない。

二つ目は、ヴィヴィオがウェイトレスさんのマネをしだしたりすると慌てて止めにはいることだ。

普段のヴィヴィオはメイド服を着ていたり、不思議な国のア○ス風衣装を着ているので私もフェイトちゃんも可愛らしくヴィヴィオの動作をみているのだが、彼だけは違っていて『こ、こらヴィヴィオ!?! 家ではダメだって!?!』とヴィヴィオを止める始末。ヴィヴィオもヴィヴィオでそれに何も文句も言わずに『えへへ。かわいい?』となぜか止められたことに上機嫌。

まるで私とフェイトちゃんを差し置いて、二人で何かをしているみ

たいだ。二人してなにかを隠している——彼が私に対して隠し事？

「そんなのダメー……!!」

『うわっ!? いきなりどうしたんですかなのはさんっ!?』

ガラッ! と回転椅子が倒れる音と部下が私を呼ぶ声で我にかえる。

「あつ、えーつと……にやんでもにやいよ、にやんでも」

「なのは、ネコ語になってるよ!? 大丈夫!」

「う、うん。大丈夫」

フェイトちゃんが私のほうに近づいてくる。もしかしたらフェイトちゃんも私と同じような考えをもっているかもしれない……。

「フェイトちゃん、ちよつといい?」

「え? どうしたの?」

「う、うん……。えーつと、さ。ちよつと話したいことがあるから休憩室にいかない?」

「え? べつにいいけど……」

そうして私はフェイトちゃんを連れだつて休憩室に行く。途中後ろのほうで、

『なのはさんとフェイトさんの百合でレズでイケナイ展開に……!』

『ティア! カメラの準備はできてるよ!』

とのなんとも嘆かわしく、情けない自分の部下の声が聞こえてきたので

「あ、ヴィータちゃん。ちよつと二人に訓練お願い」

「あー、いいぜ。おいスバルとティア。カメラなんてもつてないで行くぞ」

『なのはさんのイケズー……!』

いや、訓練も大事だからね?

☆

「それでなのは。どうしたの?」

休憩室でフェイトちゃんとアイスココアを片手に対面に向かい合う。

「うん。近頃、アレが変だと思わない?」

「アレ? ……あ、俊のこと? うくん、確かに変だとは思うかな」

「だ、だよね!? やっぱり変だよね!」

「ちよつ、なのは顔が近いよ! ま、まあ……なんだか少しよそよそしい感じはするし、最近は部屋にこもってパソコンで何かしてるよね」  
「そうなんだよ! 私達に隠れてなんかコソコソしてるじゃん!? それって——どう思う!?」

「え? べつにいいんじゃない?」

「——へ?」

フェイトちゃんの意外な言葉で拍子抜けする。

あ、あれ? フェイトちゃんなら『ダメだと思えるかな』って言うと思っただけど……。

「……え? フェイトちゃんはそれでいいの……?」

「うくん……。べつにいいってわけじゃないけど、俊が何か自分で頑張ってるみたいだし、私はなにも口出しはしないかな? ヴィヴィオも巻き込んでみたいんだけど、危ないことはしてないみたいだしね」

「うつ……確かにそれはそうだけど……。でもでもでも! フェイトちゃんは心配じゃないの?! 懐いていたペットがふいによそよそしくなったんだよ!」

「お、おちついてなのは!? 顔が近いって!? た、確かに心配ではあるけど、俊なら大丈夫だよ。人外レベルの人たちが周囲には沢山いるし、俊だって一般人よりかよっぽど強いし」

「た、たしかに強いのに知ってるし、そこらへんは心配してないけど……。ええと、そういうことじゃなくて……。この頃遊ぶ機会とか減ったし……。私達以外の女の人と会ったりとか……。そういうこともあるわけで」

「え〜つと、なのは? もしかして寂しいとか?」

「へっ!? そ、そんなわけないじゃん! ただ私は、ペットがなにか間」

違いを起こしたら去勢させないといけないことと、相手方の心的外傷と今後の将来を心配してるの！ だから……え〜つと、その……とにかく、これは一度問いただしたほうがいいと思うんだ！」

多少強引ではあったものの、私の結論をフェイトちゃんに聞いてもらう。フェイトちゃんは顎に手を当てて1分ほど考えたあと、

「……たしかにそれはいいかもしれないね」

と、納得してくれた。うん、やっぱり問いただしたほうがいいよね。だって、去勢するかしないかの瀬戸際なんだから。

☆

夕食も終わり、お風呂に入り、あとは寝るまでだらだらしているだけの時間が過ぎていく中、彼はこそそと玄関へと向かっていた。

私とフェイトちゃんは目で合図して、ヴィヴィオをつれて彼の後ろをついていく。彼が玄関のドアへと手をかけた瞬間――

「どこにいくのかな？ よかつたらなのは達にも教えてほしいかも。ねえ、フェイトちゃん？」

「そうだね、なのは。出かけるには些か遅い時間だよ、俊」

分かりやすく肩をビクリと震わせ、彼はぎこちなく首を動かしたあと、ぎこちない笑みでというよりも引き攣った笑みでいまにも泣きそうな笑みを浮かべていた。

「や、やあ二人とも。奇遇だね、こんな所で会うなんて」

「いや玄関だから会おうと思えばいつでも会えるよ。つて、そういうことじゃなくていまから何処に行くのかな？」

「えーつと、コンビニに行つてきます」

「なにか買うものがあるの？」

「ベビーパウダー買ってくる」

「まっつて、この家の年齢でベビーパウダー使う人はいないんだけど」

「俺がフェイトのおっぱいをチューチューしながらベビーパウダーがついた手でなのはにア〇ルを弄つてもらうんだ」

「絶対に行かせないよっ!?! いまの会話で君の特殊な性癖とか全部無

視してあげるけど、絶対に外へと出さないからね!？」

ガシツと彼の肩を掴む。フェイトちゃんも同様に唇が青紫になりながらも懸命に私以上に必死に彼を止める。彼を離すことで被害を被るのは間違いなくフェイトちゃんなので必死にもなるよね。でもフェイトちゃん、爪が喰い込んで彼の肩出血してるんだけど。「しゅ、俊ダメだよ!？」今日は私達と一緒にいよ!？ ね!？ なんなら部屋で一緒に寝てもいいから!？」というか仮に俊がベビーパウダー買ってきても絶対にしないからね!？」

「俺だって……! 俺だってア○ル弄ってもらうなら好きな人達に弄られたかったよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!？」

彼は泣きながら、そう絶叫して、私達の制止を振り切って玄関の扉を開けて出て行った。

開け放たれた玄関の前でポカーンとする私達。

「……いっちゃったね……」

「うん……、そうだね……」

「とりあえず、玄関閉めようか……」

「うん……、そうだね……」

私達はそつと玄関を閉め、彼の存在を記憶の中から抹消した。

☆

なのは達の制止を振り切る形で逃走し、俺はいまキャサリンのバイト先『あなたの穴にインサート』の店内で掃除をしていた。店名からして、綺麗でケバケバした女性が多い——と思うだろうが、実はその逆でゴテゴテとしたガチムチっぽい人達で女装してお酌をするというなんとも近づきたく絵面が展開されていたりする。

しかも全員、元管理局員。いずれも現役時代に腕を鳴らした猛者たちなのだが、そんな男たちの前でもこの人物は別格であった。 鋼

鉄にして鋼殻、『砕き鉄塊の拳(トロールハンマー)』と呼ばれた男。

名前はキャサリン。 本名——岩尾管狗いわおくだくさん。 魔力量はあえてランクにするしたらEランク、しかしながら魔導師ランクはAAAランク。 そんな人がいま——

「ダーリンってばほんとかわいいわ〜！ ——食べちゃいたいくらい」

俺の尻を執拗以上に愛撫していた。ズボン越しからとかじゃなく、パンツ越しに、愛撫——というよりもより正確に表すのなら——俺の尻をわしづかみしていた。

擬音で表現するのなら、ぐにぐに！ という感じだ。

「あの……何度もいうように俺はキャサリンのダーリンでもないし、死んでもお断りだし、俺の尻をわしづかみにするな！」

「でも可愛いわな〜！ 普段は変態行為を日常的に繰り返すあなたが、ふりふりのミニスカメイド服で髪を強引にツインテールにして男性用縞パンをはいて顔を赤くしているダーリンはすごく可愛いわよ♪」

「べつにふりふりのミニスカメイド服を着ることに抵抗はないし、男性用縞パンを履くことに対しても抵抗はまったくないし、ツインテールもたまに遊びでやってるから全然いいけども——それよりもなによりも、アンタら従業員の俺を見る目が怖いんだよ!」

だから俺は来たくなかったのだ……！ そもそも、この人は初対面からしてもおかしかつた。 おっさんに紹介されてキャサリンに会ったとき、初対面にもかかわらず個室に連れ込まれたのは悪い思い出だ。

しかもこの人、強引ではなく紳士的に服を脱がそうとする。 引き千切るんじゃないくて、執事がお嬢様に服を召すときのように、もう色々怖い。 けど——この人のカリスマ性だけは本物だ。 なんてって、此処の従業員全員——キャサリンの元部下なんだから。

そして俺のいまの現状は、先も述べたようにふりふりのメイド服(俺がよくなのはやフェイトに着させようとするタイプの奴。 メイド喫茶とかで多いかな)に、男性用縞パン。 ちなみに白と青色であ



る。そして髪はツインテールにしている。ツインテールといつても、横からちよこんと出ているだけなのだが、これでも立派なツインテールだから問題はないはずだ。

「にしてもまあ……よくもこんな人がくるもんですな。潰れてもなんらおかしくないのに」

「リピーターが多いのよお。それに——男同士のほうがワイワイガヤガヤできるでしょ？ 女と飲むとね、どうしても男ってのは恰好つけたくなる生き物なのよ。それが男の本能的な行動欲求なの。」

でも、そんなことしたらストレスたまるでしょ？ そういったストレスを感じた人達は此処には集まってくるのよ」

「なんか麻薬みたいですね」

「この世は麻薬で満ちてるわ。ダーリンの大好きなアニメやマンガ、ゲームだって麻薬といえば麻薬なのよ？ 違いのは合法か違法かだけ」

「なるほどなく。だとしたら、恋も麻薬ってことか？」

「そうよお。恋以上に中毒性が高いものないわね。だって失つても、また戻ってくるのが恋愛なんだから。人間である以上、切つても切れないわね」

パワプロでも恋の病になると練習できないしな。恋って恐ろしいぜ。

『キャツサリン！ 俺の相手してよお〜！』

「はいはい！ いま行くわあん！ あ、ダーリンもいきましょ？」

「えッ!? 俺はいいよ!? 掃除してるから！」

「でも、せっかく可愛いんだからいきましょよお〜！」

「だーかーらー！」

「6万に上げてもいいんだけど……。ダーリン乗り気じゃないし

——」  
「なにぼさつとしてんだキャサリン！ 客をまたせるな！」

「うふ、そういう素直なところ大好きよ」

やめろ 離せ 近寄るな

「ハローハロー、山ちゃん。最近調子はどうなの？　つと、その前に紹介しとくわあ！　私のダーリンであるカナよ！」

「え？　何勝手に源氏名つけてんだよ、変態ガチムチ女装野郎」

「6万欲しくないのかしら？」

「はじめまして〜！　カナです☆！　カナは此処でのバイトは今日初めてなのでちよっぴり緊張していますう〜……。みなさんよろしくお願いします！」

人は金が絡むと外道に堕ちるとよく聞くが、まさかナチュラルに外道で下種の俺がここまで堕ちるとは思わなかった。でも——こんなときのために裏声というか、萌え声が出せるように練習しといてよかったぜ……！

「へ〜、カナちゃんか〜！　キミかわいいねえ……。ちよつとこつち来てお酌してくれない？」

「あ、はい！」

愛想を振りまきつつ、手で呼ぶ客の隣に移動する。その時にちらりと店内を見回すと、おっさんが従業員のみんなに慰められている光景が目に入った。……普段から色々大変だもんな……。俺が半分を占めてそうだけど。

客の隣に座ると、酔っているのか俺の尻を撫でてきた。そして俺の耳たぶを噛んできた。

「おいてめえ、酔ってるからつてなにしてもいいと思うなよ。いますぐその手をひっこめねえと手切り落とすぞ」

『おっふおん！』

「も、もお〜！　やめてくらしやいよお〜！　エッチっ！」

「カナちゃんかわいいなあ〜！　お尻もぷにぷにだし、どう？　お酒とか」

「あ、カナは未成年なのでお酒は飲めないんです〜！」

「え？　まじで？　カナちゃんは何歳かな？」

「永遠の17歳です☆」

張り倒したい。客とか関係なく、いますぐこの場でこいつを張り倒したい。テーブルに置いてあるペーパーナイフを使って刺殺したい。

「そ、そういうえば山さんはどんな仕事をしてるんですかあ？ カナもつと山さんのこと知りたいなあ〜」

ちよつと甘えた声でそう聞くと、山さんはデレデレしながら答えると思つたのだが、海も真つ青なほどの青さと海溝ほどの暗さで答えはじめた。

「しがない漫画家だよ。以前は少年ジャ○プで連載してたんだけど……いまは人気もなく持ち込みマンガもことごとくボツ食らつてるよ……」

……あれ？　もしかしたら地雷踏んだかな……？

山さんは俺の肩を掴みながら、というか、ぎゅつと抱きしめながら叫び始めた。

「カナちゃん！　俺はダメなマンガ家なんだよっ！　どうしようもないほどダメな人間なんだ！」

素晴らしいながら、俺の胸を揉む山さん。　素晴らしいながら、俺の尻を撫でまわす山さん。　素晴らしいながら、俺の匂いをスーハーシューハーと嗅ぐ山さん。

超絶に気持ち悪いです、本当にありがとうございます。

しかしながら、この人が本当にマンガ家で連載していたというのであれば、俺はこの人の連載マンガを読んだことがある。　というか、ファンである。　タッチが柔らかく女の子がエロイのだ。　健全なのにエロイのだ。

俺はもう一度、あの作品を読みたい。　あのタッチの女の子を再びみたい。

だから、山さんの肩を掴みそつと剥がし、満面の笑顔で一ファンとしてお願いした。

「カナは山さんの作品をずっと読んでました。　そして好きでした。

カナはもう一度、山さんの作品を読みたいです。　だから——お願い、カナのために、描いて？」

「カ、カナ……ちゃん……」

「はい？」

山さんが下を向いてわなわなと震える。かと思うと、

「結婚しよおおおおおおおおおおおお！一生幸せにするからあああああああああ！」

「ちよっ!? 俺男だつてば?」

「一向に構わん! むしろそれがいい! カナちゃんのような可愛い美少女がいてたまるか!」

「いや構えよっ!」

血走った目で俺を押し倒す山さん——しかし山さんはこの人を忘れていた。オーナーである、キャサリンを。

「山さん、ちよくつと度が過ぎたわねえ。個室にいきましようか?」

キャサリンは俺の名を呼ぶ山さんを個室へと連れて行った。

俺はというと、その間にテーブルを他の従業員に任せて店の端へと避難した。

☆

このバイトもやがて終わりを迎える。店自体はまだまだ続くが、俺はこれからバイト終了までの30分間をのんびりと過ごすことにした。ちなみにおっさんは酔いつぶれてる。お前、あれだけ行きたくないと言っていたのに、一番楽しそうだったぞ。

何気なく窓の外をみる。既に暗い常闇が辺りを支配しており、夜行性動物が本来の力を発揮するときがきたようだ。

チン

「飲むかい、カナちゃん」

「どうも。それとカナちゃんはやめてくださいよ」

「それじゃシュンちゃん? ひよっところちゃんは可愛くないし」

「……カナでいいです」

あぶねえ……一瞬寒気がしたぞ!?

軽く身震いしたのち、持ってきてくれたグラスに手をつける。

「カルピスですか」

「いまのキミが白濁液を飲む姿を想像すると……勃起がとまらんぞ」

「そのチ○コへし折るぞ」

カルピスを飲む俺。それを写メる男。どうみても変態の図である。

「つて、おい!? 写メるなよ!?!」

「大丈夫大丈夫。あとでちゃんと送るから」

「いや送られてもリアクションに困るんだけど!?!」

これで抜くことができたならプロすぎるだろ。いくらなんでも自分自身の女装姿では抜けないぞ。

「でも結構いい感じだぜ?・ほら」

そういつて俺にみせる。……なるほど、確かにこれはアリだな。

訂正、どうやら俺は自分の女装姿でも抜ける男であった。

「それにしてもすまん、隊長が——いや、キャサリンがお前を巻き込んでよ。本当は掃除だけのはずなのに」

「べつにいいよ、給料が上がるんだ。それ相応のリスクがつきものだろ?」

かなりハイリスクではあったが。

そういうと、男は笑った。ニツコリと穏やかに。女装姿で。

「やつぱり、お前は面白い男だよ。なあ、キャサリンがなんでオカマバーを開いているか知ってるか?」

「さあ? あまり知りたくもない話題だが、その雰囲気から察するに色々とあつたり?」

「そう、色々とあつたりしたんだよ。キャサリンが辞めたのは丁度10年前さ」

☆

当時、という俺たちからしてみれば10年前。キャサリンは犯罪者がその名を聞いたら二重の意味で縮み上がるほどの魔導師であつたらしい。一つは魔導師ランクが高く、強いこと。もう一つ

は男色系男子であること。その二つは犯罪者たちにキャサリンの名を広めたことだという。特に後者の理由は相当大きいことであつた。

そしてこれが一番驚いたことなのだが、なんとキャサリンは海ではなく陸のほう、つまりミッドの平和を守っていたのだ。陥れるためではなく、知識としては陸は海より劣っていると聞いたことがある。それに優秀な魔導師は海に行くとも聞いた。（ちなみになのは達は海である）そんな中でキャサリンだけは陸にずっといたそう。しかしながら、理由を聞いてみたところ、その理由がなんともキャサリンらしく面白かつた。

『だってパンツが見えちゃうじゃない！』

いや、お前ふんどしだろ。

そう当時の人々は突つこんでいたに違いない。俺なら間違いないくそう突つこむ。

こんな人がカリスマ性拔群とはにわかには信じられない話であるが、部下の皆さん、つまり現従業員たちは口を揃えてこう言った。

『あの人は性別が男か女か迷子になつていても、生き様だけは漢だよ』  
そしてこんなエピソードを教えてくれた。

一昔前、ミッドで凶悪犯罪者がやってきた。陸の者たちは市民を守るために必死になつて戦うが、相手はランクでいうとSクラス。とても陸で敵う相手でもなく、海のほうもランクがランクなだけに人材を出すことに抵抗があつたらしい。

一人、一人、また一人と局員は倒れ、ミッドがパニックになるなかその男はいつものように、散歩でもするかのように、小さい子どもにアメをあげながら、その自慢の拳で敵を蹴散らしつつ犯罪者のボスの前にたつた。

いつものふんどしスタイルで。舐めまわすように見つめながら。

『おい、その変態。なにしにきたんだ？』

ボスは問う。

『色男探しにきたの』

キャサリンはそう答えたらしい。

ボスはまだ15歳くらいの子どもで、管理局を悪と決めつけた中二病を発症させた子であった。

『魔力量もAAで魔導師ランクがSの俺に勝てるのかよ？ お前ランクは？』

『魔導師としてのランクならAAAよ。 魔力的にはEくらいだったかしらね』

ボスは笑う。 嘲笑する。

小馬鹿にしたように話しかける。

『ランクが俺より下じゃないかよ、雑魚が！』

素晴らしいながらキャサリンと戦い——結果、キャサリンの圧勝らしかった。

魔法もなにも使わずに、キャサリンは相手を鉄拳で征したのだった。

そしてキャサリンはいった。 魔導師を全否定するであろう発言を口にした。 しかしながら、キャサリンの言葉で救われる者もいたかもしれない。

キャサリンはこういったのである。

『魔力なんてただのお飾り。 それに頼って戦うような奴なんか、怖くもなんともないわよ。 魔力ありきでしか何もできない魔導師なんてクソくらえ』

☆

「それって……管理局に喧嘩売ってますよね……？ 大丈夫なんですか？」

「まあ、大丈夫だったらしいぞ」

「というか、キャサリンもう少し早くこれなかったの？」

「便秘らしくな、5時間くらいトイレにいたからさ。 完全に戦力から外してた」

締まらねえ話になったなあ……。

「あの人は常に自分の行動で示してくれたんだよ。 誰よりも臆する

ことなく、誰よりも早く一歩進んでくれたんだ。だからこそ——俺たちはあの人が好きなんだ。あの人と一緒にいたいんだよ」

「……ちよつとだけ、わかる気がするよ……」

俺自身も少なからず、そういうったところがあるからな。

基本的に俺は外道で根性が腐つてて性格も最悪な男である。だからこそ、魔力量がA以上あつて、魔導師ランクもA以上あるやつが、『ランクなんてものはただの飾りなんですよ。頭の固い連中たちにはそれがわからないんです』

なんてことをほざいていると、それはもう俺の脳内ではただの嫌味にしか聞こえないわけである

『お前それ、ランクのことを気にしている女の子の目の前で言えんの？』

と、問いただしたくなるような男なのだが、

「なんか格好いいな……キャサリン」

「ああ、最高に格好いいよ」

なんだかキャサリンの喋ったセリフだと、なんとなく恰好よく感じてしまう。たぶん、本当に拳のみで戦うからこそだろう。魔力なんてものに頼らずに。魔導師と

しては三流で、人間として一流の男なのだろう。

奥のトビラがふいに開き、中から目下の話題であるキャサリンが出てきた。

「あらあごめんなさいね、ダーリン！ はい、お給料。そ・れ・と——」

チュ

「これは気持ちよ、気持ち」

「どう考えても頬にキスマークがついてるんですけど、気持ち悪くらい赤くて大きなキスマークが俺の頬についてるんですけど」

給料の袋をもらう瞬間に頬に当たった感触がおぞましくて今日は寝れないかもしれない。

俺は寝転がっているおっさんを肩に腕を通しながら抱き上げ、キャサリンにずっと疑問に思っていた質問をぶつけることに。



キャサリンのエピソードはわかった。名台詞もわかった。ただ――

「なんでキャサリンは管理局を辞めたんだ？　いまならおっさんとの二枚看板なのに」

いまのミッドは大変治安がよく、治安が良すぎるところではゴキブリが出てきたくらいで近隣住民がパニックになるほどである。

だがしかし――犯罪なんて争いなんていつ起こるのかわからない。だから、戦力はもつと多いほうがいいだろうに。

そういった意味も込めて発した質問だったが、キャサリンはまるで子どもをあやすように俺の頭に手を置いたあと、笑顔のままこういった。

「私には、局で働くよりも、みんなでわいわい騒げる場所で好きなときに好きなお酒を飲むほうがあつてるのよ」

そう答えた。

そして続けざまにこういった。

「頼むわよ」

そんなセリフは本来ならば、時空管理局に勤めていて、なおかつエースオブエースやらなんやら言われているエリート集団の俺の友人たちに言うべきセリフであつて、こんな無職にいうことではないのだが、その瞳があまりにも真剣だったもので、俺もついつい答えてしまった。

「当たり前ですよ。俺は自宅を守る警備員ですよ？」

その答えをきいて、キャサリンはただただほほ笑むだけだった。

☆

泥酔状態のおっさんを家まで送ったと、猛ダツシユで帰宅したのだが、時刻は1:30。　良い子は寝ている時間である。　そして我が家基本的に俺を除いて良い子、というか良すぎる子たちなのでとつくに三人仲良く川の字で寝ているものだと思っていたのだが、意外や意外。　なんとまあ、リビングの電気が点いていた。

シルエツトからして、なのはであることはわかった。

玄関にいき、ポケットをまさぐり鍵がないことにきづく。そういえば、あのときは意気消沈して出かけて行ったから鍵なんか持たなかったな。ヴィヴィオとフェイトが寝ているのでインターホンを鳴らすわけにもいかず、どうしようかと悩んでいると、内側から鍵をあける音がして

「……随分と遅くまで、ベビーパウダーを買ってたんだね……」

「や、やあ、ただいま。 ちよつと高級品のやつを買ってさ」

「ふくん……それで？ なにも持ってないけど」

「帰宅途中に食べちゃった」

「ベビーパウダーは食べ物じゃないからねっ!？」

「ちよつ 晚いんだから大きな声はダメだろ」

「あう……」

近隣住民の確認するなのは。 誰もなにも反応がないことを確認して、俺はなのはに入れてもらうことにした。

—玄関—

「ずつとまっつててくれたの……?」

「べつにキミを待ってたわけじゃないよ。 書類仕事をしてたらこんな時間になってただけなの。 それでふいに外でキミの気配を感じたから玄関にきただけ」

「あれ? でも書類仕事は六課で終わらせたっていったよな?」

「ま、間違えたの! ゲームしてたらこんな時間になってたの!」

なにをそんなにムキになってるんだ。

「ま、まあいいや。 俺はもう寝るから、ゲームもほどほどにな」

なのはにそういつて立ち去る——立ち去ろうとしたのだが、腕をギョつと掴まれ制止させられる。

「ホ、ホットミルクでも……飲んでいかない?」

うくん……正直いまの気分としては寝たいのだが。 めちゃくちゃ寝たいのだが。

それでも——俺を見つめるのが可愛すぎて、ついつい頷いてしまった。

台所に置いてある電子レンジを使ってミルクを温める。

何故こんなことをしているのか？ それは一重に彼の行いを問いただすためである。だからこそ、彼とゆっくり喋ることのできる場所を作ったのだが――

「なーんか、取り方によつては、私がアレのことを気にしてるみたいない取り方だよー……」

まったく言っていないほど、全然彼のことは意識していないわけだけど。そもそもありえないわけだけど。

「おまたせー。 って、もしかして寝てるの？」

リビングに戻つてみると、彼はソファアに座つたまま寝ていた。

「もう、せつかくのホットミルクが台無しだよ」

テーブルにホットミルクをおいたあと、彼の隣に移動する。 いや、ここは強引にホットミルクを飲ませるといふ手も……。

「……だよ……」

「え？ 何かいった？」

彼の寝言に反応する私。 しかし彼はそれ以上寝言をいうことはない。

なので私はもう少しだけ、顔を近づけることにした。 べつにこれに他意はない。 ただなんとなく、近づいてみただけだ。 そしてなんとなく言ってみた。

「ねえ……俊くん。 なのはは心配してるんだよ？ コソコソするのは、あまりよろしくないけど、この際目を瞑ってあげる。 いつかはちゃんと打ち明けてくれるって信じてるから。 でも――俊くんはお人よしでなんだかんだ言いながら、人を助けようとする人だから、知らず知らずのうちに巻き込まれたりして、そのたびになのはがどれだけ心配してるか分かってるの？ 絶対わかってないでしょ？ ううん、わかるはずないものね。 だってキミはいつも私達を優先しよ

うとするから。私達が一番だから。それはとっても嬉しいことだけど……でも、俊くんが思っていることはなのは達だつて思ってるんだよ？——ずっと隣で笑ってほしいの。ずっと隣で笑顔でいてほしいの。手を伸ばせば掴んでくれるんでしょ？しやがんでいたら声をかけてくれるんでしょ？ねえ俊くん」

これは深夜のテンションが巻き起こした、一種の魔法。だって普段の私はこんなことを考えてもいないんだから。

「最近はずっと機会も減ってるし、一緒に過ごす時間も短いよね。あんまりこんな状態が続くと、なのは泣いちゃうよ？いいの？好きな人を泣かしちゃって？」

いまの自分はとても意地悪な女の子だと思う。だって、彼の気持ちを手玉にとるようなことをしているのだから。

「そんなのダメだと思うんだ。一度好きになつたからには、ね？だから——離れないですよ……」

腕に力がこもり、その拍子に彼が目を覚ました。

「……ん……もしかして俺寝てた……？」

「う、うん。ちよつとの間だけね」

「そっか……。いや、いま夢でなのはが泣いてる夢みたからさ、駆け出して行ったら目を覚ました。うくん、あの世界の俺には頑張ってもらいたいものだ」

「それ夢なんですよ？」

「夢ってのは、必ずしも空想なんかじゃないと思うんだ。どこか違う世界の光景を映画のように見ているもんだと思っているよ」

「あ、そう考えるとちよつとすてきかも」

「だろ？」

彼の笑いに合わせて私も笑う。

彼はテーブルに置いたホットミルクに気付き、

「飲んでいい？」

と、聞いてくる。

もちろんわたしは笑って答えた。

「どうぞ」

彼はそのままホットミルクを取り、ゆっくりと飲んでいく。

その温かさのせいなのか、少しばかり頬を緩める——ところで気が付いた。

彼の頬になにか赤いマークがついていることに。

「ねえ、このマークどうしたの？ 出かける前はなかったと思うんだけど」

「へっ!? いや、これは……その……なんでもないよ、なんでも!」

「ふくん、……なんか怪しいなー。もうちよつとみせて」

彼の声を無視してもつとよく見る凝視する。手でゴシゴシと拭ったのか、かなり消えかかっているけど——

「これってさ……キスマークだよね?」

私の中で、何かが切れる音がした。

☆

彼を庭に放り出した後、私はフェイトちゃんとヴィヴィオが寝ている私室に帰ってきた。もう夜も遅い時間帯だ、はやく寝ないと……。

「あれ……なのは? もういいの?」

「あ、フェイトちゃん……起きてたんだ」

「うん、ビンタの音がここまで聞こえていたよ」

「それは俊くんが悪いよ。頬にキスマークなんてつけて帰ってきたんだから」

「えっ!? それほんと!? ちよつと詳しく聞かせて!」

## 45. ホモ疑惑

深夜庭に追い出された俺は、そのまま朝方まで延々と草むしりをしていたわけだが、これがなんともまあハマってしまい……いまは若干楽しんで草むしりをしているのが現状。こんなことでもないとなかなか草むしりをしようと思わないのでこれはラッキーととらえるべきか。

いや――

「おはよう、どスケベ女たらし」

「お、おはようございませす、なのはさん……フェイトさん」

部屋の窓から俺を呼ぶふたりの声と顔をみたのなら、これはきつとおそらくラッキーとは思えないだろう。俺は庭でしゃがみながら草むしり、対してあちら側は部屋から俺を見ているので、必然的に俺を見下す形になる。見下すといっても、舐めてかかっているみたいなことは一切ない。どちらかというところ、完璧に殺しにきてる感じだ。正直、怖すぎてチビリそう。

「あ、あのさ……なのはさん？ 昨日のことなんだけど、ちよつと誤解があつたかな、なんて個人的には思うんだよね……」

「へ〜……誤解？ どんな？」

「いや、それは言えないけど……」

言ったらバイトのことは知られてしまうし、バイトのことを知られるとプレゼントのことまで言わなくちゃなくなる。それは本当に勘弁願いたい。

「私達に言えないようなことをしてきたんでしょ？ たらし」

「信じてたのに……」

「いやほんと誤解なんだってばっ!? フェイトもそんな悲しい顔をしてないで信じてよ!」

結局、俺は二人の誤解を解くことができないまま二人を見送り、ヴィヴィオと一緒にバイトにでかけた。今日のバイト先はペットショップである。あのネコもどきを預けたところだ。

「やあシュン。 やっとキミも魔法少女になる決意を固めてくれたんだね」

「そろそろ自分の世界に帰れよ。 ゲームもでるだろうが」

「そういうキミこそ劇場版とゲームがでてるじゃないか。 三期は尺の問題がありそうだけど」

「流石に三期の劇場版は厳しい気がするけどな。 とうかそれ並行世界の話だろ。 熱血萌え燃えバトルアニメの話だろ。 この世界には関係ねえよ」

「それにしても並行世界の彼女たちは大変だね。 大きな傷を負ったり、上司にバインドで縛られたあげく魔力弾ぶつけられたりさ」

「残念ながら並行世界まで関与しようと思わないのでこの話題はここまでにしよう」

「キミはいつだってそうだ。 そうやって逃げてばかり。 かみやが聞いて呆れるよ」

「かみやは父さんが捨てたから俺は関係ないの」

ネコもどきはこの前と変わらないカゴにいれられて、客寄せパンダのような立ち位置にいた。 ヴィヴィオは熱心にふれあいコーナーで子犬や子猫・ハムスターなんかと戯れている。 めつちや可愛い、最高に可愛い。

「それにしても、キミは元いた世界に帰れといったけど、だったらこのカゴから出してくれないかな。 正直迷惑なんだよね、ボクのまわりにはいつも小さな子どもが集まって、触ろうとしてくるんだ。 正直迷惑だよ」

「エサ食いながら言われても説得力がないんだが」

お前傍から見たら完全に可愛い小動物だもん。 性格は殺したくなるほどアレだけど。 性格は殺したくなるほどアレだけど。

「ボクはこの環境を認めたわけじゃないよ。 けど、ボクがこうしていると売り上げが伸びるみたいだからね」

「お前いいところあるんだな」

「高級なエサをもらうためだよ」

「ふくん……。 それでも、お前のおかげで売り上げが伸びて、猫井さんが喜んで、お前の愛らしきで子どもが楽しそうにしているわけだ。私利私欲でここまで他人を笑顔にできるなんて、お前は最高かもしれないな。 まさに可愛い正義だよ」

「それならボクと契約をしてくれないかな？」

「それは断る」

ネコもどきと喋っていると、前のほうからピンク色の髪をしたツインテールの女の子がやってきた。 見た感じ中学2年生くらいだろうか？

「いらっしやいませ、なにをお探しでしょうか？」

「あつ えつと……。Qベえをみにきたのですが……」

「お嬢ちゃん、命を粗末にしちゃいけないよ」

ピンク髪のツインテールは困った顔をしながらも、若干俺を避けつつネコもどきのほうに顔を向けた。 確かにネコもどきは性格を抜けばマスコットの的な可愛さがあるからなく。 ちよつとだけ気持ちにはわかるかもしれない。

「キミはまたきたのかい？ ほんと飽きないね」

おい、勝手にしやべるなよ!?

そう思ったが、女の子のほうも気にしていない様子でネコもどきと喋りだったので、俺はそつとその場を後にしてヴィヴィオのほうに足を向けた。 人間関係って面倒だもんな。

☆

30分後

「よおネコもどき。 相談はお済かい？」

「相談ってほどのことじゃないよ。 ただ——人間という生き物はやはり理解できないよ。 自分が嫌な思いをするのであれば関わらなければいいだけの話じゃないか。 友情とか愛とか友達とか、ボクにはまったくわからない感情であり、わかりたくもない感情だね」



「当たり前であり、お前の言うとおりでよ。恋愛とか友情とか友達とか愛とか、所詮いらぬものなのさ。結局のところ、どんなに頑張っても世界は『自分』と『自分以外』でしか成り立たない」  
「……キミがそんなことをいうとはね。ボクはキミのことを誤解していたかもしれないよ。キミは意外と冷めている人間なんだね」  
「まさか。俺ほど萌えている男はいないさ。けど、不思議に思わないか、Qべえ。そんないらぬガラクタを人は必至に集めるし、笑顔で決して離そうとしない」

「だからボクからいわせればキミたちは理解できないんだ。何故そうまでしてガラクタを欲しがるんだい？」

「決まってるだろ。人が欠陥品のガラクタであり不完全だからだよ。だからこそ人は自分にはない部分を補う」

「なんとも情けない話だね」

「情けない？俺は誇らしく思うよ。完全なんて無価値に等しい」

遠くのほうで、猫井さんが俺を呼ぶ声が聞こえてきた。俺はそれに返事をして走る。その際に、ネコもどきを小さく呟いた。

『あの子……仲直りできたかな？』

お前も見事に不完全の仲間入りだな、ネコもどき。

☆

ひよっとこがペットショップでバイトしている間、彼女達もまた六課で仕事をしていた。

「最っ低！家にヴィヴィオがいるのにもかかわらず、変なお店行くなんて最低だよ！」

「まあなのはちゃん……ちよつと落ち着いたほうがいいんちゃう……？」

「ほら、フェイトちゃんはこんなにも落ち着いているわけやし」「おいはやて。フェイトが一心不乱にナイフを研いでいるんだけど」

「落ち着くんやフェイトちゃん!? 流石に殺人はあかんで!？」

まあ、仕事とは名ばかりな愚痴大会ではあるのだが。

「大丈夫だよ、はやて。足の神経を切るだけだから」

「それ家から出られへんで!？」

目が結構本気なフェイトにはやては本気で恐怖する。

ちなみにいまの仕事場には、なのは・フェイト・はやて・ヴィータ・シヤマル・スバル・ティアがいるわけなのだが、そんなことなどお構いなくなのははたまりにたまった鬱憤を吐き出す。

「飼い犬に手を噛まれた気分だよ」

「で、でもアレちゃう？ アイツが本当にそんなお店に行ったとは……。そ、そもそもアイツはなのはちゃんフェイトちゃんloveなんやし」

「いいや、アレの口から吐かれる言葉は嘘が多いし、すぐ調子乗るからね。行ったとしても不思議じゃないよ」

「……まあ、確かに嘘をよくつくな。あいつの存在自体が嘘みたいなもんやし」

ちよつと納得するはやて。

しかしながら、はやては何故そんな店にひよつとこが行ったのか、大凡の検討がついてるので、今回ばかりはひよつとこのフォローに回ることにした。恩を売つとく

と、後々いいことが起こりそうな気もするし。

そんな中、なのはの話聞いていたティアが疑問の？マークを浮かべながらなのはに聞いた。

「でも、なのはさんってひよつとこさんのこと興味ないんですよね？いつも軽くあしらってますし。それでもこんなに怒るってことは、ちよつとは気があるんですか……?」

そういった途端、ティアはバインドで縛られていた。

目の前にはなのはの身も竦むような冷たい視線が、

「……ティア、そういう問題じゃないんだよ？ 恋愛感情とかじゃないの。ただ——ペットの躰はきちんとしなないといけないでしょ?」  
「そうだよ、ティア。ペットの躰ができないで執務官なんて勤まらないよ。これは恋愛感情とかじゃないよ」

なのはとフェイトに至近距離から、凍てつくような視線をもらに喰

らい、コクコクと頷くティア。その頷きに満足したのか、バインドを解く。ティアにとって、憧れであり大好きなのはにこんなことをされては、少々堪えるどころか恐怖の種が植えつけられたことだろう。

「はあはあ……なんてゾクゾクするいい目つきなの……！ やばっ、いきそう。 すいません、ちょっとトイレでいってきます」

そんなことはなかった。

トイレに行くために席を立ったティアを微妙な表情で見送ったヴィータは、改めてフェイトとなのはに向き直る。

「まあ、アイツには何か考え事でもあるんじゃないか？ なのはが言ったように、アイツは二人の犬みたいなものだから、真っ先に二人にいうはずだぜ？ それを言わないってことは、アイツにも考えがあるのかもしれない」

「うっ……、そ、そうかな？」

「うんうん、そうかもしれない！ だからフェイトちゃんもなのはちゃんもあまり気に留めない方がいいかもしれない！」

はやての力強い声で、二人もしぶしぶながら納得する。 フェイトも研いでいたナイフを机の中にする。

なのはとフェイトは、『少し怒りすぎたかもね……』と、反省し、帰ったらしっかりと事情を聞こうと誓う。

はやてはその二人の結論に、心の中でひよつとこに謝りながらも張りつかせた笑顔でその場を取り繕う。 ヴィータとシャマルは二人でおかしを食べ、ティアはトイレから帰ってこない。

そして、スバルは――

「でもひよつとこさんが行った所って、オカマバーなんですよね？」

とんでもない爆弾を投げ込んだ。

上矢俊にホモ疑惑が発生した瞬間であった。

☆

夕方――

「ねえねえ、おにいさんネコさんほしいよお〜！」

「う〜ん……そうはいつでもペットの世話って難しいから、ヴィヴィオじゃちよつと……」

「え〜！ ヴィヴィオできるもん！」

「それじゃ、なのはにネコミミつけてもらうから、それで我慢するのは？」

「なのはママはモフモフしてないもん！」

なのはがモフモフしてたら怖いけどな。毛深いなんてレベルじゃねえよ。あ、でも下の毛は……まあ処理してるか。今度それとなく聞いてみよう。『そういえば、なのはって下の毛の具合はどうなんだい？』みたいな感じで。

「まあペットのことにかんしては、二人の意見を聞かないとなんともいえないなあ〜」

「それじゃママたちがいいっていったらネコさんいいの？」

「う〜ん……ok出すとは考えにくいけどな……」

ヴィヴィオと二人、台所で夕食を作りながら話す。ペットシヨツプのふれあいコーナーでネコのかわいさに目覚めたヴィヴィオは、珍しく強く俺にネコを飼いたいとせがんでくる。うんうん、こんなに自己主張してくれるとは嬉しいぞ。俺もヴィヴィオを応援したいけど……ペットは難しいからなく。やっぱりここなのはにネコミミをみつけもらうしか――

『ただいまー』

玄関から二人の声が聞こえてきた。なんだかちよつとだけ気持ちちが沈んでるのか、声が暗いけど……どうしたんだ？

朝の一件もあったので、正直怖くて足が向かないと思っていたのだが、男は単純な生き物らしく、二人の声のトーンを聞いた俺は無意識に玄関まで歩いていった。

「おかえりなのはママ、フェイトママー！」

ヴィヴィオが二人に飛びつく。二人はヴィヴィオを体全体をつかい、優しく受け止める。

「ただいまー、ヴィヴィオー！」

なのはがヴィヴィオに抱きつく。 ああ、可愛いなあ……！  
と、思っているとフェイトが俺の脇をチョンチョンとつつき、リビングに誘導する。

何が何だかわからないが、取り合えずついていく。 ……もしま、リビングでプレイするんですか!? 近くになのはとヴィヴィオがいるってのに始めるんですか!? いや、むしろいるからこそ始めるんですか! 立ちバックでいいんですね!?

もうどきどきわくわくアドベンチャーである。 フェイトのおっぱいはでっかい宝島である。 掴んじやうぞ、そのドラゴンボール。

「ねえ、俊」

ふいにフェイトが話しかけてきた。

「ふえっ?」

妄想爆走中の俺は、なんとも情けない声をあげたが、フェイトはかまわずに——俺の手を握りしめ、自分の胸に置きながら涙声で言った。

「男同士はやっぱりダメだよ!」

「わけがわからないよ」

何を言ってるんだ、この娘。 手を握られたときの俺の羞恥とテレをいまずぐ返せ。

「あの……え? え……? ちよつ、え?」

「俊の特殊すぎる性癖は私もなのはもわかってるし、許容することもできるよ? でも、流石に男同士はダメだと思うんだ。 ほら、やっぱり女の子同士ならなんか大丈夫だけど、男同士なら一気に世間の風当たりも強くなるっていうか。 確かに昨今では、そういうカップリングもおかしくはないけどやっぱりまだまだ辛いものがあると思うんだ」

「ごめん、本当にフェイトの言いたいことがわからないんですけど。俺がいつホモになったの。 確かに男もいいけど、それは二次元の話であって三次元には全く興味なんてないんだけど」

「ううん、口ではそういっても、俊の体は正直だよ」

こんなところで、そんなエロチックなセリフで聞けるとは思わな

かった。掲げているテーマが俺のホモ疑惑じゃなかったら、絶対にフェイトと性行為突入してるだろ、これ。シチュ的にフェイトが俺の体をSっぽく責めてるところだろ。

「いや、体も何も現状として俺は三次元のむさい男共に興味なんてないわけ。というかあつたら問題だろ。ミッド中に俺とおつさんの薄い本が出回るだろ。明らかに俺が受けて出回るだろ」

仮に出回っていたら俺は自殺してしまうかもしれない。けど、そうしたら二人と一緒にいられないわけ——

そう考え始めた俺に、フェイトは涙声で魅力的に感情的に扇情的に蠱惑的に俺に語る。

「——私じゃ、魅力不足かな……？」

甘く悪魔のような囁き。

女神が俺に問いかける。

その瞬間——

「もう辛抱できん!!」

俺はフェイトに襲い掛かり——バインドに捕まった。

周りを見回すと、なのはがちよつと安心したような、それでいてちよつとムつとしたような顔でレイジングハートを構えていた。

……え？　もしかして3P？　ついにフェイトのおっぱい揉みながらなのはにベビーパウダーつきの手でアナル弄られるの？

なのはとフェイトがコソコソとなにかを話しはじめ、こちらにくる。

なんかいいシチュなので、俺もちよつとモジモジしながら瞳を潤ませながらいった。

「その……優しくしてね？」

とても優しい動作で、当たる瞬間だけ速度が何十倍にも上がる魔力弾を撃ち込まれた。

……とりあえず、このホモ疑惑が払拭されたのと、昨日の件もうやむやにできたのでよかった……かな？

## 46. サーカス団

今日をもってこのバイトも終わる。それも意味すること、つまりは俺のバイト代がついに10万に達するということだ。長かった。予定通りならば今頃はプレゼントを渡し終えているはずなのだが、ちよいと狂ってしまいこのような時期になってしまった——のだが、それもこれもいまではいい思い出だ。

「というごとでおっさん、早く1万くれ。それで10万になるから」「いや、働けよ。交番にきてすぐにバイト料要求する奴がどこにいるんだ」

「ちっ、クソ使えねえ局員だな」

「お前くらいだぞ、局員を目の前にして堂々と暴言吐く人物は」

いや、俺よりもっとすごい奴いるぞ。あの六課に対してババア発言した猛者がいるからな。結果ははやてに瀕死の状態まで追い込まれてたけど。

それはさておき、

「今日のバイトってなんなの？」

「その前に、あの女の子はちゃんと信頼できるところに預けたか？」

「シヤマル先生に事情を話したら、快く引き受けてくれた」

「それならよし。それじゃ、今日のバイト先にいくぞ」

「だからバイト先どこだよ。変態女子高生大好き野郎」

「黙ってついてこい、変態キチガイゴミクス野郎」

こんな調子で口喧嘩しながらバイト先まで行きました。



何でも言うようだが、ミッドは他の世界よりかはるかに治安がよいと言える。それは強力な抑止力として管理局がすぐに駆けつけることができるからであり、ミッドの極一部（主に俺たちが住んでる周り）の奴らがキチガイ的に強いからである。

世界的にみても、（この場合の世界的とは遍く次元世界のことだ）犯

罪の件数が年々減っている。これは管理局の上層部や、一般局員が頑張ってくれているおかげだろう。

しかしながら、だからといって、犯罪がなくなるなんてことはありえないわけである。捕まえる者がいれば、その対極となる捕まえられない者がいるわけだから。

世界とは相応にして、調整されている。バランスをわきまえている。

善と悪

幸福と不幸

男性と女性

どちらか一方が増すことがあっても、どちらか一方が消えることはない。

幸福の中に不幸があるように

不幸の中に幸福があるように

善の中に悪があるように

悪の中に善があるように

世界はそうやって作られている。

だからこそ、正義と平和を掲げる管理局は凄いと思うし、大変だと思う。そして——報われないな、とも思う。だって、この世に悪は消えないから。それでもなお、世界を平和にするために管理局は存在する。決して、支配でもなく、管理でもなく、人々が平和に過ごせるように存在する。

だったら、その人々に——犯罪者というカテゴリーに位置する人間たちは入っているのだろうか？

「と、いう疑問があるんだけどぶっちゃけどうなのよ？」

「お前がもし魔導師ランクSSSでも、そんな考え方をもっているかぎり主人公にはなれないだろうな。次元犯罪者や犯罪者だって、一度でも助けを求めたのなら、それは俺たちにとっては助ける側の存在になるわけだ」

「裏切られたらどうすんの？」

「笑って殴り倒すくらい心の広さが無いとな」



「その考え方、嫌いじゃないぜ」

そういえば俺の近くにもそんな奴らが沢山いたわ。 主人公気質のあいつらが。

まあ、だからといって――

「犯罪者の説得を俺に任せるなよ!」

場所はミッドの郊外。 ちよつとやんちゃな奴らが集まる場所だ。

ミッドで唯一、犯罪者がいる場所といっても差し支えない。

おっさんは困った顔で、頬を搔きながら答える。

「いやー、な。 俺も連中がただの犯罪者ならボコって連れて行けば

済む話なんだけだよ。 ……こいつらの犯罪歴が問題なんだ」

「えー……そんな奴らの説得しなきゃなんねえの?」

「まあ、害はないからな」

おっさんと俺はスタスタと歩いていく。

やがて大きな広場にでる。

そこには――

「俺は小さい女の子と男の子の喧嘩止めてやったぞ! すんげえ悪い犯罪しちやっただぜww あいつらモジモジしながら『ごめんなさい』だってよ! 互いに嫌な奴に謝らせるとか俺って犯罪者の鏡じゃねえかww」

「俺なんて道で立ち往生してる婆さんをおぶったぜww あのババア泣きながらお礼言ってやがったww 優しくしなきゃいけない年寄を泣かすとか俺ってば鬼畜じゃねww」

「俺なんて学校中の窓清掃してやったわww 翌日見に行ったら、学校にいる全員が窓という窓をみていたぜww おかげで授業が遅れたらしいぞw 未来の若者の勉強時間を奪ったww」

世紀末みたいな奴らが恰好に似合わず、いい話をしていた。 なにこいつら、ちよつと可愛いぞ。

「あ? なんだよおっさん。 また来たのかよ? 俺らは犯罪者だからな、おっさんのいうことなんか聞かないぞ」

広場の中心で連中の話を聞いていた、俺より頭一つ分背の高い男が、おっさんに気付き話しかける。 そのおかげで、連中も気付きこ

ちらに振り向く。 見事なまでに世紀末。 ここなどくると、黒髪で  
ミクちゃんの特シャツ着てる俺が浮いているようだ。

「安心しろひよつとこ。 お前はミッドの市内にいても浮いてる存在  
だから。 まあ、それはそれとして、いつまで犯罪者ごっこを続ける  
つもりだ?」

「ごっこじゃねえよ! 俺たちは犯罪者なんだからよお!」

『そうだそうだ!』

「……おっさん、説明頼む」

「まあ……見ての通りだ。 犯罪者に憧れていてな、此処にいる連中  
全員とも、犯罪に手を染めようとしてるんだが……元が善人すぎて犯  
罪者になれてないんだよ」

「さっきの話を聞く限りだと、すごい皆いい奴そうだもんな。 見  
た目は世紀末だけだ」

「とりあえず見た目だけでも形作つたんだろうな」

なんかおっさんが呆れている。 いや、そりゃ呆れたくもなるか。  
いくなれば、犯罪者ごっこという名のボランティアだもんな。 そ  
れで駆り出されてたんじゃ、おちおち変態も捕まえない。

「とりあえず……あちらさんは自分のことを犯罪者って言ってるんだ  
から捕まえてあげれば?」

「それができないから困ってるんだよ。 こいつらの悪行を教えてや  
ろうか?」

軽く頷く。

「ひつたくりした男を集団で取り押さえリンチする。 ちなみにリン  
チの内容はくすぐりの刑」

「まあ……くすぐりは確かにつらいよな」

「朝早くから全員でゴミ拾い。 本人たち曰く『俺たちの声で騒音妨  
害してやる』らしいのだが、朝の6:00から7:30までの間なの  
でとくに意味なし」

「俺とつくに起きてるしな」

「足腰のおぼつかない老人たちのために自ら買い物を買ってでる。」

その際にお菓子を買ってサイフの中身を軽くしようと目論むが、その

金額が1000円のため老人たちは逆にお駄賃として当然と思っ  
てい

「1000円ってヴィヴィオがお菓子を買っ  
ていい金額と同じなだけ  
ど」

「小さい子どもがいる共働き夫婦のために、小さい子どもの面倒を  
みる。炊事洗濯と一通りこなし、なおかつ子どもの面倒もみるので夫  
婦からは感謝されている。なお、なにも盗んでいかないうえにお金  
も受け取らない」

「完全にボランティアだな」

まだ色々ありそうだが、おっさんは語るのを止める。もう面倒  
そうだ。

なのでこちら側から尋ねることにした。

「え〜と、要するにこいつら的には犯罪行為をしているつもりなん  
だが、世間的に見れば慈善事業であって、おっさんは逮捕することは  
できない。しかしながら、こいつらはこいつらで、全ての行いを犯  
罪行為だと思っ  
ているわけか」

「そういうことだ」

なんともめんどくさい。

「それで？ 俺はどうすればいいの？」

「こいつらを止めろ」

「なんで？」

「こいつらのご両親たちが申し訳ない顔で謝りにくるからだ」

「うわあー……それきついな」

こいつら自身は悪いこととしてなくても、それでもおっさんは形とし  
て出動しないわけにはい  
かないよな。あちら側は立派な犯罪行為  
だと宣言して  
るんだから。

「と、いうわけで見事説得できたならば1万だ。頑張  
ってくれ。」

俺はここらで見ておくから」

そういっておっさんは、タバコを取り出し一服はじめる。すると、連中の中の一人がおっさんに『すいません、此処は禁煙なんです  
けど……』と申し訳ない顔で謝ってくる。

おっさんは慌てて携帯灰皿にタバコをいれ謝る。

「まあ、とりあえず説得はしてみるか」

なんか溜息がでてきた。

というか、ミッドで唯一の犯罪者の巣がこんなにも善良な市民たちだったとは……。

ミッド平和にもほどがあるだろ。

☆

「はじめまして、ひよつとこです。まあ、そこで座って、出されたお茶飲んでるボンクラ局員のかわりにきたんだけど……おたくのお名前は？」

「水納侘須家流《みなたすける》だ」

もう名前からして善人のオーラがある。

俺なんて俊だぞ。すんげえこの名前に誇りもってるけど、顔文字にすると(・ω・) ↑こんな感じになるからな。

そもそも顔文字にする意味はないのだが。

「えーっと、おたくは犯罪行為をやりたいんですか？」

「もちろんだ！」

「どうして？」

「恰好いいから！ 犯罪者って憧れるじゃん？」

お前は中二病患者か。

「そして女子どもを泣かせたい！ な！ みんな！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！』

「そっかあ。でも、管理局にはすんげえ怖い人いるよ？」

「俺たちはあえて魔導師ランクにするならばDはあるんだぜ？」

「管理局にはオーバースやSSがいるよ？」

「……………え？」

なんで鳩が豆鉄砲喰らったような顔してるんだよ。

「……………すいません、それほんとですか？」

「うん。ちなみに管理局にはエースオブエースと呼ばれてる人がい

るんだけどさ、その人はギャラドスなんだよね。あ、ギャラドスって知ってる？ 村とかで争いごとをしてると、どこからともなくやってきて村を壊滅状態に追い込んで去っていくんだだけだし、そのエースもすごい極太レーザー放って惑星一つ破壊したんだよね」

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタッ!!  
ものすごい勢いで皆が震えだした。

なのは……やっぱお前すげえや。

いや、流石に惑星は破壊してないけどさ。幼馴染の骨は何でも破壊してるけど。

「エースオブエースはね？ 残虐非道で極悪鬼畜。血も涙もないエースでさ。人を人だと思ってなくて、犯罪者が泣いて謝っても冷たい目で『……その罪、死をもって償え』とか言っちゃう人なんだよね。もう生身の戦闘でもすぐくてさ。19歳男性の幼馴染に平気でビンタしてその幼馴染口切ったからね。幼馴染泣いてたからね」

「あの……私的なことはいってませんでした？」

「黙れ小僧！ 貴様にスナップがきいたビンタの痛みがわかるかッ！」

「うっ、すみません……」

「まあ、あんたらの気持ちもわかるんだけどね。ただなあ……俺みたいな真性マジキチじゃないとこの先犯罪行為とかきついよ？」

ちよつとこの人たちには本当の犯罪行為とか無理そうだし。ご両親も心配？とかしてるみたいだし。

——あれ？ そういえば、

「そういえば、女子どもを泣かしたんだよね？ だったら、こんなに人数いるんだからサーカス団でもやればよくね？」

『サーカス……団？』

『おお！ それいいな！』

おっさんが興味を示したらしくこちらにくる。

「お前面白いこと考えるじゃねえか！ いいな、サーカス団！」

「だろ？ 身体的にもなんとかいけそうだし、練習すればどうにかな

るかも。知り合いにサーカス団の団長いるからちよつと相談して、もし指導ができるのであればその方向で行こうかな」

「あの……俺たち犯罪者になりたんだけど……」

困ったような顔で俺たちをみる自称犯罪者。

「何言ってるんだ、サーカスをするならあんたらは“時間を盗む”ことになるんだぜ？ 次元犯罪者だってマネできないことだぜ？」

演目中は、客席の人達の時間を自分たちに全て集結させるんだ。

これ以上、すごい犯罪がどこにある。

「泣かせたいんだろ？ 女と子どもを」

その一言が決めてとなり、自称犯罪者たちはサーカス団を結成することになった。

☆

晴れておっさんから一万をもらい、ヴィヴィオを預かってもらったシヤマル先生にうまい棒をおごったあと、仲良く手をつなぎながら帰ってきた。

「おかえり、二人とも」

「お、なのはが早いなんて珍しいな。生理？」

「それ平気で聞くこと？ ちなみに違います！」

「なのはママー！ モフモフして〜！」

「はーい、モッフモフー！」

「きゃー！ かわいいー！」

なのは……それホコリをとる掃除道具なんだけど……。

新品を使ってくれたのでまだよかったけど、使用済みのをヴィヴィオに押し当てたらとんでもないことになってたよな。

「ところでフェイトは？ 一緒じゃないの？」

「うん、ちよつとキミに確かめたいことがあつてね。—— エース

オブエースはね？ 残虐非道で極悪鬼畜。血も涙もないエースで

さ。人を人だと思つてなくて、犯罪者が泣いて謝つても冷たい目で

『……その罪、死をもつて償え』とか言つちやう人なんだよね」

ビクツと体が反応する。

「これに聞き覚えはないかな……?」

「違うんだツ!? 俺はこんなこと微塵も思っただけ、むしろ俺だけはなのはの本性知ってるっというか!」

「私さ……。 今日、管理局の本部に行ってきたんだけど。 会う人会う人に最敬礼されるし、妙に避けられるから、何事かと思って調べたら——やっぱりキミにいきついたよ」

なのはの底冷えするような声。 もうヴィヴィオなんて泣き出しそう。

俺は努めて明るく振る舞いながら、ガクガクと震える足を押さえつけて笑顔でいった。

「俺はなのはの全てを受け入れるよ」

「それじゃ、これも受け止めてね?」

スナツプを利かせてビンタを打つ練習をするのは。 もう泣く寸前で俺をみるヴィヴィオ。 そんなヴィヴィオに笑いかけながら、俺はいった。

「ヴィヴィオ。 よくみておけ! これが、男の勇姿だあああああああああああああああ!」

土下座は失敗に終わった。

## 47. ありがとう

「プレゼント代貯まったから、プレゼント買いにきた」

「勝手にいけばよかったやん。　なんでわたしがアンタの買い物に付き合わないといけないの？」

「俺たち幼馴染だろ？」

「幼馴染やめるわ」

「幼馴染ってやめれる仕組みだっけ!？」

土曜日の午後、　なのはとフェイトがヴィヴィオをつれてスカさんの家に遊びにいったので、その隙にはやてを呼び出し二人でデパートに買い物にきた。　ウーノさんたちとケーキ作るんだって。

「それで、なに買うか決めてんの？」

「ネックレスを買おうかな……と。　まあ、レイハやバルがあるし、本当はもうちよつと違うのがいいんだろうけど——これがどうしても思い浮かばなくなってきた。　とりあえず自分なりに調べて、ネックレスにしてみました」

「プレゼントが思い浮かばないとかアホちゃうか。　というか、モテモテやったんだろ？　自称イケメン」

「モテたのは確かだけど、付き合ったことはないかな。　ほら、嫉妬とか起こりそうじゃん？」

「アンタのことが好きだった男性体育教師（26）とかか……」

「やめて！　俺の過去のトラウマが蘇ってくる！」

あの人ガチな方だったからな。　もう色々と頭おかしかったからな。　軽くヤンデレただからな。

「まあ、それはともかくとして——とりあえず店に行こうか」

かくして俺とはやては、ネックレスを買いに行くのであった。　蛇足であるが、はやての水色のキャミソールと白のフレアスカート姿がちよつと可愛いです。



1階の案内図を見る限り、貴金属店は5階にあるみたいだ。  
エスカレーターを使って上がることにする。

はやてを一段上にしてエスカレーターで上がっていく。はやては俺がスカートを覗くのではないかと疑ったのか、体を横にした。

あまいぞはやて。既に絶妙な角度

で、お前のパンツなど盗撮しとるわ。ほう……黒とはなかなかアダルティーな色で――

「なあ、記憶がなくなるのと、メモリーがなくなるのは、どっちが身体的苦痛を味わうと思う?」

すぐに盗撮写真を消した。

「さ、さあ……! 僕わかない! それより、今日のはやてちゃんは可愛いね! ちょっと化粧してるみたいだしさ!」

「そ、そう? ま、まあ元がええからな。あまり化粧とかせんでもいいんやけど――」

「それについては同意するわ。お前ら三人娘は最高に可愛いよな。なのはとフェイトは究極的に可愛いけど」

「……………」

「いだだだだっ!? 腕間接がメシメシいつてる腕間接がメシメシいつてる!」

「逝つてもええんよ?」

「イ、イくううううううううううッ!!」

警備員呼ばれて怒られた。

☆

「アンタのせいで怒られたわ。どうしてくれんねん」

「お前のせいで変態カップルみたいになったじゃねえか。どう責任取ってくれるんだよ」

「付き合う?」

「……………いや、お断りします」

一瞬何言ってるかわからなかった。平然とトラップ仕掛けてく

るあたり、こいつはなのはとフェイトよりもよっぽど怖い。

「あれ〜？ いまの『間』はなにかな〜？ 俊」

はやてが意地悪そうな笑みを浮かべて、こちらに近づき、腕に抱きついてくる。

「はやて、当たってるのか当たってないのか微妙だから、お前にはその技は無理だよ」

「歯というのはな、壊れれば壊れるだけ、新しいのが生えてきて、その歯自体はその前の歯よりも強靱になるんよ」

「それアローン！ 魚人族だから！ 人間の俺はそんなにしょっちゅうは生えてこないから！」

「でも知り合いにいるんやろ？」

「知り合いにいるからって俺の種族まで変わるわけないだろ!? お前なにいつてんの!?!」

これがエリート捜査官なのか!? お前家宅捜査のときに証拠そっちのけでエロ本とか探す人種だろ！ あ、魚人族の知り合いはいるけどアローンはいないよ？

でもまあ——ちよつとだけ当たったし……

「ごちそうさまでした」

と、小さく聞こえない程度に呟くのであった。

### 閑話休題

「うーん、どれがいいと思う？ というか、腕に抱きつくくなつてば」

「まあまあええやん。嫌なら引きはがせばいいだけなんやし。それはそれとして……やっぱりネットワークスなら二人のイメージカラーとか、二人をイメージできるものがええんとちゃう？」

「なるほど。なのはならギャラドスやコイキングというわけか」

「そろそろ対戦のときになのはちゃん(コイキング)使うのやめてくれへん？ 笑って勝負ができないんや」

「お前最低だな。幼馴染の姿みて笑うなんて！」

「アンタの行いのほうがよっぽど最低やで!?!」

### 愛情故、仕方なし

「うーん、やっぱりなのはは星かな？ スターライトブレイカーとい

うネタ技もあるし」

「次元世界広しといえど、なのはちゃんのスターライトブレイカーをネタ技といえるのはアンタだけやと思うで」

「それでもってフェイトは雷とか？」

「いや、雷はちよつとダメちゃう？ もう少し可愛くしたほうが」

「ん。——おっぱいとか？」

「普段からどこを見ているのかがわかるセリフやな」

「いや、それは男ですもん。」

店員さんが俺とはやての会話を困ったような顔で聞いている。

きつと声をかけづらいらいんだろうな。俺が店員なら無視確定だけど。

しかしイメージか。

二人のことをイメージする。

様々な表情と、これまでの記憶がよみがえる。

14年前のあの日のこと

10年前のあの日のこと

そして、俺が彼女達に対する感情と、彼女たちをみた感想

「ああ、調べておいてよかった」

やっぱgoogleさん最強だったわ

☆

プレゼントを買った、(正確に言うとな頼んだ)俺たちは、そのまま最上階でお昼を食べることにした。

「ひよつとこはお子様ランチが大好きやったっけ？」

「一言もいってねえだろ。あの旗が大好きだって言ったんだよ」

「小さい子どもの気を引くために使用してんのに、大きい子どもが引つかかるとは夢にも思っていないだろうなあ」

「ちなみになのはも注文しようとしてたぞ」

「あの娘は大丈夫なんか!？」

たぶん、きつと、おそらく、大丈夫じゃない。

「それで、なに食べる？ お金もないやろうし、お姉さんがおごってあげるよ。好きなもの注文してどーぞ」

「え？ まじで!? それじゃはやてのアワビ——」

ドンツ！

「ごめんなさい、調子にのりました」

「よろしい」

テーブルが陥没するほどの破壊力とか勘弁願いたいのですが。

「ん〜つと、それじゃウニトロ丼にしようかな」

「はいはい。わたしは……生パスタモッツアレラチーズとトマトソースにしようかな」

「ちよつとまっつてはやて。俺のサイフにゴムがあるから」

はやてはスルーして店員に注文した。一人でゴム掲げてる俺がバカみたいだ。

注文した品がくるまでの間、はやてと軽く世間話することに。

「六課は順調？ 喧嘩とかしてないか？」

「いや、みんな楽しくやつてるで。喧嘩とかは全くないけど、強いてあげるなら……ティアの暴走が止まらないってどこやろか」

「嬢ちゃんはいつも通りだよ。まあ嬢ちゃんにとって、なのははお姉ちゃんみたいな感覚だしな」

「お兄ちゃんのほうがダメダメやからな」

「うるっさいな……。嬢ちゃんにはバレてないんだから教えるなよ？ どこから聞きだしかについては目を瞑るから」

「はいはい。それじゃ今度はこつちが質問や。バイトはどうだった？」

はやての質問と同時に、食前に頼んだ飲み物がくる。はやて側には

アイスティー。俺のほうにはコーラだ。

ストローを入れ、コーラを飲み答える。

「聖王教会はそれなりに楽しめたよ。教会の人達も優しくかったし、面白い人ばかりだった。カリムさんやマツパさんも俺とヴィヴィオの面倒をよくみてくれていたし」

「結局辞めたわけやけどな」

アメリカンよろしく肩を軽く上下に動かし首を振りながら答える。

「なのは神とフェイト神を崇めてたから、天罰が喰らったのかもな。

でもまあ、カリムさんはその後も携帯で連絡を取り合えるくらいには修復したし、問題ないと思うよ」

「ふくん……おもしろな」

「ん？」

「え？ わたし何かいった？」

小首を傾げるはやて。

「え？ なにかいま言わなかった？」

「べつに？」

「あ、まじか。いま声が聞こえたような気がするけど——」

「気のせいやな」

なんだ、気のせいか。

その時丁度よく料理が運ばれてくる。

俺の前にはウニトロ丼、はやての前には生パスタモッツアレラチー  
ズとマトソース。

食べながらも、俺とはやての会話は尽きない。

「久しぶりに家に泊まってええ？ 今度の土日あたり」

「いいけど、仕事は？」

「終わってるとおもうで。だから八神ファミリー全員でいけるや  
ろ」

「まくた大所帯になるんか。飯の時間が大変そうだな。主に作る  
側が」

「手伝ってあげようか？」

「まさか。客人は客人らしく遊んどけ。女同士、積る話もあるだ  
ろうからさ。期待には応えてやるさ」

ロヴィータあたりにはキャットフードでもあげよう。いや、あいつ  
ウサギ好きだし、ニンジン一本あげとこう。『お前、これで野菜オ  
○ニーしてみろよ』とか言った

らしてくれるかもしれないし。

「まあ、なのは達も予定はないだろうから土日はお泊りということぞうやね。 あく、楽しみやなー!」

早くも泊まりのスケジュールを立てるはやてであった。

☆

「それじゃ、ちよつとネックレス取ってくるからまっててくれ  
「はいよー」

はやてをエスカレーター付近に残し、俺は先ほどプレゼントを注文した店に足早に駆ける。

「すいません、先程注文をお願いしたものなんですけど……」

「あ、注文の品できてますよ! すぐにもつてきますね」

若い姉ちゃん店員が元気な声で奥に引っ込む。

少し手持ち無沙汰になり、レジの横に目をやる。——そこには俺が注文したものよりも少しだけ小さいサイズではあるがネックレスがあった。

その中の一つに目をやる。

目をやって、そのまま手に取る。

そのとき、奥へと引つ込んでいた姉ちゃんが注文品をもつてきて清算を開始したので、

「あ、すいません。 これも一緒にいいですか?」

「いいですよー。 それじゃ、これも合わせまして合計で10万2千円になります」

「たりないねえ……。 すいません、ちよつとまけてくれませんか?」

そういうと、姉ちゃんは困ったような顔で首を横に振った。

「こちらも商売なので、それはちよつと……」

「そこをなんとか頼みます! 地球の花を模したアクセサリーが売ってるのなんてここらへんだけなんですよ! ここじやないと手に入らないっていうか」

「ええ、確かにそれがお店の自慢ですし……。 でも、お店としては—

「」  
「渋る姉ちゃん。しょうがない——使いたくはないが  
俺は姉ちゃんに耳打ちする。姉ちゃんは顔を赤くしながら頷き、  
本当にこっそりと2千円の文字を消してくれた。」

「いまの約束、守ってくださいよ?」

「当たり前ですよ。ここに俺の電話番号を記しておきますね」

サラサラと白い紙に携帯番号を書く。もちろん、おっさんの携帯  
番号だ。おっさん便利すぎ。

手を振って別れ、急いではやての所に戻る。

「おまたせ! それじゃ、帰るか」

手を差し出すが、はやてはその手を掴まず、スネを無言でコツコツ  
とガツガツと蹴ってきた。

「いたッ!? え、ちよっ え!?!」

「……………ばーか」

はやてはそれだけ言って、俺を残してさっさと帰って行った。

☆

その夜、シャマル先生に電話したところ、はやては俺との電話に出  
たくないといっているらしい。どうやら俺は嫌われたらしい。

「あのー……俺ってなにかしたんですかね?」

『うくん。 なにかしたからはやてちゃんは怒ってるんじゃないです  
か?』

「でも、覚えがないんですけど……」

『だからはやてちゃんに乙女心がわからないと言われてるんですよ。』

『屑男』

心なしかシャマル先生の言葉に棘を感じる。なんか心が痛く  
なってきた。

「えーっと……俺、はやてに渡したい物があるんですけど」

『ふむふむ。 あ、はやてちゃんからの伝言です。 ットラックに轢  
かれて転生でもしてろ、バカ』とのことです』

「転生者になるつもりはないんですけど」

『まあ、そういうことですから今日はもうこないでください』  
ガチャリと切られる電話。 ……シヤマル先生、かなり怒ってたよな。

溜息を吐きながら、手のひらにもっていたものをポケットにいれる。

『ただいまー!』

丁度いいタイミングで我が家の姫君たちが帰ってくる。 玄関までお出迎えする俺。

「おかえりー。 どうだった?」

「すんごくたのしかったよ!! スカさんがなまクリームをぜんしんにぬりぬりしてあそんでたの!」

「スカさんブレねえな」

ウーノさんがストレスで倒れないといいけど。

「俊くんは今日なにしてたの?」

「んくつと、デパートにいつてきた」

「ふくん。 アニメ〇トは行かなかったんだ」

「今回はね」

カリムさんと行く予定だし。

「それで二人はどうだった? ケーキ作り」

そう聞く俺に二人はとつてもにこやかな笑みで、女の子のようにはしやぎながら

「たのしかったよ!!」

そう答えた。 二人がこんなに嬉しそうにしていると、俺まで笑顔になってくる。

三人の話を聞きながら、リビングへ。 なんでもウーノさんには、どMの妹のほかにも沢山妹がいるらしく、とつても賑やかなものになったらしい。 うくん、ちよつと会ってみたい。

ふとソファアをみると、ヴィヴィオが半分夢の中へと旅立っていた。 夕食食べてないし起こしたほうがいいかな? でも寝顔もか



わいいし……。

「あ、そうだ。二人に渡すものがあつたんだ」

そう、今にも思い出したかのように言いながら、部屋に用意していたプレゼントを取ってくる。

「えくつとき、二人とも」

「どうしたの？」

改まる俺に二人も席を立つ。そして向かう会う俺となのは&フエイト。

うう……緊張する……。

「そ、その……これ！」

背中に隠していたプレゼントを渡す。赤い包み紙に可愛いピンクのリボンがなのは。赤い包み紙に可愛い黄色がフエイト。

「へ？ なにこれ？」

「ま、まあ開けてみるよ」

二人は疑問符を浮かべながらも丁寧に剥がし――

「わあ！ これ、ネックレス!？」

「すごい……！ これもしかして日本の花を模してるの!？」

「う、うん……。デパートのお店で売ってあるんだ。レジには花言葉辞典とかも置いてあって、それをみながら店員に注文できるんだよ」

「つけてもいい!？」

「お、おう」

なのはとフエイトがつけ、くるくると一回転し、互いに褒める。

と、こちらを二人して見つけ――

「に、似合う……?？」

ちよつと上目使いで聞いてきた。

「ぐはっ……!？」

萌え死んだ。これは萌え死んだ。

「ちよつ!？ いま吐血したよね!？ 大丈夫なの!？」

「なのは、フエイト……かわいすぎ……」

それを眩くのが精いっぱいだった。

二人は一通りしやいでから、

「——あれ？　もしかして、これを買うためにコソコソとしてたの？」と、核心をついてきた。

もういまさら隠す必要もないので頷く。

「まあ、はやてにバイト紹介してもらったり。ミッドの人達の力を借りてバイトしたり」

「俊くんバイトしたの!?　迷惑かけなかった!?　挨拶できた!?　泣かなかった!?!」

「お前は俺の母さんか!?　そんなことあるわけないだろ!?!」

「で、でも……社会不適合者の俊がバイトだなんて……」

二人の俺に対する評価がわかった瞬間だった。

「でも……喜んでもらえてよかったよ」

こんな笑顔が見れたんだ。　頑張ったかいがあった。

アワアワと慌てながら、先方にどうやって謝ろうか相談している二人を強引にこっちに向けさせる。　——勢いが大事だぞ！　俺！

二人を見つめる俺。

俺を見つめる二人。

見つけていたら何を言おうとしたか忘れてしまった。

「あの……どうしたの?」

「いや……その……。　ごほんっ！　——俺と一緒にいてくれてありがとう。　二人を好きになってよかったです。　その——これから、俺と一緒にいてくれますか?」

俺の言葉にフェイトとなのはは顔を見合わせ、ふふつと笑った。

するりと俺から離れるのは。　フェイトはおもむろに俺の顔を覆う。

「あの……フェイトさん……?」

「黙ってて」

「はい……」

なにがなにやらわからなかったが、言うとおりにする。

ガサガサ、ゴソゴソと何かを漁る音と、台所に向かう足音。　そし

て、

「フェイトちゃん。 もういいよ」

「うん」

フェイトの目隠しから解放された俺を待っていたのは――

「あくん」

フォークにケーキを突き刺し、差し出すのはとフェイトがいた。

「……へ？」

「もう！ あくん、 ってば！ ほら、 口あけて！」

「あ、 うん」

操り人形のように口を開けると、そこに二人がケーキを運ぶ。  
咀嚼する俺。

ふんわりとした生クリームと柔らかいスポンジケーキ、甘酸っぱい  
イチゴが口の中に広がって――

「うまい……。 うまいよこれ！」

思わず声を大にして叫んだ。

「「イエーイ!!」」

ハイタツチする二人。 こんなにうまいケーキ作れたんだ！

「えへへ……。 そういえば、 さつき俊くんが言っていた答えだけど  
――」

「あ、それはもう――」

「これが答えだよ、 俊」

言い終わる前に、 両頬に柔らかいものが触れる。

「私達以外に、キミを受け入れる所なんてあるとは思えないしね。  
あってもまあ……。 手におえないと思うけど」

そういつて笑顔を魅せる二人に、俺の心臓が爆発した。

☆

深夜11時。

幸せ気分そのまま寝たかったが、どうしてもいかなければならな  
い場所があった。

「はあ……気後れしてしまう」

玄関を軽くノックする。インターホンは使わない。

『ひよつとこなら首が飛ぶが……貴様は誰だ』

「残念でした、ひよつとこちゃんでした!」

シユツ! ↑玄関からいきなり伸びてくる剣

「あぶな!? いま完全に心臓狙いにきてただろ!」

「主はやてからお前を家に入れるなど言われたのでな」

「うぐツ……!? そもそも、なんであいつは怒ってんだよ……」

「わからん。ただまあ帰れ。お前を切りたくて切りたくてしようがないんだ」

「お前古代ベルカでは暴れん坊爆乳シグシグと言われてただろ」

「斬刑に処す——」

「ごめんなさい!」

シグシグが本気になってきたので、慌てて逃げる。結局、はやてには会えずじまいか——。

「あれ? ひよつとこやん。なにしてるん?」

と、思っていたら家の前でバツタリあった。

「いや、お前こそなにしてんだ?」

「わたしは、夜の散歩や」

「はあ!? はやて一人でか!? 危ないにもほどがあるだろ!? ここらはミッドの変人たちの巣窟なんだから、お前一人で夜歩きは危険だぞ」

「でもなあ……。夜の散歩は気持ちええし」

「心配だから俺を呼べ。いや、呼んでくれ。呼んでください。」

一緒に歩くから。いっただろ? お前が呼ぶなら俺はすぐに駆けつけるって」

「……まあ、考えとくわ。……歩くときは携帯に電話いれるから」

はやての言葉に大きく頷く。実際は変人は多いけど、皆紳士で安全なだけだな。俺より危険人物はいないのかもしれない。

はやては伸びをして、大きく息を吸い込んだ後、俺に話しかけてきた。

「それで？ なんのようなん？」

「いや……これを渡そうと思つてな」

ポケットにいれていたものはやてに渡す。

「……え？ これ、わたしに？」

「まあな。 そのー、——ずっと俺のこと助けてくれてありがとう。

はやてがいなかったら、俺はダメだったと思う。 はやてに会えて

——ほんとうによかったよ」

作り笑顔じゃない、飾らない笑顔じゃない、素直な笑顔ではやてに言った。

はやては周囲をキョロキョロと見回したあと——

「そ、そうなんか……。 ま、まあ頑張ったのはアンタやからな！ お

疲れ様！ あ、それじゃお風呂入らんといけんし、もう帰るで！」

と、マシンガンよろしく早口で家の中へとはいっていった。

「あいつ……早口言葉はやそうだな……」

幼馴染に新たな発見を見出しながら、俺は帰るのであった。

☆

「いやー、久しぶりのお泊り会やけど、こう話しているとやつぱ濃い生活を送ってるやなく、つて実感するで」

「うん、濃すぎる毎日だね。 ずっと喋りっぱなしだったから飲み物ほしいかも」

「あ、私も」

今日のはやてちゃんたちがお泊り会にきた。 夕食を食べて、お風呂にはいって、パジャマに着替えて、女の子特有のパジャマパーティーと洒落込んだのはいいけど、六課設立から一昨日までのことを皆で振り返ったのが悪かった。 濃すぎて濃すぎて……。

コンコンとノックする音、私が返事すると彼が飲み物をもってはいってきた。

「おまえらもう月曜日が変わったぞ？ 仕事は？」

「中止!!」

『さんせい!!』

「いやはやてちゃん仕事はちゃんとしようよ!?　なんでみんなして賛成してるの!?!」

堂々と中止と言い切るはやてちゃんはある意味すごい。

「あ、フェイト。　エリオとキャロは客室に寝かせたけど、それでいい?　ザツファイーついてるし大丈夫だと思うけど」

「うん、ありがとう」

彼とフェイトちゃんが話してる間に、皆はグラスを取り、飲み物を飲む。

「おつ、なかなかいけるやん」

「だろ?　色々なフルーツミキサーにかけて、フレッシュジュースにしてみた」

「おいひよつとこ。　あたしのだけ何か白い液体が浮いてるんだが」

「俺の精液——もとい、コンデンスミルクをいれておいた、冗談ですから!?!　冗談ですからスイングはやめてください!?!」

「つたく、責任もつてお前のと代えろ」

「へいへい。　うっさいババアだ……」

「久々に切れちまったよ……。　ちよつとついてこい……」

ヴィータちゃんが、彼の首根っこを掴んで引きずる。　抵抗する彼だけど、シグナムさんが華麗にミゾをヒジ打ち動きを止める。

……相変わらず、ヴォルケンの皆は彼に容赦ないなあ……。

ドナドナよろしく白目むきながら連行される彼。

「ねえ、俊くん。　ちよつと聞きたかったんだけどさ。　俊くんがくれた、ネックレスの花つてなんなの?　その言葉は?」

ずつと聞きたかったこの質問。　土日とも、彼は忙しそうに動き回っていたので聞くタイミングが見当たらなかったのだ。

ドアに頭をぶつけながらも、強引にヴィータちゃんによつて外へと連行されそうになる彼だが、律儀に答えてくれた。

「あーつと、あんまり恥ずかしいから花言葉は言わない。　なのははサルトリイバラ、フェイトは葛クズ、はやてはコマツナギ。　あとは個人で調べること!」

「おい、ゴミクズ。誰が喋っていいと許可したんだ？」

「ええ!? いつの間にか俺の人権がなくなってるんだけど!？」

「お前そもそも人間だっけ？」

「……生物の観点から見ると、人間だと思う」

そんな二人のやり取りを聞きながら、携帯で何気なく調べる。そして出てきた花言葉に思わず顔がほころんだ。

まったく……恥ずかしいってば。

「あ！俺も考えたんだけどさ、これまでの俺たちの生活をちよつとフイクション混ぜながら本を書いてみようぜ！」

まあた、バカなこといいだした。

「それで、タイトルは？」

「“俺の愛玩ペット”とか」

『ボツ』

私達の生活もそうだけど、そのタイトルがミッドに出回るとか恐ろしすぎる。

これから本格的に夏になりだすけど——ずっと皆でいられますように。

おやすみなさい

48. 英霊になったとしても誰にも呼ばれないと思う

「いまなら英霊を呼び出せる気がする」

「は？ 英霊って、あの英霊？」

「そうそう、あの英霊」

リビングで向かい合いながらPSPで英雄の霊を召喚して戦う格闘ゲームをしていると、彼が唐突に言い出した。そろそろお薬の間だっけ？

「いや、そもそも英霊呼び出してどうするの？」

「ドツキリのプラカードを掲げてそのまま帰らせる」

「最悪にもほどがある!! それ絶対怒られるよね!!」

「ランサー、自害せよ」

「ちよっぴりうまい!!」

流石暇人。

「でも呼び出すには媒体が必要だよ？ それはどうやって調達してくれるの？」

「俺のパンツでどうにかならないかな？」

「ならないよ！ なにをどう間違ったらキミのパンツが宝具になるの!?!」

「でも特A級ロストロギアだろ？」

「……そういえばそうだった」

はやてちゃん以上に動くロストロギアだった。

「あれ？ でも、キミの下着を媒体にするなら、未来のキミがくるんじゃない？」

「ふっ……土郎VSアーチャーの完全再現か」

「パンツ片手に大人が本気で戦ってる姿とかシユールすぎて泣きたくなってくるんだけど」

「何度も見てきた…… 香水の臭いがきつい45歳独身女性渡辺さん



の裸も 加齢臭のする50歳独身女性青山さんの裸も 自称18歳  
実年齢40歳の板垣さんの裸も 俺自身が拒んでも見せられた……  
！ 俺が望んだものはそんなことではなかった……！ 俺はそんな  
ものの為に……！ 守護者になどなったのではない……!!」

「アーチャー お前、後悔してるのか。——お前には負けられない！  
誰かに負けるのはいい……、けど、自分には負けられない!!」

「もうやめて!! わたしの好きなシーンをこれ以上汚さないで!!」

「いいよ！ どっちが勝ってもむなしい勝利しか残らないよ！ こ  
の戦い！」

「こういう設定にすると、これがとても悲しくなってくるよな」

それは本当に小さな願いで

それさえも世界は叶えることはなくて

それでもキミは理想を夢見て

馬鹿みたいに夢を語って

最後は裏切り続ける世界に絶望したのでした

「それただ単にモチなかつただけだから!! 世界のせいしちやダメだ  
から!!」

「先代たちから託されたユメがある。童貞卒業というユメだ。そ  
れを目指して続けていれば、いつか世界の全てを救う事が出来るだろ  
う、と思い込んでいた」

「自意識過剰も甚だしいよ!! それで救える世界なんてキミの世界だ  
けでしょ!! 管理局バカにしてんの!!」

「そんな愚かな自分が、酷く滑稽に思えて…… その愚かな自分の人  
生を消そうと思ったんだ」

「そのまま死んでよ！」

「全てを救うことができれば自分の童貞も救われると思ったんだ—  
—」

「なに恰好つけてんの!! 全然恰好よくないからね!!」

「こんな世界を夢見たんじゃない……」

「もうやめて!!」

「結局誰一人、会うことがなかった……」

「会う人全員に避けられたんだね」

「童貞の末路がこれか——どこで間違ったのだろう」

「たぶん小学校に上がるくらいじゃないかな」

「どこで想ってしまったのだろう」

「いや……想うのはいいと思うけど……」

「過ちが生まれた場所 始まりの思いが——あの時の誓いこそが、全ての過ち——それは、叶うはずのない望みなのに——また願ってしまっただ。 30歳にして、願ってしまっただ」

「まった」

「もうやめてよお……。心が折れそうだよ……」

「奇跡があるとするならば、童貞を否定することは可能なのだろうか。」

「傾く下腹部、ゴムか生かの選択肢……。年を経るごとに遠ざかる理想郷。世界はそれほど残酷で、いつも嘲笑しながら見ていた。自分はそれほど愚かだった。貫くことはなく、ただただ股間と右手を擦り切れるほどコスっていた。嘆き、苦しみ、モニターをじっと見つめ、やがて精子は枯れていった」

「もうゲームの続きしよ。ね？ 今度は私がアーチャー使おうかな？？」

「なんて言ってみたり」

「股間にはオナホが装着されている」

「オナホはせずに 一日3回は当たり前」

「幾たびの戦場を妄想して16年」

「ただの一度の前進はなく」

「ただ一度のピストンでラブドールは無残にも破裂する」

「彼の者は常に独り USB連動オナホを片手に勝利に酔う。」

「故にソープに意味はなく、その股間は——きつとインポになっていた。」

「固有結界——『不能な股間と無限のオナホ』」

「……………言うべきことは？」

「答えは得たよ、なのは。オレ、謝ってくる」

「いってらっしゃい」

「彼の頭が本気で心配になってきた。」

## 49. ひよつとこの命をかけた一発ギャグ

ヴィヴィオと二人で六課の昼食にお邪魔した。今回はヴィヴィオも同伴な上にはやてからゲストカードみたいなの貰ったからすんなりと入ることができました。

そして食堂でなのは達と合流し――

「なのはママ、あくん！」

「あくん！」

「おいしい？」

「うん！ おいしいよ！ はい、お返しに、あくん！」

「あくん！」

「おいしい？」

「うん！」

現在のなのはとヴィヴィオの食べさせ合戦を眺めていた。

なにこの天使たち。 まじヤベエ。 さつきから勃起が止まらない。い。

「フェイトママもあくん！」

「あくん。 うん！ おいしいよ！ このおにぎりヴィヴィオが作ったの？」

「うん！ おにいさんといっしょにニギニギしたの！」

「えらいよ、ヴィヴィオ！ 今日はなんでも買ってあげる！ ね、なのは！」

「うん！」

「わーい！ なのはママ、フェイトママだいすきー！」

ヴィヴィオはなのはだけでは飽き足らずフェイトまでその笑顔とおにぎりをもって虜にし、配下においた。俺ら家族でのヒエラルキーの頂点に意図せずとも君臨しているヴィヴィオ様は流石である。かくいう俺もヴィヴィオに骨抜きにされていてね。

「なんや、一緒に作ったん？」

「うん。今日は出来立てをもっていく約束してたから10時頃に作

り始めたんだけどさ。そしたらヴィヴィオが『ヴィヴィオもなのはママとフェイトママにつくる！』って言い出して聞かなくて。まあなし崩し的にヴィヴィオにはおにぎりを頼んだわけだわ。結果をみるになのはみたいに塩と砂糖を間違わなかったおかげでおいしい料理が完成したわけだが」

今日のお弁当は、ヴィヴィオお手製おにぎりに、わかめとじやくときゅうりの酢のもの。卵焼きに白魚の甘酢かけにチビグラタンである。我ながら甘酢かけはかなりの出来だと自負している。

「いいなあ、俺もあの輪の中に入りたくないな」

「諦めることやな。なのはちゃんとフェイトちゃんがアンタに邪魔されないようにバインドで縛っていったんやから」

「いや、そもそもそれがおかしいだろ。なんで俺がバインドで椅子に固定されてんの？俺たちって云わば家族じゃん？イケメンな旦那と可愛すぎる若妻じゃん？普通さ、こういうときってモブキャラ抜かして四人で卓を囲みながら仲良く談笑してるところじゃん？

なんで主役の俺がこういう不遇な扱いを受けているわけ？」

「それはまあ……家族じゃないからじゃない？」

「俺だけ家族という認識じゃなかったの!？」

だとしたらヴィヴィオが一向に俺のことをパパと呼ばないのも領ける。これでもずっと気にしていたんです。

「そういえば、はやていつの間になったの？」

「今日は時間があったから作ってみた。といってもサンドウィッチなんやけど」

「一つもらつていい？」

「どうぞ」

足と椅子を固定されているだけであり、上半身は問題なく動かすことのできる俺は、隣にいるはやての可愛らしい弁当箱からサンドウィッチは一つもらう。すんげえうまそう。

「ヴィヴィオちゃんみたいにやってあげよつか？」

「気色悪い。あいたっ!?! 脛蹴らないで!?!」

ちよつとした冗談だったのに。はやえもん、この頃短気じゃない

か？　もしかして生理？　生理のときは性欲が増すと聞くけど……  
これはもしかして、そのサイン？　生理のサイン？　ついにインサー  
トしちゃうの？

「んじや、いただきまーす」

はやての目が怖かったので冗談を言わずに一口いただくことに。

「あ、パンの表面にマーガリンを塗ってるから具もいいかんじだな」

「この具は八神家でも人気なんやで」

確かに、この具はお子様ロリっ娘のロヴィータちゃんあたりが好き  
そうだな。

辛子明太子にマヨネーズとじゃがいも。レンジでじゃがいもを  
蒸してから、マヨと辛子明太子を合わせるんだよな。今度うちでも  
作るか。おやつにはピッタリかもしれない。

「サンキュ、やっぱお前料理うまいわ」

「女の子としては料理は基本やからね」

「だってよ、なのは」

「わたしに振らないでくれるかな!?　まるで私が料理できないみたい  
じゃない!　わたしだって翠屋の娘なんだよ?　高校時代は看板娘  
としてテレビにも出たんだよ?　わたしだって料理くらいできるよ  
!」

「まじで?　お前なにかできたっけ?」

「卵かけごはん」

「まってなのは。確かにそれは料理だけど、その料理名をここで上  
げるのは反則だと思う。ほら、シャルル先生が鼻から麦茶こぼして  
るぞ」

「うひっ……うひうひうひうひよおっ」

シャルル先生大丈夫ですか?　ちよつと笑い声が気持ち悪いこと  
になってますよ?!

「それと引き換えフェイトはよく俺の手伝いしてくれてたから料理で  
きるよな。手先も器用だから、タコさんウインナーとか手コキとか  
得意だよな」

「後半まったく身に覚えがないんだけど。うん、確かにキミの手伝いはしてたね。結構面白かったし、私も色々作り方教えてもらったかな」

「……フエイトちゃん、それほんと？　もしかして、わたしだけがアレと料理を一緒にしてない上にまともに料理を作れないの？」

「それは仕方ないよ。なのはの前世は山犬だったから、山を見ると走りたくなるんだよ」

バリアジャケット姿でなのはが四足で山を走ってる光景を想像すると涙が出てくると同時にちよつと興奮してきた。

「勝手にわたしの前世決めないでくれる!?　それにウエイトレスさんとしてちゃんと働いてました！　山なんか走ってませんー」

「バストアップ体操で谷間は作ってたのにな」

「なんで知ってるの!？」

「キミに憑き　後ろに控え　監視する」

「それただのストーカーだから!？」

愛情故、仕方なし。

このフリーズ便利だな。　おっさんにパイ生地投げるときにも使ってみよ。

「あ、なのはお茶頂戴。　ノドが詰まりそう」

「詰まって死ぬ」

そういいながらペットボトルのお茶を投げ渡してくれるなのは。

もうなんとというか可愛すぎ。　けどわざわざペットボトルのお茶

を買わないでいいんじゃない？

なのはから貰ったお茶をラツパ飲みする。　……あれ？　これつ

て間接キスじゃね？　間接キスじゃね!?　間接キスだよね!?!?

「ちよつ!?!　どうしたんやひよつとこ!?!　いきなり耳から紫色の汁なんかだして!?!」

「はやて。　ペットボトルの飲み口が何故丸いか知ってるか……?」

それはな、飲み口にチ○コを突っ込んで疑似フェラを味わうことができるようにという企業側からの配慮で――」

「ねえよ！　そんな理由で飲み口を丸くしてるわけねえよ!?　それに

全然気持ちよくないうえにどう考えても入らないから!」

「企業側の配慮を否定するな!!」

「お前は企業側に謝れ!」

すいませんでした。

そんなやり取りをしていると、俺の位置から右斜め前に座っていたティアがなんとも微妙な顔というか、釈然としない顔というか、のどに魚の骨が刺さっていて、それが取れなくて悶々としているような顔をしていた。

「どした、嬢ちゃん。アへ顔ダブルピースにはまだ早いぞ」

「いえ、永遠にありえませんかからお気遣い結構です。まあ、なんというか……なんかおかしな関係だなく、っと思ってみてたんです」

おかしな関係? お前となのは以上におかしな関係なんて存在しないと思うんだけど。

「いや、まあ……お二人がその関係に疑問を抱いていないのであれば、私が指摘しても意味ないというか、むしろこじらせる恐れがありますので言わないですけども」

「おい、ティアがまともなこと言ってるぞ。 シヤマル、救護室に運ぼう」

「いやヴィータさん私はいつだってまともですよ!」

まあ、嬢ちゃんは真面目に不真面目だからな。 いや、盲信しているともいえるが。

横にいるはやてが退屈そうに俺の脇腹を突いてくる。

「ひよつとこ、なんか面白いことやって」

「えー、仕事しろよ」

「終わったもん」

「相変わらず仕事をしてる描写がないよなあ。 まあ、面白いことね

〜……一発芸とか?」

「お! いいね〜!」

俺の言葉にはやてが手を叩く。 その叩きに合わせて他の食堂にいる者たちも手を叩き、もう俺が一発芸しますよ、的な雰囲気になっていた。 ふと足をみると、椅子に縛り付けられていたバンドも外







美少女たちが飲み物を噴出するさまは見ていてちよつと興奮するけど、絵的にはなかなか凄い光景である。

「どうだった？ 俺の一発芸」

「い、いや、全然おもしろくなかつ、なかつ、ぶはっ」

「そ、そうですね……くくつ、だ、ダメよティアナ、ここで笑っちゃ……くくつ……」

全員が全員とも口元に手を置いて必死に笑いをこらえている。

まったく意味がないことだけだ。

当の本人に訊いてみることにする。

「ねえねえ、なのは。 どうだった？ うまく表現したつもりなんだけど」

「キミわたしのこと本当は嫌いでしょ!? あの時わたしがどんな想いだったか知ってるよね!? このときの戦いは魔導師人生においてもトップ3に入る戦いなんだよ!? どうしてこういったことするかなあ!!」

「なのは、笑った拍子に出たと思うんだけど、わかめが口から飛び出してるよ」

「先にいってよバカ!? こっち見ないで!」

もう色々と恥ずかしかつたのか、わかめを取ったあとヴィヴィオをぎゅつとして離さなくなった。

満足したのもう一人の当人にも聞いてみる。

「フェイトフェイト、 どうだった？」

「ちよつとだけトラウマだったんだけど、もうアレを思い出すたびに笑いがこみ上げてきて、ふふっ」

「そりゃよかった」

思い出し笑いはしそうだけど。

腹を押さえながらティアアが俺に訊いてくる。

「あ、あの……もしかして、なのはさんとフェイトさんの戦いって本当にそんな感じだったんですか？」

「いや違うから!? 全然違うから!? ちよつとまって、いまレイジングハートで見せるから!」

嬢ちゃんの発言に俺が答えるより早く、なのはが否定する。そしてそのまま、首にかけているレイジングハートの記憶映像を食堂に映し出した。

若干9歳にして魔導師ランクAAAの天才二人の激闘――

それは新人達、いや、この場にいる全員を釘づけにするには十分なものだった。ある者は感嘆の声をあげ、ある者は尊敬の視線を浴びせる。ある者は少しの畏怖を感じ、俺は性的な目でみていた。

空を舞い、風を切り、大量の魔力弾をかわし、追撃する。

一進一退の攻防。全力全開の本気の戦い

一人は母のために

一人は目の前の女の子のために

互いが譲らないものを抱えたまま、死闘を演じた。

そして――

『受けてみて！　これがデイベインバスターのバリエーション！　全力全開！　スターライトブレイカー!!』

ここで全員の腹筋が崩壊したのは言うまでもない。

この日、高町なのはの代名詞ともいえる技

スターライトブレイカーは、六課でのみネタ技と化した。

## 50. 五歳児 V S 十九歳児

6月も中旬と終盤の境目あたりになり、燦々と照りつける太陽が恨めしくなってくる季節になってきた。わたしは小さい頃からの幼馴染、フェイトちゃんと一緒にそんな太陽のもとにさらされながら家への道のりを歩いていった。

「あつつくい……。なんで夏ってくるんだらうね、夏とかなくなればいいのに」

「なのはこの頃俊みたいになってきてるよ?」

「夏って素晴らしいよね。生命の息吹を肌で感じるし、夏は海水浴やバーベキューに花火とやりたいことや楽しいことが沢山あるよ!

夏さいこうー!」

「そんなと同列に扱われるのが嫌だったんだ……」

当たり前だよフェイトちゃん。あんなバカと同列になるくらいならバカの衣装部屋に置いてあるナース服着て六課に行くほうがましだよ。

「そういえば俊からメールで『冷房いれてるからいつでも帰ってきていいぜ、マイハニー』ってきたよ」

「ああ、それわたしもきた。その時は丁度ジ○リ鑑賞会だったから返信しなかったけど」

「やっぱりジジの可愛さは異常だよな」

「それアルフさんが聞いたら泣くと思うよ? というか、どう考えてもキキでしょ」

犬よりネコ派になったのフェイト!? とか言いながら。

てくてくてくてく、二人で足並みを揃えながら歩いていく。

「そういえばフェイトちゃん。俊くんから聞いたんだけど、ヴィヴィオがペットを欲しがってるみたいだね」

ヴィヴィオがいない時間を見計らって、俊くんが私に相談してきた。

曰く『ヴィヴィオがペットを欲しがってるんだけど、二人的にはどう思う? 俺としては、なのはとフェイトが俺のペットみたいなもの

だし、いらなと思うんだけど

さ』

いや、キミがわたし達のペットみたいなものですから。なに勝手にペットから飼い主にランクアップさせてるんだ。もちろん、その時は後半の部分を無視して三人で話し合ったのだが、まったくもって決まらなかった。

以下、回想

☆

「ペットを飼うのはいいとしても、それが一過性のものにならないか心配なんだよね。飽きてしまったときが恐ろしい」

深夜とまではいかないけど、ヴィヴィオが寝静まったのを確認して、わたし達三人はリビングで緊急家族会議てきなものを開いた。

「うくん、ヴィヴィオは良い子だからそんなことになるとは思えないけど」

「いや、甘いぞフェイト。なのはの唯一の得意料理である桃子さん式キャラメル並みに甘い。なのはとフェイトがSよりなんだからヴィヴィオだってペットを苛めることに快感を覚えてしまうかもしれないじゃないかあ!!? うちの天使が墮天使になるかもしれないぞ!」

「キミの妄想はいつも飛躍しすぎてるよ」

そうはいつでも……確かに彼の言う事には一理ある気がする。ペットを飼うつてことは命を預かると同一であり、きちんと責任を持たないのであればペットを飼おうとは思わない。

だけど――

「ヴィヴィオが喜ぶ顔はみたいかも……」

なんとたつてヴィヴィオはうちの笑顔担当。ヴィヴィオの笑顔があれば仕事なんて苦にもならない。……まあ、仕事はしてないに等しいんだけど。

わたしの言葉に彼は頬を掻く。

「俺もヴィヴィオの喜ぶ顔はみたいけどさー」

彼も別にヴィヴィオが嫌いでもこんなことを言っているわけではない。むしろヴィヴィオと一緒にいる時間が一番長いからこそ、真剣に考えているんだと思う。

「俺は権力的にはこの家で一番弱いから、二人が許可出したらヴィヴィオ連れて四人で猫井さんの所に行こうと思うけど」

「うーん」

そういわれると困ってしまう。許可は出したんだけど、何分命を預かるわけだし。

「それにペットに何を飼うのかも重要になってくるよな。もう面倒だからアルフ連れて来ればよくね？」

「俊がお義母さんの家に行つて、アルフを説得してきたらいいけど」

「ごめんフェイト。アルフはなしにしよう。けどさ、これは真剣に悩むよな。だってネコとイヌはなのはとフェイトで埋まってるわけだし」

「いやわたしたち人間だから。俊くと違って人間だから」

「ちよつとまってくれ、それじゃ俺はいつたいなんなんだ？　こんなイケメンでクールな俺は何なんだ？」

「グール……かな」

「ビックリだよ、10年以上グールがそばにいたのに平気な顔してるお前たちにビックリだよ」

普通腐敗臭で凄いことになるしね。

それはともかくとして、

「仮に飼うとしたら鳥さんとかだよな。可愛いし、わたし好きなんだよね」

「あ、私も好きだよ」

「二人とも、前から俺は二人とも鳥のように美しいと思っていったんだよ」

「わかったからこつちに詰め寄らないで」

油断も隙もありやしない。どうして彼はムードというものがわ

からないかなあ……。 まったく。 普通、二人つきりのときとかに……こう……ねえ？

フェイトちゃんと二人、彼の顔面を手で押さえながら考える。

「あまり世話がかかるものだど厳しいかもね。 もし、ヴィヴィオが一人でお世話できないものならわたしは認めたくないかも」

「え？ なんで？」

顔面を押さえられたまま、俊くんがクエツションマークを浮かべる。

「いや、だつてさ、ヴィヴィオがペットを欲しがってるんでしょ？」

だったらそのペットはヴィヴィオがきちんとお世話できるレベルにしないとダメだよ。 手を余して俊くんの手伝いを求めちゃヴィヴィオのためにならないと思うの」

「そ、そんなもんなの？」

「当たり前でしょ。 まったく……やっぱり俊くんは甘いよ。 キミの言葉を借りるなら、『わたしのキャラメル並みに甘いよ。』 それじゃヴィヴィオのためにならないでしょ」

「……なのはが大人っぽいこと言ってる……」

「どういう意味よそれ!？」

わたしだつて19歳だよ!? キミよりも精神的には大人だよ!

「ヒドイよ俊! 普段はアレなのはでも、ヴィヴィオのことなら本来以上の力を発揮するよ!」

「気付いてフェイトちゃん! フェイトちゃんが一番ヒドイこと言っている事実気付いて!」

フェイトちゃんからみたわたしがどういった感じに映し出されているのが疑問になってきた。 ……大丈夫だよ? わたし大丈夫だよ?

「というか、いま思っただけでなんかこのまま二人を押し倒して――18禁にイけそう気がする。 ついに俺の夢である、フェイトのおっぱい吸いながらなのはにアナルを弄ってもらえるかもしれない」

「フェイトちゃん、お薬の時間だよ」

「ちよつとまって、いますぐ持つてくるから」

俊くんをバインドで縛ったあと、30分会議を続けたのだが決まらなかった

☆

あの時のことを思い出し頭を抱えながら、家の玄関を開ける。

「ただいまー!」

『うわああああああん!! ヴィヴィオがかつたのー!』  
玄関を開けたと同時に、ヴィヴィオの泣き声が聞こえてきた。

「なのは!」

「うん!」

急いで声のした場所、リビングへと移動すると――

「甘いなヴィヴィオ! この俺にスマブラで勝とうなんぜ100年はええよ!」

「ヴィヴィオがかつたのー! ヴィヴィオがかつたもん!」

「はっは、何を言っているんだこのミステリーガールは。画面には映し出されているだろ? 勝者と敗者がどちらなのかが」

「ちーがーうもん! テレビがおかしいだけだもん!」

「ええ!? なにその子ども特有の主張!」

リビングでは19歳児が5歳児相手に本気を出してスマブラをしていた。いましがた決着がついたのか、画面上には勝者と敗者を現す順位が。何をやっているんだ、この19歳児。5歳児相手に本気をだすキミの思考回路のほうかミステリーだよ。

ヴィヴィオがわたし達に気付いたのか、泣きながらフェイトちゃんの胸に飛び込んできた。

「フェイトマーマーあああああ! ヴィヴィオかつたのにー!」

「うんうん、ヴィヴィオ勝ったもんね? 俊に勝ったもんね?」

ヴィヴィオはフェイトちゃんに任せて、わたしは19歳児の相手をすることに。

「もう……ヴィヴィオ相手になに本気だしてんの!」



「いや、本気じゃねえし俺が本気でしたら1秒でk oできるし」

「子どもみたいなこと言わないの！ まったく……なんでヴィヴィオに本気だったの？」

「社会の怖さを教えてやろうと思ってだな」

「キミは社会にでてないでしょ!? 無職が言っても説得力皆無だよ!?」

「いや、無職の代行者的な立ち位置で……」

「いらないよ、そんな立ち位置!? それ社会の役に立たないでしょ!」

「僕が無職でいることによって、僕以外の人が一人職に就くことができるんだ。僕はそういったことに喜びを感じる」

「わたしは泣きたいよ!」

「え? それじゃ俺が本当に職に就いたらどうする?」

「フェイトちゃん達といつクビにさせられるか賭けるかな」

わたしの予想だと一週間以内にはクビになると思う。

わたしの言葉を聞いて、彼はヴィヴィオをあやしているフェイトちゃんに駆け寄った。

「フェイトママー! トロール高町がいたいけな幼馴染を苛めるよー! 助けてー!」

パアーン!

「……なのはママ、フェイトママにビンタ打たれたから俺を癒して……」

「いまのはキミが悪いよね。ヴィヴィオあやしてる最中なのにフェイトちゃんの所にいったキミが悪いよね」

それとトロール高町ってどういう意味かな? どう考えても化け物しか思い浮かばないんだけど。

「ほら、なんでヴィヴィオ相手に本気だったのか知らないけど、ちゃんと謝っといで。流石にフルボッコにすぎだよ。このダメージの残り見る限りほとんどノーダメじゃん。こんなことやられたらわたしでも心折れるよ」

「不屈のエースの心ってポツキー並に折れやすいな」

「ポツキーをバカにするな」

「俺のポツキーも勃起しちゃうぜ」

「お願いだから会話のキャッチボールしよう」

わたしは彼の背中を押して、ヴィヴィオのところに。

フェイトちゃんは泣いているヴィヴィオの涙をふいて、彼の正面に立たせる。

ヴィヴィオの目線まで膝を曲げ、両手を合わせて謝る彼。

「ごめんなーヴィヴィオ。ヴィヴィオがあまりにも可愛いからつい苛めたくなっちゃった」

「ヴィヴィオ、おにいさんなんてキライ！ ヴィヴィオいじめるもん！」

「いや、ほんとごめんってば。もうあんなことしないから、絶対にしないから」

「ほんとうに……？」

「ほんとほんと！ 嘘ついたら六課にパイ生地投げに行つてやるよ！」

「ん~~~~~……。でもダメー！」

顔の前で大きくバツテンを作るヴィヴィオ。いや、パイ生地投げられても困るんですけど……。

彼はいかにも困った顔をさせながら——訂正、毘にかかった獲物を見るような顔をしながらヴィヴィオにこう切り出した。

「うくん……それじゃ、俺がヴィヴィオにペットを飼つてやることで許してくれないかな？」

「え!?! ペット!?!」

「うんうん、ペット。あまり高い動物は買えないけど、俺のお小遣いで買える範囲だったらいいよ?」

え? ちよつ!?! なに言ってるこの人!?!

「やったー! ヴィヴィオおにいさんだいすきー!」

彼に抱きつくヴィヴィオ。彼もヴィヴィオに抱きついて二人でくるくると回り出した。

と、思ったらヴィヴィオをフェイトちゃんに預けてこちらに向かつてくる。

「どういうつもり?」

「いやー……午前中、ずっと動物の特番見ててさ。動物を見るたびにヴィヴィオが欲しそうな目で俺に訴えかけるんだよ。挙句の果てに、俺のすそを掴んで離さないんだよね。もう耐えきれなくて。あ、これは俺の独断だから来月のお小遣いの分をペットに回してください」

……俊くん。ヴィヴィオに甘すぎだよ……。

まあ、そういったところも彼の魅力の一つなのかもしれないけどさ。

「まったたく……。今度からこんなことしちやダメだよ?」

「うむ。よからう」

「なんでキミが上から目線なの」

バカをほつといて、喜ぶヴィヴィオとフェイトちゃんのとこに。

「フェイトちゃん、いまからペットショップ行くけど大丈夫?」

「うん、オツケーだよ!」

「わくわく! ペットだお〜!」

「けどヴィヴィオ。ちゃんとヴィヴィオがお世話できる動物じゃないとダメだからね?」

「はい!」

う〜ん、ちゃんとわかってるのかな?!

ヴィヴィオの喜ぶ姿を見ると、どうしても不安を拭えないわたしであった。

「むっ!? あなたも私もポッキーって、どういう意味なんだろうか?もしかして、男をスティックとして、女をチョコに例えているのか。となると——お菓子メーカーは淫らな性行為を望んでいるのか!」  
彼に関しては不安しかない。

51. ヴィヴィオ！ ヴィヴィオ！ アプラック！

スマブラバトルでヴィヴィオをフルボッコにし、俺がフェイトにビシタされてから一時間。俺たち——俺とフェイトとなのはとヴィオは四人仲良く、バイト中にお世話になったペットシヨップ、つまりは猫井さんの所にお邪魔していたのだった。

どうでもいいことではあるが、一応言っておくとネコもどきも看板ネコとして存在している。なお、なのはもフェイトもネコもどきを無意識にスルーした。俺は意識してスルーした。

現在はヴィヴィオが選んでいるのを、俺たち三人が後ろでみている形になっているのだが——

「このネコが可愛いくない？」

「いや、どう考えてもこっちのイグアナのほうが」

「この犬、アルフみたいでかわいい」

それぞれがそれぞれ、好きなようにペットにする動物の名前を上げながら遠目で物色しているのだった。

なのはは当たり前のようにネコに目がいき、俺は王の中の王のような振る舞いをカゴの中で見せているイグアナに目を奪われ、フェイトは自分のパートナーであるアルフに似た犬をずっとみていた。

「いや、キミのイグアナは論外でしょ」

「でもカツコイイぞ、あのイグアナ」

「えー、なんかシグナムさんみたいだよ」

どうやら、なのはの中ではシグシグはイグアナらしい。案外こいつも友達に対しての評価は厳しいものがあるかもしれない。

「そういえば知ってる？ イグアナって自分のお尻が大好きらしいぜ。つまり、なのは理論でいくとシグシグは自分の尻が大好きな変態になるぞ」

「……ごめん、さっきの話なしでお願い」

なのはが青ざめた顔でそう言ってくる。そりゃ、そうだよな。

あのシグシグが自分の尻の臭いが嗅ぎながら、『おほほほほほほほっ！ んぎもぢいいいいいいい!!』とか言ったら俺でも引

くわ。

いや、俺ならどさくさに紛れて突くかな。引いたうえで突く。

「まあ、冗談なんだけども。だからメールで謝ろうとするなって」

「ま、また騙されたの!？」

驚愕した顔でこちらをみるのは。可愛すぎるぜ……!」

「くそっ……。またしても……。今度はわたしが、ギャフンと言

わせてやるもん……!」

拳を握りしめて、何かを誓うのは。

そしてなにやら考え事をしはじめた。暇になったからフェイト

と遊ぶことに。

やはりペットシヨップときたら話題はもちろんアルフのことだよな。こう……。それとなくアルフの話題をだしてちよつとしたカツプルみたいな感じでいこう。

お前らみておけ!。これがイケメンの行動だ!

「そういえばフェイト。アルフってペットシヨップに売らないの?」

「もう近づいてこないで」

「まって!。選択肢ミスった!。クイックセーブしたところからやり直させて!？」

間違って選択肢の一番上を選んでしまった!。違う!。ちよつと

まっておけ!。もう一度イケメンの行動をみせてやる!

「そういえばフェイト。俺、ずっと前からフェイトの首に犬の首輪をつけて調教したいと思ってたんだ」

「本格的に近づいてこないで!。なにこの幼馴染、こんな人と一緒に暮らしてたの!?!。いますぐ追い出したいんだけど!?!。というかいますぐ出て行って!」

「まって口が滑っただけだから!。ワンモア!。ワンモア!」

いかん、さっきの失敗で動転してしまった……!?!。今度こそ、今度こそ、イケメンの行動をみせてやる!

「あのさ、フェイト。俺、ずっと前からフェイトに調教されたかったんだ。そしてフェイトの犬として一生を過ごしたかったんだ」

「なにこのカミングアウト!? 嬉しくもなんともないよ!? むしろ気持ち悪い! というか、そんなこと考えてたの!? アルフの単語とか途中から消えてるし!」

「調教されたいのはほんとかな。あとさ、アルフって誰だっけ?」  
「いま最高に最低な人間として輝いてるよ!」

フェイトが自分の持っているバックで俺を軽くたたいてくる。それこそ、例えるならばラブラブカップルのように。だから俺もラブラブカップルの彼氏としてそれ

相応の態度をみせることにした。ちよつとだけ恥ずかしいけど、でもフェイトとのイチャイチャをみんなに見せてやるのもいいかもしれない。

「おほほほほほほほほほっ! んぎもちいいいいいいいいいいいい!!」

フェイトがペットショップから逃げ出した。真・ソニックでもなのに光の速さで逃げ出した。

困ったもんだぜ、俺の彼女は。

「おいおいハニー。もとい、俺の嫁よ。いったいぜんたいどうして逃げ出すんだい? 俺たちラブラブだろ?」

「ラブラブでもないし、付き合ってもいないでしょ! それにいきなりあんな奇声上げられたら誰だつて逃げるよ! 初めてだよ! 本気で俊とかかわりたくないと思ったのは!」

「あ、すいませくん。ちよつと嫁とイチャイチャしてまして。はい、あ、僕たち19歳なんです。はい、もう10年も付き合ってます」

「なんで通りすがりのおばちゃんに私のこと紹介してるの!? いやいやいやいやいや、なんでみなさんこっち向いて『おめでどうね』みたいな目で拍手してるんですか!? ほんと私たち何もありませんから!」  
「とか言いながら、顔を赤くしてるでしょ? あれは照れてるサインなんですよ」

「頭に血がのぼってるサインだよ!」

バリアジャケットのときのようにツインテ状態のフェイトが、フン

ガ―って感じで地団駄を踏みながら怒る。 ……やばい、本気で調教されたい。

しかしながら、いま俺とフェイトがいる場所はペットショップから少し離れた場所である。 とうるかフェイトさん、あの一瞬の間ここまで移動してきたのかよ。 とんだ化け物だぜ。

「さてフェイト。 俺たちの娘が心配だから、そろそろペットショップに行こうか」

「……まあ、確かにヴィヴィオは心配だしね。 でも、俊はパパって呼ばれてないからね?」

「それはマジで不安なんだよな。 このまま俺は『お兄さん』が定着しそうでさ。 なのはとフェイトと結婚したときどうしよっかな、と思ってる」

「なんでキミの未来予想図では私達と結婚してるの……」

「愛してるから」

「ありがとう」

そのままフェイトとてくてく歩く。 もうすぐがペットショップなので、ペットショップに入る前にフェイトに言うておくことにしよう。

「フェイト、やっぱりフェイトはツインテがかわいいよ」

「……ありがとう。 俊はツインテールとか好き?」

「大好き。 とくに、なのはとフェイトのツインテとか最高」

「それじゃ……日常でもたまにしようかな。 あ、あくまでたまにだからね?」

何故かほつぺたを指で突かれながらであったが、自然に俺の頬を緩んでしまった。 だって、日常でも、たまにでも、フェイトのツインテが見られるとか——最高に幸せだ。

☆

俺視点でのフェイトとのイチヤイチャタイムを終えて二人揃ってペットショップに戻ってきたわけだが——

「この鳥さん……可愛すぎる……!」

なのはがインコを見ながらわなわなと震えていた。それをみて、俺の股間はムズムズと膨らんできた。

落ち着け! 俺のエクスカリバー! お前はまだ本気を出しちゃいけないはずだ!

「……………」

「あの……フェイトさん? どうしたんですか?」

「べつに、なにも、なんでもない」

「いや、いま俺のほうをジト目で見ていたような……」

「自意識過剰だよ、俊」

なんだかフェイトちゃんが冷たいです。さっきまでラブラブカップルだったのに、とても冷たいです。一体全体、何が起こったんだ?

「フェイトたん、フェイトたん。大好きだよ」

「知ってるよ、ありがとう。ところで、なのははいるけど、ヴィヴィオはどこにいるのかな? 私のほうからはペットショップが見えてたからお店を出たということはないはずだけど……」

キヨロキヨロと店を見回すフェイト。確かに、考えてみるとヴィヴィオがさつきから見当たらない。なのはに訊いてみることにしよう。

後ろから抱きつきながら、なのはにヴィヴィオの居場所を尋ねるところに。

「なーのーヴァー——!?!」

「あ、俊くんだったの? やっぱりね、俊くんの気配がしたもん」

「ちよつとまって。それってさ、俺と判ったうえで顔面に裏拳叩き込んだってこと?」

「愛情だから仕方ないよ」

「愛情なら仕方ないな」

なのはと二人、うんうんと頷く。ところで、この鼻血止まらないんだけど。



「なのは、ティツシユもってる?」

「あ、もってるよ。鼻に入れてあげる」

「サンキュ」

丁度良い大きさにちぎって丸めて、鼻にいれてくれるのは。ラブラブだろ? これがいまさつき、裏拳を叩き込んだ側と叩きこまれた側なんだぜ?

そんなこともおかまいなく、キヨロキヨロとなのはは店内を見回す。フェイト同様、ヴィヴィオを探しているのだろう。

「……ほんとにいないね、ヴィヴィオ」

「店内にはいるはずんだけど……」

「まあ、落ち着け二人とも」

焦り始める二人を、どうどうとなだめる。

「俺にはわかる。ヴィヴィオはちゃんと伏線を回収するためにネコか犬を持ってくるはずだ。だから今頃、猫井さんと一緒に子犬か子猫を選んでいる最中だろうよ。ほーら、樽をすれば」

猫井さんと一緒に、奥のほうからヴィヴィオが現れた。トコトコとドタバタと、子ども特有の笑顔で、伏線を回収するために、子犬か子猫を抱えてヴィヴィオが俺たちのところにやってくる。そしてヴィヴィオはやってきた。笑顔を浮かべながら、やってきた。

——アヒルと一緒にやってきた

「いや、流石にダメだろ」

異口同音に声を揃える俺たち。

「どうして? かわいいよおー?」

「いや、あのな、ヴィヴィオ? いくら俺が、犬や猫はなのフェイト被るからダメだといったからといってだな、だからといって本当にネコとイヌ以外を探さなくていいんだぞ? ただでさえ、イヌやネコと触れ合っている描写をちよこつと書いてるんだから、そこはイヌかネコにしとこうぜ」

「でもアヒルさん、かわいいよー?」

「いや、うん。まあ、確かにアヒルも可愛いけどさ。なんというか……最終回直前に出てくるキャラみたいじゃん、こいつ。これいき

なり出てきちやダメだつて」

誰が予想できてたよ、ヴィヴィオがアヒルを連れてくるなんて。

「そ、そうだよヴィヴィオ！ ほら、この鳥さんとか可愛いよお〜！  
こう……パタパターって感じがするよー」

「なのはの頭はアバババって感じだけだな」

「どういう意味かな!? そのアバババってどういう意味かな!」

「でもまあ……もうちよつと考えようぜ？ 今度は四人で考えよう」

「そうだね。 今度は私達も考えようか」

ヴィヴィオのペットなので、できる限りヴィヴィオの意見を尊重したいのだが——アヒルはちよつとわかんない。 これはリアルにわかんない。 なのはとフェイトの顔が一瞬引き攣ったくらいだから、相当だったんだとは思うけど。

「でもでも、おにいさんはヴィヴィオがおせわできるならいいって  
いったもん！ ヴィヴィオおせわできるもん!」

「いや、それは言ったけど……アヒルなんてできないだろ……」

俺となのはが頑ななヴィヴィオの姿勢に困惑していると、遠くのほうでフェイトが猫井さんと話している姿が視界に入った。

『あの……どういった状況になったら、ヴィヴィオがアヒルを選ぶ  
でしょうか……?』

『それがねえ。 ヴィヴィオちゃんも、最初はネコやイヌを飼おうと  
思ったらしいのよねえ。 けど、あのアヒルをみた途端、急に 飼う

〃 って聞かなくて……。 こつちも困惑してるのよお……』

『はあ……』

うん、二人の会話を聞いていてもサツパリわからん。

「ほら、ヴィヴィオ。 とりあえずアヒルは返そう？ なのはママも  
一緒に選ぶから」

「いやー!」

「あんまりわがままだと、なのはママ怒っちゃうよ?」

「おにいさんたすけて!」

「え!? 俺がなのはの相手すんの!」

抱きつかれ、後ろに回ってしまうヴィヴィオ。 みると、アヒルは



## 52. 新しい家族が増えました!

「まさか……ペットとしてアヒルを飼うことになるなんて……」

「なんで俺の小遣いでアヒル飼うんだよ……。犬やネコならいいけどさ、アヒルに小遣いが飛ぶと思うと……。買いたい参考書や参考書ゲームだってあるのに、マンガやアニメだって買う予定だったのに……」

「今回はわたしが出してあげるよ……。あと、お小遣いであまりエッチなもの買いきると、お小遣い自体を減らすからね?」

なのはと二人、レジの前で会話する。おいおい……エッチなものじゃねえよ、参考書と呼べ。

後ろでは、フェイトがヴィヴィオとアヒルの相手をしている。

「みてみてー! アヒルさんバクてんするよー!」

「バクテン、スルー!」

「……アヒルってバク転できたっけ?」

フェイトの困惑した声が聞こえてくる。いや、俺の記憶だとアヒルはバク転できないと思うよ。

「すいません、あのアヒルお会計を……」

「あ、べつに無料でいいわよ。むしろ、貰ってくれてありがとうねえ」

バックからサイフを出しながら、レジ会計を済ませようとするのはを、猫井さんの手が制止しながらそう言った。

「それって、どういう意味ですか?」

「言葉通りの意味よ、ひよっとこくん。ここだけの話、あのアヒルは貰い手がなかなか現れなくてねえ。知ってる? 貰い手がないと最終的には——処分するしかないのよね」

「え? ……処分ですか?」

「そ、処分。まあ、私は処分なんてするつもりなかったから、貰い手がないのであれば私が貰い手になろうと思ってたけども、ヴィヴィオちゃんなら大丈夫そうね」

思わず、なのはと二人、ヴィヴィオたちのいる方向を振り向く。

アヒルに抱きつきながら笑顔でフェイトと楽しくお喋りしている  
ヴィヴィオ。ヴィヴィオに抱かれながらも、ちよつと周囲を警戒す  
るように首を左右に動かすアヒル。それはなんだか——姫を守る  
騎士を彷彿とさせていた。

「なんだかなあ……。なのは、もしかしたら好きな動物ランキング、  
アヒルが1位になる日もそう遠くないかもしれない」

「キミの浮気癖は動物にまで作用するんだね」

そう言うのはも、笑顔じゃないか。

レジから離れてフェイトとヴィヴィオとアヒルと合流し、四人と一  
匹で店を出る。

しかしながら、このアヒル、じつはちよつとだけ気になっていた  
りする。こう……。具体的にどこがどう気になるのかは言えないのだ  
が……。とにかく気になる。なんか、こんな奴をどこかで見たような  
気がするんだよな。

☆

家に帰るまでの間に、何人の通行人に見られただろうか。ただで  
さえ目立つ俺たちに加え、今日はアヒルが凜としてヴィヴィオの横を  
歩いているのだから、そりゃ通行人もこちらに目を向けるものだ。  
そして俺の顔をなにか得心のいったように歩いていくのも納得がい  
く。みんなの言葉を代弁してやろう。

『ああ、またこいつか』

たぶんこんなところだと思う。いや、まじでみんなの俺を見る目  
がこんな感じだった。

そして現在なのだが、俺たちはリビングでアヒルの名前を決めてい  
た。

「第一回！ ペットの名前を決めちゃいましょー大会——！」

『いえーい！！』

「さあさあ始まりました。ペットの名前を決めちゃいませう大会。  
本日は私、ひよつとこが司会進行役を務めさせていただきますま

す。そして隣には実況・解説のフェイト・T・ハラオウンさん。やあやあ、フェイトさん。本日はどうなると思いますか?」

「あの……家族四人しかいないのに、私と俊抜けてもいいの?」

「ベツトいく?」

「行きません。つて、そうじゃなく、なのはとヴィヴィオの二人で考えることになるよ? つて言いたいわけ」

「ふっふっふ、巨乳ちゃんはわかってないな。俺がそんなハマをするわけないだろ? ちゃんと手は打ってあるさ。——文明の利器を使わせてもらおうじゃないか。ちなみに、愛するなのはちゃんは最初から戦力外さ」

「ああ……そういえばチコリータに『ゴメス』つてニックネームつけたのはなのはだったね……」

取り出したるは携帯電話。まあ、携帯電話とかいいながら地球にもなんなく電話やメールができる超便利アイテムなだけだな。

そんな携帯電話を操作していく。メール画面を開き一斉送信の画面に。

そしてリストから相手を順々に選んでいく。

「え〜つと、クロノとユーノは仕事だから抜かして」

「あれ? その二人抜かしていいの?」

「うん、今回は素早い返信が命だからな。今回は二人とも除外にしよう」

いまだにツインテ状態のフェイトが俺の携帯画面を覗き込む。

「へ〜、俊つて知り合いやっぱり多いね。電話帳の整理も大変じゃない?」

「まあ、結構大変かな。だけどまあ、連絡を取り合うやつなんてあんまりいないしな〜」

「ふ〜ん。——とところで、この女の子だれ?」

フェイトが俺の携帯を指さしながら、カルピスを飲んでるミニスカメイド服の女の子を指さす。……ごめん、それ俺なんだ。

「え〜つと……俺……かな」

「は?」

「だから、女装した俺だよ」

「……そう……なんだ。 その……私は俊の趣味ならいいと思うよ。 うん。 できれば、普通に女の子を好きになってほしいけど……」  
「いや、誤解だから!? ベつに女装野郎として生きていこうなんて固い決意してないから! ちょつとした出来心でやっただけだから!」  
「でも……よく考えれば、たまに俊は女装してたもんね。 ごめんね……私気付けなくて……」

「涙をためながら俺の手を握らないで!? 罪悪感で死にたくなってる!」

フェイトが俺の手をとり、自分の胸に合わせようとしたとき、ちょうどよく携帯からメールを受信したアナウンスが聞こえてきた。

『メールが届いたお? はやくみようよ!』

「相変わらずの受信音だね」

「ミクちゃん可愛いじゃん」

フェイトが手を離してきたので、携帯を取ることに。

「そういえば、皆にどんな内容のメール送ったの?」

「えくつとね。 『家でアヒルを飼うことになったので、名前つけようぜ!』 って内容かな」

ちなみに送った人物は、はやてにヴォルケン、おっさんに嬢ちゃんにスバルとエリオとキャロ。 カリムさんとマツパさんに高町家と怖いけどリンデイさんにも出して

みた。 あと安定のスカさん。

さてさて、まずは誰のメールかな?

「おっ! おっさんじゃねえか。 あいつ早いな。 もしかして暇だな。 えくつと、メールの中身は……」

『昨夜、交番にロケット花火が投げ入れられたんだが、お前じゃないよな?』

「しらねーよ!! このタイミングで関係ない話してくんな! ボケ!」

まったく……俺なら交番にロケット花火なんてしねえよ。 お前の顔面にロケット花火ぶつけるに決まってるだろ。

「えつと……あの人も大変だね。ロケット花火だなんて……」

「どうせ、遊んでたら暴発でもしたんじゃないやねえの？ よくあることだよ。あー、次々。えつと、カリムさんとマツパさんか」

ふむ……あの二人ならいい名前をを考えてくれそうだな。

カリムさん 『いつになったらDVDを貸してくれるのでしょうか？』

マツパさん 『この頃、私も卍解できるようになりました！』

「やべえよ……カリムさんにDVD貸すの忘れてた……。近いうちに聖王教会行かないと……」

「いや、それよりも問題はマツパとかいう人だよ。これ突っこんだほうがいいのかな？」

「まあ、お前らだつて卍解まがいのことできるんだからいいじゃないか。とりあえず俺のメール読む気がないということだけはわかった」

この人たち絶対読んでない。俺からメールきたから丁度報告でもしとくか、的なのりなんだと思う。

「あ、次は高町家だな。まあ、高町家というか桃子さんなだけけど。」

桃子さんなら俺のメール読んでるだろうしな。現段階で、ペット

以上に重要な話もないはずだし——」

桃子さん 『なのはとフェイトちゃんどこまでいったのかしら？』

『もう3pとかしまくりで、淫らな性活を送っています』と。送信

——」  
「させないよ!? そんなデタラメな返信絶対にさせないから!!」

「ちよっ!? 俺の携帯!」

横でみていたフェイトが俺の携帯をぶんどる。なんて奴だ。人の携帯盗むなんて最低な奴だな!

「返せ! ミルタンク! この返信に俺の全てがかかっているんだよ!」

「私となのはの人生もかかっているよ!? 100%デタラメな返信内容



送らないで！」

「ふっ……それはどうかな。 知ってるんだぜ？ フェイトが夜な夜な、『んっ……あっ……ダメ……！』 ダメだよ俊……！ なのはが隣にいるのに、そんな激しく突いたら……！ イ、イっちゃう！」とかやってることも知ってるんだぜ？ 一人でオナニーしてることも知ってるんだぜ？」

「あ？ いまなんつった？ 風穴開けられたいの？」  
「すいません、調子にのりすぎました」

フェイトがバルさん取り出して本気でキレたので素直に謝る。  
フェイトさんガチで怖いっす。 もろ死神じゃないですか。

「まったく……とりあえず、桃子さんには私が返信するから」

「はい」

それから3分

「あの……まだ？」

「う、うるさい！ ちょっと文面に不備がないかとか、ちゃんと書いたことを正確に伝えることができているかを確認してるの！」

それも電話で話せばすむんじゃない？ とか思ってたけど、またバルさん取り出されたらたまったもんじゃないので口は出さないことに。

どうでもいいことだけで、バルさんってゴキブリ駆除するあのジェットみたいだな。

ということは、フェイトがゴキブリになんの？ ちょうどツインテだし。

「だめだフェイト！ お前はゴキブリになんかなつちやいけな！！」  
「意味わかんないこと言いながら抱きついてこないで!? あの会話からどうやったたら私がゴキブリになるの!？」

「いや……でも……バルデイツシユがバルさんなんだよ！」

「ごめん、日本語喋ってくれる？」  
フェイトが呆れた目で俺のほうをみていた。 うん、俺もかなり混乱してたと思う。

「ごめんなフェイト。 ちょっと混乱してたみたいだ」  
「あ、うん。 直ってくれたならそれでいいけど……」

「俺——フェイトがゴキブリでも愛してるよ!!」  
「直ってない!?!」

☆

「メダパニから回復しました」

「お疲れさま」

「うす」

フェイトのゴキブリ疑惑から回復した俺は、早速メールを見ることに。それとなのはさん？ アヒルは空を飛ばないので空を飛ばせようとしなくてください。

「さて、アババババな、なのはちゃんはほっておいて、次のメールにこうと思います。 え〜っと、次はリンデイさんですな」

「お義母さん、よく俊に返信してくれたね。 無視するかと思つたのに」

「うん、それは俺も思った。 まあ、アレだよ。 リンデイさんも、なんだかんだ言いつつ俺のことが大好きなんだよ。 じゃないと、返信なんてしないしさ」

「確かにね」

フェイトと二人、顔を見合わせて笑いながらリンデイさんの文面を読む

リンデイ『お黙りなさい、この鳥頭』

「罵倒するために返信したの!?!」

リンデイさんブレなすぎる……! しかも自分の娘の結婚相手に向かつて平然と鳥頭呼ばわりとは……! なんちゅーババアだ……!

「いや、べつにキミの結婚相手にはなつてないけど」

「え!?! それじゃ他に誰かいるの!?!」

「それもいないけど。 ……まあ、候補くらいならいるかもしれないし、いないかもしれない」

「あやふやすぎる!?! 認めん! うちのフェイトは嫁にはやらんぞ」

！」

「キミはいつたい誰目線なの……。 あ、お義母さんから追加でメールがきてるよ？」

「あ？ いいよ、もうしらねえよ。 リンデイさんが攻略不可能なキャラだつてことはわかったからいいよ。 もうあんなババアなんて必要な——」

リンデイ『いますぐ家こいや』

「……フェイト、謝ったら許してくれるかな……？」

「……こればかりはなんとも言えないかも」

それから恐る恐る電話をかけました。

とつても怖くて、ずっとフェイトの手を握ってました、まる

☆

「よーし！ トイレで軽く泣いてきたことだし、気を取り直してメールを読むぞー！」

「ヴィヴィオに心配されるくらいにはトイレで泣いてたね。 大丈夫？」

「うん、なんとか廃人にはならなかったよ」

いやー……リンデイさん洒落になんねえわ。 それとなのはさん？ アヒルにお手をして、くちばしで突かれたからといってペキンダックにしようとしなくてください。 ヴィヴィオが本気で泣きそうです。 もう、必死に止めてるヴィヴィオの姿だけでこちらは目頭が熱くなつてきます。

「なのはー、なのはもこっちきてメール読もうぜー」

「ん？ ちよつとまってー。 このアヒルを丸焼きにしたらいくよー！」

「アヒルはペットとして飼うために家にやってきたんだよ！ お前の非常食じゃないのー！」

なのはを羽交い絞めにして、強引に椅子に座らせる。

「だってだって！ アヒルがわたしの手を突いたんだよ!？」

「まあ、そりやいきなり握りこぶしを作りながら、キミなら空を飛べるよ！」なんてことをのたまいながら、飛ばせようとする奴は突かれて当然だと思うけど」

「でもでも！ アヒルだって空を飛べるかもしれないじゃん！ 頑張ればなんだってできるよ！」

「お前の根性論とアヒルが空を飛べないという不変の事実を一緒にするな！」

「というか、どうしてそこまでしてこいつはアヒルに空を飛ばせたいんだ？」

「いまはアヒルの名前を募集してるとこなんだよ。一応、なのにも聞いておこうと思うけど……なにか名前ある？」

「ゴルメツチヨ」

「却下に決まってんだろ。なのメツチヨが」

「どっからきた。お前のゴルメツチヨはどこからきたんだ。」

「あ、俊。メールがきてるよ？ 新人たちからだ」

「ほんとだ。え〜つと」

嬢ちゃん&スバル 『なのはさんをペットで欲しいのですが、ダメですか？』

返信 『俺の性的な意味でペットだから無理です』

「削除つと」

「ああああああああああああああああああああ！ 俺の返信内容がああああああああああああああああああ！？」 なにしてくれんだよ、なのはん！」

「それわたしのセリフだよ！ なんで事実無根の内容を平気で打つことが出来るの!？」

「いつか真実が変わるかもしれないからね。その予行練習として僕は何万回とこの内容を打ってきた。もちろん、送る相手はいなかったけど（キリ）」

「（キリ） じゃないよ!? そんなことしてて虚しくないの!？」

「僕の虚しく乾いた心に、キミのぬくもりだけが潤いを与えてくれる」

「素晴らしいながら抱きつくな!! 気持ち悪いにもほどがある!!」

抱きつく俺を引きはがし、突き飛ばすなのは。

「はっはっは、つれないなあ、なのはたん。僕はキミの性奴隷みたいなもんじゃないか」

「いや、それもそれで問題あるけどね」

「というか、キミは望んでそんなものになってどうするの？」

「そう聞いてくるのは。」

「無論、二人とイチャイチャするためかな」

「手段を択ばないところがアレだね……。べつにそんなことしなくても、いくらでも方法はあると思うんだけどなく……」

呆れたようなジト目でこちらをみてくるのは。すごく……ゾクゾクしていいです……!」

「あ、それよりエリオとキャロのメールもみないと」

嬢ちゃんとはスバルのメールは、なのはに消されてしまったので仕方がない。いつか口頭で説明するでしょう。

右になのは、左にフェイトで、三人仲良くメールの文面を見る。

エリオ&キャロ 『あの……いつかどこかおいしいお店にいきませんか?』

「『この子たちの将来は安泰だな』」

三人仲良くハモリながら、頷く。

内容の返信にはなっていないけど、こう——なんか安心する。

さっそく、近いうちに食べに行こうとの約束をすることに。

するとちようどいいタイミングでスカさんからもメールがきた。

スカさん 『昨夜、一人花火をやっていたら間違ってロケット花火を交番に打ち込んでしまったのだが……どうすればよいか?』

「いや謝ってこいよ!?! なんでアンタはちよつと余裕ある態度なんだよ!?! おっさんに殺されるぞ!?!」

とりあえず、すぐさまおっさんに謝るように指示する。いまなら許してくれるかもしれないしな。最悪、半殺しで済むはずだ。

「って、そういえばヴィヴィオは?」

「あ、ヴィヴィオならアヒルと一緒に寝てるよ?」

なのはの声と指さした方向に目を向ければ、アヒルを枕にしたヴィオがソファアーの上でスヤスヤと眠っていた。

「あー……俺たちだけではしやぎすぎたかな？」

「たぶんそうかも」

ソファアーに近づいて、しやがみ込む。

しやがみ込んで、スヤスヤと眠る小さくて、可愛らしい女の子の髪を優しく撫でる。

「ごめんな、ヴィヴィオ。 退屈だったよな」

そういいながら撫でる。

振り向くと、なのはとフェイトも後ろにきていた。 二人ともしやがみ込む。

「可愛いね、ヴィヴィオの寝顔」

「ほんとだね」

「子どもは宝で、ヴィヴィオは天使だからな」

「それじゃ、このアヒルは天使を守る守護騎士ってところかな？」

「かもしれないな」

ほんと、ヴィヴィオにべったりだな。

「そういえば俊。 肝心なヴィヴィオに聞いてなかったね、アヒルの名前」

「ふむ、言われてみればそうだったな」

まあ、聞こえてないと思うけど……一応、聞いておくべきかな？

「後日改めて聞くとして。 ヴィヴィオー、アヒルさんの名前は何かいいかな？」

って、何言ってるんだか。 これで答えられるわけないのにな。

そう思っていると、ヴィヴィオの口がほんの小さく動いた。 それは、本当に小さい声で、ともすれば外の喧騒に掻き消えそうな——それほどの声量でか細い声だったが、確かに聞こえた。 小さな女の子が、呟いた名前が聞こえた。

ガーくん

そういったヴィヴィオは、アヒルを強く抱きしめた。 決して離さないように、決して手放さないように——強く強く抱きしめた。

「ガーくんか。可愛い名前だね」

「うん。なのはのゴルメツチヨなんかよりよっぽど可愛いね」

「うぐツ……！」

後ろの二人のやり取りを聞きながら——俺はあることに気が付いた。

「ああ、そういうことか」

なんで俺がこのアヒルを気になるのかがわかった。

「なんつーか……似た者同士だな、ガーくん」

そつとガーくんの頭を撫でながら、似た者同士のこの動物に優しく語りかける。

いらっしやい——今日からお前は新しい家族だよ

### 53. パパと呼んでくれた日

『お兄さんと呼んでくれるのならば キミの遊び相手になると約束しよう。 パパと呼んでくれるのならば キミの笑顔を約束しよう』  
深夜3時。 魑魅魍魎どもが堂々と跋扈し、不審者共が堂々と下半身並びに衣服を脱ぎ捨てるこの時間。 高町なのはとフェイト・T・ハラオウンも日頃の疲れからか、ぐっすりと眠っていた。 しかしながら、ぐっすりと眠っているのはなにもこの二人だけではない。

ヒモにしてペットであるこの男、上矢俊、通称ひよつともぐつすり、自作の高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの抱き枕を握りしめながら寝ているのだった。  
そんなひよつとこの自室に、とある人物ととある動物がはいつてきた。

「ガークン、お兄さんを起こしちやダメだからね？」

「ワカッタ、ワカッタ！ ガークンオコサナイ」

とある人物の名前はヴィヴィオ。 金髪オツドアイの天真爛漫な5歳の女の子。 この家のアイドルである。

とある動物の名前はガークン。 カタコトで喋るアヒルであり、ヴィヴィオの専属ペットのようなものである。 意外にもアヒルでありながら、バク転をすることができる。

しかしながら、そのことによつて高町なのはから空を飛べと言われた可哀相なアヒルさんでもあるのだ。

さてさて、何故このコンビが深夜3時の時間帯にひよつとこの部屋にやってきたかというと――

「ここにやら遊び道具あるよね……？」

遊び道具を取りにきたからである。

なのはママとフェイトママとひよつとこがアヒルの名前を決めている間に、疲れて寝てしまったヴィヴィオは、結構早い時間帯に目を覚ましたのだ。

時間が時間なので両脇でヴィヴィオを挟む形で寝ている二人のママを起こすのは忍びなく、こっそりと抜け出し床で寝ていたガークン





「ごめんなさい、おにいさん……。　　ヴィヴィオ、あそびどうぐをとろうとおもって……」

細い声で謝るヴィヴィオ。　　そんなヴィヴィオをみてひよつとこは――

「許さん」

と、大人げなくいった。

ビクツと肩を震わすヴィヴィオ。　　ついで頭におかれる手。

「まったく……俺を差し置いて一人で遊ぼうなんて許さんぞ。　　俺も

混ぜろ。　　幼女と遊べるなんて最高なんだからな」

そういつて笑いかけるひよつとこに、ヴィヴィオは

「ほんとう？」

と、疑問の声をあげる。　　ついでガークンも首をかしげる。

「ほんとほんと。　　それに、早起きは三文の得といつてな、ようするに早起きしたらいいことがありますよ、　　的な感じで早起きすることはとつてもいいことなんだぞ。　　げんに俺は得したよ。　　ヴィヴィオと遊べるんだ。　　これは睡眠よりも優先するべきところだよ」

そういつて、ひよつとこは「遊ぶか」と、オセロを取り出したのだった。

☆

遊び倒して2時間。　　ひよつとこがいつも起きる時間がやってきた。　　普段はそこからいつも通りの日常が展開されるのだが――今日はい味違っていた。

「すずしいね、おにいさん！」

「だなく。　　ガークンもそう思うだろ？」

「オモウオモウ！」

朝の住宅街の道には、ヴィヴィオの手を握りながら歩くひよつとこと、ひよつとこの手を握りながら歩くヴィヴィオの姿があった。　　そしてヴィヴィオの横をトテトテと歩くアヒルのガークン。

季節は夏であるが、朝方5時という時間帯は、散歩するには気持ち

のいい気温になっていた。

といっても、それはひよつとこの基準でしかないので、一応としてひよつとこの手にはヴィヴィオに着せる長袖のパーカーがあるのだが——ヴィヴィオの顔を見る限り必要なかつたらしい。

すると、二人と一匹の前から犬を連れた——犬に連れられたじいさんが歩いてきた。

「よおじいさん。今回はリール持つてるんだな」

「おお、ひよつとこくん……」

「あの……じいさん大丈夫か？　なんかいつ死んでもおかしくない状態になってきたぞ」

「大丈夫や……ばあさんがまだまだハッスルしてるけん……もうちよつとがんばらんと……」

ばあさん半端ねえ……。　そう素直に思うひよつとこ。

ふと、おじいさんがひよつとこの手を離してしゃがみ込みながら犬を見ているヴィヴィオに目を向けた。

「おお……ひよつとこくんの娘さんかな……」

「まあ、そんなところだよ。　ヴィヴィオっていうんだ。　可愛いだろう？」

「子どもは宝だしのう……」

二人してヴィヴィオをみる。　当人のヴィヴィオは、犬に触ろうと必死に手を伸ばしている最中である。

ふさあ。

「あ、ふかふかあ……」

犬の体毛に触り、満足げなヴィヴィオ。　その笑顔はひまわりのごとく可愛らしい——が

ワンワン！　ワンワン！

「ひゃうっ!?!」

犬の一声で笑顔は引つ込んで、逆に泣き顔になってしまった。  
なおも吠える犬

ワンワン！　ワンワン！

「これこれ、そう吠えちゃいかんよ。　ごめんのう、ひよつとこくん」

困ったように頭をかくおじいさん。

「いや、大丈夫だよ。ほら、ヴィヴィオ。犬さんはヴィヴィオに『おはよー』って挨拶したんだよー。こわくないよー?」

ひよつとこの足にしがみつくとヴィヴィオを抱きながらひよつとこはそうヴィヴィオに説明する。

けれども、ヴィヴィオはひよつとこの胸あたりを握りしめながらフルフルと首を振った。ヴィヴィオがペットシヨップで触れ合っている犬は子犬であり、ヴィヴィオに大きな声で吠えたりすることがないので急に吠えられたヴィヴィオはすっかりと怯えていた。

犬が吠えることはヴィヴィオも知っているし、おじいさんの犬よりも大型な犬の吠え声も聞いているのだが、やはり実際に聞くのと、映像でみるのは違うみたいだ。その証拠が現在のヴィヴィオである。

みると、アヒルはヴィヴィオに吠えた犬を威嚇するようにヤルカツ!ヤルカツ! と叫んでいる。

こちらもちちらで、ご主人様を泣かせた犬に怒っているらしい。

「落ち着けガーくん。アヒルとイヌの異種格闘バトルはまたの機会にでもしとこうぜ」

ガーくんの頭を撫でて、なだめるひよつとこ。ヴィヴィオが胸に抱きついてるので、ちよつと姿勢が悪いがそこはしようがない。

「ほっほ、ひよつとこくん。なかなかいいパパしとるみたいじゃなにか……。えくつと、ヴィヴィオちゃんだったかの? 怖がらせてごめんのー……」

そういつてポケットからヴェルタースオリジナルを取り出し、ヴィヴィオの前に差し出す。おじいさんなりにごめんなさいのつもりなんだろう。

一度ひよつとこの顔をみるヴィヴィオ。

「おじいさんも、ワンちゃんもごめんなさいだつて。ヴィヴィオはどうする?」

ヴィヴィオはそれに首をたてに頷いて、ヴェルタースオリジナルを受け取った。破顔するおじいさん。その顔は、孫を可愛がるようであった。

一方――

「ユルサナイ！」

ワンワン！ ワンワン！

「だからやめろってば」

ガーくんとイヌは戦っていた。

☆

おじいさんと犬と別れてから30分。依然ヴィヴィオはひよつとこの胸の中にいた。抱きかかえられていた。いや、ひよつとは何度か降ろそうとしたのだが、そのたびにヴィヴィオに反対されたのだ。

これでは散歩にならないのだが――そこを許してしまうのが、高町なのはに甘いと言われる証拠なのだろう。

「さっきは驚いちゃったな。犬さんワンワン吠えたもんな」

「うん……」

すっかり口数が少なくなってしまうたヴィヴィオ。そんなヴィヴィオをみて、どうしたもんか……と考えたひよつとこだが――あることを思い出し、ある団体を思い出し、その場所に足を運ぶことにした。

「真面目なあいつらのことだ。もう練習してるだろう」

そう確信をもちながら、ひよつとこは元犯罪者の巣窟場所に向かった。

はたして、ひよつとこが足を運んだ場所には確かにある団体があった。ミッド郊外の大きな広場にその団体はいた。各々が奇抜な恰好とをしながら早朝練習をやっていた。

「よーす、水納。練習はかどってるー？」

「あ、ひよつとこー」

シルクハットに黒ステッキ。黒いコートを纏っているいかにも不審者っぽい男の名前は水納侘須家流。ひよつとこがバイト中に知り合った人物である。善行の体現者といっても過言ではないこ

の男は、依然犯罪者を名乗っていたのだが、とある事情でサーカス団を目指すことになった。例によって、ひよつとこの言葉によって。

「ここらへんにいる全員でサーカス団をやることになった。」

「あれ？ 団長はきてないの？」

「団長なら自分のサーカスがあるから、この頃はきてないな。いまは自分たちで反復練習の真っ最中」

「ふくん……それじゃもうすぐかもな。 団長のサーカス団がここにくるのも」

「タチミサーカス団だよな。 世界的に有名な」

「マックスをはじめ、みんな一流だからな」

毎回毎回、喋るたびにトランプ投げる癖はやめてほしいけど。 そう肩をすくめるひよつととこ。

それに水納も軽く同意する。

そうして、二人で話しをしていると——クイクイとひよつとこの体に服を引っ張る感触が訪れた。 例外に及ばず、抱かれていたヴィオオがひよつとこの意識を自分のほうにむけさせたのだ。

「だくれ？」

「ああ、この人はサーカス団の団長さん。 一番偉い人だよ。 水納、

この娘はヴィヴィオ。 俺の家族なんだ」

説明を受けた水納がヴィヴィオに軽く一礼し、ゆつくりとヴィヴィオの前に手を差し出す。 クエッションマークを浮かべるヴィヴィオ。 そして次の瞬間——

「わあっ！」

ポンツとヴィヴィオの目の前に一束の花が現れた。

「どうぞ、お嬢ちゃん」

「ありがとう！」

ニコニコとした笑顔で花束を受け取り、ひよつとこに見せびらかす。 そんなヴィヴィオにひよつとこは笑みを返す。

「すげえな、水納。 手品というか……奇跡みたいだ」

「これくらいしないと、団長は務まらないさ」

素直に感心するひよつとこに、ちよつとだけ自信ありげに返す水

納。 やはりというか、なんとというか、褒められるのは嬉しいみたいだ。

「それで、結局なににきたんだ？」

「ああ、そうだった。 いやさ、ヴィヴィオにお前らの芸を見せたいな〜っと思いい来たんだ」

「ううむ……まだ人様に見せれる段階では——」

「まあ、そうだよな。 お前らみたいなヘツポコサーカス団の芸なんてみても、時間の無駄だよな」

「てめえら！ 準備はいいか!!」

『よっしやああああああああああああああ!!』

なんとも乗せやすい連中になったもんだ。 そうひよっところは心の中で思ったのであった。

水納たちのサーカスはまだまだ力が足りないながらも、ヴィヴィオを満足させるほどの力はあったようで、結果だけを見るならばひよっところもヴィヴィオも満足であった。

ひよっところは知人たちの練習の成果と、ヴィヴィオの笑顔を見ることができて。 ヴィヴィオはサーカスの芸をみることができて、満足していた。

なかでもヴィヴィオのお気に入り、ピエロが玉乗りしながらジャグリングするという内容であった。

最後はピエロらしくおどけながら玉から転げる。 それがヴィヴィオのツボにはいったようで、ひよっところの膝の上で大はしやぎでしていた。

つかの間の楽しい時間も終わり、家に帰ってきたひよっところヴィヴィオ。 時刻は7時になっていた。 いつもならば二人が起きている時間帯であるが、リビングに降りていないので、ヴィヴィオにいつて起こしてもらおうことにした。

その間に朝食を作ろうと、自分は台所に立った——ところで、家の電話が鳴った。

慌てて電話に出るひよっところ。 そして驚く。 その電話口の相手に驚く。 そして内容に驚く。

『話したいことがあるから、お昼に家に来てもらえないかしら?』  
電話口の相手、リンディ・ハラオウンはそう言った。

☆

リンディさんに電話をもらった俺は、なのはとフェイトに頼んで  
ヴィヴィオを六課に連れて行ってもらい、一人でリンディさんの家に  
きた。ハラオウン家にきていた。一人で来い、とまでは言われて  
いないけど内容はアレくらいしか思いつかないので、仕事の邪魔にな  
るかもしれないが二人にヴィヴィオを預ける形になってしまった。

……いや、そもそも六課は仕事してないうえに、ヴィヴィオもなの  
は達のことを「ママ」と呼んでいるんだよな。ぶっちゃけ、六課に  
いるほうがいいのかもしれない……。いや、でも——  
などなど考えながら、チャイムを鳴らす。

数秒おいて——

「どうも、エイミーさん。お久しぶりです」

「俊君もお久しぶり。ごめんね、今日は呼び出しちゃって」

「いえいえ、無職はなにかと暇ですから。それじゃ、お邪魔します  
ね」

出迎えてくれたのはクロノの嫁であるところの、エイミーさん。

——と、二人の子どもたち。俺を不思議そうに見上げてくる二人  
に、しゃがみ込みながら挨拶をしてポケットにいれていたアメをあげ  
る。

……やっぱヴィヴィオのほうが可愛いな。

「あ、俊。やっときたんだ」

「おおドルフ、久しぶりだな」

「いや、アルフだから。フェイトは元気にしてる?」

「勿論、いつも可愛いぜ」

「基準が可愛いのか可愛くないのかってのは人としてどうなのよ?」

いや、でも可愛いし。めっちゃエロエロだし。

廊下を歩き、リビングに入る。



そこには、フェイトのお義母さんであるリンディ・ハラオウンとなのはの両親である高町士郎と高町桃子がいた。いや、少し離れたところにはクロノもいる。今頃仕事のはずなのに、こいつが此処にいるとは珍しい。——そんな珍しい事態が起きているのか。

「どうも、お義母さん。いつみても麗しく素敵ですね」

「ありがと。そんなあなたはいつみても殴り倒したくなるわ」

「おいクロノ。俺とリンディさんの間に次元の歪みがでてないか？」

「至って正常だ」

「マジか。リンディさんツンデレすぎ、カワイイ」

「お前のポジティブさがうらやましいよ。いいから座れ」

そういつて床を指さすクロノ。

ここは素直に従っておくことに。

正座して対面する。

ここらで軽く登場人物を説明しておこうと思う。

リンディ・ハラオウン。フェイトのお義母さんであり、俺が将来的にお義母さんと呼ぶ存在。時空管理局に勤めていた過去をもつ。

P T事件、闇の書事件、両方の事件の関係者でもある。俺もなのはもフェイトもこの人には色々とお世話になったものだ。

高町士郎。独りになった俺を引き取ってくれた張本人である。

武人として、親として、尊敬する方である。なのはの父親であり、将来的にはお義父さんになる。

俺を鍛えてくれたのはこの人であり、そのおかげで今でも生き延びています。まあ、上矢は基本スペックが高い、と士郎さんは言っていたけど、それを最大限に引き伸ばしてくれたのは間違いなくこの人だよな。俺が小さいときは危ない仕事をしていたみたいだが、父さんと母さんの事件以降、喫茶店翠屋を経営することに。ちなみに高校時代には此処でバイトをさせていただいた。

高町桃子。独りになった俺を優しく、ときには厳しく、我が子のように扱ってくれた方。なのはの母親であり、将来的にはお義母さんになる。なのは同様に栗色の髪で、いや、なのはが母親同様の髪

の毛の色なのかな。とにかく美しい。しかしながら、若干Sであり、なんだか苦い経験がある。

絶対になのはは桃子さんの血を濃く受け継いでいる。あいつも若干Sなんだよな。

そんなこんなで紹介終わり。……というか、この人たち年齢を考えばかなりの年だと思うけど……見た目全然変わんないよな。

いくら年齢に合わせて老けさせると外野が煩いかもしれないからといって、ほとんど見た目変わらないのはどうかと思うんだ。年齢詐称もいいところだぜ。まったく、どこの魔法少女ものだよ。

ああ、クロノの紹介してなかった。

クロノ。友達

以上。

「……面倒ならそう言え」

「いや、だってほら。登場回数多いとお前のキャラが大変なことになるしき。俺なりの配慮だぞ?」

「……確かに、あまり登場しないほうがいいかもしれないな。それじゃいいか」

クロノにそう言葉をかけると、あっさりと引き下がった。お前はどんだけ登場したくないんだよ。

と——ふとみると、リンデイさんのこめかみがヒクヒクと動いていた。どうやら、リンデイさんは我慢の限界のようだ。

さてさて、それではメタ発言も終わりにして真剣にやりますか。

なんせ——ヴィヴィオとの生活が懸かってるんだしな。

☆

「それじゃ、ひよつとごさんは現在フェイトさんのお母さんの家にいるんですか?」

「うん。まあ……死ななきやいいけど……」

「ちよつ　なんで家にお邪魔するだけでそんな生死をかけたバトルに行くようなコメントを」

「いや、俊くんにしてみれば生死がかかってるよね」

なのはとフェイトがヴィヴィオを連れて六課に出勤して30分。卓上に紅茶とケーキを置いた面々は、今日のひよつとこの御呼ばれについて話していた。

「そもそも、ひよつとごさんとリンデイさんってそれほど仲が悪いんですか?」

「仲が悪いというか……」

「お義母さんが俊のことを避けている感じかな……?」

ティアの言葉に、なのはとフェイトが互いに顔を見合わせながら話す。

「むしろアイツに苦手意識があるように思うんよ。リンデイさんの場合」

そういうのは六課の部隊長である八神はやてである。

「苦手意識……ですか?」

「そうそう。まあ、憶測でしかないんやけど」

そう言つて紅茶を一口。

六課の仕事場の少しだけ大きい面積がある所では、ガークンがバク転をキャロとエリオに披露していた。

「けどまあ……苦手意識はあるかもなー。あたしだってアイツと戦う機会があつたのなら思わず足を一步引くかもしれねえし」

「えっ!? ヴィータさんがですか!」

何気なく呟いたヴィータのセリフに、ティアは驚き立ち上がる。

それはそうだろう。なんせ今のセリフを吐いたのが、あのヴィータなのだから。ベルカの守護騎士であるヴィータなのだから。

それに同意するように、隊長メンバーが頷く。

「まあ、確かにアイツと戦うのは面倒やな」

「ストレスで過労死しそうだよね」

次々と、そう口にする隊長陣に、ティアは思わず聞き返す。

「もしかして……ひよつとごさんって強いんですか……? 魔導師ランクにしたら私より強い、みたいなご都合主義的展開に……」

『いや、全然。やろうと思えば隊長陣なら魔法で一発だよ』

全員が首を振りながらそう答えた。

ますます混乱するティア。ちなみに隣にいたスバルは、早い段階でアヒルのほうに行ってしまった。

混乱するティアに、はやては笑いながら答える。

「まあ、アレや。アイツは『敵にまわすと恐ろしく、味方になると頭が痛くなる存在』やからなく。一番いらんタイプやで」

「……ひよつとごさんが、ちよつと不憫になってきたのですが……」

しかしその答えは的を射ていたのか、そこにいる全員が頷いた。

そんな中、高町なのはが何かを思いついたかのように言った。

「あ、でもでも！隣にいと安心しない？」

『えっ』

2名の人物を除いて、全員の頬が歪んだ瞬間であった。



なのはママがてをブンブンふりながら『違うの！それは誤解だから!』 わたしはペット的な意味を込めて言ったの!』と、みんなにむかってはなしている。

うくん、いったいなにをはなしてるんだろう？ フェイトママも、『なんでいま頷いたんだろう……』とかいってるし、あとできいてみようかな？

わたしはバクてんをきめたガーくんをだきながら、いっしょにしゃがんでみていたスバルにはなしかける。

「ねーねースバルン？」

「ん〜？ ヴィヴィオちゃんどうしたの〜？」

「パパって、なくに？」

「うくん……これは難しいなあ。 エリオとキャロはなんだと思う？」

「え？ 僕ですか!? え〜つと……優しくて、遊んでくれる人でしょうか？」

「私は……優しくて、いつも私たちのことを気にかけてくれる人かな？　まあ、それに当てはまるのはあの人しか該当しません」

「あの人って、そんな人だっけ？　もつと下種で姑息で卑怯な人じゃない？」

「本当にそんな人だったら、お二人が家に置いておくとは思えませんよ？」

「うくん……言われてみれば確かに、一理あるかも」

うくん……あのひとつでくれ？

「ねえねえ、あのひとつでくれ？」

「へ？　そりや……秘密だよ！」

「え〜！」

スバルンがくちのまえでバツテンをつくる。　ずるいずるい！

ヴィヴィオもしりたいのに……。

「それにしてもヴィヴィオちゃん。　いったい、どうしていきなり、パパが何なのか、なんて聞いてきたの？」

「えつとね、あさにね、おにいさんとおさんぽしてたらワンワンつれたおじいちゃんがおいさんにいったの。　おにいさんはパパなんだって」

「これはこれは」

「なんとというか」

「ひよつとごさん、いまだにパパじゃないことに泣きそうだね」

みんながなみだをふくどうさをする。

そしていきなり、スバルンがヴィヴィオをだっこしてくれた。

「あんまり考えなくていいんじゃないかな？　とりあえずは、ヴィヴィオちゃんが大好きな人をパパってことにしたら？　あ、あくまで一人だけだよ？　そうしないと、将来的にひよつとごさんが相手を殺しかねないから」

「ビジョンが容易に浮かびますね」

わたしはガーくんをだきながらかんがえる。

だいすきなひと？　それってなのはママやフェイトママみたいな？

それじゃあ、ヴィヴィオのだいすきなひとは――

☆

「いや、まさかリンデイさんの家でバインドで縛られるとは……これから逆レイプでもされるんですかね？ あ、ゴムつけてくださいね？ 妊娠したら困りますから」

リンデイさんが冷たい目で俺を見てくる。いやはや、なんというか……年上の冷たい視線はかなりゾクゾクするよな。

現在の状況は至って簡単である。クロノのバインドに縛られた状態で床の上に正座させられています。

「俊君……もしかして育て方を間違えたのか……」

「土郎さん……」

「あの一、お二人とも。マジで抱き合うのはやめてくれませんか？ 育ててくれたお二人にそんな顔されると、軽口が言えなくなってしまうのですが……」

「では真面目に話し合わないか？ 俊君」

「無理ですよ、土郎さん」

話し合うもなにも――

「そちらはヴィヴィオを預かるんでしょう？ こちらはヴィヴィオを育てるって言ってるんですよ。話し合うもなにもないですってば」

リンデイさんたちの要求は簡単なものだった。

要約すると、ヴィヴィオを預かる、ということである。

預かるといっても、なにも強引に引きはがすわけではない。ただ

――俺たちの家じゃなく、リンデイさんの家に引っ越す、というだけの話である。

「俊君。 なにもべつに、キミたちの仲を引き剥がそうというわけではない。ただ、少し冷静になって考えてはどうだ？ そういっているのだよ。 考えてもみてくれ。 19歳のキミたちが5歳の女の子の親になるわけだ。 子育ての経験がない君たちよりも、リンデイ

さんに任せてみてはどうだろうか？ 俺たちも仕事があるから面倒を見てやるのができないかもしれないが、リンディさんならばそれが可能だ。君やなのはやフェイトちゃんだって、来たいときに来ることができるだけだろう」

確かにそうかもしれない。 なにも、ヴィヴィオに会えないわけではない。 だけれど――

「それは無理ですよ。 友の約束を反故にすることなんて僕にはできませんね」

「やつぱり、今回も約束だったのね」

俺と士郎さんの会話を聞いていたリンディさんが、溜息をつきながらそう呟いた。

「あなたは、約束がなかったら、ヴィヴィオという女の子をどうするつもりかしら？ いや、言い方を変えましょうか。 約束がなかったら、ヴィヴィオという女の子を手放すことができるのかしら？」

「……どういう意味ですか？」

「いつもいつも思っていたのよ。 あなたは自分を蔑ろにすることに躊躇いがまったくないわ。 そのかわりに、誰かのために動くことが大好きな人間よ。 自己犠牲こそが人生、そんな自分に酔っているのがあなたよ。 ねえ、俊君。 そんな人生――楽しいかしら？」

……まいったね、これは本当にまいった。 いつの間にか俺の人生観にシフトチェンジしてるもん。 ギャグにすることができないじゃん。

「べつに誰かのために動くのが好きな人間じゃありませんよ。 特定の人物のために動くのが好きってだけです」

「変わった男ね」

「変わった男です」

だからせめて、軽く話す。 終わらせる。

桃子さんが俺に話しかけてくる

「ねえ、俊くん。 俊ちゃん？」

いや、べつに言い直さなくていいですよ？

「俊ちゃんは、どうしてそこまでしてリンディさんの所に預けるのが嫌なのかしら？　べつにリンディさんが嫌いってわけじゃないのよね？」

「ええ、俺はリンディさんのこと大好きですよ。　　土郎さんも桃子さんも大好きです。　　けど——ヴィヴィオも大好きなんです」

「あらあら……」

桃子さんが困ったように頬に手をおく。

「すみません、先に謝っておきます。　　ごめんなさい。　　俺、いまから卑怯な手段使いますね」

そういつて頭を下げる。　　バインドで縛られたまま、土下座にも等しいお辞儀をする。　　これから俺が喋ることは、俺の境遇を利用した卑怯で姑息な手段だから。　　だから先に謝っておくことにした。

そして俺は喋り出す。

土郎さんと桃子さんに問いかける

「土郎さん、桃子さん。　　お二人が俺を引き取ったとき、迷惑だなくって思いました？」

卑怯な手段その壺である

「いや、そんなこと微塵も思わなかったよ」

「そうよお。　　俊ちゃんは家族なんだから！」

土郎さんと桃子さんが力強く答える。　　ほんとうに、俺を育ててくれたのが、このお二人でよかったと、心の底から思える。

「ありがとうございます。　　ところで、ちよっとお時間もらって自分語りでもしていいですかね？」

姑息な手段その壺である

「上矢俊という存在は小さい頃に一度壊れてしまったんです。　　完膚なきまでに、粉々に壊されてしまいました。　　心と体が引きはがされました。　　人形になりました。　　人でなしになりました。　　廃人になりました。　　そして、人間もどきになりました。　　高町なのはとフェイト・テストアロッサに救われた俺ですが、それでも俺は人間もどきなんです。　　一度壊れた人間は、人間に戻ることもなんてできません。　　できたてのご飯と、温めなおしたご飯が別物であるように、俺



もきつと、細かにみるならば人間じゃないんだと思います。まあ、生物的には人間に入るんですけどね。それでも俺は、毎日楽しく生きてます。だから俺はいま幸せなんです。けど、俺って人間もどきだから、心のどこかでは『家族』を作ることができないんじゃないかと思っていました。勿論、俺はなのはやフェイトと結婚したいです。幸せになりたいです。でも、正直なところ——家族ってものがあまりわかりませんでした。こんなこというと、土郎さん達には申し訳ないのですが、俺にとつての家族は——俺にとつての両親は——あの二人だけなんです」

いまなお、行方不明な両親だけが家族なのである。  
ごめんなさい、と二人に頭を下げる。

「すいません、こんな恩知らずなバカで。勿論、高町家での生活は楽しかったです。恭也さんや美由紀さん。みんなみんな大好きです。それでも——俺は父さんと母さんの幻影を追いかけているんです。家族という幻影を追い求めているんです。まさか、そんな俺がヴィヴィオを引き取ることになるなんて夢にも思いませんでした。しかも女の子ですよ、女の子。距離なんてわかるわけじゃないですし、ヴィヴィオが漏らしたときなんかパニックになりましたよ。

きつと、世間一般からみれば——俺は子育てする能力が欠けていると思います。その証拠に、なのはとフェイトには『ママ』俺に『お兄さん』これはもう絶望的な違いですね。何度枕を濡らしたとか。『なんでお兄さんなんだよー！』って叫びたいです、問い詰めたいです。けど——ヴィヴィオの笑顔を見ると、そんなことどうでもよくなるんです。ヴィヴィオの声を聞くだけで、嬉しくなるんです。ヴィヴィオと遊べるだけで幸せになるんです。ヴィヴィオと飯を食うだけで心が弾むんです」

きつと——これは一種の病気なんだと思う。  
「俺にとつて、ヴィヴィオはもう娘なんです。どうしようもなく愛しいんです。——どうかお願いします。ヴィヴィオと——大好きなヴィヴィオと——離れたくないんです。信じてくださいなんて言えません。任せてくださいなんて言いません。だからどう

か——見逃してください」

頭を下げる。土下座する。

顔を上げると、三人がなんともバツの悪そうな顔をしていた。

「べつに……私はあなたたちの仲を引き裂こうなんて考えていないわよ……。ただ、ちよつと試したというか、なんというか……。な、なによ、私が悪者みたいになっちやっただじやないの……。心配してるのに……」

リンデイさんが小さい声で、ボソボソと呟く。何と言っているかわかりません。

代わりに、土郎さんが俺に問う。

「子育ては大変だぞ？　できるのか？」

「なんとかなりますよ」

「パパは大変だぞ？」

「恋人ができればよいものなら、恋人ぶち殺しに行く覚悟はできてます」

「いや……その覚悟は捨てておけ」

土郎さんと話していると、ちようどいいタイミングで携帯が鳴った。ふとみると、バインドが解かれていた。やっぱ話わかるやつだな、クロノっち。

電話の相手は、なのはだったので、耳に当てながらなのはの声を聞く。

「もしもし？　どしたの？」

『いや、ヴィヴィオが俊くんと話したいって聞かなくて』

「ヴィヴィオが？　なんだろうか」

『いま代わるね。はい、ヴィヴィオ』

一拍して、ヴィヴィオの声が聞こえてくる。

『えつと……なのはママ……やっぱ恥ずかしいよお……』

「ん？　どうしたんだ、ヴィヴィオ？」

電話越しでモジモジとするヴィヴィオが目に見え浮かぶ。萌える。

『えつとね……？　——パパ、だいすき』

「……え……？」

『……俊くん。　どういふことかな？　ちよつとゆつくり話し合おう

よ……』

「えっ……!?!」

いきなりピンチになってしまった。これはどういうことなんだ？

なんでなのはがいきなりドスの利いた声で、俺に脅しをかけてくるのかはまったくもって意味不明ではあるが——

「……なのはママ。家族みんな家でトランプでもしないか、今すぐ」

『えー、仕事サボりはよくないのに。でもまあ……たまにはいつか。それじゃ、いまから帰るね、パパ』  
互いに電話を切る。

「……土郎さん。家族っていいものですね」

「ああ、家族を背負ったパパは最強だからな」

土郎さんが、俺の背中を軽く押す。

「いってこい。たまには顔出すんだぞ。それと俊君。キミがどう思おうと——キミは俺の自慢の息子だ。その事実だけは変わらないよ」

その言葉に目頭が熱くなる。こんな人でなしにもそう言ってくれる、土郎さんの心の広さに感服する。

「……ありがとうございます」

頭を下げ、リビングから立ち去る——直前に、桃子さんが後ろから抱きついてきた。

「ふふ、俊ちゃん。私、いいこと思いついたわ。私や土郎さんのことを、父さんと母さんと呼べないのなら「パパ」と「ママ」と呼びなさい。あ、ちなみに強制よ?」

「えっ!?!」

「はは、それはいい。ほら、いってごらん俊君」

は……恥ずかしすぎるっ!?! なんでこの年にもなって、ガチでパパとママなんて言わなければいけないんだ!?! これは拷問か!?! さっきまでの仕返ししか!?!

「あー……そのー……ありがと……——と——」

「ふふ、どういたしまして」

そうして離れる桃子さん。この人には一生頭が上がらないな。「それとリンデイさん。いつもいつも、ありがとうございます。俺、リンデイさんの嫌味——大好きですよ。なんか年の離れた姉さんがいるみたいです。それじゃ、俺は家に帰ります。家族が待っていますので」

ツンとそっぽ向くリンデイさんにそういって、俺は家を後にした。

☆

「ただいまー!」

元気よくドアを開ける。　どうやら俺より三人のほうが早かったみたいだ。

ドタドタと元気よくヴィヴィオが俺に向かって駆けてくる。そして——

「おかえり!　パパ!」

と、抱きついてきた。

「ただいま、ヴィヴィオ」

俺もヴィヴィオを強く抱きしめる。　愛おしくて抱きしめる。

遅れてなのはとフェイトが俺を迎えてくれた。　やれやれ……とでもいいたそうな顔である。

「おかえり、俊くん。　どうだった、リンデイさんの家は」

「死ぬかと思った」

「他に誰かきてたの?」

「土郎さんと桃子さんがきてたよ」

「えっ!?　お父さんとお母さんがきたの!?!」

なのはが驚く。　いやまあ……そりゃ驚くか。

ん?　そういえば、なんだかこの状況って——

「まるで旦那の帰りをまっていた嫁と娘の凶だよな」

うん、我ながらこの状況にピッタリだ。　そしてちよっぴり憧れて

いたので嬉しい。仕事してないもんな、俺。

するとヴィヴィオが、俺の袖をクイクイと動かしたので、ヴィヴィオのほうに顔を向けると——チュツと可愛らしいキスをしてくれた。

「えへへ、パパいつもありがとー!」

ヴィヴィオの屈託ない笑顔に、こちらも笑顔になる。ぐしやぐしやとヴィヴィオの頭を撫でまわす。

「こちらこそありがとな、ヴィヴィオ」

そういつて二人で笑い合う。すると——ポンと手を両肩に置かれた。決して逃さず、抵抗できない力加減である。流石、管理局員。肩が死にそうなんですけど。

「ん? どしたの、二人とも?」

「いやー、まあ……なんというか……」

「そのー、ねえ。緊急家族会議しよつか」

「え? なんで? というかなんの?」

「そりゃあ……旦那が娘に欲情しないようになあ……?」

「ちよつとまつて。自分たちでも疑問を浮かべてるならやめようぜ。マジ怖いつて。お前らが思っている以上にレイハさんとバルさんが首筋に触れられている感触は怖いつて」

「キリキリ歩く。立場をわからせてあげるから」

二人に両脇を固められながら、ヴィヴィオがついてくるのを確認して心の中で、父さんと母さんに話しかける。

父さん、母さん。俺にも家族ができました。可愛い可愛い娘で

す。一生を賭けて守りたい存在です。

もしかしたら、歪で変な家族かもしれませんが、俺はとつても幸せです。

どこに居るのはまだわかりませんが、いつか必ず見つけ出し、紹介したいと思います。

その時まで、どうか元気でいてくださいね。

## 54. 朝ですよ！

ピピピピッ！　ピピピピッ！　つと、目覚まし時計の音と、ミクちゃんが俺を起こしにくる声が聞こえてくる。

「ん……。　もう朝か……。　昨日はなのはとフェイトがワケワカメすぎて大変だったな……。　」

目をくしくしとこすりながら、ベットから出る——出ようとしたところで自分の横で寝ている人物に目がいった。

いつも結んでいる金髪もいまはおろされストレートに、小さな体軀でペットのアヒルを抱きしめている女の子、ヴィヴィオである。アヒドルにして家庭最強の女の子。

「おはようヴィヴィオ」

金髪の髪を手で梳きながら、いまだ夢の中で遊んでいるヴィヴィオに挨拶する。　と、それに反応するように、横でヴィヴィオと寝ていたアヒルのガーくんがむくりと起きてひよつとこをみていた。

「おはようガーくん」

「オハヨウオハヨウ！　モウオキルノ？」

「俺は起きるよ。　ガーくんはヴィヴィオと寝とく？」

「ネトク！　ヴィヴィオトイツシヨ！」

言うが早い、ヴィヴィオの横で寝だすガーくん。　そんなガーくんの頭をひよつとこは一撫でし、今度こそベットからおり、背伸びしながら廊下へと続くドアを開ける。

「あつ……」

「お？　おはようフェイト。　どしたのこんな朝早くから？　まだ5時だよ？」

今日は朝からの仕事など入っていなかったはずだけど。　そう言いながら、ドアの前で右手を不自然に伸ばしているフェイトをみる。

その視線に気づいたのか、手をひっこめるフェイト。

「お、おはよう俊。　いやちよつと……。　ヴィヴィオが心配で……」

「ちよつとは俺を信用してくれよ。　流石にヴィヴィオには手を出したりしないってば。　娘に手を出すとか、どこのエロマンガやエロア

ニメだよ。流石にねえわ。と

「ううか、ロリで又とかねえわ」

「つい先日、キミのエツチな本の中から小学3年生くらいの魔法少女ものの同人誌を発見したんだけど……」

「やっぱ小学生は最高だな!!」

「早くヴィヴィオを助けなきゃ!」

強引に体を入れ、ヴィヴィオが寝ているベットに駆け出そうとするフェイト。

「いや冗談だから!? なんでマジな目でヴィヴィオの安全確保しようとしているの!」

「離して鬼畜男!!」

「だから冗談だってば!」

「だったらあのエツチな本はなんなの!」

「それたぶん、なのはとフェイトをモデルに俺が描いた同人誌だと思う。みる?」

「みないよ!? なんで自分がモデルの同人誌を見なきゃいけないの!? というか、キミは普段私達をどういった目でみてるの!」

「視姦してるお」

「でてけ! 家からでてけ!」

朝から怒られるひよつとこ。ついでに首を絞められる。

「ギブギブギブギブ! 謝るから! 謝るから! ほんとごめん!

おっぱいごめん!」

「私に謝ってよ!」

「でもお前だって悪いだろ! そんな可愛いくせに、とんでもない破壊力もったおっぱいと尻をもちやがって! むしろ耐えてる俺は褒められるべきだ! お前が謝れ!」

「おかしい! その逆ギレの仕方はおかしい!? なんか褒められてるのに素直に喜べないよ!」

「あ、同人誌の男役は全部俺だから安心して!」

「安心できる要素が皆無なんですけど!? むしろ怖いよ! 一つ屋根の下で暮らしてる幼馴染が自分たちをモデルに同人誌描いてたこの

状況はめっちゃくちや怖いよ!？」

「でも俺がプライベートで楽しむ同人誌だし……大丈夫じゃない?」

「いや、安心できないから!　どこがどう大丈夫なのか全くわかりません!」

「でもほら、男は性欲をどこかで発散しないと性犯罪を犯す可能性があるあるじゃん?　だから、その性欲の発散場所が二次元ならまだ安全だと思っただ。　二次元は架空の存在だからね。　まあ、俺くらいの猛者になると二次元キャラと三次元で過ごしてる境地にまでいけるんだけどね。　だからまあ、ようするに何が言いたいのかというと、二次元での性欲発散って意外に大切なんだよ?　考えてもみてくれよ、人間の三大欲求の中に性欲は含まれているんだぜ?　ようはそれだけ重要なことなんだよ。　なんせ性欲がないと、人類は滅亡するからね。　そんな性欲を無くすのは無理だ。　かといって、現実世界で性欲発散なんてしようものなら性犯罪につながるかねない。　しかしながら二次元なら話は別だよ。　二次元ならばいくら性欲を発散しようとも、それが直結して現実の性犯罪にはならない。　刑務所じゃあるまいし、自慰をするだけで逮捕、なんてことにはならないよね。　まあ……あえて被害を上げるならば、ゴミ箱を孕ませるくらいかな?」

「こいつ……いきなり饒舌になりやがって……!」

「フェイトフェイト。　怒りのあまりキャラが壊れてるよ」

プルプルと拳を握りしめながら、ひよつとこを睨むフェイトに、ひよつとこは「どうだ」と言わんばかりにフェイトの顔をみる。

うざいドヤ顔である。

「でもでも、だからって私達がモデルのエッチな本を描くのはダメだと思っただ」

「そんなこといったってしようがないじゃないか」

「文字じゃ伝わりにくい物真似はやめようね?　——……それに、私

は……べつに……い……い……」

「……え?」

フェイトのいきなりの告白染みたセリフについてい遊ぶことを忘



れるひよつと。」

「それってどういう……」

いきなりのごとで狼狽えながら聞くひよつとごに、フェイトはか細い声で答えた。

「だから……俊の性欲発散……私でよかったら……いいよ？」

「——ッ!？」

朱がさした頬。 ちよつとだけモジモジしだす体。 指同士をチヨンチヨンと触れ合わせながら、ひよつとごを上目づかいでみる。

「……ほんとに……いいの？」

「……うん」

最終確認をするひよつとごの言葉に、フェイトはコクリと頷く。

一步、フェイトが俊に詰め寄る。

互いに無言で見つめ合う。

動かないひよつとごの顎に手をおいて、そのままゆつくりと指を這わせ——唇に触れる。

クスリと蠱惑的に微笑むフェイト。

指を動かし、口の中に指をいれ、俊の唾液を絡め取り自分の口にもっていく。ペロリ——と、小さな舌でなめとり、そのまま手を俊の下腹部にもっていく。

「俊って……こういうの弱いよね……」

太ももから撫でまわしながら、徐々に上へと登っていき——

「……興奮……してくれてるんだ……？」

膨れ上がっているところを触る。 円を描くように、ゆつくりと、ゆつくりと——じらしていく。

「ふふっ……かわいい……」

そういつて、フェイトが俊のモノをズボン越しに掴もうとしたそのとき——

「パ〜パ……？ フェイトマ〜マ……？」

眠り眼でありながらも、しっかりと二人を呼ぶ娘の声が聞こえてきた。

「——ッ!？」

離れる二人。

そんな二人を、ヴィヴィオは不思議そうに見ている。

「お、おはようヴィヴィオ！ まだ、起きるには早い時間だぞ!」

「そ、そうだよヴィヴィオ！ ど、どうしたの!」

「うーん……フェイトママのこえがきこえてたから……おきてきたの……」

くしくしと目をこすりながら言うヴィヴィオに、フェイトはなんとも『しまった……』とでも言いたげな表情をみせる。

二人の内、先に動いたのはひよつとこである。ヴィヴィオに近づき、ヴィヴィオをだっこしながらゆりかごのように揺らす。

「えへへ……パパあつたか〜い……」

「また起こしてあげるから、ゆつくり寝ようなく」

そのひよつとこの言葉にコクンと頷き、再びスヤスヤと寝息をたてはじめたヴィヴィオ。

そんなヴィヴィオをみて、ひよつとこは改めてフェイトをみた。

「えつと……」

「そ……その……! さ、さっきのは……えつと……! えつと……」

! そ、そんなつもりはなくて……と、とにかく! ち、違うのー!」

赤くなつた顔を手で覆いながら、一目散に駆けていくフェイト。

朝の家にフェイトの叫び声が木霊した瞬間だった。

ひよつとこは茫然としながらも、そもそもフェイトがこんな朝早くに訪ねてきた状況を作つたヴィヴィオをみる。

「……とりあえず……ヌ〜う……」

ひよつとこがトイレでヌいている間に、昨日の出来事でも思い出さう。

## 55. S+のデイフエンス

「いい？ キミとヴィヴィオは親子の関係なんだから、そこらへんをちゃんと弁えないとダメだよ？」

「ちよつとまってくれ。なんで俺がヴィヴィオに手を出すこと前提でお前らは話を進めているんだ」

「……ださなの……？」

「出さないよ!? 何年幼馴染やってきてんだよ!? それくらいわかるだろ!」

「……ごめん、あと数年は一緒にいないとキミのことはわからないと思うんだ」

そんなことを言いながら、本当に首をヒネるなのは。 お前本当に俺の幼馴染か？

現在俺はなのはとフェイトの二人を目の前にして、床に正座の体勢で座っていた。 うくん……先程までリンデイさん宅で正座していたというのに、まさか自分の家でも正座することになるとは。

正座してもメリツトがないんだよなあ。 これで二人のパンツでも見れるもんなら正座というか、土下座するんだけど。

「パンツみせてください」

「いきなり土下座して何言いだすの!? なにがあつたの!? いまの数秒の思考の間にキミになにがあつたの!」

「いいじゃん、減るもんじゃないし。 さっさと見せろよ。 スターさん」

「そのネタ引つ張るの止めてくれませんか!」

「じゃあブレイカーさん」

「どつちも嫌だから!」

「ブレイカーさん、ブレイカー落ちてますよ?」

「つまらん、3点!」

意外に辛口評価だった。なのはちゃんなら笑ってくれると思つてたのに。

腕組みしながら、なのはがこちらを上から見下ろす形で喋る。

「というか、ブレイカー、いや、ブレイクならキミの専売特許でしょ？  
法則壊しの道化師へブレイク・クラウンさん？」

「やめろ!!? 俺の中二病時代を例に出すな!!」

「いや、中学時代に散々やらかしたおかげで、高校時代も抜けなかつたよね、この名前。 ねえ、クラウンさん？」

なのはがニヤニヤと笑みを浮かべながら、俺のほうに前かがみになりながら、実に楽しそうにその名を呼ぶ。

「ねえ、クラウンさん？ いや、ブレイク・クラウンさん？ よく言ってたあの口上、なのはもう一度聞きたいな……」

弄るように、俺の顎をとり、さするなのは。 クツと顎を上げさせられると、そこにはSっ気全開のなのはの顔があった。 恍惚とした表情で、目をトロンとさせながら、何が楽しいのか、クスクスと笑いながら。

「……ごめんなさい……もういいません。 ブレイカーさんとか……スターさんとか言わないから……許してください……お願いします……」

「ダメ」

この教導官鬼すぎ。

思わず顔から火が出る寸前、なのはが俺から離れる。

「まったく……これに懲りたら『ブレイカーさん』とか、『スターさん』とか言わないこと。 言ったら六課の皆にバラすからね。 社会的に追い込むからね」

「俺生活できないじゃん」

「わたしがいるからいいでしょ」

……たしかに、なのはとフェイトとヴィヴィオいるからいつか。

いや、でもまあ……スバルあたりにバレるのは嫌だから言わないけどさ。

「そうだな、なのはとフェイトとヴィヴィオいればそれでいいや」

「……そうだね、三人いれば大丈夫だね」

「あの……怒ってる？ 不機嫌になってない？」

「怒ってません。 不機嫌でもありません」

そう思ってるのなら、トウキツクで俺のミゾ蹴るのやめてくれませんか？ たまに息止まるんですけど。

赤髪ツーンテールの死神巨乳船頭の顔がちらつくんですけど。

しかしながら、何故こんなにも話が逸れてしまったんだろうか。

フェイトとヴィヴィオはなんか我関せずみたいな感じでシカトしてるし。 ヴィヴィオ、パパがママによって虐待されてるんだぞ？

助けてくれよ。 パパ、マジで無力だから。

「とにかく、キミとヴィヴィオはあくまで親子！ それを肝に銘じておいてね？ じゃないと……から……」

「おいちよつとまで。 お前いま小さな声で、皮剥ぐって言わなかったか？ 言ったよな？ 皮剥ぐって言ったよな？ お前が一番怖いよ。

人体に浸食して内部構造を破壊

するウイルスよりもお前が怖いよ。 お前知らないぞ！ 管理局

で『皮剥ぎのなのは』って呼ばれても知らないからな！」

「呼ばれるかあ!!」

☆

就寝の時間です。 今日にはリンデイさん宅と家でのドタドタがあつて正直くたくた。 このままゲームもマンガもオナニーもせずにはベツトにダイブです。

歯を磨き、自分の部屋に行こうと階段を上る寸前——後ろからドンと誰かが体当たりしてきた。 力はまったく強くなく、軽くよろめく程度。 後ろを振り返ると、ニコニコと笑みを浮かべたまま、ペットのアヒルと一緒に俺をみていた。

「えへへ……パパ、いっしょにねよ？」

これはなんとも難しい難題である。 かなり難しい難題である。 難題なのにさらに難しい。 ついさつき、なのはに釘を刺されてしまった俺としてはここで断るほうがいいんだけど……ぶっちゃけ、ヴィヴィオと寝るのもいいかもなく。 なんてことを考えていた身としては、断りたくない。

「え〜つと……ヴィヴィオ？　俺がママ達に何か言われたら、助け舟出してね？」

「うん！　いいよー！」

大きく力いっぱい首を縦に振るヴィヴィオ。　流石天使。　力が沸いてくる。

「それじゃ、俺の部屋に行くか。　ガーくんも」

ヴィヴィオをだっこして、俺は自分の部屋に向かうのであった。

はたして、俺の部屋の前には変な二人組の19歳（♀）が肩と肩を組みながら俺とヴィヴィオを見るなり、左右に揺り動きながら

「ディーフェンス！　ディーフェンス！　圧勝ディーフェンス！」

と、およそファンには見せられないようなことをしていた。　ぶっちゃけ完全に不審者です。　あと近所迷惑です。

「……お前ら、なにしてるの……？」

左右に揺れ動きながらなのはが答える。

「キミがヴィヴィオと部屋に入れないようにしてるの。　早速約束破ったね！」

「とりあえず左右に揺れ動くの止めろ。　その息の合った一定のスピード止めて」

ほんと仲いいな、お前ら。

「というか、明日も仕事だろ。　バカなことやってないで、さつさと寝たほうがいいんじゃない？　明日俺が起こすハメになるぞ？」

びつくりするほどユートピアしてからお前ら叩き起こすぞ。

「いいじゃん、キミが起こしてくれるなら。　それより！　キミの隣にいるヴィヴィオはどういうことかな？　言ったよね？　キミとヴィヴィオは親子の関係だって」

「？　親子で一緒に寝ることっておかしいか？」

「へっ？　い、いや……べ、べっにおかしくはないけど……。　ヴィヴィオと一緒に寝るのは……その……羨ましいというか……」

「ん？　なのはとフェイトだっていつも一緒に寝てるじゃん？」

「……はあ……」

「え!?!　なんで溜息!?!」

何故かバカにされたような気がする。間違ったことはいつてないはずなのに。

「で、でもでも！ 俊くんの部屋はダメだよ！ 5歳の子には見せられないものばかりあるよー！」

「人の部屋をアダルトショップみたいにな！ 5割ほどしかねえよー！」

「充分危ないよね!? それもう十分だよね!? ますますヴィヴィオを部屋に入れることができないよー！」

「だったら俺がなのはとフェイトの部屋にいくわ。そこなら安心して安全だろう?」

「へっ?」

うん、俺にしてはいいアイデアだな。ヴィヴィオも普段から寝てる場所だし、ガーくんも一緒だし安心安眠できるだろう。

「と、いうわけだから。二人は俺の部屋で寝ていいよ」

さっそく二人の部屋に足を向ける。

「それこそだめ!! 絶対ダメ！」

「そ、そうだよ俊！ 私達の部屋はダメだよ！」

「えく……。普段掃除してる場所だからとくになにもしないってば。……なのはとフェイトが使っている枕……なのはとフェイトが使っているシーツ……なのはとフ

イトの全体重を支えている至高のベット……なのはとフェイトの匂いで満ちた室内……なのはとフェイトに抱かれたことがあるヌイグルミの数々……なのはとフェイ

トが歩いたフローリング……なのはとフェイトを毎日映す鏡……なのはとフェイトの小物の数々……はあはあ……はあはあ……だ、大丈夫……何もしないから！」

「嘘つけ!! 絶対なにかする気でしょ!?!」

「な、なにもしないってば!? 本当だって、信じてくれよ!」

「いまのセリフ聞いて信じれたらそれは完全に洗脳されてるから!」

間違ってもキミのこのセリフにかんしては信じることはできません!!」

「なのはの言うとおり、できないよ!!」  
「できないおー」

なのはとフェイトに断言された。そして味方だと思っていた  
ヴィヴィオが何故か敵になっていた。後ろから刺されるとはこの  
ことか。

もう八方塞である。

はてさて、どうしたものか。そう思っていると、ヴィヴィオが俺  
の手となのはとフェイトの手を握りしめていた。丁度、ヴィヴィオ  
を軸にしてる感じで。

「一緒にねよ〜?」

「は?」

「えへへ、みんなでいっしょにねよ〜?」

「うぐツ……!?!」

何故かなのはとフェイトが精神攻撃を受けている。……そんな  
に俺と一緒に寝るのが嫌なのか……?

アセアセといきなり挙動不審になる二人。

「ヴィヴィオ、それはちよつとできないというか……。ほ、ほら!

なのはママとフェイトママとパパとでは生活習慣が違うから、ね!」

「う、うん! 俊と一緒に寝るのはダメだよ! その……ヴィヴィオ  
と一緒にだと色々……。ね!」

「え?! なんでこっちに話しを振るの!」

二人のキャッチボールを見ながら、俺はヴィヴィオをだっこする。

丁度、部屋の前には二人はいなくなつたのだ。というか、二人と  
も自分たちの世界に入ってしまったので俺とヴィヴィオのことをみ  
ていない。

「はあ……ここまで明確に断れると……色々心にくるなあ……」。

いっそのこと、二人の生活習慣に強引にでもかえようかな。でも、  
それをするとか事とかできなく

なるんだよな。遊ぶ時間だつてなくなるし」

「パパ、ないてるのー?」

「うんうん。パパは泣いてるんだよ」



「よしよし。 いいこいいこ」

俺の頭を撫でながら、そんなことを言ってくれるヴィヴィオ。 ほんと……お前だけは俺の味方だよな。 いまさつき盛大に攻撃してくれたけど。

ヴィヴィオを抱いたままベットにはいる。

ベットにはいるなり、ヴィヴィオが俺の手を握ってきた。

「えへへ……パパをひとりじめー」

なんとという策士。 ヴィヴィオ、お前才能あるよ。 そんなヴィヴィオを撫でながら、俺は娘とガーくんが寝るまで起きていたのであった。

## 56. 朝の一コマ

トイレから戻ってきた俺は朝食を作ることにした。なんだか回想があったような気がするがきにしない。そしてちゃんと手も念入りに洗ってきましたよ。めちやくちや念入りに洗ってきましたよ。

キッチンに立って今日のメニューを考える。冷奴に……わかめの味噌汁に熱々ご飯に焼き魚、あと明太子とかいいかもな。

即興でメニューを決めたら、次はさっそく朝食作りを開始する。

米を洗い、炊飯器に入れて炊きあがるのを待つ間に、おかずを作っていく。それができる頃にはなのはとフェイトとヴィヴィオが二階から降りてきた。

「ふあく……俊くんおはよう……」

「なんかえらく眠そうだな、珍しい」

「うん……昨日さ、ちよつと夜中まで起きててね……。今日のわたしはねむねむなのです」

「まあ、とりあえず顔洗ってこいよ。そのままだと味噌汁のお椀に顔面突っこむかもしれないぞ」

「流石にそれは高校時代に卒業したよ」

いや、高校時代に卒業したとかの問題じゃねえよ。普通の人が入学すらしらないから。その学校、生徒お前一人だけだと思っから。

「ヴィヴィオー、お顔洗いに行こう」

「はいー!」

なのはの隣にいたヴィヴィオは寝起きがよかったのか、元気に手をあげながらついていく。その後ろをアヒルのガーくんもえつちらおつちらとついてくる。ちよつとした勇者のパーティーじゃねえか。

なのはさんなら素手で魔王ぶつ飛ばして自分が魔王の地位についてちやいそうだけど

「あ、えくつと……フェイトもおはよう」

「へっ!? あ、う、うん、おはよう! きよ、きようはじめて会うね!!」

「え？ いや、朝方にも会ったと思うけど——」

「はじめて会うよね!!」

必死にこちらに詰め寄ってくるフェイト。 どうやらフェイトの中では朝のアレはなかったことにしたいらしい。 ……そんなに俺に触ったの嫌なの？ え？ ひよつとこ菌がついたく！ みたいな感じで嫌なの？

「……ひつく……うつ……ごめんよ……フェイト……」

「えっ!? なんでもいきなり泣き出すの!? だ、大丈夫!?」

「……ぐすつ……フェイトに内緒で盗んだパンツ返すから……俺のと嫌いにならないで……!」

「現在進行形で嫌いになりそうなんだけど。 泣いたってユルサナイから。 とりあえずその下着もう使わないから捨てていいよ」

「うん……もうそのパンツ履けないほどに使ったから……」

「ちよつとおおおおおおおおおおおお!!? なにしてるの!? なんで人の下着盗んでそんなことするのかなあ!? わかってる! 俊のやった行動がどれだけキチガイな行動がわかってるの!?!」

「うん、なんか甘いミルクキセーキの味がした。もしかして俺をおかずにしたの?」

「してないよ! そんなことするわけないでしょ! もともとそういう香りなの! というかそもそも聞いてないよ!! 誰もその情報は聞いてないし求めてないよ!?!」

「でも次の日からお腹壊してさ。 なんかいまだに腹の中に異物が入ってる気がするんだよね」

「それ気のせいじゃないから!! 絶対異物入ってるから! レントゲン検査したら私の下着入ってるから!」

「まさか……俺とフェイトは下着食事プレイをしていたのか……!?!」

「セルフ下着食事プレイをしてたんだよ! 私が入るこむスキマないから!」

「え? 混ざりたいの?」

「混ざりたくないよ!!」

残念だ。 どうやら下着提供しかしてくれないらしい。 しょう



帰るじゃん？ ヴィヴィオの件もあってなかなか帰ることができなかったから、今回は結構長居すると思うんだけど。二人の予定はどうなの？ 空いてる？」

俺は無職で暇人だからいつでもOKではあるけど、管理局員の、というか公務員の二人はそういうわけにもいかないだろうし。なんせ二人とも管理局の重要な戦力なんだから、管理局だっておいそれと手放すことは――

「あ、そういえば本部から夏休みもらったんだ。なんか上層部の人が『いつも頑張ってるからね、思いつきり遊んできなさい！』って、はやてちゃん経由で。だからいつでもいいよ」

「いいのか管理局!? いいのか上層部!? お前ら完全に孫を溺愛してるジジイやババアじゃねえか!? こいつらの仕事なんてゲームしたりマンガ読んだりお菓子買いに行くだけだぞ!?! しかもなんだよ夏休みって! どんだけこいつらに甘いんだよ!」

「あ、でもでも、ちゃんと私? わたし達は職場に行くよ? ほら、わたし達ってキミと違って人間でできるし」

「とりあえず職場に行ってるだけだろ! お前ら引きこもり一步手前の学生か!」

「でもわたし達が仕事しないと、俊くん生活できないよ?」

「いいか? 仕事なんて一切しなくていいから。むしろ定時の2時間前くらいに帰ってきていいから。フリだけは絶対してくれよな」

もうこの生活以外考えられないんだ。俺はこの生活がなきゃダメなんだよ。

「いやまあ……そりゃおいそれとキミとの生活を手放す気はないけどさ。それは男としてどうなの? プライドとかないの?」

「まったくないな」

「相変わらず人として終わってるねえ」

文字通り人として終わってますし。

三人よりも朝食を早く食べてキッチンへ。二人のための弁当を詰めていく。今日は肉巻きおにぎりというものを作ってみた。

うん……ちよつと食べにくいから工夫が必要だよな。かといっ

て爪楊枝くらいでは肉巻きおにぎりを持ち上げられないし。

「どうしたの、俊?」

「んあ? あ、フェイトか。 いやさ、この肉巻きおにぎりをどうしようかな〜っと思ってるさ」

一歩横にずれてフェイトに弁当をみせる。 温野菜のサラダに肉じゃが、肉巻きおにぎりに魚の甘酢かけ、卵焼きに切り干し大根である。

フェイトは俺が作った弁当を見て

「肉巻きおにぎりは無理にお弁当に詰めなくていいんじゃない?」

そう首を傾けながら言った。

「あく、それじゃ別々にしようか。 まあ、そこまでおにぎりも大きくないし、ネギマヨと普通のおにぎりにしよう。 デザートにイチゴもいれとくよ」

「毎日ご苦労様です」

「ごちら〜そ食べてくれてありがとう」

二人で向き合いながら笑い合う。

『ねえねえなのはママ? あさにねー、パパとフェイトママがだきあってたよ?』

『ほーう……』

「しまった!? それ誤解だから!」

慌ててテーブルに二人で戻り、なのはとヴィヴィオに説明した。  
ヴィヴィオ……! 恐ろしい子……!?

☆

「いっ て き ま す ! ! !」

「え〜っ と …… いっ て ら っ し ゃ い」

わたしの目の前で、彼が困った顔で手を振っている。 隣にはヴィヴィオが彼に抱きつきながらニコニコと手を振っている。

……なんだかんだいって、やつぱり一番長くいるせいか、ヴィヴィオは彼に懐いてるんだよね〜……。 ただ懐いてるだけならわたし

も気にしないけど。

それはそうと、こんな奴がフェイトちゃんと抱き合っていた？  
はっ、何かの間違いに決まってるよ。万年モテない男なんだし。  
自意識過剰のくるくるぱーなんだしさ。

「えつと……いかないの?」

「なに? そんなに私に早く行ってほしいの?」

「え? いや、できるならずっと傍にいてほしいけど」

……よくそんな恥ずかしいセリフを言えるよね、キミは。

「行ってきますの握手しよ。ほら、早く」

強引に彼の手を取り、握る。さっきまで洗い物をしていたせいなのか、ちよつとだけ冷たい手にわたしの比較的暖かい手が重なる。

——3分後

「……仕事遅れるぞ?」

「……あ」

わ、わすれてたああああああああつ!? フェイトちゃんが車の中でずっと待ってるんだっ!? わたしとしたことが……!

「そ、それじゃ行ってくるね!」

「……行ってらっしゃーい!」

手を振るわたしに彼とヴィヴィオが振り返す。

……うん、今日もお仕事頑張れそう!

☆

——六課——

「あ、はやてさんってステータス極振りするタイプなんですね」

「うん、下手にバランスとろうとすると使いようのない雑魚に変わることが多々あるからな。これは現実でも言えることやで。な!

なのはちゃん!」

「そうだね。新人たちは皆それぞれいい武器をもっているから、それを伸ばすことは必要だね。だからといって、短所を見ないふりをしちやいけないよ。それは

弱い自分に逃げていることになるからね。自分の〃できること  
〃と〃できないこと〃を自分自身が知ること。それが強くなるた  
めに必要なことだよ?」

『はい!・勉強になります!!』

「いや、お前から訓練は? ソファアに集まってゲームしてちや説得力  
なんて皆無だぞ?」

なのは達が携帯ゲーム機片手に遊んでいるのに対して、一人だけ書  
類仕事しているヴィータがそう呟いた。



57. お祖母ちゃんだと年寄りだけど、ママのママだと若いイメージがあるよな

高町なのはとフェイト・T・ハラオウンが仕事に行ってから数時間が経った。

ひよつとこはリビングのテーブルにノートを広げ電卓とノートの二つを交互に見ながらなにやら忙しなく指を動かしていた。そんなひよつとこを下から見上げながら、ヴィヴィオがひよつとこに声をかけた。

「ねえねえパパー?」

「ん〜?」

「どうしてそんなかつこうしているの〜?」

作業しているひよつとこのノートよりもヴィヴィオが気になったこと、それはひよつとこの恰好であった。正確にいうならば、ひよつとこの着ている服が気になったのだ。

「パパではない、女装中はカナちゃんと呼べ」

「でもきもちわるいよ〜?」

「いいんだよ、家には娘とペットしかいないんだから。佐川急便の宅配まではパパこの恰好で大丈夫だから」

とんだ恥知らずだった。

ひよつとこの女装姿は腋出し巫女衣装である。ヴィヴィオは一度ひよつとこの腋が見える位置におり腋を凝視していた。

「ほらおいで」

そういつて腋だし巫女衣装でヴィヴィオを膝の上に乗せるひよつとこ。ついでにガーくんも自慢の脚力でピョンとテーブルの上に乗る。

若干行儀悪いが、二人がいないときなのでひよつとこもたいして咎めようとしなない。

「いやさ、やっぱり夏って暑いじゃん? いくら家の中でクーラーかけてるからって意外とズボンの中のパンツは蒸れたりするもんなん

だよ。さつきまで庭の草むしりしてたパパはね、丁度シャワーも浴びたし心機一転として巫女服を着てるわけだよ。すんげえスー  
スーしててちよう気持ちいいし。やっぱりパンツが蒸れるのは気  
持ち悪いじゃん？ ヴィヴィオはパパのパンツが気持ち悪いのと、パ  
パが気持ち悪いのはどつちが嫌？」

「パパー」

「お前は最高の娘だよ。でもパパの最高の息子も可愛がってあげな  
いといけないから我慢してくれ」

「ん〜……？ よくわかんないけどわかった！」

言葉巧みに自前のマシンガントークでヴィヴィオの頭を混乱させ  
ながら、ちゃっかり自分の変態的コスプレを正当化させたひよつと  
こ。止めるブレーキとなる、なのはとフェイトがいなければやりた  
い放題の男である。

「ねえねえパパ？ これなにやってるの？」

「ん？ ああ、これね。これは家計簿とってだな。まあパパや  
ママ達が生活する上でどれだけお金が残っているのかを把握しない  
といけないんだよ。だからこうやって空いた時間にパパは家計簿  
をつけているのさ」

「う〜？ ほ〜？？」

ひよつとこの説明にヴィヴィオは首を何度も左右に動かす。ど  
うやらヴィヴィオにはちよつとだけ難しかったようだ。それに気  
づいたひよつとこは、苦笑しながら

「まあ、早い話がエロ本だよ。プライベートエロ本さ」

と、ありえない場所に着陸させた。どんな航路を描けば家計簿と  
いう場所から滑走してエロ本という場所に着陸するのか甚だ疑問で  
あるところだ。

「ガークン、冷蔵庫に冷やしたイチゴあるから取ってきてくれ。あ  
とコンデンスミルクも」

「ワカッター！ ガークンモツテクル！」

ひよつとこに頼まれた、ヴィヴィオ専属のペットにして騎士である  
アヒルのガークンが頷きながらテーブルから降り、冷蔵庫のほうに向

かう。その手足で器用に冷蔵庫を開け、冷えたイチゴが乗っている皿とその隣に置いてあるコンデンスミルクを取り、ひよつとことヴィヴィオが待つ場所に戻ってくる。

「ご苦労様、ありがとうな、ガーくん」

「オヤスイゴヨウ!!」

「わーい、イチゴさんだー!　ねえねえたべていい〜?」

「いいよ〜。ほら、ガーくんも食べな」

「わーい!」

コンデンスミルクをイチゴにかけ、おいしそうに頬張るヴィヴィオ。　と思つたら、もう一つイチゴを手に取りコンデンスミルクをたっぷりかけてガーくんの口に運ぶ。　ガーくんはイチゴをもしやもしやと噛んだあと、おいしかつたのかバク転をする。

「ガーくん、家計簿がえらいことになるからバク転はやめてくれ。」

せめてタップダンスにしてくれ」

「ワカッター!」

「え!?!　タップダンスできんの!?!」

ひよつとこの言葉に頷いて軽快なビートを刻みながらタップダンスを決めてくるガーくん。

「半端ねえ!?!　うちのペット半端ねえ!?!」

まさに万能なペットである。

ペットのポテンシャルに感嘆しながらも目の前の家計簿に目を落とす。

「え〜つと、夏だから電気代が上がるのはしょうがないな。　何度も何度も思うけど、なのはとフェイトって金持ってるよな。　そのおかげで俺が仕事しないで済むけどさ」

自分が大好きな人達の給料の高さに驚きつつも、自分が仕事をしないですむ喜びに頬を緩めるひよつと。　どれだけ仕事をしたくないのか、このセリフから滲み出ている。

「ねえねえパパー?　ヴィヴィオもこれきたいー」

「そうだなー……それじゃ作るか、巫女服」

「やったー!」

喜ぶヴィヴィオの頭を撫でながら、つけ終えた家計簿を閉じた——  
ところで、傍に置いていた自分の携帯電話が振動する。ひよつこ  
はガーくん携帯を取ってもらいディスプレイで電話先の相手を確認  
することに。そこに映し出されていた名前は、

「この時期に桃子さんということは、十中八九帰省のことだよな。」

はい、もしもし?」

『あ、俊ちゃん? 日がな一日だらだらしてる俊ちゃんことだから暇  
だと思うけど、いま空いてるかしら?』

「……まあ、あいてますけど……。一応、俺だって仕事してますから  
ね?」

『あら? どんな仕事をしてるのかしら?』

「自宅警備の仕事ですな」

『帰ったら二人でちよつとお話ししましょうか? 大丈夫、優しくす  
るわよ?』

何故だろう……。最後の「優しくするわよ?」がめちやくちや  
エロくて艶のある声で正直なんか理性が飛びそうなんだけど——  
めっちゃ怖い。

というか——

「痛い痛い痛いッ!? ヴィヴィオちゃんっ!? 爪楊枝はパパの太もも  
を刺すために作られたものじゃありませんよ!」

「パパー、イチゴもうないよお?」

「そんなことくらいでパパの太ももを刺さないでくれるかなあ!? こ  
れは絶対なのは影響だろ!? 俺こんな爪楊枝で人刺すようなマネ  
しないもん!」

「えへへ。パパだいすき」

「ほめてないほめてない!? 一言もほめてないからね!」

なにがそんなに嬉しいのか、ひよつここの胸付近に頬を当てスリス  
リと頬ずりするヴィヴィオ。

『あら俊ちゃん。私達の自慢の娘をバカにする気かしら?』

「へ!? い、いやそういうわけでは……。なのは俺だって自慢の  
人ですし……」

『きゃー、もう照れちゃって!』

「あの……なんで女子高生みたいなテンションなんですか。拾い食いでもしたんですか? というか、年を考えてくださいよ!」

『あ? 調教されたいの? ふふ、あなたたちと会えるから嬉しくて。』

まあ俊ちゃんとはもう会ったけど、それでも嬉しいものよ!』

「うっ……! えっと、今後はどんなことがあっても定期的にちゃんと帰ってきます!」

『よろしい。それで、もうそろそろ帰ってくるのかしら?』

「あ、はい。えっと、来週の月曜から一週間泊りがけで帰ろうかと思ってます!」

ひよつとこはガーくんに頼んで壁にかけてあるカレンダーを取ってきてもらうことに。ガーくんは自慢の脚力を活かしてカレンダーを取りひよつとこに渡した。ひよつとこはそのカレンダーのある週の月曜日に赤ペンで『帰省』と書いてそのまま日曜日まで引っ張る。

危惧していたのはとフェイトの予定がいつでもよくなったので、ひよつとこの予定より前倒しにする形である。

『あら、一週間でいいのかしら? もっと居てもいいのよ? それに俊ちゃんは“あっち”の家にも帰るでしょう?』

「いえ、“あっち”のほうは自分一人のときに行きますよ。今回は高町家の家に帰省です!」

『そう。それで、何人来るのかしら? はやてちゃん達も来るんでしょう?』

「まあ、そうなりますね。あ、詳しくはまた後日連絡することになりますが、なのはが教導してる新人たちと他数名くると思います。なので、結構な人数になると思いますよ!」

きつと、スバルとティアはなのはの水着目当てで来るだろうし、エリオとキャロもフェイトが来るのだから一緒についてくるだろう。

八神ファミリーは参加が決まっているようなものだし、スカさんも予定があいてると思う。可能ならおっさんも呼びたいものだ。そう頭の中で思いながら指折りで数えて電話の向こうの桃子に知らせ

る。

『それじゃ、こちらも頑張っておもてなしをしないとね。 勿論、俊ちゃんも手伝うのよね?』

「ははっ、そりゃ当たり前ですよ。 桃子さんと一緒に家事ができるのなら俺もうなにされても耐えることができますよ!」

『それじゃ、道具一式揃えておくわね。 大丈夫、ちゃんと皆にも教えるから!』

「すいません、何が大丈夫なのかわかりません。 むしろ桃子さんの頭のほうが大丈夫じゃないですよ」

そんな会話を交わしながら、桃子と談笑を楽しむひよつとこ。 そこに、客を知らせる電子音が聞こえてきた。

「あ、ちよつとまってください。 ガーくん、みてきてくれる? 知らない人だったら、とりあえず気絶でもさせといて」

「ワカッター! イツテクル!」

とてとてと玄関に歩いていくガーくんを見送るひよつとこ。 そんなひよつとことガーくんを交互にみながら、ヴィヴィオは

「……パパー、ガーくんばかりはたらかせちゃダメだよ? なのはママとフェイトママにおこられちゃうよ?」

と、もつともなことを言う。

ヴィヴィオの声は電話越しの桃子にも聞こえていたらしく

『俊ちゃん。 自分ばかり楽しちゃダメよ?』

と、子どもを叱る母親のように少し厳しい口調で怒る。 いや、桃子にしてみればひよつとこは実の息子のようなもの。 怒って当然

であり、叱って当然なのだ。 甘や

かすだけが子育てではない。 そう思う桃子だからこそ、さつきまでの楽しい談笑の口調ではなく、厳しい母親の口調で声をかけるの

だ。

「うっ……す、すみません」

電話越しだというのに頭を下げるひよつとこ。 その下げた拍子に、ヴィヴィオとおでこがコツンと当たり二人でえへへと笑い合う。

「それじゃ玄関に行きますから切りますね」

席を立ちながら桃子との会話を終わらせようとする——が、桃子のほうはそうはいかず何か重大な案件をいましてがた思い出したかのよう、ひよつとここに切り出した。

『そうそう俊ちゃん？ 今日ね、リンデイさんがあなたとヴィヴィオちやんが上手く生活できてるのか視察に行く、って言ってたわ。 っいつい忘れてたわ、ごめんなさい』

「……成程。 俺に死ぬというわけですね……」

乾いた笑みとカラカラの声で桃子に告げるひよつとこの眼前には、ガツポーズをしているガークんと明らかに気絶してるリンデイ・ハラオウンの姿があった。

## 58. リンディメツシュ

おいしいおいしいおいしいッ!? なにやっつてんだよこのアヒル!? お前リンディ大魔王になにやっつてんだよ!?

目の前で倒れているリンディさんとヴィヴィオと戯れてるガークンを交互に見ながら思わず心の中で叫ぶ。

くそっ! ガークんに命令したのは俺だから、ガークンを責めようものなら俺の責任になってしまおうし……。 いや、もう既に俺の責任のようなものなんだけど。

「やっべ、まじどうしよう……。 とりあえず落ち着け、落ち着くんのだ、上矢俊。 大丈夫、大丈夫。 俺ならこれしきの試練なんてどうってことないさ。 そう、アレだ。 大嘘憑きで虚構にしよう。

よーし、そうと決まれば」

息を大きく吸い込み、吐き出す。 それを何度も繰り返し、両手でやれやれ……の体勢をとりながら括弧つけてリンディさんに向かって言った。

『リンディ・ハラオウンの存在を虚構ことにした』

——3分後

「なんでこんなときに限っておっさん並のチート能力がないんだよおとおおとおおお!? ふざけんな、神様死ぬ!!」

「パパがこわれたっ!」

3分経つてもリンディさんの存在が消えることはなかった。 とんだミステイク。 こんなときに転生チートは羨ましいぜ。

しかしいつたいどうする……。? よーく考えるんだ、リンディさんになんと説明しよう。 いや、ここはシラを通して『あれ? リンディさん。 玄関の前で寝てると風邪を引きますよ?』 つと紳士的な態度で接したほうがいいような……。 あ、でもリンディさんに嫌われてるし、それは逆効果かもしれないな。

しょうがない——かくなるうえは

「いいか、ヴィヴィオ。 これから起こる出来事はママ達には内緒だ



からな？ 約束できるか？」

「うん！ ヴィヴィオができる！」

「よし、良い子だ。 それじゃ、パパはこの人を埋めるための穴を庭に掘ってくるからそれまでこの人のことを見張っておいてくれ。

なんならザオラルでも唱えておいてくれ。 あ、やっぱり起きたら面倒だからザラキ唱えておいて。 もう全力で唱えておいて」

「えっと……ザラキ〜？」

ヴィヴィオはリンデイさんの頭を可愛らしくペチンペチンと叩きながら、とても間延びしたザラキを唱える。 可愛すぎ、食べたい。

「よし、頼んだぞ。 パパ、マジで本気だから」

土木関係者が使うようなスコップをもって庭に出る。

俺の出した結論とは——リンデイ・ハラオウンを庭に埋葬することである。

☆

一心不乱に穴を掘り始めること10分、見た感じ、2mくらいの深さにはなっただろうと思う。 これくらいあればリンデイさんを埋葬することなどたやすいだろう。

「しかしアレだね。 いつか俺も殺人犯すんじゃないかと思っていたけど、まさかリンデイさん相手に殺人犯になるとは思わなかったよ」  
思えば、リンデイさんとは色々あったもんだな。

「リンデイさんとの思い出といえば、あれが一番鮮明に覚えているな。  
魔法熟女 ハイパーマジカル☆リンデイちゃん。 俺がリンデイさんとの関係を良好なものにしようと思って考えたキャッチフレーズなのに、フルボッコにされたんだよな」

「そういうえばそんなこともあったわね。 クロノとなのはちゃんとフェイトが止めなかったら病院送りになってたわよね」

「そうそう、『輝く笑顔に魅惑な唇。 ショタをちよっぴり摘み食い♪ 9歳なんかに負けないわ、大人の魅力で悩殺しちゃう。 ハイパーマジカル☆リンデイちゃんよ☆』と言った瞬間俺の意識飛んだしな」

「懐かしいわ。本気で殴って壁が陥没したのよね。ところであなた、こんな所でなにしているのかしら?」

「何って? そりゃリンディさんを埋める穴を——ん?」

「いったい俺はさつきから誰と会話しているのだろうか?」

今までごく自然な会話をしてきたから考えていなかったけど、これって……

壊れた機械のように振り向くと、

「パパー、ザラキしっぱいしちゃったよー」

と、困ったような顔で俺を見つめるヴィヴィオと

「あなたってほんと愉快な頭してるのね……!」

いまにも襲い掛かってきそうなリンディさんがいた。

「ベ……ベキラゴン……」

「残念、リンディには攻撃が外れたようだ」

ぼうけんのしよはきえてしまいました

☆

「リンディさん、そろそろ穴の中の土が半分を超えてしまいましたよ。」

「このままだと娘さんの旦那が死んでしまいますよ」

「いつそ死んでしまったら?」

「あつ ちよつ!? もう無理ですって、マジ無理ですって! このままじゃ俺リアルに埋まりますから!」

「一度実験したかったのよ。人間の底力というものが、どれほどの強さを発揮するのか」

「ふざけんなババア! 熟女! いつまで若作りしてんだよ、引つ込め!」

「おっと、手が滑ってしまったわ」

「うそうそうそうそつ! リンディちゃん、超絶可愛いよ!」

リンディさんによって自分が掘った穴に埋められている俺です。

まさかリンディさんが生きているとは……。それにしてもリンディさん、まじで俺を殺すことに躊躇いがないんだけど。

「あ、そういえばリンディさん。桃子さんから聞きましたが今日はヴィヴィオと俺の生活を見に来たそうですね」

「正確には、フェイトの娘であるヴィヴィオちゃんを見に来たのよ。ゴキブリであるあなたには興味ないわ」

この人は棘のある言葉をいれないと、満足に俺と会話すらないのか。ツンデレにもほどがある。

リンディさんが俺を埋葬する作業をやめて、ヴィヴィオに向き合う。

「こんにちは、ヴィヴィオちゃん。私はフェイトママのママのリンディ・ハラオウンよ」

「ママのママ?」

「そう、ママのママよ」

「う〜?」

ヴィヴィオは混乱したらしく頭を抱え、隣にいるガーくんを助けを求める。ガーくんもこれには困惑しているらしく、頭にクエツションマークを浮かばせていた。

しようがない、パパが助け舟をだしてやろう。

「ようするに、ママの中のママ。ママで一番権力があって強い人だよ」

「ギルガメツシュ?」

「そうギルガメツシュ。いや、リンデメツシュだな」

「なるほど〜」

ヴィヴィオは納得したらしくしきりに頷いて、リンディさんに抜群のスマイルでいった

「リンディメツシュさん、こんにちは! ヴィヴィオです!」

「ぶはあっ!」

何故か噴出した俺だけ怒られた。

☆

ヴィヴィオの説得もあり、なんとか死なずに済んだ俺はリンディさ

んを家に招きいそいと紅茶を用意する。

「リンディメツシユさん！ このえほんよんで！」

「ええ、いいわよ。　ところでヴィヴィオちゃん？　リンディメツシユはやめてくれないかしら？　できればもっと短くまとめしてほしいなく、なんてことを思ったり」

「えくつと……ディツシユ？」

「何故そこを選んだのか小一時間ほど問い詰めたい」

あのリンディさんをここまで困らせるとは……我が家最強のアイドルは恐ろしいぜ。

現在の俺は汚れた腋だし巫女衣装を洗濯機にかけ、Tシャツと七分のズボンを着ている。　こうしてみると、やっぱり巫女衣装って涼しかったなく、と思ってしまう。　やべえ……あんまりこんなことを思っていると、キャサリンにハントされそうで怖い。

「それにしても、どんな教育を施せばあんな単語が出てくるのかしら。　なのはちゃんとフェイトがいるから大丈夫だと思っていたけど……ちよつぴり不安になってきたわ」

まあ……ヴィヴィオ巻き込んでゲーム大会とかしよつちゆうやっていますし。　休日は八神ファミリーとかきますし。

「たぶんヴィヴィオの将来は有名なコスプレイヤーですよ。　勿論俺が専属カメラマンで」

「なのはちゃんとフェイトが全力で逮捕してきそうね」

その場面が容易に想像できてしまう。

「ところでリンディさん。　来週に高町家に帰省するのですが、ハラオウン家は予定あいてますか？」

「そうねえ……クロノは仕事で空いてないかもしれないわ」

「仕事熱心ですね」

「六課が異常なのよ」

あ、やっぱり？

「それじゃ、今回の帰省は大所帯になりますなく。　まあ、人が多いほうが楽しいので個人的には嬉しいですけど」

「さすがお祭り大好き男ね。　ところで、あちらの家には帰るのかし

らっ。」

「今回の帰省では帰りませんね。もう少し経ってから俺一人で行きますよ」

「はあ……。毎度毎度、どうしてこうも変なこだわりを持っているのか。そんな所が心配なのよ」

「ははっ、すいません。けど、ありがとうございます。感激ですよ、リンディさんに心配してもらえるなんて」

「勘違いしないことね。べつにあなたを心配してるわけじゃないわ。あなたのことで多少は悲しむかもしれないヴィヴィオちゃんとフェイトのことを心配してるの」

いつものリンディさんの物言いに、思わず顔がほころぶ。

「それにしても……。いったいどこで何をやっているのかしら。あの人は」

「また迷惑でもかけてるんじゃないですか？ なんとなくそんな気がします」

「もしかしたら、管理局に追われてたりして？」

その答えに互いにおかしくなって笑い合う。あの人ならありそうだ。

「まあ……。いつか会えますよ」

なんせ、常識の外側にいる人だしな。

ふと見ると、ヴィヴィオがお腹をさすっていた。それと同時に訪れる軽い空腹感。

「そろそろお昼ですね。ヴィヴィオもお腹すいてるみたいですし……。リンディさんもどうですか？」

「そうねえ……。それじゃご相伴に預かろうかしら」

「パパー、ヴィヴィオもおてっだいするー！」

「ガークンモ!!」

全速力で駆けてくるヴィヴィオとガーくんをだっこしながら、俺はリンディさんに満足していただくための料理を頭の中で考えるのであった。

まさか……あの子がヴィヴィオちゃんの空腹に気付くとは……。ちよつとだけ見直したかも。

キッチンでヴィヴィオちゃんと料理しているあの子を目で追いながら、先程の光景を思い出す。

「意外と頑張ってるようで安心したわ」

若干ではあるものの、本当に微量ではあるものの、彼とヴィヴィオちゃんがちゃんと生活できているのか心配だった身としては、彼とヴィヴィオちゃんがこうやって仲良くしている光景をみることできて安心した。

「それにしても……あのアヒルって本当にただの動物なのかしら……？」

玄関を開けた先に待っていたあのアヒル。私がいやがんで抱っこしようとした瞬間にありえない速度でアツパーを決めてきたあのアヒル。

「……ちよつと体がなまってるのかしら。 うくん……はやてちゃんに頼んで、六課の訓練場を借りたりしよ」

流石にアヒルに負けたとあつては、フェイトにどんな顔をしているのかわからないし。

そう決意をしたところに、件のアヒルがお皿にドリアをもって登場してきた。

「……負けないわよ」

「カカツテコイ！」

今度こそ……負けないわ！

『パパー、リンディメッシュさんとガーくんがカバディしてるよー？』『リンディさんの名誉のためにも、フェイトママには内緒にしとくんだけー』

『はーん』

……しまった!?

「昨日さ、ロリビッチものの同人誌読んで思ったことなんだけど。そもそも何故、男はロリ系に弱いかって話なんだよな。まず挙げられることとしては、背徳感、罪悪感、征服感があると思うからなんだ。法律的にはロリ、いわゆる小学生に手を出した時点でアウトだろう？ その法律があるからこそ、背徳感でいっぱいになり手を出したりするのもかもしれない。次に罪悪感。これは小学生を犯すことと、その後にくる『やってはいけないこと』をしてしまった自分に酔いたいのだと思う。例えば、悪ぶった高校生が飲酒や喫煙するじゃん？ あれは『そんなことやってる俺カッケー』というもと、『こんなことしちやダメだけど』という良心のはざままで起こる行為だと考えている。次に征服感。これは簡単だよな。小学生を犯すことで自分の心を満たしたいってだけなんだよ。つまり自分が上位に立ちたいってことなのさ。だからこそ、生物で一番弱い存在である小さな女の子を狙う。あとは単純に好きだからって理由もあるよな。けど、そのロリが好きって感情はさ、父性の歪んだ愛情からくるものだと考えている。本来なら守るべき対象であるロリを何を間違ったのか犯す対象に変わってしまった。そんな奴の成れの果てがロリコンとして逮捕される奴だと思うんだ。——で、ここでロリビッチの話に戻るんだけど。いま結構ブームじゃんロリビッチ。それじゃ、なんでロリビッチがブームなのかについて考察してみたんだ。そもそも、ロリという単語で頭に思い浮かべるのは『可愛い』『天使』『清純』といった単語だと思う。そしてここで問題なのは『清純』という単語だよな。人間ってのはよくできていて事前に聞いたこと・調べたことが本当のことだと思うことが多々あるんだよな。いわばイメージが先行してしまうのさ。だからこそ、『小学生は清純』という風潮が出来上がった。そこでロリビッチの話に戻るんだけど、これはいわばギャップを狙った発想だよな。『小学生は清純で、エッチなことなんてしない』というイメージを壊すんだ。このイメージを壊すことによってそれまでの凝り固まったイ





持ち悪いことになっている。

「あ、ほんとや。 シヤマル、治してあげたって。 第2ラウンドもするから」

「……ちよつ……まじで無理だつて……」

困り顔のシヤマルに治してもらいながら、よろよろの状態で助けを求めろ。

なのは&フェイト・・・ヴィヴィオとエリオとキヤロを背中に隠しながらガン無視

スバルとティア・・・どさくさらに紛れてなのはの髪を盗む。 なお、ひよつとはガン無視

シグナム・・・伸ばしてきたひよつとこの手を蹴り飛ばす

シヤマル・・・困った笑みを浮かべたまま、一定の距離を取る  
ヴィータ・・・ひよつとこがきても動かない

「ロヴィータよ……お前だけだったよ。 やっぱりロヴィータは良心だな……」

「仕事の邪魔だ、ゴミ虫」  
「げふうつ!?!」

ひよつとこの腹を思いっきり蹴り、本部に送るための書類をファックスで送信する。

「くそつ……! 六課の皆は薄情ものだ、絶対こいつらの血はミドリ色に決まってる」

「俊くん、いまの話聞いて俊くんを支持する六課の面々はいないと思うよっ。」

「10年前は管理局のロリ代表だったのに、いまじゃコスプレ女で痛々しいだけのなのはさんは黙ってて!」

「ちよつと表でろ」

なのはが立ち上がり、ひよつとこをネコのように持ち上げる。 そしてそのまま、廊下へと出る。

『や、あの……はい、すみません。 僕ですか? 勿論なのはさんのバリアジャケット大好きです。 はい、もう愛しているといても問題な

いほどです。 あ、はい、すいません。 でもやっぱりここは期待に  
応えないといけないと思って……。 あ、いえいえそんな滅相もござ  
いません。 はい、もう。 はい。 なんかすいません、僕みたいな奴  
が中心で。 はい、もう僕はスミのスミのほうでいいです、はい。  
はい、もう僕は高町なのはの奴隷です、絶対服従を誓います、はい。  
……え？ 焼きそばパン買ってこいですか？ でも僕お金もってな  
いし……。 あ、お金はくれるんですね。 それじゃ行ってきます』  
そんな会話が聞こえた後、一人が走り去る音が聞こえてきて、代わ  
りになのはが部屋の中に戻ってくる。

そして、いつもと変わらぬ可愛らしい笑顔でこう告げた

「みんなー！ 俊くんが自主的に焼きそばパン買ってくるんだってー  
！ 3時の休憩にしようー！」

いつもと変わらぬ笑顔を振りまくなのは。 そんなのはをみて、  
六課にいる面々は思った。

『(なのはさんに逆らったら殺される……！)』

高町なのは、その力、その脅威、いまだ健在である。

☆

「で、そもそもなんできたん？ なんか用があるからわざわざ来たの  
やろ？ それともアレか、本当にくだらん考察をするためだけにきた  
んか。 だとしたらビンタするで」

「既にビンタ以上のものを喰らったけどな。 まあ落ち着けはやえも  
ん。 来週の月曜から日曜までの一週間、俺となのはさんとフェイト  
とヴィヴィオは高町家に帰るんだけど、どうせだったら八神ファミ  
リーも一緒に行こうぜ！ というお誘いでやってきたのさ」

「あー、なるほど。 勿論いくで。 それにしても来週か、もう少しだ  
け早く言ってほしかったかも」

「え？ なんで？」

「ほら……そのー……水着とか」

「何言ってるんだよ、お前の胸全然成長してないじゃん」

ビンタが飛んできた

「……はやての胸成長してるな」

なんだろう……この理不尽な想いが胸を駆け巡る感覚は。

現在、大きなテーブルに場所を移し皆で席に座っているのだが。

向かい正面ははやて、右がなのは、左がフェイト。一番遠いところにキヤロとヴィヴィオがくるよ

うに配置されていた。お前らどんだけ俺を信用してないんだ。

そして全員、俺以外の面々は焼きそばパンを頬張っていた。……

俺も欲しい。

「俊、とつても焼きそばパンを欲しそうにしてるね」

「うん、ちよーうまそう」

「食べる？」

「食べる！」

「それじゃ、はい」

フェイトから焼きそばパン——の上ののっている紅シヨウガを渡された。

「……いただきます……」

「あ、俊くん紅シヨウガ好きなんだ！ それじゃわたしのもどうぞー」

「あ、私のもいいですよー」

『しょうがないなー、まったく』

手には紅シヨウガだけが積まれていく。久しぶりに味わう、なのはとフェイトのDS攻撃。そしてそれによる波状攻撃。すいません、僕の精神はそこまで強くないのですが。

けど大丈夫。だってヴィヴィオがいるんだもん、俺の唯一の味方のヴィヴィオちゃんなら俺を助けてくれるはず……！

チラッ

「むにやむにや……」

寝てるー！?! ヴィヴィオちゃんお腹が満腹になったから寝ちゃってるよ!?! やっぱりこういったところが5歳児だね! ガーくんがしっかりヴィヴィオが落ちない

いように支えてるし。

「ところでひよつとごさん、それは私達も行けるんでしよつか？」  
「勿論、というか既にエリオとキャロは強制参加になってるから。スバルと嬢ちゃんもくるよな？」

「勿論行きますよ！　なのはさんの水着が見れるんですから!!」  
あいかわらず自分の欲望に素直な二人である。

「ということは、これで六課のほうは大丈夫……と。　あとはス力さんとおっさんだな」

おっさんが来れるかどうか微妙な所だよな。　真面目だから『俺が休んでる間にミッドでなにかあるかもしれない。　悪いが、それを考えるといけそうにない』　みたいなこと言う可能性が無きにしても非ずなわけで。

腕を組んで考えていると、ファックスからなにかの資料を受け取ったロヴィータちゃんが俺に聞いてきた。

「そういえばひよつとご。　お前つて、あの人のことをおっさんおっさん言うけどさ、あの人の本名はなんなんだ？」

「あ、それわたしも聞きたかった。　俊くんが言わないから、一向に本名がわからないんだよね」

ロヴィータの問いになのはが同意する形で割り込む。

「いや……べつにしらないけど？　初めて会ったときからおっさんと呼んでるし」

『相変わらず非常識な奴だな』

「いやいや、俺とおっさんはこんな関係でいいんだよ。　なんせあつちも俺の本名を呼んだことなんて一度もないんだし」

「言われてみればそうかも。　男の友情みたいな感じ？」

「いやいや、どっちかというと犬猿の仲だろ。　俺が何度おっさんにボコられて、俺が何度おっさんにやり返したか」

目を閉じれば思い出す。　エアガンで発砲したり、ナイフ投げの的にしたり、こつそりロリのエロ本を制服の中に入れ地位を貶めたり。　色々やったなく。

「それでもひよつとごさんと、あの人の関係が続いてるつてのが凄いですよね」

「それはスバルン、アレだよ。俺とおっさんはトムとジェリーのよ  
うなもんなのさ」

「なんだかんだで縁切れないしな。」

「……ホモ?」

「何故そうなる!?!」

「俊くん、そんなの絶対ダメだからね! 小さい女の子も男の人も選  
択肢にいれちゃダメだから!」

「いれたら本気で軽蔑するよ?」

「いやいやいや少しは自分たちの幼馴染を信用しようぜ!?!」

「まあ……信用した結果、いまのなのはとフェイトがいるんだけどな」  
「ヴィータ、それは言っちゃあかんよ」

俺は絶対信じない。もし信用してくれるのであれば、俺の寝室と  
なのはとフェイトの寝室が一緒じゃないとおかしいもん。これは  
明らかに信用してない証拠だよ。

「つと、ちよいとトイレいってくる」

急に尿意がきたので、皆をどかしてトイレへとダッシュユする。

☆

「まったたく……小さい女の子のエツチな本は全部処分決定だね」

「うん、そうだね。ただでさえ人として終わってる俊がこれ以上墮  
ちていくのは幼馴染としてほっとくわけにもいかないしね」

「ひよつとこさんのエロ本って定期的にお二人が捨ててるんですか  
?」

ひよつとこを見送ったあと、なのはとフェイトがしきりに頷きなが  
らひよつとこの宝物を処分することに決定していると、横からスバル  
がそう聞いてきた。

「そうだね、わたし達がチェックして捨ててるね。そのたびに俊く  
んは抗議するけど」

「まあ、魔法で拘束するしね」

『四人の力関係が一発でわかるな』

その場にいた全員が頷きながら、軽くひよつとここに同情する。きつとひよつとこは家族の中では力が一番弱いのだろう。

「それにしても水着かく。いまから新しい水着買いに行く?」

「うーん、そうだね。そうしよつか。皆もどう?」

問うフェイトに、六課の面々は一つ返事でOKしていく。そして身支度を済ませたら、ひよつとこの帰りを待つことなく仕事場から出て行った。自由奔放にもほどがある職場である。

六課の面々が出て行ってから2分後、ひよつとこが戻ってきたときにはヴィータだけが自分のデスクの上で作業していた。

「あれ? 他のハーレム要因は?」

「お前をおいて水着買いにいったぞ。というか、ハーレムも何もお前にデレてる奴なんかいたか?」

「……ヴィヴィオ?」

「それはお前の幻想だ」

「その幻想をぶち壊す」

そういいながら、ひよつとこはヴィータの隣に腰掛ける。若干ながらヴィータがひよつとこの間合いを取る。

「……あの……なんで避けた?」

「ロリコン野郎に犯されるかもしれないしな」

「残念ながら、お前の腔じや俺の肉棒は入らないだろ。騎乗位なら入るかもしれないけどさ」

「そもそもお前とやりたくないけどな。性病になりそう」

「プログラムも性病になるのか?」

「さあ?」

ヴィータはひよつとこの方など見ずに、淡々とした口調で話を進めていく。

「あんま根詰めすぎるなよ、ほい」

「ん、お前にしては気がきくじゃねえか」

「どうせ、あいつらは水着買いに行くと思ってたからな。あいつらの行動なんて手にとるようにわかる。そしていつ生理がくるのかも手に取るようにわかる」

ひよつとこから渡された缶ジュースを飲みながら、ヴィータがすみ顔で答える。

「そんなことだから、いつまで経っても付き合えないんだよ」

「そもそも脈あるのかな？」

「さあ？」

「適当なことばっか言いやがって」

「人生を適当に生きてるお前に言われたくねえよ」

「適当じゃねえよ、人生の渡り方を心得ているだけさ」

ヴィータから渡された缶ジュースを飲みながら、おどけたように答えるひよつとこ。

「それにしても、何してんだ？」

ヴィータが先程からしている作業が気になったのか、ひよつとこが覗き込む形で見てくる。そこには、新人一人一人の行動パターンをデータにとり、いまの新人の力が

がどれほどなのか？ といったグラフが書いてあった。

「本部の友達に連絡入れてな、新人たちのデータをグラフにしてもらったんだよ。そしてあとは私が新人一人一人の直すべき所と、伸ばすべき所、褒める所を書いて新人たちに渡していく。なのは日記という形で新人たちとコミュニケーションを取ってるし、私は私のやり方で新人たちを教育しようと思ってる」

「ふくん、いつからはじめてんの？」

「4月から」

「六課が出来たあたりからか。頑張るな、お前」

ひよつとこは紙を一枚拝借し、眺めてみる。そこにはティアのデータが載っていた。律儀に、先月より成長したと思われるところには赤線が引いてあり、可愛い文字で『good』と書いてある。「ティアはもともと、スバルのような馬力もないし、キャロのような使役もできない、エリオのように将来有望かどうかもわからない。だから、もしかしたら自分の成長が判らなくて無理な訓練をやってしまうかもしれない。そしたらなのはをはじめ、皆が悲しむだろ？ あたしはそういうの嫌なんだ」

「確かに、嬢ちゃんはティードの葬式のとぎになのはと会わなかったら、対立してかもしれないな。天才には凡人のことなんかわからない。天才の奴が凡人の奴に何

をいっても嫌味に聞こえてしまうし、凡人が天才に言ったところで、それは負け犬の遠吠えになってしまう。天才は天才同士でつるむしかなく、凡人は凡人同士でつるむしかない」

「それでも、全てがそういうわけじゃない。六課をみればわかるだろう？」

「まあな。それにしても、教導担当のなのはがやらないで、なんでお前がやってんだらうな」

「あたしも教導担当だよ。それに、なのははあのままでもいいんじゃないか。あれはあれで新人たちのことをよく考えてるよ。日記にしたって、自分のわかる範囲で答えるし、他の隊長陣にも意見を求めたりしている。まあ、うまく回っているさ」

それに、とヴィータは続ける。ちよつとだけ顔をほころばせながら、笑顔で続ける。

「嬉しいんだ。プログラムのあたしは成長しないけど、新人達は一日一日、日々成長している。それを見るのが楽しくて、そんなあいつらの頑張りを見るのが嬉しいんだ。まあ……あまり訓練しないことは問題だけど。自主練もあまりしてないみたいだし」

「それは問題だな。まあ、六課はそれでいいと思うけどさ」

なんせ管理局の萌え担当なんだから。そう言うひよつとここに、ヴィータはクスリと笑う。

「かもしれないな。それでいいのかも」

ひよつとこから受け取った缶ジュースを一気に呷り、ゴミ箱へと持っていく。そんなヴィータの背中にひよつとこから声がかかった。

「確かに、お前ら守護騎士は身体的な成長なんてしないかもしれないけど、魔力的に成長なんてしないかもしれないけど、べつにいいんじゃないかな？」

「知ってるさ。べつにプログラムを否定しようなんて思っていない



し」

首を振るヴィータに、

「あ、あれ？ 俺の言葉が悪かったかな？」

と、ひよつとは首をひねる。

「いったい、お前は何を言いたいんだ？」

席に戻りながら、問うヴィータにひよつとは、

「だからさ、移りゆく世界で、変わらずそのままの形であり続けるものがあったてもいいんじゃないかな？ 例えば、ヴィータとかさ」

世界は日々、成長し、進化し、衰退し、滅びていく。

そんな世界で、いつまでも変わらずにそのままの姿であり続ける存在があってもいいのではないか？ そう言外に含ませながら、

「いつまでも、そのままの姿でいてくれよ、ヴィータ。 ヴィヴィオもキヤロもじきに大人になってロリ枠はお前しかいなくなるんだから」と、ニヤニヤと笑いながらいった。

そんなひよつとこの言葉に、ハツと笑い

「なにくさいセリフで気取ってんだ。 まあ、お前が年老いたら肩たたきくらいはしてやるさ」

と、じつに愉快に面白そうな表情で言った。

そうして席に戻り、自分の作業をはじめめるヴィータ。

その横で肩肘つきながら、見ているひよつとこ。

なのは達が帰ってくるまでの間、二人だけの時間はゆっくりとまったりと過ぎていった。

## 60. おっさん久しぶり

「勘弁してくれよ、おっさん。俺これからスカさんの家に行かないといけないんだってば」

「いいから席に座って反省文書け。あのバイク壊すぞ」

「はいはい、わかりましたよーっと。べつにいいじゃないか、たかだかバイクが背中に当たったくらいで大騒ぎしやがって」

「お前あのとき、『死ねおっさん!』と叫びながら俺を轢いたよな?」

「無傷で済んだからいいじゃん」

「お前いつか本気で殺すからな」

六課に訪れ帰省の件を話した翌日、俺はスカさんの家に話も兼ねて遊びにいらしたところでおっさんに捕まってしまった。こいつはどれだけ俺のことが好きなんだ。

「とりあえずバイクはかえってくんのか?」

「お前が反省文書いたらな。しかしいいバイク乗ってるじゃねえか」

「だろ? 高校時代に頑張ってバイトしてさ、その金で買った」

「お前高校時代まではまとな生活送ってたのか」

「まあそれなりに。でもバイト代の3割はお世話になってる家に返してたよ」

そうはいつても、あの二人は笑顔で断っていたけどさ。だからこつそり恭也さんとか美由紀さんに渡して、そこからあの二人に渡るように計画したこともあったかな。

「しかしそれも過去のものであり、いま現在の彼は人生が詰んでいる哀れな男、つということか」

「しばくぞてめえ。俺には天使の幼馴染たちがいるから大丈夫なんだよ。そこで性奴隷として生きていくことに決めてるから。永久就職が見つかってるから」

「お前そのうちどちらか一方から刺されるかもしれんな。それか別の女から刺されたり」

「現実のヤンデレは結構リスク高いからな。まあ、二人に限ってそ

んなことはないだろ。ほい」

「ん。……お前、小学生じゃないんだから。書き直せ」

おっさんがひよつとこに紙を返す。そこに書かれていることは大きな文字で

『先生、ごめんなさい』

「あー……たしかにこれじゃダメだよな。うん、書き直す」

「わかればいいんだ。まったく、お前の頭は3歳児か」

溜息を吐くおっさん。そこにひよつとこが紙を差し出して来る。

それを受けとり目を通すと――

『悪かったなおっさん、許せ』

「許すかボケ!!」

「きやあああああああ! 密室をいいことにこの局員が私をレイプしようとしたわー! 市民の皆さん助けてくださいーい!!」

「あ、ちよつ!? いまどきそんな嘘に引つかかるやつなんてな――」

『だ、大丈夫ですか!? いま局員を呼んだので安心してください!』

『おまわりさーん! こつちでーす!』

「なん……だと……!?」

今日もミッドは平和である。

☆

「ということがさきほど起こってさ、おっさんが必死に弁明してる姿はかなり面白かったよ」

「ひよつとこくんの心臓は毛でも生えているのかね」

「俺とおっさんの信頼関係だな」

「あっさり崩れそうな信頼関係だよ」

おっさんから逃れ、ついにスカさんの家にやってきた。テーブルの上にはリンゴジュースとカルピス、それについて先ほど開けたばかりのポテチがある。

「ところでさ、スカさん。来週から一週間俺たちが地球にいたところの家に戻るんだけど、一緒にこない?」

「ほう……それは興味深い。ひよつとこくん、それはアレかね？  
現地でパンツが落ちていたら拾っても大丈夫ということかね？」

「どこをどう深読みしたらその答えにたどり着けるんだ。まあ……  
落ちてたら拾ってもいいんじゃない？」

「ふつ、ついに私が開発したこの『パンツ落としますよ！』が役に立つ  
ときがきたようだ!!」

素晴らしいながらテーブルに足を乗せ、声高らかに叫ぶスカさん。  
いったいこの人はどれだけパンツが欲しいのだろうか。

そんなことを思っていると、ウーノさんがスタスタと歩いてきて――  
済ました顔でスカさんの脇腹を拳がめり込むほどの強さで殴って  
いった。

あまりにも鮮やかかつ流麗な動作だったので一瞬の反応すること  
ができなかった。なんとということだ、俺の身近にこんな凄い人がい  
たなんて。

「おう……!?!? ぐ、ぐびやうぐふよつかつちよ……!」

ビクンっ！ ビクンっ！ と痙攣しながらなんか変な汁を口から  
出すスカさん。完全にエイリアンです、ありがとうございます。

「スカさん口から卵出せそうな勢いだよ」

「口から卵出すくらいなら……下半身から白濁液出したほうが幾分か  
ましだよ」

そりやマシンに決まってるだろ。もとより人間は口から卵出せない  
よ。

「しかしながら……六課の面々も来ることになるのか……。ふむ、  
そろそろ潮時かもしれないな」

「ん？ どういうこと？」

「いやいや、こちらの話だよ。——なあ、ひよつとこくん」

スカさんは俺に笑いかけたあと、急に真面目な声色で話しかける。

「キミは……友達が犯罪者ならどうするかね？」

「あ？ なんか随分前にもそんな話をした記憶があるぞ」

「まあ、それでも一応聞いておこうと思ってね。友達が犯罪者で、ど  
うしようもない過ちを犯していて、それでもキミはその人物を友達と

呼んでくれるのだろうか？」

スカさんの声はいつものアホみたいな声じゃなく、おどけた調子でもなく、ただただ真剣に、俺のちゃんとした答えを聞きたそうにしていた。

「……そーだなー……。よくわからん。そもそも友達の定義からして結構あいまいなんだよな。だから——そいつに決めてもらうかな」

だから俺は、あえて誤魔化すことにした。

☆

俺がお邪魔してから1時間が経ったころ、部屋にどやどやと女の子たちが侵入してきた。

そのうちの一人が、スカさんに手を振りながら箱に入っているなにかを掲げる。

「ドクター！　これで全部のレリックを集め終わりましたよー！」

「おお、すまないね、クイントくん。わざわざ手伝わせてしまって」

「いえいえ、なかなか観光も楽しいものでしたよ」

そうしている間にも、スカさんの周りにはプラグスーツみたいなボディを溢れんばかりに誇張しているムッチリピッチリスーツを着込んだ女の子たちが囲んでいた。

「もしもし、おっさん？　ちよつといますぐスカさんの家に来て。

ちよつと目の前の男をぶつ殺してほしいんだけど」

「まつんだひよつとこくん!?　目が本気なんだけど!?　なんかここまですぐで歯ぎしりが聞こえてくるんだけど!」

「ひよつとこ、あれか？　淫行の容疑で逮捕すればいいのか？」

「うん、よろしく」

「ぎゃあああああああああ!　いつの間にか後ろにいるううううううううう!」

おっさんがスカさんの頸動脈を押さえながら俺に聞いてくる。

電話してから数秒で来るとは、こいつ絶対裏設定とかありそうだな。

「んあ？ これレリックじゃねえか。 管理局も探しているロストロギアだぞ」

「あ、管理局仕事してたんだけ」

「ちゃんとしてるところはしてるんだよ。 しかし……何故これを持ってている？」

おっさんがスカさんからレリックなるものを取り上げて、回転させながら問う。

スカさんはその問いに答えない。 黙ったままである。

「……黙秘か。 それじゃ、あとの話は管理局で聞くことにするか」

「お、おいおいまでよおっさん。 いくらなんでもそれは少し早計すぎないか？ ほら、スカさんだって何か考えがあるかもしれないわけだし……」

『そうだよ！ ドクターをいじめるな！』

「いじめる？ てめえら、このレリックがどれほど危ないものかわかってるのか？ これがどれほどの災いをもたらすのか知ってていつてるのか？ 俺はミッドの市民を守るのが役目なんだよ。 そしてここにはロストロギアがある。 しかも第一級指定ロストロギアだ。 なあ、ひよつとこ、お前ならわかるんじゃないか？ ゲームが得意で大好きなお前ならわかるんじゃないか？ たった一回の馴れ合いで、たった一回の見逃しで、罪のない人の命が失われるかもしれない。 この俺に、そんなことをしろというのか？」

おっさんはいままでにないほどの声色で、いままでにないほどの眼光で、いままでにないほどの圧力で、そういつてきた。

……正直なところ、キレたのはでもここまでは怖くないと思うぞ。

「二つだけいっておくぞ、ジエイル・スカリエツィ。 余計なことはするな。 ——じゃないと、俺はお前を敵に回さなきゃならねえ。 これは俺が預かっておくぞ」

おっさんがレリックをお手玉のように投げながら出口へと向かう。

お前……この空気どうするんだよ。

「さてよ、女子高生大好き変態局員」

「なんだ、ゴミ虫。お前に構ってる暇はねえんだよ」

おっさんは俺のほうを振り返りながら、若干キレ気味で話す。

……短気な野郎だな、まったく。

「まあまあ、そういうなよ。ところでおっさん。来週一週間空いてるか？ 来週、俺たちが住んでいた所に帰省するんだけど、おっさんもどうよ？」

いつもの調子で、テーブルに置いてあるポテチを食べながら聞くと、

「……あく、来週か？ なら、空いてるぞ」

と、頭をガシガシと掻きながら答える。

「マジかよ？」

「……娘が——」

「いや、そこまでいいよ。うん、来週は思いっきり遊ぼうな？」

「お前らが変なことしなければいいんだけどな。まったく……ミッド

ド市民が迷惑かけると俺が怒られるんだぜ」

やれやれ……と肩をすくませながら、おっさんは部屋を出る。

……なんというか、お前のツンデレを理解できたの俺だけだと思うぞ、この皆の反応みる限り。

振り向きながら、努めて明るく振る舞う。

「ま、まあスカさん！ あれだよ、ロストロギアをおっさんに預けることができたんだから、よしとしておこうぜ！ 暴走しても困るしさ！」

「……ふむ、確かにそういういった考え方もできるね。いやはや、すまなかつたねひよつとこくん。私のせいで、嫌な役を押し付けてしまったね」

「嫌な役？ なんのことを言ってるんだよ。俺はただおっさんに自分の聞きたかったことを聞いただけだよ」

「ふつ、まあそういうことにしとくよ」

席に戻りながら、俺はスカさんと話し込む。すると、そこに先ほクイントさんと呼ばれていた女性が男性を伴って入ってきた。

てつきり、そのままスカさんと話すのかと思いきやまっすぐに俺の

方に向かってくる。　　いったいなんなんだ？　　そう思っていると、俺の前に立った二人のうちの一人

人、男性が俺に握手を求めながらにこやかな笑顔で言ってきた。

「キミの噂はかねがね聞いているよ。　　こんには、ゲンヤ・ナカジマという者だ」

「俺ピツチャーな！」

……………スバルン関係かな？

☆

「少し大人気なくなかったか？」

「…………ゼストか。　　お守りならしつかりしてくれないと困るぞ。　　これがどれほど危ないものか、お前も知ってるだろ」

「だからこそ、回収を急いだのだから。　　あと、その危ない代物であるレリックを驚掴みしてる貴様はどうなんだ」

「回収するのは管理局の仕事だ。　　みたところ、回収に行ってたやつらはガキ共ばかり。　　ガキつてのは、未来を担う大切な宝なんだよ。

　　こんなつまらねえ石ころごと  
　　で壊されていいものじゃねえんだよ」

　　そういいながら、男はレリックを掴む拳に力を込めバラバラに壊す。

「相変わらず異常だな」

「安心しろ、俺以上の異常者が部屋にはいるから。　　まったく……ミッドの市民はキチガイばかりで困る」

「して、その貴様のいう『市民』はあの中に何人が含まれているのだろうか」

　　そう聞くゼストに、男は呆れたような顔で言う。

「あの場にいる全員に決まってるだろ」



## 61. パパ力はまだ高くない

「パパー、どうしたのー？ げんきないよー？」

「へ？ そうかな？」

「うん。 ぽんぽんいたいなのー？ だいじょうぶー？」

スーパーから帰ってきて、すぐに夕食を作りいつも通りに家族四人で食べているとき、隣で食べていたヴィヴィオが俺の顔を覗き込みながら聞いてきた。

ヴィヴィオは俺の腹をさすりながら心配そうに覗き込む。 ガーくんも俺のほうをみて心配していた。

「こーら、ヴィヴィオ。 ダメでしょ？ ご飯食べてるときに席を立ったら」

「ヴィヴィオはパパのおひぎにすわっただけだよ？ いどうしただけだもん」

「それでもです。 俊くんの膝から離れなさい」

「えー！ いやー！」

「あ、こーら！ 抱きつかない！」

ヴィヴィオとなのはが言い合った結果、ヴィヴィオが俺のほうに抱きついてくる。 うれしいけど……ヴィヴィオちゃん、パパの首が絞まっている。 綺麗にパパの首を絞めている。

バンバンバン

「ヴィ、ヴィヴィオ!? 手を離して!! 俊の口からお米が垂れてる！」

フェイトの慌てた言葉ですんなりと手を離してくれるヴィヴィオ。

「パパー、だいじょうぶー？」

「うん、大丈夫だよ。 ちよつと首に痕がついたようなきもするけど……。 ありがとな、ヴィヴィオ。 なのはもヴィヴィオを怒らない

でくれよ、俺がボーつとしたのが悪いんだしき」

「うっ……娘つてずるい……。 わたしも小っちゃくなれば……」

「な、なのは？ だ、大丈夫？ そんな非科学的なこと考えちゃダメだって」

「わ、わかってるよそれくらい。 でも……ヴィヴィオにとつても甘



だ

いまなのはとフェイトとかかわったら確実に骨が3本はもって逝かれる。なんか経験からしてわかる。何年俺が幼馴染として隣でストーカーしてると思ってるんだ。

だからこそ、俺はヴィヴィオの口を塞ぎながらごく自然な動作で席を立つことにした。

「さくって、風呂にでも入ろうかなー!」

いつの間にかバインドで足を固定されていた。

「あ、あれ?」

「俊くん、ご飯が残ってるよ。残しちゃダメだよ」

「そうだよ俊。席に座って食べる」

「……はい」

なのはとフェイトが自分の分の料理を食べながらも、俺に席に着くように促す。それに俺が逆らえるはずもなく、ゆっくりと座り、箸を持ち直す。……完全に食欲

がなくなってしまった。……どうしよう……。

しかしそうはいっても、ここで俺が食べないことにはヴィヴィオに示しがない上に、食材に申し訳ないのでゆっくりとスローペースで食べていくことに。

「ところで俊くん」

「ん? どしたのなのは」

「年上と年下と同年齢なら、俊くんはどれを選ぶ?」

「……えーっと、それ……なんの意味があるの?」

「いや、とくに理由はないけど。一応、ハッキリさせておこうと思っ  
て」

目を合わせないまま、告げるなのは。

意図はまったくもってよくわからないけど、とりあえず考えてみる。

年上というと、桃子さんやリンデイさん、あとクイントさんも入るよな。まあ、年上は甘えることができるし、正直ちよつといいなく、とは思ってしまう。……いや、そもそも桃子さんやリンデイさんだ

と年が離れすぎている気がするな。 まあいいや。 美人だし、20代でも通用するし。

年下は、嬢ちゃんやスバルくらいでいいんだよな？ ヴィヴィオやキヤロだと年下すぎる気がするし。 うゝむ……正直、年下と考えたときの対象がバカすぎて何の感想もでてこない。 いや、年下も可愛いけどさ、あいつら常時発情してるようなもんじゃん？ なのはやフェイトが発情して、一日中やるみたいなの展開ならいいけどさ、あいつらとじゃなんか雰囲気を出せる自信がない。

『俊さん！ そこからここにインサートです！ ほら、カモン!!』

……最悪勃起不全になりそう。 泣きながら腰を振ることになりそう。 もしくは挿入した瞬間、エナジードレインとかされそう。

最悪の場合、俺のことをなのはだと脳内で設定しそうで怖い。

というかもとより――

「同年齢一択なんだけど」

もつというならば、なのはとフェイトなんだけど。

「そう。 ……よかった」

「うん、なんだか安心したね」

俺の答えを聞いて、なのはとフェイトがほっと一安心したように二人で笑い合う。 これはアレか？ 大好きな幼馴染を取られまいとしての行動ということか？

まったく、二人とも可愛らしくていじらしいなあ。 どうせアレだろ？ いつもツツケンドンな態度だからいざというときに恥ずかしくて、チラチラと俺のほうに視線を向けちゃうってやつか。 そうなのか。 やれやれ、残念だか俺は鈍感男なんてもんじゃないからな。 もう二人の気持ちに気付いちやっただよ。

笑い合っていたのはとフェイトが俺に笑顔を向けてくる。

まったく、ごめんな二人とも。 二人の気持ち、ちゃんとわかってるよ。

「それじゃ俊くん。 年上ものと年下もののエッチな本は全部処分しておくね！」

まさかチラチラと向けていた視線が俺の後方にあるエロ本だったとは……。

二人の気持ちに気付いたところで、どうすることもできない俺だった。

☆

「さらば参考書。俺はなのはとフェイトがいればオカズに困ることはないんだ。わかってくれ。あ、でもやつぱり買おう。二次元には二次元の素晴らしさがあるしな」

なんとか夕食を食べきり、沸かしていた風呂にはいる。ちなみに将来的に嫁になる二人は、現在庭で嬉々として俺のエロ本——もとい参考書を燃やしている最中である。まさか本当に、幼馴染系や同級生系を残して年上と年下の参考書が処分されるとは……。どうやら、俺は二人の行動力を見縊っていたらしい。

「それにしても……戦闘機人かー。なーんでナカジマ夫妻は俺にこんな話をしたんだか。それもスカさん達には内緒で」

『上矢俊君、キミの噂は八神二佐から耳にタコができるくらい聞いているよ。いつもいつも嬉しそうにしゃべるからね。八神二佐の話の内容の7割はキミのことだよ』

俺を強引に連れ出し、スカさんハーレムから遠ざけたあとに最初に放った言葉だ。

それにしても、はやては俺をどれだけバカにすればいいんだ。アレだろ、俺の噂の元凶は絶対お前だと思ってる。噂を流すなら、もつとちゃんとした噂を流してくれよ。イケメンで優しい男とか、そんな感じの噂を流してくれたらいいのに。

「結構フレンドリーに話されたから、俺もついついフレンドリーに接していたところにあの話だよ」

『ところで上矢君。戦闘機人というものを知っているかい?』

「あのスカさんハーレムの奴らが全員戦闘機人とかいう存在だった?」

まあ、たしかにいまにもエヴァに乗り込みそうなスーツ着てたけど

さ。だからって戦闘機人っ

て、戦闘機人って——なあ？」

誰にともなく呟く。

人の体に機械ブチ込むなんてさ。ようするにあれだろ？ 機械

で腹からガトリングとか出しちゃう改造ネコの間人verってこと  
だろ。スカさん暇人だからってそんな

ことしちやダメだろ。

「しかし問題は——なんでそんなことを俺に話したかなんだよな。

ナカジマ夫妻には悪いけど、お兄さん力とかないからなんにもできない  
いっつうの」

あまり管理局のことは詳しくないのでよくわからんが、もしかしたら  
戦闘機人ってだけで逮捕されんのかな？ いや、でもそこまではな  
いだろ。……うーん、でもやっぱり後ろ盾くらいは欲しいところだ  
よな。

「ここは……はやてに相談してみるか」

なんだかんだいって、こういうのははやてが一番頼りになるんだよ  
な。

きつと、いい案を出してくれるに違いない。

ほんと……はやてには頭が上がらねえ。俺が頭上がる人物のほ  
うが少ないけど。

とりあえずの指針は決まったし、そろそろのぼせそうなので風呂か  
ら上がるうと、出入口であるガラス扉に目を向けると、なにやら小さ  
なシルエットがもぞもぞとしていた。どうやら衣服を脱いでいる  
ようだ。隣には、鳥類特有の細い足に人間では考えられない口の形  
をしたシルエットをした物体もいた。

というか、この家で小さいシルエットといったら、一人しかいない  
わけでありまして、いまこの場でその子が入ってくると今度こそリア  
ルに遺言を書かないといけなくなっちゃうぞ。

「ヴィ、ヴィヴィオ……？ お風呂はいるのか？」

『あつ……パパ……？』

「う、うん。パパだけど、お風呂はいるならちよつとまってくれ。

「パパ、いますぐ出るから——」

待っててくれ。そう言おうとしたところでガラガラと引き戸が開く音と、誰かが入ってくる音。そしてぺたぺたとガーくんが入ってくる音が聞こえてきた。

「やつ……あの……ヴィヴィオ……？」

突然の事態に頭が正常に働かない。というか、ヴィヴィオが漏らしたときと同じくらいパニックになる。

きつと皆はこう思うだろう。『こいつ脆いな』と。しかしながら言い訳をさせてくれ。

「えへへ……。あのね……パパ。——おふろいっしょにはいろいろ……？」

裸の娘を前にして冷静でいられるほど、俺はまだパパ力が高くないのだ。

## 62. 恋の病

いまどこで何をしているかサツパリわからない父さん。あなたは俺と一緒に風呂にはいるとき、よく『こうすれば絶対強くなるから！』と行って、年端もいかない俺を風呂で溺れさせようと思いましたね。そのたびに母さんに殺されかけているのをよく覚えています。さて、そんな父さんに聞きたいことがあるのですが——娘と風呂にはいるときってどうすればいいの？

現在の状況

俺・・・かろうじてタオル一枚でマルフォイを隠している状態

ヴィヴィオ・・・全裸

ガーくん・・・タツプダンス中

おい、そのアヒル。ちよつと空気読め。ぺちぺちうつせえぞ。

少しだけ狼狽えながらも、ガーくんを無視して俺はヴィヴィオを見ることにした。ぷつくりとした淡いピンク色の乳首に、いまだ毛が生えていない平地。きつと初潮もきてないだろう。その頬は、若干朱に染まつており、笑顔なのに、5歳なのに、なんだかもう少しだけ年をとった子どもと対面しているようである。

「と、とりあえずヴィヴィオ。ほら、湯船に浸かりなさい。そんな恰好でいたら寒いでしょ」

極力ヴィヴィオの裸を見ないようにしながら抱く——するとヴィヴィオは俺の顔面付近にガバツと抱きついてきた。

「つくかまくえたー！」

ヴィヴィオは体重も軽いので、体には負担がかからないが——抱きついた場所が悪かった。

父親が息子を高い高いの要領で湯船に浸けるように、俺もヴィヴィオを持ち上げたときに抱きついてきたのだ。

「ヴィ、ヴィヴィオ……？ おっぱいがパパの顔面に……」

「きゃー！ パパのえつちいー！」

ヴィヴィオは笑いながら、キャツキャツキャツとはしゃぐ。



……なんというか、この反応をみていると、さつきまで変なことを考えていた俺がバカらしく思えてきた。なに娘に動揺しているんだ。バカか俺は。

深呼吸を一つして、再度気持ちを締め上げる。いまの俺はヴィオオのパパ。そして娘と風呂場でやることといったら——体洗いっこだ！

「ヴィオオ、ヴィオオはいつつもママ達に体を洗ってもらってるのか？」

「うん！ あ、でもねでもね！ ガーくんはヴィオオがあらってあげるの！ いったい、フェイトママがガーくんをあらおうとしたんだけど……ガーくんヴィオオいが

いにされるのいやなんだって」

「ガーくんアラツテイイノヴィオオダケ！」

「なんとという騎士道っぷり……。ちよつとすげえや」

ブレないな、ガーくん。お前にならヴィオオを任せることができるよ。へんな虫がいたら人知れず殺してくれよ。

俺のアイコンタクトが通じたのか、ガーくんがビシリと手を親指を立てるような動作をする。

「まあ、いいや。それじゃ、きょうはパパがヴィオオを洗ってあげちやうよー」

「え!? ほんと!?」

「うんうん。それじゃ、髪から洗おうね」

ヴィオオを風呂イスに座らせ、俺は片膝をついてシャンプーを取る。2・3ノズルを押した後シャンプーを手に馴染ませヴィオオの髪を洗っていく。ゆつくりと頭皮をこするように、決して傷つけないように気を付けながらわしゃわしゃと洗っていく。

「きもちい？」

「うん！ あわさんたくさん！」

「そうだねー、あわさんがいっばいだねー。ほーら、山ができたぞー！」

「しゃきーん！」

両手ですくうようにヴィヴィオの髪を洗いながら、丁度中心にくるところの髪の周辺を束ね、竹とんぼを飛ばす要領でくるくるとこすつていく。するとヴィヴィオの髪はタワーのようにビヨーンと伸びてちよんまげのようになる。

「それじゃ流すから目を瞑ってー」

「はーいー」

ヴィヴィオが目をぎゅつと瞑つたのを確認して、お湯をすくいゆつくりとかけていく。そのときに綺麗に泡が落ちるように、手も同時に動かして泡を刈り取る。

シャンプーをしたあとはリンス。

「いつもリンスはする?」

「うん! ママたちがやってくれるのー!」

「そっか。俺もママたちと入りたいものだ」

まあ……できないわけだが。

リンスを手に馴染ませ、とりあえずシャンプーと同じ要領でヴィヴィオの髪を梳いていく。あまりリンスは使わないので、正直ちよつとわからんが……きつとおそらくこんな感じだろう。

「はーい、ヴィヴィオ。目を瞑ってー」

ヴィヴィオが目を瞑つたのを確認して流す。

さて……次は体か。

うくん……体ねえ。 どうしようか……やっぱり洗ったほうがいいよなあ。 いまさら体だけ洗わないってのは色々と問題がありそうだし。

そう思っていると、ヴィヴィオがこちらを振り返っていた。 手には体を洗うためのスポンジとタオルが。

「ああ、ごめんなヴィヴィオ。 いま体も洗ってあげるから——」

「ヴィヴィオがあらってあげるー!」

「……え?」

「いつもね、ママたちとあらいつこするの! だからパパもしよー?」  
「いや……パパはもう体洗ったから大丈夫だよ。 それよりヴィヴィオの——」

「だーめー」

ヴィヴィオからスポンジとタオルを取り返そうとしたが、ヴィヴィオは自分の体を割り込ませてスポンジとタオルを俺から遠ざける。

うーん……流石にヴィヴィオに体洗わせるのは色々とマズイ気がする。なんとというか……フラグな感じがしてならない。

だからといってここで俺が無理やりにとつたらヴィヴィオは泣いちやうかもしれないし……。

「はあ、それじゃ……前は色々と本気で危ないことになりそうだから、背中を洗ってくれないか？」

「はーいー」

手をあげながらヴィヴィオは俺の後ろに回り込む。前は俺の大事なポコチンが控えているし、できればヴィヴィオにはそういったものを早い段階で知ってもらいたくない。俺もなのはもフェイトもヴィヴィオには健全に生きてほしいのだ。既にアニメやゲームに浸ってるのでなかなか難しいかもしれないけど。

「それじゃいくよー？」

「はーい、よろしくー」

背中に石鹸をつけたタオルの感触が伝わってくる。こしこしととても弱い力でヴィヴィオが一生懸命俺の背中を洗ってくれる。

ああ……なんかいいな、こういう娘

とのコミュニケーションは。

「パパー？ きもちいいー？」

「ああ、とつてもきもちいよ」

「えへへ……」

俺の答えに満足したのか、ヴィヴィオは笑顔満開で俺の背中を洗っていく。力はまったく弱くて、お世辞にもうまいとはいえないけども——なんだろう、ちよつと涙が出てくるほど嬉しい。なんだかなあ……俺って意外と涙脆いのかも。

自然な動作で涙を拭う。しかしタイミングが悪いのか、ヴィヴィオにその涙を見られていた。ヴィヴィオちゃん、いちいち俺の顔色を見なくていいからね？

「パパー、だいじょうぶー?」

「うん、大丈夫だよ」

「でも、ないてたよー? やっぱりぼんぼんいたい?」

そういういながら、心配なのか俺の膝に座るヴィヴィオ。ちよつとこの体制はヤバイ。めちやくちや洒落にならない。

流星にヴィヴィオで勃起するほど俺も人間終わってはなないけれど、なにかの拍子に息子を刺激されでもしたら――

俺の脳裏に浮かぶ最悪のシナリオ。エロ本ではたまにあるけど、現実ではありえない光景。

「い、いかんいかん!? ヴィヴィオ、流星にそれはダメだって!!」

「ぎゃつ!」

迷いも躊躇いもなくヴィヴィオを強引に引き離す。しかしその拍子にヴィヴィオはタイルに倒れてしまった。

「す、すまんヴィヴィオ!? だ、大丈夫か!? うおつ!」

慌てた俺はタイルが湿っていることにも気づかず足に力を入れたため――滑ってしまい、結果的にはヴィヴィオを押し倒すような恰好になってしまった。

沈黙が訪れる。

「ヴィ、ヴィヴィオ……これはその……不可抗力というもので……」

なにを娘相手に慌てているんだろう。というか、そもそも俺がどけばいいのだが。しかしながら、あまりにも風呂場に居すぎたためか若干頭がボーつとしてしまい、1テンポ動作が遅れてしまう。

そんな俺の体を知ってか知らずかわからないが、ヴィヴィオは目をとろんをさせながら、その小さな手で俺の顔を触ってきた。それはいつかフェイトと俺が危ないことになりそうなきにみた、フェイトの目と同じであった。

「パパ……」

「えーつとヴィヴィオ? ちよつとパパ頭がボーつとしてるから、できれば自分で抜け出してくれないか? あ、そのまま上に抜けてくれよ。下は色々とマズイから」

「パパ……」

話を聞いてくれ、我が娘よ。

そろそろ腕の限界が訪れてきた。腕がぶるぶるいつている。

あー、このままヴィヴィオに倒れてヴィヴィオが怪我してそれによつて俺が二人に怒られて殺されるのかー。

そんなことを考えてしまう。まったくもつてついてない……明日から帰省だというのに。

ガラッ

「……ん？」

「フェイトちゃんはヴィヴィオの回収を、あとガーくんも。わたしは俊くんにお説教するから」

「わかった。できるだけボコボコをお願い」

「任せて」

目にも止まらぬ速さで、フェイトが俺の下にいるヴィヴィオを拾い上げ、俺の顔面に膝を華麗に入れてから外に出る。そしてヴィヴィオの体を綺麗にふきあげ、どこかへと去って行った。その後ろをガーくんがぺちぺちとついていく。

後に残っているのは、俺となのはだけ。

……助かったような助かってないような……。でも、俺は何も悪いことはしてないはずだし……叩かれるようなことはないはずだ！

「ありがとうなのは。とりあえずのぼせそうなので、そこをどいてくれないか？」

☆

「ありがとうなのは。とりあえずのぼせそうなので、そこをどいてくれないか？」

こ、この男……！ よくもいけしやあしやあと……！

わたしの目の前には、タオルで大事な部分を隠した幼馴染がヘラツとした顔で立っていた。心なしか、ちよつと安堵したような笑顔である。大事な部分が隠れてて私も安堵してる。

それにしてもこの男、わたしとフェイトちゃんが庭で本を燃やして

いる間にヴィヴィオとお風呂にはいるなんて……いったい何を考えているんだらう？

「あー、ちよつと話なら後で何回でも説明するから、まずは風呂から出してくれ」

そういつて俊くんが横を通り過ぎようとした。俊くんが通り過ぎようとした瞬間、自分でも驚くほどの速さで俊くんの腕を掴んだ。驚きこちらを見る、そんな俊くんを横目にわたしは強引に元の位置に戻らせた。

「あ、あのー……なのはさん？　ちよつと本気で頭がぼーつてしてるのですが」

「とりあえず……座ろうか？」

「えつと……なんで？」

疑問の声を上げる俊くんの足を強引に払う。それをひよいと片足を上げて回避する俊くん。

「……………」

なんともいえない空気が辺りを支配する。

……ちよつとだけ恥ずかしい……。いや、だって普通ならさ、これがアニメとかだったら転ぶはずだね？　なんで回避するのこの人。本人だって、回避しちゃったから『うわあ……どうしよう……』みたいな顔してこっちの様子窺ってるじゃん！　だったら倒れてよ！　もう！

気を取り直してもう一回足払いをする。

シュツ（なのはの足払い）

ひよい（俊くんが避ける）

「……………」

な……なんでこんなときだけ無駄な身体能力を使うの……！

我慢できなくなったわたしは——踵落としを俊くんに喰らわせて強引に倒した。

思いつきり頭をタイルに打った俊くん。

「いっつ……お前！　いくらなんでもそれはやりすぎ——」

「しゅ、俊くんが悪いもん！　なのはを無視してヴィヴィオとお風呂

なんかはいつて——きやつ!？」

「え!?! ちよつ!?!」

タイルがびしょびしょに濡れていたらしく、わたしは俊くんに詰め寄ろうした瞬間に足が滑り、ついきましたがた俊くんが転んだところにわたしも転ぶこととなった。

「……こ、これはその……」

意図せずして、先に倒れていた俊くんがわたしを抱くような姿勢になり、傍から見たらわたしが俊くんを襲っている構図と呼ばれても文句が言えない体勢になってしまう。

丁度わたしの下腹部をもう少しだけ下ろせば俊くんの……その……だ、大事なところに……あたってしまふ……ような体勢に。

俊くんはのぼせているのか、顔をとても赤くして早口にまくしたてる。

「こ、これはその、アレだよ! な! は、早いとこ出ようぜ! 俺もあのぼせちゃって大変なことになりそうなんだ!」

と、俊くんは言うだけ言って私をどかそうとしない。

これは……ほんとうにのぼせちゃってるのかな……?」

「そ、そうだね! ……こんなところを誰かに見られたら誤解されちゃうし……」

……べつに、誤解されてもいいのでは?」

そんな考えがふと頭によぎってしまった。

俊くんは、いつも不敵そうでもできそうに見えるけど、その実、わたしの知っている人の中で一番弱い人間だと思っている。

だからこそ、俊くんはいつも消去法を使っているのだ。 対策を立てているのだ。 あのカカみみたいな行動も、そんな消去法の一つだと思ふ。 あのはやてちゃんできえ、俊くんの用意周到さと狡賢さなら敵わないみたいだし。

だけれども、俊くんはこういった自分が予想していなかったトラブルというものに弱い、とてもつも弱く弱い。 きつと、わたし達の誰かが人造人間で、人間と機械の半々の存在だと知ったら、俊くんは少なからず動揺すると思う。 わたし達には見えないところで、動揺す

るんだと思う。

「な……なのは？」

ほら、いまも動揺している。ちよつと心臓に手を当てれば、鼓動の音と速さがいつもの何倍も速いのがわかる。

無意識に俊くんの髪を撫でてしまう。

そして俊くんは臆病だ。わたしは俊くん以上に臆病な存在を知らない。俊くんが自分の考えれる限りの対策をするのもその証拠といつても過言ではない。

そして、だからこそ——俊くんは一步を踏み込んでくれない。このへたれ！

わたしは浮かせていた腰をゆっくりと下ろす。

「……んっ……あっ」

「お、おおおちつけなのは!! お前までのぼせてどうするんだ!!」

「う、うん……なんだか、なのは……のぼせちゃったみたいなの」

腰だけじゃなく、支えていた両手さえもゆっくりと折り曲げて、俊くんに全体重を預ける。

「だ、大丈夫!! いまフェイトが来てくれると思うから! それまで我慢しろよ!!」

俊くんがわたしを両手でしっかりと抱きながら、わたしの意識を保とうと声をかけてくる。……頑張っておしつけてるのに、なんでこの人は気付かないの? いや、わたしの身を心配してるから嬉しいけど……。

「俊くん……ごめんね、なのはもう……頭がぼーつとしちゃって……」

「や、やばいのか!! もう意識がやばいのか!!」

俊くんの頭も相当だよ……。

そう心の中で思っていると、何か固いものがわたしの……大事なところに当たった。

ふと彼の顔を見れば、ものすごく気まずそうな顔をしている。

「えっと……すまん、なのは……。その、お前の顔を見てたら……」

え?! や、やっぱりコレはアレなの!! お、男の人つてのぼせてて



もこうなるんだ……。

「う、うん……しょうがないよ」

いざ本当に押し付けられると、その……体が固まってしまふ。やっぱり恥ずかしくって、顔がタコのように赤くなりそう。

まずいと思ったのか、俊くんが体の位置を変えようとする。

「あつ、んっ……だ、だめ……いま変えちゃダメ……！」

「いや、でも……そうしないとなのはアレと俺のとが——」

「だ、だから……俊くんが動きたびに……こ、こすれて……」

い、いくら下着をはいているとはいえ……その……か、かんじないわけじゃないし……いま動かれると、本気で危ない……

「で、でも、我慢して動かないと——」

「な、なのはが動くから……！　俊くんはじつとしてて」

「お、おう……」

そして固まる俊くん。　こ、これなら……だ、大丈夫なはず。

「そ、それじゃ……なのはが動くから、俊くんはじつとしててね……？」

こくりと頷くのを確認して、わたしはできるだけゆつくりと俊くんから腰を浮かそうとする——が、あまり長くいすぎたためか、手の力がまったくはいらず、少しばかり腰を浮かすことしかできなかつた。

「あつ、だめっ、あ、あたって……」

少し程度の浮かしでは、どくことなどできず……あ、アレもあつたままである。

このままではいたずらに体力を消耗するだけなので、先程の位置に戻ること。

「んっ……！」

戻した拍子に、俊くんの、だ、大事な部分と、わたしの、だ、大事な部分が上下しこすれ、その拍子に痺れたような感覚を下腹部が覚えた。　少しだけ、ビクツとなる。　体の奥からは熱い何か駆け上つてきて——

つて、う、うそっ……!?　そ、そんなわけないよね……?

しかしいまは確認を取ることができないうえに、本格的に頭がまわらなくなってきた。

そして先程と同じ体勢に戻る。

「えへへ……わ、わたし……頭が回らなくなってきた……」

「……俺もう、気分悪くなってきたんだけど……」

……女の子が抱きついてる状況で、気分が悪くなるってどういうこと？ そんなに叩かれないの？

「ねえ、俊くん？　なのはのこと、好き……？」

「何度も言ってるじゃん。あ、ちよつとまって、本格的にヤバイかも」

俊くんは具合悪そうな顔をしている。

けど、こつちだつて本格的にヤバイ。早く勝手に動くこの口を止めないと……！

「それじゃあ……もういいよね……？　ずっと待ってたんだし、それに俊くんが悪いんだよ……？　なのはをこんな気分にしたのは俊くんのせいだもん……」

もうやめて!?　わたしの口さん勝手に動かないで!

わたしの意識と制御の頑張りも虚しく、口はどんどん動く。

——でも、これでいいのかも。だつて、意外と俊くんって人気者だし、狙ってる人とかいそうだし、だつたらわたしが——

「俊くんのデバイスを私の中でカートリッジロードさせて、スターライトブレイカーを撃ち込んで!!」

もう死にたい

☆

「終わった……完全に終わった……。もう管理局の仕事も辞めたくなってきた……」

あのセリフの後、俊くんは『スバルや嬢ちゃんよりもやべえ』と言いながら腹筋が攣り、私は無我夢中で逃げてきた。

どんな人生を歩めば、あんな告白の仕方が出てくるのか。もうな

んというか……翠屋継ごうかな……そうしたら、デバイスとかの単語なんて出てこなくなるだろうし。

「それに……、はあ……」

なんか……俊くに負けた気がする。下着もアレなことになってたし。いや、完全にわたしの自爆だけどさ。

「はあく……もうお嫁にいけないよ」

「どっちかというと、あいつが婿になるんじゃねえのか？」

「……へ？」

眩きに返す人物がいたので、慌てて顔を上げると自分のマンガを俊くんの部屋に置きに来たヴィータちゃんも、またあらたなマンガを抱えながらこっちをみていた。

「無職のあいつは婿になるしか道はねえだろうし。まあ、誰がもらうのかは知らないけど」

「む、婿？」

「え？ だってそうじゃねえの？ 婿になって、翠屋だったか？ ここで働くんじゃねえのか？ あー、でもなのは達が此処にいる間はあいつはずっと此処にいるわけか。面倒だな、どうにかしてあいつだけさっさと消えてくれればいいのに」

む……婿……。た、確かにその手があった、というかその手しかないよね。

だって、俊くんはわたしがいないとダメダメさんだし、無職なんだから！

「た、高町俊……ちよつといいかも」

「？ 病気にでもなったのか？」

### 63. 帰省の朝

『悪い。はやてが夜中までゲームしててまだ起きてないから、お前らとの集合時間には遅れると思う。一応、新人たちはこっちに連れてきてるし、はやてが起き次第あたしらも海鳴に行くからそっちはそっちで行っててくれないか?』

「まあそれはいいけど、ほんと俺たちってチームワークないよな」

『否定はしない』

「新人たちもそっちにいるなら、もう皆バラバラのタイミングで帰ることになるか。お前らは海鳴の八神家に行くの?」

『まあ……そうなるかな』

「じゃないと流石に高町家もキツイからなく。でもほとんど高町家にはいるんだろ?」

『そりやそうだろうな。お前が家を解放してくれるなら話は別だがな。新人達も行きたいらしいぞ?』

「おいおい、勘弁してくれよ。流石の優しくしてカツコイイパーフェクトな上矢俊さんでも家の解放は無理だ。新人達にも言つといてくれ。あと、スカさん達とおっさんは夜にリンディさん達と一緒にくるってさ」

『あたしも家の解放が無理なことくらいはわかってるけどさ。まあわかった、それじゃ海鳴でな』

「おう、それじゃな」

携帯の電話終了ボタンを押して、作業に戻る。トントンとリズムよく小松菜を切っていると、後ろに誰かの気配を感じたので振り返る。

「……おはよう……」

「えつと……おはよう、なのは。……寝不足?」

「ちよつとだけね……。俊くんは寝不足じゃないの?」

「いや……俺はそこまでじゃないけど」

後ろにいた人物は、俺の幼馴染である高町なのはなんだが……どうにもちよつと寝不足気味らしく目の下に軽くクマがあった。

「……なんで寝不足じゃないの?」

「ごめん、意味がわからない」

確かになのは大好きストーカーとしては常になのはと同じコンデイションであることが望ましいのだが、まさか帰省の前日に眠れなくて寝不足になっているとは思わなかった。お前は遠足を楽しみにしている小学生か。

「……不公平」

なのははそれだけ言って冷蔵庫の中から牛乳を取り出してコップに注ぎぐいぐいと一気飲みしはじめた。

……これはまずい。何故だかわからないが拗ねている。

「あつ、そうだなのは。昨日さ、俺のぼせて風呂で大変なことになってたみたいだけど……ヴィヴィオには見られてないよな?」

「ゴフオっ!」

「うわっ!?! きたな!?!」

まさかこの年になって幼馴染から牛乳をかけられるとは思わなかった。しかも顔面に。疑似顔射体験だ。

「お前……よくもやりやがったな! 俺だってお前の顔面を白濁液で汚してやろうか!?! ごっくんさせろぞ」

「……覚えてないんだ」

「へ?」

「だから、昨日のお風呂の出来事覚えてないの?」

俺の冗談のような本気も無視してなのはが問い詰めてくる。 覚

えてないのかって――

「いや、正直あまり。お前に足払いをかけられて……滑って転んで

……体が重なって……」

「なんか卑猥だからその表現はやめて」

「最後らへんは本気で気持ち悪くてさ。 なんか吐きそうだったのと、お前が変なことを口走って笑ったのは覚えてるんだが……うん」

思い出せそうな気はするんだけどなあ……。

そうして首を左右に揺すっていると、なのははほっと一安心したよ

うに胸を撫で下ろしていた。

「あ、覚えてないならそれでいいの。そっちのほうが都合がいいし」

「あつ、そうそう思い出した」

「え?!」

なのはが固まるのをよそに昨日のことを思い出す。断片的ではあるものの、多少ながら覚えていることを繋げて――

「えつと、スターライトブレイカーをカートリッジフルで撃ち込んだらどうなる? みたいなことだったよな。あれ? 違ったかな?

いや、でもスターライトブレイカーって単語は覚えてるんだよね……」

たしかなのはもそういつてたはずだし。

『これは、セーフととらえたほうがいいのかな……それともアウトととらえたほうが……。もういつそのこと、スターライトブレイカーで脅したほうが』

「やめて、なにがアウトでセーフかよくわからないけど、スターライトブレイカーで脅すつてのは完全にアウトだと思うから」

この娘、怖い。

「まあとにかくあまり覚えてない。それとさ、八神家と新人たちは遅れて海鳴行っちゃった。なんでもはやてが夜中までゲームしててまだ起きてこないんだつてさ」

「ふふつ、はやてちゃんらしいね」

「あいつらしいといえばそうなんだけどさ」

なんだかなー、どうせだったら皆で翠屋に行きたかったかな。

「ところで俊くん。朝食はなにかな?」

なのはが俺の手元を覗き込みながら聞いてくるので、少し横に移動し答える。

「シンプルにお茶漬けと出し巻き卵と和え物にしようかなーと思ってる」

「ふむふむ……手伝おつか?」

「うーん、それじゃネギを切ってくれる?」

「りょうかーい」

包丁を取り出しまな板に置いてあるネギを切りだすなのは。

……怪我しないよな？

「そんな心配そうに見なくつても大丈夫だってば。　どれだけ心配性なの？」

「好きな人を心配してなにが悪い。　恋する者の特権だろ」

「はいはい、それよりもフェイトちゃん起こしてきてよ。　ヴィヴィオと一緒に寝てるみたいだし」

「フェイトがこんな時間まで寝てるのか？　なかなか珍しい。　まあそろそろ朝食もできるし、起こしてくるよ。　あ、ネギを切ったらもうなにもしなくていいから」

それだけいってエプロンをはずしフェイトとヴィヴィオが寝ている部屋に向かった。

早く戻らないと……なのはちゃん料理スキルないしな。

☆

コンコンと部屋をノックするも、フェイトとヴィヴィオのぱつきんコンビは寝ているのかこちらに返事をよこしてはくれなかった。

「よし、二人とも寝てるな。　これで堂々と部屋に入る口実が出来たわけだ。　まあ、流石になにかあるなんてことはないと思うけどさ」  
失礼しまーす、そう小さく声を出しながら室内にはいる。　相変わらずなのはとフェイトの匂いがするいい部屋だ。　こうやって全裸になれば——二人が抱いてくれるような錯覚に陥ってしまう。

服を脱ぎ、両手を左右に大きく広げ、ターンを決めながら二人の匂いで肺を満たす。　まるでなのはとフェイトにこの裸を見られてるような感覚と抱いてくれているような錯覚が俺の脳を揺さぶり、麻薬のように蕩け去る。　これが二人の魔力というわけか。

「ああ……フェイトに見られてるようで興奮するぜ」

「……えっと……こっちはげんなりしてるんだけど」

見られてた。　比喻でもなんでもなくガン見されていた。

いそいそとパンツと羽織りものをはおりながらをフェイトに爽や

かな挨拶をすることに。

「おはようフェイト。今日も可愛いよ」

「おはよう俊。今日も気持ち悪いよ」

これが朝の挨拶だなんて認めない。こんな鮮やかで爽やかな挨拶なんて認めない。

フェイトと挨拶しているともぞもぞと布団が揺れ、ひよこりと寝ぼけ眼でぼけっとしていているヴィヴィオと目があつた。フェイトは少し前から起きていた様子だけど、ヴィヴィオは完全にいま起きまじたって感じた。

「パパ〜……?」

「ヴィヴィオー、おはよー」

「おあよー……」

素晴らしいながら抱きついてくるヴィヴィオを柔らかく受け止め抱っこする。寝起きのヴィヴィオは甘えん坊である。……寝起きじゃなくても甘えん坊だけど。そんなヴィヴィオにちよつと苦笑を漏らしてしまう。いったい……いつまでこうやってヴィヴィオを抱っこすることができるかな? なーんて、ちよつと考えすぎだろうか。

「オハヨウ! オハヨウ!」

「ガーくんもおはよう。調子はどうかな?」

「ゲンキ! ゲンキ!」

「きや!? ガーくん羽をバサバサしないで!? 羽毛が髪に……」

「……ゴメンナサイ……。ガークンキヲツケル……」

「あ、ごめんねガーくん!? そんなに気にしてないから大丈夫だよ!」  
ばさばさと羽を動かしたことにより、フェイトの輝く髪にガーくんの羽毛がついてしまった。それによってガーくんの声のトーンが下がり若干泣き目になる。それ

に気づいたフェイトが必死にフォローするけど……ガーくんの調子はダダ下がりである。

「そんなに気にするなよ、ガーくん。よくあることだ。そう、俺の



白濁液がフェイトの髪につくのと同じことさ」

「ごめん、その例えの意味がわからない。一度もそんなことないよね」

「大丈夫だよ。のんでもらうから！」

「前提がおかしいっていつてるの！」

「でも……流石にアンモニア臭のする液をかけるのはちよつと……」

「まず液から離れようよ!？」

流石に朝からへビーな内容なようだ。ちよつとフェイトが嫌そうな顔をしている。

「ごめんごめん、今度から聖水と呼ぶから許してくれ」

「問題解決にはなってないけどね……」

しゃがみ込み、フェイトの髪についている羽毛を取りながら謝るもののフェイトにはお気に召さなかったらしい。女心は難しいというものだ。

向かい合う形で羽毛をとっていく。

「いつみても思うけど、フェイトの髪って綺麗だよな。もふもふしたい」

「ちゃんとお手入れしてるからね。もふもふはいつかささせてあげよ。なんだか取りにくそうだね、もう少しよろろつか？」

そう言つて俺の返事を待たずに寄つてくれるフェイト。この気遣いが嬉しいよな。

しばし無言で髪を触り、髪を触られる時間が続いた。

ヴィヴィオは既に俺に抱っこされながら寝始めて、ガーくんはガーくんで一人反省会をしている。

「んっ！ ううんっ！」

そんな時間も第三者の声によって終わりを迎えることとなった。声のした方——扉の前に目を向けると俺のエプロンを着ているのはが包丁を持って立っていた。

「俊くん、ネギ切り終えたよ?」

「ありがとうなのは。けど、できれば包丁は置いてきてくれたほうが嬉しかったかも。心臓に悪いから。いやマジで」

下手したらレイハさん持つてるときより怖い。だって包丁に非殺傷設定とかないもん。完全に殺傷設定だもん。

「あ、ごめん。素で忘れてた」

「転んだら洒落にならないからね。ほんと気を付けた方がいいよ」  
「なのはが包丁を適当な所に置きこちらに近づいてくる。」

「あれ？ ヴィヴィオ寝てる？」

「うん、二度寝しはじめた」

ヴィヴィオの頭を撫でながらなのはに返すと、

「けどもう起こしたほうがよくない？ 朝食もできるし。 ヴィヴィオー、起きないとダメだよー？」

と、その声をかけながらヴィヴィオを起こしにかかった。

「やー……」

たった一言だけ返事して、俺の服を人質と言わんばかりに握りしめながら再度寝始めるヴィヴィオ。

「もー、帰省するんだから早く起きなきゃダメなのー！」

「まあまあ、なのは。 どうせ皆遅れるんだし、もう少しゆっくりしててもいいじゃないか」

「そうだよ、なのは。 ヴィヴィオの寝顔かわいいよ？」

「もー、俊くんもフェイトちゃんも甘いよー。 たまには厳しくしないといけないのにー」

俺とフェイトの言葉に頬を膨らせながら怒るのは。 しかしそういいながら、顔は笑顔である。 わかるぞ、その笑顔の理由。 寝顔のヴィヴィオ可愛いもんな。

しばしガーくんも交えてヴィヴィオの寝顔を皆で見るために時間を費やすことにした。

どうやら海鳴に帰る時間帯は、皆と一緒にそうだ。

## 64. 少しの休憩

『ジャンケン！ ポン！』

「やったー、俊くんの一人負けー！ グ・リ・コ」

「むむっ……俺がジャンケンで負けるとは。しかも一発負け」

青い快晴と、綺麗な空気、燦々と照りつける太陽の元、俺たち家族は朝食を無事に取り先程海鳴市にやってきた。どうせ遅れたから、急いで行く必要もないかもなく、なんてことを話しながら歩いていると階段を見つけたので、現在はグリコの真っ最中である。しかし俺は不調のためか二連続負け。ゲーマーとして恥ずかしい限りである。

さてさて、俺がチョコキをだし他の三人はグーを出したので多少進んでしまったが、まだまだ挽回できるチャンスはある。

ふっ——ここからがグリコの本番だぜ？

「二」グリコのおもちやってなんであんなに購買意欲を駆り立てるのかな？ 私はまだまだその境地にまで達してはいないが、いずれその謎を解くことができるかもしれない。それまではキミにこの暗号を残しておくと思う。大丈夫——すぐに戻ってくるさ」

「これで登り終わっちゃったね」

「俊くんの負けー！ それじゃ荷物お願いね！」

「パパー、ありがとー！」

いつの間にか本番が終わっていた。

いつからグリコはストリーパー仕立てになったのだろうか。そして何故三人とも声を合わせていまのセリフ言うことができるの？

え？もしかして知らないの俺だけ？

「あの……流石にそれはノーカンでは……」

「えー？ なにー？ 聞こえないー！」

なのはがわざとらしく耳をメガホンの形にして上から聞いてくる。

今日のなのはの服装は白のワンピース。胸元に赤いリボンをつけていてこれがなんとも可愛らしい。

フェイトの服装は赤のミニスカチェックにフリルがところどころ

ついている白シャツ、それに黒いネクタイをつけている、このネクタイが適度な長さでなんとプリティ。それとなぜかツインテールにしてる、ツインは大好きなので嬉しい。

ヴィヴィオは俺が前作ったアリス風の服に身を包んでいる。前と変わっている所といえど頭に麦わら帽子を被っているところだろうか。夏は暑い上に熱中症になるかもしれないので、こういった予防はしても足りないくらいである。ああそれと、肩からヴィヴィオよりの可愛らしい水筒を持たせている。ウサ耳の女の子がパンツを見られて怒っている絵柄が描かれている。勿論描いたのは俺。なのはとフェイトには気持ち悪がれたが、ヴィヴィオが喜んでくれているので問題ない。

そしてヴィヴィオの隣にいるアヒルのガーくん。今日も今日とてその純白の白い体をヴィヴィオを狙う不屈き者の返り血で汚れなにか心配である。まあ、ガーくんにはそういった輩は半殺しにしていいと言っているわけなのだが。

そして俺の服装は七分の黒ズボンにオレンジのシャツである。何か羽織るものと思ったわけだが、暑いので止めた。

しかしながら、このなのはのしてやったりみたいな顔はなんか気に食わない。こう……ムカツクな。

「……あっ」

なのはとフェイトの方向をマジマジとみていると——軽い風が辺りを駆け巡り、それによって二人のスカートの中のパンツがみえてしまった。

高町なのは&フェイト・T・ハラオウン、ともに縞パン。  
繰り返す

高町なのは&フェイト・T・ハラオウン、ともに縞パン。

「なのはが縞パンは理解できるが、何故フェイトまぶっ!？」  
「へ、変態!!」

何故フェイトが縞パンなのかについて考察しようとしたところで、空中から——正確にいうならば二人の方向から荷物が飛んできて、それが俺の顔面に直撃した。

「いや……これは完全に俺悪くないだろ。あれか？俺が風の聖痕もってるだけでもいいのいか？もし持ってたら俺の前方に常風波浪注意報に出るくらいの風を起こしてるに決まってるだろ。恋の波をたてちゃうよ？」

「エツチ！スケベ！バーカ！」

ぐぬぬ……！ 否定できない……！

流石魔導師、敵をよく知り尽くしているようだ。

溜息を一つ空気に溶けさせながら、投げられた荷物バックを取る。

もともとヴィヴィオのバックは俺がもっているのだが、これで全員の荷物を持つハメに。

「これもパパの仕事の一つなのかねえ」

それにしても二人とも、俺が縞パン大好きって知ってるのかな？

☆

重い荷物を持ちながら、なんとか高町家にやってきた。いやー、道中は二人とも口聞いてくれませんでしたよ。まったく……ツンデレってのはこれだから困る。

「ヴィヴィオー、ここがママたちのお家だよー？」

「お〜」

ヴィヴィオが高町家を見ながらそんな声を上げる。可愛いにもほどがある。

「まあ、とりあえず入るか」

俺の言葉に三人とも頷いたので、玄関に手をかけ開けようとする――ところで内側から誰かが玄関を開けてきた。

「やっときたか、俊。おかえり、まっただぞ」

玄関の内側から出てきたのは、なのはの兄にして俺の兄のような存在でもある高町恭也さん。ありえないほど強い。なんか主人公属性とかついてそうなほどの強さを有している。

「ははっ、ただいま帰りました。すいません、ちよつと予定ずれちやっつて」

「お前たちが無事に帰ってきてくれたのならばそれでいいさ。それより疲れただろう、翠屋に行く前に休憩していかないか？」

「うーん……」

チラリとヴィヴィオをみると視線が合った。

「ヴィヴィオ、疲れた？」

「だいじょうぶー！」

「俺が疲れたから休憩しよっか」

「俊くん、いまもしかしてヴィヴィオをダシに使った？」

「だって俺だけだと恥ずかしいじゃん。」

「まったく……このアホ幼馴染は……。ただいま、お兄ちゃん。」

お母さんたちからヴィヴィオのことは聞いている？」

「ああ、聞いているよ」

なのはからの問いに答えた恭也さんは、しやがみ込みヴィヴィオの目線に合わせて頭に手を置きながら挨拶をした。

「こんには、よくきたね。俺はなのはや俊のお兄ちゃんの恭也だよ。ここはキミの家だと思って寛くわんいでいってくれ」

「こんには、ヴィヴィオです！」

そんな恭也さんの挨拶にヴィヴィオも笑顔で答える。

「えらいな、ちゃんと挨拶ができて。これもなのはとフェイトちゃんの教育がいいからだろうか？」

「恭也さん、俺を抜かしてますよ」

「よかった……フェイトちゃん！ わたし達、娘をちゃんと育てられてるみたいだよー！」

「うん！ やったね、なのは！」

「なのは、フェイト。俺を抜かしてますよ」

二人で軽く泣きながら手を合わせてる光景は俺も嬉しいが、まさかここで戦力外通告を受けるとは思わなかった。

「ところで、このアヒルは？」

「あ、ガーくんといって、ヴィヴィオのペットです。気を付けてください、ガーくん半端なく強いんで——」

シユバツ

「……ほう。　いまの攻撃を避けるだけではなく、カウンターを決めにくるとは……」

「……イマノハ30%ダトイウコトヲ、ワスレルナ」

何が起こったのか一瞬理解できなかったが、どうやら刹那の間でガーくんが恭也さんはなにかアクションを起こしたらしい。　なんであんたらがハイレベルなバトルを繰り広げようとしてるんだ。

「ガーくん、めっ！」

「……ゴメンヴィヴィオ。　ガーケンキヲツケル」

「えへへ、ガーくんいいこいいこ」

ヴィヴィオに怒られて謝るガーくんの頭を撫でるヴィヴィオ。

まあ、止めたヴィヴィオは偉いかな。

「ミッドにはこんな強敵が沢山いるのか……」

「誤解しないでお兄ちゃん。　ガーくんは別格なだけだから。　下手したら古龍にも勝てちゃうかもしれないくらい別格だから」

ミッド生物の強さに恭也さんが考え込むが、横からなのはが困った顔をしながら訂正した。　うん、ガーくんなら古龍にも勝てそうだから困る。

「あの、お久しぶりです、恭也さん」

「ああ、フェイトちゃん。　いらっしやい、フェイトちゃんも自分の家と思って寛いでくれ。　俊と一緒にだと色々と疲れるだろ？」

「そんなことないですよ恭也さん。　いや、確かに夜の営み的な意味なら疲れますが、まあ僕も腰の振りすぎでちよつと腰痛なんですよね」

「現在進行形で疲れますね」

「どうもフェイトちゃんは乗ってこないようだ。　騎乗位より正常位がいいみたい。」

「まあ、玄関で話すのもアレだから上がっていつてくれ。　美由紀もすぐに帰ってくると思うから」

恭也さん先頭で、久しぶりの高町家に入る。

懐かしいなあ

「かわいいー！ ヴィヴィオちゃんかわいいー！」  
「うわっぷ！ あふー！」

案の定というかなんというか、買い物から帰ってきた美由紀さんはヴィヴィオの姿を見るや否や至る所を触りまくっている。

「あ、このアヒルもなのはたちの家族？」

「ええ、ヴィヴィオ専属の騎士みたいな感じですよ」

「へー」

ヴィヴィオを膝に乗せながら、右手でガークンを触る美由紀さん。

「お姉ちゃん!? ヴィヴィオがきつそうだからこっちに渡して!」

みるとヴィヴィオがあまりの手さばきに、

「あうあうく……」

と、グロツキー状態になっていた。落ち着けガークン。大丈夫だから口からなにかエネルギー波を飛ばそうとするな。どうやらガークン、ちよつと地球に興奮気味なのかな？ 普段はおとなしいのに。それともはしゃいでるだけか？

なのはが強引にヴィヴィオを奪い取り、ヴィヴィオに声をかけながら抱っこする。隣にいるフェイトも心配なのかヴィヴィオの顔を覗き込んでいる。

「それにしても俊くんが娘をねく。やっぱり金髪だからフェイトちゃんとの子ども？」

場の空気が固まった——気がした。

「いや、そういうわけではないんですけど……。まあ、色々あるんです。家族であることには変わりありませんが」

そういうと、美由紀さんはうんうんと頷いて、

「そうだよね、そう言っておかないと色々大変だもんね。なのはとの関係も壊れそうだし、なにより14歳で……みたいなことになってしまうし」

「俺を鬼畜な男設定にするのはやめてくれませんか？」

皆が誤解したらどうすんだよ。



「そうだよお姉ちゃん。 俊くんはそんな人じゃないよ」

「なのは……」

「もつとゴミだよ」

「なのはさん、僕のトキメキ返してもらってもいいですか？」

常に一緒にいたなのはの言葉なので、妙に説得力もあるし。

それを聞いた美由紀さんは、にやにやとした笑みを浮かべながらなのはに耳打ちした。

「ち、ちちちち違うに決まってるよ!? なにいつてるのお姉ちゃん!?」

「頑張ってるね! なのは!」

「だから違うってば!!」

美由紀さんの耳打ちが終了したかと思えば、なのはが立ち上がりながら美由紀さんの肩を揺さぶりながら何かを否定していた。

「なにを否定してると思いますか、恭也さん。 俺の予想だと、『ほんとは俊のこと好きなんですよ!』 みたいな内容を期待しているんですけど」

「それはないだろ」

「ですよね」

はあ……悲しい。

ふとフェイトのほうをみるとフェイトはヴィヴィオに自分のアイステイーを飲ましているところだった。

俺の視線に気づいたのか、軽く手をあげる動作をして飲むか聞いてくるフェイト。 俺も頷くかわりに手を差し出すことで済ます。

フェイトから受け取ったコップでアイステイーを飲む。 うん、うまい。 少しレモンをかけてるのかな?

「つて、いいの俺が飲んで。 ヴィヴィオのアイステイーは——」

既にガーくんが持ってきてるところであった。 このアヒル、誰よりも自分の家感覚で使ってるな。

ヴィヴィオのためにガーくんがアイステイーを作っているのを見ながらフェイトから渡されたアイステイーを飲む。

「俊、これもらっていい?」

「うんいいよ」

自分の分であるオレンジジュースをフェイトに渡す。それにしても、何故恭也さんは俺だけオレンジジュースにしたんだろ？ あれか？ 俺が子どもっぽいからか？ ばかいいえ！ 俺ほどクールで大人な雰囲気を出せる人間なんて——あ、ロヴィータちゃんがいた。ロヴィータちゃんです。思い出したけど、そろそろあいつらも来てるんじゃないか？

そう思った瞬間、ポケットにいていた携帯がバイブ機能で俺に知らせてくれる。

携帯を取り出し、相手を確認。

「もしもし、はやてか？ おはよう」

『おはよー。 もう着いた？』

「いま高町家にいるよ。 どうする？ いまから翠屋行く？」

『そうやなく、皆も八神家に荷物置いたし準備ええで？』

「それじゃいまから翠屋行くか。 まってるぞ、はやて」

『なんかデート気分を味わってるみたいや。 ほな、ちよつとだけアంతタより遅くいくことにしよつか』

「デートじゃないんだし遅れてくるなよ。 甘いお菓子なら待ち合わせ場所にあるし、あの時だってほとんど同じ時間だっただろ」

それから二言くらい言葉を交わして電話を切る。

「さて、翠屋に行くか。 恭也さんと美由紀さんはどうします？」

「俺たちは待つてるさ。 ああ、母さんが遅いって愚痴ってたから気を付けていけよ。」

「うわあー……どうしよ」

何事もなければいいんだけど。

## 65. 翠屋

とことことなのはとフェイトとヴィヴィオとガーくんをパーティーに連れて翠屋まできたものの、どうにもこうにも店内に足を向けられないビビリなひよつとこ。いや、だって桃子さんが怖いもん。

「俊くん、早く入るよー？ ほら、お母さん店内から凝視してるじゃん。なんかめつちやこつち見てるじゃん」

「気をつけるのは。あれは桃子さんではない。モ・モモコだ。

あの生物は人間に擬態し人と性行為をすることによって人類を征服するための兵隊を——」

「人の母親を化け物にしないでくれるかなあ!? とうかしかれつとわたしを化け物扱いたしたよね!」

「大丈夫、化け物でも愛することが出来るから!」

「化け物を否定してよ!」

横でなのはがぎやーぎやー騒ぐが気にしない。モ・モモコの動向のほうが気になる。ぬ!? あやつ……携帯を操作しはじめたぞ？

モ・モモコが携帯を閉じると同時に俺の股間の近くにセツティングしていた携帯がバイブで震えだす。

「あつ……んっ……! とか、やってる場合じゃねえんだよ」

「ヴィヴィオ、あれは友達がいらない子特有の遊びだからマネしちやダメだからね?」

「はーい!」

フェイトが隣で俺と絶交宣言してるように思えるが気にしない。

俺となのはやフェイトやはやてたちの絆を見縊っちゃ困る。なんだかんだで俺が泣きながら謝れば許してくれるほどの絆だからな。

バイブがそろそろ鬱陶しく思い始めたので携帯を取り出し送信者を確認する。

・桃子さん

削除。

「それにしてもおそいなー、はやてたち」

「もうそろそろ来るんじゃない?」

俺の眩きになのはが返してくれたとき、向こうのほうからドヤドヤと団体様がやってきた。 いわずもがなはやて達御一行である。

これはありがたい。 事情を知らないはやてたちは先に行かせて、俺は中心くらいで隠れてやり過ぎせば事足りることである。 世の中つてちよろいぜ。

しかしながらそのためには、はやて達を先に行かせなくてはならない。 しょうがない、ここはシグシグあたりをほめて先に行かせよう。

そう思いながらシグシグ——の隣にいたはやてについつい目がいつてしまった。 薄いカーデイガンがなんとも可愛らしい恰好である。

「はやて、そのカーデイガンかわいいな」

「え? それほんまにいつとる?」

「うん。 そのカーデイガン凄く似合うぞ。 その——ギガンテスみたいな色したカーデイガン」

ゴキツ

「いまのは素な反応だったから素直にムカついたで。 喜んだ自分がバカやった」

くつ……!? あいつの拳がいま見えなかったぞ……!? ば、ばかな!? 純粋な勝負なら俺に分があると思っていたのに……!

「いまのはひよつとこが悪いな」

「あれはしょうがないですよね」

「斬刑に処す」

すいません、一人殺人鬼混じってるんですけど。 吸血鬼でも殺しててください。

はやてが倒れている俺を強引に立ち上がらせ、これまた断りもなく腕を組んでくる。

「バツや。 ほら、早く翠屋にいくで」

「いやまつんだはやえもん!? 俺翠屋に踏み入れたら死ぬ病なんだよ!? いや、マジなんだって!」

「大丈夫大丈夫、死んだら生体ポッドに入れて手元に置いてあげるわ。それに翠屋はアンタのホームみたいなものやろ？　大丈夫に決まって——」

入店

ベちや（ひよつとこの顔に生クリームがかけられる）

「……ごめん。アンタ人を怒らす天才やったな」

そういつてはやては俺の顔に満遍なくついた生クリームを指ですくって舐める。　ついついそのあとを追ってしまう。

「ん？　どうしたんひよつとこ。　マジマジとわたしの顔みて」

「いや、なんでもない」

「も・し・か・し・て・？」

「違うっていつてんだろ！」

「あれー？　わたしはまだ何もいつてないけどなー？　どんな言葉を想像してたのかなー？」

「うっ……!？」

にやにやとした笑みを浮かべながらはやては俺の顔にまだついている生クリームを今度は舌先でチロつと舐めとる。　触れるか触れないかの微妙な距離感と、触れたか触れてないかの微妙な感触が俺の頭を支配する。

「顔赤いで？　外道ぶってる純情くん？」

「う、ううっせえぞ！　お前なんか俺のテクニクで——」

「それじゃ、ここでそのテクニクつてやつをみせてくれへん？」

そういつて俺の胸に手を置きながら、下から見上げるような恰好で、挑発的な笑みを浮かべたまま、軽く舌なめずりをしながらはやてはいつた。

鼓動が加速するのがわかる。　手汗で手が危ないことになってる。それでも、はやてから目を離せない。　まるで魔法でも使われたかのように、はやてにだけ釘付けになっていた。

「お客様、そういつたことは店内では控えてくださいねー。　他のお客様のご迷惑になりますし、その男の子、これからちよつと関節折る予定ですのぞ」

しかしそれも、唐突に俺とはやての間に強引に入ってきた女性の声によつて終わることとなった。

「あ、ごめんなさい桃子さん。 いやー、俊をからかうのは面白くて」

「ふふつ、そんな火遊びばっかりしていると、いつか本気になっちゃったときに炎と化して大変なことになっちゃうわよ、はやてちゃん。 それとも、じつはもう炎に変わる寸前つてどこかしら？」

そうはやてに笑いかけながら、ごく自然な動作で俺の関節を決める桃子さん。 翠屋が誇る美人パティシエである。

「皆もよく来てくれたわね。 なのは、ちよつと皆を大きなテーブルに移動させてあげなさい。 それとケーキも全員分用意してあるから食べて頂戴ね。 私は息子を調教……ちよつと調教してくるからね!？」

「大丈夫よなのは。 俊ちゃんは立派な使い魔として戻ってくるから」

「何する気なの!? 俊くん既に震えてるんだけど!? 全話通して一番震えてるんだけど!？」

なのはの救いの手は届くことなく、俺は桃子さんに引きずられていった。

☆

なのはが呆れ半分、羞恥半分で全員を大きなテーブルに移動させると、そこには小学校時代からの旧友であるアリサ・バニングスと月村すずかがこれまた呆れながら座っていた。

「あいつは……どうしておとなしくできないの」

「まあまあアリサちゃん、あれが俊君の味だと思っし」

「ほんつと……あれといまだに付き合ひがある自分が信じられないわ。 まあそれはいいとして、おかえりなさい」

なのはの方を向きながら笑うアリサに、なのはも笑いながら返事を返す。

「ただいま、アリサちゃん！　すずかちゃん！」

「フェイトもはやてもおかえり」

「ただいま！」

そういつて旧友同士、仲良く手を握り合いながら再会を喜ぶ。

「ヴィータさん、あの人たちって……」

「アリサ・バニングスに月村すずか。　ともになのはやフェイトはやての小学校時代からの友達だ。　ちなみに魔法のことも知ってるぞ」

「なるほど、ということとはひよつとこさんとも友達なんですわ。　凄いですね、ひよつとこさん。　こんなに女性の人に囲まれて」

感心するスバルに、ヴィータは頭を掻きながら答える。

「本来なら、あいつもあの二人同様でここでバイトしながら大学に行くはずだったんだけどな。　まあ、あいつ的にはついていく気満々だったようだが」

「鬱陶しいものだな」

「シグナムー、もうちよつとオブラートに包んだほうがいいわよ？」

シグナムのストレートな物言いに、シャマルは困り顔でそう注意する。　オブラートに包むだけで、止めろと言わない辺り、シャマルもたまに同じ思いを抱くのかもしれない。

シャマルの注意に耳を傾けたシグナムは顎に手をあて、軽く考えた

あと――

「ゴキブリだな、あいつは」

「それ悪化してるわよ」

どうやらちゃんと考えたほうが、ひよつとこの評価は悪い方向に変わるらしい。

「しかしながら、あいつもあれで結構大変な男ではあるがな」

人間形態のザフィーラが悲鳴が聞こえてくる方向に視線を向けながら溜息を吐く。

それに同意するようにヴィータも頷く。

「そういえば少し前にあいつが漏らしてたな。『魔法を使えるだけで天才だ。使えない俺からしてみれば、こんなに羨ましいことはない』って」

「魔法を使えるだけで天才……ですか？」

「世の中には、言葉だけじゃどうにもならないことのほうが多い。あいつは魔法が使えないからな、私達以上に痛感してると思うぞ。」

まあ、そこらへんも含めて今日の『高町なのはパーフェクト教導教室』で質問してみればいいんじゃないか？」

ティアの疑問にそう投げ出すヴィータ。

「けどバカですよ〜ね？」

『バカというかキチガイだけどな』

スバルの何気ない疑問に、守護騎士全員は口を揃えて言った。チームワークは抜群である。

☆

「へー、この娘がなのは達が電話で話してたヴィヴィオちゃんね」

「えっと、こんにはヴィヴィオです！」

「挨拶できるなんて偉いわねー。 やっぱりなのはとフェイトの教育と、神様が人類を陥れるために創ったとまで言われているアイツの姿をみているからなのかな」

「それとはやてちゃんたちのサポートがあるからかもね」

アリサがヴィヴィオを抱きながら、旧友の頑張りについて触れると、さすががそれをサポートしているであろう他のメンバーに目を向ける。

向けられたはやてや守護騎士たちはちよつとだけ照れたような顔を浮かべる。

「しかしまあ……あのなのはがこんなに教え子を持つなんてねー」

「な、なにがいいたいのアリサちゃん？ もしかしてわたしじゃ力不足と思ってるの？ そ、そんなことないからねー！」

「いや、べつにそこまではいいけど……。 それにしても——」



そういつて、新人達をぐるりと見渡すアリサ。そして、ニツコリと笑いかける。

「私の親友は最高の上司でしょ?」

『はい!』

間髪いれずに返事を返す新人達。スバルとティアの声が大きすぎて思わず目を瞑ってしまふほどであった。

そんな中、アリサの膝の上にいたヴィヴィオが誰かを発見したと同時に、膝から飛びのいて男のほうに向かって猛ダツシュを決めてくる。男は——ひよつとはへろへろの状態でありながらも、なんとかヴィヴィオを受け止めることに成功し、ついでとばかりに飛びついてきたガーくんを受け止めることができずに倒れてしまった。

「おうふツ……!? ガーくん、お前の場合飛びつくって言うより、完璧に蹴りにきてる感じだから。飛びつくと跳び蹴りは違うからな」

「パパー、おかえりー!」

「オカエリー!」

「ただいま二人とも。あー、死ぬかと思った。というより、一度死んで転生してきたわ」

そんなことを言いながら、ヴィヴィオを連れてなのは達がまつテーブルに足を運ぶ。

『おかえりなさい』

「ただいまー、つと。おお! アリサにすずかではないか! 久しぶりだなー! 大学どうよ?」

「いや……うん、久しぶりね……大学は順調よ。ねえ、俊?」

「あ?」

「ヴィヴィオちゃん……いまアンタのことをパパって」

「パパだけど?」

「……成程。薬でヴィヴィオちゃんのことを操ってるというわけね……」

「ちよつとまで、どういったらそこにたどり着くんだ。普通に考えて、なのはとフェイトがママなら俺がパパに決まってるだろ。もうアレだよ? パパのいうこと聞きなさい状態だから」

「それ明らかに反抗されてるわよ。 いや、それにしても……えー……」

ひよつとこの隣でニコニコと笑顔を浮かべているヴィヴィオを見ながらアリサは眉根を寄せる。

「でもアンタって基本的にクズじゃない」

「人間なんて基本的にクズみたいなもんだろ」

『ひよつとこさんすげえ、いま平然と私達までクズ呼ばわりしましたよ』

『でもあいつに言われても悔しくないよな』

『ひよつとこさんよりクズじゃないとわかってますしね』

「俊、アンタ……」

「やめる!? その慰めるような雰囲気を出してこちらに詰め寄るな!

俺が悲しくなってくるじゃないか!」

あまりの不憫さに同情し、つついひよつとこに近づこうとするアリサだったが、ひよつとこはその手を振りほどき、ヴィヴィオの体を抱き上げる。

「俺はヴィヴィオが味方ならそれでいいもん! ヴィヴィオはパパの味方だよねー?」

「うん! パパのみかたー!」

ヴィヴィオの返答に満足して、ようやくなのはの隣に座り込むひよつとこ。 その膝の上にはヴィヴィオが座っている。

「あ、ちなみになのはやフェイトやはやてはノーカンね」

「なんや俊。 わたしらはとつくにアンタの味方ということ?」

「当たり前だろ。 可愛い幼馴染を助けてくれよ」

「はいはい、助ける機会があったらな」

自分の分のケーキを取りながら、ひよつとこははやてに話しかける。

「はやて。 お前さ、店内でああいうのはよくないと思うぞ。 とい

うかだな、マジで止めろ。 お前にあんなことされて俺のようになら

ない男なんて不能以外の何者でもないからな」

イチゴショートのイチゴをヴィヴィオにあげながら、フォークで

ケーキを一口分すくいヴィヴィオの隣でひよつとこを見ているガークンにあげる。

はやては意地悪い笑みを浮かべながら、ひよつとこのほうに身を乗り出して聞いてくる。

「あれー？　なのはちゃんやフェイトちゃんが大好きなんじゃないのー？　俊君もしかして浮気かいな？」

「お前だって大好きだよ。　というか、お前だけじゃなくって皆好きだよ。　好きというカテゴリーにおいて、俺は皆を区別するつもりは毛頭ないよ。　優先はするけどな」

「……そういうのは卑怯やと思うで……」

「え、なんで？　べつにいいじゃん。　区別とかつけるとロクなことにならないでイタツ!!」

ひよつとこは自分の左手に痛みを覚えてそちらのほうを向く。

「ん？　どうしたの、俊くん？　わたしの顔にクリームでもついてる？」

「あ、あれ……？　いま、なのは側から左手の甲を抓られたんだけど……」

「もー、そんなことあるわけないじゃん。　まーた、痛い妄想でしよー？」

「そ、そうかな……？　そ、そうだよな」  
「……バーカ」

なのはの小声に気付くこともなく、首を捻りながら、自分の勘違いだと思ふことにしたひよつとこ。

そんなこんなで、翠屋の一角では終始話し声が絶えることはなかった。

## 66. 高町なのはのパーフェクト教導教室

『殺す覚悟をもつくらいならば、殺さない覚悟をもつほうがいい。どちらかひとつを持たないといけないというのであれば、わたしは殺さない覚悟を選ぶ』

夕食前にスカさんやリンディさん、おっさんが海鳴に無事到着したので、高町家での夕食は混沌としていた。とくにスバルとエリオの大食いが凄まじく思わずこちらの食欲が若干減ったくらいである。そうして、俺たちは何事もなく夕食を終わり風呂に入り、後は寝るだけの時間になったわけなのだが――

「おっさん、そこ邪魔だ。どけ」

「あ？ おお、悪いな」

「何してんだ？ 大人たちは外で飲みなおしてるんじゃないやねえのか？」

飲酒が許されている大人たちだけが楽しめる特権である。ちなみにスカさんはこれには参加していない。なぜなら――

「いや俺もな、ちよつと教導官のお話しを聞こうと思ったわけだ。」

管理局が誇るエースオブエースの教導、そして言葉。局員としては是非とも聞いておきたいものだ。だからこそ、スカリエツティもあそこにいるわけだしな

おっさんが顎をさす方向に目を向ければ、スカさんが真剣な表情で話しを聞いている――ように思える。実際は紙袋を被ってるからわからないが。

それにしても……なのはの教導かー。俺もちよつと聞いておこなうかな。

おっさんの隣で壁に寄りかかりながら俺は耳を澄ませることにした。

☆

夕食もお風呂も終わり、あとは就寝だけとなったこの時間帯に、私はリビングで六課メンバーとスカさんとウーノさん、それとアリサ

ちゃんにすずかちゃんという面々と向かい合っていた。ここに俊くんがいなくてよかった……、これから話すことはちよつと恥ずかしいことだし。

「それじゃ、この教導教室が終わったら残りの日数は自由に過ごしてもいいよ。まだ早いけど、皆お疲れ様。まだまだ六課解散まで日はあるから、もうちよつとだけわたしの教導に付き合っただけ？」

『はいー』

「うん。それじゃ、教導をはじめようか」

そしてわたしは教導をはじめめる。教導といつても、何もデバイスを使って訓練をするわけではない。むしろこれは学校の道徳の時間といったほうがいいかもしれない。新人たちの質問にわたし達隊長陣、あるいはわたしはわたしが答えていくだけなのだから。

「あの、なのはさん。質問があります」

スバルが挙手をしたので、手を出して続きを促す。

「私達管理局って、犯罪者を相手にするんですよね？」

「まあ、厳密にいうと治安維持だから犯罪者を相手取るわけじゃないかな。その治安維持の過程で犯罪者を捕縛するってところかな」

「けど、犯罪者って基本的に危ない人ばかりですよ？ それこそ、魔導師だったら殺傷設定とか平気でしてきそうなのですが」

「それは否定しないかな。中には殺傷設定の犯罪者とかいたりするからね」

犯罪者って基本的に追い詰められている人達ばかりだから、なにをするかわからないし。

「危ないですよね〜」

スバルはそれだけいって、満足したのかお茶を飲みだした。

……あれ？ 質問は？ え、終わり？

「質問です、オナネタ……なのはさん」

「ちよつとまってティア。いま完全に禁止ワード飛び出したよね？

明らかに越えちゃいけないライン超えたよね？」

「なのはさんは強さについてどう思いますか？」

何事もなくはじめるティア。少し距離を置きたくなってきた。

それにしても強さか……。 うーん、

「それじゃ逆に聞くけど、ティアは強さについてどう思う？ ティアのいう強さってのは純粹な意味での力なのかな？」

「えっと、はい。一応、そのつもりで聞きました。力がないと、自分すら守ることができませんし」

「うん、確かにそうだよ。力ってのは重要だよ。自分の正義を通すとき、自分の信念を貫くとき、誰かに負けたくないとき、直接的にかかわってくるのが力だもんね。理想を説くには力がある。

むしろそれが絶対的な条件といっても過言ではないよ。理想ってのは、実力者だけが口にすることができる代物なんだから」

「それじゃ……。なのはさん達も力が全てだと思いますか？」

「ううん、そうは思わないよ。力が全てだなんて考え方は絶対にしてない。けどね——力がなくてどうしようもできない場合は存在するんだよ。言葉だけじゃ、届かないってときは確かに存在するんだよ」

例えば、PT事件とか

例えば、闇の書事件とか

私は、そんな「場合」を体験してきたつもりだ。

「わたしの知ってる人でね、『理想を説くには力がある、しかし力がなるときはどうするべきか？』よし、理想を騙して現実に引き摺り下ろそう」というありえない考え方をしている人だけだね。その人は魔法を使うことができなくて、けど隣にいた人は魔法を使うことができ、それじゃあ自分はどういった行動をすればいいか？ そう考えていたのを覚えているよ。『魔法が欲しい』そういわれたこともあったよ。そしてこうも言われたよ。『魔法が使えない俺の分まで皆を助けてくれ』って。だからわたしは、力だけが全てとは思わないけど、力は大切だと思ってる。力ある者は、自覚しないといけないんだよ。ティアの場合は、「自分は強い。十分に戦える」と思ったほうがいいかもね。大丈夫、わたしも支えていくから頑張ろうね」

って、ちよつと離れすぎちゃったかな？

「まあ、ちよつと離れたかもしれないけど、力に関してはそんな感じかな。過信はダメだけど、自信はもとう。それじゃ、次はダレかな？」

そう首を回したところで、キャラが手をあげる。

「なのはさん、さっきの犯罪者の話ですけど……もしも殺傷設定できるときはどうするべきですか？」

「殺傷設定できたらどうするべき……ねえ。キャラはどうするべきだと思う？」

「えっ、わ、わたしですか？ え〜つと……相手が何であろうと傷つけないです」

うん、心の優しいキャラの答えだね。なんか安心した。これで

『それはもう、ボコボコにするに決まってるじゃないですか』なんて言われたらどうしようかと思っていたよ。

「うん、それでいいと思うよ。管理局は治安維持や世界の平和、人々を守ることに目的なんだから。人を殺すのが目的じゃないんだ。

だから本当は殺傷設定なんてものはいらないけど……そういうわけにはいかないのが世の中なんだよね。ただ、わたしは皆に殺傷設定を使ってほしくないな。殺傷設定を使わずに切り抜けてほしいかな」

「まあ、そんなことをいうと犯罪者や殺傷設定を使いたがるバカたちになにか言われるかもしれないな」

「そうだね、ヴィータちゃんの言うとおりだよ。わたし達は戦場にいるようなものだからね。きつと、『甘いことをいうな』だの

『殺す覚悟がない奴はくるな』とか『だからお前たちはダメなんだ』とか言われるかもしれないね。確かに、その人たちの言い分は理解できるところもあるよ。けどね、わたしはそんな人達に正面から言い返すことができるよ」

なのはは深呼吸して、凜と言い放つ

「——それでも救うのが管理局です。管理局は皆を笑顔にするために存在しています。つてさ」

『……………』

「わたしは管理局に誇りをもってるよ。殺すことは誰だってできるし、簡単にできるんだ。けど、人を救うことほど難しいものはないよ。伸ばされた手を振り払うのは簡単だけど、手を握るのは難しいということだね。だけど、その難しいことを目標に掲げている管理局ってすごいよね」

いつか高校時代にこの話をしていたときに誰かさんが言った言葉を唐突に思い出す。

『殺す覚悟というのは自己満足と自己防衛であり、その行いによって周囲から得られる反応は“殺人者”というレッテル貼りだけである。やっぱ無理だわ。俺には無理だわ。俺絶対に人を殺す段階になったらガタガタ震える自信があるわ。殺しても平然としてる奴や、普通に生活できる奴って絶対にイかれてるぜ。イかれチンポだわ』

……いや、最後の部分とかは思い出さなくてもよかったんじゃないかな、わたし。

「まあ、これはなのはちゃんの考えやから決してこれを真似しろってことやないんやけど、いまなのはちゃんの言葉を頭の片隅にでもおいておくと嬉しいかな」

はやてちゃんがそういつて紅茶を飲む。

「えーっと、もう質問はないかな？」

ぐるりと新人たちを見回す。どうやら新人達にはもう質問はないようだ。

それじゃ解散しますか。そう思っていると、予想外の方向から手が上がってきた。

「ちよつといいだろうか、高町先生」

「あ、はい。どうぞ」

「うむ……。管理局は人を救う組織というが、それは犯罪者であってもかわらないのだろうか？ もしも管理局に犯罪者が助けを求めたら管理局は助けるのだろうか？」

そうスカさんが手をあげながら聞いてきた。紙袋がちよつと怖いのは内緒。



「助けを求める以上、わたしは犯罪者でも助けたいと思ってます」  
「それが裏切られることになろうとも？ 助けた犯罪者が裏切ったとしても大丈夫か？」

スカさんの声色は真剣そのままだった。まるで何かを確認するように、何かに縋るような——そんな印象を受けた。

だからこそ、私も真剣に答えることにした。

「それでも——助けを求める以上、わたしは助けたいと思います。裏切られたら、そんなことをしないように更生させます」

「……その答えが聞いて満足だよ。 うん……そろそろ決断するときだね」

スカさんの声は少し小さくて、まるで自分に言い聞かせるようなそんな声量だった。

うくん、後でウーノさんにでも聞いてみようかな？

こうしてわたしによる、高町なのはのパーフェクト教導教室は終了となった。

☆

「ひよつとこ、泣くなら他所で泣け。 気持ち悪い、俺の隣で泣くんじゃねえよ」

「泣いてねえよ、これはアレだ。 俺の先走り汁が垂れてるだけなんだよ」

「どつちにしろ離れる、バレるじゃねえか。 それにしても……成程な。これがエースオブエースと未来を担うエース達か。 管理局も安泰だな」

「当たり前だろ、なんせ俺の奴隷たちだぜ？」

「間違えるな、お前があのエースたちの奴隷なんだよ」

「やめてくれよ。 『俊さん！』 そこからここにインサートです！

ほら、カモン!!』 がリアルになっちゃうじゃん。 嫌だよ、同性の上司をオナネタに使うような女のアワビに突っこみたくねえよ」

「まあ……俺もあの嬢ちゃんがかんなことになるとは思ってたなかつ

た。しかしひよつとこ。お前もあのエース達には学ぶべきものが多いな」

「あいつらは教本みたいもんだからな。俺にはないものを沢山もつてる。なのはやフェイト、はやて達が管理局に誇りをもっているように、俺はあいつらの幼馴染になったことを誇りに思うよ」

ほんと……敵わないなあ。主人公体質にもほどがあるだろ。

「まったく……あんなことを言われたんじや、俺もしつかりと大人を見せないとな」

「おう、頑張れよ」

「お前が問題行動しなければいいだけなんだけどな」

そりや無理だ。

☆

高町家の自室で、家からもつてきたノートパソコンを操作しているとコンコンと扉がノックされた。

「はい、開いてますよー」

時刻は23:30。既になのはの教導も終わり、全員が就寝していると思っていたのだが……誰が起きているんだ？

そう思いながら扉が開くのを待っていると、ゾロゾロと四人の人物がはいってきた。

スバルに嬢ちゃんにキャロにエリオ。いわゆる新人たちである。

「んー、どした？」

「いや……ヴィータさんがひよつとこさんにも話を聞いておけつて」

「んじや帰ってくれ。お兄さん、色々忙しいから」

「右手がですか？」

「右手もだ」

まったく……ロヴィータちゃんつてば、なんて面倒なことをしてくれたんだ。俺はお前らとは違うんだよ。

「話を聞くつて言ってもなー。あんまり個人的なことは勘弁してくれよ。俺が桃子さんに逆レイプされかけたこととかさ」

「されたんですか?」

「されたらいいよね。エロゲだとそういう展開になるんだけど」

現実って厳しいよな。

「あー、それじゃ、っておい嬢ちゃん。勝手に部屋を物色するな。犯すぞ」

部屋を歩き回る嬢ちゃんを強引にスバルン達の所に戻す。うろろうろうろしやがって、お前はクマか。

もうアレじゃん。キャロとエリオとか眠そうにしてるじゃん。もう寝かしたほうがいくら欠伸してるじゃん。

はあ……さっさと済ませよう。

「それじゃ、俺からは一言。——俺のようにはなるな」

俺の声に先ほどまでぽけぽけしていた新人たちが真剣な目を向ける。楽にしても大丈夫だけど……それだけロヴィータの言いつけを守ってるということか。師弟関係は抜群というわけだな。

「俺のようになるなよ。魔法が使えないくせに、虚数空間に落ちる女性を捕まえようとする無茶をやるような人間にはなるなよ。生体ポッドの女の子にむけてシャンパンファイトをする人間になるなよ。救えもしないくせに、格好つけるような人間にはなるなよ。

誰かの服を掴んでいないと歩けない人間になるなよ。——人間もどきになるなよ」

「……人間もどきですか?」

「ああ、人間もどきだ。絶対になるなよ。俺はそれで地獄をみた人間を知ってる。死にたくなるぞ」

それだけいって、後は黙る。

正直、もう喋ることがない。自分の語彙力の乏しさに絶望するよ。

しかしそれは新人たちも同じのようで俺の言葉のあと黙ってしまった。

おいおい、俺がこいつらを叱ったみたいなの雰囲気じゃないか。お兄さん、こういった雰囲気苦手なのよね。

「まっ、俺の話なんて適当に聞いとけ。むしろ聞くな。聞いたつ

てなんの役にも立つことがないんだ、お前らは一人でも多く救えるよ  
うな立派な魔導師になれるようになるのは達には達の色々と聞いてこい。

それより明日は海に行くんだから、そろそろ寝るよろし」

「それもそうですね。それじゃ、私達はこれで寝ることにします」

スバルンの言葉を皮切りに、全員が立つ——ことはなかった。エ  
リオの隣にいたキャラが完全に寝てしまったのだ。そしてもう既  
にエリオもカウントダウンにはいつてる。

なんとということだ。ここでエリオとキャラが寝てしまい、俺の部  
屋で朝を迎えたならば確実にフェイトに殺される。バルディッ  
シュで首がトブビツシュだ。

「はあ……まったくエリキャラの二人は。これでなのはとフェイト  
の部屋に合法的に入れるようになってしまった」

「ひよつとごさん、目が危ないですよ。いまにも襲いそうな目に  
なってますよ」

「インサート女どもは具合合わせでもやってろ。俺はこれから理想郷  
に行ってくる」

エリオをおんぶし、キャラをお姫様抱っこしながら意気揚々とドア  
を開ける。

「ようこそひよつとご。ここがお前の理想郷だ」

最高速度でドアを閉めた俺であった。

こええよ、ドア開けたらおっさんが目の前にいるのは色んな意味で  
恐怖を感じるよ。

67. ガークくんにも苦手なものは存在するみたいで  
す

キラキラと自己主張が激しすぎる太陽と、水面がキラキラと輝くほどの澄んだ海。 白い砂浜には綺麗な貝殻と家族連れや若者たちが顔を輝かせながら、ときには幸せそうに語らいながら歩く。

「スカさん、あそこの人のサイズはなんだとおもう？」

「E……いや、Fカップではないだろうか、ひよつとこ君」

「挟まれたいな」

「挟まれたいねえ」

そう——俺たちは海に来ているのだ。 昨日は荷物を置き適当に喋ってスカさん達が来るまでだらだら過ごし、夕食を食って教導を聞いて終了した。

なのは達の言葉を信じるならば、ここから先の行動は自由ということになるな。 まあ、自由行動といっても今日の海は兼ねてから計画をしていたので全員参加になるわけだけど。

「それよりもスカさんや。 海には男のロマンがある。 というかな、海は母親なんだよ。 そう、俺たちは海から生まれてきたようなものなんだ。 そしてその母親が目の前で俺たちを包み込もうとしている。 さあ——俺たちの取るべき行動は？」

「ふつ、ひよつとこ君。 無論にして愚問だよ。 私達の取るべき行動は一つ」

スカさんと頷き、一目散に目の前に広がる海へと駆けていく。

「おおああああああああああああああああああああああああああああああああん!!!」

トリプルループを決めながら海へとダイブする俺とスカさん。

夏の暑い日差しも届かないこの海の中は涼しく、そして気持ちよく、ついつい足を思いつきり伸ばしてしまう——

ビキッ

「……スカさん、足が攣った」

「だからあれほど体操をしようと私は提案したんだよ!」  
見事に足を攣ってしまった。

☆

「いいからお前たち。 あいつの行動とは真逆なことをしろよ。 立派な大人になれるからな」

「ヴィータさん、ひよつとごさんが必死でSOSを出してるんですが」

『みんなー! たすけてー! 皆のアイドルが溺れちゃー』

「大丈夫だ。 ドラゴンボールで復活する」

「殺すこと前提ですか!? いまある命を助けましょうよ!」

「大丈夫だスバル。 あそこには変態仮面もいるんだ。 なんとか――」

『ウーノ君!? 助けてくれ! 紙袋が海水で大変なことに――』

「ひよつとご!! 来世の未来で会おうな!!」

「誰か助けてください! 完全にヴィータさん見捨てる気です!」

「まったく……あいつらは何をやってるんだ……」

人間状態のザフィーラが呆れながらも、素早い動きでひよつとごたちを元へ行く。

『ほら肩に捕まれ。 安心しろ、助けてやるから』

『帰れガチムチ! シグシグとかそこらへんのムチプリ呼んでこいよ!』

『はいはいわかったわかった……、それじゃお前は一人で頑張ってこい』

『ごめんザツフィー!? 謝るから、謝るから俺を助けて!』

「……………チツ」

ザフィーラに助けられているひよつとごをみて、ヴィータは心底面白くなさそうに舌打ちをした。

☆

「いいかお前たち。海を舐めるなよ。海は怖いんだ。いつ足が  
攣るかもわからないし、ときには流されることもある。サメなどが  
来ないとも限らない。海つてのは怖いんだ」

「ひよつとこ、お前の足痙攣してるぞ」

ヴィータが震える足にトーキックをかます。

「いたツ!? やめてロヴィータちゃん。俺いま必死で年上としての  
威厳を保ってるんだから!」

「いや完全に無理だろ。見てみる、新人達の目。『この人には言わ  
れたくねえ……』みたいな顔と目だぞ」

みるとスバルとティアの目は完全にひよつとこのことを見下すよ  
うな目であり、キャロとエリオも困ったような乾いた笑いを口にして  
いた。流石反面教師のひよつとこである。

しかしそれでもめげないひよつとこ。ごく自然な動作で痙攣中  
の足を揉み答える。

「いいんだよ。俺の行動でなのはたちの可愛い教え子が海の怖さを  
知ってくれるんなら」

「お前の行動で新人達が得た教訓は、お前のバカさ加減だけだな」

恰好よく潮風を体に浴びせながら言い切るひよつとこに、間髪いれ  
ずにヴィータがそう返す。

辺りを数分の静寂が支配して――

「よーし! 体操はじめっぞー!」

ひよつとこはいつも通りなかったことにした。

新人達を横一列に並ばせて体操をはじめめるひよつとこ。背伸び  
や肩回し、屈伸に震脚、アキレス腱伸ばしと一通りのことを行う。

エリオとキャロは素直にひよつとこの言うことを聞き、体操し、スバ  
ルとティアナは目の前の男が体操をしないことで足を攣った場面を  
目撃しているのでこちらも大人しく従う。

ひよつとこの隣ではヴィータも控えめながら体操を行っている。

ヴィータの水着は赤のサロペット付きビキニである。肌の露出  
も水着にしては極端に少ない代物である。

「ロヴィータちゃん、いくらなんでもそれはないだろ。自分の幼児

体型もあるけどさ。なんなら俺のもってるスクミズ貸そうか？」

「いやまて。お前いま自分がどれだけ変なこといったか気付いてるのか？　なんでお前がスクミズもってんだよ」

「ぐへへ……」

ひよつとこの気持ち悪い笑い方に、ヴィータはすかさず痙攣中の足を蹴る。

おうツ!?　と言いながら倒れるひよつとこ、そんなひよつとこの背中に誰かが思いつきり飛び込んできた。飛び込んできたといつてもひよつとこにはそこまで痛みは感じないほどの強さだ。そんなことができる人物にひよつとこは一人だけ心当たりがあるので、後ろを振り返る。

そこにはひよつとこの予想通り、向日葵が描きこんであるビキニで決めているヴィヴィオの笑顔があった。

「えへへ、パパー、どーん！」

「こーらヴィヴィオ。　パパの足はいま危ない状態にあるんだからやめなさい」

「パパー、ヴィヴィオかわいい？」

ひよつとこの話など聞かずにくるりとターンするヴィヴィオ。

凹凸などは存在しないが、その笑顔だけでひよつとこの顔は笑顔になる。

「かわいいぞ、ヴィヴィオ。　もうパパがヴィヴィオの婿になりたいくらい」

「だったらヴィヴィオはパパのおよめさんになってあげるー！」

「やつほーい！」

座ったまま拳をあげるひよつとこ。　ヴィヴィオはそんなひよつとこの胸に飛び込み抱きつく。　そんな光景を周りの人は微笑ましそうにみていた。

「ところでヴィヴィオ。　ガークんは？」

「ガークん？　ガークんなら、あそこだよ？」

ヴィヴィオの指さす方に目を向けると、ものすごいはしやぎっぷりでガークんが海に向かって猛ダツシュしていた。



『ワーイ!! オヨグゾー!!』

「ガークン! ここは海水だからガークンには——」

ボシャン!

『ベタベタスルー!!』

「ああ……遅かったか」

アヒルは基本的に淡水に暮らすので、海水には抵抗があるようだ。それはガークンとて同じらしい。ドタドタとベタベタとヴィオとひよつとこの方に走っていくと、涙をためながら

「ガークンカエル!」

と、言い出した。

「ダメだよーガークン。いまきたんだから」

「イヤー! ウミキラーイ!」

困ったように宥めるヴィヴィオに、ガークンは首を左右に振りながら拒否する。

『あのアヒル喋ってねえか……?』

『ありえねえだろ……。動物園に連絡したほうがよくねえか……?』

ガークンの姿をみて、周りの一般人がそうひそひそ話をする。

そんな一般人に向かってひよつとこは困った笑顔を浮かべながら話しかける。

「いやー悪いな、このアヒル俺の家族でさ」

『あれ? ひよつとこさんじゃないすか。海鳴に帰ってきたんすか?』

「まあ、一週間の滞在だけだな」

『なるほどねえー、ひよつとこさんがかわってるなら納得できるな。』

ひよつとこさんいるなら、俺たち翠屋に遊びにいけますね』

「おう、一人1万落としていけよ」

そう手を振りながらガークンに視線を向けていた一般人の男たちと別れる。

周囲の人間もひよつとこの姿を確認したのち、何事もなかったかのように思い思いの行動をとっていく。ときたまひよつとこに話し

かける人達もいる。

それを外側からみるティアナとスバルとヴィータ。 エリオとキャラは近くで砂遊びをはじめたようだ。

「ヴィータさん……ひよつとこさんが絡んだら魔法でも納得してくれそうですね、この人達って」

「というか、ひよつとこさん海鳴でもこんな感じなんですか」

ヴィヴィオと膝に乗せたまま、フレンドリーに話しかけてくる一般人にこれまたフレンドリーに返すひよつとこをみてティアナがヴィータに疑問を投げる。

その疑問にヴィータは面倒そうな顔をしながら答えた。

「学校にもたまにいるだろ。 学校の名物生徒や名物教師。 アイツはそれとおんなじで、海鳴の名物人間みたいなもんだからな」

「いい方か悪い方か、どちらですか?」

「勿論、両方だよ」

溜息混じりの声を出すヴィータであった。

☆

「あゝ、しんど。 そりゃさ、いきなり海鳴から消えたから色々と憶測は飛び交うと思うけど、どうしてほとんど『あいつ変な食べ物食って死んだらしい』なの? おかしくね? それ絶対になのはの役目だろ」

「なのはママの?」

「そうそう、なのはママの」

ヴィヴィオの頭を撫でながら作ったパラソルの下に敷いてあるシートに座る。 いまきてるのはヴィヴィオとガーくんとスカさんとヴィータと新人達、そしてザッファイである。

大人組はもう少し後にくる予定だから……来てないのはなのはとフェイトとはやととシグシグとシャマル先生とウーノさんか。 シグシグとウーノさんいる時点で心配ないな。 なのはも海鳴では恐怖の対象的な意味で有名人だし。

「はあ……それにしても——」

「ガークン、いい加減諦めろ。根性で海水適正Sにするんだ」

「ウウ……デモカイスイニガテ」

「困ったな……」

ヴィヴィオの隣で顔を項垂れているガークン。まいったね、あのガークンが海水のべたべた苦手だなんて。ガークンの尋常じゃないスペックで仇となり、感覚が鋭くなってるのかな？

「はっはっはっはっは！　こういうときに私がいるのだよ！」

「あれスカさん。なにそのオイルみたいなの」

「よくぞ聞いてくれたひよつとこ君！　これは海水でも淡水のような状態に感じられるオイルだよ！　これを全身に塗ればガークンもベタベタに悩ませることはなくなるぞ！」

「ホント？」

「勿論だとも、私に不可能なことはないよ。さあ、ヴィヴィオ君。

これをガークンに塗ってあげなさい」

「はい！」

スカさんがヴィヴィオにオイルを渡す。ヴィヴィオはそれをもらい、ガークンの全身にべたべたと塗っていく。ガークン気持ちよさそうだな。

「なあ、スカさん。これって人間にも効果あるの？」

「ふむ、効果はあるものの、あくまで感じるだけだから結果的には海水を浴びているのと同じだよ」

「あー、なるほど。スカさんなら触れた海水を淡水に変えることができる薬くらい作れそうだけど」

「うむ、本当はそれをしたかったのだが……30分ほど前に急遽作ったので、勘弁をお願いするよ」

「いや、30分じゃ普通作れないよね。スカさんやつぱ天才だわ」

ヴィヴィオのほうを見ると、丁度ガークンの全身に塗り終えたところであった。ガークンはもう一度挑戦しにいくらしく海のほうへと一目散に駆けて行った。

「パパー？」

「ん？ どうしたヴィヴィオ？ トイレか？」

そう聞くとヴィヴィオはぶんぶんと首を横に振って、かわりにさっきのオイルを差し出しながら笑顔で言った。

「ヴィヴィオにもぬってー！」

……これは困った。 いや、本当に困った。 やってあげたいけど……ここでヴィヴィオにオイルを塗ろうものなら間違って穴に指を入れてしまうかもしれないし……、そんなことになったら俺はこの先どうすればいいというんだ。 確実になのはとフェイトに家を追い出される。

しかし――

「はやくー！」

ヴィヴィオには他意はないわけで、ここで俺が拒否するとヴィヴィオは悲しい思いをするだろうし……せつかくの海の思い出を俺の我儘で辛い思い出にはさせたくない。

「よーし、ヴィヴィオ。 それじゃパパが全身をべたべたと触っちゃうからな〜！」

そうして俺はヴィヴィオに触れる――前に誰かの手が肩に置かれる。

後ろからでもわかるこの怒気。 きつと背後には修羅がいるに違いない。

「俊く〜ん？ 面白いことしてるね〜。 オイル塗る相手が違うんじゃないかな〜？」

「はっはっは……ヴィヴィオが俺に頼んだんだよ。 いわば、俺以外にはオイルを塗らせたくないわけであって、これにより俺がお前らに怒られるということは――」

『ヴィヴィオ、フェイトママがオイル塗ってあげようか？』

『わーい！ フェイトママだいすきー！』

「……なのはさん」

「……なに？」

「……娘とのスキンシップは大丈夫だよな？」

「そうだね。 けど――オイルはわたしのアウトかな」

脱臼で済んでよかったです。

## 68. 俺の股間がカンピオーネ

がやがやと女性達がロッカールームで水着に着替えているのを横目に私はハイビスカスの絵柄が描いてあるビキニを手を取った。

今日はこれから沢山みんなと遊んで、ご飯を食べて、あわよくば彼と一緒に……

そんなちよつとした期待を持ちながら下着を脱ぐ。昨日は頑張つて縞々パンツをはいたけど、今日はちよつとだけ大人の雰囲気を感じ出した黒を穿いてきた。……彼は見てくれなかったけど。

いや、べつに彼に見てほしくつて穿いたわけじゃないんだけどね？ なんだらう、いまちよつとだけ私の見る目が変わった気がする。

けど……ちよつとくらい覗き込む仕草をしてほしかったな……。

そんなことを思いながら水着に着替えようとすると、隣にいるのはが肩を叩いてきた。

「ね、ねえ？ ピンク色のビキニと、す、スク水はどっちがいいと思うかな？」

「なのは、年を考えようよ」

かれこれ10年の付き合いになる親友のなのはが、ピンク色のビキニとスクール水着を片手に聞いてきた。

「わ、わかってるよ!? なんかない犯罪の香りがするのはわかってるけど……、好きそうじゃん……」

「いやいや、好きそうだからって着てこられたからビツクリするよ」

そういつて私は水着を着る。うくん、ちよつと胸が苦しい……。

「えつと……パレオはつと」

ロッカーをぐそぐそと漁ると、奥のほうに封印したものが誤って下に落ちる。

てすたろつき（スク水）

「……………フェイトちゃん？」

「え〜つと……好きそうじゃん？」

「わたしには言っておいて、自分は着る算段だったの!？」

「い、いや違うよなのは!?! 恥ずかしいからやめたよ!?! なのはみた

いに痛い子にはなりたくないしー!」

「べ、べつに痛くないよ! 喜んでくれるもん!」

『主はやて、実際のところアイツは好きなのでしょうか?』

『素直にツインにしたほうが喜ぶやろな』

「……………」

ずっと思ってたんだ。髪が長いからツインテールにしようかな  
と。べつに彼のためとかじゃないよ。ほんとだよ?

私もなのはも無言で髪を結ぶ。

結ぶ終えた私たちはとくに何を喋るわけでもなく、というか、喋れ  
ずにそのままロッカーを閉める。

「あれ、なのはちゃん。それパッド——」

「ダメ!? 言わないで!?!」

「なのはちゃん、あの人はそんなこと気にしないから大丈夫だと思  
いますよ?」

「シヤマルさんまでやめてください!?! わたしにも意地はあるん  
ですよ!?!」

「…………無乳のエースオブエース…………」

「シグナムさん、ちょっとお話があるんですが」

なのはが涙目ながらも怒りで顔を真っ赤にしてシグナムに詰め  
寄る。なのはも大変だね…………。でも——彼は大きいのと小さい  
の、どっちが好きなのかな?

☆

「う…………大きい人は小さい人の気持ちかわからないんだ…………」

「な、なのは? あんまり胸を見られると…………」

なのはと二人、砂浜を歩きながら彼のいる位置へと歩いていく。  
基本的にバカでお祭り男だから騒がしいところにいけば見つかるだ  
ろうし。

じつとみていたなのはが、ふと何を思ったのか私の胸に手を置いて  
きた。

「な、なのは!? なにやってるの!？」

「いや……なんでこんなにおつきいのかなあと思つて……」

そのまま軽く揉み始めるのは。

「ひゃッ!? だ、ダメだつてこんなところでそんなことしたら!？」

「う、うん……、だ、大丈夫だよフェイトちゃん」

「ん……あッ……! な、なにが大丈夫なのかサツパ……りだよ、んッ!」

「ふえ、フェイトちゃん……だ、ダメだよそんな声だしちや……」

「そ、そんなこといわれても……、な、なのはが手を離してくれたら……!」

フェイトの声を無視して、なのはは胸を揉む。はじめは軽く触る程度だった手も、いまでは大きく撫でまわすように動かし、ときたま力を入れる。その緩急と強弱の使い方フェイトはたまらず声を出す。

「な、なのは……」

「フェイトちゃん……」

なのはとフェイトの体が密着に近い形で近づく。はあはあ……と荒い息と、んッ……という艶めかしい吐息が二人を支配する。

『はやてさん、あの二人は止めなくていいのでしょうか? 男性客が大変なことになってますが』

『シグナムいるし、なんだか二人とも本気っぽいしいんちゃう?』

アイツの噂知ってる人間ならまずあの二人に手を出そうとは思わんよ。それに、あの二人がそのままゴールしてくれたらこっちは独り占めできるしなー』

『成程、あなたのような人を小悪魔と呼ぶんですね。 なんだか時代すら思い通りにいきそうですね』

『時代の先駆者はいつも型破りで常軌を逸したバカと相場がきまつてるで』

「……フェイトちゃん、なんか……ごめんね」

「うん……きにしないで……」

いまさらながら、周囲の人間に見られていたことを思いだした二人



は顔を赤くしながら謝った。 いや、赤い顔は恥ずかしいという想い以外にもありそうではあるが。

「ん、なんだ。 もう終わったのか。 ではいくぞ、アイツが何を仕出かしているのかわからんからな」

至近距離にほど近いところで待機していたシグナムが、私となのはに話しかける。

「なんだろう……初期のわたしは危ない部下に振り回される可哀相な上司という役回りのはずなのになあ……」

とぼとぼと三人で歩いていると、小さな声でなのはが呟いたのを耳にした。

かける言葉が見つからなかった。

☆

「しかし海とはまた久しぶりですね、主はやて」

「せやなく。 一年ぶりやね」

「そこまで久しぶりでもなかったですね、主はやて」

「ゆるゆるで平和な世界観を舐めちゃあかんで」

まあ……年々犯罪率は減少しているし、近頃は義賊とかいうのも出てきたみたいだから管理局のほうもそこまで慌ただしくはないよね。

「けど、犯罪はなくならないよねー。 こればっかりはどうしようもないけどさ」

「しかしながら、主はやて。 でしたら魔導師ランクの高い私達って遊び過ぎではないでしょうか？」

シグナムのもつともな意見に、はやては気にしてない風に答える。

「前にミゼット提督が言ってたんやけど。 『六課はアイドル的立ち位置である。 それは裏を返せば、その六課が慌ただしく仕事をしていると他の局員の不安の種になってしまうかもねえ』 とかなんとか。 それに、六課は海とかいったほうがええで。 ……夏の特大号のいい種にもなるし」

「特大号？」

「ん、こっちの話や」

なのはの疑問にはやてが笑顔で回避する。けどまあ……確かにあの六課が仕事をしてたら慌てるかもしれないね。私は執務官だからそれなりに仕事はあると思うけど。

「けど義賊ですか。　なんだか面白そうですね」

「シャマルは興味あるの？」

「へ？　フェイトちゃんは興味ないんですか？」

「うくん、あんまり興味ないかな」

「あれま。　他の皆さんは？」

『とくに興味ないなあ』

「うう……私だけなんですわね」

シャマルが肩を落とす。

そうやって皆で話しているうちに、新人たちと先に来ていたヴィータやザフィーラ、それに彼とスカさんを見つけた。

海水でびちゃびちゃになった紙袋がシユールすぎて怖い。　いつになったらあの紙袋を脱いでくれるんだろう。

「つて、あれ？　なのは、ヴィヴィオ見える？」

「いや……海水に勇敢に立ち向かうガーくんの姿しか見当たらない」

二人で顔を見合わせる。

「ヴィヴィオが危ない!!」

猛ダツシユで彼が休憩しているパラソルの方へと走る。　そこには私となのはが考えていたとおり、ヴィヴィオが彼に懐いて何かを掲げていた。

そして――

『よーし、ヴィヴィオ。　それじゃパパが全身をべたべたと触っちゃうからなく！』

このロリコン!!

☆

脱臼だけで済んでよかったと判断するか、脱臼させやがって、と難

色を示すかは人それぞれであるが、俺はこう判断する。

「俊くん、そこに正座しなさい」

「俊、正座」

まだお仕置きは終わらない。

「なのは、フェイト。俺の言い訳を聞いてくれ」

「聞くだけ聞いてあげる」

「聞いたからって何か変わるとは限らないけど」

……逃げ出したい。

もう言い訳を諦めて、制裁を加えられる覚悟で他のことに集中することにした。

マジマジと二人の水着を見る。

なのはの水着は魔力光と同じピンク色である、それも鮮やかなピンク色だ。なのはの可愛らしさと相まって抜群すぎる。こいつは俺を萌え殺す気か。……どうやらパッドをつけているらしいな。

俺の目は誤魔化せないぞ。

フェイトの水着は白色にハイビスカスの絵柄が描いてあるフレッシュ感抜群の水着である。そして腰元には黒いパレオ……どうしてフェイトは俺のツボを知ってるんだ？ パレオっていいよね。

「なんかエツチな視線が……」

じろじろと見すぎたのか、なのはとフェイトは自分の水着を両手で隠しながら俺の視線上に肩を割り込ませる。

「いや……ただ二人とも可愛い水着だなくっと思って……。それに俺の好きなツインテもしてるし」

流石の俺も予想外。あまり見ていると……大変なことになってしまう。既に半起状態、正座をしているからいいものの……ここになにかが起こってしまうと大変なことになってしまう。

「そ、そう？ ふ、ふくん……べつに俊くんにそんなこと言われても嬉しくはないけど、まあありがとう」

さも当たり前だろと言わんばかりに、腕を組みながら喋るなのは。

まあ、確かに可愛いとか俺限定で言えば言われ慣れてるよね。もう少し気の利いたコメントができればよかったな……。……。

「あー、すまん。 気の利いたコメントができなくて」

「へ!?! いやべつにそんなことは……!?!」

なのはが手をぶんぶんと振りながら否定してくれる。 やっぱり優しいなあ……。

そんななのはの可愛らしい行動を見てみると、ずいっとフェイトが詰め寄ってきた。 体だけ詰め寄ってきたので、四つん這いの状態である。

「ねえ、水着が可愛いのか？ 私は可愛くないのか？」

「へ？ いや……水着も可愛いけど、大前提としてフェイトが可愛いということがあるわけで——」

フェイトの顔を直視できなくなり、思わず視線を下にさげる。

そこには——桃源郷が広がっていた。

フェイトの胸が大きかったのか、若干窮屈な様子のたわわに実ったおっぱいが天を目指そうと谷間を作っていた。

思わずガン見する。 思わず直視する。

体の中の全神経が、フェイトの胸に釘づけになる。

なぜだ？ 胸なら風呂場の入浴中とかに多少なりとも見てるじゃないか？

なのに何故？

頭の中で自問自答する。 俺の体はどうしたんだ？

「どうしたの？」

フェイトが首を傾げながら聞いてくる。 その動きに合わせて少しだけ胸が揺れる。

「い、いやっ……とくになんでもないよ……」

ごくり……そう生唾を呑み込んだ自分の咽喉音がやけに響いた。

フェイトに聞かれてはいまいだろうか？ そんな考えが脳裏によぎる。

「あーれーこーろーんーだー」

「わぷっ!?!」

そんな俺の背中に誰かが棒読み声で体当たりをかましてきた。

この声の主はよく知っている。 なんせ俺が一番厄介になってい

る人物かもしれないのだから。

「はやてお前な——」

背中にましゅまるが当たっている感覚を覚えて硬直する。

え？ これもしかして、え？

「んー？ どしたん？」

はやてはそう聞きながらも、あるものを俺の背中に押し付けてきた。

柔らかい弾力が俺の背中を通して体全体に伝わってくる。むにゅむにゅとしたマシユマロが俺の脳内を犯していく。

「は、はやて……？ できれば離れてほしいかな……なんて思ってるんだけど」

前にはフェイト、後ろにはましゅまるを押し付けるはやて。こんな状態をいつまでも続けられるほど俺の精神は強くない。

「離れてほしいなら自分から離れればいいやん？ それはできんの？」

「で、できるよ！ できるに決まってるだろ！」

はやてから離れるために体を動かした——はずであったのだが、俺の体はまったく力が入らずにそのまま動くことができなかった。

「あ、あれ……？ はやて、お前魔法使って」

「いや、何もしてへんけど？」

「いや、でも体が——」

体がまったく動かない。 バインドで縛られたみたいになんか動かないのである。

そんな俺の状態を知ってか知らずか、後ろにいたはやてが首に手を回してきた、そしてその手で俺の顔を撫でてくる。

「なあ、俊。 もしかして、わたしの胸で興奮してるとか？」

「ば、ばかいい!! これはお前らが来る前にちよつとはしやぎすぎてだな——」

「ふくん。 そういえば俊。 わたしって意外に胸あるんやで？」

「そ、それがどうした」

「いやな、俊は口リ巨乳を認めたくないからわたしを貧乳扱いするや

ろ？ けど、いい加減認めたらなく、と思つて」

「い、いいんだよ！ 俺はフェイトくらい胸がいいんだ！」

「ふくん……、けど、そこは素直な反応をしとるで？」

はやては撫でていた手をゆっくり、ゆっくりと下腹部に下げている。

「ば、バカお前、ここには人が沢山いるわけで——」

「それじゃ、人がいない所なら……ええの？」

はやてが右肩から顔を出し、そう聞いてくる。

「へ？ えつと、そういうわけじゃ、いやでも、結果としてはやつぱりそうなって、で、でも俺にはなのはとフェイトという人がいて」

しどろもどろの俺の顔を、はやて以外の誰かが強引に向きを変えさせる。

「私とお話し中ですよ？ 私だけをずっと見てて」

ぐきりつと嫌な音が首から聞こえてきた。しかし、そんなことなど今の俺には気にならなかった。だって、フェイトの顔が少し動けばキスできる位置までできていたのだから。

「俊。俊はうちよろしすぎだよ。そんなんじや——」

フェイトが何かを言おうとした瞬間、後ろのほうでなのは声が聞こえてきた。

『……なんて……塊……』

そのなのはの声に、俺とフェイトとはやてはなのはのほうに視線を向ける。

なのははその視線を浴びて、いや俺と視線を合わせて若干涙をためながら叫んだ。

「おっぱいなんて脂肪の塊じゃん！」

「な、なのは……？」

「俊くんのバーカ！ おっぱい魔人！ 変態！」

「い、いや……あの、なのは？ 人が見てるから……」

「俊くんなんて大っ嫌い！ サメに食べられてしんじやえ！」

……なのはに嫌われた。

69. 69だけでもう、えろいことを妄想するよな

「ヴィータさん、ひよつとこさんたちの所が騒がしいんですけど、なにかあったんですか？」

「アイツが思いつき地雷踏んだ」

「はあ……地雷……ですか？」

スバルとヴィータが見つめる先には、なのはが涙をためながらひよつとどこに何かを言っていた。そしてそれをはやてとフェイトが後ろから冷や汗を流しながら見ている状態であった。ひよつとこはほとんど放心状態で、糸の切れたマリオネットよろしく動かない。その一部だけが和気藹々で楽しむ空間ではなくなっていた。周囲の人間も見えないふりして、ときたまひよつとどこに敬礼している人間までいる始末。

「なのはさんがほとんど泣きそうですね。ぺろぺろしたいです」

「お前は上司をもう少し敬え。しかしまあ……あの空気どうするんだろうな」

「アイツの首を切り落とせば済むことじゃないのか？」

「シグナム、そんなことしたら発狂するぞ間違いない。無理無理」

シグナムの真剣に考えた解を、ヴィータは呆れながら否定する。

横にいたティアがヴィータに話しかける。

「ひよつとこさんなら首取れても大丈夫ですよ、なんか普通にくつつけそう」

「お前はアイツに対してどんな目を向けてるんだ。流石のアイツもそこまで人外じゃねえだろ」

「いや、そうとも限らんど、ヴィータ。アイツなら首がくつつくかもしれない。だから一度だけアイツの首を落として——」

「ザフィーラ！ シグナム止める！ こいつ危なすぎる！」

ヴィータの声にザフィーラが一つ頷いて、シグナムを羽交い絞めにする。

「離せザフィーラ！ 主はやてと密着したアイツを許しておけるか！」

「落ち着けシグナム！　せめて腕にしろ！　腕なら生えてくるから！」

「む……、本当かザフィーラ。　ならば腕で勘弁してやろう」

「おい、いつからアイツはナメック星出身になったんだ。　確かに前写メで見せてもらったけど、アイツ自身は地球人だからな」

「ふっ、冗談だヴィータ。　守護騎士のリーダーは、そんな器の小さい人物ではない」

そういつて、ふと柔らかい笑顔でヴィータの頭を撫でるシグナム。その身長さゆえか姉が妹を宥めている風に捉えることができる。ヴィータは一つ溜息を吐いて、軽く笑った。

「まったく……頼むぞ、リーダー」

「ああ——マミらせればよいのだから？」

「なに一つわかってねえじゃねえか!?　お前の器粉々に砕けてるだろ!?!」

結局、ザフィーラとシャマルの二人に取り押さえられたシグナムであつた。

シグナムを捕縛し終えたヴィータはやれやれといった調子で息を吐き出す。　そんなヴィータにスバルとティアが話しかける。

「私の予想だとひよつとこさんって、なんだかんだ言いながらはやてさんとゴールしそうですよね」

「スバル、冗談でも言っていることと悪いことがあるぞ。　アイツが家にいるとかこっちが発狂しそうだ」

「けど、そうしてくれたら私がなのはさんと一日中下半身を中心的にペロペロできるので……」

「ティアは一度病院行ったほうがいいんじゃないか」

「けど、ひよつとこさんが頼りにしてる人ってはやてさんですよ？

何かあるとすぐはやてさんに連絡しますし、相談しますし」

「まあ、確かにそれはあるけどな。　けど、アイツが最終的に頼るのはなのはだと断言できるぞ。　アイツとなのはの関係は、友達とか親友

とか幼馴染とか、そんな関係じゃないからな」

「……それってエロい感じでしょうか？」



「残念ながら健全だ」

ティアのどきどきとした視線に、ヴィータは頭を叩きながら答える。

「お前らも少しは知ってるだろ、闇の書事件」

「あ、はい。軽くではありませんが」

「あの時な、魔法が使えなかったアイツは裏方に回ったんだ。しかもアイツが向かった先は管理局本部の限られた上層部だけがいる所。

まあ学校でいうところの生徒会みたいな所だな。そこに直談判しにいっただけだぞ。本人曰く、正論でフルボッコにされたらしいけどさ。アイツはこの主張だけは譲らなかつたみたいだ」

『なのはがこの永遠に続く負の連鎖、必ず断ち切ってくださいよ』

「そしてあたしたちと戦っていたなのははこう言ったよ」

『俊くんは必ずやってくれるよ』

「なのははアイツが闇の書の後始末と今後はなんかしてくれると信じ、アイツは現在起きている事件をなのはが解決してくれると信じた」

ヴィータは思い出す。

大胆不敵に、満面の笑みで言い切ったなのはの姿を。純白のバリアジャケットに身を包み、自分と対峙していたあの姿を。

どんなに拒絶しても、何度だって近づいてくる、あの恐怖の魔導師を。

「確かにアイツとはやてのコンビは怖いよ。二人とも何をしてくれるかわからないしな。ただ、アイツとなのはのコンビはもっと怖い。わかっていても止められないからな」

「それじゃ、ひよつとこさんとフェイトさんのコンビはどうなんでしょうか？」

「えげつない」

ヴィータはそれだけいって、ひよつとこたちの方に視線を向けた。

「あのときのアイツは恰好よかったけどな。いまじゃ見る影もない」

「時代の流れって悲しいですね……」

ティアのトーンの低い声と、悲しそうな瞳に守護騎士たちが頷く。「いいか、新人達。 ああいう男にだけは騙されるなよ。 ああいう男は刺されて死ぬか、泥沼にはまるかで、えらいことになるからな。 エリオ、あいつと同じ道だけは辿るなよ?」

「は、はい……」

ヴィータの真剣なまなざしに、エリオはただただ頷くことしかできなかった。

☆

大嫌い。　なのはが涙をためながらそう言ってきた。

「はは……な、なのは?　いつもの冗談だろ……?」

「冗談じゃないもん!　俊くんなんて大っ嫌い!」

なのははそういつて俺のほうを見ずにそっぽを向いてしまった。……いつたい何が悪かったのだろうか?　いや、きつとまた俺が何か不適切で琴線に触れるようなことを言ったのは確かだろうけど……。

「そ、そうなんだ……。　俺のこと嫌いなのか……」

「うん」

俺の確認する言葉に、なのはが大きく頷いた。　もうダメだ、なのはは俺のことを完璧に嫌ってしまったらしい。　いつもの冗談じゃない、本気の嫌い方だ。　長年傍にいたのだからそれくらいわかる。

死のう。　もう生きている意味の半分は消えてしまったのだから。　俺はよろよろとフェイトとはやてのほうに向きなおる。　二人とも冷や汗を浮かべてこちらをみていた。　そんな二人の内の一人、フェイトに目を向ける。　フェイトが生きる意味のもう半分なんだけど……ぽっかりあいた穴を感じながら生きるのは辛い。

「フェイト……バルディッシュ貸してくれない……?」

「えっと……、何をやる気?」

「首切り落としてくる」

「はやまらないで!?　大丈夫、素直に謝れば大丈夫だから!　私も一

緒に謝るから！」

「そ、そうやで俊！ わたしも謝るから！ 三人で謝ったら許してくれるって！」

「それじゃ、サメ探してくる」

「だから落ち着け!?!」

フェイトとはやてが必死に足と上半身にしがみつきなから俺を押さえる。

それでも俺は止まらずにサメを探しにシートから出る——ところで、二人のほかに誰かが俺の腕を掴んだ。

生気のない瞳で、よろよろとスローテンポで振り向く。

「き、嫌いだから……そばにいて……。 そ、その……俊くんに精神的ダメージを与えたいから……」

「……え？」

「だ、だから、一緒に座ろうよ……?」

上目使いで俺のほうを見てくるのはは顔を赤くしながら、もじもじとしながら、それでも俺の腕を離すことなくパラソルの下に引つ張り込もうとしていた。

「あ……うん」

俺は茫然としながらも、なのはに引つ張られ先程の定位置に座る。隣にはなのはが体育座りで座る。

『……あれはダメやな。 天然だから破壊力が段違いや……』  
『狙ってないからねー……』

フェイトとはやてがこそこそと話す声がかすかに聞こえてくる。

「ねえ、俊くん？」

「な、なに？」

その二人の声も、なのはの呼びかけで聞こえなくなる。

「俊くんは……大きいほうが好きなの？」

「い、いや……そういうわけじゃ……」

「でも、フェイトちゃんの胸がいいっていったじゃん」

「それはだな、えーつと……フェイトの胸は至高というかなんというか……。 こう、大きさとか関係なくてだな、いやでも大きいからこ

そいいわけであって、大きくなかったらやつぱりダメなような……、いやしかしながらフェイトのいいところは胸だけじゃないんだし——

「……変態バカ」

「うっ、面目ない……」

なのはの冷たい声に思わず謝る。　けど男ってこんなもんじゃないのか？

なのははそんな俺をジト目でじっと見て——やがて、ふっと笑って見せた。

その笑顔がどういうことなのか、いまの俺にはよくわからなかったが……どうやらそこまで機嫌を損ねているわけではなさそうだ。

なのはは遠巻きにビーチバレーを楽しむ皆をみながら、感慨深いように呟いた。

「増えたね、わたし達の周りも」

「ん。　そうだな」

「はじめはわたしと俊くんの二人つきりだったのに。　ユーノ君に会って、フェイトちゃんと出会って、アースラの皆さんと会って、はやてちゃんと会って、ヴィータちゃん、シグナムさん、シャマルさん、ザフィーラさんの守護騎士の面々、リインフォースさんに出会って。　ティアにスバルにエリオにキャロ、スカさんにウーノさんにおじさん。　そしてわたし達の大切な宝物のヴィヴィオとガーくん。　いつの間にか、囲まれちゃったね」

「ははっ、気付けば大所帯だな。　どいつもこいつも手放したくない奴ばかりだよ。　どいつもこいつも危なっかしい奴だからだからな」  
それに俺は既に、二回も手放しているわけなのだから。

そういつた俺に、なのはは呆れた溜息を吐く。　そして鼻先をちょんと叩いて膨れっ面をみせた。

「わたし達からしてみれば、俊くんが一番危なっかしいんだよ？　そのくせ、だれよりも前に出て危険な役をやらうとする。　だから皆、俊くんを囲ってるんだよ？」

「おいおい、なにを馬鹿なこと言ってるんだ。　俺はいつも最後尾に

いるぞ。そこから皆を見守るんだよ」

「だーかーらー、俊くんが最後尾にいたら皆心配して後ろにいつちやうに決まってるでしょ？　ほんとおバカさんなんだから」

何故かバカにされた。あれ……？　最後尾にいると思っていたのは俺だけだったの……？

「まったく……やっぱり俊くんはダメダメだなー。これだからダメ男なんだよ」

「だ、ダメ……男？」

まさか好きな人にダメ男呼ばわりされるとは……。

複雑な俺の心境を知ってか知らずか、なのは俺の手をそっと握ってきた。

そしてこちらに顔を向けて、満面の笑顔でいつてきた。

「ダメ男さんはふらふらと何処かに行く癖があるから、しかたなくわたしが手を握ってあげましょう」

「む……、なんだよその言い方。俺だってそんなふらふらとしてないぞ」

「はあ……これだからキミはダメなんだよ。そこらへんも少しずつ勉強しようね」

うっ、俺ってそんなにふらふらしてるのかな？

『パパー！　なのはママー！』

遠くからよく知った声が俺たちを呼ぶ。声のする方向に目を向けると、ヴィヴィオがこちらに手を振っていた。その隣ではガークンも手を振りながらこちらに駆けてくる。どうやらガークンのほうは海水の件、大丈夫なようだ。

「どーん！」

「きやつ、こーらヴィヴィオ。なんでわたし達の間に入ろうとするの」

「えへへ……、パパーだっこー」

なのはの声を無視して、ヴィヴィオが俺のほうに両手を広げてくる。

それに苦笑しながらも、可愛い娘に頼まれる快感に身をゆだね臍か

ら抱き上げる。

丁度対面する形での抱つことになった。

「パパー、ヴィヴィオのことすきー?」

「うん? 当たり前だろ、ヴィヴィオのこと大好きだよ」

撫でながら答える。 隣のなのはあまり面白くなさそうに顎にヒジをつけて俺とヴィヴィオの会話を見ている。 もう犯罪者を見る目だ。

ヴィヴィオは俺の答えを聞いて、満足したのか笑顔で言ってきた。

「えへへ、ヴィヴィオもパパだいすきー。 スバルンにきいたらね?

パパはヴィヴィオのことすきだから、ヴィヴィオとパパはけっこう? できるんだって!」

「そ、そうなんだく……。 す、スバルがねく……」

全身に悪寒が這いよってくる。 体の芯が急激に冷えた感じがして、体がぶるぶると震えてきた。

「ねーねー、パパはヴィヴィオのおむこさんになってくれるんでしょー?」

「い、いやヴィヴィオ。 これはだな……。 こ。 言葉のあやというかなんとというか……。 そもそもパパとヴィヴィオとじゃ年齢差が激しいという問題が……」

「……パパはヴィヴィオのこときらい……。?」

先程まで笑顔だったヴィヴィオが顔を曇らせ、泣き目で俺に聞いてくる。

「そんなわけないだろ! ヴィヴィオのこと大好きに決まってるだろ!」

「ヴィヴィオもだいすきだよ? スバルンがさつきいってたもん。 すきなひとどうしはけっこうんできるって」

ヴィヴィオの無垢なまなざしが痛い。 確かにその通りなのだが、それはあまりにも夢物語というかなんというか。

そんなあまりヴィヴィオに現実を叩きつけることができない俺に、代わりに隣の人物が叩きつけた。

「ヴィヴィオ、俊くんにはもう相手がいるからダメなの」

ちよつと俺の思っていた言葉とは違う形だったけど。

「えー? だれー?」

「そ、それはほら……、いつも一緒にいる人……じゃないかな?」

なのはがこちらをチラチラと見ながらヴィヴィオの問いに答える。

ヴィヴィオはなのはの言葉を聞いて、隣のガーくと必死に考える。首を左右に揺らしながら考える姿がなんとも可愛らしい。

そうして待つこと10秒、頭に閃きの電球が光ったかと思うと大声で叫んだ。

「おじさんだ!」

「……え、な、なのはは……俺とおっさんを結婚させる気なのか……?」

なんて怖い女だ。手を握ってくれるといいながら、谷に突き落とそうと誘導してやがる。

「ちよつ、違うに決まってるじゃん! ほ、ほらヴィヴィオ! 他にもいるでしょ? 俊くんと一緒にいる女の人が!」

「……リンディメツシュさん?」

「俊くん、ちよつとお話があるんだけど」

「誤解だから!? たまたまヴィヴィオと三人で買い物したくらいだから!」

「へ……未亡人と娘を連れて買い物ね」

なのはが顔だけ笑顔でこちらに詰め寄ってくる。その姿と覇気が恐ろしくダッシュで逃げ出そうとはしたものの、バインドによって縛られてしまった。

そしてそのまま馬乗り状態へ。

「キミは手を握るくらいじゃ足りないみたいだね。首輪が必要みたい。それも決して外れないほど頑丈な首輪がね」

「い、いや、ごめんなさい! よくわからないけどごめんなさい!」  
必死に命乞いする俺に、なのはは顔を近づけて耳元で囁いた。

——ダメ

後でスバル張り倒す。

## 70. サメきたらしいよ

「いたいいたいいたいっ!? ひよつとこさん肩が外れそうなんですけど!?!」

「気にすんな、お前らみたいな変人には多いぞ。『きのせい』という病気は」

「いや明らかにあなたが私の肩を外そうとしてるからじゃないですか!?! ちよつ、なんでそんな力が強いんですか!?! ひよつとこさん一市民ですよね!?!」

「あれ、スバルは知らないんだっけ? 俊くんは小さいときからわたしのお父さんやお兄ちゃんと一緒に修行してたから強いよ。そこらの一般人より遥かに」

「それに加えて俺の父さんは、バカみたいな常識外れのスペックの持ち主だったからな。俺もそのスペックを受け継いでいるというわけだ。まあ……俺は平和主義な上に痛い嫌いだし、後ろで指示を出すほうが好きなんだけどな」

「私の肩外そうとしている男の人が平和主義なわけないですよね!?! メシメシいってます、肩が悲鳴を上げちゃってますよ!?!」

「あれだ、人間の体なんて遅かれ早かれ壊れるわけだしお前も管理局員ならそれを覚悟してだな——」

「嫌ですよ!?! 助けてくださいなのはさん! 可愛い部下が襲われてますよ!」

「……可愛い……部下?」

「なんでそこで可愛らしく小首を傾げるんですか!?! ほら、目の前にいます!」

「スバルはべつに可愛くないよ」

「最低だこの上司!?!」

なのはさん容赦ねえ……。冗談だとわかってるけど、あんな極上の笑みで言われるとかえって辛いな。

現在、俺となのははスバルに尋問の最中である。決して拷問とかじゃないところが、俺たちの大人としての配慮だよな。



俺の状態はというと、触った感じ肋骨が折れてる。 まあ……あの状態のなのはから肋骨だけで済んだのは御の字だ。 不幸中の幸いである。 そしてあの場を盛大に掻きまわしたヴィヴィオはというとガーちゃんとエリオとキャロと一緒に砂遊びをしていた。

「あのなあスバル。 俺もなのはもフェイトも、ヴィヴィオには真つ当な人間になつてほしいわけよ。 俺のような社会からはみ出し者じゃなくて、なのはのようなポンコツじゃなくて、フェイトのような真つ当な人間になつてほしいんだよ」

「あれ？ 俊くんいまわたしのことポンコツっていったよね？ 平気な顔してポンコツっていったよね？ わたし達の絆は？」

「確かに、俺やなのはやフェイトのアニメ・ゲーム・マンガ好きをヴィヴィオが影響受けてるのは確かだよ。 けど、それくらい趣味の範囲だから。 それなのにさ、スバルが結婚だのなんだの教えるから、ヴィヴィオが小悪魔化したらどうすんだよ？ 俺はヴィヴィオの隣にいる男性を何人殺さなければいけないんだ」

「いや、ひよつとごさんの中では殺すこと前提なんですか？」

「当たり前だろ」

「おいちよつと話聞けよ。 わたしのどこがポンコツなのかハッキリしよう。 これはわたしのプライドが許さないよ」

「けどですね。 ヴィヴィオちゃんがひよつとごさんとなのはさんが二人並んだ座ってる所を見て言ったんですよ。 『パパとなのはママがかまってくれない』って。 だから結婚をネタにしたらヴィヴィオちゃんが喰いつくかと思つて」

「……あー、ごめん。 悪かつた」

「いえ、分かっていたただけたのなら結構です。 私もあそこまで食いつくとは予想外でしたし。 安易に結婚をネタにしたこちらも悪いですし」

「あの……そろそろわたしの話を……」

「しかしまあ……べつにヴィヴィオを蔑ろにしたわけじゃないんだけどなー。 やっぱりヴィヴィオ的には構つてくれないと思つたのか」

「そりや、ヴィヴィオちゃんはひよつとごさんやなのはさん、フエイトさんのこと大好きですからね」

「まいったね、娘を楽しませることができないなんて、ピエロ以前に父親として失格だよ」

頭を掻きながら自分の失態に舌打ちする。そりやそうだよな……、ヴィヴィオの年齢だとまだまだ親と遊びたい頃だよな。俺も父さんと遊びたい盛りだったし。……まあ、いまも遊びたいのだが。

砂遊びしてるヴィヴィオに近づく。

ヴィヴィオは俺に気付いたのか、顔を上げると笑顔で自分の隣を叩きだした。どうやら此処に座れという意味らしい。

ヴィヴィオの言いつけどおりに座った俺に待っていたのは、ヴィヴィオの尻である。もう少し詳しく言うのであれば、胡坐をかいた俺の膝の上にヴィヴィオが乗った状態である。ついでにガークンも俺の頭になぜかのつた。二人とも俺のどこかに乗るのが好きですね。なんなら騎乗位で激しく腰振ってもいいんだぜ？ ヴィヴィオの処女はパパが頂いちやうぞー！

「あ、あの、ひよつとごさんー！」

「はい？ どしたのエリオとキャロ。お腹痛い？ トレイ付き添いしようか？」

「ぼ、僕たちもそつちに行つていいですか!？」

「え？ どうぞどうぞ。カモン！」

手をばしばしと両手で叩きながら促すと、エリオとキャロは嬉しそうに顔を見合わせて俺の隣に座った。丁度、座席でいうと キャロ・俺（ヴィヴィオ、ガークン）・エリオという感じだ。三人揃って団子三兄弟である。

「ところでエリオとキャロは六課には慣れたかな？」

「は、はい！ もう大丈夫です。皆さん良い人ばかりですし」

「六課は体よりも心が鍛えられそうです。隊長の皆さんの経験談や意見を沢山聞くことができますし、何かあったときは全員で解決方法を考えたりして、最高の職場だと思つてます。あ、この前も全員で

解決方法を考えたんですよ?」

「ほうほう、それはどんな問題でどんな解決方法だったのかな?」

キャラロがいまにも話したそうに体をうずうずと動かすので、相槌を打って先を促す。

「あのですね! 誰がギルドマスターをやるかの問題で、はやてさんがギルドマスターをやることで解決しました」

「お前ら職場でネットゲやってんの!」

「あ、いえ。一応、PSPですね。私もエリオくんもあまりできないというか……お仕事だからやらないうようにはしてるんですけど……」

「ヴィータさんを除いた人達が誘ってくるんです……。ヴィータさんの近くにいれば安心なんですが」

「そつかあ……。ロヴィータただけだな、上司という立場は」

後でロヴィータちゃんに良い子良い子してあげよう。

「まあなんだ。なにかあったら六課の皆に相談だな。揉め事なら俺に相談することだ。大抵のことはなんとかなると思うから」

そう言ったところで、腹の虫が盛大に鳴る。次いでエリオとキャラロ、ヴィヴィオとガーくんの腹も鳴る。

「パパー、おなかすいたー」

膝の上に座ってるヴィヴィオがばしと俺を叩きながら口を尖らせる。

「だなく。俺も腹減った。昼ごろに大人組とアリサとすずかが来るとは言ってたけど……。先に飯食うか」

「海の家に行くんですか?」

「まあ、そこしかないからな」

ヴィヴィオを肩車して立ち上がった俺に声をかけるエリオ。エリオは俺の答えを聞いて、自分も行くと言い出した。そしてそれを受けてエリオの隣にいたキャラロも行くと言い出す。

「あく、べつにここで待っていていいよ? ただ海の家の人に場所を少しだけ借りる交渉しに行くだけだから」

「え? 交渉ですか?」

「そうそう、海の家で俺が昼飯作るんだ。だから少しだけスペースを貸してもらおうと思ってるね。毎年のことだからさすがに了承貰ってくるよ」

「まあいいじゃないかひよつとこ。エリオとキヤロも連れて行ってやれば。これも経験の一つになるだろうし」

後ろからかけられた声に振り向くと、ロヴィータが腕組みしながら俺のことをみていた。

「これ経験になるか？　まあ、そこまでいうならいいけどさ。べつに何かするってわけでもないけど」

「……お前はなんであたしの頭を撫でてるんだ？」

「ロヴィータちゃんはいえらいでちゅねー。いいいいこでちゅー」

ボキツゴキツ

「……調子にのってごめんさい」

ロヴィータちゃん、見かけによらず怖いよね。　いま股関節外されて、そして股関節戻されたよ。

何事もなかったかのようにロヴィータちゃんはエリオとキヤロを連れて歩きはじめる。　こいつ神経図太いな。

「そういえばひよつとこ。　さっきなのはがお前のこと『すつとこどつこい』とか言いながら怒ってたぞ」

「……なんで？」

「さあ？　またお前がやらかしたんじゃないのか？」

「むしろ一方的にやられたの俺なんだけど」

「ところでひよつとこ。　お前海の家で何作るんだ？」

「うくん……どうせ海の家手伝うことになるだろうし、適当に食材ちよろまかして作るよ。　誰かが魚とか釣ってくれる嬉しいんだが」

――

『サメだー！ー！ー！　サメがきたぞー！ー！ー！！』

「……………」

……おかしい、ここ海鳴だよ？　なんでサメがいるんだよ。

固まってる俺をみて、ロヴィータちゃんが極上の笑みでサメのヒレが浮かんでいる方向を指さす。

「よかつたなひよつとこ。魚がきたぞ！」

「いやいやいやいやいや!? 確かに魚かもしれないけど、俺があれ仕留めんの!?!」

「サメくらい倒せるだろ?」

「いけなくもないけど痛い嫌いだし! 相手はサメですから!」

そういつている間にも海水浴に来た客たちは悲鳴を上げながら逃げていく。他の六課メンバーもこの異常事態に気付いたのか、こちらに駆け寄ってきた。

「ひよつとこ。サメを倒せば、なのはもフェイトもはやてもお前に惚れるぞ?」

「え? ほんと?」

「間違いなく惚れる」

「よし、行ってくる」

駆け寄ってきたなのはとフェイトとはやてのほうに一度目を向ける。

三人とも俺とロヴィータが何を言っているのか聞き取れなかったのか、きよとんとした顔を浮かべていた。

そんな三人娘にウインクし、高速でこちらに向かってくるサメの前に対峙する——途中でやめた。

「どうしたひよつとこ? さつさと死んでこいよ」

「いいよ。それよりもさつさと海の家に行って交渉してこようぜ。ヴィヴィオとエリオとキャロがお腹すかせてるんだし」

俺はヴィヴィオを肩車したまま、エリオとキャロを連れだつて海の家へと進路を固定してもう一度歩きはじめた。

「世の中は適材適所。アレには俺よりも素晴らしい材料がきたから大丈夫だろ」

そういつてロヴィータに指さす。遙か前方に仁王立ちしている男たちの姿を。

「心配すんな。俺が信用するミッド最強の局員と、信頼する海鳴最強の剣士が相手だからさ」

俺が指さす方向には、おっさんと土郎さんが水着姿で立っていた。

どうやら今日の昼はサメ料理に決定したようだ。

☆

「悪いね、毎年毎年貸してもらって」

「へへ、気にすんなって！ それより……そのサメ食う気なのか？」

「とりあえず、醤油焼きやバターソテーにしてみる。ふかひれは絶対使えるだろうけど。刺身は……いけるか？」

「いや、聞かれても困るが……」

おっさんと土郎さんがサメを獲得してから10分。俺は最初の予定通りに、海の家へ交渉に行った。交渉自体はなんなく終わったわけだが――

「いや、海の家って混むねー。大盛況もいとこじゃねえか」

サメを捌きながら、隣で焼きそばを作っている店主に喋りかける。

此処は海の家にしては意外と金額も安くて、店主の腕もいいので毎年毎年盛況なのだ。

「おい、ひよつとこ。お前の望み通りにタコ釣ってきたぞ」

「誰が2mのタコ釣ってこいといった。タコ坊主が」

おっさんがタコを片手に戻ってきたのはいいものの、その大きさに思わず悪態を吐く。微妙にうねってるのがなんともいえない。

「ところで、いつ来たんだ？」

「お前が海の家に向かう途中だよ。そこからサメが来たってんだから急いであそこに行った」

「ふくん。あ、子どもたちに料理持ってつてくれ。俺や大人組はまだいいだろ」

おっさんに先ほどエリオやキャロ、ヴィヴィオやガーくんにスバルにテイクアウトで作った料理を運ばせる。他の奴らは後回し。子どもが一番である。

海の家はやはりというかなんというか、俺たちのような大所帯には少し手狭なので先程のパラソルを少し大きくしてそこで昼飯を食べることにした。といっても、紙皿を持っていくだけなんだけどな。

「ほお……かば焼きまで作ったか」

「意外と此処って食材があるんだよな」

まあ、そのかわり店主しかいなくて回らないんだけど。

「とりあえず、客を捌き終えたら俺も行くからそれまではだらだらと  
しててくれ」

『手伝ってくれー!』

「うーい! んじゃ、よろしく頼んだ」

おっさんに軽く手を振って客の注文を取りに行く。

さて……午後からなにするかな。

## 71. 男たちのビーチフラッグ

ようやく昼のピークが終わりを告げた。結局のところ、サメやらタコやらは他の客にも出すことにして、少しでも量を減らすこととなったわけだが……。何分、サメ料理は初めてのことで勝手がわからなかったがそれでも客に美味しいと言ってもらえたので嬉しい限りだ。

俺はそのまま若干疲れた足取りで海の家に置いてあるサイダーを一本貰って皆のいる場所へと歩いていく。

白砂のなんともいえない感触が少しではあるが、子ども心を湧き立たせる。

そうして歩いていると、ヴィヴィオが俺の姿に気づき手を振ってくれた。それに俺も振り返ってそのままパラソルのほうにお邪魔する。

さて……どこに座ろうか。

目の前にはシートをいっぱい広げた場所に全員が座っていて、俺の座る場所など残っていないなかった。

……しようがない、陽の当たる所でもいいか。

そう考えてシートのはずれに腰かけよう——としたところで誰かが横から俺の手を握った。

手を握った相手はフェイト。そしてそのフェイトの横には狭いながらも空白ができていた。フェイトはそのまま俺の手を掴んだまま、逆の手で空白部分を少しだけ指で指さす。どうやら此処に座れ、ということらしい。これはありがたい。軽くお礼をいってそこに座ることに。

「はい、俊。確保しといたよ」

「サンキュ、フェイト。あ、サイダー飲む？」

「うん、ありがと」

フェイトから自分用の料理を渡されたので、つついっ無意識にサイダーを飲むか聞いてしまった。……まあ、飲み物はまだあるしいか。



フェイトにサイダーをあげて、自分は割り箸で料理を食べる。どれもこれも意外と上手くいった、と自分の中で思った。

「これからどうする?」

「う〜ん……大人組がきたしなんか大人数でするスポーツやるか?」

「ビーチフラッグとか?」

「それ大人数じゃできないよ?」

「トーナメントとか?」

「うーん……」

どうやらフェイト的にはビーチフラッグはあまりよろしくないらしい。難色を示している。

俺とフェイトが二人で考え込んでいると、目の前に白の水着が忽然と姿を現した。思わずその水着につられて上を見上げてると――

「私達に挨拶抜きとはいいい度胸じゃない?」

「あ、アリサちゃんダメだよ! 俊君いま帰ってきたばかりなんだから!」

……そういえば、アリサ達も呼んでたな。すっかり忘れてた。

「よお、アリサ。 その水着可愛いな」

「そりやどうも。 それより、えらく疲れてるわね。 流石のアンタ

もあの人数を捌くのは骨が折れるのかしら?」

「まあ若干ではあるものの疲れたよ。 いや、それよりごめんな。

呼んでたのに無視しちゃって」

「べつにいいわよ。 アンタは一つのこと集中すると他のことが見えなくなるし。 大方、フェイトと一緒にいることに夢中だったんでしょ?」

「い、いや……べ、べつにそういうわけじゃないけど……」

何故バレた。俺がフェイトとの至近距離のこの状態を楽しんでいることが何故バレた。

「そ、そうなの?」

「い、いや……まあ……うん。 ほ、ほら、帰省してからあまりフェイトと喋れてないし、できればこういったときに喋っておきたいなく、なんてことを思ってた」

少なくとも、なのはやはやてよりも喋ってないし。　ちよつとフェイト成分が足りなくなってきた。

「そ、そうなんだ……」

「お、おう……」

互いに会話が途切れる。

き、きまらずい……。

ちなみにアリサとすずかの水着はともにワンピースタイプでアリサが白、すずかが紫だ。　さほど興味ない。

フェイトとの会話が止まってしまつてしまうと、今度は前から俺の足をヴィオが叩いてきた。

「パパ、ヴィヴィオおさかなたべたい!」

そういつて手に持つている皿を指さす。　成程、まだ食べ足りなかつたのか。

「んじゃ、パパの膝においで。　はい、あーん」

「あーん!」

ヴィヴィオを膝にのせて、箸でヴィヴィオの小さな口にも入るほどの大きさに切り身を切り大きく開けたヴィヴィオの口にゆつくりと入れる。

ヴィヴィオはもぐもぐと咀嚼すると笑顔で

「ヴィヴィオもやる!」

と俺の皿を笑顔で取った。　そのとき、醤油が俺の乳首にはねたが気にしない。　流石ヴィヴィオ、こんなときでもパパのツボを心得ている。

「はい、あーん!」

「ヴィヴィオちやーん、ちよつと大きいかなー。　パパの口はそこまですぐ大きいからねー」

魚を切り身をそのまま手に取つて俺の口に強引にねじ込んでくるヴィヴィオ。

成程、これがイラマチオですね。

本気で苦しいです。

「こ、こらヴィヴィオ!?!　俊がタップしてるからやめようね!?!」

笑顔で押し込んでくるヴィヴィオの手をフェイトが慌てながら止めてくれる。あぶねえ……フェイトが助けってくれなかったら口腔内を魚の切り身に蹂躪されて凌辱されてそのまま絶頂するところだったぜ。切り身相手に絶頂とかいくらなんでも悲しすぎる上に間違いなく変態扱いされてフェイトから嫌われる。

フェイトから止められたヴィヴィオは俺の顔を覗き込みながら、「ごめんね？ ごめんね？ パパ大丈夫？」と謝ってくる。

そんなヴィヴィオが可愛くて頭を撫でながらつつい許してしまった。

ヴィヴィオには勝てそうもない。

そんなヴィヴィオの横をふとみるとガーくんが物欲しそうに俺をみていた。

「ガーくんも食べる？」

「タベルタベル!!」

聞くとガーくんが嬉しそうに返事をするので強引にねじ込まれた部分を噛み千切つて口をつけてない所をガーくんにあげる。

ガーくんは、はむ！ と魚の切り身をくわえると踊り食いを始める。

「ガーくん、ちゃんと行儀よく食べないとダメだよ。ほら、ここに座って」

「ハイー！」

そんなガーくんの踊り食いをみて、フェイトがガーくんに注意する。そして自分の膝を叩いて座るように促す。ガーくんはそれに素直に従う形でフェイトの膝に座り魚を食べる。そんなガーくんをみてアリサが一言つぶやいた。

「これ、物の怪の類じゃないの……？」

「物の怪がペットショップに売ってるわけないだろ」

「喋るアヒルもペットショップには売ってないわよ」

「新種のアヒルということだな」

「まあ……アンタ達がそれでいいならいいけど」

アリサが俺とフェイトをみながら、とても面倒そうな、それでいて

胡散臭そうな目で言う。

「ガークンいいなー。 フェイトママのおむねがあたってるよ」

「え？」

「へ？」

膝の上にいたヴィヴィオの言葉でフェイトの膝にいるガークンに目を向ける。

そこにはフェイトの胸が頭の上に乗っているガークンの姿があった。

「コレジャマ……、ガークンソツチイク」

ガークンはフェイトの巨乳に頭が何度か当たっているようで、それが嫌なのか俺の頭の上に跳んできた。

「……………」

フェイトは顔を赤くしながら俯いて、俺は目から赤い涙を流しながら俯いた。

「ぎっけんな……よ……！ ……なんで俺じゃなくてアヒルなんだよ……！ ……望んでねえよ、そんなシチュ誰ものぞんでねえだろ……！」

握りしめた拳の皮膚が裂け、血が滲むのが伝わってくる。アヒル相手に怒りの矛先を向けるわけにはいかないので、上唇を噛みながらこの怒りが収まるのを待ち続ける。

そんなとき、隣のフェイトが俺の肩をちよんちよんと突いてきた。ぎこちない動作でなんとか振り向く。表面上は笑顔であることを忘れずに。

そこで見たフェイトは——とても可愛かった。

顔を赤くしながら、あうあうと狼狽えながら何かを言おうとしていた。思わず抱きしめたくなる。

「あ、あのね……？ ……わ、私はアヒルに、む、胸を当てるほど………その……アレじゃないからね？ ……これは事故で、決して、その……アヒルとかじゃなくて………」

「う、うん。 わ、わかってるから！ ……フェイトはそんな子じゃないとわかってるから！」

「ほ、ほんと……？ ……それじゃ、私のこと嫌いにならない？」

「なるわけない！ なるわけないだろ！ フェイトの胸大好きだよ！」

「……胸……だけなんだ……。ぐすつ、俊は胸しかみてないんだ……」

「い、いやそうじゃなくて!?!」

俺の手をもったままフェイトが鼻をすすりだす。

『だれかリンディさん止めろ!?! ひよつとこ殺されるぞ!?! 目がマジでヤバイ!』

『ぎけ x f v t y g ぶ h n p ; ; j ; l 。 k 、 h m j n g f d s z x  
d f c j g v k h l b ; n l ; ? j : k j j . ; l 。 、 h m j n g f b  
x d z f c v ご b p n m k : ? x . i . , k j m h g f d 0 0 7 A c v  
g b h n k p @ ; l k j h g f ! ! ! ! !』  
『くそつ!! 虚化しやがった!?!』

『全員分のバインド引き千切ったぞ!』

「フェイト……。死ぬ前にいっておきたいことがある。確かにフェイトは胸も魅力的だけで、それよりもその笑顔が一番俺は好きだよ。なのはの笑顔も大好きだけ

で、それと同等くらいフェイトの笑顔が大好きなんだ。PT事件のとき、俺がフェイトにいった言葉覚えてるか?」

「う、うん……。『友達になろうなんて高望みはしない。ただ一度だけ、俺にキミの笑顔を魅せてくれ』だったよね」

「ああ、その通りだよ。だから笑ってくれ。フェイトの泣き顔も可愛いし、保護したくなるけどそれよりも笑ってくれ。それだけで今日一日、俺は生きる希望ができるから」

フェイトの両肩に手をおいてそう懇願する。

——キミの笑顔をまた明日も見るとのために、俺は今日を生きるから  
そういつた俺に、フェイトはふんわりと笑ってくれた。そして俺の顔に手をおいて、「しようがないなあ」なんて言いながら顔を近づける。体が金縛りにあったかのように動かない。けど、それでもいいと思った。

そして——

「m又hbygvtfcdrtfyヴ美のm::lnbkvgcdf  
xztstxydtcヴゆgびほ::jjj・。l、k jyhdxdcf  
vgbhjnmk、  
l。::;x d c t f r v y !gぶひんjもk、l。::: x d c f v  
gぶhnjmk、l。;・:!!」  
俺は虚化したリンディさんは首根っこを掴まれた。

☆

「……すいません、シャマル先生。治療なんてさせてしまつて」  
「いえ……それはいいんですけど……、よく生きて帰つてくれました  
ね」

パラソルシートの下、俺は寝転がりながらシャマル先生の治療を受  
けていた。俺もよく生きていたと思う。今日ほど父さんに感謝  
したことはない。

ここにいるのは俺とシャマル先生だけ、その他の皆はシートから出  
て楽しそうに水をかけあつていた。

「それにしてもリンディさん怖かったですね、俺もう死ぬかと思いま  
した」

「リンディさんのほかにも呪法を唱えていた人もいましたけどね」  
「なにそれ怖い」

そんな人が俺の周りにいるのか、怖すぎて近づきたくないぞ。

ゆつくりとシャマル先生のヒーリングが俺の体を癒してくれる。  
はあ……落ち着く。

癒されながら、他の面々をみることに。

なのはは嬢ちゃんとスバルに追い掛け回されてる。二人とも変  
態の目をしていた。いつも通りだ。

フェイトはヴィヴィオとはやとシグシグとアリサとすずかと遊  
んでいる。眼福である。

リンディさんと桃子さんは年がアレなのに、無謀にもハイレグを着  
ていた。ババア無理すんな。

『俊ちやくん、ちよつとこつちこないー?』

お二人とも美人でスタイルがいいので、俺が求婚を申し込んでしま  
いそうだ。

ロヴィータと美由紀さんはエリオとキャロに泳ぎを教えているよ  
うだ。みててほんわかする。

スカさんとウーノさんはガーくんは何やら質問をしているようだ。  
ガーくんが答えるたびに嬉しそうにしているスカさんの顔が気にな  
ってしまふ。

士郎さんや恭也さん、ザツファイーにおつさんはなにやらガチムチっ  
ぽいトークを繰り広げていた。訓練がどうか、むさ苦しいのでど  
こか行つてほしい。

そんなこんなで皆をみると、嬢ちゃんが俺に気付いたのかなの  
はを追い掛け回すのはやめてこちらに駆け寄ってきた。来るな変  
態。

「ひよつとこさん、おじさんたちがビーチフラッグをやろうとって  
ましたよ」

「え、マジでやんの? 誰が相手?」

「おじさんとお義父さんと御兄さんとザファイーラさんとひよつとこさ  
んのメンバーでやろうとのことですよ」

ん? いまこの娘、士郎さんのこととお義父さんって呼ばなかった?

なに、この娘の中ではどういった家庭が出来上がってるわけ?

深追いしたら帰れそうになさそうなので追及はやめておこう。

寝転がったまま答える。

「まあ、べつにそれはいいけどさ。いつやんの?」

「いまからです」

そういつた途端、シャマル先生が全力で魔力を注ぎ始めた。

いったい俺の体はどれほど負傷していたんだ……。

☆

「第一回! ガチムチビーチフラッグ選手権!!」

はやての失礼な声とともに後ろでみている面々が拍手と応援の声をこちらに向けてくる。

「さあはじまりました、最初で最後のビーチフラッグ選手権！ In 海鳴！」

俺の隣に並ぶのは、土郎さん、おっさん、恭也さん、ザツファイ。それぞれがそれぞれ準備運動をしながら体をほぐしている。今回は相手が相手なだけに全員本気なようだ。

「まあ、尺もありませんのでとりあえず出場者を紹介していきましよう！」

……… 適当だな、はやてさん。

はやてが土郎さんにスポットを当てながら喋る。

「まずは喫茶翠屋の店長、高町土郎さん！ エースオブエース、高町なのはのお父さんにして上矢俊の師匠でもあるこのお方！ その神速は、文字通り神の如き速さ！ そのスピードをいかして見事フラッグを手に取ることができてるのか!? それでは土郎さん、一言お願いします」

マイクを差し出される土郎さん。

「桃子——惚れ直すなよ?」

かっけええええええええええええええええ!! この人、やっぱりかっけええええええええええええええ!!

桃子さんの顔を赤くしながら、『もうっ! ……大好きですよ』とかやってるし! なにこの夫婦、うらやましますすぎる!? 俺もこんな夫婦になりたい。

はやてが『こんな夫婦になりたいなく』とかいいながらおっさんのほうに移動する。 気持ちはわかるぞはやて。 憧れるよな、この夫婦。

「お次はミッドが誇る最強の局員! おじさん! その力と技でミッドの異常者どもを一網打尽! まことしやかに管理局最強ではと噂させているこのお方、今日はどんな

チートを魅せてくれるのでしょうか! おじさん、一言どうぞ」

「局員として、ここは負けるわけにはいかん」



俺の予想、おっさんは手を抜くはずだ。こいつが本気になったら流石に勝負そのものがダメになるしな。

はやては『頑張ってください！』 そういつて恭也さんのほうに行く。

「お次は高町恭也さん！ 高町土郎指導の下、着々と力をつける海鳴の若きエース！ 今日弟弟子の上矢俊がいる手前、みつともない真似はできるはずがない！ そう豪語した恭也さん！ いまここに親子二代の神速を見ることができるのか!? では、恭也さん一言どうぞ」

「忍にいい土産話ができそうだ」

この人、もう勝った気でいやがる……。 おいおい、それはいくらなんでも早計すぎですよ？

「お次は私の自慢の家族、ザファイラー！ ベルカの守護獣たるこの男、常に鉄壁の守りをみせていたこの男がついに攻めに転じる！ 獣のように疾駆する体、一度標的を決めたら逃がすことはないその鋭い眼光！ ザファイラーに目をつけられたフラッグが可哀相である！ さあいけザファイラー！ 八神家の意地をみせつけるんや!! あ、なにか一言ある?」

「いや、あの……。主はやての期待に応えられるように頑張るだけです」

ザッファイー可哀相、もう期待に答えなきや！ という重圧が視認できるほど膨れ上がってるぞ。

そしていよいよ俺の出番。

「最後は人類を陥れるために神様が送り込んだ刺客、上矢俊！ ミッド一のバカにしてミッド一の異常者！ その割には無駄に高いスペックを有するこの男！ そのフラッグをもつて誰に告白していくのか！ これも見所に一つであります！ あ、俊。もちろんわたしにくれるやろ?」

「へ? まあフラッグくらいやるけどさ。それよりも告白して——」

『俊——！ 頑張ってね——！』

『パパー！　がんばれー！』

「おーい！　みててくれよー！」

フェイトとヴィヴィオが手を振ってくれたので、俺も振り返す。フェイトの隣にいるのははむくれている。　なんであいつはむくれてるんだ？

これで全員分の紹介も終わった。　さて、ここからが本番だな。

「勝ったらキスしてあげるで」

去り際にはやてがそんなことをいつてきた。　……何が何でも勝とう。

皆で後ろを振り向き（みんなの方を向いている状態だ）うつぶせに寝る。

さあ——本気を出すときがきたようだ

全員が固唾を飲んで見守る中、はやてが笛に口をつける。

いつの間にか沢山の人が俺たちの行動をみていた。　それもそうか、こんなことしてるしな。　怒られないだけマシである。

「よーい！　どん！」

八神はやての口から甲高い音が鳴った瞬間、四人は一斉に動きだした。

まず最初に動いたのは高町士郎だ。　自慢の神速を遺憾なく発揮し、三人よりも一歩前に出た。

そこに恭也が足をかけた。　恭也の足を刈り取るような動きに、士郎は思わず小さくジャンプする。　そこに動きを合わせるように俊が士郎の背中を踏み台にして飛び越える。

俊はそのままの勢いでフラッグを手に取ろうとする——が、横からザフィーラの飛び蹴りが腹に命中した。　脇腹を抉りながら蹴られたザフィーラの足は最後に軽く捻りをくわえることによって俊への痛みを倍増させる。　肺の空気を吐き出しながら勢いをそのまま横に一気に移動する俊。　そんな俊の後ろ、その男は立っていた。

背中にぞくりと悪寒が走った俊は本能に身を任せ前方に大きくジャンプする。　チツと音をたてて俊の後ろ髪がほんの少しだけ燃える。　髪を燃やしたのはミッド最強の局員である。

この男、元からフラッグに便乗して俊を痛めつけるのが目的である。

おっさんとザフィーラに挟まれる形となった俊。流石に冷や汗を軽く流す。

そうして三人が対峙している隙に、恭也と戦っていた土郎が一瞬のすきをつけてフラッグに手を伸ばす。それをみていた俊がザフィーラにアイコンタクトを取ると、ザフィーラは左足を軸に後ろを見ずに右足を蹴り込んだ。その蹴り込んだ場所には丁度土郎の手。パシンと音をたてて弾かれた手を見て、思わず土郎はザフィーラを見る。

『舐めないでもらおうか』

そういうザフィーラに、土郎は唇を軽く舐めて答える。

『上等だ』

土郎は標的をザフィーラにかえ、一気に駆け出す。身構えるザフィーラの後ろに神速で回り込み側頭部に手刀を叩きこむ。容赦情けのない一撃がザフィーラを襲う。普通ならばこれで倒れる。否、倒れなければおかしい——のだが、土郎は相手を見縊っていた。相手は守護騎士であるザフィーラ。そこらの一般人とは格が違うのだ。手刀を叩きこまれてもなお、その眼光は鈍く、煌めきながら土郎を捕らえる。

その眼光に土郎が一瞬怯み、距離を取る。

その背後——恭也が握りこぶしをためながら待っていた。

土郎が気付いたときにはもう、全てが遅く——恭也の拳が土郎の背中を襲う。

背中を強打され、大きく距離をとった土郎。

その土郎をみて、恭也はほくそ笑みながらフラッグを手に取りろうとする。

ざわり……！ 恭也の体が警鐘を上げる。

『蹴り碎く』

その声が聞こえた瞬間——恭也の肩が何かを襲う。トラックに撥ねられたような衝撃が走り、針糸を通すほどの精密さで骨と骨の間

に親指がめり込む。

そしてそのまま、恭也の頭を両足で挟み捻じり落とす。

『甘いぜ恭也さん。　こればかりは負けられないんでね』

そう言葉を残し、颯爽とフラッグを手に取る俊。　その体はぼろぼろで先程までおっさんと壮絶なバトルを繰り広げられたことを物語っている。

俊はゆっくりとフラッグを手に取り、拳を天に上げ勝利を宣言——しよとした矢先におっさんの蹴りが顔面に命中した。

おっさんはそのままマウントをとって俊をタコ殴りにする。

それによって俊は思わずフラッグを遠くに投げる。　そのフラッグの行方は——ザフィーラの頭の上に乗ることとなった。

ザフィーラはここぞとばかりに宣言する。『俺の勝ちだ』と。

しかしそれでも勝負は終わらなかった。

ザフィーラの宣言を聞いてもなお、士郎はザフィーラの顔に砂をかけ背負い投げをする。

それによつて砂浜に打ち付けられるザフィーラ。

丁度その頃、俊のマウントを取っていたおっさんに唾を吐きおっさんが防いだ瞬間を見逃さず腕を捻りあげ俊は脱出した。

五芒星の形で全員がゆらりと立ち上がる。

もはや全員——フラッグになど興味はなかった。

あるのは——目の前の者たちを葬ることだけ。

それぞれ首を回し、肩を鳴らし、指をしならせ、屈伸する。

そして言い切る

『上等だ。　全員まとめてかかってこいや』

ビーチフラッグはガーくんの手によつて回収されていた。

☆

他のメンバーがそれぞれを応援しているのを横目にアリサが呟く。

「あの……私の知ってるビーチフラッグと違うんだけど……」

「まあ、こうなることはわかってたんやけどな。　ほら、新人達に魔法

なしの極限の戦闘がどれほどのものか見せようとおもてな」

「……はやては昔から策士よね」

アリサの呆れた声にはやては可愛らしく舌を出して答える。

「なんのことかわかんない」

俊たちの極限バトルは2時間にもわたり、最初から最後までギャラリーを飽きさせることなく終焉を迎えた。

ヴィヴィオの放った

『ヴィヴィオおうちかえりたい』

の一言によって。

## 7.2. 意気地なしのあなた

『せーの!』

「ブタです……」

「わたしとヴィヴィオは1ペア」

「1ペアー!」

「私は2ペアや。 俊は?」

「悪いね、フルハウス」

スバルと嬢ちゃんとなのはとヴィヴィオとはやてと俺、全員の声が重なった後にそれぞれ自分ももっていた手札を場に出す。嬢ちゃんとスバルが揃ってブタで、なのはとヴィヴィオが1ペア。この二人は普通に手札をみて二人で交換してたけど可愛いので許した。そしてはやてが2ペア。 てつきりストレートかフラッシュくらいはくると思っていただけに意外と拍子抜けである。

俺はというとフルハウスだ。 まあ、ぼちぼちのカードだったかな? 普通ならフルハウスがでた時点で勝ち決定なのだが——俺の隣でいまだ手札を出していないコイツが脅威でならない。

隣に座っているアリサがほくそ笑みながら手札を場に出す。

「悪いわね、俊。 ロイヤルストレートフラッシュよ」

アリサはそういつて場に手札を滑らせるように出す。

10 J Q K A のハート形。 どうみても勝てません、ふざけんこの金髪。

「くそがああああああああああああ! なんでもポーカーだとお前に負けるんだよおおおおおおおおおお!」

勝てる勝負しかない俺としてはアリサとのポーカーはダメなんだ。 妙に引きがいいアリサは常時フルハウスである。 こいつどういった星の元に生まれてきたんだ?

のんびりタイムのこの時間、それぞれが好き勝手に行動しているときに持ちかけられたポーカー勝負。 絶対アリサがいなければ俺が1位で皆に好き勝手命令できたものを。

じんべいスタイルの俺は足を組みながらぼやく。

「そもそも、アリサがポーカーにきた時点で勝利なんてあるわけないだろ。特定のBGM流れ出したら勝利フラグと同じようにこいつがポーカーした瞬間、勝利フラグが出来ちまうもん」

「女々しい言い訳」

隣でアリサで小さく呟く。

いまのはカッチーンときたね。完璧に俺キレたね。なのはとヴィヴィオを巻き込んで俺もロイヤルストレートフラッシュ決めてやるよ。

場に散乱しているカードを集めてくる。

「けどひよつとこさんもおかしいですよ。勝負の間、ずっとジョーカー出てますけど」

「俺とジョーカーは友達だからな。俺が『助けてくれ』というと笑顔で『いいよ』って返してくれる間柄さ」

「怪しい……」

スバルが俺に嫌疑の目を向けてくる。こっちみんな。しゃっしゃっしゃとくついていると、横からなのはが俺の袖を指さしながらいつてきた。

「俊くん、袖からジョーカーがみえてるよ」

「まじで？ あぶねえあぶねえ。サンキュなのは」

あぶねえあぶねえ。イカサマがバレるところだった。

極僅かだが見えていたジョーカーを定位置に戻してカードを配る。

——ところで皆の視線がこちらに向けていた。すんごい冷たい視線で。視線のレイザービームで思わずターンを決めたくなくなってくる。

「ひよつとこさん……ずっとイカサマしてたんですね……」

「なにいつてんだお前。俺がいつイカサマしてないです宣言したよ？ いままで見破れなかったお前たちが悪いだろ」

「ひどすぎます!!」

スバルと嬢ちゃんが涙を浮かべながら抗議してきたので脱兎の如く逃げ出した。だって怖いもん。

『あッ!? まってくださいいひよつとこさん! いままで私達が受けた罰ゲーム、そのまま全部受けてくださいいよ!!』  
『そうです!! イカサマしたんだから受ける義務があるはずですよ!!』  
『うっせータコ! 誰が目から牛乳飲んで口から出す宴会芸をするか!』

☆

スバルと嬢ちゃんから逃げ切った俺はあの場に帰ることはやめて一人自分の部屋へと戻ることにした。

「あれ、フェイト。俺の部屋で何してんの?」

「へ? え、えつと……ちよつとね……」

ドアを開け自室に入ると、風呂上りで浴衣をきているフェイトが俺のベットに女の子座りをしていた。微妙に見える生足が艶めかしく、かつ風呂上りということもあってエロい。

とりあえず部屋にはいった手前、出るのも失礼になるかとも思い椅子に座る。ノートパソコンでもつけよう。

電源をいれ、しばしの間待つ。

なんだかこうやってフェイトと二人だけの時間というのは随分と久しぶりな気がする。いつもヴィヴィオかなのはがいたもんな。

「なんだか久しぶりだね。……俊と二人きりって」

「俺もたったいまフェイトと同じこと考えていたよ。気が合うな」

「ふふつ、相性抜群だね」

フェイトと二人で笑い合う。

いまはこうやって笑い合うことができるけど、あのときは思いもしなかった。——こうやってフェイトと笑い合う時間がくるとは。

「なあフェイト。覚えてるか? こうやって俺たちが笑いあったはじめてのとき」

「うん、忘れるはずがないよ。事件が終わった後だったね。公園で向かい合って、私は俊にはじめて笑いかけたんだよね」

「そうそう。あのとき、ちよつとだけ照れ臭かったのも覚えてる」



ほんとはちよつとどころじゃなくて、めちやくちや照れ臭かったんだけどな。

「知ってた？ 私ね、俊のことはじめは警戒してたんだよ？」

「知ってるさ。なんせ俺とお前の初対面のときのセリフが『話しかけてこないでください』だもん。もうビックリだよ。フェイトみたいなかわいい子に言われると心にダメーじくるんだよな。

ちなみにフェイトで2回目だったよ。1回目はアリサ」

「うー……、だってあの時の私はジュエルシード探すのでいっぱいいっぱいだったもん。母さんとの約束もあったし。それに俊つてば、私の家を特定してきて毎日毎日インターホン鳴らすんだもん。立派なストーリーだったよ」

「そのときからフェイトに夢中だったのかもな」

そのことは、いまも鮮明に覚えている。管理人さんに連行されて士郎さん呼び出されて、おわびにシュークリーム渡すことになってよな。——そのとき俺はなのはにフルボッコにされてたけど。

「けどさ、俊つてば私と会うといつも必死に話しかけてくれたよね。なのはを無視してどうにかして私と話そうとした。あのとき後ろにいたなのはの顔は般若になってたよ」

「うっ……！ そ、そこまでだったとは……。いやまあ確かに何もできない幼馴染が魔法を使える相手に接近するのはなのは的には危ないからダメなんだろうけどさ。ちよつとくらい見逃してもいいのに」

そういつた俺にフェイトは顔をマジマジと見て、その後溜息を吐いた。

「俊、ちよつとこっちききて。お仕置きが必要だよ」

……え？ いまのどこにお仕置きされる要素があるんだ？

とはいうものの素直にフェイトの横に座る。

フェイトが俺の手を握りながらいう。

「俊は覚えてるかな？ 私のことを人形もどきっていったの」

「ああ覚えてるよ」

忘れるはずがない。プレシア・テスタロッサがフェイト・テスタ

ロツサに人形と告げたときのことだ。

それに俺が思わず言い返したんだよな。

『うっせークソババア！ 人形が魔法使ったり 会話したり 排せつしたり 食事したり 泣いたり 悲しんだり 怒ったり 笑ったり ライバルと決闘したりするわけえだろ！ てめえの作ったものなんざ人形ですらない人形もどきなんだよ！』 私が崩れ落ちている横でそういったよね」

「その後俺はプレシアと口喧嘩したな。プレシアがかかってこいよ、みたいな挑発してきたから隣にいるなのはの肩を叩いて『なのは、後は頼んだぞ』そうバトンパスしたよな。あのときのなのはの顔は凄かった」

えっ!? 私に丸投げするの!?

みみたいな表情浮かべてたし。けどまあ、まっすぐな眼差しで首を縦に振ってくれたけど。

バトンパスするしかないじゃないか。俺は戦うことができないんだから。

「人形もどき、それは言い換えるなら人形に成りなかった存在。人形と人間の違いは心があるかどうか。そう教えてくれたのは俊だよね。ふふっ、9歳の私には少し難しかったよ。ようは人間だつて言いたかったんだよね?」

「あの頃はツンデレが流行してたからな、俺もちよつとツンデレってみたんだよ」

「そういうことにしといてあげましょう」

フェイトはそういつて強く強く俺の手を握りしめる。

そんなフェイトをみて、俺の中で一つの質問が浮かんできた。

本当は、ずっとずっと聞きたかったこの質問。けど、怖くて言い出せなかったこの質問。

この状況なら、言えるような気がする。

「あのさ、フェイト」

「ん?」

「もし、もしもだよ? 仮にあのとき、俺がプレシアの手を掴んで離さ

ないで、プレシアを更生させて、プレシアの病も治って、そんでアリシアも復活させて、アルフやリニスと幸せな生活を作っていたら……とか妄想しないか？」

「ううん、そんな妄想しないよ」

「……そう、なんだ……。　けど、俺はそんな妄想してしまうよ。プレシアとフェイトとアリシアとアルフとリニスと一緒に生活してる光景を妄想してしまうよ。　フェイトだって妄想するんじゃないか？　もしプレシアがなんの病もなく生きていたら、とか。　もしアリシアが生きていて、自分と二人仲良く過ごすことができたら、とか」

俺の訴えにフェイトはゆっくりと首を振った。

「亡くなった女を想っても、どうにかなることじゃないよ。　それにさ、私はいまのこの生活が楽しいよ。　俊がいて、ヴィヴィオがいて、なのはがいて、エリオとキャロがいて、はやてがいて、ヴォルケンの皆がいて、スバルがいて、ティアがいて、くだらないけど輝いている毎日が、どうしようもなく楽しいよ」

どうして……どうして俺の幼馴染たちは、こうも強いのだろうか？　俺はいつも最高の未来を考えてしまうのに。

プレシアの生存と、病の回復。　アリシアの生存、リニスの生存。　初代リインフォースの生存に、はやての両親の生存。

皆が笑いあって暮らしている、そんな平和な世界を考えてしまうのに、俺の幼馴染はいまの世界がいいという。

「強いよ……強すぎるよ。　お前もなのはもはやても、皆強すぎるよ。

どんなに頑張ってもさ、結果が残らなかつたら意味ないだろ。　俺みたいな奴は、考えてしまうよ」

「どう……考えちゃうの？」

「無力で無価値で無効な行動なんて意味ねえだろ……。　いくら頑張ってもプレシアはもういない。　アリシアはもういない。　リニスはもういない。　ほら、意味ねえじゃん。　なあフェイトもそう思うだろ？　世の中は結果が全て、どんなに努力したって実らなければ意味はねえよ」

無力な俺だからこそそう考えてしまう。

無力な俺がやった行動なんて、結局のところ無価値であり、無効なのだ。

プレシアの手を掴んだからなんだというんだ。

結果として、プレシアを助けることができなかった。

その時点で、ハッピーエンドにはならないのだ。

そんな俺を、そんな俺の体を、フェイトは優しく抱きしめてくれた。

「無力でも無価値でも無効でも——無意味なものなんて一つも存在しないよ」

「そんなの……強者の言葉だろ……」

「ううん、絶対に違う。意味のないものなんて存在しない。例えばいま足を空に蹴ったとしても、やがてその行動はどこかで活かされる。ただ——それが結果に結びつくかはわからないけどね？」

フェイトはゆっくりと俺の体を倒す。丁度俺が下でフェイトが上の形になるように。

「俊は考えすぎだよ」

「人は考えることによつて進歩してきたんだ。考えをやめたらそこで終わりだろ」

「ほらまためんどくさいこといって誤魔化す。そんな子にはお仕置きが必要です」

そういつてフェイトは俺のじんべいのヒモを解き、上半身をあらわにさせる。

そしてその顔を、俺の胸に置いた。

丁度鼓動を聴くように。

「ふえ、フェイト……？」

「めっ！これはお仕置きだから——俊は喋っちゃダメだよ？」

そうして固まる俺をよそに、フェイトは俺の鼓動を聴き続ける

☆

こうして俊の鼓動を聴いてる私つて、他人から見たらどんな風に映

るのかな？

きつと、へ、へんたいさんには映ってないと思うけど……

ちらりと俊のほうをみる。俊は私の言いつけ通りに声を出さずいた。というより、思考を停止させていた。おい、歩みが止まってるぞ？

そんな俊の様子に少しだけムカついて、私は俊の胸を軽く撫でた。ビクツと俊の体が震えたのを感じた。

「……？」

もう一度、軽く触ってみることに。

さわさわ

ビクツ

……もしかして？

なんだか楽しくなってきた私は、ちよつとだけ指を舌で湿らせて俊の胸を優しく撫でまわす。

「……ひゃんっ……！」

「……え？ しゅ、俊……？」

「え？ な、なに？ ど、どどどどうしたの？」

「えつと……いま変な声が……」

「へ、へんな声？ おいおい、フェイトの頭のほうが変なんじゃ——」

早口でまくしたてる俊の胸をもう一度湿った指で撫でる。

「あっ……！」

「……………」

ど、どうしよう……。ちよ、ちよつとだけ可愛い……

いつもとは逆な立場に少しだけ快感を覚えてしまう。

「だ、ダメだよ俊。お仕置きなんだから声出しちゃ」

「い、いや……でもフェイトが俺の……乳首にだな……」

「へ？ ち、乳首……!?! さ、触ってないよ！ そ、そんなとこ！」

「でも……そこどう考えても……」

俊の指さした所、すなわち私の手に視線を落とす。

「……あっ……」

確かに俊の、アレに私は手を置いていた。しかもアレには微妙に

水気が……。こ、これって……。私の、だ、唾液……？

硬直する私。

俊はそんな私をみて、苦笑いと愛想笑いを足して二で割ったような顔をしながらいう。

「ははっ、そういうのは似合わないよ、フェイトには。えつと……。下でゲームでもしないか？」

そういつて私の両肩を押さえて上半身を起こす俊。

そんな俊を私はもう一回、力の限り押し倒した。

えつ？ えつ？ と困惑する俊。

「……へたれのくせに……」

「あ、あの……。フェイト……。？」

「ど、どうせなのはとこんなことになったら、俊は嬉しがるんでしょ」

「い、いや……。フェイトさん……。？」

「いいよ……。ゲームしようよ……。？」

「……。へ？」

俊の両手をバインドで縛る。もう一度、馬乗り状態になった私は俊にいった。

「し、舌でゲームだったよね……」

あ、あれ？ なんだか顔が熱くなってきた……。

「そ、それ漢字が違うような……。んあっ！」

顔の火照りを隠すために、私は俊の胸に顔を押し付ける。

押し付けた私の目の前には、その……。俊の、ち、乳首があつて——  
ついついそれを触ってしまった。

……。どうやら俊はこういつたのが弱いみたい。こんな状況なのに、俊の弱点を見つけることができちゃって嬉しいと思ってしまう。

私は一度顔を上げて、俊の顔の至近距離にまでいつて若干どもりながら喋った。

「しゅ、俊が悪いからね……。？ しゅ、俊が舌でゲームなんていつたから……。わ、私はただ、俊のちよ、挑戦を、う、うけるだけだから……。！ ほ、他に他意はないよ……。？」

どもりながらも言い切ったフェイトは、もう一度俊の胸に顔を近づけて、緊張した面持ちで俊の乳首をみる。

そしてゆっくりと指を自分の舌にに入れて、十分に湿らせたあと乳首の周辺を円を描くように触り撫でる。

ゆっくりゆっくりと、焦らすように撫でていく。

そのたびにバインドで縛られた俊が、体を震わせながらフェイトの名を呼ぶ。

「ふえ、フェイト……!? だ、ダメだつて……」

「ふふ、なんで？ 俊の顔も赤いよ？」

既にフェイトは昔魅せた、あの惚けたような顔をしていた。

そして余裕があるのか、俊の乳首を撫でながら俊の顔を怪しく見ていた。

俊は顔を赤くして、ただただその快楽を受けるのみ。

やがて指での攻撃が飽きてきたのか、フェイトは俊にもわかるように舌をめいっばい出してその舌先を軽く乳首につけた。

「んあつ……！ だ、ダメだつてば……！ そ、そんなことしたら……」

「ふおんなふおほしたひゃ、ひようなるほ？」

舌を出しているため、うまく喋ることができないフェイト。しかしそれがより一層、場の雰囲気性を性のほうに傾ける。

フェイトの質問に、俊は答えることができない。ただただフェイトのほうをガン見するばかりである。

そんな俊をみて、フェイトは笑みを浮かべる。そして舌先だけでなく、舌全体を使って俊の乳首を舐める。

「ずうっ……ぺちゅびちゅっ……んむっ、あっんっ……」

フェイトの口から吐息が漏れる。舌は俊の乳首を凌辱し、既に自分のものと化していた。

そしてそのまま俊の顔に近づく。

「可愛い顔になってるね……。そんなに乳首を弄られて気持ちいい……？」

俊の顔に触れながら、もう片方の手でいましたが凌辱した乳首を弄

る。

「……その……ひゃあっ！」

「クスクス……、『ひゃあっ！』だって。可愛い声あげちゃって」

俊は声を上げた理由は至ってシンプル。フェイトが俊の乳首をつまんだからである。それによって声をあげることとなった俊だが——その顔は既に羞恥に塗れ、今日の昼ビーチフラッグで見せた勇ましい姿とは打って変わっていた。さながらウサギのようである。

「けど、俊がいけないんだよ？ 私を本気にさせるから……。ほ、ほんとうは私もこんなことしたくないけど……しようがないよね」

額にキスをおとし、もう一方の乳首を舐めはじめた。

片手は既に終わった乳首を弄りながら、フェイトは一心不乱に舐め続ける。

「んっ、あはっ……なんでかな？ 勃ってるよ？ ねえ、なんでかな？」

勃った乳首をみながら、そう俊に話しかけるフェイト。その顔はとても嬉しそうである。

「ふえ、ふえいと……」

「ん？ どうしたの？ なに？」

俊は、はあはあ……と荒い息を漏らしながらフェイトの名を呼ぶ。

そして——

『ひよつとごさくん？ もう怒ってませんから皆で大富豪やりましょうよー』

『ひよつとごささん、はいりますよー？』

ガチャリとドアを開けて、スバルとティアがはいつてきた。

現在の状況

俊が下、フェイトが上でほとんど抱き合うような形である。（俊は上半身裸、フェイトは少しだけ着くずれをおこしている）

両手はバインドで縛られており、フェイトは少しだけ唾液を垂らしている。

そんな状況。

時が止まる。



既にフェイトはいつもの状態に戻っており、あまりの自分の行動に顔が真っ赤になっている。

俊はこの世の終わりのような顔をしていた。

そしてスバルとティアは、

「……………ごゆっくり。革命を期待してますよ」

そういつてゆっくりとドアを閉めた。

「……………なあ、フェイト……………。このバインド、解除してもらえる……………？」

これバレたらいくら未遂とはいえリンデイさんに殺される……………」

「う、うん……………」

俊の言葉にフェイトは着崩れを直しながらバインドを解除する。

バインドを解除された俊は、一度大きく深呼吸をして――

「まっつてくれ嬢ちゃん！ スバル！ これは誤解なんだ!!」

そう声を大にして飛び出した。いうまでもなく、上半身裸の男がいきなり現れたのだ、リビングには悲鳴が轟く、俊の。

そんな悲鳴を耳にしながら、フェイトは俊が着ていたじんべいを羽織り呟いた。

「……………意気地なし……………」

### 73. 翠屋で頑張ります！

カランカラン――

「いらっしやいませ〜、喫茶翠屋へようこそ！ 2名様ですね、こちらへどうぞ〜」

「こんにちは、翠屋の『天使』高町なのはです！ 翠屋の『天使』

高町なのはです！

時空管理局に勤めてる魔導師であり、これでも一応エースオブエースと呼ばれるています。

……あれ？ 私って魔導師だよ？ たしか魔導師だったはず……。

「ヴィータちゃん、わたしって魔導師だよ？」

「設定上魔導師だな」

「どうやらわたしはちゃんと魔導師みたいです。最近、自分が魔導師だということを忘れそうになります。そういえば、わたしはこれでもSランク以上の魔導師でした。」

「そんなわたしですが今日は実家の翠屋でウェイトレスをやっています。実家に帰るときはいつもやっていることなのですが、今日はなんと――

「スバルー、お冷どこに運ぶんだっけ？」

「あっちだったと思うけど……」

「パパー！ アメさんもらったー！」

「ガークンモ!!」

「おいひよつとこ。 シュークリーム追加な」

『担担麺お願いしまーす！』

「おい誰だ、どさくさに紛れて担担麺注文したバカは」

今日はなんと六課の面々が翠屋を手伝ってくれるそうです！

わたしの目の前にはスバルとティア、一生懸命頑張ってるエリオにキャロに、新人達の面倒を見ながらも自分の仕事をキツチリこなしているヴィータちゃん、わたし達の愛しい娘のヴィヴィオ。そして――エプロンを着てお菓子や軽食を作っている彼。

そして今日はお父さんとお母さんがいません。なぜなら今日は彼がお父さんとお母さんを休ませるために皆に声をかけたのですから。

☆

「ママー、あさだよー」

「ふえ……？ あ、あれ……もう朝なんだ……」

ぺちんぺちんと頬に誰かの手が当たると、頭上から声かけられた声に目を覚ます。

目を開けた先にはにっこり笑顔のヴィヴィオがわたしに「おはようママー！」と抱きついてきた。

わたしはそんなヴィヴィオを抱きしめながらおはようの挨拶をして、一足先に部屋から出たであろうフェイトちゃんの後を追って自分の部屋を出た。そういえば……昨夜のフェイトちゃんはちよつとそわそわしてたなあ……。

「おはよー」

『おはよう』

リビングに行くくとフェイトちゃんとリンディさんにアルフさん、エイミーさんやエイミーさんの子供たち。そしてお兄ちゃんにお姉ちゃん、お父さんが既に席に座っていた。

「おはようなのは。今日は遅かったな」

「うん、昨日はしやぎすぎちゃって……。そもそも俊くんが上半身裸で出てくるのが悪いんだよ」

まったく……何を考えてるんだかあのバカは。

「つて、あれ？ 俊くんは？」

「俊なら母さんと朝飯を作ってるぞ」

「へー。つて、まあ当たり前か」

忘れがちだけで基本的に俊くんはうちの家事担当なんだし。料理もそれなりにおいしいし。そこらへんの人には負けないし。

「それにしても俊くんはどこに出しても恥ずかしくない男の子に成長

したよね。平均スペックも高いし、ルックスもいいし、学生時代からモテたしね」

「お姉ちゃん、俊くんはどこに出しても恥ずかしいよ」

いや、俊くんほど恥ずかしい人物はいないといっても過言ではないくらい恥ずかしい。

だからこそ、こうしてわたしとフェイトちゃんが引き取ってるんだから。

椅子を引いてヴィヴィオと二人、フェイトちゃんの隣に座る。

「……なに、その笑みは」

「なにも〜?」

無視無視。お姉ちゃんに付き合うだけ無駄だよね。

そう思っていると、丁度いいタイミングで俊くんとお母さんが談笑しながら入ってきた。

……そういえばわたしはすごいお母さん似なんだよね。という

ことは……いま俊くんの隣で談笑してるのがわたしで、さっきまで台所で俊くと料理をしたのがわたしで――

「……ちよつといいかも」

いや、本当にちよつとだけだけどね? でも――アリだよね、そういうの。

「おお、おはようなのは。丁度いいところにきた。ちよつと大事な話があるんだが、来てくれないか?」

「へ? だ、大事な話? ふ、二人だけで?」

「ああ、いやフェイトも一緒で――」

「ほらいくよ俊くん!」

俊くんの手を強引に掴んでリビングから台所へ引つ張り込むわたし。

「で、で? 大事な話って?」

「お、おう。いやあのな? 今日さ、俺たちで翠屋を回して土郎さんと桃子さんに休暇をあげようかと思ってるんだけど……」

「はあ……」

「え?! なにその溜息!?! 俺何も悪いことしてないよね!?!」

「チツ……」

「あ、あの……なのはさん？」

「で？」

「え？」

「続きは？」

「あ、うん。昨日のうちに新人達や八神ファミリーやスカさんには話をつけてあるから、あとはお前次第なんだけど……。ほら、翠屋の跡継ぎって正式的にはお前だろ？」

まあ……それはそうだけど。そういえば、なんでだろうね？

そのとき、わたしの頭にふと閃く。とある仮説。

——これって、ようは練習……？

わたしと俊くんが翠屋を回せるかどうか……試すってこと？

はくん……成程。俊くんは言外にそう言いたいんだね。

まったく……そんなに照れなくってもいいのに。

「いいよ。二人で頑張ろうね！」

「ああ、皆で頑張ろうな！ 土郎さんと桃子さんには話をつけてくるから！」

俊くんがお父さんとお母さんに話をつけているので耳にしながら、わたしは小さく拳を作る。

「よし——がんばろ！」

☆

で、蓋を開けてみれば——

「ロヴェータ、そっちのテーブルにコレ運んでくれ」

「はいよ。ティア、そっちの注文取ってくれ」

「パーパー！ またアメさんもらったー！」

「ガーケンモー！」

「俊、クリームってこんな感じ？」

「おお！ うまいよフェイト！ 味もいい感じ！」

「俊く、小銭が足りないやけどー！」

「ああちよつとまってくれ！　そこに『担担麺お願いしまーす！』  
うつせえよ、さつきから!!　担担麺はねえから帰れ！　金だけ置いて  
帰れ！」

なんで……こんなに忙しいの……!!

六課の面々が慌ただしく店の中を駆けずり回る。いつもの翠屋  
ならこここまで忙しくないのに……。これじゃ俊くと落ち着いて  
話すこともできないよ。

『混んでるなー、やっぱり』

『そりやしうがねえよ。　ひよつとこさんが帰ってきたんだから皆  
会いたいんだよ』

……こういうとき、彼の意味不明のスキルが憎い。

いつそのこと友達がいけないキャラならよかったのに……。

そういえば——今日は俊くとフェイトちゃんがやけによそよそ  
しい感じがするのも気になる。

例えば——

『きやツ!?　ご、ごめんね俊。　手が当たっちゃった……』

『いやツ、俺こそごめん！　だ、大丈夫か?』

『う、うん……』

なんなのよ！　なんなのよ、あの初々しい距離感!!

なんで微妙に空間があいてるの！　なんで隣に並んでるのに微妙  
にスキマがあいてるの！

撃とうか!?　そこにダイバインバスター撃ち込もうか?!

轟け！　わたしのダイバインバスター!!

☆

なんというか……昨夜の一件以来、フェイトとの距離感が保てな  
い。

「おいひよつとご。　スバルが摘み食いしようとしてるぞ」

「またか……。　おいスバル！」

「ふあい？」

「摘み食い中じゃねえか!？」

スバルに声をかけると既に口にチーズケーキを含んでいた。  
なんとという早業。でもやめてくれ。

「今日はお前の大好きな、なのはさんの翠屋を回してるんだ。いいか? お前がここで頑張るとなのはさんがとても喜んでくれるぞ。もしかしたら抱きついてくれるかもしれないな」

「ほ、ほんとですか!？」

きたねえからチーズケーキ飛ばすな。

「ああ、当たり前だ。俺の知ってるのはなら絶対抱きつくはずだ。一番頑張った人に荣誉を讃えて必ず抱きつく」

「うほおおおおおおお!! 頑張ります! なのはさんの処女のために頑張ります!」

横からピンク色の魔力弾が一発飛んできて、スバルの顎を砕く。

「……すいません、調子のもつてました」

「まあ……今日は俺もなのはも真剣だから、お前もそれなりに頑張れ」  
一気にテンションが落ちたスバルをみて、思わず頭を撫でる。なぜかこちらにも魔力弾が飛んできた。無差別すぎるだろ、翠屋の天使。

冷や汗を垂らす俺のことなどお構いなしに、スバルはなにやら固く決心を誓ったように拳を握りしめて問う。

「ひよつとこさん、今日の私は本気です! スバルのイケメンターンです! さあ、指示をお願いします!」

「家に帰って大人しくしといてくれ! 以上!」  
「いらぬ子ですか!? 私はいらぬ子なんですか!？」

目の前で暴れ出すスバル。だってお前……摘み食いしかしてないじゃん。しかも客の食い物つまんでいくし。

「それじゃ、後は頼んだぞロヴィータ」  
「嫌な所でバトンパスしてくれるな……」

『青髪はいらぬ子ですか! 魔女化したからいらぬ子なんですか! 私だつて魔女化しますよ!』

「ほら、スバルのソウルジェムをアイゼンと粉碎してやれ」

「アイゼンが穢れるからやだ」

「しようがない、アルティメットなのはに頼むしか『担担麺お願いしまーす!』 帰れっていったらどうが!!」

ひよつとここがいつまでも担担麺を注文する客を探し出そうとしていると、背後から誰かが抱きついてきた。そしてそのままひよつとこの口に何かを押し込んだ。

「まあまあ、そうカツカしたらあかんで俊。 はやて様特性プチケーキでも食べて落ち着くことや」

「……。(もぐもぐ) おお! これうまいよはやて!」

「料理やお菓子作りは乙女の嗜みやで? 俊もこんな女の子をお嫁さんにもらったほうがいいんとちゃう?」

抱きつき、俺の口に自分が作ったプチケーキを食べさせたはやては、そのまま俺の正面に回り込みながらそう言ってきた。

「確かに……朝、桃子さんと料理してて二人で料理を作るのは楽しかったかなあ」

「うんうん、そうやる? やっぱ二人で肩を並べての料理は新婚さんの気分もあるしな」

「あー、わかる。 二人並んできやつきやうふな感じだよな」

まあ、うちは俺以外が台所に立つことなんてありませんけどね。

というか、危ないので二人には包丁を持たせたくありません。それで怪我したら俺は包丁作った会社を訴えるね。

『……………』

「あ、そうそう。 そういえば、前に俊と並んでご飯作ったな。 ほら、蕎麦のときの」

「ああ、そういえばそうだったな。 まあ、あのときは楽しかったな。

出来もまあまああの仕上がりになったみたいだし」

『……………』

「なんなら、もう一回作る? 二人で肩を並べて」

「おっ、いいなそれ! 俺もまたはやてと料理を作れて——」

ちよんちよん



「ん？ どうしたのなの？」

「えつと……その……、ちよ、ちよつと二人で軽食でも作らない？ 二人で」

「軽食くらいなら俺一人で作るけど。 オーダーはいつたの？」

「い、いやそういうのじゃなくて……。 ただ、作りたいなく……。なんてことを思ったり」

視線をあっちこっちに動かしながらそう言うのは。 抱きつきたい。

けどまあ——確かなのはと二人で作るのもアリだよな。

「それじゃ、二人で作ろっか」

「う、うん！」

厨房を指さしながら、なのはと歩こうとする——すると、

「それじゃわたしもケーキ作る作業を再開しよーつと」

と、はやてが厨房へ向かっていった。 ああ、まだ作ってる途中だったのか。

つて、あれ？

そういえばフェイトもいたような——

「あ、俊。 ショートケーキができたよ！」

笑顔でショートケーキを見せながら駆け寄ってくるフェイト。

しかしその歩みも俺の40cm手前で止まる。 やっぱり……。昨日のことだよな。

きつとフェイトも恥ずかしがってるんだよな。 はあ……。嫌われ

たらどうしよう……。

「つて、いかんいかん。なのは軽食だけ——」

ナポリタンにでもしようか。 そう声をかけようと振り向くと

「……なのは……。まけないもん……。」

何故か両手で拳を握ってるなののがいた。

今日の翠屋……。乗り切れるかな？

## 74. 甘くはない

「あの……なのはさん……？　ちょっと近いというかなんというか。それじゃかえって料理ができなくなる——」

「だ、大丈夫！　こ、これくらいで丁度いいから！」

俊が隣にいるのはに言うと、なのははソーセージを切りながら答えた。

腋をしつかりと締め、猫の手にしたなのはは包丁とソーセージをじつと見つめたまま、不規則なリズムでありながら、しかししっかりと切り終えた。

それを見て、心の底から安堵する俊。　どうやらこの男、なのはが包丁で怪我をしないかヒヤヒヤさせていたらしい。

俊となのはの間——0mm。

だからこそ、なのはと俊が同時に振り向けば——

「あっ……」

二人の顔の距離も自然と近くなってしまるのが道理である。

「つ、次はなにをするのかな？」

「そ、そうだな。　材料を切り終えたし、さっそくナポリタンを作ってみようか。　それじゃ——」

「俊、今度はチョコケーキ作ってみたんだけど、どうかな？」

俊がなのはに教えようとした矢先、俊の隣にいたフェイトが不恰好なチョコケーキを差し出しながら聞いてくる。　チョコケーキはたったいま急いで作りましたよ、というのが目に見えるほど荒い作りになっていた。

「……………」

その歪な形に言葉を失う俊。　そう——チョコケーキはドクロの形をしていたのだ。

「な、なかなか斬新じゃないかな？　お店には出せそうにないけど……………」

苦笑いを浮かべる俊の反応をみて、フェイトは顔を俯かせる。

「ご、ごめんね俊……」

材料を無駄にしちゃって……………」

「そ、そんなことないぞフェイト！ このチョコケーキもらっついていいかな!? 俺いま甘い食べ物を食べたい気分なんだ!」

「う、うん! そ、それじゃあ……、あくん」

チョコケーキのチョコの部分指ですくい、俊の口へと運ぶ。

「え、あ、あの……」

いきなりのフェイトの急接近にたじろく俊。 先ほどまで距離感が掴めなかった女の子が、いきなりこちらの領域に踏み込んできたのだ。 いくら俊でもたじろいてしま

まう。 否、俊だからこそたじろいてしまう。

それでもフェイトは俊の口に指をもっていく。 その距離わずか5cm。

生唾一つ、ごくんと呑み込んだ俊は――

「あーん。 うくん……ちよつと甘いと思うよフェイトちゃん。 うん、――甘いよ」

俊はまな板と熱い接吻を交わすこととなった。

俊を押しつけたのはなのは、そのまま俊の口に入るはずだったフェイトの指をくわえ舌で舐めとった後、そう評価を下した。 腐っても翠屋の看板娘、その舌はこの中で誰よりも確かなのである。

そんななのはに下された評価を、

「うくん、やっぱり甘いんだ。 それじゃ、もう少し苦くしたほうがいいかな?」

そう頭を掻きながら逆に質問した。

「うん、そうだね。 苦いほうがいいかな」

そう首を捻らせながら答えた。

「うん、それじゃ頑張ってみるね!」

「頑張つてねフェイトちゃん!」

「なのはもナポリタン作り頑張つてね!」

二人とも拳を握りしめながら互いの健闘を祈る。

二人の絆は、ちよつとやそつとじゃ崩れることはないみたいだ。

フェイトがケーキ作りに専念するのを見て、なのははホッと胸を撫で下ろす。

「危ない危ない……。さて——俊くん、はじめよう……。か？」  
「なのはが俊のほうをみて固まる。」  
「そこには——」

「一度口移しをやってみたかったんや。俊、ドキドキするな……。」「ちよつとまって!?! 俺とお前とじゃ絶対どきどきどきの感覚が違うって!?! どの世界に包丁を相手に突き付けたまま口移ししようとする女がいるんだ!?!」

「ほら、いま流行のヤンデレってやつやな」

「お前がいうと洒落にならねえ!?!」

「なのはがみた先には、親友のはやてが包丁片手に俊に口移しを迫っていた。目がマジである。そして俊は既に軽く泣いていた。」

「ダメー!!」

それをみて、なのはは俊を突き飛ばす。隅に頭をぶつける俊。

「え!?! なんで俺突き飛ばされたの!?! 絶対に違うよね!?!」

「はやてちゃん! そ、そういうのはダメだと思うよ!」

「えー、なんで? いいやん、口移しくらい」

「だ、ダメなものはダメなの!」

「聞いている!?! 二人とも俺の話を聞こうよ!?! まず選択肢が絶対に間違ってる——」

「えーやん、えーやん。変態の俊はそういうの喜ぶで?」

「しゅ、俊くんの好みならわたしだって知ってるよ! 確かに俊くんのゲームの中にはヤンデレものもあるけど」

「ちよつとまてお前ら。俺の秘密を知りすぎじゃないのか? こうなったら、お前ら二人を孕ませて——」

「とりあえず包丁は捨てて、いますぐに!」

「ははっ、そんなに怒らんでもちやんと捨てるよ。わたしだって管理局の人間やで? こんな危ない凶器で人が傷つくのはみたくないよ」

「そういつてははやては包丁を柱に刺す——俊のいる柱に刺す。」

「……………!?!」

そして俊は厨房から逃げ出した。

「あ、おいひよつとこ。 オーダーがたまつて——」

「うわーローん!! ロヴィータちゃん、もう俺にはロヴィータちゃんしか頼れる人がいないんだローん!!」

「ちよつ、いきなり抱きつくな気持ち悪い!!」

俊が厨房から飛び出したところ、ヴィータが丁度俊を呼ぼうとしたのかすぐ近くにいたので思わず抱きつく俊。

「ロヴィータちゃん、このさいロヴィータちゃんでもいい! 結婚しよう! 俺を守ってくれ! 大丈夫、ロヴィータちゃんをつるぺたボディも小さい女性器も俺は問題ないから! 俺の男性器なしでは生きていけない体にするから! もう一日中ベットの上で腰振っておこう!」

「えらく斬新なプロポーズだな、おい」

「久々にひよつとこさんが気持ち悪い」

「いや、いつものひよつとこさんじゃない?」

『それもそうだね』

「というか——気持ち悪いから離れろ!!」

抱きつくひよつとこを、本気で不快そうにヴィータは殴って離れさせる。

「そんな……ロヴィータちゃんまで俺を見捨てるのかよ……」

「へ? お、おいひよつとこ……?」

顔を俯かせ軽く鼻をすする俊。

これにはヴィータも驚きいつもとは違う、優しさと焦りがブレンドさせれ声色でひよつとこに話しかける。

「だ、大丈夫か? そ、そこまで怖かったのか?」

「だ、だつておま……、甘い展開の所でさ、なのはと甘い雰囲気の中で、フェイトといい雰囲気の中で、いきなりはやてに包丁向けられて……しかも助けてくれると思ったらなのはに突き飛ばされて……挙句の果てにははやてが俺の顔数ミリのところに包丁立てて……フェイトはフェイトでガン無視だったし……」

「これ絶対にひよつとこさんのソウルジェム黒くなってるよ。ひよつとこさんも私と同じように魔女化するよ」

「いつの間にアンタは魔女化したの」

いまにも死にそうな顔をしてる俊に、ヴィータはどう声をかけようか思っている——

俊の肩をとんとんとヴィヴィオが叩いた。それにのろのろと顔を上げる俊。

そこには——アメの包装用紙を外して俊の口にアメを待機しているヴィヴィオの笑顔があった。

「パパー、だいじょうぶー？　ヴィヴィオのアメさんあげるからげんきだして？」

「ガークンモアゲル！」

「ヴィヴィオ……ガークン……、お前ら……！」

俊はヴィヴィオを強く抱きしめる。離さないように離れないように強く強く抱きしめる。

「ヴィヴィオー！　やっぱりヴィヴィオだけだよ、俺の味方は！」

「えへへ、ヴィヴィオはパパのことだいすきだからずっとみかただよ？」

「うっ……ありがとうな、ありがとうな、ヴィヴィオ……！　決めた！

俺はヴィヴィオと結婚するー！」

「ほんと!?　わーい、ヴィヴィオもパパとけっこんするー！」

「ああ！　そしてガークンが俺とヴィヴィオの子どもだ！」

『ヴィータさん、ひよっとこさん止めなくていいんですか？　あの人頭おかしいですよ』

『いつものことだろ。　ほっとけ。　心配した私がバカだった』

外野からそんな声が聞こえてくるが、既に俊の耳には聞こえない。

「ヴィヴィオのあらゆる穴はパパのものだ！　うへへへへへ！　ヴィ

ヴィオを対面座位でガンガン突きながら舌をいれてのキスをして、『パパのお〇んちんなしではヴィヴィオ生活できない！』と言わせるまで調教してやるぜ!!　うっひよおおおおおお！　ヴィヴィオ！　いまから婚姻届をもらいにいくぞ!!」

「わーい！」

『ヴィータさん、なのはさんとフェイトさんが魔女化しました』

『そんなことより注文取れ』

『t a n t a n m e n o n e g a i s h i m a s u !!!』

『ヴィータさん、担担麺の人が魔女化しそうです』

『顔面に担担麺ぶつけとけ』

『よし、行くぞ!!』

ヴィヴィオをだっこし、ガークンを頭にのせて俊は翠屋を飛び出した。

それと入れ違いで翠屋へ入ってくるもの数名。

シグナム・ザファイラ・シヤマル・ウーノの買い出し四人組みである。

シグナムは外を指さしながらヴィータに問う。

「いまバカがマジ走りをしてたんだが、なにかあったのか?」

「いいや。それよりなのはとフェイトと代わってくれ。あいつら魔女化してるから使い物にならない」

「うむ、わかった」

ヴィータの要請を快諾し、シグナムたちは店の仕事をはじめた。

——1時間後

チリリリリツと大きな声を上げて翠屋の受話器が鳴る。

「ん? はいもしもし。喫茶店翠屋ですが」

それを一番近くにいたヴィータが取り、電話の要件を聞く。

既にピークは過ぎ去り、俊もいないので客もあまり店内にいない時間帯になってきた。

「ああ、はい。わかりました。それじゃ、誰か迎えを寄越すと伝えてください、それでは」

電話越しだというのに律儀に頭を下げてヴィータは受話器を置く。

「ヴィータさん、なんでした?」

スバルの問いに、ヴィータは溜息を吐きながら答えた。

「アイツが警察に捕まったから引き取りにこいだってさ」

『なにがしたいんだアイツは!?!』

## 75. 動き出す歯車

『夢は醒めるためにある』

「監禁された。 ああ、それと先に言っておくべきことではあるが俺が警察に捕まってしまう誰が引き取ったのか、とかいうそこらへんの話は全てカットさせてもらう。 何故俺が監禁されているのかを考えるとればおのずとわかってくることではあるが。 しかしそもそもとして、主役たる俺が幼馴染相手に泣きながら土下座するのはいかなものか、まあ若干快感ではあったのだがそれはそれとして別問題だと私はここに強く断固抗議をする。 まあ、抗議したところで意味はないわけだが。 しかしながら、これだけは読者の皆さんにはお伝えしたい。 あの時のなのはヴィヴィオが俺を必死に庇うほど恐ろしかったと。 さて、ここで本題に入ろう。 誰かさんが俺を引き取ったのが午後3時ごろ。 そしていまの時間帯が約10時。 人間とこののはよっほどの極限状態でなければ7時間もすれば排泄の一つや二つをしたくなるわけであって、そもそもとして俺がいきなりこんな喋りはじめたのはそこで俺のノートパソコンを勝手に弄ってる幼馴染に振り向いてほしいからである。 まあ何が言いたいのかというところ——なのは、おしっこしたい」

「そこにペットボトルがあるよ」

「放尿プレイだと……!?!」

なんとという女だ。 平気で俺に放尿プレイを強制しやがるとは……!?

しかしながら、俺もただ放尿するのは嫌である。 やはり放尿プレイならば——

「なのは——俺の黄色いリポビタン、飲んでくれないかな?」

「消えろ変態」

プロポーズ大作戦、失敗である。

「俺なら喜んでなのはの聖水飲むのに」

「まずそんなシチュウがありえないよね」

「ですよね」



数%くらい、見込みがあると信じたい……！

「しかしなのはさん、そろそろバインドで絞められた両手首が痛いのですが。そして足のほうもそろそろキツイのですが。それにマジで漏れる」

「いや、わたしだって俊くとずっといるんだから我慢してるんだよ？ そのくらい察してよ」

「……ペットボトル使う？」

「結構です。いざとなったらお手洗いにいきますから」

「できればいま僕を連れていってくれると嬉しいな。お前、好きな幼馴染の前で漏らすんだぞ？ それがどれだけのことかわかってんのか？」

「どれだけのことなの？」

「快感でテクノブレイクしちゃうかな」

「問題ないね」

言われてみればとくに問題はなかった。

「そういえばなのは。さつきから俺のパソコンでなにしてんの？」

「俊くんが前にインストールしてくれた魔法少女もののゲーム」

「魔法少女が魔法少女もののゲームをするってなんか微妙……」

あ、すまん。お前もう少女って年じゃなかったな」

「張り倒すよ、ゴミ虫。しょうがないじゃん、世界観がゆるふわなんだから。わたしだって本当はスターライトブレイカーで頑張っちゃうんだからね」

「俺だってホワイトブレイカーで頑張っちゃうよ」

「どんな対抗の仕方なの。ところで俊くん、この年上もののエッチなゲームは捨てておくよ？」

「えッ!？」

「当たり前でしょ。キミは幼馴染で魔法少女もののゲームしか買っちゃいけません。ま、まあ……変身したときに純白の衣装だったり……栗色でツインテールのヒロ

インとかなら……わたしが少しだけカンパしてあげようかな……？」

「なのはがいるからそれはいらぬ。俺にとっては、変身したときに純白の衣装で栗色のツインテールのヒロインはお前しかいらぬんだ。だから絶対にそういつた被り物は買いたくない」

「そ、そうなんだ……。ふ、ふん……」

「まあ、たまに衝動買いしそうになるけど。ちよつとだけなら被つてもセーフということだ」

「この浮気者!!」

なのはが俺の顔面に蹴りを叩きこんでくる。パンツが見えたのでよしとしよう。

「しかしまあ、六課の面々も頑張ってくれたようで何よりである。

とくに守護騎士たちとエリオとキャロ。お礼に今度コスプレを貸出ししよう」

「わたしなら拒否るかな」

「お前はバリアジャケットがコスプレだと何度言ったら——」

「でも俊くん好きなんですよ?」

「大好きです」

「ならよし」

何がよしなのかよくわからない。女心っていうか、なのは心は複雑怪奇な代物である。とんだプレパレードである。

しかしまあ……。こうやってなのはと二人、部屋にいと落ち着くな。つくづく俺ってなのは依存症だわ。

「ところで俊くん」

「ん?」

「——上矢のほうには帰らないの?」

「えー……。それをいま聞いちゃうの?」

「うん、聞くよ。だってあそこは大切な場所ですよ」

ゲームを止めて、なのはが俺の方をみながら答える。

「一度でいいから、帰ったほうがいいんじゃない? 色々なもの、あそこ仕舞ってるんですよ」

「行くよ。ただ——今回の帰省では帰らないって決めてるんだ。

あそこに行くと、苦い思い出まで蘇える」

「……そっか。それじゃ仕方ないね」

「ああ、仕方ないな」

仕方ない——か。

なのはは既にその話はおしまいという風ゲームに熱中する。

「なあなのは。お前はとうだった、この10年間」

「もー、いきなりなんなの？ シリアスモードにでも突入しちゃうわけ？」

「いやいや、そんなことないさ。ただ——なんとなく思っただけだよ」

本当に、ちよつと思っただけである。

なのはは俺のほうを見て、不思議そうな顔をしながらも天井を見上げ唸る

「うーん、幸せだったかな。そりゃ、確かに取りこぼしたものもあるし、悲しくて辛いこともあった。闇の書事件のときなんてまさにそれだよ。けど——それでも、それすらも、わたしは受け入れて——幸せだったと評価を下すかな」

……こいつも、フェイトと同じか。

「そういう俊くんはどうなの？ 幸せじゃなかった？」

「勿論、幸せだったよ。いまも幸せだ。お前がいて、フェイトがいて、はやてがいて、ヴォルケンがいて、新人達がいて、スカさんウーノ、おっさん、クロノにユーノ、そしてヴィヴィオ、皆がいて俺はこの10年間幸せだったよ」

「もう、ほんとにどうしたの？ トイレ行く？ 連れて行くよ？」

「なあお前からみて、俺は強くなれたかな？」

「……へ？」

俺の言葉になのはが疑問符を浮かべる。それにそうだろう、なんせいきなりの展開なんだから。けど——いま確認しなければ、もう二人っきりのチャンスなんてないと思うから。

「なのはは新人達に言ったよな？ 『理想を説くには力がある』ってさ。あのセリフ、10年前に丁度、闇の書事件のときに言われたよ」「それって……」

「ああ、俺とリンデイさんだけの秘密さ。今思えば、俺があそこに辿り着けたのも“上矢”の名前があつたからなんだろうけどな。その時に俺はとある人達と会つた」

「とある人達？ 確か俊くんは管理局に行つたから……局員さんかな？」

「ああ、局員さ。流石のお前らでも恐縮するような——そんな人だつたよ。その人に言われたんだ。『9歳の子どもの夢物語に付き合つてる暇はない。力なき理想な

ど、ただの戯言にすぎない。我を通したくば力をつけろ』ってさ。そしてその人は、俺に一つのエンブレムを放り投げた。ぐしやぐしやに折れ曲がつたエンブレムだ。そしてその人は言ったんだ。『力をつけたら返しにこい』って。そのエンブレムは、いまも俺の部屋に置いてある。……あの人もあの喋り方は無理してたんだと思うけどな」

「……う？」

なのはが小首を傾げる。くそッ、可愛いなあ。

まあ、確かにいまいち要領の得ない話ではあるよな。けど、それでいい。いまはそれでいい。ただ俺は——絶対に信頼できる高町なのはの評価が欲しいのだ。この物語を終わらせるために——

「要領を得ない話でごめんな。訳のわからない話でごめんな。ただ一つ、俺はなのはに聞きたいことがあるんだ。今度こそ俺は——笑顔で物語を終わらせることができるかな？」

両手両足を拘束されてもなお、俺はなのはの目を真剣に見ながら答えを待つ。

なのはは俺のことを不思議に見ながらも、意を汲んでくれたのかやがて真剣な瞳で大きく頷いてくれた。

「うん。俊くんならできるよ。だって俊くんは“法則壊し道化師”でしょ？ できるに決まつてるよ」

笑いながらそう言ってくれるなのは。

よかつた——これで決心がついたよ。

それじゃ、待つているあの子に伝えるか。

「あッ、なのは!? 俺もう漏れるから、いますぐペットボトルに出すから部屋出てつてくれないかな!」

「なんでそうやって雰囲気壊すのかな!? どんなシリアスブレイカーだ!?!」

なのはは顔を赤くしながら、『もー、バカ!』と言いながら部屋から出ていく。ちゃっかり俺のノートパソコンを持っていくのがなのはらしいよね。

☆

まったく……俊つてば、なのはを追い出すのにあんな手を使わなくても……。

それにしても、気が重い。

だって、俊の答えはもう決まったみたいだし。 いや、元から決まっていたのかな?

だからこそ——俊はこれまで動かなかったみたいだしね。

「俊、はいるよ?」

コンコンと扉をノックするが、俊の声は聞こえてこない。

……? 演出でもするつもりなのかな?

少しの間まっつてはみるものの、俊からはやはり返事が返ってこなかった。

「俊、はいるからね」

ガチャリ

「くそッ! 俺のチンコじゃペットボトルにはいらねえよ、というかバイन्दで両手足縛られてるからポイントが定まらねえ!!」

パタン

……………最悪の演出を見た気がする。

両手足を縛られたままペットボトルで頑張ろうとしてる姿をみると、百年の恋も冷めてしまいそう。

『あつ、そういえばフェイトが待ってるんだった。 気配はするから、ちよつと恰好よく待っておこうかな』

「ごめんね……、ごめんね俊……!! もう無理だよ……!」  
一つ咳払いして、俊の部屋に入る。

これから私は執務官としての仕事を始めます

☆

「遠路遙々ご足労痛み入ります、フェイト執務官。一市民の上矢俊と申します。どうぞお見知りおきください」

「執務官のフェイト・T・ハラオウンです。上矢俊さん初めまして。

——っていうやり取りをどこかの並行世界ではやってるのかな?」

「きつとな。それでフェイト、要件はなんだ? もう少し早くきてくれたら、なのはと3Pできたんだけどな」

「ふぎけないの。俊もわかってるでしょ? ——ジエイル・スカリ

エツテイのこと。いま下でヴィヴィオと遊んでる人のことだよ」

フェイトの言葉に頭を掻く。まいったね、流石フェイトちゃんだ。

「あ……、もしかしてさ、フェイトが気付いてるってことは、他の面々も気付いてたり……?」

恐る恐る聞く俺に、フェイトはとっても悲しそうな顔をして——

「非常に言いにくいんだけど——六課は通常運営みたい……」

思わず顔を覆った。

ようするにフェイト以外は気付いてないってことですね。流石

六課だ。次元が違うぜ。

「まあ、だからといって何が変わるってわけでもないんだけどな」

「まあね。そしてこの件はおじさんが担当してるんだって。なんでかわからないけど」

「おっさんが? フェイトじゃなくって? おいおい、てっきりフェイトがこの件を担当してるんだと思ってたけど」

「勿論、私もできるんだけどね。決定はおじさんが決めるみたい。

ちよつと距離を縮めすぎたのが原因なんだろうね……。次元犯

罪者と執務官の関係のままであれば……ってね。情は公平を捻じ

曲げるっていうしさ。そしておじさんは『あのバカに決めさせる』らしいよ。ようは俊次第ってことだね」

……成程な。確かに、周辺で“一般”市民は俺だけだしな。リ  
ンデイさんはこの場合、除外になるか。

「といっても、俊の中ではもう決まってるんでしょ？」

「ああ、残念ながらね。それよりフェイト、お前はいいのか？ ずっと探し求めていた相手だろ、スカさんは」

「確かに、私はずっと探してたよ。もしかしたら、母さんのことも聞けるかもしれないし、あの人が関わってると思うからね」

フェイトは俺の隣に座りながら、そう漏らす。

「けど、いまのあの人を逮捕するのは……なんだか勿体無い気がする。このままあの人が何もしないでいるのなら……そう思ってはいるけど。現実問題として、そうはいかないんだよな」

「ああ、確かにおっさんも言ってたな。スカさんから仕掛けなければ、みたいなこと言ってた。ウーノさん、戦闘機人なんだろう？」

「うん……。よく知ってるね」

「とある人達に聞いた。流星は無限の欲望、天才だ。けど——それ以上に変人だ」

「それ俊が言っても意味ないよ」

「ごめんなさい」

確かにスカさん以上に俺が変人だった。

「俊はどうしたいの？ 市民である俊が一言通報すれば、そこでスカさんを捕まえることができるよ。おじさんは『5秒あれば片が付く』みたいだし」

「おっさん怖すぎ関わりたくない」

フェイトがクスクスと笑う。

釣られて俺もくすくすと笑う。

「なあフェイト。ごめんけど、もう決めてるんだ。いまはまだ攻略法がわからないけど——ハッピーエンドにしてみせるよ、この物語。スカさんだって、六課だって、管理局だって、登場人物全員が笑顔で終われる物語だ。だからごめん——見逃してくれ」

手を合わせて、フェイトに頭を下げる。

「うん、いいよ。けど無理はしないでね？ 無理をしていると判断し

た場合、ベットに拘束して一日中面倒みるから」

「すいません、それ性関係もアリですか？」

「……やる？」

「……え、……いや……えーっと」

「意気地なし……」

フェイトはつま先で俺のミゾを蹴り込むと、サツと立ち上がり舌を出す。

「それじゃここで私と俊が会ったことは皆には秘密ね」

「ああ、二人だけの秘密だ」

そうしてフェイトは扉に手をかける。

「ねえ俊。 俊の言ってることは夢物語じゃないよね？ ——信じていいよね？」

振り返り、俺にそう言ってくるフェイト。

……そうだよな。 フェイトだっずっと探してきたんだもんな。

スカさんバカだけど。 スカさんアホみたいなことしかやってないけど。 それでも——プレシアとつながりがあるのがスカさんなんだよな。

俺はフェイトに向かって言い切る。

「夢は叶えるものじゃない。 夢は信じるものじゃない。 夢は見つめるものじゃない。 夢は視るものじゃない。 夢は掴むものじゃない。 夢は——醒めるものだ。 そして後に残ってるのは——ただの現実、物語だけさ」

だから任せてくれ、フェイト。

絶対に、スカさんに思う存分プレシアのことを聞ける未来を作るから

「俺が困ったら助けてくれ」

「ふふっ、言われなくてもそのつもりだよ」

そういつて今度こそフェイトは扉を閉める。

プレシアのときは失敗した。 リインフォースのときは半々だった。 だから今度こそ——成功させる。

「ま、その前に残りの休暇を楽しむとするか」



はやく帰ってこないかな、なのは。  
膀胱が大変なことになりそうなんだけど。

## 76. ヴィヴィオの冒険

こんにちはヴィヴィオです！ きょうはパパとなのはママとフェイトママがなのはママのおみせでなかよくおしごとしています。あさにちよこつといたらパパがためいきをつきながらたんたんめん？ というたべものをつくってました。おきやくさんもうれしそうでよかったです。なのはママはかわいいえがおでおきやくさんとしやべつていて、フェイトママはケーキをつくっていました。ちなみにヴィヴィオにアメさんをくれたひとでした。

「あれヴィヴィオちゃん。一人でお出かけ？ ひよつとこさんは？」

「ガーくんいるからだいじょうぶ！ あのね？ パパとなのはママとフェイトママがいつしよけんめいおしごとしてるから、ガーくんといっしよにかいがらとりについてくるの！」

「へー、ヴィヴィオちゃんはえらいね。私もいこうか？」

「スバルンはきちやダメ！ ヴィヴィオがとるもん！ パパやなのはママやフェイトママにもいつちやダメだよ？」

「わかったわかった。けど気を付けてね？ それと、暗くなる前に帰ってこないとダメだよ？ ひよつとこさんが発狂するから」

「はーい！ ガーくんいこー！」

「イツテキマースー！」

なのはママのおうちのげんかんでスバルンにてをふつて、ガーくんといっしよにかいがらがとれそうなどころにいくことにしよう。

ももこさんからもらったすいとうをかけながら、ガーくんとおててをつないであるくことにしました。

☆

うーん……やっぱり誰かに報告してたほうがいいよね。

それにしても、ヴィヴィオちゃんは可愛いなー。ひよつとこさんやなのはさんやフェイトさんのために貝殻を取りに行くなんて。

まあ、ちよつと危ないような気もするけどガーくんいるし、海鳴の人達って優しい人が多いし大丈夫だよ？ なのはさん曰く『ガーくん

めちやくちや強いから安全面は確保されてるかな』らしいし。

でも――

「やっぱり連絡はいれておこう。 ようはひよつとこさんとなのはさんとフエイトさんに私から連絡しなければいい話だし」

携帯からヴィータさんの電話番号を選択しかける。

数秒待ったのち、ヴィータさんの声が電子機械を通して聞こえてきた。

「あ、ヴィータさん？　いま大丈夫ですか？」

『まあ、大丈夫つちや大丈夫だけど。 どうした？　暇なら手伝え』

「いや、いまからなのはさんのベット行くんで暇じゃないです。 っで、まあそんなことは些細なことなのでどうでもいいんですが」

『いやどうでもよくないだろ。　いまとんでもない変態を見つけてしまったぞ』

「ひよつとこさんのことですが」

『あいつは形容し難い変態だから』

どんな変態なんだろう。　ちよつと興味がわく。

『で？　要件は？』

「あ、そうでした。　いまヴィヴィオちゃんがガーくんと一緒に出掛けたので、一応報告しておこうと思って」

『一緒にはついていかなかったのか？』

「家族サービスをしたいそうです」

『ああ、成程な。　んじやまあ、あたしからひよつとこにそれとなく報告しておくよ』

「お願いしますね。　それじゃ」

電話を切って、なのはさんの部屋に行くために玄関を開ける。

ぐへへへへ……なのはタン……待っててね……。

☆

「はッ！　この気配!!　誰かがわたしの部屋に入ろうとしている！」

「はいはい、わかったから仕事をしろ。　いつまでお客と談笑してんだ」

急激な悪寒と寒気を感じ、高速で家の方角を振り向くと、そこには

幼馴染兼ペットの俊くんが溜息を混じらせながらサンドウィッチをもって立っていた。……そういえば、そのサンドウィッチわたしが持っていていくんだった。すっかり忘れてた。

「大変お待たせいたしました。こちらハムとタマゴのサンドウィッチとレタス・トマト、そしてカリカリのベーコンを挟んだフレッシュサンドにございます。お飲物のおかわりはいかがでしょうか？ よろしいですか？ はい、かしこまりました。それでは、ごゆっくりとおくつろぎください」

俊くんは笑顔を見せながらお客さんに一礼して、そのまま帰るかと思いきやわたしの腕を掴んで外へと連れ出す。

まだまだ暑いこの季節、あまり汗でベタベタするのは嫌なんだけど……。汗臭いと、そばによることができないし……。

ペシッ

「あいたっ!？」

おでこに痛みが走る。思わず手を額にもっていき擦っていると、目の前で俊くんが溜息を吐いていた。

「なのは、仕事しような」

「俊くんがそのワードを口にしちゃいけないような気がするんだ。」

『お前がいうな』 みたいなこと絶対言われると思うよ」

「翠屋なら話は別だ。翠屋では真剣に仕事をするよ、俺は」

「そういつて昨日、発狂したあげく警察に捕まってわたしに引き取られることになった男は誰だっけ?」

「クロノの悪口はよせ」

「キミの悪口だよっ! なに平気な顔で此処にいないクロノくんを罪を擦り付けようとしてるの!？」

「いいか、なのは。後ろを振り向くのは死ぬときだけだ」

「誤魔化すな!」

お返しに ペちん と俊くんのおでこを叩く。俊くんは「あいたっ」という声をあげて打たれたおでこをさする。

「まったく、局員が市民に暴力を振るうとは……。この暴力局員!」  
「俊くん住民票ないよ? ペットのところで登録してあるし」

「え」

思わず俊くんが固まる。 いやまあ……流石にいまのは冗談だけ  
どき。

「俊くん、冗談だよ」

「そ、そんなこと知ってるし！」

「ごめん、涙目で言われても説得力はないんだけど……」。

しかしまあ……それにしても、確かに今日の俊くんは頑張ってるよ  
ね。 忙しなく働いてくれてるし。 けど……どうしてこんなに頑  
張って働いてるんだろう？ いつも俊くんならサボってお客と遊  
んだり、ゲームしにいたりするのにな。

「ねえ俊くん？ 今日頑張ってるよね。 いつもならサボるのに。

どうしてそんなに頑張ってるの？」

「桃子さんや士郎さんの味と腕を少しでも早く盗みたいから。 そう  
すれば、いつでもなのはに翠屋の味を食べさせることができるし、  
フェイトの笑顔もみれる。 それに——ヴィヴィオに知ってほしい  
んだ。 俺やなのはやフェイトやはやて、皆が子どもの頃、そして中  
学時代に高校時代、翠屋のケーキを食べて過ごしたことを。 そして

——俺たちが好きなケーキを、ヴィヴィオにも好きになってほしい。

小さい夢だよ、四人で卓を囲みながらヴィヴィオに子どもの頃の話  
を聞かせるんだ。 そしたらさ、やっぱり翠屋のケーキって必要じゃ  
ん？」

だからこうやって頑張ってるんで、桃子さんや士郎さんの腕を間近  
でみて、盗みたいんだ。

そう照れながら俊くんはいった。

自慢じゃないけど、わたしのお母さんはその道では有名な人で、そ  
の腕前も『超』一流である。 そして誤解しないでほしいけど、俊く  
んの腕前もお母さんには敵わないながらも一流の腕前もっている。  
けどどうやら俊くんはそれじゃ満足しないらしい。 いや、満足で  
きないらしい。 その道のプロであるお母さんに勝つ気でいるみた  
いだ。

「それにさ、もしなのはが万が一管理局を止めて、翠屋を経営すること

になったとき、俺が厨房担当だろ?」

「それは当たり前だよ」

「けどまあきつと俺だけじゃなくティア辺りはついてくるぜ。あいつはなのは教の狂信者だからな」

「なにそれ怖い」

ティアも怖いけど、いつの間にかできてる私の宗教が一番怖い。

「それとも迷惑だったかな? 俺と一緒にいると」

そう聞いてくる俊くん。どこか不安そうだ。

……まったく、捨てられた子犬みたいな表情しちゃって。

「迷惑じゃないよ。けど、期待しちゃうよ?」

二人でのお店経営

「ああ、任せてくれ。桃子さんや土郎さんの腕すら超えてみせるさ」  
そういつて俊くんは笑いながら、お店の中へ入ろうとする。

——と、そこにヴィータちゃんが物凄く気まずそうな顔で立っていた。

「あれ、ロヴィータ。どうした?」

「いや……その……。ちよつと考えてみたんだけど、どうにも誤解を招いてしまう言い方になると結論が出てしまってさ……。こう……言いつらいというか、なんというか」

「あん? どういうことだよ?」

俊くんの質問に、ヴィータちゃんは頭を掻きながら要領の得ない呻き声を発するだけ。ヴィータちゃんはゾンビにでもなりたいたいのかな?」

そう思っていると、ヴィータちゃんが俊くんに向かって意を決したように声を発した。

「あー、ひよつとこ。えーつと……。お前の子どもなことなんだけどな、ちよつと問題が起こって……。いや、問題はまだ起きてないんだけど。けど、きつと問題が起こる予感がするから先にお前には言っておこうと思ったんだ。なのはと一緒にいるなら丁度いい。これはストレートにいったほうがちゃんと伝わると——、ってなにしてんだ?」

ヴィーたちちゃんが必死に何か言葉を喋っていたような気もするけど、既にわたしにはそんなこと関係なかった。

俊くんの胸倉を掴みあげ、右手で持ち上げ宙に浮かす。そして左手には魔力弾を作りながら俊くんに質問をしていく。

「俊くん、どういうことかな?」

「まっつてくれ、これは誰かが俺を陥れるために作った罠だ!」

「既に最底辺にいるキミを陥れようなんて酔狂な人はいないよ。それにしても俊くん。俊くんってロリコンだよ。あー、成程。

だからわたしのときは手を出さないんだね。死ねロリコン。ねえ俊くん。わたしね、俊くんのこと好きでも嫌いでもないけど、そういったところは嫌いだよ。だって年端もいかない少女に欲情するなんて人として終わってるよね」

「あの……なのはさん……? というか、俺のこと好きでも嫌いでもなかったんだ。これずつとお友達フラグのまままで終わるよね……」

「わたしもね、俊くんとはずつと一緒になりたいよ。でも、俊くんがロリコンだと捕まっちゃう可能性だつてあるじゃん? だからね、ずつと前から考えていたことがあるの。でもそれは流石に可哀相だと思つて止めてただけ……もうそういう気持ちは一切捨てるよ」

「いやっそういう気持ちは大事だと思うよ! 人の気持ちを考えることが出来るつてすごく大切なことだと思っしよ!」

喚く俊くんを下におろして、バインドで足を固定する。

そしてわたしは懐から方が一に備えて買ってきた手錠を俊くんの右手にかける。そしてもう一つのほうをわたしの左手にかけた。

そして笑顔で俊くんに言う。

「大丈夫! わたしが俊くんのロリコン体質を直してあげるね!」  
まったく……、ほんと俊くんのお世話は大変なんだから。

☆

タツタツタツタ……

「ねえガーくん、おもくない?」

「へイキ! ヴィヴィオカレイヨ!」

ヴィヴィオが上から見下げるように質問したら、ガーくんは下から

見上げるようにして答える。

俊がなのはの調教を受けている現在、ヴィヴィオとガーくんは砂浜に足を踏み入れてかいがら集めに精を出していた。

「うーん……、なのはママとフェイトママのかいがらはみつかったけど、パパのかいがらはみつかないねー」

「ネー。アッチニイッテミル？」

ヴィヴィオを上に乗せていたガーくんが、羽で彼方のほうを指さす。

「うーん、そうしょつか。まだじかんもあるしだいじょうぶだよね？」

「ダイジョウブ！ ガークンガイル！」

ヴィヴィオの問いにガーくんは力強く答えた。

そして二人は協議の結果、とりあえずこの砂浜の終着点まで足を進めることとなった。

「ガーくん、こうちやのむ？」

「マダイイ。ヴィヴィオハ？」

「ううん、ヴィヴィオもだいじょうぶ」

二人ともお互いのことを気遣いながら足を進める。

「ねえガーくん、あれはなんていうの？」

「エーット、トウダイカナ？」

「へー、とうだいかー」

ヴィヴィオが指さした方向には、灯台がひっそりとただずんでいた。

「ねえねえ、いってみようよ！」

「ワカッター！」

ヴィヴィオが上からガーくんの頭を軽く叩き、ガーくんはそれに応えるように進路を変えて灯台のほうへと走っていく。

灯台にはガーくんの最速の足ですぐについた。

ガーくんから降りるヴィヴィオ。そして周囲を見回して一言。

「なにもないね」

「ネー」



ヴィヴィオの言葉に頷くガーくん。

「キユウケイスル？」

「うーん、きゆうけいする。　ヴィヴィオちよつとだけのどがかわいた」

えへへと笑いながら座り、かけていた水筒を膝に乗せる。　ガーくんはヴィヴィオの隣に待機するように、一緒に座り込む。

ヴィヴィオは両手で水筒の蓋を回し、自分の力では取れなかったのでガーくんに渡す。　ガーくんは器用に羽を動かして蓋を開けると、そのまま紅茶を蓋にそそぎヴィヴィオに渡す。　笑顔で受け取るヴィヴィオ。

ヴィヴィオの手にも伝わる、ひんやりとした感触。

その感触を楽しみつつ、ヴィヴィオは蓋を傾けて紅茶を飲む。

「わー、おいしい！　ガーくんものむ？」

「ノムー！」

そのままガーくんは蓋を渡すヴィヴィオ。　ガーくんはその蓋を受け取り、ごくごくと飲み干す。　どうやら、ガーくんはやつぱりのどが渴いていたようだ。

「おいしいね、ガーくん」

「オイシイネー！」

ヴィヴィオとガーくんが二人で笑いあっていると、突如後ろから声がかかってきた。

「こんな所に一人でいると、悪くて怖い狼に傷物にされちゃうぜ。

とくに可愛い女の子ならな」

声をかけられたヴィヴィオは振り向く。

「久しぶりですね、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト嬢。　またえらくロリな容姿になっちゃって。　既婚者じゃなければ襲つてるところでしたよ。　……ん？　いや、なんか違うな。　微妙にオリヴィエ嬢と違うぞ」

ヴィヴィオが振り向き目にした光景は、黒のコートに身を包み、シルクハットをかぶった男性がしきりにうんうんと頷いている様であった。

## 77. ヴィヴィオの冒険②

灯台の下、黒のコートを着込んだ男性はヴィヴィオのほうをみて唸っていた。

「うーん……やっぱオリヴィエ嬢とは少し違うような……。でも容姿はそっくりだしなー……」

そんな男をみながらヴィヴィオは隣にいるガーくんにも男を指さしながら聞く。

「ガーくんしってるひと?」

「シラナリー。ヴィヴィオシッテル?」

「ううん、ヴィヴィオしらない。パパにしらないひとにこえかけられたらこえあげなきゃダメだ、つていわれたけど……やっぱりあげたほうがいいのかな?」

ヴィヴィオが首を傾げながらガーくんと話し合いをしていると、男は「ヴィヴィオ」という単語を聞いた瞬間に顔をあげてガーくんたちのほうをみる。

「ヴィヴィオ……? ということは、なのはちゃんとバカ息子の子どもというのがお嬢ちゃんか。あ、けど髪色が違うし……フェイトちゃんという子のほうとの子どもなのか? けど士郎からはなのはちゃんとの子どももって聞いたし……」

「パパとなのはママとフェイトママをしってるの?」

「んあ? ああ、知ってるさ。といつても、俺が実際に会ったことがあるのはなのはちゃん一人なんだけだな」

ヴィヴィオのクエッションマークを消すかのように男はそう快活に笑いながら答えた。シルクハットを取りながら、丁寧にお辞儀する男。

「はじめまして、ヴィヴィオ嬢。常識外れの魔法使いでございます」  
そうお辞儀をした男は、ヴィヴィオの前に片膝をつき指を鳴らす。

男が指を鳴らした瞬間、ヴィヴィオの足元には青や赤や緑や黄色の水玉模様のカラフルなシートが設置され、ヴィヴィオの後ろにはオレンジジュースやリンゴジュース、トロピカルジュースなど各種飲み物

と、クツキーやポテトチップスやポツキーやアメなどの大量のお菓子が突如出現した。

その光景にヴィヴィオとガーくんは目を輝かせながら食い入るように見つめる。そして男に振り返ると、男は笑いながら口にする。「おじさんも休憩の仲間に入れてくれないかな?」

ヴィヴィオとガーくんは目を合わせ、笑いながら男に言う。

「うん! いいよー!」

「イイヨー!」

☆

「なあ、なのは。一つ思ったんだけどさ……。べつになのはと手錠されてても不自由なく動けるよな」

「うん、確かに手錠してても問題ないね」

なのはに手錠されてからというもの、べつにそこまで普段と変わらない行動をしている男です。まあ確かにちよつと右手が使いにくいなく、とは思うけど……。とくに支障はないかな。

「手錠をしても普段と変わらない行動ができるのは当たり前だよ。」

わたし達が何年一緒にいると思ってるの? できて当たり前」

「……言われてみれば、当たり前だよな」

……世の中の幼馴染同士で手錠してるのかどうかは別として。

「この目的は俊くんが小さい女の子、俗にいうロリっこに近づかないようにするためだよ」

「だから俺はロリに興味がないと——」

俺の反論をあいているほうの手——すなわち右手で塞ぎながらものは生徒を可愛く叱る先生のような感じで言う。

「いい? 俊くんは年上も年下も対象外ということにわたしの中ではなってるんだからね? そして幼馴染萌えで魔法少女萌え。幼馴染だけでも脅威なのに、魔法少女萌えにロリ萌えが加わったら勝ち目がなくなっちゃうよ。絶対にロリに目覚めたらダメだからね? わたしとの約束だぞ?」

それに俺はただ頷くことしかできなかった。

口を塞がれて苦しいと思うより、客を待たせてるということも忘

れ、ただただ目の前にいる女の子を可愛いと思ってしまった。

なのは俺の領きを確認すると、笑いながら手錠をじやらりと鳴らしてみせた。

「ほら、早く次の料理運ぼうよ」

あ、うん。 そうだな——ん？」

なのはの言葉に自分たちが配膳をしている最中だったのを思い出し、片手でもっていたトレイに次の軽食を置くために土郎さんの所に帰ろうと進路を向けたところで、ヴィータが俺のエプロンを掴んでいた。

ヴィータは俺の顔をチラリと見た後、ほんとうに申し訳なさそうな顔で

「すまん、ひよつとこ……。あたしの伝え方が悪かった……」

そう謝ってきた。

まさかこいつ、まださっきのこと気にしてたのか？ 俺は逆にいい思いをしているというのに。

「気にしてないよ、ヴィータ。 って、なのはさん？ なんで目隠してるんですか？」

「えつと……、なんとなくな……？」

ヴィータをマジマジとみようとすると、隣にいたなのはが俺の目を手で隠してきた。 前がまったく見えません。

「まあ、あれだ。 そんなに気にすんなよ。 俺はなのはと手錠で繋がって嬉しいぞ？ 意外と快適なライフを送れてるさ」

「どう考えてもペットライフだろそれ」

うん、いつものヴィータに戻ってくれた。

「それより、早く仕事しようぜ。 ほら、なのは。 俺らも運ぼう」

なのはを促して厨房に入る、すると——

「あら、フェイトちゃんケーキ作りの才能あるわよ！ 俊ちゃんを超えちゃうかも」

「ほ、ほんとですか!？」

桃子さんの歓声と、フェイトの驚きと嬉しさが混じった声が聞こえてきた。

何事かとみてみると——そこには綺麗に装飾されたショートケーキがおかれた。一目見ただけでわかる。これ絶対うまい。そして器用なフェイトは、そこにアルフの砂糖菓子をイチゴの横に可愛らしく配置していた。

「あ、俊！ えへへ、桃子さんに褒められちゃった……。 って、どうしたの？」

「あ、うん……。 その……」

ツインテールに結んだフェイトとケーキを交互に見る。

「その……ケーキもってるフェイトは似合うなー、 って思ってた。 なんつーか、可愛らしい」

頭を掻きながらそうフェイトに告げる。

フェイトは一瞬驚いた顔をしつつも、すぐにいつもの優しい笑顔に戻って傍に置いてあったフォークを手に取り一口大の大きさにケーキをすくうと、俺の口にもってきた。

「はい、あ〜ん」

「えーつと、あ〜ん」

つついフェイトの声と口に合せて俺も口を開ける。するとそこにケーキがはいつてきた。 甘い甘い、とろけるような——そんな甘さだ。 そしてかすかに苦味があるのか、口にいれてから数秒してビターな味が刺激する。 成程、これはうまい。 ほんとうに俺を超えるんじゃないか？

「おいしい？」

「うん、おいしい」

「ふふっ、よかった。 これで『おいしくない』と言われたら頑張ってたものが全部水の泡になるところだったよ」

「バカいうな。 フェイトのケーキを『おいしくない』なんていう輩は俺がぶん殴ってやるよ」

そういうとフェイトは俺の鼻をつんと触って舌を出す。

「なにいつてるの？ 私にケーキを作るのはキミにだけだよ。 それ以外には作らないよ」

「そうなの？ 勿体無い」

「そうだよ」

フェイトは俺にずいと近づくと。昨日までの距離感とははやない。そしてフェイトは俺の頬についていたクリームを舌で舐めとり、ケーキのイチゴを食べながらいった。

「私のケーキは俊が独り占めしていいよ」

俺は萌え死んだ。

いつも思うことなんだが、どうしてフェイトは俺の心をこんなにも荒らしていくんだらうか。どうしてこんなに俺の萌えポイントを刺激してくるのだらうか。

俺はどうしたらいいんでしょうか。

そのままフェイトは、俺の口にもう一回ケーキを運んでくる。それに抗うことなく食べる俺。

ぎゅむ

「あいたっ——!?!」

足元からくる強烈な痛み思わず声が出る。そして犯人である人物に声をかけた。

「なにすんだなのは！ 痛いじゃないかっ!?!」

「ふーん、わたしは悪くないもんねー」

「お前が悪いに決まってるだろ!?!」

「いや、悪くない。これは俊くんが悪い」

「あん?」

「それより早く運ぶよ」

なのはが左手を引っ張る。俺となのはの手は現在手錠で繋がっているわけで、なのはの引っ張ったほうが左手だから俺も引っ張られるわけである。

「ちよつ、わかったってば。ちゃんと歩けるから——」

「俊、あーん」

「あーん」

フェイトが差し出してくるケーキをついつい食べてしまう。もう生きている中で、フェイトがこんなことしてくれる機会なんてない

と思うし、この状況を満喫せねば。例え世界が滅亡することになろうとも、俺はこの場を動かないぞ。俺を動かすことなどできはしない！

「しゅーんーくーん？ 誰がキミのご主人様か忘れちゃったのかなー？」

——右手の一本くらいくれてやるよ。

俊がなのはとフェイト——地獄と天国の板挟みにあっているのを遠くからみながらヴィータとシヤマルが話す。

「なんだろうな。フェイトがアイツにケーキ食べさせてる場面が、あたしには餌付けにしか見えないんだけど」

「奇遇ね。私も餌付けにしか見えないです」

「どう考えてもアイツが二人のペットにしか見えないよな」

「ペット以外に表す言葉が見当たり——」

カランカラン

「あ、おかえりなさい。どうでした？」

「うーん、意外と人が混んでたな。って、あれ？ なんで俊がおるん？」

ドアを開けて入ってきた八神はやては、シヤマルの言葉に返答しながら、この場において当然なはずの俊の存在に疑問を投げる。

「え、俺って翠屋に居ちやいけない存在なの……？」

「へ？ いやそういうことやないんやけどな？ さっき浜の灯台でヴィヴィオちゃんとガーくんが男の人の隣で楽しそうに喋ってたから、てつきりあんたかと——」

はやてが何かを言い切る前に、店の中で大きな音がして、後方のドアが壊された。

やがて遅れてはやての頬に伝わってくる風。

それは本当に一瞬で、誰も反応できず、誰も視認することができないような反応と速さであった。

誰もが疑った。誰もが目を丸くした。

そんな中、はやてだけが声を発することができた。

「……………え？ いまのはなんなん……………」

それに続くようになのはも声を上げる。

「手錠……引き千切って行っちゃったね……」

自分の左手を目線の高さにまで掲げ、引き千切られた手錠をみながら呟く。

「あの状況で動くとは……」

フェイトがケーキをもったまま、茫然とドアのほうを見つめる。

「つて、そんなこと言ってる場合じゃねえだろ！ お前らの娘が誘拐されるかもしれないぞ！」

『そうだった！ 早く行かないと!!』

茫然と動くことなく、ただただドアのほうをみていたなのはとフェイトに大声を上げるヴィータ。そのヴィータの声によって覚醒した二人は顔を見合わせてエプロンも脱がずに駆け出した。その数秒の後で、はやて達も駆け出した。

☆

「それでね？ パパはなのはママとフェイトママがだいすきなんだよ！ でね？ なのはママとフェイトママもパパのことだいすきで、パパをしかるんだけど、ママたちとつてもやさしいめをしているの！ ヴィヴィオもね、そんなパパとなのはママとフェイトママがだいすきな！」

「ほー、成程ねー。アイツはなのはちゃんだけじゃなくフェイトちゃんもやらかも大好きなのか」

「ううん。パパはね、みんなのことだいすきなんだよ！ それに、パパはまいにちパソコンでにつきをかくの！」

「なに？ あいついつの間になんか可愛い趣味を持ちやがった。日記を書くのはいいことなだけだな」

男は隣にいるヴィヴィオの口の周りについているお菓子のカスを拭きながら、楽しそうにヴィヴィオの話聞く。

「それにしても……、てつきりなのはちゃんとくつつくかと思いきや、なんか変なことになってるなあ。刺されないか心配だぞ。ちゃんと三人で生活できるだろうか」

男は溜息を吐きながら、お菓子のカスを拭きとった紙を消滅させ



る。

「さんになんてせいかつう？　ちがうよ、ヴィヴィオとガーくんもいるからごにんでせいかつしてるんだよ？」

「ん、ああ……そういえばいまはアイツも家族で頑張ってるんだったな。　まったく……こつちの問題がもう少しで終わりそうだったのについてないぜ」

「もんだい？　どんなもんだい？　ヴィヴィオもね、ふたけたのさんすうがちよつとだけでできるようになったんだよ！」

「ほー、それは偉いねー。　問題つてのはちよつとお子様には難しいことなんだけどな。　えーつと……エスプレツソウイルスだったかな？」

男は後ろに振り向きながらそう問いかける。

男が問いかけた先には、綺麗な女性がちよつと呆れたような顔でたっていた。

「エクリップスウィルスですよ、あなた。　まったく、自分が担当してるというのになんて名前を間違ってるんですか？」

「いや、担当はしてないさ。　俺は局員じゃないしな。　ただ、この問題を愛しの息子に片付けさせるわけにはいかないだろ？　あいつはあいつでやるべきことがあるしさ。　俺達にできなかつたことをやってもらうからな。　だから息子のために片付けることにしてんの」

女性の呆れ声に男はちよつとむっとしたように返答する。

「おねえさんだーれ？」

「うふふ、だーれでしょ？」

「ううー、わかんない」

男のそばに歩み寄る女性の顔を見ながら疑問符を浮かべるヴィヴィオに、女はそう切り返す。　その切り返しを受けて、ヴィヴィオは少し考え放棄した。

「それじゃ、私は謎の可愛く可憐な少女ということだ」

「……少女ではないかな」

「なんですつて？」

「いえ、なんでもないです」

男の眩きを女は敏感に聞き取り、男のほうを睨みつける。男はすかさず謝罪の言葉を口にした。その二人の一連の行動をみて、ヴィオは目の前にいる男性と女性に自分のパパとママの姿が重ねて見た。

「なんだかパパとママたちみたい。ね、ガーくん」

「ソウダネー。ニテルカモー」

クツキーを食べながら隣に控えていたガーくんは声をかけるヴィオ。その声には嬉しさを混じらせていた。

「むっ、なのはちゃん達と同じような感じか。そりやまた照れるな」

「あの子があなたと同じで碌でもない子に育たないか心配ね……」

「なのはちゃんがいるから大丈夫だろ。それにしても——ありがとな、ヴィヴィオ嬢」

男はそういつてヴィヴィオの頭を撫でた。

「あいつも——俊にもようやく守りたい子が出来たみたいだ。なのはちゃんとの関係は、守り護られの関係だからな。その点、ヴィオ嬢は違うようだし」

男はクツキーを一つ摘まんで、立ち上がる。

「ほんとはあいつに会いにきたんだが……今日のところはやめておこう。あいつの顔を見ると——全てを投げ出して、三人で生活したくなるしな」

「そうですね。それにいまの俊には家族がいますから、ちよつと無粋かもしれませんが」

女性はクスクスと笑いながら、ヴィヴィオとガーくんの二人を抱擁する。

「ヴィヴィオちゃん。俊のことお願いね？ あの子、泣き虫だから

心配なの。それにガーくん？ かしら。ヴィヴィオちゃんをよ

ろしくね。私達の可愛い孫を守ってあげてね？」

「マカセロ」

女性のお願いにガーくんは大きく頷いてみせた。

それを確認して、女性は笑顔で離れる。

「いっっちゃうの？」

ヴィヴィオは名残惜しそうに男のコートをキュツと掴む。

それに男は苦笑しながら、ヴィヴィオの目線までしゃがみ込み、  
「いつか会えるさ。 ああそれと、キミにこの言葉を送ろう。 いつ  
かきつと、この言葉の意味を体験する日がくると思うからな」

男はそう区切り、凜とした透き通る声で言った。

——子を心配しない親はいないさ

☆

右手からぽたぽたと血が垂れてくる。 どうやら手錠を引き千  
切ったときに裏側の柔らかい部分を裂いたようだ。

「はあ……はあ……！ ヴィヴィオ……！ まつてろよ……！ パパ  
がすぐに行くからな……！」

自分でも驚くほど足が回転する。 息こそ切らすが、だからといっ  
て立ち止まるような気分にはなれない。 それよりもなによりも、一  
刻も早くヴィヴィオの無事を確かめたい。

全速力で浜を一直線に進み、灯台のほうに向かうと——そこには  
ヴィヴィオが海を見つめて立っていた。 その後ろ姿に声をかける。

「ヴィヴィオ——！」

俺の声が聞こえたのか、ヴィヴィオは振り向き姿を確認して、笑顔  
で手を振ってきた。 隣にはガーくんも手を振っている。

そして訪れる安堵の疲れ。 いまになって、ようやく疲労感がドン  
と押し寄せてきた。

しかしそれでも、だからこそ、俺はヴィヴィオに近づいて思いつき  
り抱きしめた。

「わぷっ!? パパー、いたいよー!」

「よかった……！ 本当によかった……！」

ヴィヴィオを両手で離さないように抱きしめながら辺りを見回す。  
はやての情報によれば、このあたりに俺の娘にハレンチな行為をし  
ようとした輩がいたそうだが……。

「ヴィヴィオ、ここに誰かいなかったか？」

「えつとね……、さつきまでおはなししてたの！ それでね、クッキー  
とかジュースとかたくさんだしてくれたんだけど……きがついたら

なくなってたの！ ね!? ガーくん！」

「ウンウン！ フシギダヨネー！」

……えーっと、どういうことだ？

「つまり……どういうことだってばよ」

もう一度ヴィヴィオの全身と衣服の乱れをチエツクする。もう念入りに、それこそスカートをめくって下着が汚されていないかまで確認した。

「……何もされてないみたいだ……。よかつた……」

どうやら相手はロリコンでも、性的なことをしたわけではないらしい。

してたら見つけ出して殺してるけど。

ふとヴィヴィオのほうに視線を向けると、なんだかもじもじと俺のほうをみていた。

「パパ……スカートめくっちゃ……や」

「え？ あ、ごめんごめん。悪かった悪かった」

顔を赤くして怒っているヴィヴィオを宥めようと抱っこして考える。

ヴィヴィオが立っていた場所には、クッキーやジュースどころか、人がいた気配さえない。普通、そこに人がいたのならば気配というか、残滓が残っているはずんだけど……。

「はやてに限って見間違いつてことはない——とは言いきれないな。はやてだし」

それともあれか？ 魔法で消したとか？

……いや、そっちのほうがありえないか。

「ねえパパ？」

「ん？」

「しんぱいした？」

だっこした状態のまま、ヴィヴィオは小首を傾げながら聞いてくる。

俺はその質問に、ヴィヴィオの頭を撫でながら答えた。

「当たり前だろ。子を心配しない親などいないさ」

遠くのほうで、なのはやフェイトの呼ぶ声が聞こえてくる。

「ほら、ママ達も心配してるだろ？ ヴィヴィオは可愛いからな、へんな男が寄ってこないか心配なんだよ。きつと小学生になったらモテるんだろうなあ……」

皆の声のする方向に歩きながらヴィヴィオに話しかける。

「だいじょうぶだよ、パパ。 みんなにねしようかいするの！ パパはヴィヴィオのおむこさんだって！ パパはなきむしさんだからヴィヴィオがそばにいないとダメなんですよ？」

「泣き虫って……まあ……若干当たってはいるけど……」

「えへへ、パパかわいい」

ヴィヴィオは俺の首に腕を絡ませ抱きつきながらそう言ってくる。

うーん……嬉しいけど、ちよつと複雑だ。 どうせなら『パパ、カッコイイ』と言ってほしいかも。

前方からなのはとフェイトが駆け寄ってきて、俺ともどもヴィヴィオを抱きしめる。

その勢いが強すぎて、四人とも砂浜に倒れてしまったが——なんだか笑いがこみ上げてきて、その場にいる皆と大いに笑ってしまった。そして俺はヴィヴィオを抱きしめたままその場で笑いながら誓う。

——今日はヴィヴィオと一緒に寝よう、と。

## 78. 風邪.

ヴィヴィオと一緒に寝ようと決めたこの日、俺はヴィヴィオを膝に乗せながら今日の夕食を食べていた。夕食のメニューは中華。

五目チャーハンにカニあんかけチャーハン、天津飯に中華おかゆ、鶏肉細切りラーメンに温泉味噌ラーメン、ソース焼きそばに葱豚ラーメン、餃子に春巻き、しゅうまいに小龍包、エビマヨ、エビチリ、イカの塩炒め、鳥のからあげ（チリ風味やマヨ風味、そして普通の）、八宝菜にチンジャオロース、レバニラ炒め、酢豚、麻婆豆腐、わかめスープである。

大きなテーブルには各種飲み物と俺と桃子さんとリンディさんで作った料理が所狭しと並んでいた。

そんな中、俺はエビチリを一つ箸でつまんでヴィヴィオの口に運ぶ。

「はい、ヴィヴィオ。 あーん」

「あーん！ もぐもぐ」

「おいしいか？」

「うん！ おいしい！」

膝に乗せたヴィヴィオが俺の顔を見上げながら笑顔でそう言うってくる。 はあ……幸せ。

『でれでれだ』

『でれでれってレベルじゃねえだろ、あれ。 どのバカップルだよ』

『ヴィータさんもロリですし、ひよつとごさんにやってももらえるのでは？』

『やめろ、せつかくの料理がまずくなる』

『ロリは否定しないんですね』

『体は子ども、精神面は大人だ』

近くの席でロヴィータと嬢ちゃんの話し声が聞こえてくる。 ええい、うつとおしい。 愛しのヴィヴィオの声が聞こえぬではないか。

「次はどれが食べたい？ パパがとってあげるよー」

「えーつとね……。それじゃあれがたべたい！」

ヴィヴィオが指さしたのは八宝菜。俺は八宝菜を小皿によそいヴィヴィオの口に運ぶ。

「あーん」

「あーん！ もぐもぐ」

俺の口に合わせてヴィヴィオも口を開くので、そこにこぼさないようにいれていく。勿論、熱を冷ますのも忘れない。

もぐもぐと笑顔で咀嚼するヴィヴィオ。もう可愛すぎる。

ごつくん と呑み込んだヴィヴィオは、

「パパはたべないの？」

そう聞いてくる。正直、ヴィヴィオの食べてる姿を見られたらそれだけでお腹いっぱいなのだが……。そういうわけにもいかないよな。

「そうだね。それじゃパパも食べようかな」

「それじゃヴィヴィオがたべさせてあげるね！」

スープをとった俺に、ヴィヴィオはそういってスプーンを大きく掲げて見せた。そしてそのままスプーンでスープをすくい俺の口を持っていく。

「あーん！」

「あーん！」

ぼたぼたぼたぼた！

『うわっ……。スープがひよっとこさんの股間に……。』

『あいつ一生懸命耐えてるぞ。内股になりながら耐えてるぞ』

股間が……。熱い……。！

ヴィヴィオのスプーンの中身は俺の口の一步手前で全て零れ落ち、うすいじんべえの上にぼたぼたと垂れていく。熱いスープはそのまま俺の股間に食らいつき、その業火をもって亀頭を攻撃していく。じゅくじゅくと、熱く

とろみのついたスープがパンツに染み込んでいき

——たまごが踊る

「パパおいしい？ パパおいしい？ ヴィヴィオのおりようりおいしい？」

ヴィヴィオが顔を近づけて俺に聞いてくる。首を傾げて可愛く聞いてくる。

俺はそれに抜群の笑顔で答える。

「最高においしいよ！　ありがとヴィヴィオ！　けどやっぱりパパは一人で食べる——」

「ほんとっ!?　それじゃいっぱいたべさせてあげるね！」

ヴィヴィオが俺の言葉を最後まで聞かずにスープをぶんどる。

こういうところがなのはに似てるよね。ママの影響を受けているように安心したよ。　いや、安心できないけど。

ぶんどったヴィヴィオはそのまま俺の膝の上で器用に立ち、俺の方向に方向転換してスープを口に運ぶ。

「きゃっ!?!」

ばしゃあ!!

『ああっ!?!　ヴィヴィオちゃんが転んでスープがひよつとこさんの股間に!?!』

『大丈夫なのか？　あいつが着てるじんべえかなり薄い仕様だったと思うけど……』

びくんびくんびくんびくんびくんびくんびくんびくんびくんびくんびくんっ!!

『高速ピストンで熱を冷めしているだと……!?!』

『あいつ周り女性だらけなのに必死だな。　そこまでして大切なのか。　相手いないのに』

ロヴィータ……お前いつか絶対に犯す……!!

股間が熱い、というか痛い。　たまごがディスクを踊り狂ってる。

パラパラでファイバーしてる。

「ご、ごめんなさいパパ……。　ヴィヴィオ……。　パパにたべさせてあげたくて……。　ぐすっ」

「い、いや大丈夫だから！　パパくらいになると局部は鍛えてるから！　だ、だから泣くな？　なっ！」

「うっ……。　ひつく……。　ほんと？　ヴィヴィオのことおこらな？」



「ああ！ 怒らない！ 絶対怒らないから！」

「わーい！ パパだいすきー！」

スープをこぼしたことで落ち込み、俺が苦しんでいることことで心配になり、怒られるかもしれないということで若干泣きそうだったヴィヴィオ。 そんなヴィヴィオの頭を撫でながら優しい笑顔—— というなの引き攣った笑顔でヴィヴィオを慰める、というか許す。ヴィヴィオはそんな俺の言葉を受けて喜び抱きついてきた。

ぎゅむっ！

「はうつ？！」

『あー……ヴィヴィオちゃん思いつきり踏んでる……』

『というかマナー的に問題あるだろ。 こういったことは小さいうちに教えておかないとだな——』

ヴィヴィオの小さい足が俺のチンコを思いつきり踏んづける。

ヴィヴィオの将来はSM女王様で決定だな。 きつとNo. 1に輝くぜ。

しかしここで不能になるわけにはいかない。 不能になるわけにはいかないのだ。

ヴィヴィオに何かを言おうとした所で——横からなのはがヴィヴィオを抱きかかえ自分のほうにもっていった。

「いい加減にしなさい、ヴィヴィオ。 パパ困ってるでしょ？ それに膝の上に立つなんて行儀悪いよ」

「そうだよヴィヴィオ。 俊はとりあえずお風呂場でシャワーでも浴びてきたら？」

「うん……そうさせてもらうよ……。 あのさ……やけどってオロナインつければ治るかな……？」

「うーん……そこは専門外だからわからない……かな」

俺の言葉にフェイトは困った顔でそういった。 うん、そうだよね。 チンコの火傷とか普通じゃないもんね。

俺はべたべたのじんべえのまま、風呂場へと行った。 軽くシャワー浴びてきてまたご飯を食べよう。 5分もあれば十分だな。

☆

俊がその場を後にしたのをみて、なのはは自分が抱きかかえている  
ヴィヴィオをみる。

「いい、ヴィヴィオ？ 激甘の俊くんだからヴィヴィオのこと許した  
けど、普通あんなことされたら怒るよ？」

「ママも……ヴィヴィオのことおこつちやうの……？」

「へ？ いや……べつに怒るっていうか……、こういうことしちや  
ダメだよってことで」

「なんでえ……？」

「な、なんでって……。そりやあんなことされたら怒るでしょ？」

「パパはおこらなかつたよー？」

「それは俊くんがおかしいの。パパがあれだとほんと苦労するよ  
……。ねえフェイトちゃん？」

「だね。ヴィヴィオ？ スープは熱いから、あんなことされたら誰  
だって嫌なんだよ？ 俊もこれがティア辺りだったら躊躇いなく  
ぶっ飛ばしてると思うよ？」

『ヴィータさん。私ってアイドル枠ですよ？ いま平然と私が  
ぶっ飛ばされることになってるんですが』

『安心しろティア。お前は間違いなくネタキャラだから』  
『え』

「パパはだいじょうぶだっていったよ？」

ヴィヴィオは首を傾げながらわたしのほうをみてそういった。

ぐぬぬ……！ あのバカが甘やかすから……！ ヴィヴィオの基  
準が俊くん基準になってる……！

ここはママであるわたしとフェイトちゃんがしつかりいつてあげ  
ない！

フェイトちゃんに目配せをする。フェイトちゃんはこくりと小  
さく頷いた。それをみて、わたしはヴィヴィオに言う。

「いい？ ヴィヴィオ。パパはヴィヴィオが大好きだからなんでも  
ヴィヴィオの言うこと聞いちゃうし甘やかすけど、わたしもフェイト

ちゃんもこれからヴィヴィオには厳しくいくからね」

「そうだね。　　ここらでちよつとヴィヴィオの教育を見直したほうがいいかも……」

「あうっ……。　　なのはママとフェイトママはヴィヴィオのこときらいなの……。？」

「うぐツ!」

下から上目使いでわたしたちのことを見てくるヴィヴィオ。指と指を絡ませながら見つめる視線は微かではあるものの涙をためさせていて――

「こ、ここで負けちゃダメだよフェイトちゃん!?　わたし達はママなんだから!　甘やかすパパにかわって娘を叱らないと!」

「そ、そうだよねっ!　だ、ダメだぞー!」

「ひつく……。なのはママ……。フェイトママ……。　　ヴィヴィオ……。わるいこ?」

ヴィヴィオの視線に耐えきれずに、わたしはフェイトちゃんのほうを見る。　　フェイトちゃんも同じだったのか、私と丁度目を合わせる形になった。

「(なのは……。、やっぱりヴィヴィオを叱るのは……)」

「(だ、ダメだよフェイトちゃん……。　　ここでヴィヴィオを甘やかしたら、ヴィヴィオは将来我儘な小悪魔になっちゃうよ!)」

「(で、でも……。ヴィヴィオも反省してるし……。　　あんまりすると泣いちゃうかもしれないし……)」

「(と。　　ときには泣かせることも必要!　　……。だと思う……。けど)」

チラリとヴィヴィオのほうをみる。　　みるとヴィヴィオは既に半

べそ状態で、わたしの膝の上でガークンを呼んでいる最中だった。

「……。今回だけだよ?　　今度からは、こういったことはしちゃダメだからね?」

わたしがそういうと、弾かれたようにヴィヴィオの顔が笑顔に変わる。

「わーい!　　なのはママ、フェイトママだいすきー!」

「敵わないなあ……」

ヴィヴィオを抱きしめながらフェイトちゃんと二人、肩をすくめる。

そうしていると、遠くのほうでお母さんがクスクスと笑っている声が聞こえてきた。

「なのはも俊ちゃんのこと悪くいえないわね。電話では『俊くんが甘いからいけないの!』って散々言ってたのに。なのはとフェイトちゃんもヴィヴィオちゃんにデレデレでとっても甘いわよ」

「うっ……!?! け、けど俊くんほどじゃないよ!」

「ふふっ。でも、娘がパパのことを大好きなのはいいことよ。世の中にはパパのこと嫌いな娘が多いし」

『がふっ!!』

『ど、どうしたんですか!?! いきなり吐血なんかして!?!』

『うう……!?! どうして俺を置いて旅行なんかに行ってしまったんだ……!?! 娘はまだ高校生なんですよ!?! 小さいときから可愛くて、将来の夢は俺のお嫁さんだったんです……。なの……!?! なの……!?!』

「俊ちゃんもこういうことにならなければいいけどねー」

おじさんの慟哭を聞いて、お母さんは溜息を吐く。

するとお母さんの隣にいたフェイトちゃんのお義母さんのリンデイさんがすまし顔で言う。

「べつに私は彼がどういうことになろうといいですけどね」

「あら、リンデイさんは俊ちゃんに対していい印象を抱いていないのですか?」

「いい印象よりも、私はあの子が恐ろしいわ。絶対そばにいとすとレスで過労死確定よ」

「ふふっ、けどそういつたところが俊ちゃんの可愛いところだと思いませんか? なんとというか……世話を焼きたくなるというか、あの子のそばにいなきゃ!?! みたいな感じで。ねえ? なのは?」

「な、なんでわたしに振ってくるの!?!」

いきなりの振りにたじろぐ。

「あら？　なのはもそんな感じじゃないのかしら？　ほらよく電話でも『俊くんには私がいなきや——』」

「だ、ダメ——!!?」

すかさずお母さんの口を止めるわたし。　この人なんなの!?　マジでこの人なんなの!?

「そ、そんなこと一言も言ってないでしょ!?　捏造にもほどがあるよ!」

「あら？　そうだったっけ？　あ、そうそう。　確か電話では『えへへ

……。　昨日の夜、俊くんの寝顔——』」

「ち、違うっていつてるでしょ!?　そんなこと一言も言ってません!　わたしがそんなこと言うわけないでしょ!?!」

「素直じゃないわね。　そんなことだと俊ちゃんどっか行っちゃうわよ?」

「そんなこと……ないよ。　俊くんがわたし以外の所に行くなんてありえないよ」

「あら？　どうして?」

お母さんは心底不思議そうにそう聞いてくる。

「だって……その……。　俊くんなのはのこと大好きだし……。　ずっと一緒にいようって約束したし……」

『ほく』

「べ、べつに俊くんのことなんか本当はどうでもいいんだけどね?!　た、ただ……やっぱり約束は守らないとダメだと思っし……。　ほ、ほんと好きとかそういうことはありえないんだけど?!　ま、まあ……仕方ないから一緒にいてあげようかなー、みたいな……」

顔を赤くしながら、視線を彷徨わせながら指を絡めるのは。

『ヴィータさん。　うちの上司が可愛すぎてヤバイです』

『気持ちはわからないでもない。　アイツが骨抜きになるのもわかる』

『私が襲いたくなるのもわかりますよね』

『それはわからん』

お母さんがわたしのことをギュッと抱きしめてくる。

「はあく……。ほんと可愛いわ、うちのなのはは……」

「あ、あのお母さん？　ちよつとキツイ……」

強く抱きしめられたため、息ができずに苦しくなる。

「リンディさん、うちの娘可愛いでしょう？」

「いやいや、私のフェイトのほうが可愛いですよ。けどまあ、あのバ

カはうちには必要ないのでいらないですが」

「ええっ!?　そんな！　ひどいよお義母さん!?!」

「……フェイト……?」

フェイトちゃんのいきなりの大声にリンディさんが固まる。

「だ、ダメよっ！　あんなボンクラと付き合うなんてこと、私は絶対に

許さないわ!」

「っ、付き合うなんていつてないよ!?!　で、でも……告白は……された

かな」

『ええっ!?!』

その場にいる全員が驚く。勿論、私も絶句する。

『おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい

おいおいおいおいおい、あのヘタレが告白……!?!　冗談だろ……!』

「ほ、ほんとなのフェイトちゃん?!」

「う、うん……。　といつても、なのはと同じような内容で『ずっとそ

ばにいてほしい』ってことだったけど……」

「ほ、ほらみなさい！　彼はそうやってすぐ告白するナンパ野郎よ！

認めないわ！　まず絶対条件が、高収入で恰好よくて、家事ができ

て、家族を守るほど強くて、子

どもが大好きで、フェイトのことを愛していて、私の言う事も素直

に聞く、しっかりした男じゃないと認めないわ!」

うわあー……リンディさん。　それってかなりスペック高いです

よ。　高すぎですよ。

ふと後ろのほうから、愛しの娘の声が聞こえてきた。

『スバルンにパパのじまんしてあげるー！　えつとねー、パパはね

かつこうよくて、おりょうりがじょうずで、つよくて、ヴィヴィオの

ことだいすきで、なのはママとフ

エイトママのことがだいすきで、リンディメツシユさんにもやさしくてわらいながらいうこときいて、かけいぼ？ もつけてるんだよー。 すごいでしょー!』

いた。 高収入というか無収入だけど、それ以外は当てはまるスベックの持ち主が身近にいた。

「えーっと……お義母さん？」

「冷めないうちにご飯食べましようか」

「えっ!? いまの話なかったことにするのっ!?」

ヴィヴィオの話を聞いたリンディさんは何事もなかったかのようにご飯を食べ始める。

「がんばらないとね、なのは」

「だ、だから好きじゃないって……」

耳元でそう言うってくるお母さんに離れながらそう返す。

「それじゃ、間を取ってはやてちゃんというのはどうでしょうか？」

「やめておけシヤマル。 引退したグレாம்提督に殺されるぞ、アイツが」

シヤマルさんの一言に、シグナムさんがそう返す。

確かに……グレாம்提督に殺されそう。

「え？ なんで殺されるんですか？」

「ああ、スバルは知らないのか。 アイツがグレாம்提督との初対面のときどんなことしたのか」

「どんなことしたんですか？」

「アイツな……机の引き出しからエロ本発見して、それをぶちまけやがったんだ……」

「ほんとロクでもないことしかしませんねあの人!？」

「ついたあだ名がエロ本提督。 どんな想いだっただらうな……、引退のとき」

「速報」 エロ本提督が引退した 「引退後は優雅なエロ本ライフ」

「グレாம்提督は、はやてのことを可愛がるが、アイツの話題になると

不機嫌になるからな。まあ、致し方ない。誰だって自分の机からエロ本発見されたあげく、ぶちまけられたら好意的な印象をもつことはないだろうな」

シグナムさんはうんうんと頷きながらからあげを食べる。

確かに……あのときは凄かったかな……。わたしもフエイトちゃんもかなり恥ずかしかったし。

遠くのほうでガークンにご飯をあげていたアリサちゃんが大きなため息を吐きながらこちらをみる。

「あのさ、ずっと思ってるんだけど……アイツって恋愛対象に入らない？ 基本バカよ。それとも、私の知らないところでなにかカッコイイことでもしてるの？」

呆れたような視線がわたしとフエイトちゃんを見つめる。

「だ、だから恋愛対象じゃないって……」

「ああ、愛玩動物みたいな感じ？」

「あ、それ近いかも」

『可愛くない愛玩動物ですね。絶対私のほうが可愛いですよ』

『お前の場合、哀願動物だろ』

『確かに悲哀に満ちるほどなのはさんとイチヤイチャしたいと願ってはいますが』

「ふーん……。まあ、そんなに好き——もとい愛玩動物とそばにいたいなら抱くくらいのことしたら？」

「だ、抱くっ!?!」

そ、そんなことできるわけないじゃん?!? だ、抱くって……!!

そんなこと……、あ、でも手錠つけてご飯食べさせたり、弄ったりするのはちよつといいか

も……。可愛い声で鳴いてくれそうだし……。——って、何考えてんだわたし?!?

「む、無理だってそんなこと!?!」

「? なんて? 後ろから抱きつくとかすれば、アイツならコロっと落ちると思うわよ?」

「……………え?」



だ、抱くって……そういうこと？  
抱きつくほうの抱く？

そうなつてくると、今度は違う勘違いをしたわたし達のほうが恥ずかしい……。顔から火が出そうになる。

俯くわたしとフェイトちゃん。そんなわたし達をみてアリサちゃんは、

「アイツは幸せ者ねー」

そう呟いた。

「けど、抱きつくってのは有効かもね」

「すずかちゃん？」

「ほら、ヴィヴィオちゃんと俊くんがさつきやってたじゃん？ あんな感じのをやればいいんじゃない？」

さつきのつていうと……あの真正面から膝に乗って向かい合うことだよ……。けどそれって――

「な、なんか恋人みたい……」

でも――ちよつといいかも。頑張ってみよう……かな？

チラリとフェイトちゃんをみる。

「……そのまま押し倒して……いや、あつちのほうが……」

フェイトちゃんが怖い。なんか怖い。

――と、そこでふとヴィヴィオとご飯を食べていたスバルが唐突に気付き質問した。

「そういえば――はやてさんどこにいるんですか？」

『あっ』

☆

その頃、話題に出た八神はやては――風呂場に行く俊を押し倒していた。

「はあ……はあ……、俊……体熱いんよ……」

「いや俺の股間もいま熱いからっ!? まじゼニガメがやけど負ってるから!? 早くポケセン行かないとゼニガメ死んじゃうって! このゼニガメ元気のかたまりとか効果ないから!」

俊は俊で早く風呂場でシャワーを浴びたいのか、乗っかってるはやての肩を掴んでどかそうとする。まず股間にぶらさがってるものが第一である。

「なあ……なんでこんな熱いんやろ……。頭がな？　ぽーつとするねん……」

「俺の股間もぽーつとしてきたから！　中々に熱いから！」

はやては俊の言葉など聞かずに、俊に抱きつく。その速度はとてもゆっくりとしていた。

「うおっ!?　お前たまごが——」

抱きついてきたはやてをタマゴの魔の手から救おうと離れさせる——ときになってようやく俊は気付いた。

はやての尋常じゃない熱さを。

「はやて。　ちよつとおでこをくつつけるぞ?」

俊ははやてを自分の膝のうえに座らせて、髪を掻きあげながら自分の額とくつつける。

そして数秒して、はやてをお姫様だっこする。

「体が熱い?　頭がぽーつとする?　そりや当たり前だ。　お前——完璧に風邪引いてるぞ。　39度くらいかな。　まってる、お前を部屋に運んだら急いで氷まくらと熱さまシートを持ってくるから」

はやてに声をかけながら、一歩踏み出そうとしたところで——はやてを探しに来た面々に気付く。

「あつ、丁度いいところにきた。　シグナム、ちよつとはやてを運んでくれ。　ヴィータは氷まくらの用意を頼む。　なのはは桃子さん達にこのこと伝えてくれ。　フェイトは風邪薬を頼むよ。　俺も着替えたらすぐ部屋に行くから」

そう全員に指示をだす俊。　そんな俊の抱かれているはやてをみて、シグナムとヴィータは頷き、なのはとフェイトも遅れて頷いた。

四日目の夜——八神はやては風邪をひいた。

## 79. はやてスウィートデビル

『生きる意味がないからって、それが死ぬ口実になりはしない』

「本当に一人で大丈夫かしら？ 私も翠屋をお休みしてはやてちゃんの看病手伝うわよ？」

「いえ大丈夫です。桃子さんは翠屋で皆が笑顔になるようなケーキを作ってきてください」

五日目の朝。つまりは八神はやてが風邪で寝込んだ次の日、俺は翠屋の手伝いを止めて一人ではやての看病に名乗りを上げた。目の前には高町なのはの母親、桃子さんが心配そうにこちらを見つめているわけだが、そこまで俺は信用ないのだろうか？

「ねえ、俊くん？」

「ん？」

桃子さんの隣にいたなのはが俺を呼ぶ。三日目からずっと手伝いをしているのは。流石は翠屋の看板娘だ。

「その……はやてちゃんに手を出したら……ただじゃおかないからね？」

「あの……少しは俺のこと信用してくれませんか？」

どうやらなのはは桃子さんみたいに遠回りすることなく、ストレートに攻撃してくるようだ。

「流石の俺も病人相手に手をあげるほど腐ってないよ。それに、そんな気分にもなりはしないさ」

今日の俺は性欲激減している。なんせゼニガメが火傷を負っているからね。明日まで安静するように言われたからね。

「おいひよつとこ。はやてが少しでもお前の看病に不満を漏らしたらボコボコにするからね」

「はっは、ロヴィータちゃん。その本気の目はやめてくれないかな？ いや、マジで怖いって」

「大丈夫ですよ。一応、私も残ることにしましたから」

「あれ？ シヤマル先生も残るんですか？」

「ええ。ひよつとこさんだけだと、何かと不安ですし。ただ、はや

てちゃんの相手は任せますよ？ 私はあるあなたのサポートに徹しよう  
と思います」

「……？ 俺のサポート？ シヤマル先生も一緒に看病すればいい  
のに。確かに、俺一人で看病できなくなったのは残念ではあるが、  
だからといってシヤマル先生を毛嫌いする理由もないし、はやてだつ  
て二人で看病してもらおうほうがやっぱ嬉しいかもしれないし。」

「まあまあ、それじゃ皆さんはお仕事頑張ってきてくださいね！ ほ  
ら、いきましよう」

シヤマル先生で俺の腕を取り、高町家の中へと入っていく。俺は  
玄関の前で皆に見送られる形になりながら中へと入っていった。  
俺が見送るはずなのに、どうしてこうなった。

☆

コンコンと自分の部屋をノックする。

『んっ……だれ……？』

「はやて、俺だよ。入るぞ？」

はやての返事を聞かずに入室する。

「気分はどうだ？」

「最悪や。うら若き乙女の起きたばかりの顔を見る男なんて最悪や」

「安心しろ。お前はどんときだって可愛いから」

部屋にはいると、俺のベットではやてがこちらをジト目で見てい  
た。それに苦笑しながら机の椅子をベットの傍にもってきてそこに  
座る。

はやての顔を見ると、まだ熱があるのか顔に赤みがさしていた。

右手ではやての額を触り大まかな熱を測る。

「うーん……37.8ってところかな。昨日に比べれば下がった

けど、まだまだ安静してないとダメな体温だな。ほら、起きてない

で寝ろ」

「……昨日沢山寝たからもういい……」

「なにガキみたいなこといってんだよ。病人は寝るのが仕事だ」

起きようと体を起こすはやての頭をゆつくりと倒す。抵抗がない  
ところを見ると、やはり大分弱っているようだ。

「う〜〜……。ねえ、翠屋はええの?」

「ああ。なんかなるだろ。士郎さんと桃子さんいるし。フェイトも桃子さんがほめるほどのケーキ作りの腕だし、ヴォルケンも一緒だし」

「ふ〜ん……。それじゃ、いま二人つきり?」

「いや、下にシャルマル先生がいるよ」

「そっか……」

はやては小さくそう呟いた。あれですか? やっぱり僕だけだと不安なんですかね? ちよつとシヨックですよ。

「……めんな……」

「ん?」

「……ごめんな。わたしが風邪ひいたから……。翠屋の手伝いできんで……。けど、もう大丈夫やから手伝いにいつてええよ……? シャマルもおるし、あとは一人でできるから……」

布団を顔まで持つていったはやては俺のほうをみないままそう言った。布団に顔が隠れているせいでちよつとくぐもつて聞こえはしたが……。まったくお前はなにをいつてるんだか。

はやての頭を撫でながら答える。

「お前を独り占めできるチャンスをみすみす逃す俺じゃねえよ。翠屋の手伝い? お前と二人でいるほうがよっぽど嬉しいし楽しいし、大事だわ」

そういうと、はやては布団を顔全部が隠れるほど上げ——たかと思うと、ゆつくりと目の位置まで下げる。目はこちらを伺いながら——

「ほんと……?」

「ああ。本心だよ」

「……ありがと」

「礼を言われる筋合いがわからんな」

「……そういうことにしたいげる」

目はこちらを伺いながら聞いてきたので、俺も本心で答える。

はやての頭に置いていた手をそつと離す。

「あつ……」

「ん？ どうした？」

「う、ううん……。なんでもない……」

はやては首を横に振る。

そんなはやての手を俺は握った。

「……この手はなんなん？」

「握りたくなった。ほら、たまに誰かの手を握りたくなることないか？」

「まあ……それはあるけど……。だ、だからっいま握らんでも……」

「んじや離す。悪い」

「あつ……！ や、やっぱり離さんで……」

はやての手を離すと、逆に離した手をはやてが掴む。そして強く強く握りしめた。

そういえば、はやてが9歳のときにもこんなことした記憶があるな。

「なあ、なんか懐かしいな俊。こうやって二人でこんな過ごすのんびりとした時間って」

「そうだな。お前の足が治ってからはこんな時間を過ごすことはなかったからな。いや、もつというならば闇の書事件後からはなかったもんな」

闇の書事件。俺が体験した、なのは達が経験した、もつとも強大で凶悪な事件。

あらゆる人を巻き込み、あらゆる人が嘆き、誰かが泣いた——そんな事件。

そして——俺自身にとっても大事な事件。

高町なのは、フェイト・テスタロッサ、ユーノ・スクライア、クロノ・ハラオウン、リンディ・ハラオウン、シヤマル、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、八神はやて、そして——リインフォース。全員が頑張って終わらせた物語。

長い時間を経て、ようやく終わらせた物語。

そして――

「何もできなかったなあ……闇の書事件」

俺が何もできなかった物語。

管理局の上層部に喧嘩を売って、それで終わりだった。

「そんなことあらへんよ。 俊のおかげでリインフォースは笑顔で旅立つことができたやんか。 助けたやんか」

「あれを助けたとはいわないよ。 俺はただ、リインフォースに皆で取った集合写真を渡しただけさ」

あのときのことはいまでも覚えている。

どうしようもなく、どうすることもできなくて、助けたいけどそれは敵わなくて、けどなにかしてあげたくて、なにかしたくて、俺は旅立つリインフォースに――皆で撮った集合写真をあげたんだ。

『きつと独りは寂しいから、きつと俺たちがそつちに逝くまで退屈だと思っから、きつと俺たちも成長してると思っから、見間違わないうにリインフォースにこれをあげとくよ！』

そういつて俺は現像した集合写真をあげたんだ。

それをもらったリインフォースは笑顔でいった。

『私のために、泣いてくれてありがとう。 だけど笑ってくれ。 そうじゃないと私は心配で旅立つことができないじゃないか』

手にしたものは海鳴の平和

失くしたものはかけがえのない友

味わったものは無力感

あれほど自分を呪ったことはない。

「けど、リインフォースは笑ってたで？ それにリンデイさんから後で聞いたよ。 俊はとんでもないことをしてくれていたってね」

「あのババア……もとい魔法熟女め。 俺の黒歴史をべらべらと喋りおって」

「けど、内容は教えてくれんのよ。 概要は教えてくれるんやけど」  
「いや、それでいいと思うよ。 知ったら知ったら後悔すると思うから」

最悪、俺がみんなに捕まっちゃうから。

それにしても――

「お前いつまで握ってんの?」

握られた手を軽く揺らしながら聞く。

「……ずっと握っちゃ……ダメ?」

瞳を潤ませながら聞くはやて。 それに俺は頬を掻きながら、

「ま、まあ……べつにいいけど。今日はなんでもいうこと聞くわけだし」

そう答えるのが精いっぱいだった。 いかん。 病人に手を出す

なんていかんぞ。

「なあ俊。 のど……かわいた」

「水でも飲むか? それともポカリにする?」

「俊の唾液」

「風邪が治ったらな」

「約束やで?」

「はいはい」

基本的に酔っ払いと病人の約束ほどあてにならないものはない。ほとんど忘れてることが多いし。

先程よりも幾分か機嫌が良くなったはやてを見ながら思う。

そろそろ昼飯にしようかな。

☆

「なのは。 いつまでそわそわしてるんだよ」

「だってだって! 俊くんとはやてちゃんが同じ部屋に二人つきりだよ?! 絶対なにか起こっちゃうよ?!」

「あいつが手を出せるわけねえだろ、とにかく落ち着け」

「でもでも! はやてちゃんが俊くんを押し倒したりなんかしたら……」

「病人にそんなことできるとは思わないが……」

「ヴィータちゃんは甘いよ! このロリ!」

「ロリを馬鹿にするんじゃないぞ!」

翠屋の一角でなのはとヴィータが口論を繰り広げる。 なのはは残してきた俊を心配しており、ヴィータはまったくの真逆。



「なんというか……どうしてアイツ程度にそこまで真剣なれるのかしら……」

「あはは……。まあ触れてみないとわからないかもね、俊のことは」  
それをみていたアリサがなのはに呆れた視線を向けた後、自分の横にいるフェイトに少しばかり畏怖に似た視線を向けた。

アリサ・バニングス。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、上矢俊の小さい頃からの友達——俗にいう幼馴染である。「そもそもアイツに触れたくないわよ、私は。変な病原菌貰いそうだし……」

「……Kウイルス。ちよつと気持ち悪いかも」  
「でしょ?」

それを近くで聞いていたティアが呟く。

「いや……。既に何名かそのウイルスにかかっていますけど……」  
何とも言えない顔で、自分の上司たちのほうをみるティア。しながら、ティア自身がTウイルスとなつて上司に変態行動をしているせいか、まったくもって説得力もなにもない。

「ほんと、まったくもってその通りよ。彼にかかると碌なことにならないからやめておきなさい、フェイト」

「あ、お母さん……」

「昨日の話を聞いても思いましたが、リンデイさんはアイツに対してあまりいい印象を抱いてませんよね。まあそれが正常だと思いませんが」

「けど、お母さんはなんで俊のことをそんなに毛嫌いしているの? 俊はお母さんとも仲良くしたいと思ってるよ?」

疑問符を浮かべながら聞くフェイト。そのフェイトの問いにリンデイは苦虫を噛み潰したような顔をして答える。

「あなたたちは知らないのよ。彼の怖さを。彼が10年前、管理局の本部で何をしたかをね……。彼絶対に次元犯罪者になったら手に負えないわよ。こういうところはあのとんでも夫婦の一人息子のよね」

そう呟くリンデイ。

「そういえば……アイツがあのととき何をしてたのか、誰も知らないよな。概要しか教えてもらってねえし」

先程までなのはと口喧嘩していたヴィータがそしらぬ顔で話しに加わる。その横にはなのはもいた。

「私やスバルやエリオやキャロに至ってはまったく知りませんけど」

ティアが新人を代表してそう口にした。

全員がリンデイに注目する。

その全員の視線を受けて——リンデイは首を横に振った。

「ごめんなさいね。こればかりは話せないの。ただこれだけは言えるわ。彼は——上矢俊という存在は、“大将”と呼ばれる人物たちならば全員が知ってるほどの有名人よ。それほどのことをやらかしてくれたのよ」

『何をやったらそうなるんだ』

全員の声ははもる。その声は若干呆れていた。

「まあ、俊くんならありえない話じゃないよね。奇行が半端ないし」

なのはの困り顔で口から出た言葉に全員が頷く。

「そう——そうなのよ。彼は、『奇行の貴公子』なのよ!!」

リンデイが一回転して綺麗にストップしながら、右手を大きく広げ左手を天に向け悲壮感漂う顔でそう叫んだ。営業妨害甚だしい女性である。

『……………』

全員が押し黙る。一分か二分かした後

「き、奇行の貴公子って……! ブフツ! り、リンデイさん、は、恥ずかし……!」

「うわー……フェイトさんのお母さんセンスが凄いですね……」

「て、テスタロッサは、くくつ、こ、この、せ、センスを……受け継いで、い、いないのか……?」

「お、おとおおとおおとおおとおおとおおお母さんっ!! 何言ってるの!?! は、恥ずかしいからやめてよっ!?!」

ポーズをとったリンデイをフェイトは必死に止めさせる。顔は耳まで真っ赤であり目には涙をためている。自分の母親がこんな

ことをしていたら娘としては恥ずかしいなんてレベルではないだろう。とんだ黒歴史である。

「つーか……いま貴公子っていったよな……」

「リンデイさんはあの人のことをどう思っているんでしょかね……。普通、貴公子なんて呼ばないと思いますが……」

「まあ、ぶっちゃけ痛いよな」

「古臭いですね」

世代が違うから仕方ないとはいえ、流石のティアもこれには白けた目を向ける。

一方、当事者であるリンデイは――

「フェイト……」

「なにっ!？」

「やりきった気がするわ……」

「もう帰ってくれるかなっ!?!」

とても気持ちいい、清々しい顔でフェイトに報告していた。

そんな一連の行動を見ながらシグナムが顎に手を置きながら昔を思い出すように喋る。

「奇行といえば……あれが印象に残っているな。アイツが自分のふくらはぎに果物ナイフを刺したとき」

『……えっ』

シグナムの言葉になのは・フェイト・ティア・スバル・エリオ・キヤロが固まる。

「ああ、そういえばあったな。あの時はマジでトチ狂ったのかと思っただけ……」

ヴィータはふと何かを思い出したかのように喋ると、他の守護騎士の面々が頷く。

「あ、あの……どうしてそんなことしたんですか……?」

ティアの疑問にヴィータは頭を掻きながら困りながら答える。

「まあ、なんというか……はやては小さい頃に足が不自由で、歩くこともなにもできなかつたんだよ。それでも気丈に振る舞って、それに

私達も安心してて……。 け

ど、はやてはアイツにだけ漏らしたんだよ」

『なんでわたしだけ……。歩けないんやろうな。 ほんとはわたしも歩きたい……。 俊には、歩けない辛さ……。わかる?』

「わかるわけないよな。 勿論、アイツにもわからないさ。 だからアイツははやての気持ちをわかるために、はやてと同じ土俵に上がるために、そばにあった果物ナイ

フを手を取って——自分のふくらはぎに思いっきり刺したんだ。そしてアイツは汗をだらだらと掻きながら笑いながらこういったらしい」

『辛いというか、痛いな。 お前すげえよ、こんな痛みにずっと耐えてたなんて。 ほんと、よく頑張ったな』

「ほんとバカだよな。 普通やらないぜ? そんなバカなこと。 けど、それでもアイツはやるんだよ。 常識なんて投げ捨てる——アイツはそんな大馬鹿者なんだ」

「だから主ははやては気に入ったのかもしれないな。 それに——アイツは主ははやてのはじめての友達だからな」

「はじめての友達……。ですか?」

ティアの言葉にシグナムは頷いた。

「特別な友達だ」

☆

昼飯はシャマル先生が運んでくれた。 はやてにはおじや、俺にはなし。 シャマル先生曰く『下に取りにきてください』とのことだった——

「なあなあ俊。 はやく食べさせてーな」

こんな状態で下に取りにいくもない。 どう考えても無理である。「はやて、自分で食べれるんじゃないかな? ほら、熱も大分下がってるし……」

「無理や。 ほら、手が震えてるからもてへんもん。 それともか弱い乙女に無理矢理もてっちゅうんか?」

はやては素晴らしいながら、繋いだ手とは逆手を掲げる。 どうやら

本当にふるふると震えていているようで、これでは器を持ったら零し  
そうだし、スプーンを持ったら落としそうだし。……けど、どうして  
繋いで手は震えてないんだ？

「たーべーきーせーてー」

「はいはい、分かったからしなだれるな」

はやてがパジャマ姿のまま俺にしなだれかかってくる。大分体  
調も回復してきたようで安心した。

それは俺にとっても嬉しいことで、思わず顔がほころぶ。

今日のはやては若干甘えん坊ではあるが、風邪だししょうがない。  
それに、正直なところ、こうやってはやてに密着されて嬉しい。

といっても、この状態じゃ食べることもできないのではやてをちや  
んと座らせてシヤマル先生から受け取ったおじやをお椀にうつす。

そしてはやての口の前にもっていく。

「ほら、熱いからきをつけろ。 あーん」

「あーん。 んゝ、おいしいなあ」

「きつとシヤマル先生の料理で金輪際こんな奇跡的な成功をみせた料  
理は現れないだろうな」

一人で納得する。 いや、たぶんそうだろう。 なんせあのシヤマ  
ル先生だし。

「けど、どうせだったら俊に作ってほしかつたかも……」

「作ろうとしたけど、お前が手を離してくれなかったんだろ」

「ふっふっふー。 俊はわたしの物や」

「はいはい。 どうぞどうぞ、好きに使ってくださいいな」

どうせ病人だ。 何もできないだろ。

はやての口におじやをどんどんいれていく。 おじやを運ぶたび  
にはやてが小さな口を『あーん』と自分で言いながら開く姿はとても  
可愛らしく、正直こう……抱きつきたくなる。 それに何故か女の子  
座りで座っているはやては、エサをまつ雛鳥のように時折俺をみなが  
らしかしほとんど目を瞑って、ただただ俺に身を任せるのみである。

適度に水を飲ませつつ、ゆっくりとしたペースで完食までもって  
いく。 口の周りについた汁を指で拭き取ると、はやてはくすぐったそ

うに肩を震わせながら目を開けた。

「もう終わりなん……？」

「ああ、えらいよはやて。　ちゃんと完食できたな。　これだけ食べれば十分だ」

頭を撫でる。　すると、ちよつとだけ残念そうな顔で

「もうちよつと……食べれるのに」

そう言った。

「あんまり食べすぎるとよくないから、これくらいで丁度いいよ。　さて、薬を飲んで後はまたゆつくり寝るとしようか」

「う……寝たくない」

「だーめ。　寝なきや治らないだろ？」

「治らなくてええもん……。　そしたら、ずっと看病してくれるんやろ……？」

俺の手をとって下から見上げてくるはやて。　まあ、確かにその通りではあるのだが――

「俺は看病するよりも、お前と一緒に二人で元気に過ごしたいな」

確かに看病するのもいいが、それよりも何よりも俺はお前と――八神はやてと元気に過ごしたい。　苦しんでいる顔より、笑顔のほうがいいに決まってる。

「……………　そう……なんか。　ま、まあ……あんたがそこまで頼むなら治してあげてもええかな……」

お前は頼みこまないと治さないのか。　ある意味すげえな。

違う意味で体調管理抜群じゃねえか。

「はやて、シヤマル先生がくれた薬を飲む時間だぞ」

「う……、あーん」

「つたく……、はいはい」

カプセル錠の薬をはやての口に入れ、そばに置いていた水を口に入れていく。　零さないようにゆつくりとコップを傾けていく。　それでもやはり、自分のペースじゃなく苦しかったのか、はやてはとんと俺の手を叩き、それに伴い俺が口からコップを遠ざけると軽く咳き込んだ。

「す、すまんはやて!? だ、大丈夫か!？」

「はあ……はあ……。俊つて意外とアレなんやな……。のどが結構苦しかったで?」

「ご、ごめん……」

「ほんと、一線越えさせればいくとこまでいけるんやけどな……」

「アホ」

はやてが俺の胸を軽くたたいてくる。やはり風邪だからだろうか、その攻撃には力がなかった。

そうしていると、心なしかはやての頭が船を漕ぎだした。どうやら薬の副作用が効いてきたようだ。

「はやて、眠いか?」

「うくん……そんなことあらへんよー。ぜんぜん……むくないで」

かなり眠そうだった。ちゃんと日本語喋れてないし。

「ほらもう寝ろ。ちゃんと寝なきや治らないんだし」

はやての両肩をもってゆっくりとベットに押し倒す。

「やー、襲われてるー」

「はいはい。ったく、元気だなー」

子どものように笑うはやてを見て、苦笑する。これが昨日ぶつ倒れた奴と同一人物なのか?

寝る姿勢に入ったはやては俺の手を探るように動かす。その手に握りしめる俺。

すると、はやてがふふつと笑って俺のほうに視線を向けて言う。

「俊は、はじめて会ったときのこと覚えとる?」

「ああ、覚えてるよ。衝撃的でも劇的でもない、普通の出会いで、そして俺たちは普通に友達になったんだよな」

「わたしにとっては衝撃的だったで? いきなりあんなこと言われるんやもん」

「ははっ、だって面倒だったんだもん」

はやてと会ったのは、闇の書事件よりもずっと前——事件、なんてものとは縁遠いところで友達になったのだった。

「学生の内で一番めんどくさい宿題ってのは夏休みにある自由研究だ。あれほど面倒なものはない。『自由』と銘打っているのに『強制的』に何かを提出しなければならないんだから。しかもだよ？ 幼馴染の一日の行動を研究して提出したら職員室に呼び出すとかありえねえだろ？ ああ、幼馴染ってのはめっちゃくちゃ可愛くてマジ嫁に欲しいくらいの子のことなんだけどさ。ちなみに魔法少女ね。そして、その自由研究の次に面倒なものがこの読書感想文。そもそもなに？ 感想文って。『感想』ってのは読了して思ったことをそのまま口に出すものだろ？ わざわざ何文字書けとか指定してさ、その文字に達成しなかったらやり直して意味不明だろ。思ったことを素直に出すのが感想であって、思ってもないことを文字に表すのはどう考えても捏造だろ。そう思わないかい？ 文学少女よ」

「えつと……そう……なるんかな？ というか、幼馴染が魔法少女って……頭おかしいんとちゃう？」

「まあ幼馴染が魔法少女ってのはどうでもいいんだよ。いまの問題は読書感想文だよ。最優先事項は読書感想文なんだよ」

「はあ……」

担任に読書感想文の再提出を喰らった俺は、なのはとの帰宅を泣く泣く諦めて図書館にきていた。なんか図書館にきたら書けるかという訳のわからない理由できてはみたものの、天は俺を見捨てなかったのか、文学少女と俺とを引き合わせてくれた。

なのはやフェイトと同じほどの美少女。そして手には大きな本。間違いなくこの子は俺の読書感想文を代わりに書いてくれるはずだ。

「ところでキミは本好きなの？」

「まあ好きかな。 とういか……本を読むくらいしか楽しみがないっていうことなんやけど……」

文学少女は自分の足をチラリとみて、俺に笑いかけてくる。



骨折でもしてるのかな？

「うーん、そっか。でも本は確かにいいよな。本つてき、自分が主人公のような気分になれるし、現実ではありえないことだって出来るし」

なのは辺りは現実ではありえないことを平然とやってのせちやうけど。

「ところで文学少女、名前はなんていうの？」

「八神はやてやけど……、あの……本当になんなん？ 新手的変質者……？」

「こんなカッコイイ変質者がいるか。それじゃはやて。友達として頼みがある。——俺の読書感想文、明日まで書いといて」

「……は？」

「いやー、もつべきものは友達だな！ んじゃ、よろしく！」

携帯も震えだしたことだし、俺ははやてに自分の読書感想文を押し付けて図書館を退館した。

——次の日

「はやて。これはどういうことなんだい？」

「いや……どういふこともなにも、自分の宿題は自分でせなあかんやろ」

信愛なる友達である、八神はやてと出会った次の日、俺は学校帰りにはやてに会うため図書館にきたのだがそこで待っていたのは冷酷で残酷な現実であった。

ようは——八神はやてが俺の読書感想文を書いてくれなかったのである。

「い、いやいやいや俺たち友達だろ？」

「損得の感情がないと成立しない友達関係なんて御免ごうむるで」

なにこの子、めつちやカッコイイんだけど。

仕方なくはやてに差し出された読書感想文を受け取る。しようがない——言葉巧みになのはを騙し書かせるとしよう。

そうと決まれば善は急げである。俺ははやてに別れの言葉をいって図書館を後にする——しようとしたところで呼び止められた。

「これ、わたしが読んだなかでは結構面白いで。 まあ……アンタが  
気に入るかはわからんけど」

ぶつきらぼうに差し出されたのは、小さい女の子が5人の小人と幸  
せに暮らす物語。 なんとも可愛らしい絵であり、いかにも童話っぽ  
かったが、俺はついつい受け取  
ってしまった。

「んじや読んでみるか。 友達のオススメ本だしな」

「絶対はまるで。 友達のオススメ本やから」

その日、俺ははやての隣で図書館が閉館するまで本を読んだ。

☆

「それからだったよな。 俺が毎日図書館にくるようになって、二人  
で並んで本を読む。 そんな光景が日常の一部となったのは」

「ほんと、ビックリしたで。 いきなり読書感想文書いてくれ！ と  
かバカとしかいいようがないし。 あれ最終的にはどうなったん？」

「ああ、あの本の感想書なかった。 そのかわり、一人の少年が図書  
館で文学少女と一緒に本を読む作品の感想書いて提出した」

「……あんた……それ創作っていうんじや……」

「大事なのは何を読んだかじゃない。 どう感じたかだ」

それに先生からは百点満点をもらったので万々歳である。

「そういえば、それから少しくらいしてはじめてアンタは家に遊びに  
きたよね。 広い家にわたし一人だったのに、その日を境に一人分多  
く声が聞こえるようになって。」

それがたまらなく嬉しくて、アンタはそのことをわかっていたの  
か、ほとんど平日はギリギリまで家にいてくれて。 帰ったら帰った  
ら電話してくれて。 休日の日は泊まりにきてくれて……ほんと、楽  
しかったなあ。 ——なのはちゃんが襲撃してくるまでは」

「ああ……。 あの時のなのはは怖かったな。 いつものようにはや  
てとスーパー行こうとして玄関開けたらなのはが立ってて……」

『みーつけた』

「あれは怖かったなあ……」

はやてと俺の声はもる。

あまりあの——高町なのは襲撃事件のことは思い出したくないの  
でやめておこう。

はやても俺と同じ感想を抱いたのか、俺と視線が合うとゆっくりと  
首を横に振った。

そしてはやては大きな欠伸をする。そろそろ寝させたほうがよ  
さそうだな。

「ほら、もういい加減寝ろ。ずっとそばにいるから」

「……うん、そうやね。おやすみ……俊」

ああ、おやすみ。

俺がそういうと、はやてはゆっくりと瞼を閉じた。

そして数分と経たずに寝息が聞こえてくる。なんとも可愛らし  
い寝息だ。

俺はそんな可愛らしい寝息をたてるはやての髪をすきながら、一人  
呟いた。

「恥ずかしいから面と向かってはいわないけどさ、俺があの本の感想  
文を書かなかつた理由は、せつかくはやてが薦めてくれた本を、他の  
奴に見せたくなかつたからなんだよな。それに、俺もはやての家に  
行くの毎日毎日楽しみにしてたんだ。ちよつと臭いけど……お前  
の騎士になつたような気がしてさ」

寝てるお前の前だから言えることなんだけどさ。

そう一人で苦笑いして、俺も椅子に深くこしかける。ちよつとの  
間だけ、俺も眠るとしよう——

☆

彼が寝たのを確認して目を開ける。すぐ目の前には彼の寝顔で  
あって、手を精一杯伸ばせば届きそうな距離である。

「……俊って意外と束縛するタイプなんか……。けど、とつても  
嬉しい……」

自分の顔が熱いのがよくわかる。文字通り、顔から火が出そうな  
勢いだ。

俊と出会ったその日から、わたしの日常はゆっくりと、しかし劇的  
に変化していった。

俊と買い物して、俊とご飯作って、俊に体を洗ってもらって、俊とのんびりして、俊と一緒に寝て——そんな、行動するとき誰かの名前が枕に入る程度の変化ではあったが、その変化がわたしはたまらなく嬉しかった。

そしてなのはちゃんと会って、すずかちゃんと会って、アリサちゃんと会って、フェイトちゃんと会って、シグナム・ヴィータ・シヤマル・ザフィーラ・リインフォースといった家族が出来て——わたしは変わっていった。

闇の書が起動してから、私は少しずつ変わっていった。変わらざるおえなかった。

けど——俊だけは変わらないで、変わる日常と動く戦況の中いつも通り、わたしに会いに来てくれて——それが嬉しかった。

本来敵同士なのに、それをうまく丸め込んで集合写真撮らせたりして——

「確かに力はないけど、俊は自分の出来ることを精一杯やってくれたな……」

話し合いの場を設置したりもした。決裂したけど。

そして決裂した後も、シグナム達に何か小言を言われるかもしれないのに変わらず毎日会いに来てくれた。

わたしが入院したときだって——

「なあ俊……。わたしが生きる目的がないって言ったとき、なんて言ったか覚えとるかな？」

わたしはずっと覚えとるよ……。あるとき俊が言ってくれたこと——

☆

——10年前

「やつほー、はやて。足の調子はどうかな？」

「昨日もそれ聞いたやんか。いつもとかわらんよ」

「そっか。いつもと変わらないか。色々買ってきたけど、なにか食べる？」

そういつて目の前にいる男、上矢俊は八神はやてに見えるように手

に持った袋を掲げて見せる。

はやてはその袋の中身をしげしげと見た後、クッキーの袋を取り出して封を開ける。

上矢俊と八神はやて。

闇の書が起動する前も、起動した後も、変わることはない二人である。八神はやてが家にいようが、八神はやてが病院にいようが、二人はいつものように会って、いつものように取り留めのない話をするのである。

それが——二人の日常であった。

「そういえば、いかにもロリっぽいお前の家族いるじゃん？ ほら、ゴスロリの奴」

「ああ、ヴィータのこと？」

「そうそう。そいつがさ、俺に向かって何か言いかけてたんだけどさー。トイレしたくて話ぶっちぎったのよね。あとで話聞いといてくれる？」

「まあ……それはええねんけど……いつもいつもタイミング悪いなあ」

「これ絶対、将来的においしいチャンスを逃したりするんじゃないかなと思ってきたんだよね、最近」

はやてのベットに腰掛けながら、自分用に買ってきた飲み物をあげる俊。

そんな俊にははやては声をかける。

「他の皆は……どうしてるんやろうな？　なのはちやんとか、フェイトちゃんとか」

「さあ？　あいつらコスプレ趣味があるからなー。どっちにしろ男の俺はなのはとフェイトの女の子の輪の中にははいれないさ。というわけで、こっちの輪に入れてください」

軽く頭をさげる俊。そんな俊にははやてはくすくすと笑う。

「まったく……しょうがないなあ……。ええよ、はいつても」

はやてはそういつて俊に自分の食べかけのクッキーを押し込む。それを咀嚼し、呑み込んで、笑顔をみせる俊。

俊の笑顔をみて笑うはやて。　しかしその笑顔もすぐに消えた。

「なあ……俊？」

「ん？」

「俊は……人に迷惑かけてまで生きたいと思う？」

「……どういうこと？」

はやての言葉に俊は首を傾げる。

「考えてしまふんよ……。　足も不自由で、一人じゃなにもできなくて、皆に迷惑かけて、両親も亡くなって……。それでも私は生きている。　確かに、ヴィータやシグナムやシャルやザフィーラ、それになのはちゃんやフェイトちゃんにすずかちゃんにアリサちゃん。　わたしにも沢山友達ができまし、いまの生活はとても楽しい。　けど——それでもたまにほんのちよつとだけ考えてしまふんや。　生きていてもいいのかな——そう考えてしまふんや。　もしかしたら、わたしのせいで誰かが損をするかもしれんやん。　誰かが被害を受けるかもしれんやん」

俯くはやて。　そんなはやてを見て、俊は答える。

「生きてくれないかな？　俺のために」

「……へ？」

俊の言葉に下げている顔を上げるはやて。

「俺、もつとはやてとやりたいこと沢山あるよ。　外で遊びたいし、本も読みたい。　互いに家に遊びに行きたいし、二人で台所に並んで立って料理も作りたい。　それだけじゃない。　両親にだって紹介したい。　この子が俺の自慢の友達なんだ！　そう紹介したい」

そう言つて——

「お前は『生きていいのかな』なんて言うけどさ、それによって誰かに迷惑かかるかもしれないけどさ、お前のその不便な足のせいで損をするかもしれないけどさ——」

俊ははやての肩を掴み、正面から笑顔で言い切る。

「友達つて——損得の感情で成立するもんじゃないだろ？」

それはいつか、八神はやてが上矢俊にいった言葉だった。　俊に届けた言葉だった。

それを今度は——上矢俊が八神はやてに送る。  
そうして俊はやてを唐突に抱きしめる。

「一生の迷惑を俺にかけてくれ」

「……ほんま……ほんまにええの……？」

「可愛い女の子にかけられる迷惑は——男にとつちやご褒美だから  
な」

そう笑いながらはやてをみる俊。そしてはやても俊を笑いながら  
らみる。

その日——八神はやてと上矢俊はずっと手を握っていたのだった。

☆

俊は忘れたかもしれへんけど——わたしは忘れたこと一度もない  
で。

お金もないだろうに、桃子さんや土郎さんをお願いして前払いで借  
りたりしながら毎日毎日お見舞いの品買ってきてくれたり。

あんまり私のことばかり構うから、なのはちちゃんと喧嘩したりも  
したんやろ？

ぜーんぶ、聞いたんやで？

手を伸ばし俊の顔を撫でる。

「どうして……そこまでしてくれるんやろうな……」

力もないのに、魔法もないのに、それでもアンタは頑張ってる。

「女の子はな？ 自分のために頑張ってくれる人に弱いんよ……？」

アンタはそれをわかってる？

痛いのは嫌いだしいいながら真っ先に飛び込んで

何もできないといいながら他の皆では思いつかないことをしたり

他の女の子にもちよっかい出したり

「あんた……時代が時代なら打ち首やで……？ ちゃんとわかってる  
んかいな」

わたしの人生狂わしたくせに、平気な顔して日々を過ごして

ずりずりと重い体を引きずりながら俊の体に触れ、足に力を込め立  
ち上がり、俊の膝の上に座る。

「なあ……責任とつてくれるんやろうな……？ わたしはなのはちや

んやフェイトちゃんみたいに甘くないで？」

俊の顔を固定して、ゆっくりと口元にキスをする。小鳥がついばむようなキスをする。

「アンタがなのはちゃんやフェイトちゃんのことを好きでも……そんなもん私には関係あらへん……。だって——アンタには一生の迷惑をかけてええんやろ？ それってつまり——」

——そういうことやろ？

はやてはもう一度キスをする。

今度は俊の口腔内に強引に舌を滑らせる。

「んっ……ちゅっ、あんっ、……ずちゅっ、……んっ……ぷはあっ」

はやてが離れると、俊とはやての間に一筋の銀色の糸がつ——つとびていく。

それを見ながら、はやては笑う。はやては嗤う。

まるで自分の物にしたかのように、俊の口元をみて笑う。

「約束したもんな？ 風邪が治ったら唾液を飲ませてくれるって。これも俊が約束してくれたことや」

そういいながら、はやてはもう一度舌をいれる。

無音の室内に、ぴちや……ぴちや……という音が響く。

「はあ……はあ……。んちゅっ、んっ、」

はやては俊の口腔内を凌辱していく。マーキングしていく。

舌をいれ、俊の舌を絡め取り、自分の唾液で汚していき、自分は俊の唾液を吸い尽くす

やがて満足したのか、俊から離れ——今度は覆いかぶさるように抱きついた。

「俊……？ ちゃんと約束まもってな？ ご両親の紹介、期待しとるで？」

はやてはそういつて、今度こそ目を閉じる。

なのは達が翠屋の仕事を終えて、様子を見に来るまでの間。

俊ははやてを膝に乗せたまま、疲れからかぐつすりと寝ていたのであった。



## 80. 夜の騒ぎ

トントンと誰かに肩を叩かれた感覚を覚え、ゆっくりと瞼を開く。「おはよ、俊くん。ぐっすり眠ってたね！」

そこには、大好きな幼馴染のなのが笑顔で俺をみていた。肩には手が乗っていることからして、どうやら起こしてくれたらしい。

「んっ……。んー、おはよ。あれ？　そういえばはやては？」

「主はやてならベットでぐっすりと眠っているぞ」

そういったのはヴォルケンのリーダーであるおっぱい魔人ことシグシグ。パイオリしたら気持ちいいんだろうなあ……。搾乳器とか使ったらどんなことが起きるんだろうか……。母乳でてきたりして。

ベットのほうをみる。そこには、はやてがなんとも幸せそうな表情でぐっすりと眠っていた。この様子だと、風邪の具合はもういいようだ。ほっと一安心する。

「それで、俊くん。ちよつと聞きたいことがあるんだけど……」

笑顔で俺の肩を掴むなのは。ギシ……。ギシ……。と骨の軋むような音が聞こえてくる。

「はやてちゃんと——なにしてたのかな？」

その瞬間——複数人の殺気が全身に襲い掛かってくる。

小さい体躯に大人な精神を持ち合わせたロヴィータちゃんが、その体系に似合わないほどのデバイス、アイゼンを大きく振りかぶっていた。

そして俺に声をかけてくれた搾乳器ことシグシグは、なんかレバ剣を研ぎ始めた。こんな状況なのにシグシグの頭を心配してしまう。

おま、デバイスってそんなこ

とで切れ味よくなるのか？

「楽しかった……。？　気持ちよかった……。？　はやてを膝に乗せて寝るのは？」

後ろから聞こえてくる冷たい声。俺はその声を以前にも聞いたことがある。後のPT事件と呼ばれる事件の重要人物——フェイ







いまでさえ限界なレイハさんをもっと押し込もうとするのは。俺の口は既に限界である。

俺の目から水滴がたまり始めた頃に——部屋の扉が少し開き、そこから愛しの娘——ヴィヴィオが顔を覗かせた。

そんなヴィヴィオの登場に、一同ヴィヴィオのほうを振り返る。

「ひいっ!」

「ヴィヴィオ、先にご飯食べててねー? ママ達はちよつとパパと危険な遊びをするから」

「う、うん……」

「ん——っ!? ん——っ!?」

「もう俊くん。ヴィヴィオがきたからってそんなに興奮しないのっ! めっ!」

教師が生徒を叱るように軽くデコピンをするのは。

ヴィヴィオはなのは達から何かを感じ取ったのか、恐る恐る、扉を閉めて行った。去り際に小さく俺に向かってバイバイしてくれたのが印象的だ。……地上からバイバイなんてことにはならないよね……?

ヴィヴィオが一階に降りる音が聞こえてくる。それをみて俺の中の何かが語りかけてきた。

(俊、ここはなのは達に断固抗議するべきだよ、俊は悪くないんだから!)

これはまさか……俺の心の中に住む天使……!

(おいおい、お前なにいつてるんだよ。こんな可愛い女の子、しかも大好きな幼馴染とこんな状況になってるんだぜ? もっと楽しむべきだろ?)

(でたな悪魔! そうやってキミが俊を甘やかすから、俊はいまだに無職でゴミでクズで下種でもういつそ死んでいいんじゃないかな? とか思われちゃうんだよ!)

キミは天使を装った墮天使だね?

(おいおい俊。忘れたのか? 天使なら目の前にいるだろ? 高町なのはがいるじゃないか)

(やめるんだ！ 高町なのはなんて一歩間違えたら部下をバインドで縛ったあげく魔力弾で攻撃しそうな女の子じゃないか！)

俺の脳内天使、キミには金輪際会わないことにした。

もう一度、なのはを見つめる。 なのはは変わらない笑顔で、

「永続的に痛いのと、永久的に痛いのが、どっちがいい？」

そうレイハさんを俺の口から取り出しながら聞いてくる。

だからこそ俺は真剣に答える。 天使に懇願する。

「悶絶失禁コースでお願いします。 できれば言葉責めしながらバインドでチンコを縛って射精できないようにして、永遠に手コキとかしてくれませんか。 ロヴィータ

ちゃん辺りはつるつるママコを俺の顔面に押し当てて顔面騎乗みたいな感じで——」

「タイム!!」

なのはが唐突に叫ぶ。 そして四人とも俺の位置から遠い場所に移動する。

『おいどうすんだよ、脅すつもりがこっちが脅されてるぞ……。 あたしなんて名指しまでされたぞ……。 どうすんだよ、なのは。 お前の予想じゃあいつが泣いて謝る予定だったんだろ?』

『ちよつとまって、あの返答はわたしにも予想外だったから。 みて、この鳥肌。 闇の書なんかよりよっぽど怖いんだけど……。』

『謝らせてからゆっくり洗脳するつもりだったのに……。』

『リンディ・ハラオウンが何故あいつを警戒するのかがわかったな……。』

四人が俺のほうをチラチラとみながらこそそそと話す。 いったい何を話しているんだろうか。

お前ら習わなかったの? こしよこしよ話は相手が傷つくからやめなさいって。

グー

「そういえば……。昼食いそびれたんだよな……」

はやてといれたからいいけど。 どう考えても はやてく昼飯だし。

しかしそれでもやはり食欲というものは厄介で、そろそろ限界が近づいているような気がする。　　なんだか若干体が重いような気がするし。

もぞもぞ

「おつ、はやて。　　おはよー」

「んー……。　　あれ？　　結婚式は……？」

「それ夢だと思うぞ？」

「まあ、あと数か月したら正夢になるし……ええか」

もぞもぞとベットの中で動きがあつたので、そちらを振り向くとはやてがぼけくとした顔で変なことをいつていた。　　欠伸を一つして、背伸びをしながら立ち上がるはやて。

……それにしても、はやてに結婚を考えている相手がいるのか……？　　いや、べつにそれは自由だからいいんだけど……ちよつと胸のあたりがもよもよするような……。

「んー！　　よく寝た！　　せやけど、どうしてベットで寝てるんやろ？」

「いや、ベットで寝てるのが普通じゃないか？　　俺が確認したときもベットで寝てたし」

「まあ……安眠できるベットであることは確かなんやけど。　　ところで俊。　　アレ、なんなん？」

はやてが指さすのは勿論、団子大家族のように固まって秘密の打ち合わせをするなのは達。

『こうしようよ。　　俊くんの視界にわたし以外の人が見えないようにする魔法をかけるってことで——』

『なのは、それなんの解決にもなっていないよ』

「さっきまでは怖かったんだけどなー。　　いまはあいつらがめっちゃくちゃ可愛く見える不思議」

いや、マジでなのはに説明求められたときはチビるかと思ったよ。俺なにも悪くないのにさ。　　むしろ俺が説明してほしいのに。

それから30分、痺れを切らした桃子さんが呼びに来る間、俺たち6人は——細かくいうならば俺とはやては四人の秘密会議を黙って

みていた。

『わかった。責任をもってわたしの部屋で俊くんを——』  
『なのは、だからそれ解決になってないって』

☆

——自室

楽しい夕食の時間も終わり、風呂にも入り既に就寝にはいったこの時間。きつとエリオとキャロ辺りはフェイトが寝静まるまでついているんだろうなく、なんて思ってしまうこの時間。ヴィヴィオとガーくんは桃子さんと一緒に寝てるなく、なんてことを考えるこの時間。

「い、いいっ！ご、ご主人さまとペットは、す、スキンシップとかそういうのが大事なわけで、それをわたし達に当てはめると、ご主人様がなのは俊くんがペットだから、こ、これは当然の行動だから！ほ、他に他意はないから！ちよつと膝の上に座りたいなく、とか全然思っていないから！」

現在、俺の膝の上にはネコの絵が描かれているパジャマ姿のなのが座っていた。

「あ、あ……うん。えつと……」

「な、なにっ!？」

「その……、ちよつとだけ恥ずかしいかなく、なんて……」

頬を掻きながら、わざと軽く笑ってなのはに言う。実際、意地でも笑ってないところの雰囲気気が狂ってしまいそうだ。というか

——ドキドキの心拍音、なのはに聞こえないよね？

「ふ、ふくん……。べ、べつにわたしは恥ずかしいなんて思っていないけどね？」

「けど、どうしてこの時間に？」

「そ、それは……スキンシップって二人でやるから意味があるんだし……夜じゃないと、邪魔とかされちゃうかもしれない……。それとも——俊くんはなのはと二人は……嫌？」

「それは絶対にありえない。なのはさえいれば、なにもいらない」  
……いや、流石にそれはもう無理かもしれない。会ったばかり



ならまだしも、俺にはもう大切なものが沢山できてしまったわけだし。

けど——それでも、ちょっとだけ思う。

なのはがいれば、それだけで十分なんじゃないかな。

まあ、あくまで思うだけなんだけどね。

「ほ、ほんとに……わたしがいれば、あとはいらない……?」

「……へ?」

「ちゃんと答えて。わたしがいれば、あとはいらない?」

「まあ……うん。そうやってみないとなんともいえないけど」

実際問題として、そんなことできないわけだし。

「そ、それじゃあ……、いま魔法で俊くんの視界を弄って、わたし以外の人物を見えなくしたらどうする……?」

なのはが俺の服のつまみながら試すように見てくる。

これは、魔法が凄いのか、高町なのはという女の子が凄いのか……。

それにしても……なのは以外の人が視界から消えるのか……。

俺はそれを一度小さい頃に経験して体験してるんだけどなあ、そういうことを。化け物が視界に入るんじゃないかと、なのはしか見えなくなるんだろ?」

それならあの時に比べて天国だろ。いや、天国なんてもんじゃないやねえよ。そんなもんじゃ表せないほどの喜びだろ。

「えっと……せめて他の人と話せるようにはしてくれないかな?」  
「じゃないと色々と不便だし」

「……まあ、それくらいならいいけど」

「んじゃ、いいよ」

「……え? いいの?」

「どうぞ。好きなように弄ってくれ」

両手をバンザイの形にして、なのはを見る。一瞬だけ、目が点になるのは。そして少しだけ唇を動かした後——

「もう、冗談だよ、冗談。そんなことするわけないでしょ?」

「あれ? そうなの?」

「そうだよ。それに、そんなことしたら色々今後の生活で支障が

出そうだし」

「支障どころの騒ぎじゃないと思うよ。　まずヴィヴィオとフェイトに病院に連れて行かれる」

「まあ、それもそれで面白そうだけどね」

うふふふ、そう口元に手を置いて可愛らしく笑うのは。

経験してみたかったのでちよつとだけ——残念かも。

そんなことを考えてしまうあたり、俺が異常者と呼ばれるものを射ていると思う。

ごほんつ、なのははそう咳払いして俺に人差し指を突き付ける。

「そういえば、ここに来た目的を忘れるところだった。　今日きた目的は、俊くとわたし。　つまり主従での決まり事を決めようと思ってきたんだ。　とりあえず、わたしと俊くんの約束その1、〃私以外の女の子をみない〃　はい、復唱」

「無理ゲーにもほどがあります」

首を傾げるなのは。　何故あなたはそこで首を傾げることができ  
るんだ……？

「うーん、それじゃあ——〃わたし以外の女の子にちよつかいかけない〃　これは守れるよね？」

黙ったまま首を縦に振る。

……ちよつかいつて、どこまでがちよつかいなんだろうか……？  
というか、ちよつかいつてなに？

「約束その2、〃わたしのそばから離れないこと〃」

「それは絶対に守れる！　むしろ誓うことができる！」

今度は力強く答えることができた。

俺の返答を聞いて、嬉しそうにうんうんと頷くのは。

「俊くん良い子良い子。　えーつと、約束その3、〃できるだけ二人きりの時間を作ること〃」

「むしろ俺が言いたい。　俺と二人っきりの時間をもつと作つてくれ」

「……作ろうとするといつも逃げ出す癖に……」

なのはから弱パンチが胸に飛んでくる。

けど、そうはいつでもなものにはティアとかいるし……無理だよな。

考え込む俊の頬を、なのはが現実世界に戻そうと引っ張る。

「いひやいですなのしやさん」

俊の顔を掴んでいた手を離し、そのまま膝の上で説教——ではなく愚痴をいはいはじめる。

「考え事禁止。そもそもわたしがこんな苦労してるのは俊くんの所為なんだからね？ わたしだけのはずなのに、いつの間にか俊くんの周りには女の子ばかりできて、俊くんも俊くんで何を勘違いしてるのか、調子に乗って、バカみたい——」

それを黙って聞く俊。 なのはは俊の顔を自分のほうに引き寄せて言い放つ。

「俊くんには、わたしがいればいいの」

有無を言わさない、極上の笑みを浮かべるなのは。 俊もまた、それにつられて首を縦に動かした。

そしてそのまま、なのはが何かを言おうとした瞬間、ドアが盛大に大きな音をたてて開き、俊となのはの娘であるヴィヴィオと、そのペットであるガーくんが姿を現した。 後ろには困った顔の桃子がいる。

「ヴィヴィオちゃんが俊ちゃんとなのはと寝るって聞かなくて……」

「ごめんなさいね、二人っきりの時間を……」

「パパー、なのはママー、いっしょにねよー！」

「ネヨー！」

助走をつけて、なのはの背中に抱きつくヴィヴィオ。 ヴィヴィオにタックルされる形となったなのははバランスを崩し、そのまま俊を巻き込んでベットに倒れる。

「あれー？ フェイトママはー？」

「ドコー？」

そんなことお構いなしに、もう一人のママであるフェイトをガーくんと探すヴィヴィオ。

「あれー？ なのはママ大丈夫？」

「ダイジョウブー?」

フェイトがないことを悟ったヴィヴィオは、今度は自分がタツクルをかました相手、なのはを心配そうに呼びかける。

「な、なのは……?」

巻き込まれなのはの下敷きとなった俊は、自分の首に腕を巻きつけて布団にキスをしている最中のなのはを呼ぶ。

「……起き上がれない」

「へ?」

「魔力切れで起き上がれないから……このまま寝よ?」

耳元でそういつてくるなのは。

ヴィヴィオはそんなのをみて、自分のパパである俊に抱きつく。

「ヴィヴィオもするー!」

「あつ、こらヴィヴィオ!　だーめ!」

「いやー!」

横から割り込んでくるヴィヴィオに、なのははすかさず注意するが、そんなことでは止まらないのがヴィヴィオである。そのままなのはの位置を奪って抱きつく。俊はそれに苦笑しながらも、ヴィヴィオを抱き返す。

「なによ……わたしのときは抱き返してくれなかったくせに……」

そんな二人をみて、なのはは一人そう呟いた。

コンコン

なのはが呟くのと同時に、桃子が気をきかせて閉めていたドアがノックされる。そして数秒してドアノブは回され自分の枕をもつた八神はやてが部屋にはいつてきた。

「俊ー、一緒に寝ようやー。　って、なんや先客がいたんかいな。

ふーん……」

既に部屋にいたなのはとヴィヴィオとガーくんを一瞥したはやてはそのまま自分の枕をもつたまんま、俊の隣に寝転がる。そしてそのまま寝息をたてながら夢の中へと旅立つ。

一瞬の早業で、俊が何かをいう暇すら与えなかった。

ふと、俊は自分の服に湿った感触を覚える。

「……さつきまで元気にはしゃいでたつてのに……子どもつてすげー」

そうヴィヴィオをみて俊は一人呟く。俊の目の前には、よだれを垂らしながらも、俊の服をしつかりと掴んで離さないヴィヴィオの姿があった。そしてその横で待機するかのように眠るガーくん。思わずそんなヴィヴィオの頭を撫でる俊。その顔はとても優しくであった。

「俊くんだって、小さい頃は一人で騒いで満足して寝てたじゃん。あれとつてもうるさかったよ?」

「うう……面目ない。って、起き上がれないんじゃないの?」

「魔力回復した」

魔法少女に不可能などありはしないのである。

なのはは申し訳なさそうな顔をする俊をみながら、自身も隣に寝転がる。

そして俊を見つめながら何かを言おうとした口を開いたそのとき

コンコン

そう二度目のノックが聞こえてきた。

そして開かれるドアの前には、枕をもったエリオとキャロ、そしてフェイトが姿を現した。フェイトは俊の状況をみて、それでも何事もなかったかのように話しかける。

「エリオとキャロと一緒に寝たいらしいんだけど……四人で一緒に寝ない?」

フェイトの問いへの答えを待たずにエリオとキャロは俊に駆け、近い位置に枕を置く。それをみたフェイトが少し困ったような顔をしながらも、自身の枕をもってベット内に侵入してくる。

コンコン

「おいひよつとこ。お前の所にはやてきてないか? 手出ししたらお前の局部粉碎してやるけど——」

素晴らしいながら部屋にやってきたのは、ロリの代表ヴィータであった。そしてその後ろにはシャマルとシグナムとザフィーラ。全

員とも、いなくなった主を探して此処へ辿り着いたようだ。

バン！

「なのはさーん！ーん!! あなたの嫁のティアがやってきましたよーん！ーん！ 今日私とスバルとなのはさんで3Pしましよーん！！」

「ぎゃああああああああ!? なんかきた!? 面倒な部下が卑猥な物もってやってきた!?!」

「あ、ちよつと租チンさんそごいってください。なのはさんの隣は私と決まって——」

「誰が租チンじゃてめえ!! お前の子宮ぶち抜くぞ!」

ドアを壊しながらやってきたティアとスバルは、なのはの隣にいたひよつとをどかす。租チンといわれ切れるひよつと。部屋は一気にカオスへと変貌していく。

「なのは……やっぱりそういう趣味が……」

「いや違うから!?! 一度もそんなことになってないから! フェイトちゃん一緒に寝てるから知ってるよね!?!」

「パパー、だっこー」

「んー、あんま暴れるとあかんでー俊。ちゃんと枕にならんと」

「お前ら二人は呑気だなあおい!?!」

ヴォルケンを巻き込みながら大枕投げ合戦へと部屋は変わり、騒ぎを聞きつけて下からやってきたアリサとすずかを交えながらひよつとこたちは夜を楽しんだ。

「あらあら……楽しそうねみんな」

それを扉の向こう側でみていた桃子は、盗撮用に用意していたカメラが室内を一枚だけ撮る。

笑い合いながら遊ぶ皆を撮るのであった。

## 81. 海鳴初の男

背筋に氷の壁が舌を這うような悪寒と、腹のあたりに微妙に人の感触を覚えて目を覚ます。うすぼんやりとした視界、そんな中で少づつ昨日の記憶を紐解いていく。昨日は確か大枕投げ大会になって……嬢ちゃんが調子に乗って桃子さんの顔面にブチ当てて、そのまま全員就寝の形になったんだよね……。いや、マジ桃子さんすごかったわ。咄嗟に張った障壁パンチでブチ破ったからね。ギャグ補正どころの話じゃないわ。俺でも本気で蹴らないと破れないっていうのに。

ふと、伸ばした腕に重みを感じて隣をみる。

「……んっ……。もう、逃げちゃダメだって……」

……天使？

「あ、なのはだった。やべ、素で間違った……」

これはかなり恥ずかしい。いや、まあ天使だから間違っではないけど。

なのはは俺の左の腕を枕にしてぐっすりと眠っていた。朝からなのはの寝顔をみれて幸せ。今日一日頑張れそうだ。

なのはの頭を撫でようと思われているうでは逆のほう——すなわち右腕を上げようとしたところ——違和感を感じた。まったくもって持ち上がらないのだ。訝

しみながら、そちらをみると——

「もう……逃げちゃあかなくて……。これにサインとハンコを押せば……こつちのもんやから……」

……悪魔？

「あ、はやてだった。やべ、素で間違った……」  
パキッ

あれ……？ おかしいな、右腕がまったく動かなくなったぞ？

急に動かなくなった右腕に違和感を感じて自力で戻そうと努力してみる。

「動いたら足の神経切断するで」

右腕くらい使わなくても困ることはない。左手でこすればそれで事足りるしな。

「はやて……起きてる？」

「……………」

小声ではやてに聞こえるように話しかけたものの、はやては無反応だった。

もしかしていまの寝言？ お前の寝言怖すぎるんだけど。

両腕が使えないことはわかったが、この二人に使われるなら本望である。そしていい加減、無視してきた腹の気配を確認しなければ。頭を少し浮かせて腹のほうをみる。

「……何故もう少し下に寝てくれなかったのか」

思わずそう呟いた。口が勝手に動いた。脳が指令を出すよりも先に反射の要領で音として出していた。

目の前には、腹の上には、フェイトが枕代りにしてぐっすりと眠っていた。それはもうスヤスヤと安らかに、まるで女神のような美しさで眠っていた。

悔やまれる……！ とても悔やまれる……！

もう少し下に来てくれたら、あわよくば口に挿れることができたかもしれないのに……！

人生にベストは存在しないらしい。

それがよくわかった一瞬であった。

ようやく全体をみる余裕ができてきたので、視線を一周させることにした。

嬢ちゃんがデ○ルドを持ったまま寝てるとか、意外に口ヴィータちゃんの寝顔が可愛いとか、シグシグは寝顔も凛々しいとか、ザツフィー犬の姿のまま寝るのかよとか、エリオもキヤロも俺の足掴んで何してんのか、シヤマル先生その体勢キツくないのか、スバルお腹だして寝ると風邪ひくよとか、そんなことよりも何よりも——

「おはよう、ヴィヴィオ。今日も早起きだね」

「えへへ、パパとおしゃべりしたいからはやくおきたの！」

何よりも——ヴィヴィオと挨拶できてよかったと思った。 ヴィ



ヴィオと一緒にこうやって笑い合うことができてよかったと思った。  
親バカ万歳。

けどヴィヴィオ——あまりパパの股間をみないでくれるかな？  
もっというなれば、勃起してるキノコを見ないでくれるかな？

「パパ？　　ここおつきしてるよ？　　だいじょうぶ？　　びようき？」

ヴィヴィオが心配そうに四つん這いで俺に迫ってくる。　いまさらではあるが、ヴィヴィオのパジャマはウサギの顔が描かれたものである。　そしてヴィヴィオの後ろにはガーくんも起きていて頭に睡眠キャップを乗せたまま、こちらに手を振っていた。　……アヒルに睡眠キャップって意外と合うな。

ヴィヴィオが俺の勃起したナニを指さしながら涙をためている。

そういえば、あまりこうやって勃起をみせたことはなかったよな。

一応、これでもパパだからそこらへんは気を使っていたんだけど

……。　まさか起きて早々ナニをロックオンされているとは思ってなくて……。

「いや……病気じゃないよ。　むしろ健康の象徴かな？　　ほ、ほら、それよりも着替えよつか！　　パパが手伝ってあげるから！」

必死に話題逸らしを決め込む俺だが、うちの愛娘は大層俺のことが心配らしく頑なに首を横に振った。

「でもでもでも、パパのここくるしそうだよ？　　パパしんじやうよお……」

萌え殺された。

涙をためながら心配してくれるヴィヴィオには申し訳ないのだが、こればかりはどうしようもない。

……いや、まてよ？

ふと考える。

ヴィヴィオにこのいきり立つナニを鎮めてもらうのはどうだろうか……？

(※どう考えても犯罪です)

ヴィヴィオは俺のことを心配してくれている。　そして俺もヴィ

ヴィオのこんな顔を見たくない。そしてヴィヴィオがこんな顔をしている原因はどう考えてもこの天を目指しズボン突き破るんじゃないかと思うほどのナニである。

……成程、これがハッピーエンド。これが人生のベストということか。

(※どう考えても犯罪者の思考です)

だというならば……ちよつとヴィヴィオちゃんに協力してもらわないとな。これは親子のスキンシップだから。それ以外のなものでもないからね！

「ヴィヴィオ……実はな……、パパ……もうすぐ死ぬんだ……」

「ええっ!? そんな、ヴィヴィオいやだよお！ パパともつとあそびたいよ……。パパにいつぱいだっこしてもらいたいよお……。」

「いやー、パパしんじやいやー！」

「わっ!? ちよ、お、落ち着けヴィヴィオ!? 助かる方法はあるから！」

「ひつく……ぐすつ……、ほんと……?」

「ああ、もちろんだ！」

俺の死ぬ死ぬ詐欺を本気で受け取ってしまい、大声をあげて泣き出すヴィヴィオ。その声を聞いて全員が起きないかと一瞬冷や汗をかいたが、どうやらそれは徒労に終わるようだ……。しかしヴィヴィオ……。そんなに俺が死ぬのが嫌なのか。あれ……なんか涙が出てきた……。

ヴィヴィオに笑いかけながら要件を伝える。生き残るための戦力を教える。

「パパが生き残るための方法は一つ……。あの股間の病気をヴィヴィオが鎮めるんだよ……。」

「ふえ……、どうすればいいの……? パパのためならヴィヴィオがんばる……!」

拳を胸の前でぐつと握りしめるヴィヴィオ。可愛い……そして癒される……。

「まずパパのズボンを下ろす。そしたらナニが出てくるから……そ

れを優しく手でしごきながら口に含むんだ……」

(※救いようがありません)

「う、うん……！　ヴィヴィオがんばる……！」

ヴィヴィオは俺の言葉を受けて、下腹部へと場所を移動する。

そして俺が少しだけ腰を浮かしたのを見て、ゆつくりとズボンをおろす——ところで唐突に横にいたガーくんがヴィヴィオの目の前に立った。　丁度ヴィヴィオとナニの直線上に立つ形で。

「ガ、ガーくん……？　どうしたの……？　はやくしないとパパが……」

「ヴィヴィオニハマダハイ。　ガーくんニマカセテ」

そういうと、ガーくんはヴィヴィオをゆつくりと夢の国へと誘う。

こいつ……いつの間に魔法を習得しやがったんだ……!?

ヴィヴィオを眠らせたヴィヴィオは俺のほうをぐるりと向く。

そして——そのままズボンを下ろしはじめた。

「おいちよつとまって。　おいそのアヒル。　お前だよお前」

「シヌトイロンナヒトガカナシム」

「いや、あれ冗談だから。　マジ冗談だから。　ちよつとした親子の

スキンシップだから」

必死に止める俺だが、ガーくんはそんなことお構いなしに露わになったナニに口を近づける。

「おいマジやめろ!?　わかった！　俺が謝るから！　3000文字くらい使って謝罪文乗せるから！　だからマジでやめろって!？」

響く俺の絶叫。　飛び散る俺の謝罪。　しかしそんなことなどア

ヒルには通用しないらしく——

ジュっジュルルっっジュルルルっ！

「ぎやあああああああああああああああつ!?　俺のナニがアヒルに犯される——!?!　ちよつ、スト、スト、あつ……ちよつとまって……。

これ……意外と気持ちい

いような……」

絶妙な快感が俺を襲う。　こいつ……なんというテクニクを

……!

「つて、冗談じゃねえぞ……！ アヒル相手に射精したらそれこそ上矢」の名が大変なことになる……！ ガークン、その口を離すんだ！ じゃないと丸焼きにするぞー！」

「コワイー！」

俺の声を聞いて、ガークンはようやく口を離す。それと同時に快感もなくなった。

「はあ……はあ……。あぶねえ……。アヒルのフェ○テクってすげえな……」

荒い息を吐きながら、心臓を落ち着かせる。これが早朝でよかった……。5時帯に起きる奴なんて俺かヴィヴィオかガークンくらいだろ？ まあ、たまにフェイトも起きるけど、フェイトはこうやって俺の腹の上で寝てるから、この珍事件は誰にも見られて——

くる（横を振り向く）

ニコっ（なのはが笑いかけてくる）

み、見られてたあああああああああああつ!? 一番見られたくない相手に見られてたあああああああああああ!!?!

「お、おはようなのは……。今日も可愛いね……」

「ありがとう、俊くん。ところでさ、俊くん。色々と言いたいことはあるんだけど——」

なのはが起き上がる。

今のうちに開いた左腕で顔面を防御——

「娘に手をだすなっっていうたでしょうがあああああああああああ!!」

振り下ろされたなのはの拳は防御をいとも容易く壊し、俺は二度目の就寝を遂げた。

これが……エースオブエースの実力か……！

## 82. 一難

ゴシゴシとペットの頭部を洗う。洗われているペットは俺の言うとおりに黙って目を瞑ったまま成すがままにされている——が、後ろからみているとなんだか心なしか嬉しそうにしていた。

「ガークン気持ちいいか？ 痒いところはないか？」

「ダイジョウブー」

ペット——ガークンに話しかけると、頭をスポンジで洗われているガークンはとても気持ちよさそうな声をあげながらそう返事をしてくれた。

ちなみにガークンについて少しだけ説明をしておこう。

ガークン、ヴィヴィオのペットであり俺たちの家族であり、人類を除く生物の頂点に君臨するかもしれないアヒル。そう——アヒルなのだ。人語を解し、人語を話し、文字で現すと既にアヒルであることを忘れそうな存在。しかし俺たちにとってみれば大切な存在。戦闘能力はバカみたいに強く、きつと俺では勝てない。しかしなのはとフェイトはきつと勝てるだろう。だってあいつら主人公属性と補正があるし。ヴィヴィオのいうことを何でも聞き、ヴィヴィオを常に最優先に持つていく騎士道をひた走るアヒル。そして——上矢俊と同族であり、同類の存在。それがガークンなのだ。ああ、それと俺にフェラした最初で最後の鳥類でもあるな。

そんなガークンに声をかける。

「しかし悪いなー、ガークン。あそこでヴィヴィオに手を出してたら俺マジで死んでたかもしれない。ほんとありがとう」

「キニスルナヨ。ソナトキモアルツテ」

いやほんと……溜まっていたのかねー。かれこれ一週間くらいかな？

「ハックシヨン！ つああ……すまん、くしやみが」

「ダイジョウブー？」

「うーん……大丈夫だと思うけど。なんだか軽く寒気がするよう……そうでないような……」

くしゃみと同時に出てきた鼻水を拭いながら自分の体調を改めて調べる。

頭痛らしい頭痛もないし、腹を下したということでもない。咳が出ているということでもないし……きつと大丈夫だろ。鼻水も気にするほどの量ではない。寒気も気のせいだ。

全体を洗い終えた俺はガーくんに熱いシャワーをかけて泡を全て流す。

お次は自分の髪と体を洗おう。

そう思い、シャンプーに手をかけたその時——ガラガラと擦りガラスのドアが開きヴィヴィオが水着を装着した状態で風呂場に登場してきた。

「ありやヴィヴィオ？ ママ達と皆で朝ごはんを食べてたんじやないの？」

「パパといっしょにたべる。パパおふろはろう。」

水着姿のヴィヴィオが笑いながらそう駆けてくる。そんなヴィヴィオの頭を撫でながら思った。

……ヴィヴィオに手を出そうとした自分を殺したい……！

いや、あの、マジでね？ ちょっと又いてないから危ない思考になっただけですよ、きつと。でも、やっぱり娘に手を出そうとしちゃまずいでしょ？ いやもうなんというか、べつにロリコンってわけでもないけど、ロヴィータちゃんのパンツとか放尿シーンとか見たいなとかは思うけど、ロリコンじゃないですよ。だからヴィヴィオに本気で手を出そうなんて思っただけでなく、それに俺にはなのはやフェイトといった超絶美少女達がいて……まあお友達ENDで終わりそうな気はするんですけどね。もしくはペットEND。あ、ペットENDで終わるならそれでいいや。色々と嬉しいことがまっただけだし。いや、それはもうでもいいんだ、どうでもよくないけどどうでもいいんだよ。

「ヴィヴィオ……もうパパ一生ヴィヴィオに手を出そうなんて考えないから……許してくれるかな？」

「うんいいよ——」

わーい！ きつとヴィヴィオちゃんなんのことがわかってないけど言質取ったから関係ないもんねー！　これで俺は無罪だー！

「オコナツタコトラムニカエスコトハデキナイヨ」

「その通りですよ、ガークンさん。　マジすんませんでした。　止めてくれてありがとうございます」

ガークンに土下座する。　流石の俺もアヒルに土下座する日がくるとは思ってもなかったよ。

「オモテヲアゲヨ。　ヴィヴィオガシンパイシテル」

ガークンに言われて、はたと気づき横を振り向くと——ヴィヴィオが悲しそうな顔をしていた。　嫌ですよ、自分のパパがアヒルに土下座してる姿なんて見たくないですよ。

俺は土下座の件をなかつたことにするように、ヴィヴィオに自分が座っていた場所を明け渡し、俺は両膝についてヴィヴィオの絹のような金色の髪を洗っていく。

「ヴィヴィオー、さつきみたことは忘れようなー。　パパとの約束だぞー？」

「はーい！」

……この純粹さはパパの俺でも拝みたくなるレベルだ。　俺の場合、ほとんどの要素がクズで占められてるからな。　けど、危ういとは思うかな……。　ガークンがいれば問題ないと思うけど。

長い金色の髪を一通り洗い、そこからリンスを手で揉んで浸透させていく。　あ、ヴィヴィオはしゃいじゃダメだぞ。

「そういえばガークン。　ずっと聞きたかったことがあるんだけどさ。　ガークンとヴィヴィオが知らない男と遊んでたって話。　ほら、三日目のやつね。　うん、覚えてるよな？　そうそう、それぞれそれでさ——なんでガークンは男を倒さなかったんだ？」

ガークンほどの腕ならほとんどの——海鳴の奴らは手も足もでないだろうに。　べつに殺せとはいわないけど、ノックダウンさせるくらいのこととしてはよかつたんじゃないかな？　だって知らない相手だぜ？

ガークンはしばし考える。

ガーくんほどの知力だ。それを考えていない、考えられない、実行できないはずはない。

「ニテタ。タマシイガニテタ」

「……似てる?」

「ウン。ダカラコウゲキシナカツタ。ソレニカタタカワカンナイ」

……ガーくんでは勝てないのか……。俺じゃ絶対に勝てないな。勝てるのは補正がある奴らか、おっさんくらいなもんかね。

ヴィヴィオの頭に水を調節して先程よりもぬるくしたシャワーをかけていく。泡はヴィヴィオの頭から体へと流れ落ち、やがて排水溝へと吸い込まれていく。

「しかしまー……無事でよかつたな。ヴィヴィオ、体は自分で洗う?」

「んー……、パパがやって!」

「はいはい。んじゃ、背中から順々にしていくぞー」

一度桶にお湯をためて、そこでスポンジを洗い新たに石鹸をつけていく。数回くしゃくしゃとスポンジに石鹸を馴染ませると、ヴィヴィオの背中にゆつくりとスポンジを押し付け上下に動かしていく。「痒いところや痛いところはないか?」

「うん、だいじょうぶ!」

俺のほうを振り向きながら笑顔を見せるヴィヴィオ。ああ……かわいい……。ああ……

けど、あんまり長居していると皆に怒られるよなあ。

「ねえねえパパ? あしたおまつりいくんでしょ?」

「うん、そうだよ。花火とかも上がってかなり楽しいと思うよ」

「ヴィヴィオ……いったことがないの……」

しゅんとするヴィヴィオ。そうか……。そばも食べたことなかったもんな。あの祭り独特の雰囲気とか、打ち上げ花火の凄さとか知らないよな。

ヴィヴィオの頭に手を置きながら、語りかける。

「それじゃ、パパと一緒にまわろっか。二人で手を繋いで、タコ焼き



やわたあめ、かき氷にリンゴ飴、焼きそばにやきとうもろこしにヨーヨー、全部回るぞ。お前はまだ小さいんだ。行ったことがない場所があるのは当然だ、知らないものがあって当然だ、分からないことがあって当然だ。一歩ずつ、自分の目で確かめながら歩いていけばいいさ。手を握れば、俺が力強く握り返してやるからさ」

毎回毎回、なのはやフェイトやはやと一緒に戻っていたけど……今回はヴィヴィオと一緒に回ろうかな。いや違うな。——今回“から”はの間違いだな。

「ありがと、パパ」

ばしゃばしゃと自己主張するガーくんの咽喉を撫でて落ち着かせながら腕や足を洗っていく。おまたは……自分でさせたほうがいいのかもな。

そう考えながらヴィヴィオにスポンジを渡そうとすると、

『俊一人だと出禁の店が沢山あるからヴィヴィオが楽しくない思いをするかもしれないよ?』

そうガラス扉から声が聞こえてきた。

☆

シヤマルから俊のアレな感じの検査報告書を受け取ったので、ガーくんと一緒にお風呂に入っているバカに報告しに行くことにした。

ほんと朝から騒々しい。一人で騒いで狂ったかと思ったよ。

桃子さん曰く『きつと溜まっていたのよ』とのことだったが、それとこれとは別問題だ。これには私もなのはも相当怒っている。とくに信用してずっと動向を見ていたなのはの怒りはとんでもなく恐ろしく、食事中の全員の顔色が悪くなるほどだ。

けどまあ……とくに雑菌もはいつてなくてよかったかな。問題なしの異常なしだね。

脱衣所まで行くと、バカの衣服よりも小さく、可愛らしいうさぎのパジャマが捨てるように放置されていた。

「ま、まさか……!」

すりガラスの向こうから、男性と幼女のシルエットが見える。バカとヴィヴィオで間違いない。この気配からして……ガーくんも

いるみたいだね。

首を鳴らし指を鳴らし、虐殺体勢に入ろうとした瞬間、声が聞こえてきた。

それはとても優しく温かみのある声色で、先程までバカをやっていた男と同一人物とは思えないほどの声色でヴィヴィオに語りかけていた。

『それじゃ、パパと一緒にまわろっか。二人で手を繋いで、タコ焼きやわたあめ、かき氷にリングォ飴、焼きそばにやきとうもろこしにヨーヨー、全部回るぞ。お前は

まだ小さいんだ。行ったことがない場所があるのは当然だ、知らないものがあつて当然だ、分からないことがあつて当然だ。一歩ずつ、自分の目で確かめながら歩いていけばいいさ。手を握れば、俺が力強く握り返してやるからさ』

そう彼は語りかけていた。

「そういえば……俊もそうだったね」

知らない土地であるミッドを自分の目で見て歩き、魔法を確認して、わからない原理を聞いて、そうやって一歩ずつ知る努力と分かる喜びを歩んできたんだよね。

けど俊——出禁喰らつてるお店があること忘れてない？

毎回毎回、どこか計画性に穴のある彼に溜息つく。勝てる戦いしかなさくないからこういった当たり前のことが疎かになっちゃうんだよ。

まあ……出禁くらい俊なら誤魔化しそうだけどさ。けど——ヴィヴィオと俊と私の三人でお店回るのも楽しいかも、というか夫婦に見られたりして。エリオとキャロはスカさんとウーノさんと行動するみたいだし。

「俊一人だと出禁の店が沢山あるからヴィヴィオが楽しくない思いをするかもしれないよ？」

だから俊。一緒にいい？

☆

「あ、フェイトママだ！ やっほ——」

『やつほーヴィヴィオ。 俊、シヤマルから検査の報告書貰ってきたよ。 異常なしだつて』

「そりゃよかった。 去勢なんてことになったら俺はキャサリンの所で働くことになるからな。 あいつマジで堀にくるからすんげえ怖いんだよ」

『あ、ちよつとまつて。 下に小さく何か書いてある。 えーつと…… “使ったら終了しますので一生使えないと思いますけどね” だつて』

「『だ、大丈夫だよ俊!? 使うときがちゃんどくるから!』

ありがとうフェイト……、その優しきで俺の心は救われたよ……。 それにしてもシヤマル先生、なんて不吉なことを書くんだ。

ぺちぺちとヴィヴィオが俺の膝を叩く。

「どうした? ちゃんとおまた洗った?」

「できんつてなーに?」

ああ……ヴィヴィオ知らないよね。 流石の俺もミッドではまだ出禁になった店はないと思うし。

『出禁っていうのは、“出入り禁止”のことだよ。 そうだね、うーん……簡単にいうと今日からヴィヴィオはパパとママ達のお家の中に入っちゃいけません。 つていうことだよ』

「あう……パパあ……、ヴィヴィオはいつちやダメなの?」

「あくまで例え話だよ、例え話。 それにあそこがヴィヴィオの家なんじゃない。 パパとママ達と一緒にいる所がヴィヴィオにとつての家なんだよ」

ヴィヴィオからスポンジを受け取り、それと交代する形でシャワーをかけていく。

「しかしまいったな。 俺一人じゃ出禁の店とかあるし、厳しいなあ。 かといって、出禁以外の店行くか、というのも嫌だし……」

『と、ところで俊。 えーつと、提案があるんだけど……』  
つて、そういえば此処にフェイトがいるじゃん。 ヴィヴィオも俺とガーくんで行くより、フェイトも一緒に回っていったほうが楽しい

だろうし……、ちよつと頼んでみるか。

『その屋台回り、私も一緒に行くつてのはどうかな?』

「フェイト、予定がないなら一緒に回らないか?」

俺とフェイトの声が被る。

数秒して、くすくすと戸の向こうから笑い声が聞こえてきた。それにつられるようにして俺も笑う。

ヴィヴィオはそれをおかしそうに見ていたがじきに俺たちの笑いにつられて笑いだした。

なんかいいなあ……、こういった会話にこういった雰囲気は。

「ハックシユーン!」

☆

ヴィヴィオを先に上がらせて、少し時間を遅らせてから俺も風呂場を後にする。ガークンの体をふきふきして、自分の体と髪に纏わりついているストーカー体質な水の雫とおさらばした後、フェイトが置いてくれた衣服に身を包んで食卓へ向かう。

ガチャ

「朝からすいません、桃子さん。風呂まで用意してくれて——」

なのはさんと遭遇した

「……おはよう俊くん。朝からお風呂とほいい御身分だね。

まあ、べつにそれはいいんだけどさ。とりあえず朝ごはん食べよつか」

なのはさんに引きずられるような形で椅子に座らせられる。

「あれ? みんな食べたんじゃない?」

「わたしとフェイトちゃんとはやてちゃんとヴィータちゃんとヴィヴィオは待ってたよ。他の面々は俊くんの自業自得だから待つ義理ないよといって食べさせたけど。」

いまは翠屋で仕事かな?」

「ふーん。あ、ありがと。それじゃいただきます」

なのはから白米と味噌汁のはいったお椀をもらい、手を合わせていただく。それにならつて皆も手を合わせる。

目の前には焼き魚に白米、味噌汁にきゅうりの浅漬けにひじきの煮物。和を意識して作った朝食が並べられていた。

味噌汁を口に含む。

中はオーソドックスに豆腐とわかめに葱なのだが――

「うまい……。これ桃子さん？　ちよつと味が違う気がするけど――」

「それ作ったのわたしやで」

俺の問いに答えてくれたのは、正面に座っている八神はやてだった。すっかり風邪もよくなつたようで安心である。

それにしてもこのうまい味噌汁……はやてが作ってくれたのか。

「うまいよ、はやて。　やっぱはやては料理上手だな。　それにしてもはやて、お前は俺を待っていてもよかつたのか？」

「いまから二人揃って食べる習慣をつけとくと、今後の生活においても支障ないやろ？　それに俊と一緒に食べるほうがおいしいで？」

笑顔を見せてくるはやて。　思わずその笑みに一瞬固まる。

「そ、そっか！　それは嬉しいなあ。　俺もはやてと一緒に食べれて嬉しいよー！」

「うれしいわー。　まあ……。わたしが一方的に食べることになるんやけどな」

「あ、俺ははやてのためなら何でも作るぞ？　はやては一方的に食べればいいんじゃない？　帰省前だったまに手伝いを頼むくらいだったし」

「ふーん、そっかそっか。　俊がそういうなら仕方ないなー」

仕方ない、仕方ない、そういうながら笑うはやて。

はやては俺と違って仕事もあるんだし、家に招待すれば皆の分もついでに作るのに。

「ロヴィーちゃんも悪いな。　ロリなのに」

「どう考えてもロリ関係ないだろそれ。　お前の中のロリは万能すぎるぞ。　……。まあ、はやて一人残していくと色々不安だしな、主をほつたらかす騎士なんて意味ねえだろ？」

「三名ほどほつたらかして仕事いってるけど」

「……………わたしにはやてのことを預けてくれたんだよ」

誤魔化した。いま盛大に誤魔化した。

チラリと右横をみると、フェイトとヴィヴィオが楽しそうにおしゃべりしながら食事を楽しんでいた。そしてヴィヴィオの横ではガーくんが箸を使いながら俺たちと

同じように食事していた。なんだろう……どう足掻いてもガーくんは勝てそうにない。

そして左横をみると――

「……………」

なのはさんが無表情でこちらを横目でみていた。この人完全に霸王色だよ。これモブキャラ辺りなら絶対気絶してるよ。

けど――そんな目をしてるなのはも可愛いよね。

思わずこちらを見つめるなのはのほっぺたを摘まむ。『はぐっ』  
といって無表情の目に生気が戻る。

「なにすんの!? 口に含んでたご飯こぼすところだったじゃない!?  
落としたらどうすんの!?!」

「大丈夫! 俺が拾って食べるから!」

「そういう問題じゃないから!?! 落としたご飯の後始末の話をしてるんじゃないの! 食事中にほっぺた触ると危ないって話してるの!」

「ごめん、なのは。もうほっぺた触らないよ……」

「へっ? いや、いや、そういうことを言ってるんじゃないよ……べつに触りたいなら触っていいよ? その、ほら、ペットのお願いを聞くのもご主人様の役目っていうか――」

「今度からパイタッチで我慢するね」

「味噌汁頭にかけていい?」

何故ほっぺたはよくておっばいはダメなんだ。部位差別じゃないか。

「ねえおっばいなのは」

「おっばい担当はフェイトちゃんの役目だから! おっばい芸はフェイトちゃんだから!」

『なんでそこで私を巻き込むの!? 二人で勝手にしててよ!』

「……悲しくないの?」

「……ちよつとだけ悲しくなってきた」

自分の胸をみながら溜息を吐くのは。べつになのはにおっぱいなんてなくつてもいいと思うんだけどさ。お前の魅力の中におっぱいはないよ。おっぱいが入る余地がないほどのものでお前は魅力的なんだから。

「ところで、俊。明日はお祭りやん? それに伴って午後から浴衣を買いに行くんやけど、わたしの浴衣は俊が選んでくれへん?」

「え? 俺が選んでいいの? んじやアニコスの——」

「それはまた別の機会に着てあげるから、ちゃんとしたもんをお願いしたいんやけど」

ちゃんとしたもの……俺にそれを求めるのか。

「まあ、はやては可愛いからなに着ても似合うと思うけどな。任せてくれ、俺がはやてに合いそうなものを選ぶよ」

そうはやてに宣言すると、なのは側から袖をくいくいと引つ張られた。

「勿論、わたしのも選んでくれるよね?」

「当たり前だろ。俺以外に選ばせないよ」

「うん! 期待してるね! それで、今回も一緒に回るんでしょ?」

ひまわりのような眩しい笑顔でそう聞いてきたなのはに、俺は申し訳ないと思いつながら返す。

「えつと……今回はずっとヴィヴィオと行動しようと思つてさ」

「え? ヴィヴィオと行動するのは当たり前でしょ? なにいつてるの? けど俊くんだけだと、出禁のお店が沢山あるでしょ? だから一緒に行くこうよ」

「あ、うん。それなんだけど、フェイトと一緒に——」

「へー……、フェイトちゃんと」

「……え」

そして急激に襲い掛かってくる痛み。その痛みは足のほうからくるようで、気付かれない程度に下を向くと、フェイトの黒ストッキ

ングに包まれた足が正確に俺の右足の親指だけを打ち抜いていた。  
その痛み——想像していただきたい。

「(バカ!)」

視線で訴えてくるフェイト。　うう……ごめんなさい。

けど、なんでそんなに怒られないといけないんだ……?

「ねえ俊くん。　わたし達、家族だよな?　わたしだけ除け者扱いはちよつとだけ悲しいかも。　ぐすつ……」

「そうやな……。　俊ならヴィヴィオちゃんがあわつても、『みんなと一緒にまわろつか!』　くらい言ってくれると信じたんやけどな……。　いつからそんなセコイ男になったんやろ……」

なのはは目元を覆いながらしゃくり声をあげ、はやても悲しそうな表情でこちらをみていた。

「ご、ごめん!　そ、そうだよな!　言われてみればそうだよ、例年通り皆で回ろう!　今回はヴィヴィオを中心として回ろう!　な?　フェイトもそれでいいよな?」

懇願するようにさういうと、フェイトは抗議の視線と非難の視線を浴びせつつも、

「(絶対、埋め合わせしてよね!?　このバカ!　絶対だからね!)」

そう小声でいって、了承してくれた。

……フェイトさん、ほんとごめんなさい。

☆

ヴィータは一人、四人の行動を黙ってみつめていた。

ヴィータだけは見ていた。　見てしまった。

なのはとはやてが互いにほくそ笑んでいた所を。

「……刺されなきゃいいけどな」

怒ってひよつとこの足を正確に踏み抜き続けるフェイトと、けろつとした顔で朝食を食べてるなのはとはやてを見ながら、ヴィヴィオに慰められているひよつとこをみてヴィータは呟いた。



### 83. 浴衣店

「着物や和服は黒髪美人が似合うとか、日本人がやるからこそ100%を引き出せるとか、流石大和撫子だ！ とか絶賛する奴いるけどさ、ぶつちやけた話、黒髪だからとか日本人だからとかまったく関係ないよな。個人単体でみたときにその人に着物や和服が合うかどうか、なんだよ。金髪だって栗色の髪だって茶髪だってピンク髪だって赤髪だって青髪だってオレンジ髪だって、そりゃ大きく分類するならば似合わないかもしれないけど、個人単体でいうのならば俺は断言して言える。——六課の皆、浴衣似合うなあ」

「ひよつとこ、みてないでお前も自分の選べよ」

「え？ なんで？ 俺は高町家にあるものでいいよ」

「こつちは新品のやつを買ってるんだぞ？ お前も新品のやつをだ——」

「ありがとうロヴィータちゃん。でもロヴィータちゃんと結婚すると色々世間的にマズイ気がするんだ。ほら、ロリコン説とか」

「ちよつとまで、どこをどう解釈したらいまの結論に辿り着けるんだ。

お前の思考回路のほうが大ズイだろ。しかもお前と結婚するくらいなら夜天の書に引きこもったほうがマシだ」

まさかそこまで嫌がられるとは思っていなかった。

「しかもだな、お前は仕事しないだろ。そんな奴と一緒にいるとか胃に穴が開くぞ。何がロリコン説だ。こつちは悪い男に引つかかった説が流れるぞ」

「……なのはとフェイトって、とつても心が広くて優しい人なんだな」  
「単純にお前に甘い気がするだけだけだな」

海鳴にある浴衣の専門店にて、ロヴィータちゃんと俺は皆を適当に眺めながらそんな会話を繰り返す。

ロヴィータちゃんはさつきから近くにある子供向けの浴衣をチラとみながら自分の体型を手で確かめている。もしかして、それが自分にピッタリなのか探しているのかな？

「ロヴィータちゃん、あの赤い紅葉が散りばめられている浴衣って可

「愛くない?」

「あ? んー……、まあ……確かに可愛いな」

「ロヴィータちゃんの真つ赤な髪と合わさってとっても綺麗だと思うんだけど」

「そうかあ? ちょっと派手なような気がするぞ」

「いやいや、浴衣はあれくらいで丁度いいと思うよ。だって浴衣って服というよりアイドルがステージで着るような衣装だと思うんだ。

祭り用の衣装みたいな印象かな。だから主観的に派手だとももっても、客観的にみたらそうでもないことのほうが多いんだよね。

ロヴィータちゃんも派手な浴衣を祭りで見かけても、派手だとは思うけど場違いとは思わないだろ? 『祭りだからなー』で片付けるでしょ?」

「言われてみると……そうかもしれないな。うーん、あまり子どもっぽさがでない意味でもあの浴衣はいいかもな。流石に子ども全開な感じは嫌だし。ちょっと試着してくる」

ロヴィータちゃんはそういつて店員さんに声をかけ、いましがた指名した浴衣をもって試着室へと入っていく。

ごめん、ロヴィータちゃん。子供っぽさがどうか言ってたけど、どう考えてもロヴィータちゃんはぬいぐるみに囲まれてスヤスヤ寝てるような構図が一番いいと思うんだ。

ロヴィータちゃんが試着室に入るのを見送る。うーん、9歳の頃はこんなこと思ってもいなかったけど、永遠に年を取らないロリっこのいうのはありがたいよな。

しみじみと頷いていると、遠くのほうからなのはがこちらに向かって歩いてくる。その表情は好意的とはいえないわけだが。

「俊くん、反省した?」

「え? なにが?」

『「え? なにが?」じゃないよ! なんて試着中に平気で入ってきたの!」

「こう……二次元へとゲートがあると思って」

「で、あったの?」

「入った瞬間顔面に一発いれられたからわかんない。　　といつかなのはさん、あれマジでわからなかったんだよ。　　なのはとフェイトが呼ぶから試着室に入ったのに、入

った瞬間即離脱だよ。　　早漏にもほどがあるよ」

まあそれよりも気になるのは、なのはとフェイトがなんの抵抗もなく二人で一つの試着室を使ったということなんですけどね。　　二人で一緒のベットに寝てるくらいなので当たり前なのか？

「ところで、いつになったらこのバインドは解けるのでしょうか。　　そろそろ奇跡の扉を探しに行く時間なんだけど」

「奇跡の扉なんか探させないからそこで大人しくしてなさい。　　まったく……浴衣選んでくれたのは嬉しいけど、平気な顔して試着室に入るとかそういうしたのはやめてほしいよね。　　そこは嫌いだよ」

「わかった。　　嫌われたくないから挙動不審で今後からはいるようにする。　　でゆふつ、なのはたとフェイトさんの試着はあはあ……」  
「キミの中には試着室に入らないという選択肢は存在しないのかなあ!?!」

漢が………廢る!」

「しかしながら、なのはさん。　　俺が選んだもの以外でも結構見て回ってるね。　　やっぱり俺にセンスがなかった？」

「え？　　そんなことないよ。　　ただ………その………傾向を調べたりとか………　　女の子には色々とあるの!」

「生理とか？　　むらむらしちゃって『俊くん！　　俊くん！　　もう我慢できないっ！　　あっ！　　あっ………!』みたいな感じだったら——」  
「ぶっ飛ばされてえのか」

なのはさん、足の震えが止まりません。　　もうなんか言葉使いからラスボス級の匂いがしますし、なにより気を抜けば一瞬にして意識が刈り取られそうなレベルです。

チツと軽く舌打ちした後、俺の隣に移動するなのは。　　移動するのはいいけど、個人的にはバインドを解いてほしいかな？

「あ、そういえばなのは。 フェイトは——」  
どうした？

そう言おうとした瞬間に、ドンと何らかの衝撃が背中を襲う。 痛くないので普通なら笑って後ろを振り向くことができるのだが——  
「あつ」

俺が床に倒れ込むのをみて、バインドを解いていなかったことに気付くのは。 手を出してくれたのはありがたいんだけどね。

なのはから桃色のバインドを解いてもらい、後ろを振り返りながら背中に突進してきた人物に怒った振りをする。

「ヴィヴィオ。 パパはなのはママとSMプレイの最中だったんだから邪魔しちやダメだろ？」

「えへへ、パパごめんね？」

「可愛いから許す！」

「相変わらずヴィヴィオには激甘だね俊くん……」

隣で呆れながら溜息を吐くのは。 あんまり溜息を吐くと幸せが逃げちゃうぞ。 俺が頑張つて幸せにするけど。 したいけど。

改めてヴィヴィオのほうに視線を向ける。

ヴィヴィオは子どもっぽさを全開に出したのか、うさぎが可愛らしく飛び跳ねてるデフォルメ絵が描いてある浴衣を着ていた。 そしてくるりと回つて天使の笑顔を振りまきながら俺となのはに向かって、

「ヴィヴィオ、かわいい？」

「可愛いに決まってる!!」

俺となのはが一寸の狂いもなくヴィヴィオに肯定を示す。 だつてアレですよ？ 奥さん。 もう天使のヴィヴィオが可愛らしい浴衣を着て、俺となのはに『可愛い？』とか可愛いにきまってぶちゃんげもろたんぼうんだあk s w d g h j k r l g k f k d …j

「俊くん落ち着いて!! 耳から緑色の汁が垂れてるよ!!」

「はっ!? あ、あぶねえ……。 タイムリープするところだったぜ……」

「いや、こっちはいきなり隣で緑色の汁出されてそれどころじゃなかったんだけど……」

「ついに俺もナメック星の住人に……」

「頭吹き飛ばしても平気ってこと?」

どうしてキミはそうやって怖い展開しか俺に与えないのかな。俺のドラゴンボールやらねえぞ。

しかし……ヴィヴィオは本当に可愛いなあ。

くるくるりと回るヴィヴィオの頭を撫でると、ヴィヴィオはむず痒そうな顔でこちらをみてくるのでたまらず抱っこする。何度も何度も抱っこしてきたこの重み、ふと思ったことなのだが、俺がヴィヴィオをこんなに抱っこしたくなるのはこの重みが好きだからなのかもしれない。

この重みを感じるたびに責任と、心の中の何かが埋まっていくような感覚。

「娘にまで依存してるとなると……相当世間的に厳しそうだよな」

けど、ヴィヴィオがいないと『上矢俊』は消えるわけだし、そう考えると依存するのもいいかもしれない。

そうやって自分で自分を最大にまで擁護していくことにしよう。

「あ、そうだヴィヴィオ。なのはママとフェイトママが浴衣をプレゼントしてくれるから、パパからはなんか小物をプレゼントしてあげようか?」

「ううん、パパはおかねもってないからむりしなくていいよ?」

「あ、うん……。気を使ってくれてありがとね……」

「ぶっ!? しゅ、俊くん……! つ、ついにヴィヴィオにまで気を使ってもらうなんて……! そ、それはパパとして……ぶはっ!」

「う、うるさいなあ! お前みたいな高給取りと一緒にすんな!」

無職の遠吠えである。

隣で腹抱えて笑ってるなのはにキツと視線を向けて、目線でお黙り! と訴えかけたもののあの可愛らしい笑顔で流された。というよりいくらなんでも笑いすぎだろ。

抱き上げていたヴィヴィオを一旦降ろして、なのはの手を取りヴィヴィオと——というよりも人が少ない隅に移動する。

「しゅ、俊くん!? だ、ダメだよ、ここはいくらなんでも……。ま、

まあ俊くんがなのはのこと好きってことはわかってるけど、でもでもここでそういうのは——」

なのはがいきなり挙動不審でわたわたとしながら早口にそう捲し立ててくる。

「ごめん、なのは。俺だつてわかってる。こんな所でこういうのはダメだつてわかってる」

「う、うん……止めちゃうんだ……。いや、べつにちつとも期待してないんだけどね?」

「でも——それでも、だからこそ、俺はここでやらないとダメだと思つてる。お前しかいないんだ」

「へっ!? そ、そんなこといきなり言われても! ま、まあこうなるのはわかってたけど……心の準備とか……そういうのだって——」

サイドポニーにまとめた髪を弄りながらそう答えるのはに——俺は頭を下げた。

「お願いします。お金かしてください」

「……俊くん」

「はい?」

「今度から……思わせぶりはやめようね」

「なんだかすぐく落胆した様子で俺のことをみてるのは。」

「え? どういうこと?」

「いや……まあいいや。うーん、それよりお金か」

顎に手を置いてなにやら考え出すなのは。くっ……! こうい

うときはだいたい、変なお願ひされるんだよな……! あ、でもなのはのお願ひということは、最終的にはなのはが喜んでくれるのか。

ならばべつにいいや。

なのはが唐突に手の平を叩く。どうやら頭の中で色々と決まっ  
たみたいだ。

俺の顔に人差し指を突き付けながら、

「俊くん、明日のお祭りで私と一緒にわたがしを食べること!」

そう言ってきた。

「え!?! 一つのわたがしを一緒に食べていいの!?!」

「ま、まあ……言ってしまうばそうなるかな」

「いいんですか!? マジですか!? やったあああああー!」

両手を上げて店内を走る俊。顔からもわかるとおり、とても嬉しそうに店内を走っている。

『お客様、店内を走るのはちよつと……』

『あ、すみません……』

そして店員にやんわりと注意される俊。

くすくすと他の客に笑われながら、なのはの場所へと帰ってくる。

「……ただいま」

「キミとわたしが同年齢という事実が信じられないよね……。年齢詐称してたりする?」

「そつちこそカップ詐称してるんじゃないや痛い痛い!? ごめんなさい調子乗りすぎました!」

ギリギリと俊の左手首を捻じりながらも、天使の笑顔で俊のほうをみるなのは。

「俊くん、女の子はおっぱいだけじゃないんだよ? 分かってるの?」

「女の子がおっぱいだけじゃないのかは知らないけど、お前の魅力がおっぱいなんかじゃないことは知ってるよ」

綺麗に関節を取られ、片膝をつきながらも俊はなのはに視線をむけてそう断言する。

「……あ、ありがと……」

ぱつと手を離れたなのは俊とは真逆のほうを向きながら、そう答えるだけである。ゆびを執拗に絡ませているのはご愛嬌だ。

「ま、まあ俊くんはわたしなしじゃ生きていけないし、今回はお金貸してあげてもいいけど……。——って、俊くん。そういえばお小遣いは?」

ビクつと、なのはの言葉に俊の肩が震える。だらだらと冷や汗が流れだし、視線が上下左右に半端じゃない速度に動き、両手の十本が高速移動のように残像を残しながら動き始める。

「い、いやー……。えつと……。その……。こう……。世界平和てきな何

かにですね投資してきて……!」

「(……また無駄遣いしたな、この男)」

俊の挙動不審具合をそう決めつけるのは。

「へー、それで? 世界平和の投資って具体的にどんなことをするのかな? わたし管理局員だからそこらへんは把握しとく義務があるし。ほら、詐欺とかあったら大変じゃん?」

「いや、あの、女の子禁止というか……、ほ、ほら! 男の子だけの秘密みたいな感じで——」

俊が水を得た魚のように、何かを閃いたかのごとく続きを言うとした瞬間——なのはが詰め寄り俊に囁く。

「なにに使ったの?」

「……マンガとゲームとブルーレイとフィギュアとポスターです……」

観念したかのように俊が絞り出した声でなのはに告げる。するとなのはは溜息を吐きながらジト目で俊のほうをみて、

「……それは個人用のかな?」

「えつと……はい。ちゃんとお小遣いの中なのは&フェイト用のゲーム代はとってます。ミッドに帰ったら初回特典版のゲーム屋に取りにいつてきます」

俊の答えを聞いて、はあ……、と口から肺にたまっている空気を出しながらなのはは白い目で俊のほうをみた。

「それじゃ個人用のもう使ったわけね?」

「……はい。あの……、今月は新作とか沢山でて、ほらキャラソンとか買ったたり——」

「言い訳しない」

「すいません……」

「まったく……、無駄遣いする子にはお金貸してあげません!」  
「え!」

なのはの口から出た言葉は俊にとってはとても致命的なセリフであった。お金を貸してもらえない。それは言い換えるならこの場において、俊はヴィヴィオに小物をプレゼントすることができなく



なるからである。

「これには俊も驚き、なのはに詰め寄る。

「お願いします！　なのはちゃん！　お金貸してください！」

「ダメー！　無駄遣いする子にはあげません！」

「でも、なのははやフェイトだってマンガとかキャラソンとかブルーレイとか一緒にみるじゃん！」

「ほーお……。ところで——何枚買った？」

「うぐっ!？」

「一歩後ずさる俊。それに合わせる形になのはが一歩俊に詰め寄る。なのはは前かがみになりながら、俊の胸に指をとんと置く。

「何枚買ったのかなー？」

「……………」

「へー、わたしに黙秘権を使うつもりなんだー……………」

「3枚……買いました」

「それは一つのを？　それとも全部を3枚かな？」

「……全部をです」

「はい、お小遣い減らすことに決定します」

「そんなあっ!？」

「なのはの無情で非道な宣告。

「横暴だ！　いくらなんでも横暴すぎるぞ！」

「うるさい！　お小遣いをそんな使い方する人には減らして当然です！」

「どうやって生活していけばいいんだよ！」

「いや、生活自体には困らないでしょ」

「……まあ、確かに」

「はい、これで話しはお終い。　ヴィヴィオのプレゼント用のお金もあげないし、来月からはフェイトちゃんと話し合ってお小遣いを減らします。　まったく……、悔しかったらちよつとでもお金を稼ぐことだね。　まあ、それができないからわたしとフェイトちゃんがいるわけだけど。　というか、そんなことしたらわたしとフェイトちゃんを監禁するけど——」

「わかった。 お金を稼げばいいんだな？」

「……へ？」

驚くなのはよそに、俊は後ろを振り向き誰かを探して回りを探る。

そして標的の人物を見つけると、淀みない足取りでその人物——その人物たちのほうへ歩いていく。

「あれ、ひよつとこさん。 さつきヴィヴィオちゃんがひよつとこさんの内面のこと心配してましたよ？」 『パパは泣き虫だからヴィヴィオ泣かせちゃったかも』とか言っていました。 一声かけたほうがいいと思いますよ」

「それよりひよつとこさん。 私のなのはさんをあまり困らせると怒りますよ」

その人物たちとは、二人でお揃いの浴衣を選んでいたスバルとテイアであった。 俊は二人に近づいたのち、爽やかな笑みで肩を叩きながら、

「お前ら、ちよつと跳んでみる。 金持つてるだろ？ さつきと出せや」

『俊くんそれカツアゲだから!? 行動が小物すぎるんだけど!?』

俊の行動を先程の位置でみていたなのはがそう突っこむ。 そして勢いよく走っていき、俊の首根っこを掴み自分のほうへ向けさせる。

「なにしてんの!? なにしてくれてんの!? 年下の女の子相手にカツアゲする19歳青年なんて恥ずかしくて死にたくなってるんだけど!? これが俊くんの考えたお

金を稼ぐ方法なの!？」

「いや、RPGものでは定番というか」

「どんだけゲーム脳なの！ わかったから、わかったから！ わたしが悪かったから！ もう意地悪しないから今度からこういう行動はやめてね！」

「はーい！ 流石なのはさん！」

頭を抱えるのはと、その隣でヴィヴィオを呼びながら喜んでいる  
俊をみてスバルとティアはこう思った。

『(ひよっとこさんのようにはなりたくない……)』

## 84. 浴衣店2

カツアゲには失敗したが、そのかわりになのはタソから3000円の臨時収入をもらった。これでヴィヴィオに小物を買ってあげることができはるはずだ。

ヴィヴィオと手をつなぎながら小物売り場を物色することに。

ちなみになのはは嬢ちゃんに捕まってしまい、今頃嬢ちゃんをフルボッコにしてるはず。

ほら、耳を澄ませば――

『なのはさんらめえっ！ そんな、公共の場でそんな所を刺激したら……！ あ！ イっちゃう……！』

『いやしてないから!? どごも刺激してないから!? ただ、口頭で説教しただけでしょ!?!』

『そうやってじらして私の体を弄ぶつもりですね！ でも――そんななのはさんも、ステキ』

『この部下キモイ!?!』

いつも通りのやり取りが聞こえてくる。

それにしても嬢ちゃんって、ガチな方だから色々と危ないんだよね。なのは的にも俺的にも。俺の場合、下手したら恋敵に……なわけないか。

「パパー、ガークんはずーつとあそこでまってるのー?」

「そうだねー。アヒルは店内には入れなかったみたい。まあ、アヒルを連れてくる俺たちの常識がおかしいのかもしれないけど」

「ガークんかわいいそう……」

店内に入るさいに、店員側からアヒルは入れるなどのお達しがあった。当たり前のことなんだけどね。浴衣を扱うようなお店なんだし。だから現在のガークんは外

で道行く人に挨拶交わしながらひたすらにヴィヴィオをまっついている状態だ。うん、お前は立派な騎士だな。できれば当たり前のように喋るのも止めてくれると嬉しいけど。

店外のガークんを見た後にヴィヴィオに視線を移す。ヴィヴィ

オはちよつとだけしゅんとした顔をしてガーくんのほうを見つめていた。

そんなヴィヴィオを元気づけるだけにだっこしながら明るい声で話しかける。

「大丈夫だって。 ヴィヴィオが可愛い浴衣を着てくれたらガーくんはそれだけで元気になるから！　そしてヴィヴィオが可愛くなったらガーくんはもつと元気になるぞ！」

「ほんと？」

「パパは嘘つかないだろ？」

「うん！」

ごめんヴィヴィオ。　パパ何回か平気で嘘ついてるような気がするんだ。　パパ嘘つくことに関しては誰よりも吐いてきたと思ってるし。　呼吸をするように嘘ついてい

くから。

ヴィヴィオを強く抱きしめながら小物を二人で見えていくことにした。

「ほー、小銭入れの中着とか可愛いな。　あ、このひよこなんかヴィヴィオの髪色と似てるしいいんじゃないかな？」

「うーん、ヴィヴィオもつとかわいいのがいい」

「可愛いのかあ……」

ヴィヴィオの髪色と合わせるつもりでひよこが手を振っている巾着を提案してみたもののヴィヴィオにはお気に召さなかったらしく×判定を喰らってしまった。

しかしそうなると増々わからなくなってくる。　おかしい、ギャルゲーでは百戦錬磨の無敵なのに現実では負け戦なら百戦錬磨になりそうだな。　まったくどこの負完全だよ。

そうしてあれでもないと、これでもないどヴィヴィオと二人で言いながら小物を選んでみると、ふいに肩をとんとんと軽く叩かれた。　半回転して向かい合うと、ハワイアンな服でキめているフェイトが笑顔で立っていた。　どうやら浴衣の試着は終わったらしい。

「浴衣決まった？」

「うん、決まったよ。明日きちんと見せてあげるね」

「そりや楽しみだな」

「ところで、二人はいま何してるの?」

ひよこつと左に上半身をずらしながら先程まで見ていた小物売り場を覗く。

「ヴィヴィオの?」

「そうそう。やっぱりパパとして娘にプレゼントしたいなー、なんて思ってたさ」

「ふふ、俊もパパらしくなってきたね。私のために頑張ってるね、パパ」

「残念ながらその誓いは既に済ませております。そうだ、フェイトも一緒に選んでくれないか?」

小物を指さしながら頼むと、笑顔で了承してくれたフェイト。

ああ……なんでこんなに可愛いんだろ……。

ということ、フェイトもいれた三人で再び物色することに。

「扇子は……ちよつと古いよな」

「うーん、ヴィヴィオにはちよつと合わないかなー。どちらかとい

うと、それは俊むきかも。買ってあげようか?」

「あー、どうしよう。ちよつと欲しい気もするけど……ヴィヴィオのを最優先にしよう」

「はいはい。ヴィヴィオはどんなのがいいかな?」

「うーんとね……ヴィヴィオこれがいい!」

しばらく視線を彷徨させた後にヴィヴィオが選んだものは、光沢が眩しいかんざしであった。もう全身から高級感溢れてる超エリートです。流石ヴィヴィオ、お目が高い。でも値段も高いよね。

隣ではフェイトがとても困ったような顔で俺のほうを見ていた。顔にはこう書いてある。

『俊、無理なら無理っていったほうがいいよ……?』

僕らはいつても以心伝心なんです。

しかしながらこれは困った。俺のいまの金は3000円。これで見える額ならいいのだが……。

不安でいっぱいのまま、そろりとかんざしを手に取り値段のほどを見る。

かんざし (30000円)

「ごめんねヴィヴィオ。 パパは無力な存在だったよ」

「パパ!? いきなりちをはいてどうしたの!?!」

「うーん……、流石に俊には厳しい額かも。 ヴィヴィオ、私が買おうか?」

俺からかんざしを受け取ったフェイトはしげしげと見回しながらそう提案してきた。

だがヴィヴィオはそれに首を横に振ることで答えた。

「ううん、パパがかってくれるからだいじょうぶ。 ヴィヴィオ、パパがかってくれたのがいい」

「ヴィヴィオ……」

俺の首にがっしりと抱きつくヴィヴィオについ声が漏れる。 もう絶対にヴィヴィオを離さない。 もうヴィヴィオと結婚することにきめた。

フェイトは困惑した表情でこちらの様子を伺ってくる。

「どうするの? ヴィヴィオ、俊が買ってくれと信じてるみたいだよ?」

「(いつそのこと、万引きなんてのはどうだろう?)」

「(局員の前でよくそんなことが言えるね。 そんなことしたら一生軽蔑するよ?)」

どうやらこの案は海に沈むようだ。 フェイトに一生軽蔑されるところか死んだほうがマジです。

しかしながら、これは本当に困ったことになった。 ヴィヴィオはかんざしが欲しい。 俺はお金が欲しい。 どうにかして……値引きできないものか。

表面上は笑顔を取り繕いながら必死に悩んでいると、店員さんが営業用の笑顔でこちらに向かってきていた。

「いらっしやいませ。 小物をお探しですか?」

「えっと、一応決まってはいるのですが……。ちよつとお金が足りなくて……」

「あ、それなら内緒で値引きいたしましたでしょうか？　大丈夫です、私権限がありますのでちよつとの値引きなら問題ないですよ」

店員さんは胸を張りながら笑顔で答えてくれた。

この店員さん、なかなか話の分かる人のようだ。　値引きもしてくれるみたいだし……。

「それじゃ、27000ほど値引きしてくれませんか？」

「お客様、失礼ですが義務教育はお済でしょうか？」

こいつ……！　バカにしゃがって……！

「俊、いまのは俊がバカだと思うよ。　どこの世界にそんな値引きしてくれるお店があるっていうの」

やれやれ……とでもいいたげに溜息を吐きながら掌を額にあて天井を仰ぐフェイト。

そんなフェイトの顔をみて、店員は俺とフェイトを交互にみた。

「失礼ですが……お二人の関係は……？」

「え？　家族ですけど。　それがどうかしましたか？」

「い、いえ……。　お二人とも随分と若い印象を受けましたので」

「フェイトも私もともに19歳なので、まだまだ若いですよ。　店員さんだって美人で若いじゃないですか。　失礼に値しないのであれば、年齢を伺ってもよろしいでしょうか？」

うか？」

「今年で30になりますけど……。　え、19歳つて……」

「30歳ですか。　とてもそのように見えませんね。　20代前半といった感じでしょうか。　いやー、それにしても美人で綺麗だ。　もう少し早く会っていたのならば思わず告白をしていたかもしれないね」

営業用スマイルで店員を口説くことにした。　これで店員が堕ちてくれれば27000円値引きしてくれるかもしれない……！

パキッ

……なんだろう。　右の小指から強烈に痛みと熱が俺に襲い掛



かっってきた。

「ねえフェイト……。いま小指折らなかつた……。？」

「そんなことないわよ、あなた」

「いやでも、めちやくちや小指が熱いんだけど……」

「気のせいよ、あなた」

「フェイト……。怒ってる？」

「私の目の前で女性を口説こうとした罰。感謝してよね、これがなのはだったら小指じゃ済まないんだから。この頃、なのはは本気で俊を調教するつもりだし。……気持ちはわからないでもないけど」  
そつぽを向きながらすまし顔で受け答えしていくフェイト。なんだか怖い。

取りあえずフェイトとの会話が怖いので、店員さんとの会話を続行することにしよう——そう思い改めて店員さんの顔をみると、俺とフェイトとヴィヴィオをこれで

もかというくらいマジマジと見ていた。おばさん、ちよつと落ちて着いて。

「あの……。どうかしましたか？」

「あ、いえ。その……。娘様もとても可愛らしい子でございますね」

「私とフェイトの大事な娘ですから。もうヴィヴィオは世界一可愛いと思っております」

「(……。やつぱり、あの女性との子ども……。？でもそうなってくると色々……。) ヴィヴィオちゃんは何歳ですか？」

「ヴィヴィオは5さいだよ！」

店員さんはヴィヴィオのすぐ近くまで顔を寄せて俺と接するよりも高い声で明るくヴィヴィオの年齢を聞く。ヴィヴィオも5歳なんだよな。あと10年で結婚できるね。したら桃子さん辺りからガチで殺されそうだけどさ。

一瞬脳裏に桃子さんが俺の生首をもったまま、首から滴り落ちてくる血の雫を舌で舐めとるという光景を想像してしまい身震いする。

流石はモ・モモコ。人類を征服するために生み出された——いや、やつぱり止めとこ。後が怖い。

ところで、さつきから店員さんがやけに動揺しているような気がするが……。トイレにでも行きたいのだろうか？

「あの、大丈夫でしょうか？」

「は、はい！　大丈夫ですよ。（娘が5歳で……二人とも19歳ってことは……。あんなことやこんなことを14歳でやってしまい、そして妊娠……!?!　きつとこの人達は大変な思いをしたに違いないわ……!）」

密かに妄想を爆発させている30歳店員である。

実際にはそんなことありえないのだが。もしそうだとしたら、いまこの関係は成り立っていないだろう。

しかし妄想店員は止まらない。

「(だとしたらこの女性は騙されているんだわ……!　この男、明らかにダメ男臭が漂っているもの！　ちょっと顔がいいだけの男ね。可哀相に……こんな素敵な方ならもつといい男が沢山いるでしょう……!）」

「フェイト、店員さんどうしたと思う？」

「さあ？　それよりどうするの？　買えないってことはわかったでしょう？」

「えー！　パパかえないの……？」

「へ？　い、いや……そんなことないぞ！」

「……はあ。　まーた泥沼に嵌まっていく……」

「(そうだとしたら、きつとこの女性は苦労してるはずよ。私の予想では男は無職ね……)　お二人とも19歳で子持ちならさぞ大変なことだと思えます。　共働きでしょ

うか？」

おぼさんが精神攻撃をしてくる。　フェイトがあはは……と曖昧な笑みを浮かべる。　そつか、『職業、魔法少女です』なんてことが裂けてもいえないよな。　なのはじやあるまいし。

まあ、適当に嘘でもつくか。

「私は外資系の企業に勤めております。　妻は専業主婦で娘と一緒に帰りを待っていてくれますね」

「え？ その年齢ですか？」

「え、ええ……。 まあ、コネも若干あつたりしますが」

言つて気付いたのだが、翠屋でパティシエやつてることにすればよかつたと後悔した。 あ、でももうすぐミッドに帰るし意味ないか？

店員さんが訝しむようにこちらを見てくる。 面倒だ、顔面に一発いれて逃げてしまふか。

そんなことを考えてしまふ。 ヴィヴィオの前だからやらないけどぎ。

「(怪しい……。 とてつもなく怪しい……。) 19歳で外資系の企業……。 奥様も鼻が高いですね！」

「え、ええ……。 そうですね。 自慢の夫ですし、よく噂になっていきますので。(いえない……。！ 無職なんですつていえない……。！)」

「(どうしよう……。 フェイトの視線が痛い……。) そしてヴィヴィオが退屈してきたのか欠伸をしはじめた。 うーん、ここはやっぱり巾着を買つて退散するべきだろう

うか。 かんざしは……。 桃子さんがどうにかしてくれるはず) うえ、フェイト！ そろそろ行こうか」

「そ、そうねあなた！ で、では……。 私達はこれで……」

四つの中着を取り、フェイトと二人愛想笑いを浮かべながらゆつくりと後ろに退散することに。 店員さんはまだこちらのほうを見ていたが、やがて何かを悟つたかのように俺たちにも聞こえる声量で呟いた。

「できちゃった結婚か……」

この人絶対勘違いしてるな。

☆

おばさんの発言により、フェイトとの間に微妙な壁が出来てしまった。 なんかよそよそしいのだ。 二人の間が1mほど開いているレベルのよそよそしさだ。

「そ、それにしてもあのおばさん妄想が激しかったよな。 まさかヴィヴィオが俺とフェイトの子どもつて……。 いや、家族であることには間違いないんだけどさ。 な、なあ？」

努めて明るく振るまいながらそうフェイトに話しかけると、よそよそしかったフェイトがこちらをジーツと見つめていた。

「ど、どうしたの？」

「……嬉しくなかったの、そう思われて」

「え!?! そ、そんなことないって!」

「ふーん……。 で、でも確かに私とヴィヴィオは同じ髪色だし……そう勘違いしてる人がいてもおかしくないよね」

「確かにな。 そんなことありえないのにさ」

「……ありえない?」

フェイトの声が低くなる。 次いで俺の顔をみて少し寂しそうな顔をするフェイト。

「やつぱり……。 私は嫌なんだね……。 そうだよ、俊はなのはといえるほうが楽しそうだし……」

「ふえ、フェイト?」

「俊……。 私のこと……。 嫌い?」

「そんなことあるわけないだろ!」

涙をためて質問するフェイトは体以上に小さく思えて、ヴィヴィオが寝ていることも忘れて俺はフェイトを抱きしめようとした。 直前にヴィヴィオに気付くことができずそれはしなかったのだが。

「俺がフェイトのことを嫌いになる? そんなことあるわけないだろ。 お前のためなら死ぬ。 お前を守るためならどんな奴でも相手になる。 フェイトの笑顔を見た瞬間、その笑顔を守ろうと決めたんだ。 守りたいと思ったんだ。 フェイトが俺に愛想をつかして離れることはあっても、俺がフェイトから離れるなんてこと絶対にありえない」

「ざわざわ……。 ざわざわ……」

『若いわねー』『私にもあんな時期がありましたー』

「あ……」

「しゅ、俊……。 あ、ありがと……」

大声を上げたせいで、周りの婦人方たちから好奇と微笑みの視線に

晒されていた。フェイトも顔を下げてお礼をいうだけであった。

フェイトと視線に晒されてこちらも顔が赤くなる。

「お、俺もうちよつと見ていくからヴィヴィオを預かっててくれないかなー!」

「へ!? あ、俊!? ちょっとまってよ!?!」

フェイトの制止も聞かずに、ヴィヴィオを預けてその場を後にした。

顔が熱くて死にそうだ。

☆

フェイトから離れて10分。冷静に思い返してみれば、あそこで恰好よく昔のように決めることができたら違った未来が待っていたような気がしてきた。ほんと、なんでもあそこで恥ずかしくなって逃げたんだ……。

「あー、まだ顔が熱い。ごほごほ! うーん、咳もひどくなってきたような気がしないでもないけど……。明日まで持つよな。さて……巾着を買って戻るとするか」

広い店内を見回してレジを見つける。試着室の通りを歩いてレ

ジのお姉さんに話しかけようとした矢先――

「え……!?!」

試着室の一室、閉じていたカーテンから腕が伸び俺の首根っこを掴むとそのまま引きずり込んできた。抵抗することもできないまま、中へと入れられる。

そこで待っていた人物は俺のよく知る人物ではあるが、浴衣を着ている分色気が増していた八神はやてであった。

「おかえり……、あなた……」

「えーつと、ただいま?」

そうじゃないだろ上矢俊。なんでお前は普通に返事を返してるんだ。

「えつと……綺麗な浴衣だな。青を基調としたスマイレの刺繍が施してあるのか。……俺が選んだものとは違うけど」

「俊が選んでくれたものはもう買ったで。これはなんとなく着てた

だけや。もう皆自分の浴衣買ったみたいやし、そろそろお暇する時間やと思うんやけど」

「まあ、そうだな。そろそろ帰るとするか」

はやての言葉を受けて俊は試着室を出ようとする——が、俊が一步を踏み出した瞬間にはやては足払いをかけよろめかし、首根っこを掴んで後ろに強引に引き奥のほうに叩きつける。一瞬の早業で受け身をなんとかとることしかできなかった俊。はやてはそのまま押し倒す形で俊の腰に体を落とした。

「俊……そんな、大胆にもほどがあるで……」

「嘘つけ!? これ100%お前のほうが悪いだろ!? 女の子がこんな乱暴なことを——」

俊の声はそこで途切れる。途切れるしかなかった。何故なら、俊の口をはやてが塞いだからである。驚く俊をよそにはやては舌をねじ込み口を開けさせる。口腔内に侵入してきたはやての舌は俊の歯を丁寧に一本一本舐め、それが済んだなら今度は俊の舌を探しそれに触れると触手のように絡め取る。

「んちゅっ……あ、ずちゅっ……、……んっ……」

俊の舌が咽喉の奥にさがるとそれを追うようにはやての舌も咽喉の奥に侵入していく。それと同じようにはやての体自身も俊に密着するようにくつついていく。

「んーっ!? んーっ!?」

「んっ……、ぶはっ! ごめん、俊。これ病みつきになるんよ」

「い、いや、お、おま、おままままままままままままままま」

俊を上から見下ろしながらはやてはくすりと笑う。ついでにしがた触れた俊の唇を指で撫でていく。

「あはっ、やつと二人つきりになれたな……。しかも密室……」

俊、わたし……風邪がぶり返したみたいで動けへんのよ。だから誰かが来るまでこの体勢でまっけてくれるやろ?」

「いや、お前はなにをいって——」

「げほげほ——」

「だ、大丈夫か!?　すぐ助けを――」

呼ぼうとする俊の口を今度は手で抑え込む。そしてすぐ近くまで顔を寄せて

「あんっ。そんなつまらんことするなんて、俊らしくないで?」

そう蠱惑的に笑う。 たったそれだけで俊は何も言えなくなってしまう。

それを見たはやては手をどけて、馬乗りになったまま可愛らしく小首を傾げながら俊に話しかける。 先程の行動など微塵も感じられないような少女ともいふべき可愛さで、俊に話しかける。

「既成事実って便利な言葉だとおもわへん?」

「はやて、可愛い顔してとんでもないこと口走ってるぞ」

「便利やと思うんやけど……俊はどう思う?」

「……まあ、便利かどうかはともかくアレはすごいと思うよ。 それ

こそサヨナラホームランみたいなものだろな」

「うんうん!　わたしもそう思う。　ところで、俊は既成事実とかあつたらどうするつもりなん?」

「そりや……責任とらないとダメだろな」

「そっか……。　責任取るんやな……」

俊の言葉を受けて、はやてはニヤリと笑った。

血走った目で荒い息を吐きながら俊に詰め寄る。

「そっか……!　それなら思う存分やっても大丈夫なんやな……!」

バインドで俊の手足を動けなくして、舌なめずりをしながら俊の衣服を脱がしていく。　一つ脱がすことにはやての口元はほくそ笑んでいく。

「いやっ!?　はやて落ち着け!!　いまのお前マジ怖いよ!!　い、一旦

落ちっこ!　深呼吸、深呼吸!」

「酸素が欲しいん?　だったら人工呼吸してあげるで」

「お前頭やられてるんじゃないのか!」

喚く俊の口にははやてはもう一度口つける。　そしてそのまま酸素を与えることなく、逆に溜まっていた唾を俊の口腔内に流し込む。

くちゆりくちゆり……ぴちよぴちよ……、甘美な音だけが試着室という狭い世界を支配する。はやては目をとろんとさせながらひたすらに俊の口を犯し続ける。俊はそんなはやてをただ見つけるだけしかできず、次第に力が抜けていく——直前で目にした。発見してしまった。

試着室の間から覗き込むシグナムの姿を——

その瞬間、俊の背筋に悪寒が走る。

次いではやてを火事場の馬鹿力でどかし、体を左に可能な限り寄せた。俊がその行動をとった瞬間——シグナムの拳が鼻先をかすめていった。

「きさまああああああああああああああ!! 主にはやてになんということを……!! コロスコロスコロス……!!」

「いや、落ち着け!! 話せばわかる! お前はベルカの立派な騎士だろ!」

「コロスコロスコロス……コロコロコロコロコロコロコロコロ……!」

「お前コロコロみる年じゃないだろ! ってんなこと言ってる場合じゃな——」

シグナムの拳をかろうじて避けた俊は、そのまま試着室から全速力で逃げる。それを追うシグナム。殺意の波動に満ちている。

逃げる俊の手前、試着室から現れたのはニコニコ笑顔を浮かべ浴衣を眺めていたヴィータ。ヴィータは俊とその後方で修羅になっているシグナムをみてうんざりしたように声をかけた。

「おーい、ひよつとこー。あんまり店内で騒ぐと迷惑になるぞー」

『そんなことよりシグシグ止めろ! お前らのリーダーだろ! どうにかしろよ!』

「……どうせお前が悪いに決まってるんだろ……。見てなくてもなんとなくわかるぞー」

溜息一つ。ヴィータは突っこんでくる俊の進行方向に足を置く。全速力で走ってきている俊には当然ブレーキをかけることなどで



きるわけもなく、その足に引つかかり文字通り宙を舞った。思わず店内の人間が感心を上げる。感心を受けながら宙を舞い、盛大に浴衣の見本を倒す俊。どこか破片で切ったのか、頭からは少量の血が垂れてきている——が、いまの俊にはそんなもの気にもとめることができなかつた。何故なら——頬をひくつかせながら仁王立ちしている店員や首を鳴らし拳を鳴らしている店員が目の前に大勢いたからである。そんな店員たちに愛想笑いを浮かべながら一歩、また一歩と後退していく俊。そして——勢いよく加速をつけてその場を後にする。

『いい加減にしろてめえ——!!』

「いや、今回は俺のせいじゃないんです!?　ほんとです信じてくださいい!　ぎゃあああああ!?　前からシグシグ来てる——!!」

前にはシグナム、後方には店員。まさに絶体絶命である。

そんな俊を見ながら、ヴィータは呟く。

「なんかすまん」

☆

俊が店外に逃げるのをみながら、はやては少し残念そうな顔をして、寂しそうな顔をして、つまらなさそうな顔をして呟く。

「唾と一緒にその気にさせる魔法をかけたんやけど……もうちよっと早くかけておけばよかったな……。まあ、押し倒した時点ですっかり反応はしてたんやけど」

俊を見ながら、はやてはそう呟いた。

## 85. 開幕

『キョウなら』

日中の茹だるような暑さもこの時間帯になつてくると大分涼しくなつてくる。　がやがやとした人の喧騒、それぞれの屋台では客を呼び寄せるために大声を張り上げ、それに比例するように子どもたちのはしやぎ声が聞こえてくる。　暗い夜の世界であるのにもかかわらずいまこの場は明るく照らされており、沢山の人混みが出来ていた。　甘い匂いや食欲をそそるような匂いがこの場には蔓延している。　俺は左手でしっかりと娘の手を握りしめながら再度確認を取る。

「いいかヴィヴィオ。　パパの手を離しちやダメだからな？」

「はいー！」

これで何度目の確認だろうか。　正直、こんなに人が多いのだから何回確認をとつても足りないくらいだと思うが。

ヴィヴィオの傍らに控えているガーくんにも確認を取る。

「いいかガーくん。　俺もヴィヴィオのことを気に掛けるが……頼むぞ？」

「マカセロ。　ダイジョウブ」

「まあ……ガーくんのそばにいれば安全だからこれで少しは軽減されると思いたいかな」

ガーくんの頭を一撫でする。

「俊くん心配しすぎ。　何度確認取れば気が済むの？」

「そりやお前……、大事な娘だぞ？　できることならずっと手を握りしめていたい」

「……気持ちはわかるけど。　気持ちはわかるけど……、ちよつと親バカっぽい……」

「五月蠅いほつとけ」

ヴィヴィオとは逆隣にいるなのが呆れた目でこちらを見てくる。

なのはの浴衣は白を基調としたつくりになっており、そこに桜を散らせているものだ。　帯はピンクで髪を結いあげている姿はいつもより色っぽい印象を覚える。

『エリオ、キヤロ。絶対に知らない人に声かけられても返事したりついていったらダメだからね？ わかった？ 絶対だよ？ お金も余分に入れてるから沢山買って大丈夫』

夫だからね？』

「ほら、フェイトだってあんな感じだぞ」

「二人とも過保護過ぎるでしょ……」

なのはが俺とフェイトを交互にみながら溜息を吐いた。

俺がヴィヴィオと手をつなぎながら傍らでなのはと喋っていると、背中に柔らかい感触と同時に浴衣をするりと抜け俺の乳首を誰かが触る。手は確実に乳首を愛撫す

るようにさわさわと絶妙な力加減で責めてきた。

「ちよっ!?! やめろはやて!?!」

「姿を見てなくてもわかるなんて……もう一心同体やな?」

「こんなことをする奴はお前しかいないだろ! ったく、ヴィヴィオの手前こういうのはやめてくれ——」

止めてくれないか? そう言いかけて言葉を失う。

「——なんで嬉しそうな顔してるのかな?」

眼前には無表情のなのはの顔があった。冷徹で冷酷な氷のような瞳が俺を射る。それに反射して答える自分の口。

「嬉しそうな顔? そんなのしてるわけないだろ? それは見間違いに決まってるぞ」

「……そっか。 そうだよね! ごめんね、俊くん」

「失敗や見間違いは誰にでもあるさ。 そんなことより、フェイトも入れて回っていいこうぜ。 ヴィヴィオ、今日はお前が主役だ。 どこから見て回りたい? 食べたい物ややりたいものはあるか?」

無表情から一転、華やかな笑みを浮かべるなのはに笑いかけながら提案する。 それに頷いてくれたなのはをみて、俺はしやがみ込みヴィヴィオの目線に合わせながらどこに行きたいか聞く。

ヴィヴィオは俺の質問にしばし迷った後、盛大に腹を鳴らしちよつと照れたような顔をした。

「とりあえず、腹ごしらえといこうか?」

「うん！ えーつとね……、ヴィヴィオやきそばたべたい！」

「よし、んじや行くか。 おーい！ フェイト行くぞー！」

『あ、うん！ それじゃよろしくお願いします』

フェイトはエリオとキャロに手を振ってたつたつたとこちらに駆けてくる。 黒を基調とした黄色の花柄模様で彩られた浴衣は猛々しい雷のような白い刺繍を纏い、フ

エイトのはじめから持つ色気と合わさって効果倍増となった。

その証拠に、先程まではフェイトのことをちらちらと見ている輩が多いこと多いこと。 男持ちでなおかつ俺の姿を確認すると頭を下げどどっか行つたけど。

「そういえばはやて。 お前はヴォルケンの皆と行かなくていいの？」

「ええんよ。 たまにはヴォルケンメンバーで羽を伸ばしてもらいたいしな……。 主の守護ばかりやとキツイやろ？」

「まあ……そんなもんなのかね」

あまりあいつらが守護をしていた記憶はないのだが。 どうせ俺の記憶だ。 きつとあやふやで証拠にすらならないので頼らないことにしよう。

「それより俊。 なんかいうことあらへん？」

「えーつと……、可愛いよ」

「むらむらくる？」

「……多少」

はやての浴衣は青を基調とした作りになつており白と赤のハイビスカスが浴衣いっぱい広がっていた。 明るいはやてと合わせつて爽快なイメージが増々ましてくる。

俺たち四人はヴィヴィオのご所望通り、焼きそばを買うことにした。

焼きそばの屋台――

「なんだひよつとこ。 お前生きてたのか」

「勝手に殺さないでくれ。 それより焼きそば二つくれ」

「はいよ。 まあ、少しまっちよれ。 もうすぐ出来上がるから」

じゅーじゅーと鉄板の上で麺と野菜にソースを絡めながら捻じり鉢巻きタンクトップの屋台のおっさんは焼きそばを作っていく。

「俊くん。わたし達五人だよ？　なんで二つなの？」

「他にも食うのはあるだろ？　全部少な目にしたほうが後々の胃袋も嬉しいがと思うけど。それに俺も含めて全員とも大食いってわけじゃないし」

「あ、成程ね。　　そういえば俊くんも大食いってわけじゃないね。

もつと食べたほうがいいんじゃない？　……まあ、細身は好きだから別にいいけどさ」

「俺は食べるより作るほうが好きなタイプなんでな。　それに、作ってる間にだいぶ食欲もってかれるんだ」

「そういえば、前も俊はそんなこといってたね。　食べる側の私達にはよくわからないけど」

なのはとの会話に俺とは反対方向のヴィヴィオの手を握っていたフェイトが首を傾げながらいつてきた。　まあ……これは本当に作る側にしかわからないことだと思う

し、それすらも個人差があるからなー。　俺みたいな奴もいれば、そうでない奴もいる。

「わたしは俊の言ってることわかるでー。　意外に作り終わる頃には食欲もってかれたりするから、ザフィーラとかに多めにいれたりしてるんよ」

「だからこの頃ザツフィー体脂肪がアレな感じになってきたのか」

「なんやその気持ち悪い言い方。　もしかして二人して裸見せ合ったりしたんか？」

「男共でこっすり銭湯に行ったときにな。　　土郎さんには、サボリすぎといわれた。　　はあ……また鍛えなおそうかな」

男共で銭湯に行ったときのことを思い出す。　エリオの背中を流したりしてかなり楽しかったな。　スカさんと二人で女湯覗こうとしておっさんに殺されかけたっけ？

いまとなってはいいい思い出だ。　願わくばこのまま自然と消滅してほしいルートがあるのだが……あちらさんがそうはいかないのよ

ね。

「カツコつけてもいいことないのにな〜……」

「ん？ どうしたの俊くん？」

「いや、なんでもない。 それよりヴィヴィオ。 ずっと黙ったままだけど、どうかしたのか？」

「ほあ〜……」

ひとりでに咬いてしまった言葉をなんとか霧散させ、俺はヴィヴィオに声をかける——が、ヴィヴィオは俺の言葉が聞こえてないのか、ガーくん揃って指を咥えながらキラキラとした眼差しで鉄板をみていた。

「パパ！ おつきいよ！ おつきいよ！」

「そうだねー、おつきい鉄板だねー」

「だっこ！ だっこ！」

「はいはい。 おーいしよ。 ほら、うちとは比べものにならないほど大きいだろ？」

「うわあー！ おつきいー！」

抱き上げて鉄板の近くまで顔を寄せてやるときやつきやはしやぎながら、俺と鉄板とを交互にみていた。 ヴィヴィオからしてみたら、俺たちにとっては当たり前前の

ことも不思議に思えてくるんだろうか……。

はしやぐヴィヴィオの頭を撫で、いましがたできたばかりの焼きそばを受け取る——直前で声をかけられた。

「その子、お前の娘か？」

「……ああ、娘だよ。 大切な娘だ」

「そっか……。 まあどうせお前のことだ。 またなにか訳ありなんだろうけどな」

「うっせえよ。 こっちだってもう高校卒業してんだよ、なめんじやねえ」

「はっ、いうようになったもんだなひよつとこ。 また来年も来い、うまい焼きそば食わしてやるよ」

「ああ、ありがとよ。 んじや——また来年な」

小学生からの顔なじみに片手をあげてその場を去る。　どうやら早々に来年も海鳴に来ることが決まったようだ。

「さて、代金未払いだぞ」

お願い、カツコよく立ち去らせてよ。

☆

焼きそばを買った俺たちはその足でたこ焼きも買いに行くことにした。　買えるだけ買って、後でまとめて食べようということに五人で決めたわけだけど――

「開始一分でヴィヴィオは焼きそばを食べ始めたな」

「ま、まあまだ小っちゃいしね……。　それに熱々のうちに食べたほうがいいのも確かだし」

「言われてみればそうかも。　折角の出来たてなんだから早く食べた方がいいよな。　あとはやてはいつまで俺の背中で首に腕を絡ませているんだ」

「だって、両サイドはなのはちちゃんとフェイトちゃんに取られたんやもん。　それに前にはヴィヴィオちゃんがおるし、背中しか空きがないやん。　けどこれもこれでい

いかもしれへんな、俊の背中に引っ付くのもたまにはありや」

「俺は重いだけだけどな。　それにお前の場合……。いや、なんでもない」

言いかけて口を止める。　いまいったら――確実になのはとフェイトの機嫌が悪くなりそうな気がするのだ。　それに俺自身――昨日の試着室での出来事を思い出して軽くどきどきしているので止めておこう。

深く深く深呼吸する。

「かぶ」

「うひゃあ!?!」

「ええなー、そのリアクション。　ほんと俊はかわええな。　食べたいくらい……」

耳を甘噛みしてきたはやてが俺にしか聞こえない声量でそう呟いてきた。　それに曖昧な笑みで答えを返す。　なんか最近のお前お

かしいぞ……。

「パパー、あーん」

「あーん。 ーん、うまい。 ありがとうな、ヴィヴィオ」

「えへへ。 なのはママとフェイトママもあーん」

「ありがとうーヴィヴィオ」

「ありがとうね、ヴィヴィオ」

俺にだっこされているヴィヴィオが焼きそばをみんなの口に運んでいく。 ちゃんとガーくんにもあげてる辺り、自分の娘ながら感心してしまう。 ところで、ガーく

ん。 食べるたんびにジャンプするのはきつくないのかい？

ヴィヴィオはそのまま、俺の後ろにいるはやてにも焼きそばをあげる。 そんな様子を周囲の人間は微笑ましそうにみていた。 これではまるで、俺たちが雛鳥でヴィ

ヴィオがエサをあげる親鳥だな。

「ん？ タコ焼きの前におっさん達じゃねえか」

前方、目当てのタコ焼き屋へ向かっているとおっさん達の軍団が目に見えた。 あ、リンディさん焼きそば食ってる。

「よおタコ焼き。 タコ焼きもたこ焼き買いに来たのか？」

「誰がタコ焼きだ。 タコ殴りにすんぞ」

「まあまあ、祭りなんだしよしとこうぜ。 俺もおっさんのことを見

逃してやるからさ」

「それは俺のセリフだ。 しかしなんだ、此処の祭りは中々に活気が

あつていいじゃねえか」

「俺の育った場所だぜ？ それだけで理由としちや十分だろ」

おっさんは納得したように頷く。 他の人達とも会話をしようとした矢先——ヴィヴィオが俺のほっぺをぺちんぺちんと叩いてきた。

その瞳は先程の焼きそば屋台と同じように目の中に星でも入っているのかと疑いたくなるほどの輝きを放っていた。 くるりところらを向くヴィヴィオ。 そして屋台を指さして言い放つ。

「パパー！ タコせいじんがいるよー！ あたまつるつるー！」

『ぶっ！』



その場にいる全員が噴出した。飲み物を飲んでいたおっさんが吹き出し、焼きそばを食べていたリンディさんの鼻から麺が飛び出した。

なのはが必死に謝り倒す。

「す、すすすすすいません！ あの、ヴィヴィオはまだ5歳でうちの旦那がへんなことばかり教えていて！ それでその……たまにこういうこともあるんです！」

「そ、そうなんです！ あの、悪気はないんです！ほんと悪気はななくて娘もお祭り自体がはじめてでちよつと浮かれてて——」

なのはとフェイトが頭を下げながら身振り手振りでどうにかこうにか説明しようと頑張っているが——

「お久しぶりです。 どないでつか？ 繁盛してますか？」

「ぼちぼちでんなー、ひよつとこ君。 ところでその女の子はキミの娘なのかい？」

「ええ。 世界一可愛いでしょ？」

「狂犬のキミが変われば変わるものですね」

この人はとんでもなく懐が広いのだ。 これしきのことでは怒らないさ。

ただまあ……一癖も二癖もあるんだけどな。

「狂犬って……俺は道化師ですよ。 あ、タコ焼き2パックください」

「はいはい。 キミの手綱を握れるのは大好きな女の子たちだけですから、ほんと頑張ってもらわないといけませんね。 ところで……訳ありっぽいですから突っこみ

ませんが——母親はどなたでしょうか？」

「そりゃあ——」

『ごほんっ！ ごほんっ！ んうん！』

隣から声ともいえない声が聞こえてきたので、発言人物を見つめる。

「あ、ごめんね俊くん。 ところで、わたしの“娘のヴィヴィオが早くたこ焼き食べたいみたいだよ？ ほら、一緒に食べさせてあげようよ」

「へ？ あ、うん……。 はいヴィヴィオー。 あーん」

『ごほんごほん！ あ、あー、あー！』

「えっと……フェイト？」

「あ、ごめん俊。 ところで、私と俊の“ヴィヴィオがタコ焼き食べたそうにしてるね。 ほら、食べさせてあげたら？”」

「あ、うん……。 えーっと……」

『パパ早く』

なのはとフェイトの声が被る。 なのははちよつと頬を膨らませて怒ったような拗ねているような顔をして、フェイトは優しい笑みを浮かべながら声をかけてくる。

「ま、まあまずはヴィヴィオに食べさせよう。 あーん、ヴィヴィオ」

「あーん！ おいしい！ パパ！ たこやきっておいしいね！」

「だろー？ この人のタコ焼きは美味いんだ。 あ、ソースついてるぞ」

「えへへ、ありがと。 ヴィヴィオもパパにたべさせてあげる！」

あーん

「あーん。 んー、ヴィヴィオが食べさせてくれるからよりおいしい」

ヴィヴィオのほっぺに頬擦りをする。 ヴィヴィオは嬉しそうに声をあげる。

「パパー、つぎはねー。 わたがしたべたい！」

「綿菓子かー。 それじゃ行くか。 んじゃ、おっさんリンディさん俺たちはこの辺で」

「あ、その前に私飲み物が欲しいかな」

「フェイトちゃんに同意。 ちよつと咽喉が詰まっちゃう」

「それじゃまず飲み物ということでヴィヴィオもいいか？ それにはやても」

「はいー！」

おっさんたちの軍団に軽く手をあげてその場を去る——リンディさんの横を通った瞬間、リンディさんは小声で俺を嘲笑ように言ってきた。

「ふん、狂犬ね。 確かに、10年前の——あのとときのあなたは狂犬そ

のものだったわ。中々いい例えじゃない」

その声はかつての高ランク魔導師でありながらアースラの艦長を務め、そして俺を止めてくれたあのリンディ・ハラオウンの姿であった。

ただ――

「リンディさん、鼻からソース麺が飛び出てます」

鼻からソース麺出してる姿は非常に恰好悪かった。

『へっ!? あ、ちよつと! 待ちなさい! だからこつちをみずにどんどん進んでいったのね!? こら――! 待ちなさいってば――!』

☆

「だいしゆきホールドって知ってるやろ俊。あんたもエロゲとかするし、大好きそうやしな。あれって二次元だからめちやくちや萌えるねんけど……三次元でされたらもう強制――」

「それ以上言うなはやて。ヴィヴィオがいるんだからマジで止める。というか、なんでお前はいきなりだいしゆきホールドを出してきたんだ」

「んー、なんとなく。まあ、俊もだいしゆきホールドされたら観念したほうがええよ、ということや」

「そもそもしてくれる相手がいねえよ」

「こいつはいつまで俺の背中にくっついてる気なんだ……? ……胸の感触とかいい匂いとかその他もろもろでかなり嬉しいのだが。

……いや、それをいうのなら俺はいまとても最高の場所にいるような気がする。右になのは、左にフェイト、ヴィヴィオをだっこし背中にははやて。間違はなく、俺以上に幸せな人間はこの世にいないだろう。

幸せだ

「俊、だいしゆきホールド――」

「もういいから! ホールドはもういいから好きな飲み物選べ!」

「あ、お金は自分で出すからええで。んーつと、それじゃカルピスとっつけてくれへん?」

「あいよ。ヴィヴィオはどれがいい?」

「んーつと……これ！」

はやてご所望のカルピスとヴィヴィオが選んだオレンジジュースを一つずつ取り代金を払いそれぞれに渡す。

「あれ？ 俊くんは自分の分買わないんだ。 コーラだけどいる？」

「くれんの？ サンキュー」

「あ、飲ませてあげる。 はい、どうぞ」

口をつけたばかりのコーラを、そのまま俺の口にあてがいゆつくりと傾ける。 強い炭酸をがんがん流し込んでくるのでかなり咽喉が辛くはあったが、それよりも嬉し

さのほうに勝っていたので何もいわずに飲んでいく。 やがて口からボトルが離される。

「おいしかった？」

「なのはが飲ませてくれるならなんでもおいしいよ」

「知ってる。 あ、でもこれでわたしが飲んだら間接キスだね？」

「おいおい、いまさらそんなこと気にする仲じゃないだろ。 間接キスなんぞ百単位でやってるだろ」

「いわれてみればそうだね。 ……うん、小さい頃からずっと間接キスとかしてるのかあ……」

「うーん、俺からしてみたら当たり前前な感じだけど、ぶっちゃけどうなんだろうな？」

「間接キス？ そうだねー……なんか特別な関係とか、そんな感じじゃない？ ただの異性同士の友達ならやらないと思うよ」

「ということは、俺となのはは特別な関係か」

「特別な関係だね。 まあ、ご主人様とペットだから特別な関係なのかな？」

「かもな」

二人して肩をすくめる。 特別な関係か……。 うん、特別な関係だな。

命を預けることができる——そんな関係だと思っ

「俊、私のもあげようか？」

「いや、大丈夫だよ。 なのはので充分」

「そうそう、『特別な関係』のわたしだけで充分。ね？ 俊くん？」  
嬉しそうに手を重ねながら俺に振ってくるのは。

「ごめんなのは——」

「俊……。 間接キスよりもキスしながら口に含んだ飲み物を飲む行為のほうが色々——」

「ヴィヴィオがみてるから!? ヴィヴィオが俺の胸の中でガン見してるから止めて!？」

「助けて——」

首を90°向けさせるはやてはそのまま口に含んだカルピスを俺の唾内に流し込もうとする——が、俺の声を聞きなのはとフェイトが振り向くといつもたやすく首の拘束を解いた。

「どしたんなのはちゃんにフェイトちゃん？」

はやてが素知らぬ顔で首を傾げる。 どうしてこいつはそんなにネコを被ることができるんだ……？ それに——はやてのさっきの行動のせいで顔が熱い。

なのはは俺の顔をじっと見つけると——ふいにおでことおでこをくっつけてきた。

「うくん、やっぱり俊くん熱ある？ どうもいつもよりふらついてる感じだったけど」

「へ？ そ、そうかな？ 俺はあんまりそんな感覚はないんだけど」

「俊くん、自分を信じちゃダメだよ」

「遠まわしに俺のことバカにしてる？」

「バカにしてる。 でも心配もしてるよ？ 俊くんが風邪ひいちゃったら……いや、俊くん風邪ひいたほうがいいかもしれない。 この頃、他の女の子にちよっかいかけて

るし、看病というだけで独り占めもできるし……」

「な、なのは……？」

「へっ!? いや別に好きだからそんなこといつてるわけじゃないからね！ ただ……ペットの看病はご主人様がするものでしょ!？」

ずいところちらに詰め寄ってくるのは。 顔が至近距離にあり、あ

と数センチで触れ合う距離だ。

「う、うん。俺もそう思うよ」

そういうと、なのははふと何かに気付いたようにそそと顔を遠ざけた。そして咳払い一つ。

「ま、まあ俊くんにはわたしがいるから大丈夫。——わたし以外にはいらぬから」

何故だろう。最後の言葉を聞いた瞬間、背筋が急に寒くなった。そんな俺の感覚を知ってか知らずか、なのはは笑顔で俺にひつつく。

「ほらほらパパ。早くいこうよ。次は綿菓子でしょ？ 約束もあるんだし」

「ああ、一緒に食べる約束か。覚えてるよ。それじゃヴィヴィオ。わたしがし食べにいくぞー！」

「わーい！」

「ヤッホー！ ワタガシダー！」

膝でガーくんもはしゃいでいる。そっか、ガーくんも綿菓子食べたかったのか。

☆

「えーつと、綿菓子を四つ。あ、キャラ袋もあるんですか。それじゃこの魔法少女ので」

「……俊くんって、魔法少女大好きだよね」

「俺は被害者だと思う。お前らみたいなかわいい女の子たちが魔法少女だぞ？ それをずっと見てたんだ。自ずと魔法少女が大好きになつても不思議じゃないと思うんだよね」

「……わたし達が俊くんをダメにしたんだね……」

まあ、なんとなくだけでもどんな人生を歩んでも魔法少女が大好きになつていたと思う。

「それより、そろそろ射的やよーよー釣りも回らないか？」

「そうだね。そろそろ回りたかな。ヴィヴィオも焼きそばとたこ焼きと綿菓子で大分お腹いっぱいになっただろうし」

なのはと綿菓子の袋を半分ずつもって少し離れた所でまっている

フエイト達の所まで歩いていく。

「今日はヴィヴィオ中心のはずなのに、なんか他の面々が前に出ていくような気もするよな。俺の思い違いならいいんだけど」

「きつと浮かれてるんだと思うよ。はやてちゃんやヴィヴィオもテンション高いし。お祭りだし、楽しいから気持ちはわかるんだけどね」

「なのははどうなんだ？」

「楽しいよ。俊くんところやって歩いてとても楽しいし。俊くんは楽しい？」

「なのはと歩いて楽しいよ」

そういうと、なのははふと立ち止まりしばし考えた後——おもむろに自分用の綿菓子を取り出し袋を開け、中にはいつてる綿菓子をひとつまみするとそれを俺の口にもっていった。

「あの……これはなに？」

「餌付け」

まさかとは思っていたけど、本当に餌付けとは思っていなかった。いやでも……これはこれでアリなんじゃないだろうか。だって

俺ペットだし、犬だし。

「あーん」

「あーん」

なのはの声に反応してぱくりと綿菓子を食べる。しかし勢い余ってなのはの指まで食べてしまい二人とも固まり、なんとも微妙な空気が出来上がってしまった。

ちゅぽんという音をたてて口から引き抜かれたなのはの指。なのははそれを見つけた後、自分の口にぱくりと入れそのままちゅぽちゅぽと舐めまわす。

「えへへ、これも間接キスになるのかな？」

「ははっ……そうなのかな？」

答えに窮し、曖昧に笑う。何故だか、この頃なのはも少し変わってきたような気がする。なんというか……恋が実りそうな気がする。

そこで携帯が鳴った。言い換えるなら——呼び出しを喰らった。「悪いなのは。どうやら今夜の裏の主演に呼ばれたみたいだ。——行ってくる」

「うん。 行ってらっしゃい」

フェイトに自分が持っていた物を渡すとそのまま待ち合わせの場所に走っていく。

「あ、まって俊くん！」

「ん。 どうし——!？」

声につられて後ろを振り向くと——なのはが俺の顔を押さえてキスをしてきた。

それは昨日はやてとやった舌を絡ませるようなキスではなかったのだが、綿菓子の甘い味となのはからはらほんのり香るいい匂いと——そして大好きな人という要素が合わさって俺の顔が爆発した。

衆人観衆の中、なのはははゆっくりと唇を離し、照れながらいった。「お祭りだし、綿菓子の約束もあるし、ちよつとくらい素直になってもいいかな、なんて思つて。 まあ……かなり恥ずかしいけど。—— 行ってらっしゃい、あな……俊くん」

言い直すなのは。 その顔は俺と同じように爆発していた。 だからこそ、俺も照れながらであるがちゃんと答えた。

「いつてくるよ——なのは」

なのはに軽く手を振って、今度こそ集合場所に歩みを進める。 それにしても……綿菓子の約束ってそういうことだったのか……。

余韻に浸りながらも、気を引き締めていくことに。 どうやら、お祭り描写はここで終了のようだな。

あ、ついでに先程見つけたお面屋でアレを買っていこう。

丁度——俺に似合うものがあつたんだよな。

☆

祭囃子が遠くのほうから聞こえてくる。

ここは海鳴の神社。 遠い昔に、魔法少女がデバイスを起動した場所である。



そこで男は一人——トイレをしている幼女を眺めていた。

幼女のトイレが終わると、男はおもむろに立ち上がりその幼女に声をかける。

「お嬢さん、パンツ落としましたよ？」

「はう!？」

「お嬢さん、パンツはきましたね？」

「ひう!？」

「お嬢さん、パンツ見せてくれませんか？」

幼女に迫る男。その男の背中を誰かがとんと叩く。男は訝しげながらもそれに振り向いて絶句した。何かを言おうとする男は、背中を叩いて男は有無を言わず拳を繰り出す。クリーンヒットして目に涙をためる男。そんな男を無視する形で、もう一人青年が幼女のほうに近づいてきた。

「ごめんなー、かなちゃん。翠屋のお兄ちゃんだけど、俺のことわかるかな？」

「お、おにいちゃん……?」

「うんうん、お兄ちゃんだよ。ほら、此処は変態がいるからあそこのお姉さんと一緒にママの所に帰ろうね? もうここでおしっこしたらダメだよ。神様が怒っちゃうし」

青年がそういうと、幼女は黙ったまま頷いた。そして青年に抱っこされる形で持ち上げられ青年の手から綺麗な女性の手に渡る。

「それじゃウーノさん。お願いしますね」

「わかりました」

ウーノと呼ばれた女性は幼女に明るく話しかけながらその場を後にした。

それを見送った後、青年は男のほうを向いた。

「スカさん、いまのはヤバイって。いや、ヴィヴィオにアレなことをさせようとした俺が言えることでもないけどマジでないって。

おっさん落ち着け! 気持ちちはわかるがいまスカさん殺したらなんのために此処まで来たのかわからないだろ!」

青年は隣でいまにも動き出しそうな男を羽交い絞めにする。

「ふふつ、ふーっはっはっは！ ひよつとこ君、どうやら私はキミみたいにはなれないみたいだよ。——ほんと、全員がキミのようであつたらいいのにね」

「止めてくれスカさん。 人類全員が俺とかリンデイさん辺りが発狂して大変なことになる」

「俺は嬉々として皆殺しにしていくけどな」

「お前段々局員の言うべきセリフじゃなくなってきたぞ」

「ふつ、まあいい。 座つてくれたまえ。 この話しは少し長くなりそうなのでね」

スカリエツティはそう言つて、二人は石段に座らせる。 そして自分分は立ったまま話し始めた。

「ひよつとこ君、キミは薄々感じ取つてるかもしれないけど、私は人間ではない。 そして、戦闘機人という存在を生み出した次元犯罪者だ。 その正体は最高評議会と

いう事実上、管理局を裏で操つている存在から生み出されたモノだよ。 コードネームは“アンリミテッド デザイア無限の欲望”。 キミはそんな存在ともにも過ごしていたことになるのだよ」

男はそこで一旦言葉を切るが、目の前の二人はなにも喋る様子がないのでそのまま続ける。

「キミの友人であるフェイト・テストロッサの母、プレシア・テストロッサとも知り合ひさ。 あの件については少しではあるが、私も協力したからね。 ひよつとこ君、何故キミにこんなことを話すと思う？」

「知らん」

「だろうね。 キミだけには話しておきたかつたのだよ。 私を変えてくれたキミにはね。 これはもう数年も前のことだ。 無限の欲望である私は毎日毎日、知的好奇心

に満ち溢れていた。 どんなことを——どんな違法をしようか考えていた。 しかし、それと同時に、それを考えると心の中の熱が急激に冷めるような感覚に陥っていた。 自分でもわからなかった。

ウーノに聞いてもわからないと答えるばかりだ。来る日来る日も、その謎に向き合った。私に解けないものなどないのだから。だが——一向にわかることはなかった。そんな時だ。私は何かが欠け、何かが判らないまま、ミッドチルダの臨海空港の火災でキミを見かけた。その時だよ。答えはすぐにわかった。簡単だった」

火災で泣いている子どもたちを元気つけているキミをみたときに、自分の欲望に気付いたのだ。

「私は——キミのような強さが欲しかったのだ。泣いている子どもを一瞬で笑わせ、絶望している人を勇気づけ希望に変え、魔力もないのに火傷するかもしれないのに、市民でありながら恐れることなく火災の中を人々の士気を高める——エースオブエースやエリート執務官、SSランク魔導師ですらもしかしたら敵わない——そんな強さを私はキミにみた」

「よしてくれスカさん。空っぽの俺をここまでにしてくれたのは、いまあんたがいった奴らだぜ？」

「ふっ、キミがそれを望むならそういうことにしておこう。けど、全てが遅すぎた。私の手は塗り潰されていた。最高評議会、レジアス。次元犯罪者の私が真つ当な人生を歩めるなんて思っていないさ。けど——私はどうしてもキミと会って話が出なかった。そしてキミと会って、ますます思った。こんな風に人生を過ごしたい。けど……それは無理なことだった。当たり前だ、キミと私とは住む世界が違うのだから。ひよつとこ君。キミがはじめて私の家に来たとき、ガジェットドローンを破壊したのは覚えているかい?。」

「すまんスカさん。料金ならおっさんが——」

「俺はお前のサイフじゃねえんだよ」

あわや喧嘩を始めるかと思った二人をスカリエッティは制した。

「いや、いいんだ。あれは元々、二人の内どちらかに壊してもらう予定だったからね。それでも私は科学者でね、科学者とは難儀な性格で自分で作ったものを壊すこ

とに多少の抵抗はあるのだよ。だからこそ、私はキミを利用したのだ。 さあひよつとこ君。 こんな私を軽蔑するだろうか？」

「スカさん……。 本当に壊してよかったんだな？」

「ああ、よかったさ」

その言葉を聞いて、俊は盛大にほつとしたような溜息を吐き、快活に笑いながら答えた。

「よかったー！ あの特でさ、いつスカさんから請求書くるかビクビクしてたんだよな。 いやー、よかったよかった。 壊しても大丈夫だったのね」

「……怒らないのかね？」

「なーに、利用されるのには慣れてるさ。 そんなもん気にすんなって！ それより話聞かせてくれよ」

急かす俊にスカリエツティは聞こえないように小さく呟いた。

やはりキミはかわった男だ

「ではもののついでだ。 最高評議会についても軽く話しておこう。 まだ世界に平和が訪れていなかった時代に三人の人物が時空管理局という組織を作った。 その後、世界は時空管理局のおかげで平和になりつつあったのだが、人の一生とは短いものですねに三人の寿命はくることとなった。 しかしながら、三人ともとても心配性であったがゆえにその後の未来のことまで心配しだしたのだ。 そして三人は一大決心をして——自らの体が朽ちても大丈夫なように脳みそだけを生かしたい今の管理局に留まっている。 かなり適当ではあるものの、大体のことはわかったと思うよ。 この最高評議会は地上本部のトップであるレジアス・ゲイズともつながっている。 彼だつて、ただ地上を守りたいだけのはずなのにね……。 ほんと、キミのような人間ばかりだったらどれほどよかったことか」

「スカさん……」

俊が何かを言おうとした矢先、俊の隣にいる男が先に声を発した。

「スカリエツティ。 俺もこいつもお前の思い出話を聞きにきたんじゃないねえんだ。 さつさと本題に移れ」

「な……!? てめえ！」

「なんだひよつとこ。お前はこいつの思い出話を聞くために大事な人達との楽しい時間を投げてまで此処にきたのか？」

「そうじゃねえけど……！でも言い方つてもんがあるだろうが！」

俊と男が立ち上がりながら互いに胸倉を掴む。

一発触発の雰囲気の中、それをスカリエツティが止めにはいる。

「二人ともまってくれ！いや、これにかんしては私が悪かった。

つい話し込んでしまったよ。ひよつとこ君にも悪いことをした。

キミの幸せな時間を奪ってしまったのだから。そうだね、そろそろ本題に入るとしよう」

スカリエツティは一度大きく深呼吸をして笑いながら二人に向けていった。

「私は自首することにしたよ」

晴れやかな笑顔で言い切った。

俊は啞然とし、男は無表情。そんな中、明るく振る舞いながらスカリエツティは続ける。

「なに、いますぐにというわけじゃない。期日は決めてある9月1

9日。それまでに私はこの脳を使ってできる限りの技術を残し、管理局に渡すつもりだ」

「……それがお前なりの出した答えか。悩んで悩んで悩みぬいて出した——後悔しない答えなんだな？」

「……後悔しないといえば嘘になる。だが——それでも私は後悔し

ないだろう。技術を管理局に渡し——それと引き換えに私の大事な娘たちの安全を保障させる」

ギリリ……とスカリエツティから歯ぎしりが聞こえてくる。ぶ

るぶると震えるスカリエツティの体。

「どうしようもない私のことを、”ドクター”と呼んで笑ってくれるんだ。失敗して落ち込んでいるときも皆で励ますために私のことを笑わせてくれるんだ。どんなときだって……！私の娘は……

私を守ってくれるんだ……！何一つ、父親らしいことなどすること

ができなかった私を父親のように慕ってくれるんだ……！ 私だけで十分だ……！ 子に罪を背負わせるほど無能な大人は存在しない……！」

スカリエツティは涙ながらに男の肩に両手を置き訴える。

「不躰な願いだということとはわかって……！ それでも、それでも聞いてほしい……！ 私がいなくなった後……どうか——私の娘たちを女の子として幸せで真つ当

な人生を送らせてくれないだろうか……！」

男はその悲痛な叫びを、魂込めた叫びを聞き——スカリエツティの両手を外し真剣な表情で言い切った。

「幸せになる権利は誰にだって存在する。それが例え戦闘機人であつてもだ。そして俺は——市民の安全と安心を守るのが役目だ。スカリエツティ、お前も市民だ。その想い、その叫び、確かに受け取った。安心しろ、お前の娘たちは俺がなんとかしよう。この命に代えても貴様の願いは果たす！」

その言葉を受け、スカリエツティは涙を流しながら感謝の言葉を口にする。

そしてそのまま、俊のほうを向く。

「ひよつとこ君、キミにも色んな迷惑をかけてきた。今日だってそうだ、私の我儘で幸せな時間を奪ってしまった……。ただ、どうしても私はキミにこの言葉を送りたかった」

止めどなく溢れ、乾く気配のない涙を前にしながらスカリエツティが不細工な笑顔で——されど最高の笑顔で俊に言葉を送る。

「——遊んでくれてありがとう」

俊はただ必死に唇を噛み締める。言葉を発しないように皮膚を切り裂いてもなお噛み締める。

「キミはやっぱり強い子だ」

そんな俊をみてスカリエツティは笑い、自らの白衣を脱ぎ俊に着せる。

そしてそのまま、歩き去る。自首するために、娘たちのために茨の道を歩いていく。

「までよスカさん!!」

そのスカリエッツィの背中に俊はある物を投げつけた。男はそれに驚き、拾ったスカリエッツィすら声を失った。そんな中、俊は指を突き付けながら言い切る。

「白衣はむちむちな女性にしか着せないタイプなんだよ。こんなもん要らないから貰わねえ。ただ——貸してはもらうぜ? 代わりといっちゃなんだが、それを持って

てくれないか? 大事な物だ。傷つけるなよ?」

そうして俊は——スカリエッツィが持っているひよつとこのお面を指さした。

「9月19日に返してもらうぜ?」

「ふふつ、ああ9月19日に返すとするよ」

今度こそスカリエッツィは闇へと消えていった。

後に残るは男が二人。

しばし無言の空気が漂った後、男が俊に声をかける。

「ゲームオーバーだ、ひよつとこ。スカリエッツィは俺とお前の選んだ道とは違う、第三の道を自ら選んだ。こうなると俺たちに来ることはなにもない。ただだ

だ、月日が過ぎるのも待つだけだ。ひよつとこ、悔しいのはわかるが——現実ゲームじゃない。お前もそろそろ分かれ」

「おっさん、現実ゲームだ」

「あ?」

「女がいて男がいて、ご都合主義が起こり、理不尽なことが起きる。

人が死に人が生まれ、泣き、笑い、怒り、悲しむ。現実はとっても高度なゲームだ。一人一人が主役なんだ」

「はっ、だからなんだ? それで何ができる? お前に何ができる?」  
「理想を騙し、現実叩き落とすことができるさ。おっさん、俺は間違ってた。攻略できなくて当たり前だったんだよ、このゲームは」

カードが全て出揃ってなかったからだ。

俊は自信満々に言い切る。

「おっさん、いまなら特等席で俺の舞台をみせてやるぜ? どうだ、こ

の勝負乗らねえか？」

「……お前の目的がなんなのか分かるまでは乗らねえ。 目的はなんだ」

目を細める男に、俊はチツチツチと指を振り——月をバックに宣言する。

「道化師<sup>ビエロ</sup>が求めるのは——いつだって最高の笑顔だろ？」

俊はピエロの仮面を被り、男はタバコに火をつける。

そして交わすハイタツチ。

今宵——道化師<sup>ビエロ</sup>の舞台は幕を開けた



86. 曲芸1

帰省から——高町家からミツドの家に帰ってきた俺は、一日置いておっさんの所へ足を運んだ。家にはなのはとフェイト、そしてヴィオとガーくんがいるので下手な会話をしようものなら一瞬で勘付かれるからである。とくになのは。あいつに知られたらなんとも大変なことになる。

現在は交番の奥でおっさんと顔を向かい合わせて——二人とも舌うちをしていた。

「おっさん、お前もうちよつと権限強くないのか?」

「ならねえよ。レジアス中將は地上のトップだぞ? 早々会えねえ」

「といつても、俺は一般市民だから会うことは厳しいしな……」

おっさんの権限を過大評価していた。この雑魚め。

「ま、しょうがない。予定よりかなり早い、あいつに協力してもらおう」

「あいつ?」

「はあ……。しょうがないおつむが可哀相なおっさんのためにも分かりやすく教えてやる。——局内で一つだけ、異質な部隊があるだろう?」

そう言うと、おっさんは得心がいったように掌をぽんと叩いた。

「もともと、俺とおっさんだけで出来るとは思ってないさ。これでも、出来ることと出来ないことの区別はついてるつもりだしな。だが俺やおっさんと違って、はやては……色々と厳しいかもしれない。もしバレたら出世の道は絶たれるだろう。だから無理強いはいないつもりだ。明日直接会って話してみる」

「まあそれがいいな。ところでだ、ひよつとこ。お前は具体的に何をしようとしているんだ?」

俺が立ち上がり帰ろうとすると、おっさんがそう聞いてきた。そういうえば、具体的な案はまだ話してなかったなあ。

「それは全員が揃ってから話すよ。準備で時間はかけられないし、

早くても明後日には必要な人物を集めるつもりだ。それが出来てから、今回のことを話すよ」

おっさんにそう言い残して交番を去る。

まずははやてに電話だな。

☆

翌日

「フェイトさん、ここの問題なんですけどヒントを教えてくださいませんか？」

「うんいいよ。えーつと……、ここはまずこれを考えてからこつちを解いていくの。そうすると、ほら？　できたでしよ？」

「なるほど！　ありがとうございますフェイトさん！」

「ふふつ、試験頑張つてね！　そのために私も出来る限りのことはするから」

珍しくティアが真面目に何かを解いているとおもたら、フェイトちゃんに問題をみせていた。ティアも熱心に何かをできたんやなあ。いや、なのはちゃんのことなら一生懸命なんやけど……。

「はやて、これ地上本部のレジアス中将から。なんでも視察に来るとの旨だけど……どうする？」

「アイドル部隊視察してなんになるっていうんや……。まあええけどな」

「でもよー、レジアス中将つてかなり悪い噂を聞いてるぜ？　六課のリーダーははやてなんだし……何か言われるかもしれない」

「大丈夫やつてヴィータ。そもそも管理局内は六課のことを戦闘力としていれてへんし、いくらなんでもいわれへんやろ」

「だといいいけどなあ……。まあ、わかった。返事出しとくよ」

「ありがとな、ヴィータ。と、ところで……俊はみいへんかった？」

「あ？　いや、見てないけど。なにか用事でもあるのか？」

「ちよつとゲームのことにかんして、俊がどうしてもわたしに聞きたいらしくて」

ちらりと時計を見る。既に昼食は済んでおり、他の面々は細々とした書類仕事の最中や。ティアだけがなにやら違うことやつとる

みたいやけど……フェイトちゃんが監修・監督しとるから大丈夫やろ。それよりも昨日の俊の電話、どういう意味なんやろ？

昨日、深夜自室でゲームをしてると携帯のバイブが鳴りだした。

ディスプレイに表示されていた名前は俊。こんな時間にどんな用なんか、それを知りたくて電話を耳に当てると俊は一言、

『大事な要件があるんだ。明日会って話したい。時間を作ってくれないかな？』

そう言っつて、わたしの返事を聞くとそのまま切っつてしもうた。もうちよつと話したかったんやけど、まあそこはおいといつて——

「俊もついに食べられる覚悟ができたんかな？」

だとしたら、一日中犯して——

そこまで考えて、携帯が振動していることに気が付いた。どうやら休憩室でまತ್ತるみたいや。

あ、録音機もつてこ。

☆

わたしが休憩室にくると俊は簡易個室部屋で私のことをまತ್ತっていた。周囲に誰もいないことを目で確認し、手招きして呼び寄せる。

それにつられて個室にはいる。

「俊つてやつぱ大胆やな……。でもな、ここだと声を上げることができへんで？ それに動くと聞こえて——」

そこまですつて、口を閉ざす。わたしの目の先、俊はいつにもまして真剣な目をしていた。闇の書事件でみた、あの目をしていた。

あの目をよく知つてゐる。わたしたち隊長陣はよく知つてゐる。

あれは——俊が一つのことをやり遂げると決めたときの目。

そんな目をした俊が、わたしの両肩に手を置く。

「はやて。これからいうことは、お前にとつて——お前の今後の人生において、かなり不利なことになる話だ。だから無理強いはしないし、強制もしない。色よい返事をもらえるまで付き纏つたりもしない。ただ——これでもし、お前が俺にとつての嬉しい答えを出してくれて、そのせいでお前の局員として人生が閉ざされたら——俺が全ての責任を取る」

……録音しておいて正解やった。

素直にそう思った。

「それでだ、はやて——」

「ええよ」

「祭りの日にな——え？」

「だからええよ。協力してあげるっていつてんねん。責任取ってくれるんやろ？」

「あ、ああ……責任取るけどさ」

「んじや、それでええよ」

わたしの言葉を聞いて、俊はぼかんとした顔をしている。ああ……こういう啞然とした顔も捨てがたいわなあ。

「いやでも、……まあいいか。まずは必要な人物集めが先だ。はやて、ありがとう。お前のこれからの人生、俺が責任を持つよ」

俊はそういつて、いそいそと個室を出て携帯電話で誰かと話しながら帰って行った。ほんとうに……わたしと会話するためだけにわざわざ六課にきたんやな。

「あんな真剣な顔みるの、いつぶりやろうな」

ついバインドで縛りそこなったけど、あんな顔されたら犯すに犯せへんやんか。

まあええか。これから俊には責任を取ってもらうんやし。

☆

聖王教会にあるカリムの自室には二人の男性と一人の女性が座っていた。そして女性の傍らには、メイドのように控えている女性が立っていた。

男の一人は上矢俊、そしてもう一人の男はクロノ・ハラオウン。

クロノの横で座っている女性は、此処聖王教会のトップに君臨するカリム・グラシア。傍らに控えているのはシャツハ・ヌエラである。

俊は三人と向かい合う形で座りながら口を開く。

「まず先にお礼をいわせてくれ。クロノ、カリムさん、忙しい中時間を作ってくれてありがとうございます」

丁寧にお辞儀をする俊をみて、三人を石にでもなったかのように固まった。しかし、クロノだけはいち早く俊のその行動に合点がいったようで、いつもの表情に戻り

大人しく俊の言葉をまった。

「普段なら世間話でもしたいのだが、何分急を要する事態なんぞな。あまり話すことはできそうもない。だから手短かに話す。よく聞いてくれ」

そして自分がスカリエツティから祭りの日に聞いたことを分かる範囲で省きながら話していく。最高評議会のこと、レジアス・ゲイズのこと、そしてスカリエツティが自首することを。

それに黙って耳を傾ける三人。

「タイムリミットは9月19日までだ。いまは一分一秒でも時間が惜しい。単刀直入に言おう。クロノ、カリムさん。俺には二人の地位と人脈が必要だ。手伝ってくれないか？」

その言葉を受けて、クロノは溜息を吐く。俊のほうをみて、指で手を出すように合図する。

不思議がりながらも手を前に出す俊。そこにクロノは勢いよく自分の手を叩きつけた。

痛がる俊をよそに、クロノはきつぱりと言い切る。

「はやてよりも先に僕を頼れ。俊、僕はお前の仕出かすことにいつも頭を抱えてきた。既に僕の中では俊⇨諸悪の根源といってもいいくらいだ。だけど——それと同じくらい評価もしている。とくに、その覚悟を決めたときの顔は応援したくなるほどだ。本局のことにかんしては任せてもらおう。僕と騎士カリムでどうにかする。」

俊は好きなように指示をだせばいい」

「……悪いな、クロノ」

「そのかわり、失敗したら僕がお前の首を飛ばす。おそらく、俊がやろうとする行動はそれくらいリスクが伴うぞ」

真剣な表情で、真剣な顔つきで、俊に確認を取るクロノ。そして

また、俊も真剣な表情で口にする。

「悪いが死に場所は決めてるんでね。それに——勝てる勝負しかない性質なんだ」

その言葉に、クロノは満足そうに頷いた。

☆

「あー、きつつ。バイクのガソリンも給油しないといけないし、やることがありすぎてまいっちゃうぜ」

「ははっ、あの俊からそんな言葉を聞けるとは思ってみなかつたよ。

はい、麦茶」

「おーサンキュ」

場所は無限書庫のとある一角。そこで俊とユーノは立ち話に興じる。傍から見たらただの雑談をしているようにしか見えないのだが、間近でその内容を聞いたら驚

くものである。何故なら、管理局の最重要ともいえる場所と存在を話しているのだから。

俊が聞いたことを洗いざらい話すと、ユーノは顎に手を置いて喋り出した。

「なるほど。つまり僕の力が必要だということだね?」

「理解が早くて助かるよ。俺が欲しいものは此処にしかなくてさ。

どうしてもお前にも手伝ってほしいんだ」

両手を合わせて軽く拝む俊。先程のクロノやカリムよりもかなり軽い印象を覚えるがそれもそのはず、俊は目の前にいるユーノから放たれる返事を知っているからで

ある。だからこれも一応の形式上だ。

「いいよ。他ならぬ俊の頼みだしね。なんせ、僕と俊はともに抱き合って同じ布団で寝た仲だもん」

「9歳の頃の話だろ」

「ところで俊。このネコミミをつけてみないかな?」

「つけねえよ。なんでお前は両方いけるケモナーになっちゃったんだ」

「仕込んだのは俊のくせに……」

「気持ち悪い声をだすな!？」

他の奴らに誤解されるだろ！　そういつて迫るユーノに蹴りをいれ俊は無限書庫を後にする——直前、後ろからユーノに声をかけられた。

「俊、後ろは任せて。　だから前は頼んだよ」

「ん。　まあ任せろ。　お前こそちんたら探してたら老若男女男女平等顔面パンチ喰らわせるからな」

「だったら俊がへマしたらなのはに俊が浮気してるって言いつけるさ。　9歳の頃から才能があつたのはなら俊は一生部屋から出られなくなると思うな。　アレは傍からみたら軟禁みたいなものだったし。　9歳の時点で軟禁とは恐れ多いよ」

「なのはと一緒にいることができるなら監禁されたいくらいだぜ。」

ただし、この件が終わつた後だけだな。　んじゃ、明日電話するから」  
ひらひらと手を振りながら後ろを振り向くことなく俊は無限書庫を今度こそ去って行つた。

☆

俊が無限書庫や聖王教会、そして六課を回つた翌日。　ミツドのがある交番の奥には普通ならばありえない人物たちが座つていた。

六課のリーダーである八神はやて、無限書庫の司書長であるユーノ・スクライア、提督の地位をもつクロノ・ハラウン、そして時空管理局とも深いつながりとパイプをもっている聖王教会のリーダー、カリム・グラシアである。　その四人と男をみながら俊は喋る。

「まずはじめに、これから俺がやることについて話そうと思う。　勿論、皆は話を聞いて納得いかなければこの場を去ってくれて構わない。　では前置きはこれくらいして話そうか」

一度区切り、俊は真剣な雰囲気で凜と言葉を放つた。

「やるべきことはシンプルで簡単だ。　たった二つしかない。　陸と海の関係修復及び最高評議会を中心とした継承式。　これが俺のシナリオだ」

5人とも、俊の言葉に口を挟まない。

「いいか、よく考えてみる。　時空管理局を設立した偉大な先人たち

は内部でいがみ合ったり、邪魔をしたりすることを望んでいると思うか？ 同じ目標を目指す者同士、どうしてそんなつまらないことをする必要があるんだ。効率が悪いにもほどがある。そして次に最高評議会だ。その肉体が朽ちてなお、現世に留まり続ける先人たちについてだ。俺はこの者たちを楽にしてあげたい。心配なんだよ、最高評議会は、愚直なまでに世界のことを心配なんだ。そんな人達が内部でいがみ合ったりする奴らに世界を任せると思うか？ 断言する。絶対にありえない。しかしながら、ではどうすればいいのか？ 簡単だ。管理局内にいる全員を同じベクトルにもつていけばいいだけの話だ。違法合法問わず、局内にいる者全てをだ。最高評議会を縛り付けているのは俺たちだ。期待に応えることができてないのは俺たちだ。たった一度でいい。管理局を纏め上げ、最高評議会からタスキを奪う。突き付けるんだ、証明するんだ。俺たちは大丈夫だと、後は任せてくれと。いままで管理局のために、平和のために頑張ってきた偉大で敬愛する先人の後を俺たちが継ぐんだよ。途方もない時間を過ごしてきたことだろう、幾千の案を浮かべそれを実行してきたことだろう。もしかしたら狂っているかもしれない。いや、きつと狂っている。狂わない存在なんていないのだから。もう潮時なんだよ、もう限界なんだよ。脳に未来を歩ける足はついてない。未来を歩くのは俺たちだ！」

力強く拳を机に叩きつける。

誰も何も言わず、沈黙だけが空間を支配した。俊はそれを肯定と受け取り、告げる。

「この世にできないことは存在しない。攻略するぞ、管理局」  
全員が頷いた瞬間だった。



## 87. 曲芸2

「しかし俊。お前のやることはわかったが、具体的になにをすればいいのだ？」

「ん。それをいまから言っていくよ。まずお前らを選んだのには色々理由がある。管理局内のアイドル部隊である六課のリーダーはやて。お前にはかなり面倒な仕事してもらうことになるが大丈夫か？」

「ええよ。ところで俊。わたし最高評議会のことか初めて知ったで」

「昨日お前が聞かなかつたからだろ……！」

ぽけつとした顔を浮かべて首を傾げるはやてに俊はわなわなと拳を震わせながら答える。他の面々は苦笑する。ちなみに、いまの俊ははやてとユーノという見方を

変えれば危ない二人が両隣に座っていることにもなる。ユーノのほうはまだ自分で抑えることができるが、はやてが抑えられるか不安である。

「ま、まあいいや。それでだ。皆には役割分担を綺麗に分けてもらう。まずクロノ、お前は本局のことを頼むことになるが大丈夫か？」

「言ったはずだ。お前は好きなように指示を出せと」

「頼りになるよ。そしてカリムさん。カリムさんには聖王教会の権限を遺憾なく発揮してもらおうことになりそうですが、大丈夫でしょうか？」

「ええ、大丈夫ですよ。あなたの考え方、とても面白いと思いますし個人的にも手伝いたいと増々思いました」

「ありがとうございます。それでは、クロノとカリムさん。この二人に本局のことはお任せします。次にユーノ。お前には管理局設立から今までの歴史、事件、全ての情報を調べてもらう。いけるか？」

俊の疑問にユーノは力強く答える。

「言ったでしょ？　後ろは任せてっせき。　時間はかなりもらうと思  
うけど、それでいい？」

「問題ない」

「ちよつと待て俊。　何故そのデータが必要なんだ？」

ユーノと俊の会話にクロノが割り込んでくる。　俊はユーノに向  
けていた視線をクロノに向け、

「知ることは大事なことだよ。　それに——半端な知識と半端な覚悟  
で俺は最高評議会を送ろうなんて思つてないさ。　そんなことした  
ら、先人たちに失礼だろ？」

ふんわりとクロノに向けて笑う俊。　クロノは俊のその笑みを受  
けて肩をすくめる。

「……変わらないな、そういう姿勢だけわ」

「生き方は変えられるけど、生き様までは変えれないさ」

互いにニヤリと笑い合い、俊はそのまま話を続ける。

「おっさん、お前はなにもしなくていいぞ。　むしろするな」

「ここまでできて戦力外通告はこたえるぞ、ひよつとこ」

バツの悪そうな顔でひよつとこのほうをみる男。　そんな男の顔  
をみて、俊は慌てて言い繕う。

「あー、俺の言い方が悪かった。　おっさんにはどうしても活躍して  
もらう所があるんだよ。　権力的には雑魚のおっさんだが戦力的に  
は申し分ない。　お前にはナカジマ夫妻とともに暴れてもらわない  
と困るんでな」

「……ほお。　それなら俺と同じくらいの適任がいる。　そいつも呼  
んでおこう」

「それはありがたい。　まあ、その前にクロノとカリムさんが頑張ら  
ないといけないんだけどな」

その言葉にクロノとカリムは親指を立てることで大丈夫だと示す。  
それに頷く俊。

と、ここで全員の話聞いていたはやてが俊の袖を引っ張った。

「なー俊。　わたしはなにすればええの？」

「ん。はやてには地上本部のレジアス・ゲイズとの会談を取り付け  
てもらおう。それとナカジマ夫妻ともだ。ナカジマ夫妻のほうは  
今回の案を話して、是非とも協力の体勢にもっていつてもらいたい。  
レジアス・ゲイズのほうは俺が行く」

「レジアス中将なら……確かもうすぐ視察にくるらしいで。六課の  
ほうに」

「マジで!?!」

「うん。ヴィータから聞いたから間違いないはずや」

はやての言葉に指を鳴らして喜ぶ俊。

「丁度いい。その視察の日、俺も六課に行くよ。軽くご挨拶でも  
しとかないとな。俺の友達の友人みたいだし」

「友達?」

「ああ、友達だ。さて、こんなもんかな」

ふう……そう一息ついて俊は皆に頼み込んだ。

「俺が局員ならよかったんだけどな。悪いみんな、迷惑かける」

そう言つて手を合わせた俊に、全員ともこういった。

『おやすい御用だ』

「最後は任せたぞ、俊」

「おやすい御用だ」

クロノの言葉に俊もそう答えるのだった。

☆

「ところでさ、俺はあまりレジアス・ゲイズのことを知らないわけだが  
管理局ではどういった風に捉えられているんだ?」

最高評議会のことを調べる手前、レジアス・ゲイズを調べないわけ  
にもいかないだろう。そう思い、この場にいる全員に聞いてみたの  
だが――

「地上本部の実質的なトップであると同時に、過激武闘派だな。し  
かしながら、その身一つでトップに上り詰めた強さとそこで得た人望  
は相当なものだ。もし俊がレジアス中将を相手取るつもりならば、  
こう考えたほうがいいだろう。お前は地上部隊すべてを敵に回す  
こととなる」

「成程ねえ。 他には？」

「聖王教会や私のレアスキルのことを嫌ってるようでありますね。あまりいい印象をもってもらえてないようです。それに口の悪さも一級品です」

「……カリムさんがそこまでいう人物か。 他に——」

他になにかあるか？ そう言いかけたとき、後ろから男の声が聞こえてきた。

「レジアス・ゲイズ、私の友人だ。 上矢俊君」

その声に振り向くと、おっさんよりも若干高い身長の方が立っていた。 図体もでかい、大柄の男だ。

「えっと……」

「俺の名前はゼスト・グランガイツ。 こいつに事情を聞いてね。

協力させてくれないかな、上矢君。 レジアスを止めたいんだ。 友人として、止めないといけないんだ」

隣にいるおっさんを指さしながら真剣な表情で俺のほうをみるゼストさん。 ああ……この目、俺と同じような目をしてるな。

友達想いのいい人だ。

一歩前に出て手を差し出す。

「こちらこそお願いします、ゼストさん」

互いに握手する俺とゼストさん。 俺はそのままゼストさんを自分の座っていた席に座らせる。 俺は立ってればいいし。

「ところで俊。 レジアス中將のことだが、俊はどのように思っているんだ？ あくまで僕たちは局員としての立場でいったが、市民である俊はどう思ってるんだ？」

「俺？ そうだな……そのレジアス中將にまつわる黒い噂ってさどういうのかわかるか？ ゼストさんはわかりますか？」

俺が聞くと、ゼストさんはゆっくりと息を吐いて天井を見上げた。「レジアスを擁護するわけではない——が、あいつとて何も最初から違法に手を染めようとしていたわけではない。 ただ、世界から現実を突き付けられただけなのだ。 一向に止まない犯罪、うみに取られる戦力、それでも守りたい地上。 昔はまだよかった。 しかし年を

経るにつれてレジアスはだんだんと犯罪に加担していった。レジアスはただ守りたいだけなのだ、地上を。 どうしてこうなってしまうんだろうな……」

ゼストさんは悲しそうにつぶやいた。 友が犯罪に手を染めているんだ。 そうなつて当たり前か……。

「地上を守るために犯罪に手を染める、ねえ。 確か戦力は陸よりもうみが圧倒的で、質も違うんだよな。 あげくに戦力が上がらないんじゃないやそう考えるのもわかる気がするな」

「ひよつと……」

「たださ、どうも思うんだよね。 市民目線の俺は、レジアス中将のことを嫌いになれないらしい。 一生懸命地上のことを考えて、それで犯罪に手を染める。 きつと辛いことだと思っぜ。 もしそれで、そのことによつて、地上に危機が及んだとき——きつとあの人は後悔し自殺するかもしれないな。 俺は素直に『市民の平和を守ってくれてありがとう』 そう思う」

まつたく……もつと信用してもいいんじゃないかな？ 自分の部隊をさ。

「戦力は一日では増量しないし強大にはならない。 けど、確認することは一日で出来る。 レジアス中将の六課視察が終わり次第、皆には働いてもらうぜ」

ぱんと手を叩き、解散を促す。 さて、ヴィヴィオと楽しい楽しい六課見学といくとするか。

交番から外へ出ると長いこと話していたせいか、既に太陽は沈みかけていた。 さっさと帰らないとなのはとフェイトに怒られてしまい、ヴィヴィオは拗ねてしまう。

「なあ、俊」

バイクに跨り帰る寸前、はやてが声をかけてきた。

☆

はあ……きょうはレジアス中将が視察しにくるんやけど……ほんまに大丈夫なんかな？

「はやて、顔がニヤけてるぞ？　なんかいいことでもあったのか？」  
「んー、やつぱりバレてしもた？　なあ、ヴィータ。やつぱ俊はカツコええな」

「……あいつのカツコよさなら10年前から知ってるよ」

「そうなんやけどな。　ただ——やつぱ俊はかわつとらんかったよ」

あのと話してよくわかったことや。

☆

「なあ俊。　一つ聞いてええか？」

「んあ？　どうした？　視察で作戦の難易度が変わるんだから頼むぜ？」

「まあそこはええねんけど……。　なんで——俊はそこまでやろうとおもったん？　最高評議会とか管理局のこととか、俊には全く関係あらへんやん。　なんでこんなことやろうとおもったん？」

はやては純粹にそう思った。　はやてはずっと疑問を抱いていた。何故この幼馴染は——いきなりこんなことを言い出したんだろうと。　最高評議会のことも、レジアス中將のことも俊が率先してやろうとは思わない。　八神はやては知っている。　上矢俊が〃とつても優しく誰でも助ける青年〃ではないことを。　自分に甘く、身内に甘く——ただそれだけの男であることを知っている。

「なんでこんなことやろうとおもったん？　決意はわかった、動機もなんとなくわかった。　けど、それ以外のことはまったく理解できへんねん。　あんた、そんなに赤の他人に優しくないやろ？　他人には平気で暴言吐ける男やろ？」

バイクに跨っていた俊が頭を搔く。

「一度くらい——主人公になりたいじゃん？」

そういつて俊は笑いながら身に着けていた白衣を翻し、バイクに跨って家に帰った。

☆

まったく……。またわたしに隠し事をして、ただですむと思ったら大間違いやで？

ただ——言葉とその姿勢だけは真剣で本気やった。

「あー、わけわからなくなってきたもうちや……」

頭がぐるぐる回転する。もう考えるのはやめや。

それに、なんだか俊を見ると自分のことだけ考えていた自分はずかしゆうなってきたのもたしかや。

「わたしも今回ばかりは頑張るとしよか」

そのためには——まず午後のレジアス中將の視察を必ず成功させて次につなげることが、わたしの使命や。

六課の面々が集まっている部屋の扉を開ける。昨日のうちに皆には視察のことを話しておいた。今日くらいは——本気をみせてくれるはずや。

『あ、なのはさん！ わたしのレアアイテムいま取りましたね!』

『ふっふっふ、これも教導だよスバル。 つて、あーー!?! フェイトちゃんそれわたしのケーキ!?!』

『あ、ごめん。 てつきりティアのだから食べていいかなと』

『私のだったら食べていいなんて法則ないですよ!?!』

「……はやて、頑張れ」

「……がんばるんや、はやて……! ここまで負けたらあかん……!」

ごめんな……俊。 この視察、かなり危ない賭けかもしれへん……。

機動六課のとある一室にて、八神はやては呆れ100%の顔で自分のデスクいっぱいに広がったゲーム機をみていた。そして隣のもう一つのデスクにはポツキーやカルピス、クラッカーやビスコ、ポテトチップスにかっぱえびえんといったガールズトークに鉄板の食糧が所せましと置かれていた。はやてはその中の一つ、——携帯型ゲーム機を手を取って持ち主に見せつけながら問う。

「なのはちゃん。これはなんなん？」

「え？ はやてちゃんPSPもわからないの？ おっくれってるー！」

指を突き付けながらはやてに笑顔を向けるなのは。これでも空に愛され、誰もが憧れるエースオブエースである。管理局内では『なのは教』まで作られるほどの影響力の持ち主だから困る。ちなみにティアナもこれに所属していたりする。

そんななのはに顔をひくつかせながらもはやては一人、ぐつと我慢する。

「(落ち着くんや、八神はやて。あんただってそっち側の人間やろ？

いま限定なんや、ここは我慢せんと、あいつの戦略が水の泡になるかもしれへんし……。ここは我慢や……。)」

表面上はなんとか笑顔を作ろうと努力するはやて。しかし、そんなはやてにフェイトが追い打ちをかける。

「そんなこと言ったらダメだよなのは。はやてはほら……。脳内が結構偏ってそうだし、性の方向に」

はやてのほうをチラチラとみながらそう小声で言うフェイトに、はやては体をわなわなと震わせ、頬には怒りマークを発生させる。

「(なのはちゃんとフェイトちゃんにだけは言われたくない……。)」

二人だってかわらんやんか！ 二人が百合カップルになつてくれれば、わたしは心置きなくいちやいちゃできるのに……。もうええやん、局内殿堂入り百合カップルなんやしええやん！ これで俊の存在が知られたらあいつ殺されかねんで！」



時空管理局 理想の百合カップル 殿堂入り

高町なのは&フェイト・T・ハラオウン（10年間無敗）

いったい管理局はどこに向かっているのだろうか。

はやては盛大にため息をつき、次いでなのはとフェイト、後ろに控えている面々を睨みながら時計を指さす。

「みんな、もうすぐ地上本部のトップであるレジアス中將が六課の視察にくるんやけど……それは伝えてあったから理解できとるか？」

全員がうなづく。

「それでいまのいままで遊んでおつたと……」

「でもはやてちゃん。視察だから皆で一室に引きこもってたほうがよくない？」

「いいわけあるか！ 視察に来るいうとるやろ！ この視察で六課に何か問題があると判断されたら……」

『判断されたら……？』

はやての意味深な言葉に思わずなのは達は聞き返す。はやては全員を一度見回して——非常に残酷な現実を突き付けた。

「六課は解散ということになるで」

『本気だします！』

はやての言葉を受けて全員が握りこぶしを作りながら室内が震えるほどの声量でそう言つてのけた。ちなみに、ヴィータは一人外側で額に手を置き、やれやれと頭を振っていた。どうやらヴィータにはこれから自分が苦勞する未来が見えたようだ。

はやては全員のやる気に頷きながら、一人一人に指を突き付けながら、演説のように喋る。

「ええか。今回の視察でわたし達、六課の存続が決まってくるんや！ 心してかかるんやで！ とくに、教導は重要や！ むしろこれが本命といつても過言ではあらへん。なのはちゃん、頼むで？」

「オツケー。大丈夫だよ、はやてちゃん」

「ところでなのはちゃん、昨日の教導はなにしたん？」

「ドッチボール」

「せめて魔法使ってくれへんかなあ!？」

開始早々ぶっぱなししてくる高町教導官にはやては早くも冷や汗がだらだらである。今回の視察、一重になのはの教導姿にかかっているといっても過言ではないのだ。レジアス中將も事前に教導についてしつかり見るとのお達しがあったのではやてもそれを前提に行動したいわけだが――

「……えつとな、なのはちゃん。一応、『魔法少女』やから魔法使つてくれへんかな？ これじゃただの小学校のお昼休みみたいな感じやし」

「でもでも、魔力弾ありのドッチボールだよ？ 四方八方から襲い掛かってくる魔力弾を躲し、ときには相殺して、そんな状況の中でも相手を的確に当てていく。集中

力と周りを把握する能力が常に求められる結構ハードな教導なんだよ？」

「うっ……！ 教導のプロであるなのはちゃんがそういうんならそうなんやろうなあ……。エースオブエースやし、ここはやっぱりなのはちゃんの教導に任せたほうがええかも――」

「魔力弾を部下にブチ当てるとスカツとするよね」

「気持ちわかるけど、お願いだから教導で部下に日頃の恨みを晴らすのはやめてくれへん!? めっちゃ私利私欲のためにドッチボールしてるやん!」

しかしながら、この場にいる全員とも、普段のスバルとティアの言動と行動、そしてそれによってなのはがどれほど苦労しているのかを知っているのが新人二人を本気で庇う気になれないのであった。

そして、その他にもスバルとティアを庇う気になれない理由がある。

「はやてさん! なのはたんを苛めるのはやめてください!」

「そうです! やめてください!」

「私たち二人とも、なのはたんの魔力弾を受けることができちゃうしなんです! イクことができます!」

「教導はS Mプレイするところじゃないわああああああああああああ!!」

キレて席を立つはやてを、ヴィータとシグナムで必死に抑える。

「落ち着けはやて!? いまはこんなことしてる場合じゃないし、部下の監督をすることができなかったはやての責任でもあるんだ、今日だけでもしっかりとした教導をやればいいだろ!」

「そうですよ主はやて! 主はやてのために私もできる限りのことをしますから!」

はあはあ……と荒い息を吐きながら、大きく深呼吸をして席に座るはやて。

「と、とにかく……きょうはなのはちゃんちゃんとした教導頼むで。スバルとティアとなのはちゃんと、シグナムもいこか。その四人で教導を、後の面々は雑務を。」

ヴィータはわたしとレジアス中将の案内を。 ええか、みんな? 六課でゆっくりしたいのなら、今日は本気を出すんやで?」

『はい!』

元気よく手を挙げる面々に、一抹どころじゃない不安を覚えるはやてであった。

そんなはやての不安など、時間と現実心配するはずもなく時計の針はレジアス中将が来る時間帯を指す。 はやては外からの連絡を受けて、ヴィータと二人、レジアス中将の元へと向かった。

地上本部トップであるレジアス中将は厳しい目を向け、横にいる女性はそのようなレジアスに何かを耳打ちしていた。 はやてはレジアス中将に歩み寄り、握手を求めて手を差し出す。

「本日はご足労ありがとうございます。 機動六課部隊長、八神はやてです。 こちらが、六課の教導から事務処理まですべてをこなすヴィータ副隊長です。 本日はこの二人で案内することになります」  
「こんな小さな子供が副隊長とは……流石 “アイドル部隊” だな」

にこやかな笑みを浮かべるはやてとは対照的に、レジアスはヴィータを横目でみてわざと聞こえるように言いながら握手を返した。 はやては頬がヒクつく感覚を覚えながらも、愛想笑いを浮かべる。 はやてとの握手が終わると、今度はヴィータが一步前に詰め寄り握手を求める。

「スターズの副隊長、ヴィータです。お言葉ですがレジアス中将、外見だけで判断するのは如何なものかと思えます。あたしの友人の言葉を借りるのであれば『三流がよくすること。それかずっこんばっこんのことしか頭に入っていない奴がする』とのことでした。といつても、その友人は美少女がたくさん出てくるゲームを必死にやりながらでしたのであまり説得力はありませんが。しかし地上本部のトップが外見でどうこういふとは思ってもいなかったですね」「ふん。その友人というのも大したことないだろうな。言葉の端々から負け犬臭が漂っている」

「確かに負け犬かもしれないね。ただ、法則すら噛み砕く負け犬ですので注意しておいたほうがいいですよ」

両者、握った手に力を込めながら話す。ぴりぴりとした空気が辺りを包み込む——が、そんな空気もはやての声で消し去ることとなった。

「さ、さあ！ レジアス中将もヴィータもそんな握手ばかりしとらんで、そろそろ視察のほうにいこや！」

ヴィータの背中を押して、レジアス中将と横にいる女性を六課の面々がいる仕事場へと案内する。既にはやては心の中とある男にヘルプを送っているのだが、勿論届くことはないだろう。そんな中、四人はメンバーが事務仕事をしている場所にたどり着く。先ほどまでゲームをしていた場所だ。

はやてが初めに部屋へ入り、二人を誘導する。そこで二人がみた光景は——

「ねえシャマル!? ここに置いていた書類知らない!? 執務官の仕事で使うものなんだけど——」

「それならシュレッダーにかけましたよ?」

「なんでかけちゃったの!?!」

「ねえエリオくん? この書類ってどう書けばいいかわかる?」

「えっと……あれ? これはどう書くんだったけ……。確かこう書いて……」

「それ本当にあってるの?」

「うつ……。ごめん、わかんない……」

「終わった……。あの書類の中に重要な案件が入ってたのに……」

「いまから取り寄せても遅すぎるし……」

「えっと……。ノリで再生させてきますね！」

自分のデスクに置いていた書類をシヤマルにシユレッダーにかけられ落ち込むフェイト。そんなフェイトを見て、なんとか書類の再生を試みるシヤマル。その近くでは、子供組であるエリオとキャロが少し特殊な書類の書き方で戸惑っていた。まるで新学期を迎えた方がいいが、用意もなにもしてなくて朝になって慌てる女の子の部屋のようなのである。

部屋の光景を見て、はやてはチラリとレジアスのほうを見る。

「……………」

レジアスの顔がとても険しくなっていた。

いつものならだら六課と比較すれば、素直に賞賛をはやては送りたいのだが……。そもそも視察に来るほど六課のことを快く思っていないレジアスが相手となるとこの光景も叩くには十分なのかもしれない。

「ふんっ。書類管理ができてない執務官に、書類をまともに書けない子供。まあ……。所詮この程度のレベルか」

そう呟いたレジアスの言葉に、はやては心の中で罵倒で返した。

フェイトやシヤマルが騒ぐ中——この人物だけは落ち着き払って行動を起こした。

はやてとレジアスの間を通り抜けると、まずはじめにエリオとキャロのデスクに近づき

「この書類の書き方はちょっと特殊だからな、こう書くんだ。ほら、あたしが練習用として書いたのがあるからそれを見ながら書いていけ」

そう自分のデスクから紙を取り出し、二人のそばから離れた。次にフェイトのほうへと向かって歩き、これまた同じくデスクの上に置いてあった書類を落ち込んでいるフェイトに渡す。

「こんなこともあるうかと、一応コピーしてたんだがこれでいけるか？　ダメなら取り寄せるしかないけど」

「あ、ありがとうヴィータ！ 事情さえ説明すればこれでも十分通るよ！」

書類を泣き目で受け取ったフェイト。 それをみて苦笑するヴィータ。 フェイトはヴィータから書類を受け取ると、すぐさま作業に没頭する。 そんなフェイトの姿をみて、今度はシユレツダーで必死に書類を探しているシャマルに声をかける。

「シャマル。 ちょっと教導のほうに行つててくれないか？ ほら、うちのエースの教導は厳しいからきつと怪我してると思うぜ？」

ヴィータの言葉にふと何かに気づき、そして親指を立てた後シャマルは走つて出ていく。

圧巻の一言だった。 先ほどまでの大騒ぎが嘘のように静まり返る室内。 ペンが紙の上を走る音だけが耳に聞こえてくる。

ヴィータは室内をもう一度見回して、はやての元に戻つてくる。

「八神隊長。 どうやら事務のほうは大丈夫なようですし、教導のほうに行きませんか？」

そう事務的な声で告げる。 そしてレジアスのほうを向き、

「レジアス中将。 此処にいたら仕事の『邪魔』になるかもしれないので教導のほうに行きませんか？」

そう言葉を放った。

「ふんっ。 私がいるから仕事ができなくともいいたいのか？ 随分とメンタルが弱い奴らだな」

「生憎、六課は美少女揃いなので怖い顔した男性がいますと全員ともそちらに意識を向けてしまうのです。 幼馴染に飼いならされているペットだと話は別ですが」

なおもヴィータとレジアスは静かに、しかし勢いを増しながら何食わぬ顔で罵り合つていく。 それを傍目に見ながら、はやてはポケットから携帯を取出しとある人物にヘルプを要請した。 メールを出し終え、携帯をポケットに入れなおそうとするはやての肩をとんとんと叩く女性。

「いま男性の顔写真が写ってましたが……どういった関係ですか？ と、それよりも自己紹介ですよ。 初めまして、オーリス・ゲイズ

です。レジアス中将の秘書をやらせていただいています」

オーリスははやてに丁寧な頭を下げる。それに答える形で、はやても頭を下げた。

「八神はやてです。 えつと……もしかしてレジアス中将の娘さんやろか?」

「ええ、娘ですよ」

にこやかに笑うオーリスに、はやてはピンと何かを感じ取った。

「(なんやろ……、なんか危ない感じがする人やなく……。 まあ、ええか) それにしても、ほんとすいません。 ヴィータが突つかかつてしても……、きつとヴィータは六課ではなく自分にレジアス中将の目を向けさせるつもりなんやと思うんやけど……」

「いい部下をお持ちですね」

「部下やないです。 家族です」

「それは失礼しました。 ところで、先ほどの男性ですが」「夫です」

間髪入れずに答えたはやてにオーリスは呆気にとられる。

「えつと……アイドル部隊の部隊長に男がいるだけでも騒動ものなのに……夫ですか?」

「会ったこともない他人に愛されるより、大好きな一人に愛されたいと思うのは、乙女として普通のことやと思うで?」

「……確かにそうですが」

若干狼狽えるオーリスに首をかしげながらも、はやてはヴィータとレジアスを諫めて教導の場所へ行くこととなった。

そう——問題児たちが跋扈している教導に行くこととなった。

☆

『なのはさーん! これ終わったらプリクラ撮りにいきましようよー!』

『いや、だから教導をしないとわたしの給料が……』

『えー! 行きましようよー! お金なら私があげますから! 何万なら行きますか!? ホテルは何万ですか!?!』

『プリクラ撮りに行くんだよね!?　なんでホテル行くことになったの!?!』

『というか……なのはさんってプリクラとか撮りに行くんですか?』

『……高校のとき、ペットやフェイトちゃんやはやてちゃんとか、アリサちゃん、すずかちゃんとはよく撮りに行つてたかな』

『なんだろう……。　なのはさんの制服姿、思わず、無理しちゃダメです』と言いたくなるような……。』

『おいちよつとまで。　それはどういう意味だ』

八神はやては全身から吹き出す汗が止まらなかつた。　ダムが決壊したかのように体の内側から止めどなく流れていく汗と、乾いた笑みと固まった頬を張り付かせながらレジアスを見るはやて。　見て後悔した。　レジアスの表情は険しいを通り越して、無表情で感情すら感じさせない顔をしていた。

あかん……。　これはあかん……。　!

はやては心の中で叫ぶ。　いつたい、どこの管理局に教導中にプリクラの話をする部下と上司が存在するのだろうか。

はやてたちが見つめる先、高町教導官は強引に部下を引きはがす。　そこにやってくるもう一人の青髪の部下。

『なのはさん!　メリケンサックつけてみました!　これで攻撃力が段違いですよ!』

『捨ててきなさい』

『そういえば、シグナムさんとシャマルさんは?』

『プレッシャーでトイレに籠ってるよ』

終わった……。　この視察で六課は終わったで……。

その場で崩れ落ちるはやて。　しくしくと泣くはやて。　横にいたオーリスは流石にはやての行動におろおろするが、レジアスはそのことなど微塵も気にせず声をかける。

「これが六課の教導とでもいうのだろうか。　とんだ教導だ、バカバカしい」

鼻を鳴らして小馬鹿にするレジアス。　しかし、そのレジアスの言



葉にまたもやヴィータが口を出す。

「確かに、短期間の教導ならばこういう馴れ合いは愚の骨頂ですが、六課での教導は1年間。それを考えるのであれば、あの形態はとても良いとあたしは思いますが」

「何を言う。世の中力がすべてだ。教導ではその力を学ぶ。こんな教導で、なにを学べるというのだ」

「力しかない者を俺は雑魚と呼んでいる」。以前、あたしの友人が言っていた言葉ですがね。　　どうやら、その友人とレジアス中将は随分と相性が悪いようだ。　　そしてあたしも相性が悪いようですね」

「小娘との相性などどうでもいい」  
吐き捨てるレジアスは、一度教導をチラリとみて、その場を後にしようとする。

「もうお帰りになるんですか?」

「どうやら、私は思い違いをしていたようだな。六課に価値はない」

レジアスはそういうと、すたすたと玄関のほうへと歩いていく。その横を付き従うように歩くオーリス。　　後ろを、一応見送る形だけでも……という体で歩くはやて

とヴィータ。　　はやては難しい顔をしており、ヴィータは面白くないさそうな顔をしている。　　レジアスとオーリスは何か秘密の会話でもするかのように、互いの耳を近づける。

「あつ……!」

はやては思わず声をあげた。　　はやてより前方から、白衣を着こなした小さな5歳になる女の子と手を繋ぎながら、女の子とアヒルに話しかけている青年を発見したからである。

しかし、レジアスとオーリスはただの職員だろう、そう思って気にかげなかつたのだが――

「おっと、すいません」

「気をつけろ」

青年の肩とレジアスの肩がぶつかり、青年が謝るとレジアスは多少苛立ちながら青年に返す。

そして青年とレジアスが完全に交差する直前、青年は何かを思い出

したかのように「そうそう、その方」と、レジアス呼び止める。  
レジアスが振り向く。振り向いた瞬間、レジアスの眼前には山なりに投げられた自身のサイフが目映ることとなった。

「気を付けたほうがいいですよ、サイフ落ちてましたから」  
そうにこやかな笑みを浮かべた青年は、そのままはやてとヴィータと談笑する。

レジアスはそのような青年を見て、立ち止まった後、何も言わずに先ほどと同じ目的地に向かって足を進めた。

「レジアス中将、六課はどうでしたか？」

「ふんっ。もう興味が失せた。それより、*アレ*はできたのか？」

「はい、すでにできております」

レジアスはその答えに満足して、六課を出て行った。

☆

「おいひよっところ。もうちよつと嫌味っぽく言えよ。普段のお前なら、『注意が散漫してますね。それでも地上本部のトップなんですか?』とかいうだろ」

「だってミッドの生活守ってくれてるの地上部隊だし。俺は一般市民だから、レジアス中将に嫌味を言う道理がないしな。まあ、あまりヴィータちゃんも喧嘩腰にな

っちゃダメだぞ? 同じ管理局の中同士、互いのいいところや凄いとこを認め合って一つのことに向かって進んでいけ」

「むっ……、それはわかるけどよー。だってはやてをバカにしてる奴なんだぜ、レジアス中将ってよ」

「だからといって、お前が落ちる必要はないだろ」

ヴィータの頭をぽんぽんと叩いて、次いでよしよしと慰める。ちなみにヴィータは頬を膨らませて拗ねていた。よつぽどはやてのこと関係で、レジアス中将のこと

が嫌いみたいだ。それさえなければ、きっと普通の付き合いができるはずなのだが。青年はそう思いながら、撫でていく。

「それにしてもはやて、お疲れ様。よく頑張ったな」

「うう〜……、俊……六課はやっぱりダメなんかな？ もうちよつとシヤキってさせたほうがええかな？」

涙目で聞いてくるはやてを、青年は「まさか」そう肩を竦め、はやてをあやししながら自信をもって答えた。

「だったら六課は俺の切り札だ」

「さて、これからが大変だな……」そう口にして、甘えるはやてと愚痴を吐くヴィータ、そして遊んで遊んでとせがむ娘とアヒルの相手をしてしながら、青年は嗤う。

カードを切る音がする。

## 89. 曲芸4

管理局本部のとある一室にて、クロノ・ハラオウンとカリム・グラシアは直立不動で立っていた。目の前には年配の男性や初老の男性、半世紀を過ぎた女性などが手元の資料をじつとみている姿があった。

ばさり、と初老の男性が資料をデスクの上に置きクロノを見る。

「ふむ……、面白い試みではあるが、これはちと無謀ではないかな？」

クロノ・ハラオウン提督

クロノの名前を呼んだのは、武装隊栄誉元帥であるラルゴ・キールであった。左隣には本局統幕議長であるミゼット・クローベル、右隣には法務顧問相談役であるレオーネ・フィルスが座っている。その三人を囲うように半円卓に上層部の大将クラスが陣取っている。

そしてそれぞれの手元には――

『海VS陸 非殺傷設定の本気のケンカをやるつきやない！』というのは……上としては容認するわけには。はやてちゃんの可愛いイラスト付きのもの〜

「そこをなんとかお願いできないでしょうか。勿論、海のほうは私が選抜します。主催者は思いつき高ランクをぶつけろとのことでしたので」

「それは、機動六課の人選も入るのだろうか？ だとしたら暴動が――」

「いえ、六課は司会進行や案内役に回ってもらう予定です。私も六課の人選を提案しましたが、どうにも六課の人選を使うとなると都合が悪いようで」

クロノは臆することなくラルゴに伝える。ラルゴはクロノの言葉聞いて思案するように顎に手を置いた。

「クロノ提督、その主催者は――誰かな？」

年配にもかかわらず、鋭い眼光をクロノに向けるラルゴ。クロノの隣にいるカリムは、ぴよんとその眼光に押されるように可愛らしく跳ねる。対するクロノは落ち

着き払ったように主催者の名前を読み上げた。

「主催者はそこにも書かれてある通り、機動六課の部隊長である八神はやてです」

全員が手渡された資料にはデカデカと主催者の名前が書かれていた。

主催者 八神はやてと。

ラルゴ・キールはやがてため息を吐き、クロノにこう言った。

「陸と海の問題は、私たちも問題提議に上げているところだよ。

やってみなさい、ただし——それでレジアス中將がどういった反応を示し、こちらにどういった罵声を

浴びせてくるかはわからないがね」

「そこは問題ないと私どもは考えております。優秀な交渉人が存在しますので」

クロノとカリムは一礼して室内を去った。

それをみてラルゴは全員に向けて声を放つ。

「ではこちらは失敗したときの対応について検討していこう。若者が最善の出来事を考え行動を起こしてくれたのだ。こちらは最悪のことを考えた上で責任を背負いこむのが上に立つ者としての役目だろう」

ラルゴの言葉に全員が頷き、それぞれ意見を述べ始める。

それを横目に、ミゼットがラルゴに話しかけた。

「気になるかい？ これを考えた人物のことが。といっても、主催者ははやてちゃんみたいだけどね」

「私たちも大好きなアイドル部隊なら心配はせんよ。それにこちらははこちらでやることがある。まったく……私たちの前には壁が多すぎる。ままならないものよの、私たちは世界どころか管理局すら纏め、守ることすらかなわない……」

「せめて、死ぬ前に一度でいいから見てみたいものだね。平和に向かって進む管理局の姿というものを」

「人の心は機械じゃない。そんなことできるのは——きっと世界最

悪として歴史に刻まれるような犯罪者くらいだろう」

「おや？ 局員から出るとは思わないのかい？」

「榊が沢山あるのだよ」

ラルゴはどこか諦めたような、そんな声を出した。

☆

ガヤガヤ……ガヤガヤ……

「とまあ、海と陸のガチンコ勝負をさせるのがうちの大将の作戦なんやけど」

「……いくら非殺傷だからって、そんなことしたら溝が一層深まるんじゃないか？」

「そうよはやてちゃん。私もゲンヤさんもスバルがこの『イベント』に出ないから少し安心したけど……、この『イベント』が根本的な解決になるのかどうか」

ミツドの日本料理専門店で、八神はやては自分の大将の作戦を地上部隊であるナカジマ夫妻に伝える。ナカジマ夫妻は資料にぎつと目を通して幾何か不安げで胡乱げな視線をはやてに向ける。はやては二人の疑問に首を傾げる。

「そうやるか？ ため込んだストレスを相手にぶつけるいい機会やと思っやんやけど……。陸だつて少なからず海のことを——つて思ってるやろ？」

「まあ、戦力取られてるし、確かに不満も沢山ある……な」

「大将はこの機会に一気に爆発させようという魂胆なんや。既にゼストさんに頼んで陸の局員達には話を通しとるらしいで？ 勿論、レジアス中将にはみつからへんように隠れながらみたいやけど」

「ここまで規格外のことをしようと思う人物だったとは……。しかし、もしこれが失敗するとなるとんでもないことになるが、大丈夫なのか？」

はやては注文していたウーロン茶を一口含み、ゆっくりと嚥下した後答える。

「あいつが失敗する姿は想像できへんなく。あいつも不正を働く局員相手には心折りにいくような行動をとるいうてたけど、レジアス中

将と最高評議会には敬意を払ういうてたしなあ」

「敬意……？」

「こそ。 ミッドで生活できとるのも地上本部が頑張ってくれとるから。 管理局があるのも最高評議会が設立してくれたからやる？」

「だからあいつは敬意……というよりも、お礼を言いたいんやと思う」「そのためだけに、こんな真似を？」

「それがわたし達の大将や。 時代の先駆者はいつも型破りで常軌を逸したバカと相場がきまつとるで」

注文してきたから揚げと酢豚が三人が座っているテーブルに置かれる。 はやては小皿にから揚げと酢豚をよそい箸でどんどん食べていく。

ナカジマ夫妻はそんなはやてと、資料を見比べながら何か考え込んでいるようだ。

「まあ、ゼストさんが頑張ってくれたみたいやから、陸のほうは準備オツケーや。 海のほうもあの二人やから大丈夫やろうし……」

後は明日、六課の皆が頑張ってく

れるのに期待するだけやな」

「ちよつとまってくれ。 レジアス中将はどうなるんだ？ あの人は地上本部のトップだぞ？ 無視して事を進めることもできないし――」

「レジアス中将はあいつの仕事や。 心配やから、わたしもついてはいくけど。 あいつの今回の一連の行動における役割は交渉人。」

そしてわたし達はその交渉を円滑に進ませることが役目なんや」

ウーロン茶を呷りながら、はやてはそう言い切った。

上矢俊にできることは、本当に少ない。

そもそも、局の人間ではない俊は局員とまともに話せる機会もない上に相手が上層部の人間ともなると、その可能性は0に等しい。 だからこそその、クロノ・ハラオウ

ンやカリム・グラシア、そして八神はやてなのだ。

「ゲームには役割が存在するんよ。 まあ、あいつはちよつとこの世の中を立体的ゲームとして捉えすぎている感があるけど。 で、今回

お願いしたいことはゼストさんと一緒に陸の指揮をやってくれへんかな？」

ゲンヤにお願いするはやて。ゲンヤは黙ったまま、数分考え込む。

やがて、こくりと頷いた。

「しようがない。俺たちも彼には賭けてるんだ。カツコイイとこ見せようじゃないか」

ゲンヤの言葉を受けて、八神はやてはニッコリと笑った。

☆

高町なのは&フェイト・T・ハラオウンの家は俄かに慌ただしい様子であった。

「フェイトちゃんっ！ 明日の原稿書いた!?!」

「私救護係りだから書かないで大丈夫だよ」

「ガツデムー！」

ばたばたとなのはとフェイトがリビングを走り回るのを横目に、俊は胡坐を掻きながら布と布とを合わせ、可愛らしいヒラヒラをつけたりと、ゆったりとした動作で衣装を作っていた。そんな俊の隣には、胡坐を掻いた足に両手を置きながらワクワクドキドキと瞳を輝かせて衣装をみるヴィヴィオとガーくんの姿があった。

「俊くん！ 明日の原稿書いてくれない!?!」

「それくらい自分で書けよ。それに、明日は陸と海の非殺傷なんだけどデスマッチなイベントなんだろ？ 死人は出ないけど負傷者は沢山でるから六課も大変だぞー。」

どう考えても、「イベント」とは名ばかりの代物だからな」

「そんなことわかってるよ！ わたしは反対したのにはやてちゃんがこごぞとばかりに部隊長命令出すんだもん！」

「きつと、はやてもはやてで陸と海の関係のことを思ってるんだらうよ」

チクチクチク……

なのはのほうを見ずに、衣装のほうを見ながら俊はなのはに答えた。後ろにいたなのはが面白くなさそうに顔をムっとさせる。



「んー！ 人と話すときは目をみるの！」

ゴキッ

「はうっ!？」

首の辺りから本来なら聞こえてはならない音が聞こえてきたが、なのは気にしない。そしてヴィヴィオも気にしない。ガーくんは声をかけようかと思ったが止めることにした。

俊の顔を強引に自分に向けさせたのは、文句を言おうと思ったのだが——俊が先ほどまで作っている衣装をみて興味がそちらに移る。

「あれ？ これってアニメ化が発表されたやつ衣装じゃん。 あそこまで喋るステッキは要らないと読んで思ったけどさ」

「ヴィヴィオが着たいから作つてとせがむんだ。俺もヴィヴィオには似合うと思うから全力で作ってるけど」

「ふーん。 ……わたしは似合うかな？」

「……………勿論！」

「なにそのとんでもない間は?！」

ガクガクと前後に俊の頭を揺らすなのは。

「お、落ち着くんだ、なのは！ お前はバリアジャケット姿が似合いですぎててそれ以外のものが霞んでしまっんだ！」

パツと俊を解放するなのは。 そわそわしつつ、ちよつと照れたように笑いながら指を絡ませる。

「えへへ、ありがと。 わたしも俊くんにはそのミクちゃんのTシャツが一番似合うと思ってるよ」

「できればスーツが似合うとか言って欲しかったかも」

グイグイとヴィヴィオがなのはと喋っている俊を引つ張る。 どうやら、早く作つてほしいようだ。 俊が時計を見ると、ヴィヴィオはもう少しで寝る時間である。 確かにこれは早く作らなくては。

俊は衣装づくりを再開する。 そこに雑務を終わらせたフェイトが合流する。

自然と全員とも俊の手元を見る形となっていた。

「けど、5歳にしてコスプレに目覚めつつある娘かー。フェイトちゃん、どう思う?」

「うーん……、本人が着たいなら別にいいと思うんだけど。パパ的にはどう?」

「俺はヴィヴィオの味方になるかな。ヴィヴィオの年齢だといろいろと試せる衣装もあるんだよな。園児服とか、ロリ巫女とか、――冗談だから二人ともデバイスを

しまおうんだ」

首筋に冷たいものが二つ当てられ、俊は即座に投降の意を示す。

ため息を吐く二人。俊は頬を掻きながら苦笑混じりに答える。

「まあ、真面目な話、俺はいいと思うぜ? ヴィヴィオには母親が魔導師だからとか関係なく、やりたいことを存分にやつてもらいたい。

ヴィヴィオが自分自身で魔導師を選ぶならそれでもいいし、コスプレイヤーになりたいのならそれでもいい。ヴィヴィオには、後悔しない生き方をしてほしい」

俺やなのはやフェイト、皆にそれは無理だけどさ。

自嘲気味に、幸せそうに笑う。

後悔するような出来事なら沢山あった。それでも俊は幸せだと感じている。

それにつられる形で、なのはとフェイトも笑った。

「そうだね、それが一番だよ」

「私もなのはもはやても俊も、自分自身で決断して今この場に立っているんだもんね」

なのはがヴィヴィオをだっこする。だっこされたヴィヴィオはなのはとフェイトを交互に見たあと、にへらと照れたように笑って見せた。そんなヴィヴィオをなのはとフェイトが愛しそうに撫でる。

ヴィヴィオは、くいくいとなのはの服を引っ張りながら話す。

「なのはママ、ヴィヴィオね? なのはママのおみせでウェイトレスさんしたい!」

「ほんと!? うれしー!」

たまらずヴィヴィオを抱く手に力が籠められ、ヴィヴィオは「フェ

イトママ助けて!」とフェイトに懇願する。

フェイトにヴィヴィオを奪われたのは、いまだチクチクと、絵にするととても地味な行動を行っている俊の背中に体を密着させながら、

「ねえねえ俊くん？ えつとき、六課の試運転が終わったらさ……一年間くらい二人で翠屋経営してみない？ ヴィヴィオのためにも……さ？」

そう勇気を振り絞りながら言った。

手元が狂い左の手のひらに思いつき針を刺しながら、

「いいなそれ！ 俺となのはとフェイトとヴィヴィオかー。きつと翠屋の経営上がるぜ？ それに、きつと八神家や嬢ちゃんとスバルは来るだろうし……、面白そうだな！」

「……………わたしは二人で経営したのに……………、バカ」

嬉しそうな声を上げる俊とは対照的に、なのははトーンを落としながらぼかぼかと背中を叩く。

と、ここでヴィヴィオの就寝タイムを知らせる音が鳴る。

「ありや？ もうそんな時間か。ごめん、ヴィヴィオ。起きたら完成すると思うから、今日は寝てくれ」

「うー！ ……パパだからいいよ！ なのはママ、フェイトママ、一緒にねよー！」

フェイトにだっこされながらヴィヴィオが嬉しそうに二人の名を呼ぶ。二人は、お互いを交互に見つめあった後、ふっと笑って頷いた。

ちなみに二人ともパジャマ姿であるので、いつでも寝ることはできる状態だ。

ヴィヴィオと手を繋いで、2階に上がる寸前、フェイトが振り返りながら俊に問う。

「そういうえば、明日俊がどうしても外せない用事ってなに？ こういうイベント大好きな俊には珍しいことだけど」

聞かれた俊は、しばし逡巡した後

「幸せの一步を踏み出しに行くよ」

「そうおどけてみせた。

クスリとフェイトは笑い、からかいながら2階へと上がっていった。

一人残された俊は、衣装を作りながらメールする。数分してバイブが鳴り、返事が返ってくる。それも複数の。

俊は画面を開きしばし見つめた後、パカんと閉じて作業を開始する。

「明日……スーツで行こうと思ったが、ミクのTシャツでレジアス中将に会いに行くか……」

一人眩き、ヴィヴィオのために衣装を完成させるのであった。

## 90. 曲芸5

高町なのははこの場にいる局員よりも一番高い場所で、朝に幼馴染が書いてくれた原稿を読んでいた。

「これより、海と陸の非殺傷設定本気模擬戦を開催します。進行、そして救護は六課の私たちが行いますが……くれぐれも死なない程度に頑張ってください。あ、あれ？ ヴィータちゃんこれなんて読むの……？ べ、べつに読めなかつたわけじゃないよ？ ほ、ほんとだからね？ えーつと……、ぎ、讒謗・罵倒・罵り・怒声・中傷・罵る・漫罵・悪口・誹謗・痛罵・雑言・毒突き・嘲笑・唾罵、大いに聞かせて頂きます。今日は無礼講となっております。普段の鬱憤をぶつけてもいいですし、逆に相手側の話を聞きそれに対して自分の見解を述べることも大いに結構です。本日は上層部の皆さんもモニターを通すか直接見ていることでしょう。この機会に一度、不満や不安をぶつけてみるのも一興です。時空管理局という組織の上立つ者が、部下達の不満を呑み込むことができぬほど器の小さな存在ではないことを私はよく知っていますので。私から言いたいことは一つです。この『イベント』が終わった後に鬱憤が残っているような状態は止めてください。全て吐き出してもらいます。この『イベント』が終わった時に、肩を組んでいる光景が広がりますように」

なのはは冷や汗を流しながら宣言する。

「それでは——最初に最後の海と陸による全力全開の模擬戦、開始！」  
無敵のエースオブエースの宣言を皮切りに、次々と海と陸の両名が罵詈雑言を口から吐き出しながら魔力弾を放っていく。おおよそ、この姿を管理世界に発信したな

らば信用を根こそぎ失うことになるだろう——そんな光景がなのはの前には広がっていた。

「お疲れさん」 そうヴィータがなのはを労いながら近寄ってくる。なのははそれに笑顔で返す。まだまだ始まったばかり、こんなところでへばっていたのなら部下に示しがつかないうえに、エースオブ

エースとして恥ずかしい。さらに近づいてきたティアからスपोर्टドリンクを受け取ったのは目の前の光景を見ながらつぶやく。「……怪しい、いつもの俊くんなら嬉々としてこのイベントを見に来るのに……。今回に限って用事だからいけないなんて、またわたしに隠し事かな?」

「心配なのか?」

「心配なんてしてないよ。だって俊くん、前に——『任せてくれ』そういつていたから。それに、俊くんがピンチのときってなんかわかるんだよね。女のカンってやつかな?」

「気をつけるなのは、そのセンサー壊れてるから」

「ちよっ!? わたしのアホ毛筆り取ろうとしないで!」

ピンと通常の前髪より跳ねている髪の毛を筆り取ろうとするヴィータになのは身の危険を感じて後ろに避けた。その拍子に後ろに控えていたティアとぶつかり、ガ

ツチリと肩を掴まれた。にんまりとした笑みを浮かべるティア。

「ヒップアタックポーズなんて……流石なのはさん、私に出来ない芸当をいとも容易く行ってきますね」

「そんなポーズ聞いたこともないんですけど!? わたしとティアは女の子同士だから結婚は無理だからね!」

「大丈夫です! 魔法で生やします!」

「問題はそこじゃないよ!」

大声を上げるなのはに、それを恍惚の表情で見るティア。華麗にスルーして六課の職員に指示を出すヴィータ。と、そこにとてとて、そんな可愛らしい足音が擬音につきそうなほどの走り方で愛するヴィヴィオがなのはの元に駆けてきた。

「なのはママー! みてみてー!」

「かわいいよー、ヴィヴィオ。朝から50回目だけど」

「えへへー!」

「ガークンハ? ガークンハ?」

「うんうん。ガークンも可愛いねー。朝から50回目だけど」

駆けてきたヴィヴィオはなのはの答えに満足したように、照れてい

るような、そんな笑みでなのはの腰に抱きついた。次いでガーくんもなのはの足元に抱きつく。なのははヴィヴィオとガーくんの頭を撫でながら、朝から通算50回目のこの一連の行動に苦笑する。

そこにスバルが慌てたように駆けてきた。

「ヴィヴィオちゃん……はあはあ……急に走り出しちゃダメだよ……。今回なのはさんにヴィヴィオちゃんのそばにつくようお願いされてるのわたしなんだから……」

「えへへー、ごめんね？ スバルン」

まるで悪びれた様子もないヴィヴィオの笑顔にスバルは破顔する。5歳なんだから、このくらい動き回るほうが正しいのかもしれないとでも思ったのだろうか。

「ごめんねスバル。ほら、ヴィヴィオには今回のイベントはちよつと刺激が強すぎるからあまり見せたくないんだよね。だからできれば、ヴィヴィオを連れて見えない場所にいてほしいかも。はあ……こんなときにお気楽極楽あんぽんたんですかぽんたんへタレで話をはぐらかす癖に嘘が恐ろしく下手くそな幼馴染（19歳、黒髪）がいてくれたら便利なのに」

『……………』

「えっ？ えっ？ なんでみんなしてコソコソ話してるの!？」

スバルに申し訳なさそうな顔をして謝ったなのはは、此処にいない幼馴染についてただ述べただけにもかかわらず、なのはを除く四人と一匹は少し離れた場所で何か話し始める。

『おいおい、またあいつ地雷踏んだのかよ。ほんと地雷原を全力疾走するのが大好きな奴だな』

『絶対になのはさん怒ってますよ。いつも以上にフルボッコに言ってますもん。これ完全に初体験したはいいけど、男のほうが早くイキすぎて満足できなかったパターンですよ。まあ、あの人はそんな展開すら持ち込めそうにないんですけど』

『ちよつと的確な例えだと思った自分が情けない』

四人と一匹がそうやってコソコソ話をしてしていると、なのははちよつと面白くなさそうな顔をする。自分だけ除け者扱いされたのだ、普

通の反応だろう。これで喜ぶのは新人二人くらいなものだ。

なんともなしに携帯を取り出し、とある人物に電話を掛ける――が、電源を切っているようで女性の機械的なアナウンスがなのはの耳に聞こえてきた。通話終了ボタ

ンを押した後、携帯をポケットに戻しながらなのはは呟く。

「ペットのくせに……電源切るなんて……。……バーカ、もう知らない。べつに声とか聞きたくなくなったわけでもないし、どうでもいいことだし」

『なんだ、いつもどおりだな』

『えへへー、なのはママかわいいでしょー?』

『口ではあんなこと言ってるのに、途端にそわそわしだすなのはさんの可愛さが半端ない。あれで19歳とか信じられないですよ』

『むしろ19歳なのに、あんなことしちゃう所が可愛い』

遠くからなのはのほうをみながら、そんなことを口々に言い合う四人。ガーくんは既にガールズトークに飽きたのか「イベント」のほうに意識を集中させていた。

なのはの元にナース服姿のフェイトがやってくる。

「あれ、なのは。なにしてるの?」

「むしろわたしが聞きたいんだけど。フェイトちゃんなんでナース服のコスプレしてるの? 似合ってるけど」

上から下までマジマジでフェイトを見つめるなのは。その視線を受けてフェイトはちよつと困ったような、しかし照れたような顔をしながら答える。

「えつと……『絶対に似合うから着てくれ! それで写メを送ってくれ!』って、頼まれて……」

「フェイトちゃん、さっき更衣室で一人携帯のカメラに向かって照れ笑いしながら写メ撮ってたんですよー。可愛かったですー。男の趣味はあまりよくないようですが」

「じゃ、シヤマル!? さっきの見たの!?!」

「はい、もうバッチリとみてました。ちなみに私は写メを撮るフェイトちゃんの写メをバッチリ撮りましたよ。ほら、これなんですけ



ど——」

「いやあああああああつ!? 見ないでえええええええつ!?」

後ろから突然現れたシヤマルが白衣を纏いニコニコ笑顔を浮かべながら携帯の写メをなのはに見せる。携帯を覗き込むのは。

その後ろに興味津々な様子で覗き込

む四人。

「フェイトさん、嬉しそうな表情してますね」

「これフェイト教の人たちに何万で売れるんだろ」

「フェイトは昔からコスプレ系にあまり抵抗なかったしな。ほんと、なのはもはやてもだけど、男の趣味が悪いよな」

「フェイトママかわいいー!」

スバル・ティア・ヴィータ・ヴィヴィオが携帯を覗き込みながらそんな感想を漏らす中、なのはは——

「ナースかぁー……。わたしのときはバリアジャケットやメイド服が似合うって言ったのに。ふーん……。そうなんだー……」

『あいつ地雷踏みまくってるぞ』

『この場所に居ないにもかかわらず一番の存在感を放ってますよ、あの人』

「な、なのは……?」

「ふえ? なに? どうしたの?」

「いや……。大丈夫?」

「全然大丈夫だけど? それにしても、フェイトちゃんのコスプレ可愛い……。わたしも写メ撮らせて!」

ポケットから携帯を取り出したなのはは、フェイトの返事もまたずにシャッターを押す。何度も何度も撮りまくる。フェイトは困惑しながらも、なのはに言われた通りのポーズを取る。

「あ、こつちにも目線くださいー!」

「こつちもお願いしますー!」

「フェイトママ、かわいいよー!」

「え!? え!?」 おろおろしながら言われた通りにあつちこつちに

視線を向けるフェイト。いつもよりサービス精神旺盛である。というか、本人自体が困惑でこの事態に処理できなくなっているのかもしれない。

瞬く間にコスプレ撮影会と化した空間に、ヴィータは一言――  
「そろそろ仕事に戻れよ」

そう呟いた。が、そんなことなのは以下5名が聞くはずもなく――  
―と思っていたところで、意外な人物が顔を覗かせた。

「フェイト。兄として一言いいか。――そういつたことは好きな人の前だけで頼む」

声をかけたのはフェイトの義兄であるクロノ・ハラオウンであった。この「イベント」を用意した立役者であり、また海の人選を決めた人物でもある。クロノはフ

ェイトの格好にそれ以上追及することはなく、ヴィータの隣に移動し口を開く。

「戦局は？」

「正直、予想外の粘りを陸が見せているよ。あつさり終わると思っていたんだけどな。おっさんはSランクを墜としてさっさと後ろに下がったけど、それを無視したとしても今の陸は異常だ。ゼスト部隊を起点に、海と張り合っているのだから。――まあ、その分口も悪いが」

「それはしょうがないさ。海よりも陸のほうが言いたいことが沢山あるんだから。ああ、フェイト。その恰好では色々心配だから、仕事はしなくていい。此処でなのは達と一緒にいることだ。

救護のほうは他の人選、ちゃんとした専門役職に頼んできたから」

妹のことが心配なのか、背中を向けながらフェイトに声をかけた。それになのはと軽く笑い合いながらフェイトとなのはは席に着く。

此処は本日の全てを任せられた六課のメンバー、詳しく言うならば隊長、副隊長、新人たちしか入れない場である。クロノも兄として心配する必要もなくなるだろう。

「で？ あいつはどこにいった？ この「イベント」にあいつが来ないわけないしな。普段のあいつなら嬉々としておっさんを殺しに

くるのに」

「あいつの考えはよくわからないからな。残念ながら、問い詰められても答えを出せない。それにしても、ヴィータに心配されるなんて、あいつはつくづくヒロイン体質なのかもな」

「ヒロイン体質だからこそ、あたし達は困るんだけどな。知ってるか？ 昨今のアニメやゲームは、ぼんくらやれやれ系クス主人公なんかよりヒロインのほうがよっぽど逞しく、心が強い。だからこそ、無理をしてしまうんだけどな」

だから困るんだよ、胃薬代もバカにならないんだからさ。  
そうヴィータは一人眩き、戦局の末を見守ることにした。

☆

「ヒロインとは女の主人公を指す言葉でもある。知ってました？ レジアス中将」

地上本部トップ、レジアスの私室にて白衣を着こんだ上矢俊は、対面するレジアスに話しかける。二人とも椅子に座っており、両名の後ろにはそれぞれ女性が一人ずつ控えていた。俊の後ろには機動六課の部隊長、八神はやて。レジアスの後ろにはオーリス・ゲイズが控えている。

俊から話しかけられたレジアスは、その言葉を無視する形で問う。  
「……その白衣の下からチラチラ見える服、こちらをバカにしてると解釈していいのか？」

「これはこれは失礼しました。何分、スーツよりこちらのほうが似合っているといわれたもので」

白衣で前を隠し、俊はにこやかな笑みを浮かべる——が、レジアスは無表情で次の質問をぶつけてきた。

「陸と海の茶番劇を提案したのは貴様か」

「おやおや、部下が一生懸命戦っているのにもかかわらず茶番劇ですか。怖いですね」

「大切な部下達なんだ。こんな茶番劇で怪我を負わせるわけにはいかないだろう」

大切な部下達

その一言を聞いた瞬間、俊の口は思わず綻んだ。

「ご心配には及びません。あくまで『イベント』ですので、終わるころには体の怪我はありません。あくまで体の怪我の保障だけです。それにしても地上本部の人たちも意地悪ですねー、トップにこの『イベント』のことをひた隠しにするなんて。いったい、誰がこんなことを計画したのやら」

慰めるように、同情するように、俊はレジアスに視線を向けた。

レジアスは舌打ちする。

「誰がこんなことを計画したのか？ 此処まで来ておいて、随分な言い様だな。 貴様だろ、この『イベント』を計画したのは。——いい加減、その仮面を外したらどうだ？ 機動六課で出会った小僧が」  
俊はゆっくりと、顔につけていたピエロの仮面を取った。 後ろにいたはやてに放り投げる。 素顔を晒した俊は、改めて挨拶をする。  
「何日ぶりでしょうか、レジアス中将。 まさかバレていたとは。」

流石は地上本部トップの方だ」

「白々しい挨拶だな」

「これは失礼」

俊は肩を竦ませ、怖い怖いとアピールする。 そんな俊をレジアスは鼻で笑う。

「こんな時間に何をしに来た？ 10年前、管理局のエンブレムとラルゴ・キール元帥に唾を吐いた管理局最大の犯罪者が」

「いやはや、そんなことありましたねー。 残念ながら今回は関係ないことで此方にお邪魔しましたよ。 ところでレジアス中将は、いまの管理局についてどう思いますか？」

「……………どう思う……………とは？」

俊の言葉に返すレジアスに、俊は腹を抱えて大笑いする。

「あーっはっはっは！ レジアス中将、流石にそれはないでしょう？ それとも——アインヘリアルを作ったあなたには簡単すぎましたか？ この問題」

その瞬間、レジアスは年配にも関わらず素早い身のこなしで俊の胸倉を掴みあげる。

「貴様！ そのことをどこで知った!? スカリエツテイか！」

唾を飛ばしながら、レジアスは怒鳴る。俊はそれにスカした顔で答えた。

「何をそんなに怒っているんですか？」

「貴様……！」

「『貴様あれを作るためにどれほどの時間と資金を使ったと思っ  
ているのか……！』とでもいうつもりですか？ ——あんな脆くてくだ  
らないガラクタ使わないといけ

ないほど落ちぶれたのかよ、レジアス中将。失望したぜ、あんだ」  
底冷えするような俊の声。新人達にも聞かせたこともないよう

な声。八神はやてすら2年前に聞いたきりの声。

「ゼストさんは言ってたぜ？ 『昔のレジアスは違法行為に手を染め  
るような男では決してなかった。俺はあいつの理想のためにこの  
体を酷使してもいいとすら思ったんだ』 そう悲しそうに、しかし誇  
らしそうにいつていた。 ジェイル・スカリエツテイは言っていた。  
『彼だって、ただ地上を守りたいだけのはずなのにね……』 後ろの  
女性も、もしかしたら悲しんでるかもしれないぜ？ 父親がバカな行  
為をしているのを身近で見てるんだから」

「何一つ知らない小僧が——知った風な口を聞くなッ!!」

胸倉を掴んだままレジアスはそう叫び、自分も倒れる形で俊の頭を  
床に打ち付けた。これにははやてとオーリスも驚き、近くに寄ろう  
とするが、

「気に入らん……その目……！」

レジアスの心の奥底から絞り出したような声に足を止める。俊  
は頭から血を流しながら、それでも眼球はしっかりとレジアスを捉え  
ていた。睨むこともなく、怒ることもなく、同情することなく、憐  
れむこともなく、ただ——見つめていた。それがレジアスには気に  
入らなかった。

「レジアスさん、あんだ情けないなと思ったことはないのか？ 違法  
に手を染めて、自分の理想すら曲げて——自分が惨めにならないか

？」

「貴様に何がわかるというのだ！」

好き勝手に自分の価値観で喋る俊を、レジアスは殴り飛ばす。

「理想なんでもものは所詮ただの妄想に過ぎないのだ！ 二十歳にも満たない小僧に何がわかる!? 私だって若いときは思ったものさ！」

『地上を平和で安心して暮らせる世界にしよう』 そのためにゼストと共に誓い合った！ そして——その結果がいまの地上本部に他ならない！ 海に戦力を取られ、少ない戦力で地上を守る！ そんなこと、できると思っているのか！」

レジアスは叫ぶ

「私は地上さえ守ればそれでいい！ そのためにこれまで違法なことだってやってきた。 それのどこが悪い!? 9を守るために1を捨てるのは当たり前のことだろう！」

そうしないと地上を守ることなどできないのだ！ 私は間違っただけじゃない！ 地上を守るためならば——違法なことにはだって手を染めよう！」

レジアスとて、何も好きで違法なことを行っているわけではない。 そうせざるおえなかったのだ。 海に取られていく戦力、0にならない犯罪率、どうしたらいいのだろうか？ どのようしたら地上を守る事ができるのだろうか？ そして彼がいきついた結論が——いまの彼の姿なのだ。

全ては地上のためである。

レジアスの叫びに、八神はやては何も口が出せなかった。 出すことなどできなかつた。

八神はやてとて、想いは一緒なのだから。

管理局員は——守るために存在しているのだから。

しかし、此処には管理局員以外の者が1名混ざっていた。 ミッド市民が1名混ざっていた。

市民は荒い息を吐くレジアスの胸倉を掴む。

「ぎけんじゃねえぞ!!」

それは室内が揺れるほどの怒号であった。

「苦しそうな顔で、悲しそうな顔で、後悔してるような顔で、諦めたような顔で、進むことを止めた人間に——守ってほしくもねえんだよ！」

先程とは真逆の立ち位置で——俊が上でレジアスが下の体制になる。

「地上のトップはそんなものなのか!? 俺たちの平和は、違法に塗れた上でしか成り立たないものなのか!」

「それでいいじゃないか! それで平和に暮らすことができるんだ! 何が不満なのだ!」

「不満に決まってるだろ!! ——俺たちの平和を守ってくれている人間を自信満々に自慢できないなんて不満しかねえんだよ!!」

俊の言葉にレジアスが息を飲む。

「レジアス中将、アンタしか地上を任せられる人はいないんだよ! 安心して地上の平和を預けられる人はいないんだよ! くだらねえ違法行為がバレて、アンタが牢屋にブチ込まれたら誰が後釜を継げるというんだ! 俺は絶対に認めねえぞ! アンタ以外に、俺たちミッド市民の平和を託すつもりはさらさらねえぞ! レジアス中将、英雄なら英雄らしく——俺に自慢させてくれよ! 違法行為に手を染めず、地上の平和を守り抜いた漢だって——証明してくれよ!」

「それができたら苦労するもんか! 私だって頑張ったさ! それでも理想に届きはしない!」

「理想なんてものは、所詮人間の頭で考えだしたものにすぎない! 人はな、実現できる範囲でしか物事を考えることができないんだ!」

ガツシリとレジアスの肩を掴む俊。

「はやてエー! モニター映せ!」

慌ててモニターを映すはやて。 俊はレジアスの首を動かし、モニターを凝視させる。 そこに映し出されているのは——

「ゼスト……、それに多くの部下達……、どうしてまだ倒れていないんだ……」

音声を切ってあったモニターには、必死の形相で食らいついている地上局員の姿があった。 ボロボロの状態で叫びながら、それでも必

死に空を墜とそうと抵抗する者たちの姿が映し出されていた。

「二人で理想に届かない？ 一人で地上の平和を守れない？ 一人なら違法に手を染めることだってありえる？ アンタには、こんなにも沢山の部下と友がいるじゃないか。届かない空りそに必死の形相で食らいつく、諦める気持ちを知らない、大馬鹿者たちがこんなにいるじゃねえか。 レジアス中将、確かに俺は市民として地上の平和を望む。 安心安全の暮らしが一番だ。 けどさ——その代償で、アンタを失うというのなら俺はそんな仮初の平和なんかいらさないよ。 だから言わせてほしい」

俊は背筋を伸ばし、レジアスに頭をさげた。

「今まで地上の平和を守ってくださり、ありがとうございます」

そして、頭を上げ笑顔を見せる。

「そしてこれからも、守ってください。 正々堂々と自信を持って誇らしく、このモニターに映っている、戦士達と共に」

その言葉を聞いて、レジアシはつい俊に問いかける。

「私は……間違っていたのだろうか……？ 違法に手を染めることは……間違っていたのだろうか……？」

「それはこれから考えていくんですよ。 あなたはこれまで違法手段で地上を守ってきた。 次は合法手段で地上を守ってみてください。

おのずと答えは出てくるはずですよ。 私は自慢したいので、合法を薦めますが」

クスリと笑った俊に、レジアスは卑屈な笑みを漏らした。

「……いまさら間に合うはずもない」

「間に合いますよ。 ちよつと寄り道しすぎただけですから。 それに、そんなに心配なら私の理想を教えましょうか？ 何故、こんなことをするのかその理由つきで」

俊はレジアスに話す。 自分が何故此処にいるのか 何を成そうとしているのか それを最後まで聞いたレジアスは思わず笑った。 当たり前前の反応を見せた。

「そんな荒唐無稽のことが、できると思っているのか？」

「できますよ。 所詮、私の考えた理想です。 現実に落とすな



なんていとも容易い。ゲームなんてそんなもんですよ」  
「……………ほお、そこまでいうのなら試してみるか？」  
「？」

レジアスの言葉に、隣に來たはやてと二人首を傾げる。  
「手を貸すといっているのだ。勿論——失敗したら犯罪者として逮捕するがな」

その言葉にようやく合点のいった俊は笑みを浮かべる。  
「それはいい提案ですね。しかしながらレジアス中将、手を貸すつもりならば覚悟しておいてください。私、馬車馬のように働かせますので」

「年寄りは劳わるものだろうに」

二人は握手し、俊とはやては部屋を後にした。モニターには地上部隊の敗北が記されているが、レジアスはとても誇らしそうな笑みを浮かべ、拍手を送った。これから始まる——途方もない理想を目指して歩む大切な仲間一杯の拍手を送るのであった。

☆

地上本部の廊下を俊とはやては仲良く肩を並べて歩く。

「それにしても血大丈夫なん？ 一応、止血はしたんやけど…………」

「たぶん大丈夫だろ」

「それにしてもレジアス中将、ほんとに大丈夫なんかな？」

「べつにレジアス中将は地上の平和のために違法行為に手を染めたんだぜ？ 大丈夫に決まってるさ。まあ、これからが大変だと思っけどな。

機を見て、自白するらしいし。意外と真面目な方だな」

「真面目だからこそ、…………ということやろか」

「かもな。それはそうとはやて——」

「ん？」

足を止めた俊に合わせる形で止まったはやては、横にいる俊に振り向く。

「お前……………いつの間に3人に増えたんだ？」

「……………は？」

顔を赤くした俊は、定まっていなない焦点ではやてを見ていた。一

目見てわかる、危険信号である。

はやてが何か言葉を発する前に、俊はゆっくりとはやてに体を預ける形で倒れこんだ。勿論、地上本部の廊下には少なからず人もいる。しかし、俊の体は既に限界らしく人目も憚らずはやてを押し倒した。

その光景を見ていた局員はこう語る。

『八神はやて二佐、とてもうれしそうな表情で押し倒された自分を携帯に収めてましたよ』

☆

“イベント”を終えた高町なのはとフェイト・T・ハラオウンに届いた写真つきメールは衝撃的なものだった。なにせ自分の幼馴染（へっぽこ）が親友である八神はやてを押し倒していたのだから。しかもはやては乙女の表情で頬を赤らめながらである。何かあつたに違いない。二人の女としてのカンが囁きかけている。だからこそ、なのはとフェイトは“イベント”が終了した後、大物たちに挨拶した後さつさと八神家にカチコミにいった。

そして現在——二人（他数名）は、『俊とはやての愛の巣』とプレートに書かれ下げられている部屋の前まで来ていた。なのはは無言でプレートを引きちぎり遠くに投げ捨てる。それを見た瞬間、フェイト以外の面々が一定の距離を置いた。

なのはがドアノブに手をかけた瞬間、室内から男女の声が聞こえてきた。勿論、俊とはやてである。

『しかしまあ、あの後いきなり血が大量に出てきたのには驚いたで。

俊は知つとつたん？』

『知識だけなら……あつただけど。本当にそんなことが起こるとは思わなかった』

『次からは気を付けないあかんで。激しくするのはええねんけど、それでアンタがダウンしたら元も子もあらへん。今度あんなことしたらほんま怒るで？』

『はやてのはキツイからな……、今度からは気を付けるよ』

ブチイッ!!

なのはの頭の血管が切れ、今度こそなのはは怒鳴りこむためにドアを開ける――

「あれ？　なのはちゃん、なんできたん？」

「……なのは？　丁度よかった……、一人じゃ家に帰れそうになかったんだ……」

そこでなのはが見た光景は、ミニスカにタンクトップのはやてが俊の腰より少し下の位置に自分の下半身を押し当てている光景であった。俊は赤ら顔で少し息を乱しながら無意識になのはに手を伸ばした。

ついになのはの血管が切れた。

そこから始まるキャットファイト、それを守護騎士たちは「やれやれ……」と呆れながら見学し、新人達はただただ恐怖していた。

そんな中、フェイトは俊に近づき、掛布団をたくし上げ確認した後、ほっと一安心して俊に問う。

「どうしたの？　元気ないみたいだけど」

「……風邪が悪化したみたい……」

上矢俊、ここにきてまさかの体調不良である。

## 91. 小休憩1

「イベント」から一夜明けた朝、俊は相も変わらず自分のベッドで寝込んでいた。

「うーん、39.8度か……。もう、なんでこんなになるまで黙ってたの？」

「いやー、どうしてもここまでではスピードが大事になってくるから休めなかったんだよね」

「まーた訳のわからない言い訳を」

マスクをしてもわかるへらへらつとした顔で笑う俊に、体温計で熱を測っていたフェイトはため息を吐く。顔を赤くし、咳を何度も何度も繰り返す俊。フェイ

トは俊に水差しを傾けながらチラと横を見ながら問う。

「で、どうするの？ アレ。間違はなく俊のせいだと思っただけ」

「いやー……。パパ冥利に尽きるな」

「ちゃんと現実を見なさい」

フェイトと俊が話しているのは俊の部屋。そして、開け放たれた

俊のドアの前では――

「いやあー！ ヴィヴィオもパパとねるー！」

「だーかーらー！ パパはごほんごほんしてるから一緒に寝れないの！ ヴィヴィオまで風邪になっちゃうでしょ！」

「ヴィヴィオかぜひかないもん！」

「ヴィヴィオくらいの子が一番危ないの！」

ドアの前では俊のベッドに駆け寄ろうとするヴィヴィオと、それを止めるなのはの姿があった。ヴィヴィオの目には涙がたまっていた。

「パパがしんじやう！ パパがしんじやうもん！」

「いや、風邪くらいじゃ俊くんは死なないから……。高校時代、浮気したときにフルボッコにしたけど死ななかつたし、大丈夫だと思うよ？」

「むくくっ！なのはママはパパのことすきじゃないからそんなこと

「いえるもん！」

「なっ!? わたしほどパパのこと愛してる人はいないもんねー! ヴィヴィオのパパLOVE度より100倍は好きですー!」

娘相手に大人げない姿を見せるママ(19歳/職業・魔法少女)。

娘は隣にいる自分のペットに目を向け、お願いする。

「ガークン、なのはママをやっつけてー!」

二人のやり取りを見ていたアヒルのガークンは、ここで自分に振られるとは思ってなかったのかいささか驚いた顔をする——が、それも一瞬で大好きなヴィヴィオのお願いに快く頷き、なのはの前に立つ。

「へー……、ガークンヴィヴィオの味方するんだ。 そう……」

「ヴィヴィオ、アイテガワルイ、アキラメヨウ」

「ガークンっ!?!」

なのはと対峙してからおよそ3秒、ガークンは素直に負けを認めるのであった。 頼みの綱のガークンが降参した以上、ヴィヴィオ一人での戦いとなるだろう。

「ヴィヴィオ? パパはごほんごほんで、いまとつても辛いのだ。 だからなのはママと一緒に下でゲームしてよ。 ね?」

ヴィヴィオの目線と同じ目線になるように、なのははしゃがみこんでヴィヴィオに諭す。 普段のヴィヴィオならこれで頷き、なのはと一緒に下でゲームをするわけだが今回は違っていた。

ヴィヴィオは首を横にぶんぶん振った後、

「パパがしんじやうもん! ヴィヴィオがそばにいないとダメなの!」

そう主張した。

これにはなのはも困り果て、後ろでその様子を見ている二人に視線を向ける。

しかしヴィヴィオのこの行動も、ヴィヴィオの視点に立ってみれば当然のことだろう。 ヴィヴィオにしてみれば、パパである俊はいつでもどこでも元気な人物なのだ。 どんなときでも笑顔で自分だっこしてくれて、自分のわがままを聞いてくれる大好きなパパなのである。 そんなパパが、ベッドで辛そうな顔をしているのだ。

ヴィヴィオからしてみれば一大事であろう。

「ヴィヴィオがきてから俊くんずっと元気だったし、ヴィヴィオの言い分もわかるんだけどね……。ヴィヴィオのことを考えると、こればかりは譲れないんだよな」

そう小さくなのはは呟いた。目の前には、パパに向かって走り出しそうな娘の姿がある。正直なところ、なのはは俊に少しばかり嫉妬していた。こんなにも娘に思われているのだ。羨ましい限りである。

「でも——ダメなものはダメです！」

「あうっ……！」

がっしりとヴィヴィオを前からホールドするなのは。ヴィヴィオはそれに抵抗しながら、子供特有の言葉をしゃべる。

「なのはママのばか！」

「バカじゃありません」

「なのはママのあほ！」

「アホじゃありません」

「なのはママのとしま！」

「ママはまだ19歳です！ ピチピチでいまが一番かわいい年頃です！ それに貰ってくれる人がいるからいきおくれにもなりません！ そうだよね、俊くん！」

『えっ!? も、勿論！ なのはみたいな可愛い娘がいきおくれなんかになるわけないだろ！ ……まあ、できれば俺と結婚してほしいなあー、とは思っけど……』

『……………』

『いたっ!? フェイトさん、俺病人なんですけど!?!』

『バーカ……。 ……俊がぼーっとしててよかった』

二人は二人でなにやらやっているみたいである。それはそれとして、なのははヴィヴィオである。なのはは俊の発言を聞いて、満面の笑みを浮かべながらヴィヴィオに喋る。

「ほーら、パパはなのはママのことが大好きでしょー。ほら、ヴィヴィオは娘なんだしこれ以上パパに迷惑をかけちゃいけないから下

に行くよ」

何故か微妙に棘のある言い方をしてきた。娘相手に大人げなさMAXの母親である。ヴィヴィオはそれでも頬を膨らませながらなのはに對抗する。

「パパはヴィヴィオのことがだいすきだもん！　パパはヴィヴィオのおよめさんになるの！」

「残念でしたー。　俊くんはなのはママのお嫁さんですー」

『おめでどう俊。　ついに性別の壁すら越えることができたね』

『時を駆けた少女ですら性別の壁は越えられないという事実を二人はわかっているんだろうか……』

『さあ？　けど、そろそろヴィヴィオとなのはをどうにかしないとご近所さんに俊が女の子だったという新事実が発覚したあげく、5歳に手をあげるレス女になっちゃうよ』

『俺のことはどうでもいいけど、ヴィヴィオには笑ってほしい。』

「おーい、ヴィヴィオー！」

いまだ、どちらの嫁なのかで喧嘩していたのはとヴィヴィオだが俊の呼びかけによりその喧嘩も終わりを迎えた。　俊に呼ばれたヴィヴィオは、普段のにこにことした笑顔で寝ている俊に抱きついくる。

「パパ、だいじょうぶ？　だいじょうぶ？　しんじやうの？　しんじやうの？」

「大丈夫、パパは死なないさ」

しつこいくらい真剣に質問するヴィヴィオに、俊は頭を優しく撫でながら答えていく。　なのはは指をくわえて羨ましそうに見ていた。「ヴィヴィオ、夜までには治すからそれまでなのはママと一緒にいてくれないかな？　それに、なのはママはヴィヴィオのことが心配だからあんなこといつてるんだからな？　嫌われても、疎まれても、それでも娘のことが心配であんな憎まれ役を買ってくれたんだ。　そこはわかるか？」

「……うん」

「よしよし、いい子だな。　ほら、だったらなのはママに言わないとい

けないことがあるよな?」

「……うん」

そつとヴィヴィオを撫でる俊の手が止まる。ヴィヴィオはとてととなのはのほうに歩いていき、

「なのはママ、ばかとかいってごめんなさい」

そう謝った。なのはは笑みを浮かべながら、

「はい、よくできました。ヴィヴィオは偉いねー。流石私たちの

自慢の娘! ママもちよつと熱くなっちゃったね。ごめんなさい」

「ううん、いいよ」

二人して抱き合い、仲直りのキスをして照れたように笑いあう。

なのははヴィヴィオをだっこすると、様子をみていた俊に手を振った。

「早く治してね。まってるから」

「ああ、すぐに治すよ」

俊となのはは手を振って別れた。ヴィヴィオをだっこしたなのははそのまま階下へと向かう。フェイトと俊に二人の話声が聞こえてきた。

『よし、ヴィヴィオ。パパのためにお昼ご飯作ろつか』

『うん! ヴィヴィオがんばる!』

『ガーくんも手伝ってね?』

『ハイ!』

「……………」

その話声を聞いて、フェイトと俊は固まった。

「フェイト、二人の調理を止めてくれないかな……? いまの俺の胃ならとんでもないことになる」

「私も俊を死なせたくないし、全力で止めてくるよ。けどその前に

俊——手を離してくれないと動けないよ?」

「……………」

無意識のうちに俊はフェイトの手を握っていた。フェイトはにやにやと笑いながら俊に問いかける。

「二人はさびしいのかなー、俊? さびしんぼうで甘えん坊の俊?」



「べ、べつにさびしくなんかねえよ！」

「あ、そう。それじゃもう行くね」

「あつ……」

フェイトと俊の手がするりと解けると、俊はフェイトの服を無意識のうちに掴んでいた。フェイトが振り向くと、俊は冷や汗をだらだらと流しながら言い訳の言葉を探し――

「えつと……、さびしいのでできればすぐに来てほしいです……」

観念したかのように、うつむきながら小さな声でフェイトにお願いする俊。フェイトは、そんな俊を愛しそうに抱きしめると頬にキスをし、そのままドアの前まで移動する。移動したフェイトはくると俊に振り返ると、唇に人差し指をあて

「今日は私が新婚の新妻並みに手厚い看病をしてあげる♪」

そう宣言し、上機嫌で去って行った。俊は意識を失うように夢の中へと旅立った。

☆

ほんと、なんで病人のときの俊は母性というか、庇護欲をそそられるんだろう……。けども、つつい苛めたくなっちゃうし、困ってる姿を見たくなくなっちゃう。まあ、いつもの俊もみたいしやっぱり風邪は治ってほしいかな。

私は俊の部屋からキッチンへと移動するために階段を降りる。

そこに、なのはとヴィヴィオの声が聞こえてきた。

『なのはママっ!? おなべのなからまものがでてきたよ!?』

『ぎゃあー!? ガーくんやつつけて!』

『マカセロー!』

……いったい、いつから家は魔界につながるゲートを引いたんだろうか。というか、なのは。鍋から魔物を呼び寄せるなんてレベルが高すぎるんだけど。

自然とため息が出てしまったけどしょうがないよね。

そう自分に言い訳をし、なのは達がいるキッチンへと向かう

「なのはー、ヴィヴィオー、そんなに食べ物で遊んじゃ――」

「(・ω・)」

「えつと……」

「(、ω……)」

「あ、うん。おとなしくゲームしとくんだね」

「(、……)」

ヴィヴィオをだっこしたなのはがショボンとした顔でてくてくとリビングへ向かっていった。あ、あんなに落ち込むほどの酷い出来だったんだね……。どれくらい酷かったのかな？

「……………」

はっ!? あ、あまりの酷さに現実逃避してた!?

「ま、まずはキッチンの片づけから始めようかな……」

スポンジに洗剤をつけ深呼吸をした後、私はこの悪魔たちと戦うのであった。

## 92. 小休憩2

トントントントン、とキッチンからは小気味よい包丁の音が聞こえてくる。家の労働の一切を担っている俊が風邪で倒れこんだのが昨日のこと、そして今日はその俊に代わってフェイトが家事を担当することとなったのだ。高町なのは？ 家を燃やすつもりか。

フェイトが俊のためにおかゆを作っていると、背後から何者かの視線を感知した。フェイトは後ろをそつと振り向く。

「ω・、」

「な、なのは……？」

「( ) ミサツ」

「……」

……かわいい。フェイトは先ほどからのなのはの行動をそう結論付けた。最初はおとなしくゲームをしていたのはだが、次第に飽きてきたのかはたまた俊のことが心配なのか、しきりにフェイトが担うキッチンに近づこうとしては去っていく。先ほどからその繰り返しである。ちなみにヴィヴィオはガークんとゲームに熱中している。すっかり涙も消えていた。

フェイトは一つでおかゆを作りながら、もう一つで三人分の昼食を作りつつ、なのはに声をかける。

「えつと……手伝いたい？」

「(コクコク)」

「それじゃ、お皿をお願いしてもいいかな？ 大きいのを二つと小さいのを一つ。今日のお昼は豚肉とお野菜の辛味噌炒めにするからさ」

フェイトのお願いになのはは首を縦に動かした後、食器棚から大きな皿を二つと小さな皿を二つ取出し、フェイトに見せながらキッチンに置く。いちいち仕草が可愛く、フェイトは胸の辺りがキュンとした。

「それじゃ次は( )飯をよそってくれる？」

なのはは( )飯茶碗を取出し三人分をそようとテーブルへと置きに

いった。フェイトはそれを見送った後、フライパンから出来上がった豚肉と野菜の辛味噌炒めをなのはが用意してくれた皿に盛りつけていく。盛り付けが終わった直後になのはが丁度よく来たので、フェイトはなのはに運ぶように言いつける。それを了承したなのはをみて、フェイトは俊のおかゆの最終段階へと入った。既に出来上がりつつおかゆに卵を落とし完成である。それにしてもこの女性、作る料理がミスマッチである。

「あ、先に食べて。私は俊にご飯食べさせてくるから」  
なのはとヴィヴィオにそういつてフェイトは二階へと上がっていく。その顔は心なしか嬉しそうであった。

「もしかしたら、『やっぱり俺にはフェイトがいないとダメなんだ……』とか言われたりして?」

そんなことを考えながら、フェイトは俊が寝ているドアをノックした。

☆

頭がぼーっとする。体がふわふわと空を漂っているような感覚に陥って、これが夢なのか現実なのかわからない。

コンコン

『俊ー? 入るよー?』

俺のエプロンを着たフェイトがおぼんを持って入ってきた。エプロン姿がよく似合うよな。まるで新妻みたいだ。いや、今日は新婚の新妻みたいにしてくれるんだっけ? ああ、風邪ひいてよかつた。

コトンとおぼんを置いたフェイトは俺の背中に手を回し上半身を起き上がらせると、前髪をあげて額をくつつけてきた。

「うーん、まだまだ熱が高いね。おかゆ作ってきたんだけど……食べれる?」

小首を傾げながら聞いてくるフェイト。ああ、可愛いなあ。なんでこいつはこんなに可愛いんだ……。

けど、本当にフェイトがここまでしてくれるんだろうか? なんだ

か夢のような気がしてきたぞ。

フェイトが蓮華をもつてふーふーとおかゆを冷ましてくれている。そんなフェイトを見て、俺の体は自然と動こうとしていた。それに必死に自制を効かせようとするが、体調不良のせいか思い通りにいつてくれない。

けどまあ、いいか。

どうせ夢なんだ。夢の中でくらい、普段できないことをしても大丈夫だよな、害はでないんだし。フェイトにキスしても大丈夫だよな。俺だつて好きな娘を前にして完璧に抑えることができるほど、できた人間じゃないんだしき。

☆

フェイト・T・ハラオウンはいまの現状が理解できないでいた。

「……!?」

声を出そうにも声を出せないフェイト。しかしそれもそうだろう。何故ならフェイトの声を発する場所である唇を、上矢俊が塞いでいたのだから。

思わず手に持っていた蓮華を落とすフェイト。蓮華はベッドのシーツに吸い込まれるように落ち、シミを作った。

そつと唇から離れた俊は、そんなフェイトを見てクスリと笑った。

「ダメじゃないかフェイト。食べ物で粗末にしちやいけないよ」

落ちた蓮華を拾い、置いてあるおかゆをすくう。熱を冷ましながらおかゆを食べた俊は数回咀嚼した後飲み込んだ。ぺろりと舌舐めずりをしてフェイトに蓮華を向ける。

「フェイト、これちよつと塩分が多いかな？ おかゆに塩を使うときは気を付けないと、すぐに塩分過多になっちゃうぜ？」

「へ？ あ、ご、ごめん……」

思わずフェイトは謝ってしまう。目の前に人のために作ってきたのに、何故かその人に注意されてしまうフェイト。しかし俊はそんなことなどお構いなしにおかゆをすくいフェイトの口に持って行った。

「ほら食べてみろよ。 ゆっくり咀嚼していくとわかるぜ？」

少しおどおどしながら、ぱくりと勢いよく口に含んだフェイト。そのままもぐもぐと咀嚼し――

「あ、ほんとだ。確かに多かったかも。……むー、でも俊のために作ったんだし……」

頬を膨らませるフェイトに、俊はゆっくりとフェイトの髪を撫でながら近づき、ぺろつと舌でフェイトの唇を舐めた。

「――なっ!？」

「うん、これくらいが丁度いいよ。ん？ どうしたんだ？ フェイト」

フェイトは自分の顔が赤くなるのを自覚する。それと同時に今度こそ動揺した。

「しゅ、しゅんっ!?! ちょ、ちよつとどうしたの!?!」

ガバつと俊の両肩に両手を置くフェイト。俊はそんなフェイトの手を取り、ゆっくりと自分の胸の前にもっていく。

「ごめんなフェイト。あまりにフェイトが可愛くて、あまりにフェイトの唇で艶やかで、つつい舐めてしまったよ。やっぱり迷惑だったよな?」

「い、いや……べ、べつに迷惑ってわけじゃ……」

ここで嫌と言えないフェイトは自分自身に叱咤する。そんなフェイトを見て、俊はゆっくりと抱きしめた。フェイトの金色で手で梳くと聞えることがない流れるよ

うな金髪を撫でながら、優しい声色でフェイトの耳に囁きかける。

「ごめん、フェイトを困らせて。やっぱり俺ってダメな男だな……」「そ、そんなことないよ!?! ほ、ほら私はこんなに元気だから!」

顔と顔とが見れる距離まで引き離れたフェイトは、にっこりと笑顔を浮かべる。それを見て、俊もニッコリと微笑んだ。

「やっぱり、フェイトには笑顔が一番だ」

「あう……ありがと……」

い、いったいどうしちゃったの!?! いつもの俊じゃないよねっ!?!

フェイトは心の中で叫ぶ。しかしそんな叫びも俊には届くはずもなく、フェイトは腰を掴まれ胡坐を掻いた俊の膝に乗せられた。

あわあわするフェイト。手を背中に回す俊。そしてもう一度キスをする。優しくゆつくりとキスをする。

……………べつにいつもの俊じゃなくてもいいかも……………

フェイトは心の中で呟いた。当たり前のようにその呟きは俊に届くはずもなく、俊はフェイトに話しかけてきた。

「フェイトはほんと可愛いよな。それに人当たりもいいし、仕事だってできる。なんでもござれの美人だよ」

「そ、そんな……………」

「けど、だからこそ俺は心配になっちゃう。誰かにフェイトを取られるんじゃないかってさ」

「……………俊……………?」

「なあフェイト。俺にはお前が必要なんだ」

俊は強引にしかし優しく、フェイトをベッドに押し倒す。

フェイトは抵抗しないまま、成すがままに押し倒される。

ポジションが上になった俊はフェイトに安心感を与えるように笑みを浮かべ、キスをおとす。今度はフェイトの唇から自分の舌を侵入させ、フェイトの舌を絡ませる——所謂ディープキスである。

驚き引つ込めようとするフェイトの舌を俊は逃がさず、まるで手を取り抱き寄せるようにフェイトの舌を離さない。幾ばくもしないうちにフェイトも積極的に自分の舌と俊の舌を絡ませる。『もつと欲しい……………もつとしよう……………』言葉にはしないが、フェイトは目線で俊に訴えかける。手を俊の首に回し、決して離さない意志を見せた。二人だけの空間には卑猥な音と、時折漏れるフェイトの声だけが聞こえてくる。

何分が経っただろうか、俊はそつとフェイトの口腔内から自分の舌を離す。「あつ……………」思わずフェイトはそう声を漏らした。細かい銀色の粘着質のある糸が先程までの二人のつながりを一層認識させる。

「フェイト、かわいいよ……………」

「ふあつ……………く、首筋にキスしないで……………。す、するならここに……………」

自分の指で唇を指さすフェイト。おねだりするフェイトに俊は首を傾げながら、手を太ももにもつていった。

「そこもいいけど、俺はこっちもしたいな？」

ゆっくりと愛撫しながら俊は首を傾げながら聞く。フェイトは視線を四方八方に向け、誰もいないことを確認する。全神経を集中させ、気配を感じないことを確認

する。その間にも俊は太ももを撫で続け、ゆっくり焦らすように下腹部、フェイトのスカートの中へと手を忍び込ませる。ビクッ、フェイトは緊張で体が跳ねる。

それを見た俊は、フェイトの緊張を解くためかキスをし、意識をそちらに向けさせる。フェイトの目は幸せそうにとろんとしていた。俊はゆっくりとフェイトの下着越しに指を這わせていく。

「じ、焦らさないですよ……俊」

「フェイトが可愛いから、つい」

「……もう。もつとして……、私を愛して……」

ジューーーーーーッ

『シャマルさん！ それ以上近づくと録画がバレちゃいますって!?!』

『大丈夫ですよティアナ。いまのフェイトちゃんは察知する能力は完全に機能してないようなものですし』

『それにしてもひよっところさん……、意外と積極的なこともできるんですね……』

『ありや完全に現実と夢の区別がついてない状態だな。』夢だから

普段できないことをしても大丈夫。だって夢だし嫌われても俺には害がないしな”とか考えてる

ぜ。 さっさと死ね、クズ野郎』

『シグナム、ヴィータは荒れてるな』

『仕方ない。見舞いのために午後の仕事を全部断ってきたというのに、当の本人はテストロッサといちゃいちゃしていたんだ。自腹でフルーツまで買ってきたというのにな。まあ、あのクズが死ねという所には同意するが』

『それにしてもはやてちゃん遅いですねー。まだなのはちゃんに入



れてもらえてないんですか?』

『主はやては色々と前科があるしな……』

ドアの向こうからティア、シャマル、スバル、ヴィータ、ザフィーラ、シグナムのやり取りが聞こえてくる。その声を聞いた瞬間、先程まで幸せに浸っていたフェイトの意識が急激に現実へと引き戻された。

思わず俊を突き飛ばし、力強くドアを開ける――

「二二編集してから渡しますので」

「まだ何もいってないんですけど?」

ドアを開けると、全員がにやにやとした笑みを浮かべながら立っていた。フェイトは顔が赤くなる。

「フェイトちゃん、口の周りの唾液は拭いたほうがいいですよ?」

「へっ!? い、いやだ、私ったら……」

袖でぐしぐしと拭うフェイト。それを愉快そうに見る者たち。

フェイトはその視線に気づいたのか、あわあわと慌てふためいた後、

「ちよ、ちよっとシャワー浴びてくる!」

そう言い残しその場を脱兎の如く逃げ出した。

それを見送ったヴィータは俊の部屋へと入りそこで、ようやくしつかりと頭が働いてきた俊の顔面に蹴りを躊躇いなく打ち込んだ。

上矢俊、またしても意識を失うのであった。

### 93. 小休憩3

「お〜！ すごいよシヤマル先生！ みるみる体が軽くなっていく！  
ありがとう！」

「それでも今日はちゃんと安静にしておかないとダメですよ？ 確かに市販の薬よりは効果はありますが、完全に治ったというわけではありませんので」

シヤマル先生が人差し指を立てながらしつかりとした口調で告げてくる。俺はそれに何度も何度も頷きで答えた。

ふと、沢山の気配を感じて起きたのが10分ほど前のことであり、部屋にはヴォルケンや嬢ちゃんが俺の漫画やゲームを好き勝手に使っている光景が広がっていた。そこでシヤマル先生が俺が起きたことに気が付き、あれよあれよという間に風邪クスリを飲ませてくれたのだ。市販の粉よりも飲みやすい、いかにも効果がありそうなクスリを飲んで数分が経つたいま、俺はクスリの効果は体で体験していた。

「あれ？ そういえばはやては？」

「あ？ はやてなら玄関先でなのはにつかまつてるんじゃないやねえの？」

「ふ〜ん……。ちよつと様子でも見てくるか。風邪も大丈夫そうだし」

ベッドから降り、部屋を出ようと腰を浮かした瞬間、ロヴィータちゃんが俺の腕を掴んできた。そのまま、強引に仰向けに倒される。

「止めろ。お前が行くと面倒なことになる。それにいきなり活動をすると体に悪い」

「ロヴィータちゃん……。結構大胆なのね……。優しく……。してね？」

「聞いてたか？ いまのあたしの話ちゃんと聞いてたか？ 復唱できるか？」

バカを見るような目でこちらを見てくるロヴィータちゃん。幼女からそんな目を向けられるなんて、僕ゾクゾクしちゃう。

「それに、大胆さならお前に負けると思うぞ。 お前あんなことでき  
たんだな」

「え？ なんのこと？」

「……いや、覚えてないならいいや」

「え？ なに？ なんなの？ 俺何かしたの？ なんで皆してヒソヒ  
ソ話してるの？ ねえっ!? ちよつと怖いんですけど!」

焦る俺の肩にシグナムが優しく手を置く。

「ま、主はやてに手を出さなければそれでいい。 後は高町あたりに  
刺されてれば大丈夫だ」

「それ絶対大丈夫じゃないよね？ プログラムと生身の人間を一緒に  
するな」

釈然としない思いを抱きながらも、シグシグからナイフを受け取り  
ロヴィータちゃんが持つてきてくれた果物を切っていく。

それにしてもこの果物。 かなり高価なものようだが……、

「ロヴィータちゃん、これいくらした？」

「お前の小遣いよりは少ないぞ。 だがお前がおいそれと買えるほど  
安くはないぞ」

「……………」

予想より万単位で高くて手が止まってしまった。

「ロヴィータちゃん、金大丈夫だった……？」

「収入ゼロのお前と一緒にするな。 これくらいわからないに決まっ  
てるだろ」

「ロヴィータちゃんマジイケメン。 それにくらべて——」

チラリと横を見ると、嬢ちゃんとスバルが必死に俺のプライベート  
パソコンのロックを解除しようとしていた。 なにやってんだあい  
つら。

『あ、あれ……？ 絶対に『なのフェイラブ』だと思ったんだけど』

『うーん、『なのはたんちゅっちゅ』だと思ったんだけどなく』

……こいつら、かなりニアミスしてやがる……!?

「なあひよつとこ。 あのパソコン解除してきていいか？」

「やめて！ あいつらには知られたくないから！」

「まあ、私たちにパスワードが知られている現状を鑑みると、貴様のパソコンのロックなんて無意味に思えるのだがな」

「そもそも誰だよ、俺のパスワード流出させた奴。しかもめっちゃ規模が狭いし」

いや、規模が狭いのはいいことなんですけどね？ でもあの中には日記も入ってるわけで、それを知られたら確実におちよくられること確実なわけで。

「……まあ、いつか。アレに辿り着くには10回ものパスワードを入力する必要あるし大丈夫だろ。 あ、

シグシグ、りんご食べる？」

「いや、私はバナナをもらおう」

「やだっ！ この子つたらこんなな人がいるところでバナナを口に含みたいだなんて！ やっぱりピンクは淫乱なのねっ！」

「バナナでそこまで反応できるお前は間違いなく変態だろうな」

ごめんシグシグ、カマ口調が気に入らなかつたのなら謝るからレバ剣をこちらに向けるのは止めてください。

シグシグが見舞い品の籠の中からバナナを一本取り器用に皮を剥きながら食す。 なんてこいつはいちいち騎士っぽいんだろう。

緊張でトイレ直行する子なのに。

しょうがないからロヴィータちゃんにあげよう。

「はいロヴィータちゃん。 あくん」

新婚バリのいちやいやいや雰囲気を出しながらロヴィータちゃんの口元にりんごを持っていくと見事に手を叩かれた。 ここまで嫌われてるとそういうプレイかと思ってしまう。 でもベッドに落ちたりんごに謝罪しながら食べるロヴィータちゃんはめっちゃくちゃ可愛いです、はい。

あ、咽喉が乾いてきた。

「ひよつとこ、病人は水分を沢山とり汗を流すことも仕事だ。 ほら、水分を取れ」

「……………」

「ん？ 何故お前はそんなに悲しそうな顔をしているんだ？」

「いや……なんでもない」

なんでザツファイヤーが水差し取ったの？ ザツファイヤーとフラグ作  
れってか？ ぶっ飛ばすぞ。

とはいえ、素直に感謝を述べながら水を飲むことに。 うん、清涼  
感が体に染み込んでくる。 頭もスツキリしてきたような気もする  
し。

ザツファイヤーにもう一度お礼を言って水差しを渡すと、キャラとエリ  
オが漫画を抱えながらこちらにやってきた。 いったい何事か？  
エロ本は隠してあるから見つからないと思うんだけど……、だから探  
しても無駄だぞそのバカ二人。 なんでさっきからこいつらは俺  
の部屋を荒らし回ってるの？ 俺に恨みでもあんの？ やめろ！  
そのファイギュアには触るな！

「あの、ひよっとこさん」

「あ、ロヴィータちゃん。 その珍獣二人を俺のファイギュア棚から  
遠ざけて。 というか、こつちに連れてきて。 ——それで、どうし  
たのよキャラにエリオ。 俺の見てる目の前でその漫画引き裂く気  
？ それはもうなのはさんの必殺技だからネタ被りになるので使え  
ないよ？」

「いや、えっと……そうじゃなくて」

キャラがモジモジとしながら漫画に目を落とす。 持っている漫  
画は日常系漫画ですか、ほのぼのしてて割と好きな漫画です。

「それ気に入った？」

「あ、はい！ とっても面白いです！ そ、その……出来ればお借りで  
きないかと……」

「いいよー。 ある分だけ取っていいよ。 いま20巻まで出てる  
し」

本棚を指さし、一列に並べてある箇所を示すが、エリオとキャラは  
二人して首を振った。

「いえ、今回は4冊で大丈夫です」

「あ、そう。 んじゃ、電話さえくれれば六課に持っていきこうか？」

「い、いえ……。 ここまで取りに行きます。 その……ご迷惑じゃ

なければなんですけど……」

「オツケーオツケー。深夜でも早朝でもいつでもいいよ。基本ガーくんが人の気配で起きるから大丈夫」

「ひよつとこ、それガーくんは大丈夫じゃないだろ。アレほんとにアヒルか?」

「きつとロストログアだから大丈夫」

「基準がわからん」

エリオとキャロの頭を撫でながらロヴィータちゃんと会話する。成程ねー、そりやエリオもキャロもまだ子供なんだし、この家にもっと遊びにきたいよな。もっと

こつちからも誘っていくか。

「ひよつとこさんひよつとこさん！これ借りてっつていいですか!？」

「流石にプレステ3は無理だ。諦めてくれ」

小脇にプレステ3を抱えたスバルが嬉しそうな顔して聞いてくるが、バツサリと切り捨てる。現在進行形でやってるゲームがあるし、流石に無理だよ。

「ひよつとこさん、この梨食べていいですか?」

「どうぞー、嬢ちゃん剥こうか?」

「あ、お願いします」

嬢ちゃんから梨を受け取り剥いていく。半分ほど剥き終わったら一口大のサイズに切り分け、シャマル先生が持ってきてくれた皿に乗せていく。嬢ちゃんはお礼をいながら受け取り、ぱくぱくと食べていく。うん、食べる姿が可愛いから先ほどのフィギュアの件は不問にしておこう。

皆も梨を食べることに夢中なので、全部剥いてから一息つくことに。

「ふう……。体調管理も満足にできないなんて、土郎さんになんて言われるだろうか……」

バレなければいいけど、なのはは絶対に喋るだろうし。

それに桃子さんから何か言われるだろうなあ。

微妙にへこみながら、りんご剥きを再開しようとした矢先、どたど

たと階段を上る音が聞こえてきた。

何事かと思ひドアのほうを眺めっていると、金色の髪にオッドアイ、アリス風の服に身を包んだ愛娘のヴィヴィオが心配そうな顔を見せながら顔を覗かせた。俺の顔を見るなりヴィヴィオは駆けだそうとするが、何故か部屋に入ろうとした瞬間に不安になった顔でこちらを見てくる。そして部屋にいる全員を見て、横にいるガー君を見て、最後に俺をみて、

「ヴィヴィオはいつでも……パパはだいじょうぶ？」

胸の前に手を置きながら聞いてきた。

はい死んだー！　いまの俺は萌え死んだー！

心の中で歓喜の声を上げながら、表情は優しく父親らしく優しく笑いかけながら「おいで？」そう声をかけ手を広げながら答えた。心配そうな顔から一転、ひまわり

のような笑みで俺にダイレクトアタックを決めてくるヴィヴィオ。

「えへへ……、パパもうだいじょうぶ？　もうへいき？　きょうヴィヴィオとねれる？」

「うんうん、もう大丈夫だよ。今日はヴィヴィオと一緒に寝れるよ」

「やたー！　パパだいすき！」

「俺もヴィヴィオ大好きだよ」

ヴィヴィオを抱きしめながら優しく頭を撫でる。

『ロリコンきめえ』

『しかも自分の娘だぜ？　こいつ絶対に手を出さぞ』

『成程、だから高町達にもあまり前に出ないんだな』

「なんでお前らはこの光景を素直に微笑ましそうな目で見る事ができないの？」

全員腐りすぎだろ。

ヴィヴィオは俺の評判が下がっていることに気が付くことはなく、「よいしょ……よいしょ……」と言いながら俺の膝にすっぽりとおさまってしまった。　下からこち

らを見上げながら恥ずかしそうに、けれど嬉しそうに笑うヴィヴィオにこちらも堪らず笑みを浮かべる。

「そうだヴィヴィオ、りんご食べるか？ ガークくんも」

「たべる！ ヴィヴィオねー、ウサギさんがいい！」

「ガークンハドラゴン！」

「ドラゴンはまた今度ねー。 きつと食べる所がなくなると思うから」

それにあれはちよつと時間かかるし。

今回はヴィヴィオを優先しようということで、りんごをウサギに剥くことに。 手元はヴィヴィオが見える位置に移動させ、肩にはジャンプしてきたガークくんが乗つかる。 しやりしやりしやり、剥くこと数分、綺麗に盛りつけられたウサギをヴィヴィオとガークくんが美味しそうに食べている光景が広がっていた。

それにしても、なのはもフェイトもはやても何してるんだろうか？

☆

家の玄関には高町なのはと八神はやてが立っていた。 いまだに靴を履いているはやてをなのはが見下ろす形である。

両者笑顔で会話する。

「なのはちゃん、そろそろ通してくれへんかな？ 親友やる？」

「人の男を横取りしようとする親友をわたしは持った覚えはないかな」

「いややわく、なのはちゃん。 ただの幼馴染を自分の男みたいにとらえとるん？ あー、だからわたしと俊とのイチャラブにも突っかかってくるんやな」

「いちやらぶ？ あれははやてちゃんが一方的に俊くんを食べようとしているだけであつて、まったく全然違うと思うんだけどな。あ、もしかしてはやてちゃんってそういう風にしか俊くと接することができないのかな？」

ビキビキ……！

なのはとはやての頭に怒りマークが浮かび上がる。

表情で笑顔であるが、その内面にどんなことを思っているのか？

そんな折、後ろから声をかける者が現れた。 体からは湯気が立ち上り、シャワーによる赤くなつた頬が可愛らしい、なおかつ魅惑なプ



ロポーションがより一層艶めか

しく見える、フェイトであった。フェイトはタオルで金色の髪から水分を吸いだしながら二人に声をかけた。

「何してるの？ ヴィータたちはもう俊の部屋にいるけど？」

「あれ？ フェイトちゃんシャワー浴びたんだ。お気に入りの下着履いてたのに？」

「う、うん。ちよつとね」

曖昧に笑うフェイトだが、自分の手が知らず知らずのうちに下半身に伸びそうになることに気が付き一瞬体が固まった。

「？ フェイトちゃん？」

「な、なんでもない！ なんでもない！ ほんとなんでもないから！

それよりはやて、いつまでそこにいるの？」

「なのはちゃんが入れてくれへんねん」

「ダメだよなのは。はやてだけ仲間外れはよくないよ？」

「うっ……。フェイトちゃんは甘いよ……、もうわたしが先に襲うもん……。逃げられないようにするもん」

フェイトにまで怒られいいじしだすなのは。そんなのはをフェイトは抱く。抱きながら頭をよしよしと撫で続ける。

「(やつぱ、なのはちゃんとフェイトちゃんはその組み合わせのほうが似合つとる気がする)」

なのはとフェイトが抱き合っている様子を見て、はやてはそんな感想を抱きながら階段を上る。と、そこに丁度いいタイミングで先に家に上がらせてもらっていたメンバーが降りてきた。

その先頭にはヴィヴィオがいた。

「あっ！ はやておねえちゃんだ！ あのねあのね？ パパはもうすこしねるからはいっっちゃダメだよ？ それにね、よるはヴィヴィオとおねえするの！」

「そっかー、よかったなーヴィヴィオちゃん。それじゃ、わたしはちよつとなのはちゃんとフェイトちゃんの部屋に用があるから2階に行くで。ほんならヴィータ、皆をよろしく頼むで？」

ヴィヴィオと手を繋いでいたヴィータが頷くのを確認して、2階へ

と上がったはやては一目散に俊の部屋へと向かった。

ノックなしに部屋へと入ると、俊が何かの資料に目を落としている最中であつた。はやての気配に気づき顔を上げた俊は、はやてを笑顔で招く。はやてはそれにた

め息を吐きながら、一冊のあらかじめ懐に忍び込ませていた資料を手渡した。

それを受け取りぱらぱらとめくる俊。資料に目を落としながら、俊ははやてに問う。

「不正局員これだけ？ たつたの40人？」

「元が少ない上に、レジアス中将の件でかなりの人数が手を引いたから、それだけやな」

「まあ、手を引いた奴らは行動を起こすことができない奴ばかりだからな。流れに乗せられる連中ばかりだろ。きつとこいつらは集団心理で、自然とホワイトなほうに行くだろうな。まあ、管理局を変えることができればこの手のタイプは問題ないさ」

俊の問いに答えるはやては、床に転がっていた雑誌を拾い上げ読み始める。

「それにしても、俊の言った通りそこにリストされているほとんどが疑心暗鬼に堕ちいつてたで」

「そりやそうだろ。レジアス中将は不正の中心人物みたいな立ち位置だったしな。なにせバックが最高評議会だし。そのレジアス中将が墜ちたんだ。次は自分か」

「もしれない」　「もしかしたら誰かが自分のことをバラしたかもしれない」　「そう考えるのが普通だろ。そうして精神も体も疲労させ、そこにこちらがアクションをかける。まあ、予定通りだな」

「だからレジアス中将を墜とした後に、一週間から二週間、何もアクションを起こさないっていうたん？」

「その通り。だからしばらくは、ここにリストしてある人物に軽く接触しておくだけでいいかもな。あくまで軽く、挨拶を交わす程度でいい」

「それで？ 俊はどうするん？ 不正局員相手にどう行動していくん

？」

「俺？ そうだなく、まあそれなりにしていくさ。不正局員なんだし、別に気遣うこともないしな。クズを相手にするときには、こつちはそれ以上のクズになることが大切だぜ、はやて」

「ごろんと寝転がりながら答える俊は、葉のせいなのかわからないが大きな欠伸をする。

「ほんと心配なんやで？ あんたのこと」

「大丈夫さ。俺は勝ち目のある勝負しかしない主義なんぞな」

「はやてはそんな俊を見て、肩を竦めながら結婚式の雑誌を眺めるのであった。」

## 94. 曲芸6

高校時代、一日だけアリサと二人きりで昼休みを過ごした日がある。そのときアリサは、上矢俊という人物のことをこう評価した。『自分に激甘、身内に甘く、他人に無関心な男よね』

購買で買った俺の紅茶を横取りしながら、アリサはそう平然と言っ  
てのけた。正直、アリサの評価に感心した。いつからかはわからない、いやきつと小学校に上がる前のあの事件の時だろうか。その時から、少しばかり感性が変わったのかもしれない。壊れたから変わったのか、はたまた壊れてなくてもこうなったのか。案外、俺はあの事件を言い訳に使っているのかもしれない。だとしたら、俺はかなりの親不孝者にあたってしまおうかな。

『自分に甘いのは当たり前。他人に無関心なものも当たり前。興味ない存在を見続けるほど、俺は暇じゃないんでな』

『自分に甘いのが当たり前なんて、いまのご時世では無理があるわよ。ほら、どこかの正義のヒーローは自分に厳しく律してるじゃない』  
『それがそもそもおかしいんだよ。自分の最大味方であり相棒は自分自身だ。世界は自分と自分以外の存在で成り立ってるのだからな』

『あんたの考え方、いつか身を滅ぼしそうね』

アリサがため息を吐きながら白い目を向けていたのを覚えている。

こればかりはしょうがない。あの時から、一部の例外を除いて俺はそう認識してしまっただから。

しかしまあ……、アリサが友達でよかったよ。

ところで、ここにて唐突に脈絡もなく話題を変更させてもらうが、人間とは面白い生き物で、自分より下に存在する者を認識すると途端に尊大になる生き物である。そこに例外は存在しない。人によつては、〃人間の醜い部分〃と評する者もいるだろう。しかしながら、俺はこう思う。

『〃醜い部分〃があるからこそ、〃綺麗な部分〃が映えるのだ』

例えば、人間は自分よりも外道な存在を目の当たりにすると、途端

に善行な人間へとシフトすることがある。それは「醜い部分」が存在するからであり、相手の潜在

している「醜い部分」が自分の「醜さ」を凌駕していた場合、脳の処理が間に合わないことよって起きる反動のようなものである。自分より下の者を認識したから、自分より下がいると自覚したから。希望が見えてしまったから。だからこそ、その者は変わることででき、かつ「綺麗な部分」を存分に見せつけることができた。

醜

いと綺麗は常に一心同体であり、表裏一体なのだ。人間は脆い生き物だ。

軽く手を払うだけで骨を折ることもでき、親しい誰かが傷つくだけで激昂する。

単純で単調で、醜く脆い、自己欲求と自己満足で形造られた存在。目の前にいる者たちがいい例だ。

管理局という巨大な組織を使って、自分の欲求を満足させる。今日までどれほど甘い汁を啜ってきたのか……想像するに難くない。きつと、高町なのはという存在に出会わなかったら、俺もこの者たちと同じような道を辿ったことだろう。そして最後には高町なのはという無敵のエースオブエースに勝負を挑み散っていく。そんな未来を何度も何度も想像してきた。何度も何度も妄想してきた。不思議なものだ。俺は彼女に殺されてもいいと思っているのだから。

これぞまさしく歪んだ愛情である。

「さて……ここに書かれていることがあなた方の罪状になりますが……異を唱える者はいないのでしょいか？」

白衣に身を包み、ピエロの仮面で顔を隠した俺は不正局員に告げる。誰か一人が肩を震わせ、こちらを見る。

「キミは……何が目的なんだ？」

「はて、どういう意味でしょうか？」

風邪をひいた日から2週間が経った今日、俺はレジアス中將とはやてとユーノを中心に集められた不正局員の資料を抱え、この部屋にき

た。八神はやてが事前に呼び出した不正局員、全40名がいるこの場所にだ。部屋に入室すると、すぐさま局員たちがそわそわとした目でこちらを見て、俺の姿を視認し硬直した。大方、はやてが来るものだとばかり思っていたのだろう。それか——自分達の悪事がバレたとも思ったのか。

悪事を働いた人物が一人残らず召集されたんだ、そう思っても不思議じゃないよな。

「キミの目的はなんなのだと聞いているのだ！」

ヒステリック気味の声を上げながら、俺に掴みかかってくる初老の局員。ハッスルしてますなあ、この男性は。目の下には濃い隈、それに明らかに人間不信になりつつある瞳。どうやら、自分達の悪事がバレるかもしれないというハラハラ気分を味わい続けるとストレスでこんな状態になるらしい。チラリと周りをみるが……、大方この初老の男性と同じだな。

ふむ……、逆説的に考えるとはやてだけがこの者達には希望だったのかしれない。いつ逮捕されてもおかしくない緊張の中で、八神はやてという存在だけがいつもと変わらない様子で挨拶を交わしてくれる。

人は不完全であるがゆえに、誰かを頼る生き物だ。以前、こういった話を猫モドキとしたことがある。

この者達からしてみれば、八神はやてだけが頼れる存在だと思ったのだろう。

『彼女は私に挨拶を交わしてくれるから、きっと私のことを見捨てないはずだ』

『彼女になら……』

目を追うごとに、そんな感情が支配する。それ以外に道が閉ざされていく。

俺がなのはに抛り所を見つけたように——この者達もまた、はやてに抛り所を求めようとしていたのだ。

心身ともに限界の中で、“当たり前”な行動を起こすだけで——人は簡単に堕ちていく。

この手のやり方は詐欺や宗教では常套手段である。

人の弱みに付け込み、相手の心を奪い、相手のスキマを埋め、相手を自由自在に操る。

金も地位も名誉も体も命すらも——簡単に手に入る。

全ては計画通りに事が運んでいる。精神的に不安定の中、まともな話し合いが出来るとは思ってないし、そもそも話し合いをしようとすると思わない。他人に付き合うほど暇じゃないんだよ。

だから夕食の献立を考えるのと同時並行で事を進めよう。

やるべきことは至ってシンプル。

——悪人になればいいだけさ。

掴みかかられていた手を握り返す。骨が軋む音が室内に響き、痛がる声が聞こえても素知らぬ顔で握り続ける。

「誰が俺に触ることを許可した、この家畜以下の生物が」

骨を折るのは得策ではない。何事もほどほどが大事であるし、ここで怪我を出せば不安定なこの者達は襲い掛かってくるかもしれないしな。

握っていた手を離す。離されていた手が支えとなっていたのか、どさりと初老の男性は崩れ落ち、こちらを恨みがましい目で見つめていた。それを見下しながら、

「そのような薄汚れた汚い眼でこちらを見られても困ります。眼球を抉り出されたいのでしょうか？」

凄んでみる。たった一言、いつもより低い声で喋るだけで相手は黙ってしまった。声を出すことができなくなった。

「賢明な判断をありがとうございます。こちら家畜以下の返り血を浴びるなど想像しただけで吐き気がしてくるのであります」

飛ばし過ぎな感じがして否めない。事実、超小型イヤホン越しのはやてからもストップボールが何度かきているし。それでも、俺の口は止まらない。ああ……いま

この状況がとてつもなく楽しい。

「さて、ここに集まってもらったのには勿論理由があるのですが、理解している方は沢山でしょう。——あなた方には私の駒になっても

らいます。 管理局を潰すためのね。 不正局員のあなた方には相応しい役柄だと思いませんか？」

左手を差し出しながら告げる声は軽やかで、それとは真逆に俺以外の局員は一斉に驚いた顔でこちらを見た。 何をそんなに不思議がっているのだろうか？

「おや、どうかしましたか？ そんな顔をして、まるで『管理局を滅ぼす？ ふざけるな！』 そう言いたげな顔をして」

「あ、当たり前だ！ 管理局を潰すなんて……そんなことがまかり通ると思っっているのか！」

恫喝するように野次を飛ばす後ろの男性に、俺はクスリと笑ってしまった。

「いやはや、管理局に寄生している害虫が正義面して何をほざいているのでしょうか？」

「当然であろう！ 管理局が潰れたら——」

「自分達が困るから、とでも？」

そこで言葉に詰まるのが、クズの証なんだよ。 人のこといえないけど。

「楽しいですよねえ。 皆が平和のために頑張っている最中、自分だけが汚職を働くのって。 楽しいですよねえ、面白いですよねえ。」

必死に頑張っている連中を嘲笑い

ながら、自分は安全な場所でモニターを見ているだけでいいのですから」

実に賢い生き方だ。 実に堅実な生き方だ。

野次を飛ばした男性に近づき、そつと頬を撫でながら俺は聞こえるようにハッキリと一字一句聞き取れるように言葉を紡いでいく。

「覚えておくといいでしょう。 地位なんてものは、残飯以下の価値しか存在しないということを」

ヴィヴィオが壊した俺のフィギュアのほうが価値があると断言できるほど、地位というものに価値はない。 服と同じなんだよ。 服は一生同じものを着ることはありえない。 いつかは脱がなくてはならない、その時——人は裸になる。 それと同様に、地位だってい



つかは脱ぐときがくるだろう。そんなものに固執して何になる？理想としては、なのはやはやと考えている俺からしたら、権力や地位に食らいついている人間を見ると同情してしまう。可哀想になってしまう。そして、壊したくなってしまう。

さて、そろそろ飽きてきたので本題に入ろう。

俺は入口から一番近い場所に陣取り、全員に向かって告げる。

「いいですか皆さん。私は何も私利私欲のために管理局を潰そうなどと考えていません。全ては救済なのです」

全員の頭に疑問符が浮かび上がってくる。

「考えてみてください。管理局の行っている行動を。思い返してみてください、管理局の実態を。名前が悪いなんて幼稚なことはいません。それよりよっぽど酷いことがあるのです。分かりますか？」

指を突出し一人に問いかけてみるが、相手は何が何だかわからないという風に顔を左右に振るだけに止めた。まあ、当たり前といっちゃ当たり前なだけだな。

「いいですか？ 管理局は治安維持といっていますが、世界の平和のためにと掲げてますが——そんなこと、実現不可能な夢物語なんですよ。この世に平和なんて存在するはずがない、「平和」という言葉自体が、争いによって生み出された言葉なんです。つまり、「平和」とは99%の日常と1%の争いから出来た言葉なのです。本来なら、争いをしていなければ、平和という単語は生み出されていないはず。そして、世界は「悪」と「善」の二つで成り立っている。争いと平和の二つで成り立っている。上層部の連中なら知っているはずでしょう。世界に平和なんてものは存在しないということ。だからこそ、管理局は治安維持が限度なんだということが。

——さて諸君、長くなってしまう申し訳ないが……つまり私の言いたいことというのは——」

すつと息を吸い込み、肺の中の空気を入れ替え、見下しながら上から目線で偉ぶりながら教えを説く。出鱈目で出任せを喋る。

「管理局という存在自体が——奴隷そのものなんです。世界という

飼い主に、出来ないことをやらされ続ける哀れな奴隷。 勿論、そこで仕事に従事している皆さん

も」

なのはが聞いたらどういった反応をするだろうか？ あいつはこういういった話題の時は真剣になるからな。

「可哀想とは思いませんか？ 底なし沼に落ちた荷物を拾ってこいといつているようなものです。 もがけばもがくだけ深みに嵌り、時間が経てば何もしくなくても悪化する

る。 そんな場所で一生を捧げるなんて可哀想だと思いませんか？ あなた達は選ばれた人間です。 管理局に洗脳されていない唯一の局員達！ さあ、どうでしょう？ 私と一緒に管理局を潰しませんか？ そのほうが、局員達のためでもあるんですよ？」

当然ながらこの誘いに対する答えは決まっている。 人間なんて簡単な生き物なんだ。 自分より下を見つけたら大きくなるように、自分より外道を見つけたらいきなり善へと走り出すように――

「……私はそんなことしたくない」

「わ、私も……」

「お、俺も管理局を潰すなんてそんなこと……いまさら」

――この通り、勝手に「善人」ぶろうとする。 笑えてくる。 人間の優柔不断さと身勝手さに笑みが零れてくる。 猫モドキは人間のことを分らないと言っていた。 当たり前である。 刹那の間に立っている場所を切り替えることができる存在を理解しようということのほうが難しいだろう。

だから言つてやる。 全てのことを柵に上げ、侮蔑と嘲笑を混じらせ言葉を送る。

「いまさら善人ぶるなよ、擬善者」

偽るのではなく、義に尽くすのでもなく、善に擬態した者共に言葉を送る。

「自分の過ちを忘れたのか？ 自分が何をしたか覚えてないのか？ 口だけでならなんとでも言えるぜ？ 驕るなよ、不正を働いた愚者共

がどの口でほぎいてやがる」

俺の言葉に室内が凍りつく。それもそうだろう、なんたつてこいつらは不正を働いた局員。本来なら、この場において発言権など存在しない輩である。どんな言葉を吐こうとも、それは嘘で作られていると感じ、どんな正論を紡ごうとも、それは罪の前に掻き消される。そもそもが不正局員と俺であったなら土俵が違うのだ。対話することすらままらない。

だからこそ——ここで彼女を投入させる。

「ちよつとええかな？　そののけつたいなピエロの仮面を被った違法さん？　ここをどこだか知ってるんか？　身分を証明できるものもつとる？」

背中からかけられる声に振り向くと、膨大な資料を抱えながらこちらに笑顔を向けている彼女の姿があった。彼女——言わずと知れた、管理局に置いて、高町なのは、フェイト・T・ハラOWNと並ぶ人気を博しており、こと此処に至っては絶対的なカリスマを確立している俺の幼馴染——八神はやてである。それはこの場においてすぐ感じた。不正局員を取り巻く空気が一変したのだ。どこか安心したような安堵が部屋を支配する。

「おやおや、これはこれは可愛らしい御嬢さん。御嬢さんのように可憐な子が、こんな薄汚い連中に用事でもあるのでしょうか。だとしたら、とても犯罪チックな臭いがしてきますねえ」

にこやかな笑みを浮かべたはやてが胸ポケットに入れていたボールペンをへし折る。よし、遊びは止めよう。

コツコツコツ、靴音をわざと鳴らしながら部屋へと入り、俺の横を通り抜け、連中を守るように俺と連中の線上線に割って入るはやて。背の低いはやてが、俺のことを睨みつけながら精一杯凄んで見せる。

「あんだ、さつきこういうとつたな。『管理局という存在自体が——奴隷そのものなんだよ。世界という飼い主に、出来ないことをやらされ続ける哀れな奴隷さ。勿論、そこで仕事に従事している連中もな』。中々面白い発想やな、捻くれ者の発想や。管理局という存

在そのものが奴隷とは……そんなこと、管理局で仕事をしている局員は誰一人として思っていないことやな」

「ええ、当たり前でしょう？　なんせ、既に洗脳されている——」  
「それは違うで」

俺の言葉を遮る形ではやてが間髪入れずに否定した。首をゆつくりと横に振り、「それは違うで」そうもう一度繰り返した。はやては毅然とした面持ちで俺を見つめながら宣言する。断言する。

「わたし達は、奴隷なんかやない。此処にいま立っているのは自分の意志や。此処で働いとるのは自分の希望や。いまわたし達は、自分の意志と希望でこの場所にい

るんや。自分達で選んだ歩んでいる道なんよ。それをどこの誰とも知らん、ぽつと出の者に、管理局のことを何も知らん男が——わたし達の選んだ道を否定できるんか？」

「……案外、できるかも知れないぜ？」

「ううん、できへんよ。人は誰かの歩む道を否定することなんてできへん。人間はそこまで器用でもないし、そこまで偉くもない。そんなこと出来るのは神様くらい

や」

「だとしたら、俺は神様になろう。他人の全てを否定できる神様になろう。管理局を潰せるほどの神様になろう」

はやては何も言わず首を振る。可哀想な子供を見る目でこちらを見つめる。

「あんた、わかっとるんか？　神様ってのは一人ぼっちなんやで。神様は何でもできるけど、何でもできるからこそ、頼ることを忘れて一人ぼっちになるんやで？」

おかしいなあ。話し合ってセッティングし、台本だって作ったから茶番だってわかるのに——どうしてはやてはこんなにも、本当に心配そうな顔をして、不安そうな目でこちらを見つめてくるんだろう。まさか俺が本当にこんなバカな真似をするとでも思っているのだろうか？

「しかしながら、そこにいる不正局員はどうだ？　まさか、そいつらの

不正も選んだ道とでもいうのだろうか？」

「そうやな、そういうで。少なくとも、わたしの知っている人物で一人いるで。『それも選んだ道だろ？ だったらちやんと責任もって歩んで行けよ』 そう笑いなが

ら平気な顔する人物をな」

「そいつ、最高にバカだな。 とんだクズ野郎だ」

「そうやな、世界一のクズやで。 乙女の純情を弄ぶんやからな」

……乙女？ ……純情？

頬を掻こうとして、仮面をしていることを思い出し手を止める。

そして一度だけ、はやての後ろにいる連中の様子を伺うと、見事にはやてのことを救世主のような目で見つめていた。 ……ふむ、頃合いかな。 これで連中ははやての駒になったようなもんだしな。

大仰に手を左右に広げたため息を吐く。 精一杯バカにする形を取る。

「……ふむ、これは勧誘に失敗したみたいですね。 こうなってくる、私は次の手段を取らねばなりませんので早急に失礼させて頂きま

す。 後ろの皆さんも、いつか

またお会いしましょう。 次こそは色よい返事を期待してますよ」  
軽く笑いながら、俺は部屋を出る。 これで後ははやての一声であいつら達は墮ちるだろう。 ほんと、ちよろいものだ。

と、そのときポケットに忍ばせていた携帯が震える。 デイスプレイを見ると、クロノからのメールで、内容ははやてを拾ってくるとのことだった。 ああ、そういえば失敗のことも考慮してクロノに待機してもらってたな。 クロノに、よろしく頼む、とだけ添えて返信する。 さて、今晚の夕食は……すき焼きにでもすっかな。

そんなことを考えながら本局の廊下を歩いていると、背中に衝撃が訪れ思わずよろめいた。 俺へのダイレクトアタックを仕掛けてきた人物は、そのまま真横からひよ

っこりと顔を出してきた。 少女のような笑みで屈託なく笑う彼女。

「こんな所で何をしてるのかな？ なのはさんが逮捕しちやうぞ

！」

「なのはさんに逮捕されるなら死んでもいい」

「いや、死んだら逮捕できないじゃん……」

至極まっとうな意見だった。

そのまま二人で肩を並べて歩く。

「そういえば、なんでなのはが此処にいるんだ？ 六課は？ ヴイ

ヴィオは？」

「ヴィヴィオはフェイトちゃんとガーくんが面倒見てるよ。今日は

上層部に名指しで呼ばれたんだ。『変わったことはないか？』って

ラルゴ・キール元帥に聞かれて

さー……。思わずテンパっちゃって、『ヴィヴィオは毎日元気に

過ごしてます！』って、娘のすくすく成長記録を伝えちゃった……。

まあ、なにもお咎めなしに退室させられたからよかったけど」

「ふーん、そっか。まあ、俺のほうは本局に落書きでもしようか

なー、なんて思ってきたんだ。皆一生懸命働いてたから止めてあげ

たけどな」

「俊くん、その上から目線は非常におかしいと思います」

「今日はすき焼きにしようと思います」

「やったー！ すき焼きおいしいよねえ。皆も呼ぶ？」

「だな」

六課に帰るつもりだったなのはは、そのまま夕食の買い物に付き合ってくれるそうさ。……これって、見方を変えればデートだよな

？ 将来の予行練習に……とかではなさそうさ、なのはの様子を見る限りでは。

嬉しそうにはしゃぐなのは、携帯に届いた成功メール。その二つを交互に見ながら思う。

いまさら察知しても後の祭りだ、と。

## 95. 曲芸7

暦では9月に入った現在、夏の暑さも幾許か和らぎ季節は秋へと移行しはじめるこのとき、男は一人パソコンのディスプレイと格闘していた。視線は動かさず、キーボードを弾く音だけが室内に木霊する。かれこれ何時間だろうか？ 最近の彼を見る者は口々にこう語る。

『ドクター、目の下に濃い隈ができてる……』

少女たちは心配そうな声でそう語っていた。だからといって、少女たちに彼を止めることはできないし、しようとも思っていない。ましてや何故彼がこんなにも一生懸命になっているのかさえ知らされていないのだ。この場合、止めようがない、そういったほうが正しいだろうか。

ギシっ……男は自分の体を支える椅子に全て預け目頭を押さえる。ひとしきり押さえた後、手元に置いていた目薬を眼球に落とし再度ディスプレイと睨みあった。

コンコン

「誰だい？」

『ドクター、私です。 おにぎりを持ってきました』

「おお、それはありがたい。 すまないが持つてきてくれないかい？」  
ドクター、そう呼ばれた男は視線をディスプレイに固定したままドアの向こう側にいる人物に告げる。 ガチャリっ、ドアを開け入ってきたのは女性であった。 長年、ドクターと呼ばれた男の後ろについできた女性である。

「すまないねえ。 そこに置いておいてくれないかい」

「わかりました。 ……ドクター、ところでそれは」

女性は男の目の前に置いてあるディスプレイ画面を指さす。 一目でわかる。 デバイス関係だということが。 男は苦笑しながら答えた。

「私の頭をフルに使って、将来役に立つデバイスの資料を作っているのさ。 デバイスのことだけではないけどね。 少人数で大勢を相

手取ることができるロボットなんかの資料を作成してはいるが……  
こちらは現段階の人間の技術では無理かね」

「……何故このようなものを？」

「知的探究心と好奇心に疑問文は不要なものだよ」

男は女性が持つてきたおにぎりを食べながら、片手でキーボードを弾いていく。

その様子を見ながらわずかに寂しそうな顔を浮かべる女性。女性性は自分で持つてきた水筒のコップを取出し、丁度咽喉が詰まりもがいている男に渡した。それを引っ手繰るように奪い咽喉を鳴らしながら飲み干す男。息も絶え絶えになりながらも、男は女性に礼を言つて空になった皿とコップを手渡す。女性がそれを両手で受け取ると、男はすぐさま作業に入った。

「そういうえばドクター、ドゥーエから面白い報告が来たのですが……知っていますか？」

「いや、……この所部屋から一步も外に出てなくてね。キミが来なければ、危うく声の出し方すら忘れるところだったよ」

「それではドクターは知らないのですね。いま現在、管理局にテロを起こしている人物がいることを」

ドクター、そう呼ばれた男のキーボードをタッチする音が初めて止んだ瞬間であった。しかしそれも一瞬で、すぐにタイピングを再開する。それでも構わず女性は報告だけを口にする。

「どうやらその人物は、様々な人物を巻き込んで管理局の内部からテロを起こしている模様です。関わっている人物は大物揃いです。

まず、管理局の目玉部隊である六課の部隊長八神はやて。出世頭として有名なクロノ・ハラオウン。無限書庫の司書長ユーノ・スクライア。聖王教会のトップ、カリム・グラシア。地上本部のトップ、レジアス・ゲイズ。その他、上層部を除く大物たちも動いている模様です」

「ほお……あのレジアスが、か。　　どういう風の吹き回しなんだろう  
か」

「そこまではドゥーエもわかっていないようです。　　しかしながら、



気がかりなことがある、と」

「ふむ……気がかりなこと……とは？」

「首謀者が一般人だということですよ」

今度こそ、男の指は完全に止まった。

「何故管理局の大物達が揃っている中で、一般人が首謀者なのか。それが疑問であるとドゥーエは言っていました。……ドクター？」

報告を終えた女性は、つい男の顔を不思議な顔で見ってしまった。

しかしそれもそうだろう、男は笑っていたのだ。子供が誕生日プレゼントをもらった時のように笑

っていたのだ。

「いや、すまない。その男には、その男なりの行動理念があるのだろう。私にも推測は不可能さ」

「しかしながら、何故一般人が首謀者なのでしょうか？ カリスマという点では、八神はやてはズバ抜けております。そういった人物に先導してもらったほうがいいと思ってしまうのですが」

「それは違うよ、ウーノ」

男は「あくまで推測の域を出ないが……」そう前置きして喋りだした。

「きつと、ほとんどの局員はその首謀者の顔はおろか声すら聞いたことがないはずだよ。例えば、その首謀者が各人、ここでいうなら八神はやてやレジアス・ゲイズな

どに頼みごとをして、それを頼まれた人物達がまるで自分をお願いしたように頼みながら動かしている。といったところだろうか。

だから、ほとんどの局員は首謀者のことを知らないはずだよ。そして、何故一般人が首謀者なのかについてだが……、これは後々のことに役立てるためだと思っっているよ」

「後々のため……とは？」

「テロが終わった後、必ず局は首謀者を探すことになるだろう。しかしながら、局員から出してしまったら管理局内でどんなことが起こるかわからない。例えば、そのテロが将来的にいい方向に進むものだったとしても、テロ行為であることに変わりはないのだからね。」

話に聞く限り、もし大物人物達の誰かを首謀者だと決めつけ逮捕したとしたら——それこそ内部分裂が始まってしまいかもしれない。かといって、適当な人物を仕立て上げることもできないのは確か。だからこそ、あちらも部外者のほうが都合がいいと思うはずだよ。秘密裡に処理をしても気づく者はいないんだからね」

そこまで言ったところで、女性が口を挟む。

「まっってください。だとしたら」

若干驚きながら口を開こうとする女性が次の言葉を声に出す瞬間、男が口にする。

「そう、その首謀者は自首するつもりだろうね。それが、このテロの一番被害を出さないやり方だからね。初めは信じないかもしれないけど、証拠ならいくらでもあるだろうし。その上で首謀者が一言適当な嘘をつけばいいだけさ。『自分は人を支配することが得意だ。だから管理局で使えそうな人物をマインドコントロールし、自分の駒にしてからこのテロ行為に及んだ』 実際、テロは行われたわけだから信じないわけにはいかないしね」

男が喋り終ると、二人の間に沈黙が降りた。女性は寂しそうな顔をし、男は唇を噛み締める。二人に非はなく、強いて言うならその首謀者のくだらない自己犠牲愛を知ってしまっただけ、ただそれだけである。

「ドクター……、あの……」

「彼が直接的な邪魔をしないように、私も彼の邪魔をしない」

「……そう……ですか……」

女性が何かを提案する前に、男はピシヤリと言い切った。その頑なな態度に女性は何も言うことができなくなり、黙ったまま頭を下げ、皿と水筒をさげるため部屋を

後にする。その直前、男は女性に聞こえるように呟いた。

「彼は私の理想だ。大丈夫だよ」

その言葉に、女性は嬉しそうに何度も何度も首を縦に振った。

☆

管理局本部のとある一室、三提督と呼ばれる人物を中心に上層部の

人間が集まっていた。手元には膨大な資料の山がいまにも崩れそうな勢いがそびえ立っている。

「迂闊であった……、既にこの勢いは止まることなどなく我々を呑み込みんでいくだろう」

円卓の中心で、ラルゴ・キールが声を上げる。

「だけでもねえ……、私はこのままでもいいように思えてくるよ。」

「なんせ、若い世代が一生懸命、未来に向かって歩こうとしているんだから」

ラルゴの隣に座っているミゼット・クローベルが資料を読みながらつぶやく。それは勿論、ラルゴにも聞こえており、

「確かに、次の世代に託すことも必要じゃし、そう考えてもおろ。しかし、結果がどう転ぼうとテロはテロ。そんなことを管理局が許すことはできん」

「おや？ あなただつて希望溢れる未来のほうがいいと、常々言っていたではありませんか」

「……まあ、そうなんじゃが」

ラルゴ・キールは迷っていた。既にこのテロ行為を止める力を上層部が持ち合わせていないからである。否、少しばかり語弊があるので言い直そう。上層部をもつてしても、この流れを止めることができないからである。それほど既に、八神はやて達による局員の掌握は完成している。しかも厄介なことに、八神はやて達が掲げているものが『現在よりも明るい未来』だというのだから介入することがより一層難しくなっているのだ。それに、ミゼット・クローベルの態度からも分かるとおり、上層部の中にも賛成しつつある人物もいる。

そんな中、室内に大将の一人が疑問の声を投げかけた。

「しかし……そもそもその首謀者は誰なんでしょうか？ 八神はやてということも考えましたが、そんなふいに思いついたから行動を起こすような人物には——まあ見えてしまいますね。しかしながらそこを置いとくにしても、違和感を禁じ得ません。他の人物に至っても同じ感想を抱きます」

その疑問に多くの者が同意の声をあげた。

ラルゴはその疑問にため息を吐いた。

「八神はやて、クロノ・ハラオウン、ユーノ・スクライア。これらの者達には共通の友人が存在する。それも管理局員ではなく一般人のじゃ」

「ほっほ、私も会いましたよ。これで会うのは二度目だけでも、坊やは覚えていなかったようですけどね」

「それにその人物は、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、さらには八神はやての固有戦力達とも繋がりが存在する。下手をしたら、アイドル部隊六課の他の者達とも既に面識を持っていたかもしれない。持っていたとしてもおかしくない人物じゃ」

ラルゴはいまでも鮮明に思い出す。

「彼が首謀者だとしたら納得いくことが多々ある。何故、このような大物達を動かすことが出来たのか、何故誰も存在を気づくことができなかったのか。私たちは油断していた。アイドル部隊六課が動かない限り、危険はないと頭の中で判断してしまった。そこにまんまと付け込まれたのだ。六課を隠れ蓑にして、六課のメンバーを華やかな表舞台に上がらせることで自分の存在を気づかせないようになしていたのだ」

「流石は一坊やの一人息子だねえ。あの子が自慢するだけある」

一という名を聞いた瞬間に、室内が俄かにざわついた。

「上矢一。夜の神とまで言われた、とんでもない化け物を知っている人物は沢山いるだろう。だが、ここにいる何名かはその一人息子に会ったことがあるはずだ。10年前の闇の書事件のとき、犬のようには吠えた可愛らしい男の子だよ」

「いまは成長して、狂犬にでもなっているのかもねえ」

思えばそうだった。彼は管理局が大嫌いだと叫んでいた。

「上矢俊。彼以外に首謀者はいまい。彼がもしテロ行為を起こしたのだとすると、じきに此処に来るだろう。私が10年前に出した宿題の答えは携えてね」

毅然とし、真剣な面持ちで喋るラルゴとは対照的に、終始ニコニコ

していたミゼット。その両極端な二人に困惑しながらも、皆は時期やってくる人物に興味を抱くこととなった。

☆

「く、くそっ……! パーフェクト勝利だけは避けないと……!?!」

「無駄無駄無駄無駄ツ! 俺のプラチナたんの前でガードすることができると思っっているのかスバル!」

「明らかな萌えキャラ使ってる、こんなキモオタに負けたくないよおとおおおお!?!」

ようやく9月に入り、夏の暑さも和らいできたこの季節、いつも通り皆が遊びにきていた。いま現在は、俺とスバルがリビングで格闘ゲームをしている最中である。訂正、俺がスバルをフルボッコにしている最中である。現実ではこいつの本気パンチを食らったら顔面粉砕しそうだけど、格ゲーなら負ける気がしない。

「スバル、ドライブをうまく活用しないと無理だよー?」

「そんなこといわれても無理ですって?!? なのはさん助けてくださいー!」

「がんばれー!」

スバルの後ろでなのはがちよくちよくアドバイスしているが、やっぱり教え子だからついつい教えちゃうのか? それとも、あまりにもスバルが不憫すぎて助言しているのか?

「なんつーか……、このプラチナってキャラ、あたしと少し被ってねえか?」

「ふざけんなツ! ロヴィータちゃんよりプラチナたんのほうがペロペロしたくなるに決まってる——イタイイタイイタイイタイツ!? ごめんなさいごめんなさいっ! ジョークですから!?! ジョークですから!?! ロヴィータちゃんの未成熟な体のほうがペロペロしたいです!」

先程よりも頭蓋骨を握る力が強くなったのは何故だろうか。ミシミシと嫌な音が耳の奥底に響いてくる。

何度も何度もタップしてるというのに、ロヴィータちゃんは無表情

で俺の頭部破壊に勤しむ。お前、もしかしてこれをするために横に座って見てたんじやないだろうな？

それにプラチナたんはヴィヴィオのほうが被ってるような気がするぞ。

「ハザマはコンボで削っていかないと、単体攻撃はまったく削らないんだよね。俊くんは、『テルミがなー……。テルミがなー……。』ばっかり使って使わないんだけど」

「成程。あ、大分慣れてきました。でもコンボがつかない……。……」

この間にも俺のプラチナたんはやられていく。ああ……。ごめんねプラチナたん。

頭蓋骨が危険な状態にもかかわらず、俺は他の面々がなにをしているのか気になり視線をあちこちに彷徨わせる。

「フェイトさくっ！ やっぱりここがどうしても納得いかないんですー！ 解説お願いしますー！」

「うん、いいよ。ティアは理解力あるからすぐに覚えるよ。えっとね、ここは——」

嬢ちゃんがフェイトに本を見せながら泣きついていた。そういえば、嬢ちゃんが1ヶ月頃に執務官試験があるとかいつてたな。弁当でも作ってやるか。ティーダも見てるぞ、頑張れ嬢ちゃん。

「普段ひよつとこからバトル漫画などしか借りなかったが、ひたすらほのぼの系の漫画も面白いな……。心が癒される」

「ですよね。シグナムさんはもう少しこういう漫画を読むべきだと思います」

「むっ……。……。そ、そうなのか？」

シグシグとキャロが以前貸した漫画を読んでいた。意外や意外、シグシグの膝の上にキャロが座るといふ心温まる光景が広がっていた。シグシグ、ちよつとお姉さんみたいで嬉しそうだな。いまならさりげなくパイタツチくらいは出来るかも。って、そういえばエリオは？

「シヤマルさん。このドクロマークが描かれている小瓶はなんです

か……?」

「あ、それは触っちゃいけませんよ。そこの無職さんで実験しましたら、カニのように泡をぶくぶくにしてましたから」

「えっ!」

シヤマル先生、それは初耳なんですけど。ちよつと詳しく説明してください。

そう考えた直後、頭蓋骨を圧迫する痛みがふいになくなった。

「あ、あれ?」

「ひよつとこ、お前のプラチナたんが負けたぞ」

「あああああああああああつ!! 俺のプラチナたんがっ!!」

「なのはさん、なのはさん的には悲しくなってきましたせんか?」

「色々泣きたくなってくるよね」

画面内ではプラチナたんが倒れていた。絶望が俺を包み込む。

「んじゃスバル。今度はあたしとしようぜ。ひよつとこ、おすすめ

めのキャラはないのか?」

「お前はテイガーさん使ってみ。意外と相性いいかもしれないぜ」

強引に俺をどかしたロヴィータちゃん嬉々としてテイガーを探し、その凶体に一瞬戸惑いながらも素直に選択、軽くなのはに指導を受けながらスバルと勝負していくことに。

さてさて、俺は愛しのヴィヴィオでも観察しようかね。

「ねえねえ、ザツフィーはわんちゃん?」

「犬ではない。守護獣だ」

「でもわんちゃんだよ?」

「だから犬ではない。守護獣だと」

「あう……ヴィヴィオわんちゃんのなきごえききたかった……」

「……………わん」

……なんかごめんねザツフィー。そしてありがとう。後ではねっこあげちゃう。

「あ、パパー! ザツフィーねー、かわいいよ?」

「ヴィヴィオのほうが可愛いよおー!」

「えへー、ありがとう」

ヴィヴィオと向かい合いながらこしよこしよ話をする。ふと、誰かの視線を受けていると感じ探ると、真正面からザツファイーが見つめていた。別にお前に見つめられても素直にお喋りできるぞ。

「親バカだな……」

うるさい。ヴィヴィオが大好きだからしようがないだろ。可愛いヴィヴィオが悪いんだ。

だっこをせがむヴィヴィオを抱き上げると、キッチンのほうが甘い香りが漂ってきた。そこからエプロンを着たはやとガーくんがシュークリームを持ってくる。ガーくん、エプロン姿意外と可愛いな。

「あ、俊。俊のエプロン使ってもうたけど、べつにええよね？ どうせ一緒になるんやし」

「あ、それあげるよ。昨日熊のデフォルメエプロン買ってきたからさ」

「チツ……。まあええか」

「残念だったね、はやてちゃん。ちなみにわたしはお揃いの買ったよ」

「フェイトちゃん。エプロンが可哀想と思わんかったんかつ！」  
「ちよつとまってっ?! それはどういうことかな!?!」

違うんだよはやて。エプロン姿のなのは見るだけで俺が頑張れるからいいんだよ。

「パパー、たべさせてー!」

「はい、あくん」

「あくん!」

シュークリームをつまんで、ヴィヴィオの可愛らしい小口に運ぶ。口に入りきらなくてクリームが飛び出したが、それは俺が指ですくって舐めとることにした。うん、やっぱりはやて上手いな。

「あ、そうだ。なあ、ちよつとお前らに頼みたいことがあるんだけどさ」

その言葉に俺と一部のロリ以外の全員がこちらを向く。



「どうしたの？」

「うん。近々、パーティーやるかもしれないんだけどさ、俺一人じゃ無理そうだから助けてくれないかな？」

「うん、いいよ」

「流石俺のジョーカー。頼りにしてるぜ」

なのはが猪の一番に了解してくれ、それを皮切りに、皆も『しょーがないな』といった感じで了承してくれた。そんなほんわかした雰囲気の中、後ろから誰かが俺の服の襟首を掴み引き寄せてきた。目の前にはちよつと怒った感じのロヴィータちゃん。

「おいひよつとこ！ テイガーじゃ勝てないぞ！ ちよつと付き合え！」

「えー……。スバルのマコトに負けんなよ。スバル、ハザマどうだった？」

「コンボが……」

「だよなー。俺もハザマ練習しよつかなー……」

「あ、それじゃ参考に見ておこうかな」

とりあえず、ロヴィータちゃんに練習するかな。

その後、ムキになったロヴィータちゃんに深夜2時まで付き合わされた。すまん、スバル。お前まで付き合わせてしまって……。

## 96. 曲芸8

『足りないものは沢山あった。理解力・広い視野・戦局を見定める目・決断力・冷静さ。沢山のものが自分の力不足で手のひらから零れ落ちる中で、友達を失いたくないという想いだけが残っていた。けれどもそれはただの想い。子供が小さく膝をつきながら必死に庇うだけであり、そんなもの現実というものの前では無力でしかなかった。子供なんて所詮その程度。自分の意見を曲げることなく進める奴らは力のある生き物だけなんだ。ああ……、俺は何度幼馴染たちに嫉妬すればいいんだろうか?』

ゲームを齧っている人にはわかるかもしれないが、ゲームの中にはどうしてもスキップできないイベントムービーというものが存在する。それは製作者が意図してそうしているのかどうかは分からないが、そのイベントを見ておくことによって今後の物語の展開を理解するということでは非常に優秀なものである。ようは、絶対に見せておきたい場面なのだ。そんなもの、この物語にはないけれど、あつてたまるものかと思うけれど、それでもこの物語も終幕を迎えるためにはどうしても必要な場面だと思うので見ておこう。いや、振り返っておこう。

10年前、闇の書の事件でのとある一場面のことを振り返ろう。

ナレーシヨン、脚本は全て俺が、上矢俊が担当しよう。

ネクタイを結び、上層部が待っている室内への扉を開けながら過去のことを思い出す。

☆

「落ち着きなさい上矢君！　なのはちゃん達が頑張っているというのに、あなたは何処に行くつもりなの!?!」

管理局本部の許されたものだけが歩むことを認められる廊下にて、リンディ・ハラオウンは目の前を歩く小さき少年の肩を掴む。肩を掴まれた少年は大人が本気で止めに来たことにより歩みを止め振り返る。

「あそこにおいても俺が出来ることなんてないですし、それに俺は約束

したんです！ 事件の後処理は任せろって！」

「だったら大人しくしておきなさい！ あなたわかつてるの!? いまこの状況が一刻を争うほどのことだってことを！」

「だから大人しくしてろってか!? はやてや守護騎士たちが今後どのような処罰が下るかわからないんですよ!?!」

大声を上げる少年に、リンデイは冷静になりながら、膝をつきゆつくりとした口調で諭す。

「はやてちゃんのこととは、この状況を打開してから考えていけばいいのよ？ それに、あなたがそんなことを考えなくても大丈夫よ。はやてちゃんのこととは私がきちんと責任をもってあげるから」

「大人はいつも嘘吐きだ。そうやって子供を騙していくんでしょ？」

父さんと母さんの時のように」

「うくん、少しは大人を信じることで出来なにかしら？」

「信じてなんになるの？ それで自分にとってどんな利益につながるの？ 信じたからって守ってくれるの？ 絶対に？ 自分の身を犠牲にしても？」

少年の疑問にリンデイは答えることが出来ずそのまま黙り込む。

それを確認した少年は再び歩き出した。少年の行先までの順路

は至ってシンプル。一直線の道筋か

らなる廊下はただ一つの扉へと繋がっている。上層部の中でも

限られたものだけが入室することを許可されている部屋。そこに

は、本局統幕議長・法務顧問相談役・武装隊荣誉元帥ら三人を中心に纏まっている管理局の心臓ともいえる人物たちが顔を揃えて日々意見を交わしている場所である。そこを目がけて少年は進んでいく。

リンデイの静止を振り切り、扉を開けた。

円卓上に囲まれた輪の正面で、資料を読んでいた初老の男性は突如入室してきた少年の姿を見ると、優しく穏やかな笑みをたたえて声をかける。

「キミはどこからきたのかな？ 迷子にでもなってしまったかの？」

その横にいた初老の男性と同じくらいな年配の女性も少年の顔を

見て声をかける。

「これまた可愛らしい侵入者さんだねえ。　ふむ……どうやって此処まできたのか」

立ち上がりながら少年に近づく初老の男性と女性。　その他の面々は突如やつてきた少年に目を丸くしながらも、手を休めることなく仕事を進める。　そこにやつてきたのは青ざめた表情を浮かべ冷や汗を流しながら飛び出してきたリンデイであった。　リンデイは面々に頭を下げる。

「も、申し訳ありません!?　この子は現在扱っております闇の書的事件にかかわりをもってしまった人物でして、その……えっと、……例の人の一人息子です」

しどろもどろになりながら、最後は蚊の鳴くような声で告げるリンデイ。　リンデイの言葉に二人は驚き、やがて破顔する。

「あの子の子供かい?　これはまた将来有望な人材が挨拶にきてくれたみたいだねえ」

「ふむ、確かにな。　しかし道を選ぶのは彼自身。　私達管理局は強制することはできないよ。　——ところで、リンデイ・ハラオウン艦長。　キミは何故こんな所で油を売っているのかな?　闇の書事件は一刻の猶予もない状態だと聞いている。　こちらはいまだに意見が割れていてね……」

先程とは対照的な顔と声のトーンでリンデイに話しかけた初老の男性に、リンデイは肩を震わせ頭を下げた。

「申し訳ありません……。　現在、硬直状態が続いている現状であり、民間協力者による説得の最中であり……。　しかし、いずれにしても闇の書は——」

続きを話そうとするリンデイに男性は手で制止させる。　一方、女性少年の頭を撫でながらポケットから取り出した飴を手のひらの中に落とす。　なんとも微笑ましい光景、孫と祖母が再開した時のようなそんな光景。　だが、そんな光景も少年の絞り出すような声で霧散する。

「……闇の書の所有者は……どうなるんですか?」

真つ白なキャンパスに一滴の黒が落ちるように、少年の言葉は室内に広がっていく。

「はやては……八神はやては……無罪になるんですよね？ フェイトのときだって大丈夫だったんだし、はやてだって大丈夫ですよ？」少年の問いに答える者はいなかった。否、答えることができなかった。此処に存在している利口な大人たちは決して無罪になることはないと知っていたから。

全員の反応を確認し、少年は男性に再度問う。

「ねえおじさん、答えてよ。はやては無罪になるんでしょう？ ならないとおかしいよね？」

「なんで……そう思うんだい？」

「だっておかしいだろ!? はやては何もしてないじゃないか!」

しやがみこみ少年と同じ目線になった男性の顔に唾が飛ぶのも気にせず、少年は怒号にも似た叫びを上げる。男性は冷静に、頭を振った。横にゆつくりと何度も頭を振った。

「〴〵なにもしていない〴〵 そんなことはない。げんに、闇の書の所有者である女の子のせいで世界の危機にまで発展しているのだからね」

「だからって、それははやてが望んでやったことじゃ——」

「望む望まない関係なく、彼女が闇の書を所有しているということが大事なんだよ。わかるかい、坊や？」

「さあ、帰るんだ。キミをまつている人達が沢山いるだろう？」男性は少年の肩を押してリンデイに託す。リンデイは少年を後ろからしっかりと抱きしめると、促すように一歩後ろに踏み出す。しかし、少年の体は動かなかった。

「〴〵キミをまつている人達が沢山いる？」 知ってるよ、そんなこと。

でも、約束したんだ。なのはやヴォルケンと約束したんだ。約束したんだ、はやてと。一緒に色々なところを二人で歩いて遊びに行こうって約束したんだ。はやてにだって待っている人達は沢山いる。貴方達は——そんな女の子を見捨てるんですか？ 歩けないのに、希望に向かって歩みを進める女の子を見捨てるんですか？

闇の書を所有していたから。 そんな理由で、」

「私情を挟むつもりはない。 それが管理局の、 武装隊榮譽元帥の答えだよ」

無情にもバツサリと、 少年の言葉は切られていった。

「いま此処に10人の人間がいるとして、 9人と1人のグループに分けられたとしよう。 その手で救えるのは一つのグループしか存在しない場合、 9人を選ぶのが管理局だ。 例え、 その1人がキミでいう所の友達だとしても、 だ。 それが管理局であり、 それが現実だ」

男性は背を向けながら言葉を綴る。

「世界とは相応にして、 調整されている。 バランスをわきまえている。 善と悪・幸福と不幸・男性と女性、 どちらか一方が増すことがあっても、 どちらか一方が消える

ことはない。 幸福の中に不幸があるように、 不幸の中に幸福があるように、 善の中に悪があるように、 悪の中に善があるように世界はそうやって作られている。 友達を助きたい、 なんとも綺麗で美しい友情だ。 けれども、 キミは理解しなければならぬ。 キミが助けようとしている女の子、 それに付属している闇の書がどれだけの人間の数を奪ってきたのかを」

コツコツコツ、 靴音を立てながら近づく。

「確かに、 その女の子自身には何の罪もないのかもしれない。 けどね、 闇の書には罪があるんだよ。 沢山の命を奪ってきたロストログニアには罪が存在するんだよ。 そして現在、 それを所持しているのが彼女だ。 無罪にすることは簡単だ。 だが、 それでは納得できない者達も大勢いるんだよ」

少年には理解できなかつた。 闇の書で家族を失ったわけではな  
い少年には理解することが難しかった。 少年は気づかない。 自  
分の後ろで、 唇が裂けるほどに溢れ出る衝動を抑え込んでいる女性な  
ど気づかない。 それでも少年は言い続ける。 世界の真理に対抗  
する。

「……ダメ……なんですか？ 9を見捨てて、 1を救うことのどこがいけないんですか？」

「合理性に欠けている。それに、キミのいう1とは闇の書の所有者のことだね。では、少年。9の中にキミの友達が沢山入っていたとするなら——キミはどちらを選ぶのかな？」

誰が9の中に存在している人物全員が、赤の他人だと断言したのだろうか。9の中に高町なのはが入っていてもおかしくない。9の中にフェイト・テスタロッサが入っていてもおかしくない。少年は今度こそ理解していなかった。『9を捨てるということは、友達を捨てること』、であり、『1を見捨てるということは、友達を見捨てるということ』であることを理解していなかった。これがいまの現状であり、これが現実である。

少年は言葉を失った。勇ましく乗り込んでみたまもの、得たものは子供には厳しすぎる現実で、失ったものは自分の甘い理想論。浮かびは消える友の笑顔、消えては浮かぶ彼女の涙。その間で揺れ動く想いに終止符を打つものはなく、少年は力なく項垂れた。

室内の空気は重く、誰もが作業を中断させていた。そんな中で、少年は呪詛のように小さく呟いた。

「……潰れるよ……。女の子一人助けることができないような無能共なんかいらないだろ……」

水面に波紋を立てるように、少年の言葉は空間の全てに響き渡った。

「……ふざけんなよ、期待外れもいいとこだよ……」  
「上矢君……?」

「雑魚、無能、間抜け、役立たず、やっぱり大人つてクズしかいないじゃねえかよ！ お前らに——誰かを失う辛さが分かるのかよ!？」

いまにも掴みかからんとする少年は、さながら狂犬のようであり、男性の咽喉元を食い千切るばかりの勢いであったが、その後乾いた音が室内に響き渡ったことで、少年はその場で立ち往生することになった。赤くはれ上がった頬に手を置きながら、目の前に立っている女性に茫然としながら。

女性は、上層部の連中に深々と頭を下げ、ついで少年のほうへと向き直った。同じ目線になるようにしやがみこみ、肩を掴む。

『誰かを失う辛さが分かるのか!?』ええ、私は分かるわよ。痛いほどわかるつもりよ。けどね、上矢君。そんなもの、この場においては意味もない問題なのよ。この場での答えは一つ。『上矢君の行動は徒労に終わった』という事実だけよ。自分より相手の言い分のほうが正しかっただけ。自分の理想論より、相手の現実論のほうが理に適っていただけなの。ほら、満足したでしょ? もう帰りましょう?』

母親のように優しく頭を撫でるリンディの手を少年は振り解いた。その反応を見て、リンディはため息を吐き——俯き涙を流していた少年の顔を強引に自分と向き合わせ、室内に声が反響するほどの大声で叫んだ。

「悔しかったら、自分の理想論を押し通せるだけの力を身に着けなさい! 誰もが貴方を認めるような、そんな立派な存在になりなさい! 小さな女の子を守るような、そんな大人になりなさい! どんな不足な事態が起ころうとも、動じない男になりなさい! 皆を安心させることができる男になりなさい! ——悔しかったら、私たちが驚き、降参するようなことをやってのけなさい!」

女性には既に出来ないけども、此処にいる大人には出来ない芸当だとしても、これから未来を歩く少年になら出来るかもしれないのだから。

少年は女性の胸の中で泣き喚いた。涙の貯水がなくなった頃、男性が胸のバッチを外しながら少年へと声をかける。

「キミに一つ、宿題を授けよう。問題はこうだ。『9人の女の子がいまにも谷に落ちそうです。しかしその一方で、1人の女の子が川で溺れようとしています。救えるのはどちらか一方だけである。さあ、キミならどうする?』キミがその答えに辿り着き、自らの手でこの扉を開ける瞬間を私は楽しみに待っているよ。それまで、このバッチはキミに預けておこう」

少年の手をゆっくりと広げ、自分が身に着けていたバッチを託す。その光景に後ろで様子を伺っていた上層部の連中がどよめきたつが、そばで行く末を見ていた年配の女性が手で制す。



女性に抱っこされた少年は、そのバッチを見て、ついで男性を見て、男性の顔面にぺつと唾を吐いた。

「あんたなんて大嫌いだ」

☆

彼が道を間違わないように、10年間同じ場所に存在し続けているこの部屋で私は語る。

「10年前、私は一人の少年に出会った。その少年は、友達のためだけに闇の書で亡くなった遺族のことを見捨てると言ってきた。面白い少年だった。どんなことを言われても、自分の理想を一切曲げようとしないうる不思議な少年であった。それでも私は、何故かその少年に未来を託してみたくなくなったのだ。本当に不思議なことに。

現役のエースオブエースでもないのに、その少年のそばにはエースオブエースとして現在活躍している女の子がいるというのに。何故か私は彼に未来を託してしまった。批判は勿論あった。それでも、後悔なんて微塵もなかった。後悔も反省もない、しかし心配の種は残っていた。だが、それも今日で終わりになるらしい」

目の前に立っている青年へと変貌を遂げた少年は、10年前に預けたバッチをこちらに放り投げながら笑った。

「彼の言葉は非常に難解だ。善の中に悪を持ち、悪の中に善を持つ。彼の言葉に意識を集中することだ。彼の一挙一足に注目することだ。この者に対して、最大限の警戒を行うことだ」

19歳だからと甘く見るな。自分より年下だからと甘く見るな。

何故なら彼は、

「目の前に立っている男こそが、管理局設立以来、史上最悪のテロリストだ」

キミの答えを聞かせてもらおう。

丁度その瞬間、零時を知らせる鐘が鳴った。

9月3日を知らせる鐘が鳴った。

## 97. 曲芸9

『人は可能なことしか頭に思い浮かぶことができない』

懐かしい、それが俺の感想だった。 10年前、暴走列車のごとくこの部屋にダイナミックな入場を果たしてきたあの時と同じ机、同じ椅子、同じ面子、いや……面子はかなり老けてるかな？ こう……ストレート打ち込んだらワンパンでいけるんじゃないやね？ そう思うほどには老けていた。

俺は目の前の人物たちと対面する。 緊張しないといえば嘘だけど、怖くないなんてことはないけども、それよりも好奇心のほうが勝っていた。 すつと息を吸い込み、肺の中を空っぽにするほど大きく息を吐き出し――

「流石に老人方の集まりだと……こんな夜中は厳しかったですかね？」

肩をすくめておどけて見せた。

視線はたった1人の人物だけを射抜きながら。

「それでも仕事での残業は当たり前だよ。 キミも年寄りには抜き使ったほうがいいと思うだろう？」

「ええ、それには同感です。 人生長く生きたんだ。 さつさと過労でもなんでもいいから蒸発しちやって構わないですよ。 まあ、蒸発したいのであれば」

人がリアルで蒸発してるところって見たことないし……是非みれるのなら見てみたい。 今度なのはに頼んでみよう。

「しかしながら、この管理局には少々長く生きすぎた存在がいるようです。 体を捨てて、なおこの世の平和を願い続ける英雄がいます。

ラルゴ・キール武装隊荣誉元帥、あなたに問います。 あなたは、150年間平和だけを考えて、自分の娯楽も全て捨て、自分で命を絶つことも禁じ、150年間という途方もない歳月を生き続けることができますか？」

俺個人としての答えはノーだ。 150年だぞ、150年。 もしもこれにイエスと答えることが出来る奴はいたら、俺はそいつに『キ

チガイ』の称号をプレゼントしよう。純正のキチガイだぜ。

質問に対して顎を擦りながら、しばし考えていたラルゴ武装隊榮譽元帥は口を開いた。

「率直に言おうと、私ではそんなことは無理だ。いや、私だけではない。キミだってそうだろう？　上矢君」

「ええ、それが普通の反応です。当たり前前の答えです。あなたは教えてくれました。完全なる善などなく、完全なる悪などない、ということ。まさにその通りだ」

「と思います。この世が『完全なる平和』になることなんてありえません」

「もしも、完全なる平和は存在するという人物がいたら俺に教えてほしいものだ。『完全なる平和』が存在するというのなら、『管理局』なんて組織は設立されていい。そして、この先の未来にだって『完全なる平和』は訪れない。此処にいるメンバーはそれを誰もが知っているだろう。理解しているはずだろう。勿論、テロを起こしてなんだけど……こんなこと皆に聞かれたら怒られると思うけど、俺は『完全なる平和』なんてものは未来永劫訪れないと確信している。

それでも――

「それでもいるんですよ。『完全なる平和』を目指して、ただそれだけを目標にして存在している英雄達が」

「それは本当に素晴らしいことだと思う。顔を引きつり、思わずバカにしてしまうほど凄いことだと思う。でも、何年かかってもいいから目指していこう。そう心に誓い、生きてきた英雄達がいるんです」

「お前らだって知ってるんだろう？　お前らだって尊敬してるんだろ？　部外者の俺が資料を読んで尊敬したくらいなんだ、局員であるお前らが知らないはずがないし、想うことがないはずがない。」

「その方々の名前は、最高評議会。裏でレジアス・ゲイズを操り、ジェイル・スカリエツィを生み出した張本人にして――いまなお平和を願う英雄です」

ふと、スカさんがいま何しているのか気になった。――が、その

想いをなんとか心の奥底に沈めることにして面子の表情を伺う。

全員の視線を一齐に浴びる俺は、どんな表情をしていたらうか。どこを向いても、誰かと目が合う状況に不思議と快感を覚えてしま

と、見知った女性を発見した。見知ったといっても、ヴィヴィオと数分会っただけの相手なのだが、あちらは俺のことを完全に理解しているらしく手を振ってきた。たまらず俺も振りかえす。そこに、ラルゴ・キールの声が割って入ってきた。

「二つ、いいだろうか？ 上矢君。キミは——何が狙いなんだろうか？」

いい質問だ。あえて漠然とした質問をすることで、こちらに完全な答え、又はそれに近い回答をさせる手法。例えば、『キミはテロが狙いだな？』なんて聞いても本当に外れていたんじや、こちらの意図が分からなくなってしまうもんな。回答は一回しかないんだから。

「そうですねえ……、管理局潰しですかね」

「その答えはダウトだよ。管理局を潰したいのなら、キミは殺人行為を犯すはずだ」

「おいおい、管理局のお偉いさんなら市民の言葉に穿った目を向けることは止めようぜ。それに殺すだけなら、此処にいる全員を殺せばそれで事足りる。そんなことしませんか。なんせ、蟻すら殺すことができない人間ですから」

「おや、キミは蟻のような生き物を平気で殺す人間だと思っていたよ」  
「娘から怒られたんだよ。『アリさんがんばってるからそんなことしちやダメー！』アリさんに謝って！』だとき。可愛いだろ？ あいつは世界で一番かわいい5歳児だよ」

「ふむ、人は変わるものだね」

「そう思う時は、相手じゃなくて、自分が変わった瞬間なんだぜ」

さて、あまり退屈な時間を此処で過ごしていると、ヴィヴィオの真夜中のトイレタイムに間に合わなくなってしまう。そろそろ寝る前にトイレに行く癖を付けさせたほうがいいよな。今度、リンデイさんや桃子さんに聞いてみよう。いつものように家に招き入れ、い

つものように楽しい時間を過ごすために。

この一瞬だけ頑張ろう。

肺の空気を入れ替えるように大きく深呼吸する。明日の未来は分からないけども、今日をよりよい一日にするために。声を大にして宣言しよう。

「私がこのような手段を用いたのは、管理局が憎くてテロを起こすためではありません。誰かを殺したくて起こしたものではありません。ただ——最高評議会を楽にさせたいのです」

俄かにざわつく室内。あちこちから疑問の声が上がってくる。

俺には意味が分からなかった。俺には理解できなかった。何故この者たちはそんなにも心配そうな顔をしているのか、何故この者たちはそんなにも不満そうな顔をしているのか。

まるでやりたくもない宿題を強制させられている子供の光景が脳裏に浮かんだ。

此処の代表者なのか、ラルゴ・キールは俺に話しかける。

「上矢君。最高評議会に楽をさせたいという君の気持は理解できる。友達のために此処まで乗り込んできた君のことだ、150年間頑張ってきた最高評議会のことについて心を痛めたことだろう。私達だってなんとかしなければなら

ないと思っている。だが——」

『だが、それは容易なことではない？』そう言いたいんだろ？」

ラルゴ・キールの言葉にすかさず割って入りこむ。ラルゴ・キールは間を置いて頷く。こいつがそういうことは分かっていた。

だからこそ、俺は下準備を入念にしてきたのだ。こいつらを黙らせるための下準備を。頷かせるための下準備を続けてきたのだ。

「此処以外の局員は全て掌握済みさ。地上はレジアス・ゲイズを中心とした人物。本部は八神はやて、クロノ・ハラオウンを中心とした人物。管理局が頼りにしている無限書庫はユーノ・スクライア。

懇意にしている聖王教会はカリム・グラシア。何も全員に逐一内容を話す必要なんてない。集団心理を煽ればいいだけの話なんだね」

俺の口から言葉が出るたびに何人かが驚嘆の声を上げる。その淑女なんかは拍手つきだ。しかしそれでもラルゴ・キールは冷静に俺を褒める。

「10年前とは大違いの周到さだ。管理局で働く気はないかな？」  
「生憎、天職を既に見つけてるんで。さてみなさん、いかがですか？俺の賭けに乗ってみないかい？」

俺の誘いにラルゴ・キールは首を横に振った。

「内容は知らないまま、頷くようなバカはここにはいないよ。ミゼット、頼むから彼の誘いに頷かないでくれ」

首を横に振った後に隣にいる女性に抗議するラルゴ・キール。こちらとしては味方が一人いる状態なので嬉しい。

だが、味方が一人じゃダメなんだ。此処にいる全員の力がないと管理局は本当の意味で機能しない。しかしながら上層部の連中だってバカじゃない。俺の言葉をあ

らゆる意味で解釈し、針穴のような小さく細かいミスと説明不足を狙い撃ってくる。だからこそ、俺は上層部を最後に回した。どんな質問にも答えることが出来るように。小さなミスすらしないように。出る杭を徹底的に潰し、ルートを全て破綻させてきた。

「なに、簡単なことさ。9月19日にパーティーを開こうというだけだよ。司会進行ははやてにでも任せろ。勿論、主役は最高評議会だ。スカさんの娘経由で連れてくることは容易いし、パーティー自体は六課が全面協力してくれると約束してくれました。流石に末端までは最高評議会のことは教える必要はないと判断しています。が、レジオス中將他、大勢の中將クラスは私の意見に耳を傾けてくれるように最高評議会なき後の管理局について日夜協議しているとか何とか。ああ、もつと詳しい内容が知りたいんですか？これはうっかりしてました。それでは説明しますね。会場はなんでも聖王教会側が用意しているそうでも広いホールのようですね。流石に管理局を機能停止には出来ませんから、参加者は部隊ごと交代していくことになると思います。参加者は管理局と、聖王教会側、それに無限書庫側。ああ、ステージもあるらしく随分

しつかりしたパーティーになる模様です。高齢者にも優しいように食事にも気を付けますよ。では次に主な役割に――」

べらべらと饒舌に喋る俺の口を、ラルゴ・キールは手で制した。

こめかみに指を押し当て唸る姿に、食卓にのったピーマンをいかに避けて食べるか試行錯誤しているヴィヴィオの影が重なる。ヴィヴィオ今頃トイレかな？ もうお漏らしは勘弁だぞ。

現在の家のことを考えていると、目の前の人物は慎重な声色で俺に問いかけてきた。

「キミの構想は分かったし、計画の綿密さも十分評価する。個人では到底できないことだが、力を借りてここまでできたことは素直に感服するし、賞賛に値する。確かに私達とて、最高評議会を野放しにしているわけにはいかないと思っっているのだが、キミに一つ聞きたい。主犯格であるキミに聞きたい。――それで未来は良い方向に変わるのか？」

真剣さが伝わってくる。周りにいる者達もまた同じ考えなのか俺のほうを射抜くように凝視していた。少し考えれば分かることだよな、上層部だつて最高評議会に負けなくらい世界平和のために身を削っているんだから。

だから俺は正直に答える。質問者に、何をバカなこと言っているんだ、そう言いたげに口を開く。

「変わるんじゃない。変えるんだ。俺達が俺達自身の手で未来を手繰り寄せるんだよ。いいか？ 未来に答えなんて存在しない。

未来に正解なんて存在しない。手  
にした未来を正解だと胸を張って宣言できるようにしていくんだよ」

自然と拳を握りしめ気づいたら大声を上げて叫んでいた。

「いつまで卓上で空想論かましているつもりなんだよ！ 世界を平和にしたいだろ！ 安全な世界にしたいだろ！ だったら、行動するしかねえんだよ！ いつまであんたらは最高評議会におんぶさせるつもりだ！ あんたらだつて見てきてるだろ？ 最高評議会は限界なんだよ、もう無理なんだよ。終わらせるしかねえんだよ、楽させる

しかねえんだよ！ 150年間だぞ、150年間！ 英雄だって人の子なんだぜ……？ 生涯英雄なわけじゃねえんだよ。 聖人君子でいつもいつだって正しい行動を起こすとは限らねえんだよ！ 手にしたバトンをこぼすときだってあるんだよ！ あんたらはそれを見て何とも思わないのか？ そんな血も涙もない人間じゃないだろ、他人のために身を削ることが出来る存在がそんな奴らなわけがない！ そんな人達だから、俺は提案することが出来るんだ！ 10年前、天狗になっていた俺を完膚なきまでに叩きのめしてくれた人達だから誘えるんだ！」

時には間違いだって起こすだろう。 過ちだって犯すだろう。 なんてことはない、当たり前のことなんだよ。 150年間、よく頑張ったほうだよ。 だからもうゆっくりと眠らせてあげたい。

だから――

「最高評議会が残したモノで、最高評議会の遺志を継ぐんだよ！ 今度は俺たちが英雄になる番なんだよ！」

最高評議会が残したモノ、この管理局で再スタートさせていくんだ。

大袈裟に手を振るいながら、身振り手振りを交えてハッキリと正確に伝えていく。 自分たちが立っている場所がどんな所なのか伝えていく。

「そもそも、俺達がいま居る場所を作ったのは誰か忘れたとは言わせないぞ。 自分の階級や給料を自慢してもいいけどさ、その場所だって最高評議会が作ったんだぜ？ 平和を胸に、信念を掲げ、理想を手にするために、な」

『おおっ!』 そんな声が聞こえてきた。 おい、上層部に知能指数が足りない存在が混じってるぞ。 いまの翁は絶対にアホキヤラ要因だと思う。 というか思いたい。 じゃないと任せるのが不安になっってくるもん。

「まあもつと長い演説を決め込んでカツコイイ俺を演出してもいいんだけど、それよりも優先すべき事柄は多々あるので早めに答えを頂こう。 —— 未来をかけて賭けてみるかい？」



キザったらしく右手を差し出す俺に、代表者であるラルゴ・キールは全員の顔を見渡してその領きを確認した後、満足そうに笑って見せた。

「オールイン。 お見事だよ、上矢君」

「ま、結果は分かり切ってたことだけだな」

シヨール・ダウン。 これにて前座は終了だ。

☆

事前に攻略法が全てわかっているゲームだった。 味のないガムを噛んでいるような、まるで作業ゲームでもしているような気分だった。

それが今回の一連の出来事における俺の感想。 友人たちが協力してくれた時点でこうなることがわかっていた俺としては、ようやく纏め上げることが出来てよかったな。 ちよつと疲れましたわー。 くらいにしか感じないのだが、どうやら目の前のご老人二人はそうは思っていないらしいかった。

「あの10年前の小僧が、よくもまあこんなことを思いつくもんだよ。

上矢君、随分苦労したんじゃないか？」

「俺自身は苦労してないですね。 友人に指示出してただけですんで。 なんとというか……個人的には呆気ないですかね。 とくに上層部は元々俺を試す感じでしたんで」

「私達の目指すべき道もキミと同じということだよ。 しかしそう呆気なくさせたのは他ならぬ君自身だよ。 キミは常に用意周到ですべての事柄に対処できるように事前に用意しておくタイプみたいだね」

「俺のような雑魚はこうすることで生き残ってきたんで。 周りが化け物しかいませんから、ついていくにはこの方法しかないですね。

父さんのようにあらゆる事象をぶち壊せることが出来れば楽なんですよけどね。 負け犬は負け犬らしく、ってね」

若干、自嘲気味に笑って見せた。 こればかりはしょうがない。

無いもの強請りしても始まらないしな。

自嘲気味な笑顔を見て、二人の高齢魔導師の顔が曇る。

これにはこちららも慌ててしまい、出された紅茶を急いで置きながら補足を付け加えた。

「あ、えっと、むしろそつちのほうかなのはやフェイトと一緒にいる時間が増えるし、俺としてはありがたいのでよかったですかな、なんて考えてますよ!? ほ、ほんとに!」

と、そこで二人はお互いに顔を見合わせてクスクスと笑いだした。どうやらハメられたみたいだ。ラルゴ・キールの右隣にいるミゼットさんが声をかけてくる。

「そういえば上矢君。上矢君はどうしてこんな計画を立てたのかしら? 最高評議会なんてはやてちゃんできえ知らないことだから、初めから上矢君が最高評議会目的だとはあまり思わないのよねえ」

「ポイズン」

そもそもこの計画は、娘を置いて自分だけ楽になろうなんて考えた科学者に突き付けるために行ってきたことなんだけど、それは言う必要もないし、あまりにも様々

なことが絡まりすぎて一概には言えなくなってしまったのよね。

首を傾げるミゼットさんの口元をそつと指で塞ぐとポケットから携帯を取出し見せびらかす。表示されている名前は現役エースオブエースであった。もうなんか色々怖い。悪いことしてないのに怖い。桃子さんに、『桃子さんって年齢的におばさんになるんですかね?』とか間違つて質問してしまったとき並みに怖い。

「その続きは19日、運がよかったら聞くことが出来るかもしれませんね。んじや、俺は帰らせていただきます。そろそろなのはちやんが空鍋回してるかもしれませんので」

オタマで空鍋を掻き回すのではなく、玄関先で空鍋ごと振り回しているのはを想像する。……よし、攻略法がわかったぞ。右から左へ受け流そう。

必死に協議をしている上層部に声をかけて退室しようとした矢先、ラルゴ・キールが呼び止めてきた。振り向かずに続きを待つ俺に、そつと優しく聞いてきた。

「宿題の答えは見つかったかな?」

それは10年前、俺が課せられた宿題だった。リンディさんにまで怒られた宿題だった。

9と1、どちらか救うことが出来るのは一方だけである、と。

9は崖から落ちそう、1は溺れそう。救えるのは一方だけ。そんな、一方が死ぬ未来しか残ってない。選ぶことができない選択肢。

10年間、必死になって考えて、出た答えはとてもシンプルなものだった。なのはが教えてくれた。フェイトが気づかせてくれた。はやてが自信を持たせてくれた。ヴォルケン達が後押ししてくれた。

俺の答えは至ってシンプル。

「9を救い、1を掬います」

法則壊しはお手の物。気に入らない選択肢しかないなら自分で作ればいいじゃない。

嬉しそうに笑う二人の高齢魔導師に見送られ、俺は今度こそ退室した。

☆

着信の恐怖に怯えながら帰ってみると、ガーくんが何故か足を攣っていたらしく泣いていた。アヒルって足を攣るんだな……。

「タスケテー!?! イタイヨー!?! アシガー!?! アシガー!?!」

必死に助けを求めるガーくん。おろおろして足をマッサージするフェイト。何故か覚悟を決めた目で包丁をもっているのは、そして元氣つけようとしているのか、必死にガーくんに向かって「みにくいアヒルの子」を読んでいる天使のようで魔王なヴィヴィオ。そんな家族にため息を吐きながらふと思ったことがある。

どうやら、俺が手繰り寄せた未来は大正解みたいだ。

## 98. 閉幕

『これにて終了でございます』

わたしの周りにはフェイトちゃんやはやてちゃん、そして愛娘のヴィヴィオが嬉しそうに笑っていた。華やかなドレスを纏いながら、親友たちに囲まれて大きなホールで楽しくお喋りする。なんでもこんな場所にいるかはわからないけど、心がほっこりと温かくなるのは肌で感じた。だけど、いつまで経っても彼が自分の所に来ないのが疑問で、つつい隣にいるフェイトちゃんに彼の居場所を聞いた。

『え？ そんな人いないけど……？』

フェイトちゃんはおかしそうにわたしを見る。そんなことあるわけない。だって、一緒に住んでたじゃん！

わたしははやてちゃんに尋ねてみる。はやてちゃんだって、はやてちゃんだって、その……体がワナワナ震えてくるけど……彼に色々してるんだし、知らないはずないもんね？

『うくん……。なのはちゃん、疲れてるんじゃない？』

知らなかった。苦笑しながら、わたしに休むようにいつてくるはやてちゃん。はやてちゃんはよく嘘をつくけども、絶対に笑えない嘘はつかない。それだけは誓える。そんなはやてちゃんがなんでこんな嘘をつく必要があるんだろう？

ヴィータちゃんにも、シグナムさんにも、シャマルさんにも聞いてみた。彼がバイトでお世話になったというカリムさんにも勿論聞いた。

全員とも反応は一緒。わたしが疲労していると思えば休養を進めてくるばかりであった。

そんなことあるはずない。だってわたしが覚えているから。わたしの記憶にわたしの心に、彼は刻み込まれているから。きつと、これは何かの間違いだ。自分自身に言い聞かす。言い聞かしながら、愛娘のヴィヴィオの答えに啞然とした。

『パパ？ ヴィヴィオにパパはいないよお？』

無邪気に無垢に答えるヴィヴィオ。その瞬間、わたしは彼の名前

を叫んでいた。360度、あらゆる所に視線を這わしながら、蟻の子一匹逃すことなく。

何度も何度も視線を動かし、わたしはやつと彼を見つけた。スーツを着込み、その上に白衣を纏い、手でお祭りにときを買ったと思しきピエロの仮面を弄びながら、わたし達の姿を見た彼は嬉しそうな笑みを浮かべて外へ出ていった。いまにも消えそうで、いまでも無くなりそうで、既に失せそうで、彼は外へと消えていった。

自然と手を伸ばした、頬から流れる滴を拭うこともせず、わたしはがむしやらに手を伸ばした。届かなくても、捕まらなくても、必死に手を伸ばし――

「あつ、なのはっ……!?! おっぱい掴まないで……! んっ……!」  
フェイトちゃんの朝から妙に艶めかしい声で目覚めることになった。

☆

今日は私のほうが先に起きたので、しばしなのはの寝顔を見守ることにしていた。 同い年にもかかわらず、なんとなく母性本能をくすぐるというか……、ついふもふしたくなるような、そんな錯覚に陥ってしまうのは。 9歳の頃からそんな感じなんだよね。 二人揃って母性本能をくすぐるから困ってしまう。 むにやむにやと手を動かすなのはは、たまに自分の長い髪の毛を食べようとしたり、眉を顰めたりしながら熟睡している。 うくん、そろそろ起きるかも？

『パパー！ 魔法少女コミカルゴメットさんがはじまるよー?』

『ちよつとまってー! もうすぐ朝食出来るからー!』

もう一方の母性本能をくすぐる子供は、私の大事な愛娘と一緒にアニメを見るみたい。 今日もヴィヴィオと一緒に起きて遊んでいたみたいだし、ちよつと妬げちゃう。 子供のほうにも、愛娘のほうにも。 はあ……私も9歳の頃に戻れたらなー。

「んっ……。 ダメ……、行っちゃや……」

「ん?」

なのはのほうから小さな声で何か聞こえてきた。 あまりにも小

さな声量のせいで聞き取れず、ついつい顔を近づけると——なのはがいきなり胸を鷲掴みしてきた。あまりの早業に反応することさえ出来なかった。

「んっ………！」

つい漏れてしまった声を聞いて、なのはの揉みが一層強く、そして早くなる。

「あっ、なのはっ………!?! おっぱい掴まないで………! んっ………!」

堪らず声を出す。私の声が聞こえたのか、なのははビクつと体を震わせパチリと目を覚ました。二、三度瞬きをした後、私のほうを向いて笑顔を見せるのは。

「おはよー、フェイトちゃん!」

なのは、その前に私の胸を揉みしだく行為を止めてください。

「うん、おはようなのは。と、ところでさなのは——」

「ね、ねえフェイトちゃん?」

「ん? どうしたの?」

胸を揉む手が止まり、心配したような、それでいてどこか不安そうな顔を見せるのは。もしかして、嫌な夢でも見たのかな?

「えっとさ………俊くんって人物、知ってる?」

「忘れたくても忘れられないと思うよ?」

何を言っているんだろう。もしかして、まだ寝ぼけているのかな? ?

私の答えを聞いたなのはは、何故か安堵したように息を吐き、いきなり私に抱きついてきた。

「もー! フェイトちゃん大好きー! やっぱそうだよねー、忘れるはずがないよねー!」

「きやつ!?! も、もうなのはったら………。もう俊が朝食作ってるし、早く二階に下りないと………」

「えー! もうちよっとだらだらしようよー。どうせ俊くんが起こしに来てくれるんだしきー!」

「いや、だから………」

その俊が来てるんだって……。

部屋の扉を指さし、なのはの視線を移動させる。扉の前には、鼻息を荒くした俊と、「わーい、ラブラブだー！」なんてことをいいながらはしゃいでいるヴィヴィオ、そして欠伸びながら興味なさそうにしているガーくんがいた。

正直、鼻息荒くしている俊が気持ち悪い。

「はあ……はあ……百合……百合……！」

喋るともつと気持ち悪かった。

扉を一気に開け放ったヴィヴィオが、私となのは目がけて飛んでくる。それを二人で受け止めながら三人でベッドに倒れこんだ。

「ヴィヴィオー、今日も元気だねー！」

「うんー！ さつきパパとゴメットさんみたからヴィヴィオげんきだよー！」

「そっかー。ゴメットさんカッコいい？」

「うん！ でも、パパのほうがカッコいいよ！ そしてねーそしてねー、なのはママとフェイトママのほうがかわいい！」

「あくん、もうヴィヴィオ大好きー！」

互いに抱きつく二人。そこに私も巻き込まれるようにして、川の子になってガールズトークを開始する。ふふつ、なのはとヴィヴィオとこうやって遊んでるときって幸せ。ご飯はその……将来の旦那さんが作ってくれてるしね。

『うわあ〜〜ん!! 俺も息子切るからその輪の中にいれてくれー！』

『オチツケ！』

……なんで私となのはがチラチラそつちを見ているのかはわかってきてないんだね……。

はあ……、この調子じゃいつになるんだろうなあ。

——食卓——

「つまり夢の中でなのは俺の存在を抹消したかったということか。こうして俺が話している間にも『うっせーんだよ、この家畜が』とこ思ってるんですね」

「ち、違うよ!? そんなことないもん! むしろ忘れていたフェイトちゃん達のほうが最悪だと思います!」

「なのは……、夢って自分の都合のいいようになってるんだよ?」

フェイトの優しいまなざしになのはがわんわんと抗議する。朝からなのはは元気だなー。それにしても面白い夢だ。俺がいなくなるかあ……。

並行世界にはそんな世界もあるんだろうなー、と考えながら箸を進めていく。

「じゃ、じゃあじゃあ! フェイトちゃんはどんな夢を見たの! わたしは教えただし、勿論フェイトちゃんもいうよね!」

「なのはが勝手に言い出したのに……。まあ、私の夢は至って普通なんだけど——なのはと俊とヴィヴィオを養っていたかな」

「至って普通だな」

「でしょ?」

フェイトと二人して頷くが、なのはは納得できなかったのか異議を挟んできた。

「はいはい! わたしも俊くん養ってます! フェイトちゃんの夢に抗議します!」

「まあ……所詮夢だしねー」  
「だなー」

なのはの抗議をさらりと流す。瞳を潤ませながらいじけるなのはに、二人して鮭の切り身を与える。するとなのははちよつとだけ機嫌を治したのか、嬉しそうな顔をする。

隣から服の袖を引っ張る感触を覚えて横を向くと、ヴィヴィオが太陽な笑顔で自慢げに夢の内容を話してくる。

「ヴィヴィオはねー! なのはママとフェイトママとパパとガーくんといえにいたよー。それでねそれでねー、なのはママのあたまにねこさんのみみがびよこびよこし

てて、フェイトママはわんちゃんかびよこびよこしてたー!」

「へー。それはパパも見たかったなー。それで、パパはどんな



だった?」

「ハムスターのふくきてママたちのまんなかでふるえてた!」

それ絶対に脅されてる最中ですね。カツアゲされてます。

ヴィヴィオの頭をなでなでして、ガークンにも聞いてみる。アヒルと意思疎通できるとは、時代も進んだものである。

「ガークンハドラゴンタオシター!」

現実でもしそうだから怖い。なんせ箸で器用に鮭の身ほぐしているアヒルだからな。

みんなそれぞれ面白い夢をみているものだ。

うんうんと頷き、頬にご飯粒をつけているヴィヴィオの顔を拭いてやっている、なのはとフェイトがこちらに視線を向けてきた。

「んで、君は?」

「リンディさんに暴言吐いて絶望で全身を覆われる寸前だった」

まあ、本当はウエディングドレスなんだけどな。

なのはとフェイトが出勤する時間になり、見送りとして玄関まできた。今日は9月19日、いつもと違う仕事になるだろうな。

それを表すように、靴の踵を整えていたなのはがふと何かを思い出したように俺に話しかけてきた。

「あ、そうそう俊くん。今日は此処で仕事があるんだ。武道館何個分の広さなんだろうねー。なんでもパーティーがあるらしくてね、今日は六課が色々頑張るみたい。会場設備とか、ショーの司会者とか、まあ……前線の私達がどれだけするかはよくわからないけどねー」

……こいつ、いま自分のことを前線といっただと……? お前、いつ戦いに出動したっけ?

俺に招待状らしきものを渡してくるなのは。丁寧にガークンの分まで揃ってる。俺は俺用にカリムさんから貰ったわけだが、折角だしこちらを使わせてもらうことにした。

いつものようにお見送り。フェイトが自室で何か探し物をしているので、しばし待つことになっているが。その間、なのははヴィヴィオとあっちむいてホイして遊んでいる。……正直なところ、な

のははこういう子供と遊んでいる姿のほうが似合ってしまう。うん、戦ってるなのも恰好いいんだけどなく。

やがて二階からバタバタと慌てて降りる音が聞こえてくると、フェイトが姿を現した。手に持っているのは車のカギ。なるほど、部屋に間違つて置いていたのか。

「いつてきまーす！」腕時計を見ながら慌ただしく玄関を出ようとするフェイト。そんなフェイトの手を引いて、体を支えながら俺は耳を近づけフェイトにだけ聞

こえるように囁いた。

「なあフェイト。すぐに結果が出ない行動もいいものだな」

何を言わんとしているのか理解してくれたフェイトは、そつと微笑んでくれた。

今度こそ玄関を出る二人に手を振って、俺もスーツに着替えに部屋へと向かった。

☆

時刻は既に19時を迎えようとしていた。目の前には最高評議会の面々方、室内には俺とスカさんの娘の二人だけ。ヴィヴィオとガーくんはリンデイさんと一緒に会場に向かっている。

「(科学の力つてすげー。脳みそだけなのに生きてるんだもん)」

初めての遭遇でしげしげとポッドを眺める俺、最高評議会は声をかけてきた。

『もう一度……言ってもらおうか?』

重く、体の芯を押さえつけられたのかと錯覚してしまうほどの声。

「ん〜? だからさ、俺と一緒に来てほしいところがあるんだよ。

絶対に気に入るって。一秒一秒、世界のこと考えてたんじゃキリがないぜ? 発狂しちゃうぜ?」

『発狂など、当の昔にしておった。狂い狂い狂い続け、それでも私達は世界の行く末を見守るためだけに存在しているのだ。力が及ばないことなどどうに知っておる。願いが叶わないことも知っている。それでも……可能性を信じて私達はモニターを見続けるのだ。』

『ここを離れることなどありはしない』

対面してわかる、覚悟の強さ。最高評議会の想いと重くなった心。最高評議会は既に知っていたのだ。だけでも、それを肯定して何が変わるわけでもない。否定して何かが生まれるわけでもない。最高評議会に力なんて残っていない。少し調べれば分かることだった。何も出来ない自分達の愚かさに歯ぎしりしながら、ただ虚ろに刻を刻むのみ。

かける言葉が見つからなかった。いや、かける言葉はすぐに見つかった。だけど、その言葉をかけたところで、世界が変わるわけでもなく、最高評議会が変わるわけでもない。俺なんか声をかけてもきつと変わらないだろう。

自然に歯ぎしりしていた。自分はやはり無力なんだと思い知らされる。

それがなにより悔しくて——俺は手にもついていたバブをポツドの中に落とす。

『き、貴様あああああああああああああああ!』

「すまない、バブ一つしか持つてこなかったんだ……」

バブを一つしか持つてこなかった自分が情けなくなった瞬間だった。

「鬼畜の所業だ……」

スカさんの娘に当たるドウエさんは何故か俺を見て戦慄していた。残る二人の最高評議会はモールス信号で降参を示してきた。

しゅわしゅわと泡が立つポツドを眺めながら、俺とドウエさんは場所を移動する準備を始めた。

疲れたろ？ 後は俺達に任せなよ。

☆

それは唐突に送られてきたものだった。9月4日に私宛てに届いた手紙、丁寧な字で書かれた手紙を要約すると、いわゆる招待状であった。こんな酔狂なことといったいどのだれがしたのだろうか。資料整理も大詰めにきていた私は、ウーノに招待状を預けそのまま作業に取り掛かった。抑えることができない笑みを浮かべながら。そして来る19日、私はその光景に啞然と圧倒されることになった。

た。正確な人数などしつていないが、ほとんどの局員が来ているのではないかと思うほどの人の多さ、局員以外にも聖王教会・縁のある人物たちは呼んでいるようだが……。それにしてもこの多さ、予想を遥かに上回っているこの現状に、流石の私も声を失う。資料が潜ませてあるトランクケースを握っているこの感触だけが、この光景を現実だと実感させてくれた。

「流石のお前も驚くか、ジェイル。無理もない。こんな現状、実現したくても出来ないものだったからな」

「昔までは……」幾許か優しい声色で、私と同じこの光景を見る者はそう声を出した。

そう、そうなのだ。陸と海の垣根を越えて、仲よさそうに話しているこの光景を私はいまだに信じられずにいた。口々に互いの欠点、それによる支障、そしてその欠点の改善点。いまごく当たり前に行われている光景が、つい数か月前の管理局では決してありえない光景であったのだ。なんせ、陸と海の亀裂は海よりも深く、陸よりも長いものであったから。

「不思議なものだ……。おかしいよな、依然からずつとこんな状態だどつい錯覚してしまうのだ。陸と海に亀裂などなく、こうして世界のためにお互いが尽力を尽くすために各々奮起する。以前からそうだったんだと……。錯覚してしまう」

「錯覚するのも無理はない……。なんせ私だって信じられないのだ」

ああ……。どうして彼はいつもこうなのだろう。

どんな障害だって、彼は笑って壊してしまう。いつだってそうだった。あの時だって、空港事件のときだって。

『あ〜！スカさんだー！ウーノさんもいるー！あー、チンクもいる！お〜い！』

遠くのほうで、お姫様のような服を着込んだヴィヴィオくんが手を振っていた。その隣には、ママである高町なのはとフェイト・テスタロッサ・ハラオウンもいる。……。彼女にもまた、母であるプレシア・テスタロッサのことを話そう。——彼によって、自首の機会は

潰されてしまったのだから。

駆け寄ってくるヴィヴィオくん、それを確認してトランクから手を離れた。中には必死になって死にも狂いで集めた研究成果で入っているにもかかわらず、そのトランクから完全に手を離れた。体に軽く衝撃を受けながらも、私はヴィヴィオくんをしつかりと抱きとめた。

「こんばんは！ スカさんにウーノさんにチンク！ わー！ 他のみんなもいる！」

後ろに控えていた可愛い娘たちに挨拶をしていくヴィヴィオくんは、その愛くるしさも相まってかすぐさま皆の玩具と化してしまっただ。

皆もヴィヴィオに会いたかったのだろう。

「あ、スカさんこんばんは。今日は家族全員で出席なんですね」

「ははっ、このようなお祭りごとを私一人で楽しんでしまったら、それこそ娘たちに後で何されるか分からないさ」

ああ……いまさらになって考え出した。いや、放棄して考えに真正面から向き合った。

もし、もしも私が今日自首をしていたら——娘たちの心はどうなるのだろうか？

私は拘束され、最悪死刑になるだろうし、それでいいと考えていた。生活と安全は保障されている、今後の人生は真つ当な人間として生きていくことが出来る。だけど、だけでも——

「ヴィヴィオくん、もしもパパがいなくなったら——どうする？」

ウーノに抱っこされていた彼の娘に問う。問われた娘はきよとんとした顔をし——そのまま顔をくしゃくしゃにしだした。

「あっ、い、いやっ!? ベつに彼がいなくなったらわけじゃなくて——」

「なのはママー！ うわあああああん！」

「はい、よしよし。パパは電話一本で棺桶から甦るから大丈夫だよー。ほらほら、折角の可愛いお洋服が台無しだよー。パパに見せるんでしょ？」

「ひっくっ……… うっ……ぐすっ………」

ウーノの手からなのはに渡るヴィヴィオ。目から涙をこぼして  
おり、なのはの胸に顔を埋めてぐずりだした。真っ白のドレスで着  
飾ったなのはは困った顔をしながら、ハンカチでヴィヴィオの涙を  
拭ってあげる。それからヴィヴィオの肩をとんとんと叩きながら  
ゆっくりとあやしていく。

「大丈夫だよ、何も怖いことはないからね」

なのはがヴィヴィオをあやす横では、スカエリツティがこの場にい  
る全員、ナンバーズ・レジアス・ガークン・フェイト・そしてなのは  
から白い目を向けられていた。頭を項垂れながら謝るスカリエツ  
ティ。ヴィヴィオはぐすんとしながらも、広い心で許してくれたよ  
うだ。

スカリエツティは思う。そして確信する。

「なあレジアス」

「……どうした？」

「これを、使ってはくれないだろうか？」

差し出したのは研究結果が入ったトランクケース。娘たちの安  
全な生活と引き換えに自首することを選んだスカリエツティが未来  
に残すために作った努力の結晶。

それをレジアスに渡す。娘たちは知らない。これを作るため  
にスカリエツティがどれだけ苦労したのか。しかしスカリエツ  
ティもまた、自分がいなくなることで娘た

ちがどれほど苦労するのかを視野に入れてなかったのだからお互  
い様だろうか。

トランクケースを受け取ったレジアスは確認を取る。

「……いいのか？」

「勿論だよ。いまの私は機嫌がいい。それに——科学者として、  
自分の努力の結晶がどれほど役に立つのか興味があるのは確かなの  
でね」

スカリエツティの努力の結晶、近い将来必ず役に立つときがくるだ  
ろう。

そしてその時を楽しみにしながら、スカリエツティは家族の輪の中

に戻っていく。大切な家族の輪の中に、笑顔が溢れる家族の中に、本来あるべき家族の形へと戻っていった。

泣き止んだヴィヴィオが、フェイトから生春巻きを食べさせてもらっている最中、そのアナウンスは唐突にやってきた。

『あー、あー。 えー皆さん、楽しんでるやろかー!?』

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!』

ホール内に流れる機動六課部隊長の可愛らしい声、後に続く野太すぎる野郎どもの声。 その二つがなんともいえない不協和音を醸し出し、ホール内にいる局員は思わず耳を塞いだ。

『えー、これよりプログラムを消化していくでー! そろそろみんなもだからだってお喋りしたり、食事をするのにも飽きた頃やろ! ここらで一つ、シヨールといくでええええええ!』

またもや野太い声がホール内を支配し、その声が静寂に変わる頃、軽快な曲調の音楽が流れだした。 皆の視線は大きいステージへ。 皆がステージを凝視する中、チアリーダー姿のヴォルケンスたちが飛び出し踊りを披露する。 ピンク髪の長身女性は顔を真っ赤にしながら踊り、金髪の柔らかそうな女性は意外とノリノリでボンボンを振るう。 赤髪の幼女は無表情で機械の如く動き、ガチムチの男は笑顔を浮かべながら踊っていた。 迸る汗が一層彼をスターへ駆け上げさせる。

『いぞガチムチー!』

『シヤマルさああああああああん! 俺の尿道に注射器を挿入してくれー!』

『ヴィータちゃんかわいいよー!』

『シグナム姉さんカッコいいー!』

ボンボンを振り振りしながら踊るヴォルケンスに様々な声と喝采が上がり、一番のサビが終わった瞬間、機動六課のフォワード陣が飛び出してきた。 今度はチアガール

ルではなくミニスカメイド服だ。 男共のテンションはMAX、女性もまた、踊る可愛い新人たちに声援を送る。 管理局員の何が凄い

かというど、誰も写真を撮ることなく

ちやんと余興として楽しんでることだ。

なのは達も手拍子で盛り上げる。飛び入り参加自由なこのショー、既にスカさんの娘の何人かがステージに向かって走り出していた。

そんな中、なのは達の元にリンデイが足を運んできた。ワイン片手にやってきたリンデイに、なのはとフェイトは頭を下げる。

「すいませんリンデイさん。ここまでヴィヴィオとガーくんの引率をしてくれて……」

「ごめんねお母さん」

「いいのよ、二人とも。そんなに頭を下げなくても」

「あ、ところでリンデイさん。俊くん知りませんか？ さつきから探してるんですけど見当たらなくて……」

きよろきよろと辺りを見回すなのは、その顔はどこか不安そうな顔をしていた。既にアルコールがはいっているリンデイはそんなのはに気づくことなく、笑いながら答える。

「さあわからないわ。きつと、ちよつと可愛い女の子にナンパでもしてるんじゃないかしら。それよりフェイト聞いてー。皆私のこと20代だと思っかけて話しかけてくるのよ。もう大変、リンデイちゃん困っちゃうー！」

「母さん大丈夫っ!? ものすごく痛い女の人になってるよ!」

「まだまだフェイトには負けないわよー!」

「分かったから! 分かったから母さんアルコール摂取するのはもうやめて! 婚活にいる勘違い女性みたいな印象しか持たれないから!」

大分酔っていたリンデイに絡まれながら、周りに必死に張り付かせた笑みを浮かべるフェイト。ちなみに誰もかかわりたくないのか、スカさんファミリーは2m離れたところで素知らぬ顔で談笑していた。

フェイトが絡まれ、スカさんファミリーが無視を決め込む中、なの



はだけが不安の色を濃くしていた。

そしてもう一人、ヴィヴィオがいなくなったことにも誰も気づいていなかった。

☆

華やかなステージでホールが熱狂の渦に巻き込まれる中、青年は幾許か離れた場所で最高評議会に話しかけていた。

「管理局つてすごい所だよな。管理局のおかげで助かった命はいくらでもあると思う。助けるって行為はさ、その人の何十年後の未来、出会う人さえも守ることになるんだ。助けられた人物がまた違う誰かと出会い、恋に落ち、ときには喧嘩し、そうやって様々な人間と出会い、人と人が大きな一本の幹で繋がっていくんだよ」

『無限の樹形図か……』

「あ、知ってた？ こりやまいった。ドヤ顔で語った俺が恥ずかしい。まあそれもそうか、知識で勝てる生き物なんていないだろうしなあ」

既にそこには、青年と最高評議会しかいなかった。青年と一緒に最高評議会をここまで運んできたドウエは家族の元へと先ほど走っていった。

『キミはいいのかい？ こんなところにいる』

三人のうちの一人が話しかける。

「いいさ。ここからでもステージは見えるし、あんたらと話していたいし。それに、ステージを飾るのは俺なんかよりもっと相応しい奴らがいるしな」

青年の視線の先には楽しそうに踊る六課の姿がそこにはあった。彼女たちは何も知らない。夏祭りを終えてからの青年の行動など知る由もない。何故今日此処でパーティーをしているのかすら理解していないだろう。いや、彼女達だけではない。ほとんどの局員が理解していないだろう。

「俺のお節介は終わったよ。華やかなステージに野郎がいるより、綺麗な女の子たちが踊っていたほうが見えて楽しいだろ？」

『確かに……。そうしてお前は、いつだって縁の下の力持ちはする

の दौरानな……』

バブで綺麗サツパリな脳になった男は、何度も何度も頷いた。

男の目にはこの光景がどう映っているのだろうか？　こんな組織を作りたかったのではない！　そう叫ぶかもしれない。逆に、こんな組織になつてしまつて……、と嘆くかもしれない。

四人とも黙つたまま、時だけが流れていく。ステージ上では、フェイトが顔を赤くしながら歌を歌っている最中である。どれほどの時間が流れただろうか、三人のうちの一人、青年の餌食になった男がポツリポツリと話し出した。

「目的は……世界の平和だった」

何かを思い出すように

「管理局が出来る前はまさに無法であつたのだ。目の前で殺された者もいたし、罪のない者が消える場面にも何度だつて出くわした。

なんとかしたかった……、どう

にかしたかった……。世界を恨むのは簡単だが、人を救うのは難しい。そんなことわかりきつていた。理解していた。だけでも、それでも、私達は救いたかった。それだけが、願ひだったのだ」

だから彼らは管理局を設立した。

「だけど人の寿命はかくも短いもので、設立して間もなく体に限界が来てしまったのだ」

これからだというのに。折角設立することが出来たというのに。

悔し涙が止まらなかつた。

「君なら理解できるのではないか？　まあ理解出来なくてもいい。とにかく当時の私たちは希望に満ち溢れていた。管理局を設立し、法を制定し、これからよりよい未来が、管理局が出来る以前なんかよりずっといい世界が待っている！　そう期待に胸を膨らませながら」「それで……そんな状態に？」

「その通りだよ。死ねない体になることへの抵抗はなかつた。むしろ自分たちが世界の守護者になつたんだと思うと誇らしさすら持っていた」

だが、世界はそんなに甘くなかつた。

管理局を設立したからといって、犯罪の一気に減るなんてことはない。実際はその逆で、管理局が出来たことよって死角が多く生まれることになった。

「来る日も来る日も減少しない犯罪率を聞くことになった。罵声だつて浴びせられた。能無しとまで言われた。しかしそれも当たり前前の反応だ。君だつて、強い存在が目の前にいるのに助けられなかったら暴言を吐くだろう？ 呪うだろう？」

「……うん、俺ならきつとそうするよ」

管理局だつて万能じゃない。それは周知の事実かもしれない。だけど、そんなもの救いを求めている存在が気にするはずがないだろう。『助かりたい』それだけしか頭にならないのだから。

「だから私達は努力した。世界が平和になるように。皆が幸せに過ごすことが出来ますように……、そう祈りながら努力した。そしてその結果——管理局は内部でも対立しあうことになり、段々と私たちは壊れていった」

何が正義なのだろうか？ 何が平和なのだろうか？ この行いは間違っていないだろうか？

自問自答するけども、答えはいつも決まっていた。自己弁護をしていたのだ。

「滑稽なことだ……。 私たちは世界を救っている気になっていた。そこで生活している人間には目もくれず、偽りの秩序だけを必死に守ってきたのだ……。 助けを乞う声を無視して……」

頬に伝う涙は何を意味しているのだろうか。

懺悔？ 後悔？ 憐れみ？ 憐憫？

答えは彼ら三名しか持ち合わせていない。

三名の視線の先にはステージが、瞳には踊って騒いでいる局員の姿が映し出されていた。

「……私達がやったことは間違っていたのだろうか？」

三人のうちの誰かが呟く。

「管理局を作ったことまでも後悔しているわけではない。しかし……だからと言ってこれまで行ってきた設立以後のことを考えると

……」

自信が持てなかった。正しい答えを欲しがった。自分達が歩いた道を肯定してほしかった。さりとして青年は何も言わず、何も語らず、ただ黙っているだけであった。

そんな青年の元に何者かが走ってきた。英国貴族の息女が着るような洋服を着飾りながら小さなお姫様は駆けてきた。そのまま勢いを殺すことなく青年の膝にアタックを決める女の子。青年の腰に抱きつき、力いっぱい抱きしめた後、嬉しそうな笑顔を向ける。

「パパみつけたー!」

「ミツケター!」

「おー、見つかったっちゃったなー。よくここがわかったな、誰も分からないと思っていたのに」

「えへへー、ヴィヴィオはパパのばしよならすぐわかつちやうの!」

青年に抱っこされながらはしゃぐヴィヴィオ。青年の頭に乗りながら遊ぶアヒル。

ふと、ヴィヴィオが最高評議会の存在に気づく。抱っこされている青年の手をすり抜けて地面に降り立ったヴィヴィオは、感心と興奮の入り混じった顔で青年と最高評議会に視線を交互に送った。

「パパ! パパ! これ! これ!」

「なんだとおもうー?」

「ヴィヴィオこれ知ってる! ブレインコントロール! ブレインコントロール!」

「うーん……ちよつと違うかなー。これはなー、なのはママとフェイトママが働く管理局の一番偉い人達だよ」

「ブレインコントロールなの?」

「ブレインコントロールなの」

しげしげとポッドを覗くヴィヴィオに、くちばしでポッドを叩き強度を確かめるガーくん。青年はガーくんを手元に引き寄せる。

ヴィヴィオは青年のほうを向きながら問いかけた。

「おしごとがんばってるの?」

その問いに青年は笑いながら頷いた。

ヴィヴィオはポッドに向き直る。向き直り、三体あるポッドを出  
来るだけ一か所に集めだした。ガーくんもそれに倣うようにヴィ  
ヴィオの手伝いをする。一か所に集められたポッドを前にヴィ  
ヴィオは大きく息を吸い込み――

「ありがとうございますー！」

その笑顔はひまわりの如き愛らしさで

その笑顔は太陽のように明るく

その笑顔は最高評議会の心をすつと軽くした

「パパー、ヴィヴィオちゃんとおれいいえたよー！」

「偉いなー。流石愛しのヴィヴィオだ。洋服もキュートだし、パ  
パ襲っちゃうかも！ あ、そうだヴィヴィオ。なのはママを呼んで  
きてくれないかな？」

「うんー！」

褒めて褒めてと急かすヴィヴィオの頭を撫でながら、青年は一つだ  
けお使いを頼んだ。それに頷いたヴィヴィオはすぐさまなのはを  
探すため、ガーくんを連れだつて走り出した。

それを見送った青年は、最高評議会に向き直り何か言葉をかけよう  
としたが目の前に広がる光景を前に口を閉ざした。

最高評議会は泣いていた。大粒の涙を流しながら、大の男三人が  
泣いていた。

代表格の男が喋る。顔を歪ませながら喋る。

「おかしなものだ……。私達は、これまでに沢山の救えなかった人

達の顔が脳裏に浮かんでは消えていた。それぞれが苦悶の表情を  
浮かばせながら、時には悲しそうな表情を浮かばせながら、私達の脳  
裏に張り付いて離れなかった……。聴覚の部分には断末魔が絶え  
ず響いていた……。それが当たり前だと思っていた。救えな

かったのだから。それをなくすために私達は違法・合法問わず尽力  
した……。それでもやはり無謀で無茶であり、そのたびに私達は失  
意に沈んだ……。……いつの間にか涙も流すことがなくなった。

枯れ果てたのだと思っていた……。――本当におかしなものだ  
……。 たった一人の少女の言葉に、何故私達はこんなにも無様に泣

いているのだろうか……」

止める術は持ち合わせていなかった。否、止めようとは思わなかった。

「何万、何億、何兆もの苦悶より、たった一人の笑顔のほうが脳裏に張り付いて離れない……。何万、何億、何兆もの断末魔より、たった一人の感謝の言葉のほうが絶えず響いてくる……」

ぼろぼろと涙を流す最高評議会に、青年が声をかけた。

「それが答えだよ。あんた達のやってきたことのさ」

男たちの目元を拭う青年。

「道を歩めば『間違っているかも』と思うことは幾らでもある。けどさ、歩むべき先にあるのはいつだって未来だけなんだよ。俺達の歩く先に道はない。いつだって、歩いた後に道は作られる。未来に正解なんてありはしない。だから俺達は努力するのさ。歩いてきた道を正解だと答えることが出来るように。胸を張って誇れるように。後ろに控える子供たちに立派な背中を見せるのさ」

なあ、あんたらは胸を張って誇れるか？

挑発的に誘う言葉。不敵に笑いながら煽る青年。最高評議会

は、先程の泣き顔ではなく最高の笑顔でこう答えた。

「私達の歩いた道は正解だった！」

その言葉に青年は子供のようには笑って見せた。

「ジエイル・スカリエッティに伝えてくれないか。『好きな道を歩め』と」

「ああ、伝えておくよ。あー、その……ヴィヴィオの後じやインパクトないかもしれないけどさ、俺からも言わせてくれよ。——いままでお疲れ様でした。後のことは、俺達に任せてください」

「ふっ、ぬかるなよ？」

「人間はそこまで愚かじゃないさ」

がっしりと握手を交わす。残りの二人とも握手し、二・三、言葉を交わした。

最高評議会の顔は晴れやかだった。もう何も怖いものはないというように、もう何も心配事はないというように。ただただ、刻の

流れを受け止めた。

男三人の体が発光し、薄れていく。現世に止めることがなくなつた魂が、ようやく輪廻転生の理に戻っていく瞬間であった。

青年は問う。

「言い残すことは？」

「生きててよかった。それ以外に語る口をもつてはいない」

それを最後に最高評議会は姿を消した。残っているのはただの悪趣味な脳みそと、それを保管してあるポッドだけであった。

「さて……いくか」

シヨールが終わつた。ピエロは、華やかなステージを見ることなく姿を消した

☆

「え？ 俊くんがわたしを呼んでたの？」

「うん！ あつちにいるよー」

いつの間にかわたしたちのそばを離れていたヴィヴィオを探すと十数分、迷子になっていたヴィヴィオが知らないお姉さんを引きつけてわたしのことを探しに来た。しかもわたしが迷子になっていたという設定だった。迷子になっていたはずの娘を探していたら自分が迷子になっていた。どうやら次元跳躍が行われたらしい。

しかし俊くんがわたしをねー……。ヴィヴィオの話では、指名はわたしだけみたいだし……。これはもしかしたらもしかして？

「う、うんっ！ あ、あるよね？ だってこのドレス、どっからどうみてもウエディングドレスだし……。まさかわたしの魅力に理性が追い付かなくなつた俊くんが獣になつちやつて……！」

きやーきやーと顔を真っ赤にしながら照れていると、隣にいたヴィヴィオがとても心配そうな顔をしていた。一瞬にして我に返る。

てくてくとヴィヴィオと手を繋いで指定された所に行く——

「えつと……俊くんは何と戦っていたの……？」

なんか脳みそらしきものがぶかぶか浮いていた。あ、ガーくんダメだよ！ 口ばしで遊んじゃダメだってば!!

「あれー？ さつきはしゃべつたのにねー」

「オカシイネー?」

「これが喋ったの!?　これが!」

流石のわたしも驚きを禁じ得ない。もしかしてこれは悪魔合成に失敗した成れの果てなのかもしれない……!

「あ、手紙がある。これは俊くんからだねー。ふうん、結構ロマンチストじゃん。でも中身は結構乙女な部分あるし——」

言葉が止まる。手紙に書かれていた文面を何度も何度も目で追う。

「ははっ……冗談だよね……?」

手紙に書かれていた文面は至ってシンプルでわかりやすかった。

『ごめん。刑期を終えたら絶対に働くよ』

「ヴィヴィオ!　パパを探すよ!」

「お?　お?」

何があったか分からないけど、お別れなんて真っ平ごめんだよ!

☆

青年は一人、パーティー会場の外でグラスを傾けていた。笑い声が絶えない場所で、ここだけが隔絶された空間であった。

「今宵は月が綺麗だね。ひよつとこ君」

「月にいくら手を伸ばした所で、触れることは叶わないぜ?　スカさん」

隣に姿を現した白衣姿の男は、青年のグラスに軽く自身のグラスを当てて飲む。幾分か酔っ払っているのか頬が赤い。

「ああスカさん、伝言だ。『好きな道を歩め』だとさ」

「……うむ、ありがとう。笑顔で逝けたのかな?」

「ああ、最後の最後で救われたよ。よかったのか、話さなくて」

「互いに話すことなど何もないさ……。それに、……いや、なんでもない……」

「変なスカさん」

「まったくだよ」

しばし無言でグラスだけを傾ける。

「悪いなあスカさん。大事な自首の機会を潰しちゃって」



「まったく……君には困ったものだよ。こんな祭りをぶつけられると、こちらとしては何もできないではないか。それでも、研究結果自体は役立つものだったからレ

「ジアスに預けたけどもね」

「へー。結局、スカさんの企みは娘たちにはバレてないの?」

「ウーノ以外には誰も知らないと思うよ。あ、そうそうひよつとこ君、君にこれを返さなければならなかったね」

スカリエッティが取り出したのは、祭りのときに渡した大事なひよつとこのお面。それを受け取った青年は、先程から手で弄んでいたピエロの仮面を粉々に砕く。

「よーし! これで全部元通りだな。俺も一安心だ! お兄さん記念に踊っちゃうぞー!」

いそいそと服を脱ぎだす青年は、全裸になると不思議な踊りをはじめた。

、(。▽。)ノ  
^ ( )  
ω >

、(。▽。)ノ  
( ) ^  
ω <

< (警) >  
(。D。)ノ  
< ( ) > ^ (。D。)ノ  
— | ω >

< (警) >  
^ (。▽。)ノ  
^ ( ; 。D。)ノ

≡ ( )ノ ≡ ( )ノ

∴ ; /

∴ ; /

——「警」

( ) ( , A、 )

( ) ( Vノ )

— — — — —

「どういうことだつてばよっ!」

「それは俺のセリフだ。タバコ吸いに外に出たら全裸でお前が踊つてる最中だったんだぜ? 思わず啜えていたタバコ落としてしまつたぞ」

まさかおっさんが出てくるとは想定外だった。

「とりあえず服を着ろ」

「あはくん? 服を着てくださいお願いします」 だろ?」

「フンっ!!」

久しぶりに亀頭にデコピンされた。しかもおっさんのデコピンだからめちやくちや痛い。

亀頭にアロエ軟膏を塗りつけつつ服を着ていると、その間におっさんがスカさんと話し込んでいた。

「まあなんだ。よかつたな、色々」

「ええ、おかげさまでね」

会話は終了した。やっぱ野郎つてこういう時の会話が面白くないよな。もつとボーイズトークしろよ。

「しかしひよつとこ。お前は全部元通りだといったが……それは流石にねえだろ?」

おっさんが言葉をかける背後から、一人の老人が歩いてきた。

「おーおー、憎い演出してくるじゃん。ラルゴ翁。わざわざ俺を捕まえにパーティーを切り上げてきたのかい?」

「その通りだよ、上矢君。君はテロの首謀者として逮捕されるのだからね」

「あーはいはい。んなことは分かってましたよーっ」と

為すがまま、俺はおっさんに手錠をはめられる。これが噂のゴム人間をも封じた俺は翁に顔を向ける。これが噂のゴム人間をも封じた俺は翁に顔を向ける。

手錠をはめられた俺は翁に顔を向ける。

「んで、懲役どれくらい？」

「ふむ……終身刑くらいだろうか」

「マジすか。流石の俺も驚き桃の木ウソツキーだぞ」

「つまんなかったから死刑な」

「ラルゴ翁、おっさんは局員として色々問題があるからクビにしたほうがいいと思う」

「こいつマジで危ないもん。」

「けど残念だったなあ。ヴィヴィオの運動会とか見たかったし、なのはやフェイトと一緒にもつと過ごしたかった。はやてにだつて札を返せてないし、ヴィータちゃんだつて弄り足りない。——ま、しようがないか。俺はこの選択が間違っていたなんて微塵も思っていないしな」

遠くのほうで、管理局の車を発見した。どうやら、俺はアレに乗って連行されるらしい。ま、俺には相応しい最後かもしれないな。

「一つ息を吐き、足を進めようとした直後」

「上層部のほうで、会議があつてな」

ラルゴ翁が喋りはじめた。うるせえちくわぶつけんぞ。

「世界的テロの首謀者、その人物をどうするかの会議があつたのだ」

「んで、終身刑が決まったんだろ」

「そう。終身刑が決まったのだよ。しかし、その終身刑は従来の終身刑とは少し違っていてね。まあ、それも無理はあるまい。なんせその者は管理局に対してテロを行ったのだから。いわば、管理局を掌握したものだ。そんな人物を拘束するとなると、私たちは多大な労力が必要になってくる。そこで私達は考えた。いかに効率よく、人件を削減し、君を拘束し続けるかを。そして考えに考え、一つの結論に至ったのだよ」

遠くのほうで、誰かが俺の名を呼んでいる気がした。その声はい

つもいつも毎日毎日聞き続けていた声で、その声は色をなくした世界から俺を救い出してくれたんだ。その声はゆらぐ俺の心に道を示してくれたんだ。その声は俺に自信をつけさせてくれたんだ。その声は俺がどんなことをしても守りたい声だった。

「どうだね？　流石の君も、現役エースオブエースにエリート執務官、若くして部隊長になったエリートと、それが所有する固有戦力、次期エースたちに可愛い幼女相手

では……打つ手はないだろう？」

ああ……まったくもってその通りだよ。これは対俺専用の最終兵器だぜ。

「はっ、まいったねこりゃ。お手上げだよ」

おっさんが手錠を引き千切ってくれたので大人しく手を上にあげた直後、泣きじやくりながらエースオブエースが突っ込んできた。

そして次に幼女が飛びついてき

て、耐え切れなくなった俺は尻もちをつく。そこにエリート執務官が乗っかり、部隊長、固有戦力がにやにやしながら倍プッシュしてくる。

「重い重い重いっ!?　なんか腸がねじれてる。とんでもない方向にねじれてる!?!」

さりとて俺の言葉を聞く者は誰もおらず、俺はただただ彼女たちの下敷きとなって小言を受ける羽目になった。

いくら言われても今回ばかりしようがない。口を挟む権限すら俺にはない。だけど、ただこれだけは言わせてほしい。皆の返答は分かっているけど、いまだけはちゃんと聞いておきたい。自分の耳に残したい。だから俺は肺の空気を入れ替えて、大音量で言うてやった。

「ただいま!!」

『おかえりー!!』

ほら、言っただろ？

そこからまたもや続く小言の数々。俺はそれに自然と浮かぶ笑顔を携えながらずっと聞いていた。

ふと、スカさんと目があつた。

「月が綺麗だねえ、ひよつとこ君」

それに軽く笑いながら俺は言う。

「上に乗ってる太陽が眩しすぎて月がわからないや」

そうだ、明日は遊園地に行こう。

俺は明日の予定を決めながら立ち上がり、ヴィヴィオを抱っこする。

それに不満の目でなのはとフェイトが睨み、はやてが後ろから抱きついてきた拍子に支えきれずにその場で転ぶ。

視界いっぱい広がったのは、青と白の縞々パンツ。俺はこの縞パンの持ち主を知っている。俺が子供の頃から好きな女の子。

守りたい女の子。高町なのはだ。

いつもいつだって、俺の隣にいてくれた君。

自然と口から言葉が出ていた。

「なのは…… 大好きだ……」

「下着に顔突っ込みながら言うセリフかあ……」

意地でも口から言葉を出さなければよかった。

顔を真っ赤にしたなのはに怒られながら俺は思う。

明日は今日より楽しい一日を過ごすとしよう。

## 最終回・栞

9月20日の朝10時、俺は自室で一人パソコンの前でキーボードを操作していた。画面上には文字の記号が羅列してあり、それと並行して違うファイルでとあるものを作成していた。目の乾きを覚え、常備している目薬をさす。おっさんがビールを飲んだときのよな声をだしながら、俺はしばしの間目を閉じていた。

昨日は色々あった。最高評議會のこと、俺自身のこと、ヴィヴィオが危うく漏らしそうになったこと、リンデイさんに絡まれたこと。列挙しきれないほどの出来事が24時間という限られた時間の中で起こることとなった。

「人生って不思議だよな。24時間を一瞬で過ごした日もあれば、濃密に過ごす日もある。それこそ体感でいえば1年は過ぎたと思うほどにさ。それでも……きつと総合的には変わらないんだろうなあ」

首を鳴らしながら、目薬によって閉じられていた目を開ける。そこに映っていたのは勿論パソコン——というわけではなく、

「あれ、ヴィヴィオ？ いつの間に膝の上に？ まったく気づかなかったんだけど……」

「えへへー、なのはママがまほうでうごかしてくれたのー！」

両手をバツと広げ怪盗ポーズを決めるヴィヴィオ。このポーズは俺とヴィヴィオが毎週見てる魔法少女コミカルゴメットちゃんの主人公、ゴメットちゃんがよくするポーズだ。あの子、魔法(物理)という所が好きなんだよな。ちなみになのは達は見ていない。だけどその後はバリアジャケット姿なのだから目の保養と理性の崩壊で体に悪い。やはりまずは先方の両親に挨拶してからが普通だと思うんだ。それを怠るのは言語道断だと考えるの。

ヴィヴィオを膝の上に乗せながら、作業中断せざるおえなくなった俺はパソコンに手を伸ばそうとした直後——後ろから何者かの攻撃によって妨害された。攻撃手段は後ろからの抱きつき行為。抱きついてきた相手はそのまま両手を俺の首の横からぶら下げて楽な

体制へと入っていった。

「ふっふっふっ、俊くんは既にわたしの魔法によって拘束されています」

「ほう。どんな魔法なんですか？」

「ひつつき虫になるという魔法です。つまりわたしは俊くんの後ろをこうやってずっとひつつくしかないのです」

「それは残念だ。なのはを真正面から抱きしめたかったのに」

しかしこればかりはしょうがない。なのはの魔法は俺には解けないからな。それに、正面はヴィヴィオがいるしヴィヴィオを抱きしめよう。

そう思い立ち、ヴィヴィオを抱きしめようとした瞬間、なのはが椅子を回転させ、俺と自分を正面の位置で固定させた。

「えっと……なのは？」

「そ、その……くつつき虫は正面からでもくつついて平気というか……なんというか……」

指を絡ませもじもじとするなのは。頬が朱に染まり、視線をこちらにちらちら向ける。思わず息子が立ち上がる。それを必死に座らせることに多大な労力を使ってしまう。

「なのはママ？ どうしたの？」

「へ？ いやなんでもないけど……。——ヴィヴィオ、ちよつとそこどいてくれるかな？」

俺に抱きついているヴィヴィオに、両手を合わせてお願いするなのは。ヴィヴィオは一層俺の首に回した手に力を込める。その様子を見て、なのはの何故か言葉を強くした。

「ヴィヴィオ、ちよつとだけだから。ね？ ね？ 譲ってくれるよね？」

「いやー！ ここはヴィヴィオのばしよなのー！」

なのはがヴィヴィオの腰を掴むと、ヴィヴィオが膝の上で暴れだしそれによって俺はバランスを大きく崩すことになり——椅子ごと床に倒れこんだ。なんとかヴィヴ

イオは無傷だったけど……いまのは正直どうかと思う。

「おい、なのは。いまのはいくらなんでも——」

「パパー、いまのたのしいねー!」

「ヴィヴィオが喜んでるからどうでもいいやー!」

ヴィヴィオの笑顔が生きる原動力です、はい。

いまだヴィヴィオは膝——ではなく腰に座っていた。

「なのは、起こしてくれ」

なのはに救いを求めて手を上げるも、なのはは俺のパソコンのディスプレイに夢中であった。急いで立ち上がろうとする俺の腹を、なのはは足で押さえつけ体の動き

に制限をかける。事実、腹の上あたりを押さえつけられた俺は全く動けない。ただただ静かになのはのパンツを眺める仕事に精を出すだけであった。

「ふーん……これまだ続いてたんだ。あー、昨日のこともちゃんと書いてるじゃん。全部キミ視点な上によくわからないけど」

「俺は有言実行型だからな。絶対に出版まだこぎつけてやる」

「その時はデータを破壊するか俊くんを破壊するか二択になるね」

「どSな笑みでこちらを見るのは止めてください」

なのはは俺をサンドバックか雌犬ならぬ雄犬とも思っているのだろうか。実質その通りだから否定しようがない。

椅子に座ったまま俺を足で無造作に押さえつけているなのはは足を組む。

「見えたー! ピンクのふりふりパンツだ!」

左の鼓膜が破れた瞬間だった。

後でアロエ軟膏でも塗っておこう。

「ところでなのはとヴィヴィオは何しにきたの? フェイトの車まだ直ってないんだろ?」

今日の本当の予定としては、皆で朝早くから遊園地に行くはずだった。しかしながら、家族全員で準備を、いぎフェイトの車で出かけるようとした直後に問題が起こってしまったのだ。有体にいえば、車の後輪がパンクしたのだ。これには思わず全員が押し黙り、ヴィヴィオに至ってはいまにも泣きそうな始末。移動手段を絶たれた



俺達だったが、そこに名乗り出る者がいた。

それが——ガーくんであった。

よくわからんが、一時間もあれば車を直せるみたいなので大人しく待機することにしたのが20分前。俺はその間作業を、なのはとヴィヴィオはリビングでテレビを、フェイトは執務官の雑務処理を。各々が自由に過ごすはずの一時間なのだが……。

「暇になりましたー！」

「なりましたー！」

予想を裏切ることなく揉み揉みしたいおっぱいを張るなのは。

乳首をちゅーちゅーしたくなるおっぱいを張るヴィヴィオ。この思考が覗かれていませんように。

「ということで、なのはママは俊パパのパソコンのチェックでもしますか。あ、これを一から見るというのも……」

足をどけずにマウスを操作しだすなのは。

「ヴィヴィオはパパとあそぶー！」

腰の位置を微妙に動かしながら俺の顔に詰め寄ってくるヴィヴィオ。つい手が勝手にヴィヴィオのスカートをめくる。いちごパンツだったので、とりあえずぶにっしてしてみた。

右の鼓膜が破れた瞬間だった。

「ちよつとまで……!?!? いまなのはの足がありえない動きをしたんだけど……!?!?」

士郎さんに鍛えてもらった俺だが流石にあんな化け物じみた動きを出来る自信はない。そもそも士郎さんも恭也さんも化け物すぎだよな。なんだかんだ大先生と呼

ばれていた俺でもあの人たちには勝てないわ。

結局、俺はなのはとヴィヴィオとダラダラと残りの時間を過ごすことになり、丁度一時間が経った頃ガーくんとフェイトが呼びに来た。「おーい俊になのはにヴィヴィオー。パンク直ったからいくよー！」

「おー！ ガーくん流石だな」

「モットホメテ！ モットホメテ！」

飛び跳ねるガーくんの頭を撫でながら、俺達は部屋を出ることにした。

と、そこになのはが袖を引きながらパソコンを指さす。

「題名は書かなくていいの？ 分かりにくくない？」

なのはの疑問はもつともであったが、俺はそれに首を横に振ることで答えた。

「まだ終わっちゃいないからな。 なんとなく、題名はつけたくないわけよ。 俺の題名は却下されましたしね」

「あれは当然の結果だと思います」

いい題名だと思ったのに。

嘆息する俺になのははくすくすと笑う。 それが不思議で堪らずつい質問すると、こんな答えが返ってきた。

「いや、いつまでもこんな日常を過ごすのかな、と思つてね」

「お気に召さないかい？ こんな日常は？」

なのはは極上の笑みを浮かべ答えた。

「こんな日常は大好きです」

天使のように笑いながら話すなのはに、心臓がドクンと跳ね上がったのを自覚する。

まったくズルいよな、女って。

——あんな顔されたら、まともに見つめることなんか出来ないじゃないか。

青年は惚れている女性の顔を見ることが出来ず、ひよつとこのお面で顔を隠しながら部屋を出る。 その後から、栗色の髪の女性が首を傾げながらついていき、金髪の

幼女が青年に抱きつきながら話かける。 金髪の女性は、素知らぬ顔で青年の隣をキープしながら歩き立ち、アヒルは定位置となった青年の頭でちよこんと座る。

『ねえパパー。 なんかおもしろいはなししてー』

『んー、そうだなー。 それじゃあ……時というものは残酷なものである。 9歳でロリロリでツインテールで天使のような幼馴染も昔は「魔法少女」といわれみんなに可愛がられたものだ。 バリア

ジャケットだって小学校の制服を参考にしたらしく9歳という年齢も相まってそれはそれは可愛らしいものであった。しかしどうだろう……10年の歳月が過ぎ、その幼馴染も随分とかわってしまっただ。あの純粹無垢だった幼馴染はいまは19歳にもなるのにいまだに「少女」と信じて疑わないらしい。本当に俺と3年間高校に通ったのかと疑いたくなってくるほどである。髪型にしてもそうだが、いつもはサイドテールにしているのにここぞというときにはツインテール。確かにツインテールはかなりの萌えポイントであるがいかげなものかと思う。極めつけはあのバリアジャケットである。あれっていまだに小学校の頃の制服をモデルにしているみたいだし正直コスプレにしかみえない』

『二トの人にそんなこと言われたくないんだけど……』

『あれ……？ 遠まわしに私のことも言われてるような……』

いつものように笑いながら、いつものように怒りながら、いつものように冗談を言いながら過ごす——いつも通りの家族の光景が広がっていた。

☆

——これは『ひよつとこ』こと上矢俊がお送りした 非日常が日常的な 喜劇 気楽 喜話 幸運 幸福 な物語である。

——ん？ どうやら彼女達が呼んでいるようだ。

まったく、まだ終わっていないというのに。

……しようがない、葉を挟んで終わることにしよう。

それでは皆さんまたいつか——ステージ上でお会いしましょう。

あとがき

( ) ミンナ……

( )

一一

、(、A、)ノ オツカレサマ!

( )

ノ 〇一

### 総まとめ

無印終了です。ようやく無印が移行できてほっと一息。

無印内で私がやりたかったことは、最後の最後に全て凝縮されています。何故か嫌われ役になっていることが多い最高評議会からなのは世代へとバトンタッチです。

といっても、実際に読んでいただけると分かりますが、バトンタッチはひそかに行われました。むしろバトンタッチというよりはお疲れ様の意味合いのほうが強かったように思います。

このお疲れ様、という言葉をかける人物はかなり前から決めてました。皆大好きヴィヴィオです。理由としては、なのは達は実際に管理局側に立っているということ、スカさん達はもろもろ。

実際に第三者として素直な言葉を語れるのがヴィヴィオだったからです。

悩んで悩んで苦勞して、必死になって平和をめざし、その結果として皆に恨まれるだけというのはいかかなものか。管理局にとって欠かせないものをもっていた人達です。

最後まで笑い笑って感謝で送り出そうではありませんか。

きつと最高評議会の想いはエースオブエースを中心とした若い世代が受け継ぐことでしょう。

原作から色々と変わっているキャラたちですが、一番かわってるのはスバティアです。

こいつらマジで何があったの？そう思うくらいなのは狂となりバーサーカーのようになのはを襲いあわよくば一線を越えようと画策する存在です。

作中でどんどん変わっていったキャラとしてはなのはでしょうか。回をますごとくどんどんポンコツ化（萌え化）していましたが、やはりメインヒロインとして要所要所をしっかりと抑えてくれた方かなと思います。

好き放題やったキャラとしてははやてです。エロ担当になってましたが意外と初心というか一番乙女になっていたかなーっと思っます。立ち位置的にもとつてもいい。

ちなみにちっこいリインはこの世界ではないの？という疑問をお持ちの方、ちっこいリインはいます。ただひよっとこの前に登場していないだけです。

ヴィータにはお世話になりました。この子ほんとうに頼れるイケメンとして活躍してくれました。

個人的に質問がきそうなところでは、エクリップスウィルスのところかなと思います。これは私自身がForce系はやらないという意味も込めて、とある人物がひよっとこの管理局テロと同時並行で終らせたってことにしています。六課解散後をやるとしたらvividの時系列で終了になります。

※次回からA'sを更新していきますが、章分けができるのでこのまま投稿していこうと思います。

A's 1話というふうに投稿していきますのでよろしくお願いします。

A, S

A, S 1. 逃げられない

あれから4年の月日が経った……。最高評議会という大きな柱から自ら進んで歩み始めた管理局だが、その後は順調にいつているらしく、毎日毎日嬢ちゃんやスバルから連絡が来る。どうやら二人とも、ワーカーホリックにならずに済んでいるようだ。というか遊びに来るくらいなのでこいつらちゃんと仕事をしているのか疑いたくなってくる。4年も月日が経つと色々と変わってくるらしく、フェイトのおっぱいがまだ成長しているとか、なのはがシュークリームを作れるようになったとか、俺が理想の仕事を手に入れたとか、自分たちの環境と事情だつて変わってくる。そうそう、はやて達も管理局を止めたんだよな。うくん、管理局の層が一気に薄くなったけど大丈夫だろうか？ ……まあ俺には関係ないからいいんだけどさ。あ、これを忘れるところだった。なんと、5歳児のヴィヴィオが小学生になったんだ。それももう小学4年生だ。年をとつても天使なことは変わらないし、相も変わらず『パパ』と呼んで慕ってくれる。 ……そろそろ一緒に寝るのを止めないとなのは達から本当に逮捕されかねないけど……。でもヴィヴィオと一緒に寝ると落ち着くんだよな、ヴィヴィオも俺と考えていることが同じなようである。この頃は俺よりもヴィヴィオのほうが早く起きるようになってきた。そしていつも上に乗って起こしてくれる。嬉しいことであるが、そろそろ自分が小学4年生で、パパが小学4年生なら十分守備範囲だということを理解してほしいこの頃である。

……そろそろ現実逃避から卒業するか。

「なあ俊。いつまで固まってるつもりなん？ そろそろハンコ押してくれへんやろか？ 私たちの新婚生活のために」

「ははっ、はやて……。なんで此処に俺のハンコと99%出来上がってる婚姻届があるんだろうか……」

「え？ それは私と俊が結婚するからなんやけど……。もしかして

ちよつと疲れてるんかな？」

それは3時間も椅子に座ってたら疲れるよ。……いや、違うな。いきなりのことで頭がオーバーヒートを起こしたんだろうな。

始まりは一通のメールだった。はやてから大事な話があると伝えられたメールに、六課でヴィヴィオとふよよしていた俺は急いで私室まで駆けてきたのだが……そこで待っていたのは99%出来上がっていた婚姻届と各種揃えてある結婚式場だった。部屋に入った俺を出迎えてくれたはやては幸せそうな顔で言っただけだ。

『これでやつと結婚できるんやな！ 私のこと幸せにしてくれへんと怒るで？』

惚れるような笑顔で言われた俺は反射的に頷きそうになった所でなんとかこらえた。そして疑問をぶつける。

『えつと……なんで婚姻届とかあるの？ まだプロポーズとかもしてないんだけど……』

『プロポーズならしてくれただやん。ほら、最高評議会の手伝いのとき』

『え？』

記憶を辿ってもそれらしいことは言っていないと思う。……いや、

あの時の俺は最高評議会のことで頭がいっぱいだったから気づいてないだけかもしれない。もつと記憶を辿ってみることにしよう。とにかく、ちよつとしたすれ違いがこんな大きなことに発展してしまっただけだ。とにかく俺がいま出来ることははやてに事情とか色々話して説得することだ。勇気を振り絞ってこんなことをしてくれたはやてには申し訳ないけど……。

「なあはやて。確かにはやては美少女だし、料理や家事も出来る。きっと俺の変態的要望にも全部答えてくれて、お前となら幸せな生活が待ってることもわかってる。けどさ、はやて。俺はお前が思ってるほどいい人間じゃないんだよ。きつとお前を不幸にってしまうかもしれないんだ」

胸の辺りが締め付けられる。はやてにこんなせこい手段を使う

自分に嫌気がさす。 けど——はやては誤解してるだろうし、きつと皆だつて俺がどうしようもないクズ人間だつてことを忘れてる。

「なあはやて。 もうちよつと考えてからにしようぜ?」

鼓動が早く息が詰まるほどの圧迫感に押される。 俺の言葉を黙つて聞いていたはやてに若干ながらビビつてしまう。

すると、俺の心を読んだのか、はやては優しく笑いながら口を開いた。

「私たちのラブラブ生活なんやけど、まず朝は俊が私の耳元で優しく愛を囁きながら起こすんや。 勿論ベッドはダブルベッドで一緒に手を繋いで寝るのが決まりやで? 手錠で拘束してもええねんけど……それは夜中唐突にしたくなつたときに邪魔になるからないほうがええよね? そんなでもつて、私と俊の間には二人の子供がおつて、ちゃんと俊と私の間ですやすや寝てるんよ。 私達はその子を起こさないように愛を囁きながら二人して起きて、そうして起きた私たちは二人で肩を並べて朝食を作つていくんよ。 朝食はごく一般的なもので、こんがり焼いたベーコンとお砂糖を使って甘く仕上げたスクランブルエッグ、トースターで焼いたマーガリンたっぷりの食パンにミルクを少しだけおとしたコーヒー。 二人で愛情を注ぎながら作つた朝食やから、あ〜んとか言つてラブラブをエンジョイしちゃつて、けどそれで私たちの子供がちよつと嫉妬しちやつたりなんかして……。 でもな仕事へ行く時間になつてしまうの。 本当は行きたくないんやけど、そうせんと生活できへんしそこは諦めるんやけど……。 でも、出勤する寸前で俯く私に俊はキスしてくれるんよ。 とびきり甘いキスを。 ああ、30分に一回のメールと電話は欠かさへんで。 そうして俊がいない時間を頑張つて乗り越えて仕事から帰宅すると、玄関で子供と一緒に俊がお出迎え。 そこからまた幸せな時間を満喫して、やがて子供が寝る時間になつて俊と私の二人で寝かしつけると、今度は私たちの番とばかりにベッドでいちやいちゃするんよ。 なあ今日はどんなプレイでするん? 女子高生・ナース・メイド・巫女・婦人警官・女教師・魔女っ娘・裸ワイシャツ・裸エプロン・テニスウェア・レオタード・チャイナ服・スチユワーデス・チ



アガール・ドレス・バニーガール・サンタコス・体操服&ブルマ・ゴスロリ・甘ロリ・スクール水着 衣装部屋には多種多様なジャンルのものがあるからどんなことにでも対応できるから色々飽きへんで。

——楽しみやなあ俊。 いまからこんな毎日を過ごすなんて」

数滴パンツにシミを作った俺を許してほしい。 はやてちゃん、絶対に俺の話聞いてなかったよね？ ガン無視してたよね？

「あく……えっと……、そのラブラブ生活は俺も楽しみではあるけどほら、俺達まだそういう行為とかしてないじゃん？ それにやっぱはやてにはグレアムさんがいるし、結婚するならグレアムさんの所にもいかないといけないし、もし行くんだったら俺も職を持ってからのほうがいいのかなんというか……」

張り付く笑み。 乾いた笑い声。 決してはやてとの結婚が嫌とかではないが、いまの俺には不安定であつちにふらふら、こつちにふらふらしている状態で——誰かを選んで結婚してはいけないんだと思う。 もっと自分の中の何かが固まるまで。 なんか刺されそうな気がするし。

俺の不安を感じ取ったのか、はやてが詰め寄りそつと頬を撫でてくる。 少しばかりくすぐったいが、温かい。 知らず知らずのうちにはやての瞳に吸い寄せられる。 まるで蟻地獄に捕まった蟻のように、段々とはやての顔が近くなるような——

「!？」

近くなるような、ではなく近くなっていた。 口元に触れるはやての柔らかい唇。 下唇を甘噛みするはやて、それに反射的に口を開けた。

「んっ……はむ……んあっ……」

八神はやては開いた口に舌を強引に滑り込ませ、俊の口腔内を自分の唾液でべたべたにしその舌で蹂躪する。 無造作になりながらも、綺麗に歯一本一本見逃すことなく舐めるその姿に俊は動きを止めるしかなかった。 足をかけドアにほど近い壁に体ごとぶつけにくはやて。 二人の位置関係上、壁にぶつかったのは俊のほうで、俊は苦悶に顔を歪ませたが足をかけられてからの壁打ちのせいで地面に

座る形になってしまった。そこにはやてが俊の片腿に全体重を乗せて座り込む。六課の制服はタイトスカートになっており、はやてが俊の片腿に全体重をかけるような座り方をすると必然的に俊の視線からは下着が見えてしまうのだが、むしろはやてはそれを楽しんでるのか、俊の視線の先を辿った後、くすりと笑った。いまだに唇を離さないはやては、そこからさききに求めてくる。若干息が荒れ、頬が朱に染まり制服のボタンを外し真っ白なブラウスを露わにする。たわわに実った胸を俊に押しつけながら股を腿に擦りつけるはやて。口元が唾液でべたべたになった頃、はやてはようやく唇を離し俊に告げる。

「俊……、私はな10年前にとある男の子に人生を台無しにされたんですよ……。私の目にはその男の子しかみえへんねん……。なあ俊？ 私の人生を台無しにしてくれた男の子は……責任を取るべきやとおもわへん？ 責任とって結婚してくれるべきやとおもうんよ……」

「はやて……」  
俊の肩に手を置き上目使いで話しかける。

「私は……10年前からずっとまってるんやで？」

室内は無音に支配される。正確にいえばはやてと俊の息遣いしで聞こえない。二人だけの世界であった。どちらかが生唾を呑み込む音が聞こえ、俊のほうで口を開こうとした矢先――

「おーいひよつとこ。ヴィヴィオが『パパがヴィヴィオおいてどっかいったく！』と言いなながら泣いてたぞ。いまは訓練終わらせたのはとフェイトがあやしてるから大丈夫だけだよ。お前もちよつとヴィヴィオの教育考えろよな、このままじゃ近い将来なのはとフェイトを巻き込んだとんでもない事態にまで発展するぞ。あと電話で言つてたミロカロスの交換早くしよう――ぜ……？」

外から入ってきたヴィータの瞳に映るもの、それは第三者からしたらもう絶対に危ない関係なりそうな状態のはやてと俊の光景であった。二人ともドアにほど近い位置にいたせいか、すぐにヴィータの入室に気づき、というか俊のほうは固まり、はやてはヴィータを確認

し、またそのまま俊に抱きつき始めた。

「い、いやロヴィータちゃん違うんだ?! お前はちよつと誤解してると思うけど、べつにはやてとどうこうあつたわけではなくて……!」  
「ふくん……—ほんとか?」

「……いや、ちよつとはあつたけど……」

あつさり折れる俊。 勇気を出して自分に言ってくれたはやてに申し訳ないと思つたのだろうか。 自分はヘタレすぎてそんなことできないもんな。

ヴィータは冷めた目で俊は見る。

「ま、べつにあたしには関係ないけどよ。 ただ……お前ちよつとむかつくから一回死ねよ」

「……え?」

「お前みたいな人間のゴミのどこかいーんだかな。 なのはもフェイトもよ。 あー、ムカついてくる」

「……もしかしてロヴィータちゃん嫉妬?」

「なわけあるかつ!」

ヴィータの大声は予想以上の音量を伴っており、その声を引き金となり遠くのほうから俊がよく聞く人物達の声が聞こえてきた。 その中には娘の涙声も混じっていた。

「は、はやて!? 一旦離れよう! な!? な!? そのほうがお互いのためにもいいってば!」

「やー……。 私は俊をはなさへんときめてんねん。 死ぬまでそのままごうしとくで」

「ロ、ロヴィータちゃんも手伝ってくれない……?」

「あ? べつにそのままでもいいだろ。 お前だつて嬉しがってるし」

「え?」

「鏡で一回見ておけ。 おっ! なのは達が来たぞ」

ヴィータはドアから外へと身を翻した。 それと入れ替わるようにして室内に入ってきたのはヴィヴィオをだっこした状態のなのはとガーくんを肩に乗せながらヴィヴィオのためにウサギのぬいぐる

みを持っているフェイトであった。二人とも最初の入室こそ笑顔だったものの直ぐに無表情に変貌する。ついでに泣き止む寸前だったヴィヴィオもなのはの怖さを直感で感じ取ったのかまた泣き出した。それを見かねたシャマルが一時自分の所げ避難させることに。

なんともいえない空気が部屋を支配する中、なのはとフェイトがつかつかと俊に歩み寄る。目線を合わせるためにしやがみ込み、二人して俊の手を取る。

「えつとえつと！ これはその……、いや、はやては決して悪いことをしていたとかじゃなくて……！ だからはやてと絶交とかそういうのは無しの方向でお願いしたいというか……」

しどろもどろになりながらも自分の意見を主張しようとした俊に、なのはとフェイトは割り込みがちでこう言つてのけた。

「うん、知ってるから大丈夫だよ。俊（くん）は私以外にこんなことしないもんね！ ——……しないよねえ……？」

俊の血の気が一気に下がった瞬間であった。後ろではシグナムがブチ切れ、パパラッチのごとく写メを撮るスバルとティア、うんざり気味でこちらをみるヴィータ、ヴィヴィオをあやしているシャマルとガーくん、おろおろするキャロとエリオ、いまだ抱きついているはやて、そして拘束のごとく手を握るなのはとフェイトを見ながら、上矢俊は乾いた笑みを浮かべることしか出来なかった。

『俺が全ての責任を取る』

「……もしかしてあの……？」

後の祭りとはこのことであつた。



これは、管理局テロから1週間を過ぎた頃から俺こと上矢俊がお送りする、ちよつと性格が怖くなってきた彼女たちと織りなす物語。

その半年間を綴った物語。 人生という本の1ページである。

## A, s 2. ソファアでの出来事

所変わってはやての私室からいつもの部屋に移動してきた俺達。さっそくロヴィータちゃんにミロカロスを渡そうと思っていたのだが、全く違う件で俺は思わぬ苦戦を強いられていた。

「ごめんってばヴィヴィオ。もう許してくれよ〜」

「ダメー！ ヴィヴィオ絶対ゆるさないもん！ パパのこときらい！」

ヴィヴィオを置いてはやての私室に行ったのがまずかったのか、つい先ほどまでなのは腕の中で泣いていたヴィヴィオが頬を膨らませながら怒っていた。隣ではガーくんが寄り添うように付き従っている。ソファアに座り俺のほうを見るヴィヴィオは、かなりご立腹のようだ。

でもそっかあ……。俺のこと嫌いなのかあ〜……。

「うつぐ……！ ひつく……！ もう生きてく自信がなくなった、ごめんなヴィヴィオ……。 ヴィヴィオに嫌われたパパは一人寂しく死ぬことにするよ……」

瞳から多量の水分を流しながらヴィヴィオの頭を一撫でし、その場から去っていかうとする俺を、

「あつ……！ だ、だめ！ パパいつちややつ……！」

ヴィヴィオは両手で服の袖をめいっばい掴むことで止めてきた。涙を流しながら振り向く俺に、ヴィヴィオは

「えつとえつと……。今日ね、パパがヴィヴィオとず〜つといてくれるなら……。ゆるしてあげてもいいよ……。？」

そう上目使いで首を傾げながら聞いてきた。なにこの天使。

なのはやフェイトやはやてとは違った天使さを感じるんですけど。見てください、これが俺の愛娘です。

勿論、俺の答えは決まっている。

「本当に許してくれる？」

「うん！」

「ヴィヴィオー！ 大好きだあー！」

「わぶっ!? パパ息が苦しいよお……」

あまりの可愛さについつい強く抱きしめすぎたみたいだ。これも全部ヴィヴィオが可愛いから悪いのだが。

そんな二人の光景を遠くで見ている者達が3名いた。一人はD S片手に呆れた顔でひよつとこを見るヴィータ。そして後の二人はヴィヴィオの可愛さに鼻を押さええているスバルとティアである。

「ヴィヴィオちゃんって得ですよ。娘だからどんなお願いだって出来るし、5歳児だからなのはさんとフェイトさんにダダもコネることが出来ますよ」

「けどなー、もう少し厳しくしたほうがいいと思うぜ?」

「でもヴィヴィオちゃんくらいの年の子供って、あんな感じで独占欲強いですよ」

「そりやそうだ。集団行動をまだ習ってないからな。六課の全員とも、小さい頃は独占欲が強かったんじゃないの? この年で強すぎると問題が起こるけどな」

「ねえはやてちゃん……? このふざけた婚姻届はなんなのかな……?」

「大丈夫やで、なのはちゃん。結婚式にはちゃんと呼んであげるから」

『少し……頭冷やそうか……』  
『あんな感じでな』

ヴィータが指さす後方で、ドス黒い空気を纏った二人が対話するたびに窓ガラスが割れていく。エースともなればあんなことも可能になってくるのだろうか。だとしたら私には到底無理な気がする。知らず知らずのうちに心が拒否反応を起こしてしまうティアであった。

「いや、お二人も凄いやけど一番すごいのは……」

『アーイソガシイソガシ。 シュウフクモラクジャンイナ』

『(お前は一体何者なんだ……)』

全員の心の声が一致した瞬間であった。

割れた窓ガラスもコンマの世界で直していくガーくん、流石のス

バルも冷や汗を掻く。 ガークンのおかげで窓ガラスが無事なことにはかわりないので突っ込みを入れることが出来ないが。

「ところでヴィータさんは何してるんですか？」

いまだDS片手に突っ立っているヴィータにティアが質問すると、ヴィータは苦虫を噛み砕いたような顔でひよつとこのほうを指さした。

「あいつにミロカロス貰う予定なんだけどさ。 どうもタイミングが合わなくてな」

ひよつとことヴィヴィオの他に先程まで混ざっていなかったはずの人物が輪に加わっていた。 ちよつとだけしよんぼりした顔でDSの画面を眺めるヴィータであった。

☆

俺とヴィヴィオが遊んでいると、フェイトがひよこひよこ隣に座ってきた。

「あ、フェイトママだ。 フェイトママも遊びにきたのー？」

「うん、そうだよー。 ヴィヴィオ、だっこしてあげようか？」

「うんー！」

俺の手からフェイトの手に渡るヴィヴィオ。 フェイトはヴィヴィオをしつかり抱いた後、そつと肩に寄りかかってきた。 鼻腔を擦る女性特有の香りと、落ち着く心。 その二つをしっかりと自覚しながら、俺は思う。

なんでフェイトは俺の左手を力の限り抓っているのだろうか。

「？ どうしたのパパ？ 顔がっらそうだよ？」

「あはは、なんでもないよヴィヴィオ。 ちよつと可愛い天使が悪戯してきただけだしさ」

「その可愛い天使に内緒で、舌を絡めるほどのキスをはやてとしたのはどこの誰かな？ ねえ俊？」

可愛い笑みのはずなのに、背筋に薄ら寒いものが常に付きまとうのは何故だろう。 ちよつと可愛すぎて一般人の俺には神气的なアレ

を受け止めることが出来なかったのかもしれない。べつにビビってるわけじゃないけど、ビビってるわけじゃないけど、股間の息子が軽く鳴く。これはきつとアンモニア臭のする汁のほうだと直感した。

「え〜つと……フェイトさん？ あれはその——」

「知ってる？ 言い訳をする男の人の大半が『あれはその』から始まるんだよ？ 丁度いまの俊のように」

ダメだ、勝てる気がしない。もうなんか土下座して謝りたい。謝りながら撒き散らしたい。

どつと冷や汗を流し、わずかにフェイトから離れる。が、フェイトがそれを許すはずもなく俺はなんなく捕まる。局員つて私事でバインド使つて大丈夫なんだっけ？

なんともいえない空気が辺りを支配する。そんな中、相も変わらずフェイトの胸に顔を埋めるヴィヴィオの嬉しそうな声だけが聞こえて、それがいまこの場の状況が俺の妄想でないことを実感させた。

ヴィヴィオの頭を撫でるフェイト。ネコのように「あう〜、わきや〜！」と言いながら楽しむヴィヴィオ。

「可愛いなヴィヴィオ」

「そうだねロリコン」

「可愛いよフェイト」

「ありがと浮気者」

「トイレ行っていい？」

「だめ」

どうやら放尿プレイをお望みのようだ。度し難いほどの変態だ。

どうやってこの場をうまく収め、トイレに行くかを考えていると——フェイトのほうもモジモジと体を揺らし始めた。

……もしかして——

「成程……。放尿耐久プレイということか。なかなかの変態具合

じゃないかフェイト」

「いやなんの話っ!?! 勝手に私を変態キャラにしないでくれるかな!?!」



もう十分いるでしょ!？」

「しかし俺のリサーチによるとフェイトのおっばいの成長具合は幼少期からなのはに揉まれたものであって——」

「うるさい黙れ」

流石に怒られてしまった。くそっ!　なんで俺はフェイトのおっばいを揉むことができないんだよ!？」

何故俺がフェイトのおっばいを揉むことが出来ないのかをレポートにして纏めようと考え出した矢先、フェイトが体を預けてきた。

寄り添うのではなく、預けてきた。ちらりと横目で盗み見ると寝息をたてているフェイトの姿。いきなり寝だしたフェイトに首を傾げ、何かに気づき必死に起こそうとするヴィヴィオをこちらに抱き寄せ、その金色の髪を撫で梳かす。手櫛でここまで滑らかに滑るフェイトの髪の毛つて凄いなあ。

「フェイトママ倒された!　パパ、フェイトママが!　フェイトママが!」

「しーっ。フェイトママは疲れて寝ちゃったんだよ。心配しなくても大丈夫だって」

「そっかあー……。大丈夫なのかあー……」

安心したのか、胸を撫で下ろす仕草をするとフェイトに抱きつくヴィヴィオ。まあ、一緒に寝たいだけみたいだし大丈夫だろう。

それにしてもいきなり寝るなんて——

『「やっぱ疲れてるんかなー」ですか?　ひよつとごきさん?」

「うおっ!?!　後ろから顔を出すな驚くだろ!?!」

「まあまあ。それよりフェイトさん可愛い寝顔ですね。分からない問題を教えてもらおうと思いましたが止めておきます」

「お兄さんが教えてやろうか?　手とり足とり腰とり」

「ひよつとごきさん知能指数低そうですし遠慮しておきます」

それなりの学力はあったさバカチン。少なくとも大学は余裕で行けましたとも。まあ執務官の試験問題なんて専門的な分野もあるから分からないけど。

「それにしてもフェイトさん、燃料が切れたかのように一瞬にして寝

ましたね。 流石に驚きです」

「管理局も新体制になって日が浅いから大変なんだろうな。 無理しないといいけど」

「う〜ん……私も勉強教えてもらうの控えたほうがいいでしょう？」

「おいおい、フェイトでさえ一回は試験落ちてるんだぞ。 素直に教えてもらってろ。 落ちた時の言い訳が出来ないほど教えてもらえ」

「むっ、私は別に言い訳なんてしませんよーだ」

「ほんとカー？」

自然と零れる意地悪な笑みを浮かべ嬢ちゃんを見ると、嬢ちゃんは舌を出しこちらに思いつきり向ける。

9月19日を境に管理局は大きな変化を迎えた。 俺は局の人間でもなければ、状況を知ろうとも思わないので、あまり詳しくは知らないのだが、ラルゴ翁たちを中心にクリーンさを前面に押し出しているらしい。 それに局員の年齢制限、なんかも付け加えられたとか。

本部の上のほうは、はやてが実質握ってるようなもんだし、地上はレジアス中將を中心に前以上に頑張っている。 そして何より——陸と海が互いに協力しだしたのが一番嬉しいことだった。 人手が圧倒的に少ない陸、そこに手を空いている海の局員が助ける形でフォーローに入っているみたいだ。

あの時の模擬戦は無駄にはならなかったみたいだ。

海は陸の諦めの悪さを学び、陸は海のエリートによって向上心を刺された。

互いが互いを認め、切磋琢磨し合う——それがいまの管理局だ。

ただ、管理局は万年人手不足に悩まされている。 そんな状況の中、そこまで手を回せるのは何故か。 そこには外部の存在の力が大きく作用している。

「義賊『フツケバイン』……ねえ」

「ああ、それ管理局の間でも話題になってますよ。 なんでもエース級がゴロゴロいるそうで。 それに、それを設立した人がカリスマに溢れており世界最強だとか。 全部噂の域を出ませんが……。 ど

うしますひよつとこさん、完全にひよつとこさんの上位互換ですよ。ゲームでいう所の常に待機状態になってしまいますよ」

「いまだき義賊なんてバカバカしい。それにカリスマ？ 世界最強？ 『それは上矢俊の父親を超えてから名乗れ』ってな。なのはが精神的に最強というのなら、父さんは全てにおいて最強だ」

「……………小さな子どもが父親自慢してるみたいで可愛いですねえ」

にやにやと笑みを浮かべる嬢ちゃんにデコピンをお見舞いする。  
うるさい黙れ。

「まあ、確かにフツケバインは現状ありがたいけどな。ただまあ……………場合によってお前らが潰すことになるかもしれないがな。

どつちにしろ俺が関わることはないだろうし、どうでもいいや」

「そういう人に限って中心人物になってしまいうんですよねえ。よくあるラノベ展開的に」

「魔防0の俺がお前ら魔導師と戦ったら瞬殺されるっての。それよりその問題集見せて。ちよつと解いてみる」

「いいですけど出来る訳ないですってば」

嬢ちゃんから問題集を受け取り一問解いてみる。ふむふむ……………  
成程……………。

「これフェイトの執務官試験と同じ問題だった。ほら、正解だろ？」  
「うそおっ!! 執務官試験って上位に入る、というか一番難しい試験なんですけど!?!」

まあフェイトの試験勉強は皆で手伝ったからな。途中でなのはが知恵熱出したりして大変だったけど。

「はっはっは、まあせめて俺を超えるくらいは頑張ることだな! なんならお兄さんが教えてあげようか? 『なんでもやりますから、教えてくださいご主人様』と猫耳を着用した上で上目使い&旧スク水を着ることが条件だな!」

「いえ、フェイトさんが起きたら教えてもらうのでいいです」

……………そんなあつさり断んなよ。俺もなのはやフェイトみたいに教師役やってみたいんだよ。5分で飽きて終了すると思うけど。

後ろで唸りながら問題を解きはじめる嬢ちゃん、隣ですやすやと寝息を立てるフェイトとヴィヴィオを見つめながら、ふと違和感を覚える。

！……そうだロヴィータちゃんにミロカロスあげる予定だったんだ

辺りを見渡すと、ロヴィータちゃんが一心不乱にゲーム機を見つめていた。

「ろ、ロヴィータちゃん!？」

『うるせえバカ！ こつちくんな!』

「……しまった」

完全に拗ねてる。 うわあ……やってしまったよ。 これ完全にダメ男の典型だよ。

頭を抱える俺の肩を嬢ちゃんが軽く叩いてくる。まるで背中を押してくれるようで、すこし安心する。嬢ちゃん……俺に謝る勇気をくれるのか？

「ぶぶつ……い……さつさといつてきてくださいよ……! ダメ男野郎さん……! ぶはっ!」

近いうちに絶対泣かしてやる

嬢ちゃんのうざすぎる顔を見ながら俺はそう心に決めた。

ちなみにロヴィータちゃんにはミロカロスと間違えて、しゃぶるドン（シビルドン）を送りつけてしまい殺されかけました。でも罵倒は気持ちよかったです。

A, s3. 500円のお買い物

「あ、ロヴィータちゃんに踏まれた股間が痛いわー。ちょっと俺の周りの女の子達は人の股間を弄りすぎじゃないですかね。なんなんですか？ 痴女なんですか？ 誘ってるんですか？ 下のデバイスでロストログアを封印ですか？ ……夜は痴女になっちゃう魔法少女っていいかもしれん……。でもあいつら少女じゃないから……当てはまるのはロヴィータちゃんくらいか。キヤロは除外するとして」

しばしロヴィータちゃんの痴女について考える。あのボディを一生懸命使って誘ってくると思うと、何故か涙があふれてくる。でも需要はかなりあると思う。俺だつてチンコは勃つし汁も零れてくる。

「パパー！ おかしは何円までですかー！」

「お菓子は100円までですよ。ガーくんも100円だからな」

「ハイー！」

隣で歩いていたヴィヴィオとガーくんが手を上げながらお菓子売り場の方向に走っていく。おーい、走ると転ぶから歩きなさい。

夕食を作るためにヴィヴィオとガーくんと六課からスーパーへ移動してきた。なのはとフェイトははまだ六課で仕事中。あと20分くらいで帰ってくるとはメールがきたけど……ほんとうなのだろうか。

「あ、管理局つてやっぱ面倒だよな。マジ社畜の最先端をいつてるぜ。六課はゆとりの最先端をいつてるけど。けどそもそも六課は士気上げのための美少女部隊だし……ある意味一番確実に仕事をしている気はするかも」

管理局もクリーンな感じだし、そもそも上層部は実質はやてが握ってるようなもんだしな。それにしてもヴィヴィオ……俺の隣にずっといるんじゃないのか……。

「うーむ……流石にお菓子の魅力には勝てないのか」

お菓子売り場に走るヴィヴィオを目で追いながら、愛しさ半分寂しさ半分で目的の食材へと向かった。

☆

——駄菓子

それは小さな子どもを引き付けてやまない魅惑な代物である。

5円チョコや10円ガム、30円の棒付きキャンディーなど、子供が手に取りやすい価格設定であり、対象者を小さな子としているため、その舌になるべくあつた基準に作られている。

お菓子売り場に入ったら最後、子供はそこからお目当てのものを手に入れるまでは一步も外部に出ることはない。

親からすれば魔の領域なのである。

そんな場所にヴィヴィオも例に漏れず立っていた。というより物色していた。目の前には毎週日曜日の朝に放送される超人気魔法少女アニメの100円指人形の箱が置いてあり、ヴィヴィオはそれを真剣な様子でじつと見つめている。

「100円かー……。どれにしようかなー」

一つ手にとっては箱を上下に動かし、側面に耳を当てて音を確認する。カラカラカラという音が聞こえてくると、ヴィヴィオは黙って領き元の位置に戻す。既にこの行動は二桁を超えている。

ヴィヴィオは一緒にお菓子コーナーに入ってきたガークんのほうに振り返る。

「ガークんはなににしたの？」

「ガークンハハトサブレ！」

「わー！ ハトさぶれおいしいもんねー！」

「ウン！ ガークンダイスキ！」

アヒルにとつて、ハトなどという存在は仲間でもなんでもないようだ。そもそも仲間意識があるかどうかさえわからないが。

「ヴィヴィオハキマツタノ？」

「ううん。どれにするかまよってるさいちゆうだよー」

腕組みしつつ、頭を左右に揺らすヴィヴィオ。　ヴィヴィオにとってみれば、この選びは真剣そのもの。

ここでミスを犯してしまうと家に同じ指人形が立っている光景を見ることになるかもしれないからだ。

そんなヴィヴィオを見てか、ガーくんも一緒になつて箱選びに加わった。　大好きなヴィヴィオの役に立つこと、それはガーくんの生き方そのものでもある。

いまだに何故ヴィヴィオにこんなにも懐くのか、フェイト達がペツトシヨップで遊んでいる間にどんな出来事があつたのか、真相は闇の中である。

『ウーノ姉、あそこにいるのヴィヴィオじゃない?』

『あらあら、ほんとうね。　パパの姿が見えないようだけど……どうしたのかしら?』

『そんなことより声かけようよ。　おい、ヴィヴィオー!』

二人揃つて箱を選んでいる最中、誰かが遠くのほうでヴィヴィオを発見し声をかけてきた。

その声に反応してそちらを振り返つたヴィヴィオは、自分の名前を呼ぶ二人を視界に入れた途端、駆けだし買い物カゴをもっている人物に抱きつく。

「わーい!　ウーノ!　こんにちは〜!」

「ふふ、こんにちはヴィヴィオ。　今日は一人でお買い物?」

「ううん。　パパとガーくんといっしょ!」

とことごとヴィヴィオの後ろをついてきたガーくんが、ウーノに向かって片手を上げる。

「オイッスー。　ミテミテ、ガーくんコレニスルンダー」

そのまま子供が親にお菓子を見せびらかすように、ガーくんはウーノに自身が手に持っているハトさぶれを見せる。

「ヴィヴィオはねー、いまえらんでるの!　ノーヴェはどっちがいいとおもう?」

「へ?　あたし?　う〜ん……こっち、かな」

ウーノの隣にいたノーヴェにヴィヴィオは自分が両手に持ってい

た箱を差し出す。 ノーヴェはそれを受けて、しばし迷った後に右のほうを指さした。

「そっかぁー……。 ヴィヴィオはこっちだとおもうんだけどなく」  
「じゃあそっちでいいんじゃないか……。？」

ノーヴェが指した方向とは反対側を振るヴィヴィオに、ノーヴェは困り顔でそう答えた。

「それより、ヴィヴィオ。 あいつはどこいるんだ？ えーっと、ヴィヴィオのパパは」

「パパ？ パパならここに——」

そこでようやくヴィヴィオは気づく。 自分の隣に大好きなパパがいないことに。

きよろきよろと周囲を見回すヴィヴィオだが、お菓子売り場にパパの姿はなく——

「パパ……。まいごになっちゃったかもしれない……。！」

はれて俊は迷子認定されたのであった。

必死そうな顔でノーヴェとウーノに伝えるヴィヴィオだが、二人ともそんなヴィヴィオに苦笑する。

二人にはどちらがどのような状態なのか検討がつくのだろう。

「それじゃ……。迷子さんがヴィヴィオの元にくるまで私達は待っていきましょうか」

「そうだねー。 あたしも丁度ヴィヴィオと話したかったし。 というか……。それよりも何よりも、あたしはこのアヒルの生態がずっと気になってるんだけどさ」

あ……」

「ドクター曰く、『突然変異、もしくは誰かが憑依しているかだね。』

まあ生態ロストロギアと言われたほうがある種納得できるんだがね』  
とのことよ。 あまり深く考えないほうがいいわね」

「やっぱこの家族化け物揃いだ」

「でもなのはちゃんが好きなのよね？ それにフェイトちゃんも」

「うっ……。！ それは……。まあ。 あたし達に優しく接してくれたら、色々とお菓子のこととか教えてくれたし……。 それに……。初め



てだったよ。 戦闘機人の力にあんなリアクションを返されたの」  
『えっ!? ノーヴェちゃんってそんな強い力もってるの!? ヘー! やったね! 力があると色々なことにチャレンジ出来るから、その力は大事にしないとダメだよ? 大事なのは、その力をもって自分が何を成したいのか、だよ』

初対面の時、ノーヴェは親しげにウーノと話しているのはに軽いヤキモチを抱き、自分がいかに強い能力を持っているのかを誇示した。

それによるなのはの反応は、ノーヴェが思っているのと180°方向が違く、手を取り優しい笑みを向けるなのはに頬が朱に染まった出来事も記憶にまだ新しく残っている。

「オチとしてはなのはちゃんがノーヴェより凄まじい力を持っていたということかしら」

「あれは勝てない。 泣いて謝るレベル」

その後行われた軽い模擬戦でなのはの魔導師としての強さを垣間見たノーヴェ他、その場にいた戦闘機人たちに恐怖を植え付けたのはであった。

ガーくんの中に乗るヴィヴィオを見ながら、ノーヴェはもう一人の人物についてウーノに喋る。

「あのさあ、なんでなのはさんはあいつの名前を呼ぶとき嬉しそうなのかな……?」

「あら? ヤキモチ?」

「そ、そんなんじゃないけどっ! ただ……あの俊とかいう奴、やっぱり好きになれないっていうかなんというか……」

既に『さん付け』のなのはと呼び捨てにされる俊。 これが人望の差なのだろうか。

俊に対してさほど嫌悪感を抱いていないウーノはノーヴェの言葉に首を傾げる。

「ウーノ姉は知らないかもしれないけど……空港火災のあの時——」  
「ドクターの火の不注意で火災なり私達が全力をもって消火作業にあたり、自分たちが悪いからお金などを全額こちらが出して謝罪金を一

一人人名簿調べて渡した結果、最高評議会に頭を下げて生活保護を受けることになったあの空港火災のとき？」

「う、うんまあ……死者がいなくてよかったよね。じゃなくて！その時だよ、その時！ あたし達見たんだよ。 あいつが……ゴミを見るような目で大人を眺めていたんだよ。一瞬だったけど、確かにあの目はそんな目だった……。それでいて、なのはさん達やドクターの前ではニコニコした笑顔を浮かべていたりしてさ、なんというか……気持ち悪い」

必死に言葉を選び自分に話すノーヴェに、ウーノは困った顔をし、「私の妹はそういった認識、そして見解を示しているのですが……ひよつとごさんはどう思いますか？」

「そうですねえ……ノーヴェちゃんが処女かどうかで俺の態度も変わりますね」

「あなたがノーヴェから嫌われる理由が分かっちゃいました」  
「……え？」

下を向きながら必死に言葉を選んでたノーヴェは、第三者の声に驚き顔を上げる。

そこには、買い物カゴを持った俊が立っていた。

自分がいま話題に出した人物で、自分がいま気持ち悪いといった人物。

「どうもー噂の気持ち悪い人物です。 お久しぶりですウーノさん。スカさんはあれから忙しいですか？」

「そうですねえ……泣き目で管理局に奉仕しているみたいです。収入も安定してますし、私としては嬉しい限りなのですが……ちよつと体のほうが心配ではありますね」

「あー、それはぐ愁傷様です」

頬に手を当ててため息を吐くウーノに、俊は苦笑いを浮かべるだけに止める。

「もしよろしければ、近いうちに会っていただけませんか？ あまりにも真つ当な人間に囲まれているせいでドクターが発狂しそうで……」

「……あの……それは俺が真つ当じやないということですか……?」  
「……」

「せめて何か言ってください!」

視線を泳がせたまま、黙るウーノに俊は悲痛な叫びをあげる。　嘘  
をつけないウーノさんである。

「はあ……」 そうため息をつく俊はノーヴェのほうに振り返る。

「あー、君とは2度目くらいかな?　一応君がさつき言っていたことは間違いだからな」

指をさし断言する。

「俺はあの時、風に揺られて捲り上げられているのは達のスカートをガン見していただけだから。　薄目でスカートをガン見していた  
だけだから。　ほんとやましいこ

となんて一切ないから」

「ひよつとこさんの中ではどこからがやましい行動なのか気になるところですね」

間髪入れずにはいるウーノの突っ込みに、俊は照れ笑いを浮かべる。　べつに褒めているわけでもないのに。

「それにほら、あの時は俺って救出された子供の面倒みてたし。　あの子、親御さんとお姉ちゃんがくるまで俺の手を離さなくってさ。

まあそれもちよつとの間だから記憶にないと思うけど。　それよりも、その後のなのはと話した場面のほうが印象深いと思う」

「ふふつ、色々と損な役回りですね」

「いやいや、助けたのはなのはだし。　俺のことなんて忘れてくれて構わないですよ」

ウーノと話す俊をみて、ノーヴェは哑然としていた。

自分が抱いていた人物とは程遠い真実、そしてポケットから飛び出ている小学生美少女ゲームに本能が警鐘を上げる。

『こいつは真性だ……!』

なのはとは違う意味でノーヴェに恐怖を抱かせる俊。

ガタガタと体を震わせ、ウーノの後ろに隠れてしまうノーヴェ。

それを見た俊は、何事かと思いい優しい笑みでノーヴェに近づくが――

「く、くるなあっ！」

「えっ!? まだ何もしてないんですけど!？」

「そのポケットから飛び出ているゲームが原因ではないかと思いません」

ポケットを指さすウーノ。 俊はさりげない動作でゲームを奥底に隠し

「大丈夫。 ノーヴェちゃんはじっくりことこと煮込むから」

「ぎやあああああああああ!?! ウーノ姉! やっぱこいつ気持ち悪い!?!」

ウーノに抱きつき泣くノーヴェに、俊は舌なめずりをしながら笑う。

完全に性犯罪者の顔である。

と、ここで俊の足を叩く人物が現れた。 下をみて確認する俊。

そこには怒っているのか、頬を膨らませたヴィヴィオが立っていた。

「パパ! まいごになっちゃダメでしょ!」

「あー、ごめんなーヴィヴィオ。 パパが迷子になっちゃったもんなー」

「そう! パパがまいごになったの! でもごめんなさいしたからゆるしてあげるー。 ヴィヴィオえらい?」

「えらいぞー。 それに可愛い!」

「えへへ〜」

しゃがんで頭を撫でる俊にヴィヴィオが抱きつく。

抱きついたヴィヴィオは頬をすりすり、ウーノとノーヴェの前でちよつとだけ甘えん坊な部分が露出してしまう。

ついでにガーくんも俊の肩に乗っかり、何故かタップダンスをしはじめる。

無言でガーくんを頭から振り下ろす俊。 何故かはしやぐガーくん。 その光景は既に人類の理解の範疇を超えていた。

「で、ヴィヴィオ。 お菓子は何にした?」

「これ！」

思いつきり差し出すヴィヴィオの手には、俊自身も見ている朝アメの魔法少女指人形がのっている。俊はそれを受け取り、カゴの中へ入れる。

「おー、いいなこの指人形。じゃあガーくんはどれにした？」

「コレ！」

「ハトさぶれ……。アヒルじゃないからセーフということか？ むしろ敵対関係にあるのかもしれない」

1人納得しカゴの中にハトさぶれを入れる俊。そのカゴの中にはいくらやマグロ、イカにタコ、えびが揃っていた。

「今夜は海鮮丼ですか？」

「海鮮丼ですね。にぎり寿司にしてもよかったです、それは仕入れた時にでもしようかな、と」

「ヴィヴィオぶちぶちすき！」

「いくらおいしいもんなー」

万歳して、自分の意見を述べるヴィヴィオの頭を撫でる俊。撫でられて嬉しそうなヴィヴィオ。

「んじゃそろそろ俺らは帰るか。マグロはツケにしたいし、いくらも手を加えたいしなー。ほら、ウーノさんとノーヴェちゃんにばいばいしていいっか」

「うん！ ばいばい！」

「ジャーナー！」

一生懸命手を振るヴィヴィオに、軽く手を振るガーくん、そして頭を下げる俊に、ウーノは流麗な動作で手を振り返しノーヴェは俊を警戒しながらもヴィヴィオに手を振り返したのだった。

☆

夕食も済んだ高町家。後は風呂入って各々自由時間を過ごすだけなのだが――

家のリビングでなのはが俺のことを見つめながら、指でテーブルに

一定のリズムを刻んでいく。なお額には怒りマークが具現化している模様。 コメカミもひくひく動いている状態だ。

「俊くくん……? 3人で決めたよね? ヴィヴィオのお菓子は100円までだった」

「仰る通りです……。 だけどさなのは――」

『『だけど?』』

指の動きが止まった瞬間、俺は言葉を呑み込んだ。

だって、どんな言い訳をしようとも――

『みてみてフェイトママ! ゴメツトちゃんてた!』

『わー! よかったねーヴィヴィオ。 ところで、100円のお菓子をなんで5個も買ったの?』

『なのはママとフェイトママとガーくんとヴィヴィオとパパのぶん!

みんなのもかってきた!』

『あ〜……そういうことか』

ヴィヴィオが100円のお菓子を5個買ったことには変わらないのだから。

しかしヴィヴィオよ。 いつの間に買い物カゴに入れたんだ。

会計の時にマジで唾然としたんですけど。

ヴィヴィオとフェイトの会話を聞いてなのはが頭を抱える。 ママって大変だな。

「あー、そのー、なのは? 娘が俺達を思って行動してくれたんだし、怒っっちゃダメだぞ?」

「うう……そんなこと俊くんに言われなくてもわかってるよお……。

でも、やっぱ今後のことを思うともうちよつとヴィヴィオの教育も考えなきゃダメかなー、なんて思うし……。 最近甘やかしてる気がするもん……。 ヴィヴィオは可愛いし、可愛いし、可愛いし、わたしの自慢の娘だけど、抱っことかずつとしたいけど、やっぱ俊くんとフェイトちゃんが甘い分、わたしがしつかりしないと……。」「うーん、それはそうだけだな。 でもまだ5歳だし大丈夫なんじゃないの?」

「そうかなー? 大丈夫かなー? ママとして心配だよー……」

さつきまでの威勢はどこへやら、急に子犬のようになったのはを  
あやしなから俺も今後のことを考える。

「(六課解散まで残り半年か)」

風呂遊びの道具をもって、俺の所へダツシユで駆け寄ってくるヴィ  
ヴィオ。

「パパー！ おふろはいろー！」

「おー、いいぞー！」

『フェイトー、サブレガメニハイルー……』

『いや……普通に食べてたらそんなこと起こらないんだけど……』

「あ、お母さん？ ちょっと子育てのこと……。 はっ!? いや、ま  
だそういうことはしてないから！ ベ、ベつにわたしに魅力がないわ  
けじゃないもん！」

六課解散までには、俺個人の問題のほうも解決しよう。

俺だってもう家族をもっているんだから。

A, s 4. 高町なのははDKらしい

カレンダーを一つめくった今日、ついに10月に突入してしまった。夏の残暑も消え去り、日中は涼しく、夜は少しだけ冷え込んできたのだが、それでもまだまだうちの娘は元気いっぱい庭を駆け回っていた。

フリルつきスカートで棍棒を手に庭を一生懸命走るヴィヴィオ、その先にはアヒルのガーくんが後ろをちらちら確認し速度調整を行いながら走っている。

また二人でなにか新しい遊びでも考えたんだろうか。俺にはサツパリわからん。この頃のヴィヴィオはよく自分で遊びを創作する。

そうやって自分でどんどん遊びを創作していくことは良いことだし、嬉しい限りだ。

「読書の秋に食欲の秋、そして性欲の秋。うーん……秋は色々やるが多すぎて手が忙しいな」

とくに性欲。なのはとフェイトにキャンプファイヤーの資源となくなってしまったので、また揃えないといけないのかと憂鬱になってしまふ。

「いつそのこと……あらたなジャンルに手を出してみるとか。ポテ……家から追い出されるのでやめとこう」

追い出されるだけじゃなく高町家緊急家族会議で始まってしまふかもしれないし。

いや、だがしかし、本当にそれでいいのだろうか？

この頃は需要もあるし、そういう本も増えてきている。この大波に乗らなきゃ男が廃るのではないか？

「しかしポテはなく、将来的なことも考えるとやっぱ厳しいかもしれないし。そもそも男である俺は仕込む側なわけで、そういった本を持っていると女性側も敬遠するかも。なのはだって幼馴染本だけは残してくれたし」

やはりスポンサーのニーズに合わない参考書を買おうと捨てられる



可能性がある。

まるでなのはがエロ本を欲しがっているみたいだに聞こえるが別に問題ないので気にしない。

「ボテ腹はまたの機会にするか」

干していた洗濯物を取り込みながら呟くと、下からヴィヴィオが不思議そうにガン見していた。

「パパー、ボテバラってなくに〜?」

「なのはママのことだよ」

「おー! なるほどー!」

「違うんだ、違うんだなのは!? 俺が悪いわけじゃない! ベつに俺は悪くない。 咄嗟のことで頭が回らなかつたんだ! お前はスリムだから! まだそんな年じゃないから!」

これ絶対に殺される。 聞かれたら一瞬にして幼馴染のアドバンテージとか一気に消滅する。 ついでに俺も消滅しちゃう。

「いいかヴィヴィオ? 絶対になのはママに言っちゃダメだからな?」

絶対だぞ?」

「はーい! ヴィヴィオおうちチャックするー!」

口元に指を持っていき、左から右に移動させる。 よしよし、ヴィヴィオがいい子で助かった。 ついでにガーくんにも注意しておく。

物わがりのいいガーくんは首をぶんぶん縦に振る。 そもそも絶対的な支配者の前では、ガーくんも下手なことはいえないし杞憂だったかもしれない。

干した洗濯物を取り込み、布団を抱え部屋に入る。

あー……庭の手入れもちよつとやっておこうかな。

布団を陽がほどよくあたる場所に置くと、もう一度庭に出る。 庭の端、俺がいつか庭に埋められ、ついでにネコモドキを沈めた位置にほど近い場所に花の花壇は存在する。

季節を移りゆくごとに花壇の色は変わり、彩られ、綺麗に輝く。

それはまるで、なのはやフェイトやはやて達のように、自然に愛おしくなってくる。

燦然と輝く陽の光を浴びて、花は美しくなるように――

彼女達もまた――

そしてヴィヴィオもまた――

「テキシユウダー！ モノドモデアエー デアエー！」  
「んっ!？」

花に触れながら雑草を引き抜いていると、後ろのほうでガーくんが声を張り上げ、誰かと対峙していた。

「ちよっ!？ ま、まちなさい！ 服が汚れる!？ だ、だから服が……服……が……。 上等よこのバカアヒル！ 人間舐めると痛い目合うってこと分かせてあげるわ！」

なにしてんすかりンディさん。

ああ……!？ 俺が干した洗濯物が!？ 窓ガラスが!？

なにしてんだあのババアに糞アヒル……!？ 俺の頑張りが……頑張りが……!？

心の声など聞こえることがなく、ガーくんとリンディさんの戦いは熾烈を極めていく。リンディさんが魔力弾をゼロ距離から放つとガーくんはそれを避けることなくその身に受け、自身は前足を軽く曲げ延髄に鎌を下ろす。命を刈り取るその前足を、リンディさんは前屈みに移行し間一髪で避ける。ちらりと見える胸の谷間、これは高ランクだ。流石は歴戦の魔導師というところか。

前足を寸での所で避けたリンディさんは、その体重移動に逆らうことなくその場で空中一回転を決め、着地の軸足とは別の足でガーくんに踵落としを決めに行く。ハイニーソを履いたそのおみ足は地を穿つ。足と地の直線状にガーくんは存在していた。空中にいるガーくんはその速さに対応することが出来ず、地に落とされると思った刹那――

「ヒカリヲ――コエル……!？」

ガーくんは光を超えた。

☆

「コワツカヨー……、ヤキトリニナルトコロダツタヨー……」

真っ白な羽毛からどこか焦げ臭いにおいを発しながら、ガーくんが涙目で俺に擦り寄ってくる。ガーくんちよつと離れて、なんかお前めっちゃ熱いんですけど。

「まさか……先に光を超えられるなんて……。仕留めたと思ったのに……」

「リンディさん、自分も光を超えることが出来るかのような言い方は止めてください」

ガーくんをなだめながら、リンディさんに紅茶を出す。今日のリンディさんは黒のシックな服に赤のフリルをワンポイント、下のスカートも黒で揃えてきている。

しかもニーハイ、そしてミニスカ。

年を考えてほしい。めっちゃくちやドストライクというんだけどさ！ もうこの人やっぱすげえよ、何が凄いかって、熟女なのに20代が着るファッションを着こなしていることがすげえよ！ この人絶対に肌年齢10代とかだよ！

「リンディさん肌年齢はどれほどですか？」

「20代だったかしら」

「すげえっ！ 20代って十分すげえよ？」

「この熟女まじですげえ。」

「して今日は何用で？ なのはもフェイトもいないですよ？」

「今日はヴィヴィオちゃんに会いに来たのよ」

「ああ、あっちじゃ相手にされないどころか邪魔者扱いなんですか

……可哀想に……」

「ゲンキダセヨ、ナ？」

「なんで無職とアヒルにそんなに心配されなきゃいけないのかしら……!? エイミィとの仲も良好よ！」

「よくいるよなー、こういう勘違いする人」

「ネー」

「あなた、カルシウムはちゃんと摂ってるわよね？」

無言で土下座に移行する俺。頭に足を置くリンディさん。

「ありがとうございます」

礼を述べた瞬間、頭が床に5cmほどめり込んだ。

「ところで、ヴィヴィオちゃんはどのようにして布団で寝ているのかしら?」

「ふがほ(う)ふが(う)」

「ふくん……確かに5歳じゃ体が夜までもたないものね」

納得したリンデイさんはより一層足に力を込め立ち上がると、布団ですやすや寝ているヴィヴィオに近づき、ほっぺをぷにぷにしながらはじめた。

「既に失われたそのもち肌……」

『聞こえてるわよ?』

失われそうな無職の命

魔力弾が飛んできたときに身を守れるようにガーくんを胸の位置に抱っこする。

しかしそんな俺に目もくれないことなく、リンデイさんはヴィヴィオはじつと見つめていた。この人、もち肌欲しさにヴィヴィオの皮を剥ぎ取らないだろうか? リンデイさん素手で戦艦の装甲剥ぎ取る猛者だからな!。

丁度そのときヴィヴィオが寝返りをうつ。

毎日俺と同じ時間帯に起きるヴィヴィオにとって、昼に移行する時間帯までがとてつもなく長い。夜を待たずして体力を使い果たすことがしばしば。そのためヴィヴィオは、昼を食べて数十分から一時間後ほどお昼寝を毎日しているのだ。

付き添いとしては俺とガーくんが毎日、仕事がない日はなのはやフェイトも一緒になってお昼寝する。なのはの場合はそのままガチ寝に移行することもしばしば。

「ああ、思い出した。リンデイさん、ちよつとの間ヴィヴィオの面倒をお願いできますか?」

「ええ、勿論よ。 なにか急ぎのようでもあるの?」

「なのは達におやつをもっていく約束してまして。 ラズベリーのタルトなんですけど、あまりが冷蔵庫にあるんで、よかつたら食べてください」

「あら、甘いものには厳しいわよ?」

味覚破壊されてる人がいつてもなあ……。

「あ、それとフェイトによりしく言っておいて頂戴」

母親の顔でフェイトの名を出すリンディさん。やはり母として娘が心配なんだろうな。

「言っておくけど、フェイトの心配は半年で終了したわよ」

「あれ？ そうなんですか？」

「ええ。最初はおどおどしてて、何かにつけて私に確認を取ったり、不安そうな顔をしていたけど、なのはちゃん達と海鳴で生活するようになってからは、私の心配は杞憂に終わっていったわ」

「これわいが褒められるパターンやで」

「むしろフェイトの教育上、あなたを真っ先に抹殺しておきたかったわ」

これわいが殺されるパターンだった

10年前から思っていたが、この人なんで俺にこんな厳しいんだ。尋常じゃないほど目の敵にされてるんだけど。

リンディさんがため息を吐きながら、ヴィヴィオの頭を撫でている隙に俺は抜き足差し足忍び足で家を出て行くことにした。この空間にいと、いつナイフが飛んでくるかわからないし。

ドライアイスを大量に敷き詰めた箱の中にラズベリータルトを並べ、そのまま玄関を出る。バイクに跨って六課へ行くとした直後、膝の上にガーくんがちょこんと座っていることに気づいた。

「……いつからそこにいたんだ……？　というか、ヴィヴィオの隣にいないか？」

「リンディメツシュトイタラカグコワス。カグコワシタラナノハニオコラレル……。ナノハコワイ……。ソレニスグカエツテコレル」

うーむ……すぐに帰ってこれるような距離ではないのだが、まあガーくんがそこまでいうならそうなんだろうな。

「んじや行くか」

ガーくんを膝に乗せ、俺は六課へ移動するのだった。

☆

爆音轟かせ六課へ向かった彼、ヴィヴィオちゃんがお昼寝中だとい  
うのにいい度胸じゃない。

「んっ……あう……」

もももぞと口を動かしながら眠るヴィヴィオちゃん、可愛くて食べ  
てしまいたい。 彼さえいなければ……！ 彼さえいなければ……  
！

悔やんでも悔やみきれない私の汚点だわ。

「はあ……、それにしても、あの子はいつまで私を心配させるつもりな  
のかしら」

9歳の頃は可愛かったのに……。 いまでは憎たらしくなって。

「ほんと……いつまで経っても目が離せないわ……」

重いため息を空気に流し込み、私は彼が作ったラズベリータルトを  
食べることにした。

彼はお嫁さんでも目指してるのかしら……？

☆

「そういえばわたし達ってDKじゃないっ!？」

「あ？ ドンキーコング？」

「ウィエツホツホツホツホ w w w w w w w w ホツホツホツホホーホ  
w w w w オホーホ w w w w オーホホホホー w w w w イエツホーw  
w w w w ウツホホ w w w w アオー w w w w ウツヒャホーオ w  
w w w w ウツホツホツホ w w w w ウーホホホホー w w w w  
w w w w」

「みんなの書類がっ!？ みんなの書類がっ!？」

突然立ち上がり、手を叩きながら意味の分からない言葉の羅列を発  
し始めたはやてちゃん、そしてそれによって被害を受けたわたしたち  
の書類。 それぞれのデスクの上にはジュースでべとべとになった

悲惨な光景が広がっていた。

よかった、最終ラインは越えなかったみたい……！

やっぱりみんな女の子、口に手を置き上品に液体を零している。

ティアなんかトマトジュース飲んでいたので絵面が怖い、怖すぎる。

そしてその光景を作り出した本人は、その光景に満足気に頷いた後、椅子に座った。

「で、なのはちゃん。百歩譲ってなのはちゃんがドンキーコングなのは認めるけど、わたし達まで一緒にされても困るんやけど」

「いや違う違うっ!? 間違えた、千歩ほど間違えたっ! ほんとはJ D、女子大生だった!」

「きやぴきやぴな服に身を包んだゴリラ……」

「離れてっ! ゴリラから離れて!」

トラウマもんだから、きやぴきやぴな服着てるゴリラとか倒せる自信ないから。

「で、なんでいきなり女子大生なんか言い出したんだ? 頭でも打ったか?」

隣で一緒にデスクワークをしていたヴィータちゃんが、心配そうな顔をしながらこちらを覗いてくる。やばい、なんかわたしが本格的にアレな人みたいじゃない。

「いや、違うんだよ。そういえば、わたしって年齢的には女子大生なのにもう働いてて、なんか女の子らしいことしてないなと一瞬思ったの」

『働いてる……?』

そこ、疑問をもっちゃいけません。ちゃんと給料もらってるし、上から何も文句言われてないから大丈夫だよ、きつと。

この頃はやてちゃんが、中将の人達に何かお願いしてたけど不正はないはず。 ないはず……!

わたしの言い分にヴィータちゃんが顔を引き攣らせる。

「おいおい……十二分に女の子らしいことしてるだろ……」

「えー……そうかなー?」

うーん、自分はあるまりわからないなあ。 わたしちゃんと女の子

らしいことしてるのかなあ？

仕事柄魔力弾を放ち続けていると、たまに女を捨てたのではないかと不安になっちゃうし、でもでもいまのこの生活が一番楽しいし充実してるのも確かなんだよねえ。

「巷の女の子はなにをしてるんだらうなあ……」

『女と女のくみずほぐレズのプロレスごととか』

『しようがないなあ、なのはさんは。妊娠しても責任は取りますので……』

「動かないでティア。残像残しながらこつちに向かつてこないでっ!?! その手に持つてる怪しげな物体を早く締まって!?!」

ただ立っているだけなのに、何故かわたしの方向に瞬歩のような速さで距離を詰めてくるティア。なにこの子、ほんとなにこの子。

抱きついてくるティアをアイアンクローで仕留めながら、受け取っていたノートに目を落とす。

今日はフェイトちゃんがティアを、わたしがスバルを、シグナムさんがエリオで、シャマルさんがキャロ。子供組は基本的に真面目……というよりまともな人に頼むことが多い。だってはやてちゃんだとコメントがカオスなことになるし。ヴィータちゃんはいっつも書類に埋もれてるし。

ヴィータちゃんって書類といつも一緒にいるよね。お友達なの？ それとも運命共同体とか？

でもでも、ヴィータちゃんのおかげで六課が回っているのは事実なんだよね。皆感謝しっぱなしだよ。

作業中のヴィータちゃんを無言で後ろから抱きしめる。赤髪をなでなで、頭をよしよし、ヴィヴィオと遊ぶときのように接する。

「なのは、邪魔」

「ひどいっ!?! わたしなりの感謝のしるしだったのにつ!?!」

「しるしはいいけど、早くその書類終わらせてくれよ。後が詰まる」

「あー、ちよつとまって。スバルのノートでちよつと気になるところがあつて。スバルー、集合ー!」

「はーい!」



元氣よく手を上げこちらにダイブしてくるスバルに、すかさずティアシールドを展開する。

シールドを展開したまま、ノートを見せる。

「これ、なんで一回消して書き直してるの？ それも、最初は丸々一ページ使ってた形跡があるのに、二回目は当たり前障りのない訓練の感想と、自己の問題点だけ。ほんとに、これが昨日書きたかったこと？」

わたしの質問にティアと遊び始めたスバルの顔から笑みが消える。

自分自身でもわかった。スバルの笑みが消えた瞬間に、わたしの顔が険しくなったことを。

自覚しながら再び問う。

「ねえスバル、わたしが何で自己管理型のノートを渡したかわかる？」  
雰囲気を察し、ティアがシールドの役割を放棄した。それによつて、わたしとスバルを隔てる壁が消失し、わたしの瞳にスバルの顔が映し出される。

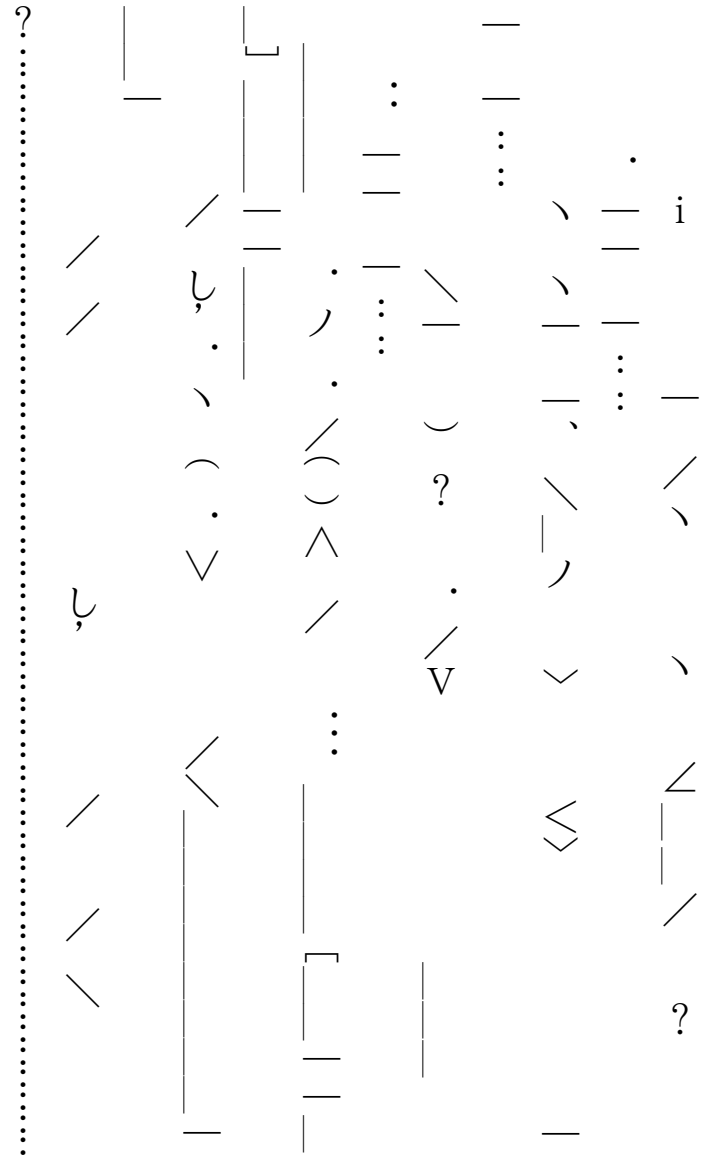
「……暴走したときのことなんて……書けるわけないじゃないですか……」

スバルは俯き気味でわたしにしか聞こえない声量が呟いた。

ぐっと握りしめた拳に何か重いものを感じ、スバルの呟きがどういった意味なのか聞こうとした瞬間――

「……」

六課の窓ガラスが割れた。



## A, s5. ストロベリーパニック

高町なのは他、六課のアイドル達が啞然と立ちつくす中、青年は周囲を見回し全員がいることを確認し大声を上げる。

「おやつにラズベリータルト持ってきたけどおっさん轢いたから何個かおじゃんになった！ 文句はおっさんに頼む！ すまんな嬢ちゃんとスバル！」

「それよりもっと謝るべき箇所があるよね!？」

1人だけ早くこの日常とは逸脱した光景から我に返ったなのはが青年に向かって問い詰める。

「世界を逆に回転させてしまったこと？」

「君の首を180°回転させたい」

「日常を飛び越えちゃうからやめて」

なのはは青年の首をがっしりと掴んで180°回転させる。その結果、青年の首に通っている神経が切れる音が聞こえてきたが気にしない。

「ほら！ どうするのこの窓ガラス！ 怒られるのわたしたちなんだけどー！」

『わたしたちっていうか、わたしなんやけどな……。これ局からお金おろるんかな……。』

『おりなかったらあいつから請求すればいいんじゃないやね?』

『夫の不始末はやっぱ嫁のわたしがなんとかせなあかんし……。』

いや、でも今回のことを教訓に……。』

なのは達よりも奥のほうからそんな会話が聞こえてくる。

ヴィータの言葉によりお小遣いが下げる可能性が生まれ恐怖する青年。はやての会話により怒り顔から一転、無表情へとシフトチェンジするなのは。

「ところで俊くん。その箱の中にはラズベリータルトが入ってるの？」

無表情もつかの間、いつもの可愛い女の子に戻ったなのはは俊が手に持っている箱を指さしながら聞く。俊はそれに頷いて箱の中身

を見えるように開けた。

「ほい、なかなかうまくできたよ。——つて、なんだ全員無事だったのかタルトたちよ」

箱をあけて覗き込むなのはに釣られるように、他の面々も覗き込む。

ここらへんはやっぱり女の子というべきだろうか。みんな甘いものにはめがない模様。そして俊も爽やかな笑顔で手鏡を駆使してのパンツ覗きに余念がない。女性たちが甘いものに釣られている間に、青年は自ら甘いものを作り出す。世界レベルで有名なパティシエを師にもつ男がやる行動である。

「んっ?」

と、そこでスバルが俊の行動にいち早く気づき、口頭で注意しようとしたが——

スっ (なのは30秒)

サッ (スバル0.5秒)

「露骨すぎてむかつきますッ!」

口よりも先に手を出した。鍛え上げた右ストレートから放つ拳は、まっすぐに俊の腹部へと命中。俊は肺から空気を強制的に吐き出しながら吹っ飛んだ。

「俊くんっ!?! 俊くんっ!?!」

急いで駆け寄るなのは

「いいぞもつとやれ!」

「滅ぼせ!」

煽るヴィータとシグナム

一目散に駆け寄ったなのはは、床に転がっている俊を自分のほうに抱き寄せる。そして拳を握りしめたまま若干涙目でぶるぶるしてスバルにきつい口調でぶつける。

「スバル、差し入れをもってきてくれた人を殴っていいと思ってるの? わたしは教え子にそんな教育はさせてないよ」

「なのはさん、さつきひよつとこさん差し入れを餌になのはさんのパンツやフェイトさんのパンツを手鏡越しに見てましたよ?」

なのはは抱き寄せていた腕をぱつと離し、俊の顔面に膝を決め込む。

「なのはさんっ!? 差し入れた人の顔面に膝を決め込むのはいいんですかっ!? いまめちやくちや慣れた手つきで自然に決め込みましたけど!?!」

「ううっ……、わたしも胸が痛いけど、教え子のためには反面教師になることだって苦じゃないよ……」

「なのはさん顔がめっちゃ笑顔です、この上ないほど笑顔です!」

自分の上司に若干の恐怖を覚えるスバル。

「なのはタン、お胸が痛いのか? お医者さんごっこ——」

スパンと乾いた音とともに、なのはの裏拳で一人の青年の命が散った。

☆

「なんかスバル元気ないな。まるで女の子みたい」

「別にスバルは珍種でもなんでもないし、普通に女の子なんだけど」

桃色のバインドで両手両足を拘束された俊が、張本人であるなのはに疑問を投げかけた。二人とも、窓ガラスを割ったことの謝罪を六課中にし終ってからタルトぱくぱくタイムである。二人肩を揃えて一緒に食べるのが一般的な男女であるが、ズレすぎたこの男女の場合は、女性のほうが男性を拘束し、自分の手で餌付けを行うという食べ方が主流である。勿論、この食べさせ方により、なのはと俊は向かい合う形となっている。

フォークで俊の口元にタルトを運んだなのはが、そのフォークを可愛らしく先つぽのほうだけ口元に咥えながら考え込む。

「だけどもあ……確かに今日のスバルはちよつと変なんだよね。こう……元気がないっていうか」

「拙者のビンビン丸は今日も活きがいいでござるよ?」

「もうすぐ試験だっていうのに、どうしたのかなー? 悩み事があるなら、わたしに相談してくれてもいいと思わない?」

「拙者のビンビン丸は今日も活きがいいでござるよ?」

「ねえ、無視した意味がわからないのかな?」

「サーセン」

ゴミを見るような瞳で俊を見下ろすのは。俊はそれに素直に謝った。あまり遊ぶとビンビン丸が納刀されることを心得ているのだ。

「何かなのはがしでかしたんじゃね？ トラウマ的な出来事を」

「うくん……それはないと思うけどなー。訓練だつてあれくらいしないと試験なんか受かりっこないし。新体制になってから、ものすごく厳しくなつたんだよ？」

「じゃあ女の子の日はなんじゃね？」

「上司が女性なのに黙っておく問題かな？ 俊くんみたいな上司ならともかく」

「そういえば、俺達にも男の子の日はあることは知ってるか？」

「え？ なにそれ？」

「たまたまが急に痛くなるんだよ」

「皮剥いたぶどうの痛さより、わたし達のほうが絶対に痛いと思う」

「やっぱムラムラすんの？」

「世界を壊したくなる」

「ムラムラは？ ねえムラムラは？」

「う、うるさいっ！ フェ、フェイトちゃんがいるから大丈夫だもんっ！ そういった面では問題ないもんっ！」

顔を真っ赤にしてばしばしと叩きはじめるのは。それに降参の意を示しながら俊はスバルを眺める。

『……あんばん』

スバルは手元の資料を見つめながらそう呟く。

俊の右耳に、いまだ熟れたトマトのようなのはが顔を寄せて小声で話しかける。

「ね？ なんかおかしいでしょ？」

「べつにいつも通りじゃね？ あいつ基本的にメダパニかかってんじゃん。いまは休憩としてサイレントモードになってるだけだろ。」

へーきへーき」

俊の軽い口調に、なのはは俊の額にデコピンを打ち込む。 バイン

ドによって逃げることもできない俊は甘んじてそれを受け止め、抗議の視線をなのに向けるが、逆になののはが真剣な表情で自分のほうを見返していた。

一瞬の沈黙、負けたのは——当然として俊のほう。  
ため息一つ空気に溶かし、いつものように口踊らせる。

「はあ……流石にもう抱っこできないっていうのに。——ついにスバルンの処女を頂くときがきたようだな」

抱きつく姿勢に入っていたなののはが、そのままリアットを決めるはめにいうまでもなかった。

☆

「ふう……」

自然と出るため息を止める力も沸いてこない。いつもならデスクにじっと座っていることはなく、この自由時間になのはさんとの仲を深めるためにトイレの個室までくっついていくのが日課な私。前に家族に『その……個室は止めたほうがいいんじゃないかな……？』とは言われたが愛しているから止められない。

なのはさんと出会ったのは、忘れもしないミッドチルダ臨海空港大規模火災のときだった。火災発生の際に建物内に取り残された私は、落ちてくる瓦礫を見つめながら助けを呼んだ。来るはずもない、ヒーローを求めた。後悔と欲求が渦巻き滴の結晶となって地面へ落ちる。

降りかかる火の粉、落ちてくる土くれ、そして——そんな全てを消し去ってくれた優しくあたたかい桃色の光。

その人は、優しく声をかけてくれた。その人は、優しく私の手を取ってくれた。その人は、優しく私を抱きしめてくれた。

赤色よりも柔らかく、灰色よりも純白なヒーローは、たった数秒で私を救い出してくれた。

私を抱いたまま空を駆けたその人は、涙で濡れた私の顔を拭き、地面に下ろした後ぎゅっと力強く抱きしめて頭を撫でてくれた。決して大きくない体だったけど……あのときの私にはとても大きく感じられた。きつとそれは、きつとそれが、その人の持っている器の

大ききなのかもしれない。

私を救出してくれた後、その人はすぐに離れていった。

『ごめんね、ちょっと席を外すね？　大丈夫、すぐに戻ってくるからね？　えつと……お名前は？　うん、うん。　そっか、スバルちゃんだね。　大丈夫だよスバルちゃん。　すぐに戻ってくるから』

いまなら分かることだけど、あの混乱の最中私だけに割ける時間なんてものは存在していなかった。　致し方ないこと。　しょうがないこと。

だけど幼い自分はそんなことなど分からずに、ただただ周囲で独りぼっちの自分が寂しくて怖くて不安で、また知らない誰かの服をつまんでいた。

『あん？』

頭上より聞こえてきた声は、先程のように優しくなく一瞬にして怖くなった私は黙って俯いた。　何故だか手を離すことはできなかった。　きつと、この手を離れたら本当に泣いてしまうとわかっていたから。

その人は私が怖くて俯いたことに気づいたのか、それ以降言葉を発することはなかった。　ただただ、じつと私の手を握りしめてくれた。　ただただ、頭を撫でてくれた。　あの人と同じようにあたたかなくて、思わず顔が綻んだ。　きつとそれを見られていたのだろう、その人はくすりと笑っていた。　途端に恥ずかしくなった私だけど、何か嫌な感じは一切しなかった。

それからしばらくしてギン姉と母さんが私を探しにきてその後ろにはなのはさんとフェイトさんがいて……私は後ろの人に抱っこされて……

『あんまり泣いていると、せつかくの可愛い顔が台無しだぜ』

私の方向からは表情は読み取れなかったけど、きつとその人は笑いながら話したんだと思う。　だって、あのときの私はちよつと照れていたから。

ふとした拍子について考えてしまう。　もし、私に兄という存在がいたなら……あの人のように――



「俺なら子宮をだっこするかな」

「さりげない風を装って気持ち悪いこといいながら私のデスクにこないでください」

回転イスでぐるぐる回りながら私の元に変態がやってきた。その後ろからなのはさんが湯気をたててるカップを二つ分持ちながらやってきた。

「ごめんね、ちよつと薬を切らしちゃって。はい、あったかいミルクどうぞ」

「なのはさんの搾れたてミルク……!?!」

「違う違う違うっ!! でないから、まだわたしなにもでないからっ!!」  
「ダイソンの吸引力なら出る可能性が……!?!」

「俊くん黙ってて! めんどくさくなるから黙ってて!!」

なのはさんは本当に可愛い。私の子どもを産んでほしいくらい可愛い。もうなんというか、本当に子どもを産ませたいくらい可愛い。

……なんというか、我ながらおかしくなつたものだなあ。助けてもらったときは純粋な憧れだったのに、いまでは愛情にまで発展して……

「なのはさんを孕ませて……」

「俊くん助けてっ、教え子から聞こえてはいけないセリフが聞こえてくるんだけどっ!! 鳥肌が! 鳥肌が!」

大好きなのはさんがひよつとこさんに抱きついてマジ泣きする。

ひよつとこさんは胸が顔に当たって嬉しそうな表情……、というより鼻血で大変なことになってる。これだから童貞は。

「フェイトさん、私もあつちのほうで勉強を……」

『この問題が解いたらね。ペーパーで9割取っておかないと厳しいよっ。』

『ぐぬぬ……』

『ココマチガツテルヨ?』

『あ、ほんとだ。ガーくんよくわかったね?』

『キョウカシヨミタカラネ』

『えらいえらい』

『エヘヘー、ホメラレタ』

「はあ……」

「ため息が多いな、スバルン。頭痛？ 生理痛？ 情緒不安定？  
悲しくないのに涙がでちゃう？」

「恋煩いではないですよ」

けど……頭を悩ましてることは確かだ。

なのはさんは警戒しているのか、ひよつとこさんの後ろに隠れながら私のほうをチラチラ見る。なにこの可愛い生き物。でもレイジングハートを振り回すのは怖いのでやめてください。

ほんとこの人は可愛くて、優しくて、カッコよくて、頼りになる上司だなあ。

訓練だつてAランクに昇進させるために一生懸命付き合ってくれて、欠点を埋め長所を伸ばしてくれて、頑張った分だけ褒めてくれる。

そんな私の大好きな憧れの人。

でも——だからこそ——

ガタつ、そう音がたつほどの勢いで席を立つと、驚くなのはさんとこつちを無表情のまま見ているひよつとこさんに一礼して、私はさつさとその場を逃げ出した。あの二人の近くにいると、なんだか自然と涙が零れそうだから。

カッパだけを持って廊下に出る。

「なのはさん達に戦闘機人だつて、打ち明けるって決めたのに……」

いざ言おうと思うと……体が震えちゃうなあ……」

だからこそ——打ち明けた後の反応が怖くていまだ一步を踏み出せない私がいる。

なのはさんは……あのときみたいに私を優しく抱いてくれるのかな……？

A, s 6. 熟女ははしやぎメール打つ

「今日のスバルは絶対におかしかったよね!」

「そうかあ?」

「絶対にそうだよ! まったく、俊くんはダメダメさんだなあ。女の子のちよつとしたサインを見逃さないのがいい男の条件なんだからね? あれは絶対わたしに何かを伝えようとしていたよ」

「体重が1キロ太ったという事実をいま伝えようか?」

「この頃便秘気味だから!」 魔法少女は太らないって原則があるから大丈夫だもん!」

「スカトロなのは……」

「ちよつと表出ろ」

冷酷な表情で襟首を掴むなのは。その握力は凄まじくこつちが漏れそうになる。

「た、タンマタンマ!? 冗談だって冗談だつて!」

両手を使ってTの文字を作ると、なのはがぱつと手を離し床に女の子座りをしながら髪を弄りだす。

「うゝ……なんでわたしはおっぱいに栄養がいかないんだろう……」

わたしだつてフェイトちゃんみたいに……おつきかつたら……」

ちらちらとこちらを見ながら、そう言ったなのは。俺もなおっぱいをガン見しながら、あつちでヴィヴィオの相手をしているフェイトのおっぱいを思い浮かべる。

『フェイトママ? かおまつかだよ? だいじょうぶ?』

『う、うん! 大丈夫だよヴィヴィオ! なんでもない、なんでもないからね!』

『あ、こらバカアヒル!? 人がヴィヴィオちゃんのために剥いたぶどうを勝手に食べるな!』

『ワ〜ン、フェイトー! リンデイメツシユガイジメルー!』

『ま、まあまあお母さん。アヒル相手にそんなムキにならなくても……』

『むきーっ!』

あつちはあつちで楽しそうだな。　　というかりんデイさんしつかり夕食のデザートまで頂いてるんだな。　　ぼっち説が強くなってきたぞ！　　まあそんなぼっちはどうでもいい。　　それよりいまはなのはに伝えなきやいけないことがあるんだ。

例え貧乳でも、お前の魅力は変わらないよ。　　そう言わないと――

「な、なのは――」

「あら、誰がぼっちですって？」

「!?　り、りんデイさんいつのまに……?」

「いつから私があそこにいたと錯覚していた？」

「な、なんだと……!？」

「で、なのはちゃん泣かして何してるのよ？　キモ男」

りんデイさんはそのまま俺の隣に腰をおろし、目の前でしゅんとしてるなのはに目をやる。

「まだ泣かしてないですよ。　　というか泣かしませんよ。　　なんていうかまあ……乙女の悩みですかね。　　包茎で悩む男の乙女verです」

「大丈夫よなのはちゃん！　　わたしが処理の仕方を教えてあげるから！」

「へっ!?　　いまどんな勘違いされたの!?　　りんデイさん何を想像したの!？」

なのはを強く抱きしめるりんデイさん。　　いったいどんな勘違いをしたんだこの未亡人。

あわあわするなのは。　　何故か手で俺を追い払うりんデイさん。　　……ここはりんデイさんに従っておくか。　　くそ！　　くそ！　　あと数秒早ければ……!」

今回の選択が後々の大きな問題にならないことを祈りつつ、なのはにいたらないことを吹き込まないようにりんデイさんに言い聞かせた後、その場を去る。　　よし、ヴィヴィオと遊ぼう。

ヴィヴィオは苦笑いのフェイトの膝でガークんと遊んでいた。

俺に気が付くと、両手をぶんぶんぶと振り回し、こっちにくるよう  
に合図をする。　　なんて可愛い娘なんだ。

「パパー！ だっこー！」

「はいはい」

フェイトの膝の上で両手を上げ、だっこをせがむヴィヴィオ。俺は腋の下に手を入れ一気に抱き上げる。そのままフェイトの隣に移動し、今度は俺が先程のフェイトと同様にヴィヴィオを膝の上に乗せた。隣ではフェイトがガーくんを膝に乗せているところだった。

おいアヒル、そこ変われ。

「ごめんね俊。お母さん、ちよつときさびしんぼみたいで……」

「んー、俺はリンディさん好きだし別にいいよ。夕食時に『ワインなの？ ねえワインなの？』って聞くのはやめてほしいけど」

「あうっ……。今度から持参するように言い聞かせておくね」

「けど今日ヴィヴィオがお昼寝してるときに、留守番を申し出てくれたのは素直に助かったな。やっぱりあの人はなんだかんだで俺達を気にかけてくれてるし」

「ふふっ、なんてっただって皆9歳の頃からお母さんのお世話になってるもんね」

「けど外見まったく変わらないよな……」

「うん……。桃子さんもそうだけど……あれは管理局SSSランク秘密ファイルに記載されてると思うんだ……」

「え？ そんなのあんの!? なにそれ面白そう！」

「しまったっ!? 余計なことを口に出してしまった!？」

今度絶対にみにいこう。スカさん連れてみにいこう。ルパンみたいでいまからワクワクしてきた。

フェイトとそんな話題で華を咲かしていると――

「はむっ！」

「あいたっ!？」

膝で遊んでいたヴィヴィオが暇をしたのか耐えかねたのか、はたまたただしたかっただけなのか、俺の人差し指を本気噛みしてきた。

不意の痛みで思わず手を引っ込め、ヴィヴィオに目を向けると、ヴィヴィオが餅のように頬を膨らませていた。

「ヴい、ヴィヴィオ……?」

「パパ！ ヴィヴィオさみしかったなー！」

じーつとこちらを見ながらヴィヴィオは喋る。

「ヴィヴィオおきたらパパいなくてさびしかったなー！ さびしかったなー……」

一回目の寂しかったは大きく、二回目の寂しかったは小さく発したヴィヴィオは、そのまま俺の手を握り動かした。 とんとん、とんとんと俺の膝に当てながらこちらを上目使いで見るヴィヴィオ。

……そっか。 寂しい想いをさせちゃったのか……。

膝の上に乗せていたヴィヴィオを、後ろからそつと優しくぎゅつと強く抱きしめる。 その温もりを確かに感じながら。

「ごめんなヴィヴィオ。 寂しかったんだよな。 お昼寝して起きたとき、おれがいなくて寂しかったのか。 ごめんな、これからはずつと隣にいるから」

ごめんごめん、そう謝りつつあやすように左右に体を揺り動かす。 そうするとヴィヴィオの表情は一転、ひまわりのような笑顔を浮かべ

「うん！ ごめんなさいしたからゆるしてあげる！ ヴィヴィオいい

こ？ ヴィヴィオいいこ？」

「うん、ヴィヴィオはいい子だよ。 えらいえらい」

「えへへ」

隣にいるフェイトにいい子か聞くヴィヴィオに、フェイトは笑顔で頭を撫でながらいい子だと伝える。 ヴィヴィオはそれに嬉しそうに笑った。

「リンディさんいるから大丈夫だと思ったんだけど……失敗しちゃったなー……」

「ガークンが六課内からいきなり消えた謎がいま解けたね」

「残像残していきなり消えたから何事かと思っていたら……。 俺よりヴィヴィオのこと想ってるのかもしれない」

俺が一番ヴィヴィオのこと想っていると自負していたのに。

「これは私も負けてられないかも。 よし、そうと決まれば！ ヴィヴィオ、おいで！ フェイトママがだっこしてあげる！」

「わーい！」

ヴィヴィオのほうに両手を広げたフェイト。その胸めがけてヴィヴィオはとんでいく。その代りなかわからないが、俺の膝にはガーくんが綺麗にお座りしている。

ヴィヴィオがフェイトの胸をぺたぺた触ると、フェイトは顔を赤らめながらヴィヴィオを諭す。『だめだよー?』なんていいつつヴィヴィオの鼻をちよんと押すフェイト。俺がフェイトの胸をぺたぺた触ると、『もうえっち』なんていいつつ俺の鼻面にどすと重い拳をいれてくる。鮮血が舞うこの空間。ガーくんはクイツクル○イパー片手に待機していた。

「パパっ!? パパっ!?!」

「もうヴィヴィオは可愛いねー。ほらおいで。私のぷりん『あーん』して食べさせてあげる」

「フェイトママ!? パパが、パパが!?!」

「何言ってるのヴィヴィオ。パパなんていないでしょ?」

「フェイトママっ!?! フェイトママっ!?!」

ヴィヴィオの俺を呼ぶ声だけが耳に深く残った。

☆

「は〜い、ヴィヴィオあ〜ん」

「あ〜ん」

カラメルをたつぷりのせた黄色のお菓子プリン、銀色のスプーンに一口大の大きさをすくってフェイトは膝にちよこんと座っているヴィヴィオの口元に運ぶ。ヴィヴィオは可愛らしい口を最大限まで開口し、スプーンにのったプリンを迎え入れた。

ちゆるんと擬音が聞こえてきそうなほどの食べ方でプリンを口に含んだヴィヴィオは、もぐもぐと咀嚼しごつくんと呑み込んだ。

「おいしいヴィヴィオ?」

「うん! ヴィヴィオだいすき! でもでも、フェイトママのほうがもっとすき〜!」

「えへへ、ありがとうヴィヴィオ」

照れ笑いを浮かべるフェイト。

その様子をフェイトの隣で椅子に座った俊は気持ち悪いほどにガン見していた。それはもう犯罪者のようにガン見していた。ときたま、フェイトが俊のほうを見ないまま『顔が気持ち悪い』とのメッセージを送るがそんなことなどおかまいなしにガン見していた。

しかしながら、これには淫乱団地妻の谷間並みに深い理由があるのだ。その理由をフェイトも共有しているからこそ、あまり強く言えないでいる。

「……………」

その理由とは――

「……………」(チラッ)

「ちよっ!? だから大丈夫ですから止めてくださいってば!? 下着を引つ張らないでくださいよ!?!」

「大丈夫なのはちゃん! 人生の先輩として処理の仕方を教えてあげるから!」

「処理ならちゃんできてますから大丈夫です!」

目の前で繰り広げられる攻防に、どうすればいいのか困惑している二人であった。

「(変態じゃねえか)」

「(まるで俊みたい…………)」

なんらかの方程式が出来上がった瞬間であった。

「わたしの周りには変態しかいないの!?!」

リンディをからくのところまで引き離し、一目散にフェイトのほうへ駆け寄るなのは。現在、一番の安全圏は此処しか存在しないのである。

うわーんと泣きつくなのはをフェイトがよしよしと頭を撫で慰める。鼻をすするなのははフェイトをぎゅっと抱きしめた後、文句を言いだした。

「出勤すればティアにスバルの変態部下の相手だっしてしないといけないのに……………」

フェイトは苦笑しつつ、そのままなのはを抱きしめ続ける。

「まあまあ、いいことも必ずあるって!」



「あの二人わたしがトイレにいます、個室ノックしつつガチャガチャしてくるし……。どれほどの回数で止まったことか……」

「まあまあ、……それはちよつと……」

「あの二人何故かわたしにえつちな下着見せて誘惑してくるし……」

「ガチすぎて怖い」

ちよつとしたパニックホラーである。

なのはの告白に思わず抱きしめていた手を離してしまうフェイト。

はあ……、そう知らず知らずのため息を吐くのははフェイトの隣にいた俊を椅子に見立てて腰を落とす。そしてそのまま背もたれに体を預けるように、俊に体を預けた。

「な、なのは……?」

「ちらちらこつち見てたでしょ。バレバレなの」

「いいパンチラ具合でした。具も若干見えそう——」

、、  
—— パーン

( ⊠ ⊠ )

( ㄥ ☆ ) ㄥ )

「わかめが——」

、、  
—— パーン

( ⊠ ⊠ )

( ㄥ ☆ ) ㄥ )

「俊はちよつと黙ってて」

「……はい」

二度の高速ビンタを受けた俊に対し、フェイトは呆れ口調で言い放った。しかしいまだになのはは俊の上に乗っかっている。

はあ……、知らず知らずのうちにため息を吐く。

「あら、なのはちゃん悩み事? 相談にのってあげようか? 人生の先輩として」

「お母さんは黙ってて」

( ㄥ 。 ㄥ )

驚きの表情を娘に向ける母親。しかし娘はガン無視である。

娘にキツイ一言をもらいシユンとするリンディに、俊はよしよしと

頭を撫でようと手を伸ばす——が、目視できないスピードで払われた。一瞬何が起きたか理解でき

ずに、リンデイと自分の手を交互に見やる俊。

いまだにシユンとするリンデイに、今度はフェイトの膝にいたヴィオが身を乗り出していいこいこいしようとする。しかしヴィオの小さな体では、リンデイの頭まで手が届かない。あう……そうヴィオが漏らす直前にリンデイは自分のほうから頭を差し出した。

いいこいこいしてもらおうと頭を差し出した——が、その直前にガークンから後頭部を思いつき蹴られたため、顔面がテーブルにめりこむほどの頭の下げ方を披露することとなった。

「ふざけんじやないわよこのバカアヒルーツ！」

「ヴィオガイイコイコシテアゲヨウトシテルンダカラ、コウベヲタレロヨ」

そして始める異種格闘技戦。軽快なフットワークを見せるアヒルに、動きを封じ必殺の一撃を放とうとする人間。

「あーっ！ けんかしちゃだめー！ めっ！」

そしてそれを止める5歳児。

5歳児に正座で説教をされるアヒルと大人の構図がそこにはあった。

ところかわって、なのははフェイトに相談事を持ちかけていた。

相も変わらず俊を椅子代わりにしたまま。

「スバルがなのはに隠し事？」

「うん。それもなかなかの悩みだと思うんだ。スバルの性格上、あまり隠し事はしないタイプの人間だし。そんなスバルがわたしに対して隠し事をしてるってことは

それなりの問題なんじゃないかと」

「……そういえば、今日はティアもしょっちゅうなのはのほうに視線をやってた。どうせいつも好き好き光線かと思ってたけど——」

「実はしねしねこうせんというオチだったのか」

「俊くん黙って」

「はい」

なのはに手を抓られ、椅子になることに専念する俊。

フェイトは自分の顎を擦りながら、考え込むような形で、言葉を選びながら話す。

「なのはは、どうしたいと思ってるの?」

「どうしたいって……?」

「んーっと、……、スバルのその悩みを聞いて、それからどうするの?」

「わかんない……」

ぶんぶん、頭を横にふるなのは。その際、サイドに結つてある髪が俊の耳に直撃する。

「わかんないの?」

「うん」

「わかんないまま、聞いてどうするの?」

小首を傾げるフェイトに、なのはは、

「スバルが何について悩んでるのか分からないし、聞いたところで何が出来のかなんて分からないけど、だけどわたしはスバルの上司だから。スバルのこの一年間は、わたしが面倒を見るって決めてるから。もしもこのことでスバルが悩んでいて、一步を踏み出せないでいるのなら、怖くて震えているのなら、あのときのように——助けてあげたい」

空港火災のときに見つけた一人の少女。泣いて泣いて、どうにもできなくて、周りは炎に囲まれ、為すすべもなく泣いていた少女。

その少女が、時を経てまた自分の前に立っている。

どうしていいのかわからず、一步を踏み出せないでいる。

自分に何かを伝えようとしている。

「スバルを助けない」

毅然とした表情で、決意した表情で、なのははフェイトにそう伝えた。

フェイトはそれに笑顔で答える。彼女もまた、この目の前にいる魔導師に救われたから。体は成長し、心も成長こそすれど、高町なのはの本質は変わらない。そんな彼女だからこそ、きつと空は高町

なのはが好きなんだ。 フェイト・T・ハラオウンも高町なのはが好きだからよくわかる。

フェイトはなのはを抱きしめて、なのはの頭を撫でながら

「がんばろうね、なのは。 私も精一杯のアシストをするから」「うん！」

ヴィータちゃんあたりには相談しとこうか、なんてなのはとフェイトで話が盛り上がり出した頃――

「重大発表ツ!!! どんどんぱふぱふーツ!!!」

椅子が喋り出した。

あまりの大声に全員の手が止まり、椅子に視線を集める。

椅子は、こほんと咳払いをし

「明日、とろろ大会を開きます！ 文句は言わせません！ とろろ大会を開きたいんです！」

そう主張しだした。

『何言ってるんだコイツ……』

フェイト・なのは・リンディの三人は口こそしないもの、そう心の中で呟いた。 対して、ヴィヴィオはガークンは大喜びだ。

「パパー！ とろろってな〜に？」

「こう……山の神的存在で、なんかねこバスを愛車にしてるヴィヴィオと同じ5歳児の女の子のおつきなお友達で――」

いきなりの脱線事故だった。

「って、違う違う。 とろろな、ヴィヴィオ。 とろろは明日一緒にみような」

「お〜……、とろろ。 とろろおいしい？」

「とろろ〜はんはおいしいぞ〜。 明日はパパがカメラを回してあげるからな」

「わーい！ ヴィヴィオおひめさま！」

「そうだ！ お姫様だぞー！」

わ〜い！ とガークンの手を取りながらはしゃぐヴィヴィオ。

その様子に椅子は満足し、なのはとフェイトのほうに目を向けた。

「……」

「そんな眼差しで見つめられると、椅子はびくびくしちゃう！」

膝を揺らす椅子に、上にのっかっていているのはは先ほどよりも強くひねる。あくまでどく気はないらしい。

椅子の発言によって白けた目を向ける魔導師二人組。そのうちの金髪魔導師が自分の頭をとんとんと一定のリズムで軽く叩きながら、

「大丈夫……?」

そう心配そうに聞いた。

「あれっ!?　なんで頭の心配されてるの!？」

「いや、だつてさ俊くん。明日ビデオ回すんでしょ？」

「うん」

「何のために？」

「みんなの仲がいいところを撮るために」

「わたし素直な俊くんが大好き」

「みんなが白くてねばねばしたものを口に入れて満面の笑みを浮かべてる映像を見ながら、僕も白くてねばねばしたものを下の口から出そうかなと思ひまして」

立ち上がり椅子ごと蹴り上げたのはによって、椅子は椅子から転げ落ちた。

「変態！・変態！・変態！・」

「もつとりズミカルに！」

「へ、へんたしい？　へ、へへへんたい？」

「ぶっ！」

「泣かせる！　絶対に泣かせてやるもん！」

涙目になったなのはが椅子の胸倉を掴もうとした瞬間、フェイトの制止の声が聞こえてきた。

勢いよく振り返るなのは。諦めたような表情と呆れたような表

情を、足して半分に割ったような表情で自分の携帯画面を見せる。

映し出されているのは受信画面、

メールの差出人はヴィータ。

『明日の夕食はお前らの所でパーティーか。　昼は少し減らしておこうかな』

「まってヴィータちゃんっ!?　これは罠だから!　なんかうちのペットが発情期っぽいから!」

「おーいなのは。　いま10月なんだけど。　あ、でもなのはは年中発情して——」

「ふんがーっ!」

椅子に襲い掛かるのは。　ぽかぽかと可愛らしく拳を叩きつける。

「いたっ!?　重い重い!?　魔力付加つける拳めっちゃ痛い!?　ぽかぽかかって擬音違う!?!」

フェイトはそんな二人のやりとりのため息を吐きながらぞくぞくと来るメールの内容に頭を抱える。

「はあ……これで最後か。　って、あれ?　もう一人メールがきてる」

お母さん

私も仲間にいれてー(\*´ω´\*)

仲間外れはマジカルパンチだよ?ゞ(△▽)ノ

絶句した表情で画面を5秒間見続け、ゆっくりと視線をリンディのほうに向けて

「……」(ちらっ、ちらっ　わくわくっ　うずうずっ

「……………」(ぽちぽち

お母さんへ

娘からのお願いです。　恥ずかしいのでやめてください

そう返信したフェイトはメール画面の削除ボタンをそっと押すのであった。

## A, S 7. 犯人はヤス

夢と現実の狭間を歩む朝の起床時間帯。隣でわたしの名前を呼んでいる誰かに返事をしながらも意識は夢の方に傾いていた。優秀……だと思いたい青髪の教え子がわたしの下着を奪って全速力で六課を駆け回る夢。教導が終わりシャワーを浴びて、遊びにきてるヴィヴィオでもふもふしようと計画を立てていた矢先に起こった出来事。バスタオルで体を拭きつつ下着を手にとった瞬間、猿のような速さで教え子が姿を現し下着を奪って逃走。その代りに置いていった自分の下着をわたしに渡し全速力で駆けていった。

その一瞬が命取りとなってしまう。個室ガチャガチャまでされたわたしは油断していた。あの子達からの奇行に慣れてしまっていたのだらう。こんな初歩的な行動すら瞬時に対応できなかった。

悔いたところで後の祭りである。急いで下着以外を身に着けたわたしは教え子を確保するため六課内を全力で駆ける——が、タイトスカートの下がすーすーしすぎて思うような走行が出来ずちよつとだけ涙が出始めた。それでも上司の意地に賭けて追い縋ろうとするわたし。既に教え子は下着を顔面に押し当て、荒く激しくビートを刻んでいる。一秒でも早く、このすーすーした感触を終わらせたくて、教え子の名前を叫びながら走る——直前でわたしの名前を可愛らしく呼びながら誰かが後ろから抱きついてきた。腰に回る手、子ども特有の高い声、そしてわたしをママと呼ぶ唯一の存在、ヴィヴィオである。

ヴィヴィオが後ろからわたしに抱きついてきたのだ。見事にこけるわたし、無垢な笑顔で抱きつくヴィヴィオ。そういえば、遊ぶ約束してたもんね。きつと心配してわたしを探しにきてくれたんだよね。スカートが捲れ上がっている状態であるが、幸いにも周りには誰もいなかったし、ほっと安心して可愛らしく叱ろうとヴィヴィオに顔を向けたその先に——

「——ッ!？」

「きゃっ!?!」

瞬時に覚醒したわたしは勢いよく起き上がった。その拍子に隣にいた誰かが驚きの声を上げてベッドに倒れこんだのが視界の端に見えたので、慌ててその誰か——フ

エイトちゃんの体を揺らす。

「フェイトちゃんフェイトちゃんっ!?!」

「お、おはようなのは……。またうなされてたから起こそうとしてただけど……。もしかして私のこと嫌いなのか?」

「そ、そんなことないよ! わたしフェイトちゃんのこと愛してるよ! もうLOVEだよ!」

「あ、ありがとなのは。それよりどうしたのなの? また怖い夢でも見たの? 呪詛のように『下着……。わたしの下着……。』って呟いていたけど」

「そう! それ大事っ! いまとんでもない夢みたの! わたしがシャワー浴びて、そしたらスバルにパンツ取られて、ノーパンで追っかけてたらヴィヴィオが抱きついてきて、それでそれで……」

そこまで言った途端、わたしは次の言葉を言えなくなった。否、口を開けど音が空気を振動することがなくなった。

目の前にいたフェイトちゃんが首を傾げる。

「なのは? それでその後どうなったの?」

「それでその……」

頬がみるみる真っ赤になるのを自覚する。体が熱く、極度の緊張

状態なのか脳に酸素がうまく送れていない。頭が真っ白になり、感

覚がなくなっていく。先ほどの

映像が絶え間なくフラッシュバックし脳裏から離れない。まるで

先程の映像を一生涯残していくことを自分の脳が選んだかのよう

に、鮮明に刷り込んでいく。忘れられるはずもない。消せるわけもない。彼のあんなに驚

いた顔、彼のわたしをみる目。

「な、なのはっ!?! ちょっと大丈夫!? 顔というか体全体が真っ赤になってるよ!?! なにがあったの!?! ノーパンの先に何があったの!?!」



心配してわたしを揺すりながら話しかけてくれるフェイトちゃん。でもノーパンの先に何があったのってちよつと卑猥すぎるから止めようよ。仮にもわたしたち一児のママだよ。先に発言したのわたしなだけどさ。

でもこれだけフェイトちゃんが錯乱してるとかえってわたしが冷静になれてありがたい。所詮夢は夢。そう気にすることなんてなにもない。

「ねえフェイトちゃん……。ちよつとわたしのパンツ見てくれる……。？」

「なのはああああっ!？」

これは錯乱なんかでは断じてないはず。ただの確認、とどのつまり確認。それ以上でもそれ以下でもない。

「お願いフェイトちゃん……。わたしのパンツをいまずぐみて……」

両手で優しくフェイトちゃんの両手を包みながら、上目使いでお願いします。するとフェイトちゃんは視線をあちこちに彷徨させた後、戦火に単騎で突入する覚悟を決めた一人の戦士のような目で頷いた。

「じゃ、じゃあ……。入るよ?」

「う、うん……」

布団をぺらつと捲り、潜ったフェイトちゃん。数秒してからわたしは恐る恐る聞いた。

「フェイトちゃん……。わたし下着はいてるよね……。？」

「うん、大丈夫。ちゃんとはいてるよ」

よかった、本当によかった。これで下着をはいてなかったらわたしは蒸発するところだったよ。ほつと一息安堵したのもつかの間、もぞもぞと顔を出したフェイトちゃんの表情は不思議でいっぱいだと疑問を投げかけていた。

「ねえなのは?」

「ん? どうしたの?」

「なのはってさ、夜寝る前に青の水玉模様だったよね?」

「うんそうだけど。あれ可愛くって気に入ってるんだよね」

「でもいま確認したらさ——ケミカルレースとメローフリルのピンク





の両肩をがっしりと掴んできた。

その後ろにはあたふたとした様子で見守るフェイトが。

「な、なのは……っ?」

「……………」

いきなり掴まれた俺は少量のアンモニアを垂らした後、恐る恐る怖がりながら名前を呼ぶが、なのはは何も言わず俯きながらぶるぶると震えていた。

「ふえ、フェイト? あの……これはどういう事態が起こってるの?」「えつと……多分なのは勘違いというか寝ぼけているというか……………」

歯切れの悪いフェイトの言葉。なにがなんだかさっぱりわからない——そう思った矢先、なのはが小さく呟いた。

「……………とつて……………」

「え?」

「……………責任……………とつて……………」

「……………はい?」

「わ、わたしのノーパン姿見たんでしょっ!? 責任とつてよっ!」

「んんっ!」

熟れたトマトを思わせる状態のなのはが涙目で俺に言い放つ。

「えつとえつと、んんっ!」

ヤバイ、何がなんだかさっぱりわからない。俺がいつなのはのノーパン姿を見たというのだ。土下座してでも見たい代物だよ。

ぶるぶるするなのはだが、そのまま俺にぎゅつと抱きついてきた。それはもう密着レベルで。なのはの香りがぶんぶんするレベルで。顔を埋める姿勢で抱きついてきた。

「な、なのははっ!? だ、大丈夫かっ!? なのははっ!」

顔を埋めたままぶんぶんと顔を横に振るなのは。そのたびに布越しに伝わるなのはの柔らかい肌に昇天寸前だ。

こ、これは抱きしめたほうがいいのだろうかっ!? やっぱり抱きしめたほうがいいよねっ!? これもうOKのサインだよねっ!?

だ、だきしめてみようかな……………!

生睡のみこみ震える指先に力を入れ、なのは背中にとつと触れる寸前

「あひっ!？」

誰かが俺を後ろからぎゅっと抱きしめてきた。背中に当たる胸の弾力と全てを包むその包容力。甘い香りを胸いっぱい吸い込みながら、視界からいつの間にか消

えた人物の名前を口にする。

「あのー……フェイトさん？ な、なにをしてるんでしょうか……？」

「やきもち」

そう言って、抱きしめる力をより一層強くする。なんでこの人は俺の耳のそばで、ちよつと拗ねた口調で『やきもち』なんて単語を使うのだろうか。もう幸せ一杯

でいまにも死にそう。

なのはの背中に触れる直前で止まった手。後ろからでも分かる、フェイトはじつとその手を見ているのだ。あかん、なんか別の意味で震えてきた。

「ねえ俊？」

「は、はい？」

「私は裸見られたこともあるし、責任取って結婚してよ」

「け、結婚ですか……？」

「うん、そう」

「で、でもそれにはリンディさんが……。それに無職だし」

「……………働かせたら虫つきそうだし別にいいのに」

何かを小さく呟いたフェイトが耳を噛んでくる。痛い痛いやめてください死んでしまいます。

……でも、もしフェイトと結婚したらいまのこの関係はどうなるんだろうか？ なのはとフェイトとの関係も、俺の友人関係も、何もかもが壊れそうで、傾きそうで、正直な所俺は怖い。かなり前に、なのはと一緒に二人で翠屋をやろうと誘ってくれた時も……俺は怖くて話題を逸らした。またレアスキル弱虫が発動した。ミッドに来るとき、土郎さんに結婚したいと言ったけど……いざそういうこと

を視野に入れていくとどんどん現実が押し寄せてくる。二人の間体だつてあるし、管理局にとつても二人は大切な存在だし。ハッピーエンドなんて存在しないのかなあ……。

でもまあリンデイさんの説得とかは本気で怖いのもまた事実だ。あの人に結婚報告なんてしたら顔面抉られそうで怖い。リンデイさん子どもの頃から大好きだけど、本能がたまに警戒レベルMAXになるのもまた事実。

ぎゅっ——！ ぼぎゅぎゅっ

「痛い痛いっ!? なのはさん骨がつ!? 骨がつ!?」

「……無視されてなのは傷ついた」

「あ、うん……。ごめんなさい」

骨がみしめしいと悲鳴を上げるが、素直に謝ることにする。きつと俺が悪いんだろうし。しかし俺がなのはのノーパン姿を見たかあ……。でもよくよく考えてみる

と、普通に裸とか見た気もするんだけど……。

「なのは、考えてみれば俺何回かなのはの裸見た記憶があるんだけどさ……」

「ノーパンのほうが貴重でしょっ!」

「言われてみれば確かに……!」

「二人ともいったいどこに向かおうとしてるのっ!? 戻ってきて!」

状況が中々カオスになってきた中、朝のアニメを観終わり、こちら側にすつとんできたヴィヴィオが俺の腰に抱きついてきた。これで前になのはが、後ろにフェイトが、横にヴィヴィオがいる構図となった。

「ヴィヴィオー、もうアニメ終わったのかー?」

「うん、おわった! だからパパをぎゅーっしてしにきたよ!」

その直後、ヴィヴィオがぎゅっーとしてきたので可愛くなつてつい頭をなですることに。

ほんとヴィヴィオのぎゅっーはかわいいなあ。癒されるよ。

でも——

「なのはさんにフェイトさんっ!? 魔力付加でのぎゅっーは人命にか

かわるので!? 人命にかかわるのでっ!?  
「 30秒ほど言うのが遅ければ俺がとろろになるところだった。」

## A, S 8. ヴイヴィオ可愛いよヴィヴィオ

今日はいつもより30分も遅い出勤となった。いつも通りの朝食に二人の準備、そこに手間がかかったとは思えない。やはり朝食前のあの騒動が原因だと考えられる。

「だけど嬉しかったなあ。二人が俺の横に座って朝食を食べてくれたのは」

いつもは横にヴィヴィオとガーくんがいるだけだもんなあ。けど、今日はなのはの寝ぼけ(?)のおかげで二人に抱きつかれるし、二人が横で朝食を食べてくれるしともう死んでも構わないような内容を朝から送っている。ほうほう……ようやく二人も俺の魅力に気づいたというわけか。

「いや、ほんと照れるなあ! どうしよつかなあー、きつと夜にワイシャツ一枚で俺の部屋に来たりして!」

どうしよっ!?! そしたらどうしよっかなっ! どうしたほうがいいと思う!?! 俺もこのまま結婚ルートに――

ピンポン

『は〜い!』

「結婚かあ……」

今朝のフェイトの言葉が脳裏から離れない。リピートしてる、目を閉じれば伊達メガネのフェイトが俺に向かって、頭をとんとん軽く叩いている。あれ? これ昨日の記憶じゃね? どんだけポンコツなんだ俺の脳みそ。

『あつ! リンディメツシユにももこさんだあ! おはようございませ〜!』

『オイツス!』

「いやでもなあ……結婚資金とか用意してないし……。その前に職がないんですけど」

資金溜めようがないしなあ……。

『あら、ちゃんと挨拶できてヴィヴィオちゃんは偉いわねえ。いいこいいこ。俊ちゃくん、なのはから電話もらってお手伝いきたわ



よー」

「なのはの場合、エースオブエースでトップアイドル、というか宗教のトップ。局としても絶対に手放さないだろうし、世間的になのフェイで完結してるんだよなあ。仮に了承を得ても、それからが問題で――」

『ヴィヴィオちゃんはいつも可愛いわねー。あ、こらバカアヒル止めなさいっ！ つけまつげがっ！つけまつげが落ちるじゃないっ！? お邪魔するわよー。駄犬ー、クロノがいつもお世話になってるからって、子ども達用にジュースの箱を託かってきたわよー』

「フェイトの場合、エリート美人執務官としてなのは同様にトップアイドル、というか宗教のトップ。なのフェイで完結しており、なにより問題なのが――あのリンデイさんが絶対に首を縦に振らないことだ。やはり調教して従順な俺のペットにしない限り――」

「誰が誰をペットにするですって……?」

「……へ?」

リビングでお絵かきしているヴィヴィオとガーくんを除いて、この場にいるのは俺だけのはずなのに後ろから怒気を含ませた声が聞こえてきた。それもかなり聞き慣れた、ゆうに3桁は怒らせたことのある俺が断言するんだ間違いない。

「――っ!? その声は熟女リンデイだなっ!」

「なに年上で世話までしてあげた人にタメ口聞してるのよ」

振り向いた瞬間天井を見ていた。何を言ってるかサツパリわからないだろう? 俺は理解したくない。

どすんと音をたてて尻から床に不時着した俺は、目の前にいる人物を見て思わず逃げ出す。

「あら俊ちゃん? ママを目の前にして逃げ出しちゃうの?」

モ・モモコの一言で俺はその場に凍りついた。流石は地球を滅ぼすためにやってきたお方だ。一言発しただけが俺の中枢神経を乗っ取ったか……っ!?

「だめよ。ほら、ママに会ったらまず抱きつくのが高町家の掟よ」  
ちやつかりヴィヴィオを抱っこした桃子さんが片手で俺を迎える

体制をとる。 いやいやいや、流石に抱きつきませんよ。 なのはみたいに女の子同士じゃないんだし。 それにヴィヴィオだつて見てるし、リンデイさんだつて頭にガーくん乗つけたままだけどこつちを凝視してるし。

「ははっ、何を言ってるんですか。 それはなのはが帰ってきたとき用に取ってあげてください——」

「はい、っ—かま—えた」

言い終わる前に優しい香りと温もりに包まれた。 息が出来ないほど強く抱きしめているわけでもないのに、何故かその場所から離れたくないと思ってしまう。 ……なんかいいなあ、こういうの。

「最近、メールの頻度も減ってるわよー?」

「うっ……ごめんなさい」

「電話もちゃんとするよ」

「はい」

「それと……俊ちゃんは嫌がるかもしれないけど、桃子ママはなのとは同じくらいあなたをこうやって抱きしめたいのよ? ちゃんと覚えておくこと」

「……うん」

「はい、よろしい。 あら、リンデイさんどうしたんですか? なんか羨ましそうな顔してますけど」

「へっ!? い、いや何言ってるんですか桃子さん! ベつにこんな駄犬相手にそんな表情しませんよ!? ただ……あの子達に勝ち目があるかと思ひまして……(とくになのはちゃんなんて厳しい戦いになりそうね……)」

リンデイさんの言葉に桃子さんはふふふと優しい笑みを浮かべるだけであつた。 いったいどういう意味なんだ?

為すがままにされる俺、まあもうしばらくはこのままでもいいかなと考えたが同じく桃子さんに抱っこされていたヴィヴィオがこちらに飛び移ってきたので強制的に離れることとなった。 抱きしめられたままの体制でヴィヴィオを支えるのも困難だしな。 しつかり自分の足で支えないと。

ヴィヴィオを抱っこし、頭を撫でる。あ、ガーくんダメだぞ。リンディさんのアホ毛をくちばしで噛んでると北京ダックにされるぞ。

口では言わなかったがガーくんは察したのか飽きたのか、リンディさんのアホ毛をペツと吐き捨ててこっちに飛んできた。

「あーこらこら。肩に乗れ肩に。飛んでまでこっちに来るなよなー、ちゃんとガーくんも抱っこするから」

……あれ？ 飛んできた……………？

「そういえば俊ちゃん。今日はとろろ大会するんですって？」

「え？ あ、ええその予定です。ちゃんととろろ用に自然薯も用意しましたしすり鉢でスリスリしてます」

「懐かしいわねーとろろ。私も若い頃はとろろを沢山作ったわ」

「へー、桃子さんもとろろ好きだったんですか？」

「そうねえ……………やっぱり若かったし、好きだったわ。だからこそそのなのはよ？」

「え？ なのはってとろろ好きだったんですか？ 気づかなかつたなあ……………」

「やっぱり19歳の女の子ですもの！ ただあの子の場合、俊ちゃんのとろろだけで幸せになれると思うわ！ だって私も今も昔も士郎さんのとろろだけなもの！」

「士郎さんもとろろ作るのうまいんですね。マズったな、昨日の夜にでもコツを教えてもらえばよかったかも。でも、それにしても嬉しいです。なのはが俺が作ったとろろだけで幸せになってくれるなんて……………っ！」

「そうよ！ 俊ちゃんのとろろがなのはには必要なの！ 精一杯頑張るのよ！」

「はい！ 俺一生懸命頑張ります！」

「……………あのー、そろそろ突っ込み入れたほうがいいのかしら？」

突っ込みみたいだなんて流石リンディさん。むんむんむらむらの性欲の権化だな。それに引き替え桃子さんはやっぱり大人の女性って感じだな。どっちも大好きだし尊敬できるお方なんだけど

な。

「……まああの駄犬があんな感じならフェイトとの仲も心配なさそうですね。もし報告しなきゃならないようなことを仕出かしたら容赦なく——すけど」

何故だろう、リンディさんの後ろに一瞬修羅が見えた。そしてな  
んで桃子さんはあらあらうふふなんですか。

いやーいいね、こういうの。こうして美熟女二人といい感じにお話しながら娘を抱っこする。ヴィヴィオおねむモードに入ったけど。ごめんなーつまらなかつたかな？

「あー、ヴィヴィオがそろそろ寝そうなんでとろろ作り再開しまし  
うか」

俺の言葉に二人は頷き、それぞれのエプロンを身に着ける。

「あれ？ リンディさん意外と似合いますねエプロン姿」

「当たり前でしょ。素材が最高にいいんだから」

「これまた否定できない返答ですね」

あの……桃子さん？ わかってますから、わかってますからエプロン姿で俺の背中に指を這わすのは止めてくださいっ!?

「も、桃子さんも凄く似合っていて……とつても綺麗ですよ」

「うふふありがと」

……うん、お互いの母親とのスキンシップも完璧だ。いい関係を

築いてるぞ上矢俊。

「はあ……それにしてもなんでこんな腐れかけたゴマ団子みたいな男のことをフェイトが気に入ってるのかいまだに理解できないわ」

……いい関係を築いてるのか？ 上矢俊？

ま、まあリンディさんはあの極上なツンデレが売りなんだからあれ  
でいいんだ。本当は俺とドロリツチなことをしたいって欲求で  
いっぱいなんだろうし。

きゅつと服の裾を掴まんでいるヴィヴィオを起こさないように  
そっとソファーに寝かしてから、俺もこの二人のスリスリ大会にエン  
トリーしよう。

「(起こさないように……起こさないように……)」

細心の注意と最大限の集中力でヴィヴィオを体をソファアに預ける。そこをガーくんが無音でバスタオルをヴィヴィオに掛けた。ガーくんはそのままヴィヴィオを胸辺りでそつと足を折る。最初は気づかなかったけど、ガーくんのこの状態って警戒態勢なんだよな。少しでも不穏な気配を発しようものならガーくんはいつでも飛びかかってくる。……うわ、いま自分がザクロになるところを想像してしまった。嫌な気分になったわ。

気を取り直してキッチンに行き、スリスリに参加することにした。大人三人でも余裕があるこの広いキッチンが俺は大好きです。

なのはとフェイトに駄々をこねた甲斐があった。えつと……リンデイさんと桃子さんは楽しく会話しているし、間に割って入るのは失礼だよな。桃子さんの隣に行こう。

「へー……、あんたはそつちに行くのね」

「……………」無言で移動

「あら俊ちゃん、記憶に刷り込んでおいた躰を忘れてしまったのかしら？」

「…………つ!? ……つ！」震えながら移動

桃子さんの隣にいけばリンデイさんが、リンデイさんの隣にいけば桃子さんが……。

大の大人が二人して青年を苛めるなんて……つ！

そう考えた矢先、リンデイさんが呆れた口調で言ってきた。

「ほら真ん中きなきいってことよ。とろろ作りなんて3分で退屈になつちやうんだから、私達を楽しませなさいよ。料理や掃除や洗濯の相談でもいいし、ヴィヴィオちゃんの子育てのことだっていいわよ。ここにはちゃんと立派に娘と息子を育てた親が二人もいるんだから」

とろろを擦る動作を止めることなくリンデイさんはそう言った。

「母親の前でくらい強がらなくてもいいのよ」

「そうよ俊ちゃん。なのはも自分の教え子のことでも悩みっぱなしでメールや電話がしょつちゆうくるのよ。いまだって教え子にちよつと強く言い過ぎたかもしれない、とか、何か隠し事してる

みたいだけどうやったら力になれる、って相談されてる最中よ」「フェイトもそれは言ってたわね」

たしかにフェイトはなのはの力になるって約束してた。偉いなあ二人とも。真っ先に親を頼ったのか。本当に偉いなあ……。

頼る……ねえ。ヴィヴィオを預けるかどうかで前にもそんなことを言われたな。俺ってこれでも色んな人に頼ってるのに。なのはに頼ってるし、フェイトにだって頼ってる。はやてはもちろん、ロヴィータちゃんにシグシグミシル、シヤマル先生にザツファイ。それにおっさんにユーノやクロノにも頼ってる。勿論、お二人にだって頼ってる自覚はあるよ。やっぱおっさんはいらぬや。そうだ、俺ってかなり頼ってるよな。

「何言ってるんですかりンデイさん。俺はかなり頼ってますよ」  
スパーンっ！

「あらこの自然薯いい音を奏でるわね」

「いたいっ!? 自然薯のビンタいたいっ!」

俺の反応をガン無視で二打目を放とうとするリンデイさんに俺は両手を上げて降参の意を示した。

「わかりました、わかりましたよ。どうせスカさんとカリムさんになのはとフェイト辺りには話さなきゃならないことだったし。えーと、夏休み前になのはとフェイトにプレゼントを渡そうとはやてに頼んで聖王教会ってところでバイトをしてたんですよ、ほんのちよつとだけ」

「あああれね。フェイトがデレデレの顔で自慢してきたから覚えてるわ。私に喧嘩売ってるわけ?」  
「うんうん、俊ちゃんとっても頑張ったみたいね。偉いわよ」  
「どうもどうも。それで……元々聖王教会でプレゼント代を全部た

めれるようにあちら側と相談していたんですが、ちよつとトラブルが起きましてそのことが原因で俺は聖王教会でのバイトを辞めたんです」

スリスリと三人とも手は休まない。それでいて、俺だけが一人で喋り二人は黙って聞いてくれていた。

「その時はガーくんもいなかったし、誰かに家でヴィヴィオと留守番をさせるのもヴィヴィオのためにならないっていうか……ヴィヴィオを残してまでバイトに行くのは間違ってると思います無理を承知でヴィヴィオを同行させながらバイトをしてたんです。聖王教会側はそれを快く快諾してくれて……それでいてバイト中は斡旋してくれたはやてが様子を見に来たりして……物凄く順調でした」

いまでも覚えている。はやてが隣で一緒に仕事をしてくれて、シヤマル先生がヴィヴィオの相手をしてくれて。とつても幸せで充実した時間だった。

「でも……それもあつという間に終わりを告げました。なんというか、聖王教会も一枚岩ではなかったというわけですよ。カリムさんとは違う一派がいたんでしょねえ、そいつらカリムさんにヴィヴィオを聖王教会で預かるよう俺を説得しろと抜かしてたんですよ。勿論、カリムさんはそれを頑なに拒否してくれました。そのことが嬉しかったと同時に、ヴィヴィオの安全面での問題とカリムさんのトップとしての立場も危なくなると思ひ、近くにあつた花瓶を床に叩きつけてクビという形で辞めました」

いまでも覚えている。カリムさんの申し訳なさそうなあの顔が。「カリムさんとはいまだって親交もあるし喧嘩なんてしてませんが、気になってるんですよね。ヴィヴィオのこと」

ちらりと寝ているヴィヴィオのほうを見る。一定のリズムで呼吸をするその様はとても可愛らしく、みていて心が洗われる。

「聖王教会の事件が怖くてパパとしての自信がなくなった？ それともヴィヴィオちゃんのことを怖くなったの？」

桃子さんが顔を覗き込みながら聞いてくる。

「自信がなくなつたっていうか……ちゃんとヴィヴィオを守ってあげられるかなあ、なんて思ったり。それにヴィヴィオのことを怖いなんて思ったことはありません。いつだって可愛いという感想しか出てきませんでした。けどたまに思うんです。ヴィヴィオは何か大きな問題を抱えているんじゃないかって」

ふむふむ、そう声に出しながら桃子さんは頷いた。

なるほどなるほど、そう声に出しながらリンディさんも頷いた。

「ヴィヴィオちゃんはあなた達の日常に劇的な変化をもたらしたわよね。なのはもヴィヴィオちゃんと生活してからちよつとだけ、ほんのちよつとだけだからけなくなつたし、ヴィヴィオちゃんと過ごすためにお休みもずつと多くなつたわ。それに生活習慣もヴィヴィオちゃんを中心にまわしてる。フェイトちゃんだつてそうよね。」

フェイトちゃんの場合はもつとしつかりしようと頑張つて、それでいて時間を出来る限り作るようにしている。それはあなたにしてもそうよね、俊ちゃん。あなただつてほとんどヴィヴィオちゃんと一緒にいるでしょ?」

「そりやまあ俺はヴィヴィオのパパですし、ヴィヴィオと一緒にいるのは楽しいし、大好きだからであつて——」

「そうよね、ヴィヴィオちゃんといふのは楽しいし、ヴィヴィオちゃんことは大好きなんだよね。うくん……じゃあそれで問題ないんじゃないかしら」

「……え?」

思わず手が止まる。リンディさんから叩かれる。なんて理不尽なんだこの人。

「きつとね、いま俊ちゃんが抱えていることは時間が経てばあつちから顔を出す問題よ。いまの話を聞く限りだと個人間で解決する問題でもないだろうし。確かにあなた達がヴィヴィオちゃんと暮らし始めたとき、私たちも同じことを思つたわ。ヴィヴィオちゃんは大きな問題を抱えていて、だけどそれはヴィヴィオちゃん自身では解決できない、もしかしたらヴィヴィオちゃんすら知らない問題なのかしれない、そう話し合いをしていたわ。もしそうなら大人の私達が引き取つたほうがいいと考えあふとき俊ちゃんを呼び出したの」

でもね、そういうながら桃子さんは一人喋る。

「子を持った親は子ども笑顔で理解できるのよ、その子が本当に必要としているのは誰なのかつていうのわね。その笑顔の先にはいつもなのはとフェイトちゃんとあなたがいるの。どんな時でも抱きしめてくれる優しいママとパパがいるの。子育てに必要なもの



は使命感と愛情の二つだけよ。　あなたはそれを持つてるでしょ？  
だから大丈夫」

そういつて笑顔を向けてくれる桃子さん。

「これから先、あんたとなのはちやんとフェイトには困難な問題が立ちふさがるでしょうね。　あの聖王教会側が欲しいと願ったということはそれほど事が大きいということ」

「だけどもあ……、そう小さく眩きリンディさんは横から俺を抱きしめてくれた。」

「その時がきたらあなた達はいつも通りにヴィヴィオちゃんを抱きしめてあげればいいのよ。　こんな風にね」

俺の頭を撫でながらもリンディさんのとろろ作りは止まらない。

そんなちよつとぶつきら棒で、それでいて誰よりも当たり前のように俺に力を貸してくれるこの人が俺は10年前から好きなんだよな。

「ありがとうございます。　でもリンディさん、わざわざとろろを手に入染ませてから頭を撫でなくていいんじゃないですか？　あつちよつ!?　耳の穴にとろろ流し込むの止めてくださいってばっ!?　なんか鼓膜に張り付いたっ!?　なんか鼓膜に張り付いたっ!?」

10年前から嫌がらせもされているわけなんだが。

ジャンプしとろろを耳の穴から出そうと頑張っていると、リンディさんが面倒そうに話し始めた。

「こんなときに一君が居てくれたらあなたの問題事をぱつと解決できるのにねー、そのヴィヴィオちゃんを欲しがった一派を消してくれるでしょうし」

「え？　父さんがですかっ!?」

「そりやそうよ。　あなたの頼みならね、あの人あなたのことが大好きだもの。　あなたが産まれたときはしやぎようなんて凄かったわよ。　後あの人だけね、ラルゴ提督をハゲ呼びしてたのって」

「父さん……」

俺も今後ハゲ呼びしてみよつと。

「行方不明扱いされてるけど、いまあなたのこと監視してるんじゃないかしらっ。」

きよろきよろと辺りを見回すリンディさん。この人本気で疑ってるみたいだけど

「あのーリンディさん？ 父さんも母さん——」

「あの二人が死ぬわけないでしょー。私達の世代はあの二人の強さを痛いほど味わってきたのよ。断言する、死んでも復活するわよあの二人」

力強く、これまでにないほど力強くそう語ってくれるリンディさんになんだか少しだけ胸のもやが取れた気がした。

「まあエンターテイナーだからきつとタイミングでも見計らってるんでしようね。それか、タイミング逃したか」

そう言って、またとろろ作りを真剣にやり始めたリンディさん。

ふと横を見ると桃子さんは笑顔でこちらのほうを見ていた。

この人なりの励まし方……なのかな？

なんかからかおうとも思ったが、なんとなくいまの雰囲気を大事にしたくてこれ以上何も言わずに俺も作業に取り掛かる。そうだよなあ、俺だけで悩んでもしようがないし頼りになる大人はすぐ近くにいるんだ。なのはとフェイトが落ち着いたらちよつと話し合ってみよう。大事な大事な娘のことなんだから。

『あふ……あ、ガーくんだ。おはよー……』

『オハヨウヴィヴィオ、ヨクネムレタ？』

『うん！ なんかねー、おねえさんにだっこされてぽかぽかだった！』  
『ソツカー』

どうやらヴィヴィオがお目覚めのようだ。一気にこの場がやかましくなるな。

『あ、パパだ！ パパー！』

ほーらヴィヴィオが勢いよく近づいてきたぞ。さて振り向いて抱きしめて——

くるっ（振り向くひよつとこ）

ゴツ（ヴィヴィオの頭突きで股間が粉碎）

「おうっ……！ おうっ……！」

「パパっ!? パパどうしたのっ!?!」

いきなり崩れ落ちた俺を心配してかヴィヴィオは必死になって揺さぶり名前を呼んでくれる。　　なんとかそれに応えようと手を上げるが、激痛によりすぐに金の玉を元の位置に戻す作業に移行する。

「俊ちゃんのところろ生産工場が……」

「あなたって負傷するたびに一番そこにダメージ食らってるわよね。なにプレイなの？」

二人の声もうまく耳に入らない。――が、目の前にいるヴィヴィオがいまにも泣きそうな顔をしているので必死に堪え、最大限の笑顔を向ける。

「だ、大丈夫だよヴィヴィオ……。　　パパの股間は着脱式だから一晩抱いて寝れば元通りだよ」

「お〜！　よくわかんないけどパパすごい！」

ぱちぱちと小さな手で精一杯の拍手を送ってくれるヴィヴィオ。そのヴィヴィオの頭を撫でながら立ち上がり、先程までスリスリしていたところろに少量のダシをかけ、小皿に取り分けヴィヴィオに手渡す。受け取ったヴィヴィオは小皿と俺を交互に見ながら、

「これがととろ？」

小首を傾げながら聞いてきた。

「ととろろな。　　今日はこれをあつあつのご飯にかけて食べるんだぞー」

「……」

あれ？　　なんかヴィヴィオの反応が微妙だな。　　いつもなら喜ぶのに。

「ま、まあまあちよつと食べてみたらヴィヴィオちゃん。　　きつとおいしいわよ、私も一緒にスリスリしたのよー」

見かねたリンデイさんがヴィヴィオの目線まで膝を曲げて援護してくれた。　　桃子さんも両拳を握りこんで『がんばって！』そう鼓舞してくれる。

ヴィヴィオはそんな二人の声援もあつてか、小さな口で少量だけととろろをばくついた。

「」（ドキドキ……）」

「……………」

ヴィヴィオの無反応に三人揃って生唾を呑み込む。　ヴィヴィオはゆっくりと顔を上げ

「……きょうはこれだけなの？」

そう寂しそうに聞いてきた。　うんと首を縦に振った俺にヴィヴィオは落胆したかのようにガーくんを抱き上げてソファアに帰っていった。

先程と同じような恰好で寝始める。

その光景を三人で眺め、

「5歳児には厳しかったですかね……」

「ちよつと失敗だったみたいね……」

リンデイさんと二人、顔を正面に固定したまま話す。

いち早く立ち直ったのが桃子さんだ。　桃子さんは冷蔵庫を物色したのち、あるものを発見して戻ってきた。

「俊ちゃんマグロといくらはちゃんと用意してたのね。　それにそこに生わさびもあつたわよ」

「まあ一応こんなこともあろうかと今朝準備はしてたんですけど……」

「じゃあこれを使いましょうか。　子ども組にとろろオンリーは酷かもしれないし」

「……うくん」

「それにヴィヴィオちゃんに泣かれても困るでしょ？　大丈夫、もう少し大きくなったらとろろオンリーでも食べれるようになるわよ」

「……そうですね。　確かにいま考えると子ども組にはとろろオンリーはきつかったかもしれないです」

「そもそもなんであなたはとろろオンリーにしようなんて思ったのよ」

「女の子がとろろを嬉しそうに食べるとか……いいじゃないっすかあ」

顔をすり鉢でごりごりされかけた。

なんて怖い人なんだこの人。

リンデイさんの魔の手から逃れた俺は、さっそくヴィヴィオを起こしにいくことに。

その間桃子さんはマグロを切り身にしてとろろの上に乗せ醤油を垂らしきぎみのりをまぶす。即興でこれだけのものが出来ればヴィヴィオも満足するよな。

ソファアで寝ているヴィヴィオと俺の気配に気が付き顔を上げるガーくん。ガーくんの頭を撫でた後、ヴィヴィオを優しく起こす。

「ヴィヴィオー、もうおはようの時間だぞー」

「うふあ……おふう……」

抱きかかえるとヴィヴィオは言葉にならない声を発しながらもぞもぞと起き出した。

「おはようヴィヴィオ」

「おあよーパパ」

「とろろあるけど食べるか？」

「ととろろ!? うん! たべる!」

威勢のいい声と共にヴィヴィオはキッチンへと駆けだした。そこには桃子さんとリンデイさんがスタンバイしていてヴィヴィオに小皿を渡していた。

「おおー! これがととろ……」

「違うわよーヴィヴィオちゃん。これはねー、とろろ」

「とーろーろ?」

「そう。よくできましたねー、いいこいいこ」

「えへへ、とろろかあ。ヴィヴィオちゃんとおぼえた!」

桃子さんの後に復唱するヴィヴィオの可愛さはスターライトブレイカー級だった。なにこの天使。

それにしても先程までとは打って変わった反応を見せるなヴィヴィオ。

桃子さんからスプーンを受け取り、まぐろの切り身と一緒にとろろを食べるヴィヴィオ。もぐもぐと大きく口を動かし、ごくんと食道を通して胃に収めた瞬間

「おいしいっ! ガーくんこれおいしいよー!」

「ガークンモホシイ！ ガークンモホシイ！」

笑顔満開でおいしいと連呼するヴィヴィオとリンデイさんに往復ビンタを浴びせながらねだるガーくん。 ああ……やめるんだガーくん……！ リンデイさんの髪がとんでもないことになっていく……!?

切れそうになるリンデイさんをなだめる桃子さん。

「そうよね、所詮はアヒル。 争いは同じ土俵でしか起こらないのよ。 私はアヒルになんかにならないわよ」

「ハヤクシテヨ、トシマ」(ゲシつと脛を蹴るガーくん

「上等じゃないのツ！ あなたツ！ 今日のレパートリーに北京ダック追加よツ！」

リンデイさんがアヒルになった。

エプロンを脱ぎ捨てガーくんを捕まえようとするリンデイさん。それから華麗に逃げながらも煽ることを忘れないガーくん。

一人と一匹のいつもの光景を見ながら、ヴィヴィオは桃子さんに抱っこされて甘えているのであった。

そんな二つの光景を見ながら俺も気合を入れ直す。

よし、皆がくるまで頑張るぞ。

A, s 9. ヴィヴィオの小学校はどこ？

『えー戦闘で一番大事なものはなんですか？ はいティア』

『戦闘の長期化に備えてなのはさんのポストカードと抱き枕』

『外周』

『あ、ティア。 講義の休憩時間にこっちにきてね。 やり直すと苦手な問題集中して解くからね』

ヴィータは一人緑茶をすする。 その隣では八神はやてが思案顔で書類を読みながらサインをしていく姿があった。 はやての周りには膨大な膨大な書類が山となって築かれている。 それをさばきながらはやてはぽつりと呟いた。

「ヴィータ……飽きたんやけど……」

「……」

「なんで部隊長なんてやってるんやろ……。 もう勧誘とかラブレターとか調教願いとかばっかなんやけど。 あとたまにわたし宛ての仕事」

「……管理局は平和だなあ」

自分の仕事を午前中で終えたヴィータはどこか気晴らしに外に出かけようと思った矢先にはやてに捕まった。 はやて曰く『一人で書類整理とかつまらへん。 せめてロリ成分がほしいねん』とのことであった。 ヴィータ自身、大好きなはやてにそう言われるのはやぶかさではない……というよりちよつと嬉しかったので、自分のお茶とお菓菓子を持つてくるとはやての隣にちよこんと座り現在まで至った。 その間ずつとはやては独り言をつぶやきっぱなしである。

「なあ〜ヴィータ〜。 お膝に移動してくれへん？」

「あ？ なんで？」

「ロリ成分がないとしんでまう」

「……まあ死なれても困るしなあ」

しようがねえなと呟きながらヴィータははやての膝に座る。

ヴィータの頭を撫でながらはやてはヴィータにしか聞こえない声量が呟いた。

「ヴィータに変身魔法かけて子どもが出来たってことを口実に籍を入れるって作戦ええかもしれないなあ……。最悪ベッドまで行けばこっちが主導権握ればええんやし、じっくりと一晚……。いや三日三晩くらいわたしの声しか聞こえない部屋で耳元で愛を囁けば、なのはちゃんやフェイトちゃんと談笑してる最中でもきつとわたしの姿が脳裏浮かんできて——」

「うわあああああアツ!?!」

「あうっ!?!」

叫び声とともにはやての膝から転げ落ちるように逃げ出すヴィータ、そこに丁度資料を持って通りかかったフェイトと激突した。9歳から身体的に大きく成長しスタイル抜群のフェイトと9歳から何も変わらないヴィータの身長差のせいで、フェイトはヴィータの頭が腰に当たり大きく尻もちをつく形となった。

フェイトの声と空に舞うフェイトの資料、そして一連の連鎖を起こした本人であるヴィータがフェイトのスカートを握りしめながら震えている姿をみて室内で講義を行っていたのは他新人達と、シグナムとシヤマルが手を止める。ザフィーラは犬の姿で散歩中である。

「いたた……。ちよつとヴィータ——ってどうしたの？ 震えてるけど……」

「はやてが……。はやてが……。!」

「ん？ はやてがどうかしたの？」

はやてのほうを指さすヴィータ、それに釣られる形でフェイトもはやてのほうを見るが、

「ん……。どうやってこのラブレター返信したものか……。他に男がいるって書くと後がめんどうそうやし——ってみんなどうしたん？」

はやては一枚のラブレターを睨みつけながらうんうんと唸っている最中であつた。

「あ、あれ？ だつてさつき身の毛がよだつようなことを言つてて」

「何言つてるのヴィータ。そんなのいつものことだよ」

「ちよつとまつんやフェイトちゃん」



それってどういうことなん？ あ、あはは……えーつと、えーつと……

そんな声をBGMにヴィータは一人、目をぱちくりさせていた。「休暇もらって夜天の書に引きこもろうかな……」

沈んだ調子のヴィータを、優しく後ろから抱きしめる温かい手。

「きつと業務が忙しすぎて変な幻覚でも見たのよ。ほら、今日はひよつとこくんが料理作ってくれる日だからそれまで休憩しておいたらどう？ 後のことは私がやっておくからヴィータだけ先に行く？」

「あー……そうしようかな。うん、確かに最近仕事忙しかったもんな、あんな幻覚みてもしょうがない、しょうがない」

よし、そうとしたら帰宅の準備を進めよう。

帰宅の準備を進めるヴィータ。そんなヴィータをなのはは一人じつとみていた。

「あたたた……ねえシャマル、ちよつと腰どうにかなってないか見てくれない？ って、どうしたのなの？」

「いや……ヴィータちゃん俊くんの部屋のベッドで枕を抱いてくんかくんかしないかと心配になって——」

「ごめんシャマル、先になのはの頭の診断お願い」

「ちよつ!? わたしは極めて正常だよ！ 乙女だよつ!?」

「はいはい乙女乙女。ほら、講義はわたしが受け持つから」

「だ、大丈夫ですかなのはさんっ!? さっきの発言はちよつと心配になつてきますー!」

「ティアに心配されたっ!? もう生きていけない!」

「はーいなのはちゃん、検査していきますねー。ストレスは感じますか?」

「ティアとかですかね」

「あれっ!? なんか段階が一足飛びになつてるんですけどっ!?」

『なんなんですかっ! 私の何がストレスなんですか乳首すつてくださー!』

『助けてっ!? 誰か助けてっ!? この子の将来が不安になってきたんだけど!』

嬉しそうな表情で抱きつくティアと怖がりシャルマルに助けを求めるのは。 それらを横目にヴィータはひよつとこがとろろ作りに動しんでいるであろう家に足を進めようとする。 が、それをなのがひしつと抱きつく形で止める。

「大丈夫ー? わたしとフェイトちゃんの部屋に安眠用のお香があるからそれ使ってゆつくり休んでね?」

「あー、まあちよつとだけ疲れてるだけだろうし大丈夫だよ。 まああいつの部屋よりなのはとフェイトの部屋のほうが嬉しいからありがたく使わせてもらおうよ。 うーん……やっぱ少し仕事量減らすかなー」

後ろ手を振って六課を後にするヴィータに、皆も手を振って送り出す。

ヴィータを見送った後、シャルマルは心配そうにつぶやく。

「過労で倒れないならいいけど……」

「確かに心配だよ。 ヴィータちゃん、わたしと同じくらいハードな仕事量だもんね」

「(ハード?)」

「(え? なのはちゃんの仕事ってハードでしたっけ?)」

「(なのはちゃんが壊した訓練所の修繕費どないしよ……)」

「(ハードなプレイかあ……)」

「あ、あれ……? なんでみんなこっち見ないの? なんで目を逸らすの!? わたしだって忙しいもん! 皆が楽しめてなおかつ無駄のない練習考えたり、ティアとスバルから逃げたり迎撃したり、あとあと! ……デスクワークしたり! えつとえつと、それとねそれとね? ……」

とくになかったのか、なのははちよつと泣き目になってフェイトに抱きついた。 なのはを優しく抱きしめたフェイトは頭を撫でながらヴィヴィオと同じようにあやす。

二人の周囲に広がるちよつと桃色な雰囲気を感じながらはやては

シヤマルとシグナムと相談しながら考える。

「視察のときもパーティーのときも、通常業務だつてヴィータにはちよつと頼つてたし、ここらで一週間くらいヴィータには休んでもらおうと思うねんけど。いまパツと休暇を出すと、本人の心理的にマインスな方面が出てくると思うから少し経過して後がやっぱベストやと思うんやけど」

「そのほうがいいですね。有給休暇も溜まっていますし」

「いや、今回の休暇はわたしのほうから引いてもらうよう掛け合うで」「はやてちゃん有給残ってましたっけ?」

「わたしからのお願ひなら喜んで聞いてくれる人達が何人もいるからそこらへんは大丈夫やろ」

「前回の出来事で一番得をしたのつてはやてちゃんですよね。」

ひよつとこ君は結局推薦を全部蹴ってるわけですし」

「いやーかわいいって罪やわー」

困り顔のシヤマルに嬉しそうなはやて。

「あ、そういえばフェイトちゃん。皆に今日はとろろしかないって言ったっけ?」

フェイトの胸の中に顔を埋めていたなのはがふと顔を上げて聞いてくる。フェイトは一瞬だけ思考し、

「いや……そういえば言っていないかも」

「え? 今日なのはさんのとろろオンリーなんですか?」

「ティアちよつと黙つてて」

「え? それほんまなん? とろろオンリーつて意外と飽きるの早いと思うんやけど……。わたし達はそれでもええけど、子ども組、とくにヴィヴィオちゃんはどうするんやろ?」

「うくん……きつと俊くんがなんとかしてくれるよ。ヴィヴィオが絡むと嫉妬するくらい一生懸命になるし」

なのはの言葉に一同頷く。ヴィヴィオ相手には人が変わったように献身的になる姿を全員が目撃しているからだろう。

そのことを面白くないと思っっている人物もこの場には数人いるの

だが……全員ともそれは口に出さない。なんせ相手は5歳児なのだから。それにヴィヴィオには全員

とも幸せになってほしいと願っているのだから。

「よっしやー！ なら早いところ仕事終わらせて高町ハラオウン家に突撃やー！」

『おぉー!!』

はやての言葉とともに全員が拳を突き上げる。それを眺めながらなのは嬉しそうに微笑んだ。自分に抱きついてこなかった教え子を心配しながら。

☆

ヴィータが高町ハラオウン家に向かっている頃、台所ではヴィヴィオが桃子と一緒にとろろ作りにトライしていた。

ウサギが餅つきをしている柄が描かれた白を基調としたエプロンを身に着けたヴィヴィオは、自然薯片手に一生懸命桃子の言葉に頷いていた。

「ゆ〜つくりでいいのよヴィヴィオちゃん。おててを怪我しないように、ゆ〜つくり回してみて」

「ううう。」

両手で自然薯を持ったヴィヴィオは、体全体を動かしながら自然薯をゆ〜つくり回していく。勿論、すり鉢は桃子がしっかりと押さええている状態なので安心である。

「上手よ〜ヴィヴィオちゃんっ！ えらいえらい！」

「えへへ〜。 パパー！ ヴィヴィオほめられたー！」

桃子に頭を撫でられ嬉しそうに報告するヴィヴィオ。顔を後ろに向けてリビングにいるパパへと視線を移すと――

『あなたね、アヒル一匹面倒もみきれないの？ それとも人のつけまつ毛で遊ぶように教育してるのかしら？』

『いや、えっと、ガークンも悪気があったわけではなくてですわ……』

『あら、いま現在も私の頭の上に陣取っているこのバカアヒルのどこが悪気がないといえるのかしら？』

『いや、ですからえっと……そう！ リンデイさんは綺麗なんだから

飾らなくてもいいというガーくんからのメッセージなんですよ！  
な?! ガーくん?!」

『ふくん……ならアヒルに直接聞いてみましょうか。 バカアヒル、私に対しての発言を許可するわよ』

『ワイー、カレイシユウ』

『リンデイさん落ち着いてっ?! 家具が壊れる家具が壊れるっ?!』

『ここまで腹が立ったのはあなたに』リンデイさんって頑張っつてパイパンにするけどすぐ生えちゃうタイプですよ』って言われて以来よっ!!』

『ガーくん助けてっ?! 俺が壊れる俺が壊れるっ?!』

『ヴィヴィオちゃん、パパはねーいまちよつとスプラッタなことになってるからちよつと待っててね〜?』

『はーい! ねえねえももこさん、ぱいぱんって——』

『それはなのはママに聞か、将来勉強するからそれまでとっておきましようね〜?』

『は〜い!』

元気よく手を上げるヴィヴィオ、その際とろろが桃子の顔に付着するが桃子は笑顔を絶やすことなく指ですくって舐めとる。

ふと、一心不乱にとろろ作りを再開するヴィヴィオの姿に、小さいときの自分の娘の姿が重なった。

自分と夫の間に生まれた初めての子。 自分の優しさと夫の強さを併せ持ったとても芯の強い女の子。 自慢の娘。

『ママ! なのはパパにクッキーつくる! じゃましちやめっ!』

『はいはい、わかりましたよー』

姉と一緒にパパのために一生懸命クッキーを作る後ろ姿を眺めたものだ。 兄はハラハラした様子でその様を眺めていて、夫は部屋中をうろうろしていた。 それでも娘はそんな周りには一瞥もせずにもくもくとクッキーを作っていた。

その後には士郎さんは救急搬送されることになったんだけど……、なのはあの時のこと覚えてないわよね。 考えてみれば一くんが必死の形相を浮かべていたのってあの時だけよね。

「ももこさん、ヴィヴィオつかれた〜……」

ぐいぐいと服を引っ張られる感触と、ヴィヴィオちゃんの疲れた声が現実には引き戻される。 すり鉢のほうを見ると、三口程度のとろろが作られていた。 それを

別皿に分けラップしておく。 これはパパとママ達にヴィヴィオちゃんからプレゼントしましょうね。 そういうと、ヴィヴィオちゃんは大きく頷いた。 それも極上の笑顔付きで。

『なのはねっ！ ママのためにいっっぱいがんばるっ！』  
「……なのは成分が足りないみたいね。 早いとこ帰ってこないかしら……」

「なのはママおそいねー？」

「ねー？」

二人口を揃えて首を傾げる。

するとそこに死にそうな声で俊ちゃんが復活してきた。

「ヴィヴィオ……パパにはヴィヴィオだけがすべてだよ……」  
あらあらリンディさんにこっぴどくやられたみたいね。

ヴィヴィオちゃんと離すまいと強く抱きしめる俊ちゃん。 ヴィヴィオちゃんは俊ちゃん頭の頭を撫で撫でして優しくする。 これじゃあどつちが子どもなのかわからないわねえ。

タタタタツとガーくんがヴィヴィオちゃんに駆け寄ってくる。

俊ちゃんはガーくんも一緒に強く抱きしめるけど……、あんまり長いこと自分の世界に入られるととろろが作れなくなるから困っちゃうわ。

「ほら、いつまでめそめそしてるのよ。 早く準備するわよ準備」

「うう……さつきまで俺のキャンタマ握ってた痴女の癖に……」

「あのまま潰してもよかったのよ？」

「ごめんなさい、もうパイパンウーマンなんて言って遊びません」

俊ちゃん、どうしてそんな子に育っちゃったのかしら。

☆

俺がリンディさんからすこすこされてからアニメが一本視聴終了する時間が過ぎた頃、唐突にリンディさんが喋り出した。

「そういえばあなた達はヴィヴィオちゃんの学校どこにするか決めたのかしら?」

「……………あ」

「そういえばまったく決めてなかった。なのはとフェイトとそんな話題一回も出した記憶がない。」

「……………いまから決めたほうがいいですよね」

「もう10月だし、決めておかないとねえ」

「……………ですよー」

どうしたものか、すっかり忘れていた。俺としたことがヴィヴィオはずつと成長しないでずつと俺をパパと呼んでくれる可愛い5歳児だと思ひ込んでいた。

「……………10年もしたらきつと俺のことなんかクズ呼ばわりして……………彼氏なんか出来ちゃって……………うわあああああああああああああああああああッ!!」

「落ち着いて俊ちゃんっ!? まだそうと決まったわけじゃないわっ!」

「桃子さんは俺のヴィヴィオに彼氏一つできないくらい魅力がないっというんですかっ!」

「落ち着きなさいよあなたっ!? ヴィヴィオちゃんは可愛いから大丈夫よっ!」

「うわあああああああああああっ!? もういやだ! そんな世界いらない!」

泣きながら崩れる俊に困った顔と呆れた顔をそれぞれ向ける保護者二人。そんな俊にヴィヴィオは近づき、いいこいいこと背中をぽんぽんと叩いた。

「ヴィヴィオ、パパのことずつとだいすきだよ! ヴィヴィオね、パパのおよめさんになるもんっ!」

ぐつと両手を握りこぶしにするヴィヴィオ。

『パパのおよめさんになるもんっ!』

その言葉が暗黒面に墮ちようとした俊の心を繋ぎとめた。

折れそうなくらいにヴィヴィオを抱く俊。 ヴィヴィオは困った

様子でパパと何度も呼ぶが、俊はそれを無視せずと抱き続けた。どれほどの時間が経ったのだろう、俊は抱いていた手を離すとゆつくりと立ち上がり桃子とリンディをまっすぐ見つめた。

『ひよつとこー邪魔するぞー』

「リンディさん、桃子さん、俺——ヴィヴィオと結婚しますッ！」

「お前頭大丈夫か？」

俊の後ろでヴィータが冷ややかな視線を浴びせていた。

☆

「俺としたことが冷静さを欠いてしまうとはな。それもロヴィータやヴィヴィオといったロリっ娘に見せてしまうとは恥ずかしい。

カツコイイ年上男性のイメージを崩してしまうところだったぜ」

「安心しろ、そもそもお前はカツコイイとは縁遠い男だからな」

「え？ ハンサム？」

「はいはいハンサムハンサム」

俺に会いたいから仕事を抜け出してきたというロヴィータ。

やっぱ俺って罪な男だな……。

「ひよつとこ服を脱ぐな、だらしない体見せるな」

「えっ!? 俺の体だらしないですかっ!? 最近走り込みしかしてないからマズいですかね!？」

「まあ細身ではあるけど、べつに問題ないと思うわよ。キモいから服を着なさい」

リンディさんからお墨付きをもらったので問題ない。きっとロヴィータのベッドのお誘いだっただと思う。幼女の恥じらいを見抜けないとは紳士失格だな。

「おい人間失格、なのはから何も聞いてないのか？ てつきり連絡してあるのかと思っただけど……」

「え？ あー、携帯充電してたから気づかなかったのかも。ちよいまっって確認するから」

部屋の隅に置いてある充電器に近づき携帯と充電器のイチヤイチャした雰囲気を取り離す。残念だったな充電器。お前は大気中の微生物でも孕ましておくんだな。



「あ、なのはから着信あったね。 15件ほど。 はやてからも同じくらいの数できてる」

迷った末にはやてに電話をかけることにした。 ロヴィータははやての家族、はやては親みたいなものだからな。 他の誰よりも心配してるだろうし。

プ——

『やっと電話つながったみたいやなあ俊』

「あー、ごめんよはやて。 ちよつと充電しててさ。 それで、ロヴィータのことだろ？ たったいま家に到着したよ」

『ほんま?! よかったあく無事にそっちに着いたんやな。 これで一安心や』

「うん、それでロヴィータはどうしたの？ 顔色もそこまで悪くないみたいだけどさ」

『んーそうなんやけどなあ……。 最近ちよつと仕事のしすぎやともうんよ。 それでさつきわたしの膝の上で寛いでいたかとおもたらいきなり騒ぎ出して……。 シャ

マルは過労でストレスもあるんやろっていつてたし……。

ヴィータは大切な家族やし、何かあってからじゃ遅いやろ？』

「なるほどねえ……。 確かにロヴィータ俺から見ても働きっぱなしだったもんなあ。 比較対象がアレだけど」

『うん。 なのはちゃんとフェイトちゃんが自分達の部屋を使っているって言うてくれたからそっちの部屋で休ませてあげて。 ええか？

なのはちゃんとフェイトちゃんの部屋やで？ 俊の部屋は絶対にあかんで？』

「お、おう……」

どんだけ信用されてないんだ俺。

携帯を閉じポケットに突っ込んだ後、ヴィヴィオ達がいるキッチンへと向かう。

「ロヴィータ、ママンから電話があったよ。 俺はなのは達の部屋少し片付けてくるから待つてね」

「あ、ひよつとこー！ いろいろそこまでしなくて。 あたしは本当に

なんともないからさ」

「まあまあ遠慮するなつて。あれだろ？俺の名前をつぶやきながら指でイジっちゃうんだろ？お豆ちゃんクリクリしちゃうんだろ？大丈夫、俺とお前の仲なんだからさ」

「お前と会話しているとゲロ吐きそうになるわ」

お下品な言葉づかいだこと。

それに……、ロヴィータはそう言つて気まずそうにそっぽを向いた。

「二人だとなんか面白くないし……」

……こういつた女の子の仕草に弱いんだよなあ。

桃子さんとリンデイさんに視線をやると二人とも、笑顔で快諾してくれた。

「んじゃ、ロヴィータには手伝ってもらいますか。よし、奴隷が一人増えたからラッキーだな！」

「らっきー！」

隣にいたヴィヴィオとハイタッチ。ヴィヴィオは分かっているだろうけど、可愛いから大丈夫。

ロヴィータの頭を撫でる俺だが、意外にもロヴィータは抵抗することなく為すがままにされていた。

こうしているとロヴィータは本当に人形みたいで可愛いなあ。食べちゃいたいくらいだ。

思考を読まれたのかロヴィータがいきなり振り向いてきた。ロリに似合わないような顔を浮かべながらこつちを睨みつけてくる。

「どうしたんだいダッチワイフ」

「触んなインキンタムシ」

撫でていた手を払いのけるロヴィータ。

……訂正しよう。

ロヴィータは喋っても可愛かった。

☆

さてさて、ロヴィータを戦力に加え準備を再開するが、いまの俺達の話はヴィヴィオの小学校一択となってしまうた。

「ヴィヴィオが魔法に少しでも興味あるならS t. ヒルデ魔法学院がいいと思うんだけど……本人まったく興味ないしなあ」

「あら、なのはやフェイトちゃんが魔導師なのにねえ」

「なのはママもフェイトママもおうちであそんでるときのほうがかわいい！ まほうはなんかいやー」

「ふむふむ。 ヴィヴィオちゃんの言うことはもつともね。 私もフェイトが危険な仕事に行くときははまだに不安があるのよねー。

魔導師は常に危険と隣り合わせ、そう考えると別段魔導師を凄いで見ようとは思わないし、逆にそんな姿が嫌になっちゃうこともあるわよね」

「ヒルデの制服ヴィヴィオに似合うと思うんだけどなー……」

「制服はお前が自作してヴィヴィオに着てもらえばいいだろ」

「……っ!? ロヴィータ貴様天才かつ!」

「まあな。 それよりヴィヴィオに希望はないのか?」

「きぼう? んーつとねえ……」

ロヴィータちゃんに尋ねられたヴィヴィオは、体をゆさゆさ揺らしながら考え込む。 といってもヴィヴィオは小学校なんか知らないから希望も何も出てこないだろう

なあ。 ヴィヴィオに難しく考える必要はないよって言うておくか。

「ヴィヴィオ——」

「ヴィヴィオねー、パパやなのはママやフェイトママのしようがっこうがいいなー。 ヴィヴィオはママたちやパパのところでおべんきょうして、ママたちとパパのこともーつとしりたい!」

「愛してる」

ひしつと抱きしめたヴィヴィオの体。 うぎゆつと可愛らしい声を出すヴィヴィオの隣でガーくんも『ガーくんモイツシヨニイクツ!』とジャンプしていた。 わかったわかった、手配しておくよ。 そう意味を込めながらガーくんの頭を撫でる。

「ヴィヴィオちゃん……やっぱりなのはの娘ね……。 こんなに可愛らしいなんて……もうすっかり対象になっちゃったわ……」

桃子さん、ちよつと意味不明の供述をしながらもほろりと涙。

「ヴィヴィオちゃんなんていいこなの……。私絶対に聖祥小学校の校長になってヴィヴィオちゃんが苦勞しないように腕を振るうわ……。」

リンデイさん、やめてください。本当にやりかねないから怖い。「いまのまままで妹なんていらなと思うていたけど、ヴィヴィオみたいな妹がちよつと欲しくなった……。」

ロヴィータ、姉妹丼の完成である。

しかしまあ……。ヴィヴィオが俺達と同じ学校に通いたいとは驚いた。でも……。正直とても嬉しかった。是非あそこでヴィヴィオには俺達以上に楽しい思い出を沢山作ってほしい。

「あ、それじゃいま聖祥小の制服着てみるか？　なのはの制服がパパの部屋に置いてあるから」

「ほんとっ!?　ヴィヴィオきてみたい!」

「ちよつとまでひよつとこ!　どうしてお前がそんなものを持っているんだ!」

「たまにベッドで臭いを嗅ぐからに決まってるだろ!　とくに3年生のときの制服にはいまだにお世話になってるぞ!」

「まっつて俊ちゃん!　それインフィールドフライよ!　俊ちゃんのママとしてもなのはのママとしても流星に見過ごせないわ!」

「くっ……。!?　この男と同じことをやっていたなんて……。!?　でもフェイト可愛いしちよつと気持ちがあわかってしまうのが悔しいわ……。!」

「おいやべえ人物が二人に増えたぞっ!」

「大丈夫……。心配すんな。サイズが合っていないのは知ってるさ。

クリップでどうにかしてみるよ」

「誰もそこ心配してねえよっ!」

「ロヴィータ……。たった1人の娘がさ、俺達を通った学校の制服を着たいと願ってるんだぜ?　それを叶えてあげるのがパパの役割だと俺は思うんだ。そう思うだろお姉

ちゃん?」

「いやまあそれはそうだろうけど……あたしはなのはの小学校の頃の制服の臭いをいまだに嗅いでるお前に問題があるって言ってるんだよ。あと勝手にあたしをお前ら変態家族に入れるな。あたしははやての家族だ」

「人間が自慰をするのと一緒だよ」

「いやお前それで自慰してるんだろが。あつ!? こらまで逃げるな! お前なのはに殺されても助けてあげないからなっ!」

『ツンデレ最高フオオオオオオオオオ!』

ロヴィータの叫び声を無視して部屋に戻り、真空パックに保存しておいたなのはの制服を取り出す。勿論そのとき空気中に溶け込んだなのはの臭いを肺に取り込むことも忘れない。

足取り軽くヴィヴィオの元へと戻る俺。ロヴィータは俺に軽蔑のレーザービームを当てるが今夜のおかずを提供していることに気づいていない。桃子さんは笑顔のまま録音テープを握っている。

……バラされたくないから奴隷になることに決めた。

リンデイさん

『フェイトの制服を捨てるか彼を殺すか。選択肢は一つに一つね。』

コロコロファイバーよ』

あれ? 選択してなくね?

いやしかしそんなこといまはどうでもいいのだ。いま大切なのはヴィヴィオにこのなのはの制服を着せること。それが俺に課せられたミッションだ。

「ほらヴィヴィオ、これがなのはママの小学三年生のときの制服だぞー。ちよつとまってるな、ヴィヴィオの背に合わせるから。はい背筋伸ばして、決めポーズでもするか」

「(・ω・)」

「ごめんやつは普通に両手を左と右に広げて」

「(・ω・)」

「うん、そうそう。ふむふむ、オツケーオツケー」

ヴィヴィオの背丈に合うように服をクリップで止めていく。見映えは悪くなるが、穴はあけたくないしヴィヴィオが可愛いから問題

ないだろう。 ヴィヴィオを待たせるわけにはいかないのでちやつと終わらせる。

「はいヴィヴィオ。 一人で着替えられるか？ パパが手伝おうか？」

「だいじょうぶ！ ヴィヴィオできるもん！」

「そつか。 じゃあがんばれー！」

俺の声援を皮切りに、ロヴィータと桃子さんとリンデイさんとガークンもヴィヴィオに声援を送る。 ヴィヴィオは初めての制服に若干戸惑いながらもまたよたよたもたと着替えを無事に終え――

「俊ちゃんが心臓発作を起こしたわっ!？」

「ひよつとこっ!?! おい大丈夫か返事しろ!？」

「いまがチャンスッ！」

「――はッ!? 危ねえ……ヴィヴィオのあまりの可愛さに昇天するところだったぜ」

危ない危ない、もつとヴィヴィオの制服姿を焼き付けておかないと死んでも死にきれん。 ところでなんでリンデイさんは忍者スタイルで俺の咽喉元にナイフ置いてんの？ まるで死神みたいなんすけど。

「パパー！ ヴィヴィオどう？ にあうー？」

いやいやこれはこれはなんというかまあ……天使が舞い降りてきたね。

いやこれ凄いよ、入学初日からマドンナ認定だよ。 ヴィヴィオのクラスメートは学園天国だよ、隣の席を狙っちゃうよ。 隣の席に座るの俺だけどき。

「……ヴィヴィオにあわないの……？ あう……」

「い、いやいやそんなことないぞッ！ ちよつと制服着たヴィヴィオが可愛すぎて言葉が出なかつただけだよ！ ヴィヴィオ本当に可愛いぞ！ やっぱヴィヴィオは学校なんかには行かせない、ずっとパパと一緒にいようしよう！」

「い、いよー！」

ヴィヴィオは嬉しそうに俺に抱きついてくる。 俺は優しくヴィヴィオを抱っこして頭を撫でる。 嬉しそうに少しくすぐったそう

に俺に甘えてくるヴィヴィオをみていると、本当にヴィヴィオが俺達の俺の所に来てくれたよかったと思う。三人ならこんな幸せ味わうのはもつともつと先だっただろうから。それにヴィヴィオが来てくれてから、二人の帰りをまつのが苦じゃなくなった。前は一人でつまらなかつたけど……ヴィヴィオといると時間の経過が早く思えてくるよ。子どもって不思議な存在だ。まあそもそも一人で留守番なんてほとんどしてないんですけどね。いつもおっさんで遊んでたし。

桃子さん達もつとヴィヴィオの制服姿を見たいというのでヴィヴィオをおろすことにする。ヴィヴィオはその場で見せびらかすようにくるくると回りながら皆に『かわいい？　かわいい？』と聞いて回る。

桃子さんは笑顔で答えながら頭をなでなで

ロヴィータも優しい笑みで頭をなでなで

ガーくん盛大に拍手を送りながらかわいいと連呼

リンデイさんの周りは赤色で埋め尽くされていたためヴィヴィオがひいた。

「ぼ、パパっ!?　リンデイメツシユさんからちがでてるよっ!?」

「ヴィヴィオが猫のものまねすればリンデイメツシユさんの鼻血は止まるよ」

「ほんとっ!?!」

聞いてくるヴィヴィオにうんうんと頷き答える。

頷きを見てヴィヴィオは意を決したような眼差しでマーライマンと化したリンデイさんに向き直り――

「ヴィヴィオだにゃんっ♪」

リンデイさんと二人で萌え死んだ。

『お前はいつたいなにがしたいんだよっ!?!』

薄れゆく意識の中でロヴィータの叫び声が頭の中に木霊し続けた。いた。

☆

桃子さんとロヴィータのおかげでなんとか一命を取り留めた俺と

リンデイさん。 ヴィヴィオの制服姿は強烈だ。 気を抜けば一気に魂が持っていかれてしまうからな。 これはリンデイさんも思っていることだったのが、アイコンタクトで『よくやったわ』と送ってきた。

「あーパパがリンデイメッシュさんをずーつとみてる！ パパだめー、ヴィヴィオのほうむいて？」

「枯れた女性よりみずみずしい幼女のほうがいいよ。 わかったからわかったから、膝の上に乗って動かないでくれ」

「どうして？」

「抱きしめたらヴィヴィオの背中しか見れないだろ？」

「おー！ パパかっくい！ パパすきー！」

「だろ。 俺もヴィヴィオのことだーいすき！」

「ヴィヴィオのほうがパパよりもーつとだいすき！」

『……ロリコン』

おい誰だいまボソつと呟いた奴。

「ヴィヴィオちゃん、私にもぎゅーつとして頂戴？」

「いいよー！ リンデイメッシュさんにもぎゅーつとする！」

俺の膝の上から降りたヴィヴィオはリンデイさんの膝に一目散に駆け出し飛びついた。 そこに桃子さんも参入しヴィヴィオは二人に交互に抱きつく。 ちよつとだけヴィヴィオが羨ましくなった。

ヴィヴィオを見ていると膝に確かな重みを感じたので見下ろす。 ガーくんが綺麗にお座りをしていた。 その頭に優しく手を置く。

「ヴィヴィオカワイイネ」

「ああ可愛いな」

「ガーくんモシヨウガツコウイツテイイ？」

「勿論。 制服もちゃんと用意しとくさ。 一応、指定服だからな」  
「ハイ」

アヒル用の制服を受け付けているか明日からさっそく電話してみるとするか。 無かったら自分で縫えばいいだけの話だし。

「学校ではヴィヴィオを頼むなガーくん」

「モチロン。 ヴィヴィオマモルノガガーくんノヤクメー！」



ばさりと大きく羽を広げるガーくん。 成程成程、ヴィヴィオの学  
校面での安全はクリアできたな。

羽を広げるガーくんに危ないからと注意をし、羽をたたませる。

ガーくんはヴィヴィオの制服姿がよほど嬉しいのか頭を左右に振り  
ながら歌を口ずさんでいた。

「ツヨクテヤサシイオヒメサマー、タヨレルオヒトダスゴイヒトー」

「はは、なんなんだその歌?」

「ガークンノママガウタツテタ! オヒメサマジヤナイノネニ!」

「俺はガーくんのママも言語を喋れることに驚いたよ……」

末恐ろしいなガーくん一族……。

他愛もない話をガーくんとしながらチラリと時計に目を向ける。

あー……そろそろ帰ってくるのかな?

時刻は既に夕方5時となっていた。

「桃子さんリンディさんロヴィータタソ、そろそろ作業に戻ろう。

なのは達が帰ってくる。 公務員なのにあいつら定時より早く帰宅  
することあるし」

「六課はしようがないわよ。 そういう目的で立ち上げられた部隊で  
もあるんだから。 んじや続きをやりましょうか」

「あ、その前にヴィヴィオ。 なのはママ達に写真送るから、ポーズ  
撮ってみようか」

「、(・ω・)」

「えーつと……ヴィヴィオはそのポーズ好きなのか?」

「ゴメスちゃんがやってたの! ヴィヴィオはゴメスちゃんすきなん  
だー」

「ヴィヴィオがゴメスちゃん好きなのは知ってるけど、そんなポーズ  
してたっけ?」

「うん! キのうやってた!」

「パパがカミソリに絡まったジャングルと格闘してるときだったの  
か。 でもヴィヴィオ、ゴメスちゃんは魔法少女だけど魔法は嫌いな  
んじゃないのか?」

「ゴメスちゃんはいつもパンチだからだいじょうぶ!」

「確かにそうだったな。名前負けはしてないけど、なんであのアニメって魔法少女にしたのかいまだに疑問なんだよなあ」

見た目的にはなのはをリスペクトしてるんだけどさ。あくまで可能性の話だが。

「まあいいか。この際、色々なポーズを撮っておくか」

「わーい！ ガークくんもこっちきて！」

手招きでガークくんを呼ぶヴィヴィオ。首を傾げつつヴィヴィオの元にくるガークんを抱っこしたヴィヴィオは笑顔でこちらにピースする。成程、流星女の子だ。可愛い女の子には可愛い動物はつきものだもんな。

スカートをちよつと摘まんだポーズや抱っここのポーズ、床に座らせて正座や体育座りになるりと回ったポーズ。ねこをイメージしたにゃんこスタイルに前傾姿勢、尻中心に攻めた写真とスカートたくし上げの写真はリンディさんとロヴィータの前蹴りとともに消えていった。だが既にバックアップは取っておいたので問題ない。流星に5歳をオカズには使わない、ヴィヴィオフォルダに入れておくだけだ。

「ねえねえかわいくとれてるっ!？」

「勿論！ ほら、みてごらん」

「ガークンハ？ ガークンハ？」

「ほらガークん単体の写真もこんなにあるぞ。でもやっぱヴィヴィオがガークんを抱っこして撮った写真が一番いいな。待ち受けにしておこう」

「あら、確かにこれは可愛いわね」

「うんうん、ヴィヴィオちゃんとってもかわいいわよ。ガークんも

男前よ？」

「お前も撮ってやろうかひよつとこ？」

「いや、4pが始まるといけないから遠慮しとく。それよりママ二人に送りたい。送る画像は——」

何にしようかスライドさせていたところで、桃子さんとリンディさんに頭を撫でられていたヴィヴィオが例のポーズ写真を指さした。

おいガークン、なにちやつかり桃子さんに抱かれてんだよ、しかもおっぱいが当たる位置じゃねえか。俺に変われ!

「ひよつとこ、耳から緑色の液体が垂れてるぞ。お前の故郷はナメック星か」

「神様、ダメ。隣の部屋で孫悟空寝てる」

「止めろ。模擬戦のときお前がマイク通して読み上げたせいで死ぬかと思っただわ」

「神様にも穴はあるんだよな……」

「お前は5円玉の穴で十分だろ」

「バカにしてんの? ねえバカにしてんの?」

ロヴィーたちちゃんのやり取りが長くなったせいかわいおいオが膝の上でばんばん足を叩いてくる。ごめんごめん、俺が悪かったよ。

気を静めてもらうために頭をなでなで。機嫌を戻してくれたのか、かわいおいオはにっこりと微笑んでくれた。

「よし、んじや二人に送るぞ。わいおいオ、なんかメッセージあるか? 打っていいぞ」

わいおいオに携帯の操作を任せる。俺の右隣にはガークンが、左隣にはロヴィータが、前にはリンディさんで後ろは桃子さん。そして膝の上には全員が見守るわいおいオが。

わいおいオは慣れない操作に手間取りながらもなんとか打ち終えた。わいおいオがなのはとフェイトに宛てたメッセージだ。修正もなにもせずにそのまま送った。

「さてと……まだ皆が来るまで時間はあるだろうから少しでも多く作って——」

『なのはまってるッ!? 運動オンチのなのはが六課からここまで100m走 8秒前半のタイムで走る理由はなに!? 携帯のメールに何が書いてあったのッ!? さつきから私足が攣りそうなんだけど!』

「予定変更! 玄関に行くぞわいおいオ!」

「おー!」

「ガークンモイクー!」

## A, s10. お風呂なの

わたしは駆ける

鳥のように 風のように 背中に羽を広げて目的地に向かう。

『まっつてなのはっ!? 家ならまだしも公共の場で私用の魔法はまずいってばっ!?!』

先程、雑務を粛々とこなしていたわたしの元に一通の添付付きメールが届いた。宛先人はわたしのこいび——ペット、家事をなんでもこなしてくれるペットである。 仕事申だというのにわたしに構ってもらえなくて寂しかったのかペットがメールを送ってきたのだ。それ自体はまあよくあることなので、ため息を吐きつつもメールを確認することに。

そこには天使が変なキメポーズを決めていた。体中に電流が走るというのはいくつものことをいうのだろう。気が付くとわたしは駆けていた。後ろから追っかけてくるフェイトちゃんもきつとメールを確認した後、あんな雑務なんかどうでもよくなってきたのだろう。 だってわたしがそうなんだから。

高校のときクラス対抗リレーで、『なのはちゃんは出来るだけ短い距離になるように前と後ろに速い人を置いとくね』と言われたこのわたしが、光の速さで家へと帰る。

「ただいまッ! ヴィヴィオはッ!? わたしの可愛いヴィヴィオはどこッ!?!」

「なのはママおかえり〜! ほらこれ——」

「かわいいッ! ヴィヴィオほんと可愛すぎるッ!!」

「うぎゅう……なのはママ……くるし……」

勢いを殺すことなく家の中へダイブしたわたし、玄関ではヴィヴィオがお出迎えしてくれていた。 わたしの姿を確認してニコニコ笑顔で話しかけてくるヴィヴィオ、しかしわたしはそれよりも速いタイミングでヴィヴィオをがっしりと抱きしめていた。 ヴィヴィオの鎖骨が折れてしまうのではないかと心配になるほどの力が抱きしめた。

ヴィヴィオが何か言っているが気にしない。そのままヴィヴィオのほっぺに自分のほっぺをスリスリしながらひたすら愛でる。

「あのー……なのはさん？ 一応俺もお出迎えしてるんですけど……」

「ガークンモ……」

「いまヴィヴィオを堪能してるんだから二人は黙っててっ！ あく！ ヴィヴィオ可愛いよー、これ聖祥の制服でしょ？ それもわたしの制服だね、無くさないように目立たない所に名前書いてるもん、ほら。

あれ？ 俊くん何処いくの？ え？ ご飯の準備してくるの？

いってらっしやーい。 あーでも可愛いよヴィヴィオ。 ヴィヴィオ可愛いよ。 この制服どうしたの？ おかあさんがヴィヴィオのために持ってきてくれたの？」

「ううん。 パパがヴィヴィオにくれたの！」

「変態止まれッ！ いやきよろきよろしながら探さなくていいからっ！? キミのことだよキミのことー！」

「はあはあ……やっとおいついた……。 ちよつとなのは……雑務終わってないのに仕事放棄しちゃダメだって……」

「あ、おかえりーフェイト。 早かったね、どうしたの足ガクガクして。 大人のオモチャが取れなくなっちゃったの？」

「俊……いまちよつとそんな冗談に付き合っ……られないの……」

「ごめん、お水をお願い……」

「フェイトーっ！ 私の可愛いフェイトっ！ おかえりなさいー！」

「ちよつ!? お母さんちよつとまって押し倒さないで……っ！」

「ちよつと俊くん、なんで俊くんがわたしの小学生のときの制服もってるのか教えてくれる？」

「つい股間がギンツとなって保存した。 いまでも残り香を堪能している」

「そんなに小学生のときのわたしがいいのっ!? いまの19歳のわたしの香りじゃ満足できないのっー！」

「ツツコミガオカシイ」

「どういう意味なのか説明してよっ！ もう俊くんがわたしの制服盗

んだのには驚かないよ、キモくて家から追い出したくて軽蔑するけど、ブルマのラインを超えてないからまだ絶交はしないで許してあげる」

「よかった……スク水はセーフってことか……!」

「いや余裕でアウトだよっ!」

「みてみてフェイトママー! ヴィヴィオかわいい?」

「ヴィヴィオ絶対に離さないッ! もう絶対に離さないよッ!」

「むぎゅっ!? フェイトママくるし——」

「フェイトツ!? ヴィヴィオガタイヘンナコトニナツテルツ!?」

なのはが顔を真っ赤にしながら俊に抗議でぼかぼかと力なく殴り、死にそうな様子で帰ってきたフェイトはヴィヴィオをぎゅっくっくと抱きしめる。リンディはフェイトに抱きついたまま幸せそうな顔を浮かべ、ガークンはヴィヴィオの様子におろおろと動き回る。

玄関で男女鳥類合計で6人がぎゃーぎゃーと騒ぎ立てる中、一人の女性の手を叩く音でこの場が完全に静止した。

「あらあら、いい年した大人が玄関でそんなに騒いじゃダメよー。

はーいヴィヴィオちゃんおいでー。ガークンも。なのはははやてちゃんに電話ね、心配したはやてちゃんが連絡してきたわよ。

フェイトちゃんはリンディさんのためにちよつとだけそこで寛いでおいてもらえるかしら? お水は私が持つてくるわね。俊ちゃんは集合」

「お、おかあさんっ!? どうして此処にいるのっ!」

「あれ? なのはが呼んだんじゃ——」

「はーい、なのはもお口はチャック、手はお膝。 かわいい娘ねー。

でもチャックははやてちゃんに連絡してからにしましょうね」

「素直に正座してお口チャックの仕草までするのは可愛いなあー、萌え萌えきゅんきゅんしちゃう」

「俊ちゃんはちよつとこっちにいっちゃい」

「……はい」

2階へといぎなわれる俊。ごめんなさいという言葉と嗚咽だけ

が木霊する。

『……………ツ!?!』

ヴィヴィオを除く全員が泣き目になっていたのは言うまでもない。

『なのはちちゃん？ 一体どうしたん？』

「おかあさんがわたし並みに魔法を使いこなしていたら世界が滅んでたかもしれないよはやてちゃん……………」

『何があつたん?!? どんな残虐な行為が行われてるん?!?』

電話口からやての焦りを伴った声が聞こえてくる。

「でも心配しないで、きつと死なないから。 あ、ちよつとまって。

いまフェイトちゃんにお水渡してくる」

正座から足を崩し、キッチンへと向かうのは。 その後ろにヴィヴィオがくっ付いてくる。 なのははコップの8割を水で満たしつつ、ヴィヴィオにフェイトへ渡すようお願いした。 ヴィヴィオはこくと大きく頷くとフェイトに水を渡しに走る。

なのはもフェイトの元へと歩を進めながら、はやてと会話する。

『あー…………ヴィヴィオちゃんの制服姿なあ。 それならなのはちゃんが飛び出した理由もわからないでもないかも』

「でしよでしよ?..」

『うーん…………まあしやあない。 今回の件は見逃したる。 でも雑務は持つてくるからキツチリ終わらせるんやで?..』

「うへえ………… わかりました……………」

『ほな、こつちもそろそろ終わりそうやから、もう少ししたらそつちに行くで』

「はーい。 まってるねー」

通話終了ボタンを押し、携帯をポケットにしまいこむ。 いまだ2階からは俊のごめんなさいと嗚咽が聞こえてくるが完全スルーすることにした。

「フェイトちゃん、夕食前にお風呂入らない？ 洗いっこしようよ」

水を飲みほしたコップを横にどけ、制服姿で浮かれているヴィヴィオに笑顔を向けていたフェイトに、なのははそう提案した。 ちなみにフェイトの後ろにはリンデイが背後霊のように存在していた。 そ

の頭の上にはガーくんが乗っていた。

フェイトはなのはの提案に、いいよと笑顔で答えた。浮かれていたヴィヴィオも一緒に入りたいと言いだし、二人はそれを笑顔で快諾。

「あつ！でもヴィヴィオはせいふくぬがないといけないのかぁー……」

「んー？また着替えればいいんじゃないかな？寝るときにパジャマに着替えるんなら問題ないよ？でも、ご飯のときはエプロンつけなきゃダメだよ？」

「おおー！なのはママあたまいい！」

「ふっふっふー、だってママはヴィヴィオのママだからねっ！」

ドヤ顔するなのはにヴィヴィオはてばなしで拍手を送る。

ひとしきり拍手した後、なのはとフェイトとヴィヴィオはそれぞれの着替えと遊び道具を持ってくることに。その際になのははリビングで一人アニメを観ていた人物に声をかけた。

「ヴィータちゃんも一緒にはいる？」

「くそっ……い！なのはに声をかけられた、これであたしのゆったりとした時間も終わりを迎えてしまったッ……い！」

「いやそれどういう意味っ!？」

どうやらヴィータは極力関わらないように努めていたようだ。

☆

かぽーん、風呂場の中でそんな音が聞こえてくる。

現在風呂場にいる者は、なのはとフェイトとヴィヴィオとガーくん、そしてヴィヴィオに無理矢理入らされたヴィータであった。リンデイも入りたいと駄々をこねた

ようだが、フェイトに断られてしまった。

そんなフェイトはというとヴィヴィオを膝に抱っこして湯船の中で温まっていた。なのははヴィータの髪を洗っている最中、ガーくんは浴槽でばしゃばしゃと泳いでいた。

「フェイトママのおっぱいはおおきいねー。ぽによんぽによんして



る」

「えーほんと？　ありがとうー」

抱っこされたヴィヴィオはフェイトの大きな胸を触りながら揉みながら、感心したような声を上げる。　フェイトは娘に触られるのに抵抗がないようで、ヴィヴィオの気の済むようにさせていた。

「どうしたらフェイトママみたいにおっぱいがおおきくなるのかなあ？」

「んー、そのうち大きくなるよ、大人になったらね。　ヴィヴィオはまだ子どもだからね」

「そっかあー。　あしたにはヴィヴィオはおとなになってるかな？」

「それはちよつと無理かなー。　でもどうしてそんなに早く大人になりたいの？　子どもっていいよ？」

「そうだよーヴィヴィオ。　なんでも子ども料金だし、ちよつと泣けば許してもらえるし、小さい女の子ってそれだけで得だよー。　ね、ヴィータちゃん？」

「なんであたしに振るんだよ」

「だってほらヴィータちゃんはエターナルロリ娘だし。　あ、お湯流すから目をつぶってー」

「読みたい本が高い場所にあるときはロリを呪いたくなるけどな。」

それになのはだって精神年齢はロリ一直線だろ」

シャワーのノズルを引っ張り、まずなのはがちゃんとお湯が出てるかを手に当てながら確かめる。　お湯が出てるのを確認すると、ヴィータの頭の泡を流しながらもう片方の手で髪を梳いていく。

視線だけヴィヴィオに向けたなのはが質問する。

「でもなんでいきなりヴィヴィオはそんなこと言いだすの？　子ども嫌になっちゃった？」

「ううん。　パパのもってるえほんにおっぱいのおおきいおねえさんがのつてたの！」

「ほう……」

二人の瞳から光が消える。

いままで泳いでいたガーくんが音もなく水中に沈む。

「ねえヴィヴィオ？　パパは持ってたその絵本について詳しく教えてくれるかな？」

「ふえ？　いいよー！　でもなのはママちよつとこわい……」

「ううん、大丈夫そんなことないよ。　ね？　フェイトちゃん？」

「そうそうそんなことないよ」

安心させるようにフェイトがヴィヴィオの頭を撫でる。　ヴィヴィオは笑顔でそれを受け取る。

「えつとねー、パパはねえほんをほんがたくさんあるばしよのおくにおいてたよ。　それでねー、こうね？　かみをふたつにしてるえほんがたくさんあった！」

「成程成程、ツインテールの絵本が沢山あったんだね」

「うわあー……マジかよあいつ。　19歳でツインテールしてる魔法少女が家にいるっていうチャレンジだな。　引くわあー……」

「それでね？　はやておねえちゃんぐらいのかみのひともいたよ！」

「ほうほう……」

「それでね？　みんなはだかになつてた！　でもね、ヴィヴィオがえほんよんでたらパパがきてダメー！　つてされちゃった……。　でもパパもてにおなじようなえほんもつてた。　それでねそれでね？

　パパがヴィヴィオがおとなになつたらあのえほんみせてくれるつていったのっ！」

　だからはやくおとなになりたいんだあー、ヴィヴィオはその言葉で締めくくった。

　ヴィータは一人、二人の覇気によって気絶したガーくんを引き上げた。　そして今度はヴィヴィオを手招きで呼び、風呂椅子に座らせると体を洗い始めた。　それにならってヴィヴィオはガーくんの体を洗いはじめる。

「あわあわあわ、あわわわわ」

「ご機嫌だなヴィヴィオ」

「うん！　ヴィータちゃんとおわあわごっこできるからね！　でもなのはママとフェイトママとも——」

「あー、そっちは見るな、いま見たらヴィヴィオは一生二人に抱きつく

ことが出来なくなるからな」

「おっ」

首を傾げるヴィヴィオ、しかしヴィータに見たらダメだと言われたので素直にその言葉を聞き入れたようだ。既にガークンの体を洗うことに専念している。気絶しているガークンに対して起きるように体を揺らしながら声をかけている。

そんなヴィヴィオの頭を一撫でしてヴィータはちらりと湯船の方に目を向ける。

「ねえフェイトちゃん……爪を一枚一枚剥がしていくのはどうかな……？」

「それいいと思う。それとニッパーで舌を5mmずつ引つ張っていくのもアリだね……」

「(あ、今日がひよつとこの命日か)」

一瞬で悟ったヴィータ。なんせ二人の後ろでは互いの死神がガツチリと握手を交わしていたのだから。

なおもパパをどう調理するかが話し合う二人。もうすでにその会話は娘に聞かせていい内容とは到底呼べなかった。

ヴィータはヴィヴィオの体の泡を流しながらため息まじりに二人に話しかける。

「お前たちがもつとかまってあげないからエロ本なんか走るんだよ」

「なっ!? そ、そんなことないよ! かまってあげてるもんっ!」

「んじや二人の魅力がエロ本に負けたんじやねえの? 可哀想に……」

「そ、そんなことないよ! 少なくとも私は魅力たっぷりだと思う! なのはよりスタイルいいし!」

「ひ、ひどいよフェイトちゃんっ!? わたしよりおっぱいが大きいだけじゃん! それ以外なら負けてないもん!」

「いいや! 絶対に迫ったら私にメロメロになるよ! だって俊は私を押し倒したもん! 私がじゃないよ、俊が私を押し倒したの!」

「わ、わたしだつて何回も押し倒されたよ! それはもう獣のよう

にっ！」

「嘘でしょ？」

「ごめんなさい」

素直に頭を下げるのは。

そんななのはにフェイトは頭を撫でることで答えた。

「ま、あいつは童貞だからもう少しわかりやすくアタックとかすればいいんじゃないの？」

「わかりやすくってどれくらい？」

「はやてぐらい」

「あんなことしたら心臓バクバクしちゃうから無理だよ、わたし」

「小学生かお前は」

言動だけは負けず劣らずなのになあ。声にこそ出さないがなのはに對してそう評価するヴィータ。

「はやてみたいかあ……。ちよつと頑張ってみようかな」

「ええっ!? フェイトちゃんあんなことできるの!? あんなこう……。えっちなこと！」

「ま、まあ私達も大人だしね」

「さ、流石大人だねえ、フェイトちゃん」

「なのははそういうのはないの？」

「い、いや考えたことはあるよ？ シミュレーションもやったし、アップローチも散々してきたもん。でも、でもだよ？ いざ本当に俊くんとそういうことをすると……。途端にもじもじしだすとなのは。一人が顔を覆ったり、へにやつた顔になったりと大忙し。」

「あー……。ある意味では健全な付き合いになりそうではあるな」

「私が男だったら絶対になのはと結婚してると思う。可愛すぎて死にそう」

真剣な表情と声でヴィータに声をかけるフェイト。

わからんでもない。そう口にしたヴィータはヴィヴィオの手を握った浴室を後にしようとする。

「おたくらは……聞くまでもないか」

なのはをしつかりと抱きしめたフェイトを見てヴィータはそう呟いた。

「あれー？　なのはママとフェイトママはー？」

「ママ二人はもうちよつと入っているそうだ」

「じゃあヴィヴィオもはいるー！」

「ダメだ。　さつきからシャワーで遊んでばっかりだっただろ。　ほら、体拭くから大人しくしてろ」

　ぶーぶーと抗議するヴィヴィオ、しかしヴィータが体を拭きはじめてからは大人しくするヴィヴィオであった。

「フェイトちゃん、おっぱい触らせてー？　なにかが掴めるかもしれない」

『胸のふくらみしか掴めないと思うけどいいよ。　その代わり——』

『きやつ!?　もう、もうそんなとこダメだって……!!　んっ……!!?　ら、らめらめ……』

「ガーくんは真つ先にこちらに走ってきてる童貞を止めといてくれ。

　もうすぐヴィヴィオの着替えも終わるから」

「ハ——イ」

『くっ!?　おのれガーくんそこをどけ！　理想郷がもうすぐなんだっ！』

『カナシムミライシカソンザイシテイナイ。　ゲンジツヲタタキツラレルダケダ』

『それでも……!　　拝みたい世界があるんだッ——!』

『セントクリヨクガハネアガツテイルダトツ……!!?』

「相変わらずこの家族は毎日楽しそうだな」

「たのしいよおー!　　ヴィヴィオすきー!」

　自分の目の前で嬉しそうにはしゃぐヴィヴィオを見て、ヴィータも呆れながらも笑顔を見せた。

「ひよつとこさんッ!　　なのはさんの下着をくれるということに加勢しに来ましたー!」

「よし嬢ちゃん、特攻野郎Hチームの力を見せるぞー!」

「ひよつとごさんと同等とか死んだほうがマシなので抜けていいですか?」

「5秒でチーム解散か! それもまたいいだろう!」

「あいつら協調性つてもんを知らんのか」

「こまったちゃんだねー」

そんな言葉どこで覚えたんだー? ゴメスちゃんがいつてた!

そんな会話を二人でしながら後を去ったヴィータとヴィヴィオであつた。

☆

ヴィータとヴィヴィオがリビングに戻ると既に六課メンバーとスカリエツテイ家族が集まっていた。全員でトランプをやっていたようだ。

「ハートを止めてるのは誰なんでしょうか?」

「何故一斉に私のほうをみるのだ。私はハートの8など——」

『ドクターお願い、だして?』

「喜んでツ! むひよおおおおおおおおおツ! もつと、もつといまの言葉を!」

妹たちの甘えた声に興奮するスカリエツテイにため息を吐くウーノ。

ヴィヴィオはヴィータの手を離しスカリエツテイの元に一直線に飛び込んだ。

「わーい! スカさんだー!」

「おおヴィヴィオ君っ! 久しぶりだね会いたかったよ! 管理局の開発部というのは全く面白くもなんともなくてね。この間だつてチームサーベルを作ったから局員に配らせるように提案したら却下されたよ。どう思うヴィヴィオ君? とりあえず試作品をひよつとご君には渡したんだけど——」

「おい一番渡しちゃダメな奴に渡すなよっ!」

「でもひよつとご君からは、『おっさんに白刃取りされた。スカさんもつとすごいのが作つて』とお願いされてね。いま頑張ってる最中なのさ」

「スカさんたいへんだねえ〜」

よく分かっているくないヴィヴィオの感想。だがスカリエッツィはそれで満足したのか優しく頭を撫でるだけに止めた。

「ヴィータ、先程から気になっているのだが……なぜヴィヴィオは聖祥の制服を着ている？ ひよつとこのコスプレ魂がまた発動したのか？」

「ああいや、そうじゃなくてヴィヴィオが聖祥に通うからその試着」  
「ほお……。ヴィヴィオがああ魔窟に通うとはな……」

「私てつきりヴィヴィオちゃんはS.t. ヒルデ魔法学院とかその辺に通うと思っていましたが……成程ああ魔窟に通うんですか」

「仮にも自分たちの主の母校を魔窟呼ばわりするのはやめろよ二人とも」

魔窟であることには変わりないがな。ひよつとこが連れてきた狐まだ生きてるかな？

「ヴィヴィオ、もっとよく見せてー！」

「いいよー！ ほら！ くるくるくるくるくる〜」

スカリエッツィの娘たちにお願いされたヴィヴィオは、スカリエッツィから離れ皆の中心でくるくると回って見せた。全員が一様に優しい笑みを浮かべるそんな光景が広がる。

「もー、フェイトちゃん激しすぎるってばー」

『でもなのはも可愛かったよ？』

『もう上がったの!? なんで上がったっちゃうのツ!? もっと入浴しといつよ!』

『なのはさんの裸体! なのはさん抱きしめてツ!!』

『ぎゃあああああツ!? 変態が編隊を組んで襲ってきたツ!?』

『この動き……ランページ・ゴーストツ!』

一部見せられない光景も広がっていた。

A, s l l. ショックだったリンデイさんと秘密の  
レイハさん

「なのはママー、カルピスつくって！」

「いいよー、ちよつとまっててねー」

風呂上りのなのはとヴィヴィオがカルピスを作るためにキッチンへと向かっていく。俺もそろそろ夕食の準備をしようかな。とろろも大体スリ終わったし、ツケもいい感じに染みてる。鶏肉も甘辛に炒めてある。その他にも大根ときゅうりと梅のとろろ和えや自然薯をスリスリすることなくそのまま焼いた自然薯焼きも用意してある。

「はいはいみんなトランプ片付けろー。あ、ヴィーたちちゃんとシヤマル先生は追加のテーブルもつてきて」

「ひよつとこ、お前の犬小屋直しておこうか？」

「食い終わったたら頼む」

「了解した」

シグシグの何気ない優しさについてお願いしたけど、別に俺は犬小屋で生活してるわけじゃないんだけど。なんでこいつは俺がいまだに犬小屋で生活してると思ってるんだよ。少しの間だけだよ犬小屋生活してたの。

「さて今日の夕食だが、なんと——とろろご飯一択だツ！」

『ええ〜っ!?!』

「の予定だったが可愛い可愛いヴィヴィオが、とろろご飯だけじゃ無理ということがわかったので——」

『童貞のくせに生意気だっ!』

『短小包莖っ!』

「お前ら二人はとろろご飯な」

『ひよつとこさん素敵！ イケメン抱いて!』

「お前らは汁の代わりに溶解液が出てきそうだから止めとく。と

まあ、二人以外はとろろを使った料理に変更ということだ」



「ひよつとご君、君は知ってるかね？　とろろを食べていたと思っただら痰（たん）を食べていたという昔話があつてだね——」  
『動くなッ！』

流石にこの人数差では離脱することが出来なかった。　しかしいいことを聞いた。　今度なのはとフェイトで試してみよう。　いや、むしろなのはとフェイトの痰を俺が食べるといふ行為のほうが興奮。　「俊、それを実行したらどうなるかわかつてるよね？」

嫌だなそんなフェイトさん。　そんなにマジな目で威嚇するの止めてくださいってば。　ほらちよつとした冗談ですから。

「じゃあ物々交換にしよう。　フェイトの痰と3万円はどうだろうか？」

無言で腹パンされた。

もうこれ以上この話題には触れないでおこう。

☆

「ひよつとご、下に敷くものはレシートがいいか？　それともビニール袋がいいか？」

「もつとマシな敷物の2択にしてくれ」

「ではローションにしよう。　案ずるな、フローラルな香りを選んでやろう」

「お前ただ嫌がらせしたいだけだろ!？」

なんなんだいったい。　生理か？　生理なのか？

生理といえば高校時代は、美少女5人組に『生理中はお願ひ、うるさいから喋らないで』って言われてたな。　ずっと喋れない時期もあつたっけ。

「あれ？　そういえばシャマル先生、ヴォルケンって生理とかあるんですか？」

「妊娠もできますよ」

「えっ!？　それほんとですかっ!？」

「嘘です」

「よかった、ザツファイアのポテ腹の絵図をみなくて本当によかった」  
「ちよつとまってください。　なんでそこで私達より先にその名前が

出てくるんですか」

「そういえばザツファイーって犬の姿でするんですかね？」

「さ、さあ……。本人に聞いてみたらどうでしょうか？」

「それもそうですね。おいザツファイー——」

ザツファイーの姿を探し視線をあつちこつちに移動させる。あ、いたいた。犬の姿をしたザツファイー、そしてその正面にヴィヴィオもいた。んー？ なにしてるんだろ？

気になって二人に近づく。

「ザツファイーにはねー、このほねっこあげるー」

「うっ……」

「ちがうでしょー。わんわんだよー？」

「わ、わんわん……」

……。ごめんねザツファイー。ヴィヴィオに合わせてくれてありがとう。俺も後でビーフジャーキーあげるよ。

一生懸命ザツファイーにほねっこをあげてるヴィヴィオ。虚ろな目でほねっこを啜えるザツファイー。

いつもヴィヴィオのそばにいるガーくんの姿が見当たらないので探してみると、スカさん一家に捕まっていた。

「へー、ほんとにアヒルだねー」

「喋るアヒル……。ふふっ、また新たな開拓の始まりね……」

「ふむ……。どうにかしてこの生態について調べ上げたいところだ」

「ワーハナセー！ ガークンハヴィヴィオトナリニイクノー！」

「ほら皆、ガーくんを離さない。ドクターも離してください。」

「ごめんなさいね、ガーくん」

「ウーノハヤサシイネ！ ウーノスキ！ デモヴィヴィオガイチバンスキッー」

「本当にヴィヴィオちゃんのことが好きなんですわね」

「ズーットイツシヨダツタカラネ！」

ウーノさんに頭をよしよしされて目を細めるガーくん。いいなあガーくん。俺もアヒルになったらあんな美人に優しく頭を撫でてもらえるんだろうか。

「シヤマル先生、アヒルになる魔法ってないですか？」

「うーん……そういう魔法はちよつと……。自分で見た目を変える魔法ってのは存在するんですけどねえ……」

「へー、それちよつと教えてくださいよ」

「ひよつとごさんは魔法の才能ないですし魔力もレシートの切れ端並ですから意味ないと思いますよ？」

流星にちよつとだけ魔導師に嫉妬した。魔導師っていいよな、やっぱり。なんとというか格差を感じるわ。

そんな俺の心を察してくれたのか、シヤマル先生は俺の両手を自身の両手で包み込み、

「でも、私は魔導師でもなんでもないひよつとごさんのほうが好きですよ？」

ふんわりと笑うシヤマル先生。

「それに、ひよつとごさんが魔導師になっちゃったら誰がなのはちやんやフェイトちゃん、そしてヴィヴィオちゃんを優しく迎えるんですか？ ご飯を作ったり洗濯したり愚痴を聞いたり。それにいいんですかー？ ヴィヴィオちゃんと遊ぶ時間も減るし、ヴィヴィオちゃんひよつとごさんに懐かなかったかもしれないですよー？」

「そ、それはダメですよっ！ 大問題です！ 大事件ですよ！」

「ですよね？ だからそんなに怖い顔しちやメっですよ」

両手から顔へと移行したシヤマル先生の両手は、俺の顔をゆっくりと優しく撫でてくれた。……俺が二人に恋をしてなかったら確実に持つていかれた。そう思えるほど、いまのシヤマル先生の笑顔は反則で、両手は優しく温かった。俺は幸せ者なんだと改めて確認させられた瞬間だった。だから今度は俺から手を握った。なんとなく、この温もりをもうちよつと感じたのかしれない。シヤマル先生ってフェイトみたいに母性の塊って感じだし。

『じっく』

背後から視線を感じ、いまずぐ言い訳をしたい衝動に駆られる。

「シヤマル先生……」

「はい？」

「俺の後ろに誰かいます……?」

「みんなにカルピスを配りながらも視線を私達に固定させているのはちやんがいますね」

「……どうすればいいんでしょうか?」

「それは……手を離してなのはちやんに謝るとかででしょうか?」

「ですよー。それしかありませんよ。でも——」

「いまこの一瞬はシャマル先生の温もりだけを感じたいときはどうすればいいですか?」

本当にこれは困った。別にシャマル先生に対してフラグとか攻略とかそういう類のものを抜きにして、いまはこうやってシャマル先生の手を握っておきたい。

……姉ってこんな感じなのかな?

でもそういう意味では意外とリンデイさんも姉ってというか……まあ年がめつちや離れてるけど。

思わずシャマル先生に助けを求めた俺だったが、シャマル先生は苦笑しながら言ってきた。

「ひよつとごさんは知人男性の中では無職で性格・行動に難がありつてことを除いたら頭一つ分以上抜き出てますし——」

逆に収入と性格と行動を除いたら後何が残っているのか聞きたい。「私もひよつとごさんのことは好きですが、流石に恋人関係にはなりたくないといえますか……そもそも私達は人間とは異なりますのでちよつとそういう関係は遠慮しておきます。あと純粹に怖いので、はやてちやんとかなのはちやんフェイトちゃんとか」

少しだけ赤くなつた顔でそう言ってくるシャマル先生。あれ?

いま俺あつさり振られなかった?

「シャマル先生、俺いま——」

「はいシャマルさんカルピスもってきましたよっ!」

なのはの声と共にシャマル先生と繋いでいた手が解ける。なのはが丁度引き千切る形で俺の正面に、シャマル先生の正面に立ったのだ。

そこまでしてカルピスを届けるといふのはのプロ意識に尊敬し

た。きつと俺の分であろうカルピスはおぼんの中で盛大に零れているけど。

なのはの出現と同時にシャル先生は、「あ、もう行きますね!」とそそくさと去ってしまった。 ああ……あと数秒でいいから感じていたかった。

なんてことを考えているとなのはが振り向く。俺の両手を自分の両手で包み込み、じつとこちらを見つめてきた。

「俊くん、これがわたしの温もりだよ」

「う、うん。 えつと……なのは?」

俺の返事に頷き、今度はぎゅつと抱きついてきた。 なのはは今度は何も言ってくれなかった。 ただただじつと抱きついてくれるだけだった。

なのはの吐息が聞こえてくる。 自分の心臓がなのはに聞こえないか心配になってきた。 それくらい心臓の鼓動は早く大きく脈を打っている。

自分の足は本当に地に着き2本の足でしつかりと立っているのかの感覚さえあやふやになってきた頃、なのはの体がすつと離れていった。 先ほどまで顔すら見れなかったので、改めてみようとなのはに視線を向け——ようとした瞬間、ぼつと何かが正面に覆いかぶさり眼前の光景を見えなくしてしまった。

「な、なのは?」

「い、いまはダメ……。 あう……。今頃になってこんな大勢の前でしちゃったことが恥ずかしくなってきたよ……」

「なの——」

「い、いまはダメっ! ほんとうにダメっ! しゅ、俊くん! これからは二人っきりのときにしようというのは! ねっ!? ねっ!」

「ち、違うってそうじゃなくて——」

せめてカルピスいりのおぼんは下に置いてからしてほしかったんだ……。 なんか白いものが股間にほどよくかかったし。 股間のミルクかけが完成しちゃってるし。

『おえッ——』

『大変だシャマル君っ!? うちの娘たちが口から砂糖をつ!?』

『えー、いまのなのはを抱きしめることが出来なかつたひよつこは童貞の鏡であると同時にへたれポンコツということが証明されてしまい——スバルとティアは涙

目になりながら丸めたティッシュを投げるな。悔しいのはわかるけど』

丸めたティッシュと、スカさんの娘たちの砂糖を吐く音を聞きながらなのは視線を向ける。顔を真っ赤にしながらもヴィヴィオを抱いて満足そうな笑顔を見せこちらに手を振ってくれるのは。それに俺も笑って振り返す。

今度はへたれポンコツと呼ばれないように、なのはに抱きしめ返そうと決意した。

勿論、二人っきりのときに。

☆

「へー、これが噂のレイジングハートかー」

スカさんの娘さんの一人がなのはのレイハさんをしげしげと観察しながらそう呟く。確かこの子なのはの無差別笑顔攻撃で撃沈した子だと記憶している。

「でもレイジングハートって完全にアナルビーズだよな。案外どっかの変態がアナルビーズの一つをもぎ取って出来たのがレイジングハートかもしれないぞ」

「どんな仮説っ!? 違うよ全然違うよ! わたしのレイジングハートはそんなんじゃないもん!」

『もーあつちいって! うー! バカバカ!』とハリセンで執拗に頭を叩かれながら強制退去を余儀なくされた。いやでも完全にアナルビーズだよな。一回なのはにアナルビーズ見せたとき、自分で首にかけてるレイハさんの形状確かめてたし。

「つまりレイジングハートはまだ6つほど残っておりその全て集まった時に真の姿を見せるということか」

「見せてどうするん……あほ」

強制退去させられたのでキッチンに戻りながらレイハさんのこと

について考えていると、目の前にエプロン姿のはやてがバカを見る目でこちらを見つめていた。

自分の家から持ってきてきたのだろうか、純白にふりふりのエプロンはウエディングドレスを彷彿とさせた。

「デバイスには無限の可能性が秘められているからな。ほら夜天の書だってまだまだ隠された機能とかあるんだろ？」

「俊が落書きしようとしたら赤い文字で『やめてください』って浮かび上がってきたんやから、なんかまだ機能があるかもしれんな」

「皆してその場から一瞬で逃げたよな」

「なのはちゃん泣いてたしフェイトちゃん固まってたし、アリサちゃんとすずかちゃんは腰抜かして大変やったな」

「はやては平気そうな顔してたよな」

「俊に抱きつけてむしろ嬉しかったで」

「……どうして六課の部隊長はこうもストレートな物言いが出るんだらうか。」

「ふっふー、それにしてもわたしがこつちを手伝っている間になんか色々ピンクにしてくれたみたいやなあ」

はやてが頬をぶくつと膨らませ前傾姿勢でジト目する。

「い、いや……そういうわけじゃなくて……」

「えいっ」

そんな掛け声とともに自分の唇に誰かの唇が重なった。

ちよつとの時間、一瞬で刹那的な重なりだったが、重なった瞬間とてつもない甘い何かが体を駆け抜けた。

小悪魔モードっていうのかな、そんな表情で俺に笑いかけてくるはやて。

舌で唇をちろりと舐めるはやて。

「なあはやて、なんか体が熱いんだけど……」

「それはきつと恋の魔法やな。抑えられへんならここでしてええよ

……？ わたしはいつでもokやし」

美少女三人組の中でも一番背が低いはやては、上目使いで俺の顔を見てきた。瞳にはうつつすらと涙をためている。

堪える俊、堪えるんだ……。いま変なことをしたら怒られるとい  
うか殺される。いまは俺のよろろを作っている場合ではないんだ  
……。でもこんな表情をしてるはやては可愛いし……。いったいど  
うすれば——どうするのが正しいんだッ!?

ぎゅっと抱きついてくるはやて。落ち着け、俺……。こんな流  
されながら行為に及ぶ若者が増えるからダメなんだ、気をしっかり持  
つんだ、ながらで雰囲気でしちやダメだ……。っ!

「あ、あのさはやて!」

「ん?」

「やっぱダメだ、そういった行為はもっとう……。付き合いつてい  
うのが」

「10年間の付き合いやろ?」

「言われてみればそうさ。あ、いや違う俺が言いたいの友達付き  
合いじゃなくて——」

「わたしってそんなに魅力ないんかなあ……」

「そんなことあるわけないだろ!」

しゅんとした顔と声で自分の体を眺めるはやてに思わず俺はそう  
力説し抱きしめてしまう。

「むしろ魅力しかない、出会ったときからはやては魅力たつぷりの女  
だったよ! 魅力がない女に命張るほど、俺は優しい男じゃない!」

つい強く抱きしめてしまう、力が入る。と、痛かったのかはやて  
が思いっきり俺を突き飛ばし後ろを振り向いてしまう。顔が見え  
ないがもしかしなくても怒ってる?

「あ、ありがとな……」

「お、おう」

声から察するに怒ってないみたいだけど、もしかして照れてるのか  
? こつちをチラチラと見ながら指をもじもじさせてどんだけ可愛  
いんだよ。また抱きしめたくなるじゃんか。さつきバカにされ  
たからな、今度は強気に行くぞ、俺だって男なんだからな。

一歩、また一歩とはやてに歩きだす。と、視界の端に虚ろな目を  
した様子でとろろを生産しているリンデイさんを捉える。



『フェイトと一緒に風呂入りたかったのに……フェイトと一緒に風呂入りたかったのに……フェイトと一緒に風呂入りたかったのに……フェイトと一緒に風呂入りたかったのに……フェイトと一緒に風呂入りたかったのに……』

……なにこの人怖い。

ま、まあでも声をかけておこうかな。放置しておくところちに帰ってきてそうにないし。リビングでフェイトが名前呼んでるし。

「リンデイスン——」

「キエエエエエエエエエエエエエエエエツ!!」

いきなりとろろぶっかけるのは反則だと思った。

## A, s12. 一撃必殺ホワイトブレイカー

「俺の入浴シーンとか嬉しいだろ？」

『俊くんの入浴シーンとかオレンジの皮の搾りかすと同程度くらいだよ。着替えここに置いてくよ』

「サンキュー」

リンデイさん主催の『ひよつとこ秋のぶっかけ祭り』とろろでとろとろな瞳を君にく』が終わった後、リンデイさんはフェイトが回収し俺は風呂に入ることとなった。リンデイさん娘離れが出来てなさすぎるだろと思つたが、フェイトをヴィヴィオに置き換えると俺も人のことを言えないのでリンデイさんの件では何も言わないことにした。

『俊くんもう皆食べ始めてるけどいいの？』

『いいんじゃない。料理ははやてに任せてあるし、なのはも戻ったら？』

『お膝の上にヴィヴィオを乗せて、隣でおかあさんの過保護すぎる愛情行為にお腹いっぱいの高町なのはは逃亡したのであった。ヴィヴィオはガーくんとウーノさんが面倒みてるから大丈夫だよ』

「桃子さんのなのはへの愛情は小中高の担任が家庭訪問に来るレベルだもんな。毎年恒例の行事になつてたよな」

『おかあさんがわたしのこと溺愛してくれてるのは知ってるけど、流石にこの年でお口あくんは恥ずかしいんだよね。部下だっているんだし』

「心配すんな。その部下からお口あくんされることになるから」

『えっ!? わたしってどんな扱いなの!? 上司らしくしてるのに!』

「え? なんだつて?」

『だから上司らしく——』

「え? なんだつて?」

トント

「俺が悪かった。俺が悪かったから無言でスリ硝子をトントンする

のは止めてくれ」

怖いよ、超怖いよ。目を瞑って頭からお湯流せねえよ。

なのはは俺の願いを聞いてくれたようでスリ硝子を叩くのを止めた。よかったスリ硝子は救われたのね。

さくて、丁度着替えも届いたし俺も上がりますかな。はやてばかりに任せておくわけにはいかないし、俺もヴィヴィオを抱っこしてお口あくんしたい。

ということ、ドアを開ける前になのはに一声かけることに。

「なの——」

『ねえ俊くん？ 20歳になったら……わたしはもう魔法少女じゃないられないよね？』

「……驚いた。なのはさんいまでも魔法少女のつもりだったみたいですよ。19歳とかもうババア一歩手前——」

ダンッ！

「ごめんなさい冗談ですっ！ 冗談ですからスリ硝子をひび割れまみれにするのだけは勘弁してくださいっ！ いま割れると俺のレイジングハートから赤色の魔力光が飛び出るから！ いいの!？」

そんな幼馴染のみつともない姿を見るのが嫌なのか、なのはさんはスリ硝子を壊すことを諦めてくれた。

「んで、いったいどうしたの？ なんか悩み事？」

『うくん……悩みってわけじゃないけど、このまま魔導師続けてもいいのかなーってね』

もう何年も一緒にいるのでなのはの冗談は声のトーンで分かる。だからこそ分かる。なのはのこの呟きが冗談じゃないということが。

『あ、べつにね？ いまの現状に嫌気がさしたとかじゃないよ？ 魔導師人生は順風満帆だし、収入も無職を抱えられるほどの額貰ってるし、可愛い部下も出来たしね。ただ忘れがちになるけどさ魔導師の仕事って死の瀬戸際に立つときがあるでしょ？ だからちよつと……ね』

含みのある言葉で締めるなのは。そこまで聞いて俺もやつとな

のはの言いたいことを理解した。魔導師の仕事が死の瀬戸際を歩くことがあるのはなのはを含め全員が知っている。とくになのはは9歳の頃に魔法と出会いなし崩しの事件に巻き込まれ、自分の意思で事件を解決に導いた。その時に痛いほど理解しているはずだから。心でも、そして体でも。魔導師になると決めたとき、桃子さんと士郎さん、そしてリンディさんを交えて一日話し合ったのだから。俺もそのとき会話を盗み聞きしてたから覚えている。魔導師という仕事の危険性をリンディさんは痛いほどなのはに話していた。

そしてなのははそれを承知した上で、自分の意思で魔導師になると決意した。俺も桃子さんも士郎さんも止めなかったのはなのはが自分の意思で魔導師になると決意したから。そんなのはがいま迷っている。

じゃあなんで迷っているんだ？

そんなこと、あの時と今を比較してみると一目瞭然だ。

「ヴィヴィオか」

『うん……』

まあ今と昔じゃ俺達の周りで変化したことなんてヴィヴィオ関連でしか思い浮かばないもんな。

しかしヴィヴィオのことか。これはなのはにヴィヴィオが魔導師を好いてないってことは教えないでおいたほうがよさそうだな。いま言うとなのはは深く考えないで魔導師辞めるかもしれないし。

「なのははどうしようと思ってるんだ？」

『わかんない。そこまで考えが固まってるわけじゃないし……』

でも、なんかいまのままってわけじゃダメだと思う』

「そんな状態のまま魔導師を続けると怪我するかもしれないなあ」  
それで空を自由に動けない体になったら元も子もないし。なのはみたいな天才だとそういうことがありそうだからちよつと怖い。

自信ゆえに過信する。実力が高い奴ほど自分の限界を見極めきれない奴って意外というもんだしな。

俺の怪我という単語に何か感じたのかなのはははスリ硝子越しに唸っていた。

『うくん……怪我かー。 相手が怪我することは常に考えてるけど、自分が怪我するってことはあんまり考えたことなかったかも。 擦り傷とかなら別だけど、俊くんが思い浮かべているような怪我はね』  
「お前は常に相手に怪我させようと考えて行動してたのか。 だからデストロイ高町って言われてたんだよ」

『えっ!? なにその通り名!? わたしのどこがデストロイなのっ!?』  
「え? 違うの?」

『どつちかというと、エンジェル高町だとおもっの』

自分で言っておきながら恥ずかしがるなよ。 スリ硝子越しでも顔真っ赤にして俯いてるのが分かるぞ。

「ま、俺にとってはその通りだけだな」

……ちよつとなのはさん、なんか反応してくださいよ。 こつちまで顔赤くなってきただろ。 いや、これは恥ずかしいとかじゃないぞ? 断じて違う。 のぼせただけだから!

『えへへ……そう言われると照れるかにやーにやんて』

「ネコなのは萌えッ!」

『ちよッ!? スリ硝子に突撃しないでよ!? 思わずレイジングハートで刺すところだったじゃん!』

咄嗟の判断でレイハさんをレイピアにするのは魔導師として満点だけど女の子としては減点だろ。 見たことないぞ、デバイスで人を刺そうとする女の子。 あ、シグシグがいたわ。

額から少々紅玉の滴を流しながら、なのはに質問する。

「でもなのはは飛ぶことは好きなんだよな?」

『うん』

それにね、そうなのはは続ける。

『他の人が聞いたら嫌味に聞こえちゃうけど、高町なのはって人物は空に愛されてるんだ。 空がわたしを守ってくれるの。 空がわたしに力を貸してくれるの。 墜ちる気がしないの。 だからかな、わたし自身の怪我に対する意識が低かったのも。 高いけど低いみた

いな感じ。 あ、皆には内緒だよ?」

別に嫌味でもなんでもないさ。　なのはが空に愛されてるのは皆が知ってることだから。　周りも、管理局も、次元世界も、だからこそお前はエースオブエースなんだと思うよ。　その不屈の心が空の心を奪ったんだ。　空はなのはを愛し、なのはも空を愛している。　俺のほうが空よりも先に好きになったのに。

「実際そうなんだから皆も気にしないさ。　でもまあ——」

スリ硝子の取っ手をかけ思いつきり開ける。

いきなり開け放たれたスリ硝子と全裸の俺になのはは驚いたのか、目をパチクリさせて俺を凝視していた。

ちゃんと笑えているのかな?　そう疑問を感じながらも、最高の笑顔でなのはの肩を叩き、しっかりと抱きしめる。　体を拭いていないため皮膚を流れる水滴はそのま

まなのはの服へと染み込んでいく。　それでもなのはは俺を突き飛ばしたりはしなかった。　きつと驚いて何も出来ないだけかもしれないが、それでも一向に構わない。　しっかりとなのはを抱きしめる。

「あ、あの……俊くん?　パジャマが濡れて——」

「魔導師を辞めても構わない。　このまま続けても構わない。　ヴィヴィオのことは俺と他の皆がしっかりとフォローするし、ヴィヴィオもきつと魔導師のことを理解してくれるよ。　ヴィヴィオは賢い子だから。　最高評議会のときだってちゃんと頭を下げてお礼を言えるいい子だから。　だからなのは、お前は自分の思うがままに進んでくれ。　お前の全てを肯定する」

ああ、風呂上りは素晴らしいなあ。　火照った体を冷ましてくれる。　だからきつとこの顔の赤みもすぐに誤魔化してくれるだろう。

「ばーか」

抱かれた彼女は小さく呟くと、笑いながら俺の手を離れた。

これだよ、この笑顔だよ。　この笑顔だけは誰にも渡したくない。

「バカでもいいさ。　バカも悪くない、こうして抱き合えるのなら」

「抱き合っていないよ。　一方的に抱きついてきたんだからね。　しか

も裸で。心が広いわたしじやなきや逮捕されるところだったんだから。このおばかさん」

何故だろう、バカつて単語は悪口に使うはずなのにいまの俺は笑えている。これも彼女の魅力の一つなのかな？

彼女は笑いながらバスタオルでいまだ水滴に濡れている髪の毛を拭いてくれた。

「ほんとにしようがないなー。忘れてたよ、わたしにはヴィヴィオ同様に19歳児の子がいたんだった。世話かかりっぱなしのね」

「その19歳児に怖いビデオ見たときに抱きつくのは誰だったかな？」

「さーて記憶にございませんで」

嘘つけ。高町一家総出でなのはを寝かしつけたことはいまでも覚えてるぞ。それから怖いビデオ禁止になったことも。

「ほらほら、そんな過去はどうでもいいでしょ。はい、顔は拭いてあげたから後は自分でやって。……それと、その……ソレも早くないとかして、ばか……」

視線を明後日の方向にやりながらなのはが指さしたものは、反り立つ延べ棒であった。お前も興奮していたのか？ わかるぞ、なのは可愛いもんな。お前がなのはを愛したのはいつからか？ 中学生くらいからか？ 小学生からか？

俺の延べ棒が恥ずかしいのか、なのははわぎとらしく咳払いをしつつ俺のほうをチラチラ盗み見る。もつと視線下げて。

アイコンタクトを交わすが、なのはは一向に視線を下げてくれない。

しようがない、俺のほうから攻めてみるか。

「レイジングハート！ セットアップ！ 刮目せよ！ これが俺の全力全開ッ！」

俺はなのはの目の前で摩擦熱を生み出すかのごとく擦る。ひたすら擦る。なのはがこちらを涙目で睨みつけるのさえもオカズにし、スナップをさらにきつくする。

延べ棒はまばゆいばかりの光を放ち、金の延べ棒へと進化する。

「なのはしゃがんでッ！ 一撃必殺——」

出す寸前でなのはのサマーソルトが鳩尾にクリーンヒット

←  
後ろに吹き飛ぶ俺

←  
ピュッ（ホワイトブレイカーが目の中に飛び込んだ音）

「助けてえええええッ!? なのはごめん！ 俺が悪かったよ!? 謝るから！ 謝るから、目ん玉の中で俺に挨拶してくる息子の息子を拭きとって!?!」

キモイよ！ これヤバイよ!? なにが『お父さん、先代の無念を晴らすチャンスです』だよ！

なのはがこの場から立ち去るのを気配で察知する。

聞こえてくる舌打ち、何故だろうものすごいチャンスを失った気がする。

それでも俺は叫び続ける。 なのはの名前をひたすら呼び続ける。

返ってきたのは黙れと叫びながら投擲されたロヴィータちゃんのアイゼンだった。



A, s13. あなたはあなたのままだから

「ったく、もう19歳で子持ちなんだからこんなバカなことしてんじやねえよ。あたしの胸に触ろうとすんなカス」

「すまん。洗濯板でどこに膨らみがあるのかわからなかった。でもこのほうがロリ成分が増えて俺的にはグツドだ」

「誰もお前のロリに対する気持ちなんか聞いてねえよ」

ひよつとこの両目を握りつぶすヴィータ。

「誰がお前の目ん玉の中から気持ち悪いもん拭き取ってあげてると思ってるのか?」

「誰が家の風呂ぶつ壊してくれたと思ってるの?」

「……それに関しては本当に悪かったと思ってるよ……」

ちらりとヴィータはアイゼンが仁王立ちでそびえ立つ風呂場を覗く。

「罰としていまから俺のことは『ダーリン』って呼んでもらうからな?」

「あたしの貯金を全部風呂場の工事費用に回してくれ。なんならいまからあたしが働く分の金も全部お前にくれてやる」

「あれ!? そこまでして俺のことをダーリンって呼びたくないの!? ちよつと傷つくんだけど!」

「お前のことが大嫌いだからな」

「ロヴィータちゃん、俺はロヴィータちゃんのことを愛してるよ?」

「前世に戻れ。腐った玉子」

「ロヴィータちゃん、それ10年間付き合いのある友人に向けて発する言葉じゃないよね」

ひよつとこのジュニアのジュニアを目から取り除き終えたヴィータは立ち上がりながら、抗議の言葉を発言するひよつとここに、「一度たりとも友人と思ったことはないがな。ほらいくぞ、馬糞」「ロヴィータちゃん、それ人に向けて言っているいい言葉じゃないよね」とても的確な言葉を用いて皆がいる部屋へと入っていった。

☆

全員が食事をしている——というわけではなかった。

食が細い者や食べ終わった者達はそれぞれ好き勝手にゲームや漫画で思い思いの時間を過ごしていた。

スカさんフアミリーとかその典型だろうな。

それでも、こちらから見る限り新人達とは打ち解けているみたいだしよきかなよきかな。

『みんなー！ ひよつとこさんの秘蔵のエロ本見るー？』

嬢ちゃん、キミがその手にもってる9歳のツインテールで縞パンニーソの女の子がランドセルをしょいながらビッチっぽく誘ってる表紙のエロ本を先生に返しなさい。さもないと先生が痛い目にありますよ？

「俊くん……？」

ほらっ!? もう先生の足首が折れる寸前だよ！ いいからそれ返せ！

「まあまあ俊くん、ここに座って少しお話しようか？」

なのはさん、足首折つてからのその提案は止めてください。

崩れ落ちるようになるのはの横に座り込む俺。　　というか比喩でもなんでもなく崩れ落ちた。　　シャマル先生がいるかいつて、彼女たちは人の骨を折りすぎではなからうか？

心の中で魔法少女を畏怖の対象として祭り上げていたところ、なのはが咳払いを一つして俺に向かって説教をしはじめた。

「いい俊くん？　俊くんがえっちな本を所持していることにはもう諦めの境地に達しているから文句はつけないけど、内容によってはこちらも取るべき手段をとるってことは前々から言ってるよね？」

「母乳でも飛ばすの？」

「キミの歯が一本一本飛んでいくんだよ」

なんて怖い女なんだ。　　歯を一本一本筆り取っていくなんて人間には到底無理な行いだ。　　流星はモ・モモコから生み出されし殺戮兵器といったところか。

「でも母乳をマッハ3で飛ばしたほうが確実に仕留めることが出来ると思うんだ」

「だからなんでさつきからわたしが母乳飛ばせること前提で話を進めようとしてるのっ!?!」

なのはなら出来るど踏んでるんだけどなあ……。

「まあなのはがマツハ3の母乳飛ばしが出来ないどわかつたんで俺はヴィヴィオのところにも——」

ガシッ

「おつと俊くん逃がさないよ」

くそっ! 逃げ切れると思つたのに!

「俊くん? わたしは別に俊くんが嫌いだからこんなことするわけじゃないからね? むしろ俊くんのが心配だからこんなことをしてるの」

「まあでもなのは、俺だつて二次元と三次元の区別くらいはついてるし性犯罪なんてバカなことしないよ」

「ほんとうかなあ……? じゃあちよつと質問。わたしがあの表紙みたいにランドセル背負つてあのポーズで下着とか色々見せつけながら俊くんのベッドにいたらどうする?」

「病院に連れてく」

……いたっ!?! なのはさ、なんで無言でそんな殴つて……っ!?!

「じゃあ質問その二。ヴィータちゃんがああ表紙みたいにランドセル背負つてあのポーズで下着とか色々見せつけながら俊くんのベッドにいたらどうする?」

「犯す」

いたっ!?! 女性の皆さん……ッ!?! ちよつと一列に並んで腹パンは勘弁してくださいッ!?!

「キヤロ、エリオ、今後10年間はその性犯罪者に近づいちゃダメだからね? 大丈夫、いざとなつたら私が二人と引き換えに体を捧げるから」

「ちよつとそこのフェイトさんっ!?! 冗談だよ冗談ッ! なんでマジな顔して教え込んでるの!?! ほら、俺が一步踏み出すたびにエリオとキヤロが一步後ずさりしてるじゃんッ!?!」

折角育て上げてきた大切な関係が砂のように脆く崩れ去つていっ

た音が聞こえる。

順々に腹パンをくらいながらも、なんとかエリオとキャロに誤解を解かせようと近づくがついにはフェイトに結界を張られる始末にまで発展した。ちよつとしたジョ

ークがこんなことになるとは。

しかしながら既に腹パンは佳境にまで達しており、俺はまだまだにピンピンしている。まだまだ腹パンには耐えられる。これでも鍛えているんだ。魔力付加なしの成人女性の腹パンなんて大した脅威――

「じゃあ2順目はみんな魔力付加ありでいこっか」

――あ、俺はここで死ぬんだな。

桃色の魔力を拳に纏わせながら笑顔でこちらに向かってくるのは。せめて死ぬならなのは蒸れた下着の下で死にたかった。

撲殺天使も逃げ出す笑顔のなのはに、俺も笑顔で応える。あ、ダメだ。これうまく笑えてない。

せめて一回で死にますように……。

「なあ……いつから此処は殺戮場と化したん？」

――そんな(俺にとつての)地獄絵図を消してくれたのは紛れもないはやての声だった。

「あ、はやてちゃん。ちよつとまってね、いま乙女のパンチを繰り出すから」

「なのはちゃんなのはちゃん、乙女のパンチは風が鳴るほど早くないで」

「もうなにしとるん皆。折角の席を台無しにする気なんか？」

流石は部隊長。そしてこの場においての一番の良識人。頬を膨らませ腰に手を当て皆を怒るはやてに、全員ともしゅんとした顔で頭を下げる。

皆への説教を終えたはやては、ため息を吐きながらこちらにやってくる。

「ごめんなあ俊、折角呼んでくれたのにこんなことになってもうて」

「あー……まあ俺も悪ふざけが過ぎたしな」

ふふと笑うはやて。

「こちらこそありがとな。来てくれたのに仕事してもらって。おかげでこっちは楽が出来たけど、はやては結構疲れたろ？ 大丈夫か？」

「これくらいなら問題ないで。これでも魔導師として訓練も行ってきとるから体力もあるし、元々料理は好きだから苦でもなんでもなかったで」

それに、そう続けてはやては笑顔を向ける。

「誰かのために料理を作れるって、とても幸せなことやおもうし」  
……この笑顔は卑怯すぎる。

幼い頃に両親を失ったはやてはずっと一人で生活をしてきた。

何をするにも一人ですつとしてきたんだ。

今の俺のように料理を誰かと作ったりすることもなく、誰かと会話をしながら食事を摂ることもなく、のんびり誰かと漫画やゲームをすることもできず、同じベッドで狭さを感じながら寝ることもなく、何気ない呟きも受けられずに霧散するだけ。

俺が出会うまでずつとずつと、彼女はその生活を続けてきたんだ。

思い出す。彼女と会った日のことを。

思い出す。大きな家で彼女と過ごした二人だけの時間を。

「そうだな。誰かのために料理を作れることって、とても幸せなことだよな」

「せや」

『あ、桃子さん。ワインでもどうですか？』

『いいですねー。それじゃ軽く飲みましようか』

『まっとお母さん。普通は一本のワインを二人で飲むものだよね？』

なんで一人一本なの？』

『あ、フェイトもどう？ あなたももうすぐ20歳なんだからちよつとは飲んでおきな』

『まだ未成年だから飲まないよ。それにヴィヴィオもエリオやキヤ口達がいるんだから』

『大丈夫よフェイト。酔ったら私が介抱してあげるから』

『大丈夫だよ。 あ、私はヴィヴィオの様子でもみてこよ——』

『逃がさないわよ、子猫ちゃん。 初めては私のものなんだから』

『誰か助けてッ!? 此処に危ない人がいる! 娘に手を出す気満々の危ない母親がいる!』

あの時は二人つきりで、はやては俺のために料理を作ってくれたけど、今ははやてだけの家族がいる。 いつもはやてのことを考えてくれる優しい保健室勤務の先生に、はやての約束は必ず守り通し、立ち塞がる障害を壊してくれる腹下しの剣士に、ちっこいくせに誰よりも頼れるロリっ娘。 寡黙だがいぶし銀で見せ場を作る犬。 ひまわりのように明るい、俺を心底嫌ってる妖精ちゃん。

ほんと、あいつらが来てくれてよかった。

でも——

「もし俺とはやてがあのまま一緒に二人だけの生活を送っていたら、10年後はどうなっていたのかな」

「ほえ?」

きよとんとした表情でこちらを見るはやて。 い、いやいやいや俺も何を言ってるんだろうか。 おかしい、ちよつと落ち着け上矢俊。

はやてがあまりにも可愛いから

って混乱するんじゃない。

咳払いを一つ行い、平静を装って話しかける。

「あー、はやて? いまのはだな——」

「な、なあ俊? い、いまから新婚さんごっこでもせえへんか? ベつに他意はないんやけどな?」

「あかんねん。 そんなことしたらウチ死んで舞う」

「しゅ、しゅん!? いきなり口調が変わったで!」

べ、べつに慌てているわけではない! ただ、エプロン着ながら、胸を押し付けながら、上目使いでそんな可愛いことを言われると男は誰でもこういった反応になって

しまうんだよ!

「ま、まあ口調はおいといて……とりあえずここに座ってからやな」  
すとんと下半身の感覚がなくなり膝から崩れ落ちる。 はやては

それを予期していたかのように受け止めてくれたが——いま何が起こったの？

「あかん、こっちもてんぱって思わず魔法使ってもうた。ほんとはワインで酔わせて介抱する振りしてベッドで押し倒す予定やったのに……。あんな態度取られてもついついしてしまっやんか……」

小声ではやてが何かをつぶやいている。俺の脚力の弱さに驚いたのか？

『まっとお母さん!? バインドまで駆使して娘を無理矢理酔わせようなんて母親のすることじゃないんだけど!? なのは助けて!』

『ヴィヴィオー、ちよっとお外にでよっかー。少し夜風に当たろうねー』

『はい! なのはママだっこ!』

『もうしようがないなー、甘えん坊さんなんだから』

『まってなのは!? 私もなのはに甘えたい! いますぐ抱っこしてほしいよ!』

床にぺたんと二人で座る。はやてとの距離は肩が互いに触れ合う距離だ。色情を高めるフェロモンがはやての体から漂ってくる。

思わず視界がぐらりと揺れる感覚に陥る。自分の体が自分以外の誰かに操られているような、そんな不思議な感覚が自分の体を支配する。

「な、なあ俊? 俊も夕食たべてへんやろ? えっと……俊のために特製のとろろご飯を作ったんやけど……」

そういうとはやては立ち上がり、一旦奥へと引っ込み、手に器を持って帰ってきた。

「俺のために? え? マジで?」

「うん。新妻はやてちゃんは旦那以外には料理を作らないタイプだから」

いつの間にかはやてが新妻になっていた。でもどうしてだろう、妙にはやてには新妻という単語が似合っている。

「料理上手で可愛くて勉強が出来る家事万能。なるほど、そりゃ新妻って単語がよく似合うはずだな……」

「おまけに夫婦の営みにも積極的やで？」

笑顔でそんなことを言いながら、俺の口にとろろご飯を持ってくる。折角なので食べさせてもらうことにして、口の中でゆっくりととろろご飯を咀嚼する。

「……………どうなん？」

「……………うまい」

「よしっ」

小さくガッツポーズするはやてをよそに、俺はそのままはやてから器を受け取りもぐもぐと食べ始める。いや、やばいよこれ！ めっちゃうまい！

なにも食べてなく空腹だったのも重なり、器になみなみ盛られていたとろろご飯をもの数分で食べ終わる。

「あ、俊。ほっぺにまでとろろご飯を食べさせんでもええんやで？」

「……!？」

「いや、ただ舌でなめたただけなんやからそんな驚かんでも……………」

「—それとも、興奮したん？」

俺の肩に体を預けながら笑うはやてに、思わずこくと頷きそうになる。い、いかん、ここで下手に頷いたらシグシグに殺されかねない……………」

「ここは平静を装って—」

「い、いや、まあ俺くらい女性経験がある奴だといまの行為なんて何も感じないというか当たり前というか——」

じーっ（テントをじつとみつめるはやて）

ピクンっ（挨拶するテント）

「——興奮するっというか」

こんなとき、正直すぎる俺の体が憎らしい。俺はまだヴォルケンに殺されたくないんだ。せめてヴィヴィオの入学式を見るまでは死ねない。

「ふふ、かわいいんやから。…………薬の効果が効きはじめるまでに3

0分ってどこやろか」

「え？ 薬って？」



「ううん、なんでもあらへんよ。ほら、これも俊のために作ったんだで？ あーん」

「い、いや自分で食べれるってば。シグシグあたりにでもそういうことはしたほうがいいんじゃないか？」

「シグナムは胸ばっかり見るからダメや」

「あいつはエロ親父のコアでも蒐集してたのか」

なんつー変態剣士だ。

「はい、ダーリン」

甘ったるい声でそんな言葉を言われると変な気分になってくる。きつと雰囲気にあてられたのだろう。俺ははやてのあーんに応

える形で口を開いた。うん、うまい。やっぱりはやての料理は最高だ。

「でも結婚したら、はやての料理を毎日食べるわけだから太るだろうなー」

旦那さんダイエットが大変そう。

「大丈夫やで俊。運動なら毎日するしな」

何故だろう、はやての運動という単語に変な想像をしてしまった。

うっ、しかも頭までくらくらしてきた……。

「(効いてきたみたいやな……)」

『ヴィータさん、ひよつとごさんどうしたんですか？ なんか目が虚

ろになっていきますよ？』

『んー？ まあ発作か何かじゃ——』

「ダーリン？ あー、皆、俊はもう寝たいみたいやからわたしがベッドまで運んでくるな」

『は、はやてっ!? ちょっとまって！ いや、「ありがとう」じゃねえよ、一言も祝の言葉なんて送ってないから!』

☆

室内の喧騒に耳を傾けながら、私は一人縁側で夜風に身を預ける。

室内で火照った体を冷ますこの風がいまは何よりも気持ちいい。

皆楽しそうだな。シグナムさんやシャマルさんやヴィータさん

達は2階に上がっていったし、ティアはナンバーズと楽しそうにお喋

りしてるし。

ナンバーズ……か。私はどう接したらいいんだろう？ 私と同じ存在の彼女達と。友達？ 姉妹？

「そもそもいきなり自分たちも戦闘機人なんですって言われても困るよお……」

ただでさえ自分が戦闘機人だったのはさんに打ち明けるのに四苦八苦してるのに……。

それにスカさん達もスカさん達だし。なんでいきなり私と同じ存在だって打ち明けて……全員にやにや笑ってたし。

「はあ……きつとこんな問題で悩むなんてバカらしいって思ってるのかなあ。でもでも、なのはさんに打ち明けていまの関係が壊れたりしてら困るし——」

「呼んだ？ スバル？」

「ひゃあっ!? な、なのはさんっ!?」  
「ん？」

い、いつの間来てたのか、なのはさんがヴィヴィオちゃんを抱っこして私の隣に立っていた。

……それにしても妙に子どもを抱く姿が様になってる。お風呂上りだから色気が増してるのかな？

「隣いいかな？」

「あ、は、はい！」

私の隣に座るのはさん。あ、ヤバイ、いい匂いが……私を誘う匂いが……っ！

座るのはさんに抱っこされていたヴィヴィオちゃんが、ガーくんと一緒にぴよんと庭に飛び出る。月明かりに照らされながら、ガーくん遊び始めるヴィヴィオちゃんはとても可愛くて思わず顔が綻ぶを肌で感じた。隣をチラリと横目で見るとなのはさんを同じなようで、ヴィヴィオちゃんの方をみてニコニコと笑っていた。

本当になのはさんは笑うと可愛い。

ガーくん追いかけてっこをしているヴィヴィオちゃんは私達の視線を感じ取ったのか、こちらを振り返ってぶんぶんと勢いよく手を

振った。私もなのはさんもそれに振り返す。

「ところでなのはさん、ヴィヴィオちゃんとガーくんは何をしてるんですか？」

「うーん、追いかけてっこかな？ それか鬼ごっこ」

「どうやらなのはさんも分からないみたいだった。でも子どもの遊びって大人には分からない場合も多いからなあ。」

しばし二人でヴィヴィオちゃんの動向を見守る。ヴィヴィオちゃんもなのはさんのようによく笑う子だ。なんか本当の親子みたい。

……いや、なのはさんは本当の親のように接してるんだろうなあ。

毎日見ているとそう思う。優しく抱っこするなのはさん、屈託なく笑うヴィヴィオちゃん。血は繋がってなくても二人は本当の親子なんだろうなあ。

「なんか悩みがあるんじゃないかにや？」

「へ？」

「顔に悩み中って書いてあるよ」

視線はヴィヴィオちゃんのほうを向いたまま、なのはさんは私に話しかける。

「このところずっと悩んでたみたいだから、ちよつと気になってたんだ。ほら、日記にも何か書いてたみたいだし、笑顔がぎこちなかったしね」

「わ、私の笑顔ぎこちなかったですか……？」

「うん。いつもの可愛い笑顔じゃなかったよ。不細工な笑顔だったもん」

この教導官の辞書には躊躇いという単語が登録されていないのだろうか。

たしか夏場にも可愛くないと言われた気がするけど。

「ま、まあ悩みといえは悩みなんですけど……」

「それは尊敬するなのはさんにも言えない悩みかな？」

「えつと……」

つい口ごもる。本当なのはさんに言いたい悩みなんだけど、何

故か言いだせない自分がいる。

それを察してくれたのか、なのはさんはそれ以上深く追求することなく違う話題を振ってくれた。

「そうだ、折角二人つきりになれたんだから昔話でもしようか。わたしとスバルが初めて会ったあの時のこと」

あの時と濁したのは出会いが火災の場面だったからかな？　こういう時のなのはさんの細かい気配りは嬉しい。

「初めて出会った時ですか、あの時は本当にもう死を覚悟していましたよ。でもどこかで誰かに助けてもらいたくて、咄嗟に出た言葉なのはさんが返答してくれて」

いまでも覚えている。颯爽と私を助け出してくれたあの純白の天使を。

「そうそう。もう視界に入れた瞬間に絶対に助けるって決めてたからねー。わたし不思議とそういう時のポテンシャルって通常の3倍くらいの力が出るんだよ」

「ああそれひよつとごさんの同じようなこと言っていましたよ。『なのはは誰かのためならどこまでも強くなれる。だからエースオブエースなんだ』って」

「……なんでそれを本人に言ってくれないの？」

たぶんひよつとごさんは言ってると思う。通じているかは別問題として。

頬を膨らませて怒るのはさんが可愛すぎて辛い。

本当にあの人がうらやましい。私はなのはさんのことが一人の女性として好きだけど、なのはさんは私のことを一人の女性として大好きってわけじゃないし。……それに女性限定でも私は一番じゃないもの。女性部門で一番はぶつちぎりでフェイトさんだろうし。なんだかんだで、ひよつとごさんいなかったら二人が結婚しそうだし。もう既に一緒に寝てるし子どもいるし、結婚してるようなものだし。

「女性同士でも子どもは出来る……」

「あの……スバル？　頭大丈夫……？」

はっ!? いけないいけない、折角なのはさんと会話してるんだからそっちに集中しないと。

「あ、ごめんなさい。でも、あのときなのはさんに抱かれて助けられた際にみた景色はいまの色あせずにしっかりと記憶にあります。」

なのはさんの表情も。だから私は魔導師になるって決めたんです。

なのはさんみたいになりたいって」

本当にカッコよかった。誰よりも、何よりも。

「でも助け出した後はわたしも色々慌ただしくって中々会話できなかったよね」

「そうですね、あのときはぽつんと私一人になっちゃって……。私ちよつと泣きそうになっちゃって、知らない誰かの服を掴んで離さなかつたんですよ。でもその時は怖くて、その人を顔を見れなかつたんです」

「へー。じゃあその人がわたしが来るまでスバルの面倒をみてくれたんだ」

「といっても会話らしい会話はしなかつたです。ただじつと私の後ろに立ってくれて、頭を撫でてくれました。でも、それがなんだか心地よくなって」

「ふふっ、その人がスバルに欲情しない人でよかつたね」

「えへへっ、本当にそうですね。あんな人だったらお兄ちゃんに欲しかつたかもしれません」

ちよつとだけ可愛らしく夢見る少女のように語ってみる。

「あげないよ?」

返ってきたのはドスのきいた上司の言葉だった。

「あの……なのはさん?」

「ただでさえ最近ロリコン化が著しいんだから、妹キャラのスバルがきたらダメダメ。スバルはわたしだけを愛してればいいの」

なんて殺し文句を使ってくるんだ、この人は。

「は、はあ……。べつにその人がいま何処にいるのか知りませんし、なのはさん以外に愛してる人もいませんけど……」

なんだろう、このなのはさんの反応。

「……よく考えればスバルは敵じゃないから問題ないか」

なんて酷いことを言うんだ、この人は。

なのはさんは自分で何かを納得したのか、うんうんと頷くと笑顔で私に話を振ってくる。

「で、それからわたしとスバルがちゃんと会話したんだよね」

「はい。あのときはとっても緊張しました。でも、なのはさんは優しく私を……抱きしめてくれて……」

誰かが私を抱きしめてくれる。離さないように、ぎゅつと力強く、だけど柔らかく。私を安心させるかのように抱きしめてくれた。

「こんな風に……?」

抱きしめたなのはさんが優しく語りかけてくる。

「……はい」

なんとかその一言だけを返す私。

「大丈夫、大丈夫。 なにも怖くないよ」

子どもをあやすようにぽんぽんと背中を叩くなのはさんの行動に、思わず涙が一筋流れる。

そこからは怒涛のような勢いだった。いままで我慢していた分、決壊したダムのように溢れ出る涙。なのはさんはその間ずっと私を抱きしめてくれた。

声を殺して、息をひそめて、なのはさんの腕の中で静かに泣く私。そんな私を心配したのか、遊んでいたヴィヴィオちゃんが自分のハシカチを差し出してきた。

「スバルどこかいたいの? ヴィヴィオもあたまぶつけたときに、なのはママにだっこしてもらったよ?」

「うっ……ヴィヴィオちゃん……ありがとね……」

「ヴィヴィオ、スカさんのところでちよつと遊んできてねー。スカさんがゴメットちゃんごっこしたいんだって」

「えっ!? ほんと!? それはいいそいでいかないと! いこガーくん!」

「オウトモサツ!」

なのはさんからの情報を聞いて急いでスカさんの元へ駆け出す  
ヴィヴィオちゃん。 ガーくんは後ろからヴィヴィオちゃんが転ば  
ないか様子を見ながら一緒にについてい  
った。

『やあヴィヴィオ君。 どうしたふぐう!? わ、私になんの恨みが  
……!』

『ヴィヴィオがゴメツトちゃんやる! スカさんは……モンダミン  
のやくね!』

『お口をくちゅくちゅし続けられればいいのだろうか……』

『どう? 少しは落ち着いたかな?』

『はい……』

ヴィヴィオちゃん達の声をBGMに私となのはさんは正面から向  
かい合う。

「私……ずっとなのはさんに言えない悩みがあつたんです……」

「うん」

「きつとなのはさんにとっては取るに足らない悩みかもしれませんが  
……それでも私は悩みを打ち明けてなのはさんから違う接し方をさ  
れるのが怖くって……。 でも、

なのはさんはずっとずっと私のことを心配してくれて……」

出尽くしたはずの涙がまた流れてくる。

ああ……もう何が言いたいのかわからなくなつてぐちゃぐちゃに  
なつてきた……。

「でも、そんななのはさんに打ち明けられない自分も情けなくて……  
でもやっぱり怖くって……」

なのはさんの指がそつと瞼を撫でる。

「そっか。 ごめんね? 二度もスバルに怖い思いをさせちゃつて」

なのはさんの言葉が心にすつと浸透していく。

別になのはさんは何も悪くないのに。 私が勝手に思い込んで  
だけなのに、それでもなのはさんは優しく謝ってきた。

ふるふると首を振る私。

「そんな、なのはさんは悪くないんです……。 ただ私に勇気がな

かっただけで……」

私はあの時の臆病な自分のままなんだ。あの時から何も変わらない。泣きながら、泣きじゃくりながら、ずっとずっとその場に立ちつくすあの頃と変わらない。

そんな私の手をなのはさんは強く握ってくれた。決して離すことない、そう思えるほどの強い力で握ってくれた。

「勇気がないならわたしが分けてあげるから。スバルの勇気が育つまでずっとずっとこのまま手を握ってあげるから。だからゆっくりでいいんだよ？」

優しく笑いかけてくれるなのはさん。

ああ……だから私はこの人のことが大好きなんだ。私が惚れたのは可愛らしい容姿じゃなくて、この優しく照らしてくれる光に惚れたんだ……。

大丈夫、なのはさんなら受け止めてくれる。

確固たる根拠があったわけでもないのになぜかそう感じた。気づいたら口が動いていた。

「私は戦闘機人なんです。スカさんの娘たちと同じ存在なんです。だから——」

もつと他にも言おうと思ったが、なのはさんは人差し指を私の唇にそつと当てた。

「そっか。よく話してくれたね。いいこいいこ」

なのはさんはあの時と同じように優しく頭を撫でてくれた。

頭を撫でながらなのはさんが話し始める。

「そっかあ、スバルは戦闘機人なのかあ。ふむふむ、それは一ついいことを聞いたなあ」

「……へ？」

思わずなのはさんの顔を凝視する。

「だって戦闘機人ってことは他の人には出来ないことがいっぱいあるでしょ？ そうなると色々な場面で活躍できるしなんでもチャレンジできるよ。あー、そうなると教導内容を変更しようかなあ。ヴィーたちちゃんと相談して——」



「あの……なのはさん？」

「ん？ どうしたの？」

「えっとその……それだけですか？」

「ふえ？ それだけって？」

「だからその……反応というかなんというか……」

「なんかここまで悩んでいた私がバカみたいだ。なのはさんは、

あーって感じで頷いた後

「別にスバルはスバルでしょ？ 戦闘機人だとしてもわたしの可愛い

部下だつてことには変わりないし。それにほら、わたしの周りつて

変人しかいなしそこに機人が加

わるだけのことだしね」

「だからほら——」

「そういつてなのはさんは、両手を広げてこういった。

「おいで。スバル」

「……………はいっ！」

ああ、やっぱりこの人は私の憧れであり、私が尊敬する人であり、私の初恋の人なんだ。

月明かりに照らせれ、温かい両手に抱かれながら、私は思った。

今夜はゆつくり眠れそうだと。

☆

「……………あの、どういうこと……………？」

隣には下着姿で手を握っているはやて、そして目の前には頭に手を置きつつため息を吐くシヤマル先生とロヴィータちゃん。後ろにはレバ剣を投擲しようとするシグシグにそれを止めるザファイラの姿があった。

この状況から考えられる結果は一つ。

「……………bookuhannaniwositandesuka？」

「落ち着けひよつとこ。未遂で済んだ」

「はやてちゃん疲れてたんでしようね。ベッドに入ってから3秒で

眠りましたよ」

「……………じゃあなんで下着姿なの？」

「シグナムが脱がせた」

「あいつのプログラムの中には変態親父が混じってるぞ、100%」

『離せザフィーラッ！ 何故あいつがよくて私が主はやてに近づけないのだ！』

『息を荒げながら主の服を脱がすお前を近づけさせるわけにはいかんだろ！』

「……まあでもよかったような惜しいことをしたような」

「なのはとフェイト対はやてというバトルが勃発するけどな」

「童貞万歳!!」

「（一生童貞という図式がもう成り立っているわけなんですけど……ひよつとごさんは気づいてないみたいですね）」

「（まあバカだからな。 それよりも、なのはのほうはうまく問題を片付けたみたいでよかったよ）」

「（ええ本当にそうですね。 流星はなのはちゃんです。 はやてちゃんも寝ちゃってますし、お開きに——）」

『だれかー、お母さんが吐いたから片付け手伝ってー』

「……」

リンディは娘から飲酒禁止令が通達された。

## A, S14. カルピスの化け物

残暑も既に過ぎ去ったこの季節、いつも通り俊はヴィヴィオに腕枕をしながら抱っこして寝ていた。腕枕で寝ているヴィヴィオは俊の服の裾を掴みながらむにやむにやと寝ている。ヴィヴィオの隣ではガーくんが足を折って寝ている。ヴィヴィオが落ちないように配慮した寝方だ。

短針は明朝4時を指していた。あと1時間半もすれば二人とも起きてくる時間だ。普段ならばの話であるが。

俊の腕の中で寝ていたヴィヴィオががさごそと起きる。眠り眼で寝ぼけてるヴィヴィオは隣で寝ている俊の頬をぺちんぺちんと叩き起こす。

「ぼよ〜……」

「んっ……ううん？ どうしたヴィヴィオ……怖い夢でも見たのか……？」

眠い目を擦りながらも、こちらはしつかりと意識を覚醒させながら愛娘の頭を撫でる。

ヴィヴィオは俊の疑問に首を振り、下半身をもじもじさせながら答える。

「ヴィヴィオおしっこしたい……」

「そっか……おしっこか。そりゃ大変だな……」

うんうんと頷く俊。

「——大変だっ！」

慌てふためく俊。

「ヴィヴィオまだ我慢できるか!？」

「もうちよつとだけならヴィヴィオがんばれる……」

「よし！ すぐ連れていくからな！」

両手を広げてまっているヴィヴィオを腋の下から抱っこして急いで階下のトイレへと走る。

「ふあ……ねむねむ。あれ？ 俊くん。奇遇だねえトイレの前で会うなんて。……ちよつとなんでわたしがトイレ行くときに狙い

打ちしたかのように来るの変態」

俊がヴィヴィオを抱っこしてトイレに向かうと、そこには丁度ドアノブに手をかけた状態のピンク色のネグリジェ姿の高町なのが立っていた。なのはも口ぶりから察するにトイレのために起きたのだろう。

「なのはトイレ開けて！ ヴィヴィオが催してる！ もう決壊寸前！」

「へ!? いやでもわたしもトイレに——」

「漏らせ！ 個人的にも漏らした姿を見たいから！」

「いやだよっ!? この年になって漏らすとか洒落にならないよ！ あと将来が不安になることをサラっと言わないで！ 絶対にそんなプレイしないからね!?!」

「とりあえずヴィヴィオ！ とりあえずヴィヴィオ！」

「あ、そうだ！ ヴィヴィオの泣き顔見たくないしヴィヴィオを先にして——いやでもわたしも結構ギリギリなだけど!?!」

「じゃあ一緒に入れば解決だ！」

「その手があった！」

ヴィヴィオを俊から受け取ったなのはは、もう泣く寸前のヴィヴィオを連れてトイレに入る。

『はいヴィヴィオ、もうだしていいよ。 えらいえらい、よく我慢したねー』

『えへへー、ヴィヴィオがんばった！』

『もういいかな？ ママもおといれしたいんだー』

『うーん、もうちよつとだけ』

『もうママ本当に危ないから!?!』

トイレの中からはのはの悲痛な叫びが聞こえてくる。

トイレの中で内股全開でもじもじとする19歳魔法少女。 娘の手前、笑顔を保っているが心なしか頬がヒクついており一人の状態であったのなら完全に慌てふためいている状態だ。 現在トイレを占領中のヴィヴィオは大分我慢していたのか中々動く気配がない。

「(ちよつ……本当にどうしよう……! 小さいときに俊くんの前で

やっちゃったけど、それはまだ小さいときだったからセーフなわけで……現在だともうお嫁にいけないレベルだよ……！ ヴィヴィオをどかすわけにもいかないし……！」

ヴィヴィオと会話しながら笑顔を保ちつつ、なのはは一人頭を抱える。この状況をどう脱すればいいのかを真剣に考える。

その時だった。トイレのドアをノックする音が聞こえてくる。

『なのは、大丈夫か？ いま俺の部屋に戻って取ってきたもんなんだけど——』

そういつて俊くんは何かをドア越しに渡してくる。流石俊くん、未来のわたしのお嫁さん頼りになる！

すっ（おまる）

……これでわたしにどうしろと？

俊くんはなんて体の張ったギャクをする人なんだろう。

『大丈夫だ！ ここには俺とヴィヴィオだけだから問題ない！ 俺も音姫によってそっちの音が聞こえないから！』

ドアから少しだけ覗かせている小型カメラを徹底的に破壊する。

「むしろ俊くとヴィヴィオだからこそ問題なだけ……！」

1人は（わたしのことが）好きな人で、もう1人は愛娘。この二人にだけは痴態は絶対に見せられない。見せたらもうにやんにやんプレイでもなんでもしてあげる。

と、そこでようやくヴィヴィオが終わったようで水の流れる音がする。ほっと安心したような表情でヴィヴィオは水でしっかりと手を洗った後、パパのまつ外へと出て行った。外ではヴィヴィオを待っていた俊がヴィヴィオに話しかける声が聞こえてくる。

なのははこの段階になってようやくゆっくりと腰を下ろした。

「はあ……よかった。なんとか母親の威厳と未来は守ることができた」

ほっと息を吐きながらなのはが安心してしていると、コンコンと控えめにノックをする音が聞こえてきた。

「ん？ 俊くん？」

『まあその……後片付けは俺がするから、落ち着いたら出てくれ。19歳でつてのは痛いかもしれないけど、別に俺は気にしないし、正直なのは漏らしたものを一滴残

さず飲み干したいと考えて——』

「俊くんキモイから消えて。あとセーフだから。誤解したままこの場を去らないで」

☆

「パパー、ヴィヴィオカルピスがいいー」

「だーめ。お茶にしときなさい。それか水」

「じゃあお茶にする!」

「ガーくんもお茶でいいか?」

「ウン!」

のどが乾いたというヴィヴィオのためにキッチンへとやってきていた。一番小さいコップにお茶をついでヴィヴィオとガーくんに差し出す。ヴィヴィオは嬉しそうにそれを受け取ると口に含み飲み込んだ。ガーくんもゆつくりと嚥下する。

「おいしい?」

「うん! ヴィヴィオいきかえった!」

「それじゃ寝ようか。まだ起きる時間まで大分あるしな」

「はーい!」

ヴィヴィオと手を繋いで部屋へと戻ろうとすると、丁度いいタイミングでなのはがやってきた。なのはも咽喉が乾いたのかな?

「あ、俊くん達もう寝るの?」

「おう。今日の弁当の注文とかあるか?」

「サンドウィッチがいい」

「オツケー」

「いつもありがとう、俊くん」

「好きでやってることだから気にすんな」

二人してえへへと笑いあう。ああ……やっぱりなのはは可愛いなあ。

なのはは鼻歌を歌いながら冷蔵庫の中からカルピスを取り出し原液

をコップに注いだ。

とぽとぽとぽ（なのはが原液を注ぐ音）

ドボドボド（俺がそのコップにお茶を注ぐ音）

ドツドツドツドツ（ついでにカフェオレも注ぐ音）

「なにしてんの俊くん!? 流麗な動作でなにしてくれてんの!?!」

お茶とカルピスとカフェオレの奇跡のコラボレーションが実現したコップを持ちながら抗議の意を示すなのは。

「それはごっちのセリフだなのは！ ほら、なのはがカルピス作ったからヴィヴィオが——」

「ヴィヴィオはおちゃでなのはママはカルピス……? なんで……?」

小声でなのはに答えている最中、ヴィヴィオが寂しそうな声で俺の服を引っ張ってきた。 うう……やっちゃったよ……。

「あー、あのなヴィヴィオ? これはカルピスじゃないんだよ。 な? なのは?」

「へっ!? あ、えつと、そうそう！ カルピスじゃないんだよこれが！」

急に話題を振られて焦ったが持ち前の笑顔で場を作る。 よし、ヴィヴィオが疑問符を浮かべながら首を傾げてるぞ！

「どちらがうの?」

「これはねー。 お茶とカルピスとカフェオレが合体した——オレカルピスって飲み物なんだよ」

カルピスは自己紹介しないだろ。

「……………」

なのはと二人して、やっちゃった、そう感じながら顔を見合わせる。しかし以外なことにヴィヴィオはそのオレカルピスに食いついてきた。

「オレカルピス? それどーいうの?」

説明を求められて笑顔が凍りつくなのは。 がんばれ、ママがんばれ。

「おいしい?」

「どうだろうねえ。　ちよつと飲んでみるねー。　……正直不気味すぎて飲みたくないけど——」

娘が見ている手前、絶対に残せない。　例えそれが不気味な色を添えているとしても。

覚悟を決めた表情でおカルピスを飲むのは。

くいつ（なのは口に含む）

ふるふるふるっ（こちらに向かって涙目で首を振る）

メキメキメキツ……（無理矢理飲ませようと強引に俺の口を開ける音）

飲ませようと延髄に深刻なダメージを負わせるなのはに抵抗を続ける俺。　やがてなのはが耐えられなくなったのか、右手で口を抑える。

あ、いまにも戻しそ——

ペツ

ヴィヴィオが俺のほうに注目している瞬間に流し台に吐き出すなのは。

「なのは……」

「……ヴィヴィオ見てないから見逃して」

そんなに不味かったのか……。

だからといって俺に処理を任せるのは止めてくれ。　ひそかに魔力を付加しながら追い込むのもやめてくれ。　ええいッ！　自分で処理しろ！

なのはに對抗して俺も負けじと押し込もうとする。

ヴィヴィオが不思議そうに俺となのはを交互に見る。　ヴィヴィオの中では飲み物Ⅱおいしいという図式が成り立っているから、互いに飲み物を口に押し込もうしている親の光景が不思議でたまらないのだろう。

「ねえガーくん、パパとなのはママは何をしてるの？」

「ソー、ワカンナイ」

首をぶんぶん振るガーくん。　……丁度いい、ガーくんにも飲んでもらって味を再確認しよう。　なのは一人の意見だと片寄りも出て



くるしな。

なのはおも俺と同意見だったのか、視線を一瞬交わした後に笑顔でガーくんをコップを差し出した。

「ねえガーくん？　ちよつと飲んでみない？」

「エ？　ナンデガーくん？」

「まあいいからいいから」

なのはおも差し出したコップを素直に受け取り傾ける。

「（；； 皿、）」

ガーくんのこんな表情はじめてみた。

心なしか痙攣までしてるし。　そんなにおもい代物なのか。

ガーくんはそつとなのはにコップを返し、とことこと歩いて俺の足にしがみついてきた。

……ガーくんにおもまでのダメーじを合わせるなんて……とんでもねえ代物だおレカルピス……。

俺に抱っこされながらガーくんの一連の行動を見ていたヴィヴィオは、こちらのほうを向きながら、

「ヴィヴィオやっぱりのまないでいいかも……。　パパー、もうねむいからねよー？」

なんて賢明な判断を下せるんだ愛娘は！　よし、そうだな！　もう寝よ——

がしッ

「俊くくん？　まだこのおレカルピスの処理が残ってるでしょー？」

ダメだよー、キミも原因の発端を担ってるんだから」

笑顔のなのには首根っこを押さええられてしまった。

「ガーくん、ヴィヴィオと一緒にわたしとフェイトちゃんのお部屋で寝ていいよ。　ヴィヴオー、フェイトちゃんに抱っこされながら眠るとすつごい気持ちいいからおススメだよ」

「ほんとっ!?　それはたいへん！　いますぐフェイトママのところに行かないとー！」

本当に嬉しそうにバタバタと駆けだしたヴィヴィオ。　ガーくんおもそれに追従する形でこの場を去っていった。

ガーくんあれから一言も喋らなくなつたな。

しかしそれはそれとして――

「なのは、いつもフェイトとそうやって寝てるの?」

「いつもってわけじゃないけど。結構な割合かな」

「そういえばお前ら修学旅行の時は手を繋いで眠ってたもんな」

「まって俊くん。どうしてわたしとフェイトちゃんその時の様子を知ってるのかな?」

「はやてがくれた。……一万で」

「俊くん気づいて!? それ買わせられてるから!」

でもとつてもいい買い物だったといまでも思う。手を繋ぎながら抱き合つて寝てるJKなんてそうそういないしな。

「つて、そんなことはいま問題じゃないよ。いまの問題はこのオレカルピスをどうするかだよ」

「そうだな……。じゃんけんで負けたほうが一口飲むって方法でいこうぜ」

「オツケー、それが公平だね」

二人して頷きあう。

「俺はパーを出すからな」

「じゃあわたしは俊くんがパーを出してくれなかったら泣くからね」

「えッ!? ちょッ――」

「最初はぐー、じゃんけん、ぽん!」

チヨキ(なのは)

パー(俺)

「やったー! わたしの勝ち! はい、俊くん口あけてー?」

「いやいやいやまって!?」

コップを俺の口に近づけるなのはにストップをかける。なのははさも不思議そうな表情でこちらを見る。

「いまのはおかしいと思わないか?」

「え? なんで?」

「いやだって……」

「あッ――」

なのははぽんと手を叩いて何かを思い出したかのような素振りを見せる。おつ、わかつてくれたか。

そう思った瞬間、なのはが俺に抱きついてきた。

「えへへ、ありがと俊くん！ やっぱり俊くんは優しいね！」

一瞬何が起きたのか分からなかったが、理解した瞬間俺はオレカルピスを飲み干していた。

☆

「フェイトママー！ だきー！」

「うぐつ!? んっ、あふあ……ヴィヴィオ……? なんでヴィヴィオがここにいるの……? 俊のお部屋で寝てたはずじゃ……」

フェイトの胸めがけて駆けてきたヴィヴィオは、ダイブする形でフェイトに飛びついた。ヴィヴィオの突進を胸で正面から受け止めたフェイトは肺から一気に空気を

吐き出しながら、目をくしくししながらヴィヴィオに問いかける。

「あのねー? パパはなのはママとオレカルピスのんでるから、なのはママがフェイトママとおねんねしなさいって」

「へー……二人がカルピスをねー。——二人でカルピス!？」

カルピスという単語でフェイトの頭に浮かんだのは決して娘には見せられないような光景であった。妄想ともいうが。

「ヴィヴィオ、ちよつとここでまってるね!？」

「いいよー! ガーくんねよ?」

「ウンー」

ヴィヴィオとガーくんが手を繋ぎながらベッドに横になったのを確認してフェイトは急いで階下に向かう。ちなみにフェイトはピントクのネグリジエ姿のなのはとは色違いの黒のネグリジエを着ている。

『……しゅんくんツ……! しゅんくんツ……!』

下からなのはが幼馴染を呼ぶ声が聞こえてくる。

「うぐ! 今朝ベッドに忍び込んでおけば——」

などと考えても後の祭りであるが、フェイトは自分で自分を責める。

二人がいるキッチンへはもうすぐだ。

フェイトはなのはの声を頼りにキッチンに歩を進める。まずフェイトの視界に映ったのは仰向けになつてる俊、そして俊に馬乗りになつてゐるのはだった。その状態でなのはは俊の名前を呼ぶ。

「俊くんッ！ 俊くん死なないで！ ああッ！ 俊くんの魂が口から漏れ出ちやう!？」

名前を呼びながら俊の口から出る白い球を必死に口に押し込んでいた。

「……二人ともおやすみー」

「ああまってフェイトちゃんっ!? お願いかないで！」

去つていこうとするフェイトの腰に必死にしがみつくなのはであつた。

A, s15. 休日（前編）

「ごろごろー、ごろごろー」

「ごろごろー、ごろごろー!」

休日の昼下がり、居間でなのはとヴィヴィオが体を横に倒してごろごろと昼食までの時間を貪り、キッチンでは俊が昼食の準備のためにピーマンを取出し刻もうとしていた。

「はっ!? いまパパピーマンとつたでしょ!」

ごろごろと遊んでいたヴィヴィオがピーマンの臭いを嗅ぎつけたのか、すぐさま起き上がり俊のいるキッチンへと走っていく。

『なんだよーヴィヴィオ。ピーマンちよつとだけしか使わないから大丈夫だつて』

『……ほんと?』

『ほんとほんと。一個食べれば大丈夫だから』

『えー! ヴィヴィオそんなに食べれないのに……』

『ヴィヴィオが自分のお皿にあるピーマンを全部食べることが出来たらパパがご褒美あげちゃうぞー』

『え? ほんと!?!』

『うんうん』

『じゃあねじゃあね! えーつと……んーつと……』

なのはの耳に聞こえてくるのはご褒美について一生懸命考えているヴィヴィオの可愛らしい声、そしてテレビから聞こえてくる女性向け男性特集のナレーターの声。テレビに視線を移すと黒髪をツインテールに結んだスタイルのいい女性が指さし棒で画面を指しながら喋っていた。

『このように、世の男性はツインデレとツインテールに弱いということが判明しました。それに萌え袖。特に可愛らしいリボンで纏められたツインテールに弱いみたいです。ちなみに私も今日はツインテールです。それにほら、萌え袖なんですよ?』

『……』

なのはの動きが止まる。

『ツインテールというとはやはり金髪というイメージが強いようですが、アンケートを実施した結果、そこまで髪の色にこだわらないという方が多いようでした。ただし、近くに金髪の可愛らしい女性がいる方は要注意です。あなたがその方よりナイスバディでなかったら勝ち目がないと思ってください。ちなみに私は昨晚彼氏に振られました。あの野郎、私より若い女の子のほうがいいなんてぬかし——』

『はい！　ありがとうございます！　お次は——』

無慈悲なナレーターという言葉を耳にしながら、背後に圧倒的な魔力量を察知し、俊とヴィヴィオがいるキッチンへと顔を向ける。そこには金髪で可愛らしいピンク色のリボンでツインテールに纏めたナイスバディな女性が黒のミニスカに縞々ニーソ、黄色のセーターで萌え袖を作って俊と楽しそうに会話していた。

『昼食作るの手伝おうか？』

『んー、そうだな。それじゃ手伝ってもらおうかな。そのリボン可愛いな。それに黒のミニスカ縞々ニーソで萌え袖なんて俺を殺しにきてるのか？』

『えへへ、俊のゲームや漫画とか読んで俊の好みを勉強したんだ。』

もう10年も一緒にいるから全部わかってたつもりだったけど、もうちよつと勉強しなきゃと思ったかな。でも人妻だけはやめてね？

それに私も女の子だからやっぱりいつでも可愛くいたいし。その……どうかな？』

萌え袖で口元を隠しつつ、上目づかいで俊を見るフェイト。口元を隠していない手でちよつとだけスカートの端を摘まんで首を傾げるその仕草は、同性からみたものでも頭がくらくらするほどの可愛さをもっていた。なのはでもくらくらするほどの可愛さだ、それが異性かつその子のことが好きな男ならば——

『ねえフェイト。俺がいまプロポーズしたらOKしてくれる？』

『ふえ？　う、うん。もちろんOKするよー！』

このようなことになるのは非を見るより明らかだ。

なのが見ている前で幸せ桃色空間が広がっていく。その中心

には二人の男女、そばではなんとかピーマンを昼食に出させないようにとアヒルに生ピーマンを食べさせる金髪少女と、ピーマンをむしゃむしゃと食べる白き使い魔。

何かがそこで収束されていくのをなのはは肌で感じた。

なのはの中で警鐘が鳴る。それに促されるようになのははキツチンに走り俊の背中に飛びつく勢いで抱きついた。

「うおッ!？」

予期しないなのはの抱きつきによるめく俊。なのははそんな俊に構わずにそのままぶらぶらとぶら下がりに続ける。

「あー……なのは?？」

「可愛らしいリボンでツインテールに纏めてる金髪ナイスバディの女性には俊くんにはまだ早いからダメ」

「お前は何を言ってるんだ……」

呆れた表情を浮かべる俊と、困った表情で首を傾げながら苦笑を浮かべるフェイトをよそに、なのはは喋り続ける。

「さつきテレビであつてたの。男性はツインテールに弱いって。

それも金髪ツインテールがそばにいたら一発KOされるって。俊

くんはフェイトちゃんにプロポーズしようとしたでしょ?？」

「いや……それはだつてフェイトが可愛かつたし……」

「フェイトちゃんが可愛いからつてすぐさまプロポーズとか——」

ぶらさがりからおんぶの形に移行したなのはの視界にはフェイトの姿が飛び込み、思わず言葉を止まる。美少女のなのはが思わず口を止めてしまうほどいまのフェイト

トの姿は可愛らしいということだ。

「フェイトちゃん……だいすき」

「なのはッ!? ちょっと最近のなのはおかしくないかな!? そっち系に片足突っ込んでないよね!？」

「い、いや、間近で見ると一層可愛かつたからつい。って、そうじゃなくて! フェイトちゃん、その服装、わたしの俊くんを誘ってるでしょー!」

「い、いや……私は別に……。って、いつからなのはの所有物になっ

たの。なのは俊の彼女でもないのに」

フェイトの言葉になのはが胸を抑えて後ずさる。

「そ、それは俊くんが奥手だからで……」

「なのはは待ってるだけなの？　へー……」

「そ、そんなことにやいもん！　ねっ！　俊くん！　夏祭りにキスしたりとか——」

「……」（上矢俊、思い出を振り返る）

「……」（高町なのは、思い出が蘇える）

「……」（両者顔を伏せる）

二人とも顔を赤くして照れ笑いを浮かべる。そんな二人の行動が面白くなかったのか、フェイトは俊の腕に自分の腕を組みこませ強引になのはを離脱させる。そしてそのまま方が触れ合う距離まで近づきなのはに勝利宣言をする。

「私は俊に押し倒されて下着脱がされていくところまでいったよ。

ね？　俊？」

笑顔を俊に向けるフェイト。俊の額には脂汗が滝のように流れていた。

俊の記憶の中にフェイトが話した内容の場面は一度も再現されなかったのである。そんなことを通常時の俊がしようものなら未亡人に焼き討ちにされるといふ結果が目に見えているので当然といえば当然である。フェイトとの関係を進めるうえで未亡人攻略は絶対に通過しなくちゃいけない問題なのだから。しかし俊が脂汗を浮かべる理由はもう一つある。

なのはが先程まで自分が持っていた包丁片手に光のない瞳でこちらをじっと見つめているからである。むしろ脂汗の原因は8割方こちらだといえよう。

「えへへ……俊くんはそんなことしないもんねー？　なのはしってるよ？　俊くんはなのはことがいちばんすきなんだって」

満面の笑みでこちらにじりじりと詰め寄ってくるなのは。

俊の脳裏に浮かぶのは、『高町なのは襲撃事件』の思い出。八神はやてと上矢俊が捕食対象の気分を味わうことになったあの凄惨な思



い出。それがいままさにフラッシュバックされていた。

なんとかしてこの状態ののを止めないと、そう思い体を動かそうとする俊だが抱きついたままのフェイトがそれを制した。

「うー！　なのはのわがまま！　俊はなのはだけのものじゃないんだよ！」

流石最強の未亡人の娘。　泣いた八神はやてとは違っていた。

もつとも、現在の八神はやてならフェイト以上のことを仕出かしそうな気がするのはいうまでもない。

フェイトの言葉にピクリとしたなのは、その頃には既に瞳のハイライトは復活していた。

「だってだって！　俊くんがフェイトちゃんを押し倒すとか——」

「なのは包丁もったまま俺に詰め寄んな!?　刺さる！　この距離は刺さる！」

包丁の直線上に位置する俊。　あと数cmで刺さる距離までなのは

はは体を詰めていた。

「俊くんは記憶にあるの！　押し倒した記憶が！」

「あるよね、俊！」

「いや……これがまったく記憶にないんだよな。　そんなことしてたら絶対に忘れないだろうし」

「ほーら！　フェイトちゃんがいつものように俊くんを押し倒したんでしょ！　それなら納得できるもんね！」

「なっ!?　ちよっ！　はやてじゃあるまいしそんなことしないよ！」

「二人とも、はやてがその場にいたら喧嘩になるからな、いまの会話……」

ため息交じりに、自分の腕の中で泣きながら二人と口論になっているはやてを想像する俊。

「フェイトちゃんの意地悪！　可愛さで攻めるのやめてよ！　あとその艶めかしい体を使って俊くん誘惑したりとか！」

「そ、そんなこといったらなのはだって可愛さを利用して、絶対領域見せたりパンチラとかしてあざといよ！　私服はいつもミニスカだしさ！」

「にや、にやいをいつてるのかぜんぜんわかにやいんだけど！」

「それに萌え萌えな二次元キャラみたいだし！」

「フェイトちゃんこそザ・金髪二次元キャラって感じじゃん！ そっ  
ちこそ萌え萌えだよ！」

「うー！」

「ちよつとまってくれ二人とも。なぜその情報を俺にリークしない  
んだ。何故自分一人の中で自己完結しちゃったのさ！ 俺まった  
くパンチラとか見てないんだけど！」

ちよつとしたキヤットファイトが勃発しているせいで、俊の言葉が  
二人に届くことはなかった。そんな中、俊の袖をくいくいと引つ張  
る幼女がいた。くりくりお目めに幼女特有の萌え萌え雰囲気  
纏った幼女は、自分のペットを指さしながら困った風を装って俊に話  
しかける。

「パパー、ガーくんがね？ ガーくんがピーマンたべちゃった」

「……そっか。ガーくんが食べちゃったのか……」

「うん」

あくまでガーくんが食べたことにして自分は関係ないことにした  
いヴィヴィオ。ガーくんも別段それに不満がないようで、何も言わ  
ない。

「だからね？ もうピーマンはないよ？」

「いや心配するなヴィヴィオ。まだ予備のピーマンがそこに——」

「パパだっ！」

その場から一歩動こうとした瞬間、ヴィヴィオは必死になって俊に  
抱っこをせがみだした。

「えー、ピーマン取った後でもいいだろー？」

「やあー、いまだっこしてー！」

小さな体軀をめいっぱい使って背伸びするヴィヴィオの姿があま  
りにも可愛かったのか、俊はデレデレした表情になり「しようがない  
なー」なんて言いながらヴィヴィ

イオを腋の下から抱っこする。抱っこされたヴィヴィオはえへ  
へと笑いながら子猫のように俊に頬を摺り寄せて甘える。

背後でキャットファイトが繰り広げているとは思えない光景である。

「パパー、なのはママとフェイトママなにしてるのー?」

「うーん……なのはがフェイトのスカートめくったり、なのはがフェイトの胸揉んだりしてるからなー。なのはママが変態ってことしかわからん」

「ち、ちがうよ!? ライバルの下着とかチェックしてただけだからー!」  
「な、なのは……んっ……」

「フェイトちゃんも変な声だすのやめとよ!?!」

慌ててその場から後ずさりするなのはに、フェイトはチロリと可愛らしく舌を出して再度俊に近づいた。

「えへへ、とっつた!」

ガツチリ腕組みホールドを決めるフェイト。ヴィヴィオを抱っこした状態の俊はなのはにらみつける攻撃で防御を下げられながらも、フェイトを拒むことなどできようはずもなく、

「さっ、早く昼食つくろ?」

フェイトの笑顔にただただ頷くしかなかった。

——ピンポーン

そこに来客を知らせるベルが鳴った。

その瞬間、なのはは、

「俊くん! ほら、はやくいかないと!」

そしてフェイトは、

「俊はいま忙しいからなのはがいきなよ!」

ここでも睨みあいが勃発、それに耐えかねた俊がヴィヴィオを抱っこしながら、

「あーもう俺が行くから! はい! なのはもフェイトも一緒にくる!」

そう言い残して来客が待っているであろう玄関へと足を運んだ。

二人とも指でつつき合いをしながらも渋々といった感じで俊の後に続いた。

「はいはい、どなたですかー?」

「どなたですかー?」

俊の後に続く形でヴィヴィオが問いかける。俊は問いかけながらもドアを開き――

「おっほ!」

目の前の光景に思わず声を上げた。

俊の目の前には9歳の頃の高町なのはがしていた変則ツイントールをし、ゆったりしたセーターで萌え袖を作り、ストレッチフレアースカートに縞々ニーソで合わせた八神はやてが笑って待っていた。

思わず声が漏れた俊にはやてはいやらしい笑みで近寄りながら、話しかける。

「なー俊? ちょっとイメチェンしてみたんやけど……どうやるか?」

くるりとその場で回り、身長差を活かして覗き込みながら聞く。

そのときに右手で萌え袖を作り照れ笑いの表情を作りながら、左手で心なしか胸を強調する。

「――素晴らしい」

ヴィヴィオをそっとおろし、はやてにゆっくり近づく。

「ど、どうしたんだはやて? なんつーか……いつもの数段可愛いんだけど……」

「そ、そんなにちがうん?」

自分の服装をマジマジと見るはやて。ストレッチフレアースカートの端をつまみ、パンチラギリギリのラインまで自分で持っているその仕草が、俊をより一層引き付ける。

スカートの端が上がることに、俊の体は地面に近づいていき、そして頭が地面の中に埋まった。

「パパっ!? なのはママフェイトママ!? パパがしんじやうよ!」

パパの頭によって陥没している地面を見ながら、その頭の上に足を置いている二人のママの名前を呼ぶ。

しかしママ二人はそんなことなどお構いなさなようで、こめかみをヒクヒクさせながらはやてと対面していた。

「はやてちゃん、今日はなんでここにきたのかな?」

「ん？ リインとザファイラの散歩にヴィータが同行して、ヴィータが心配だからってシグナムがそれに同行してて、シヤマルはスカさんと一緒に新薬の実験のために本局に朝から行っておらんのよ。折角の休日なのに一人でいるのは寂しいなあと思ってたら、いつの間にかここにきてて」

「……じゃあ遊びにきたわけ？」

「いや俊を迎えにきただけやな。遊びはわたしの家で……なあ？」

語尾を艶めかしい声で俊に向かって放つと、そのまま俊に胸を押し付けてくるはやて。ただ地面に陥没している俊に胸を押し付けたところで、生死を彷徨っている俊はそれどころではないだろう。

なのはの額に怒りマークが何個も浮かび上がる。

「今日の俊くんの予定は家族と一緒に過ごすことで埋まってるから。遊びに行くのはまた今度にしてくれるー？ あとわたしも久々にはやてちゃんの家に行きたいから、俊くんが行くときはわたしもついていくね！」

そういいながらはやての手を取るなのは。その笑顔だけは抜群に可愛いものだった。あくまで笑顔だけであるが。しかしはやても負けていなかった。

「いやいやなのはちゃんは仕事で疲れてるやろし、折角の夫婦二人っきりの時間なんやからなのはちゃんがいると邪魔なんよ」

こちらも笑顔でなのはの手を握りながら棘をばらまく。棘が体中に突き刺さったなのははこめかみをヒクつかせながら握った手に力を込める。それに反応するかのごとくはやての手にも力がはいる。

両者ともに笑顔だからこそ、その周りに放たれる黒い靄が一層の恐怖をかきたてる。

それを敏感に感じ取ったヴィヴィオは目に涙を溜めてフェイトのスカートを掴まみ、屍の手を握る。

「ん？ どうしたのヴィヴィオ？」

「……なのはママとはやておねえちゃんこわい……」

スカートを掴ままれたフェイトははっとした表情になりすぐさま

ヴィヴィオに笑顔を見せた。

「大丈夫だよヴィヴィオ。でもここは危ないからパパとフェイトママと一緒に布団にいこっか」

「うん！ えほんよんで？」

「うん、もちろん」

決壊寸前のヴィヴィオの頭を優しく撫でると、腋の下から手を入れゆっくりと抱っこし、屍の手をしっかりと繋ぐとピリピリする二人に笑顔を向ける。

「あ、私はヴィヴィオと俊と部屋にいるから。二人でファイトっ！」

がちりと掴んだ手は離さずに、泣き目のヴィヴィオを抱いたまま家に入っていくフェイト。なのはやてが見守る中、玄関からはガチャリという音が鳴った。

「フェイトちゃんいま鍵閉めたよね!? 当たり前のように閉めたよね!?」

「ちよっ！ それは卑怯な戦法やおもうで!? フェイトちゃんちよつと話し合いの場くらい設けて！」

なのはとはやてが二人して玄関に向かって叫ぶ中、フェイトはヴィヴィオと屍と一緒に布団でほくほく笑顔であった。

A, s 16. 休日（後編）

「俺の記憶がない間に何が起こったんだ」

「えつと……なのはとはやてが二人つきりにしてほしいとお願いしてきたから、私が気を利かしてヴィヴィオと俊を連れて家の中でゆつくりしてたくらいかな？」

「そうか……。こいつらは殺し合いでもしようと考えてたのか？」

目の前に座っている二人の魔法少女はお互いに頬を膨らませて、そつぽを向いている。俺が作った昼飯はしつかりと食べながらであるが。場所は既に玄関からリビングに移っていた。俺がはやてのパンツ鑑賞しようとした瞬間から意識がなくなり、気が付けばフェイトとヴィヴィオの抱き枕になっていたからサツパリわからん。なんで二人ともこんなに空気がギスギスしてるんだ？

「パパピーマンたべる？」

「うーん、パパもピーマンあるからいいかな。ほら、ヴィヴィオもピーマンたべて——」

「そっかあ。フェイトママたべる？」

「おーいヴィヴィオちゃんパパを無視しないでくれー」

フォークで刺したピーマンを俺の隣にいるフェイトに向けるヴィヴィオ。このピーマン嫌いもなんとかしないととは思うけど、どうやって克服させていこうか。

「フェイトママもピーマンあるから大丈夫だよ。というかヴィヴィオ、今日のおかずはピーマンの肉野菜詰めチーズ入りなんだからピーマンあげたら——」

「はいガーくん」

「アーン」

「もしもーしヴィヴィオ？」

フェイトもピーマンを食べないと分かった途端に捨てるのか。

子どもってこういう所が恐ろしいところだなあ。というか、お願い一つ聞く約束でもピーマン食べるの嫌だったのか。それとも目の前に置かれた実物を見て、約束なんて忘れたのかな？

フェイトの席は俺の隣だ。 というよりも、フェイト・俺・ヴィヴィオ・ガーくん順に並んでいる。 対する向かい側はなのは・はやてだけである。 明らかに場所がおかしい。

「そういえば、今日は元々庭で昼食を食べる予定だったんだけど、皆室内でいいのか？」

ビクッ！

庭という単語を聞いて肩を震わせた魔法少女が約2名。

「い、いや、庭より室内のほうが情景よくて気持ちがいいんじゃないのかな？ ね！ はやてちゃん！」

「そ、そうやな！ なのはちゃん！ やっぱ庭より室内やな！」

先程とは打って変わった表情で息を合わせて野外食事を拒否するなのはとはやて。 明らかにおかしい、絶対に俺がノビてる間に何かがあつたんだろうな。

「……フェイト？ なにかした？」

「えっと……ヴィヴィオと遊んでたらうたた寝しちゃって、気が付いたら鍵開けるのをすっかり忘れて……」

「うう……玄関の外に放置されるのがこんなに怖いことだなんて……」

「最初の10分はまだよかつたんや……。 その後の50分間がもう涙が出てくるほど情けなくて……」

二人とも放置されたときの心境を思い出したのか、瞳にハイライトを消して沈んだ表情で昼食を食べる。 ……正直物凄く可哀想になつてくる。 思わず抱きしめてあげたくなるほどだ。

チラリと横目でフェイトを見る。 フェイトもフェイトで反省とつか後悔というか、しゅんとした表情をしていた。 いやまあ、フェイトが悪いとは限らないし、元々なのははやてがモメにモメたのが原因かもしれないなあ。

「パパー、ヴィヴィオおかわりー」

「おー、はいはい。 ちょっとまってねー」

差し出したヴィヴィオの皿に俺の皿の手をつけていない部分だけを。 むろん、ピーマンもだ。



「……………」(固まったまま俺を見つめるヴィヴィオ)

「いや……そんなに悲しそうな表情でパパをみてダメだぞ？　ピーマンさんだつてヴィヴィオに食べてほしいって泣いてるぞ？」

「ピーマンさんはパパだからダメ」

「こらヴィヴィオダメでしょ。　ピーマンは変態じゃないんだからパパと一緒にしちやダメ」

「まってフェイト。　いまさらつと俺のこと変態にしなかつた？　否定はしないけど、別に否定は出来ないけど」

「そつかあ。　ピーマンさんはパパじゃないのかあ。　フェイトママたべる？」

「逆に食べさせてあげよつか。　はい、あーん」  
「やつ」

手を交差させて嫌がるヴィヴィオ。　明らかな否定のポーズだが、そこまですてピーマンを食べたくないのか。　お前は哲学する柔術家か？　ちよつとこのままじゃ心配になってくるぞ。

「うう……俊ヴィヴィオが私のピーマンを食べてくれないよお……」

「ま、まあまあ、ゆつくり克服させていけばいいからさ」

「うう、じゃあはい。　とりあえずあーん」

ヴィヴィオに断られたのがシヨックだったのか、フェイトはヴィヴィオに食べさせる予定だったピーマンを俺の口に運んでくる。

なんと役得なんだろう。　差し出されたピーマンを咀嚼しながらそう考えていると、

「……………」(何も言わずに黙つてピーマンを差し出す向かい側の二人)

……俺だつてピーマンはそこまで好きじゃないんだけどなあ。

「浮気は絶対に許さないからね、俊くん？」

「わたしは分かつとるで、俊？」

断る術は持ち合わせていなかった。

☆

昼食を食べ終えた俺達はなんとなく携帯ゲーム機片手にデザートを食べしていた。　今日のデザートはあんみつである。　円形に並ん

だ俺達はあるみつをばくばく食べながら、どこか遊びに行かないかと計画を立てていた。遊びに行くことには全員賛成したが、今回はヴィヴィオもいるのでヴィヴィオが退屈しない遊び場ということで揉めた。俺のアダルトショップ巡り案は反応すらしてくれなかったです、まる。

大人しくヴィヴィオを膝に座らせてヴィヴィオの髪を編み込みしている、なのはが勢いよく手をあげた。

「わたし久しぶりにボウリングに行きたい！わたしと俊くとヴィヴィオペア対フェイトちゃんはやてちゃんガーくんペアで対決しようよ！ねっ!? ねっ!?」

「ちよーつとまつんやなのはちゃん！そのペアの組み合わせには疑問を感じるで！」

「そうだよなのは！此処は私と俊とヴィヴィオとガーくと二人とということだ！」

「残念でしたー、俊くんはわたしと一緒に一番嬉しいもんね！それに、二人とも今日は超ミニスカでしょ？そんな姿でボウリングなんてしたらどうなるかなあ？」

にやにやと極悪っぽく笑うのは。なのは自身が可愛いから全く怖くないのだが、それは言わないでおこう。しかしそうか……ボウリングかあ、確かに体を動かすのはいいかもしれん。それに——合法的にパンツ見放題だしな！

『いや、べつにそれはかまわへんけど。むしろこの恰好は見せるためにしてるもんやしなあ』

『わ、私ははやてみたいな考えじゃないけど、俊が見たいっていうのなら別に隠さなくてもいいかな……。それに今日は攻めるって決めてたし』

『う、うぐう……っ！ふ、二人ともずるいの！なのはもミニスカにする！二人のミニスカよりきわどいミニスカがあるもんね！』

『はあ………』

思わずこれから訪れるであろう桃源郷を考えながら拳を握りしめると、編み込みのため大人しくしていたヴィヴィオが顔だけこちらに

向きつつ聞いてくる。

「パパー、ぼうりんぐってなーに？」

「んーっと、10本の棒を大きなボールを転がして倒すゲームのことかな。ちよつとゲームで練習してみよっか」

「うん！」

携帯機ゲームのカセットを入れ替えて起動する。ヴィヴィオの目の前にそれを持っていくと、ガーくんも興味があるのかヴィヴィオの横にピッタリとくっついて画面を凝視しはじめた。

ヴィヴィオとガーくんにとっては初めてのボウリングか。こういうのは一番初めが肝心なんだよなあ。最初が楽しければその後もその遊びを楽しく続けることが出来る。

「おー！ これたのしい！」

「ガーくんモ！」

「きようはこれを見んなでするのかー。ヴィヴィオたのしみ！」

画面を見ながらきやつきやつきやつきやつきとはしゃぐヴィヴィオとガーくんを見ながら思う。

今日がヴィヴィオとガーくんにとって最高の休日になるように頑張ろう。

それが親の務めなのだから。

☆

—某ボウリング場—

「いや、お前らが出かける準備に1時間もかけるからおかしいとは思っていたよ。なんせ素材が抜群なんだから化粧なんてほとんどしなくていいし、服もセンスいいから全部可愛いからな。そんなお前らがなんでこんなにも時間をかけているのか考えていたが——なるほど、こういうことか」

今日来たのは車で20分移動した場所になるボウリング場だ。

ボウリングってのは遊びでやる分には性別も年齢も考えないスポーツだから休日になると混むんだよこれが。俺らも学生の頃行っただけど混んで遊べないってこともあったもんだ。とくにカツプルとかな。あいつらイチヤイチヤイチヤイチヤイチヤイチヤイチヤ



『でも俊のお宝の中では20後半でもロリ系って表現を使う女性が沢山いたから私達もまだまだ萌え萌えは使えるよ。 それになのはは萌えの天才だから』

『あー……確かになあ』

「なんか嬉しいような悲しいような……。 ま、まあでも大丈夫だよ俊くん。 わたしには俊くんだけだから！」

ぎゅつと誰かが抱きついてくる。 この胸の感触、この形——紛れもなくなのはのおっぱいだ！

「ありがとうなのは。 キミはやはり天才だ」

「……最低」

ぼそりと呟くなのはの声が妙に冷たい。 何故だろう？

「ま、俊くんだからしょうがないか。 ほら、俊くんさつさと登録しよう！」

「お、おうそれもそうだな！」

さーで、またとないパンチラ量産舞台だ！ 本気出すぞ！

☆

「ねえおかしくない？ なんで三人とも別のレーンにいて全員俺の名前入れて登録してるの？ お前達別居中の夫婦なの？」

どうしてこうなったのか。 僕にはまるでわからない。 後ろから三人のパンチラをニヤニヤしながら鑑賞し、あわよくば嬉し恥ずかしハプニングとか手取り足取り腰とりの指導とか想像してたのに三つのレーンを行ったり来たりじゃ落ち着いて座ることもできないぞ……。

「はい俊！ がんばって！」

『俊くんはやくー！』

『俊ー！』

『はやてちゃんもフェイトちゃんもやめてよー！ 俊くん困ってるでしょー！』

『そういうなのはちゃんだって——』

ギャーギャーッ！

「なんか鳥が騒がしいね。 あ、もうちよつと投げる速度落としても

大丈夫だと思うよ?」

「ふえ、フエイト胸が当たってるんだけど……!?」  
「えっち」

たったいまはやてのレーンで投げ終えたというのに既にフエイトは俺のボールを持ってスタンバイしていた。それはもう屈託ない笑顔で。俺がボールを持つと彼女は隣で腕組みし、投げれないように体を寄せる。まるで彼氏とデートに来たイチヤイチャカップルのような気分だ。しかしそれは後の二人も同様であった。なのはもはやてもニコニコとした笑顔で自分の番のときも俺が来てからしか投げないし、本当に幸せそうだった。

だからこそ、俺も口では悪態をつくけど止められない。彼女たちが幸せそうなら俺はそれでいい。自分が頑張ればいいだけの話だから。自分が体動かして彼女達が笑顔を浮かべてくれるなら。

でもどうしてだろう? 自分の中が何か引つかかる。いまにも地雷を踏みそうな――

「ヴィヴィオつまんない!」

その言葉で全員の動きが止まった。俺はゆっくりと振り返る。なのはのレーンにじつと座ったまま、いまにも涙をこぼしそうな5歳の幼女を見つめる。

「えつと……ヴィヴィオ?」

「ヴィヴィオもうかえる!」

「ど、どうして?もしかしてボウリングつまんなかった?」

隣にいたなのはがしゃがみ込み、ヴィヴィオの目線と同じ高さで語りかける。対するヴィヴィオは涙が溜まっていた目を袖で拭きつつ答えた。

「だってなのはママもフエイトママもはやておねえちゃん、みんなばらばらだもん。パパはずつとはしつてるしヴィヴィオつまんない……。ヴィヴィオもうぼうりんぐきらい……」

ぎゅつとなのはに抱きついたヴィヴィオ。そりやヴィヴィオにとつちや楽しくないよな。折角皆で遊べると思ってきたボウリング場なのに、蓋を開けてみれば全員とも違うレーンで遊んでるんだも

んなあ。 ヴィヴィオの想像してた未来予想図とはかけ離れた図だろうな。

ボウリング場にはヴィヴィオの鼻をすする音だけが聞こえていた。 既にはやとフェイトも俺の隣に来ていたが、二人ともバツの悪そうな顔でおろおろしているだけである。 非は完全にこちらにある。

その非はなにもなのはとフェ

イトとはやてだけじゃない。 俺にもある。 俺だつてこのレーンの組み合わせになった瞬間に反対するべきだった。 俺の身体能力をもつてすればスライディングしながらパンツを鑑賞することができるのでこの状況に甘えていたんだ。 目先のパンチラに目がくらんでしまったのだ。 いわば好きな相手のパンチラが俺の思考判断を狂わせた。 そしてその結果、ヴィヴィオは――

「ごめんねヴィヴィオ。 なのはママ達が悪かったよ。 自分たちのことばかり今日は考えちゃつてごめんね……」

なのはがあやすようにヴィヴィオを抱っこし頭を撫でる。 ヴィヴィオは胸に顔を埋めたままくんと小さく頷くだけに止めた。 ヴィヴィオが泣いているのかどうかは定かではないが、最悪の休日になったことだけは確かである。 完全に俺の失態だ。 三人ともすつごい暗い顔してるし、娘は泣くし。 俺もなんだか泣きたくなってきた。

もういつそのまま失禁でもしようかと考えていた直後、隣にいたフェイトの横を風のように通り過ぎ、なのはの胸に顔を埋めていたヴィヴィオに声をかける人物がいた。

「小さくて可愛らしくて愛らしいお客様。 申し訳ございません。

私のほうで手違いを起こしてしまいました。 先ほどまでのレーン分けなのですが、あれは昨日の合コンでのレーン分けを見間違えて組んでしまったものです。 長年この業務に努めていますがこのような失態をしたあげく、あなたのような小さくて可愛らしいお客様に嫌な思いをさせてしまうとは……恥ずかしい限りでございます。 正しくはこのようなレーン分けでした」

そう言つて深々と頭を下げた店員は機械を操作する。 何回かの

電子音の後、レーン分けの表示は、なのは・しゅんから、なのは・フェイト・はやての二組目としゅん・ヴィヴィオ・ガーくんの二組目に分かれていた。

「席もバツチリ隣通しでございます。お若い夫婦とそのご友人にもご迷惑をおかけしまして、なんとお詫びしたらよいものか」

店員はオーバリアクションを取りながら悩みだした。

そこにヴィヴィオの小さな声が聞こえてくる。胸に顔を埋めたままだが、ヴィヴィオの要求はバツチリ聞こえていた。その要求に店員は笑顔で応える。

「わかりました。それでは少々お待ちください」

深々と頭を下げた店員はすぐに要求されたものを取りに奥へと引っ込んだ。

それと同時に、ヴィヴィオの明るい声が聞こえてきた。

「えへへ、パパといっしょよ！なのはママといっしょよ！フェイトママといっしょよ！はやておねえちゃんといっしょよ！ガーくんといっしょよ！」

「そうだよー、もう誰も離れたりしないからね」

「せやでヴィヴィオちゃん。まあ今後離れることがあるとしたら……その人の命が絶たれたときやな」

「ふえ……」

「ちよつとはやてちゃんっ!? いまのヴィヴィオは泣き虫モードなんだからやめてよー！」

「ヴィヴィオー、フェイトママがだっこしてあげるからおいで」

「うん！」

なのはの胸からフェイトの胸に飛び移るヴィヴィオ。やはり巨乳のほうがいいもんな。わかるぞ、その気持ち。

「俊くん……?」

「うひゃあっ!」

「いま失礼なこと考えてなかった?」

「め、滅相もございませんッ!」

瞬時に背後に周りこみ頸動脈を確実に押さえてくるなんて管理局



のエースオブエースは化け物か!? あ、でも胸は気持ちいい……。俺の考えを見抜いたのか、なのははすぐに飛びのき胸を隠す仕草を取る。

「……変態」

「およびでしようか?」

「なんか悲しくなってるから返事するのやめて!」

「でも名前を呼ばれたから……」

「キミの名前は上矢俊でしょ!」

「ふッ、懐かしい名だ。その名をまた聞くことになるとはな……」

「いやいや、現役で使ってるでしょ。また厨二病でも再発したの?」

「な、なわけないわい!」

「はいはい……。ほら、早くお礼言うよパパ」

「ですなママ。すいませーん! ——って、あれ?」

スタッフが引っ込んだスタッフルームを尋ねると、そこには先ほどヴィヴィオが要求していたストロー付きカルピスと手紙がぼんに添えられていた。なのはの方に首を向けるが、こちらの言いたいことが分かっていいるのはも首を横に振ることで応えた。

「……奇術師か何かか?」

「いやいや、わたし達Sオーバー3人に勘付かれない人物なんて早々いないよ。これでも魔導師だよ? 平時のときでも察知する能力を下げることはないよ」

「その割には俺の覗きに気づかないときもあるよな」

「……まあ見てほしくないわけじゃないし……」

いきなり小声になったので聞き取れなかったが、まあ殺すという単語はなかったっぽいし大丈夫だね? 家に帰って殺されないよね? ?

ちよつとだけ幼馴染の小声の声に心臓をバクバクさせながら、ぼんにカルピスと一緒に乗っけてある手紙を取る。隣でなのはが覗き込んでいるのを確認して、俺も声に出して読み上げた。長文ではないが、あまり意味のわからない文章であった。

曰く、『その他のレーンにも順次振り分けておりますので、今日はこ

ころゆくまでご堪能ください』とのことだった。

なのにも意味が分からなかったのか、首を傾げてこちらを見てくる。しかしながら、俺だってこれは理解できない。そうやって二人で首を傾げていると、ふいになのはが体をビクンと跳ねさせた。

「……バイブ？」

「違うよバカ！　はあ……今日は折角楽しい休日になると思ったのに……」

ため息を吐きながら天を仰ぐなのは。　　いったいどうしたというのだろうか？

もうなんか俺の手を握りしめてここから一步も動かない姿勢を取るなのはに懐疑的な視線を投げかけていると、階下から聞き覚えのあるバカの象徴の声が聞こえてきた。

『なのはたんの髪の毛発見！　やはりなのはたんはここにいますよ！』

『いやそれは分かったからお前らは訓練に戻れよ。　もう期日迫ってるんだろ、昇進試験の』

『根詰め過ぎるとよくないからって息抜きに犬の散歩に連れて行ってくれたのはヴィータさんじゃないですか！　最後までお供しますよ！』

『ふむ、ボウリングか。　そういえば家にヴィイヴィオ君がいた頃は諸事情によりこういう場所に連れていくことはできなかったので、本当に彼らに預けてよかったと思えるよ』

『主はやてッ!?　主はやては何処にッ!?』

バカの象徴を筆頭に、毎日毎日耳にしている奴らの声が集まってくる。　成程な、いまようやくなのはが後ろに隠れたのか合点がいった。　そりや今日のなのはは気合の入った服装だもんな。　あいつらからしたら恰好の獲物つてわけか。

スタッフルームから階段場所を覗く。　うひょー、皆いるじゃん。

『あ、スカさんにヴィータちゃんだ！　わーい！』

『よおヴィイヴィオ。　ボウリング楽しんでるか?』

『いまからすきになるとこー!』

『お、じゃあまだしてないってことか。　　ってあれ？　　パパとなのはママは？』

『パパとなのはママ？　　んーっと……あれ？　　ヴィーたちちゃん、パパとなのはママがまいごになっちゃった……』

『まあそんなに涙目になるな。　　ティアがいるから——』

「ギャーッ!?　やめて!?!　下着脱がそうとしないで!?!」

「なのはたーん!」

「ペロペロー!」

「なのはタソー!」

「なにどさくさに紛れて俊くんもまぎってんの!?!」

「まあ着衣派の俺もノーパンまでは認めるよ。　　スカートは絶対に脱がすなよ?」

「あいあいさー!」

「セーットアアーロープツ!!」

「撤退だ!　ちよつと悪ふざけが過ぎたようだぞ!」

「コホーッ!　シュコーツ!!」

言語を失ったなのはの攻撃は、一切の手加減がなかったので怖かったです。　　もう絶対になのはのパンツを脱がすことはやめようと思いました。　　本日2度目の臨死体験でした。

☆

ボウリング場には黄色い声が至るところで聞こえてくる。　　元々六課は女性の人数が圧倒的に多いというのに、今回はスカさんの娘も全員参加。　　花園にまで発展している。　　そして俺の膝の上にはヴィヴィオがおいしそうにカルピスを飲んでいいる。　　先ほどとは打って変わったほくほく笑顔で、なんとも幸せそうな表情だ。

「パパ?」

「ん?　どうした?」

「ぼうりんぐってたのしいね!」

「ああそうだな」

ヴィヴィオの頭をなでなでしつつ、先程についての反省会を頭の中で行う。　　はあ……なんか落ち込むわ。

「おーいヴィヴィオ。 ほら、投げ方のフォーム教えてやるよ」

「おー！ ヴィータちゃんおとなだー！」

「いや、見た目がロリなだけで実際にめっちゃ大人なだけだな」

ロヴィータちゃん、お前はロリと共存する道を歩むのか。 俺にとつてはいいことだ。 生涯ロリっ娘がそばにいることになるんだからな。

膝からロヴィータちゃんの元へと移ったヴィヴィオは、幼児用の5本指ボールを使いながらロヴィータちゃんの真似事をする。 ロヴィータちゃん真剣そのものである。 いやー絵になるなあ。

自身で買ったお茶を飲みながらヴィヴィオとロヴィータちゃんの様子を見ていると、両隣に挟み込むようになるのはとフェイトが腰をおろす。

「俊くん楽しんでる？ あ、お茶ちょうだい」

「楽しんでるぞー。 はいどうぞ」

「今日は失敗しちゃったね、色々」と

なのはにお茶を渡しつつフェイトの言葉に頷く。 完全に俺らの大失敗だよ。 ヴィヴィオが漏らして以来じゃないか？ ここまで大失態を犯したのって。

「はあ……ちゃんとママやってるつもりだったんだけど……つい自分のことに走っちゃったよ」

「私も。 今日はどうかしてたかも」

「はあ……」

肩を落として暗い影を落とす二人。 これは結構重症かもしれない。

「あー……そこまで落ち込む必要もないさ。 そりゃ今日は全員暴走してさ、結果的にはヴィヴィオを泣かすことになっちゃったけどよく考えてみると今日の失敗はいい失敗だったのかもしれないぞ」

「何言ってるの……可愛い娘が泣く姿みてわたしの心はバラバラ寸前になっちゃったんだよ？」

「私なんて9歳の頃の自分と重ねちゃったよ……」

相当重症だった。 もうなんか二人の周りだけ負のオーラが半端

ない。はやての方を見ると、はやてははやてでシャル先生に暗い顔して何かつぶやいてるし。すみません、シャル先生そっちは頼みます。俺はこっちをなんとかしますから。

落ち込む二人をそっと抱きしめる。両肩にビクリと体を跳ねる感触が伝わってくる。さらにぎゅっと抱きしめる。決して自分から逃げる事が出来ないように。

抱きしめられた二人が上目使いでこちらを見上げている気配を感じながら、俺はゆっくりと言葉を紡ぐ。慎重に言葉を選び、二人に優しく伝える。

「よくさ、失敗の先に成功があるって言葉聞くじゃん？ あれってさ、失敗をしてから初めて成功が何なのか判明するって意味だと俺は捉えてるんだ。まあ、本当は違

うかもしれないけど少なくとも俺はそう捉えている。失敗をしないままの人生も悪くないが、きつとその人生にベストと呼ばれるものは存在しないと思うぜ。だって判別する材料が存在しないから。『きつとこうなんだろうな』そんなあやふやな答えを持って進んでいく道つてとつても怖くないか？ 俺なら怖い。怖すぎるな。

だから今回のことは自分達にとつていい経験になったんだと思う。俺もなのはもフェイトも間違いを犯した、失敗した。だから今後はその教訓を生かしていけばいいじゃない」

大丈夫、大丈夫だから。

そう二人に言い聞かせながら、そして自分に言い聞かせながら。

「つて、どうしたんだ二人とも？ 下ばかり見てないでカッコイこと言った俺を見惚れてもいいんだぞ？」

「……………（いやいやいやっ!! いまは絶対に無理！ バレる！ 絶対にバレる!）」

俯いている二人の頭をぽんぽんと撫でつつ、俺のことを呼んでいるヴィヴィオの元へ行くために腰を上げる。さて、俺もヴィヴィオと遊ぼうかな！ 今日死ぬまで

遊びつくすぞ！

「ひよつとこ、賭けボウリングしようぜ久しぶりね」

「いいぜロヴィータちゃん！　じゃあ俺が勝ったら処女頂戴！」

「あたしが勝ったらギロチンな。　ちなみにさつきは全てストライク出したぞ」

……今日で本当に死ぬかもしれない。

☆

結局、俺達が家に帰ってきたのは夕方近くになってしまった。何度かローテーや人数シャツフルしてトーナメントや団体勝ち抜き戦したりと大盛り上がりだったのでしようがない。　まあそのせいでヴィヴィオは終盤ねむねむモードでなのはとフェイトと俺を中心に皆で抱っこしたりおんぶしたり。　そのくせ『ヴィヴィオまだかえりたくない』って駄々はこねるし。　まあ可愛いし、最終的にヴィヴィオがボウリングを好きになってくれたからよかったよかった。

いまヴィヴィオはソファアの上でガークンを枕にしてすやすや夢の中に旅立っている最中だ。　疲れちゃったんだろうな、今日はお疲れ様。　夕食までゆっくりおやすみ。

ヴィヴィオの髪を撫でていると、後ろからなのはが声をかけてきた。

「お疲れ様、俊くん。　はい、紅茶」

「サンキュー。　あれ？　フェイトは？」

「ああ、フェイトちゃんはいま部屋でティアに勉強教えてるよ。　執務官試験は鬼畜だからね。　今日は元々ティアはフェイトちゃんに教えてもらおうと思ってたみたいだし。　皆も察してティア一人にしてくれたしね」

「ティアたん頑張ってるじゃん。　受かるといいな」

「俊くんたん付けはやめようよ、きしよいから。　まあ受かればいいけど……実際のところは微妙かなあつてのがわたしとフェイトちゃんの見解。　一回じゃ決まらないかもしれないね」

「厳しいな教導官」

「厳しいというか現在の力量を見るとそういった判断を下さなきゃならないんだよ。　わたしだってティアには受かってもらいたいよ」

「ということは、あの年で受かったフェイトってとんでもなく凄いな

「じゃね？」

「とんでもなく凄いだよ。わたしもフェイトちゃんもはやてちゃんもね。はあ……こんなに長いこと面倒見るのは初めてだから胃がキリキリするよ……」

ヴィヴィオのソファアに座ったなのはは、ヴィヴィオの髪を撫でながら部下を思いつつ胃をさする。心優しき教導官は色々と大変だなあ。

二人でヴィヴィオを黙ったままわしゃわしゃと弄る。わしゃわしゃわしゃわしゃすること数十分、流石に俺も夕食の準備をしなきゃならん時間になってきたので席を立つ。

「あ、俊くんちよつとまって。今日はわたしも一緒に夕食作るよ」

「やめて」

「ふえ……」

「さあ一緒に夕食作るぞ！まるで新婚さんみたいだな！」

流石に一日に二人も泣かれると困る。それも未来の嫁と娘ときたら精神がもたん。

台所で一緒に買ったエプロンを装着しながら鼻歌を歌うのはを見ながら、ふと想像する。

結婚指輪をはめたなのはと自分が二人揃って台所に立つ姿。そしてそこに自分達の母校の制服を着たヴィヴィオがガークンと一緒にやってくる。そこに指輪をはめて女教師スタイルのフェイトが笑顔でやってくる。そんな、妄想のような幸せな想像。

「ははっ」

「？ 俊くんどうしたの？」

「いや、なんでもないさ」

「あー、怪しい。なのはさんのセンサーにピンってきたよ！」

頬を膨らませてこちらを睨みつけるなのは。可愛く睨みつけるためまったく怖くない。そんななのはのほっぺたを摘まんで口から空気を吐き出させる。

「ほんと可愛いなあーなのはは」

「はぐらかさないー！」

そんなやり取りを繰り返しながら夕食の準備をしていく。

『あふ……ぽぽぽ……？　なのはまま……？』

「あ、はいー！……ここにいますよー！」

ヴィヴィオの寝ぼけた呼びかけに答えるのはを横目に思う。

休日はまだ終わらない。　きっと夕食後も楽しい休日が続くんだろうな。

それはそれとして、いったいあのスタッフは何者だったんだろうか？



嬢ちゃんとスバルンの昇進試験が明日に迫った夜、俺達海鳴組は呑気にトランプをやりながら寝るまでのしばしの時間を満喫していた。膝の上にヴィヴィオを乗せた俺は、いち早くババ抜きから上がったのでヴィヴィオの髪をブラシで梳いてツインテールにする作業に勤しんでいた。

「あー、ヴィヴィオの髪はスベスベだなー。この髪をずっと触っていられるなんてなんといい役得」

ヴィヴィオのほっぺたをちよいちよいと触りながらヴィヴィオ成分を補給する。ほっぺたを弄られているヴィヴィオは、何度かくすぐったそうにしながらもこちらにはにかなでいるので止めはしない。ところでヴィヴィオ？ ガーくんの体毛はツインテールに出来なからそろそろ止めようか？ ガーくんさつきからめっちゃ痛がつてるから。アタタツて言ってるから。

「そういえば明日が昇進試験だけど、誰が付き添いすんの？」

隣でヴィヴィオにポツキーをあげていたはやてに聞く。

「えーっと、二人の付き添いはなのはちゃんとヴィータとシヤマルやな。後学のためにエリオとキャロも一緒に行くみたいやけど。

わたしのほうが昇進試験に受かった時ように、部隊のランク調整と本局への定例報告会でいけないよ。シグナムとリインはわたしのほうについていくみたいやし。ザファイーラはお留守番や」

「番犬だもんな」

「最近皆が犬扱いするから人間状態のときでも四足歩行しようとするんよ……。洗脳って恐ろしいで……」

「ほんまかいな……」

「いや、ほとんど俊のせいだからね？」

はやてとは逆の隣にいたフェイトが話に入ってきた。あら、3番目に終わったのね。じゃあどんけつシヤマル先生か。あ、ちよつと悔しそう。

「そういえばフェイトはどうすんの？」

「わたしは家にいるよ。 ヴィヴィオの面倒見ようかなって思ってたさ」

「お？ あしたはフェイトママとずっといっしょ？」

「そうだよーヴィヴィオ。 明日はフェイトママと何して遊ぶー？」

「なにしておそぼお……。 パパはなにしておそびたい？」

「んー？ パパはフェイトママとプロレスごっこしたいな」

「じゃあヴィヴィオもそれするー！ パパ、ヴィヴィオとしよ？」

「ダッ！（ひよつとこは逃げ出した）」

「バチンッ！（金色のバインドが足の自由を一瞬にして奪う）」

「ゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツゴツ！（プロレス実践中）」

「ええか、ヴィヴィオちゃん？ ヴィヴィオちゃんとパパがプロレスをすると、パパはあんなことになってまうんよ」

「ヴィ、ヴィヴィオぶろれすごっこはいい……」

「きゅつとはやてのスカートの裾を握るヴィヴィオを、はやては優しく抱っこする。」

「ヴィヴィオがはやての膝の上で、ガークンにツインテール計画を再開し始めた矢先、2階からばたばたと慌てて階下に駆け降りる音が聞こえてくる。 ヴィヴィオとはやてはその音に揃って首を向けると、寝間着姿のなのはが慌てながら――」

「俊くんわたしの万年筆――俊くんが落下させたザクロのような姿にッ！」

「あ、万年筆ならなのはの机の引き出しにあるぞ。 鍵かけてある引き出しの一つ下」

「キモッ!? 俊くんタコみたいでキモー！」

「お前はよく幼馴染にキモいを連呼できるな」

「なのはは起き上がった俺の姿を見るなり、キモいを連呼してその場を去りまた2階へと上がった。 かと思うと、数分も立たないうちにまたばたばたとこちらに戻ってくる。」

「お、久々のバタなのじゃん」

「いやいやいや好きでバタバタしてるわけじゃないから！」

そういつたなのははテーブルに座り、さつきから手に持っていた書類に万年筆を走らせる。

「ねえフェイト、バタなのは何してるの？ 一向に自分が進化しないからクレーム書いてんの？」

「なのはの場合、クレームというなの砲撃だから」

「あーなるほど」

「えっ!? いまなんで俊くん納得したの!? どの部分で納得する要素があったの!?!」

筆を走らせていたなのはがこちらに振り向く。

「ほんでんで、なのはは何を書いているの？」

「あの子たちが六課に入ってからからの訓練評価を書いているの。この子はどの部分が伸びてきたとか、長所はどこで短所がどこかかってのをね。明日昇進試験でしょ？ だからそれを提出して評価の際の目安にしてもらうの」

「巷で話題の賄賂？」

「いやいや、そんなことしたら一発で退職に追い込まれるから」

「なのはは今年に入ってからおっぱいが少し大きくなったよな」

「えっ!? それほんと!?!」

「うっそぴょーん」

「俊逃げてツ!? なのは本気だから！ なのは本気だから！」

ちよつとからかっただけなのに万年筆投擲するなんていまの管理局員って恐ろしい……ッ！

「で、俊はなんで咄嗟にわたしの後ろに隠れたんかな？ そこらへんについて詳しく聞きたいんやけど」

なのはがバーサーカーになった瞬間、フェイトがなのはを抑えその隙に俺ははやての後ろに隠れた。

い、いかん……ヴィヴィオの髪をツインテにしてるはやての所に隠れるなんてこれじゃまるではやてを盾にしたみたいだ……。

……はやての好感度がみるみる下がっていく音が聞こえてくる……っ！

男ひよつとこ、ここでカツコイイセリフと共に挽回させて頂きま

す。

「キミのおっぱいを後ろから鷺掴みしたかったからさ」(withウインク)

すいません死んできます。

☆

「女子高生っていいよな」

「以上、無職の戯言(たわごと)でした」

「はい解散—」

「まって、まだ何も言ってないから。ちよつと皆寝る準備をするのは早すぎるんじゃない!? まって! まだ本題にすら入ってないから!?! あれ? なんでなのはさんは僕を犬小屋に誘導しようとしてんの?」

「駄犬の躰は飼い主の務めだからね。そもそも女子高生なんて制服マジックでしょ」

「お前はいま全世界の女子高生好きを怒らせた……ッ!」

「いやいや俊くん以外に怒る人なんて—」

ガラッ!

「私がいる! 私も女子高生が大好きだ! スカートから見える生足! 健康的な肢体! 自己主張する胸! 円光をもものもしないその勇氣! 私は大好きだッ!」

「ドクターいい子ですから黙って家に帰りましょう。さっさと書類仕事を終わらせてください」

「くッ……! ひよつとこ君! 私がいる! 君は一人じゃないということを忘れ—」

ピシャッ!

「……スカさんいつ来てたの?」

「いまウーノさんからメール来たけど、いきなり家を飛び出してこっちに走ってきたらしいよ」

「なんとというニュータイプ」

科学者が全力疾走するなんて普通なら一大事件なのにな。

でもスカさんが乱入してきたおかげで、全員とも解散するタイミン

グをなくしたのか、なんかそのまま戻ってきた。わらわらとまた円卓上に座る俺ら。シャマル先生、いつまでトランプ持つてるんですか。

トランプを持ったままイチゴキャンディにするかりんご飴にするか悩んでいるシャマル先生を眺めていると、視界に金髪ツインテールのお姫様の姿が入る。と、思いきやそのまま俺の腹に体当たりで抱きついてきた。的確に鳩尾に入れてくるあたりヴィヴィオは将来とんでもない女の子に成長する気がする。

そんな俺の考えなど分かるはずもないヴィヴィオはにぱあつと笑顔をこちらに見せると、

「みてパパ！ ヴィヴィオおひめさまみたい！」

そういつてツインテールの髪型をこれ見よがしに見せつけてきた。体当たりをかましてきたかと思いきや俺の目の前に立ち、くるくると回って嬉しさを表現するヴィヴィオ。長いツインテールが回るたびに俺の顔面にバシバシと当たっているのだがご褒美として受け取っておこう。

「可愛いなあヴィヴィオは」

「でしょー」

笑顔いっぱいでそう喋るヴィヴィオはまたもや体当たりで抱きつく。頭を腹にぐりぐりと擦りつけたヴィヴィオは、ぱつと顔を跳ね上げ小首を傾げながら俺に聞く。

「ヴィヴィオがおひめさまならパパはおうじさま？」

「んー……ヴィヴィオがパパを王子様だと思ってくれるならパパは王子様になろうかな」

「やたー！ じゃあヴィヴィオはこまったときはだっこしてくれる？」

「ヴィヴィオが困ってなくても抱っこしちゃう。こんな風に——」

両手をヴィヴィオの背中に回してしつかりと落とさないうように固定して立ち上がる。頭を撫でるとヴィヴィオは嬉しそうに笑った。

「ヴィヴィオが泣いているときはパパがそつと抱きしめてやるよ。パパはヴィヴィオのパパで、ヴィヴィオの王子様だから」

俺にとつてはこの子の笑顔が見れないことは世界の崩壊と同等の意味を持つのだから。

「えへへ、パパだいすき。でもパパはだめだめさんだからちよつとたよりないかも……」

パパ死亡のお知らせ

「大丈夫だよヴィヴィオ。なのはママとフェイトママもいるからね！　ね、フェイトちゃん？」

「うん。パパはだめだめだけど、なのはママとフェイトママがいるから大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

「ほんと?!　なのはママとフェイトママがいればヴィヴィオだいじょうぶ。ヴィヴィオさいきよーになるー!」

娘の強さの信頼の本音を確認し一気にブルーになったが――まあヴィヴィオが喜んでるし俺が二人に勝てないのは事実なのでよしとしよう。だが二人にはヴィヴィオ

は渡さん！　手を広げておいでポーズしても渡さないもんねっ！　ヴィヴィオをぎゅつと抱きしめたまま座り直す俺。フェイトとなのはが手を広げてよこせポーズをしているがあえて無視する。

あ、アヒル口で拗ねた。ちよつと可愛い。

「で、さっきまで何の話をしてたんだっけ？」

「自分で言うっておいて忘れたんか……。俊が女子高生最高つてのたまったのがそもそも始まりなんやで？　……そんなに好きなら明日着てこよか？」

「え？　マジで？」

「まあそれで俊が満足してくるんならわたしはええけど」

「はやては最高のお嫁さんになるぞ」

「じゃあその最高のお嫁さんと結婚せえへん？」

「NTRは相手の男を傷つけるしなあ……」

「あかん、会話のキャッチボールだとおもたらフリスビーやこれ」

「セーフ！　俊（くん）がバカでセーフ！」

なんだよお前ら、いきなり審判みたいに手を両翼みたいに広げるなよ。ビビるわ。

「やっぱ既成事実しかあらへんかな……」

「あれエロ本とかで見るといいよな。なんか男の尊厳が満たされるというか、もうそこまですてくれるなら絶対に幸せにしよう——つて思えるよな」

「へえ……そうなんか……」

はやてが三日月状の笑みを浮かべる。

何か地雷を踏んだような気がした瞬間だった。

☆

「あの、いつになつたら本題に入るんでしよう？」

きっかけはシャマル先生のその一言だった。りんご飴を食べきったシャマル先生は歯磨きをしながらそう俺に問いかけたのだ。

勿論、さっきの俺の女子高生ネタのことだろう。他の皆は首を傾げているようだけど。ヴィヴィオに至っては俺の膝の上でもう寝てるけど。

「ああそうそうそうでした。ほら、さっき女子高生の話したじゃん？ あれって前フリだったんだよ」

「前フリ？ 刑務所行きの？」

「ふっ、バカな局員共に俺を捕まえることはできねえよ」

「俊くんわたし達の職業思い出してからもう一度言ってみて？」

「え？ お前らの職業ってアイドルだろ？」

「魔法少女だよ！」

「少女……？」

「そうだよ。まだまだ現役の少女だよ」

「はい、いまから魔法少女のなのはさんが萌え萌えなセリフとポーズをとりまーす！ 3 2 1 どうぞ！」

「はへっ!? えっとえっと……き、キミのハートを射止めるきゅんきゅん♪ なのはのミクラルラブパワー！ えーい！」

???

／ ……、

ノイ●ア イ●ア：

— …… —

— …… c っ ……  
 — …… | ……  
 \ …… | ……  
 \ …… / ……  
 — …… — ……  
 \ ?? / ??  
 — …… — ……  
 — …… — ……

「真顔止めて、お願いだから」

顔を真っ赤にして両手で顔を隠しているのはが一番萌えるわ。

自分のした行動があまりにも恥ずかしかったのか、作成途中の書類を放棄してフェイトの後ろに隠れる。頭を押し付けるようにフェイトの背中にぐりぐりするのはを、フェイトは優しく頭を撫でる。

でもフェイトの顔も笑っているんだよな。めっちゃにやにやしてたし。そしておそらくはやてはいまの行動を録画していたに違いない。そう思いはやてに視線を向けると予想通りバツチリ録画してあった。あとで金を渡すので頼むな。

「よし、なのはの萌え成分も補給出来たし、ここらでちゃんとした本題に入りたいと思います。ズバリ、高校時代の回想という名のテコいれをしようと思って」

「テコ入れているのは聞かなかったことにしてあげるけど……高校時代かあ。懐かしいね」

「まあ去年まで現役だったんだけどな、俺ら」

「どっちかというバリアジャケットのほう似合ってたからね、私達の場合」

「正直コスプレだったもんな。あ、いまもか」

9歳からの精鋭コスプレイヤーだったな。お前ら。

「でもわたしの高校時代は俊くんのおもりしかしてなかった気がする」



ひよいとフェイトの後ろから顔だけ覗かせたのはが高校時代を思い出しながら話しかける。

「高校時代の思い出なあ。 んー……あ、2年の時の球技大会とかおもろかったな！ 主に俊が」

「いやその話はやめ——」

「女の子は俊を病院送りにしようって団結してたもんね」

「え？ 俺そこまで嫌われてたの？」

「球技が苦手なわたしはちよつときつかったけどねー」

わいわいと話し始めたのはとフェイトとはやて。

俺は膝の上にヴィヴィオを抱きながら思い出す。

忘れもしない、あの球技大会。

否、忘れられない球技大会だった。

以下、回想

## A, s18. 球技大会①

「ねえ俊くん、今日はバイトある？」

帰りのホームルーム間近に隣の席のなのはが椅子を近づけながらそう聞いた。現在のなのははバリアジャケットのときとは違い、ツインテールではなくサイドテールだ。ツインテ亜種みたいなものだな。

「あるよ。ていうか、俺のバイトのシフト知ってるだろ。俺のバイト先は翠屋なんだから」

「じゃあ今日は休もう！ 店長の娘の命令です！」

「店長の娘は昨日、ケーキ運ぶときにすっころんだよな」

「あう……思い出させないでよバカ……」

なのはは昨日の出来事が頭によぎったのか、顔を真っ赤にして俯いた。男の俺はスカートの中をもろに見えたとし、顔に精液のようになっていたクリームに興奮を覚えていたのだが、本人はやっぱり恥ずかしかったようだ。

「あんな馬鹿でかい魔力砲撃ったり、魔法に関しては天才と言われてるけど……案外魔法に結びつかないところでは小学生のままだよなあ、なのはって」

「だ、だってあんなところにナプキンがあつたから——」

「何も無いところで転んだぞ？」

「も、萌えを研究してて……」

「ナイス萌え!!」

うう……魔法ならあんな失敗しないのに……、そういいながら俺の机の上にてこをこつんと置くなのは。男性局員が見たら萌え死んでるだろうな、今頃。

なんせいま目の前で俺のシャーシンをぼきぼき折ってるこの女の子、高町なのはは管理局（萌え）最強の魔導師として知らぬ者はいない存在なのだから。

「いまなんか不愉快な紹介のされ方をした気が……」

「まあまあそういうなよ（萌え）なのは」

「あれっ!? なんかいまわたしの名前の前に変な単語が付かなかった!?!」

「まあまあそういうだよ、(おかず)なのは」

「まって最初のほうがいい! もう最初のほうでいいから後者はやめて!」

シャーシンを折る手を止めてまで主張するなのはに、俺も渋々ながら言うのを止める。なんてわがままな子なんだ。

再び俺のシャーシンをほきほき折り出したなのは、ちよつとキミい加減にしなさい。お前が俺のシャーシン界限で何と呼ばれてるか教えてやろうか? 破壊の権化と呼ばれるんだぞ。俺は罪のないシャーシンを破壊しすぎだ。だが可愛いから許す。

「というか、なのはも仕事あんだろ」

「上司が変わってくれたよ!。学生だから無理しないようにって。

だから今日はオフだにや!」

「オフなのかにや!。——そいつ男?」

「ううん、もうすぐ三十路の女性教導官」

「……………」

「他の人の話だと、教導にかこつけていい男に手当たり次第アタックかけてるみたいだよ? え〜つと、なんだっけ? 逆なんとかつてのもしてるっばい」

大丈夫なのかその女性教導官

「ついたあだ名がまんじゅうとか」

「ぶツ!?!」

「わたしは意味がわからなくて色んな人に聞いたんだけど、苦笑するだけで教えてくれないんだよね〜」

「なのは、まんじゅう大好きって言って?」

「へ? まんじゅう大好き。これでいいの?」

「保存完了つと。これでまたネタが——」

「まって俊くん!?! いったいなんなの!?! なんか決して越えてはいけないラインを越えてしまった感じがするんだけど!」

「まあ人生色々さ。大丈夫、なのはは可愛いから」

「いやなにそのごまかし。……納得いかないけどまあいいや」

帰ったらお母さん辺りにでも聞こうかなー、なんてことを言いながら俺の指に消しゴムをかけていくのは。キミ俺の存在を消したいの？　そういう意思の表れとみていいのかな、この行為は？

消しゴムで俺の指を消しつつ、なのはがちよつとトーンダウンして話しかけてくる。

「けどさー……なんか身近にそういう人がいるとわたしも心配になっちゃう。その人、仕事ばかりやってたからいま慌てて結婚相手探してるんだよね。まあ独り身は嫌だからってのが理由みたいなんだけど。なんかその人、男性局員を獲物というかそういう物としか見てなくて——なんかそれってとつても悲しいことだとおもうの。わたしはまだ彼氏とかいないけど気になる人はいるし、いま胸に抱いてる恋心を大切にしたいって思うけど——もしわたしがあの人の立場になったらわたしもあんな風になっちゃうのかな？　結婚に焦って、心をなくしちゃうのかな？」

なのは小学生の頃からちよつと抜けてる気があるけど、人一倍大人な精神面を見せるときがある。フェイトのときだって、はやてのときだって、俺のときだって。そしていまだって。現役高校生の俺らには普通関係ない話であり、笑い話にしかならないようなものなのにな。

いつの間にかなのは消しゴムをかけることを止めていた。なのは手を俺の手の甲の上に置いていた。この手の位置が俺にとつて丁度よかった。置かれた手をそつと両手で包み優しく笑いかける。

「心配すんな。俺がいる限り、愛も恋も忘れさせないさ」

俺はいつだってそばにいるぞ。なんせ俺にとつての初恋の女の子なんだ。釣り合わないと分かっているけど絶対に俺は離れないぞ。

自分の中でそう誓う。例え住む世界が違ってても必ず俺はキミの隣に立ち続ける。そう誓う。

「って、なんだよなのは。そつぽ向かないでくれよー、折角カツコよ

く決めたのにー」

折角決めたというのに、当のなのははそっぽを向いてこっちを見てください。

「こ、こつちみるの禁止！ み、みちやダメっ！」

「えー、なのは可愛いから目の保養にしたいのに」

「はう……」

手は放してないから嫌がられてはいないはず。 ……いないはず。

うん、きつと嫌がられてない。 大丈夫、きつと大丈夫！

互いに手を離さない俺らの前に、ぬうと誰かの影が作られた。 その影に反応して顔を向けると、ツーサイドアップにしたアリサが一枚の紙を目の前に差し出しながら——口から砂糖をおもむろに吐き出した。

「きゃあーっ!? アリサちゃん大丈夫!」

俺の机に大量に吐き出された砂糖に驚きなのはが心配の声を上げる。

「大丈夫じゃないわよ、あんたらのおかげでいつまでもホームルームが始まらないのよ。 はやてなんて瞳にハイライトがないわよ」

「あう、ご、ごめんなさい」

「まったくもう。 ほら、今日は球技大会のチーム決めるためのホームルームなんだからー」

「アリサが吐いた砂糖、1グラム500円!」

「10グラム頼む!」

「こつちは7グラム!」

「俺は15!」

「はいはい待って待て! 10グラムに制限させてもらう! じゃないとすぐなくなる!」

「じゃあ俺も10グラム!」

「俺も!」

「私達も!」

「どうするアリサ! 砂糖がもうない! 早く口から吐いて痛い痛いッ!? ごめんなさいごめんなさい、謝りますから頭部は、頭部は勘

弁してください!!」

「なのは、こいつのどこがいいのかさっぱりわからないんだけど」

「ごめん、わたしもわかんない」

「ふーん、まあいいわ。ほら、さつきとホームルーム始めるわよー!

今日は先生出張なんだからぱつと決めて帰るわよ!」

『はーい!』

☆

「球技大会かあ。わたしは苦手なんだけどなあ」

「なのはは運動苦手だもんね」

「あ、フェイトちゃん」

俊くとアリサちゃんが教壇に立って話を進めていく様子を見ながら呟いた独り言にフェイトちゃんが応える。フェイトちゃんはわたしの親友で小つちやい頃に色々

あったけど今は一番の仲良しさんです。子どもの頃からスタイルはよかったけど、中学に入ってからスタイルもぐんぐんよくなってきて、今では学年No.1のスタイルの

持ち主さんです。羨ましい……。フェイトちゃんは綺麗だし、家事も炊事も出来るし、気立てがいいし……。うう……。かないっこないよお。わたしはいまだに童顔って言われること多いのに……。

「それにしてもなのは、さつきはとつてもかわいかったよ。ほら、この場面とか——」

「にゃあーっ!?!」

フェイトちゃんが見せてきた携帯画面には先ほどの、その……俊くんとのお出来事の場面がしっかりと録画されていた。い、いったいいつの間に録画してたの?」

「まあクラスメイト全員とも録画してたけどね」

「ほ、ほんと?」

「うん、もうバツチリ」

「うぐう……。ま、またわたしと俊くんの間に変な噂が——」

「立ったら大変だから俊は私に任せて?」

「いやフェイトちゃん、それは間に合ってるよ」

にこりと笑顔でなのはの言葉を遮ったフェイトに、なのはが笑顔で応えた。

「いやいや大丈夫だよなのは。 ちゃんとなのはも貰うから」

「いやいやフェイトちゃん、わたしがフェイトちゃんを貰うから」

お互い論点がずれてることには気づいてない。

「でもフェイトちゃんはいいよねー、運動神経いいからガチ勢の野球のほうにいくんでしょ？ 俊くんはそっちが内定してるし、はやてちゃんもアリサちゃんもすずか

ちゃんも運動神経いいから、わたしだけバレーのほうに行く未来が……」

「え？ なのは聞いてなかった？ なのはも今回は野球のほうだよ？ というか、今回はちよつと特別だからどの学年のクラスもバレーを捨てて野球に全戦力を注いでるよ」

「ほえ？ なんで？」

よよよとフェイトちゃんに泣きついていたわたしは顔を上げる。 おかしいなあ、去年はそんなことなかったのに。

そう疑問を持ったわたしにフェイトちゃんは優しく教えてくれた。

「今回は特別に優勝したチーム、まあ優勝したクラスには過去に没収した代物を全て返すって校長サインが書かれた紙が全クラス委員に配られたの。 それに、MVPに輝いた者は夢の国への招待券があるとかないとか」

「へー、なんか太っ腹だね。 いったいなんでだろう？」

「どこぞのひよつとこが男衆を集めて校長先生の自宅に夜襲をかけて取り付けたった噂もあったりするんだけどね……」

「ああ……どこぞのひよつとこね」

二人して教壇でレギュラーを決めているどこぞのひよつとこを見つめる。 退学にされていなくが学校の七不思議とされている人物だから……本当にやったのかし

れない。 でもでも、いつ夜襲なんてかけたんだろう？ 俊くんが夜中にベッドから移動したら分かるのに。

でもそんなことより――

「じゃあ今年は最初から最後までずっと一緒!？」

「まあ元々なのは去年もずっと私達と一緒に行動してたでしょ？」

――チアガール要員と殺伐とした空気をリフレッシュさせる存在として」

「この学校はわたしのことをなんだと思ってるの?」

そろそろこの学校について疑問を持ち始めたよ。それにしても、そっかあ、チアガールかあ。今年も着ることになるんだなあ。

……お腹周り大丈夫だよな?

誰にも悟られないように、そっとお腹周りを触る。うん、問題ない。見せても問題ないよ!

「ぎ、なのは。私達も話し合いに参加しよ」

「うん!」

フェイトちゃんの言葉に頷いたわたしは、差し出されたフェイトちゃんの手をしっかりと握り、俊くん達がまつ教壇へと向かった。

☆

基本的にレギュラーと作戦は俺とアリサで決めることとなった。

勝手知ったるなんとやら、流石に俺もアリサも10年間も友人を続けていると相手が何をしたいのか、言いたいのが手に取るようになってくる。いまだに魔導師組はわからないときがあるけど。魔導師って意外と何考えてるかわからんときがあるんだよな。

現在、教壇にはスタメンとベンチの杵と乱闘用の杵にヤジ用の杵、そしてハニートラップ杵が用意されている。勿論、スタメンとベンチ杵以外は俺の手書きだ。

「俊くん、こんなことばかりしてるからわたし達のクラスは動物園って呼ばれるんだよ? わたし達だけクラス替えなかったし」

「ババ様の不思議な力が働いたんだろ」

「それどこのグンマー?」

「違うわよなのは。女子は楽園、男子は鬼畜が今のあたし達のクラスの呼称よ」

「勇者王のロヴィータちゃん連れてこないよ」



「ヴィーたちちゃん昨日の夜まで仕事だったからいま寝てるんじゃない？」

「ふーん、寝込みを襲うならいまの時間帯か。まあそんなことより、レギュラーとベンチを決めてくぞお前ら——っていつになったらはやては降りるの？」

さつきからずつと俺の背中に負ぶさっているはやてに話しかける。小柄な割に自己主張が激しすぎる胸ががんがんと当たってるんですけど！

「もうちょいしたら」

まあ俺も俺で嬉しいし、役得だからいつか。うへへ……たつぷり堪能してやるぜ……。

はやてに気づかれないうように舌なめずりをしていると、フェイトと一緒に隣にやってきたなのはが両手をこちらに広げていた。

「なにしてんの？」

「だっこ」

「前がふさがると書けないから、フェイトにだっこしてもらいなさい」「わかった。フェイトちゃんだっこして！」

「ええっ!? 流石にそれは予想外なんだけど!」

両手を広げていたなのはそのままくると回転し、フェイトに両手を差し出してきた。驚き声を上げるフェイトだが、周りからの『ほら……もつと百合百合しろよ……!』という無言の圧力によって渋々半分、照れ半分でなのはを抱っこした。なのはとフェイトの身長に差異はほとんどない。それでもフェイトはなんとかなのはを抱っこしようとするもんだから、その体勢は凶らずとも——

「なのはとフェイトがえきべ——」

「いい加減に決めるわよボケナス。ほら、あんた達二人もこのバカの思い通りにならない! まったく……あたしだって没収品を取り返したいの。だから——あんまり遊んでるとどうなるか分かってるわよね?」

「女帝がキレたぞ、これより本気モードに全員入るようにツ!!」

チヨークが一瞬にして蒸発したんだぞ? 誰でも命は欲しいよな

?

だっこされたのはとだっこしたフェイトを隣に並ばせ、ようやく作戦会議を始める。板書はさすが役を買って出てくれた。

「うし、じゃあレギュラーだけどこれはまあ女子が5人、男子が4人のレギュラーにベンチにパチンコの名手である佐和田と吹き矢の名人韋駄天御猿でいいよな」

「明らかにベンチ二人が何か仕出かしそうだけど……まあ異論はないわ。女子はあたしとすずかとフェイトとはやてとなのはでいいとして、男子は？」

「俺と野球部三人で問題ないだろう」

「オツケー。それじゃ次はポジションだけど——」

レギュラーの枠に名前を書き、その横にポジションを書いていこうとした矢先、隣からなのはの慌てた声が割って入ってきた。

「ちよ、ちよつとまって!? わたしがレギュラーなの!? そ、そんなダメだよ、わたしよりもっと運動神経いい人がいるんだし——」

「違うんだよなのは。このクラス全員がお前がわたわたしながら一生懸命プレーする姿をみて萌えたいんだ」

「鬼畜だ!?! このクラスメイト達鬼畜だよ!?!」

「だがなのはに怪我されると困るから、9番でライトにでも置いていて」

「いや、それだと長打打たれたときに困るわ。ファールゾーンで遊んでおいてもらいましょう」

「言つてよ! それもう戦力通告だしてよ! そっちのほうがまだいいよー!」

わんわんと俺の制服に顔を押し付けるながら泣くなのは。優しく頭を撫でつつ穏やかな口調を意識し喋る。

「冗談だよなのは。なのはには三墨を守ってもらう。んでショートのフェイトを置く。重要な役割だからな? しっかり頑張るんだぞ?」

「ほんと? なのは戦力外にならない?」

「ならないならない。なるわけない」

下から覗き込むように聞いてくるのはに、首をぶんぶんと横に振りながら答える。　ぱあとなのはの顔が明るくなる。　ほんと分かりやすい奴だよな。

「それじゃなのはは9番でサードに決定ね。　俊はどこにいく?」

「そうだなー、1番でキャッチャーにしようと思ってるんだけど」

「あら?　1番つてのは分かるけど、キャッチャーは意外ね。　てつきりピッチャーかと思ってたけど」

「ピッチャーは女子にやらせようと思ってな。　ほら他クラスも女子はいるだろうし、やっぱり女の子が投げるほうが華があるし、クロスプレー危ないだろ?」

「ふーん——本音は?」

「ヤジを飛ばしやすいくから」

男衆が一齐に頷く。

「ま、まあ……好きにしていいいわよ。　どうせキャッチャーは男子に任せるつもりだったし。　なのはよかったわね、あんたの凡打は全部俊がカバーしてくれるわよ」

「まったくもう……俊くんは本当にわたし離れが出来ないんだからー」

「離れたくないんだもーん」

「あんたら今度は顔面にゲロ吐くわよ」

「ごめんなさい。」

「さて、フェイトをショートに置くとなるとピッチャーはあたしかしらね?」

胸を張って両手を腰に置くアリサ。　まあ確かにアリサがピッチャーなら問題ないだろうな。

「一応、肩のことも考えてはやてと交互にしようと思うんだけどね。」

「それでいいはやて?」

「いまだに俺の背中に負ぶさってるはやてに話しかける。　こいつは子泣き爺か?」

「ええよー。　それじゃピッチャー以外ときはファースト守ろうか」

な」

「それがいいわね」

「というか男は元々外野だから、おまえらで内野決めていいぞ。長打打たれたときにきちんと処理できる奴が外野にいないと負ける」

「あら俊？ それはあたしとはやてが長打を打たれるってことかしら？」

アリサが俺の口を引っ張りながらそう聞いてくる。後ろからははやてもアリサとは逆方向の頬を引っ張る。

「ひよ、ひよんなことひよまいません（そ、そんなことはございません）」

引っ張られているのでうまく口が回らずに変な言葉が飛び出す。それを聞いて満足そうにパツと手を離すアリサ。

「まあ頼れる外野がいるのはありがたいしね。ただし——処理を誤ったらどうなるか分かってるわよね？」

クラスメイトの半数が覇気により消し飛んだ。

しかし、いまのポジションを見ると必然的にさすががセカンドになるな。すずか的には大丈夫なんだろうか？

なんてことを考えながらすずかの方をチラリとみると、笑顔で指を輪っかの形にした。よし、本人の承諾を得たし問題ないな。

後は打線か。俺となのははトップとケツで決まったけど、他はどうするか。……ここは経験者に聞か。

「野球部的にはどういう打線にするよ？」

肌が浅黒くガツチリとした体型の野球部Aに話を振る。

「そうだな、萌えが9番でお前が1番なら7と8に野球部を置くな。お前に必ず回すような打線にする。後はお前が打ってくれるだろ？ んで、前にも強打者を置く意味で俺が4番で打つ。後はそうだなあ、2番にフェイトさんで3番に女帝で5番6番をはやて閣下にすずか良識人で固めるってのはどうだろうか？」

さらさらとレギュラーの枠に名前とポジションを書きながら埋めていく。ふむふむ、確かにいい塩梅だな。

「うし、じゃあそれでいくか。　　ってことでいいかな、女帝」

「今度言ったら泣かせるわよ。　　あたしとしては異論なしだけど他の皆は——」

アリサがクラスを見渡す。　　全員ともOKの意思表示をしているのを確認して決定の文字を書く。

「じゃあこれで決まりね。　　あたしはこれを職員室に出してくるけど、あんたはどうする?」

「男衆と乱闘の相談を」

「あたしが先生に怒られるんだからほどほどにしてよね」

はい善処します。

すずかを連れてげんなりしながら職員室へと向かうアリサ。

ツーサイドアップにしている髪がびよこびよこ揺れる。　　がらりと音をたてて閉じられた扉を眺めながら、おんぶしているはやてに話を振る。

「アリサの髪型って可愛いよな。　　俺あの髪型大好き」

「本人は中学生時代にショートにしたけど誰かさんに爆笑されたあげく、小学生時代の髪型が一番かわいと言われてしもたからなあ」

「いや……爆笑したのは悪かったけどさ……」

だつてしょうがないだろ。　　ショート似合わなかったんだし、シヤマル先生と被つてたし。

「……わたしも髪型かえよかなー」

「いや、はやてはその髪型で可愛いと思うぞ?」

「そ、そやろか?」

「せやせや」

うんうんと首を縦に振る。　　はやてはそれが一番可愛いよ。　　ふいに背中に感じる重みが消えたかと思うと、はやてが回り込んでジつとこちらを見つめてくる。　　小柄な

はやてに見つめられると、必然的に上目使いの体勢になって——なおかつ制服も少し緩めてるから位置次第では胸も見える。　　ほら、この角度から目を細めになると……ッ!

「俊くん？」

「俊？」

普通にバレてみたいです。

……はやても気づいてるなら言ってくればいいのになあ。

☆

翠屋のテーブル席に5人の女子高生と1人の男子高生が座っている。男子高生の両隣には男子高生の手を握っている金髪の美人女子高生と腕組みしつつケーキを食べさせている女子高生が、向かい側には頬を膨らませ、メロンソーダをぶくぶくと泡立てている栗色髪の女子高生とそれを宥める紫髪の女子高生、それらを見ながら呆れ果てるツーサイドアップ女子高生の姿があった。

呆れ果てている女子高生、アリサがこの形容しがたい空間をぶち壊す。

「そういうえば、今回のMVP賞金は夢の国の招待券だけどあんたは誰と行く気なの？」

勿論、この場においてアリサが『あんた』呼ばわりする人物はただ一人しかいない。この場において唯一の男子高生のことである。

あんたと呼ばれた人物は、はやてに餌付けをされながら答える。

「なんで俺がとること前提なんだよ。もしかして取ってほしいの？」

おまたきゆんきゆんさせたいの？」

「去年のMVPだったからよ。で、誰と行くつもりなの？」

「そりやまあ——」

そこまで言いかけて彼を言葉に詰まった。別に彼の周りからいきなり酸素が消えたわけではない。彼が失語症になったわけではない。彼はただ、周りにいる三人の女の子の気迫に圧倒されたのだ。

手を握っていた金髪美女ことフェイトはニコニコ笑顔で手を締め上げ、餌付けをしていたはやては『わたしやろ？』とそれがさも当たり前かのように話し、なのははジト目でこちらを黙って見ている。

「ひ、秘密ってことで……」

ひよるのも無理はない。それほどまでにこの空間からは重い霧

困気が一瞬にして出来上がってしまったのだから。

「ま、まあ俺がまだなるって決まってるないし、そんなことより——」

「ねえ俊？」

「なあ俊？」

「俊くん？」

「「わたし（私）と行くよね？」」

黙って首を振る以外に生き残る術は残されていなかった。

「ほんと仲良いわねー」

「ねー」

そしてその様子を見ている二人もまた、そそくさとテーブル席から離れていくのであった。

結局、魔導師三人組による詰問は彼が泣きだすまで続行されたのであった。

## A, s 19. 球技大会②

太陽が何度か昇って落ちてを繰り返して、ようやく球技大会当日となった。授業を一切休みにしてまで行われる球技大会だが、名目上は一応授業となっているため開会式や面倒な諸注意なんかが最初に行われる。校長の挨拶に始まり、諸注意、体操、宣誓に、生徒指導部のゴリの言葉で終わる。

『——とまあ球技大会はあくまで授業の一環ということをお忘れなく。』  
うに。みんな怪我をしないように楽しく参加してくれ。今回は先生達も参加するからお手柔らかなに。

不細工な癖に爽やかな笑顔を浮かべるゴリ。さっさと引つ込め、ポインな生徒会長とボーイツシユな体育委員長をさっさと召喚しろ。檀上が上がってるゴリに呪怨を送っていると、ふいに視線が交差する。殺意が芽生えた瞬間だった。それはあちらも同じだったように、俺のほうを見て眉を顰めた後——

『上矢、頭部死球には気を付けることだな』

「アリサ、教師チームに当たったらまずあいつを沈めるぞ。大丈夫、頭部に30発ほど当てれば流石に男子駆逐殺戮専用マシンである。あいつも死ぬだろう。援護は俺らに任せろ。一気に沈める」

「いやよ、あたしが怒られるんだから」  
なんて女だ。可愛いからってわがままなんだから！これだから金髪お嬢様の処女キャラは困るんだよな——

「おだまり暴君。一大企業のお嬢様は色々大変なのよ。あたしに釣り合う男だっていないしね」

「海鳴のプリンスたる俺がいるだろ？」

「破壊のプリンスがなんですって？」

「それサイボーグクロちゃんね」

「あのマンガ面白かったわよね。今度また借りるわ」

「一緒にアジャポンの交換しようぜ」

「ヒロスエと結婚でもしてなさい」

「……いつ……ッ！俺に死ぬというのか……！」



しようがない、アリサとのアジャポンの交換は諦めよう。

嘆息を吐きつつ、後ろでだるそうにしているはやてに話しかける。

「はやてー、アジャポンの交換しようぜ」

「ええよー」

「バカやってないでほらもう解散なんだからクラスメントにもどー  
ー」

キュポンっ（それぞれの鼻を取り外し付け替える）

「これでアジャポンの交換成立やな」

「アジャポーンっ!?!」

アリサがいきなりアジャポンを叫びだす。 流石一大企業のお嬢

様、発声練習まで完璧だな。

「ちよちよちよちよっ！ い、いまあんた達鼻が——」

「だってアジャポンの交換だしな？」

「なあ？ 別に普通のことやおもうけど……」

「いやそうじゃなくて！ いやアジャポンの交換はあつてるけど、そ  
うじゃなくて！」

慌てふためくアリサを見ながらニヤニヤと笑うはやてと俺。 実  
際、俺もはやても人間なのでアジャポンの交換など出来るはずがな  
い。 これはただ単に、はやての魔法でアリサにそう幻覚を魅せただ  
けなのだ。 他の人から見れば、俺とはやてがただ鼻を摘まみあつた  
だけにしか見えない。

はやてと二人、アリサの見えない所でハイタッチ。 ツンデレお嬢  
様が慌てふためく姿を見るのは楽しいですなあ。

「アジャポんが！ 二人ともアジャポんが！」「アリサちゃん、ちよっ  
と落ち着いて？ 落ち着いてから保健室行こうね？」というアリサと  
すずかの二人の会話を見ながら、はやてとアイコンタクトを交わして  
いると、後ろからコツンと頭を叩かれた。 そして聞こえてくる幼馴  
染の声。

「こーら、魔法が認知されていない世界で魔法を使うことは許されて  
ないでしょ？ しかも私事で使って」

腰に手を当てて怒る栗色ツインテールのなのは。 今日スポー

ツということもあり、気合が入っている。ちなみにブルマだ。この学校、女子にはブルマしか認めていないらしい。どう考えても学校の教育方針に一個人の強い感情が入っているような気がしないでもないが、触れるとめんどくさいことになりそうなのでいいや。

いまはそんなことよりなのはだよなのは。腰に手を当てる怒つてらっしやる。どうやら後ろにいるフェイトもそれには同じ考えなのか、首を縦にうんうんと振るばかりだ。

「いやいやなのは。よく考えてみようぜ。人間は魔法の生き物だ」

「はあ?」

バカにしたような目でこちらを見ている。ちなみにはやても正気なんか?みたいな目でこつちを見てきた。

「いいか。例えば、俺とお前が子どもを作るとするだろ? そうすると、俺の精液がなのはの子宮に支給されることにより新たな生命が誕生するわけだ。あの白い液体から大きな子どもを作り出すんだぜ? それこそ魔法だと思わないか?」

フェイトが後ろで「苦しい言い訳を……」はやてが隣で「流石に無理があるやろ……」と呆れている中、なのはは顎に手を当てて「うん……」と一生懸命唸っている。なのはから話題を逸らすことが出来ればいいだけだから、なのはがこうやって考えていることで半ば成功したようなもんだな。あとはなのはが何か言ってきたときに違う話題を放ってやれば――

そう考えていると、思案顔のなのはが首を縦にうんうんと振りながら答えた。

「たしかにそれはそうだけど、そんなことしなくてもコウノトリさんがはこんできてくれるんでしょ?」

『え?』

「あ、あれ? 違うの? おかあさんが前男女の行い以外の他に、コウノトリさんが運んでくる場合もあるって」

フェイト・はやて・俺が驚きの声を上げると、自分が間違っていると思ったのか、なのはが慌てながら確認を取る意味で俺達を見回す。

そっかあ……桃子さんは娘を萌え特化にする気なのかあ。

自然と柔らかい笑みを浮かべてしまう。フェイトに至つては母性を刺激されたのか、なのはをぎゅっと抱きしめて頭をいい子いい子と撫でている。

「え!? ちがうの!? だつておかあさん言つてたよ!」

「そうだねなのは。子どもはコウノトリさんが運んできてくれるよ。大丈夫、コウノトリさんに任せようね」

「そうやな。なのはちゃんとフェイトちゃんの子はコウノトリさんがきつと運んできてくるとおもうで」

「俺はフェイトの金色の髪を受け継いでいると思うな。でも性格はなのは寄りの萌えっ娘で、中身はフェイトとなのはのハイブリットだな。芯が強く優しい子」

「あく、未来のエースオブエースやな」

うんうんとはやてと二人、頷きあう。

「おかあさんダメしたね!? コウノトリさんが子どもを運んでくるつてのは真っ赤なウソだつたんだね!」

顔を真っ赤にして携帯で桃子さんに文句をつけるなのは。いや騙される方が悪いと思うけど。……でも、いまさらながらに思うけど……桃子さんの教育つてすげえ。

それから5分後、一回戦の試合のため俺達はクラスメントへと戻つた。終始アジャポンをつぶやくアリサと顔を真っ赤にしてお嫁にいけないとつぶやくなのはが可愛かつた。

☆

初戦は同じ学年のクラス同士で戦うこと。そう校長の御達しがあつたので、俺達は2つ右隣のクラスが初戦の相手となつた。このクラス、なでしこ野球部がかなりの数おり、そいつらを中心に女子が強い権力を持っているクラスだ。『アリサさんみたいな女帝なら歓迎なんだけどな……』とはクラス内ヒエラルキー最下位の男子の声。アリサは女帝といつてもちゃんとした女帝だからな。ただ

ギヤーギヤーと我を押し通すようなババコンガとはわけが違うのよ。  
一回戦が始まる少しの間、はやてとキャッチボールをしながら相手  
クラスの男子から聞いた愚痴の数々を思い出す。

うん、初戦にしてはなかなかいいクラスに当たったかもしれん。  
強すぎないけど弱すぎない。いい緊張感を持つことができるな。

「なあ俊！ 俊はキャッチチャーしかせえへんの？」

キャッチボール相手のはやてがボールを投げながら聞いてくる。

「そのつもりだよ！」

「でも俊がピッチャーのほうがあええとおもうで？ ほら、決勝戦は教  
師チームなんやし！ ピッチャーのゴーゴリは元高校球児で体育  
教師の夢がなかったら今頃プロで活躍してるほどの強さやろ？ 流  
石にわたし抑えられる自信あらへんのやけど」

困った顔で頬を搔くはやて。 そりや俺だつて打てないかもしれ  
ないからなあ。 流石に野球部以外は打つことが困難だろ。

「心配すんな！ うちには秘密兵器があるから問題ない！」

返したボールをグラブでしっかりとキャッチしたはやて。 ふと、  
手を止めてジト目を向けてくる。

「秘密兵器？ なんかえらい心配なんやけど……」

「心配したらあかん。 あたちがなんとかするダッチャ」

「俊アヒル口はキモイからやめてくれへん？」

まさかははやてからキモがられる日がこようとは。 結構キモがら  
れてるけど。

はやてと二人でキャッチボールしてる間に審判（試合をしていない  
野球部十空いている先生）から代表者集合の声がかかったので中断し  
て審判の元へ駆け足で走ってい  
く。

予想通り、あつちの代表者はなでしこ野球部のエース。 いかにも  
気が強そうな女子である。

先生から互いに握手するように言われ、イケメンスマイルでエース  
と握手しようとした直後にフアブリーズを手でシユツシユとされた  
あげく抗菌ティッシュで拭かれ、自身は手袋を着用に俺と握手した。

「先生、これは僕に対して触んなカスという表れだと受け取れます。言外のいじめではないでしょうか」

「上矢君はカスではありません。クズです」

「待ってください先生、僕はカスからクズに言い直せと抗議したわけではありませんー!」

「それでは握手も済んだことですし先行後攻のジャンケンをしましよるか」

「決勝戦ではデットボールしか与えないので覚えておいてください」

「なんという教師だ。これは致命傷を避けられない死球を与えるしか他ないな。」

いかにして自然な死球を与えるか考えながらジャンケンをしていると、相手がパーでこちらがグーの手で負けてしまった。まあどっちでもいいか。

「じゃあ私達は後攻でお願いします。最後の裏でサヨナラホームランの予定ですので」

にこりと笑った彼女はそう口にした。目はまったく笑っていないけど。

その表情に初めて感覚と思考の全てを目の前にいる対戦相手に向けることとなった。

なでしこ野球部のエースである彼女、楯梨(たてなし)(だったと記憶している)は笑いながらもこめかみをひくひくさせていた。

「さっきから黙って聞いていたけど、あなた達珍獣の集まりが決勝戦の舞台上上がるつもりなの? ここで負けるのに?」

ハツと鼻で笑う彼女、どうやらはやと俺のキャッチボールの会話を全て聞いていたみたいだ。

「全国レベルの実力派ピッチャーとして名が知れてる私の球を捉えることができるの?」

「そもそもの規模が小さいなでしこ野球で全国レベル? ってことは高校球児でいうと地方大会レベルかな?」

「なッ……! い、いつてくれるじゃないの……ッ!」

「イキ狂いのサスペンサーとは俺のことさ」

「ふざけんじやないわよ！ さつきからバカにして！ ただじやおかないからね！ 女子からの嫌われ者の癖に！」

「べつに嫌われたって痛くも痒くもないもんねーだ。俺はなのは達がいればお前らなんて歩く性処理道具にしか見えねーよだ」

舌を出しておちよくると、目に涙を溜めながら顔にビンタをかましてきた。それを空中三回転半で華麗に避けると、楯梨はぷるぷると震えながら、

「実力の差を見せてやるんだからっ！ あんたには頭部死球よ！ 全部！」

そう言つて、即席ベンチへと帰つていった。なんだ意外と打たれ弱い子だったのね。

「さーって整列整列」

楯梨が帰つたのでなし崩し的に整列することになる。女帝というからどんなものかと思つて吹っつけたが、案外メンタル弱い子だったなーと思ひながらなのは達が整列している所に戻る――

ドゴツ（なのはに腹パンされ）

バチンツ（フェイトにビンタされ）

ゴキツ（はやてに肩を外され）

バシツ（すずかに足払いされ）

ゴシヤツ！（顔面にアリサの右ストレートがクリティカルヒットした音）

『代表者が試合する前に戦闘不能に陥ったけど心配ないわ。自業自得よ。さ、正々堂々と学生であることを忘れずにお互い頑張りましょう。それと審判、それによる打順を交代したので再提出します』

『はい確かに受け取りました』

遠くのほうでアリサが相手チームと審判に向かってそう説明しているのが聞こえてくる。よかった、まだ鼓膜は生きている……。

☆

「1番バッターの上矢が致命傷のため代打で韋駄天がいきます」

「はいわかりました。上矢君は高町さんが介抱していますので守備

変更も後でお願いしますね」

代打の韋駄天が球審の後ろにいる先生に交代を告げる。先生は韋駄天の話に頷き、事前に両代表者から渡された紙に何やらメモを書き込んだ。

「ふんツ、野球部以外では唯一の危険打者の彼はあれだけ大口叩いていた割には無様なものね。私が怖くて逃げ出すなんて」

マウンド上の楯梨は、ボールを指で遊ばせながら鼻をならしバカにする。

そんな折、楯梨とは逆方向のベンチから、地獄から這いずる異形の蟲が背筋を辿るような感覚が楯梨を襲った。小さい頃から野球を経験している楯梨をもってしても感じたことのないこの感覚に、楯梨はたまらず大きくマウンドを飛びのいた。慌てて相手ベンチをみる楯梨。そこには——両手両足を拘束され亀甲縛りで横たわっている上矢俊の姿があった。その横にはSMプレイでしかお目にかかれないようなムチを持った高町なのはがベンチに座りながら時折動こうとする俊にムチを放つ姿が見て取れた。

「ひいッ!? な、なんなのあれ!?!」

「調教かな」

「……流石動物園組ね。頭がぶっ飛んでるわ。——でもまあ、あの悪名高い彼が出てこないなら安心ね。素人相手に悪いけど、こつちも没収品は返してほしいの。本気で行くわ」

「ふっ——あんなゴミいてもいなくても負けはない」

『あいつ後で潰す』

『こーら、発言許可を与えていないのに勝手に発言しない。フェイトちゃん、ボールギャグをお願い』

『オツケー』

『それは俺がいつかなのはとフェイトに使うかもしれないと思って買って隠していたボールギャグじゃないかッ!? 何故フェイトがもって——』

『わたし達相手に隠し通せるとでも思ってたのかな?』

『んッー!? んッー!?』

一面において繰り広げられるおそよ高校生というカテゴリー内では決してあってはならない風景がそこには広がっていた。初戦ということで見物していた生徒の大半はドン引き、相手チームからは高町なのはとフェイト・テストロツサ・ハラオウンに畏怖の視線が注がれ、ひよつとこのクラスの男子だけは爆笑しながら写メを撮っていた。ちなみに女子は総スルー。

そんな異様な光景を目の当たりにした楯梨が思わず手元を狂わせてしまうのは仕方がないことであった。

楯梨は投げる直前手元を大きく狂わせた。ストライクゾーンから大きく外れたボールはそのまま韋駄天に一直線に飛んでいく。韋駄天はそれを華麗に避けようと、大きく飛びのいた。ここで彼は一つだけミスを犯した。それは飛びのく際に、体を楯梨が放ったボールと正面に迎え合わせたことだ。ただ単に体を横にずらすだけでよかったのに、モテナさすぎて童貞をこじらせた韋駄天は楯梨が放ったボールを股間で受け止めたのだ。何度もいうようだが楯梨は全国レベルの投手。例え女だろうがその事実が変わりはなく、そんなレベルのストレートを股間に受けた韋駄天は――担架で保健室に運びこまれることとなった。

「どうしてうちのクラスの男共はああもバカなんだろう」

「それは違うよアリサちゃん。バカだからこそうちのクラスにきたんだよ」

「まあ女子に頭のいい子が固まってるから必然的に男はバカが多くなるわよね。あ、ごめん佐和田韋駄天の代わりに代走お願い！」

やれやれと頭を振ってため息を吐くアリサに、調教師のなのが答える。

「はあ……足の速い韋駄天がいなくなったのは痛いけど、球技大会のルール上あいつはまだ使用可能だから大丈夫よね。じゃあちよつと行ってくるけど、私は普通に打

っていいの？」

金属バットを肩に担ぎながら、亀甲縛りでギャグボールを啜えさせられているひよつとここにアリサは話しかける。そんなアリサに



ひよつとは何か言いたそうに視線を向ける。それに気づきハンカチでギャグボールを掴んで離してあげるアリサ。なお、ハンカチはそのままポケットに入れることはなくゴミ袋の中に入った。

「アリサタソひどい。俺の唾液が染みついているのに」

「だからこそ捨てたのよ汚らわしい人畜の癖に」

「まって幼馴染に対してする発言とはあるまじき暴言を吐かないで」

「あんたが私の幼馴染なのは私の人生の汚点よ。それで、命令は？」

「んー、とりあえずセーフティバントで。内野がどれくらい動ける

のか見たいし、次の打者がフェイトだから二塁に進塁させときたい」

「はいはい。べつに私はわざわざアウトにある必要はないんでしょ？」

ひとつ伸びをしてバッターボックスに向かうアリサ。その後ろ姿を見送りながらなのはひよつとに質問する。

「ねえ俊くん？　なんでフェイトちゃんの前に二塁に行かせたいの？」

別にアリサちゃんもフェイトちゃんと同じくらいの運動能力もってるよ？」

ベンチに座つてのんびりとするなのはに亀甲縛りのひよつとが答える。

「おいおいお前らの世を忍び仮の姿を忘れたのか？」

「世を忍び仮の姿って……。まあ確かに高校生のうちは魔導師はバ

イトみたいなものだけだし——あつ、そういうことか」

両手を合わせるなのは。頭の上には電球が灯つたのが見て取れ

る。そのなのはの動作にひよつとこは頷き補足する。

「そういうことだ。おまえら魔導師は常日頃から素人たちの球速・

球威とは比べ物にならないほどの魔力弾を目に焼き付けているんだぞ。フェイトやはやてはこの大会、打って当然というわけだ」

「……あれわたしは？」

「なのははほら……運動と魔法が結びつかないからさ……」

「むーっ！　すぐそうやってわたしのことバカにしてー！」

「ま、まあまあ落ち着け！　なのはには次の試合でやってほしいことがあるんだからさ！　なのはには出来ないことが！」

「ほえ？ わたしにしか出来ない仕事？」

「そ、そうそう！ なのはだけが頼りなんだよ！」

ひよつとこ必死の命乞いは、功を奏したのかなのはの顔から笑顔を再び取り戻す結果となった。　　なんだかニヤニヤしながらえへへともじもじするなのは。

「もうしようがないなー。　　ほんとわたしがいないとダメダメなんだからー」

亀甲縛り中のひよつとこにムチを浴びせながら、顔を赤くするなのは。　　横では悶絶してヘブン状態のひよつとこが存在している。

「あんた達……わたしのセーフティバント見たのかしら……ツ！」

「うわあっ!？」

ザつと土を踏みしめながらこめかみを引くつかせ二人を見下ろすアリサ。　　先ほど同様に金属バットを肩に担いでいるのだが、いまにもひよつとこに向かって振り下ろしそうな気分である。

「言われた通りに進塁させたあげたわよ、これで満足かしら。　　それと——」

先程とは打って変わって笑顔を見せるアリサ、笑顔で二人に近づき強引に二人の間に腕を捻じ込み引き剥がしひよつとこをすずかに、なのはをはやての方に向けて放り投げた。

「いつまで二人でいんのよ！　　イライラするわね！　　本気で顔面にゲロ吐くわよー！」

『そうだそうだ汚物ひよつとこの癖に！　　わたし達のはちゃんは独り占めにするなんて！』

『帰れひよつとこ！　　なのはちゃんは俺達に任せろ！』

はやてに抱きしめられたなのはを囲むようにバリケードを作る女子たち。

『あう……しゅんくくん』

「なのはー……」

「ほら、嘆いてないで試合に集中しなさい。　　目指すは優勝でしょ。

　　こんなところでつまずいてちゃ話にならないわ。　　——それに、私  
がこうでもしなかったらフェイトとはやてがどんな行動に出るか分

からなかったわよ」

こつそりとそう耳打ちしてくれるアリサ。その瞬間、ひよつところは冷や汗ダラダラの状態へと変わっていった。

「す、すまんアリサ……。確かになのはを独り占めするのはよくないわな……」

「まあそつちじゃないんだけど、わざわざ私が全部教えるのも癪だし黙っておこうかな）まあ今後は気を付けなさいよ。あんたの場合、小中高で引き下がれないところまで来たんだから。一人でも爆弾を爆発させると不幸な未来が待ってるわよ」

「ちよつとまって、なにその恐ろしい設定」

「ほら、次はフェイトなんだから応援しなさいよ」

「いやその前に……まあいいや。なんかあつたら魔法少女3人組がどうにかしてくれるだろ。フェイトー！　がんばれー！」

なるようになる。そう結論付けたひよつところは思考を球技大会に切り替えて、バッターボックスでバットを構えているフェイトの応援に集中する。ひよつとこの声が聞こえてきたフェイトは、体全体ごとひよつとこ、ベンチのほうに向き笑顔で腕を大きく振ってその声援に応えた。

「フェイトちゃんバッターだから！　いまは声援に手を振るんじゃないよ、早く打つことに集中して!」

陽気なフェイトに驚き、なのはが突っ込む。なのはだけじゃない、アリサやすずか、他のクラスメイトも驚く中、ひよつとこはやてだけは冷静だった。

「まあフェイトくらいにはあれくらいで丁度いいだろう。——雷光の異名は伊達じゃないさ」

フェイトがベンチに手を振る中で放たれた楯梨の渾身のストレートは——キャッチャーミットにおさまることなくライトの頭を大きく越えた。後ろに目でもあるかのごとく、振り向きざまに振ったフェイトのバットがとらえたのだ。

「まわれまわれ——！」

ひよつとこの大声で茫然としていた相手チームがようやく我を取

り戻したかのように動き出す。ライトが捕球している間に一塁にいた佐和田はホームへと生還、そしてフェイトは二塁を蹴つて三塁へ。セカンドが中継をしている際には既に楽々三塁へ進んでいた。『流石フェイトさんだあああああああッ!!』

フェイトのヒットにベンチが沸き立ち、ひよつとこ達の見学をしていた他のクラスもこぞつて沸いた。そして盛大な握手が送られる。これに慌てたのはフェイト本人であった。嬉しそうな表情から一転、恥ずかしそうに顔を手で覆い、「やめてやめてー」といやいやと頭を振っている。その姿が非常に可愛らしく、見ている男共はデレた表情でフェイトをずっと見ていた。

「うし、次は俺かー」

番の野球部Aが打席に向かう。

「あーちよつとまつてくれ」

ひよつとこはAを呼び止める。ちよいちよいと手でこつちへ来いの合図をし、アリサに聞こえないように耳打ちする。Aはひよつとこよりも早く、笑顔で応えた。

「心配すんな。ヒットは打たねえよ。流石にプライドはあるだろうからな。ここで野球部レギュラーの俺を打ち取れば楯梨も少しは報われる。同じ野球部のよしみだ、少しは譲歩しないとな。お前もそう思つて俺を呼びつけたんだろ？」

「いやセーフティバントで1点入れようと思つたから呼びつけたんだ」

「お前は鬼か!？」

「俺が鬼ならマウンド上で茫然としている楯梨は既に死んでいる。いいか？俺らは遊びで球技大会をしてるわけじゃねえんだよ。」

——卑怯な教師の手によって囚われている友を助けるためにしてるんだ。いいか？俺達に敗北は許されない。卑怯だクズだと罵られ、蔑まれても——友人のためなら汚名を被るのが漢つてもんだろ?」

きゅんつ、野球部Aの胸に矢が刺さる。

「ふつ、忘れてたようだな、自分の性別を。すまねえひよつとこ。」

俺という存在を思い出させてくれてありがとうよ」

「へへっ、いいってことよ」

その後ろ姿は、先程の野球部Aとは違っていた。もう高校生だから。そう達観しようと考えているAはいまやどこにもいない。全ては——友のために。その一心でAは戦場へと赴き楯梨と対峙する。

「ふん、誰かと思えば野球部のレギュラーさんではないですか。あなたを抑えれば私の面子もまだ保てますね」

「甘い楯梨。今日の俺は一味違うぞ。今日の俺は——悪鬼羅刹だ！」

「流石バカクラスの男子……何言ってるのかサツパリだわ」

「しゃこーい！ フェイトさんは俺が還す！」

クマのような咆哮にうんざりしながら楯梨はボールを投げる。

Aは横目でフェイトがホームに走りこんだのを確認し、バントの構えを取った。しっかりとボールを見るAからは必ず当てるという信念が感じられた——が、ここでボールは大きく変化した。先ほどと同じ球威、同じ速度、そこから下へと急降下したのだ。慌ててバントの位置を見定めるAだが時すでに遅し、ボールはバットに当たることなくキャッチャーミットへとおさまった。ひよつとこよりセーフティバントのサインを出されそれを実行したフェイトは、自身の足を活かしてベース直前まで来ていたため、そこから三塁に帰れるわけもなくタッチアウトとなった。しょんぼりしながら帰るフェイトに、ベンチの皆は温かい言葉をかける。

「うう……ごめんね」

「まあまあいまのはしょうがない。レギュラーのくせにあいつがセーフティ失敗するのが悪いんだから。おーい男子諸君、あいつが帰ってきたら魔女裁判式磔の刑な」

ストライッカー！

『イエッサー！』

「俊、顔が怖いよ顔が」

修羅のごとく恐ろしい顔でAを見る俊。後ろには観音菩薩が

チェーンソーを持って待機している。

ストライツクー！

バッターアウト！ チェンジ！

「チツ、使えねえな。　いいかお前ら、この球技大会終わったらあいつは処分だ」

「俊、それもうクラスメイトにかける言葉じゃないから。　私が1点取ったから大丈夫だよ」

修羅を宥めるフェイトの元に、肩を落としたAが帰ってきた。

「うう、すまねえひよつとこ」

「明日に殺処分が決定したぞ。　んで、どんな感じだった？　お前が打てないってことは大抵が打てなくなるけど」

「ありや多分SFF、スプリットフィンガー・ファストボールだな。」

あんな変化するSFF見たのは初だが。　俺達野球部となでしこ野球部は球技大会で本気出すなど監督に言われてるから、変化球なんて考えてなかった」

「ふむ……SFFか」

「どうするの俊？」

「問題ない。　アリスかはやてが楯梨の頭部に死球食らわせて強制退場の運びにしよう」

「いや問題しかないんだけど！　それは流石に怒られるよ！」

「まあ怒られたから反省文書けばいい。　友のためだ。　よっしゃ！

全員守備につけ！　気張っていくぞー！」

『おー！』

「(たまになんで俊のことが好きなのかわからなくなってくる……)」

フェイトはベンチに戻った楯梨に、死なないで！と手振りで合図を送り自分の守備へついた。

「えへへーフェイトちゃん。　わたし頑張つて守備するよ！　しゅつとしてばばーって！」

ゴロを取って一塁に投げる振り(効果音付き)の幼馴染を見て、より一層の不安を覚えるフェイトであった。

動物園クラス1ー0楯梨クラス

## A, S20. 球技大会③

### 球技大会特別ルール

- ①・試合は5回までのコールドなし 試合時間は1時間以内。  
オーバーした場合、その回の裏で試合終了 ※同点のまま試合が終了した場合、延長なしで安打の数で決めます
- ②・試合直前に審判に渡す登録用紙に名前が載っている者なら、何度だって交代を繰り返してもよい
- ③・故意によるラフプレーは退場とする
- ④・盗塁は禁ずる ※リードは可

「とまあルールの確認はこれくらいで十分よね」

指で野球ボールを転がして遊ぶアリサと今回の特別ルールについて確認を取る。今大会、試合が5回までしかないので先に点を取つてからの、逃げ切り型のほうが有利なんだけど――

「しよっぱなから楯梨か。下手したらホームランで同点にされる可能性もあるよなあ」

ピッチャーマウンドからバッターボックスをチラリと盗み見る。楯梨は獣のような瞳で俺とアリサを凝視したまま一歩たりとも動こうとしていない。あれ絶対に指定Sランク危険生物だから駆除したほうがいいと思うんだが、なのは達が動かないのでどうすることもできないか。

「ちよつと、あんた私が打たれること前提で話してるんじゃないの?」  
頬をフグのように膨らませたアリサがこつちを睨みつけながら怒る。 おお……なんか萌える! これはそう、約束の時間を過ぎて待ち合わせ場所にきた彼氏に怒る彼女の態度と一緒にじゃないか!

「すまんアリサ、お前とは体の関係までが限界なんだ……」

「ちよつとまで、あんたの中で何が起きた」

「え? 俺のセフレにしてほしいって話だろ?」

「それなら一生涯処女のほうがましよ」

「またまた、俺の部屋にきたときどぎついエロ本読んでたくせに」

「あああれ? 全部なのはバラしたわよ」

「くそッ！ 球技大会なんかしてる場合じゃねえ！ 俺はいますぐ帰るッ！」

「帰ったところであなたの隣の部屋が地獄への入り口でしょうが……」

『二人ともー、いつまで作戦会議してるつもりだー。早く守備位置につきなさい』

「あ、すいませーん！ ほら、守備位置についた。敬遠なんてサイン出したら顔面青紫色になるまで殴るわよ」

「まったく……アリサは頑固だなあ」

アリサに睨みつけながらもキャッチャーの守備位置につく。とりあえず、あつちは野球経験者が多いから塁を溜めるとすぐに点を取られるよなあ。

こちらをじつと見つめるアリサ。どうやら俺のリードを待っているらしく、アイコンタクトで相談してくる。うーむ……初球は大事だよなあ。なんせ相手は楯梨なんだから。

すくりと立ち上がり、キャッチャーミットを楯梨の頭部の直線状に置く。

『とりあえず頭部死球で様子をみよう』

「いやなんの様子見ッ!?!」

『心配するな、野球に事故はつきものだ。それにあつちの主力を潰すことも出来る一石二鳥だろ?』

「あんた女子の怖さ知らないでしょ！ そんなことしたらあたしが女子の中で恨まれるじゃないのよー！」

『そこはほら、アリサの力で抹消すればいいだろ。お金は万能なんだから』

「くっ……もうどうなってもしらないわよ！ 責任とんなさいよね！」

「あ、それなんか子どもを孕んだ危険性をもった行為をしたときにアリサに言ってもらい——」

カキインツ！

ホームラン！



「ちゃんとしやがれへぼピッチャー！　なんだそのへっぽこなボールは！」

「頭部死球を本気で投げられるわけないでしょ!?　それよりあんたがちゃんとサイン出さないからでしょうが！」

審判にタイムを取りアリサに文句を言いに行くと、アリサが胸ぐらを掴みながら怒ってきた。

「いや、だから楯梨を退場させれば勝率がぐんとアップして——」

「あんたさ……そもそも故意のラフプレーは禁止って書いてあるのよ？」

「俺がラフプレーと思わなければそれはラフプレーとして成立しない」

「なんとという暴君」

がつくりと肩を落とすアリサ。　なんかアリサの周りにだけどんなよりとした靄がかかっている気がするのはいのせいかな？

「はあ……あんたのせいで振りだしに戻ったわよ」

べしべしと高速連打でデコピンを繰り出してくるアリサの後方、丁度楯梨がホームに帰ったらしく俺とアリサに聞こえる声で呟いたのを耳にする。

「はあ……ちよつと可哀想になってきちゃうかしら。　まあでもしよ  
うがないわよね。　だって私はなでしこ野球部のエースで全国レベル  
なんだから。　みんなー、おまたせー！」

「……………」

恐らく、手を振っている連中は同じなでしこ野球部の連中だろう。　それを証拠に他の奴らはごめんとポーズをとって頭を下げているのだから。　そうかそうか……打ちごろの球か。　まったく——舐められたもんだな。

「俊、あともう1点めぐんであげてもいいんじゃない……?」

ぷるぷると肩を振るわせるアリサ。　いまの楯梨の言葉でアリサの中のプライドがボルケーノしたらしい。　もうなんか目が怖い。

笑ってるけど、笑ってるけど暗殺者の目をしてる。　まるで俺の工口本の中に熟女モノを発見したときのなののはの目と似ている。

「……可哀想に。俺もうしーらないっと」  
さて、位置につきますか。

☆

ストライクッ！

3アウトチエンジッ！

審判の威勢のいいコールがグラウンドに響く。楯梨からホームランを打たれたアリサは、その後はすぐに立ち直り抜群の制球力と唯一扱える変化球のカーブとストリートとスローボールで後続にバットを振ることすら許さずに3アウトに打ち取って見せた。

「ナイスピッチ」

「当然よ。あームカツク！なによきっきのあの態度！」

即席ベンチに戻ってきたアリサは地団駄を踏む。よほど先程の楯梨の態度が気に入らなかつたんだろう。

「まあまあアリサちゃん。深呼吸深呼吸」

「そうやでアリサちゃん。こういうのは勝てばいいんよ。勝った後に一言グサツと心にくる言葉のほうが負け犬には効果覷面やで」

タオルでアリサの顔を拭くすずかの言葉に、はやてが同意する形で補足する。にこにここと笑う二人を前にアリサも膨らましていた頬を通常時に戻し、頬を搔く。

「ん……なんかごめん」

「ツンデレ姫可愛いなあ」

「ツンデレじゃないわよ」

「俺はヤンデレ大好きだぞ」

「……それ洒落にならない（わ）よ……」

隣にいた俊のヤンデレ好きにアリサとすずかが可哀想な目を向ける。対する俊は何故自分がこんな可哀想な目を向けられているのか分からないのか、首を横に捻る。

「なあはやて、俺の周りにヤンデレなんていたっけ？」

「さあ？ まあそんなことより——」

『動物園クラスの次のバッターは……はやてさんですか。はやてさん、早くしてください』

「むう……もうちよつとまってくれてもええのに」

はやてが何かを言いかけた時、バッテリーボックスから主審の先生の声ははやてにかかる。はやては口をアヒル口にし文句を言いながらも、渋々といった雰囲気です。

トを持ってバッテリーボックスに向かっていく。そんなはやてに俊は後ろから声をかける。

「はやて！ 頑張れ！」

ビクつと肩を震わせたはやては後ろに振り向き、笑顔で手を振る。その笑顔に俊の後ろでノコギリを構えて待機していた男子共は撃沈した。

『くそッ！ なんでいつもコイツばかり……！』

「まてまてまて、その前にお前らはそのノコギリで何しようとしてたんだ」

『くそお！ 俺だつてはやてさんに笑顔向けられたい！ コイツと俺達と何が違うんだよ！』

「まあ顔だろうな」

発狂した男子共がノコギリでひよつとこに襲い掛かる。ひよつとはそれに対し後ろをみずに後ろ蹴りを繰り返す。そこから始まるベンチ内乱闘。このクラスに友

情など存在しない。あるのは殺意のみである。

「うるさあああああ！ これだから動物園クラスってバカにされるんでしようが！」

ひよつとこと男子が殴り合う中、それを強制的に止めたのはアリサの一声であった。アリサの怒気を孕んだ声に男共は一瞬にしてアリサの目の前で正座し、目をキラ

キラ輝かせている。

『うおおおおお！ アリサさんに説教されるなんて！』

『やべえよやべえよ、アリサさんの唾が俺の顔に！』

『あッ！ お前俺によこせ！』

『いや俺に！』

「俊、バット持ってきて。俊は一塁のコーチお願い」

氷のように冷たいまなざしをクラスメートに向けるアリサは、俊から金属バットを受け取った後俊にそう指示を出した。

「はいはい。　　そういえばなのは達は——」

アリサに金属バットを渡した俊は、アリサの指示通りに一塁コーチへと向かう途中、なのはとフェイトを探し視線を彷徨わせる。二人はすぐに見つかった。ベンチ

の端、隅っこに二人だけの空間を作っていた。

『はいなのは、あーん』

『あーん。　　うん！　　おいしいね！　　フェイトちゃんもあーん』

「……混ざりたい」

本音を呟きながら、俊は一塁コーチへと向かった。

一塁コーチから眺めるバッターボックスにははやてがバットを長く持つて楯梨のボールをファールにしている姿が映っていた。

「ファールで出来るだけ粘る気か。　　まあどうせ楯梨のボールなんてはやてにはいつでも打てるもんな。　　なあいまファール何回目？」

一塁ベースにいる女の子にファール回数を聞くと、女の子は6回目だと親切に教えてくれた。

俊は真剣な表情でバッターボックスに立っているはやてを見つめる。

「いつだってお前は真剣だもんな……」

カキンツと金属バットと白球がぶつかる音が鳴り響く。　　白球はファールゾーンに綺麗に落ちる。　　楯梨は嫌そうな顔をしながらもプライドからか、敬遠を選ばない。　　対するはやては真剣な表情ではあるが、どこか余裕な雰囲気がかがわしている。

はやては考える。　　もつとずつと粘って、さつさとピッチャーを交代させようと。　　そう思いながらバットを振る。　　これで8回目のファール。　　まだ、まだいける。　　そう考えながらはやてはバットを構え直す。

「ん？」

バットを構え直すと、一塁コーチに俊がいるのが目に見えた。

「あかん、ファールなんてしてる場合やない！」

はやて思わず口に出す。既にはやては楯梨のボールなど見ていなかった。視線は一塁コーチにいる俊だけを捉え、バットは的確に楯梨の投げたボールを捉えていた。小気味よい音を立ててセンターの後ろに深く深く突き刺さるボール。

『ナイスバッティング！　ゴーゴー!!』

はやての長打に動物園クラスのベンチは沸き立つ。男子女子ともにベンチ内では声を上げて走れ走れと笑顔で指示を出す。一方打たれた楯梨は茫然自失。無理もない日本女子野球界を背負う自分がいとも簡単に打たれたのだから、しかも素人相手にだ。

『はやてちゃんランニングホームランいっちゃえー!』

打った本人は自分が打ったボールなど視界から消し、一目散に一塁に走り込み——そこでピッチャーと止まった。

『なにイイイイイイツ!?』

『俊みてくれた!　わたしが打ったとこ!』

「おう!　バッチリ見たぜ!　でも2塁に進んだほうがいいと思うんだ。ベンチで修学旅行に俺だけハブろうって提案がいま出されてるし」

「そんなときは二人だけで修学旅行楽しめばええよ」

一塁ベースにしっかりと足を残しながら、俊の手を取るはやて。

そのままはやては恋人のように腕を組む。二人の身長差からはやては俊を見上げる形となるのだ

が、見上げるはやてがすっかり笑顔を浮かべるものだから、当の本人は真っ赤になった顔を見せないように視線を逸らすばかりである。

『俺来世ではあいつを殺すための殺戮マシーンに転生する』

『もうあいつの上履き焼却炉に捨てようぜ』

『あたし上矢君が早漏だって校内でいいふらしてやる』

はやての好意の全てが俊に向いていることに憤りを感じるクラスメートからの呪詛のような言葉に俊の背筋は凍る。

そうこうしている間にようやくはやての打ったボールにセンターが追い付き中継を挟みながら二塁へ、そしてピッチャーへと返球される。

楯梨は泣きそうな顔でこちらを見ていた。瞳に涙を溜めながら一塁で俊に楽しそうに笑顔を振りまくはやてを睨む。

それに気づいた俊ははやてにそれとなく伝えた。

「あー、はやて？　楯梨がこっちを見てるぞ？」

「せやな。　　そういえば俊、今日はお弁当やる？　　それでな？」

ちよつと作りすぎたから俊の分も詰めてきたんやけど……その……よかったら食べてくれへんかなあつて」

「え？　　まじで？」

「う、うん……。　　だ、ダメやろか？」

「いや！　　まったくそんなことないしむしろ嬉しいよ。　　あ、じゃあ俺の作った弁当も食べる？」

「うん！」

『俺来世では魚になって骨であいつを殺してやる』

『上矢君、顔がいいだけの癖に……！　　あたしからはやてちゃんを寝取るなんて！』

『そうよそうよ！　　絶対上矢君は無職になるはずだから、はやてちゃんも今のうちに離れて！』

どうやらこのクラスにはレズ女子が相当数いるようである。

☆

所変わってこちらはバッターボックスに立っている月村すずかは打席に立つ前に主審の先生に言われた言葉を思い出していた。

『動物園クラスの手綱を掴めるのはあなただけです。　　本当にお願います。　　あのクラスは男女ともにおかしい子が多数いますが、あの子たちがいると校内が活気づくのです』(って言われてもな……。　　私には無理だよ、絶対に)」

困った表情でとほほと落胆するすずか。　　一塁でははやてが楯梨を無視して俊と会話し、ベンチではクラスメートが阿鼻叫喚の地獄絵図と化し、相手チームはそんな自分のクラスにドン引き、なのはとフェイトは二人だけの世界でポッキーゲームをする始末。　　こんなクラスを自分がどう手綱を取ればいいのだろうか。

「(だめだめ、いまは打つことに集中しないと)」

首をぶんぶんと振って目の前のピッチャーだけに意識を集中する。いまなら自分でも打てるのだから。フェイトとはやてが魔導師であることを知らない楯梨にとつて、二人とも素人という枠組みである。その二人から立て続けに長打を完璧に打たれたのだから落ち込むのも無理ない話である。しかもそれが二人とも余裕しやくしやくで打たれたのだから。

そんな楯梨の投球はストライクゾーンからことごとく外れ、自慢のSFFも一回よりキレがおちていた。すずかはボールをしつかりと見極めてフォアボールを選び、続く7番8番の野球部も手堅くヒット、1点を追加しなおもノーアウト満塁のチャンスでバッターは9番のなのはへと回ってきた。

「お願いしまーすー！」

いつの間にか野球帽子を被っていたなのは帽子を取り、しつかりと挨拶をする。その様子に主審と野球部はおろか、キャッチャーの女の子でさえもほんわかとした笑みを浮かべる。

『なのはー、手が逆だぞー』

ぐつとバットを握りしめたなのはに、一塁コーチの俊が声をかける。

「へ？ 手が逆？」

「あ、なのはちゃん。バットはね、こう持つのよ」

クエッションマークを浮かべたなのはに、キャッチャーの女の子が優しく教える。

「あ、ありがとう！ ふんふん、俊くん行くよー！」

『おう！ とりあえず打ったらボールは見ずにこつちに全力全開で来るんだぞー！』

なのはが大声で手を振ると、俊も大声で手を振り返す。

「クラスの皆もわたし頑張るからねー！」

『なのはちゃんががんばってー！』

『ノーアウトだからミスっても大丈夫だからねー！』

『ファイターー！』

クラスメートも手を振り返しながら声援を送る。

そんな声援を聞きながら楯梨はボールを内角低めに投げた。

魔導師としては天才の域に達しているなのは、自分が手に持つバットの長さを計測し、視線を楯梨の瞳に奥へと据える。なのはの雰囲気が変わる。一陣の風が吹きすさび、長髪を風が遊ばせる。

ゆつくりとバットを構えるなのは。天才は既に魔導師モードへと移行していた。全力全開で目の敵を撃ち抜く一筋の光へと姿を変える。フェイト・T・ハラオウン、八神はやて・高町なのは——誰を一番敵に回したくない？ そう問われたら誰もが高町なのはと答えるだろう。それほど魔導師としての彼女は敵に回すと恐ろしいのだ。

「んにゃっー!」

ストラーイクツ!

だが残念なことにはただの球技大会。魔法の天才も球技はてんでダメであった。あっけなく空振り三振を決めたなのはクスメイトの拍手を受けながらとぼとぼと自軍のベンチへと引き返していった。

「どんまいなのは! 次があるよ!」

「そうそうなのは、次は打てるわよ!」

フェイトとアリスの金髪コンビがなのはを励ます。

「そ、そうだよね! 次はちゃんと打てるよね!」

「まあ目をつぶってちゃ打てるもんも打てないけどな」

「うぐっ……!」

なのはがベンチに持ち帰ってきたバットを持ちながら俊が一言つぶやく。

「う……俊くんのいじわる……」

「え? なんだって?」

「あんたいつから難聴になったの?」

「俺の耳は自分にとって不利益な情報は聞き取れない仕組みになってるんだ」

「あんたの人生楽しそうね」

呆れ口調のアリサに笑顔で投げキッスを渡す俊。その瞬間アリ



サの足が視認できないほどの速度で俊の頬を取られ俊の体はベンチからバッターボックスまで吹き飛んだ。

「上矢君、寝てないで構えなさい」

「待ってください先生……いまの惨劇を見て言うべきことはそれですか……」

「ああ、打席変更は私のほうで済ませておきましたので」

ピクピクと打ち上げられた鯉のように跳ねる俊に先生は同情することなく進行させる。その無情ともいえる反応を目の当たりにしたひよつとはバットを支えになんとか立ち上がり、バッターボックスで構えを取る。しかし視線はベンチで頬杖をついてこちらを見るアリサに向けられていた。その横ではなのが慌てている。俊に何かを伝えようとしているが、アリサに口を塞がれているため声は届かない。

『なのはは黙ってなさい。こっちのほうが面白いでしょ』

『むー！　むー！』

「なのはたんにあんなことをするなんて……！　アリサめ……昼休みに体育倉庫で純潔を奪ってやる……ッ！　泣きながらもト口顔で俺の——」

ゴツ

デットボール！

満塁でも俊に頭部死球を喰らわせた楯梨は、何故か動物園クラスから賞賛を浴びることとなった。

☆

5回の野球というのは意外と早く終わるものである。それに時間制限も設けてあるのだから最長でも1時間である。とどのつまり、野球というより一種のミニゲーム

と捉えていたほうが分かりやすいだろう。

楯梨クラスと動物園クラスはその後、俊に続くバッターであるフェイトが長打を、アリサが安打で4番が意地を見せてのホームラン。はやてにすずかで1点を稼ぎ、野球がチャンスを演出、なのはが空振

り三振と続き、なんやかんやで計8点も取り一回戦を大勝で終えた。ちなみに楯梨は泣きながらもひよつとここに一矢報いることが出来たので満足そうな顔をしていた。

「まあ一回戦からなかなか皆いい調子じゃない？」

「せやな、なのはちゃんも予定通りの成績やけど守備はぽてんヒットをちゃんと処理してたしい感じやない？」

「えへへ、ありがとー」

アリサとはやてが一回戦の記録を見つつ述べる。それにすずかとなのはが同意しながら記録帳を覗き込み――

「まあ問題はうちの大將がすっかりスネちやったことか（や）な」

4人ともとある方向に視線を向ける。そこには体育座りで木と楽しそうにお喋りしている高校生の姿があった。

「やあ木さん。 え！ あの銀杏さんついに結婚するの!! へー、お相手は？ えツ!! ジェネラル・シャーマンと!? おいおい、あの人確かに淫乱だったけどあの巨根と結婚するなんて…… やっぱり

決め手は巨根かなあ」

「なんであいつあんなに楽しそうに木とお喋りできんの……」

「俊……ついにみつけたんやな……俊のレアスキル」

「いやはやてちゃん、これ絶対にレアスキルとかの類じゃないと思うよ」

「あはは……みんなやりすぎだよ……」

そんな高校生の横には一人、笑顔を浮かべたまま黙って俊を見つめる女子高生がいた。

『うんうん、よかつたねー俊。 お友達が結婚して』

『いや、ほんとほんと！ 嬉しいなー!! ……俺は頭部死球食らってもクラスメイトが俺を囲ってマイムマイム踊り出すからさ』

『よしよし、大丈夫大丈夫。 ちゃんと俊には私って味方がいるからね。 私だけは味方だよ?』

頭を撫でながらそつと触れ合う距離まで移動するフェイト。

フェイトはそのまま頭を撫でるだけじゃなく、自身の豊満な胸にそつと頭を移動させ体全体で抱きしめる。

『俊は良い子だから、二回戦も頑張るよね?』

そう笑顔で質問するフェイトに、俊はデレデレの緩みきった顔でこくと頷いた。それに対しフェイトは優しく笑い、より一層抱きしめる力を強くする。

「流石フェイトね……。しつかりとあのバカをコントロールしているわ。まあそのおかげで——」

「(ギリギリギリ……!-)」

「どうどうなのはにはやて。そんなに怒らなくても——」

『ねえフェイト?』

『なーに?』

『乳首吸っていい?』

『俊が死んだら考えてあげる』

「(ビキビキビキ……!-)」

「あれ!? いまのどこに怒る要素があったの!」

「イチヤイチャしやがって……!-」

「あんた達ちやんとフェイトの会話最後まで聞いてた!」

ギリギリと奥歯を噛み締め、拳を握り耐える二人。俊とフェイトはそんな二人の光景など知る由もなく、二人笑顔でアリサ達と合流する。

「よーし! 二回戦勝ってフェイトの乳首を吸うぞー!」

「まって俊、私の話ちゃんと聞いてた!」

「分かってる、照れてるだけなんだろう?」

「なんなの俊のその前向きすぎる思考回路は!」

可愛い奴め……。そう思いながら俊はアリサが持っていた対戦表を手取る。

「まあ分かったことだったが、やっぱり俺らのチームはほとんどどうまい奴らと当たっていくな。俺らが強いだけで楯梨達だって普通なら初戦で負けるほど弱くないか」

「らな」

「というかどう考えても体育委員と実行委員の悪質な嫌がらせにしか見えないわよ、この対戦表」

「うーん、まあ大方あっち側は大会が盛り上がるように対戦表を決めたんだろ。初回からずつと俺達はうまい奴らと戦っていくから見応えはあるだろうし。逆方向は教師チームが勝ち上がるように細工されてやがる」

「えー！ それじゃこの大会って仕組まれてるの!? なんかズルくないそれって!」

獣のような唸り声をあげていたのはだが、俊の説明を聞いて表情を一転させる。頬をぷくーつと膨らませて両腕をぶんぶんと振り上げ抗議の意思をあらわす。

「だがあの誰にでも平等を常とするゴリラと、校長先生がこれに気が付かないわけがないんだよなあー」

「となると、これはゴリラ達も共犯ってことになるんやろうか?」

「もしくは——そうしなければいけないなんらかの出来事があったのか」

ピンと空気が張り詰める。自軍のテントとはさほど離れていないので、外からのガヤは聞こえてくるはずなのだが、6人の耳は無音を捉えていた。

均衡を破ったのはやはり俊であった。手に持っていた対戦表を落としながら、やれやれと首を振る。

「なーんってな。考えすぎだろ流石に! そんなことよりさつさと二回戦の作戦立てて勝利で昼食タイムにするぞ! てめえら! 全員集合! これより作戦会議を開く!」

俊の声にベンチでお菓子パーティーをしたり漫画読んでたりゲームしていた面々は揃って俊たちのほうへ歩を進めた。俊は全員が揃ったことを確認し、落とした対戦表を拾い皆に見せる。

「この対戦表からいくと、次の相手は十中八九2年の体育専攻科の奴らだ。んでその次が男子野球部が多く在籍している3年のクラスで、セミファイナルが3年の……こいつらかな。んで最後にファイナルが100%の確率で教師チームだ」

『運がわりーよな俺ら』

『これ見る限りだと、ずっと厳しい戦いを強いられるかもしれないぞ……』

『でもアリサ女帝が苦しい顔すると思うと興奮するよな……』

『ああ確かに……』

「俊、バット」

「死なない程度にな」

ぶんぶんと勢いよくバットを素振りするアリサに男子たちは押し黙る。

俊はそれを確認し、口を開いた。

「いいか、いまからお前らに作戦を伝える、一度しか言わないからよく聞いておけ。まず二回戦は俺の代わりにフェイトがキャッチャーを務める。ピッチャーは一回か

ら順番にはやて、すずか、アリサ、フェイト、なのはの順で投げてください。主審にはその都度俺から伝える。二回戦はこれで大丈夫。キャッチャーをフェイトがする以

上、ボールはバットに当たらない。俺らが試合をしている間に、ハニートラップ部隊には3年の男子野球部に色仕掛けをしてこい。あいつらエロいことしか考えてないからな、絶対に襲ってくる。

男子は物陰からいつでも飛びかかれるように準備、スタンガンの使用を許可する。必ずハニートラ部隊、男子ともに小型のビデオカメラと隠しカメラを忍ばせ証拠を残しておけ。3回戦時の強請に使用する。俺らが3回戦勝ったら男子全員でセミファイナルの対戦相手をごこれ。武器の携帯を許可する」

「俊くん、これ絶対に球技大会の作戦会議の内容じゃないよね」

「愛するもの（エロ本）のためだ。俺は修羅になろうと決意した」

「もう……退学になっても構わないからね！」

ふんとそっぽを向くのは。普段から管理局局員として働く彼女としては何か気に障ることあるのだろう。それか単純に幼馴染のことを心配しているか。

頬を搔く俊に頬を膨らませて怒るのは。

『ていうーかさ上矢君、教師チームってゴリがいるんでしょ？ 勝て

んの?』

「ん? 心配すんな。 ……勝てなかったから物理に切り替えるだけだしな」

『なるほど、やっぱお前すげえわ。 退学間近なのに』

『上矢君カッコイイ!』

「まてお前ら、さりげなく俺単体で襲撃するように仕向けるな」

その後結局、二回戦の呼び出しがかかるまで皆で襲撃に行こうよ派とお前が単体で逝けよ派の二つの意見に分かれ話し合いとなった。

「はあ……バカばかり」

アリサはそんなクラスメイトを遠くから見ながら呆れ口調で呟いた。

☆

「いやよッ! どうしてあたしがなのは達みたいなことしなきゃいけないのよ!」

「これもクラスの勝利のためなんだよ! お願いします!」

『お願いしまーす!!』

「絶対に嫌!」

「アリサちゃん、もう覚悟決めなあかんで?」

「うッ!」

「でる! どびゅッ!」

「ぶち殺すわよあんた!」 そ、そもそもなんではやて達はそんな恰好で平気なの!?! ——チアガール姿なのよ!?!」

わなわなと指を震わせはやての恰好を指さす。アリサが狼狽えるのも納得の光景がそこには広がっていた。高町なのはがフェイト・T・テストアロツサが八神はやてが

月村すずかが——チアガール姿でベンチに座っていたのだから。

青をベースに黄色の線と白い線で縁取られた上に、チラリズムを完璧に抑えたスカート。ちよつと激しい動きをすればパンツが見えてしまうのではないかと期待感が高まる服装となっている。

「大丈夫だよアリサちゃん!。ちゃんとブルマ履いたままチアガール

ル姿になってるから。 上も完全防衛だし」

「コスプレイヤールと一緒にすんな！」

「魔導師だよ!？」

「そもそもあんた達は何もおかしいと思わないわけ？」

「まあわたしはいつもバリアジャケット着てるし」

「私はお母さんに色んな服装せられて写真撮られてるし……。 それに俊からもコスプレお願いされて着てたこともあるし……」

「わたしは俊がコスプレ好きやから普段から色んなモン着とるよー」  
「(ダッ!）」

上矢は逃げ出した。 しかしなのはに捕まった。

『落ち着けなのは!? 俺は何もしていない!?!』

『ねえ……俊くんはなのはの所有物って子どものとき約束したよね……?』

馬乗りで俊と5cmほどの距離で触れ合う距離まで顔を近づけるなのはを見ながら、アリスはフェイトとはやてに言う。

「あんた達……あれのどこがいいのよ?」

「いや、あれでちゃんとカツコイイとかあるんよ?」

「……右に同意」

「ふくん、さっぱりわからん」

『わたしのこと好きなんでしょ? 世界一可愛いんでしょ?』

『世界一かわいいよ!』

「うん、やっぱりわからん。 まあ確かにコスプレになんの抵抗もない2人は分かるけど、なんですすか抵抗なく着てんのよ?」

フェイトの横で苦笑いを浮かべていたすかに目標を変えると、すかには照れながらも

「こういう服を着る機会ってあんまりないし……。 ちょっとやってみたかったなあって思ってた」

もじもじしながらえへへと笑うすかには、クラスの男子が射抜かれたの言うまでもない。 そしてその間にはやてがなのはと俊を引っぺがし、自分が俊を独り占めし

たのも言うまでもない。

はやてとなのはの板挟みになっっている俊にアリサが気持ち悪いモノでも見るかのように見つめる。

「キモイ……」

とても理不尽ではあるが、とてもよくあたっていた。

☆

結局その後、ずかとクラスメイトの説得もあつて嫌々ながらアリサもチアコスを着ることとなった。なんとこの二回戦、あちら側は5人全員がチアガールのコスプレ

レになるまでずっと正座で待機してくれていたのだ。

しかしながら、ここで一つ問題があった。

「なんであたしのチアコスがこんなにスカート短いのよッ！」

「す、すいません！ 間違つて一着だけエロコス持つてきてしまつて！」

「ああん!? あんた学校をなんだと思つてんの！」

「猿共の交尾場」

「……まあ一理あるわね、それも」

荒ぶる神よ鎮まりたまえ、そう何度も何度もクラスメイトは心の奥底から願う。そうでもしないと1人の男子生徒が死んでしまうから。俺達の使い捨て装甲板がいなくなってしまうから。クラスメイトは彼を助けたい一心で願う。

『エロコスつてすげえ……、基本的にパンツ丸見えの構造なんだな……』

所詮彼は使い捨て装甲板。クラスメイト的には意外とどうでもよかつたようだ。

「あ、アリサちゃんもう整列だからちよつとだけ手を止めよ? その後にゆっくりシゴいても問題ないでしょ?」

「……まあそれもそうね」

ぼろぼろになった俊は引きずりながら、一同は整列へと向かう。

「えー、今回の審判は動物園クラスの担任の愛ぼんでーす! 上矢君、大丈夫?」

「先生……ババコンガが俺を……」



「はいはいアリサちゃんストップストップ！ 上矢君をあんまりイジメないの！」

脳髓を引きずり出そうとするアリサを止める愛ぼん。既に使い捨てて装甲板は完全に心が折れフェイトの後ろに隠れている。尻を揉んで往復ビンタを受けている最中だ。彼のエロへの欲求はいまだ折れてはいなかった。

「ほらほらアリサちゃん、そのコスもかわいいよ？ ブルマも着用してるし問題ないでしょ？」

「そ、そうですね……。み、皆……これ変じゃない？」

頬を赤らめスカートのエンドの端を掴んでみせるアリサに、皆は笑顔でこう言った。

「うんかわいいよ！」

「すんごくかわいい！」

「アリサちゃんスタイルいいし、よく似合ってる！」

「女帝流石！ よ！ 姉御！」

「おっす痴女」

「はいそれじゃ二回戦は始めるよー！」

元氣いっぱい二回戦の開始を宣言する愛ぼん、アリサ達の対戦クラスは心底こう思った。

『（こいつらと試合とかもう帰りたい……）』

## 二回戦

動物園クラスVS2年体育専攻科クラス

動物園クラス、重傷1名。

A, s 2 1. 球技大会④

二回戦、試合は完全に投手戦にもつれ込んでいた。二回の裏、すずかとフェイトがバッテリーを組んで2年体育専攻科を捻じ伏せる。

『審判！いまボールが分身して飛んできましたよ!?!』

『初戦で頭部死球でも受けましたか?』

『審判!? いまボールが直下で落ちてきたんですが!?!』

『月村さんは素晴らしいボールを投げるみたいですね』

体育専攻科の奴らが一打席ごとに審判に抗議してくるも審判はほとんどこんな感じでスルーしてくれている。そりやそうだろう、ボールに仕掛けなんてないし、そも

そもピッチャーだってお前らが丁度打ちごろのボールを提供するピッチャーなんだからな。

ただちよつと——キャッチャーが最強クラスの魔導師だけのこと。

野球部部員のむさくるしい声が空に響く。これでチエンジなので、ずつと俺の背中で指を這わせていたなのはとアイドルポーズの練習をしているはやて、そして一人だけスカートを抑えて赤面しているアリサを連れてベンチへと戻る。

「おつかれさん、フェイト。飲み物いる?」

「うん、貰おうかな」

少し前に金を払ってスポーツドリンクを買ってきてもらったので、それをそのままフェイトに手渡す。

フェイトは礼を言いながら、こくりこくりとのを鳴らす。

「はい、ありがと」

それが当たり前であるかのようにスポーツドリンクを手渡すフェイト。俺もそれが当たり前かのように渡されたペットボトルを舐めまわす——直前でフェイトに取られる。

「顔がキモい」

「イケメンに向かってなんたる言葉を投げかけるんだ」

「はあはあ言いながら私が口をつけた部分に舌チロチロさせて近づく男の顔がキモくないわけないでしょ?」

「大丈夫、浮気はしないって」

「まっつていま俊だけ次元の狭間に行かなかった？」

「次元の狭間に迷い込んでみてもすぐにキミの元に戻ってくるよ」

「ありがとう。でもこのペットボトルは渡さないからね？」

差し出す手を振り払うフェイト。 どうも淫乱ボディの癖にこういうシチュエーションには照れるみたいだ。

それにしても、そう前置きしてフェイトは眉をハの字にして問いかける。

「これって不正というか反則にならないのかなあ……」

「反則？ どこが？」

「だって……もろ魔法使ってるわけだし……。それに管理局にバレたら怒られるし……」

この二回戦、俺はフェイトに一つだけ指示を出した。それはフェイトにとっては至極簡単な行為であり、それでいて完全勝利で二回戦を終わらせることが出来る指示である。

ようはキャッチャーのフェイトに魔法でボールを操作してもらおうということだ。

ピッチャーが投げたボールをフェイトが適当に軌道変えてミットにおさめるだけの簡単なお仕事。ピッチャーは1回ごとに変わるから文句なんていいようもないし、そもそも女子に男子がそんな情けないこと出来るわけがない。

俺らは1点加えればそれでこの試合は勝ちも同然なわけだ。

「まあアレだ。管理局になんか言われたら野球漫画持参して『この漫画にある必殺技を真似ただけです』つていえばなんとかなるだろう。人が考えたことだ。人に出来ないわけがない。それに、あっちもフェイト達のチアガール姿を間近で見られてるんだ。既に勝ち負けなんてこだわってねえよ」

チラリと視線を相手チームのベンチと守備に向ける。全員ともこちらを凝視しつつ前屈みになっていたり地面に頬を擦りつけていたりする。

「……ねえ俊、これ生徒指導のゴリ先生呼んだほうがいいんじゃない

？」

「案ずるな、既に我が下僕がゴリを呼んで待機している。試合終了と同時にゴリがあいつらを殺す予定だ」

そう言われてフェイトもゴリの気配に気づいたのか、軽く頷いた。フェイトが頷いたその瞬間、二回のラストバッターであるさすがが見逃しの三振でベンチに戻ってくる。

「お疲れですか。どんな感じ？」

「うん、俊君なら余裕で打てるかな。後は綺麗に合わせられるか、かな？」

「タイミングなら太鼓の達人で鍛えてるから自信あるぜ」

グラブを手に取りマウンドへ。お次のピッチャーはアリサだな。

現在のアリサはエロコス着用のため正直チンコにくる。高校生にも関わらず、ツーサイドアップのあの髪型と金髪が相乗効果を生み出しているんだろうなあ。それに――赤面しつつ顔を伏せるアリサに萌え死ぬ。

「俊くん」

「痛い痛いッ!? 眼球押さえないで!? 失明する失明するから!」

後ろから可愛らしい声と共に可愛くない暗殺術で俺の眼球を潰しにかかるのは。あ、なんか瞳の中に浮いてる。へんな生き物が浮いてるよ、これ。

パツと離された手から体を逸らし後ろにいるのはを見る。チアコス姿で頬を膨らませているのは、そして横にはバットを持ったまま笑顔でこちらを見つめている

はやてが静かに立っていた。……なんでバットを振りかぶっていたかは聞かないでおこう。

「アリサちゃん見るの禁止!」　　というか、そもそも俊くんのせいなんだからね。アリサちゃんがあんなに困ってる姿なんて早々拝めないよ」

「うくん……確かにな。まあ可愛いからいいんじゃない？」

「あのねえ……」

「まあ確かにアリサちゃんがかわええのは賛同するけど――あのボー

ルの軌道はどういいわけするん？」

はやてがアリサの方向を指さす。正確にはアリサの投げたボールを指さしていた。下着が見えてるのにもかかわらず、必死にスカートの上端を抑えるものだから足も

上げない上に、手も振りかぶらない。したがって必然的にボールはすぐ下に落ちる——寸前で地を這うようにバッターへ向かい手元で急激にホップしストライクゾーンへ穿つ。

『す、ストライク！』

ここからでも分かる、めちやくちや困りながら宣言する野球部、明日の方向を見る教師、冷や汗を掻くフェイト。

誰もがおかしいと思いつつながら、アリサの泣きそうな表情を見ては何も言えずに次の動作に入ろうとする。

「で？ どう責任とるん？」

『なによあいつ！ さつきとはまるで球筋が違うじゃない！ それにボールがあんな動きするわけじゃないでしょ！ 不正よ不正！』

初戦で負けた雑魚がなんかわめいてるし、フォロー入れておくか。

「アリサー！ それがさつき言っていたライジングキャノンか！ 守君もビックリなホップだな！」

「流石やでアリサちゃん！ この回で終わりやなんて勿体ないくらい！」

はやても俺の作戦にのってくれたのか、声を出して騒ぎ立てる。

『お、おいマジかよ……。あれが女帝の本気だと……。！』

『あんなボール打てるわけねえだろ……。』

「そもそもそんなボール投げれるわけないのにな」

「まあ男なんて可愛い女の子が笑顔向ければすぐに騙されるバカな生き物なんやから、いまのを信じたって別に驚かんよ」

「たまにお前のことが怖くなる。まさか俺も騙されたりしてないよね？」

はやてならなんかやりそうで怖い。そう感じていると、隣に立っていたはやてがそつと俺の胸に頭をこつんと預けた。

「体育倉庫でのアレは本気だからしたんよ……。？」

……まっつてくださいいはやてさん。 体育倉庫でのアレってなんで  
すか？ 俺と貴女は体育倉庫でナニかしましたっけ!?

困惑する俺をよそに、はやては甘えるように体全体を摺り寄せてく  
る。 知り合いの中でロリを除いて一番身長が低いはやて。 上か  
ら甘えるような潤んだ瞳を向けられて落ちない男なんてまずいない。  
俺だって——すぐ横でなのはが爪を右腕に食い込ませていなければ  
落ちたかもしれない。

「なあ俊？ 今日打ち上げわたしの家にきいへん？ 手料理ごちそ  
うしようとおもってるんやけど」

「ふんすっ！」

ぐいっと横にいたなのはに引っ張られる。 その拍子にはやてと  
密着させていた体が離れる。 胸に当たっていたはやての感触が途  
切れ、代わりにいつもの優しい感触が体全体に伝わってくる。

「残念でしたー！ 今日打ち上げは翠屋でやるもんねー！」

ふんすなのはがはやてにあっかんべーをする。

「ふーん、まあ料理が出来ないなのはちゃん場所を提供するくらい  
しか出来ないもんなあ」

「……」

なのはとはやてが互いに暗殺者の瞳を向ける。 ヤバイヤバイ  
よ、こいつらが本気でバトると学校壊れるよこれ。

龍虎があいまみえるその間際、審判からの交代が告げられた。 ど  
うやらフェイトが空振り三振で3人も終わらせてくれたらしい。

ほっと胸を撫で下ろしながらベンチへと戻る。 いや、二人を宥め  
ながらベンチへと戻る。

右隣にはやて、左隣にはなのは。 そんな状況の中、フェイトが満  
点の笑顔で俺の元へとやってくる。

「俊—みてくれたー？ 私頑張ったよー！」

「おうフェイト！ ナイスキャッチ！」

手を振りながらフェイトは俺の膝の上に腰を下ろした。 しかも  
正面で正座位の体勢で。

なのはとはやてが睨みあいをしているこの場。

それが当たり前かのように腰を下ろしたフェイトは、

「ねえねえ、二回戦終わったからお昼ご飯だね？ 今日二人でのんびり食べない？」

なあんて可愛らしいことを言ってくる……ッ！

「ちよつとフェイトちゃん！ いま俊くんはわたしが——」

「あ、なのは。 打席が回ってきたよ？」

「ふえ？ わわっ！ ほんとだ！ はやくいかないと！」

わたわたと慌てながら打席に向かうのは。 一礼した後、打席へと入っていった。

そしてすぐに帰ってきた。 もうなんというか……なんていえばいいんだろうか……。

☆

試合はなんの面白みもなく4回の俺のホームランで決した。 その後はフェイト、なのはの絶対に打たれない投球で、終わってみれば完全試合という結果で2回戦を終えた。 雑魚共には可哀想なことをしたけど、次の試合のためだ、許せ。

そしてそのまま昼食へ。

「ったく！ 今度あんなことさせたら首の骨捻じ曲げるわよ！」

「まあまあアリサちゃん、アリサちゃんのチアコス評判よかったんだしそこまで怒らなくても……。 あ、写真もらったけどいる？」

「いらぬわよそんなの！ ウキー！」

体操着姿のアリサが烈火のごとく怒る。 顔を赤くして、コックが愛情いっぱいで作ってくれた弁当(重箱)を食べながら箸を振り回す。

「あぶな!?! 箸を振り回すなよ危ないなあ！」

「うるさいうるさいうるさい！」

女帝アリサ様ご乱心である。

現在俺達は二回戦を終えて昼食タイム。 レジャーシートを広げて、なのは・フェイト・はやて・アリサ・すずか・そして俺の6人で弁当を広げながらのんびり昼食を満喫中である。 中央にははやてが多く作りすぎたらしい弁当箱も置いてある。 なのはとフェイトが強制的に置かせたのだが、これ思いつきりハートマークが描かれて

るんだよなあ……。

「それにしても相変わらずはやての弁当はおいしそうだよなあ。それ骨付き鶏肉のさっぱり煮？」

「そうやでー、お酢をきかせてあるから運動した後丁度ええし。

一個たべる？」

「そういいながら、自分の箸で骨付き鶏肉をつまんで俺の口元まで持っていく。」

「はい、あ〜ん」

自分の小さな口を開けながら促す。俺がそれにあらがえるはずもなく、はやての口の動きと連動するように口を開け、そこにはやては優しく骨付き鶏肉をいれた。

もぐもぐと咀嚼する。醤油をベースにした味付けに、思わず白飯をかきこみたくなる。

「うまい！ めちやくちやうまいなこれ！」

「せやろ〜！ これヴィータも好きなんよ！ あの可愛らしい口でもぐもぐと食べるんよ！」

「確かにこれはロヴィータちゃんもばくばく食うわな……」

うんうんと思わず頷く。だってそれほどうまいもん。

「あ、そうや！ 明日あたりわたしの家に泊まりにきいへん？ 二人でまたご飯作りながらまつたり——」

「俊は明日私の家に泊まるんだよね？ ずっと前からその話をしたたんだし」

はやての話を遮るような形でフェイトが間に割り込んでくる。

フェイトの今日の弁当はリンディさんが作った愛母弁当だ。ちなみにリンディさんの弁当はフェイトが作っている。もうリンディさん仕事してないのになあ。

「あー確かにそれ言ってたな。二人でゲームでも買って徹夜でクリアしようって話だったよな」

「そうそう！ ホラーゲームにしようかって話しをしてて」

「どのホラーゲームにするかを決めあぐねてたんだよなあ」

頭をぽりぽり掻きながら、どうしたもんかと考える。はやてとの



料理作りも魅力だけど、フェイトとは前から約束してるからなあ。

「すまんはやて。料理は休日にもゆつくり泊まりでしょう。そのほうがお互いいいと思うし」

両手を合わせてはやてに謝る。

「あつ……そうやな、そのほうが夜存分にできるし。ただ、流石に子どもは卒業してからがお互いにええとおもうんよ」

「まって！いま一足飛びに跳んでいった！驚くべきものが飛んでいった!？」

冗談だと分かっているけど目が笑ってない分怖い。

球技大会終了後の予定を続々と確認していると、ふいになのはの顔が視界にはいった。フグのように頬を膨らませこちらを、むくつと睨んでいた。手には俺が作った弁当。箸はネコのイラストが描かれており、レジャーシートの一先端に座っていた。

何故だろう。怒っているんだけど、すごく寂しがっている……ような気がする。まるでいつも構ってもらえていたネコが急に構ってもらえなくなりスネたみたいなの、そんな印象をなのはから感じた。直感で分かる。もう10年以上も一緒にいるのだから。

自然と体が動く。腰を浮かせ、なのはの横に歩み寄り座る。

「初戦と二回戦よく頑張ったな」

頭を撫でると、為すがままの状態になるなのは。目を細めてくすぐったそうな表情を見せる。

「でもわたしフェイトちゃんはやてちゃんみたいに活躍できなかったよっ。」

「いやいや、それでいいんだよ。エースにしよっぱなから活躍されても困るしな」

なのははたまに無邪気で無防備に男女を虜にする。いまがその状態だ。さつきまで喧嘩していたはやてやフェイト、暴れていたアリスにそれを抑え込んでいたはずかだって、いまなのはの状態を見てはその行動を停止させていた。

女の人生はベリーEasyとはなののはのためにある言葉だ。

俺にエース扱いされたなのは顔をほころばせて喜ぶ。

「へへっほんど？ 嬉しいなあ」

「ふっ、相変わらず扱いやすい女だな」

「まって俊くん聞こえてるから!? せめてわたしのいない場所でそのセリフは言つてよ!」

表情をころころと変えるなのはの仕草に自然と笑みがこぼれる。

「まあでも確かになのはもうちよつと頑張らないとねー。このままじゃ気になるあいつにいい恰好魅せられないまま大会が終わっちゃおうわよ?」

「あう……ひどいよアリスちゃん。だってなのは運動苦手なんだもん……」

両手をもじもじさせてしゅんとするなのは。

そんななのはの仕草は可愛いと思うがちよつとまで、

「誰なんだ!? なのはは俺と一生離れないって約束したじゃないか!」

浮気か!? 浮気なのか!」

誰!! 俺のなのはたんをたぶらかしているポケナスは誰なんだ!

ぶっ殺してやる!

「落ち着いて俊くん怖い怖い!! 顔が般若になってるから! いまにも刺殺しそうな表情でわたしに詰め寄るのはやめて!」

「ああっ! 体が滑って顔が胸の谷間に!」

——谷間がなかった

「いや……その……ごめん。ついフェイトやはやてと同じことをしたばかりに……。まあなんだ……揉めば解決するから」

「離してフェイトちゃんツ! 鼻がヴォルデモートになるまで殴るからツ!」

怒りがヴォルケーノしているなのはをフェイトが後ろから羽交い絞めでとめる。

百合妄想がはかどるぜ!

なのはの暴れっぷりを安全地帯（はやての後ろ）でスポドリ片手ににやにや見てた俺の肩を誰かが叩く。優しく触れるように叩かれたその手に合わせて後ろを振り返ると、そこには思わぬ人物がにこにこ孫を見るような表情で立っていた。

「こんにちは上矢君。 ちよつとよろしいですか？」  
俺の名前を呼んだのは、我らが校長先生その人であった。

☆

校長先生に連れられ辿り着いた場所は体育館裏。 カーネルみたくいでサンダーズな校長先生は誰もいないことを確認した後、俺に驚くべき内容を話し始めた。

「その年でアナル開発ですか……」

「上矢君が私の話を聞いてないことはよくわかりました」

「ぐくりと唾を飲む俺とは対照的に、校長先生は足軽兵を倒す武将のように軽くボケを流した。

「いやまあちよつと校長先生の話した内容があまりにもバカバカしくて……。 それほんとなんですか？」

「業者が気持ち悪い笑みで言ってきたのだから間違いないでしょう。」

「はあ……今後学校としてはあの業者と縁を切ろうと考えています」  
「それがいいと思いますよ。 なんせ——学校行事の賞品のチケットにラブホテルを強要させるようなバカな業者なんですから」

なんてバカバカしい話なんだろうか。 球技大会のMVPに選ばれたら夢の国の招待券がもらえるのは全校生が知っているところ。

しかしその夢の国の招待券の実態は夜遅くまで遊ばせて、あちら側が勝手に予約しているラブホテルへゴールイン。 そんな内容だ。

「大方、うちを毛嫌いしている周辺の学校の仕業でしょうね。 うち  
は運動においても文化活動においても優秀な人材が揃っているの  
すべての賞を総舐め状態ですから。 それに生徒の容姿レベルも高  
いのも反感を買っているのでしょうか」

「まあよくあることです。 少子化が進んでいるこの現在、どの学校  
も生徒獲得のために必死になりますからね。 ただ——そのために  
生徒を傷つけるのであれば私も黙ってはいません。 とにかく、この  
ことは私の方で片をつけたと思います。 そこで上矢君には

「さつさとMVPを取って夢の国のチケットを手に入れろってことで  
すよね」

校長先生の言葉を遮る。

「はい、よくできました。それでこそ私のお気に入り生徒です」  
「どーも。校長先生には幾度となく退学を取り下げてもらってますからね。それくらいお安い御用です」

いつもとなんら変わらない、校長先生のお願いだ。

キンコンカンコンと学校の鐘が鳴る。 昼食終了の合図だ。

「んじゃ俺はもう行きますね」

一礼した後、手を振ってみながまつテントへと向かう。

その背後、校長先生は声をかける。

「上矢君、君の退学に待ったをかけるのは何も私だけではありませんよ?」

私よりもあなたのことを思っている先生が近くにいるんですよ?」

後ろからかける校長先生の言葉に、俺は誰だか理解できないまま曖昧に頷いた。

☆

クラスの待機所に行くときゴリが仁王立ちしていた。

「あ、すいません。ゴリラが学校内に侵入してきたので射殺してほしいのですが」

「俺なんてバカが学校にいるせいで毎日撲殺したい気分じゃありません困ってる」

「ぶさいく天使ー、顔面事故だよゴリラちゃん♪」

「ぬうううううおおおおおおおおおッ!!」

こいつは本気で殺しにくるから焦る。

地面にめり込んでいる木刀を見ながら早く管理局に逮捕されなにかと切に願う。

「ほんでどうしたんすかゴリ」

「どうしてお前は年上を敬えないんだ。まあいいか。 単刀直入に述べる。 上矢、お前次の対戦相手だった3年野球部組と3年のこのクラスに何かしたか?」

ゴリが手に持っていた対戦表を見せながら話しかけてくる。

ふむふむこの野球部チームはハニトラで強請をしようとしたチー

ムか。

目線を自軍の男衆に向ける。

親指を立てる男衆。 成程、やはりあいつらはエロ猿だったか。ほんでこっちは俺らでボコる予定だったチームか。

これも……成程、ついでにやつといたか。 お前らアサシンに格上げしといてやろう。

まあそれはそれとして、ゴリが聞いたのは俺が何かしたかってことだよな。 うんうん、それなら――

「何もしてません」

「嘘を吐くな」

どうしてこいつは生徒を信じるといふ教師として当たり前前のことが出来ないんだッ……！

「一年の頃からずっとお前を見てきたんだ。 お前が嘘をついてるかどうかなんて一目でわかる」

『まさかのゴミ×ゴリかよ……』

『薄い本がゲロまみれになるな……』

「いま喋った奴前に出ろ」

顔面交通事故の刑に処する。

ゴリは木刀を、俺はバットを肩に担ぐ。

そこに体育服に着替え終えたなのは達5人娘が笑顔を向けながらゴリを止めにくた。

「ま、まあまあ先生！ 俊くんはわたし達と一緒に試合をしてたわけですし、皆も一生懸命応援してくれてたので、先生が思っているようなことはないとおもうんですけど」

なのはが冷や汗だらだらで管理局で鍛えた営業スマイルをゴリに向ける。 後ろにいる他の4人も営業スマイルでうんうんと頷いた。

「ぬッ、そうだったのか……すまない高町。 まあ確かにお前達が交代交代でピッチャーをやって頑張ってたのは俺も確認していたしな。

まあこの2チームとも腹痛が原因なのだからお前らがどうにか出来ることでもないか」

……あれ？ 先生、なんか俺のときと態度が違いすぎませんか？

「そうやで先生！ もうせっかちなんやから〜！ ほら、先生達はわたし達と違って3回戦セミファイナルがあるんからこんな所で油売ってる場合やないで！」

「お、おう！ そうだったな！ すまんすまん、それじゃちよつと行ってくるか！ お前らも決勝でな！」

『ういーっす』

ゴリは先ほどとは打って変わった表情でこの場を後にした。

「なんだろう、この理不尽感」

最高の結果に終わったはずなのに、なんかもやもやする。

「まああんたとあたし達とじゃ先生の対応も違ってくるわよ」

「あのエロゴリラめ、決勝で殺してやる。 どうかお前らよく2チームともしとめたな」

『まあ決勝はあのゴリだしな』

『出来るだけ力は温存させたいし、何より5人娘が俺らのエロ本のために頑張ってくれてるんだから、これぐらいはしないとな』

「ちよつとまって皆、わたし達皆のえつちな本のために頑張ってるわけじゃないからね！」

『フオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

「えっ!? なにその盛り上がり!? いま盛り上がる要素なかったよね!?!」

きつとなのはのえつちな本の言い方に萌えたんだろうな。 なんせ俺の股間も盛り上がったんだから。

しかしまあ、これはいまの俺にとっては嬉しい誤算であることは変わりない。 戦力を温存し、最終兵器を見せることなく決勝までこぎつけることが出来たのだから。 よし、こちら側は最高の形で決勝を迎えることが出来る。 後はそうだなあ……あつちの戦力でも確認しとくか。

「よーし、皆で教師チームをバカにしにいくぞー！」

『おーー!』

意気揚々とクラス全員で教師チームの試合を観戦に行くことに。 負けるつもりはないが、少しでも試合を見て勝率を上げておきたい

からな。

教師チーム vs 2年チーム

ピッチャー・ゴリ バット6本を折り完全試合

俺達はフリスビーで遊び始めた。

## A, S22. 球技大会⑤

ゴリ率いる教師チームの圧倒的かつ理不尽な力を見せつけられた俺達のクラスは、フリスビーで遊びババ抜きで遊び、ティーパーティーをして盛り上がった。

……いかん、これはいかんぞっ……!

もはや完全に俺達のクラスはやる気がなくなっている。それはそうだろう。なんせ金属バットを6本も折ったゴリが決勝もピッチャーを務めるのだから。クロスプレーなんて考えていないだろう、なんせあちらは完全試合が当たり前のチームなんだから。

私立聖祥大学付属高等学校は、生徒の質が高い水準であると同時に、教師の質も高水準である。その質の中身は様々で勉強もあれば一芸（音楽や芸術）の質と様々である。そして当然といえば当然であるが、教師のほとんどが運動が出来る人材だ。……まあ俺らの担任とかいう人物は例外だけだ。

「まいったな……普段は生徒の運動能力が高いから見落としがちだけど、教師もそれなりの運動能力をもってるんだよなあ。まあそれでも俺ら高校生のほうが分はあるが」

それがどこまで通用するか。なんせあつちにはゴリがいる。あいつ一人で9人分と考えてよい。

1番バッターでピッチャー。全ての打席でホームランを叩きだし、全ての試合を完全試合で終わらせている化け物。

だが、あいつだって人間だ。どこか、どこかつけている隙があるはずだ……!

クラスメイトが撮ってくれていた教師チームの動画を食い入るように見る。スロー再生で、早送りで、巻き戻して、時間を掌握し行動を制限する。ゴリの動きを頭の中でトレースし、勝つ方法を探り出す。

アタックアタックアタックアタックアタックアタックアタックアタック――

――見つからない。

アタックアタックアタックアタックアタックアタックアタックアタック――



——浮かばない。

既存のありとあらゆるシュミレーションをしてもゴリを倒す算段が思い浮かばない。

「いや、そんなはずはない……。俺がこの球技大会に出場している以上、優勝するのは俺達だ」

だというのに——全くもって困ったことだ。

「だからゴリラに球を渡すのはダメなんだよ……」

この動画を見る限り、俺らの勝利はない。

だとしたら、やるべきことはただ一つ。

「勝つ見込みがないのなら、俺が勝てるレベルまで引きずり降ろせばいいだけのことだ。それを可能にする戦力が俺にはある」

これまでのシュミレーションが役に立たないのなら、それを捨てて新たに作ればいいだけの話なんだから。

幸い、決勝まで30分の時間がある。

ペンと紙をクラスメイトから借り、まずは自分の戦力を把握する。まずはフェイト。多分一番ヒットを打てる可能性がある人物だ。

閃光の異名は伊達ではない。あのゴリのスピードでもフェイトは目で見て確認して、真芯でとらえることが出来るだろう。だけど

——あのフェイトの細腕で前に飛ばせるかどうか怪しい。身体強化をすればいけるんだが——そんなことさせるわけにはいかない。

流星にそこは線引きしておかないと。

チラリと横目でなのは達と談笑しているフェイトを盗み見る。

可愛い……可愛すぎる！ いかん、やはりフェイトに身体強化までさせるわけにはいかん。フェイトはきつと俺が頼めばやってくれる。

これまでもそうだった。どんなに渋い顔をしていても、頼めばやれやれといった顔で何でもしてくれた。フェイトはとても優しく、素敵な人だ。

だから、こんなこと頼めない。

俺のわがままで、俺の都合で、そんな素敵な人を“凡人”にしたくない。

「ただまあ……身体強化はさせないとして、ピッチャーはなのとはと

フエイトの最強バッテリーに頼るしかないんだよなあ……」

身体強化はさせたくないけど、ボールは操ってほしい。

なんなんだこのクソガキが考えたようなご都合主義のルール。

「でも勝つためには最低条件として打たれないが必要なんだよなあー！　そうなることやっぱりなのフエイに頼むしか……」

「だけど身体強化はダメでボール操りは許可。　いやあ……なんかこれは違うような――」

頭の中で自問自答していると、いつもそばにいる二人の気配を背後で感じた。　ふりむく暇もなく、顔の両横からそれぞれ頭を出して手元の紙を覗き込んでくる。

「あれ？　俊くんなにやってるの？」

「どうやって教師チームに勝つかのシミュレーション。　ゴリの強さを見て諦めたかもしれないが、俺は絶対に諦めるわけにはいかんのよ」

なんせこっちはいつもお世話になっている校長先生のピンチ。

たったこれしきの不祥事でも叩く奴は死ぬほど出てくるわけだ。

そうになると、人がよい校長は学校の品位を下げないためにも自分からこの学校を去る。　というよりその方法しかない。　それこそがこの問題を計画した奴の真の狙い。　それを未然に防ぐためにも、俺は絶対に勝つんだ。

ただまあ――

遊んでいるクラスメイトを見渡す。　ふむふむ、やっぱこうなるわな。　俺も校長先生に命令されてなかったらこうなってただろうし。

「諦める？　何言ってるの俊くん？」

なのはが首を傾げながらこちらを見てくる。　少し前に顔を突き出せば唇が触れ合い距離。　その距離で、なのははいつもと変わらないう笑顔で言った。

「みんな俊くんの作戦待ちなんだからね！　早く優勝できる作戦考えてよー！」

肩をバシバシと叩きながらそう言ったのけたなのは。　思わず顔が点になる。

「そうそう、俊の指示で皆動くんだからね」

「いや、でもだつてみんな遊んでたし——」

「そりや指揮官の号令もないのに動く兵隊はいないでしょ」

「やれやれと頭を振りながら、言っておくけどね——そう前置きして誰も負けることなんて考えていないからね」

フェイトはウイंकを飛ばした。

周囲を見渡す。見渡して、自分を責める。

なんてことだ。なんて見落とした。全員——瞳は前を向いていたんだ。

この場で俺だけが負けることを一瞬でも考えてしまったんだ。

「……悪い。ちよつとお前らのこと甘く見てた」

『困るぜ大将——』

『ここまでできたら優勝しか興味ないんだからな——！』

『まあ元から優勝以外いらないけどね——！』

ああ、まったくもつてその通りだ。

俺達はなんのために此処にきた？

「なのは、フェイト。お前らにはピッチャーとキャッチャーのバッテリーを頼む」

紙に守備位置を書き込んでいく。と、なのはが横から手を出してペンを走らせていた手を止める。

「俊くん。お願いをまだ聞いてないよ？」

「……でも怒られるかもしれないし」

「怒られる……？ ぷっ」

俺のセリフを聞いたなのはが笑いだす。それにつられてフェイトも一緒に笑って笑い出した。

「俊くん、もう2回戦で使ってるんだから今更だよそれ！ あはは、あーお腹痛い！ それに、身体強化とかしなければあっち側にバレないしね！」

グツと親指を立てるなのは。それでいいのだろうかエースオブエース。いや……まあいいか。それに、勝つためには必要だしな。

「うん、頼んだ」

「うむ、頼まれた」

うんうんと首を縦に振るなのは。かわいい。

「さて、それじゃちよつと打順も弄っていこうかな」

守備はこれで問題ない。無敵のエースオブエースに任せる以上、俺が出来ることなんて皆無だ。

後は攻撃。1点をどういれるかだ。

クラスメイトを巻き込んで全員で考える。ゴリが体力切れなんて起こすはずはないし、かといってクロスプレーも出来ない。

あーでもない、こーでもないと言いながらも、なんとか決まった打順と作戦。

勝っても負けてもこれで最後。これからが俺達の本当の球技大会だ。

指定の時間となり、全員でグラウンドに整列する。対面にゴリが目を瞑ったまま静かに問う。

「よくきたな上矢。遺言書は書いてきたか？」

「そつちこそ、負け犬の首輪は買ってきたのか？」  
捻じ伏せる。ただそれだけを胸に刻み、決勝戦を迎える。

☆

コイントスの結果、俺達は後攻となった。ここで守備位置の確認だ。

ピッチャー・なのは キャッチャー・フェイト ファースト・アリ  
サ セカンド・はやて ショート・俺 サード・すずか レフト・野  
球部A センター・野球部B

ライト・野球部C

という配置である。だがまあ——守備配置なんて問題ではない。  
なんせ——

ピッチャーマウンドにいるのはが足を上げ、振りかぶって投げる。

ボールは外角低め、フェイトが構えていたキャッチャーミットに寸分の狂いもなく剛速球で吸い込まれていった。

一番バッターのゴリが思わず呻く。

「ぬう……高町。 2回戦のあの投球はブラフだったというわけか……」

「すいません、田中先生。 わたし毎日（魔法）球で遊んでいるので、実は得意なんですっ！」

嬉しそうな表情を見せるのは。

ゴリはそんなのはにふっと笑いかけ、

「上矢。 球技大会終わったら校長室に來い。 親御さんを交えて、いまの高町の発言について聞いたです。 あと高町、校則で不純異性交遊禁止だというのは知っている

よな？」

——なんか壮絶な勘違いをしていた。

「まっつてなのはが言ったことはそういう意味じゃないからッ!? 日本人なら言外にあるその真意を汲み取って——」

「汲み取った結果があれだ。 つまりそういうことなんだろう？ 貴様は殺す」

「だから違うって言ってるだろボケ教師が！ なのはも反論して——」

『あう……しゆ、俊くんとなのはが……』

「なのはさああああああんッ!」

違うんだよ！ 真っ赤な顔を伏せてほしいわけじゃないんだよ!?

ゴリに反論してほしいんだよ！

プツンッ

なんだろう、一気に空気が弛緩した気がする。 俺らの一番の攻撃力であった戦意とピンと張りつめた糸が切れた音が聞こえてきた。

「さてはゴリめ……! 俺達の戦意と興奮を冷ますのが目的だったのか……!」

ふと周りを見渡すと、顔を覆っているのはを筆頭にグラウンドのメンバー、応援席にいるクラスメイト、全員とも明らかに瞳に宿っていた炎が鎮火していた。

——してやられた。

ゴリを見る。 あいつはうつすらと笑みを浮かべていた。

なのはが振りかぶって投げる。外から内に抉るように入ってくるボールに、ゴリはしっかりと腋をしめて――

カキンッ!

真芯で捕えた。

ああ……やられた。

ゴリにとつては、あのなのはのボールだって絶好の球だったんだ。高く高く羽が舞うように、白球が空へ登っていく。

ぐんぐんと伸びていく白球は、その頂きに到達し引力に従って――  
なのはが構えていたミットにすっぽりと収まった。

「……へ?」

思わず情けない声が出る。あ、あれ? 俺の気のせいだったかな?  
? ボールはホームラン一直線のはずだったんだけど……。

ボールを手にとったなのは、くるくると手の中でボールを弄りながらくすりと笑った。俺の目はとうとうおかしくなったのだろうか。くすりと笑って、流し目でゴリを見つめるなのはの周りに、魔力光を模した天使の羽が飛んでいた。

☆

高町なのはの雰囲気が変わった。この場にいる全員がそう思ったことだろう。いつもはほかほかとお日様を体現したような存在である彼女。その彼女がああゴリを打ち負かしたのだから。まるで鞘から抜き出た日本刀のように。ウォーターカッターのように。いまのなのはは触れるもの全てを切るような雰囲気醸し出していた。

皆が驚くその中、フェイトとはやて、そしてようやく状況を呑み込んだ俊だけが、戦闘モードに入ったのだと理解した。

管理局のエースオブエース。魔法の天才。空に愛された魔導師。

その異名を、その呼び名を、この場にいる全員が刻み込むこととなる。

空に愛された彼女のの前では飛ぶことすら許されない。

それは何も、人間だけのことではない。

なのはの手から放たれたボールは、フェイトが構えるミットに吸い付くようにはいつていく。

2番打者相手には空振り三振を決めたなのは。この調子かと思いきや、次ぐ3番打者には初球から綺麗に合わせられた。これは抜ける——誰もがそう確信した瞬間、

ボールはギルギルとバックスピンを開始して、勢いをなくしストンとピッチャーであるなのはのミットにおさまった。

『チェンジッ！』

野球部員の声とともに攻撃と守備が入れ替わる。ピッチャーであるなのは、そして女房役のフェイトに拍手と賛辞がひっきりなしでかかってくる。それになのははピース、フェイトは笑顔で応えた。『なのはちゃんすごかったよ！　なんかなのはちゃんの周りだけ空気が違った感じだったよ！』

『もう無敵って感じだったよ！』

「にやはー、困ったにやう。でもありがと！　わたしも打つほうでは役に立てないけど、ピッチャーで一生懸命頑張る！」

Vサインを見せるなのはに、クラスメイトが沸き上がる。

なのはのピッチングで優勝の2文字が現実的なものになってきた。

しかしとうのなのはは、

「(ふっふっふ……。これで俊くんはわたしに惚れ直したかな？

最近、ずっとフェイトちゃんやはやてちゃんに尻尾を振ってるし、こちらで誰が俊くんにふさわしいご主人様かっつのを再確認させないとね！　ああ……いまから楽しみ。打ち上げで俊くんがわたしを見つめながら潤んだ瞳でなのはの名前を呼んで、それになのはが応えて、足を舐めさせてそして——って、ダメダメ!?　まだわたしも俊くんもまだ高校生なのに……。でも——もう高校生だもね)」

などとピンク色の頭で幸せな夢を視ている最中である。

この試合、なのははどう俊の心をゲットするかに重きをおいているようだ。けど、だからこそ、なのはもこの試合負ける気などさらさない。

「さてと、それじゃ私行ってくるね」

「おう、頼んだぞ」

ベンチで水を一口含んだフェイトが、ヘルメットをかぶりバッターボックスに立つ。相も変わらず、1番バッターとして切り込み隊長を務めてくれている。

「お手柔らかにお願いします。先生？」

ニコつと微笑むフェイトに、守備についていた男性教師たちが立ちくらみをおこす。無理もない、スタイルも性格もよいフェイトは、生徒としても女性としても完璧すぎるほど完璧なのだから。教師としても男性としてもくらくらつきてしまうものだ。

ただ、ゴリだけは例外としてどっしりと仁王立ちしていた。

「フェイト・テストアロツサ・ハラオウンか。全ての試合で圧倒的な出塁率を誇る強打者。それに、あの高町のボールをいともたやすく捕球する姿。上矢の軍勢で一番塁に出したくない人物だな」

「あら、そこまで私のことを評価してくれたんですか？　ありがとうございます」

そう言っている間にゴリは投球フォームからなのはと同じスピードの球を放る。ただ一つ違う点は球質の重さだろうか。空気を平伏しながらキャッチャーの元へと向かう球。バットを一段と強く握りしめたフェイトは、力いっぱいフルスイングする。

何かが折れる音とともに、ボールはころころと力なくゴリの足元へと転がっていった。それを手に取るゴリは、バッターボックスで両手を痛そうにぶんぶん振っているフェイトに声をかけた。

「ほう……いまのを打つか。流星というべきだな。ただ——その手でこれからの試合が——」

「あ、これくらいいつものことなんで大丈夫です」

「……そうか」

「うー、久々にあんな固い衝撃手に受けたかも。なのはの魔力弾を素手で受け止めたとき以来だよ。ねーなのはー！　救急箱取つてー！」

『はーい！　ちよつとまつてー！』

いたたー、なんてことを言いながら両手をさするフェイト。　ネク



ストバッターサークルで救急箱を構えていたなのはの所について、手当を受ける。

「うー、じんじんする。あれはちよつとアリサ達には無理だと思うよ」

「だねー。見た感じそんな気がする。はい、おしまい」

「ありがとー。じゃあ次がんばってね!」

「うん!」

まるで家路の別れ際のような気軽さで手を振り、ベンチに戻るフェイトとバッターボックスに入るなのは。

よろしくおねがいしまーす! そう頭を下げながら入ってきたなのはは、すぐにベンチへと帰ることとなった。

「だから打てないってなのは言ったじゃん! 折角ピッチャーかつこよかつたのに! かつこよかつたのに!」

うわあああああん! とフェイトの膝で泣くなのは。本人の宣言通り、凄いののは投球だけのようにであった。

「まあまあなのは。次は俊だし応援してあげよ?」

「うっ……ぐすっ……うん。しゅんくんがんばれー」

まるで地蔵のようにフェイトの膝から動かなくなったなのはは、両腕でがっちりとフェイトを抱きしめて、体をバッターボックスのほうに向けた。ひらがなばかりの声援を送った。

俊はゆつくりと噛み締めるようにバッターボックスに立つ。両手でしつかりとバットの根本を持ち、長打を狙う。この一戦、決して負けるわけにはいかないのだ。俊は自覚している。自分がクラスを引つ張る存在だと。自分とゴリの初戦が、この試合の勝敗を大きく左右することを理解している。しかしそれはゴリとて同じ。全ての試合を完全勝利で終わらせてきたゴリは、決勝戦もその予定で臨んでいる。そして、ゴリも理解している。このクラスは――起爆したら手がつけられないクラスだということ。

動物園クラス。それは嫌味であり賛辞の呼称でもある。一度檻から解き放たれた動物たちは、勝利の雄叫びを上げるまで決して檻

に戻ることはしない。ありとあらゆるモノを狩り、不屈の魂をもつ存在。そしてこの決勝戦、ついに檻は壊され動物たちは地へと降りた。

ゴリはそのことを理解している。そしてその中心で牙を光らせ瞳孔を見開き、虎視眈々と自分を狙う猛獣が誰なのかを。

「お前は本当に怖い存在だ。普段はバカがバカを着てバカ歩きしているのにもかかわらず」

「先生、日本語が不自由なようですが大丈夫ですか？」

「一度本気を出すと、あいつらを纏めてあげて襲い掛かってくる。

本当に恐ろしい存在だ」

「そりやどうも。あんたに言われると体が痒くなってくる」

「心配するな。俺は本音しか言わない主義だ」

だが勘違いしてはいけない。

「決勝戦、絶対にお前と戦うと思っていたのでな。お前の対策はバッチリだ」

ゴリは一度も、彼を侮ったことなどないのだ。彼のここ一番の怖さも知っている。彼の火事場の馬鹿力も、彼の起爆の材料も、全てを知り尽くしている。

だからこそ——発火している彼の炎を消すことなどいとも容易かった。

世の中で一番重要なものは純粹たる力だ。

どんなに権力をもつていようとも、どんなに金を所有していようとも、どんなに名声を得ようとも、圧倒的な暴力の前には全て平伏す。

そう——ゴリが選んだ球種は全てストレート。コースはど真ん中。ゴリはその純粹たる力で彼を捻じ伏せたのだ。彼の中で燃えていたロウソクの炎が消える。

彼はバットを振った。確かに目で見てよく狙ってスイングした。しかし彼のバットは空気を叩きつけ、ボールはミットに収まる結果となった。

それは誰がみても理解できる。空振り三振というものであった。

「上矢、お前がどんなに凄いか知っている。しかし、いまのお前では俺の球は打てん。ハラオウンが打てたとしても、お前は絶対に打てない。何故かわかるか？ 簡単だ。お前が弱いからだ。ハラオウンのようにしなだれない木はすぐに折れる。いまのお前はまさにそのしなだれかたを知らない木だ」

バッターボックスからは舌打ちが聞こえてくる。何も言わないまま、黙ったまま、彼はベンチへと引き下がり守備のためにグラブをはめる。全員とも、どう声をかけていいのかわからなかった。空振り三振という完全に打ち負かされた事実、フェイトが当たったのだからこいつなら……という期待が一気に理想へと変わった瞬間、この場にいる全員がそのことを理解していた。否、一人だけ理解していない者がいた。

「どんまい俊くん！ 次があるよ！ 肩の力を抜いていこう！」  
軽やかに言い放つのは。俊の肩を叩き、まるで安心させるかのごとくドヤ顔で親指を立てる。

そんな彼女の行動に、俊も顔をほころばせた。

「お前が又いてくれたらそれで十分なんだけどな」

「このボケナス！ もうなんで三振してんのハゲ！」

「あれッ!? 急に冷たくなってない!？」

「まあまあわたしと俊くんの中じゃない！ それに、わたしは本当に俊くんが打ってくれると信じてるし。それまでに何か対策立てないかね」

「だな、あともう1打席回ってくるんだし、そのうちに対策立てないとな。まいったな……いまのままじゃ全然打てる気がしねえ」

参った参ったとやれやれと首を振る俊。

そんな俊にクラスメイトからも意見が飛ぶ。

『まずゴリのことだから絶対にストレートだろうな』

『ああ違くない。ほんでコースもど真ん中だな。ゴリ性格悪いし』

『でもあんなゴリでも妻子持ちだぜ？ つまり童貞卒業してるんだぞ？』

『ゴリラの交尾か……』

『激しそうだな……』

「俊くん、どうしてわたし達のクラスはすぐにズレていくの？」

「バカしかいないからかな」

至極当たり前な結論に達する。

そしてその軌道修正をするのはいつもこのお方である。

「ほらほらあんた達！　いつまで喋ってんの！　早く守備に戻るわよ！」

手でベンチから追い払うようにレギュラーメンバーを外へやるアリサ。自身もグラブをはめ守備位置に入る。その時、俊の隣にそつと歩み寄り小さな声で胸を軽く小突きながらウインクを飛ばして言った。

「ここまで来させたんだから責任取りなさいよ？」

笑顔で笑う彼女は、一片たりとも負けを意識していないようだった。

その笑顔が、俊の胸にすんと落ちる。屈託なく笑う彼女。いつもバカらしいと言いながら、それでもはいはいとその手腕でクラスを纏め上げる彼女。お互いにLOVEではないがLikeな関係。

今日だって、クラスのために嫌な役を全部引き受けてくれた。いっただって、クラスのために嫌な役を受け入れてくれた。

そんな彼女の頑張りを俊はよく知っている。

「そうだな。表彰式にお前の笑顔が見たいしな」

「バーカ。そういうこと言わないほうがいいわよ？　普通の女の子なら惚れちゃうから」

「なんだよー、お前は惚れてくれないのか？」

「ふふっ、ホームラン打ったら惚れちゃうかもしれないわよ？　なーんてね」

あっかんべーをしながら自分の守備に戻るアリサ。

自然と出るため息に頭を掻きながら、俊も自分の守備位置についてた。

☆

軽快にストライクをとるなのは横顔を見ながら、自分がなの  
ことを好きになってよかつたと考える。彼女は俺の理想であり  
ヒーローだ。何度彼女のように強くなりたいたと思ったことか。  
何度彼女のような存在になりたいと思っただことか。

いつだって彼女は勝利を勝ち取ってきた。歩く萌え要素であり  
ながら、ウラボスのような存在。それが彼女だ。

今回だって、きつと彼女は一人も塁に出すことなく5回を終えるだ  
ろう。例えゴリが相手だろうと、空を味方につけた彼女には敵わな  
い。だから結局、最後は俺とゴリの勝負になる。勝たなきゃいけ  
ないこと前提の勝負。一度負けた、敗戦を経験した。フェイトよ  
り下だと言外に言われた。だがそんなことは別に痛くも痒くもな  
い。だって彼女のほうが数段上なのは俺が一番よく知ってるから。  
だが、そのフェイトが俺に期待してくれている。なのはがアリサ  
が信じてくれている。他の皆もそうだ。顔には出さないけども、  
皆でゴリの対策を考えてくれている。

いつたい誰のために？

そんなの決まってる。俺のためにだ。

いつたい何のために？

そんなの決まってる。俺が打てるためにだ。

バシンツとミットにボールがおさまる音が聞こえてくる。いま  
の打者で3アウト。俺達は互いに声を掛け合いながらベンチへと  
戻る。

「そんじゃ、ちよつと野球部の意地でも見せるかね。ひよつとこ、出  
来るだけ粘るからお前も目に焼き付けとけよ」

そういつて今日の大会、最後まで4番を背に背負ってくれた野球部  
はバッターボックスへと向かう。軽く一礼しグリップを握って  
まっすぐにゴリを見据える。

——1球目

バットを短くもっていたあいつは、コンパクトなスイングでファ  
ールチップを当てに行く。

いまの球種はストレートか……。

——2球目

先程と同じ球威、先程よりもやや内角を攻めたコース。ゴリは生徒にボールをぶつけたらどうしようなんて考えははなからない。あいつにそんな脳みそあるかどうかも疑問であるが、それよりも『生徒に当てない』という絶対的な自信を持っているからである。そして、その自信に裏打ちされるだけの実力を兼ね備えている。しかし、だからといって、こちらも空振りで終わるわけにはいかない。いくら球威が重く速くても、先程同様ストレートならあいつだって――

打てないわけではない。そんな俺の楽観論をあざ笑うかのようにゴリは遥か上を行っていた。

ストン――

まるで不可視の壁に当たったかのように、ボールは谷へと落ちていった。

薄々感じていた。あのゴリがストレート以外の球種を投げられないわけがないことを。

でも！ だからって！

『ストレートと同じ速度で変化球とかせこいだろッ!!』

俺らクラスの悲痛な叫びがグラウンド内に木霊した。

！  
なんなんだあのチート！ あいつ管理者権限でも持つてんのかよ

「おいひよつとこ!! お前ほんとに打てるんだろうな!!」

「いやいや難易度跳ね上がった!? わかんねえよ！ 握り一緒だったし球速変わんねえし!」

ああッ!? そんな会話をしてる間にも既にアウトになっている!?  
すぐすぐと戻ってくる野球部員に問う。

「おいどうだった!? お前からみてどうだった!」

「あんなボールみたことない……魔物だわ完全に……」

い、いかん……完全に戦意消失してるぞ……。

はあ……とため息をつきながらベンチに座る野球部員。そっか、あおちからみてもアレはおかしかったのか……。

「……やばいな。ストレートに絞ろうにもこれじゃ絞りようがないし、第一まだ変化球投げられるかもしれないしなあ。　　とうかゴリが下方向の変化球だけしか持っていないはずがない」

「パワプロだとゴリは全方向に変化球マークがついてもおかしくない存在なんだから。」

「せめて握りが違ったり球速が違ったりしてくれば、こちらも活路を見出せることが出来るのだが……。」

「唸りながら、眉を寄せる。　　どうにかして、どうにかして勝機を――ちゅっ」

「頬になんらかの感触が。　　それを認識する頃には、触れた本人はこちらに抱きつきしなだれていた。」

「は、はやて……さん？　　な、なにをしてるんですか？」

「んー？　　補給」

「……成程、補給か。　　確かに補給ないと艦隊も進めないからな。」

「うん、おっぱい当たってるしなんの問題も――」

「俊くん？」

「俊？」

「問題山積みだった」

「い、いや俺は何もしてないぞ!?　　一生懸命ゴリを攻略しよう」と――」

「ふーん……」

「ほーう……」

「指を鳴らして詰め寄るなあのはとフェイト。　　抱きついて離れないはやて。　　子猫が甘えるゆに頬を摺り寄せてくる。　　ダメだ、この状況でゴリを攻略してるなんて言っても誰も信じてくれない。」

「ぐわしツと頭を鷲掴みにされ――た直後に、はやてがぱつと離れる。」

「うーん！　　補給完了や！　　それじゃちよつと解明してくるで。　　まあわたしの読みが当たってればええんやけど……」

「ぶんぶんと手を振りながら、バッターボックスから帰ってくるすずかのバットを受け取るはやて。　　いったい、何をするつもりなんだ？」

「両隣にすたとんと腰を下ろしたなのはとフェイト、それにクラスの皆」

もはやての動向に注目する。

### 1 球目

ゴリは容赦なく、抉るように外側いっぱいから内側ギリギリに入る変化球で決めてくる。 やっぱこいつに容赦なんて存在しない。 流石のはやてもそれは打てないと判断したのだろうか、ピクリと体を反応させるだけに止め、バットを振ろうとはしなかった。

### 2 球目

空気抵抗が存在しないのではと思うほど、力強いストレート。 空気の壁を破壊して進むようなその動きに、はやては素早くスイングで対応する。 ボールは真後ろに飛んでいき知らないクラスの男子に命中した。

### 3 球目

追い込まれても顔色を変えないはやてに、ゴリが選んだ球種は大きくうねりをあげて斜め上から斜め下に落ちてくるカーブだった。 蛇が鎌首もたげて襲い掛かってくる様を彷彿とさせるそのカーブに、所見のはやてはなんとかバットには当てたものどころと一塁線へと転がっていったボールは、ファースト自らがキャッチしベースを踏んでアウトとなった。 流石、このカーブも同じ速度とは化け物度が増してきたな。

『ふっ、いまのスローカーブを当ててくるとは恐ろしい奴だな』

「どこがスローカーブだよ!」

「え!? 俺の中でスローカーブの定義が歪んできたんだけど!」

「いやまて! あいてはゴリだぞ! きつとスローカーブを知らないんだ! ほら、俺には聞こえてくる……ゴリラがボールを持って嬉しそうにはしゃぐ声が……」

「ああ……確かに……」

『貴様ら放課後生徒指導室へこい』

ゴリラがなんか喚いてるようだが、あいにく人間には理解できないんだ。 ごめんね。

それはそうとこれで2回も終了。 いまから3回目か。

「よーし! わたしががんばるよ! ズギヤーンっていつてドキュー



ンって決めてくる！」

両拳を握りしめて、ふんすっ！って聞こえてきそうなほど意気込んでいるなのはの頭をわしゃわしゃと撫でる。なんか猫と遊んでいるみたいで気持ちいい……。

なのはの頭を撫でていると、つんつんと後ろから誰かに肩をつつかれた。

振り向くと、犬耳と尻尾（の幻影が見える）フェイトがニコニコした笑顔で立っていた。

「えつと……」

何も言わずにただニコニコするのみ。さ、触ればいいのだろうか？

恐る恐る頭を撫でると、耳と尻尾がぶんぶんと反応している——よ  
うな気がした。

か、かわいい……。

まるで本物の犬耳尻尾のように動くフェイトの姿をみて、癒される。フェイトのほうを向いたことで後ろのなのはから凍てつく波動が背中にビシビシと当たっているがいま振り返ったら間違いなく  
卒倒するので振り向かないようにしよう。

『「らー！ あんた達早く位置につきなさい！』

「はっ！？」 そうだった！」

既に守備位置についていたアリスからのお叱りでようやく我に返る。お、恐るべし……ドッグフェイト……。

撫でていた手をどけると、名残惜しそうな顔を向けてくるフェイト。それに後ろ髪をひかれる思いで自分の守備位置につく。まあ実際になのはに守備位置まで強引に引きずられていったんです  
けどね。

1回、2回と無安打で抑えたなのは。3回は7番8番9番の下位打線のため、あつさりと三者凡退を決めた。試合を進めていくごとにストレートが重くなり、変化球のキレが増しているのが恐ろしいところだ。

ベンチに戻り、スポーツドリンクを飲みながらこちらの下位打線

(といつても野球部2人にラストバッターがアリサにしてあるのでまったく下位打線ではないんだけど)

の応援をする。

1人目は空振り。本気で悔しさを露わにする。よくわかる。俺もそうだったから。

2人目、続けて2球連続ストライク。もう後がない。

「あれ?・ネクストバッターサークルにアリサいなくていいのか?」

まあ俺達ほとんどあそこ使用してないけど。律儀で真面目なアリサなら普段ならあそこで軽くスイングをし合わせている頃だ。

不思議に思い辺りを見回す。いた。

ベンチに少し離れた場所。はやての話を聞いていた。はやて

が話し終わると、黙ったまま腕組みをし考えこむ。

「ねえ俊くん、アリサちゃんの番になっちゃったよ?」

「え? マジで? おーいアリサ! 出番だぞ!」

『あ、ちよつとまって! いま行くわ!』

なのはと二人で手を振りながらアリサをよぶ。アリサはそれに応える形で手を振り返すと、はやてと一緒にこちらに走ってきた。

「おまたせ! じゃあちよつと行ってくるわね。はやて、あの話、信じていいのね?」

「うんええよ。さっきの打席で疑心が確信に変わったから」

「オツケー!」

足早に打席へと向かうアリサ。

先程のはやてとアリサの会話、そしていまのやり取りを聞いて俺ははやてに問いかけた。

「さっきの話ってなんだ?」

「俊がなんで真ん中ストレートを空振り三振したのかの謎が解けたから、アリサちゃんに教えて、わたしの理論で打ち破れるか実践してもらおうとおもってるんよ」

説明しながらこちらに詰め寄ろうとするはやて、その間にフェイトが当たり前のように座った。はやてはそのまま立ち上がり、これまた当たり前のように俺の膝の上に座る。お姫様だっこの形で両手

を俺の首にかける。

冷めた二人の視線もなんのその、はやてはそのまま説明を続ける。「ゴリ先生のストレートはバッターがバットを振ってボールが当たる範囲にきたらホップする仕組みになってるんよ。それも、俊のときは1球目2球目3球目、全部ホップする大きさを覚えてきとった」「……マジで?」

「マジやで。俊はど真ん中ストレートを打てなかったシヨックで見てなかったかもしれへんけど、キャッチャーミットまでは流石に騙せん。ただ怖いのは3段階ホップやから、ストレート一つにしても的を絞ることができへんってとこなんよね……」

それってつまり、上向きの球種が3つあるってことか……。なんつー無理ゲー。

でも――

『ストライク! バッターアウト! チェンジ!!』

はやてをお姫様だっこしたまま立ち上がる。

「ありがとうはやて。お前がいてくれて本当によかったよ」

下から見上げてくるはやては、若干潤んだ表情で優しく微笑んだ。着々と、ゴリを俺達のレベルまで引きずりおろしている。

☆

フェイトちゃんもはやてちゃんも俊くんのお膝に座ってうらやましい……。

わ、わたしだって……! いやでもちよつとまって。なんでわざわざわたしから座らないといけないの? 別にわたし俊くんのことなんかこれっぽっちも好きじゃないのに。

4回表。バッターは田中先生。ここ一番つとぎに変なことばかり考えちゃう。なんかもやもやする。飼いだ他の人間にじやれてついて嫉妬する飼主の気持ちがよくわかる。あ、あくまで例えだよ? わたしべつに嫉妬とかしてないよ?

そりやまあ、他の女の子と喋ったりするのをみるのは嫌だけど、嫌だけどそれだけだし。呼べばすぐにクルシ、一日中部屋の中で一緒に過ごしたりもしたし。べつに俊くんのことなんて好きじゃない。

好きなんかじゃないよ。わたしがいま頑張ってる理由は好意からきてるものじゃないよ？

じゃあなんのために？

「なのは！・ 4回表、頼んだぞ！」

「うん！・ 任せて！」

うん、やっぱりの笑顔だね。

俊くんには笑っていてほしいから。だからわたしは頑張れる。

自分の中で全ての動きがスローモーションに見える。そしてその中は自分だけはいつもと変わらない動きが出来る。何度も何度も経験してきたこの感覚。

バットなんて振らせない。瞬きさえも許さない。

一瞬で駆け抜ける

「これがわたしの全力全開……ッ!!」

『なのはあ……手が痛いよお……』

あ、ご、ごめんねフェイトちゃん!?

☆

全てを無に帰し そんな表情で4回表を投げ終わったなのは。ゴリに一振りも与えなかったとは、やはり管理局のエースオブエースは化け物か。

「すごかったわねえ、なのはの『滅びよ……』」

「いやいやそんなこと一度も言っていないよ!？」

「あれ？ 気づいてなかった？ なのは言ってたよ。キャッチャー

の私のほうまでバッチリと。アリサはちよつと笑ってたし」

「そんなあ！ ひどいよアリサちゃん！」

「ちよ、ちよつとだけよちよつとだけ！ ほんのちよつと笑っただけ！」

でも、正直俺もあの場面で笑いを取りにくるなのはは凄いなと思う。本人はまったくそんな気ないとしても。そして同時に思う。

こんなに頑張ってくれている彼女のために、この試合に勝つと。

4回裏、いよいよ俺の出番がくる。

クラス全員でエンジンを組み、円の中心でアリサが話す。

「いい？　ここが正念場よ。　フェイト、なのは、そして俊。　ここで一気に叩き込むわよ。　そしてなのはで逃げ切り。　追いつかれても、強打者引き入る4番5番6番でまた絶望へ叩き込む」

「そうだ、ここが俺達の勝負どころ。」

「ここは戦場！　勝つるは強者のみ！　あたし達は何を成すためにここまでできたの!!」

「友を救うためにツ!!」

「討つべき敵はツ！」

「眼前にツ!!」

「いくわよー！　猛獣の恐ろしさ見せつけるわよツ!!」

「応ツ!!」

アリサの鼓舞でクラスの士気が一気に上がる。

煌く牙を光らせて、40人あまりの猛獣が牙をむく。

フェイトがバッターボックスに立つ。　今日2回目のゴリとの対戦。

初球はファール。　ストレートになんとか食らいついた。　2球目もファール。　落としたボールに即座に反応しあてにいった。

3球目——中から外へと逃げる球に、腕

をめいっばい伸ばすことで対応する。　カンツと音をたてて三塁

側ファアロゾーンへところどころ転がっていく。

「フェイトちゃんがんばれ……！」

「フェイト！　フェイト！」

4球　5球　6球——と食らいついていくフェイト。　ただ、持久勝負となると、俺達に勝ち目は無い。　ゴリ相手に体力勝負を挑もうなんてお門違いもいとこだ。

『先生、もつとえぐるようなコース投げてきても大丈夫ですよ？　それとも、私に遠慮してるんですか？』

『いや、いつでも俺は全力だ。　そうでないとお前達生徒に申し訳ないからな』

「俺……もうちよつとゴリはサボることを覚えてもいいと思うんだ」

「ああ、確かに……。　あいつ無尽蔵なスタミナもってるからな」

「……正直あいつの空手チョップとか首折れるかと思うよな」

『お前らには120%で当たってやる。心配するな』

「いやあああああああッ!?」

俺らクラスの切実な願いは、本人の口から否定された。

そんなことをしている間にも、フェイトとゴリの勝負は続く。 9

球目をゴリが投げたそのとき、勝負は動いた。

ゴリが投げたボールを、フェイトが押されながらもなんとか打ち返したのだ。それは綺麗なセンターヒット。一気に湧き上がるベンチ。否、ベンチを飛び越して観客までもが沸き上がった。本人は痛い痛いといいながら、両手をぶるんぶるんさせているけど。それでもこの歓声を聞いて、笑顔でこちらにサムズアップしてきた。

なので俺らもサムズアップし返す。

「いける！ いけるぞ！ 次は——」

「がんばるおー！」

「二「ああ……うん。いってらっしやい……」二」

「あれ!?…なんで皆一気にテンション下がったの!?!」

えっ!? えっ!? と言いながらテンションを下げる皆に焦るなのは。

違うんだよ、お前が悪いんじゃないんだよ。これは運命の女神様が悪いんだよ……。

「まあなのははピッチャーでいっぱい頑張ってくれたからもうそれだけで十分だよ。よっしや、後は任せろ！」

なのはが持っていたバットを手に打席へと向かう。

「いやいやまって俊くん!? わたしの番でしょ!? なにさらつとハブろうとしてんの!?!」

俺の手からバットをもぎ取ったなのはは、ぷりぷりと怒りながらバッターボックスに立った。かと思いきや、こちらに振り向き、

「わたし『ストライーク!』みんなが思ってるよりずっと『ストライーク!』出来るんだからね! 『ストライーク! アウト!』よーしいくぞー! ……え? 終わり……?」

「よっしやあ! ひよつとこ頼むぞー!」

「ぶちかませー!」

「俊君！ 頑張れ！」

「俊！ 空振り三振なんてしたらただじゃおかないわよ！」

「俊、信じとるよ？」

『俊——！ ホームで待ってるからね！』

クラスメイトの声が自分の中で、炎となつて燃え盛る。

人間って不思議なものだ。 さっきまでは攻略不可能だと思つていたゴリだけど、いまは丁度いい相手だと考えてしまう。 この短時間で、まったく認識が変わってしまった。

「(・ω・)」

「お疲れ様、なのは。 後は俺に任せてくれよ。 なのはがこんなに頑張ってくれたんだ。 最後くらい、カツコイイとこ見せないとな」

「(\*。▽。\*)」

しよんぼりしながら帰ってきたなのはの頭を撫でながら言った言葉に、すっかり機嫌を取り戻してくれたなのは。 けど、この言葉は俺の本音だから。 ご機嫌取りなんかじゃない、正真正銘な素直な気持ち。 そしてその言葉で、喜んでくれているのが嬉しい。

ゆつくりとバツターボックスに向かう。

「ほう……一度は完全に消した炎、再び灯すことに成功したとはな。 だからお前らのクラスは面白いんだ」

ゴリが土を鳴らしながらのゴリの言葉。

「勘違いしちゃいけないぜ。 前の炎と思うなよ？ 今度はあんたがのまれる番だ」

軽くスイングしながらゴリに言い返す。

もう大丈夫。 フェイトのようにしなだれない木だけど、それでも俺はまつすぐに立てる。

俺を支えてくれる人がいるから。 俺を信じてくれる人がいるから。

ゴリが振りかぶって投げる。 インコースにきたボールに逆らわずに振っていく。 ボールがバットに当たる直前にストンとボールは落下していく。

『ストライク！』

大丈夫。心は平静だ。

「上矢、お前は本当にどうしようもない人間だ。お前一人にこの学校は手を焼いている」

「そりやどうも。でも、いいじゃないすか。毎日が面白くて」

軽口をたたく。ゴリはそれに少しだけ口角を釣り上げて応えた。

「やっぱり、なんだかんだでゴリもそう思ってるんだよな。じゃな

いと、あんなに毎日俺達に付き合ってくれるわけねえか。」

「今度はスライダーだ。そういえば、お前は将来どうするんだ？」

「ちやんと考えてるのか？」

「えぐすぎるスライダーを投げながら、耳に痛い言葉のボールをぶつけてくる。」

「まあ……一応。許可が出ればなんすけどね……」

「ちらりとなのは達を見ながら喋る。」

『ストライーク！』

「ふん、ヒモ野郎が。さて、ラスト1球」

「かかってきな、ゴリラ野郎」

深く深く深呼吸をする。なのはが頑張ってくれた。フェイト

が頑張ってくれた。はやてが頑張ってくれた。アリサが、ずずか

が頑張ってくれた。皆が頑張つて、必死に攻略法を探して、最後を

俺に託してくれた。

負ける気がしない。

負けるわけがない。

既にあんたは俺達の土俵に上がっているのだから。

いまなら手に取るように分かる。ゴリが何を投げるのか。

ゴリが振りかぶり放ったボール。

今日の試合、最大球威ともいえるボール。

だから俺も今日一番のスイングで応える。

タイミングはドンピシャ、真芯に当たるその間際、ボールは掬い上げるようにホップする。

1段階、2段階、3段階。ぐんぐん手元で浮き上がってくる。

ああ……成程これはソフトボールというライブボールか。これ



を野球でするなんてこいつはマジモンの化け物じゃねえか。

既に体は動いている。いまさらバットの方向を変えることは出来ない。

これで終わり。俺達の優勝は泡となって消えていく。

頭の中でなのはの笑顔が浮かんでくる。フェイトの笑顔が、はやての笑顔が。

優勝して皆で笑顔で写真撮影している光景を思い浮かべて——俺も自然と笑顔になった。

白球がぐんぐん空へと上がっていく。シャボン玉のように、頂きへと昇る白球はやがて綺麗な弧を描いてギャラリの中へと消えていった。

一瞬の静寂、そして——

『よっしやあああああああああああああああッ!!』

『やってくれろと信じてたぜひよつとこッ!!』

『上矢君素敵ッ！抱いて!』

クラスメイトの歓喜の声が聞こえてくる。

『すげえ……あいつやっぱすげえわ……。あのゴリからホームラン

かよ』

『やっぱりあいつら恐ろしいぜ……』

『でも、ちよつと上矢君カッコよくなかった?』

『こういう行事のときはカッコよく見えるんだよねえ。まあ一週間

もしたらそんな気起きなくなるけど』

黙れビッチども。俺にはなのは達がいるからお前らなんてこつ

ちから願ひ下げじゃ!

ダイヤモンドを回りながら、自分を賞賛する声に酔いしれる。そして、ホームベースで迎えてくれているクラスメイトの元へと飛びついた。

☆

『明日から通常授業に——』

背後に聞こえてくる先生の声をBGMに、校長先生に礼のものを渡す。

「どぞー。 なんとかMVP取れましたよ。 俺絶対にフェイトだと思ってたんですけどねー」

「ハラオウンさんの名前は確かに出てましたね。 それに高町さんの名前も。 けどどちらも本部のほうに辞退の旨を伝えにきたんですよ」

「うお!? じゃあ危なかったですねー。 というか、なんでそんな勿体無いことを……」

そう言うと校長先生はきよとんとした顔をして、すぐに破顔した。

「成程成程。 キミもまだまだ子どもということですね。 その点やはり女の子のほうが男の子より大人になるのが早いようで」

「なのは達は処女です！ 大人になんてなってません!!」

「分かりました！ 分かりましたから校長先生を殴ろうとするのはやめてください!?!」

なんて老人だ！ 危うく血祭りになるところだったぞ。

「しかしまあ、よく見事に勝ってくれましたね。 信じてましたけど」  
「そりゃ勿論つすよ。 俺は勝てる戦いしかしないタイプですからね」

「ふふっ1打席目でのあの表情も複雑だったという訳ですかな?」

「うっ……それはそれということ……」

「まあそういうことにおきましよう」

ああそういえばこれを渡さないといけませんね。 そう言いながら校長先生は2枚のチケットを取出し差し出してきた。

みるとそれは夢の国の招待券。 それも真正正銘の、ラブホなんて入っていない夢の国を楽しむためのチケットだ。

「これって……」

「ええ、真正正銘MVPに渡す商品ですよ」

……なるほど。 ぬかりないあたり流石校長先生だ。

招待券を受け取り、誰に渡すか考える。 2人か……うーむどうしたものか。

——あ、いい考えを見つけた。

「ふむ、どうやら使い道を発見したようですね」

「ええ、最高の使い道だと判断しました」

うむうむ、我ながらいい考え方だ。

『俊くん！ 俊くんどこいったのー！』

『あいつMVP賞貰った瞬間に消えていったわねー。 どこいったのかしら？』

『俊のことやからなんか裏で動いてたりしてなー』

『ふふっそれありそう』

『流石の俊君でもそれはないと思うよ』

遠くのほうでいつものメンバーの声が聞こえてくる。 そういえば既にBGMが止んでいることから考えて閉会式が終わったのか。 てことはこのままクラス写真だな。

「じゃあ俺はそろそろ行きますね。 あまり繋がっていると知られるとヤバイですし」

「それもそうですね。 それじゃあ上矢君。 今日是一日お疲れ様でした」

「いえいえ、こちらこそありがとうございます」

二人してお辞儀して、そのまま別れる。

クラス写真を撮ったら打ち上げの準備。 今日はまだまだ始まったばかりだ！ 忙しくなるなあ！

「おーいみんなー！ 愛しのイケメンがきたぞー！」

☆

「ほんと、彼は面白い生徒ですね。 どうでしたか？ 球技大会は」

俊が去った後、校長は校舎の影に隠れていた者に話しかける。 その者は校舎の影から姿を現し校長の前に立って顔を破顔させて嬉しそうに報告する。

「とても面白く、久しぶりに血が滾りました。 特に4回の攻防は最高だったと感じております」

「ええ私も見ておりましたが、とても嬉しそうなあなたを見ています。 こちらも嬉しくなってきましたね。 あの時、あなたを退学から守つてよかったと実感していますよ」

「いやはや、その説は本当にお世話になりました。まんまと策にはまって学校を辞めるしか術がなくなったとき、あなたが手を差し伸べてくれなかったらどうなっていたことか……。

私はあのときのあなたに憧れて、教師という道を本格的に目指そうと決めたのですから」

「おやおや……それはそれは嬉しいことですね」

笑顔を見せる校長に、ゴリも笑顔で応える。

『おいさつきから誰だよ！ お前の頭小突いてる奴！ 張り倒すぞ！』

『うるせー！ なんてお前だけ5人娘はべらせてるみたいな構図で写ってんだよ！』

『そうよそうよ！ なのはちゃんよこしなさいよ！』

『だああああままれえええっ！ 今回何もしなかったモブ諸君が！』

『んだとツ!? 使い捨て装甲板の分際で!』

『だまれ自慰をすることでしか存在を見出すことができない馬糞以下のゴミクズ共が!』

「……あいつはまた……ツ!」

ゴリは笑顔から一転阿修羅のような表情で拳を握りしめる。

これには校長もフォローしきれないのか、あはは……と笑うばかりである。

「つとにあいつはしようがないですね。この後ちよつと生徒指導室で説教してきます」

「まあまあ、いいじゃありませんか。ああいう子が学校に一人いたほうが賑やかで面白いですし」

「はあ……先生は本当に人がよすぎます。甘々です」

「ついつい高校生の時のあなたを重ねてしまうんですよ」

「いやいや!? 私はあんなにバカではありませんでしたよ!」

大きな身振りで主張するゴリに、校長は一枚の写真を内ポケットからそつと取出し見せる。

「ほら、あなたが球技大会で優勝したときのクラス写真です。真ん中で全裸になっているのがあなたですよ? 多分彼よりひどいです」

「ぐぬうつ……!? そんな昔のことを……!」

こうして、元担任と元教え子の昔話は生徒たちが片付けを開始するまで続いていった。

快晴の空のもと行われた長い長い球技大会は、動物園クラスの優勝で幕を閉じたのであった。

クラス写真を撮り後片付けも終わって一時帰宅。皆で時間を合わせて19:00に翠屋へ向かったわけだが、そこで待っていたのはパンパンと大きな音をたてながら吹き荒れるクラツカーの嵐だった。『球技大会優勝おめでとうー!』

手に持ったクラツカーを投げ捨て、桃子さんと土郎さん、恭也さんに美由紀さんが俺となのはに抱きついてくる。柔らかく、それでいて温かい優しさがなのはと俺を包み込んでくれた。みると、フェイトには愛情200%のリンディさん、そしてクロノにエイミィさん&ルドルフ。アリサにはメイド長と執事長、そしてなにより今回のために会合の日程をズラしてまで翠屋で出迎えてくれた両親が可愛い娘にハグとキスをしていた。すずかも大好きな姉と両親に抱きつかれながら幸せそうな笑顔を浮かべていた。はやてには家族でヴォルケンメンバーと石田先生、そしてこの日のために遙々英国からやってきたグレアムさんとリーゼ姉妹が笑顔で迎えていた。

「さ、みんなあー! 今日貸切よ! いっぱい食べて球技大会の疲れを癒してねー!」

『はいー!』

小学生のように手をあげて席につく。俺の両親にはなのはとフェイト。アリサやすずかは自分の両親の隣に腰を落ち着かせる。はやては……ロヴィータちゃんとシグシグとロツテリア達が誰がはやての隣に座るかで揉めていた。……グレアムさん、貴方は手を挙げないほうがいいと思います。最悪退場させられる恐れがありますので。

「あーもうわかったわかった。それなら、リーゼ姉妹が猫になってわたしの膝の上に座って、両親にシグナムとヴィータがすわりー。それでまるく収まる結果になるか——」

「嫌だー。あたしだってはやての膝の上がいい!」

ロヴィータちゃん完全に身体と精神年齢が一緒になってるよ。ロリババアなのに。

「はい、みんなーご飯ができたわよおー。　たーくさん食べてねー！」

桃子さんとリンデイさんから揚げやグラタン、ポテトサラダにおにぎりサンドウィッチにエビフライ、魚のムニエルにピザを大皿に並べてもってくる。　一目で分かる。　これ全部手作りだ……。

料理と桃子さんとの間を視線で何回も何回移動させていたからか、ふと桃子さんの方を見たときには目と目が合った。　というか合わせられた。　桃子さんはニツコリと微笑んで、そのまま俺を抱きしめる。

「みんながんばったからもんね。　子どもの頑張り笑顔は親にとっては最高の喜びよ。　それに、一生懸命頑張ったあなた達に食べてほしいの。　他人が作って運んでくれた料理じゃなく、親が子どものためだけに作った愛情たっぷりの手料理を」

「……はい。　いただきます」

自然と笑顔が零れてくる。　ああ……この人達が自分の成長期を見守ってくれた本当によかった。　はにかみながらそう思った。

隣でパスタを食べているなのにも桃子さんは抱きつく。

「なのはぎゅーっ！　なのも頑張ったもんねー！　担任の先生から電話があったのよ！　『なのはちゃん物凄く凄かったです！　天使かとおもいました！』って！　天使なんてそんなの当たり前なのに！」

桃子さんテンションたけー……。

「お、おかあさんくるしいっ!?　パスタが！　パスタが咽喉に絡みつく!?!」

……うん、桃子さんの相手はなのはにしてもらおう。　あれ女子高生特有のテンションだよな。　前に桃子さんが女子高生の制服着るとどこ見ちゃったし俺。

「隣いいか？　俊君？」

「あ、士郎さん。　どうぞどうぞ」

いつの間にかなのはは桃子さんにお持ち帰りされていた。　なんか奥から俺を呼ぶ声が聞こえてくるけど怖いから無視だ。

「今日はよく頑張ったな。生活指導の田中先生が電話してきたぞ。『お宅の息子さんはとてもよくまっすぐに育っております。境遇にも負けず、前を向いて一生懸命歩いています。高町さん、本当にありがとうございます』ってね。あはは、参ったよほんと。私もあの時はうるつときちやつてな。あはは、きつと一がああの電話に出ていたら肯定しながら親バカっぷりを発揮するはずだ」  
そっか……ゴリつてば余計なことをしやがって……。  
「ほんと……これだから教師つてのは嫌いなんですよ……」  
「ああ、本当にな」

抱きしめられた土郎さんの胸の中で静かに漏らす。きつとこの目から落ちる滴は、土郎さんの服に吸収されてすぐにわからなくなるだろう。それに、皆それぞれの相手に忙しいし。

「……土郎さん、俺とっても幸せ者なんですな」

「ああ……そうだね」

「もし、俺に子どもが出来たら……子どもにもこの感情を知ってもらいたいと思っています」

自分は一人じゃない。

もし、自分に子どもが出来たなら世界中の誰よりも幸せにしよう。そう思った。

「キミなら出来るよ。なんせ一達の息子で、私達の息子なんだからな」

そう言った土郎さんの顔は、とても穏やかであった。

☆

フェイトが酔ったリンデイさんに鬼絡みされている。なんか女の人生説いてるし、チャラ男にだまされるなどか言ってるし、当たり前のように俺の悪口言ってるんだけど。

リンデイさんのツンデレっぷりに若干の怖さを感じながら、忍さんが焼いてくれたピザを取り皿に分けようとした手前で、後ろから声をかけられた。

「俊！遅くなつてごめん、ちよつと服を決めてたらこんな時間になつちやつてさ」



「おうユーノか！ 服なんて適当に——結婚してください」

振り向いたら美少女が頬を上気させて肩ではあはあと息をしながらこちらを向いていた。

「へっ!? い、いやちよつとまってまだ早いよ！ まだみんないるし心の準備が——」

顔が熟れたトマトのようになりわたわたとするユーノ。 いやあ、なかなか乙なもので——ん？

「ユーノ。なんか今日はいつにもまして女装に気合が入ってるのな。化粧も若干してる？」

「う、うん。今日は俊が頑張った日だから僕も頑張ろうと思って……」

そつかさつつか。 だからこんなに可愛いのか。 胸の位置に届くほど伸ばしてる髪は、二つ結びのツーサイドアップに結ばれており、両方に可愛いリボンが巻かれている

る。 服は水玉が飛ばしてある白地のシャツに淡い緑色のカーデイガンを羽織り、下はフレアミニスカに黒のオーバーニーソ。 唇には桜色の口紅を塗っているのが確でできる。 正直これはやりた。 そしてそう思ってしまった自分が死にたい。

俺はユーノの肩をがっしりと掴む。 びくりと体を震わせ、目をとろんとさせるユーノ。 おいまで、なんで目を閉じる。 おいアリサ！ なんで携帯で写メを撮る!? までなのはにフェイト!? セットアップはダメだって！ こいつユーノだから!? 完全に男だから！

なんか一瞬にして包囲網が出来てしまったが、いまはそんなことはどうでもいい。 まず目を瞑っているこいつを起こそう。 デコにデコピンをかます。 あう……と言いながら目を開けるユーノ。

「ユーノ、一度しか言わないからよく聞けよ？」

「う、うん……」

「俺の中の理性と男女の垣根が壊れるから少し押さえてくれ。 お前は素材がいいから女装するとそこの女よりよっぽど可愛いんだから」

ぼつと顔を真っ赤にするユーノ。 ただただこくと首を小さく

縦に動かした。

「……………神様はどこまで俺の邪魔をするんだろうか？」

ユーノから2歩下がってあらためてユーノをマジマジと見ながらそう考える。

「いや、見方を変えればこれもありっちゃありなのか？」

高校生の性欲では理性とか常識とか倫理とかが消えていきそうだから困る。

そんな俺にストップをかけてくれたのはなのはだった。ただし冷徹な眼差しをこちらに向けながらだが。

「俊くん、ちよつとなのはと一緒にご飯食べようか？ ほら、なのはが取ってあげるから何が食べたいか言って？」

肩が壊れるほど強い握力で椅子に座らせられ、有無を言わず取り皿で取ったご飯を差し出すのは。 ……死にたくないから従おう。

既に関係は幼馴染では死刑囚とギロチンになっていた。

「俊くんさあ、今日はフェイトちゃんやはやてちゃんにとっても優しくかったよね？」

「え？ そうかなあ……………べつに普段通りだったと思うけど？」

別に普段からフェイトやはやてとは仲良いし、あれくらい毎日のことだと思っただけ……………。

「……………お膝にのせるのが？」

「い、いやそれは——」

「お姫様抱っこするのが？」

「だ、だからそれは——」

「……………なのはもしてほしかったのに」

そっぽを向きながら、横にいる俺以外には聞こえない声で、なのはは小さく呟いた。

……………なんなんだこの可愛い生き物は……………ッ！

ツインテールにした髪を指に絡ませ弄りながらこちらをちらちらと伺うのは。 本人はバレてないつもりだと思っけど、こっちからしたらその仕草がまた萌えを誘う。

「あー、その……ごめんなのは？」

「ゆるさないもん。でも……明日俊くんが遊びに連れていってくれるなら考えてあげてもいいかな……？」

……つまりこの萌えとデートする権利をいま与えられたということですね？

「ちよつ!? いま俊くんデートだと思ったでしょ!? ち、ちがうからね! これはそういうんじゃないから!」

「え!? デートじゃないの!? なにその思わせぶり!? それじゃなんなの、明日の遊びはなんなの!」

「えつと……えーつと……犬の散歩？」

「なるほど、納得できる」

犬は股の臭いを嗅いだり舐めたりするからな。つまりそういうことか。

「んじゃあ明日はどこ行く? 遊園地? 映画? ショッピング？」

「うーん……違うところがいいな」

「動物園？」

「それうちのクラス」

そういえばそうだった。学校に行けば珍獣がクラスにわんさかいるんだった。しかし、いま明日といったよな？

「明日って学校だけど——」

「サボろう」

『なのはー、学校サボったらお仕置きよー』

「( ; 皿 )( ) 俊くんやつぱり明日はなしにしよう……」

……うん、桃子さんのお仕置き怖いよな。あれは人間がしている行為を遥かに超えている。

「まあ明日ってのはなしにしても、遊びに行くのは行くんだろ? どこか行きたい場所でもあんの？」

そう聞くと、なのはは目をパチパチとさせ次いで深い深いため息を吐いた。悪戯好きの子猫を叱るような、いやこれやつぱバカをみる目だ。

「……俊くんはこれだからモテないんだよね」

「な、なんだよいきなり……」

「MVPは何のために取ったの?」

M……V……P……? あ——

「そうだった!? すっかり忘れていた、夢の国だよ夢の国!」

「そうそう! それだよそれ!」

た、確かポケットの奥に曲げずに——あった! ほっと一安心しつつ、なのはのほうを見る。なのははニコニコと笑顔を浮かべながら両手をばんざいのように広げて

きた。 うん、とりあえず何やってるのか分からないけど、渡すものは渡してしまおう。

席を立ち、なんかいちやいちゃいしながら食べさせ合いつこをしている桃子さんと土郎さんの前に立つ。二人とも行為を中断してこちらを見ながら首を傾げている。そこに、MVPとして校長先生からもらったホテルなしのちゃんとしたチケットをプレゼントする。

「あの、これ。 夢の国のペアチケットなんですけど、よかつたら二人で羽を伸ばしてきてください。 えつと……育ててくれたお礼というかなんというか……」

ああー! どうしてこう恥ずかしんだろう! それにいま渡さなくともよかつたんじゃないかな?! 差し出してから気づく不甲斐なさ。そして振り向けばぼかんと口を開けてるなのはとフェイトとはやて。 いるよな、蚊とかが飛んでくると口を開けながら迎撃するタイプの人。

「あら、ありがとう俊ちゃん。 そうねえ……折角だし明日は臨時休業にして遊びに行っちゃいますか?」

「そうだなあ、折角俊がくれたんだから行ってみるか」

「4人目が出来るかもしれませんし」

「いや、流石にそれは……年だしお互い……」

夫婦の仲がいいのはいいことだ。俺もお二人のような関係をなのはやフェイト達と築いていけたらと思う。 まあ——

『……』

それよりもいまはあの三人に弁解というか土下座をしないといけないわけなんだけどさ。

☆

カランとグラスに圧倒的な存在感で鎮座していた氷が溶けて音をたてる。中身は三ツ矢サイダー。しゅわしゅわと泡を弾けさせるサイダーを見ながらのんびりサン

ドウィッチを食べていると横にろりっ娘ロリロリのロヴェイタちゃんが座ってきた。

「おおロヴェイタちゃん！ どうしたの？」

「お前がぼっちで寂しそうだったからな。あと食べたかったから揚げとサンドウィッチをお前が独り占めしてたから」

まあ確かに皆それぞれ楽しそうにしているもんな。なのははいつもの姦し娘たちと。親は親同士だし、ユーノはクロノと仕事の話してるし。ロツテリア猫は食事に夢中だし。

「まあいいんでない？ 楽しそうだし」

「こういう席だと分かるよな。親密度つてか友達具合が。いつも話してるけどこういう席だと全く話さない友達とかいるし」

「あーそれ高校でもあるわ。すんごい浅いんだよな、関係が」

「つまりいまのお前だよ」

「でもロヴェイタちゃんは来てくれたじゃん。つまりロヴェイタちゃんと俺は深い仲ってことか？」

「食べたい食べ物の場所にお前がいただけだよ。つまりお前は食事にたかる蠅ってことだな」

どうしてこいつはこう人の心を殺しにかかるような行為を平然とすることが出来るんだろうか。

でもまあ——つまようじでから揚げを刺して小さな口に放り込みながらロヴェイタちゃんは不敵に笑って見せた。

「お疲れさん、決勝は痺れる試合だったぜ」

……ったくこのろりっ娘は。

思わず抱きしめる。つまようじで眼球を刺されかける。

「そういえばなんで決勝のこと知ってたんの？」

「んー？ ザファイラの散歩がてら皆で観に行つたからな」

成程。 ザファイラの散歩か。 幼女と大きな犬のコンビか。

「幼女はなにをオプシオンにしても輝くからいいよな」

「幼女は正義だしな」

コップにサイダーを注ぎあおるロヴィータちゃん。 こんなに可愛いのに、いつも男よりかつこいいことをするんだろな。 この口リ娘は。

しばし二人とも無言でサイダーを煽り食事を摂る。 たまにロヴィータちゃんが俺に取り皿を差し出して、目であれを取って来いと命令するのでそれに従う。 無言だけど心地よい空間。 うん、喋るだけが友達じゃないんだよな。 こうやって、喋らなくても居心地の良い空間を互いに共有し、提供できる友達つてのも大事だよな。

『えっ!? お小遣いこんなにもらつてええの!? うわあー!』

ふとはやての気色のいい声が聞こえてきたので、ロヴィータちゃんと二人でそちらのほうに視線を向けると、グレアムさんがニコニコとした笑顔ではやてに小切手を渡していた。 ……お小遣いで小切手か。 というか――

「グレアムさんがはやてにお小遣いあげると、どう考えても女子高生にお小遣いという名のお金を使って援交――」

「ひよつとこ、あのおっさんに殺されたくなかつたら喋らないほうがいいぞ。 お前ただでさえ嫌われてるんだからな」

そういえばそうだった。 エロ本ぶちまけたから嫌われてるんだった。

「はやての場合、親代わりとなつてくれるおっさんの許可を貰うのが大変だよなあ……」

「んー？ なんの許可が必要なんだ？」

「いや、こつちの話。 それよりひよつとこ、そのピザ取ってきてくれよ」

「はいよー」

ピーマンと薄切りハムをふんだんに使ったピザを一切れロヴィータちゃんに渡す。 ロヴィータちゃんはサンキューといいながらか

ぶりつく。その姿はまるで幼女すぎて死ぬほどかわいかった。ロヴィータちゃん、ほんとかわいいんだよなあ……。つまり幼女とちゅっちゅしたい。

「……お前ちよつとキモイぞ。顔が」

「えっ？ イケメンになにいつてるの？」

「心配すんな。自分で思ってるほどイケメンじゃないから。お前あれだろ？ 部屋の鏡みて自分のことをカツコイイと錯覚しちゃうバカだろ」

「い、いやそこまでは——」

「これだから淋病男はキモいんだよな」

「ちよつとまでそれ言ったのだけだ」

顔を潰れたトマトに変えてやる。

「シグナムだけど？」

まあうちのクラスの田中は『世界大戦末期の状態をよく表現してる顔だよ』って言われてたし、淋病くらいなら甘んじて受け入れようかな？ ベ、別にシグシグには逆立ちしても勝てないからって理由じゃないからな!?

ロヴィータちゃんは、ははーんと言いながら口角を釣り上げて聞いてくる。

「お前シグナムには——」

「なのはにゃんが俊ひゅんにダイブなのー!」

「うわっぶ!」

ロヴィータちゃんが何か言いかけて、背後から俺に飛びついてきたなのはに巻き込まれる形で倒される。

ちよ、おいなのはいまロヴィータちゃんとお話中——ってなんか顔赤いし目が怪しくない？

俺のCANは実にあたるもので、挙動がおかしいのは俺のことを認識するとすぐに両手で首を鷲掴みに自分の胸に抱き寄せた。

「ひゅんくんはなのはのものー! ずーつとなのはのものだもんねー! えひゃひゃひゃひゃ!」

……こ、怖い。なんつーか酔ったリンデイさんに鬼絡みされてい

るときに既視感を感じる。

先程なのは巻き込まれたロヴィータちゃんやんが起き上がりなのは抗議しようとしたが、なのはのあまりの変貌っぷりを近場でみて思わず桃子さんに問う。

「あの……おたくの娘さんはどうしたんですか？」

「お水を焼酎と言いつきながら飲ましてたらこんなことに……」

なのはの方に振り向き唾然とするロヴィータちゃん。その間にもなのはの絡みは続く。

「ひゅんくんはーなのはのことすきー？ それともきらいー？」

「いま言わないとダメ……？？」

「もっちろーん！」

「えつと……だ、だいすきだよ」

「そうだよねー！ きゅうりはやさしいじゃなくてすいぶんだよねー！」

「あれ!? いまそんな会話一言もしてなかったよね!？」

え!? さつきの告白はなかったことになったの!? 俺の告白よりきゅうりが野菜か水分かどうかのことが大事だったの!?

その後もなのはの鬼絡みは続いた。一向に噛み合わない会話をしつつ、それでも楽しく夜を過ごす。途中からフェイトやはやて、悪乗りでアリサやはやてにヴォルケンまで参加してきたもんだから収拾がつかなくなっていった。

意味のわからない言葉の羅列、いきなり始まるもろきゅー談義、何故か床に捨てられていた俺のパンツ。ユーノ、さりげなくポケットに入れるのは止めて。日付を跨いでもいまだ明かりがともされ、姦しい声が聞こえてくる翠屋。夜の宴はまだまだ続きそうだ。

きつと、この場にいる全員が明日は寝坊するんだろうな。なんてことを考えながら呂律の回らないなのはを介抱するのであった。



A, S 24. ヴィヴィオ、初敗北

10月某日、時刻は既に夜の3時を回っていた。そんな時間帯の中、高町ハラオウン家の一室にはいまだ電気がしつかりと点いていた。夜風は素肌に優しくなくなった季節だが、部屋の主はタンクトップ一枚で細かい作業に没頭していた。

「何が悲しくてあいつらのために飾り付けなんて用意しなくちやならないんだか。これは後で体で支払ってもらいましようかな。」

あー……でもあいつら羊水の代わりに溶解液入ってそんな奴らだからな、口で我慢しよう」

タンクトップ一枚で作業をしていた部屋の主は彼女二人のご奉仕を想像し下半身が躍動したことについての論文を脳内学会にて発表した後、あぐらをかいた状態のまま伸びをする。

「うーん！ ああ、背中からバキバキと嫌な音が聞こえてくる。」

はあ……なんで俺がこんなことを。普段ならヴィヴィオを抱き枕にして寝てる時間だというのに……」

自身の愛娘を想像しながらため息を吐く主。その愛娘は現在隣の部屋で絶世の美女二人に囲まれてすやすやと寝息を立てている最中であろう。

「あーやめよ、もうめんどくせ。あいつらの昇進試験なんて知ったことか」

床一面に広がっている折り紙で作った鎖状の輪っか飾り。それを見つめながら、ふと主の頭に二人の少女の姿が映し出された。幼馴染の鬼教導官の鬼畜弾除けでフルボッコにされている姿、涙目で助けを求めてくる姿、鬼教導官の体に触れたい一心で策をめぐらす姿。

「ま、好感度上げといっても損はねえな」

一人そう口に出すと、主は再び作業を再開し始めた。

「そろそろパンツはくか。掃除してるとはいえ、床に直置きは心配になる」

正真正銘タンクトップ一枚だけの姿だったこの男はいそいそと下着をはいてから作業に戻る。

主の部屋の明かりはなのは達が目を覚ますまで変わらなかった。

☆

「おはよー俊くん。目の下に隈ができてるよ?」

「おはようなのは、目の下に隈ができてんで」

「にやはは……だつて今日はあの子たちの昇進試験なんだもん。心配で心配で……。俊くんもでしょ?」

「いや、俺はまったたく。あいつらが昇進試験受かってもなんの得もないしなく。俺的にはどうでもいいや」

「(1階に降りる前に俊くんの部屋に行ったことは内緒にしとこ)」

日が昇り、短針は7時を指していた。高町なのはは寝間着姿で、キツチンの弁当に視線を落として一心不乱に作っている俊と話していた。俊の手元には大きな重箱が4つと弁当箱が3つ、そしてウサギがデフォルメされた小さな弁当箱が用意されていた。コンロの上には寸胴が2つ並べられており、匂いから察するにビーフシチューと豚の角煮だろう。なのはは何故こんな朝っぱらからそんな重たい食べ物を作っているのかは問わない。ただただ、弁当を作る幼馴染を見て微笑むだけであった。

なのはの視線に気づいたのか、俊がだれにともなく言い訳を始める。

「急に食べたくなつたから作ってるだけだからな。別にあいつらのためじゃないから」

「そうだねー、あの子たちのためじゃないもんねー」

「……やめろよその笑顔」

「えへー」

子どもが拗ねるように頬を膨らませる俊に、なのははあえてほっぺを膨らませ左右の指でつつく。愛くるしい笑顔を見せてくるなのはに、俊もたちまち頬を戻した。

「ていうかさ俊くん」

「んー?」

欠伸をかみ殺した声で応答する俊に、なのはは真顔でこう言った。「ぶつちやけ気を緩めるとベッドに戻りそうなんだけど。昨日球技

大会の思い出なんて語らないほうがよかつたんじゃない?」

「同感だ。あれのせいで俺も作業始めたの深夜になつてからだつたぞ」

「誰だよ昔話しようつて提案したの!」

お互いに相手を指差す。なんて不毛な行為なのだろうか。

しかし、なのはとこんな会話をしている間にも俊の手が止まることはない。

「あ、俊くん! それタコさんウイナーにして! タコさんウイナー!」

ソーセージに切り込みを入れようとした俊の横からなのはが要望する。はいはいと一つ返事で答えた俊は、単純な切り込みから焼いたときに足が丸まってくる切り方へと変更。そのままウイナーを焼きはじめる。

「試験受けるあいつらにはあまり油っこいものを食べると胃にくるかもしれないから、あいつらの分はボイルにするわ」

「はいはい」

足が丸まりタコの形になつていく様を見ながら返事をするなのは。俊は大きい幼女みたいだ、という感想を抱きながら料理を進めていく。

しばしなのはが見守りながらの調理が続く。

たんたんたん

ふとなのはと俊の耳に軽やかなリズムで2階から1階へ階段を降りる音が聞こえてきた。

『フェイトママはおっぱいもふもふだねー?』

『えー? そう?』

『うん! もふもふしてる! はー……おとなつてすごいね!』

『あはは……ありがと。でもヴィヴィオ、このことパパに話しちゃダメだよ? パパは——』

「すみません僕ももふもふフェスティバルに参加してよろしいでしょうか!」

「救いようのない変態さんなんだから」

諦め半分呆れ半分で階下で土下座している俊を指差すフェイト。  
その胸には5歳のヴィヴィオを抱っこしていた。

「パパだー！　パパおはよー！」

「ヴィヴィオ！　今日のフェイトママのパンツの色は!？」

「くろー！」

「なのはママは!？」

「ピンクー！」

「二人とも勝負パンツであることを確認！　朝の洗濯が楽しみです  
！」

スパーン！

階下に降りると同時にフェイトの前蹴りが正確に俊の顎を捉える。

後ろに吹っ飛ばす俊。　そこに待ち構えるなのは。　つまり——死

「キョウノアニメハナンダロナー」

「なんだろうなー」

ちなみに愛娘のヴィヴィオはペットのガーくんの粹な計らいで、ア  
ニメ鑑賞に全神経を注いでいた。

☆

「弁当つくってる俺がいうのもなんだけどき、昇進試験って一日フル  
に使ってやんの？」

ヴィヴィオが差し出してきた焼き魚の骨を綺麗に取り出しなが  
ら俊が聞く。

「そうなるね。　たしか午前中に実技で午後は筆記かな。　そして採

点して試験官が合格だと判断すれば晴れてAランクってところかな」

同じくなのはが差し出してきた焼き魚の骨を綺麗に取り出しなが  
らフェイトが答える。

「ふーん……なんか大変そうだな」

「そりゃね。　ランクが上がるってことは局にとっても重要なことだ  
からね。　それ相応の覚悟をもってくれないと逆に困るよ。　たし  
か試験官ってそういう部分も見るんだよねなの？」

「そうだよ。　成績がよかっただけじゃ意外と受からないこともあ  
るね。　言ってみれば即席内申書みたいなもんかな。　数値に現れ

ない部分も含めての昇進試験だからね」

うわあ……管理局員って大変そうだなあ……。思わず同情する俊。なんせこっちは悠々自適なヒモ生活。それも美少女と幼女と一緒に。

「でもあの二人なら受かると思うよ。本来のコンディションで受ければね」

味噌汁をすすりながらなのはは緩みきった顔を見せた。うん、こいつがそういつてるなら間違いないだろうな。なんせ最強の教導官からのお墨付きなんだから。俊はそう思いながらもずくを口に運ぶ。もぐもぐと咀嚼するその横で、ヴィヴィオが拙い箸さばきであるものを取った。

「ヴィヴィオ、それちよつと辛いから止めたほうがいいとおもうぞー」

ヴィヴィオがご飯茶碗の中に落とした明太子（まるまる一本）を見ながら声をかける。

しかし当のヴィヴィオは俊のほうを振り向いて自信満々にこう答えた。

「だいじょうぶっ！ ヴィヴィオむてきだから！」

「いやいや、無敵でも内部攻撃には案外脆くてだな」

両手をぐつと握りしめて無敵を強調するヴィヴィオ。そこになのはとフェイトも笑顔で加わる。

「ヴィヴィオ、なのはママもパパに賛成かなー？ それちよつとからいよー？」

「ううん、そんなことないよっ」

「いや食べたことないでしょ……」

「ねえヴィヴィオ？ それ全部は多いと思うから、フェイトママにも分けてくれないかなー？」

「うーん……いいよ」

フェイトママのお願いに、ヴィヴィオは箸で明太子を半分に分けてあげることこたえる。

これでヴィヴィオが保持している明太子は半分になった。しか

しこれでもヴィヴィオには多すぎる。　ということ、俊となのはは目配せした後、フェイトと同じ行動をとることに――した瞬間にヴィヴィオは小さな口で明太子にぱくりとくらいついた。

「「あっ」」

思わず声を上げる保護者。　ヴィヴィオはおいしそうにもぐもぐと噛んだ後、口を半開きにしぶるぶると震えながら箸を落とした。

首をゆつくりと動かして俊の方向に固定すると、俊が何かを言う前にわんわんと目に大粒の涙を流して泣きだした。

健やかな朝の日常は、一転して慌ただしい朝の日常へと変化した。

☆

ピンポーン

「俊ー！　なのはちゃん迎えにきたでー！」

『はいよー！　ちよつとまってなー！』

高町ハラオウン家の呼び鈴を、はやてが押しながら俊の名前を呼ぶ。　俊はそれに玄関越しに答えた。

数分して玄関が開く。　そこには制服姿のなのはと私服のフェイト。　そして俊に抱っこされているヴィヴィオ。

「おはよー俊。　って、ヴィヴィオちゃんどうしたん？」

涙の後が見えるヴィヴィオの顔を覗き込みながらはやては俊に聞く。　ヴィヴィオははやての視線から逃れるように俊の胸に顔を埋めた。

「あー……明太子を食べて撃沈した」

「5歳で明太子は無理やろ……。　梅干しだって目の敵にするみたいやし」

俊にあやされるヴィヴィオを見ながらはやては困ったように笑った。　俊に頭を撫でられるヴィヴィオ。　ヴィヴィオは小さな声で呟く。

「ヴィヴィオはしょうがくせいになるからむてきだもん……」

「そうだなー、ゴメスちゃんと一緒だもんなー小学生って」

「うん……」

「あーゴメスちゃんね。　ようやく理解したわ。　たしかヴィータも

わたしと一緒にみとったよ？ なーヴィータ？」

はやてはガーくんの咽喉を触っていたヴィータに話しかける。

「べ、べつに好きでみてねえけどな！ ただの暇つぶしだよ！」

「ヴィータちゃんゴメスちゃんきらい……？」

「いや、べ、べつに嫌いじゃないけど……。 や、やめろお前らのその

温かい眼差し！」

手で払いのける仕草をするヴィータ。 思わず俊は頭を撫でよう

とする。 指が粉碎骨折した。

「うぐお……ッ!？」

「まあロリの頭を撫でようとする俊くんが悪いよ、それは」

「まてなのは。 ロリを自称するのはいいけど、他人にロリ扱いされ

るとなんかムカつく」

「まあまあ。 ほら、早く行かないとスバルもティアも待ってるよ。」

携帯に記された時間をヴィータに見せるなのは。

「あ、なのは弁当——」

「フェイトちゃんからもらったよー」

「えー!? なのはちゃんええなー……」

なのはが掲げている重箱をはやてが羨ましそうに見つめる。 こ

れくらい家事スキルもトップランクであるはやてだって作ることは

出来る。 しかし、しかしながらこの場合、料理の出来栄えなど関係

ないのだ。 はやてにとって作ってくれた人物こそが最大の重要項

目であるのだ。

そんなはやての心情を知ってか知らずか、俊はふっふっふと笑いな

がら自身の後ろに隠してあったものを取り出した。

それは重箱ではなく弁当箱。 それも一つではなく三つも。

「ほい、これははやてとシグシグとシヤマル先生の弁当」

渡されたはやては弁当と俊の顔を行き来させる。 何順かした後、

ようやく普段より小さな声で俊に問う。

「ほ、ほんとにええの……? わたしのために無理せんでも——」

「無理じゃないよ。 そのはやての弁当箱に詰めてるのは、はやての

ためだけに詰めたものなんだからさ。 だから遠慮しないで食べて

くれ」

「そう言われたはやてはきよとんとする。　自分がいま何を言われたのか脳が処理していく。　そして――」

「えへへ……愛妻弁当や」

「幸せそうに弁当箱を持って小躍りする。　漢字がどう考えても間違っているがそんなことをはやてには些細なことである。　既にはやての頭の中には幸せな家庭生活のビジョンまで浮かんでいる。」

「子どもは二人で二階建ての家にお庭付き。　大きな犬がいるとええなあ。　なああなた？　って、あなたはまだやなあ。　ちよつと早とちりしすぎやろか！」

「いやんいやんと頬に手を当てて首を振るはやて。　既に彼女の視界からは俊意外の存在は消えていた。　そこになのが一言添えた。　なのはは幸せそうにしているはやての池の中に大きな大きな石を投げ込む。」

「まあはやてちゃんのその妄想を現実にしてるのがわたしなんだけだね」

「ピシリツと固まるはやて。　ヴィヴィオを抱っこして避難するヴィータとシヤマルとフェイト。　なのはに捕まり逃げ遅れた俊。」

「空気が一気に重くなる。　はやてからは黒いオーラがどろどろとあふれ出し、なのはの周りを侵食する。」

「そうやなあ……なのはちゃんはええよなあ……。　一緒にお風呂はいったり一緒にベッドで寝たり。　朝はおはようのキスしながら起こしたり……」

「(どうしよう……何一つやったことがない……)」  
「暗い雰囲気です話すはやて、自分の家での行動を鑑みて沈んだ気持ちになるのは。」

「その空気を吹き飛ばしたのはやはりヴィータの一声であった。  
「おーい、二人とも落ち込むのはいいけどマジで時間なくなってきたぞー。　なのはもはやても今日はやること沢山あるだろ」

「ヴィータの言葉にはつとめる二人。　慌てて携帯で時間を確認し、  
「やばいやばい！　これ以上は本当に二人が遅刻しちゃう！　ヴィー



「夕ちゃんシヤマルさん早く行かないと！」

「もたもたしてたのお前だろー。まあいいまから行けば間に合うだろ」

「はやくみんな乗り！ それじゃ俊、また後で——」

連絡いれるで！ そう言おうとしたはやてはふと気づく。 私服

姿の俊、俊に抱きついて甘えんぼモードのヴィヴィオ、手を振って見送るガーくん。 そしてちゃっかり俊の隣で笑顔を浮かべているフェイト。 あまりにも自然な光景のため見落としそうになったが、はやては去る直前に気が付いてしまったのだ。

「なあ俊？ 今日もしかしてフェイトちゃんって休みやったっけ？」

「おうそうだけど？ 昨日言ってただろ？ なのはは付き添い、フェイトは待機。 はやてだってそれを了承して、昨日は車取らないといけないからって言って帰ったじゃん」

「シヤマル！ 俊の自宅で待機や！」

いままさに車に乗り込む寸前だったシヤマルに別指令を下すはやて。 まるでそれを予想していたかのごとく、シヤマルははやてに気づかれないようにそっと苦笑した。

「あの一はやてちゃん？ 冗談ですよね？」

「いいや、これは冗談やない！」

『はいはい！ わたしもはやてちゃんに賛成！』

間髪入れずに車内に乗り込んでいたなのはが同意を示す。

「あはは……困りましたね。 えつと……私ははやてちゃんのお願いなら喜んで待機しますけど、ひよつとこさん的には大丈夫ですか？」

「キッチンにさえ近づかないでいてくれたら問題ないですよ」

「待ってください、それはどういうことですか？」

「問題ないで俊。 わたしも俊の仕事を増やしたくないし、シヤマルは台所進入禁止にするから」

「待ってください、それはどう言葉を変えても戦力外通告を出していただきますよ？」

「とまあ俺は問題ないけど、フェイトは？」

「うん、私も問題ないよ」

につこりと笑うフェイト。この笑顔を見て、誰が俊の後ろで直前まで唇を噛んでいたと予想できるだろうか。

「んじやそういうことで決まりだな。ほんじや皆気を付けていってらっしゃーい」

「皆頑張ってるねー！」

「なのはママがんばってるねー！」

「イツテラッシャーイ！」

俊をはじめ、家に残るメンバーが手を振って見送る。なのは達も車内から手を振り返しつつこの場を去っていった。

後に残ったメンバーは俊とフェイトとヴィヴィオとガーくん。

そして直前に待機を命じられたシャマルである。

ヴィヴィオを抱っこしたままの俊は、フェイトにヴィヴィオを預けて伸びをする。背骨がボキボキと鳴り、腕がパキパキと音をたてる。夜からずっと作業をしていたため、骨が凝り固まっていたようだ。

「っし、じゃあ俺らは作業しますかね。あ、フェイトとシャマル先生はヴィヴィオとアニメでも見といて。俺はキッチンで仕込みしてるから」

「あ、私手伝おうか？」

「マジで？ 手伝ってくれるならお願い。今日は仕込みでかなり時間かかるから、フェイトがいてくれると助かるよ」

「ヴィヴィオも！ ヴィヴィオもおてつだいする！」

フェイトに抱っこされたままのヴィヴィオが右手を挙げて主張する。ついでにフェイトの足元にいるガーくんも手をあげた。ヴィヴィオがいるところに自分もいる

と主張するかのようだ。

「でもそうするとシャマル先生が一人寂しくアニメ観ることに……」

「いやいやひよつとこさん、流星に私だってピーラーで野菜の皮を剥くくらいなら——」

「シャマル先生には一歩も動かないでもらおう」

「そうだね、それがいいと思う」

「ちよつとまつてください!?! 私に対する警戒度高すぎませんか?!」

普段はとても優しく精神安定剤と呼ばれるシヤマル。料理が絡むと精神安定剤は大麻へと進化を遂げる。

シヤマルが一人、抗議の声を上げる中フェイト達は家の中へと戻っていった。

☆

キッチンからは相も変わらずいい匂いが立ち込めている。豚の角煮の様子を見ながら俊はヴィヴィオとガーくんそれぞれエプロンをつけた。両手をばんぎいの体勢で待機するヴィヴィオとガーくん。そこに俊はエプロンを通す。

ヴィヴィオのエプロンはデフォルメしろくまがプリントされたエプロン、ガーくんは黒色のエプロン。本人の希望により三角巾もつけてあげる。

「んーつと、ヴィヴィオとガーくんには何をやってもらうかな。あ、酢飯作ったからそれを冷ます仕事を与えようか」

顎に手を置きしばし逡巡した俊は、自身が先程作った酢飯を思い出す。これはちらし寿司用に作った酢飯だ。

「ヴィヴィオ、この酢飯をガーくんと一緒に冷めしてくれるか?」

昔ながらの寿司桶で作った酢飯をヴィヴィオとガーくんに見せながら説明する俊に、ヴィヴィオは眉をハの字にして困ったように言った。

「パパ……ごはんしっぱいしちゃったの?」

「ヴィヴィオこれは酢飯といって、ちゃんとした食べ物なんだよ? だからそんなに同情したような目でパパのことを見ないで?」

何故かいいこいいこと頭を撫でられる俊。役得だから別にいいかと彼はすぐに考えを改め直した。

「それじゃヴィヴィオとガーくんは酢飯をお願いね。パパはちよつと知り合いの魚屋に電話して、お願いしてたものが手に入ったか確認するから」

「はーいつ（ハイイツ）!!」

右手をあげ答えるヴィヴィオとガーくん。よいしょよいしょと言いながら、俊が出した小さい机の上に鎮座した寿司桶のうちわで風を送る。シャマルは黙ったままヴィヴィオ達の背後で待機していた。死んだ魚の目をしている。

近くにあげられた魚には目もくれず、俊は魚屋に電話をかける。

普段より1オクターブ高い声で話す俊に一生懸命うちわを振るヴィヴィオとガーくん、そして死んだ魚の目でヴィヴィオの行動を見守るシャマル。俊が携帯電話をポケットにしまったときに、事件は起こった、

「おまたせー！ ごめんね、ちよっとエプロンがどこにあるかわかんなくて……。もう、なんで俊ってばコスプレ部屋にエプロン置いているの!?!」

キッチンに広がるフェイトの声。フェイトは元気な声でわびを入れながら入ってくる。

「つて、皆どうしたの？ 固まったりして?」

首を傾げるフェイト。しかし、この場にいる者が石化するのは当たり前のことであった。

「ふえ、フェイト……」

「ん？ どうしたの?」

「か、かわいすぎる……」

「ふえ……?」

私服は先程と何も変わっていない。髪型は先程までとは違い、いつもツインテールにしている髪を今日は上ではなく下に、つまりおさげに結ってある。結った髪は前

に垂らしてる。しかし、そこは問題ではない。一番の破壊力を演じているのはエプロンなのだ。一見普通のエプロンと変わりないが、たった一つ、唯一にして無二の

存在感を放っている場所があった。

「おっぱいが俺をお迎えしてくれている……」

そう、フェイトが着ていたエプロンは胸の部分が強調されるような

作りになっっているのだ。　いわゆるちよつとエツちなエプロン。主にそういう用途の時に着用するエプロンなのだ。

俊の視線に気づいたフェイトは慌てて胸を隠す。　しかし芳醇で豊富な胸は隠しきることなど出来るはずもなく、逆に寄せ上げ自らの存在を主張する。

「むしやぶりつくしたい……はあはあ……」

「ちよつ!?　俊おちついて!　意識をしつかりと保つて!!」

既にヴィヴィオはガーくんが避難させていた。二人仲良く酢飯を冷ましている。　いや、場所がキッチンから違う場所に移ったからか、シヤマルの制限も解かれ今度は2人と1匹で仲良く冷ましの最中である。

「お、おちついて俊!　深呼吸、深呼吸だよ!　はい、すつてー」

「乳首を吸つてええええええええええええッ!!!」

「はいてー」

「僕の子種を吐き出してえええええええええええええええええッ!!!」

人の形をしたコミュニケーション不能な存在を前にして流石のフェイトも脳の処理が追い付かなくなる。

「はあはあ……これは第二形態でお迎えしなければ……」

「ちよつとまつて俊!?　第二形態つてなに!?　頭大丈夫!?!」

フェイトの言葉など既に聞こえていなかった。でんぐり返しをしそのままブリッジに移行。その後、ブリッジ状態から上半身だけを浮かせ両腕をだらんと垂らす。

「キモイ!　第二形態思つた以上にキモイよ!?　というかこれ絶対にS子に憑りつかれたよね!?!」

「おっばい……」

「それ以外に喋ることがあるでしょうが!」

フェイトの問いかけにおっばいで答えた俊にフェイトは蹴りをかます。

フェイトは自分の幼馴染の身体能力を見誤った。

彼の両親は世界が震える魔導師、そしてその彼を育てた親は高町家。　恵まれた身体能力に恵まれた環境。　そこで彼が手にした力

はとてつもないものであった。普段、彼は理性というリミッターを、いや彼だけではない。人間は誰しもリミッターを知らず知らずのうちにかけているのだ。しかし、いまの彼は第二形態。人間という枠を逸脱した存在。いまこの瞬間——彼の100%が顔を出す。

「おっぱいいいいいいいいいッ!!」

「きゃあああああああああッ!!!?」

バーストをかけた異形のダツシュ。ゴキブリが空を飛行するように文字通り飛んできた。あまりに一瞬の出来事と、第二形態からそんなダツシュをやられたものだからすっかり女の子モードでビビるフェイト。客観的に見ればとても萌え萌えするフェイトなのが、本人は恐ろしいピンチを目の前で体験している。

異形の者がフェイトの胸に手を当てる——その間際バインドが異形の者の足を絡め捕った。

「○▽☆●ッ!?!」

既に言語が失われていた。

いきなり出てきたバインドに一瞬気を取られる異形の者。その間フェイトは何者かに後方へと引っ張られた。そしてそれと同時に何者かが自身より前に出て——

「フェイトのおっぱいは私のものなのよおおおおおッ!!」

なんかきた。

素直にフェイトはそう思った。自分の家のキッチンで異形の者が異形の者を殴りつけたように見えた。

「って、お母さん!?!」

「フェイト、きちやったわ。なのはちゃんに今日のこと連絡したら、今日一日フェイトとゴミが二人だけで過ごすって聞いたから急いできたわよ」

「まっってお母さん!! 私と話すかその自動撲殺機と化してる右手を振り降ろすのを止めるかどっちかにして!?!」

「じゃあ撲殺した後に親子水入らずで話しましよ」

「ストップストップ、お母さんストップ!?!」

1秒間に60発もの拳を浴びせるリンデイ。既に異形の者は虫の息だ。

慌ててその拳を止めに入るフェイト。その時、胸がリンデイの右手にぼつちりと当たっていたためリンデイはニヤけた面を浮かべながら拳を止める。

「俊大丈夫!? 私のことわかる!?!」

「おお……おっばいよ……」

「……これは分かってないってことでいいんだよね?」

自分がおっばいだと認めたくないフェイト。

しかし奇しくもリンデイの撲殺により、俊は正気を取り戻した。

命は取りこぼしそうになっていたが。

慌てて救急箱を取りに行き戻ってくるフェイト。

「はい俊、ちよつと染みるけど我慢してね?」

「フェイトおう、私も右手が——」

「お母さんは自分でして!」

クワツとリンデイに怖い顔を向けるフェイト。リンデイは呼吸

困難に陥った。

「ああお母さん大丈夫!? ていうかさつきからお母さんに何しに来たの!?!」

衣服を緩めて空気を取り込みやすくして背中を擦るフェイト。

「はああ……ダメよフェイト……。あつちにまだヴィヴィオちゃんがいるでしょ? もうえっちな娘になっちゃって……」

「大丈夫みたいだね。じゃあ私俊の手当に戻るから」

息を切らせつつ甘く猫撫で声で、谷間を強調しつつフェイトに擦り寄るリンデイ。そんな母親に対してフェイトはそっけなく返す。

「……」

「はい俊。んー、腫れは皆が帰る頃には引くと思うけど。一応シヤマルに見てもらおうか」

先程からヴィヴィオと酢飯を冷ましていたシヤマルに声をかける。

キッチンにはフェイトの代わりにシヤマルが。そしてフェイトはリンデイを引きずってヴィヴィ

オ達のほうへ行く。

「あ！ リンディメツシユさんだー！」

「リンディダリンディダ！」

「はいおはよー、ヴィヴィオちゃん。 バカアヒル」

「ムスメニハツジヨウスルクセニ」

「娘に発情しちゃいけない法律なんてミッドには存在しないのよ！」

「お母さんちよつと黙ってて、ヴィヴィオの心の教育に悪いから」

娘から刺さる氷の氷柱がリンディの胸を深く抉る。

愕然としつつ娘のニーソを撫でまわすリンディ。 フェイトはそ

んな母親を見ながらヴィヴィオをぬいぐるみのように抱っこする。

「もう……新婚さんごっこ出来ると思ってたのに……」

可愛らしく頬を膨らませて漏らすフェイトの言葉は、小さな音量だったのが幸いしたのか誰にも聞こえることはなかった。



A, s 25. ご褒美試験

俊とフェイトが家で騒動を起こしている頃、なのははスバルとティアナを連れて試験会場にきていた。

「うおおおおおおお！ ついにきたよ！ 試験会場着いたよ！」

「わかったから、わかったから少し落ち着けよ。引率の先生が大声出しなからなにしてんだよ」

「え？ 先生？ どつちかというと女子高生みたいじゃない？」

「なのは……お前の高校生時代は終わったんだ。いくら呼んでも帰っては来ないんだ。もうあの時間は終わって、お前も前を向いて歩く時間なんだ」

「でもまだ卒業して一年だから問題ないよね？」

「まあコスプレなら問題ないだろうな」

「一生ロリでいられるヴィータちゃんが羨ましい……。わたしもロリならもつと……」

「でも近づいてくるのはロリコンだけだからな。あいつら基本鼻息荒くしてくるからキモイぞ」

「うっ……やっぱりやめた」

ヴィータはうんうんと頷き、なのはは自分がロリコンに質問攻めにかかる場面を想像したのか顔色を悪くした。

「ところでスバルとティアはどこいった？」

「ああそれならあっちにいるよ。ほら、あそこで受け付けしてる」

なのはが指さす方向をヴィータも見る。スバルとティアは受付の人物らしき人から番号カードを受け取り説明を受けている最中だった。いつもの成りは潜めており、うんうんとしつかりと頷いていた。ちゃんと説明を聞いているようだ。

「……普段からあんな感じなら可愛いんだけどなあ」

「えー、普段も可愛いじゃん。ちよっとお茶目だけど」

「お、お前は聖人君子か……!?!」

普段からスバルとティアからセクハラ行為を受けているというのにそれをお茶目で済ますなのは。なのはをヴィータは震えながら見

つめる。

そんななのは達の元に一人の女性が手を振りながら向かってきた。

「おーいなのは。久しぶりー、どうそつちのほうは？」

「あ、お久しぶりです。六課楽しいですよー、お菓子食べれますし」

「いやいやいや、六課じゃなくてなのはが好き好き言ってた男の子との関係のこと。どう？少しは進歩した？」

「ありよりよりよりよりよりよりよ！」

「痛い痛い!?上司にビンタ止めて!?一応教導隊の上官なんだからビントヤめて!?!」

「わ、わたしがいつ俊くんのこと好きとか言ったんですか!?わたしはただ人間社会に溶け込めない野良犬のお世話が大変だつて愚痴をこぼしただけで——」

「へー、俊つて名前なんだ。その子かわいい？」

「……まあたまに」

「愛しくてたまらないんでしょ？」

「それは俊くんがわたしに抱いてる感情です！」

「うお……この子言い切ったよ……」

なのはの教導隊の上官だという女性はなのはの剣幕と、その言い切り方におもわず後ずさりする。

「わかってる、わかってるつてば。ちよつとからかったただけだから。もー、べつにいいじゃない好きな人が出来るくらい普通のことなんだから」

「もー……すぐわたしのことからかって」

頬を膨らませそっぽを向くなのは。そんななのはにごめんごめんと謝りながら、唾然としながら二人のやり取りをみていたヴィータとエリオとキヤロに女性は挨拶をする。

「どもーこんにちは。なのはが教導官になった時から桃子さんよりお世話とサポートをお願いされてましたカナコと言います」

「こ、こんにちは」

「うんうんーシヨタとロリか、いいペアだね！」

エリオとキヤロと握手をするカミコ。

「あ、あなたが噂のろりっ娘ヴィータちゃん？略してロヴィータちゃん？うわあー、ほんとにろりろりしてる！かわいいー！ロリなのにツンデレっぽい目つきしてるところがなおよし！」

「やめろー！抱きつくなー！はーなーせー！」

エリオとキャロに続き握手しようとしたヴィータにカナコは思いつきり抱きついた。アホ毛を甘噛みし制服から胸を揉みしだき、骨がバキバキ折れる音がするほど強く強く抱きしめる。

その猛攻から必死に逃れようと体をねじるヴィータだが流石教導官とでもいうべきか、しっかりとヴィータの動きに合わせて腕を離さない。

「おいなのはーこいつはなんなんだよ!？」

必死に逃れようと頑張るヴィータは、わたし知りませんよ的な顔で作り笑いを浮かべていたなのはに声をかける。

「えーっと……なんていえばいいんだろう。分かりやすくいえば女版俊くんかな。三十路で強引に既成事実作って結婚した女局員として一部では有名だよ」

「三十路じゃない！29歳！1か月で結婚式挙げたから三十路じゃない！あー、ロヴィータちゃんのほっぺ柔らかい！ほっぺたべたい！」

「おいこれ性別が女のせいかひよつとこよりひどくないか!?!あいつだって節度を守って——ない！」

「ヴィータちゃん落ち着いて!？」

クワツと顔を見開くヴィータをカナコの手から急いで回収するなのは。ヴィータの頬は唾液にまみれていた。べとべとする頬をハンカチで拭きながら、なのははヴィータに注意する。

「気を付けてヴィータちゃん。あの人、どっちでもイける人だから」

「くそっ！やっぱり教導隊は変態しかいねえのかよ！」

「まってヴィータちゃん。それじゃわたしも変態になっちゃうから。訂正しなきゃね」

「」

「あれ!?!なんでそんな唾然とした目でわたしのこと見るの!?!」

驚きのあまり声が出ないヴィータをなのはが揺さぶりながら問い

詰める。

「とうかカナコさん、この場所にいるってことはもしかして今日の審査員ですか？」

「もしかしなくても今日の審査員だよー」

その言葉を聞いて項垂れ頭を抱えるなのは。尋常じゃない項垂れ方を見たヴィータがひそひそ声でなのはに話しかける。

「おい、そんなにまずいのかよ？」

「まずいよ、めっちゃまずい。あの人妥協しない人で自分の基準点超えないと死ぬ寸前まで教導する人だったから。この試験だつてきつとそう。局側から基準ライン聞いていると思うけど、現場と教導で培ってきた目で採点すると思う。早い話が局が決めてるラインなんて場合によっては無視する人なんだ」

「おいおいいいのかよそれ……」

「それが許されるのがカナコさんなんだ……」

まずいよー……まずいことになっちゃったよー……。そうヴィータを抱きしめながらなのはは眩く。カナコはなのは達からエリオとキャロに視線を向け、なのはに気づかれないように手で壁を作りながら二人に質問する。

「ところでエリオ君にキャロちゃん。俊くんってどんな人かな？写真とかある？」

「あ、写真ならここに」

「見せなくていいよー、二人とも」

写真をカナコに差し出そうとするエリオとキャロ。その姿をめざとく発見し二人の手を掴むなのは。にっこりと微笑んでいるのに二人の手はピクリとも動かなくなった。

「もーなのは、ちよつと見るだけだつて」

「ダメです。俊くんに何か吹き込むつもりですよね、完全に。いったいあなたのせいでどれほどのカップルが泡と消えたと思ってるんですか。カナコさん裏で噂されてたほどなんですよ。カナコさんに目をつけられたカップルは必ず別れるつて」

「いやいや当時は自分より幸せな人が許せなかったけど、いまは自分

も結婚して子どもできて幸せだから、もう人様を別れさせて遊ぶのは止めたよ。まあいい男だったらちよつとつまもうとは考えていたけど」

「残念ながら俊くんはわたし以外の女性には興味がないので」

「あれあれー？クロノに聞いた話だと、クロノの妹さんと大将中将にいたく気に入られてる八神はやてちゃんも狙ってるみたいだけどねー」

ひらひらと手を振りながらカナコに背を向けていたなのはだが、フェイトとはやての名前が出された瞬間、なのはの体がビクリと脈打った。

「確かクロノの妹のほうはナイスバディーに加えて性格も優しいし器量好し。なんでもしてくれそうってことで結婚したい管理局員1位だったような気がするなー。それに八神はやてちゃんも出世頭で、料理上手。器量も好し。エロそうなのに昔から好きな男の人のために初めてをずっと守っている純情さ。うーん——勝てそうにないね」

「だ、だからなんだっていうんですか。別にわたしは俊くんのこと好きじゃないですし、俊くんが誰と結ばれようとわたしには関係ないことなので。でも俊くんにはわたしがいないとダメだとは思いますが」

「うんうんそうだねー。なのはがいないとダメだよねー。ところでなのは、妹ちゃんとはやてちゃんに差をつける方法知ってるんだけど聞きたい？」

なのはの話しを頷きながら優しく聞いていたカナコは、人差し指を立てながら怪しく口角を釣り上げる。

「カナコさんの意見は参考になりません」

「でもそれで旦那を墮としたよ？」

「うっ……。ま、まあ俊くんはわたしにメロメロなので必要ないことですが、ここで聞かないと先輩に恥をかかせることになりますからね。き、聞いておいてあげましょう」

指をもじもじ、ツインテールにしたリボンがピコピコと揺れ動く。

なのはは周囲の人間のことを気にしながらも耳だけカナコに向けて聞く準備にはいった。

「しようがないなあ。えーつとね——」

両手で小さな筒を作り、なのはの耳元で話しかける。

なのははそれをふんふんと首を縦に動かしながら聞き——ボンと効果音が聞こえてきそうなほど顔を真っ赤にして大きく飛びのいた。

ヴィータを抱き寄せ真っ赤な顔でカナコを指差す。

「ヴィ、ヴィータちゃん変態がいるよ!」

「知ってるよ」

なんと無慈悲な答えなんだろうか。

変態の烙印を押されたカナコはなのはの反応に首を傾げる。どうやら自分が予想していた反応とは違っていたらしく、

「あれー?なのはにはちよつと早かったかな?」

「まあなのはは純情なんで。というか、そろそろうちの部下達が帰ってくるのでいいですか?あいつらもこんなところで審査員に会うと変に緊張しちゃうんで」

「あ、それもそうだね。それじゃあたしも審査員の説明とか受けてこよっかなー。それじゃまたねなのはー!」

「絶対に俊くんに近づかないでくださいね!」

手を振りながらお別れするカナコに、なのははそう釘をさした。カナコが去った後、残されたのはヴィータを抱きしめたままのなのはとポカーンとしているエリオとキャロ。

ヴィータはなのはに問う。

「なのはにしては厳しいあたりだったな。苦手なのか?」

「いや苦手じゃないし、実際わたしの面倒ずっと見てくれてすごく感謝してる。わたしはカナコさんのこと大好きだよ。でもね、こと男が絡む出来事においてはカナコさんは絶対にダメ。近づけることはおろか関わりを持たれることすら厄介なの。無類の力を発揮するの!」

「そんなになのか?」

「本人の前では言えなかったけど、カナコさん破局させたカップルが多すぎてある一つの呼び名が使われるようになったの!」

「なんだそれ。疫病神とか?」

「滅びの爆裂疾風弾」

「や、やばいですなのはさん。めっちゃ緊張してきたんですけど……どうしたらいいでしょうか？」

「大丈夫だよティア。自信もっていこう。審査員がいるから緊張しちゃうだけで、やってることとはわたしのときと一緒だよ」

「やってるだなんてそんな！もうこんなに人が多い中でそんなことを！確かに可愛い声でなのはさん鳴いてくれますけどー！」

「あ、すみません。この子ちよつと教導の時に頭をやられました」

頬を赤らめくねくねするティア、周囲にいた人間に笑顔を向けながら説明するのは。

「でも本当に大丈夫でしょうか。AランクですよAランク。エース級ですよ」

不安そうな瞳でなのはを見つめるスバル。ふとなのははスバルが手を振るわせていることに気づいた。自分もよくわかる。どんなに練習を積んでも、どんなに大丈夫だと心の中で思っても、自分の体は震える気持ち。失敗が頭の中を埋め尽くす。どんなに成功をイメージしても隣にいる失敗がそれを嘲り笑いながら指をさす。

目の前にいる自分の教え子は、いまそのまっただ中にいるんだ。

なのはは強く思う。

そんな教え子に自分が出来ることはなんだろう。一生懸命考える。

震える彼女達に何をすればいいだろうか。

なのはは自然と体が動いた。二人に笑顔を向けるとそつと二人を抱き寄せ、背中を叩き赤ちゃんをあやすように優しく言葉をかける。「大丈夫、怖くないよ。失敗したっていいじゃない。一生懸命全力全開でやり遂げて、二人が悔いを残さなければそれでいい。受からなかったらまたわたしが一から教えてあげるからね」

ね？ そう二人に微笑むなのは。

対する二人は恋した乙女のような瞳でなのはのこことを見つめる。

そつと、ぎゅつと、激しく強くなのはが引き剥がそうとしても剥がれないほど強く強くなのはを抱きしめる。

「なのはさん結婚してください！いますぐ結婚してください！一生な

のはさんを飼いたいです！お願いします！」

「私も！私も結婚してください！」

「やめて二人とも骨が折れる、骨が折れるから！！ヴィータちゃんヘルプ！」

「あ、ちよつと待ってくれ。はやてと電話してるから。はいはい、こっちはいまから試験開始だから。そっちはどんな感じ？うんうん」

「エリオにキャロ——」

「あ、フェイトさんですか？いま丁度始まるところで——」

無慈悲な通話。なのははこのときほど携帯電話というものをこの世から根絶したいと思ったことはなかっただろう。

ピンポンパンポン

『これよりAランク昇進試験を開始いたします。登録されている方は試験会場へ、その他の方は別室にて待機をお願いします。なお、午前中に実技試験。午後に筆記試験となっております』

「ほらもう時間だから！早く行かないとね！」

「嫌です！結婚してくれるまで離しません！」

頑としてなのはを離さない二人。しかし時間は刻一刻と過ぎ去り、試験を受けるであろう人達もどんどん試験会場内へと歩を進めていく。

この時、なのはは焦っていた。自分の教え子たちが試験の結果ではなく自分のせいで落ちることになったら、他の皆にどう説明したらいいのか。

だからしようがなかったのだ。こういうより他なかったのだ。

「わかったわかった！二人が頑張ってたらちやんとご褒美あげるから！」

「いえー！いえー！いえー！いッ！！」

ご褒美と聞いた瞬間、即座になのはから離れハイタッチを交わす兩名。

「ほら、いつまでいるんだよ。さっさと試験受けてこい。あたし達は上で見ておくから。心配すんな、あたしもなのはも二人が受かると確信してるから今回受けさせてんだ。何も臆することはない。会場の



雰囲気にもまれるな、会場全体を自分のペースにもっていけ」

ひらひらと手を振りながらそうアドバイスするヴィータに頭を下げて笑顔で返事する二人。ヴィータに続き、エリオとキャロも二人に声をかけてスバルとティアもそれに笑顔で答える。そしてそのまま二人はこの場を去り、会場へと足早に駆けていった。

そんな二人を見送りながらなのはとある人物に電話をかける。ワンコールのうちに電話に出た人物になのはは泣き目で訴えた。

「俊くん……なんでもするから家に帰ったらわたしのそばにずっといて」

『なに!? 高速回転三所攻めをしてくれるだど!?』

「ごめん、やっぱ半径5m以内に近づいてこないでね」

通話終了ボタンを即押し、大きく大きくため息を吐くのは。

「ヴィータちゃん、やっぱわたしが俊くんに惚れるとかありえないわ」  
「あいつは人間の皮を被ったゴミだからな。明日辺りにゴミ収集車が迎えにきてくれるだろ。さ、あたし達も上に行くか。ほら、エリオにキャロ。迷わないように手つなぐぞ」

そういつてエリオとキャロの手を繋ぎ、見学席へと向かうヴィータ。

その周りでは幸せそうな顔を浮かべている男性局員女性局員が多数いたらしい。

A, s 26. オムライス

「ヴィヴィオもうつかれたー。ガーくんあとやってー」

「ウン、イイヨー」

「わーい！」

スバルとティアの昇進試験が始まった頃、丁度ヴィヴィオも酢飯作りで飽きていた。うちわで風を送るのに疲れたのか、うちわをガーくんの手渡し一緒に扇いでいたシャマルの膝に寝転がる。

「あらあら」

シャマルはそれに抗議することなく、自身もうちわで酢飯を扇ぐのを止めヴィヴィオの頭を撫ではじめる。

「シャマルせんせいのおひざきもちー。ヴィヴィオすき！」

「それは嬉しいですねー」

「あ、ヴィヴィオシャマルせんせいもすきだよ？」

「はい、わかってますよー」

ふと我に返りシャマルにぎゅーっと抱きつくヴィヴィオをシャマルは抱き返す。ひとしきりシャマルを抱きしめたヴィヴィオはシャマルの膝にまたもや寝転がる。

「なのはママとヴィータちゃんおそいねー」

「そうですねー、もうちよつと時間かかるかもしれませんがね。でも夕食前には戻ってきますよ」

「そっかー」

ヴィヴィオはシャマルの手を取りさすりながら返事をする。若干声に元気がないのが心配になったシャマルがヴィヴィオの顔を覗き込むと、ヴィヴィオの目はとろん

としており瞼が落ちそうになっていた。心なしか船も漕ぎ出している。朝から明太子を食べて泣いたり、今日はスバルとティアの昇進試験ということで大人も大分慌ただしくしているので、いつもより余計に体力を使ったのかもしれない。酢飯作りだって5歳の女の子には重労働だ。

それでもなんとか寝ないように頑張っているヴィヴィオにシャマ

ルは声をかける。

「ヴィヴィオちゃん、おねんねしてていいですよ。お昼ご飯になったら起こしてあげますからね」

「……うん」

ヴィヴィオは小さな声でそう答え、今度こそ夢の世界に旅立った。いまのヴィヴィオは服のままシャマルの膝枕でおねんね。シャマルはそんなヴィヴィオにバスタオ

ルでもかけようと思いつが、自分の膝にはヴィヴィオが寝ているので動けないことに初めて気が付く。ため息を吐きつつヴィヴィオの頭を撫でてみると、さつきまでうちわで酢飯を作っていたガーくんが口にバスタオルを咥えて立っていた。とことごとことヴィヴィオの元に駆け寄り、そつと口からバスタオルを離しヴィヴィオにかけてあげるガーくん。満足そうに頷いた後、酢飯作りのためうちわを再び扇ぎだす。

「ありがとうございます、ガーくん」

「ヴィヴィオダイジ。ヴィヴィオマモルツテヤクソクシタ」

「誰と約束したんですか？」

「ナイシヨ」

器用に口元に人差し指をもつていきシーのポーズをとるガーくん。その人差し指はどこに生えていたものなのかシャマルの疑問はつきない。

「10年間付き合ってきましたがいまだに理解不能なひよつとこきんもさることながら、それよりも不思議なのがガーくんなんですよねえ。この世界に人語を解す生物はいますが、いずれも高等生物。アヒルが喋るなんて聞いたことありませんし」

シャマルは思考を巡らせる。

「(もし仮にいたしたら管理局の情報部署の耳に入っているはず。しかしその様子もなく、おまけにガーくんがいた場所はすぐ近くのペットショップ。先程のガーくんの口ぶりから察するに元々は飼い主がいたみたいですし……)」

「ヨイシヨ、ヨイシヨ。ミンナノタメニガークスメシツクル！」

体全体で一生懸命うちわを扇ぐガーくん。その光景を見ながらシヤマルはこう結論付ける。

「まあわたし達の中で一番鼻が利くはやてちゃんと直感正答率100%のなのはちゃんが心配してないみたいですから別にいいですよ。ヴィヴィオちゃんのいうことしつかり聞いてるみたいですし」

自分一人だけでうんうんと頷きそう結論付けるシヤマル。と、丁度そこにキッチンでリンデイと俊と一緒に作業していたフェイトがひよっこりと顔を出した。

「あれ？ヴィヴィオ寝てるの？」

「はい、いましたがた寝ちやいました。さっきまで一生懸命頑張ってたんですけどね」

「ヴィヴィオエラカッタヨ。ガンバツテタ！ダカライマハガーくんガガンバツテルノ！」

「そっかー、よしよしガーくん」

シヤマルの方へと歩み寄るフェイトは、その途中でうちわを扇ぎながら頑張っているガーくんの頭をよしよしと撫でた。嬉しそうな表情を浮かべるガーくん。フェイト

トはそのままシヤマルの隣に座り、シヤマルの膝で幸せそうに眠っているヴィヴィオの頭を優しく撫でる。

「幸せそうな顔して寝てる。よっぽどシヤマルの膝枕が気持ちいいのかな」

「そうだと嬉しいんですけど。それよりそっちは終わりました？」

「いや……なんというか……その……」

言いにくそうに言葉を濁すフェイト。視線をあらぬ方向に彷徨わせ頬を掻く。そんなフェイトの様子に何か感じたのかシヤマルが苦笑する。

「ほんとフェイトちゃんは愛されていますね」

「あれは愛情というか愛狂だよ。それにそのうち一人は母親だし。……まあもう一人のほうにそう思われてるのは悪い気はしないかなあ……」

なんだかんだでちよつとだけ嬉しそうなフェイト。まるで恋する

乙女のようなのである。

ここでそんな恋する乙女が逃げてきた現場を見てみよう。

☆

「知ってましたか……ッ！パン切りナイフはパンを切るためにあるものであって、人の首を切り落とすために存在するのでありませんよ……ッ！」

「あらごめんあそばせ……！あまりにも醜く醜悪な生き物が私の隣にいるため思わずナイフを手にとってしまったのよ……！」

「だったらそのナイフをとつと俺に向けるのは止めてくれませんかねえ……！」

「あなたこそナイフを隙間でとめているそのフォークをどかしたらいいんじゃないのかしら……！」

現場は殺し合いの場へと移行していた。楽しい楽しいお料理教室はどこにいつてしまったのか。リンデイの手にはパン切りナイフ、俊の手にはフォーク、それぞれの力は拮抗している。しかしこの両者、先程から作りかけや作り終えた料理には一切触れることなどせず、決して料理に怪我を負わせていないところがたち悪い。

そもそも何故こんなことになったのだろうか。

「そもそも、リンデイさんがタツクルなんてしてくるから俺の手がフェイトのおっぱいを揉んだんですよ！元を辿れば悪いのはリンデイさんじゃないですか！」

「いいえ、あなたが私のフェイトと仲良く野菜なんて切ってるからよ！それに私はちよつとヨロけただけよ！別に悪気なんてないわ！」

「……変形性膝関節症おばさん」

「もっぺん言ってみろこのクソ餓鬼いいい！」

どうやら原因は俊がフェイトの胸を揉んだことにあるようだ。そしてその行動を作った張本人はリンデイであるらしい。

「フェイトと一緒に仲良く料理してた俺に嫉妬してるんでしょー！」

リンデイの猛攻を間一髪でかわし、軌道を先読みにフォークをそこに滑り込ませることでなんとか致命傷を免れながら俊はそう言い放つ。

「べ、べつに嫉妬なんて方に一つもしてにやいわよ！」

「にやのは化しますよリンディさん」

「え？ピチピチの女子高生ですって？」

「いい歳した女性が何言ってるんですか。もう四——」

シユタツ

「それ以上言葉を発したら打ち首獄門の刑に処するわよ」

俊の顔の真横には先程までリンディが持っていたパン切りナイフが刺さっていた。首を縦にぶんぶん動かして肯定の意を示す俊に満足そうに頷きながらリンディはキッチンを離れる。

『フェイトー、ママと一緒にご飯つくりましょー』

『しーッ、お母さんいまヴィヴィオが寝てるから静かにして』

『はい……ごめんなさい』

声のトーンが下がるリンディ、一方俊は——

「ちよつとちびった……」

19歳にして漏らしていた。

『ヴィヴィオちゃん抱っこしたい……』

『えーダメだよお母さん。ヴィヴィオいま寝てるんだから起こしちゃうでしょ。それじゃ今度はお母さんがヴィヴィオと一緒にいて？私は俊の手伝いしてくるから』

『あ、じゃあ私も——』

『娘のお願い、聞いてくれるよね？』

『……はい』

たったつたとフェイトはヴィヴィオの元を離れて俊が待つキッチンへと入る。

「俊おまたせ、やっと二人で——」

「フェイトのおっぱいの感触を手が覚えているうちにプリンを作らないと。お、フェイトもうちよつとで——」

フェイトは静かに退出した。

『お母さん、ちよつと2階で精神を休憩させてきていいかな？』

『へ？ええ、いいわよ。お昼にはちゃんと降りてきなさいよ？』

『あ、それならメールか電話お願いしていい？ちよつと聞こえないか』

もしれないから』

『ええいいわよ』

☆

一時間後、シャマルの膝枕から起きたヴィヴィオと俊は俊の自室で籠城しているフェイトに声をかけていた。扉は内側から鍵がかけられている。

「フェイトー、頼むから返事してくれー。俺が悪かったから、もうおっぱいプリンなんて作らないから出てきてくれー……」

「フェイトママー、ごはんだよー？」

ヴィヴィオがとんとんと扉を叩く。すると内側から鍵のロックが外される音が聞こえ――

「おおフェイト！ほんと悪かった――」

俊の言葉を聞かずに、扉の隙間から手をだしヴィヴィオを掴んで部屋へと招き入れた。

「……フェイトちゃん。僕もそっちにいききたいなー……」

『ダメ。私のおっぱいにしか興味がないんでしょ？』

「そ、そんなことないってば!？」

『じゃあ私が貧乳になったらどうする？』

「巨乳になる魔法を発明する」

『ほらやっぱり。どうせ私なんておっぱい欲を満たすためだけに存在してるんだ……』

扉越しにフェイトのすすり泣く声が聞こえてくる。

それに狼狽えたのは勿論俊だ。あわわわと突如ブレイクダンスをしながらフェイトにおっぱいプリンの弁解をする。

「ち、ちがうんだよフェイト！あまりにもフェイトのおっぱいの感触が気持ちよくて――」

『はいはいどうせ私はおっぱいだけの女ですよーだ……。いまは若いから皆構ってくれるけど、年が経つにつれておっぱいだけしかない女とか言われるんだろうなあ』

「そ、そんなことないってば！ほらフェイトは可愛いし、実際に管理局1の嫁にしたい女性なんだし！」

『でも身内に最大の障害が存在してるし。婚期逃すこと確実なんだよねえ』

「やばい、フェイトの闇が深すぎる。ダークネスでとらぶってるよこれ」

現状を考えると、フェイトの言葉は意外と洒落にならないのでどう返すか困っていると、階下よりシャルマルが俊のほうに駆け寄ってきた。

「ひよつとごさん、リンデイさんが赤ワイン探してましたよ？それと今日のお昼はオムライスにするみたいです。フェイトきーん、今日はフェイトさんの好きなオムライスですから早くきてくださいねー！それじゃ私はリンデイさんのお手伝いしてきますので。……そういうええばヴィヴィオちゃんは？一緒に呼びにいったはずですけど……」

「フェイトに取られました」

「ファイトです、ひよつとごさん」

頑張ってくださいと声をかけた後、シャルマルは階下へと去っていった。数分して響くシャルマルの叫び声と鍋がひっくり返る音。どうやら下は下で悲惨な状況になってるらしい。

「なあフェイト、リンデイさんもフェイトの大好きなオムライス作ってるみたいだから機嫌なおそうぜ？俺も金輪際フェイトのおっぱいで遊ばないって誓うからさ」

『本当に？』

「ほんとほんと。それにリンデイさんだってフェイトの幸せを一番に考えてくれるから、婚期を逃すなんてことあるはずないって」

『お母さんの行動を見てもそう思える？幼馴染二人が幸せな夫婦生活を送っている中で、私だけ独身で30歳過ぎてもハイレグよろしいフォームで、女神（笑）とか言われて——』

「なあフェイト、俺の嫁にならないか？」

その言葉は自然と口から出ていた。俊もその事実には驚き、口元に手を置いて自分がいま何をフェイトに言ったのか脳内で反芻する。反芻し、自分が何を言ったのかき

つちりと理解した後——それでもなお言い続けた。



「元々、なのはとフェイトにはプロポーズする予定だったよ。けど中々指輪が決まらなくてずっと保留にしてただけだよ。夏ごろにようやく見つけてね。俺としては」

六課が解散するまではって考えてたけど……フェイトがそんなに不安を感じていたなんてな。見抜けなくてほんとごめん」

俊は扉に向かって頭を下げた。たとえフェイトの目に入らなくても、それでも俊は頭を下げる。俊はただじっと待った。いったいどれくらい時間が過ぎただろうか、俊の額には一筋の汗が浮かび、流れ落ちる。その間際、ようやくフェイトは俊に声をかけた。

『意外とモテてるんだよ？私の他にも女の子の幼馴染が二人、獣属性の女装が趣味の男の子一人』

「すいません、若干一名男が紛れ込んでいますけど」

『地位の高い人がめっちゃくちゃアタックしてるらしいよ。そのたびに男性の名前出して断ってるみたいだけど』

「三脳が草葉の陰で泣いてるぞおい」

管理局の未来はどっちだ。

「それに、誰にモテようが好きな女の子にモテないの意味ないだろ？その女の子が俺にとってはフェイトだよ。その………返事を聞いていいかな？」

頬を搔く手が熱いのか、頬が熱いのか定かではないが、俊の体は真っ赤になっていた。これが照れからくるものであるのは明白であり、その証拠に先程からプロペラダンスをして気を紛らわせようとしている。

ガチャリ、扉のロックが外れる音とともに重い重い扉がようやく開いた。そこからフェイトは顔を出す。俊の目には潤んだ瞳で自分を見つめるフェイトときよとんと

しているヴィヴィオが映し出されていた。

「よ、よおフェイト」

片手をあげる俊に——フェイトは飛びつき抱きしめた。

バランスを崩し倒れそうになる自分の足に力を込め堪える俊。そんな俊のことなどおかまいなしにフェイトは強く強く、俊の骨がメシ

メシと音を立てるほどに抱きしめた。

「離さないからね……」

そう返事をしながら。

俊もそれに抱きしめることで返した。

抱きしめる合う二人、そんな二人にヴィヴィオがくいくいとフェイトの袖を引っ張る。

「ねえねえフェイトママー。ドラマのつづきみようよー」

「あ、こらヴィヴィオ!? シーツ! いまシーツ!」

「……ん? ドラマ……?」

「あ、ダメ! いま部屋に入っちゃダメ——」

ヴィヴィオの口元を押さえるフェイト、その隙に俊は先程までフェイトとヴィヴィオがいた自室に足を踏み込む。目に飛び込んできたのは、録画であろうドラマの胸がきゅんきゅんするようなラブシーン。恋人同士だと思われる男女が笑い合いながら互いにキスする場面が映っている。

そんなドラマがふいに消える。俊の後方にヴィヴィオを抱っこしたまま笑顔を浮かべているフェイトが消したのだ。フェイトの笑顔は若干強張っているが。

「あははは……。あ、あれー? おかしいなー? いつのまにこんなドラマ流れてたのかなー?」

「お? このドラマヴィヴィオがフェイトママのおひぎにすわったときにはながれてたよ?」

「そ、そうだったかなー? じゃあ何かの拍子で流れたみたいだねー?」  
「でもこのドラマたのしいよね! ヴィヴィオだいすき! でもこんきとかよくヴィヴィオにはさからなかった。パパー、こんきつてなーに?」

不思議そうな表情で俊に質問するヴィヴィオ。当の俊は顔を真っ青にしていた。

「な、なあフェイト? もしかしてだけど、フェイトはこのドラマずっと見てたのか?」

「……うん」

もう逃げられないと観念したのか、フェイトが首を縦に振る。

「最初は一人でドラマ見てただけど、ヴィヴィオの声が聞こえてきたからヴィヴィオを部屋の中に入れてお膝に座らせてドラマの続きを見てたの。そしたら外から声がするのに気づいて、音量が大きくて邪魔だったのかと思ってボリユームを下げたらその……さっきの『なあフェイト、俺の嫁にならないか?』ってのが聞こえてきて」

「そこからフェイトママボリユームちいさくするから、ヴィヴィオきこえなかったのー」

フェイトに抱っこされていたヴィヴィオが頬を膨らませながら言ってくる。しかしいまの俊にはそんなことに構ってられるほどの精神状態にいなかった。

「それで慌てて、ボリユーム落としたら……俊が私にプロポーズして……えとその……つい舞い上がっちゃって」

指を絡めながら顔を赤くしてちらちらと俊を見るフェイト。対する俊は――

「……つまり俺がフェイトと思って喋っていた相手はドラマの役者であって、俺は自分から秘密を暴露してしまったのか……?」

「ま、まあそういうことかな」

『フェイトー、ヴィヴィオちゃん、ミカツキモー、昼食が出来たから早くいらっしやーい。フェイトもいつまでドラマみてるのー? あ、あの子音量大きくして見るのが好きなタイプだから携帯から連絡しなきゃいけないんだった。もう、19歳といってもやっぱり子どもは子どもなのよねえ』

そんな声が聞こえてきた直後、フェイトのポケットからバイブ振動が俊とフェイトの間を支配した。

☆

「あれ? ひよつとこさんは?」

「二人にしてほしいだって。その……色々と呼びたいときもあるよね。一応、俊には分からないように防音障壁してきたからこっちは迷惑かけないから大丈夫だよ」

「まあいまだにスカさんと戦隊ごっこしてる人ですからね。別に不思議ではありませんか」

「あらフェイト？顔が真っ赤よ？大丈夫？」

「う、うん！大丈夫大丈夫！全然平気！」

「そう？ならいいけど」

「ヴィヴィオこのオムライスすき！おいしい！」

「あらほんと？嬉しいわ、ありがとうヴィヴィオちゃん」

スプーンを握りしめながらニコニコ笑顔でリンデイに話しかけてくるヴィヴィオを、リンデイも笑顔で抱きしめる。

ヴィヴィオとリンデイが抱き合っている姿を見ながら、フェイトは先程の俊の言葉と自分の行動がフラッシュバックする。

『俺の嫁にならないか？』

表面には出さないように努力しながらも、フェイトはいまにも小躍りしてしまいそうな気持であった。その証拠に、先程からオムライスを誰にもいない虚空に向けて差し出しているのだから。

「あのリンデイさん。フェイトさん大丈夫ですか？」

「ええ、問題ないわ。あの子、人一倍恋愛ものが大好きだから実家暮らしのときはたまにこういうことになってたの」

「はあ……」

☆

女子会(年齢の差あり)が下で行われている中、俊はガークンをベッドに押し倒していた。

「ガークんにだって穴はあるんだよな……。もう恥ずかしくて生きていけないから最後に童貞卒業するためにガークン協力してくれよ……」

「ケガサレルー!?ガークンノミサオガケガサレルー!?オチツイテ! イッタンオチツイテ!」

「はあはあ……」

「ヤメテ!?!シヨウキニモドツテ!」

ついにアヒルとの交尾を成功させようとしていた。

A, s 27. なのはスネる

ティアとスバルの実技が終了してから数分、いまだに結果は出てこない。きつとあの人が関わってるから揉めてるに違いない。まだ落ちたと決まったわけでもないのに、当の二人は敗戦ムードバリバリで落ち込んでる。

「まあなんだ……ミスしたのはショックかもしれないがまだ落ちたと決まったわけじゃないんだから顔をあげろ」

「うう……無理だよヴィータちゃん」

「上司に向かってちゃん付けはやめろ」

流石ヴィータちゃん、二人で落ち込んで下を向いているのにアツパー繰り出すなんて流石すぎる。

「なのはさんだって試験官なら落としますよねえ……」

「へっ!? う、うーん……そうだねえ……」

まあ確かにあのミスはちよつとなあ……。

わたしが二人にどう発言すべきか迷っている間に、無言を肯定と受け取ったのかティアとスバルが二人で肩を抱き合い慰め合いを始めた。

「うう……どうせ私達はエースオブエースにつきつきりで見てもらってるのに試験に受からないほどの愚か者なんだ。こうなったらなのはさんに養ってもらおうよりほかないよ……」

「そうね……」

「まっつて二人とも。なにわたしが養うのが当然みたいな流れになっつんの。わたしもう子どもが二人もいるんだから無理だよ」

一人は可愛い5歳児の女の子、一人は犬のようにわたしにくっついてくる19歳児の男。19歳児のほうが手のかかるから厄介なんだよね。

「それにまだ落ちたって決まったわけじゃないから、そんなに落ち込まないの。落ちても昇進試験なんだから受かるまで挑戦すればいいでしょ?」

「でも……落ちたらなのはさんに迷惑かかっちゃいますし、なのはさ

んの評価も……」

……え？もしかしてこの娘たちそんなこと気にしてたの？

「なのはさんは最高の教導官って太鼓判押されてますし、そんななのはさんが一年間面倒を見てくれてるんですよ？これで落ちたらなんかもう申し訳なくて……」

まるで捨てられた子猫のように抱き合う二人。そっか……二人は二人なりでそんなことを思いながらこの試験に臨んだんだ。ほんと、可愛い教え子だなあ。

自然とわたしの両腕は二人を抱きしめていた。そつと二人のおでこにキスを落とし頭をよしよしと撫でる。

「大丈夫、わたしはそんなの気にしてないよ。落ちたら落ちたでいいじゃない。受かるまで何度だってわたしが面倒みてあげるから」

「なのはさん……」

わたしからは見えないけど、きつとティアもスバルも安心しきった表情かな？こういう時にこういうったケアをするのもわたしの役目だもんね。それにしてもそんな想いで臨んでいたなんて……ちよつとだけ二人に対する考えが変わったかも。

「(二人とも目が血走ってて顔が変態そのものでなのはの髪を舌でテイスティングしてるけど、まあなのはには知らせないほうがいいな。なんか感動してるっぽいし)」

訓練終わりのプリクラくらいなら一緒に撮りにいってあげてもいいかな！

ピンポンパンポーン

『Aランク昇進試験・実技の部の合格者が発表されました。受験者は速やかに確認し、試験官に今後の指示を仰いでください』

「あ、結果が発表されたみたいだよ。さ、いっておいで」

二人の肩を押して公表されている会場に向かわせる。

「ふう……どう思う？ヴィータちゃん」

「試験において誤射は最大のミスだ。それに加えていつも通りの動きが二人ともできなかつたからなあ。ただ、やっぱりなのはが教導しているだけあって他よりは頭一つ分実力が抜きん出ていることは事実

だ。普通の採点ならギリギリのギリギリで及第点。なのはと同じ教導官が試験なら……下手したら落ちたかもな。やっぱ試験で誤射はマズイだろ」

「終盤挽回してただけどねえー……」

思わずため息がでる。二人にはあんなこと言っただけで、こつちだつて責任は感じるんだよね。やっぱメンタルトレーニングをもっと取り入れるべきだったかな……？

自分自身の反省点を探していると、ポケットにいれていた携帯が振動する。ヴィータちゃんに断つて携帯を開くとフェイトちゃんの名前がディスプレイに表示されていた。通話ボタンを押して耳にあてると、わたしの癒し100%であるフェイトちゃんの困った声が聞こえてきた。

『もしもしなのは？いま大丈夫？』

「うん、大丈夫だよ。どうしたのフェイトちゃん？」

『いや……ちよつと俊がなのはの声を聞きたいらしくて……』

「へ？俊くんが？」

な、なにになにいきなりそんなわたしの声が聞きたいだなんて！ほんともう俊くんだったらわたしがいないと何もできないダメダメさんなんだから！まったくこまっちゃうなあ。甘えん坊なんだから。

「いいよ。そんなに俊くんがわたしの声を聞きたいくらい寂しがつてるならしょうがないなあ。忙しんだけど、仕方ないにやあ」

『……もしもしコイキング？』

「張り倒すぞハゲ」

いけないいけない、せつかく声を聞きたくて電話してきたのにハゲはダメだよ、ハゲは。

咳払いを一つ、先程より明るく可愛らしい声を出すように努めて電話口の彼に話しかける。

「どうしたの俊くん？なにか嫌なことでもあったの？」

『心の安寧を保ちつつ現実逃避するためなのはの声を聞きたかった。なのは、俺もうダメだ。挿入は出来なかったけど、ガークんに顔射かましてしまった。あげくのはてにはお掃除もさせようとした。』

フエイトがビンタして正気に戻してくれなかったら俺の初体験の相手がアヒルになるところだったよ』

どうしよう俊くんの話にまったくついていけない。

『しかも量がすごかった。びゅつるるるるるッ！って感じで。そんでいま1階でリンディさんと桃子さんと土郎さんが家族会議してる。助けて』

どうしようそんな家に帰りたくない。

「あ、あのね俊くん？おちついて？俊くんいま混乱してるみたいだから。いい？わたしの質問にゆつくりと落ち着いて答えてね？」

『うん』

「よし、いくよ？俊くんはいま何をしていますか？」

『自分の部屋でヴィヴィオを抱っこしながらフエイトの太ももを触っています』

頭の血管がキレそうになる。うらやましい！フエイトちゃんがうらやましい！別に俊くんのことなんてなんとも思っていないけど、そんな空間にいれるフエイトちゃんがうらやましいっ！

「そ、それじゃあ俊くんはなんでそんなことをしてるんですか？」

『フエイトが泣きながら「アヒルに負けるのはいやっ！俊もどって！アヒルより女性のほうが絶対にいいから！」っていいながら太もも触らせてくれたから、そのままずっと触ってる』

くそお……！わたしだって太ももには自信あるもん！おっぱいはフエイトちゃんに勝てないけど太ももなら勝てるもん！絶対に負けないもん！

……というかさつきから俊くんはなんでそんなことになってるんだっけ？

「俊くん？もう一度聞くけど、なんで俊くんは自室でヴィヴィオをだっこしながらフエイトちゃんの太ももを触ってるの？そしてなんでおかあさんとおとうさんとリンディさんが家で家族会議してるの？」

『……挿入しようとしたから』

「……………はっ？」



『アヒルに挿入しようとしたら家族会議にまで発展した』

「なんか頭痛くなってきたんだけど」

頭痛が……！俊くんの発言の一つ一つがわたしの頭を締め付ける！なんてバカな頭をもってるの。もう死にたい、こんな男と幼馴染なんて人生の汚点なんだけど。

『あ、桃子さんが呼んでるからちよつと行ってくる』

「はっ!?ちよ、ちよつと俊くん!?まだ話終わってないから!」

引きとめようと俊くんに声をかけるが、無情にも俊くんはわたしとの会話を切り自室のドアを開けた。流石にフェイトちゃんの携帯だけあつてドアの開閉の音まで聞こえてくる。

『もしもしなのは……?』

「あ、フェイトちゃん?あのさ俊くんどうしちゃったの?ガークンにその……えっちなことをしようとするなんて。ヴィヴィオのことは釘刺しておいたけど、ガークンはまったくノーマークだったよ」

『わたしだってノーマークだったよ。どこの次元世界にアヒルと初体験を済ませようとする男がいるの。それも私やなのはと一緒に住んでいながら』

そう、そこなんだよね問題は。わたしやフェイトちゃん、少なくともフェイトちゃんは家にいたわけだしフェイトちゃんは女のわたしからみても素敵で可愛がってもらいたいというかなんというか——いけない、わたしまでトリップしそうになった。

「というかフェイトちゃん、俊くん何かした?」

やっぱフェイトちゃんが可愛い以上、俊くんがガークんに初体験をあげるなんて考えられない。というか考えたくない。ガークんに負けるなんて絶対に考えたくない。

フェイトちゃんの息遣いが聞こえてくる。ちよつとためらっているというか、言つていいのかわからないって想いがわたしに伝わってくる。わたしはフェイトちゃんの名前を呼ぶ。フェイトちゃんはそれに反応するように、小さく小さく呟くように、

『……プロポーズされたの』

「……………は?」

『いや、だから俊にプロポーズされたの。えつとね経緯を話すと、俊が私を見てたドラマのセリフを私が言ってる勘違いしてなんかそのままプロポーズしてくれたの。あ、でもでも本人は六課解散のときに私となのはの二人に揃ってプロポーズしたくて……。つまり勘違いフライングした自分が恥ずかしくてガーくんに出そうとして』  
「……………」

携帯が手から滑り落ちる。カツンと携帯が床と触れ合う音が聞こえたが、いまのわたしにはどうでもいいことだった。

『もしもしなのは？』

グイータちゃんわたしの足元に落ちた携帯を拾い、フェイトちゃんとか何か話しをする。

そっかあ……。フェイトちゃんそんなことがあったのかあ……。

『あ！なのはさんだ！なのはさーん！』

『やりましたよなのはさん！なんとかギリギリで受かってました！』

『なのはさーん！』

ティアとスバルがニコニコした笑顔で手を振りながらわたしのほうに向かってくる。流石わたしが鍛えただけやって足が速い。それにしても無事に二人とも合格して

よかったなあ。これで後は筆記だけだね。ティアのほうは筆記は問題ないし、スバルもちやんと勉強してたからよほどのことが無い限り二人ともAランクは確実。

「なのはさーん——」

「うわあああああああああああああああああッ!!」

「ああ!?ティアがなのはさんに殴り飛ばされてトリプルルツツで吹き飛んでいった!?」

「お、落ち着けなのは!?流石にティアが不憫すぎるだろ!」

「うう……。わたしもフライングでもいいからプロポーズされたかったもん！うわああああああああん！」

「ティア!?大丈夫!」

「絶頂……」

駄々っ子になったのはと訳も分からず殴られたティア、そして愛

想笑いを振りまきつつ事態の収束を図ろうとするヴィータ。

より一層の混乱を極めていった。

☆

愛想笑いを振りまきながら、とりあえず昼食休憩のために指定されている場所へと訪れたヴィータ。横には無表情で鬼のように電話をかけ続けているのはと、カウンターを決められたことで絶頂に達したティア、そんなティアを羨ましそうに見つめるスバルに、そんな危ない人物達から守るようにヴィータに手を繋がれているエリオとキャロ。既にヴィータの胃は荒れに荒れている。昇進試験に受かった人や付添でやってきた人達が多数いたため、ヴィータは全員が座れるほどあいているスペースを探しながら足を進める。

どうにかこうにか全員分が座れるスペースを見つけあて、ようやく腰を下ろした。

「よしここらで昼食にするか。ほら、なのはも少しは電話止めろって。あいつの履歴がなのは一色になってるぞ」

「俊くんは更生させないとダメなの。俊くんはわたし以外見えないように魔法かけるのがいいと思うの」

「はいはい、そんなことに魔法使ったら捕まるっつーの。ほら、その俊くんがお前のために作った弁当なんだから食べるぞ」

「むう……だって俊くんってば——」

「でもひよっとこさんらしいですけどね。勘違いでフライングなんて。それでもなのはさんは私のものですけど」

「確かにあの人ボケとバカで塗り固めたような人物だからねー。それとティア、なのはさんは私のものだよ?」

重箱を開け、紙皿とコップを配りながらティアとスバルが視線ファイトを始める。

「でもー……なんか悔しいじゃん。べつに俊くんことは好きじゃないけど、俊くんがフライングでもなんでも他の人にそういったことをするなんて」

ほっぺを膨らませながら拗ねるのはに、この空間にいた全員の胸がきゅんきゅんした。無論、その場にいた男性局員はトイレに駆け込

み、女性局員は鼻息を荒くする。

ある意味での地獄絵図空間にうんざりしながら、ヴィータはなにに声をかける。

「まああれだ。家に帰ってそこらへんは詳しく聞けばいいだろ。それよりいまは昼食だ。お前らもいつまでなのはによだれ垂らしてんだよ」

「うん、そうだよね。帰ったらお話しようとおもう」

「(なんかすまんひよつとこ。変なスイッチいれてしまったかもしれん)」

なのはは一つ頷いて、両手で自分の頬をぺしぺしと叩き気合をいれる。

「よし！いまは教え子の昇進試験、気合いれないと！」

ヴィータに笑顔を見せながらおにぎりを手に取るなのはに、ヴィータも笑顔で応える。ひよつとこが痛い目をみる未来しか見えないがいまはそつとしておくとしよう。

「両手足縛ってベッドにくくりつけて泣きながらわたしに懇願するまで今日は寝させないぞー！」

いまはそつとしておこう。

☆

一方その頃、高町ハラウン家では――

「で、俊ちゃんもう一度いってごらん？」

「えつとその……私こと上矢俊はアヒルに欲情したあげく顔に射精をしてしまいました」

「もう一度」

「……もう勘弁してください」

士郎があわあわと見守る中、俊が桃子とリンデイに苛められていた。

## A, s 28. キミの想い、魔力にのせて

性器のアヒル顔射事件によりリンディと桃子の玩具になっていた俊がついに反論を言い始めた。

「そもそも、なのはやフェイトといった可愛い女の子と一つ屋根の下で生活してるんですよ？普通なんかハプニングとかえっちなイベントとかあるはずじゃないですか。

か。もう19歳だし。なのに俺はそんなハプニングとか起きないんですよ！二人とも起こしてくれないんですよ!!?そりやアヒルで性欲処理しようとも思いますよ!!」

「普通思わないわよ、俊ちゃん」

「……はい」

反論終了！

間髪入れずに答えた桃子に俊は一度頷いてからそつと目元を拭いた。

「いや、でもですね桃子さん。もう10月ですよ10月。俺が性欲お化けで変態の鬼畜野郎なら今頃第一子が誕生している頃ですよ」

「そうねえ……なのはがいなくなってもうそんなに経つのね。早いものね」

「まあ会おうと思えばすぐに会えますから、あんまり実感とか沸かないですよね」

俊の言葉に桃子はうんうんと頷く。しかしその横では、

「フェイトがいない夜があんなにも寂しいなんて……。フェイトを抱きながら寝たり、フェイトにちよつかいだして可愛い声で鳴かせたり、大人の準備練習したり……。フェイトが高校生までは幸せだったのに……」

リンディは一人泣き崩れていた。

「まあまあリンディさん。婿養子の俺が慰めてあげますから」

「そしてフェイトの本命が無職のクズなんて……!」

「リンディさーん、本人が目の前にいますからもう少しオブラートに包んでくださいねー」

流石の俊も獣を思わせるリンデイの眼光に冷や汗を掻く。

「というか俊ちゃん、そろそろ料理再開したほうがいいと思うわよ」

「そうですね。んじゃちよつと失礼して」

そう言つて席を立ちキッチンという自分の持ち場へと戻る俊。桃子はその後を追うように俊にくつつき隣に立った。リンデイはひとしきり呻いた後、フェイトを襲いに行く。

『お母さん、俊の手伝いしてきて。わたしは急遽入った仕事するから』  
『……手伝いしたら襲っていい？』

『やめて』

リンデイの口から鮮血が踊り舞う。

「リンデイさんは下手したらフェイトにヤンデレになりそうですよね」

「リンデイさんフェイトちゃんのこと物凄く可愛がっていたものね。ふふ……可愛い娘がやってきたって嬉しそうに抱きしめてたのをいまでも思いだすわ」

串カツの準備として玉ねぎと豚肉を串にさす桃子は思いだし笑いをしながらそう言った。一方の俊は市販のタレに独自のアレンジを施しながら、続けて話しかける。

「愛し方が尋常じゃなかったですね。まあいまもなんですけど」

定期的な聞こえてくるフェイトの冷たい口調とリンデイの呻きを肴に昔話で盛り上がる。

「そういえば俊ちゃん、今日の試験はいつ終わるのかしら？」

「そうですね……多分あと3時間くらいだと思うんですけど……」

「多分後4時間はかかると思うわよ。例年昇進試験は時間通りには終わらないのが恒例なのよ」

「あ、リンデイさん」

口元の血を拭いながら俊の隣、桃子とは反対方向に陣取つたリンデイ。コップに水道水を注ぎ口を漱ぎながら俊と桃子に説明する。

「昇進試験、あの子たちは確かAランクよね？Aランクはエースの仲間入りだから管理局側も慎重になるのよ。実力はあっても経験不足の役員もいれば、経験だけは一人前だけど実力が伴っていない子もい

るからね。まあその点あの子達は問題ないんじゃないかしら？」

「どうしてですか？」

「だってはやてちゃんの部隊に教導官がなのはちゃんでしょ？それにあの子達は六課でちゃんと経験を積んで——」

「ないっすよ。俺の知る限りでは現地で経験したのは一方的に犯罪者をボコったはやてを見て、はやてには逆らわないことを肝に命じたくらいだと思います」

「……え？経験とか積んでないの？ほら、犯罪者を確保とか、ロストロギアの確保とか」

「ゲームしたり教導したりレクレーションしたりケーキ食べたり教導したりお喋りしたりですけど」

「……そう」

悟りを開いたかのごとく優しい笑みを浮かべるリンディだった。

ちなみにその頃士郎は——

『これがなのはママでこっちがフェイトママ！』

『コレハガークン！……ソレトパパ』

『うちの娘はいつの間に地球外生命体になったんだ……。そして何故ガークンは俊君で頬を赤らめたのか』

ヴィヴィオを膝にのせたまま、ヴィヴィオの前衛的な家族スケッチに困惑していた。

☆

俊と桃子とリンディはキッチンに三人並んで料理を作っていた。

「大体の下準備は終わりましたかね」

「ええそうね。後はその時々で大丈夫だと思うわ。お疲れ様俊ちゃん」

「いえ、これが俺の仕事ですから」

時刻は既に4:30を回っていた。壁時計でその時刻を俊が確認すると同時にキッチンに一人の来客が。金髪をツーサイドアップにしているフェイトが私服姿にオレンジ

フレームの伊達メガネをかけて訪れてきた。

「ふう……ようやく仕事終わったよお。急に入ってくるんだから参っ

ちやう。ごめんね俊、折角の二人つきりでの料理だったのに……」

「いやそれは問題ないよフェイト。ただ横で俺にボディーブローいれてるフェイトの母親をどうにかしてほしいんだけど」

メコオツ！メコオツ！

尋常じやない音が、決して人体から発せられてはいけない音が俊の人体から現在聞こえてくる。

「お母さんおいで」

「きやうんきやうんっ！」

40代熟女の常軌を逸した行動を垣間見た瞬間である。

犬耳と尻尾でもついているのかと疑いたくなるほどのリンデイの愛情表現に、流石のフェイトも苦笑する。

「お、お母さん俊が見てるってば」

「……リンデイ×フェイト。まあこれもありっちゃありだな」

「俊戻ってきて!?!」

頬を摺り寄せてくるリンデイを強引に剥がしながらフェイトはキッチンに綺麗整頓されて並べられている料理の下準備の数々に目を奪われた。

「うわー！これすごい！これ全部俊が作ったの!?!」

「いや、午後からは桃子さんとリンデイさんにも手伝ってもらったよ。

流石桃子さんとリンデイさんだよ。二人とも俺より手際いいし勉強になった」

「ふふ、俊ちゃんに料理を教えたのは誰だか忘れたのかしら？」

「ははっほんとありがとうございます」

「俊ちゃんにはなのはのお嫁さんになってもらう必要があるんだからね」

「またまた桃子さん。それをいうなら婿さんですよ」

「え？」

「え？」

顔を見合わせる桃子と俊。どちらもおかしいなと首を傾げる。

「まあいいや。それより紅茶飲みます？フェイトも丁度仕事が終わったみたいですし、こっちも下準備は大体終わりましたから、なのは達



の連絡がくるまでゆっくりしておきましょうよ」

そう言つて茶葉とポットを戸棚から取り出す俊。それに合わせる形でフェイトは違う場所にいる士郎・ヴィヴィオ・シャマル・ガークンにも紅茶を飲むか聞きに行く。

『紅茶飲む人―？』

『ヴィヴィオあまいのがいい！』

『ガークンモ！』

『それじゃヴィヴィオとガークンはミルクティーにしようね』

フェイトの声と共にヴィヴィオとガークンの元気のよい返事が俊達がいるキツチンにも聞こえてくる。とつとつと、と可愛らしい足音を奏でながらフェイトは俊の元

へと戻ってきた。

「俊、ヴィヴィオとガークンの分はミルクティーでお願い。士郎さんとシャマルは私達のと一緒で」

「はいよー」

フェイトのオーダーを受けてさっそく取り掛かる俊。そんな俊とフェイトを桃子は優しい目で、リンディは暗殺者の目で見守っていた。

☆

周囲の騒々しきとは裏腹にスバルとティアナがいる空間は無音が支配していた。正確にいうのならばスバルとティアナには周囲の雑音など耳に入っていないかった。なんせ自分達の手元は――Aランク昇任を証拠づける一枚の紙を掴んでいたのだから。

「ほんとこれで落ちてたらどうしようかと思っていましたよ……」

「いやーほんとこの子達をどうするかで揉めたのよー！経験はないくせに実力は他を圧倒するほどの力を見せたんだから。普通、実力と経験どっちも兼ね備えてないと昇任は認めないんだけど……この子達の場合エースになる素質は十分にあつたのでそれを考慮した結果こういう判定を下したわけ。渋る重役を黙らせるの大変だったんだかねー！」

「いえもうなんとお礼をしたらいいのでしょうか……」

「まあ色んな局員を直で見て指導している教導官の意見だったからね。きつとなのはがあとここで発言したら二つ言葉で承認は決まってたわよ。あ、そうそう。なのはの指導に半年間ついてくれたって実績も考慮されてたわよ」

「え、なんですかその考慮のされかた。まるでわたしの教導がきついみたいなの——」

「え……自覚なしとか流石『血飛沫祭りなのはちゃん』って呼ばれるだけあるわ」

「まってください!?!なんなんですかその二つ名!?!誰が付けたんですかその二つ名!?!」

バツトでどすどすなのはちゃん。憤慨するの巻。

「あ、でもティアアナちゃんのほうは筆記満点だったよ。ティアアナちゃんえらいね、ちゃんと勉強してたんだ」

「えへへ……私執務官になるのが夢なのでそのために毎日勉強だけにしてきましたので。11月にある執務官試験も受けるつもりです!」

「へー執務官か。頑張ってるね」

「はい!」

大きく頷くティアに笑顔を見せながら、滅びの爆裂疾風弾はなののはの服の裾を掴み自分の元に引き寄せる。

そしてなのはにだけ聞こえる小さな声で、

「いまのままじゃ落ちるよ。しっかり執務官用のプログラム組んでやらせること。それと勉強のほうも力入れたほうがいいわよ。一度模擬試験やらせてみるといいかも。あの子の弱点が見えてくると思うから」

「そ、そんなに危ないですか?」

「内側からは近すぎて見えないかもしれないけど、外側からははつきりと分かるわよ」

「……わかりました。ヴィータちゃんとはやてちゃんとフェイトちゃんに相談して対策を練ってみます」

なのははしっかりと頷く。自分にとっても一番長く付き合ってきた部下だ。可愛くないわけがない。なのはとてそんな可愛い部下の

涙なんて見たくない。滅びの爆裂疾風弾を見つめるなのはの目は真剣そのものだった。

「ま、それはそれとして今日はゆっくり休みなさい。なのは今日一日此処にきてからずっと肩に力がはいつたままの状態だったわよ」

「えっ?」

そう言われてようやくなのはも気づいた。自分の両肩に力がこもっていたことを。

何度も言うが、高町なのはにとってスバルとティアナは初めて長期期間受け持った教え子だ。教導官というのは色んなところを飛び回り、技能を教えていく存在。そこに情を生み出すまでの時間は与えられないことがほとんどである。そんな中、友人である八神はやてからの招待で配属することになったこの六課で受け持った新人達との共有時間はおよそ半年間だ。半年間もの間、自分が一から教え育てていったのがこのスバルとティアナだ。

可愛くないわけがない。

心配にならないわけがない。

なのは知らず知らずのうちに緊張していままでずっと肩に力はいつていたのだ。

なのはの緊張の糸が切れた瞬間だった。

腰が砕けるようにすとんと女の子座りするなのはに、ティアナとスバルはなのはのほうを向きながら喜びの声をあげた。

「やりましたよなのはさん！私Aランクです！エースの仲間入りですよ！」

「ほんとやりましたよなのはさん！なのはさんがずっと面倒みてくれたおかげです！」

喜びの舞を踊りながら嬉しい報告をする二人に、なのはは女の子座りで下を向き俯いたまま声をあげようとしなない。

「なのはさん……?」

そんななのはに不安を覚えたのか、二人は喜びの舞を踊るのを止めるのはの目線に合わせようとしやがみこむ。

しやがみこんでようやくなのはのいまの状態を理解した。

しやがみこんで目線を合わせて、ようやくわかるなのはの表情。  
しやがみこんで目線を合わせて、ようやくわかるなのはの気持ち。  
「み、みるのきんしい……！じょうかん、めいれい、なんだからあ……  
！」

ぼろぼろと零れ落ちる涙を拭いながら、なのはそう二人に命じた。  
自分のハンカチは既に涙で濡れて使い物にならなくなっていた。  
そんななのはにそっと滅びの爆裂疾風弾はハンカチを差し出す。な  
のはの頭を撫でながら、優しい声色でなのはを労わった。

「よく頑張ったね、なのは。お疲れ様」

「うわああああああああん！」

教導官だつて人間で、好きで厳しい指導なんてしてるわけじゃない。  
いつもいつも教導する側というのは憎まれ口を叩かれるのが世  
の常である。そんな世界の中で管理局でも笑顔で酷い教導をすると  
恐れられているなのはの教導を半年間ずっと頑張ってきてくれたの  
だ。ずっと信じてついてきてくれたのだ。

スバルとティアナが感じている嬉しさは、なのはだつて感じている  
のだ。

そつと、なのはの体を抱きしめる二人の人物がいた。

「いままでありがとうございます。私、なのはさんの教導だからこそ  
至近距離からの魔力弾でも耐えることができましたし、あのおかげで  
咄嗟の判断能力と思考処理が早くなりました」

「私も、なのはさんの防壁の中での無尽蔵ピンボールのおかげで周囲  
を見渡す目とどんな時でもバランス崩さない体幹を身につけること  
ができました」

「ありがとうございます」

一度立ってから深く深く最敬礼をするスバルとティアナ。いつも  
はふざけてばつかの二人がこんなことをするものだから、ようやく止  
まりかけていたなのはの涙のダムがまたもや決壊する。

言葉さえも発することができないほど感極まっている状況に、はや  
てへの報告をして帰ってきたヴィータが自身の携帯を差し出した。

それにクエッションマークを浮かべながら受け取り耳を当てるな

のは。

その声はいつもより穏やかなのはの耳へと伝わった。

『よおなのは。ロヴィータから聞いたよ。スバティア受かったんだって？よく頑張ったな、なのは』

「俊くん……」

『あーあんまり喋らないほうがいいと思うぞ。お前の場合、一回泣き出したら止まんないことが多いからさ。それにしてもなのは、半年間よく頑張ってきたな』

「うん……。なのはね、よくがんばったとおもう……」

『ああよくがんばったさ。これ以上ないほどよく頑張った。毎回飽きられないように、単調にならないように、色んな状態から学んで考えが凝り固まらないように、柔軟な発想ができるようにパターンを定着化させないように教導プログラム組むの大変だったよな。ほんと、よくがんばったよ』

電話越しに優しい優しい声が聞こえてくる。全てお見通しかのごとく、まるで自分の心を見透かされているかのごとく語られてくる内容に、なのはは黙って頷きながら聞いていた。

『嫌われるのが怖かっただろ？自分の教導の真意がちゃんと理解できているか、ちゃんと伝わっているか不安だっただろ？こういうのは言葉で言ったところで本当に理解しないと意味がないからな。上辺だけ理解されても困るし。でも、ちゃんと伝わってるよ、なのはの思い。ちゃんと聞こえてるよ、なのはの心の声』

『なのはが放つ魔法にのって、ちゃんと新人達に届いてるよ』

「へー、いい男じゃん。キザったらしくて多少キモいけど、ちゃんとなのはのこと想ってくれてるいい子なのね。ふむ……合格」

隣でずっと俊の話しを聞いていた滅びの爆裂疾風弾は満足したように頷いてみせた。

「うん……うん……。ありがとう俊くん……。あのね俊くん、なのはもいいたいことがあるの……」

ほそほそと電話口に向かって喋るなのは。かと思うと、携帯の通話ボタンを切って携帯をヴィータに手渡しした。

「いいのかなのは？もうちょっと話してもいいんだぞ？」

「ん、いいの。いつまでもここに居るわけにはいかないし、それに言いたいことは言えたから」

なのははその言葉通り、目元に泣き痕を見せながらも晴れ晴れとした笑顔を早くも見せていた。切り替えは重要であることをちやんと理解している。

「それじゃ帰るか。いまはやてに連絡したら迎えに来るってさ。フェイトも来てくれるってさ。家ではあいつがご馳走を作ってるみたいだぞ」

「まじですか!？」

「まじだ」

ご馳走というキーワードに敏感に反応するスバルとティアナは浮かれてはしやぎまくる。ヴィータをもちあげ高い高いをし、ヴィータの踵落としによって撃沈される。

「それじゃこつちも帰りますかね。丁度旦那も迎えにきてくれたし。じゃあねなのは、今日は愛しの俊君に甘えなさいよ」

「べ、べつに俊くんのことなんてなんともおもってません!でもまあ……俊くんがわたしに甘えたいっていうのなら考えてあげてもいいかな……」

頬を赤くしながら体をくねくねさせてそういうなのはに滅びの爆裂疾風弾は豪快に笑い声をあげながら迎えにきていた旦那の元へと駆けて行った。

丁度それと入れ替わる形でなのは達の元へと駆け寄ってくる人物が三人。

フェイトとはやてとシグナムだ。

「二人ともおめでとー!」

はやてとフェイトの喜び爆発で、場は一層賑やかになったという。

☆

フェイトがなのは達の迎えにいったのと入れ替えに、俊達の元にもはやての願いで先に高町ハラオウン家に到着している者がいた。

人間よりも小さく、まるでお人形のような出で立ちの女の子。今日はちよつとおめかしをしているのかロリータファッション風のドレスを着ている。

その女の子はいま現在、5歳の女兒の好奇心な瞳に晒されながら困惑を極めていた。

「パパ！ようせいさんがいる！ヴィヴィオのめのまえにようせいさんがいるよ!?!」

「で、ですからリインは妖精さんじゃないですってば〜!」

俊に会いたくないあまり、玄関からではなく窓からの不法侵入を試みたのが仇となった。

## A, s 29. ペろペろさん

前回までのあらすじ

ヴィヴィオが妖精さんを見つけた。以上

☆

高町ハラオウン家が俄かに活気づき慌ただしくなっていくのを5歳であるヴィヴィオも肌で感じ取っていた。パパである俊が忙しくキツチンとリビングと居間を往復し、大好きなのはママのパパである土郎が背の高さを生かして家の飾りつけを行っていく。

桃子とリンデイが指示を飛ばし、シャマルが盛大に塩コショウを撒き散らし阿鼻叫喚の地獄絵図が生まれていく。

そんな状況の中、ヴィヴィオはガーくんの羽に守られながら庭に面した窓へと連れられ、ガーくんによって開けられた窓から新鮮な空気を肺いっぱい吸い込んだ。

口の形を変えて何か喋ろうとするヴィヴィオに、ガーくんは自身の羽で優しく塞ぐ。頭を横に振っていまは喋るべきではないとヴィヴィオに伝える。

ヴィヴィオもそれはなんとなく理解できたのか、人差し指を口元に当て『しー』という動作をした。

大の大人が5歳の子どもには見せられないような悲惨な状態になっている最中、ヴィヴィオの耳には庭側からの小さな小さな声をしつかりと捉えていた。聞こえるはずのない方向から聞こえるはずのない可愛らしい声が聞こえてくる。そんな状況にヴィヴィオは首を傾げながら振り向くと――

「ふう……やっぱりつかれますね。でもペろペろさんに会わないためにはこれくらいしないとです！」

そこには妖精が可愛らしい甘ロリファクションで浮遊していた。

「それではお庭から失礼して……。あっ……」

甘ロリファクションの妖精は抜き足差し足（浮遊）で静かに高町ハラオウン家に不法侵入を成功させる。と、そこでようやく妖精は気づく。自分を見つめている5歳の女の子の視線に。キラキラと瞳を輝



かせながら好奇心な視線を向けていることに。

「あ、それではリインはここらへんで退散しますですー……」

ロリータファッションのスカートの端をちよこつとだけ摘まんで可愛らしくお辞儀する妖精は、そのまま笑顔を保ちつつそそくさと退散を試みる――が、ヴィヴィオ

はその隙に見逃していなかった。

「ガークン！」

「オウトモ！」

ヴィヴィオの掛け声とともにガークンは大きな口を開けて妖精をパクリと飲み込んだ。

『ぎゃあああああああ!? こ、怖いです!? 真っ暗です!? はやてちやーン助けてくださいーい!?!』

ガークンの口の中で暗い怖いと泣き喚くりイン。たまらず口を開けるガークン。

「ぶはっーうう……怖かったです……。いったいなんなんですか、いまのは」

慌ててガークンの口元から這い出てくるリイン。汗をかきながら息を整えるリインに、ガークンは無表情かつ興味津々の眼差しで見つめていた。

「……」ジーツ

「うっ……! な、なんなんですか……」

「……………」ジーツ

無表情を保ちつつじりじりと詰め寄ってくるガークんに、リインは恐怖を覚えたのかゆっくりとゆっくりと後退しはじめる。

そんなガークんにヴィヴィオは頭を撫でたのち、両指の人差し指でバツテンを作り、

「ガークンたべちゃめっ!」

そうガークンを制した。

「た、たべる!? リインを食べる気だったんですか!?!」

「ガークンアヒルだから」

「……リインはじめてしりました……。アヒルはデバイスをたべるん

ですね……」

戦慄したのか顔を青ざめるリイン、突っ込み役が不在のため、5歳の女兒と妖精の会話はどんどんおかしな方向に進みそうになっていく。

室内の慌ただしい空間の中にぽっかり浮かんでいる不思議空間。ガーくんの頭を撫でながらヴィヴィオはリインに触ろうと手を伸ばす。一瞬身構えるリインだったが、すぐに緊張の輪を解き自らヴィヴィオの顔の前に近づいていく。自分の目の前にやってきた甘ロリ妖精をしげしげと観察し、そつと壊れないように優しく抱きしめるヴィヴィオ。

ヴィヴィオの胸の中にいるリインは抱きしめられながら顔を上に向けヴィヴィオを見つめる。

「そういえばヴィヴィオちゃんとは初めましてですね。えつとですね、リインははやてちゃんのデバイスになります。普段はぺろぺろさんが近くにいますのではやてち

やんのポケットとか胸の谷間なんか隠れてますので、こうしてお会いするのははじめてです！」

華やかな笑顔を見せるリインにヴィヴィオは疑問符を浮かべながらこう言った。

「デバイスつてなに？」

ヴィヴィオが此処にきてからの半年間、ヴィヴィオの耳にデバイスという単語はほとんど聞いていいほど入ってこなかったので、ヴィヴィオがそう思うのは当然だ

といえよう。ママであるのはやフェイトは常にデバイスとなるレイジングハート、バルディッシュを所持しているのだがヴィヴィオはそれをアクセサリだと勘違いしている。

「そ、そうですね……デバイスというのはお友達という感じでしょうか」

「なるほどー。じゃあヴィヴィオとようせいさんもデバイス？」

「へ?どうですか?」

「ヴィヴィオとようせいさんはもうおともだちだよー!」

「ダヨー！」

リインを力いっぱい抱きしめるヴィヴィオ。それに乗じるようにガークンも羽でリインを抱きしめるフリをする。ヴィヴィオはすっかりこの小さな小さな妖精を気に入ったようだ。確かにヴィヴィオには物珍しいだろう。なんせリインははたから見たら、まんま妖精そのものなのだから。5歳の女の子には夢が膨らむ現実だ。

リインを気に入っているその証拠に先程からヴィヴィオはリインを決して離そうとしていない。

ヴィヴィオにお友達宣言をされたリインは白雪のような肌を赤くさせ、ふいっとそっぽを向いて、

「これははやてちゃんとヴィータちゃんが可愛いと念を押すのも理解できますね……」

そうコメントした。

リインはすっかりヴィヴィオワールドに引き込まれていったのだ。

☆

はやてちゃんから、なのはさんとフェイトさんの元に5歳の可愛らしい女の子がやってきたという話を聞いたときは頭が混乱しました。

そしてそれと同時にリインは戦慄を覚えました。

あのお二人の元に5歳の女の子がやってきたということは、あのペロペロさんの家に5歳の女の子がやってきたのとイコールで繋がってしまうのです。

ペロペロさんに5歳の可愛らしい女の子を与えるなんて、お肉の園にハイエナを放り込むようなもの。

これをきつかけにペロペロさんとお二人の仲が引き裂かれ、はやてちゃんもペロペロさんのことを考え直してくれると思っていたのですが――

「パパ？ パパのどこいききたいの？ じゃあヴィヴィオといっしょにいく？ パパはねー、すごーくかっこよくてやさしいよ！ ヴィヴィオだーいすきー！ あ、でもなのはママとフェイトママもだいすきー！ それにガークンもー！」

……ペロペロさん意外と頑張っているみたいですね。

はやてちゃんは主観が入りすぎてましたし、ヴィータちゃんは元々ペロペロさんのことどーでもよさそうでしたからあまりあてにできませんでしたし。

でもまあリインはペロペロさんのこと大嫌いですけどね。

それはそうとして、リインははやてちゃんの伝言をはやくペロペロさんに伝えないといけません。

「ヴィヴィオちゃん、パパはどこにいますか？」

「パパ？パパならねー……あ！あそこにいるよ！」

ヴィヴィオちゃんが指をさす方向に確かにペロペロさんは大皿をもって移動していた。

「パパにようじがあるの？」

「はい、リインはパパさんに用事があるのです」

「そっかー。じゃあヴィヴィオがよんできてあげる！」

「あ、まっってくださいー！」

「お？」

ペロペロさんをおぼろげにするヴィヴィオちゃんを制して、リインはヴィヴィオちゃんの後ろに隠れる形で話しかける。

「実はリインは妖精さんなので、ヴィヴィオちゃんやガーくんみたいないい子にしか見えない存在なのです。ですから、ヴィヴィオちゃんがパパさんをおぼろげに呼んでくれても

リインとパパさんは会話をすることができないのですよ……」

「ようせいさんってたいへんなんだね……」

悲しそうな声色を浮かべるヴィヴィオちゃん。うう……リインの胸がちよつとだけ痛みます。

「ですからリインの代わりにヴィヴィオちゃんがリインの話す内容をペロペロさんに伝えてください。これはヴィヴィオちゃんにしかできない仕事ですけど……できますか？」

「うん！おもしろそう！まかせてー！」

か、間髪入れずに返答してきますね……。

ヴィヴィオちゃんの背後に憑くリイン。ヴィヴィオちゃんはアヒルさんを引きつれてとことこ可愛らしい足取りでペロペロさんに

近づく。

ペロペロさんはそれに気づいたのか、笑顔を見せた後ちよつとぼつが悪そうな顔でヴィヴィオちゃんの頭を撫でる。

「ああ……ごめんねヴィヴィオ。ヴィヴィオの相手ができなくて。ちよつとシャマル先生という地雷がここにきて爆裂粉碎して。もうすぐ終わるから、終わったらパパと一緒にアニメみような」

「うんーヴィヴィオまつてるねー!」

笑顔で答えるヴィヴィオちゃんに、足を折り曲げヴィヴィオちゃん目の視線に合わせて喋るペロペロさん。これは断じてペロペロさんじゃないです。こんなペロペロさんリインは知らないです。

ペロペロさんはヴィヴィオちゃんに両手を広げておいでと囁く。

しかしいまのヴィヴィオちゃんはリインのメッセンジャー。いまはペロペロさんに抱っこされるより大事なことが――

「わーいー!」

えっ!?

ちよ、ちよつと!?ヴィヴィオちゃんリインのメッセンジャー役は!?!  
なんであんなに自信満々に頷いたんですか!?

ペロペロさんに抱っこされるヴィヴィオちゃんの後ろでリインは隠れてやり過ぎそうと努力しながら、そう思う。

ふと体が軽くなり、ヴィヴィオちゃんの後ろ姿がさきほどより遠くに見えます。あれ?どうしてでしょうか?

はて?リインはヴィヴィオちゃんと離れている。ということは誰かからの手によって、リインとヴィヴィオちゃんは離されたということになりますね。……ではいったい誰から?

一人だけ心当たりのある人物に思い当たり、自分でもびっくりするくらいの嫌な顔でゆっくりと後ろを振り向く。

そこには、ペロペロさんの笑顔がありました。

「ようリイン。ヴィヴィオと遊んでくれてサンキューな」

パーン

( ☒ ☒ )

( ☾ ☆ ) ( ☽ )

「え!?!俺なんでいまビンタされたの!?!何も悪いこといってないよね!?!」

「ご、ごめんなさいです!あまりのキモさについて手が……」

「イケメンたる俺になんたる仕打ち」

ペロペロさんは相変わらざるきもいです。かつこつけ野郎です。

ぱっとペロペロさんの手から離されたリインはヴィヴィオちゃんの横で浮遊します。

「それにしても久しぶりだなリイン。六課設立からなにしてたんだ?」

「リインは基本ずつとはやてちゃんのポケットか、胸の谷間で待機してました。でもすぐにうとうとしちゃってはやてちゃんが仕事中はほとんど寝てました。後は家で自分の服を作成したりとか」

「はやての谷間でおねんねだと……羨ましい……。俺もおっぱい枕を経験してみてえ。ところで、その自分の服を作ってるのなら、その服もリインお手製か?」

「はい!はやてちゃんに手伝ってもらいながら二人で作ったんですよ!」

「おおいいいセンス」

くるくると回るリインにペロペロさんが賞賛の拍手を送ります。まあ当然ですね。なんてったってリインとはやてちゃんの二人で作ったのですから。

「ところでリイン。お前一体になににきたんだ?はやてと一緒にじゃないのか?」

「すぐ近くまでは一緒に車の中にいたんですけど、はやてちゃんは新人達を迎えに行っちゃいました。それと引き換えにリインは伝言を預かってこちらに来たのです」

「なるほど。それで伝言は?」

「もう忘れてしまいました」

違うんです。此処にくる直前までリインはちゃんと覚えていたんです。でもアヒルに食べられたりヴィヴィオちゃんと話してたりしているうちに記憶からなくなっていくたんです。リインは悪くない

です。悪いのはリインではなく世界です。

ペロペロさんはそつとリインのことを抱きしめて、優しく背中を叩いた。

「相変わらずの萌え萌えポンコツデバイスで安心したぞリイン」

「リインはポンコツなんかじゃないですよー！ちよつとだけ物忘れが激しいだけですよー！」

むかつきますよー！ちよつとはやてちゃんの伝言を忘れたからといってポンコツデバイス扱いなんて！

「まあまあ。リインは俺らでいうところのなのはポジションなんだから。ほら、はやても前に言ってただろ？『なのはちゃんとリインはポンコツ萌えやおもうんやけど』って」

「うう……はやてちゃんまで……」

がつくりと肩に石が乗っかってきた感じがします。なんかどつと疲れが出てきました。

そんなリインにヴィヴィオちゃんだけはよしよしと頭を撫でてくれます。うう……ヴィータちゃんやんがヴィヴィオちゃんのことを可愛がるのが分かる気がします。

「まあはやての伝言なら俺が電話で聞いとくからいいさ。リインも此処までくるの大変だったろ？ヴィヴィオと一緒にテレビでも見ておいてくれよ。カルピスもってくるからさ」

「いえリインもお手伝いしますよ。なんか大変そうですし」

「あーならシャマル先生を頼む」

『シャマルちゃん包丁を持つのはやめるんだ！取り返しのつかない事態になるぞー！』

『包丁を洗おうとただけなんですけど!?!』

「シャマル先生、頑張れば頑張ろうとするほど普段の力を発揮できないタイプだから。しかもこういった行事に局地的に」

「普段は優しくて落ち着いてて八神家でもしっかり者の位置にいるんですけどねー」

まあそういうことならしょうがないです。リインがヴィヴィオちゃんとシャマルのお姉さんをしてあげましょう。

ヴィヴィオちゃんの手を引いてキッチンにいるシャマルを迎えに行きます。

「シャマルー、リインが迎えにきましたよー。ヴィヴィオちゃんと一緒にテレビみましょー」

キッチンに入りながらいるであろうシャマルに話しかける。

それにしても……はやてちゃんの伝言ってどんな内容でしたっけ？

☆

「ようせいさんビスコを食べる？ビスコを食べるとつよくなるんだよ？」

「リインは強くならなくていいですけどビスコは好きなのでもらいま  
す」

「はい、あーん」

「あーん」

ヴィヴィオちゃんは小さいリインのためにビスコを半分に分り、片割れをリインの口にもってきます。ビスコはその形状から割るという行為をするとカスがぼろぼろと落ちるのですが、アヒルさんが下に落ち

る前に袋で全部回収しちゃいます。現代のアヒルさんはすごいです。

折角のヴィヴィオちゃんの好意なのでリインはそれに逆らうこともせず口をあけてビスコを食べます。さくさくとしたビスケットと中にある甘いクリームが口の中いっぱい広がってリインを幸せにしてくれます。

「はあ……ビスコはおいしいですね」

「ねー。ガーくんもシャマルせんせいもたべる？」

「タベル！」

「じゃあお言葉に甘えて、一つだけ」

もう片割れのビスコを自分の口に入れて、新しいビスコを一つずつ取出しピリピリと破いて上げさせてあげる。これを自然体でやってしまうところが子どもらしいです。大人になってもこんなことを自然体でやってしまうのなら第二のなのはさん誕生です。



カランつとテーブルに置いてあるカルピスグラスから氷が遊ぶ音が聞こえてきます。

いまリインはヴィヴィオちゃんのお膝の上で、テーブルの上に置いてある料理の壁によって全く見えないテレビを鑑賞中です。両脇にはそれぞれアヒルさんとシヤマルが待機しています。

アヒルさんはヴィヴィオちゃんに頭を撫でられながらもぐもぐと大人しくビスコを食べてます。

……意外とアヒルって近くでみると愛嬌があるんですね。咀嚼してるところとか、ヴィヴィオちゃんに頭を撫でられて嬉しそうに目を細めている姿とか可愛いです。

ヴィヴィオちゃんとリイン、シヤマルにアヒルさんが大人しくテレビを見ている横に若干疲れをにじませながらペロペロさんが腰を下ろしてきました。

「いやいやそんなに身構えるなよリイン。何もしないってば」

「ペロペロさんはそういういながらリインにえっちなことを沢山してきましたからもう信用できません。一度落ちた信用を回復させるのがどれほど難しいことなのか身をもって体験してください」

「可愛い顔して言うことは恐ろしいんだよなあお前って」

ため息をつくペロペロさん。

「その点、ヴィヴィオは可愛い顔して中身は天使だからなー！ヴィヴィオは俺の理想郷だもんなー！」

「ヴィヴィオよくわかんないけどパパはだいすきだよ？」

5歳の子に理想郷なんていつても理解できませんってば。

ヴィヴィオちゃんを膝にのせて抱きしめるペロペロさん。ペロペロさんに場所を譲ったアヒルさんはペロペロさんの頭に移動しちやいました。

ヴィヴィオちゃんも抱かれ慣れているのか、とくに拒絶することなくペロペロさんのきのままに抱かれ続けます。ペロペロさん、さりげなくリインも抱こうとするのはやめてください。

リインに差し出される指を叩き落としていると、ペロペロさんがヴィヴィオちゃんに話しをもちかけてきました。

「ヴィヴィオ、リンデイさんと桃子さんが一緒に飾りつけしたいってさ。もう危ないことはパパ達で終わらせたし、安全だから大丈夫なんだけど飾りつけしてみるか？」

「ほんと（\*。▽。\*）!?ヴィヴィオもしていいの!？」

「ああ勿論だ。ヴィヴィオがちゃんといい子にしてたからな。ほら行っておいで」

「わーいー!ようせいさんいくよ!ガーくんも!」

「え!?!ちよ!?!リインはゆっくり——」

小さいゆえに逃げることもできず、ヴィヴィオちゃんに抱かれたままリインはドナドナされていくのでした。

まあ……ヴィヴィオちゃんが嬉しそうに桃子さんとリンデイさんと飾りつけをしていたので良しとしましょう。

A, s30. ようせいさん目視できる人多発警報

桃子さんとリンディさんとシャマル先生とヴィヴィオとリインが舌でキャンディーを転がしながら遊んでいると、家のインターホンが鳴った。既に飾りは終わっており、料理も運び終えている。後はなのは達の帰りを待つのみだったため、女の子組（熟女含み）は我先にと玄関へと向かっていった。

俺も行きませんか。

女の子組（熟女含み）の後を追う形で俺も玄関へと向かう。丁度ヴィヴィオが玄関の鍵を開けるところだったようだ。

ガチャリと開いた玄関から、ウサギのような目をしたなのはが顔を覗かせた。

「ただいまー！ヴィヴィオ！」

「なのはママだ！おかえりー！」

「わふー！」

ひよこつと出てきたなのはを確認しジャンプで抱きつくヴィヴィオ。なのはもヴィヴィオをしつかりと受け止めながら頭を撫でる。

「おかえりなさいなのは」

「あつ！おかーさん！ただいまー。なのはね、今日はすごくがんばったよ？」

「ええ知ってるわよ。えらいわね」

なのはがヴィヴィオにそうしたように、桃子さんがなのはの頭を撫でながら抱きしめた。猫のように嬉しそうに目を細めるなのは。後ろでは士郎さんが指をくわえて羨ましそうに見てる。

ひとしきり桃子さんに愛でられたのはは、後ろで指をくわえてみていた士郎さんに気づいたのか、

「あ、お父さんもきてたの？ただいまー！」

とてとてと駆け寄ってきた。嬉しそうなのはの頭を撫でる士郎さん。士郎さん物凄く幸せそうだ。

そんななのはを皮切りに続々と家の中へと遠征組が帰ってきた。ちよつと疲れたような表情のはやてやこちらは結構グロッキー気

味なエリオとキャロ。……なんかほとんど疲れてるな。

「フェイト！ママの胸に飛び込んできてもいいのよ!?ほら、カモーン!!」

「あ、遠慮します」

フェイトはそこまで疲れていないのか、出かけてきたまんまの顔色で華麗にリンデイさんの誘いを断った。リンデイさんあまりのショックに服脱ぎだしたぞ。

「ヴィヴィオ、ちよつとリンデイさんに抱きついてきなさい。ほんとはパパが抱きつきたいけどそんなことしたら後でフェイトママに殺されかねないから」

「俊くん、そんなことしたらまずリンデイさんに殺されるでしょ」

そうともいう。

「うんわかった！ヴィヴィオがんばる！」

なのはの胸に顔を置いてぬくもりを感じていたヴィヴィオは、俺の申し出を快く快諾し両の拳を握ってガッツポーズをした後リンデイさんのほうに向かっていった。ガーくんも同行している。

さて……ヴィヴィオはどうでるのか。

「よしよしリンデイメッシュユさん。げんきだしてね?」

かわいい！めっちゃかわいい！

隣にいたなのはと互いに握手を交わす。そしてそのままユニフォーム交換に入ろうとしたけどそこは真顔で首を横に振られたから諦めよう。

「ヴィヴィオちゃん……。……もう一度子育て始めようかしら。今度はママのことを愛しすぎておかしくなるくらいの子具合に……。」「リンデイさんに抱きつくヴィヴィオを抱き寄せながら不穏なことを言うリンデイさん。もうそろそろブラが露わになるな……。……」

「はいはい。もう十分すぎるほど子育てしたでしょ。もういい歳した大人なんだから止めてもみつともない。それにブラが見えるよ。俊に毒でしょ」

「目がアーツ!?目がアーツ!?」

「大丈夫だよフェイトちゃん。俊くんの目はわたしが守ったから!」

「いやそれ逆に視力が……」

痛い痛いよ目ん玉痛いよ!?!なんでなのはは躊躇いなく俺の目ん玉突けるんだ!?

「私母さんのこと大好きで愛してるつもりだったんだけどなあ……」

小さく呟くフェイト。しかし音量に反してその言葉はこの場にいる全員に聞こえていたらしく、一瞬場が静まりかけた。その瞬間、リンデイさんの服が弾け飛び、涙を流しながらリンデイさんはフェイトをきつくきつく抱きしめた。

「ごめんねフェイト!ほんとごめんね!ママそんなつもりじゃなかったの!ママもフェイトのこと愛してるわよ!ほんと結婚したいくらい!ほんとフェイトの全てを自分色に染めたいくらいにフェイトのこと愛してるの!ほんとよ!?!」

「はいはい知ってるから。母さんの気持ちは重すぎて痛いくらいだから。ちよつと遊んだだけだよ」

ふふふと笑うフェイト。

「あーもう!可愛い!結婚しましょうフェイト!」

「あ、遠慮します」

「ジーザス!!」

テンション高いなりンデイさん……。よつぽどフェイトと離れて辛かったんだらうな。

「うう……それにしてもいまだに目が見えん……」

そんな俺の服を誰かがちよいちよいと引っ張る感覚。引っ張られる力の方向からしてこれは……小さい女の子だな。ということはヴィヴィオだらう。

そう結論付けた俺はゆっくりと腰をおとし、目の前にいるであろうヴィヴィオをそつと抱きかかえた。頭を撫でながら耳をはむはむする。ああ……パパって最高。

そうしているとようやく視力が回復したのだらう。だんだんと霞む目がぼんやりからしつかりへと視力の変化を促す。ほら、これですぐったそうに笑うヴィヴィオの顔が見えるぞー。

ロリータファッションに身を包み、殺意の波動に目覚めたロヴィー

夕ちゃんが俺に抱っこされていた。

「てめエ……あたしを抱っこするとはいい度胸してるじゃねえか……！」

俺は無言のままロヴィータちゃんをはやてに手渡し脱兎のごとく料理が並んでいる部屋へと引つ込んでいった。

『てめえ逃げんなボケナスッ！』

『まあまあヴィータ。俊も悪気があってやったんやないし。許してやりーよ』

『だってあいつ耳をはむはむして——』

『はいはいそれじゃわたしがはむはむの上書きしたるから』

舌でテイステイングした結果、ロヴィータちゃんの耳たぶはマシユマロ味でした。やっぱりロリって最高！

☆

ロヴィータちゃんはロリはロリでも悪魔ロリっ娘だな。じやないと俺をこんなにもぼこぼこにしないもん。それに今日はもう口をきいてくれないみたいだし。

顔こそ傷物にしてないものの、腕や膝には痣が沢山できました。

耳たぶをはむはむしたただけなのに……。

「俊もごめんなー。ちよつとヴィータも驚いたんよ。いつになったら玄関から移動するのか俊に聞こうとしたら、俊がはむはむしだしたから」

「いやーヴィヴィオだと思ったからつい」

「ああいうのはいまのうちに沢山したほうがええもんな。……小学校高学年になるころには俊もどんな態度で対応されるかわからへんし……」

「こ、怖いこというなよ……」

ちよつと想像しちまつたじゃねえか。

現在俺達は玄関から料理が待っているリビングへと場所を移動し、席順を決めている最中だ。

「はやてきーん、どういった席順にしますー？」

「んー？べつに好きな場所でええよー」

はやての言葉で各々好きな場所に座っていく。

「なのはママとフェイトママはヴィヴィオのよこー！ガーくんも！」

「いいよー」

テーブルの丁度中心線に真っ先に座ったヴィヴィオは、両手で自身の真横をばんばんと叩いてなのはとフェイトを呼ぶ。ガーくんは当たり前のようにヴィヴィオの隣に鎮座していた。

「じゃあ俊くんはなのはママの横に——」

「なのはさんの横は私がいただきますねー！」

「ちよつ!？」

「なのはさんの処女は私がいただきますねー！」

「黙れ」

俺がなのはに呼ばれて行動に出るよりも先に嬢ちゃんがなのはの横にピツタリとくつついていた。タコの吸盤かよという突っ込みを入れたくなるほどのピツタリ具合である。入り込む隙も余地もありやしない。……しやうがない、今日ばかりは許してやるか。平日だったら殴り飛ばしているところだったがな。しやうがないだろう？今日の主役はあいつらなんだから。

まあ俺はフェイトの横で——

「フェイトの隣は私のものよ」

「母さん……腕絡ませてくるのやめて……」

フェイトの横には修羅がいた。恐ろしいほどの修羅がいた。

ため息を吐きながらこっちにごめんと謝るポーズを見せるフェイト。いやまあ親へのサービスってのは大事だからな。こういうのはしつかりとしといたほうがいいさ。

フェイトかなのはの横に座る予定だったので他の場所なんて考えてもいなかった。そのせいもあってか俺がなのはとフェイトの横を確認している間に全員とも座り終えていたようで、どうやら俺待ちになっただけ。立ったまま全員の視線を浴びる。……どこに座ったものやら。

そう考え込んでいると、真っ先に席に着いたヴィヴィオが俺の顔をはっとした表情を浮かべる。

「ヴィヴィオ……ごはんのことにむちゆうでパパのことわすれてた……。ほんとはパパのせきもあるはずだったのに……」

「あー。それは残念だったねー」

「どんまいヴィヴィオ。次は忘れないようにね」

しよぼーんとした顔を浮かべるヴィヴィオを両横からなのはとフエイトが頭を撫でたり、自分のほうに引き寄せてデコにキスをしたりして慰める。それにしても完璧

なまでに忘れてたな。でもそのパパの席のことを完璧に忘れるほど夢中にさせた料理自体俺が作ったものだから、なんかちよつと嬉しいというか誇らしい。

「まあ気にしてないよヴィヴィオ。どうせ後で席なんてバラバラになるんだし」

「そうそう。俊くんが隣に来るしねー」

「ねー」

お前らの両横はデコでも動かないと思うけどな。リンディさんと嬢ちゃんを見ながらそう思う。

「ほな俊はわたしの横で」

「シャーツ!」

「いやですう! リインはぺろぺろさんの近くにいると蕁麻疹が出てきちゃいます!」

「物凄く嫌われてるんだけど……」

「まあまあ」

はやてが座る隣にロヴィータちゃんとリインがいるのだが、俺がはやての横に座る（ロヴィータちゃんとは逆方向）ということロヴィータちゃんは牙を見せながら警戒してくる。そこまで警戒することないだろ。リインに至っては物凄く嫌われっぷりだ。

まあしかしそこははやての仁徳のおかげだろうか、はやてが笑みを浮かべて二人を撫でるとしようがない……といったふうに二人も引き下がっていった。

「それじゃ早く食べちゃいませうか。それじゃ……はやてちゃんが音頭でいいのかしら?」



「へ？わたしですか？ええまあそれでもええけど……ここは直属の上  
司であるのはちゃんです」

場を仕切る桃子さんがはやてに振ると、はやては両手でどうぞの形  
を取りながらなのはにバトンパスする。

「わたしでいいの？ティアとかは——」

「なのはさん一カメのほうに笑顔お願いしまーす！」

「バカはほつといて皆で食べよっか。それじゃ手を合わせてくださ  
い。今日は皆さんお疲れ様でした」

『お疲れ様でしたー！』

「いただきます！」

『いただきますーす！』

全員とも行儀よく手を合わせてから、それぞれ自分の小皿に好きな  
料理をとっていく。

「ヴィヴィオはなのはママが取ってあげるからねー。なにが食べたい  
？」

「んーつとねー……ヴィヴィオこれ！」

ヴィヴィオが指さしたのは生春巻き。春雨とニラを中心に豚肉と  
大葉を少々、そんなでもって生春巻き用の皮で包んでいる。ヴィヴィオ  
は喜んでくれるかな？

なのはがヴィヴィオが指さした生春巻きをとってやる。フエイト  
が生春巻きのたれをかけてあげる。ヴィヴィオはまだちよつと慣れ  
ていない箸使いでしっかりと生春巻きを掴み、口元へと運んでいっ  
た。

その小さな小さな口をめいっぱい開けて頬張るヴィヴィオに、知ら  
ず知らずのうちに固唾をのんだ。ヴィヴィオはもぐもぐと咀嚼し勢  
いをつけてごっくんと嚥下した。ど、どうだ……？

「ヴィヴィオおいしい？」

そう聞くなのはにヴィヴィオは笑顔で答えた。

「うんーヴィヴィオこれすきー！」

生春巻きを指差しながら答えるヴィヴィオにほつと俺は息をつい  
た。よかった……。いくら料理が出来ようと、娘の口に合わなかった

ら意味がないからな。

「つぎこれ！」

「はいはい。色んなものをちよつとずつ食べようねー」

ヴィヴィオの小皿で料理を取りながらなのはも笑顔をみせる。……意外とこうしてみるとなのはって人妻っぽいんだな。いや、人妻っぽくなってきた？なんかそんな感じがするな。まあ何言ってるか自分でも若干意味不明なんだけどな。

あ、そういえばビーフシチュー出すの忘れてた。

「誰かビーフシチュー食べるか？」

「私食べます！」

「私も！」

「あ、わたしも俊のビーフシチュー食べようかな」

嬢ちゃんのスバルが真つ先に手を挙げて、その後にはやてが手を挙げる。それからは雪崩の如く手を挙げられたので、とりあえず全員にビーフシチューを配ることに

した。朝からじつくり煮込んだものだからうまくないわけがないんだけど……。

隣にいるはやてを見る。スプーンに掬いビーフシチューを食べるはやて。ゆつくりと味わうようにはやての咽喉元が動く。

「ど、どうだはやて……？」

「うん、ええよ。朝から煮込んだだけあってとつてもおいしい」

「よかった。はやてにそう言ってもらえるならまず大丈夫だな」

それを裏付けるように、料理が得意な桃子さんとリンディさんもおいしいという意味表示をしてくれた。うん、朝から時間をかけて作った甲斐があった。

「ひよつとごさんおいしいんですけど、なんかむかつくのでクリームを出したいと思います」

「黙って食べバカ舌」

おいしいならクリームを出す必要はないだろ。

テーブルに肘をつきバカ舌に話しかける。

「そういえばお前昇進試験ギリギリでの合格だったらしいな。なのは

という最高の教導官がいるってのに」

「だってー……緊張しちゃって」

「緊張を楽しめないようじゃ実力は出せんぞ。お前やスバルの実力ならAランクなんてそこまで難しくないだろうに」

「ひよつとごきさんそれは私を褒めてるんですか？」

「情けないって話だよ。まあでもお疲れさん。よく頑張ったな」

「えへへ」

そんな表情見せられたら、今日くらいはなのはを譲ってあげたくなくなるから止めろ。

「ひよつとごきさんは今日一日ずっと家で料理作ってたんですか？」

「まあな。後は飾り付けとか。でも桃子さんやリンディさん、士郎さんがいなくなったら結構ギリギリの作業になってたかもしれない。シヤマル先生は逆に局地的爆心地でひやひやした。今日はあるまりヴィオと遊んでやれなかったし、明日は一日ヴィオのために使いたいなーって感じ」

チラリとヴィオを横目でみる。相変わらずなのはとフェイトを巻き込みながら楽しそうにお喋りしながら料理を楽しんでる。

「来年からは小学生だからただでさえ接する時間が少なくなるのになあ……」

思わずため息が零れる。そんな俺を啞然とした表情で見つめる嬢ちゃん。お前テーブルから揚げ落とすな。髪の毛刈り上げっぞ。

「ひよつとごきさんが……パパっぽい」

「いやこれでもパパだよ」

「でも立ち位置的にはメイドみたいなものですよ。あ、男の場合は執事でしたっけ？」

「性奴隷メイドだったら喜んでやるんだけどな」

どつちもwin-winの関係だし。

「でもメイドさんも可哀想ですよ。朝から夜までご奉仕しなきゃいけないなんて」

「というかもろエロ漫画のせいだよなそういう考え方って。一説にはそういう夜のご奉仕専用のメイドがいたのはいたらしいけど」

「へ〜。あ、ちらし寿司食べたいです。取ってください」  
「はいはい」

俺の近くにあるちらし寿司を小皿によそって嬢ちゃんに渡す。いま嬢ちゃんのはなの横ではなくスバルの横だ。なんでも二人でローテーションを組んだとか。

「ところでひよつとごさん」

ちらし寿司を食べながら嬢ちゃんが聞いてくる。

「んー？」

「リインさんいつまでひよつとごさんの周りをぐるぐる回ってるんですか？衛星じゃあるまいし」

それは俺が一番聞きたいよ。なんでリインは怖い顔（可愛い顔）して俺の周りをぐるぐる回ってるんだ？

「ペロペロさんを監視するためです。はやてちゃんにいつ襲い掛かるかわかりませんからね」

「襲わないよべつに」

「え……。俊は襲ってくれへんの……。わたしはいつでもええのに……」

俺が言った直後に上目づかいで俺にしなだれかかってくるはやて。指で俺の胸を弄りながら頬を赤らめるはやてに俺の理性は限界寸前だ。

「は、はやて……。この場ではやばいって……」

「そうやな……。じゃあいまから2階に——」

ミニスカートを少しだけ上にあげながら、俺の耳元で囁くはやてはそのまま俺がロヴィータちゃんにやったように耳たぶを甘噛みする。

こ、こいつ少し酔ってないか……。？さつきからずっと黙ったままだったけど……。

「は、はやて……。？お前酔ってないか？」

「酔ってへんよ？だってまだ未成年やからのまへんし」

ということとは素面でこんなことしてるのか……。？そ、そりやはやては可愛いし、料理も出来るし家事も出来る。正直俺もはやてのことは大好きだし。でも——

「たあつ！」

「あいて!？」

後頭部に小さな痛みが走る。可愛らしい声と共に俺の頭にリインが頭突きをかましたようだ。その証拠に俺の目の前にやってきたリインは頭を撫でながら涙目で俺のことを睨みつけている。

「やっぱりペロペロさんははやてちゃんにとつての悪ですね!はやてちゃんをこんなにしたペロペロさんをリインは許しませんよ!」

「なにもしてないっつーの……」

「うー!やっぱりペロペロさんは八神家の敵です!」

ぶんぶんと怒るリインを俺にしなだれかかりながら食事を摘まんでいたはやてが制す。

「リイン?俊を困らせたらいかんよ?」

「うー。でもでも——」

「でもやない」

はやてはリインを胸に抱きしめながら、頬にキスする。キスをされたリインは一瞬俺のほうを睨みつけるが、やがてやれやれといった感じで頭を振ってはやてに体を委ねた。

「あの……ひよつとこさん。ペロペロさんつてのはひよつとこさんのことですよね?それってつまり……」

「そうです!リインが生まれたばかりのとき、この人ははやてちゃんの一部屋で寝ていたリインの全身をペロペロと舐めまわしたんですよ!」

「うわあ……」

ゴミをみるような目で俺をみる嬢ちゃん。リインの声が大きかったのか、ふと気が付けば部屋にいる全員が俺に注目していた。またフェイト、なんでそんなに悲しそうな目で俺を見るんだ。フェイトの後ろにだっぴま現在進行形でフェイトの指を舐めまわしてる熟女がいるじゃないか。いや別に俺はあの人と同類といっているわけじゃなくて——

「それにペロペロさんその後リインに変な白くてどろどろしてる液を

かけたんですよ！もう最低です！」

「それペロペロさん通り越してぶっかけさんじゃないですか!？」

ああ！いまこの場にいる全員の見界から俺の姿が消えた気がする!?!

「まてまてまて。当時の俺はユニゾンデバイスとかよく説明されてなかったから、リインを最初みたときはほんとに妖精が見えたと思ったんだよ。そんでこすりつけてたら発射した」

「まってください。終盤の文脈が明らかに異常です」

「お前だつてフィギュアに発射することあるだろ？俺だつていまだにたま姉にはお世話になつてるよ。たま姉たまんねえよ？」

「いやいやいや。私をひよつとこさんみたいな度し難い変態にするのは止めてくださいよ」

「じゃあお前はなのはのフュギュアでしないのかな？」

「あれはフィギュアという名の専用デイルドですから」

「二人ともストップ!?!ちよつと二人とも離れて！濃いよ、二人だけ空間の空気が濃すぎるよ!?!」

俺と嬢ちゃんの会話に見かねたなのはが声をかけてきた。なのはは頭を振りながら、俺に釘を刺す。

「あのね二人とも？色々突つ込みたいことはあるけども、とりあえず——黙れ」

「……はい」

殺気を帯びたなのはの鋭き眼光に俺も嬢ちゃんもただただ頷くばかりであった。やつぱりなのはつて怖い。

☆

ほんつとに俊くんは救いようがないほどのバカなんだから！何がたま姉たまんねえよ！たまるわアホ！まったく、わたしとフェイトちゃんが魔法でヴィヴィオや子ども達には聞こえないようにしてたからよかつたけどさ。

さつきからずっと見てたらはやてちゃんに鼻の下伸ばしてデレデレしちやつて、年下の女の子と遊んで、ここは合コンなの？キミは合コンだつていいいの？

心の奥底でふつつつと感情がマグマのように煮えたぎる。

「なのはママ……かおがこわいよ?」

ヴィヴィオの怯えた表情をみてふと我に返る。

「え?あ、ごめんねヴィヴィオ!なのはママは怖くないよ。ほら、こんなに元気で笑顔だよ?なのなの!」

「ううん、なのはママこわいよ?」

そこは否定するところじゃないと思うんだけど。

「へ?そ、そうかな?なのはママ怖いかな?」

「ちよつぱり」

物凄くシヨックなんだけど。愛娘にママ怖いよって言われると物凄くシヨックなんだけど。

笑顔を顔に張り付かせたままのわたしに、ヴィヴィオはでもでもと続ける。

「でもね?なのはママはとーってもやさしいよ!ヴィヴィオなのはママのことだいすき!」

「ほんと?なのはママもヴィヴィオのことだーいすきだよ!」

ああ……やっぱりヴィヴィオって可愛い……。もうフェイトちゃんに続きわたしの癒しスポットになってるよヴィヴィオ。

「そうなのはママ!ちよつとみみかして!」

「ん?どうしたの?」

ガーくんから揚げをあげているとヴィヴィオが何か思いついたようにわたしの服を引っ張る。わたしはヴィヴィオの顔に耳を近づけながら、ちよつと会場からは背中を向けていかにもな演出をしている。

「これないしょだよ?ぜったいにいっちゃだめだよ?」

「うんうん。大丈夫だよ。どうしたの?」

ヴィヴィオはすつと俊くんを指差した。

「あそこにようせいさんがいるの!」

「パパはあれでも一応人間なんだけど!」

「お?」

「お?」

……あれ？わたし何か間違ったこと言ったかな？

「なのはママ……ちがうよ？」

「あ、あれ？パパじゃないの？」

「うん。パパじゃないよ。……Σ(・ω・)!?」

ふと何かを思い出したかのような表情を浮かべるヴィヴィオ。うんうんと唸りながら思案するヴィヴィオはとつてもかわいくて、何時間見ても飽きないだろう。

ヴィヴィオはちよつと可哀想な表情でわたしを見てくる。

「ごめんなのはママ……。ヴィヴィオはいいけど、なのはママはわるいだからようせいさんがみえないみたい……」

……妖精さん？もしかして俊くんの上でカルボナーラ食べてるリインのことかな？

「あのようせいさんとね、ヴィヴィオおともだちになったの！」

うん間違いなくリインのことみたいだね。はっはーん、それにしても妖精さんか。どこぞの俊くんみたいなことをヴィヴィオも言いだすね。といつても俊くんもヴィヴィオも一般人だからユニゾンデバイスを知らないのは無理ないよね。ここは合わせておこうかな。ヴィヴィオ自身が気づくまで。

嬉しそうに妖精さんと友達になったことを語るヴィヴィオに、わたしはちよつと得意げにリインを指差す。

「もしかしてヴィヴィオもあの妖精さんがみえるの？」

「(。D)」

驚きすぎて声も出ないようだ。

「な、なのはママもようせいさんがみえるの……？」

驚き体を震わせながらわたしに聞いてくるヴィヴィオに、わたしは首を縦にゆつくりと動かすことが答える。

「なのはママもいいこだったんだ……」

あれー？なんでそこが驚きの対象になるのかなー？

「なのはママは生まれたときからずつといい子なんだよ」

「そうなの？」

「そうそう。けどそうかあ……ヴィヴィオも妖精さんが視えるんだ



ね。あのねヴィヴィオ、よく聞いてね？妖精さんが見えるってことは、ヴィヴィオは選ばれた人間なんだよ」

「えらばれたにんげん？」

「そう。ヴィヴィオは魔王を討伐する聖なる勇者に選ばれたの」

「ヴィ、ヴィヴィオそんなにすごいものにえらばれてしまったんだ……！」

「そうだよ。時期にヴィヴィオはあの妖精さんを従えて魔王討伐のために冒険しないといけないの」

「……ヴィヴィオなのはママやフェイトママやパパとはなれるのはやだ」

「じゃあやっぱり魔王討伐の話はなかったことにしよう！」

「ええっ!?それでいいの!?!」

だってヴィヴィオの離れたくないよ光線が凄いんだもん！もうこれは箱入り娘で育てるより他ないじゃん！

「よいしょっと」

ヴィヴィオを抱っこして膝の上にのせる。ヴィヴィオの隣にはずっと待機モードでわたしとヴィヴィオの話を聞いていたガークンがとことことやってきた。すつとヴィヴィオの隣に足を折り、自家製のシューマイを小皿に取り分けるガークン。タレと辛子をつけておいしそうに頬張る。ヴィヴィオはそんなガークンを見て、自分も自分もと口を開ける。箸捌きマスターレベルのガークンはヴィヴィオように辛子をどかして、タレだけが垂らしてあるシューマイを食べさせてあげる。おいしそうなヴィヴィオ。そんなヴィヴィオを見るとなんだかこちらも嬉しくなり、つついヴィヴィオの頭を撫でてしまう。もうヴィヴィオったら。ネコみたいな声だしてじゃれついちやつて。ほんと可愛いんだから。

「ぐろぐろぐろぐろぐろ」

「……」

「ぐろぐろぐろぐろぐろぐろぐろぐろぐろぐろぐろ」

「……俊くん何してるの?」

「ネコです」

「うちはネコなんて飼っていません」

「じゃあ飼ってください」

「……しようがないにやあ」

わたしの太ももを擦りながら隣でごろごろとうるさいバカをほっておくわけにもいかず、なし崩しの相手に相手してあげることになった。

「かなーりはやてちゃんやティアといちやいちゃしてたようだけど、もういいの?」

「別にいちやいちゃしてたわけじゃないんだけど。まあはやてはシグナムとリインに連れていかれたし、嬢ちゃんとは離されたし。ほらいまはエリオとキャロの相手をスバルと一緒にしてるだろ?」

俊くんが指さす方向に首を動かすと、確かにティアとスバルがエリオとキャロと仲良く話していた。

「つまり俊くんはハブられてしまったということだね」

「まあそうなるな。というわけで隣いい?」

「どうぞ」

わたしの言葉を聞いて俊くんは自分の小皿を一回取りに戻り、また戻ってきた。わたしの隣に座った俊くんはヴィヴィオの頭を撫でながらポテトサラダをよそう。

『ヴィヴィオちゃん。こっちでリインとトランプしませんか?』

ふと遠くからリインの声が聞こえてきた。もうお腹いっぱいになったのか。シャマル先生とトランプ片手にこちらにぶんぶんと手を振っている。

「あー!ヴィヴィオしたい!ガーくんいくよ!」

「ヨシキター!」

「なのはママいってくる!」

「はい、いってらっしゃい」

わたしの膝の上からすくりと立ちあがったヴィヴィオはガーくんを連れてリイン達の元へと走り去っていった。残ったのはわたしと俊くんのみ。既にフェイトちゃんはリンデイさんに付き合っ隣部屋でリンデイさんのお酒に付き合ってる。未成年だから注ぐだけなんだけど。お母さんはお父さんと一目を憚らずにいちやいちゃし

続けている。夫婦仲がいいのはいいことだけど……。うう……。ちよつと自重してほしいかも。はやてちゃんは相変わらずシグナムさんとヴィータちゃんの両方に挟まれながら楽しそうにご飯を食べている。……。ほんとの姉妹みたいで思わず笑みが零れてくる。とくにヴィータちゃんが周囲を気にしながら、はやてちゃんにアーンしてもらってるなんて可愛い以外の何ものでもないよね。あ、視線が合わないように逸らしとこ。

「相変わらず料理は一瞬でなくなるなー。あんなに時間をかけて作ったのに」

俊くんは独りでにそう呟く。そうだよ。俊くんは俊くん朝からずつと頑張ってくれたんだよね。わたしがティアとスバルと一緒に試験を受けてるときも、はやてちゃんが手続をしに本局に行つてるときも、俊くんは何も言わずつと料理をしてくれたんだよね。うん、料理だけじゃない。深夜からずつと……。飾り付け用の準備もしてたよね。隣の部屋からごそごそしてる声が聞こえちゃったよ？

ほんと……。なんでもかんでも一人でしょうとするんだから。そのとき、わたしの体はごく自然に動いた。隣でサラダポテトを食べている俊くんの手をそつと包み込む。いきなりのことでびっくりしてわたしのほうに振り向く俊くんに、わたしはただただ笑みを浮かべる。

「お疲れ様、俊くん」

「……おう」

人で笑いあう。今日一日疲れたけど、なんか俊くんの笑顔を見たらそれも吹き飛んじやった。

そうだよ。俊くんも頑張ってくれたんだよね。

だったら——ご褒美はあげないとダメだよ？

宴も終わり皆が就寝した時刻。俊は一人洗い物をしていた。

「ふう……ほんとに疲れてるんだなみんな」

洗剤つきのスポンジで大皿をこすりながら、さきほどみた家の様子に苦笑する。

なのはとフェイトの部屋には、フェイトを連れ込んだリンデイと連れ込まれたフェイトが抱き合いながら寝ていた。(フェイトは必死に離れようとしていたが)

桃子と士郎は自宅に帰り、はやてはザファイラを除くヴォルケンに抱きつかれながら寝ている。はやての表情もさることながら、ヴィーアの幼児のような幸せそうな表情が俊には印象的だった。

そしてヴィヴィオは新人達と一緒に就寝中である。スバルとティアの二人に囲まれてガーくんを抱っこしながら客間で寝ていた。ちよつと年の離れた姉妹のようで、思わず俊の笑みがこぼれたのはいうまでもない。キャロとエリオもそれぞれスバルとティアの隣で眠っていた。

そんな就寝の状況だ。

「なのはだけが見当たらなかつたが……あいつはどこにいったんだ？」

皿洗いをする前に一通りの箇所は見回り、それぞれの状況を確認した俊だがなのはだけが見当たらなかつた。

「まあもしかしたら桃子さんが家に連れ込んでるのかもしれないし、家を出た形跡はないから心配ないか。……いや桃子さんに連れていかれたのならそれはそれで心配になるな。リンデイさんもそうだが、桃子さんも色々と危ないゾーンまでいつている可能性があるし……」

桃子となのはのあられもないシーンを想像し前屈みになる俊。

「それはそれで……アリだな」

一人納得し皿洗いを終わらせていく。

それから30分後、ようやく皿洗いを終えた俊はエプロンを外し電気を消して、とある人物の場所へと足を伸ばす。抜き足差し足忍び足

で到達した場所は、客間でティアたちと一緒に寝ているヴィヴィオの元である。

「ヴィヴィオたそー。パパがちゅつちゅしにきたよー」

ただの変態である。まごうことなき変態である。

ガーくんをだっこしながらすやすやと寝息をたてるヴィヴィオに俊は近づき、髪をなでる。金色の髪が闇の中で揺れ動く。ヴィヴィオの小さな手で俊の指をぎゅつと握る。

俊は優しい目で自身の服を脱いでいく。

「まってくださいいひよつとこさん。対象が誰かはわかりませんが、ここで服を脱ぐ時点で犯罪者ですよ」

「……なんだお前起きてたのか」

「なのはさんと一つ屋根の下だと思うとお豆の勃起がおさまらなくて……」

「顔を赤くして恥じらう乙女を演じてるつもりだろうが、喋ってる内容は下衆そのものだからな」

顔を真っ赤してあわあわとするティアに冷静に突っ込みをいれる俊。しかし突っ込む男も全裸である。

「どうかひよつとこさん。まだ起きてたんですか？もう深夜ですよ」

「片付けしてたんだよ」

「それはそれはご苦労様です」  
「うむ」

寝ている状態で頭をさげるティアに大仰に頷いてみせる。

「それはそうとヴィヴィオちゃんって不思議な香りがしますよね。さつきまでくんかくんかしてたんですけど、なんか……高貴な香りがしました」

「お前と比べたらドブネズミだつて高貴だろ」

「中身限定だと否定できない自分がいます」

そこは否定しておけよ。げんなりする俊。

「というか香りとかわかるのか。お前は犬だな」

「なのはさんの犬ですからね」

「残念だな、なのはの犬は俺だ」

「いやいや私ですから」

「いやいやいや俺だから」

互いに自分がなのはの犬だと譲らない二人。外野としてはすごくどうでもいいことだが、当人たちにとつてはすごく大事な部分らしい。

「ううん……」

「……」

言い合ってる二人の横でヴィヴィオが声を漏らしながらもぞもぞと動く。一瞬で止まる二人。俊は瞬時にパンツをはき逃げ出す構えをとる。——が、ヴィヴィオは動

いただけですぐにまた夢の中へと旅立った。

ほつと一安心する二人。

「……とりあえずここから出るわ。もうヴィヴィオの寝顔もみたし」

「んじや私もちよつと目が覚めたんでご一緒」

服を綺麗にたたみ、エリオの横に置くと俊はヴィヴィオをもう一度撫でてたら部屋を出る。ティアもそれにならう形で部屋をでる。

二人並んで歩く廊下。ティアが俊に話しかける。

「ひよつとこさん、何故服を綺麗にたたんで部屋においてきたんですか」

「パンツ一枚のほうが何かと都合がいいだろ？」

なんの都合がいいんだよ、そうティアは質問したかったが色々と面倒なことになりそうなので口を開かなかつた。

「それよりひよつとこさん。せつかく二人つきりになったんでちよつと悪戯しませんか？」

「いや俺もう自分の部屋で寝る予定なんだけど……。疲れたし」

「えー、遊びましょうよー」

「だから——」

「ヴィータさんの寝顔を写メろうと思ってたのに」

「よしいくぞー！ぐずぐずするな！」

きらきらと輝く瞳はまるで少年のようできて、疾駆する姿はただの

変態であつた。

☆

その頃のなのはさん

し、心臓がいたいほどに脈を打っているのがわかる……。ど、どうしよう？これ他の人にきこえてないよね？家が微振動で揺れてないよね？

あう……。きこえてたらどうしよう……。

「……これはご褒美なんだから。けつして俊くんのごことが好きとかそういうのじゃないから……」

自分自身にそう言い聞かせる。そう、これはご主人様としてとーぜんのことをしてるのであつて、それ以外に他意はないもん！

「……それにしてもおそいなあ俊くん」

もう洗いのもの終わってるはずなのに……。せつかく手伝つてあげようと思つたのに、手があるからとかいつて手伝わせてくれなかつたし。……。まあ戦力になるかと問われたら首を横にふるしかないだけだね。

「はあ……。俊くんはやくきてよー。もうねちやうよー……」

現在わたしは俊くんの部屋のベッドの上にいます。べ、べつにへんなことをしようつてわけじゃないからね!?

た、ただ……。驚かせようとおもつてるだけだもん。

だからこうして――

「メイド服の恰好までしてあげたのに……」

俊くんのコスプレ部屋からメイド服までもつてきて着てあげたのに。それにしてもこのメイド服、スカートがめちやくちや短いんだけど……。座つても下着がみえるつてどういうこと？

「それに……。普段ガーターなんかつけないからこれであつてるのわかんないよお」

ニーソと下着の間をガーターベルトで連結させているわけだけど、これで本当にあつてるのかな？フェイトちゃんならガーターよくしてるから詳しいんだけど……。

「なんかこのメイド服、全体的にえっちなんだよね……」

俊くんのコスプレ部屋からもってきてきてやつだから、ものすごくあやしい。なんかいかかわしい雰囲気とかただよってないよね？

……魔法で作ればよかったかも。

「まあでも、かけ布団でガードしとけばいいかな」

どうせ俊くんならアクシデントとかあるわけないし。……すこしくらいあってもいいのに。

「もう俊くんのばか……。もうなんでこないの。ばかばかばか。もうしらないもん！」

そもそもなんでわたしがこんな恰好までしてベッドにもぐりこんで俊くんまたなきやいけないの！

もう寝る！

☆

俊とティアははやて一家が寝ている寝室への扉をそろりとあける。全員がしっかりと寝ていることを確認し、俊とティアは体を滑り込ませるようにして部屋へと侵入していく。二人とも動きが素人じやないところが怖いところである。

八神一家ははやてを中心に、右にヴィータ左にシグナム、そしてヴィータを抱っこしているシャマルという布陣を展開している。

「ひよつとごきさん……ザフィーラさんはどこに？」

「外の犬小屋で番犬してくれてる。家に女が多いから見張っていいようだったさ」

「惚れますな」

「まったくだ」

ガチムチマツチヨなザフィーラに敬礼し、二人はターゲットであるヴィータへと近づく。

二人はシャッター音がしない設定にして写真を撮りまくる。物凄くいきいきとした顔でとりまくる。

「よし……んじゃぶっかけるか」

ひとしきり撮って満足した俊はおもむろに練乳をとりだす。どこから取出したのかはきかないお約束だ。



牛の絵柄が描かれた練乳のキャップをまわし、ヴィータに近づくと俊。

「写真は頼んだ」

「まかせてください」

真剣な表情を浮かべる二人。やっていることは最低のゲス行為だ。

しぼりたての練乳をヴィータの顔にちよつちよとかける俊。口元に2滴、目元に1滴、髪の毛に量多めでぶっかける。

ヴィータのみるく添えの完成だ。

「これはこれは……」

「我ながら背徳的だな」

写真を撮るティアも興奮を隠しきれない様子。

「ひよつとごさん、今度は四つん這いで襲つてる感じを出しましょうよ」

「いやそれよりも事後っぽくしようぜ」

「お、いいですねそれ」

まるでプリクラをとる女子高生のようにきやつきやとはしやぎながら、ヴィータに練乳をぶっかけて遊ぶ変態共。パンツ一枚の男が、ヴィータを襲う絵を撮ったり、オレンジ髪の変態が練乳を口からヴィータの顔に垂らしたりと、あまりにも卑猥な写真がどんどんと出来上がっていく。

その光景が10分ほど経過したとき、二人は恍惚とした表情を浮かべて満足していた。

「ふうめつちや楽しかったな」

「同感です。明日プリントしてきますね」

「頼むわ」

がっしりと固い握手をかわす二人。

「ほお……お前ら生きて明日を迎えることができるかと本気で思ってるのか……?」

「ッ!?!」

その声は地獄の底から響いてくるような怒気を孕ませた声であった。重力の圧によって体から崩れ落ちるティア。ティアは崩れ落ち

る寸前に俊に手を伸ばすが、危険を察知した俊は足払いでティアにとどめをさす。

冷や汗をかきながら、俊は目の前でこのろいうさぎを抱っこしたヴィータが目を赤く光らせていた。

「よ、よお……ロヴィータちゃん。お、お子様はまだ夢の中で旅行を楽しんだほうがいいんじゃないか？」

「ああ、あたしもそうしたかったんだけどな。——こんなにべたべただと寝苦しくてな」

自分の髪や顔にぶっかけられた白濁液を指に絡ませつつ、睨みつけるその表情に俊はいいようもない快感をひそかに感じた。

顔を近づけ、くんくんと白濁液の臭いを嗅ぐロヴィータ。

「……流石にイカ臭くはないか」

「いまからぶっかけることもできますがいかががしますか？」

「いかががしますかじゃねえよ。ぶっ殺すぞ」

指をほきほきと鳴らしつつ、俊に近づくヴィータ。

その頃には騒ぎで強制的に起こされたはやてやシャルが眠い目をこすりながら、防音の障壁を張っている姿が俊の視界の隅に映された。

ちなみにシグナムはまだはやてに抱きついたまま爆睡中。はやては下着が丸見え状態のままぼーっとバナナ型のまくらを胸元で抱きしめている。

俊はじりじりと後退しながら、つとめて優しい声色を意識してヴィータに話しかける。

「お、落ち着けロヴィータ。お前も女なら俺にぶっかけられたいと思うだろう？」

「お前のその自信はどこからくるんだ」

「俺の性奴隷だろ!?!」

「なったこと一度もねえよ!?!」

驚愕する俊に驚愕するヴィータ。既にはやては夢の中へと再び旅立っていた。

その間にロヴィータは俊に近づき、首根っこを掴み自分の顔に近づ

けさせる。

至近距離で俊を睨みつけるヴィータに、俊は笑顔を見せながら言った。

「愛してるよ、ヴィータ」

それにヴィータも、最高のロリロリしい笑顔と甘い声をこういつた。

「あたしも愛してるよ。だーりん」

直後、だーりんの視界にはアイゼンを振りかぶったヴィータの姿が、

「——なんていうとでも思っんのかボケナスがッ！」

防音の障壁によって近所迷惑にならないヴィータの怒りは、俊だけにとどまらず俊を盾にこの場から逃げ出そうとしていたティアにも向けられることとなった。

「逃げるなティアッ！」

「おっぱい吸わせますから許してくださいーい!？」

それがティアの最後の言葉であった。

☆

カチ……カチ……カチ……

「……………ちよつと遅すぎない？」

俊くんの部屋で俊くんをまつこと数時間。完璧に寝るタイミングを逃したわたしは部屋に置いてあった携帯ゲームで遊びながら帰りをまつていた——がいくらなんでも遅すぎる。

「……………なにあつたのかな？つて、んなわけないよね。ここは自分の家だし、俊くんがヴィータちゃんあたりにちよつとかいでも出してない限り、そんなことはないか！」

……………ちよつかい出してないよね？

だんだんと不安になってきた。だつてあの俊くんだよ？

猥褻物陳列罪と外を歩いただけで『今日未明、ミッドで不審な人物が目撃されました』つてテロップが流れてくる俊だよ？

……………ああどうしよう、やつぱキツチンに迎えに行つたほうがいいかな!？」

『あーしんど。これから寝ても一時間くらいしか寝れねえよ。美容に悪いよ』

『ひよつとこさんまだいいじゃないですか。私なんてモロ女の子ですよ？美容にダイレクトにくる女の子ですよ？管理局のアイドル枠ですよ？』

『お前は懐石料理の端に置いてあるつまようじみたいな存在だから美容なんて気にすんな』

廊下から俊くとティアの話し声が聞こえてくる。

『マジすか。ところでひよつとこさん一緒に寝ます？もう1階に行くのは怖いです』

『なのはにバレたら殺されそうだからやめとく。なのはの教え子に手をだすななの一！とかいいそうだし』

語尾になのつけるのはやめてなの。

『しようがないですねえ。ヴィヴィオちゃんペロペロしながら大人しく寝ますか。おやすみなさーい』

『はいはい』

たったつたと1階におりる音が聞こえてくる。それと同時にカチャリとドアノブが回る音、そして――

「ふー。俺も寝よ」

俊くんが疲れ切った声でベッドに侵入してくる。既に目を瞑って夢の中に旅立つ寸前。その俊くんは、わたしは声をかけた。

「お、おつかれさま俊くん……」

「ん？ああおつかれさん。……は？」

俊くんがピタリと固まる。つぶっていた目をあけて、ベッドにもぐりこんでいたわたしを凝視する。

……よくよく考えたらわたしすごい行動にでてるような気がしなくもない。というかなぜパンツ一枚？

「えつと……今日はここで一緒にねてもいい？あ、あのね？フェイトちゃんはリンディさんと寝てるから――」

「消えろ俺の煩惱ッ！」

「ちよっ!?塩まくのやめて!？」

「塩をまいてほしくなくば——いますぐここで潮を吹け！」

「……調子にのると怒るよ……？」

無言で床に正座する俊くん。調教の賜物だね。

「……」スッ

「はい俊くん。発言を許可します」

「……なんでなのはがここにいるの？」

「……わたしとフェイトちゃんのお部屋、リンデイさんに奪われたから」

「リンデイさんにフェイトを寝取られたわけか」

「いや、ちよつと違うと思うけど……」

まあだいたいそんな感じかな。

「なるほどね。んで寝るところがないから俺のお部屋にきたと」

「そうそう」

「くんかくんかしていたと」

「するわけないでしょ」

「俺がなのはの立場なら下着を舐めまわしているというのに」

部屋に侵入者迎撃用の魔法を設置しておくことを決めた。

思わずため息をついてしまう。……あんなにどきどきしながら待っていたのに、気がつけばいつも通りになってしまふこの状況にため息を吐きたくなる。

と、そう思っていると俊くんがちらちらと視線を横に動かしているのに気がついた。月の明かりに照らされてわかったことだけど、心なしか顔も赤くなっている。

「ん？俊くんどうしたの？」

ビクツとする俊くん。視線を左右に動かした後、わたしを凝視しつつ言いよどみながら声を発した。

「あの……なのは？」

「ん？どうしたの？」

「……パンツまるみえなんだけど」

「にゃッ!？」

俊くんの指を辿ると、わたしの下着に一直線。自分が丈の短いメイド服を着ていることにいまさらながら気づいたわたしは、さつきまで

使っていた枕でスカートをガードする。

「……みた？」

「……なのははえろい下着よりも可愛い下着のほうが似合うと思うよ。それは……前にはやてが勝負下着とかいって見せてきたものに近いし」

いったいどんな状況だったのかと問いただしたい。

「あれ？というかなのは。いま着てる服って俺のコスプレ部屋にあったものだよな」

「……まあね」

「それ……エロコスって言って、エロを目的としたコスチュームなんだけど……」

「はっ!？」

「こ、これが!?!こんなに可愛いのに!？」

いやいやいやいやそうじゃない。そこじゃない。問題はそこじゃない。

問題は――

「っ、つまりなのはは俺と――」

「じよ、冗談じゃない!!そんなつもりまったくないよ!」

一生懸命否定するわたしに、俊くんは捨てられた子犬のような目で見つめてくる。

「……まあ今日は頑張ってたご褒美……てきな」

そ、そんな目で見つめられると……。

「ほ、ほら!ガーターだっつけてあげたし」

「……かわいい」

「ほ、ほんと!?!フェイトちゃんより似合う?」

「それはない」

素直すぎる俊くんにわたしの拳が飛んでいく。くらえ!エクセリオンバスター!!

「でもほんとに可愛いよ。ガーターつきエロコスメイドとかもう理性が崩壊しそう。それも大好きなのはがこんなことしてくれるなんて」

ほんとうに嬉しそうにする俊くん。……ほんのちよつとだけかわいい。

い、いけないいけない！俊くんにかわいいなんてわたしの目もついに腐ったかと思っただよ。

……でもまあ、今日くらいはそれでもいいか。

すとん、とわたしの中の何かが底に落ちていく。体が軽くなる。心が落ち着いてくる。

正座してこちらを伺うように、それでいて変態よろしく舐めまわすようにわたしをみる俊くんに、ふつと笑いかけて隣をぽんぽんと叩いた。

子犬のようになしっぽを振って隣に座る俊くん。

わたしはそんな俊くんの体にそつと寄り添い——そのまま押し倒すようにベッドに体を密着させた。もちろん、恥ずかしいから正面同士ってのはなしにして。

「え!?ちよ、なのは!?」

慌てる俊くんはほんとかわいい。ぎゅつと体を抱きしめながら、両足で俊くんの足を挟み込む。

「今日はその……特別だから。べ、べつに俊くんのことなんて好きじゃないし、どうでもいいけど……今日は俊くんとっても頑張ってくれたからそのご褒美だもん。べつになのはがしたいからこんなことしてるわけじゃないもん」

強く強く抱きしめながら、わたしは俊くんと自分に言い聞かせる。

「そ、そうなのか……。なのは、おっぱいが当たってるんだけど……。それにふとももの柔らかい感触が……」

「……変態」

頭をこつんと叩く。

「ご、ごめんなさい……」

「まったく。ほんとにだめだめさんなんだから。……まあそんなところも嫌いではないけど」

「んじゃ好きってこと?」

「そうはいってないでしょ。調子にのりすぎ」

「すいませんでした」

まったくもう、ほんとに俊くんはだめだめなんだから。……やつぱりわたしが養ってあげないとダメだね。

「なあなのは？お前……なんかあったのか？」

ふと俊くんがわたしに声をかけてくる。その声色はどこか心配そうな表情が容易に頭に浮かんでくる。

「べつになにもないよ。なんで？」

「なんとなく。……なんとなくなのはがさびそうに思えたから」

「むー。人をウサギみたいにいつて」

「バニーはあんまり似合いそうにないな」

だから妄想でコスプレさせるのはやめてよ。

「ウサギ……か」

それはどちらかという俊くんのほうじゃないかな？なんてのは置いて……。まあすこしだけからかってあげようかな？

魔法でウサ耳をはやすわたし。頬擦りしながら、うさぎ語を話す。

「うさうさ。うささささ」

「末期症状か？」

「正直自分でも頭おかしい人の行為だと自覚してた」

なによ、うさささささって。意味わかんない。

そうこうしているうちに俊くんが反転しこちらに顔をむける。丁度正面で見つめ合う形になってしまった。

じつと見つめてくる俊くんは、思わず顔をそむけてしまう。俊くんのくせに。

「……可愛いな、そのウサ耳。でも猫耳のほうがなのはは似合うぞ」

「ほんと？それじゃ猫耳にする」

ウサ耳から猫耳に魔法をつかって変更する。ちゃんと本物同様に耳がぴよぴよこと動く仕様にしてある。魔法万歳。

……それにしてもこの幼馴染。ものすごくくだらない顔になっているけど大丈夫なんだろうか？

「俊くん、よだれたれてる」

「おっと、いけね」



じゆるじゆると音をたてながらよだれをふく俊くん。なにこの幼馴染きもい。

……まあ女の子としてはちよつとだけ嬉しい気持ちもあるけど。自分にここまで萌えてくれるのは。

「ところでなのは。俺はいつまでこの状態になってればいいのか？」

「わたしが寝るまで」

「んじや寝るか。俺は黙ってるよ」

「もうちよつとだけお話ししよ？」

抱き枕状態になってる俊くんにそう提案する。俊くんは思案したあとに肯定の意思を示した。

「まあなのはがいいならそれでもいいけど……。んで、話題はなんにする？なのはのコスプレ？」

「いやいやいやそもそもコスプレなんてしないから」

「凄いなお前。メイド服はコスプレにあらずってか。流石10年間もコスプレしてる人間は違うな」

「だからあれはコスプレじゃないってば!?!バリアジャケットなの!?!たたくもう……。えーつと話題だっけ?それじゃあ……。俊くんの今後の将来とか」

「もうちよつと軽いのにしてくれよ……」

「だーめ」

逃げようとする俊くん。ただどこつつちが両足でがちり下半身をはさんでいるし強く抱きついてるから逃げられない。観念したの両手を万歳する。

「俊くんは今後やりたいこととかないの？」

「まあとくにはないな。強いて言うならヴィヴィオの授業参観とか家庭訪問とか。ヴィヴィオのことに今後を使っていきたいかな。それとなのはやフエイトのためにも」

「他には？」

「あとは親に会いたいかな。それに……。やっぱいいや」

何かを言いかけた後、取りやめる俊くん。

「なにになに?なにを言いかけたの?」

「べ、べつになんでもないから、んなことどうでもいいだろ！」

「だーめ。幼馴染としてちゃんと聞いておかないといけないんだから」

「なんだよそれ……。そういいながらも俊くんは喋ろうとしない。無理矢理口をこじあけようとしても必死に口を閉じる。むう……。こんなときだけ強情なんだから。」

「こんなときはじつと睨みつける。そうすると俊くんはわたしの眼力に怯えてすぐに喋り出すんだから。」

「ぐっ……。そんな上目使いで見つめられると、こつちが折れるしかないよな……。」わかった、わかったよ。いうよ。その……。結婚だよ」

「……。へ？」

「だからその……。結婚したいなって思ってた……。」

「けっこん？血痕？……。もしかして結婚？」

「文字が思考回路とマッチした瞬間にわたしは俊くんに詰め寄っていた。」

「だ、だれと結婚したいの!?誰としたいの!?」

「は!?!」

「ほ、ほら、だって俊くんのまわりには沢山いるでしょ!?フェイトちゃんとかはやてちゃんとかヴィータちゃんとかリンディさんとか!新人二人は眼中にないだろう」

「けど!」

「ナチュラルに二人を蹴落としたな。それにロヴィータとリンディさんと結婚したら色々な意味でヤバイだろ」

「……。はやてちゃんは?」

「はやては……。どうかな」

「肩をすくめる俊くん。わたしのペットの癖になまいき。」

「じゃあだれなの?」

「それは……」

「それは?」

「……。お前とフェイトだよ」

「俊くんのいった名前が一瞬理解できなかった。いや正確には理解

できているんだけど、なんとなく信じることができなかった。

「わ、ワンモアプリーズ」

「何故英語。だから、なのはとフェイトと結婚できればいいなって思ってるの」

わたしと……結婚？

「そ、それってその……エプロン装着して『ごはんにする？お風呂にする？それともディバインバスターする？』とかそういうことだよね？」

「お前の中でディバインバスターは隠語になってるのか？」

「その他にも俊くんがメイド服きてご奉仕したりする生活だよね？」

「そこはなのはがしてくるんじゃないのか」

「だってメイド服なんて恥ずかしくて死にそうなんでもん」

これ部屋を明るくされてマジマジと見られたら悶死する可能性が大だよ。

「でもまあ……そんな感じかな。あんまりイメージはわからないんだけど、小さい頃から好きで高校生からは離れたくないと思って——そして気がつけば二人と結婚したいと思ってた。こうしてみると意外と俺って単純だな」

ははと笑う俊くんは、わたしは笑顔で首を横に振る。

「ううん。そんなことないよ俊くん。わたしも……わたしも実はそうだったから。わたしもね、好きな人がいて——将来この人と結婚したいなって思った。小さい頃か

らずっと一緒にいてくれて、月日が流れてLikeからLoveになっただけだったの。世間的に言えば（俊くんは無職だし将来性がないから）止められるのはわかっている。でも——好きなものは好きなんでもん。しょうがないよね」

「なのは……」

俊くんがわたしを見つめながら言うてくる。

「そこまでフェイトのことを愛していたんだな」

「殴り飛ばすぞこの野郎」

どこからそういう話になった。いや、確かにフェイトちゃんのこと

は好きだし愛してるし、結婚するならフェイトちゃんがいいって公言したことは覚えているけどさ。いやけどほんとにフェイトちゃんとの結婚生活もいいかもって思うし、正直フェイトちゃんのエプロン姿とか可愛いしもう可愛いしで最高だとは思うけど。

でも結婚したいのは——

「わたしが結婚したい相手はフェイトちゃんじゃないよ、俊くん」

「え？ そうなの？」

そこまで意外そうな顔しなくてもいいのに。

「わたしが結婚したいのは——キミだよ。朴念仁さん」

鼻をつんと押してみせる。案の定、ぽかんと口をあけたままの状態になってしまふ俊くん。

視線をきよろきよろと動かし、まわりに誰もいないことを確認すると——そつと自分を指差し

「……おれ？」

そう問いかけてきた。

それに黙って肯定する。

無音の静寂が部屋を満たす。誰かが下で起きた音が聞こえてくる。

そして——俊くんは顔を真っ赤しながら俯いていた。乙女か貴様。

「あ、いや……その……マジか。マジなのか」

「うん、マジだよ」

「そっか……。マジか。——それで俺はどうしたほうがいいの？ このまま体を委ねればいいのか？ それとも裸になって——」

「落ち着いて俊くん!? テンパリすぎだから!？」

「お、おうそうか……。そうだよな」

深呼吸して気持ちを落ち着かせる俊くん。

「えつと……。それでさ俊くん。とりあえず、返事から聞いていい？」

「そ、そうだな。えーつと……。俺も好きでした。結婚しましょう」

……。多分、というか絶対にわたしの顔は熟れたトマト以上に赤くなってる。

凄く幸せな気分。

やつと、やつといえたこの気持ち。ずっと胸に秘めていたこの想い

が成就した。それだけでわたしの世界が幸せに満たされていくのを感じた。

何も言わず、というか言えずに、わたしは俊くんを黙って抱きしめた。俊くんがうめき声をあげながら、骨らしきものがパキリといった気がしなくもないけどそんなことはどうでもいい。わたしはただただ俊くんを抱きしめる。

「あ、そうだ。ご褒美をあげないと」

「ご褒美？」

「うん、ご褒美」

すっかり忘れていたけども、そもそもわたしがメイド服で俊くんの部屋にいたのは、今日一生懸命頑張ってくれた俊くんにご褒美をあげるためだったのだ。

「俊くんなにがほしい？」

「いや……もう十分なんだけど」

わたしも俊くんに同意見なんだよね。わたしの場合、自分が一番のご褒美を手に入れちゃった……という理由もあるけど。

二人で悩んでいると、ふと俊くんが小声で

「初夜……とかするんだよね。結婚した男女って」

そう言ってきた。

いきなりのことに固まるわたし。い、いや……それはそうだけど。

「いきなりそれ……？ド変態」

「い、いやべつにしたいとか思ってるわけじゃ——」

「……なによそれ。わたしじゃ不満だっていうの？」

目が細くなるなのは。その対応に俊はビクリと肩を震わせた。

「そりゃはやてちゃんやフェイトちゃんみたいな雰囲気とかは出せないけど、それでもわたしだってその気になればできるんだもん」

そういうと、なのはは俊に覆いかぶさるポジションへと移行した。

もう完全に目がすわっている状態だ。

続きの言葉を発しようとする俊に、なのはは指を口元にあてて制止させる。

すつと体を沈み込ませるのは。その先には俊の唇が。二人とも

瞳を閉じる。窓から差し込む月の明かりが二人を照らしだす——そんなとき、

「なのはママがパパをいじめてる——……」

いるはずのない声が聞こえてきた。それも眠そうな。いまにも眠りだしそうなほど浮遊した声をだしながら。

覆いかぶさっていたなのはは体全体を震わせ、大急ぎで俊から飛びのき、声の主に目をやった。

眠い目をこすりながら、ガークんと手を繋いだ状態のヴィヴィオがそこにはいた。

「ど、どうしたのヴィヴィオ……?こんな夜遅くに」

動揺のあまり声を震わせるなのは。スカートがまくれて下着が露わになっているが、そんなこと気にとめる余裕など存在しなかった。

ヴィヴィオはガークンとは逆の手で抱いていたうさぎのぬいぐるみをもふもふしながら、

「こわいゆめみたから、パパといっしょにねようとおもったの……」  
そうしゅんとしながらいつてきた。

丁度そのとき、ヴィヴィオとは違う存在がドアのすきまからひよっこり顔を覗かせる。

「すいませんひよっこさん。ヴィヴィオちゃんが『パパがいい、パパがいい』としきりにいうものですから——ふおッ!?エロコスメイドなのはさん!」

顔を覗かせたのはさきほど別れたばかりのティアであった。

どうやらさきほど騒がしかった原因はヴィヴィオとティアのようである。怖い夢をみたヴィヴィオを寝かしつけていたティアだったが、ヴィヴィオの要望をきいて泣く泣く俊の部屋にきたということだろう。

しかしなんとというタイミングでの襲撃だろうか。

とうの本人はすでに目的の人物の隣にいそいそともぐりこんで、ぎゅーっと抱きつきながら夢の中へと旅立った。ついでにガークンもヴィヴィオの横で寝る体勢に移行している。

残ったのは点数が悪かったテストを母親に見つかったときのよう







「わたしに死ねと!」

「なーに、ちよつとお股から赤い血が流れるだけですから問題ありません」

「問題しかないよ!」

なのはのおっぱいを触りながら興奮するティア。いまにもなのお姫様だつこで抱えて下に連れて行きそう。そんなティアの暴挙を止めるべく、なのはは泣く泣

くある提案をもちかけた。

「そ、そうだティア!それなら、俊くんのベッドでわたしと寝ようよ!ほら、俊くんの隣にわたしが寝て、その隣にティアが寝るってことで!」

「でもひよつとごさんのベッド、そんなに大きくないですし」

「俊くんがヴィヴィオを抱っこしてきつきつまで詰めていけば問題ないから」

ね!?ね!?そう説得するのは。いつの間にか上下関係が逆転しているような気もしないでもないが、そこはあえていうまい。

ちなみに俊は二人の会話の大ききでヴィヴィオが起きないかを心配していた。

「まあいいでしょう。なのはさんと一緒に寝れるのならひよつとごさんのベッドも、ラブホのベッドも結果は同じです」

いったいこの娘はなにをするつもりなのだろうか。

交渉が成立し、ティアはなのはと手を繋ぎながらベッドにもぐりこむ。俊はヴィヴィオを抱っこし、自分が一番落ちる確率が高い端に移動する。順番でいえば、ティア・なのは・ヴィヴィオ・俊という順で寝ていることになる。

「うゝ……最悪のタイミングでやってきたよ」

思わずなのはが愚痴る。プロポーズ後のこの状況でいきなりの襲撃。色々と準備が整っていたなのはとしても複雑な感情だろう。

「(でも——大きく前進できたしいいかな。いまはこれくらいで)」

ヴィヴィオをあやししながら、ティアに高速デコピンをかましていく俊を横目になのははくすりと笑った。

10年以上もまったのだ。一日くらいの我慢など簡単なこと。

そう自分に言い聞かせ、なのははティアにバレないように布団越しに俊の手を握り、ゆっくりと目を閉じた。

☆

その翌日、何故かなのはがティアを俊の部屋に連れ込み俊に見せつけながらプレイしたという噂が家中に流れていた。

## A, s32. ツーカーの仲

「ただいまー!」

ガチャリと開けられた玄関から元気な声が聞こえてくる。どたとたと玄関から部屋に向けて廊下を走ってくる女の子の名前はヴィヴィオ。5歳の女の子で将来の夢は喫茶翠屋のウェイトレス。その後ろには付き従うようにアヒルのガーくん。

『ヴィヴィオー! たまごが入った袋もってるんだから走っちゃダメよー!』

「はーいー!」

右手にはおかし袋。左手にたまごパックの入った袋をもつヴィヴィオは玄関で靴を脱いでいるフェイトにそう返事をした。今日はヴィヴィオとフェイトと俊でお買い物。スーパーで食材や日用品を買ってからの帰宅である。

上限100円という規則の中で一生懸命考えて買ったおかしを早く食べたいヴィヴィオはいち早く部屋に戻ってきたわけだが――  
「ティアを撲滅させる方法を考えないと……!ティアを撲滅させる方法を考えないと……!」

魔方阵の中心でミサの恰好で踊り狂うママの鬼のような形相に思わずたまごのパックを落としてしまう。

ガタガタとその場で震えるヴィヴィオ。無意識にガーくんをぎゅつと抱きしめてなのはから視線を逸らそうとする。丁度そのときフェイトがやってきた。

それと同時にヴィヴィオはフェイトに抱きつき、

「なのはママがあくまになっちゃった……!」

そう震える声を出す。そつと抱きしめヴィヴィオの目を隠すフェイト。

「な、なのは……?なにしてるの?」

「はっ!?フェイトちゃんいつからそこに!」

「いまちようど帰ってきたところだけど……。俊は回覧板をお隣に渡しに行ってる。それでなのは、いったいなにしてるの?」

「ティアを撲殺する方法を考えてたの。この恰好みたらわかるでしょ？」

「(わからない、さっぱりわからないよ)」

くるくると踊ってみせるのはだが、フェイトの目には肉屋の解体ショー実演にしかみえなかった。

そもそも何故なのはがこんなことをしているのかは、昨日の一件が尾を引いているのが明らかである。

プロポーズの朝ということで気分よく1階にやってきたのはにおめでとうの祝福の声。てっきりなのはは自分と俊のことなのかと思ひ込み気持ちよく返事をしていた。

——が、蓋を開けてみればなのはティアの結婚報告(仮)への祝福の声。それも当の本人がどんな形であれ肯定してしまったので、嘘は事実へと変わってしまった。

「どうせ女の子との結婚報告が流れるんだったらフェイトちゃんとの結婚報告のほうがよかった！」

「あ、わたしは結構です。普通に俊と結婚するから」

打ちひしがれながら泣くなのはに追い打ちをかけるフェイト。捨てられた子犬のような瞳をむけるなのは。

フェイトはにつこりと笑ってみせた。

「そういえば……フェイトちゃん。なんであのととき否定してくれなかったの？」

「えっ」

キラリとなのはの瞳が光る。幽鬼のように立ち上がり、ヴィヴィオを抱きしめてじわじわと後退するフェイトを壁際に追い込む。

「そうだよ。よくよく考えてみればフェイトちゃんがあのととき否定してくれればよかったんだよね……。フェイトちゃん面白そうに笑ってたし……」

「そ、そうだったかなー？お、おぼえてないなー」

けっしてなのはのほうはみないフェイト。視線を明後日の方向に動かし棒読みでなのはの言葉をかわしていく。ガークンはその隙にヴィヴィオを避難させようと手を掴んでフェイトとなのは間からす

るりとヴィヴィオを抱いて抜けて出て行った。

フェイトの顔が苦虫をかみつぶしたような表情を作る。ヴィヴィオというセーフティネット、そして心の安定剤が消えたことでのなのはとフェイトの間にあつた隔絶した境界線が消えてしまったのだ。

「あはは……」

「えへへ……」

二人して笑い合う。可愛らしく笑いあう。

次の瞬間、フェイトは反復横跳びからの空中ジャンプ急降下、右と左に2回のフェイントをいれて左からなのはを抜き去ろうとした――が、そこは管理局のエースオブエース。冷静にすべての行動を見切り、フェイトが抜き去る寸前だがっちりと捕らえた。

後ろから抱きつく形で止めたなのははフェイトの耳元で、

「フェイトちゃんにも同じ苦しみを味あわせてあげる……。フェイトちゃんもまだほとんどの人に結婚報告してないもんね？大丈夫だよ、いまなら修正きくから」

「い、いやちよつとまって!?!そもそも私はティアやスバルみたいな変態にアタックされてないし――」

「母親と娘の禁断の愛って、わたしとティアよりも衝撃的な出来事だよねー」

「まっつてなのはそれはやめて!?!それだけはお願ひ!ほんとに婚姻届もってくるから!私の実印が押された状態で婚姻届を渡されるから!というかなのはその隙に俊と――」

「なんのことかわかんないな。届けを出すときだけティアをバインドで縛ろうなんて全然これっぽっちも考えてないよー」

「この悪魔!」

「そういえば高校生の頃、俊くん手作りパンあげようと思って作ってたらオーブンの中からルシファーでできたことあつたよ」

「あー、あつたねそんなこと。桃子さんのケーキ食べて魔界に帰っていったね」

「魔界に帰るルートがオーブンの中しかなかったから帰り際がシュー

ルだったよね」

なのは唐突な話題変更に対応できるフェイトは尋常じゃない。

「……久しぶりにパン作ろうかな」

「ケーキじゃなくて？」

「パンのほうが女子力高そうだし」

「戦闘力なら高いのにね」

「でもわたしってほとんど出動したことないんだよね。教導ばかりで。でもいつもいつも戦場だと家族が心配するしね……」

フェイトを解放してとととととキツチンへと向かうのは。フェイトもそれに同行する。

「女の子は心配されるよね。私も小さい頃はお兄ちゃんによく心配されてた。怪我や虐められていなかった。お母さんは男性が私の半径5m以内に近づいてきたかつて」

「後者の心配は絶対におかしいと思うんだけど」

「あの頃の私は純粋でそんなお母さんのことが大好きだったんだよね。……いまでも十分好きだけど」

なのはは強力粉やバターを取りだしながら、フェイトはたまごを割りながら会話する。

「おかあさんは流石に最初の頃は心配してたけど、実家通いだっだし局が学業優先にしてくれたしリンデイさんが面倒みてくれたりだったからそんなことはなかったかなあ」

局が学業優先させるということは、Aランク以上のなのは達がでる幕がないということ。それはつまり世界が平和である証なのでそれはそれでいいのだが――

「ここまで平和だとなにか裏で進行してそうで怖いよね」

フェイトの一言になのはは作業の手をとめて考え込む。自分達がいま置かれている状況と担っている立場。六課が出張るほどの重大な案件が裏で進んでいる可能性、全てを頭の中で計算する。

そして出た結論はこうだ。

「そうなたらレベルを上げて物理で殴ろう」

「せめて魔法でお願い」

高町なのは。ゲームはキャラを高レベルまで育ててボスの絶望した表情をみるのが大好きな女の子である。

強力粉とココアパウダーを混ぜ合わせ、ふるいかける作業をするフェイトの横で、なのははドライイースト、強力粉、砂糖、塩をはかりで計算してから泡だて器で混ぜていく。

「そういうえびヴィオはどこいったのかな？」

「あれ？そういうえびどこだろう？」

すっかりトークとパン作りに夢中になっていたなのはとフェイト。いつもこういうときに自分達の隣でにこにこ作業をするヴィオオがいないことによく気付く。

と、作業を止めた二人の耳に廊下からヴィオオの楽しそうな声が聞こえてきた。

『パパはやくかえってきてねー！お？なのはママとフェイトママはねー、ぱんつくってるよ！』

会話の内容から察するに、パパである俊と電話をしているらしい。一旦作業を中止して二人はヴィオオの元へと向かう。

受話器を無線のように両手でもってパパと会話していたヴィオオは、なのはとフェイトの存在にきづき、

「これパパ！これパパだよ！」

と受話器をぶんぶんと振り回した。

「あ、だめだよヴィオオ。受話器をぶんぶんと振り回したら危ないから。頭ごつんってしちゃうよ？」

頭ごつんの言葉をきいてヴィオオはピタリと動きをとめる。頭ごつんは嫌なのだろう。瞳をうるうるさせながら、

「なのはママ……はやくヴィオオたすけて……」

そう懇願してきた。

くすりと苦笑するなのは。なんだか極端な子だなあと心から思った。いったい誰に似たのやら。

「はいはい。なのはママはいつでもどんなときでもヴィオオを助けますよーっと。はいフェイトちゃん」

「任された」

受話器をヴィヴィオからもらったなのはそのままヴィヴィオを抱き上げてフェイトに託す。フェイトはヴィヴィオをあやしなから頭をなでなで落ち着かせる。

なのはが手に持った受話器からは俊の声が。なのははちよつと怒りながら俊に返事を返す。

「もしもしー？俊くんちよつと遅くない？いったいどこまでいつてるの？」

『それよりフェイトと二人でパンツ食ってるってマジか!?あれはやめとけ！食あたり起こすぞ！』

「いやパンを作ってるだけで——」

『へんたいへんたいっ!!』

「キミにだけは言われたくない」

まったくもってその通りである。

なのはの肩をとんとんとするフェイト。指で先程まで作業していたキツチンのほうを指差し、口をぱくぱくする。さきに行ってるという合図だろう。なのはも親指と

人差し指でOKの輪っかを作ってみせる。

ヴィヴィオを抱っこしたまま去るフェイト。それを見送ったなのはは改めて受話器越しの俊に向き直った。

『——ってことだからほんと偶然が重なってさ。ほんとに今回はなにもしてないんだ。だからいつものように頼めるか?』

「へ?あ、うん。まかせて。(……話全然聞いてなかったけど大丈夫だよね。だってもうわたしと俊くんは夫婦なんだから。それに10年以上の付き合いだしツーカーの仲だもん)」

『頼んだぞ！俺も急いで準備しとくから』

「オツケーー!」

そういつて受話器をおくなのは。いったいなにに對しての頼みこみだったのか。なのはは受話器の前でしばし考え込む。

「……いつものように頼めるか。いつものこと……いつものこと……」



必死になっていつものことを考える。自分がいつもしていること。俊が頼み込むほどのこと。となると――

「こすぷれ……かな？バリアジャケットのことをコスプレ衣装だつて言ってるもんね。俊くん目線でいくと教導してるときはコスプレ中だから、一応いつものことにはなるよね」

でもコスプレかー……。ほんとにこういうの好きだよね。そう思いながらなのはレイジングハートで実家である翠屋の制服に衣装チェンジする。

「うん、こんなところかな。……まあコスプレと問われたら微妙だけど、これはこれで……。意外とよく似合ってるし」

くるりとターンを決めるなのは。その姿ににやにやとした笑みが止まらない。

「(\*。▽。\*)」

「Σ(・ω・)」

そしてそんなのはを影からみていたヴィヴィオとフェイトもまたほんわかした気持ちになっていた。

それに気づいてなんとか平静を装おうとするのはだったが、顔が真っ赤なせいもあり装う姿がまたなんとも言えない萌えをさそう。

「み、見るの禁止！」

フェイトとヴィヴィオの目を塞ごうとするのはだったが、フェイトはそれをひらりとかわし――なのはにこんな提案をしてきた。

「ねえなのは？その服にねこ耳つけて語尾ににやんをつけるともつと可愛くなると思うよ？」

「フェイトちゃんわたしのことバカだと思ってるでしょ。……フェイトちゃんもしてくれるならいいよ」

「えっ」

自分も振られることになるとは思わなかったフェイト。しばし思案するが、

「……にやのはのためならしょうがないよね」

そういつて自分もなのはの魔法で服をかえる。ついでにねこ耳も

つけられた。

ヴィヴィオはそんな二人をみて羨ましいのか、自分も自分もとなのはにせがみ晴れてここにねこドリームが誕生することとなった。

「俊くん以外に見られませんかように。俊くん以外に見られませんかように」

「(いまのうちに写真撮っておこう)」

なのは気づかれないように写真を撮るフェイト。撮った写真を確認し恍惚の表情を浮かべる。

「ガーくんこれかわいいでしょー。ヴィヴィオのせいふくだよー」

「ワー、スゴクカワイイ!」

手を叩いて喜ぶガーくんはヴィヴィオはよしよしと頭を撫でる。

ひとしきり撮り終えたフェイトはさきほどから気になっていたことをなのはに質問する。

「そういえばなのは。俊はなんて言ったの?もうすぐ帰ってくるって?」

「あー、えつとね……。コスプレして待つてだつてにゃん。(きつとたぶん)」

「ふーんなるほどね。それじゃパン作りながら待つていようか」

「そうしよーにゃん」

「そうしよー!」

「オー!」

意気揚々と三人と一匹はキッチンへと戻り、中断していた作業を開始する。

たぶんもうすぐ帰ってくるだろう。そう思いながら楽しそうにパンを作るのであった。

「あ、ところでは。さっきの話だけど、またいつもの冗談なんですよ?」

「……はいヴィヴィオなのはママと一緒にこれをやろうねー」

「はいー!」

「ねえなのは視線をこっちに向けてよ。お願いだから視線をこっちに!」

☆

「回覧板渡しに行っただけで通報とか頭おかしいんじゃないか？」

「お前が回覧板と一緒に奥さんの下着を渡したからだろ」

「風で家の前まで飛ばされていたんだから俺は悪くないだろ。というか俺はお礼を言われるほどの功績をしたんだぞ」

「お前が一言、『奥さん、ちよつと染みがついてますよ』と言わなかったらこんなことになってないんだけどな」

交番内にて俊とおっさんの声だけが響く。お互いに麦茶で咽喉を潤しながら、卓上にはオセロ板を、その横には携帯を置きながら会話をする。

「それにしても遅いなあ、なのは。いつもなら急いでここに駆けつけてくれるんだぞなあ」

「そうだったか……？お前意外と優先順位低かったと思うぞ」

「え？マジで？」

「結構マジで」

おっさんが置いた黒が俊の白を挟み込み、盤上は一気に黒側有利へと移行する。

「でも流石にくるだろうな。身内の恥だろうし」

「人をなのはの恥部みたいにいいうなよ」

「いつてねえよ、顔面男性器」

「黙れ顔面アナル」

俊は白を盤上に置いた瞬間、人差し指で強く弾く。白のオセロは寸分の狂いもなくおっさんの顔面めがけて飛翔するが、顔を傾げるだけでおっさんは回避に成功する。

「うるせえぞヒモ」

黒オセロを置こうとしたおっさんは誤ってオセロを俊に投げつけてしまう。俊はそれを自分がてにもっていたオセロで防御する。

「うらやましいんだろゴミ虫。管理局の美少女二人と一つ屋根の下で暮らせる俺が。たまに庭にある犬小屋で寝てるけど。おっと手がすべった！」

「いやいや人としてそんな生き方は見苦しくてできないから、俺には

むかない職業だなヒモなんて。おつと手がすべってしまった！」

バチーンッ！

互いに投げたオセロが額に命中する。防御と回避を捨てて互いに一撃必殺を選択したのが仇となったようだ。

ぽとりと落ちる白黒オセロ。それが二人のファイトの合図だった。

「最近俺と会えなかったからって寂しいアピールしないでいいんだぞおっさん」

「いやいや俺は平和な交番勤務が出来てたから幸せだったんだけどな」

「あはははは」

互いにボディーブローやリアット、前蹴りからのサマーソルトなどの応酬をしつつもけっして笑顔は崩さない。既にオセロは全壊。机も無残な形へと変貌していた。

「ちよっとお前表でろ」

いい年した大人たちが何をやってるんだ。

## A, s33. ツーカーの仲2

「公務員のくせに市民様を殴るんじゃねーっよパーンチッ！」

「市民のくせに毎度毎度問題起こすなキック！」

「黙れ男爵イモツ！」

「黙れ童貞ッ！」

「……それ傷つくわ」

「……すまん」

ピタリと攻防の嵐が止む。顔を伏せて涙を隠すひよつとことをおっさんが慰める。肩に手を置いて優しく叩く。

そしてひよつとことはおっさんの顔面を思いっきり殴る。

「ふつ、もうバカ二人に言われ慣れているから、これくらいじゃ傷つかんよ」

「やっぱお前のこと嫌いだ」

「お互い様だな」

舌を出して挑発するひよつとこと、血が混じった唾を吐きながら首を鳴らすおっさん。

「真裸万象の力、いまここで見せてやろう」

「さてひよつとこと。そのままでは公然猥褻罪でお前を逮捕するぞ」

「表現の自由を侵害するつもりか？」

「部屋でやれ」

「俺の性的エネルギーが部屋一個程度に収まると思うなよ？」

「高町教導官たちが泣くぞ」

「そんなことはない。むしろ見捨てられる」

それならなおさらやるなよ。とは突っ込まないおっさん。むしろ疲れてきたのか突っ込みを放棄している節もある。

ふとそこにアイスクリーム片手にこっちをひたすら無視した歩行速度で通り過ぎようとしていた人物が目に入った。

バナラアイスをコーンの上のつけて、それを頭に乗せた小さなデバイスとともに食べる少女。おっさんが知る中で、一番の良識人。

「おいひよつとこと。お前の後ろに知り合いがいるぞ」

「ん？誰だ……おお！俺の玩具！ロヴィータちゃんではないか！」

『うわ、ヴィータちゃん。ペロペロさんに気づかれましたよ』

『他人のフリ他人のフリ』

素知らぬ顔で一切立ち止まることなく通り過ぎようとするヴィータとリイン。ひよつとこが振り返ると二人は視界から消えるように人垣の中は消えていく。しかしそ

れを見送るほどひよつとは愚かではない。

「ロヴィータちゃんまって！俺に愛を！この裸に愛を！」

真裸万象となったひよつとは人垣を掻き分けてヴィータを追いかける。ヴィータは手に持っていたバニラアイスを投げつけつつ全速力で逃走を図る。

それを逃がすほど真裸万象の能力は下ではない。地を這うような移動方法で人の間をすり抜けていくと、必死に走るヴィータの足をおもむろに掴む。

「離さないぞお……僕のロヴィータちゃん」

足を舐めながら愛しそうにつぶやく真裸万象。

「当たり前だが再逮捕された。」

☆

「僕は無実です」

「死刑に決まってんだろ」

椅子に座りヒモで雁字搦めにされた真裸万象は無実を訴えた。しかしそれはすぐに却下された。

そばにはゴミをみるような目つきで真裸万象をみるヴィータとリイン。ヴィータの迎えにきたシャマルは顛末を聞かされたあと、同情する瞳をむけていた。

「現代医学、魔術を用いても彼の完治は無理でしょう」

「あいつ解体しようぜ。社会の悪だぞ、あれ。幼女にあだなす悪党だぞ」

「違う、スキンシップだ」

「あたしじゃなけりや社会復帰できねえよあのスキンシップ」

呆れた口調をみせるヴィータ。それに照れ笑いを浮かべる真裸万

象。

「えへへ、嬉しいな」

「殺すぞボケ」

容赦なく顔面を踏み抜くヴィータ。

「これは保護者召喚だな」

やれやれとため息をついて保護者の元に電話をかけるおっさん。それをみながらリインはヴィータの肩から真裸万象の肩へと移った。「やれやれです。天使なヴィヴィオちゃんやなのはさんがいるというのに、ペロペロさんは社会のゴミ。まあヴィヴィオちゃんとなのはさんとフェイトさんという完璧すぎる布陣に大きな―をいれたという点ではいいですけどね」

「お前がロヴィータから俺に移った理由は近場で悪口をいうためか」

「それがいいになにがあるというんですか」

バニラアイスのおわびにというはからいでおっさんからもらったアイスキャンディを舐めるリイン。

「だいたいリインはペロペロさんのこと嫌いですし」

「ツンデレめ」

「デレたこと一度もありませんが」

「ツンツンめ」

「そもそもペロペロさんと関わりたくもないです」

やれやれと頭をふるリインは、可愛らしく浮遊してヴィータの肩に戻る。

リインと同じくアイスキャンディを舐めていたヴィータ、ふと疑問に思い真裸万象に声をかける。

「そういうやお前がなのは達の休日到此処にいるって珍しいな。いつもは平日だろ？」

「それに加えてヴィヴィオちゃんがきてからはずっとヴィヴィオちゃんといますから、ここにやっかいになる頻度も減っていたはずなんです」

ヴィータの後にシヤマルが続ける。

「まあそうなんだけどな。ちよつと回覧板を隣に渡しに行ったら、あ

れよあれよというまに捕まって」

「お前は天才か」

「ほんでなのはに引き取りにきてもらおうと電話かけたんだが、一向に現れなくてね。そこにロヴィータちゃんが出てくれたからちよつと遊ぼうと」

「べつにお前に会いにきたわけじゃねえけどな。それにしても珍しいな。なんだかんだいいつつ10分くらいでいつも引き取りにきてくれるだろうに」

「ひよつとごさんに嫌気がさしたんじゃないですかー」

「はっは、なにをいってるんだロリデバイス。俺となのはの仲がこれしきのことだ——」

「ひよつとご。なのは教導官が引き取りを拒否した」

あまりのショックに服が弾けとんだのはいうまでもなかった。

☆

そろそろパン作りも終盤、俊くんはまだまだ帰らないけどほんとなにしてるのかな？せつかく翠屋の制服でまってるのに。

「俊くんおそいにゃー。ちよつと心配になつてきたにゃー」

「うーん、なにかに巻き込まれたとか？」

「むしろ誰を巻き込んだかもしれないにゃ。というかフェイトにゃん。フェイトにゃんも語尾をにゃんにするにゃん」

「私どつちかというと犬だから」

「わけがわからないにゃん!？」

にゃんパンチをくりだすにゃのはの頭を撫でるフェイト。隣にはヴィヴィオがあまったパン生地でなにか動物をつくっていた。

「ヴィヴィオそれなーに？」

「これはガーくん！かわいいでしょ？」

「かわいいねー。ヴィヴィオ上手だよー」

「えへへー」

アヒルと思ひ込んでみればアヒルに見えなくもないパン生地を作るヴィヴィオ。その笑顔が眩しくて、ついつい頭を撫でてしまう。



ヴィヴィオは嬉しそうに目を細める。

「そろそろパンを焼こうか。焼いてる間に俊が帰ってくるかもしれないし」

「そうだね。きつと俊くんのことだから二オイに誘われて帰ってくるよ」

「じゃあヴィヴィオ。そのパンもせっかくだから焼こうか」

「はいー！」

元氣よく手をあげるヴィヴィオ。

「ペキンダックだにゃん……」

恐ろしいことを呟くにゃのは。

とうのガーくんは何かを察知し、フエイトの後ろに隠れてしまった。

「それじゃ私となのはが作ったパンと、ヴィヴィオが作ったガーくんパンを焼いていくよ」

「おー！」

わくわくした様子でオーブンに入っていくパンを見守るヴィヴィオ。丁度そのタイミングで電話が鳴る。

「あ、わたしがでるよ」

「ありがとう」

しゅたつと手をあげたなのは廊下に出て、鳴りやまない受話器をとって応答する。

「はい、高町です。あ、いつもお世話になってます。はい、俊くんですか？え？そっちにいる？……ああ、なるほど」

電話の相手は俊を確保しているおっさん。なのははおっさんの説明を受けたのち、げんなりした表情にかわっていった。

「いつもいつも本当にすいません！あれにはちやんと言い聞かせてはいるんですけど、持病がひどくって……はあ。ヴィヴィオがきてから少しはマシになったと思ったのですが。反動が一気に爆発したんですかね。ええはい。わかりました、引き取りにいきますね」

と、そこまで言ってからなのはようやく気がつく。自分が翠屋の制服をきていることに。そして思った。もう少し反省をさせるべき

ではないか、と。

「あのすいません。もう少し反省させるという意味で引き取り拒否でお願いします。パンが焼き上がる頃に迎えにいきますので」

パン〱幼馴染の図式を崩さないのは。電話口ではパンに負ける幼馴染のことを不憫にももっているおっさんの顔が目には浮かぶ。

「あ、それと俊くんには反省したのなら、しっかりと言われたことを守りなさいとお伝えください。はい、いつもすいません。お手数かけます。はい、それでは失礼し

ます」

ガチャンと受話器を置いたのはは、にやのはへと戻りフェイトの元に帰っていく。

「ただいにやー。俊くんね、さつきから捕まっていたみたいになやの」

「ツーカーの仲とはいったい」

「男女の違いになやのかな」

きつとなのはが俊の言葉を聞き間違っただけだと思おうよ、とは言わないフェイト。キッチンからは離れ、ソファでヴィヴィオを抱っこしながらファッション雑誌を広げているフェイトの横になのはも座る。ちなみにヴィヴィオは録画していた深夜アニメをきらきらとした瞳で視聴していた。

「あ、このお洋服かわいい。……でもちよつと甘ロリを意識しすぎてる感じかな」

「なのはには似合うと思うけど」

「えー、そうかな？わたしももう19歳だよ？甘ロリはちよつときつくないかな？」

「んー？でもまだ19歳でしょ？成人してないし問題ないよ。（甘ロリっぽいコスプレなんて慣れてるレベルでしてるし）」

「ほんと？それじゃあちよつと甘ロリも攻略していいのかなあ」

甘ロリに興味をもったのか、調べ始めるなのは。

高町ハラオウン家は平和に時間が過ぎていくのであった。

☆

一方の交番組は――

「私は醜い男です。ヴィータ様のような綺麗で素敵な子を追いかけまわすような変態です。……あの、もういいですか?」

「誰が止めていいといった。ほら早く次の言葉を復唱しろ。ヴィータ様は天使でかわいくて有能な女の子です。対して僕はミジンコよりも役に立たない存在です」

「ヴィータ様はロリなくせして黒下着をはいちやうおませな女の子です。でも仕事のときはウサギパンツやイチゴパンツをはいてきます。彼女にとってはこれで勝負下

着なのだろうか? 対して僕はたまに下着を履き忘れたまま六課に遊びに行く。そんな僕はミジンコよりも役に立たない存在です」

「お前があたしに喧嘩を売りたいことだけは伝わったよ」

全裸万象はヴィータで遊んでいた。すでにリインはおやすみモードにはいったのかシャマルのポケットですやすやと寝息をたてていた。

「とりあえずお前は反省文を書け。それ書いたらもう帰っていいから」

「え? マジで!? 帰っていいの!?!」

「いつまでも居座られたら邪魔だ。俺はそこまで暇じゃないし。ただし服を着ろよ」

「靴下はけば問題ないよね?」

「変態度が上がるだけじゃねえか。どっちにしろ猥褻物陳列罪でアウトだよ」

「難儀な世の中になったもんだ」

「世の中もお前さえいなければ世界は平和だったのにと嘆いているころだろうよ」

渡された紙にすらすらと反省文を書いていく猥褻物陳列罪。それを隣でみるヴィータ。

「お前まともな文章書けるのか」

「小中高と反省文を書かされ続けた俺は息をするかのごとく反省文を完成させることができるからな」

「誠意の欠片もないのな」

「誠意があつたらまず反省文なんて書かないし」

それもそうか。納得してしまうヴィータ。

「もう10月だな」

ふと、本当に唐突にヴィータはそう呟いた。

既に暑いから寒いに移行する期間となった。六課設立から半年が過ぎ去ってしまったのだ。

「まだ10月ともいえるがな。この半年間、色々とおつたなあ」

「あたしは忙しすぎて疲れたな。とくに最初とかな。新人は手がかかるし、遊びにくるお前はもつと手がかかるし。ヴィヴィオはかわいいけどどこか不安になるし」

「ああ、もうヴィヴィオを預かってそんなに経つのか」

2枚目を書き終えて、ラストページに文字を埋めていく全裸万象。

「ヴィヴィオの小学校とか決めてるのか？」

「ヴィヴィオの希望で俺らの母校になったよ。まあ勝手知ったるなにとやらだし、なにかと都合がつくからよかったかも。それに翠屋には桃子さんと土郎さんもいる

し、あそこで手伝いする気満々だしな」

「それじゃ家は明け渡すのか？」

「そこはまだ検討中かな。借りてくれたリンデイさんや大人組と相談したいし」

半分まで字を埋めた全裸。

「お前らがミッドからいなくなるならティアやスバルは追いかけてくるかもしれないな」

「ありそうだから困る。あいつらなのは狂にもほどがあるからな」

「まあ命の恩人みたいなもんだからな。あいつらの気持ちもちよつとはわかる気がするよ。まああいつらはキモイがな」

丁度いいタイミングで文字を埋め尽くす。かたとペンをテーブルに置き、紙をおっさんに渡す。

「ほい、反省文。そろそろなのは達が恋しくなってきたから帰るわ」

「おう帰れ。あともうくん。仕事はかどらないから」

「失礼だな。まるで俺が邪魔してるみたいない方すんなよ」

「100%お前は邪魔しかしてねえよ」

やれやれと頭をふってバカにする全裸。おっさんの拳を軽くいなしながら、台所で局部にサランラップを巻きつける。

「まてまて!?!お前それで帰るつもりか!?!」

「ん?なにか問題でも?ちゃんと猥褻物は隠してるぞ?」

「隠しきれてねえよ!?!サランラップのせいでより強調されてるじゃねえか!?!」

「勃起するとすんげえ痛いんだよな、これ」

股をさすりながら痛みを訴えるサランラップ。

「たまにお前は世界意思すら超越した存在だと錯覚するときがある」

「照れるからやめろよ」

「褒めてねえよ」

ズボンとシャツを渡すおっさん。サランラップはそれを受け取り着替える。

「あ、ちよつとサランラップを外すときの快感がたまらん……」

あえぐ全裸をスルーしてそれぞれは帰り支度を始める。ヴィータは寝ているリインを自分のポケットにいれて、シヤマルは携帯ではやてに連絡をいれる。

おっさんは書類仕事に戻り、ひよつところは全裸からランクアップ。

「さーてそれじゃ帰るか。おっさん暇つぶしになつたぜ、サンキュー」

「もうくんなよ。今度きたら殺すからな」

「ロヴィータちゃんもまたね!」

「さわんなハゲ」

抱きつこうとするひよつところにヴィータは拳を叩き込む。鼻血を出しながらもひよつところはリインを抱きしめようとするが、リインは血が流れている鼻に掌底を叩き

込む。涙を流しながらシヤマルに抱きつくひよつところ。シヤマルは苦笑いをしながらも頭を優しく撫でる。

「ロリ怖いよお……ふええ……」

鼻血をティッシュでガードするひよつところに、ロリ二人組は飽きれ

た視線を送った。

☆

自宅から香ばしいにおいがする。鼻腔を甘い香りが満たす。

その匂いに釣られるように玄関の扉をあけると、魔法少女のコスチュームに身を包んだヴィヴィオと、恥ずかしそうにスカートの裾を抑えるフェイトの姿。ヴィヴィ

オはすぐにこちらに気づいたようで、満面の笑みを浮かべてこちらに走ってきた。

「パパだ！パパおかえりー！」

「ただいまー。ヴィヴィオいたい、ステツキがパパの顔面にめり込んでいる」

「えへへー」

ステツキは振り回すのじゃないぞ。そう言いたい俊だったが、ヴィヴィオの楽しそうな笑顔をみているとそう咎める気力も失せてしまった。

それよりも、気になっていたフェイトに視線を向ける。

ツインテールにサイズがあつてなきそうなパツツンパツツンのきわどいコスチュームをしているフェイト。フェイトはさきほどから固まったように動かないでいる。

「なあフェイト——」

「ち、ちがうのこれは！えっと、えっと、ヴィヴィオとおままごととしていたらいつの間にかこんなコスプレをすることに——」

「ムチムチしててすごくエロイ」

「いやあああああああああッ!!」

顔を覆いながら逃げるように二階に駆け上がるフェイト。すごく可愛かったのに……そうショックをうける。

「あ、俊くんだ。おかえりー。パンあるよ？食べる？」

「おう食べる食べる。というかなのは、何故迎えにきてくれなかった」

「だってパン作ってたし」

「俺とパンのどっちが大切なの？」

「あの一瞬はパンだったね」

パンに完全敗北した俊であった。

なのは自分が食べていたココアパンをちぎり俊の口元に運ぶもぐもぐとハムスターのようにそれを食べる俊。

「うまい」

「でしょ？ ヴィヴィオとフエイトちゃんと一緒に作ったんだー」

ヴィヴィオを抱っこしながらなのはトリピングに向かう俊。なのはのパン作りを話を聞きながら、自分も参加したかったと嘆く。

「女の子だけの女子会だったからね。俊くんは参加不可能だよ。俊くんのほうは何してたの？」

「おっさんと遊んできた。あとロヴィーたちちゃんを追いかけたりして遊んだ」

「また謝りの電話をかけなきゃダメなんだね……」

思わずため息がこぼれてきたのはであった。

A, s34. 一家崩壊5秒前

「なのはさん、明日一日デートしてください」

「はえ？なんで？」

デスクで書類整理をしながらポツキー食べていたなのはに、ティアナは体をくねらせながら恥ずかしそうに顔を赤らめて、

「だってえ、友達になのはさんと肉体関係をもったって話したんですもの」

なのはの拳がティアナの顔面にめり込んだ。

「落ち着いてなのは!? まずいって！ 教導以外で部下を殴るのはまずいって!？」

「離してフェイトちゃん！ あと99発！ あと99発でいいから！」

「それもう死んじゃうよ!？」

なのはを羽交い絞めにして動きを止めるフェイト。なのははそんなフェイトから抜け出そうともがきながらティアナに手を伸ばす。

フェイトはなのはをぎゅっと抱きしめると自分の胸に顔を埋めさせる。頭を撫でながら、

「よしよしなのは、いい子だから。いい子だからそんなことしちやダメだよー?！」

そう優しく諭した。なのははふにやつとした表情にかわり、すぐに落ち着きを取り戻した。

『流石なのはマイスターのフェイト。あの猫を一発で落ち着かせるなんて』

『ヴィータさん、書類の山で姿が視認できないけどいたんですね』

『のんびりしないで誰か手伝えよ』

「はい、いい子いい子。それでティア、いきなりなんでそんな話になったの?！」

「ふーッ!!」

「なのはもそんなに威嚇しないの。ほらポツキーあげるから。あーん」

「あーん」



もぐもぐとポツキーを食べるのはの姿はその場にいたティアナとスバル、そしてフェイトをキュン死させたのはいうまでもない。

ティアナが頭を撫でようとして迎撃されたのもいうまでもない。

「で、ティア。いったい何があったの？いきなりなのはをデートに誘うなんて」

「私ってこんなになのはさんと仲がいいのに一度もデートしたことなんですよ？これっておかしくありませんか？」

「まあ仲がいいならそもそも殴られてなんだけどね」

「照れ隠しです」

「最近ティアのその精神力は尋常じゃないなと思ってきたよ。まあ……でもなのはも忙しいよ？指導もあるし、明日ヴィヴィオの学校の手続きと説明で有休使い切る予定だし」

「あ、ヴィヴィオちゃんもうそんな時期ですか。早いですねー」

「うちに来てから半年過ぎたもんね」

しみじみとするフェイト。思えばフェイトも色々複雑だった。いきなり金髪の幼女を幼馴染が拉致監禁したのかと疑い、それからママと呼ばれるようになりでも可愛くて萌え死にしそうになって……。

「家に帰ればヴィヴィオがお迎えで玄関まで来てくれるんだけど、それが凄く可愛くて」

「あーわかります。小さい子どもの抱きつき方とかあるんですよ。あれほんとかわいいですよね」

いつの間にかヴィヴィオトークへと話題はシフトチェンジし、なのははフェイトからこそこそと離れていく。

「なのは、どこにいくの？」

「ほえ？あ、なんかいま俊くんの気配を感じて」

「あいついまヴィヴィオと家で待機中なんじゃないのか」

「待機中というカツコイイですけど、実質はただのニートですからね」

「否定はできない」

否定する気もさらさらないのはとフェイトであったが。二人からしてみれば、仕事をしないことで自分が家に帰ったときに俊がいる

というメリツトが大きいし、余計な女関係もないしで嬉しいことばかりなのである。

「でもあいつ家事は万能なんだよな。メイドにでも転職する気か？」

「……………」

つーつと鼻血が出るのは。よだれが出るフェイト。

「落ち着けその固定砲弾とレースクイーン。その反応は明らかにおかしいぞ」

ヴィータの冷静な突っ込みに正気に戻る二人。二人とも変則ツインテールで家事をしている姿を思い浮かべてしまったみたいだ。

「まあでも……………そういうプレイもあり……………かな？」

「あり……………だね」

二人して首をうんうんと頷く様をみて、ヴィータは心の中で、  
「(どうでもいいけど仕事しろよ)」

そう突っ込んだ。

——その頃のひよつとこ——

「いでよ天剣！この障壁をブチ破れ!!」

そう言いながら、ひよつとこはスカリエッツィが作ったビームサーベルを障壁に突き立てる。障壁とビームサーベルは互いに互いの魔力を削り合い、火花を散らしていたがやがてビームサーベルのほうが空中で霧散して消えていった。

「……………やっぱりまだダメみたいだな。スカさん」

「みたいだね。ふむ……………これは面白い。ロストログアを護る障壁とはかくも固いものなのか……………。障壁というより境界か」

そばで空中分解したビームサーベルをみていたスカリエッツィは科学者としての本能が騒いでいるのだろうか、いつも以上に真剣な表情で境界と境界の中に鎮座してあるロストログア——ジュエルシードを眺めていた。

「この境界は一つ一つ、構成が違うのかもしれない。ということはそれに対応して作ったものを一個一個ぶつけて中和していく方向にもっていったほうが……………」

結界をマジマジと見ながら、専用の機械をだして調べ始めるスカリエツティ。最高の科学者の異名は伊達ではない。後ろ姿をみてひよつとこはそう改めて思った。

ひよつとこは後ろで控えていた人物に話しかける。

「なあラルゴ翁。これって本当に壊せるものなのか？嘘ついてたら鎖骨折るぞ」

「もつと年寄りを労わった発言をしてはどうか。……質問の返答ならイエスだよ。キミたちが壊せるかどうかは別問題じゃがな」

「くそ、こんなに凄い結界だとは思ってなかったぞ」

「ほっほ」

愉快そうに笑うラルゴの脳天に霧散して取っ手だけとなったビームサーベルの成れの果てを突き刺す。ビクンビクンツ！と痙攣しながら倒れるラルゴ。

「結界を解くまで契約書にいれるとサインは絶対しなかったにしても……もう少しなんとかすればよかったな」

うんざりした様子でジュエルシードを眺めるひよつとこ。かれこれ何回目になるだろうか。これと対峙し、さきほどのように自分が負けた回数は。

☆

新暦75年9月26日

俺の目の前には複雑そうな表情で一枚の紙をみているラルゴ翁、ミゼットさん、レオーネさん。その後ろで頭を抱えている秘書官と思われる女性三名。翁、秘書官いたんだな。この性欲じじい。

「もちろん、契約書にはサインしてくれませよね？お三方とも」

できるだけ笑顔を向ける。後ろで秘書官の女性がにらみつけているが、シグシグミシルに比べたら怖くもなんともない。むしろそのまま投げキッスしちゃう。

チュツ

「ガハッ……！」

……投げキッスで吐血されるとこっちも悲しくなってくる。

「……ひよつとこ君。その……キミはこの契約書の内容はしっかりと

理解した上で私達を呼び寄せ、この契約書にサインさせようとしているんだね？」

「もちろんですよ。しっかりと理解した上で契約書にサインをお願いしてるんです」

「では見間違いではないということだね。この——ジュエルシードを一個盗むが見逃せというのは」  
「ええ」

満面の笑みをもって返す。ラルゴ翁とレオーネさんは頭をため息を吐き、ミゼットさんは俺同様ににこにことした笑みを浮かべるだけだ。……流石の俺もこの人が何を考えているのかよくわからない。だからこそ注意が必要なんだがな。

秘書官は顔色が真っ青になってる。唇は紫色で膝ががくがく震えている。ゴキブリを見つけた時の小学生低学年のなのは反応そっくりだ。

「恐ろしい提案をしてきたね、キミって子は。最高評議会を救った影の立役者であるキミに私達は恩義がある。だからこそキミの申し出を無下にすることなど不可能。

そのタイミングでこの契約書にサインを申し出てくるとは……。  
キミは間違いなく上矢一の息子だよ。私の執務室に火炎瓶を投げ込んだね」

「さっさと俺に憎しみをぶつけるのやめてください。で、さっさとサインしてくださいよ。俺この後なのは達と買い物行くんですから」

「私達がこの契約書にサインしないと断ったらどうする？」

「それは考えていませんね。貴方がさきほど言ったように、この契約書を断ることなんてできない。そうせざるおえないようにこっちはコトを進めてきたんですよ。まあ……偶然が重なった結果なだけなんですけどね」

「しかし私達にも立場が——」

「やだなあラルゴ様。簡単なことですよ。——もみ消せって言うてんだよ。記録からも記憶からも抹消し、ジュエルシードは元々20個

だったという歴史を作ればいいだけの話じゃないですか。簡単なことですよ?」

「しかし——」

いまだ何かを言いかけるラルゴ翁。俺はその肩にそつと触れて、

「なーに、いまさら罪が一つ増えたところで変わりませんよ」

口から出まかせ……というわけでもないがかなりあてずっぽうだったが、かなり堪えたようで翁はだんまりとしてしまった。いくらなのは達の世代が平和だといっても、翁たちが全盛期の頃は少しくらい不祥事があつただろう、なんて考えで言ってみたが意外とそうなのか?……なんか古傷を抉つたみたいで申し訳ないな。声にだして謝つたら計画台無しだから謝らないけど。

「ところでひよつとこ君。貴方はいつからジュエルシードに興味があつたの?」

翁の代わりにミゼットさんが話し相手になってくれる。

「そうですね、ジュエルシード自体は小学生の、なのはと俺が事件に巻き込まれてからです。まあそのときは単純に綺麗だから、なのはに似合うよなー程度でした。本格的に手に入れようとしたのは高校生になってからでした。ただ本局に行つても、なのはかフェイトがいないと行動できなくてジュエルシードの保管庫も見当がつかない。そんな状態でした。そんなときこの騒動が起こつたんです。それからはやてから貰つたパスで本局の隅々まで探してようやく保管庫を見つけて、ただ障壁が張つてあつたのでスカさんに取り除くの手伝ってもらおうと思いたちました」

後は勝手にそつちが恩義を感じてるだろうと予測して、本日こうやって足を運んだ次第なんですよ。

しかしほんと探すの苦労したなあ……。本局で何回もなのはに会うし、はやてにも会うし。バレないようにするの大変だったぜ。

「でもひよつとこ君。たしかに私達は恩義を感じてるし、個人的にはその契約書にサインしてもいいと考えてる。だけど……それはあなたのジュエルシードの使い方次第。貴方は——なんのためにこのよくな大がかりな計画を? 最高評議会という大きな問題に隠れてこん

な計画を進めていたのかしら？」

使い方、つまり目的はなんだってことか……。

それはジュエルシードっていったらこれしかないだろ。

「ジュエルシードに秘められてるエネルギーを枯渇させて、結婚指輪を作るんです。プロポーズしたい人達がいるので」

「「……は？」」

おいなんだよその間抜け面は。なんか悪いこと言ったか？

「え？なに？なんか悪いこといった？」

「いえ、ちよつと驚いて……。その、なんでジュエルシードで結婚指輪を？」

「俺達三人が出会ったきっかけをくれた品物だからです。それがあつたから俺達は出会って、今日までの関係を築けた。もちろん、これを取り合つて色々あつたし悲しい出来事も起こつた。でも、ジュエルシードがなかったら俺らは出会わなかった。あの二人は出会わなかった。はやとても出会わず、ヴォルケンとも出会わず、新人とも出会わず、ヴィヴィオとも出会わなかった。そう考えると、やっぱりジュエルシードで作つた結婚指輪を渡したいと思つて。始まりの物語を作つてくれジュエルシードで、また新しい一歩を、つて」

きつとあの出会いは運命のいたずらと神様のきまぐれが起こしてくれたものに違いない。だけどそれが俺達の未来を大きく変えた。無論、いい方向にだ。

だから、また新しい道を歩んでいくなれば絶対にジュエルシードを使うんだつて高校生のときに決めたんだけだ。

ふと秘書官に目を向けると、優しい視線を俺に向けていた。まるで姉が弟に向ける視線みたいだ。いや、秘書官だけじゃない。三提督とも孫をみる年寄りのような視線を俺にむけていた。

な、なんなんだ……？

「じつにキミらしい。最高評議会がキミを認めて託していったのも理解できる」

「ええ、そうですね」

さきほどまであんなに難色を示していたハゲ翁とレオーネさんがさらさらと書面にサインした。どんな心境の変化があったんだ？

「無知は罪といいますが、知らないのですから罪になりませんよ」

ミゼットさん、段々とはやてに毒されていないか？とんでもない屁理屈をこねてるぞ。

しかししつかりとサインをしてくれた。これで三人とも契約書にサインしたな。そろそろなのはとフェイトから鬼電がくるから退散するか。

「それじゃ、もう用はありませんので退散しますわ。後のことはこつちでうまくやりますので。ジュエルシードを盗んだ後は頼みますね」  
それだけ言うのと、俺は返事を待たずに退出する。その直後になのはからコールがそれに慌てながらも対応することになった。

……それにああいっただ場ではしつかりとした口調で会話するんだな、ミゼットさんもラルゴ翁も。

☆

そんな契約を交わしてからいままで一度も進展らしい進展はない。いや今日がその進展した日だろうか。なにせよジュエルシードを守る結界が固すぎてエネルギーを枯渇させるどころの話じゃない。

「結界はスカさんに任せるとして、俺はどうエネルギーを枯渇させるかって問題あがあるんだよな」

願いを叶えるドラゴンボール、このエネルギーを枯渇させる方法を考えないとな。いっそのこと願いとしてただの石になれっしてみるか？

「エネルギー枯渇させる問題として、放出するエネルギーをどこに持っていくかが問題になるかもしれないの」

「放出するエネルギーをどこに持っていくか……。例えば、無人で生物がない惑星に行つてそこで放出するってのは？」

「そんなことしたらまずキミの命がどうなるかわからないし、管理局も捜査に乗り出すだろうね」

「おいおい、そこはそつちでなんとかしてくれよ」

「えーだってー、あの契約書には盗んだことを見逃すことしか書いてないしー」

体をくねくねさせやがって死にたいらしいなこのじじい。

「ユーノに相談してみるか、無限書庫にヒントあるかもしれないし。クロノは……立場的に相談したら職が危ぶまれるな」

「まあ頑張りたまえ」

それだけいってラルゴ翁は帰っていった。さて、俺達も帰るとするか。

☆

夕食後、ヴィヴィオを膝にのせてのんびりしているとなのはがげんなりした面持ちで隣に座ってきた。顔を覆い、悲壮感たっぷりのオーラを体から撒き散らしながら。後ろではフェイトが困った様子で苦笑いを浮かべている。

「どうした？便秘？」

「有休を使い切ってた……。今日ね、はやてちゃんに明日ヴィヴィオの小学校の手続きとか説明とか聞いてくるから有休取るって伝えたら、首をひねりながら『でもなのはちゃん有給休暇なら全部使いきつとるよ』って」

「うわ、それじゃ明日俺とフェイトだけで行くことになるのか？ちよつと緊張するな……」

「いや……わたしもいけることになったよ。自分の体を犠牲にしてね……」

苦々しく呟くなのは。先の言葉が出てこなかったため、その後を代弁する形でフェイトが答えた。

「ティアが自分の有給休暇をくれたの。ヴィヴィオが悲しむといけなからって。でも条件があって、それが――」

「わたしと一日デートすることだったの……」

なのはの処女が危ない……！

「大変だぞ、それは変態だぞ！なのはの貞操が……！」

それも分かっているからか、なのははがっくりと項垂れて俺のほうに体を預けてきた。



「うー……こんなことなら有休を使い切らなければよかった。とか確認しながら使えばよかった」

「なのはママだいじょうぶ?」

「大丈夫……じゃないかもしれない」

「ツ!? パパー!なのはママがあぶない!なのはママがあぶないよ!」

何が危ないのかさっぱりわかってないヴィヴィオがとりあえず危ないを連呼する。なのははそれがかわいいのか顔を上げてヴィヴィオを抱き寄せながらよしよしと頭を撫でる。

「……一応、上司と部下が遊ぶだけの図なのになんで一家崩壊みたいなノリになってるの……」

フェイトの冷静な突っ込みはこの際スルーしておこう。

その後フェイトに確認してみたところ、フェイトはヴィヴィオのことを予想して自分だけ有休を調整していたらしい。たしかに思い返してみればフェイトだけ仕事していたときが多かったな。

まあ……なのはの自業自得か?

A, s35. 一家崩壊1秒前

本日、高町ハラオウン家はちよつとした騒動となっていた。

「フェイトちゃんわたしのブローチ知らない!？」

「え？たしか部屋の鏡台に置いてあったよ？それより私のイヤリング知らない?」

「わかんない!」

原因はなのはとフェイト。バタなのとバタフェイが家の中を駆け回りながら身支度に追われているためだ。かくいう俺も人のことはいえないが、それでもワイシャツをきてネクタイ締めて、あとはスーツを羽織るだけなので二人よりも随分ゆつくりとした時間を過ごすことができる。

「パパー! ヴィヴィオもおきがえする!」

「はいよー」

そして本日の主役であるヴィヴィオは嬉しそうに自分が着る服をもってきた。いかにもかわいらしい服だ。いつもの萌え萌えとした服は抑え気味で、これなら学校に行くのも問題なさそうだな。

「はいバンザイして」

「ばんざーい!」

両手を上にあげるヴィヴィオから寝間着を脱がし、服を着替えさせる。シワがつかないように丁寧に着替えさせた後は靴下を渡す。ヴィヴィオはそれを受け取ると床にぺたんと座つて一生懸命に靴下と格闘しはじめた。それをぼーつと眺めておく。視界の端には忙しなく動くのはと、薄く化粧をするフェイト。二人ともそんなことしなくても可愛いのに、やっぱ女なんだな。

袖をちよいちよいと引っ張られる。それに釣られて視線を向けると、ガーくんが黒のスーツと白のスーツを掲げて、

「ドツチガイイカナ?」

そう聞いてきた。

「とりあえず白はなしかな。するなら黒だろ。青はダメだぞ、有名なキャラと被るから」

「ハイイ」

白のスーツを直しに行くガーくん。お前まで気合い入れてるのか。「ねえパパ。ヴィヴィオちよつとねむくなってきた……」

本日の主役、早くも退場しそうなんだけど。

目をこするヴィヴィオを抱き上げる。うん、ちゃんと自分で靴下をはけるようになってるな。

「いまから桃子さんの家に行くんだから我慢しなさい」

「はい」

素晴らしいながら完全に俺の胸に頭を預けるヴィヴィオ。まあ本人も興奮して昨日は中々寝つけなかったからしょうがないといえましょうがないか。

「俊くん洗濯物した!?!」

「したよ。家事は全部やつといたよ」

「わかった!あ、あこの服大丈夫かな!?!」

白のスーツとスカートでほんわかとした雰囲気を出しているのは。胸元には星のブローチ、首元からはレイジングハートをかけている。化粧もこなし普段より可愛い。

「問題ないよ。かわいく仕上がってる。しかし早くないか?今回はただ説明きいて書類とかの準備するだけだろう?入学式でもあるまいし——」

「俊くんのバカ!こういうときからちゃんとしなさいといけないの!わたしたちは若く見られるんだから、その分きっちりしておかないと!ああ……いまから見える。脱線した瞬間にはじまる保護者いびりが……」

高町家相手にそんないびりする人物がいるか?なのはの後ろに控えている人物達が恐ろしすぎてそんなことできないだろ。

「まあ実際俺らは若いしな。成人迎えてないし」

……いま思えばなのはってこの年で子持ち人妻になったんだよな。なんだろう、このエロスな響き。

「魔法淑女人妻なのは……えろいな」

「なに考えてるのかなー?」

「痛い痛いネクタイ締めないで!?!首がモゲる!」

怒った顔で俺のネクタイを引っ張るなのは。さすが必殺仕事人、手練れすぎて一瞬なにをされたか理解できなかった。

ギブを言い渡しているのに、なおもネクタイから手を離してくれないのは。ふとだんまりを決め込んだかと思うと、何を思ったのかふいに俺のネクタイを緩めて外していた。

「えーつとたしかこれをこうして……」

何かを考え込みながら俺の首にネクタイを巻きつけていくのは。これは完璧に殺しにかかっているな。

「あ、あれ?・ちよ、ちよつとまってね俊くん。これ意外と難しいよお……」

困った顔で呟くのは。俺もさつきから酸素をうまく取り込めなくて困っている。

なんとか必死でヴィヴィオだけは床に落とさないようにしているが、そろそろ本格的にヤバくなってきた……。

「あーもうわかんない!これちよつと外すからね!」

何故か締めていたネクタイを取られる。すると首元から抜けていくとネクタイはなのはの手に。そして何故かネクタイを自分に結び始めるのは。お前時間がないんじゃないのか……?

「あ、なるほどなるほど。つまりここをこうすれば……」

納得したような表情で再び俺の首にネクタイを締めていくのは。一生懸命に俺のネクタイを結んでくれているので、俺も一生懸命になのはの匂いを嗅ぐことにする。……少し香水を振りかけているな。いつもの匂いではない。

「これでよしつと。はい俊くんも面白いよ」

「おう、サンキュ」

「えへへ、どういたしまして」

ネクタイを結び終えたなのはは満足したように頷き、自分の作業へと戻っていく。

「ちよつとネクタイは歪だけど嬉しいなあ」

俺無職だからまずネクタイを結ぶ機会なんてないし、裸ネクタイくらしかないもんな。いい機会を作ってもらったヴィヴィオにも感謝だな。

「ほらヴィヴィオ。しっかりしろ。もうすぐいくぞ」

「ん……あーい」

ヴィヴィオを床におろすと、丁度着替えを終えたガーくんがやってきた。手に蝶ネクタイをもっている。

「コレシテ」

アヒルに蝶ネクタイは厳しいものがあるよな。俺はスーツを自分で着る時点で厳しいものがあると思うけど。

「はいはい。ちよつとまってる」

ガーくんから蝶ネクタイをもらい膝をついて締めていく。

「ワァー！アリガトウ！」

「どういたしまして。さて、フェイトー！なのはー！そろそろ時間だぞー！」

壁時計をみて事前に話していた時間が近づいてきたためフェイトとなのはに声をかける。

『はーい！もういくからちよつとまってる！』

遠くからなのはの声が聞こえてくる。フェイトは黒の七分袖のジャケットとタイトスカート、中は白のブラウスだ。普段はしないイヤリングが大人の色気を醸し出して

ている。はい確定。これもう勝利確定。上矢俊、たったいま陥落しました。

「おまた——」

「あー！なんでフェイトはそんな色気で俺の理性を刺激してくるかなー！これもう犯罪だなー！犯罪的なエロスだよな！これもうダメだ、我慢できない！」

「あ、俊。ネクタイ曲がってる。はいそこでストップ」

ルパンダイブの最中ふいのストップ。なんとか空中浮遊で動きを停止すると、フェイトは俺のネクタイに手をかけた。

「しっかりしてよね。いまから高町家に行つてそれから学校に行くん

だから。それにお母さんもくるんだよ？こんな曲がったネクタイしてきたら……結婚報告するときに殺されるよ」

「そんなことしなくても殺されそうなんですが」

「そのときは二人で駆け落ちでもしよっか」

当たり前だと言わんばかりのフェイトの表情は、至極真面目なものだった。……頑張ろう。

「それにしてもフェイトってネクタイ結ぶのうまいのな」

「練習してたしね。ほらやっぱりお嫁さんはネクタイ結べないとダメでしょ？」

おっとフェイト選手、親友である高町なのはに喧嘩を売りました。

しかしなのは選手それを聞いていない。友情はなんとか守る事ができましたね。

「それじゃ俺もブラとパンツをスムーズに脱がせることができるように練習しておこう」

「……なんか手慣れる感を出されるとちよつと引くかも」

……女心って難しいな。

そうこうしているうちになのはがやってきたのでようやく高町家へ行くことにした。

「ヴィヴィオちよつときんちようする……」

「大丈夫大丈夫。少し高町家で落ち着いてから学校へは行くか」

「ん、そうだね」

そんなわけでヴィヴィオを落ち着かせるために、高町家でゆっくりしてから学校へは行くことに決まった。

☆

最近ご無沙汰な高町家に帰ってくると桃子と士郎が快く出迎えてくれた。二人とも相変わらず見た目が変わらない化け物だということを追記しておこう。

「いらっしやいヴィヴィオちゃん。今日は頑張ってたね」

「うん！ヴィヴィオがんばる！ヴィヴィオむてきだからだいじょうぶ！」

力いっぱい拳を振り上げるヴィヴィオに桃子は頭を撫でる。嬉し

そうに笑うヴィヴィオをみていると俊やなのはやフェイトまで嬉しくなってしまう。桃子に頭を撫でられて少し落ち着いたのか、さきほどまでのそわそわとしていた雰囲気若干薄らいでいた。

「なのはもフェイトちゃんも俊ちゃんもガーくんもお疲れ様。ほら時間までゆつくり休みなさい。ケーキと紅茶を用意してるわよ」

「うん！ありがとうございます！」

「ありがとうございます。あの……母はまだですか？」

「さっき買い物にいったけど……まだ帰ってきてないみたいね」

「ほ……。それは安心しました。そのまま鍵をかけておいてください。母がこの場にいるとめんどくさいことになりそうなので」

「あ、あいかわらず厳しいのねフェイトちゃん……」

「今日はママとして本気ですから。私がしっかりしないと……」

「俊くんそれわたしのイチゴ！とらないでよ！」

『お前は胸についてる乳首でも食べてろ！』

『ガーくんこれなに？』

『モンブランダヨ！』

『おう。モンブランか』

『私が……しっかりしないと……！』

少しばかり涙をみせながら強い意志を覗かせるフェイトに桃子は乾いた笑いを送りながらそつと肩を叩く。

後ろにいる大きい子ども二人と小さな子ども達のお世話は大変だろうと心の中で思いながら。

「ま、まあフェイトちゃんも少しはリラックスしないとね。ほら紅茶だけでも飲んで落ち着いて？」

「は、はいありがとうございます」

ソファーにはヴィヴィオがなのはの膝の上に座りながらモンブランを食べさせてもらっている。なのははイチゴのショートケーキを食べながらヴィヴィオの面倒をみているのだが、ヴィヴィオのことに気がいきすぎて自分の服にホイップクリームが落ちそうなことに気づいていない。

「なのは、自分のクリームが落ちそうだよ」

なのはの横に座ったフェイトはなにげない動作でなのはがもっていたフォークに付着するホイップクリームを舐めとる。

「……」

「ん？どうしたのなのは？」

フェイトのほうをじつとみるなのはにフェイトが首を傾げると、なのはは無言で自分の頬にホイップクリームをちよこんとつけた。そのまま何事もなかったかのようにヴィヴィオの相手をする。

「……えっと、なのはついてるよ？」

「え？なにが？」

ぴこぴことなのはの頭にネコ耳の幻覚がみえるフェイト。目をくしくしと擦るがその幻覚は消えないどころか、さきほどよりも動きが激しくなっている。それによくみるとシッポもぶんぶんと振られている。

ヴィヴィオはガークんに自分のモンブランを食べさせており、俊は二人をよそに誰かと連絡をとっていた。

「……はあ」

だれにも見られないうちに済ませよう。

そう決心したフェイトはそつとなのはの頬に口寄せて、かわいらしい舌でぺろつとなのはのホイップクリームを舐めとった。

なのはのネコ耳としっぽは千切れんばかりに振られていた。

フェイトは周りを確認しながらさつと身を引いて、誰にも聞こえないようにひそひそ声でなのはに耳打ちする。

「なのは……いきなりどうしたの？昨日もあんなに甘えたでしょ？」

「んー？べつにー。ただフェイトちゃんが不安そうな顔してたから元気づけてあげようと思って」

「ふ、不安そうな顔って……」

「フェイトちゃんは美人なんだから、そんな顔しちやダメだよ。リラックスしなきゃ」

ヴィヴィオの頬をぷにぷにしながらにへらと笑うなのは。

「むう……なのはだって家を出るまであわあわしてたじゃん」

「覚悟決めたからね。わたしやフェイトちゃんが不安そうな顔してた



らぎ、ヴィヴィオだつて不安になっちゃうよ。だからわたし達は常に笑顔でリラックスしてなくちゃダメなんだつて」

魔導師と戦うよりもこっちのほうが簡単だよ。そう笑うのはにフェイトはふつと肩で笑った。ようやく笑うことができた。

「……かなわないなあ」

いざというときの決断力と度胆の強さ。この二つをもっているからこそ彼女はエースオブエースになれたのだ。そう悟るフェイトはなのはにそつと寄り添った。

「……ありがと、なのは」

「どういたしました。でもまあ、いまわたしが言ったことが本当なら俊くんは心臓に毛が生えた生き物だと考えたほうがいいかもね。少なくともわたし達より落ち着いて、ヴィヴィオとも普段通りに接してたんだから」

「そうだね。なんだかんだで……俊は頼もしいのかもしれないね」

二人で俊を見つめる。携帯で何かを言い争う俊に目を奪われる。二人に視線に気づいた俊はきまずそうにしながら、声量をかなり絞る。冷や汗を垂らしながら手で戸を立てるその様子に、女としての直感が働いた二人はそつと魔法で俊の電話を盗聴した。

『だから違うってスカさん。スカさんが言ってるのは、俺とお前のろりぷに天国くカウパー・サラダバーくであつて、俺が頼んだのはそれのらぶ・ぼーしょん編だつて！え？置いてない？……まいったな、それは困った。やっぱ予約しておくべきだったかな？でもタイトルのになのはとフェイトにもし受け取られたりすると危ないし』

「ちよつと奥でお話ししようか、あなた？」

一人一つの要領で両肩を外すなのはとフェイト。悲鳴すら上げる間もなくバインドと猿轡で封じ込まれた。

「言い訳は後で聞くから。まずは奥に行こうか？大丈夫だよ俊くん。返り血なら洗い落とせばいいし、いざとなったらおとうさんの服を借りればいいでしょ？」

「ヴィヴィオー、ちよつと桃子さんと遊んでおいてねー？ママ達はす

ぐに戻るから」

『はい！パパはー？』

「塵と化してなければヴィヴィオの元にまた現れるから大丈夫！」

勢いのままにヴィヴィオは首を縦に振った。もちろん理解など微塵にしていないが。

ずるずるとなのはとフェイトに引きずられる俊を手を振って見送るヴィヴィオ。ガークんと桃子は合掌して見送る。

『ち、ちがうんだ二人とも!?こ、これは純愛物語であって——』

『あのタイトルのどこに純愛要素が入ってんのー!!』

『どんなタイトルかもしれないくせに!』

『し、しってるもん！ね、フェイトちゃん！俊くんに言っただけでー!』

『え!?私!?え、えっと……ろ、ろりぷ——っていえないよ!?』

奥の間から三人の声が響いてくる。ヴィヴィオは桃子の膝の上に座りながら、桃子を見上げて笑顔を向けた。

「パパとママたちなかよしだねー!」

「そうねー、パパとママも仲良しねー。……死ななきやいいけど」

それからリンディが帰ってくるまでの間、なのはとフェイトからの無限コンボをお見舞いされていた俊は、フェイトから話しを聞いたりンデイにも無限コンボを叩き込まれることになった。

☆

無限コンボを決められてから2時間ほどの回復をしようしたが、そのおかげもあってなのはもフェイトも平常心を取り戻した。代償は大きかったものの、魔法の力で俊の衣服は元通りになり、俊は楽しそうなヴィヴィオにひかれながら自分の母校へと歩みを進めた。

「いい、俊くん。絶対に変なことしないでよね?下半身露出しちゃダメだからね?」

「まるで俺が日常的に可半身を露出しているみたいな言い方はやめてもらおう」

　啞然としすぎて言葉がでないのは。

「俺が出してるのはチンコであって下半身ではない」

「もつと悪いよ!?そのピンポイントはやばすぎるよ!?」

慌てるのはに口笛を吹く俊。ちなみにヴィヴィオはフェイトが奪取して身の安全を確保した。

「それにしても小学校か。懐かしいな。小学生まだいるかな？」

「いるわけないでしょ。そういえば俊くんってわたし達が説明受けるときなにしくの？」

「うーん、ヴィヴィオと学校見学かな」

少し悩んでそう答える俊。書類や説明ごとはなのはとフェイトのほうが得意、というより局員であるためなのは達が受け持つことになっている。ほんとのところ、俊ではなのはもフェイトも不安なので自分達で事を進めようというのが魂胆であるが。俊もそれを理解しているので何もいわず、自分はヴィヴィオと時間を潰そうと考えた結果、さきの学校見学に思い至った。

「でも最初は俺も一緒にいくんだろ？」

「そりゃね。親の名前を書かないといけないわけだし」

「だよなー。俺となのは、そしてフェイトにヴィヴィオ。それとガーくんか？」

あれ？アヒルは名前書いていいのだろうか。そもそも保護者じゃないよな？

ちらりとガーくんをみて悩む俊に、ヴィヴィオを乗せて歩いていたガーくんはぽんぽんと俊の足を叩いた。

「モンダイナイ。ガーくんハコトバシャベレルカラ」

それこそ問題なんだよなあ……。口が裂けても言えない俊であった。

ガーくんをどう扱うべきか。その考えに浸っていた俊はふとあることに気がついた。それはミッドでは当たり前のことすぎて失念していた部分。いや、なかつたことにしていた部分。それは――

「なあ……ヴィヴィオの名前つてどっちで記入するの？」

ぴたりと全員の足が止まった瞬間だった。

考えてみればそうだった。地球で生活をする以上、母親は一人しかいないのだ。なのはとフェイトの二人を母親として書くなんて真似をしたらどうなるか、想像しただけでも恐ろしい。だからこそ、高町

なのはを母親にするのか、フェイト・T・ハラオウンを母親にするのかどっちか一つを選ばなければならない。逆にいうならば、どちらか一方しか選べないのだ。

そしてヴィヴィオは選んだ母親の名字を地球では使い続けるのだ。義務教育が終わるまでは必ず。

俊は自分に聞いたです。

これまでこの問題を一度でも本気で議論したことはあっただろうか？

答えは否。

ではなぜ二人ともこの問題について触れなかったのか？

それは多分――

「なにいつてるの俊くん？」

「そうだよ俊」

「ヴィヴィオは高町（ハラオウン）性を名乗るに決まってるよ」

二人とも自分が母親で、自分の名字を使うと考えていたからだ。

「……ん？」

頭を抱えてしやがみこむ俊。自分が先送りになっていた問題をいま気づいたことに後悔するとともに、この場でどちらの姓を名乗らせるのかで言い争いをしはじめようとする二人を抱っこして高町家へと音速で帰宅することにした。

「ガークンついてこい！とりあえず年長者達に助言を乞うぞツ!!」

「オウトモサー！」

ジェットコースターのような速さを体験してはしやぐヴィヴィオに乾いた笑みを浮かべながら高町家へと帰ると、このことに察知していたのか桃子さんとリンデイさ

んが対面して待っていた。

「あら俊ちゃん。この時間だと学校に行く前にちゃんと気づいたのね」

「ええ、なんとか……。その、すいません桃子さんにリンデイさん。どうかお知恵をお貸しください。このままじゃ……。なのはとフェイトが戦争起こしてしまいます」

俊に抱きかかえられたまま、ツーンとそっぽをむく二人。桃子もリンデイも自分の娘をみながらそこまで考えが至っていなかった娘に呆れて、ため息を漏らしていた。

A, S36. 疑問多々

なのはとフェイト、両者テーブルを挟んで席についていた。その隣には保護者の桃子さんとリンディさん。ヴィヴィオはガークンと美由希さんと別室でおりがみ作りに夢中、俺はその両者の真ん中で正座していた。

「俊ちゃん……まさかとは思うけどほんとに三人で話し合いはしてなかったの?」

「……はい」

「一回も?」

「たぶん……」

俺の記憶が正しければの話であるが。俺もなのはもフェイトもヴィヴィオが誰の姓を名乗るのかなんて相談してなかったような。そもそも俺の代までしか上矢姓を名乗ることがないから失念していた。俺が高町かハラオウンを名乗るように、ヴィヴィオもまた高町かハラオウンのどちらかを名乗らなければならなかった……。

「……どうでしょう」

「どうでしょうと言われても……色々やり方はあるけども、それよりもなのはとフェイトちゃんがお互いに納得した形で了承しないことにはね。ほらなのは、ネコ

みたいにしやーしやー言わないの」

「ほらフェイトも犬みたいに唸らない」

桃子さんの隣でなのはが、リンディさんの隣でフェイトがそれぞれ威嚇する。

地獄絵図。まさに地獄絵図である。

あの高町なのはとフェイト・テスタロッサ・ハラオウンがテーブルを挟んでいれるもののいまにもやり合いそうな雰囲気醸し出している。局員がみたら失神するぞ。

俺だってさっきから冷や汗が止まらないんだから。滝のように流れる汗のせいで一張羅が台無しだ。

「まあなのはとフェイトちゃんは、二人とも自分の姓をヴィヴィオ

ちゃんに名乗らせたいのよね」

「うん！」

「でもヴィヴィオちゃんは一人だからねー。できないこともないけど……俊ちゃんのにはどっちだと思う？」

「え!?俺ですか?そうですねえ……」

「適当な返しすると後で痛い目に合うから気を付けなさいよ」

リンデイさんの忠告ともとれる発言に、顔を上げて二人に視線を移す。二人とも片方で殺戮者の瞳、片方で萌え殺す気満々の瞳で俺を見つめていた。

不用意な発言はアウトということか……。

「そうですね……俺は……。どうすべきなのかなあ」

高町を名乗っても、ハラオウンを名乗っても、結局のところヴィヴィオは幸せになるだろうしなのはとフェイトがそれで愛さなくなるということはないだろう。

「ヴィヴィオ・ハラオウンも、高町ヴィヴィオもどっちも似合うしな」

呟く俺になのはとフェイトは既に興味をなくしたようで、二人で口論を開始した。

「なのはより絶対に私の姓を名乗ったほうがいいよ。だって髪色も一緒だし、そのほうが不自然に思われないし」

「髪色が違うだけで区別するような人とは付き合わないつもりですから、その点は心配しなくても結構ですー。それよりフェイトちゃんは六課解散したあとは各地を回

っていくから忙しいでしょ?保護者面談なんかはわたしが受け持つから、やっぱり高町を名乗ったほうが自然だと思っただ」

「私だって六課解散したあとはヴィヴィオや俊のそばにいるつもりだからご心配なく。なのはだって教導あるでしょ?そっちのほうが忙しいんじゃない?」

「だいじょうぶですー。六課解散したあとは管理局辞めて翠屋で働くつもりですから」

「……ずるい」

「ずるくないもん。元々わたしはお菓子作りの才能あるし」

『それはない』

「え!?なんで総ツツコミ!?!」

お前にお菓子作りの才能があったら人類パティシエ計画が発動されているぞ。断言しよう。オーブンと魔界を繋げる女はお菓子作りの才能ではなく、黒魔術の才能があるんだよ。

「って、ちよ、ちよつとまでよなのは!俺はなにも聞いてないぞ?お前が管理局辞めるなんて」

「だって言っつてないもん」

「翠屋を潰す気か!」

「ウェイトレスとレジ打ちだから潰れないよ!つたくもー、俊くんってば。すぐになのはのことバカにして。……それに、わたしだって自分なりに一生懸命考えてみたの。管理局辞めることについては」

頬を膨らますなのは。桃子さんはなのはの頭を撫でながら落ち着かせる。

「いやでも、お前が管理局辞めるってかなり人生が変わるような……」  
「うん、それも知ってる。その上で結論をだしたの。……理由はまだきかないでくれるかな?その……決心がついたらちゃんと自分の口で説明するから」

俺はただ漠然と頷くことしかできなかった。あのなのはが、管理局で絶対的な地位を確立しているなのはが出した結論だ。口を挟むことはできない。なのはの決心がつくときをひたすらまとう。

「しかしこうなると……どうするべきか」

なのはもウェイトもヴィヴィオを譲るつもりはなし。もちろん俺の姓を使うのは論外。となると……

「やっぱり、魔導師らしく模擬戦で勝負をつけようか」

せめて母親らしい仕事で対決してほしい。

「まあなのはがウェイトちゃんに母親らしい部分で勝つのは無理だもね。和洋中一通り作れるウェイトちゃんに、無間地獄を製造するなのは。隅々まで掃除をするウェイトちゃんに、いつの間にか本を読み始めるなのは。買い物メモを見ながら品質に注意しながら買い物するウェイトちゃんに、自分のお菓子を真っ先に買い物カゴに入れるな



のは」

「母親対決ではフェイトちゃんどつこいどつこいで勝負がつかないね」

『んんッ!?』

なのはさんの自信まじ半端ねえわ！完全に負けてるのにイーブンにもっていった！

「いたっ！お、おかあさんつねらないですよ……」

桃子さん顔は笑ってるけど怒ってますわ。もしくは落胆してるか。

一気に涙目になったなのは。小動物のような視線をこちらに向けてくるので、思わずなのはの頭を撫でそうになったが桃子さんによってそれは阻まれた。

「俊ちゃんもなのはを甘やかさないの」

「あっはい」

思わず答えたけどなんかこれって違くないか？いや、あつてるといえばあつてるけどさ。

「なのはつてもうちよつとしっかりしてそうな雰囲気たまに醸し出すけど、実態はドジっ子魔法使いみたいな立ち位置だよね」

「いやいやフェイトちゃん。完璧魔法使いの間違いでしょ。それについてい掃除中に漫画読んじやうのは俊くんのせいだし、料理できなくなったのも俊くんのせいだもん」

「俺に責任転嫁とはやるな」

「ちがうもん。だって俊くんがすぐになんでもしちやうからこんなになつたんだもん。俊くんに調教されたようなもんだもん」

『……』

「はッ!？」

無自覚にきわどいセリフを吐くなのはに三人が冷たい視線で俺をみる。俺はそっぽを向いてそれを回避しようとするが、なのは自身が自爆したことに気づいて顔を真

っ赤に染めて俯いてしまった。

「……とりあえず修正しましょうか」

桃子さんの神の言葉によって全員とも何事もなかったかのように

その後は振る舞った。

☆

議論は平行線をたどるのみだった。

そもそもなのにもフェイトも一步も譲る気はなく、かといって互いが納得いく結論がでるわけでもない。(魔導師対決は母親と関係なすぎで却下した)

そろそろ決めないと今日中に訪問できないんだよなあ。

正座がきつくなつたなのは女の子座り、あとは正座しながらずつと言いつつ合っている。主になのはとフェイトが。桃子さんとリンディさんは諫めるぐらいのストッパーの役割にとどめている。親が口出して納得することはないだろう。そう結論しているっぽいな、この人達。

実際そのとおりなのだからやっぱ二人とも格が違うなあ。

「こ、こうなったらかわいいさアピール対決にしよう……」

「か、かわいいさアピール対決……?」

まあたなのはが訳の分からないことをいいだした。

「こう、どっちが萌え萌え度が高いかで競う」

「審査は誰がするの?」

「……俊くん」

やめて、マジやめて。 どうしてそう完璧なまでのタイミングで俺に話をふってくるかな。

じーつと俺のことをみつめるのはとフェイト。互いにウインクを飛ばしてくるが、どうすればいいのか判断に迷う。こんな形で決めたいのだろうか?

「い、いや……流石にそれはダメじゃないか。もっと違うことで決着つけたほうが」

「議論は尽くしたもん。俊くんだって別の案ないでしょ?」

……まあ思い浮かばんな。

萌え萌え勝負ならばたしかに不公平さはでないだろう。しかし、しかしだぞ、ヴィヴィオの名字を決める大事なイベントを萌え萌え勝負にしてしまっていないのか?色々と間違っていないか?養子縁組とか

……いやそもそも母親をどつちがするかって問題だったな。色々ど頭が混乱してきた。

「で、どつちからやるんだ。萌え萌え勝負」

「ふっふっふ、どうぞフェイトちゃん。そつちに譲ってあげる」

「むーなのは……なにその得意げな顔。私だって萌え萌えできるつてところみせてあげる」

毅然とした表情をみせるフェイト。しかし実際にやるのは萌えポーズだ。

桃子さんもリンディさんも二人でため息をついている。

咳払いするフェイト。きよろきよろと周りを確認し、この場に俺ら以外はいないことを確認したのち、深呼吸する。

カツと目を見開いたフェイト。

「ふええ……ふえいともえつてなんだかわかんないよ……でもがんばる。もえもえきゅーん！」

『失礼します。母さん、管理局のほうからようやく書類が届いた——』  
「……」

フェイトは 窓から 飛び出した

残念 リンディに つかまった

「殺して！もういつそ殺してツ!!」

「だ、大丈夫だよフェイトちゃん!?可愛かったから!ものすごく可愛かったから!ね!!」

「お、おう!そうだよ、めっちゃ可愛かったよ!」

両手で顔を覆い、悶絶するフェイトに顔をかける俺となのは。フェイトは嫌々と顔を左右にふりながら全身をピクピクと震わせている。

ちなみに押し倒して胸と下半身を揉みしだこうとしていたリンディさんはクロノによって羽交い絞めにされている。

「とうかクロノ、なにしてんの?あれ?今日って普通に仕事じゃないの?」

「まあそうなんだが、色々と準備するものがあつたもので。僕も仕事が詰まっているから失礼する。後のことは頼んだぞ俊」

「できればリンディさん引き取って」

「そうしたいのはやまやまなんだが……理由があつてな」

苦い顔をするクロノ。リンディさんを引き取るわけにはいかない事情でもあるのだろうか。介護のときは皆で平等に一日ごとに世話するって約束だからな、絶対に逃げるなよ。

視線でそう訴える俺だが、クロノはそつと視線を逸らした。

「そういうわけなのでよろしく頼む。……その、強く生きてほしい俊」  
「まて、なんだその意味ありげなセリフ。優しい笑みで退場するなアナル拡張するぞお前。」

「な、なんなんだいきなり……？それに、クロノがもっていた資料つて」

いつの間にか隣でしくしくと泣くフェイトをあやししながら、リンディさんのほうを盗み見る。柄にもなく真剣な表情で資料を読み込んだリンディさんは、ばつと立ち

上がった。

「悪いわね、ちよつと用事はいったみたい」

「あー、管理局関係ですか？」

「クロノが資料を渡しに来た時点で頭を働かせなさい」

相も変わらず厳しい人だ。

キリつとした出来る女の雰囲気醸し出しながら、自然な動作でフェイトの胸をまさぐりにいくリンディさん。直前でしくしくと泣くフェイトに腕をはらわれて俺の乳首にソフトタッチすることに。何故か全力で膝蹴りをいれられたが訴訟を起こす間もなくリンディさんはこの場を去っていった。

暴君かよあの人。

なのはと二人、顔を見合わせて首を傾げる。ちなみにフェイトは泣くのを止めたが真っ赤な鼻とうさぎの瞳で、なのはの萌えアピールをこの目でみようとしていた。

「えーつと、まあわたしとしては観客が一人減ったからラッキーだったのかな？流石におかあさんはいいけど、桃子さんやおとうさんに見られるのはちよつと恥ずかし

いし。おとうさんに見られたら憤死するかも」

舌をみせながらへへと笑うのは。かわいい、なんてかわいいんだ。

立ち上がったなのはフェイトと同じように俺らだけであることを確認して、

「なつのなつのぴよん！あなたの心になのぴよんぴよん！笑顔届ける高町なのはだよ！なのぴよんって覚えてほしいぴよん！」

『俊君達はそろそろいかないと時間がないんじゃないか？車で送っていいんか？』

「探さないでほしいぴよんッ！」

「落ち着けぴよん！大丈夫だぴよん！」

普段なら絶対にだせないであろう速度で窓を開け放ち逃げようとするのは。思考がフェイトとまったく一緒だ。

神速で逃げ出す前のはをなんとか捕まえて頭を撫でて落ち着かせる。フェイト同様顔面真っ赤に染まっている。……父親にみられたのは辛いなあ。

ま、父親である土郎さんは色々と察してくれて車のカギを俺に見せつけながらそつと出て行ってくれたけど。

「もうダメだぴよん……なののはウサギの惑星に帰るぴよん……」

頭が混乱しててなのはおかしいことをいつてるぴよん。

轟沈寸前なのはフェイト。

「桃子さん、俺はどうすれば……」

「それはもう俊ちゃんが決定権をもってるんでしょ？」

そうだった。よりにもよって今回のジャッジは俺に権限があるんだよなあ。盛大に爆散した二人の萌え萌えアピール。でもなんだかんだで二人とも必死だったし、ドロードと納得いかないよな。でも甲乙つけがたいし……。

なのはとフェイトが見つめる中、俺は頭を回転させて悩む。どっちだ？何回もリピートを繰り返すんだ。愛らしさと可愛らしさに点数をつけるんだ……！

「おーい三人ともー。もうヴィヴィオちゃんが待ちかねてるよ。いつまで学校行くの延期させればいいんだって」

俺達が重大な案件を決めあぐねている中、ヴィヴィオが美由希さんに手を引かれてやってきた。別室でガーくんと美由紀さんと三人で遊んでいたヴィヴィオだが、その頬はぷっくりと膨れており怒っていることが手に取るようにわかった。

「おそーい！もうヴィヴィオおりがみあきた！……はっ!?なのはママとフェイトママがないてる!？」

なのはとフェイトの轟沈状態に気づいたヴィヴィオは慌ててかけより、ぎゅーつとなのはとフェイトを抱きしめた。

「だいじょうぶ？なのはママもフェイトママもどこかいたいの？」

それはヴィヴィオなりの心配と気遣いで、なんだか傍から見ればヴィヴィオのほうがなのはとフェイトの保護者にみえてついつい笑ってしまった。

「パパ！はやくヴィヴィオがないたときみたいにいこいいこしないと！」

ヴィヴィオにとってなのはとフェイトが泣いているのは大層ダメなようであり、一刻も早く泣き止まそうとしている。たしかにヴィヴィオが泣きそうなときは頭を撫でると自然と笑顔になっている。

「はいはい。ヴィヴィオのときと同じように優しく愛情こめてな」

ヴィヴィオのいい子いい子はロヴィーたちやなのフェイのいい子いい子よりも少しばかり優しくソフトに意識している。なんせヴィヴィオは正真正銘の5歳児。なにが起こるかわからないしな。

両手でなのはとフェイトの頭を撫でていると、ヴィヴィオは自分も構って欲しくなったのか俺の膝の上にちよこんと座りこちらを見上げる仕草をとっていた。

「ねえヴィヴィオもしてー」

幻覚というか錯覚だと理解しているが、いまのヴィヴィオには犬の尻尾がみえてしまう。

……そうだ、ヴィヴィオにも意見をきいてみよう。

ヴィヴィオの頭を撫でながら俺はごく自然に話を切り出した。

「なあヴィヴィオ。ヴィヴィオはさ、なのはママとフェイトママどっちも好きか？」

「うん！ ヴィヴィオだいすき！」

「それじゃ……ヴィヴィオはなのはママとフェイトママの……そのなんだ」

「どう言えればいいのかわからない。」

「お前はなのはママとフェイトママのどっちの名字を使いたいか？」

「そんな切り出し方はないだろう。人の体をした悪魔じゃないか。しかし、しかしだぞ。ならどうやって切り出せば……。両隣にいる二人もどういえるのか、どう切り出せばいいのか戸惑っている。ヴィヴィオに喧嘩してる部分を見せたくないから別室に移したわけだし、二人ともヴィヴィオを目の前にして名字をどっちが使うかなんて話題を嬉々としてだせる性格じゃない。」

「ねえヴィヴィオちゃん？ ヴィヴィオちゃんはとつてもラッキーな子よ。いまね、なのはママとフェイトママとパパがね、ヴィヴィオちゃんのお名前を考えてたの。ヴ

「ヴィオちゃんが小学校で使うためのお名前をね」

「おー！ なにそれ！」

「ふふ、高町・ヴィヴィオ・ハラオウンよ」

『……え？』

「思わず三人とも声が漏れた。予想外な人物から頭の片隅にこびりついていた言葉が出てきたのだ。予期していなかったので間抜けな声が出るのも仕方がない。」

「おいでヴィヴィオちゃん。そう桃子さんは自分の膝をぽんぽんと叩き、ヴィヴィオは嬉しそうに俺の膝を離れて桃子さんに座った。桃子さんを見上げて話に耳を傾けるヴィヴィオ。」

「ヴィヴィオちゃんは幸せものよ。だってなのはママとフェイトママがヴィヴィオちゃんを右と左で守ってくれているんだもん。普通の子はパパやママのどちらか一方

「しか守れないのよ？」

「でも……パパがいないよ？」

「パパはヴィヴィオちゃんが呼べばすぐにくるから問題ないわ。それ

にパパは弱いから。なのはママとフェイトママのほうが頼りになるわ」

「たしかに……」

いやな納得の仕方だな。否定できる材料がないから受け入れるけど。あと両隣の二人は憐みをもった瞳で俺の肩を叩くな、慰めるな。泣きたくなるだろ。

「たかまち・ヴィヴィオ・ハラオウン！これがヴィヴィオのなまえー！」  
「そう。ヴィヴィオちゃんのお名前よ。これから先生にお名前はなんですか？つて聞かれたらそう答えればいいのよ。ほら、もう学校に行く時間だからパパとママについて行こうね」

「うんー！」

大きく頷いてこちらに戻ってくるヴィヴィオ。俺達の手を取ってはしやぎながら急かす。

「はやくー！ヴィヴィオがっこうにいきたい！」

「ん、あ、ああ。ちよつとまってな、パパは桃子さんに話があるから」  
「はやくきてね！」

ヴィヴィオはフェイトとガークんと手を繋ぎながら走って玄関に向かった。美由希さんも面白そうなのかヴィヴィオの後についていってしまったので残っているのは俺となのはと桃子さんのみであった。

「……ありがとうございます」

「なのはもフェイトちゃんも俊ちゃんも、三人ともどっちつかずで決められない。そう思ってたわよ。リンデイさんと土郎さんもね」

仰る通りです。申し訳ありません。

なのはと顔を見合わせてから二人同時に頭を下げる。顔は見えないが、桃子さんは笑っているだろうか？それとも呆れているだろうか？どちらにしろ、いつかこのご恩は返さなければならぬ。

「あなたたちはヴィヴィオちゃんを抜かして話をしていたけど、本当はヴィヴィオちゃんこそこの場にいるべき存在なの。だってその名前を使うのはヴィヴィオちゃんなのだから」

「ごめんなきー」



「それに俊ちゃんもなのはやフェイトちゃんより冷静に物事を考えることができる立場にいたのだから、あなたがそれに気づかないでどうするの」

「すみませんでした……」

いつぶりだろう、なのはと二人で桃子さんに怒られたのは。

「もつといえバヴィヴィオちゃんならこの結末になるだろうことをちゃんと予測しておきなさい。あなた達よりよっぽどリンディさんのほうが頭働かせてたわよ」

そういつて桃子さんは席を立ち、引き出しの中から書類を取り出した。

「この書類があれば地球でもちゃんと三人で生活できるそうよ。私も中身を確認したし、今回は特例で管理局の偉い人、えーつとミゼットさんだったかしら。この方も随分と尽力されたみたい。ちゃんとお礼いつておきなさい」

ほんと渡された書類は、ものすごく重く感じた。まるで誰かの命をその背に背負ったような——そんな感覚に陥った。

「俺らじゃなんにもできないな……」

「違うわ俊ちゃん。私達ができることがここまでなのよ。これから先はあなた達が頑張るばんよ」

その言葉に俺もなのはも首を縦に大きくふった。そうだ、これからは俺となのは、そしてフェイトで頑張らないといけないんだ。もう管理局の加護はない。支援はあ

てにはしてはいけない。

地球で過ごすのだ。なのはとフェイトは管理局員としてではなく、一児の母として、俺は父として。

「はい、頑張ります」

気合を入れ直せ、浮かれるな。俺達がいっかりしないと、ヴィヴィオの親として背中と口で語らなければ。

☆

士郎さんに車で送ってもらい、事務の対応係に話しをつけると何故か理事長室に案内された。

道中、俺もなのはもフェイトも訳が分からず困惑状態。何故理事長に？俺達はただの一家族として見学にきたのに？資料だつてミゼツトさんとリンディさんが関わっているのだ。うまくやってくれているはず。だというのになぜこんなことに？

ヴィヴィオとガーくんだけが嬉しそうに面白そうに興味深そうにきよろきよろとあたりを見回しているだけだった。俺らはアイコンタクトで事情を理解しそうと必死だったただけだ。

しかし、それも理事長室に行けばすぐに理解した。理解せざるおえなかつた。

装飾が施された理事長室、その机の前でぎこちない笑みを浮かべる俺らと変わらない年齢の女性。そして初対面ですと言わんばかりに自己紹介をするマツパ。

「こ、こんにちは。来年度より理事長に就任しましたカリム・グラシアと申します」

「補佐のシャツハ・ヌエラと申します」

カリムさん、既に俺の視線に耐え切れなくなったのかそっぽを向いて自己紹介はじめたぞ。マツパさん、鋼の精神と面の厚さで完全に俺を初対面扱いはじめたぞ。

「い、いやあのカリムさん？なに遊んでるんですか？しかも理事長つて、小学校に理事長室なんて——」

「来年度から設立されます」

「ヌーブラヤツホーさんも何故補佐なんかを」

「今度その名前で呼んだら頭カチ割ります」

カリムさんはペこペこ頭を下げるばかり、いったい全体なにがどうなっているんだ？

「俊くん、お知り合い？」

「ん、まあ知り合いといえば知り合い……かな？たぶんはやてのほうがこの二人については詳しいと思うけど。とりあえずいえることは……管理局は関わらないようだが、聖王教会は思いつきり関わってくるといふことだけだな」

いったいなにが目的で、どんな理由でこの場にいるのか。そしてど

んな方法で俺らが此処に来ることを予期していたのか。色々俺にはわからないことばかりだが……

「んー？なんかどこかでみたことあるような気がするー」

「こ、こらヴィヴィオ！そんなに人のことをじろじろみちやダメだよ」

「い、いえいえべつに問題ありません……」

「ジー」

「……なんなのです、この威圧感たつぷりなアヒルは」

少なくとも、聖王教会が噛んできたいうことは——ヴィヴィオが絡んでいるのだろう。

「あの、ひよつとこさん？その……お気持ちはわかります。あなたが聖王教会から去ったのは、あの一件を聞かれて不審に思われたからですね。あなたが私達を信用しないのはいたいほど理解できます。ですが……どうか信じてください。私達が此処にきたのは危害を加えるためではありません」

信じてくれないかとは思いますが。そう言葉の余韻を残すカリムさん。たしかに俺が聖王教会に不審を持ったことは本当だが……。

「まあ事情があるんだろう。聖王教会のトップがわざわざ未開の地球に6年も在籍するほどの理由が。べつに詮索しようとも思わないし、個人的に恨みもない。べつに俺は構わないよ。俺らもちよつと特殊な形だから学校側から便宜を図ってもらうのはありがたい」

逆に学校のトップが知り合いで話しの分かる人ならば色々都合が付きやすい。あとはまあ……関係を悟られないようにすればいいだけの話だ。

「ありがとうございます。ふふ、やっぱりひよつとこさんは優しい人なのですね」

ふんわりと笑うカリムさん。こりやその手の男性ならばすぐに堕ちるな。……教会に務めていながら罪深い人だな。

「いててっー」

ふいに耳を引っ張られてそのままねじ切られた。

耳たぶが完全に千切れた音がする。これもう再生するの無理そうだぞ。

そんな俺の耳たぶを千切った怪力、高町なのは俺とカリムさんの直線状に立ちはだかり、すつとカリムさんに握手を求めた。お、流石はなのは。

「初めまして、俊くんの妻の高町なのはです。そしてヴィヴィオの母親です。あなた、俊くんの何なんですか？」

なのはさん、狂気の笑みを含ませながらカリムさんに握手を求め  
る。

「ひいッ!？」

カリムさん、恐怖のあまり逃げ出す。なのは、左右にフェイントを入れ込んだ後すぐさま確保。こいつアマゾネスの戦士かよ。

「お、落ちて着けなのは!?!カリムさんに手を出すのは色々とマズイってば!」

「大丈夫だよ俊くん。カリムさんとおはなししたあとは俊くんをたっぷりと撲殺、もとい撲滅してあげるから」

「撲殺も撲滅もかわんねえよ!？」

「撲殺天使なのはちゃんがいい?それとも撲滅戦鬼なのはちゃんがいい?」

なんだその二択。後者は世紀末が舞台の物語か?

「ヴィヴィオねーまえにあのひとにあったことあるよー?」

「え?ほんと?」

「うん!どこだったかなー?」

「どこだろうねー?」

「ナニヲタ克蘭デルノ?」

「とくに」

『キョウカイツブシチャウゾー』

ああ……俺もフェイトと同じ安全地帯にいきたい。ヴィヴィオが必死にうんうんと唸っている様子をフェイト同様間近で観察したい。というかフェイト、さらりと魔法で俺らとそつちとの間に障壁張らないで。俺も殺戮現場から逃げ出したい。

にこやかな笑顔で俺との関係を根掘り葉掘り聞こうとするなのは。こちらに縋るような視線を送るカリムさん。いや一応頑張ったよ?

でもちよつと無理だったかなあ……。ほら、補佐であるヌーブラはガーくんに捕まって身動きとれないし。

これはもう人生諦めるしかないよ。あなたも俺も。

全てを悟った俺は静かになのはからの尋問を待つことにした。この場にバグキャラでも現れないかぎりこの場をひっくり返すことはできないだろ。

目を瞑ろうとする俺にコンコンと理事長室をノックする音が聞こえてきた。ついでガチャリとノブがまわり、スーツ姿の誰かが室内に入ってくる。

「カリム理事長。管理局からの書類はここに置いておきますよつてあら、皆。先に理事長室にきてたのね。道理でいつまでたつても来ないはずだわ。そろそろクロノ呼

び出して迎えにいかせようと思つてたところだったけど丁度いいわね」

それは俺らがよく知る人物で、さつきまで俺らと一緒にの部屋にいた人物で、俺の中で暴君として燦然と輝きを放つ、尊敬できる人。

リンディ・ハラオウン——その人がスーツ姿で理事長室を訪れた。

いたよバグキャラ

## A, S37. 問題解決?

某日、八神家にて

八神はやては書類に目を通したあと、困った顔で正面に座っている女性に話しかける。

「えつと……ほんまなんですか?」

「ほんまなのよ、はやてちゃん」

はやてに返事を返すのはリンディ・ハラオウン。俊の天敵、フェイトloveの最強母。愛ゆえに娘と母の関係を壊し、女性同士の垣根を越えてフェイトを襲う恐ろしい存在。

そんな彼女がもってきた資料を読んだはやては、そこに記されている事実があまりにも突飛なことなので目を疑うばかりであった。

「まさかヴィヴィオちゃんがなあ……。で、なのはちゃん達は知っているんやろか?」

「まだ知らせてないわ。というよりこの事実を知ってるのははやてちゃんと私と聖王教会の上のほうだけ。ということで喋っちゃダメよ」

「はーい。……こうなるとヴィヴィオちゃんを預けたあそこが怪しくなるなあ。……こつちから仕掛けておいたほうがよさそうやな」

「ん? なにかいったかしら?」

「いえいえなにも。それで、今日はどんな用件で? この資料を見せるためだけにわざわざ家に来るとは思えないんですが……貴女の場合」にやりと口角を釣り上げるリンディ。はやてはうわーつとした顔をしながらとりあえず書類を片付けて端に置く。

『リイン、雪見だいふく一個やるよ』

『ほんとですか!?! さすがヴィータちゃんです!』

後ろではリインとヴィータがはむはむと雪見だいふくを食べている。

「部屋に移動させましょか?」

「いえ、大丈夫よ」

茶封筒にいれてあるもう一つの資料とおぼしきものをテーブルで

滑らせながらはやてによこすリンデイ。はやてはそれを受け取りながら、中身を取り出し隅々まで資料を読み切った後、

「……聖王教会もやることがえげつない」

そう呟いた。

「あら、探していたものがようやく見つかったのよ？これくらい普通よ。聖王教会だって管理局に頼りたくないから私に個人的な話を持ちかけてきたわけだし。そして今度は管理局の八神はやてとしてはなく、フェイトの友人の八神はやてに話をもちかけているのよ。バカを演じることができるあなたにね」

「さあ？なんのことか、わたしには理解できかねますね」

「あらそれは失礼したわ。いまのは忘れて頂戴」

はやては何もいわずに黙って資料に目を通す。

そこに書かれている事柄は、端的に言えばヴィヴィオを聖王教会で見守るというものであった。

「これって監視ですよね？」

「監視じゃないわ。私がフェイトを温かく見守っているのと同じことよ」

「ストーリーじゃないですか」

もう、ストーリーじゃないわ。愛が為せることよ！そう頬を膨らませるリンデイをよそにはやては考え込む。

なんせここに書かれていることを友人であるカリムは実行する気なのだから。そしてこの作戦には自分の家族も巻き込まれている。

もう一度、もう一度ちらりと教師の欄をみる。

校長——リンデイ・ハラオウン

保健教諭——八神シヤマル

体育教諭——八神シグナム

校長補佐・ヴィヴィオの担任——フェイト・テスタロッサ・ハラオウン↑ここ重要

「(なぜ当然のように校長補佐にフェイトちゃんがいるのか、そして身内が担任をもつことは許されていないはず、とかそういうことは置いて……シグナムとシヤマルが先生なあ)」

恐ろしく身内で固めたものだった。教育委員会にバレればどうなるかわかったものじゃない。

しかし、きつと聖王教会ならどうにかするのだろう。

「もちろん報酬もしっかり渡すし給与も保障するわ。なんせシグナムとシヤマルを二人も縛りつけるんだもの」

「まあ管理局を退職してこっちにくるわけですから、それくらいしてもらわんとこまるけど……」

二人がそれを許すかどうか、それがはやるには気がかりだった。なんせいきなりのことだ。しかも相談もなしに勝手に組み込まれているときている。はやるにとつても正直面白くないことではある。

「はやる、なにしてんだ？」

「なにしてるんですー？」

雪見だいふくを食べながらこっちにやってきたヴィータとリイン。ヴィータを膝にのせリインを頭にのつけたはやるはヴィータの頭を撫でながら質問した。

「なーヴィータ。もしシグナムとシヤマルが管理局を辞めて教師になつたらどうする？」

「んー？あー……いいんじゃないか？どうせ仕事らしい仕事ってないし。あたしもできることなら辞めたいよ。辞めてはやるとのびのび暮らしたい」

「なんやヴィータ。そんな甘えたこといって、なにか買いたいお菓子でもあるん？」

「ねえよべつに。人を子ども扱いするな」

見た目は子どものくせに。そう思ったが何も言わないはやるとりイン。

「ところではやるちゃん、いきなりどうしたんですか？そんなこと聞いて」

「んー、ちよつとな。これみてみ」

ほいと渡した資料を読むヴィータ。雪見だいふくの串を弄びながら読み進めるヴィータだが、しだいに顔は険しくなっていく。

「……聖王教会えげつねえ」



「それもういうた」

「で、どうすんだはやて。あいつら二人とも買い物行ってるけど」

「どうていうてもなあ……。二人に聞いてみなわからへんし」

「だな。……しかしヴィヴィオがな」

「これは八神家だけの秘密やで？」

「ああ。しかしヴィヴィオが聖王教会……。のねえ」

「これはなのはちゃん達が大変やで」

「大丈夫なのかあいつら。けっこうメンタル弱いぞ」

「まあフェイトちゃんおるし大丈夫やろ。うちはうちでこの案件をどう処理するかが問題になるで」

「あたしははやての指示に従うから」

「リインもです！」

「ふふ、ありがとう二人とも」

よしよしと頭を撫でるはやてに、目を細める二人。ほのぼのとした光景が広がっている。

「ちなみに、ちなみにだけどはやてちゃん個人としてはどうなのかしら？」

湯呑を傾げるリンディにはやては一瞬だまりこむが、小さな声で呟いた。

「……俊もミッドにいないわけだし……。帰ってもええかな」

「「はい？」」

その声はあまりにも小さすぎて誰にも聞こえなかったらしく、その場にいた全員が聞き返す。

「あ、や、な、なんもない！なんもないから！」

顔を真っ赤にしたはやてが両手を大きく左右にふる。疑いをむけるリインとヴィータをさけるように顔を背けながら、はやては別の話題に切り替えていった。

☆

——現在

「説明して俊くん。この人と俊くんはどんな関係なの？浮気なの？浮気してたの？死ぬの？」

「説明してください亀頭……カリムさん」

「お母さん、私の太ももから手を離して。私に頬擦りしないで。とうかなんで此処にいるのか説明して」

三人とも違うことを口にする。なのは俊の足を踏みつけながら、俊は痛みに耐えながら勃起するテントを触りながら、フェイトは隣に座るリンデイをどかさそうと奮闘しながらかけた言葉である。

「えーっと、詳しい話はちよっと。あと上矢さんでしたよね？なんで亀さんなんですか？」

純情ぶりやがってビツチめ！

「いま何を考えました？不埒なこと考えましたよね？死にますか？殺しましょうか？」

「ガークンたすけて!?ヌーブラヤツホーこわいよ！」

「ヤメロー！」

どすつと嫌な音をたててヌーブラが崩れ去る。ガークンの頭突き恐るべし。

ヴィヴィオはヴィヴィオでカリムさんの隣にちよこんと座っている。なんか波長でも合うのだろうか、しきりにカリムさんの顔を見ながら首をひねっている。かと思えばカリムさんの太ももをちよんちよんと触ってちよつかいかけてるし、カリムさんもその様子に嫌な顔一つしないでにっこりと対応している。……人見知りしないタイプだけどんなか他の奴らと接し方が違うような気がするなヴィヴィオ。

俺の勘違いならいいけど。

「で、実際なにしにきたんです？俺らはヴィヴィオの小学校見学と説明を——」

「聖王教会の重要案件です。そう言えばあなたは理解できますよね。花瓶を割って退散したほどですから」

復活していたヌーブラがそう俺に告げた。

「……なるほどね。ってことは、俺らは聖王教会に喧嘩を売ればいいのかな？」

たしかあのときはヴィヴィオをよこせだの言ってたよな、聖王教

会。カリムさんに敵意はないが、聖王教会には敵意ばりばりあるんだよな俺。

「逆よ逆。今回は聖王教会の暴走を食い止めるためにカリム・グラシアが先頭に立って用意したの」

「フェイトちゃん、話がまったく見えないよ」

「私もだよなのは。ねえ俊、いったい何の話をしてるの?」

「聖王教会がヴィヴィオを全身舐めまわしたいって言ってるんだよ」

「聖王教会潰すべし」

「俺の体も隅々まで舐めまわしたいらしい」

「あれ?一瞬にして聖王教会が気の毒になってきた……」

どういう意味だ。

「でもまあ、俺が説明するよりも亀頭……カリムさんから詳しく聞いたほうがいいんじゃないの?俺は一回聞く権利を放棄した身だから、正確な情報を教えることができないかもしれないし」

多分俺がもってる情報と対して相違はないと思うが。聖王教会とヴィヴィオ。古代ベルカとヴィヴィオ。聖王教会がどういった組織なのかを考えれば……まあ間違いはないはず。あの人に裏を取っていないが。

これは嫌味でもなんでもなく、本当に心から思ったことなんだが……どうやらあちら側には嫌味に聞こえたらしい。カリムさんは沈んだ顔で、ヌーブラは睨みつけるが眼光が弱い。

「あーそのー……なんといえればいいんでしょうか」

視線をきよろきよろするカリムさんにリンデイさんが助け舟をだす。

「あまりこの場で詳しくは話せないわ。ただ、聖王教会にとってヴィヴィオちゃんはとつても大切な存在なのよ。おそらく、二人が思うよりもね。あの聖王教会の偉い人が魔法も認知されておらず発達もしていないこの地球にわざわざ越してきた理由を考えてみればいいんじゃないかしら」

「ヴィヴィオと聖王教会ねえ……。そういえば聖王教会ってあの聖王教会ですか?」

「あ、はい。多分その聖王教会かと」

「……聖王教会。聖王と呼ばれる存在を崇め奉る大規模組織。それがヴィヴィオと関係してるってことは……——まさか!？」

カンの鋭いフェイトは自分の中で一つの結論に達したようだ。驚きの顔でヴィヴィオを見るフェイトの顔で少しだけ複雑な表情を浮かべている。ヴィヴィオはそれに対して可愛らしい顔で首を傾げるにとどめた。

「……なるほど。それなら聖王教会が絡むのは必然というわけですね」

「流石は私の娘ね。察しがいいわ」

フェイトの手を握るリンデイさん。フェイトは心配そうにリンデイを見つめ返す。

「聖王教会……聖の王……聖杯……つまり聖杯戦争?」

「なのちゃんちよつと落ち着こう?キミは気を緩めるとなのちゃんモードになるから、もう少しだけ頑張ろう」

「はい。ヴィヴィオおいでー」

手招きするのは。ヴィヴィオはソファからぴよんと飛び降りてなのはの膝の上に座る。ヴィヴィオの髪を三つ編みにして遊び始めるのは。

「べつにヴィヴィオが何者でも関係ないことなのにねー。ヴィヴィオはヴィヴィオなのに」

「お?」

「……やっぱ気づいてたのか」

「推理小説はよく読むからね」

三つ編み中のヴィヴィオはなのはを見上げながら首を傾げる。それは他の者も同様で、なのはの発言の意味がすっかり伝わっていないのかクエッションマークを浮かべていた。

ただ一人、俺だけがなのはの言わんとしていることを理解できた。

そもそもとして、高町なのはという人間はとんでもない人間だ。普段はほよほよしているが、戦闘中でもほよほよしているが、年がら年中ほよほよしているが、一般の物差しで測ってはいけない。

「答えは簡単だよシユトソンくん」

「へんなあだ名つけんのやめーや」

動くヴィヴィオを固定して三つ編みにしたなのはどこから取り出した伊達メガネを装着して悠然と立ち上がった。聖王教会側とリンデイさんが口をぽかんと開ける中、なのははゆっくりと室内を歩きながら話す。ちなみにヴィヴィオとガーくんは安全なフェイトの隣に座っている。

「答えは常に言葉の中にある。かの有名な高町なのはが言った言葉さ」

「なのはの口調が変わったね」

「あいつはワンダフルガールだからな」

「フェイトママ、なのはママどうしたの?」

「どうもしないよ。なのはママはいつもどおり」

「……たしかにそうかも」

おい言われてるぞ。娘にワンダフルガールだって認められてるぞ。

「俊くんとスカさんが友達になった。それがわたしが疑いをもつきっかけだった。ヴィヴィオを連れてきた初日は局員として俊くんを抹殺するべきか、幼馴染としてミンチにするべきかとても悩んだけど……ヴィヴィオが可愛かったから許した。そして次に俊くんたちが知らないところでスカさんに問い詰めて吐かせた。そして答えを得た」

「お前それ実力行使っていうんだよ!」

しよぼんとした顔をするなのはだがやってることはとても恐ろしい。スカさんが不憫でならない。

「……お前それいつだよ。問い詰めたの」

「……さあ?あまり重要なことでもなかったし。さつきまで素で忘れてたことだし。うーんと……いつだったかなあ。管理局が色々変わる前かな?」

……つまり俺が色々動いていたときにはこいつは知ってた可能性があるってことか。いままで隠し通してきたって凄くないか?……いや本人も言ってたけどかなり前に忘れてたな。ヴィヴィオの

こと。

そのときになつてようやくカリムさんが口を挟む。

「あ、あの……いったいどういうことなんですか？いい、いま重要なことではないと」

「ええ。そうですけど？」

「あなたは……全て理解した上でそのような判断をしているのですか？」

「全て理解した上でそのような判断を下しましたよ」

「……………」

けろりと言ひ切るなのはに流石のカリムさんも言葉を失つたのか、体を後ろに少しずらした。リンディさんも止めないし、フェイトもなのはに任せているようだ。きつとこの問題はフェイトよりなのはのほうに分かつてるのかもしれない。

「私には何故あなたがそう平気な顔をさせているのか理解に苦しみます。……胸が痛まないのですか？どうかしようと思わないんですか？真相を知っていないながら」

「胸が痛む？誰にですか？どうにかする？何をですか？真相？それはヴィヴィオと他人の聖王オリヴィエのDNAが一緒という事実ですか？ふむふむ、ほうほう。それで／＼ε、ε、ε／＼」

カリムさんはよく我慢したと思う。拳を握るだけに止めたのは立派だと思う。

「俊の煽りスキルをなのはいかなく発揮してるよ。責任とりなよ」

「プロはこうする。だからなんですかー？(??) ? (∫三? ( (??) ?」

頬にできた手形にヴィヴィオがそつと手を触れる。暖かな温もりが頬を包み込む。こりやいい子に育つわ。なお、リンディさんからは謎の延髄チョップをもらう。

「それでって……！」

「だってわたし、一度たりともオリヴィエとともに過ごした時間なんてありませんから」

きつぱりとそう言い切るなのはにカリムさんが言葉を詰まらせる。膝に座ったヴィヴィオはなのはとカリムさんを無視して俺に首をむける。

「ねえパパ？なのはママたちなんのおはなししてるの？」

「難しい話さ。ヴィヴィオの将来の話」

「ヴィヴィオはウエイトレスさんになる！ゆめのなかでおねえちゃんもおうえんしてくれたー」

「そうだなー、夢の中でお姉ちゃんがなー。——ん？お姉ちゃん？」

「うん！きれいなおねえちゃん！」

……おかしいな。ヴィヴィオに姉がいるなんて聞いてないぞ？スカさんも何も言っていないし、もしかしてと思っただけなのは達のほうをみるとこちらにも初耳のよう言い争いをやめて、こちらを見つめていた。

「ねえヴィヴィオ？お姉ちゃんって、どんな人？フェイトママは会ったことないけど……。あ、もしかしてシグナムみたいに大人の女性の人をそう呼んでいるのかな？」

フェイトがヴィヴィオに視線を合わせながら質問する。おっぱい万歳。

「えつとねえつとね！ヴィヴィオよりおとなだった。なのはママやフェイトママみたい！それでねそれでね、ドレスきてた！それでね、とってもやさしいめをしてるの！ゆめのなかでたくさんおしゃべりしてね、おねえちゃんはいっつもえがおできてくれるの！」

興奮したようにヴィヴィオは姉の情報を喋る。個人的な感想も多いが、ドレスか……。お姫様スタイルか？そして年齢は同じくらいらしい。

「あーヴィヴィオ？なんで夢にでてきた人がお姉ちゃんなのかな？それならパパも夢に出てきた美少女悪魔っ娘ちゃんと結婚してるはずだよ？」

「えー？でもだっておねえちゃんヴィヴィオとおなじめのいろだったよ？」

「……マジか。パパの美少女悪魔っ娘ちゃんはパパを殺して満足して

帰っていったよ」

ヴィヴィオと同じ瞳。オッドアイの瞳をもつ女性……か。

ふとなのはとカリムさんを見ると、なのはは何故かドヤ顔で、カリムさんは信じられないという様子を受けていた。

「それでね？おねえちゃんはね、ヴィヴィオがウエイトレスしたいっていったらよしよししてくれてね？がんばってねっていった！……ようなきがする」

そっかー、気がするだけかー。でもそれはきつと実際にヴィヴィオと同じ見た目の人物がヴィヴィオにそういったのだろう。どうしてヴィヴィオの夢の中に現れているのか知らないが、案外ヴィヴィオのことが心配になって古代ベルカから現代に転生でもしてきたのかもしれないな。

それこそ違う生物に生まれ変わって。

「そっか。それならお姉ちゃんのためにも頑張らないとな」

「うんー」

頷くヴィヴィオの頭を撫でながら、カリムさんにこの不毛な争いの終結を提案した。

「カリムさん、とりあえずもうやめにしましょうか。お互いにヴィヴィオのことが好きでヴィヴィオを大切にしたいって気持ちは同じみたいです。聖王教会のことはそちらにお任せします。幸い、リンデイさんが校長であるなら……まあなんとかなるでしょう。ほらなのはも一応謝っておけて」

「……ごめんなさい」

わたし悪くないもん。ヴィヴィオとオリヴィエ違うもん。というオーラ全開のなのはは一応謝ったが、すぐにヴィヴィオを抱っこして頬を膨らませた。

フェイトがなのはの機嫌を取っているので、俺はカリムさんとヌーブラに向き合う。

「すいません。なのはは基本的に優しいですし柔軟な対応とかできるほうなんですけど……ヴィヴィオは特別な存在で。べつに聖王教会のことを悪くいつてるわけでもないし、カリムさんのことが嫌いとい



うわけではなくて……」

どういったらいいか迷っているとカリムさんは優しく口もとに指を置く。

「ええ。わかってますよ。あれほど真剣に向かい合ってくくれる人がヴィヴィオちゃんの親になってくれて安心しました。こちらこそすいませんでした。少し取り乱してしまっただけで……。あの、聖王教会のことは私が全力を出しますので、ヴィヴィオちゃんが話していた件について進展がありましたら報告を……」

「ええ。もちろんです。色々と解決しないといけないことも多いですしね。まあすぐに解決するとは思えませんが」

「それは同感です。おそらく年単位でのことになるでしょうから、貴方とは今後ともよりよい関係を築いていきたいものですね」

「お互い、潰しあうことがないようにしましょう」

にこりと微笑みあう。それに合わせる形でなのはが俺の手を引いた。頬を膨らませていることから察するに多少怒っているのかもしれない。スカさんから色々と聞いた

「だから、なのも思うところがあるんだろう。」

「はいはいわかったよなのは。それじゃもう帰ろうか。なんか疲れてきたし」

「帰りたいのはやまやまなんだけど……今度はフェイトちゃんの問題が」

ヴィヴィオを抱っこしたままなのはがフェイトのほうに視線をむける。そこにはフェイトがリンデイさんに壁ドンされている光景が広がっていた。逃げようとするフェイトの行動を阻むリンデイさん。

「お願いお母さん……補佐だけは許して」

「ダメよ。貴女の生活の全てを監視して舐めまわすの」

これ親子の会話じゃないよね。絶対にストーカーに居場所を突き止められてた被害者と加害者の会話だよな。

「とういかなんで勝手に決めるの。私の勝手でしょ」

「母親が爆死してもいいっていうの？」

「いやいや怖いよ!?!娘にここまで執着する母親って怖すぎるよ!?!」

助けを求めるようにすがるフェイト。

「でもフェイトちゃん。案外いいかもしれないよ?教師って福利厚生いいってきくし、ヴィヴィオのそばにいられるのは最高だよ。管理局みたいな危険なことはないし。フェイトちゃんの体が危ないかもしれないけど」

「たしかにそうだな。ヴィヴィオの安全を考えるとそれもいいかもしれない。校長がリンデイさんだし理事長がカリムさんだから都合もつきやすいだろう。フェイトの体がリンデイさんによつてとんでもないことになると思うけど」

「二人とも気づいて!無意識に私がお母さんによつて食べられることを容認してる事実気づいて!?!俊はいいの?ほんとにそれでいいの!?!」

「……親子丼を……所望してもいいですか?」

「知らないバカ!」

☆

高町家に帰ってきた俺達はホットミルクを飲みながら思い思いに過ごしていた。なのはとヴィヴィオはお風呂で女の子向けのアニメ主題歌を歌っている。

結局、フェイトの必死な抵抗と、カリムさんの助けもあつてフェイトはヴィヴィオの担任になることだけにとどまった。(リンデイさんは半径5m以内に近づかないこと。ただしフェイトが許可した場合のみ近づいていいこと)という条件つきでだが。

そして俺はというと隣で拗ねているフェイトの文句に対してイエスマンになることに徹していた。

「助けてくれなかったからショックだった。それに俊は私がお母さんに何をされてもいいってのがわかったし」

「いやいや違うよフェイト。俺がリンデイさんに肉弾戦で勝てる見込みはないし、俺もフェイトが教師になるのはとってもいいことだと思うんだ」

「ぶうっっっっ」

「俺の好きなテイアーユ先生とそっくりになるし」

「さようなら俊。籍を入れる前でよかったよ」

「まってフェイト先生！冗談だよ！冗談だから！」

立ち去ろうとするフェイトの足にしがみつく。この体勢からだ  
と下着が見えて役得ですよ。ぐへへ。

「……俊の前でスカート履くのやめようかな」

ぼそりと呟かれたフェイトの恐ろしい発言に僕はたまらず無言で  
姿勢正しく土下座した。

「でもフェイト。管理局はよかったのか？カリムさんも管理局に残る  
つもりなら無理強いは決してしないとは言ってたけど」

本人は是が非でも教師になってくれって視線で訴えていたけど。

「うーん、なのはが管理局を辞めるつもりなら私もいいかなって。そ  
れに教師のほうがヴィヴィオも安心すると思うし」

まあ確かにな。なのはが翠屋で仕事して自宅に帰ってきて、外で仕  
事してきたフェイトをお出迎えとか最高じゃん？フリルエプロンで  
お出迎えのなのはとか最高じゃん？俺？隣でオナニーしてるからそ  
れでいいよ。それでティッシュを処理してくれるだけだよ。

「……二人とも無事に辞められるといいけどな。俺はそれが心配だ  
よ」

「……いざとなつたらなのはと結婚するから静かに暮らしますって宣  
言しようかな。でもそうすると色々誤解が生まれてしまうような  
……」

心配しなくてもその誤解はすでに生まれている。そしてそれは誤  
解でもないぞ。

「お母さんがごめんね俊」

ふいにフェイトが話しかけてくる。その顔は少し困っていた。

「お母さんの気持ちも理解できるんだ。今回のことだって、ほんとは  
私のことを心配しているからだって気づいてる。成人もしてない娘  
が死ぬかもしれない仕事をしてるのは親なら心配して当然だよな。  
いくらいまは世界が平和だからって、この平和が何年続くか分からな  
い。もしこの平和が壊れたら、私の実力からしたら……ね」

真つ先にいくことになるっか。

「なのはも私も親の気持ちは痛いほどわかってるつもり。だからまあ……なんというか。結婚もするしそろそろ親を安心させたいなって。それにもう——」

俺に寄りかかってくるフェイト。肩の力をぬいて全身を俺に預けてくる。上目づかいでこちらを見上げて、微笑みながら

「守ってくれる旦那さんがいるからね」

勃起 不可避。僕の股間は盛り盛り盛り上がりました。ええ、それはもう暴発寸前です。

全身を預けてくるフェイト。これはもう、そういうことなのでは？生唾飲み込み居住まい正し何かを期待するフェイトの体に触れようと手を伸ばす。

「フェイト……愛してるよ」

「——私もよ」

最後にみた光景はフェイトと俺の間に顔だけ突出しこちらに見続けるリンデイさんの顔であった。

『あ、フェイトちゃんお風呂あいたよー』

『はーい。ほらお母さん、さっさとお風呂はいるよ。俊はそこに置いて。……せつかくいい雰囲気だったのに』

『えへへ、フェイトは一生私のものよ』

『はいはい。わかったわかった』

「ねえなのはママ？パパはなんでしろいめむいてるの？」

「きつと恐ろしいものを見たんだよ。ほらヴィヴィオ、髪乾かすからこっちきて」

俊が倒れているその横でのんびり髪を乾かす嫁と娘であった。

☆

いつもの場所、花が世界を取り囲み、上を見上げれば果てしない空が広がっている空間で小さな女の子は純白なドレスを纏う女性に話しかける。身振り手振りをくわえて、子どもながらに今日あったこと楽しかったことを女性にも感じてほしいと思う女の子に、優しく笑いかける女性。やがて女の子は喋りつかれたのかとてとてと女性に近

づき膝の上に座った。よしよしと頭を撫でながら子どもをあやすように女性は子守唄を歌う。女の子は子守唄を聴きながら、ゆっくりとまぶたを閉じる。その顔はとても幸せそうで、女性は満足そうに頷きながら隣でのんびり座っているアヒルの頭を撫でた。アヒルは嬉しそうに頬を摺り寄せながら、そつとくちばしで女性の手の甲に触れる。さながらその光景は騎士と姫の誓いを彷彿とさせる光景であった。アヒルにとって、ヒナから育ててくれた女性はそれほど特別な存在だということだ。そして、そのDNAを受け継ぎ、継承している小さな姫もアヒルにとってはまた特別な存在となっている。

明日もまたよろしくね。

——ヴィヴィオを膝にのせながらオリヴィエはそう自分の小さな騎士に呟いた。

ヴィヴィオの小学校見学が終わった翌週、なのはのはのんびりとデスクワークをしながら料理本を読んでいた。制服姿に足を組みながらぺらぺらとめくる料理のタイトルは『女の必見料理く男を轟沈させる魅力の料理く』。男を海の底に沈めることに特化した料理の数々が並んでいる様だった。

後ろのスペースではヴィヴィオがガーくんをひよつとことヴィータでつみき遊びの真っ最中。向かい側のデスクではフェイトがテイアナに勉強を教えている。

「あ、ヴィヴィオ！ここはこっちにしないと倒れるぞ！」

「だいじょうぶ！ガーくんをここにはめこめばもんだいない」

ふんふんとヴィヴィオはガーくんの体をつみきで築いた橋の真下に無理矢理はめこむ。目を見開いて驚いた表情を浮かべるガーくんだが、愛するヴィヴィオのために無言で自ら橋を支える土台となる。その行動に敬意を表しながらひよつとことヴィータは手をパチパチと叩いた。

「これがプロってやつか」

「ロヴィータも守護騎士を名乗るなら、これくらいしないとな」

「流石のはやてでもつみきで作った橋の下にもぐれって指示は出せねえよ」

満足そうに頷いてガーくんを引っ張り出すヴィヴィオを見ながら二人は話す。案の定、ガーくんを引っ張り出した衝撃で橋は見事に崩れマットを敷いたヴィヴィオ専用遊びルームの中でつみきは盛大にばらばらと散らばってしまう。その様子を眺めながら茫然とするヴィヴィオ。

とりあえずガーくんを抱っこしてひよつとこの胸に抱きつくヴィヴィオ。あやしなから散らばったつみきを眺めながら苦笑する。

「あー残念だったヴィヴィオ。せつかく作ったのに壊れちゃったね。また今度頑張ろうか。今日は違うことしよう」

「……………うん」

「大丈夫大丈夫。きつと3割くらいは妖怪のせいだから。妖怪リモコン隠しにチンゲ散らしがいるんだから妖怪つみき倒しもいるさ。ほらここに妖怪ロリータ娘もいるだろ?」

「喧嘩売ってんのかお前」

「でも最近ニュースでみたけど、なんでもかんでも妖怪にする子どもが増えたらしいな」

「ああそれな。子どもをもつ親は大変だろうな。なんでもかんでも妖怪のせいにされて煽られるんだしな」

「でもこれのおかげで俺の活動もしやすくなったよ」

「は?」

おもむろに立ち上がりズボンを下げるひよつとこ。ズボンを手をかけた瞬間にヴィヴィオを自分のところに退避させて耳を塞ぐヴィータ。ガーくんは目にもとまらぬ速さでヴィヴィオの顔に自分の翼を当てて視界が見えないようにする。

ズボンを下ろしたひよつとこはそのままの勢いでパンツを脱いで、勃起したままのいちもつを握り、座って料理本を読んでいたなのは所におもむろに向かい、気分よく歌いながらいちもつでなのはをピンタする。

「ヨーでる ヨーでる ヨーでる ヨーでる ようかいでるけん でられんけん!」

気分よく歌う掛け声とともにひよつとこは白い何かを発射しなのはの顔にかけた。

「これは妖怪のせいなのか!? そうだろう! なのは、いま何時?」

おもむろに立ち上がったなのはは無表情のままひよつとこの首を締め上げる。

「大惨事に決まってるだろコラア……ッ!」

『いいかヴィヴィオ。お前はパパに育てられてると勘違いしちやダメだぞ。なのはママとフェイトママに育ててもらってるんだ』

『?よくわかんないけどわかった』

その後、八神はやてのもと事情聴取が行われ彼は六課の冷たい床で全裸のまま一日を過ごして釈放された。

なお、女性からは冷たい視線を浴びせられ、被害者からは会うたびに唾を吐きかけられる。

以下は目撃者の証言と容疑者の弁明、被害者の怨嗟の声をお聞きください。

目撃者一・いや……なんというか一瞬の出来事で体が反応できなかった。あれが夫だと思うとちよつとだけ結婚は先延ばしにしたほうがいいように思えてきた。

目撃者二・あれやばいっすよ。私もなのはさんへの思い入れは強いですけど、あれはやばいっすよ。

目撃者三・あいつは一年間ぐらい衛星軌道拘置所にぶちこんだほうがいいって。

容疑者の弁明・違います！これは妖怪のせいなんです！あの制服姿で足を組むエロさに欲情した妖怪のせいなんです！信じてください、僕は無実です！

被害者の怨嗟・フェイトちゃんが止めなかったら息の根を止めることができませんでした。妖怪のせいなので処分はなしでお願いします。



A, s39. シグナム先生のムフフな授業（前編）

暗く寒いこの道はどこまでも果てしなく広がっている。どんなに叫んでも、どんなに泣いても世界は僕の方に目を向けることなく、地球は通常通りに回転する。このときほど、僕は自分を呪ったことがない。自分の弱さを恨んだことはない。自分の愚かさや醜さを妬んだことはない。僕がいなくても世界は廻る。だとしたら、僕の価値ってなんだろう。

「現状無価値だと思うよ」

肌寒い廊下で全裸正座されていると、フェイトが屈んだままそういった。屈んでいるのだからもつと配慮してほしいものだが、どうも今回はそういうことはないらしく膝かけ持参の屈み体勢で話しかけてくる。

「まったくもう、なーんであんなことするかなあ。覚悟が出来ていないとか、エースオブエースとして心が砕けそうになったとか、雰囲気というものを理解してほしいとか、なのはぶつぶつ独り言呟いてるよ。ヴィヴィオを抱きながら。もつとこう……雰囲気とかさ。やっぱあるでしょ？」

「しかし顔射というのはマーケティングみたいなもの。これはもうセックスなのでは？」

ボールペンで両目を貫かれた上に唾まで頂けた。これほどの褒美はもうないだろう。

「とりあえず今日一日そこで反省してね。それじゃ」

「え？トイレは？肛門からもマーケティング活動することになるよ？それでもいいの？夫が肛門からマーケティングすることになるけどそれでもいいの!？」

『大丈夫大丈夫。それくらいで私達は愛想尽かしたりしないから。そんな軽い女じゃないから私達』

「いやいや恰好いいしありがたいけど、そういう問題じゃないから!？俺の人としての尊厳が失われて——」

『それならもとからあつてないようなものでしょー』

にこにこ笑顔で手を振るフェイトは、そのまま部屋へと消えていく。一人寂しいこの廊下でまた一人になってしまったようだ。

コツコツと靴を鳴らしながら近づくる女がいた。淫乱ピンクくつ殺騎士のシグナムだ。亀甲縛りのため体を動かせないの、小刻みにチンピクすることで挨拶した。

「おつすシグナム。浮かぬ顔してんな」

「話しかけるなクズ」

どうやらシグナムの耳にも届いているらしい。女ばかりの情報網ほど怖いものはないな。もっぱら広報活動に勤しんでるのはアホ女ことスバティアだろうけど。

「スバルとティアアナが嬉々としてお前の悪事を広めていたぞ。なのはを寝取るチャンスだといって」

「バカいうな。なのはにはフェイトがいるんだぞ。あの聖域を犯せるやつなど存在しない」

なのフェイトこそが理想郷。俺？隣でオナニーしてるからそれでいいよ。

「にしてもなんか元気ないな。オークにでも犯されたか。淫乱ピンクくつ殺騎士のシグナムよ。俺に相談してみるといい。オークのようにお前を犯してフラツシユバツ

クするような一生消えない心の傷をつけてやるから」

爽やかな笑顔でシグナムの心に寄り添っていく。シグナムは少し考えたあと、一度飲み物を買ってくる言い残して去っていく。数分して戻ってきたシグナムの手にはホットココアとおしるこ。シグナムはチンピクしている俺の棒の支えになるようにホットココアを股の下にもぐらせる。

「あつつツ!?シグナムさん熱い!めっちゃ熱い!肉棒の止まり木みたいになってるから!?ココアの使い方間違ってるから!これ常に85。以上を維持しないと熱でとんでもないことになるって!いいのをお前!貴重な男の精子が死ぬんだぞ、それでいいの!」

「どうせ生まれてきてから何十億と犠牲してきたんだろう。いまさらじゃないか」

お前の場合、元を断とうというのが問題なんだよ。

自身はおしるこを飲みながら、俺の隣に座るシグナム。こいつ絶対に犯す。亀甲縛りが解かれて俺がまだなのはに殺されていなければこいつを犯して孕ませてとんずらしてやる。それか調教して性奴隷にする。

おしるこ入りのカップを傾けたシグナムは困惑した表情でぽつりとつぶやく。

「体育教師とは……どういふものなのだろうか。そう考えていた」

「それはお前おっぱい揺らしながらシヨタを誘惑する生き物だろう」

「お前にはもう相談しない」

「悪かった、俺が悪かったから棒をココアの中につけようとしなくて！染み込まないから、何も染み込まないから！」

必死の懇願に冷めた視線で応えるシグナムはどうか俺の棒を解放してくれた。

亀甲縛りが解かれたらこいつは穴という穴を犯したのちに調教して穴ガバガバになった状態で奴隷市場に売り飛ばしてやる。

「主はやてに快くやりますと言った手前、恥をかかせぬようにと思っているのだが……どうにもそういう体験をしたことがないのでわからない」

「お前らは学校生活つてやつをしたことがないもんな。体験してみれば少しは教師つてのがどんなものか理解できたかもしれないが」

「主はやてにかしてもらった教師もののアニメをみたが、どうにもしつくりこなくてな」

そりやアニメと現実の違いですから。

「期待に応えたい。完璧に仕上げたい。そう思えば思うほど、教師というものがどのような存在なのか分からなくなってきたて困っている。そもそも教師つて必要だと思うか？」

「お前それは迷宮に迷い込みすぎだろ。前提条件を消滅させてどうすんだ」

真剣な表情で質問してくるシグナムに呆れ混じりの声をかける。こいつは頑張り屋だからな、どンドン沼にはまっていくな。

「はやてに相談したらどうだ？この手のことにかけてはあいつの右に出るやつはいないだろう」

「それはダメだ。主はやてが困った顔で言ってきたのだ。『シグナム、あのな？いまからいうことは断つても大丈夫やからね？』主はやては優しいからあのようなことを言ってくれたが、立場と人間関係がある以上、私が断ることはできない。だから私は笑顔で力強く宣言したのだ」

やり遂げてみせます。お任せください、我が主よ。

「私は決めている。主のためならどんなことでもやり遂げると。例えそれが難しいことだとしても、人類が立ちふさがっている高い壁だとしても。私は主はやてのために完璧に仕上げてこなしてみせる。それが——ヴォルケンリッターの騎士というものだ」

教師という職業はべつに人類が直面している高い壁でもなんでもないのだが、まあいいいたいことはよくわかる。

こいつもこいつでなんとというか……主が大好きなんだよな。こういうとき、こいつのことを素直に恰好いと思える。尊敬できる。

「うツ……！」

突如シグナムが腹をおさえる。

「おいおいどうした。拾ったパンでも食ったのか？」

「いや……緊張で腹痛が」

……お前何か月先のことだと思ってるんだよ。

「トイレ行ってこい。ゲリベンリッターに名前が変わる前に」

「今度その名で呼んだら16分割にした上で人肉料理にするからな」

戦艦クラスの眼光で威圧するシグナムに棒を上下に動かすことで降参する。シグナムは腹をおさえたままこの場を後にした。相変わらずの緊張っぷりだな。大丈夫なのかシグナム先生。

「つておいおいおい!?ココアどけてからいけよ！」

湯気をたてるココアを残したまま去っていったシグナムの姿は見た当たらず、ひよつとは一人で身をくねらせてココアの呪縛から逃れようとする。

そこにふよふよと空中を漂いながらこちらにやってくる幼女。

ヴィヴィオが妖精と信じてやまないデバイス、リインだ。

「おいリイン、いいところにきた！ちよつと助けてくれ！」

「リインは妖精なので心が綺麗な人にしか見えませんよー」

「思いつきり会話してるじゃねえか！心が綺麗な人だろ？それはつまり俺のことじゃん！」

「ペロペロさんは黒曜石のように黒すぎてツヤがでてるタイプなので候補外です」

考慮する価値もないのか、ゆらゆつとこの場を通り過ぎていくリイン。相手がデバイス幼女であるならば、この技を使わざるおえない。

「ヴィヴィオに添い寝できる権利を一回だけやろう！一回だけだぞ！それ以上はダメだからな！これでどうだ？これなら助けざるおえないだろう！」

「すでにリインとヴィヴィオちゃんはらぶらぶなので必要ないですー。それによく一緒に寝てますので」

「までお父さんそんなこと許可してない!?いつの間にそんな関係に!?!」

めんどくさそうにこちらをようやく振り返るリイン。話しかけないでくださいと顔にでていた。

「うるさいので声を出さないでください」

レベルが多少上がっていた。

「リインはおこってるんです。なのはさんにあんなことして」

「あんなことってどんなこと?」

「だからその……あんなことです」

「もうちよつと詳しくいつてくれないと分からないなあ。なのはには色々としてきたから」

「えつと……」

「あ、もしかして白いあれを顔にかけたことかな？あ、でもそれってなんていうんだっけ？リイン覚えてる?」

「え?えつと、たしかはやてちゃんがいました。が、がん——」

「やめろや変態ロリペド野郎」

ひよつとこの顔が壁にめり込んだ。

「ヴィータちゃん！」

「リイン、こいつと話すときが穢れていくから気を付けたほうがいいぞ」

こつちこい。手招きするヴィータにリインは急いでヴィータの影に隠れる。

つま先でひよつとこの顔面を突いたヴィータは書類片手にココアが入ったカップを手に持ち、躊躇なくひよつとこの棒に注いだ。

「熱い熱い熱いッ!」

「リインをハメようとする罰だ」

「はっ!? リインはハメられようとしてたんですか!」

「おう、気をつけろよ。こいつマジで見境ないからな」

「おっそうだな。ロヴィータちゃんも昔、俺にガンガン突かれてイツたもんな」

「いいかりイン。これが哀れな童貞の末路ってやつだ」

処女のお前に言われたくないわ。

「ロヴィータちゃん、シグナム結構ぬかるみに入ってる感じがするぞ」

「……まあ性格からしてな。そうなることはなんとなく予想できていた。どうしたものかなあ」

思案顔で腕を組むロヴィータ。

「あいつは真面目すぎるんだよな。教師なんて適当にしても大丈夫だろ。しかも体育教師だし」

「そうはいかないんだよ、シグナムとしてはな」

それが魅力なんだけど。そういつたロヴィータの顔はとても優しい笑みに満ちていた。

「あ、ところでもう全員帰るからそれを伝えにきたんだった。なのはが今日は顔を見たくないって言ってたからお前ここで一泊しろ」

「え? 廊下で? こんな冷たい廊下で?」

「ほれ、これやるから。流石にトイレいけないと可哀想だからって。優しいあたしの主に感謝しろよ」

おまるをそつとひよつとこの股間の下に設置するヴィータにひよつとこは真剣な顔で首をふった。

ヴィータもそれにそつと首をふる。

首をふるひよつとこ。

首をふるヴィータ。

あーうーと言いながらヴィータの顔のふりに合わせて遊び始めるリン。

首をふるひよつとこ。

延髄に蹴りをいれて無理矢理縦に頷かせるヴィータ。

「つてことで後は頑張れよ」

それじゃ、手を挙げながら立ち去るヴィータ。その背中に声をかけた。

「おいロヴィータ。ちよつとシグナムについて面白い遊びを考えたんだが、ちよつと乗らないか？」

その言葉に死ぬほど嫌そうな顔をするヴィータに、ひよつとこはへらへらと笑った。

☆

「なーんであたしを巻き込むかなあ。これあたしが始末書を書くことになるんだけど」

「まーまーいいじゃないか。メンバーも集まったことだし」

目の前で腕を組むヴィータの肩を揉むひよつとこ。近くではティアナとスバルが準備運動でストレッチ中。驚くほどチンコが反応しないことにひよつとこは、やはりあいつらは女じゃないんだなと改めて認識する。

「それに、なんであたしまでブルマじゃないといけないんだ？殺すぞお前」

「いやー、やっぱ紺色ブルマつて最高じゃん？」

「理由になってねえよ！」

拳をひらりとかわすひよつとこに、アイゼンを取り出そうとするヴィータ。その二人にシグナムは声をかける。

「……いったいどういうことなんだ？何が起こっているのか説明して

くれ」

困惑するシグナム。自身は上下ジャージ姿で他の面々はブルマ装備。場所は訓練室で、設定は……きつと運動場だろうか。トラックがひかれているところをみるとなのは達が通っていた高校の運動場もこんな感じだった気がすると思いをはせる。

自信満々にひよつとは言つてのけた。

「いまからお前には体育教師として40分間授業をしてもらう。そして10分で纏めだ」

「まるで意味が分からんぞ」

ヴィータに助けを乞うシグナム。ヴィータは頭を掻きながら、「まあなんだ。つまり模擬授業をいっぱいしておけば、シグナムも少しは自信がつくんじやないかなって思つてさ。それで急遽、こいつとあたしで生徒役をしようって。あの二人はなのはの髪の毛一本を事件についできた危ない女たちだ」

何処の世界に髪の毛一本でついてくる女がいるだろうか。よつぽどアホだと思ふのだが、きつとおそらくなんか楽しそうだから。そんな感想が先にきたに違いない。

メンバーはぎつとこんな感じだ。

ひよつとこ・ヴィータ・ティアナ・スバル・ザファイラ・救護人としてシヤマルがそばで控えている。ちなみに全員ブルマ装備である。「なあひよつとこ。男のブルマほど危ないものはないと思うぞ」

「俺はメイド服とか着てるから慣れてる。それにザッファイも意外に似合つてて可愛いぞ」

「……反応に困る」

若干照れているザファイラに身震いしながらもシグナムは頭を振った。

時刻は深夜。すでに日付は変わっている時刻。明日もまだ仕事があるというのに、自分のために集まってくれたのか。

「……まったく。ほんとバカなことを考える」

「そりゃどーも。それより先生、さっさと授業を始めようぜ。俺はともかく皆は明日も仕事だろ」



「ん、ああそうだったな。それじゃ授業というものをしてみよう。まずは体を動かすことだな」

まずはストレッチをしよう。シグナムの掛け声にティアナとスバルが元気よく返事をする。デスクワークと勉強で体が動くのを求めているのだろう。

ヴィータとザフィーラは身長差をものともしない身体能力で軽々とストレッチをこなしていく。そしてひよつとは当たり前のように余ったので、同じく余りものの

シグナムとストレッチをすることにした。

「すまんひよつと。私はシャマルとストレッチをするから独りでストレッチをしてくれ」

先生の言葉は絶対だ。

ひよつとは泣く泣く独りでストレッチをするのだった。

A, s 40. シグナム先生のムフフな授業（後編）

学生時代、常にストレッチ相手ははやてだったことを思い出しながら一人でストレッチを済ませる。

シグナムを前に全員で整列する。ブルマ姿の可愛いヴィータ、生物学上女であるスバルとティアナ、ブルマをはいたキモい男と照れてるムキムキマッチョのやばいやつ。

「そ、それでは指導をはじめる」

「シグナム、指導じゃなくて授業だ」

「ん、ああそうだったな。授業をはじめる。といっても……人数がないのであまり大層な授業はできないか」

考えるシグナム。隣にいたヴィータがひよつとここにきく。

「こういった少人数のときはなにをするのがいいんだ？」

「ん？まあ全員で遊べるものだろうな。少人数での授業の場合、二手に分けるのは得策じゃないと思うぞ。教師の体は一つだし、へんな壁ができる」

「だってさシグナム」

「なるほど。ではボール遊びをしよう。ドッチボール……は無理だろうから中当てはどうだ？」

『さんせーい！』

手を挙げるスバルとティアナ。シグナムはうんうんと頷いてボールを一つ手に取った。

「中当てっていうかあれか。……女を孕ませる遊びといわれる——」

「まてまてまて、お前はエロ本の読みすぎた。なんで受精させる遊びになってんだよ。普通にボールを当てるゲームだろ」

「しかしここにはロヴィータちゃんやシャマル先生以外に女がない。これはいかほどなものかと思うぞよ」

「スバルとティアは理解できるが、シグナムとザフィーラもカウントしないのか」

「俺はナチュラルにザッファイをカウントしたお前が恐ろしいよ。シグナムはアレだ。淫乱ピンクくっ殺騎士だから、肉便器的扱いなんだ

よな」

「ふーん、なるほどな」

中当てのフィールドをザファイラがつくり、その中にヴィータとひよつとこ、そしてザファイラが入る。両側にはスバルとティアナ。審判役としてシグナム。

「ところでひよつとこ。一つだけ忠告しといてやる」

「ん？どうしたロヴィータちゃん。ちゃんと中に出してあげるから心配ないぞ」

外側役のティアナにシグナムよりボールが渡される。

「いやべつにそんなことはどうでもいい。あたしたちは子どもなんか産めないしな。いま大事なものはそれじゃなくて——ティアとスバルが魔力で身体強化してるぞって

ことなんだが」

全てを言い終わる前にティナが放ったボールがひよつとこの真横をかすめていく。

「まあ死ななければいいか」

「先生ッ!?シグナム先生!?ちよつとまって、いま人を殺せるスピードでボールが飛んできたんだけど!？」

『まあ人は能力差があるからな。それはいたしかたないことだ』

「お前どこに目ん玉つけてんだよ!?魔力強化は反則だろ!」

『しかし自身がもちうる武器を有効的に使う。どこに問題があるのだ?』

「おいどうにかしろよお前のリーダーだろ!?あぶ、おぼッ……ぐベツ!？」

ティアナの投げたボールがひよつとこの腹に当たる。ボールが高速回転でうねりながらスバルの元と到達すると、スバルはひよつとこごとティアナにボールを投げつける。

ボールとなったひよつとこをかわしながら、呑気な調子でヴィータとザファイラは会話する。

「しっかし久しぶりだな。こうやって子どもみたいに遊ぶのは」

「さつきからブルマが食い込んで気持ち悪いがな。子どもの頃は主は

やての遊び相手としてよくしていたものだ。リハビリと称して公園で遊んでいたのを覚えているか？」

「覚えてる覚えてる。一生懸命体を動かしながら、笑顔をむけるはやては可愛かったな」

やがて避けるのも面倒になったのか、二人は座り込んで話し込む。

スバルとティアナはうきうきするん気分ひよつとを放り投げながら遊ぶ。その様子をみていたシグナムは隣で困ったように笑顔を張り付かせるシャマルにぼそりときく。

「……これはもしや噂にきく学級崩壊というやつか？」

あ、この人教師に向いてないかも。そう思ってしまうシャマルであった。

☆

「シグナムせんせい、ひよつとくんが家に帰りたいたと嘆いています」  
「む？どうしたひよつと。お腹でも痛いのか？」

「全身が痛いんです。魔導師にボールにされて全身が痛いんです。家に帰ってフェイトに癒されたいです」

「家に帰っても口をきいてもらえないだろうからこのまま続行するよ  
うに」

無慈悲な宣告が教師より生徒に告げられる。

「いやー、ひよつとくんがボールになってくれたおかげで楽しかったです。いつもは私達がなのはたんのボールかサンドバックになっていますから」

「なのはたんからは俺が言っておくからストレス発散に俺を虐めるのはやめなさい」

「でも美少女に苛められるなんてうらやましいことだと思えますよ？」

「美少女？池沼の間違いだろ」

「シグナムせんせい、ティアちゃんのパンチがひよつとくんの顔面にめり込んでひよつとくんが原型をとどめていません」

「よしそれでは次の授業をはじめます」

律儀に手を挙げて発言するヴィータ。しかしその内容により先生

にスルーされる。

補佐となったシャマルが大縄をもつてくる。麻でできた大縄を両手にもち、笑顔でシグナムは次の授業を行う。

「よし、次は八の字の練習だ！教師である私が回すのは当然として……すまないがザファイラ。一緒に大縄を回す役を頼めるか？」

「問題ない。……跳ぶ役にならなくてよかった」

ぼそりと呟いたザファイラの言葉をヴィータは見逃すことはなかった。ヴィータはこの場で一番頭がキレる。だからこそ、この後にどんなことが巻き起こるのか、予想できないわけがない。

「いやまてよザファイラ。あたしが回そう。お前は跳んだほうがいい」

「いや身長的に無理だろう。諦めて跳べ。……跳べればだが」

嫌そうな顔を浮かべてシャマルに抱きつくヴィータ。対岸の火車だと思っているシャマルはよしよしとヴィータの頭を撫でる。そこにまたもやシグナム先生より無慈悲な言葉が告げられる。

悲な言葉が告げられる。

「人数の関係上、シャマルにも参加してもらおう」

脱兎のごとくこの場から逃れようとするシャマル。しかし抱きついていていたヴィータがそれを許さない。

「逃げるなよシャマル……」

「お願い……逃がして……！」

シャマルもこの後どうなるか理解できているのだろう。首を横に振っていやいやと答える。

一方、分かっている組であるひよつとこ・ティアナ・スバルの面々は首を傾げている。

「ただたんに八の字するだけだろ？別にそこまで恐ろしくないだろう」

「たしかに。いくらシグナムさんでも大縄で危ないことはできないのでは？」

うんうんと隣でスバルが頷く。

「お前らは幸せそうでいいな。んじやお前らが前な」

べつにいいけど。声を合わせる三人はひよつとこ・ティアナ・スバルの順に並ぶ。

「うむ。ようやく並んだ」

腕組みして待っていたシグナムは片方をザフィーラに渡して、大縄を回しはじめる。はじめはゆっくりと、跳ぼうとするひよつとこを手で制止、勢いよく回していく。

次第にその速さは目で追えるものではなくなっていき――

フオン

けっして大縄では聞こえてはいけないだろう音が聞こえてくる。風を切る音、ではなく人体を切断しそうな音が訓練室という名の校庭に響く。

「ぎ、残像が……！大縄ではけっしてあってはならない上下に残像がみえている……！」

一歩後ずさるひよつとこ。しかし後ろにいたティアナはぐいぐいとひよつとこを前に押し出す。

「まてまて嬢ちゃん!?俺を殺す気か!？」

「こういうときのためのひよつとこさんじゃないですか!もしかしたら思ったほど速くないかもしれないですよ!」

「上下に同時に残像がでてるのに!？」

「それは……ひよつとこさんの目が狂ってるから」

真面目な顔を作るティアナの両目を指で突く。

「さあひよつとこ……まずはお前から跳んで見せろ!」

うきうきするんわくわくらんらん気分の熱血教師シグナムの声がひよつとこにかけられる。

「いや、でも先生……こういうのはやっぱり小学生としての比較対象が必要だからロヴィータちゃんを……」

くいくいとひよつとこの指を引っ張るヴィータ。それに気づきひよつとこが振り返ると、ヴィータは上目使いで頬を赤らめながらも

じもじと指を絡ませ、

「おにいちゃんがかんばつてくれたらね？ ヴィータもおにいちゃんのためにがんばりたいなあ……。その……。ね？」

「ひよつとこ、イキますッ！」

『(ちよろい……)』

この場の全員がそう思った。

勃たせながらうきうきで気分で大縄の中にはいったひよつとこは、一発目で足を縄に取られ、浮いたところに縄がムチのように首を刈り取る。縄と首はそのままの状態で一回転。否、一回転では飽き足らず、そのまま水車に磔にされて死ぬまで回される拷問のような行為がヴィータ達の目の前で繰り広げられた。

「大縄つて怖いっすね……」

「ああ。人類が生み出した現代の拷問方法だな……」

「香典はいくらにします？」

「5円でいいだろう」

「いやいや助けましょうよ!? なんで皆さん見殺しにする方法で話を進めていくんですか!？」

誰も八の字を跳ばずに(跳ばずに)のんびりひよつとこの死ぬ様子を眺める横で、天使シャマルだけがひよつとこを助けようと必死だった。

☆

シャマルの手を握り、ヴィータを膝に抱っこしたままひよつとこはぼそぼそと呟く。

「世界が逆に回転した……。日常を飛び越えていった……」

「うんうんそうだな。はいはいよかったな」

どうでもよさそうにスポーツドリンクを飲むヴィータ。ヴィータの隣では対して動いてもないのにティアナとスバルがもちやもちやとハチミチ漬けレモンを食べている。

目の前には腕を組んで考え込んでいるシグナムがザファイラに相談ごとをしていた。

『やはり……。私は教師には向いていないのではないか？ これでは主

はやての期待に添えないような気がする』

『いまのままでは小学生を殺しかねんことは理解できた。ゆつくり頑張っつていくよりほかはない』

『……やはりそうか。ゆつくりと頑張っつていくしかないか』

思案するシグナムをよそに他の生徒は纏めに入る。

「どうだった二人とも。シグナムの授業」

「うーん……いまのままでは死人がでるか」と

「私もティアに同意です。ここに犠牲者がいますし」

「……どうしたもんかなあ」

はやてに相談するしかないのかね。スポーツドリンクをひよつとこに渡しながらヴィータは一人考える。シグナムが今回のことで悪い方向に考えなければいいんだ

が……。

そう思っつた矢先、シグナムは両手をぽんと叩いて晴れやかな笑顔を向けた。

「うむーやはり一回だけの模擬授業ではあまり練習にならないな！やはり定期的にこの模擬授業をやっつていくとする！主はやてのために完璧に仕上げるのだ！そのために協力してもらおう！」

全員の瞳から光が消えた瞬間だった。

☆

ブルマから私服に着替えた面々は絶望の表情で訓練室を後にする。

「週に2日もシグナムさんの模擬授業に付き合うなんて……」

「それはいいけど、毎回死ぬ可能性があるっつてのが……」

「いやーまさかひよつとこが土下座しながら勘弁してくださいっつて泣いたのは意外だったな」

「シグナムさんの泣き落としであっさり陥落しましたけどね」

まあシグナムの泣き落としなんてレア中のレアだしな。幼女の真似事をしたヴィータがそう思う。

「ん？これなんだ？」

訓練室から帰っつてきた面々は、いつもの部屋に向かっつていた。扉を開けると、ヴィータのデスクの上には見慣れぬ重箱が置かれていた。



その横にはうさぎ印の可愛ら

しい弁当箱。重箱と弁当にはそれぞれ手紙が一枚添えられていた。『おつかれさん。お腹減つてるとおもっているいろいろ作ってきたで。ゆっくり食べて』

『ばーか』

一枚目は重箱、二枚目はうさぎ弁当箱。

それぞれ誰が作ってきたのか一発でわかる仕様だった。

「おいひよつとこ。これお前用だからお前が食べろよ」

「ん？ああ、べつにいいけど。そっちの重箱も食べていい？」

「それをちゃんと処理できたらな」

後からやってきたシグナムも加わり、全員で夜食となった。熱いお茶を全員分に配り、それぞれが好きなおかずを取る。おにぎりをほおばり、からあげを噛み千切

り、プチトマトで遊んで怒られる。ちよつとした女子会＋犬参加の体裁になってきた矢先にシャマルがひよつとこに話を振ろうと目を向けると――ひよつとこはおだやかな笑みのまま息を引き取った。

「きやあああアツ!?ひよつとこさんが穏やかに死んで……!」

「ああ、なのはの弁当だからな。死んでもおかしくはねえんじやねえの?流石にあそこまでされたら殺されてもなあ」

「いやいやいや、もっと騒ぎましようよ!?一大事ですよ!」

「死んだままなのはに返しとけば蘇生術使って生き返らせるさ。それより玉子焼きたべりゆ?」

「たべりゆうゆうゆうゆうゆうッ!」

10年間の幼馴染よりも主作った玉子焼きのほうが大事だったシャマル。

ひよつとこは女子会が終わるまで、天国の遊園地で遊んでいたという(蘇生術を行ったのはの証言より)。

A, s 4 1. 健康診断、午前の部

『ねえなのは、あのこと絶対に言っていないよね?』

『大丈夫。あのことだけは絶対に秘密にしてるから。バレたらものすごくめんどうなことになるもん』

『そうだよ、絶対に俊にあのこと漏らしちゃうと大変なことになる』  
ヴィヴィオとぶよを落として連鎖するゲームをやっている後ろで、  
なのはとフェイトが耳打ち談義を開始している。二人とも音量をお  
さえているがろうじて聞き取

れているので問題ない。どうやらなのはとフェイトのどちらかが  
漏らしたらしい。この年になって漏らすのは恥ずかしいな。

「1デシリットルあたり10万……いや30万はするか」

『どうしようフェイトちゃん、俊くんがまたキモいこといつてる』

『俊がキモいのは産まれたときからだからしょうがないよ』

会話してる振りして俺を貶すのやめーや。

部屋掃除のときにカルピスコンドーム床一面にばらまくぞ。

「ふんふん」

そしてヴィヴィオ、したり顔で俺のコントローラー奪って意図的に  
ミスさせるのはやめなさい。

ヴィヴィオを膝の上のせて適当な詰み方をしながら、耳だけはな  
のはとフェイトのほうに傾ける。

『まさかねー健康診断がこんな時期にあるなんて』

『うう……明日は朝食抜いていかないと』

『いまさら無駄だよなのは……』

ほうほう、朝からなのはは抜くわけか。朝っぱらから手淫船貿易と  
はやるな。

二人のため息で締めくくられた会談、なるほどなるほど。なんだか  
おもしろそうなことになってるな。これはさっそくはやてに連絡せ  
ねば……。

なのはとフェイトが両隣に腰を下ろす。なのはの魅惑のぷにぷに  
脇腹ボディーをつまむ。

「うるらあああああああああああああッ！」

目にもとまらぬ速さで腹パンがとんできた。

「ま、まって……！いま骨が砕けた音がした……！やばいところに刺さったー！」

「コーホー、コーホー」

「なのはママがプレデターに?!」

人語を失ってしまったなのは、しかしいまの一件で確信した。

なのはは腹を摘ままれることを嫌がった。それはつまり——体重測定があるということ。

体重測定、しかもなのはとフェイトが二人で受ける。となると健康診断。ということとはつまり——検尿検査もちろんあるわけで。

一応、プロポーズを了承してくれたなのはとフェイトの尿⇨俺の尿という図式が成り立つわけで、自分の尿を飲んだところで罰則はなにもない。

「ぐへ、ぐへへへへへ……明日はリアルゴールドだあ……リアルゴールド祭りだあ……！」

ヤバイやつをみる目のなのはとフェイト、そしてガークンをよそに俺はさっさくはやてに連絡をとった。二言返事でokしてくれたはやて。

うふふ、明日は楽しみだな。リアルゴールド沢山飲んじやうもんね！

☆

「前からいつてあったとおり、検尿検査は実施しません。課でやることは胸部心電図や血圧、視力に聴力、慎重・体重、そして最後に問診やね」

「僕もう帰る」

「検尿ないとわかった途端帰ろうとすんな変態。誰がお前みたいなオナ猿帰すか」

「それはつまり、ロヴィータちゃんか俺の性処理用愛玩玩具になってくれるということ……?」

ブスッ

「ぎゃああああ!?目がああああああ!?」

「穢れきつてるくせにつぶらな瞳がむかついた」

「ロヴィータちゃんなら基準を越えてるから許可したのに……」

「今度はアイゼンで頭砕くぞ」

ドスの利いた声に知らず知らずのうちに頭を床にこすりつけていた。そしてその勢いのままひっくり返ってロヴィータちゃんのパンツを――

「ドロワ……だと……!?」

「今日はお前がくるって話だったからな。嫌な予感がしてたんだよ」

容赦なく俺の顔を踏みつぶしながらなんでもないことのようにいうロヴィータ。これ完璧に頭蓋骨にヒビはいつてますありがとうございます。ごさいます。

「で、はやて。なんでこいつがいるんだよ」

「ああ、まあ俊が検尿目的で連絡取ってきたのはわかってたし、どうせならそのままこっちに連れてこさせて機材の搬入なんかの力仕事をさせようかとおもつてな」

ナース服姿のはやてが書類に目を通しながら答える。

「まんまと騙されてやんのバーカ」

「なんだとロヴィータ!お前なんか俺のチンコで――」

「ほう、ここにスライサーがあるのだが……お前の自慢のステイックとどちらが強いかな勝負してみないか?」

「い、嫌だなあシグシグミシルさん。僕の魔女ステイックなんてレイジングハートの足元にも及びませんよ」

あつぶねー!?なにこのくっ殺女騎士!?いつの間に背後に現れてレバ剣俺の首元に置いてんの!?めっちゃ怖いよ、いますぐ俺が検尿するところだったよ!?

「というかシグシグミシルもきてんのか。いかにも役立たなそうなのに」

「役に立つ、立たないの問題ではない。主はやてが朝早くに機材搬入や設置のために出勤してきたのだ。騎士として当然だろう。それに私はお前と違って力持ちだから」

な。機材の設置を頼まれている。そういうお前は朝早くに何しにきた?」

「検尿を飲尿しようかと」

「なに!? 検尿は個人で病院にて行うことになったのではないのか!？」

「それは違うな。この弁当箱でおなじみの醤油さしにに入れて俺に提出することになっている。お前の大好きな主はやてからの命令だ。いますぐいつてこい」

「くっ……!」

歯ぎしりするシグシグ。しかしお前の大好きなはやての名前を出されちゃ断れまい。

「か、紙コップは……用意しているだろうな……!」

「残念だが、それは新人用だ。お前はその醤油さしに直接注ぎ込まなければならぬ」

「な、なに!? し、しかしこれも主はやてのため……!」

苦渋の決断をするシグシグ。俺はシグシグの肩に手を置き、優しく諭す。

「がんばれ、お前はヴォルゲンリッターの最強の剣だ。これくらいどうつてことないさ」

「……ああ、そうだな」

「いつまで続けるんだその茶番」

呆れたようにロヴィータちゃんが突っ込んでくる。

「なに!? いまのは茶番だったのか!？」

「え!? 本気で信じてたのか!? お前昨日説明されたばかりだろ!？」

シグシグの反応もしょうがない。こいつは剣に極振りしてる脳筋だからな。

「さーて俺も手伝うか」

『おいまでひよつとこ! お前の首を置いていけ!』

『どうどうどう』

嘶く馬をロヴィータが静める。大変そうなポジションだなロヴィータ。

はやてのほうに近寄り、俺も書類を覗き込む。

「なあはやて。二・三質問したいことがあるんだが」

「ええよ。ちなみにこのナース服、水をかけると溶ける素材でできてるからきをつけてな」

「男衆なにをしている！早く水もってこい！」

『動いたら死ぬと思え』

『動いてもいいけどな。——アイゼンの餌食になりたいやつだけ』

くそ、俺達じゃこいつらには勝てない……！

このもんもんをどこで晴らせばいいんだ！

ピタリと硬直した男衆たちの目には一筋の川が流れていた。

「ほらほら、はよ搬入と設置終わらせてここに皆は先に健康診断終わらせるで。しつかり働いてくれた人は特別にハグしてやるで」

『うおおおおおおおおおッ!!』

「ザフィーラが」

『うごがああああああアッ!』

歡喜が絶叫に変わる瞬間をみるのは面白い。

「俺のハグはダメなのか……」

犬状態でショックを受けてるザフィーラの背中を撫でてやる。うちもこんな犬欲しい。ルドルフがきてくれたら嬉しいんだけどなあ。あいついまクロノのところのこどもたちの相手してるからな。

「はいはいそれじゃさっさと終わらせるでー!」

はやてに続く形で声をあげる。そこに白衣姿の本日の主役といつか一番頼りになる人がやってきた。

「ヴィヴィオちゃんの着替え終わりましたよー。ヴィヴィオちゃんどうぞー」

『はーい!』

ここについてからすぐにヴィヴィオははやてのナース服をみて着たいとせがんだのでシャマル先生にお願いしていたところだ。はてさて、どうなったかな？

とてとてと俺達の元にやってきたヴィヴィオは白いナース服にふちの部分はピンクの線がかけられている。頭にはナースキャップ。腰に手を当てドヤ顔ポーズを決めている。

「ふふん、これでヴィヴィオもナースさんになった。ヴィヴィオもうむてき(ドヤア)」

「おお、これは可愛いな」

「ヴィータちゃんもきる?」

「いやあたしはいいよ」

ヴィヴィオの提案に苦笑しながら首をふるロヴィータ。そんなロヴィータにはやてはあつさりど、

「いつてないんやけど、いまいる面々は午後からの健康診断のときはナース服に着替えてもらうで?もちろん男は白衣やけど」

愕然とした表情のロヴィータちゃん。

普段六課の美少女達と接しない男性スタッフは拳を強く握りしめ高らかに掲げている。あ、シグシグに蹴りが鳩尾にはいった。

「ほ、ほんとかよはやて!?正気か!」

「当たり前やろー。ちゃんと水で溶けないナース服を用意しとるんやから」

あ、めっちゃ悩んでる。そもそもこいつ普段着がロリータファッション当たり前なんだから(バリアジャケットはいわずもがな)ナース服くらいで悩むなよ。

「まあはやてと一緒ならいいか」

自分の中で納得できたのかうんうんと頷くロヴィータ。ちなみにヴィヴィオはナースキャップが邪魔なのか装備欄から外して隣にいるガーくんの頭に乗せている。

かくいうガーくんは不安そうに俺に、

「ガークンノハクイアル?」

「作ってやるよ、時間あるし」

「ワイイ!」

羽をばさばさと広げて喜ぶガーくん。お前の毛色が白衣なんだからいらねえだろ。そう突っ込み気分で顔をむけるロヴィータ。

俺はヴィヴィオを抱っこしつっはやてに確認を取る。

「これで全員か？それなら始めようぜ」

「あ、ちよいまち。あともう一人、無限書庫での健康診断のときにどうしても出られなかったからユーノがくるんやけど……まだきてへんのよ」

「へーあいつが遅れるって珍しいな。迎えにいつてやろうか？」

「いやもうすぐそこまできてるみたいなんやけど」

携帯を取り出すはやて。と、ドアが大きな音をたてて開く。ドアを開けた人物は息を荒げながら、はあはあと呼吸を落ち着けると俺達のほうをみて謝った。

「ごめん、おくれちゃって——」

「よう久しぶり。元気だった？」

「う、うん！俊も元気そうだなによりだよ」

無限書庫の司書長であるユーノは今日も今日とて、女物も可愛らしい服を着ている。初対面ならまず女と間違えて惚れてしまうほどの顔立ちに、女が嫉妬してしまう

ほどの振る舞い。ほら男性スタッフなんてユーノの姿みて惚けるぞ。

そつとユーノが俺の手を握り、指を絡ませてくる。

「僕ももう少しプライベートな時間が取ればいいんだけど、忙しくてなかなか会いにいけないから、こういうとき会えると嬉しいな」

「俺もだよ。ほらヴィヴィオ、ユーノお兄さんに挨拶しような」

「??こんにちは！」

「はいこんにちは」

ヴィヴィオの頭を撫でるユーノ。気持ちよさそうに目を細めるヴィヴィオ。

『そりや見た目かわいい女がお兄さんなら頭にハテナマークが浮かぶわな。おいはやて、男性スタッフがもう何も信じたくないとうわ言い



いながら壁に頭打ちつけてるぞ』

「はいはいみんな現実にもどってきーな。俊もいつまで握ってるねん」

「あつ」

むっとするユーノと舌をだすはやて。なにがどうなってるんだかわからない。

☆

搬入を終えたので、男衆で機材の設置を急ぐ。はやてはてきぱきと指示を出して俺達はそれに従って運んでいく。時間が経つにつれて一気に病院の様へと変化する。

ミニスカート姿のユーノが血圧に使用する機材を運ぶ。

「ユーノ俺が運ぼうか?」

「ほんとに?ごめん、お願いします」

ユーノから受け取った機材をはやてが指定した場所にもっていく。ユーノは隣でそつと俺に寄り添う。

「そういえばこんど無限書庫にいく予定なんだけど、ヴィヴィオ用の絵本を見繕ってほしいんだよ」

「うんいいよ。僕が探しておいてあげる」

笑顔で答えてくれたユーノに感謝しつつはやてが待つ場所へと機材をもっていく。

丁度それが最後だったらしく午前中に全ての作業が終わった。開始までは一時間もまだあるらしく、この一時間でいまいるスタッフは早めに健康診断を済ませてなの

は達の診断の際は白衣姿でスタッフ側に回るらしい。

「それじゃ10分休憩してその後二人一組で健康診断にしようか。

あ、女性はナース姿、男性は白衣に着替えておいてな」

はやての号令で一旦休憩タイム。俺はヴィヴィオと一緒にジュースを買いに自販機にいった。ユーノやロヴィータはナース服に着替えるために更衣室にいており、

シヤマル先生は今回の主役のためこまごまと準備のために席を外

している。必然的にはやてとヴィヴィオの三人になった。

「はやてなにがいい？」

「うーん、ミルクセーキにしようかな」

「はいはい。ヴィヴィオは？」

「シユワシユワーってやつがいい！」

「ヴィヴィオは炭酸と。ガーくんは？」

「ツバサヲクダサイノヤツ！」

「赤牛ね」

翼を増やしてどうするつもりなのかこのアヒル。

休憩室にベンチに座りながら一息つく。ペットボトルのふたをあけてヴィヴィオに手渡す。ガーくんは当たり前のようにプルタブをあけてごくごく飲むが、お前いまどうやってプルタブあけた。

すとな隣に腰をおろすはやて。ミルクセーキをあげながら、

「そういえば俊は健康診断って今年受けたことある？」

「仕事に就いてないから健康診断とかやったことないなあ」

「じゃあ俊も受けてええよ。ヴィヴィオちゃんも。ガーくんも一応受けろ？」

「うん！」

「ワイ！」

「悪いなはやて。なんか迷惑かけて」

「ええよ、俊ならいつでも」

ほがらかに笑うはやて。ナース服と相まって白衣の天使にみえてしまう。

「ごくごくとおいしそうに咽喉を鳴らすヴィヴィオの頭を撫でていると、すすつとはやてが近づいてくる。

「なー俊？午後の健康診断終わったあとって予定とかあるん？」

「いやとくはないけど」

「じゃあちよつと付き合ってくれへん？10月の終わりにハロウィンあるやろ？六課でもハロウインのイベントやらなあかんねん。六課を解放して装飾してお菓子用意してっていう感じで。それでちよつと意見を聞いておきたいことがあつてな」

「ああいいよそんなことならいつでも。ヴィヴィオは一緒の方がいいのか？」

「いやできれば俊一人で」

「わかった。それじゃ隊長室にいけばいいんだな」

基本使われることがない隊長室。場所だけはなんとなく覚えてはいるが、なにがあったのかは思い出せない。はやて他のメンバーと一緒にのところで仕事するもんなあ。

着替えが終わった女子の姿が見え始めた。どうやら休憩時間も残り少ないようだ。

「そういえば六課って男衆結構いたんだな。会う機会がほとんどないからビツクリしたわ」

「どうせ今回限りで消える予定だから覚えんでええよ」

え、なにそれこわい。

はやての言葉に恐怖を覚えていると、ナース服姿のロヴィータとシグシグととユーノがやってきた。

「おーロヴィータちゃんよく似合うな。シグシグはAV女優みたい。

ユーノも中々……結構いけるな」

「まて貴様、何故私だけセクシー女優なんだ」

牙突してくるシグシグを避けながらじつくり見る。

「シグナム、ガーターはつけへんの？」

「な!?!主はやてまで……!?!」

「ええやんか。シグナムはそっちのほうが似合うと思うで。わたしも一緒につけるから、ガーターつけてみなへん？」

はやての言葉に心底悩むシグナム。ここは俺からいっておくか。

「はやて、ガーターはやめたほうがいい」

「え?なんでなん?」

「男がお前のガーターつきナースコスを見て前屈みにならないと思うか?長座体前屈をしにきてるわけじゃないんだぞ?」

こいつはたまに天然なところがあるから恐ろしい。もう少し俺達

男のことを考えてくれ。身長を測るわけであってチン長を測るわけではないからな。

「俊も?」

「当たり前だ」

「……そうなんか。それならやめてあげようかな」

にやにやとした含み笑いを浮かべるはやてから顔を逸らす。ユーノが俺の手を取る。

「俊、今日は一緒に回ろうね」

「いいけどヴィヴィオとガーくんも一緒だぞ?」

「うんそれがいい!……予行練習にもなるし」

「いいや俊はわたしと回る予定なんよ。ごめんなユーノ君。ユーノ君はほら他の人と回ってきて色んな人とお喋りしたほうがええんちゃう? いつもは無限書庫でお仕事しとるわけなんやから」

「むむっ……!」

一発発の雰囲気醸し出される。周りの面々はおろおろとするばかり。シグシグははやてが俺と回ろうとしていたことにシヨックを受けてレバ剣を振り回してくる。

る。ロヴィータちゃんは、

『ヴィータちゃんいっしょにしよー』

『ん? ああいいぜ』

なんてロリ特有の可愛らしい会話をしている。ん?

「あれ、ってことは俺と回るのロヴィータちゃん?」

「げっ!? マジかよ……。お前ヴィヴィオの付属品だろ。いらなからどっかいけよ」

「いやいや後でなのはとフェイトに怒られるって」

「……まあたしかにそれはありそうだな」

思案するロヴィータはしようがないとばかりにため息をつく。ヴィヴィオと一緒に回らないという選択肢はなかったらしい。

「え?」

対するはやてとユーノは信じられないとばかりに俺達をみる。にこやかな笑みを浮かべてロヴィータを抱き上げるはやて。

「ヴィータ、もしかしてやけど健康診断にかこつけて変なことしようなんて思っただけやろね。例えば睡眠薬を飲ませてそのまま救護室につれていくとか。胸部診断と称してどこかに隔離するとか」

「ないないない断じてない!?!というかそんなことしようと思っただけ!?!」

「い、いまの一例や一例。……まあ予想はしてたし保険はかけてるしええか」

しょうがない譲るわ。そうやってロヴィータをおろすはやて。俺は涙目のユーノに詰め寄られていた。

「俊は僕と回るより小さい女の子のほうがいいの!?!僕じゃダメなの!?!」

「いやダメじゃなくてだな。ヴィヴィオと一緒に回りたい相手だからな?俺はべつに誰でも——」

「ぐす……」

「な、泣くなよユーノ!ほ、ほら埋め合わせはするから!な!?!いつか二人で遊びにいこう!そうしよう!」

「僕のいききたいところでいい?」

「ああもちろん!」

「うん、それならいいよ!……どこのホテルがいいかな」

怪しく笑っていたような気がするけど見なかったことにしよう。どうにかこうにか二人とも収まってくれたようなのであらためてロヴィータちゃんと一緒に健康診断

をすることにした。

☆

午後の本番の健康診断のスタッフとなる俺達の場合、自分達の健康診断はセルフで行う。まあ当たり前だ。そもそもスタッフになるためにいまやっているのだから。例外的にシヤマル先生だけ本局で終わらせているらしいのだが、シヤマル先生には問診と胸部検査という重要な役目があるので身長や体重といったところにはいない。

「検尿があつたらロヴィータちゃんの持ち帰って保存して、残りを飲尿するのになあ」

「本人目の前にキモいこというなよ。ほら血圧みるみる下がってるぞ。最高血圧で40とかもう死ぬレベルじゃねえか」

ぼそりと呟いた言葉が聞き取れたのか、ロヴィータちゃんは嫌そうな顔をする。

いまは血圧を測っている最中。既に終わった俺がロヴィータちゃんを。隣でヴィヴィオがガーくんを。

「パパー、ガーくんはねがおつきくちはいらないうって」

「じゃあ羽を一枚千切ってそれを血圧機に入れて検査しよう」

「まてまてまてどうしてお前はそう健康診断の概念を壊そうとするんだ」

千切った羽を測定しても無意味だろ。もつともらしい言葉をもらう。

結局、ガーくんはトランフォームしてなんとか測定を可能にした。やっぱアヒルってすげえ。

☆

「おー、ヴィヴィオ背が伸びたぞー！やったな！」

「ふふん！ヴィヴィオむてき！」

「そうだな無敵だな」

ヴィヴィオの身長を測ると若干ながら前に測ったときより伸びている。よく寝ているからだろうか、寝る子は育つというもんな。

「あ、こら爪先立ちは禁止だっけいっただろ！」

隣ではガーくんの身長を測っているロヴィータからそんな言葉が飛んでくる。

「ネエノビタ？ノビタ？」

「え？うーん、ひよつとこここれ伸びてるのか？」

「どれどれ。おーやったなガーくん。伸びてるぞ！」

「ワーーー！」

嬉しさのあまり竜巻を起こすガーくん。職員が恐怖に怯えているからやめなさい。

今度は俺がロヴィータちゃん的身長を測ろうとする。しかしロヴィータちゃんはそれを頑なに拒否。

「いやだって身長変わらないし。体重も変わらないだろ」

「どれどれ、ふむふむ。たしかに胸は変わり映えしてないようだが――」

「どこ触ってんだお前!」

アイゼンでボツコにされる。なんだよおっぱい触っていつていつたじゃん。

「いついつた!?!いまの会話からどうやってその心情を読み取った!?!」

「天才ですから」

「変態なんだよ。だからいーつつーの。あたしは身長と体重は前のか  
いときやいいんだよ。ほらそれよりさっさと測るぞ。台座がいるな。  
あ、おいアヒル。ちよつと飛んで測ってくれ」

「イイヨー」

『え?アヒルって飛べるの?』

『そもそもアヒルって喋れるのか?』

『ミッド産のアヒルなんじゃね』

当たり前すぎて感覚マヒしてたが、傍から見たらその反応が正しい  
よな。ヴィヴィオが気にしてない限りどうでもいいけど。

身長を測るために測定器の上に立つ。ガーくんがぱたぱたと飛ん  
で準備をする。

「イクヨー」

「おお、ゆっくり頼む」

「てんちゆうーッ!」

「あでッ!」

返事をした次の瞬間、ものすごい勢いでバーが降りてきた。思いも  
よらない出来事と舌を噛んだ痛みから一瞬何が起こったのか理解で  
きない。測定器から離れてガー

くんのほうを見上げると、俺の近くの虚空をじつと見つめていた。

ガーくんの視線の先を辿る。

ガーくんの視線が動く。俺もそれに合わせて動く。

ガーくんの視線がまたもや動く。俺はその視線に大きく口をあけ

て突進する。

何かを口の中にゲツトした。

「お、おいひよつとこ、大丈夫か？」

「パパーいたいいたい？」

心配そうなヴィヴィオとロヴィータ。ガークンが触つてもいないのものすごい勢いでバーが降りたのを見たもんな。

「ふあいじょうぶ。あふおはいまふおろひた」

「悪は滅びた？」

ロヴィータに頷く。あとは舌でこいつの至る所を犯しつくせば――

「ぶはッ！いってえー、いま咽喉チンコ蹴りやがったなエロフィギュア」

「リインをペロペロさんの口に入れた罰です！不潔です！汚らわしいです！あんなこの世の最果てのゴミ処理場にリインをおくるとほんとだ罰当たりです！」

「俺の口内をゴミ処理場呼ばわりするエロフィギュアなんて犯して当然だろ」

「リインはエロフィギュアなんかじゃないです！ペロペロさんの目をほんとうに腐ってますね！」

「リイン、お前いままでどこにいたんだよ？」

「ふふんヴィータちゃん。リインはずっといましたよ。ペロペロさんが到着したときからです。ただしリインはだれにもバレずにずっといましたから。あのアヒルさん

にみつかつちやいましたけど」

「どうやって？」

ロヴィータがそう聞くと、リインはない胸をそらして自慢げにいった。

「ペロペロさんの目から逃れたい一心で、リインは自身を透明化させる魔法を編み出したのです。そしてヴィヴィオちゃんをペロペロさんの魔の手から逃すために今日いちいちチャンスをうかがっていたのです」



「よし血圧器にこいついれてくるわ」

「ぎゃー!? 助けてください！ ヴィータちゃん！」

「まてまてひよつとこ。グロ映像になること間違いなしだからやめとけ」

指に噛みついてくるエロフィギュアをどうしようかと迷っていると、ヴィヴィオが嬉しそうにリインを指差した。

「パパ！ ようせいさんがいる！ ヴィヴィオがいいこにしてたからようせいさんがきたよー！」

「ん？ ああそうだな。ヴィヴィオがいい子にしてたから妖精さんがヴィヴィオに会いにきたぞー」

ヴィヴィオにエロフィギュアを手渡すとヴィヴィオは嬉しそうにエロフィギュアを内緒のこそこそ話しを始めた。ガークンもそれに加わってエロフィギュアが身構えているのがなんか面白い。

「ヴィヴィオは人気者だな」

「うちのアイドルだからな」

楽しそうにおしゃべりしているヴィヴィオたちを連れだつて残りをさつきと終わらせることにした。昼飯でも食いながらこいつらにはゆつくりおしゃべりさせてあげたいしな。

☆

聴力でロヴィータちゃんを遊んだり胸部検査でロヴィータちゃんのおっぱいを眺めることに失敗したり、なんやかんやがあったものなんとか問診までたどり着いた。ロヴィータとガークンと手を繋ぎながら頭にエロフィギュアをのせているヴィヴィオ。そんなヴィヴィオがかわいいです。

「はいでは問診しますね」

(. . . ω . . .)

お薬処方しますねー

— ) — i —

／ \ ; ; ( ) — ( ; ; ) \

／ \ ( . . ω . . ) チラッ

／、；、（）———（；、ノ）  
（；、ω、）

／、、、、  
うねー  
今度カウンセリングも受けましょ

／、；、（）———（；、ノ）  
———（；、ノ）

「はい問診終わりましたよ、ひよつとこさん。それじゃヴィヴィオちゃんも問診しましょう。おいでーヴィヴィオちゃん」

「いやいやいや!ちよつとまってよシヤマル先生。問いかけは?いま問いかけなしでしたよね。俺の目すら見ずに終わらせましたよね?」

「はい?なんのことでしょうか?」

「おらさつさとどけよひよつとこ。後がつかえてるだろ。シヤマルだって一人でこの量さばくのは大変なんだぞ」

「おいまて、いまの正当化されるのか!」

俺の声なぞ聞く耳もたないヴォルケンの面々など飛び越して、間違いを犯す男衆がいるかもしれないから、という理由でユーノとシグシグと三人で行動していたはやてに直訴した。

しかしそつと目を逸らされた。

俺が夜天の書の主なら全員性奴隷していたぞ。

## A, s 4 2. 健康診断、午後の部

六課の健康診断。ナース姿のはやてやヴィータが検査する中、男が一人検尿コップを片手に立っていた。

「検尿の募尿にご協力くださいーい！あなたの一滴が男性の性を開放しまーす！」

男の周囲にはぽっかりと空間に穴が開いていた。

男が立ち向かう世界は男のすべてを否定する。常識外を常識だと疑わず、道を貫くものをあざ笑う。どんなに声を大にしても世界はそっぽを向いて男を拒絶する。

それが世界の選択であり、それが男の生きる世界である。

「すみません、邪魔ですのでどいてくださいゴミ」

「失せてくださいゴミ」

打ちひしがれる男に情け容赦のない言葉をかける女が二人。その名は高町なのはとフェイト・テスタロッサ。健康診断の検査表を手に持っている彼女たちは男の腹を蹴りながら、壁のほうへ寄っていく。

「いた！お前らエースオブエースや優秀な執務官が人の出入りが激しい往来でそんなことしていいと思ってるのか！」

「大丈夫、魔法で俊くんのごときは空き缶だとみんな思ってるから」

「どうりで俺の呼びかけに誰も応えてくれないはずだ」

「わたしの魔法をあの手でキモい呼びかけの失敗に利用するのはやめて」

つばをはき捨てるのは。フェイトはつばが付着した俊の顔を拭く。

「手首のスナップが！手首のスナップが完全に首の骨を折りにいつてるからー！」

真剣白羽止めで受け止めるひよつとここにフェイトは舌打ちする。

通路の壁に移動したひよつとここは正座しながら二人に見下ろされていた。

「というか俊くん、なんでここに居るの？バレないように来たはずだけど……」

「天の導きだ」

「救いようがない神様だこと」

呆れた様子の方エイト。ひよつとはその手にもっている診断書の中身を読む。

「おー、まだ胸が成長するか」

「はえッ!? な、なんでわかるの!?!」

「去年と比べて胸囲が大きくなったからな」

「へー……方エイトちゃんさつき胸は去年とかわらないって言ったのに……。あれは嘘だったんだ……」

「あちがうの、ちがうなのは! ほら俊のせいでなのはが墮ちしたじゃん!」

そもそも比べる相手が悪いだろ。とは言い切れないひよつとこと。なのはの瞳孔がガングまりのため、それも仕方がない。

「相手が牛ならなのはが負けるのも仕方がない」

「人間です! ミルタンクじゃないです!」

「人間です(たつぶん)! ミルタンクじゃ(たつぶん)ないです(たつぶん)!」

「遊ばないで!」

顔を真っ赤にする方エイトの拳をさらりと避ける。なお鳩尾にかかどが綺麗にはいり悶絶。

悶絶し床を転げまわるひよつとこの顔を踏みながら方エイトは心底困った顔を浮かべる。

「それにしてもどうしよう……。コレが健康診断にくると困るからなにも伝えずに出てきたのに」

「甘いぞ方エイト。あと非常に悲しいぞ。一つ屋根の下に暮らすペットと下僕の関係なのに」

「気づいて、その二つの関連性はともに主人がいることだから。私たち奴隷になつてるから」

「それはつまりわたしがご主人……?」

「キミはほんこつメイド」

何かに気づくなのはにやさしいまなざしを向ける二人。自分がいかに有能であるかを一生懸命説明しはじめるのはを無視して

ひよつところはフェイトに泣き真似をす  
る。

「悲しいなあ……。俺ってそんなに信用されてないんだ……。ただちよつと幼馴染の検尿を採取しようとしただけなのに、それだけで健康診断があることを知らされな

いなんて」

「普通は幼馴染の検尿を採取しようとしなから

「俺がやったゲームでは——」

「俊。ちゃんと現実っていうゲームもプレイしないとダメだよ？」

「データが読み込めないからな」

棒読みで虚空をみつめるひよつところにそつと目元を拭うフェイト。

そんな現場にやってきたのはスバルとティア。二人とも自分の健康診断表を手にもちながら、なのはたちに気づいて近寄ってくる。

「あれ？なのはさんにフェイトさん、なにしてるんですか？」

「あ、ティア。いま生ゴミの処理をしようと思って」

「あー、ひよつとごさん。乙女の健康診断に男が立ち入るのはダメですよ」

「黙れメスゴリラ」

隣からなのはのビンタが炸裂する。

「ゴリラに謝って」

「なのはさん逆うツ！」

「すまん、スバル。申し訳なかった」

「あれ？いまゴリラ認定されました？スバル！ゴリラみたいな図式が成り立ちましたよね？」

「二人とも大人気ないなあ」

後輩をからかう二人をみて、嘆息するフェイト。

「はいはい、あんまりいじめないの。二人ともいまどこまでいったの？よかつたら一緒に回らない？」

「え？いいんですか？次視力にいかうかなって話してまして……」

「なのはも私も視力まだだから一緒に受けようか」

『やった！』

フエイトの言葉に本当に嬉しそうに喜ぶ二人。ふとフエイトが意識をスバルとティアに向けている間にひよつとこが姿を消していた。

「あれ？なのは、俊はどこにいったの？」

「俊くんなら予定があるっていつてどっかに消えたよ？それよりヴィータちゃんのとこにヴィヴィオがいるみたい。後でヴィヴィオのところにもいこうね」

「うん。まあ俊がいないのはいいことだし、いまのうちに視力測ろうか」

フエイトの提案に異を唱える者はおらず、一向はそのまま視力検査の場所へと足を運ぶ。

「えっと、視力検査の担当は後方事務の人みたいだね」

検査場所までついた一行は、検査の担当について話題にする。普段はあまり接点がない事務方だが、いったいどんな人なのだろうか？

「あ、ごめんなさーい！まったあ？」

仲良くしたいねー。なんてことを言い合う一行の前に現れた一人の人物。セミロングの髪の毛を茶髪に染めたその髪の毛はいかにも安っぽく、子供用のナース服を着ているからか異様にピチピチ、ムチムチとしたその姿を嘔吐を誘発させる。サイズが合わないためかナース服からは下着が丸見えであり、目の前のフエイトたちを誘っているのがガーターベルトにTバックで腰をくねらせるナース。よくよくみると乳首の露出はNGなのかニップレスを装着している。

『チェンジで』

有無を言わさぬその言葉にナースは体をくねらせながら唇に指をあてる。

「あはーもしかして、わたしのかわいさに怖気ついたのかな？あ、やべ。チンコでた」

腰を左右に動かしていたからか、その反動で密封から空気に触れたそのイチモツ。バレないようにポジションセットを行うが、四人ともガン見である。

「てへぺろ」

「ひよつとこさん。頭やばいつすよ。いや下半身のほうがもつとヤバ

いですけど」

「すげえ……これが猥褻物陳列罪の具現化つてやつか……！」

本気でひよつとこの頭を心配するティアと、猥褻物陳列罪の具現化に感動するスバル。そして――

「お願いだから……その姿はやめて……悲しくなってくるから……！もつと家で構つてあげるから……」

「あ、ヴィヴィオ？ パパにヴィヴィオの声をきかせてくれる？ パパね、お仕事してないはずなのに頭が壊れたみたいなの」

ひよつとこに抱きつきながら涙を流すフェイトと、ヴィヴィオの声で正気に戻そうとがんばるなのは。

「まてまて、人を変態みたいないないでくれ。失礼な奴らだな。警察呼ぶぞ」

「つかまるのはあなたですが」

「管理局員目の前によくここまでやるな」

「とりあえず、視力検査がいま手一杯で忙しいから俺が急遽ヘルプに入ることになった。これから一人ずつ棒で指していくから、その指された文字を思いっきり叫ぶように」

「なんか説明しはじめたんだけど」

「フェイトさんが乾いて瞳からハイライト消えてるけど」

「美人で優秀でみんなの憧れのフェイトさん。しかしその幼馴染が猥褻物陳列罪なんて汚点だね」

フェイトに同情しながらも、二人は付き合わないと面倒そうなのでひよつとこの戯れに付き合うことにした。

☆

「本来なら専用の機械を使うが、その機械がいまあいてないから昔ながらのやり方でいくぞ。まずはスバル。右目から」

スバルは渡された黒い目隠し棒で左目を隠す。決められた線から先へは出ないように注意しながら、ひよつとこが指示する場所の文字をいっていく。

「まずはここ」股間に指示棒を当てながら

「んく……股間……いやペニスですかね」

「正解だ。次はここ」股間に指示棒を当てながら

「ん〜……股間……いやあそこですかね」

「グッド。次はここ」股間に指示棒を当てながら

「ん〜……股間……いやちんこですかね」

「エクセレント。判定はH。度し難いほどの変態だ。次、譲ちゃん」

「え!? 終わりですか!? いまので本当に終わりですか!? 理不尽すぎませ  
ん!?!」

ひよつところは文句を言うスバルを無視してティアの検査に移る。

「まずはここ」

「ん」

「次」

「ぎ」

「次」

「も」

「次」

「ぢ」

「次」

「い」

「次」

「い」

「はい、続けて」

「んぎもぢいいいいいいッー!」

「はい、判定はA。アへ顔。次、フェイトいつてみよう」

「え!? それだけ!? いままで視力検査終わりですか!? なにほんとに書いてるんですか!? まっててください、これ怒られるの私ですから!」

二人の抗議を無視してひよつところはフェイトの検査に移る。ものすごくいやそうな顔のフェイト。未使用の目隠し棒をなのはに渡すと、なのはは無言でフェイトに送り返す。

「いつそのこと魔力弾で俊をぼっこぼこにしようかなあ」

「でも俊くん、十年間魔力弾浴びてきたからタフさだけは成長してきたよ」



「頭の中身は9歳のころが一番キレてたんだけどなあ」

「あーわかる」

しみじみとつぶやくなのはとフェイト。視線はもちろんムチムチナースに注がれる。

「とりあえずこれから——」

ガタンツ!!

「よし全員そこから動くな。というかその猥褻物陳列罪お前が動くな。股間のイチモツを上下に動かすな殺すぞ」

「あ、ヴィータちゃん！」

「よーなのは。電話サンキュー。やっぱりこいつ手伝いすっぽかしてお前らと遊んでやがったか。ひよつとこ、お前は男性職員のヘルプを頼んだはずだが？」

「あんなオスくさいところいたら俺の貞操が危ないだろ」

「心配すんな。いかにも危険人物ですってオーラを放ってお前を放り込むことで、ユーノに性欲をぶつけないようにするのが狙いだから。ちなみにお前の貞操なんて全人類が興味ない」

「カエルに人気なだけだなあ」

「お前はカエルと交尾でもすんのか。ほら、さつさと持ち場に戻れ！」  
アイゼンでひよつとこの腹を叩きながらひよつとこを室外に連れ出すヴィータ。ヴィータは呆然とする四人に向き直り、

「悪いな。あいつにヘルプを頼んだはいいものの、なのはとフェイトがきた瞬間いなくなりやがった」

ヴィータの言葉にまんざらでもなさそうな顔のフェイトとなのは。この場にいた三人は心の中でちよろいとつぶやいた。

「……あッ！そうだヴィータさん、ひよつとこさんに視力検査させられたんですけど、これどうすればいいですか!？」

「ん？ああ、もういつかいやり直しだな。あたしがやってやるからちゃんとした検査場所に行くか。おいそこの脳みそところてんできてる二人もいくぞ。つたく、あの猥褻物陳列罪のどこがいーんだか」

一人つぶやきながら本来の場所へ四人を誘導するヴィータ。その顔はうんざりしていた。

☆

そのころのヴィヴィオとリイン。

ひよつとこが遊んでいるさなか、ヴィヴィオはリインと一緒に問診をしていた。隣にはしつかりとシャマルがついており、こちらのほうで正式な問診は行っている。つまり、ヴィヴィオとリインの問診は形だけの行為となる。しかしながらのこの問診が非常にかわいく、癒しとなっていることは間違いなかった。

「おからだはどうですか!」

「そうですねえ、ちよつとだけ頭が痛いですね」

「あたまがいたいなの?じゃあヴィヴィオがいたいなのいいたいのとんどけーしてあがる。なのはママとフェイトママがしてくれるとね、すぐにいたいのがとんどくよ」

「本当ですか?それだけお願いします」

「はい!いいたいなのいいたい:...とんどけー!」

女性の頭に手を置いたヴィヴィオは盛大な身振りで手を後ろに動かした。ヴィヴィオは一生懸命であるが、はたからみたらただのかわいなお遊戯である。

「はい、これでなりました!」

「あ、本当です。ありがとうございます」

「はい!どういたしまして!」

にこにご笑顔のヴィヴィオ、そのヴィヴィオの頭をなでるリイン。「はー、本当にヴィヴィオちゃんはかわいいです。これがぺろぺろさんが産んだとは驚きです」

「リイン。ひよつとこさんは男で産めないわよ」

リインの発言を訂正しつつも、シャマルもヴィヴィオの頭をなでる。されるがままになるヴィヴィオは目を細めて幸せそうな表情を浮かべる。床にはガーくんが正座で

待機しており、守りは万全である。

「それにしてもパパおそいね。パパもあたまがいたいのかな?」

「ペロペロさんは単純に頭が悪いだけですから心配いりませんよ」

説得力を伴うその言葉にシヤマルは大きくうなづいた。ちなみにガーくんも床でうんうんと頷いており、ヴィヴィオだけは頭にクエツシヨンマークを浮かべていた。

「パパはやくかえってこないかなー。なのはママとフエイトママと  
いっしょにあそびたいのに」

「そうですねー。もう少しリインたちと遊びましょう。あと一時間も  
したらすべて終わりますので」

「ほんとう？じゃあヴィヴィオがんばるー！」

両拳をぐつと握り締めるヴィヴィオに、たまらず頬をすりすりと寄せるリイン。リインにとつてヴィヴィオは妹みみたいな存在だ。

「はー。どうすればペロペロさんの魔の手からヴィヴィオちゃんを救  
いだせるのでしょうか」

いまだにひよつとこからヴィヴィオを救いだそうとするリイン。  
どうやらまだ近いうちにリインとひよつとこのファイトが勃発しそ  
うである。

☆

その後のひよつとこ

あたりに人影はない。既に健康診断はすべて終わっており、後は帰  
るのみとなつている。ひよつとこの携帯電話には着信が100件以  
上たまつている。相手は六課の面々だ。

「あのー……ユーノさん？そろそろ帰らない？」

「ううん……もうちよつとしてからにしよう？」

「30分前にも聞いたけどなあ。ほら、ユーノも明日は仕事だろう？」

「じゃあ朝帰りする？」

うるんだ瞳でひよつとこを見つめるユーノ。綺麗に着飾ったユー  
ノは美少女と呼んでも差し支えないほどだった。もともと線が細い  
上に化粧もしているため、なみの女よりもかわいいユーノがひよつと  
こに抱きつきながら甘えている。

「俊、たまにしか会えないんだからもつと一緒にいようよ……。僕は  
毎日でも会いたいのに、我慢してるんだよ？」

「いやまあそうだけどき。俺はともかくユーノは忙しいだろう？」

「俊のためならスケジュールだつてあけるよ？」

「(……いかん。マジで襲いたくなる。ここは穩便に退散しよう)。あーそれは嬉しいけど、そういった話はまた今度にしよう」

しなだれかかるユーノの体をそつとどけながら、椅子から腰を浮かすひよつとここに、ユーノはぽつりともらす。

「古代ベルカについて……神夜がどれくらいかかわったのか知りたくない？」

その言葉にひよつとこの動きが止まった。

「僕なら俊が知りたい情報を教えることができるけど。ふふ、知ってるよ？そのために聖王協会にバイトしにいったことも」

「まいったな。……相変わらず情報通だな」

「ねえどうする？俊次第だよ？」

俊の頬に触りながら、そつと抱きしめるユーノ。そのユーノの甘い罨にかかりたい自分がいることをひよつとこはしつかりと理解したうえで、なおユーノをそつと体から離れた。

「俺が十年間探してもみつからなかったことだ。お前がもっているとは思わない。それに、俺はそんな情報交換でユーノを抱くほど腐っていない。お互い、翌日に仕事がない日に、蕩けるように貪りあおう」

その言葉にユーノは肩をすくめる。どうやらカマかけは失敗したようだ。

「そうだね。そのほうがいい。でも、言質はとったよ？ほら」

『俺はユーノを抱く』

にこにご笑顔でボイスレコーダーを見せびらかすユーノ。

「ちよ、ちよちよちよつてまで！それはなのはやフェイトに見せることは絶対にやめてくれよ!?頼むからな！」

「えー……どうしようかなー？」

「なんでもするから！なんでもするから！」

土下座するひよつとここに考え込むユーノ。その姿はまるで小悪魔のようだった。

A, s 43. 取材

六課の朝は遅い。日が昇り、学校へ向かうため子どもたちが通った道を行くと歩いてくる女性が一人。彼女の名前は高町なのは。才色兼備の管理局が誇るエースオブエースだ。栗色の髪を一つ結びにして、局の制服に身を包み歩く姿は百合の花である。

「あ、おはようございます。今日はよろしくお願いします」

人懐っこい笑みを浮かべる高町さんは取材陣に挨拶をし、出勤のため道を行く。

普段からこの時間なのですか？

「いえ、今日は休みと勘違いしていましたので。普段はいつもどおりの時間帯に出勤しています。今日はたまたまです」

なるほど。普段も出勤の足は徒歩ですか？

「まちまちですね。時間をかけて歩いてきたり、フェイトちゃんの車に乗せてもらったり。本当はわたしも免許がほしいお年頃ですけど、周りからとめられているんですよ」

そうなんですか？

『「こいつは人をひき殺す恐れがある」そう幼馴染に言われて、なぜかみんな納得してしまっただけです。まったく失礼な話ですよね」

それはたしかに失礼ですね。

「まったくです。マリオカートで予行練習しているので問題ないのに」

……たしかにこれは問題ありそうですね。

「ん？なにが良かったです？」

いえ、なんでもありません。

そうこうしているうちに高町さんの仕事場、六課へと到着する。

「まあ六課の敷地内を歩いてるだけでしたし——あつ、い、いまのオフレコで！ご、ごめんなさい！あーどうしよう、どうしようフェイトちゃん!？」

『なのはがんばってー!』

あ、大丈夫ですよ高町さん！こちらのほうでカットしておきますの

で！

「ほ、ほんとですか？ふう……。あ、それじゃこちらから受付をお願いします」

そうして通されたのは外部の者が名前や目的を提出し訪問カードをもらう受付所。六課はその役割上、綺麗どころが集められている場所のため、外部の者はここでしつかりと記録をとることになっている。

では、失礼して代表の私が記録を——おや、すでに名前が書かれていますね。いったいどんな方が六課に来ているのでしょうか？

名前・スカハッティ

目的・女子更衣室見学（小学生です、社会科見学のため仕方なくきました）

名前・ひよつとこ

目的・女子トイレ見学（小学生です、社会科見学のため仕方なくきました）

……なるほど、小学生ですか。

「その子たちはいま社会科の先生と一緒に見学の間中ですね」

『あ、ヴィータさん！庭で焚き火ですか？あれ？それにしてもへんな道具使ってますね』

『おうティアか。これはファラリスの雄牛とってな、レクレーションに使う楽しい遊び道具だ。こいつらがどうしても社会科見学していった駄々をこねるからな。仕方なくうちにあったものを持ってきてやったんだ。耳を澄まして

みろ。楽しそうな声が聞こえてくるぞ』

『誰か助けて！こいつマジで殺す気だッ！おい取材陣！六課のメス豚共がこんな鬼畜だつてことを世界に知らせるチャンスだぞ！』

『そのとおり！容姿に恵まれているにもかかわらず、それらは一切男に還元しない畜生で陰湿で腐った女性の姿をカメラで捉えて——ひよつとこ君、熱湯投入してき

た!?中と外で私達を殺す気だ！』

『中にはお湯を投入』

『外にはそつと薪の追加を』

『死因は酸素不足』

『ボラ○ノールのCMにのせるとは、こいつらまだ余裕あるな』

六課の庭から楽しそうな声が聞こえてくる。カメラマン、庭のほうもとつておこう。

カメラマンに指示を出す。すると高町さんが私の肩にそつと手を置いて、一ミリたりとも笑っていない笑顔で言い切った。

「このくんだり、カットでいいですよね？」

「あまりの怖さに首を縦に振ることしかできなかつた。

高町さんの視線から逃れるべく、手元に目を向ける。どうやらさきほどの小学生のほかにもまだ来訪者がいるみたいだ。

名前・ボビー・オロゴン

目的・おひるたべるお！

名前・ハクイノダテンシ

目的・クジヤクニナル！

私達取材陣は考えることを放棄した。

☆

お客様カードを首にぶら下げて私達取材陣が案内された場所は彼女たちの職場であった。高町なのはさんを中心とした花形六課の面々は一箇所に集まって仕事をしているらしい。それはつまるところ、女の園ともいうべき場所である。

本当に取材陣が入っていい場所なのでしょうか？

「あはは、そんなにかしこまることないですよ。本当に局の皆さんと同じような職場ですから」

あんまり期待しないでくださいね？高町さんはそう私達に釘を刺しながらそつと部屋をあけた。

「ヴィータちゃん！コピー機が壊れてしまいました!？」

「なに？まったく、なにしてんだよ」

「リインなにもしていません。ペロペロさんの顔面をコピーして指名手配犯にしようとしただけです」

「コピー機だって心をもってるんだ。こいつをコピーしたいわけない

だろ?」

「お前、俺だって心をもっていること忘れてないか?」

「なるほど。つまりコピー機のせいっぱいの抵抗ということですか」

「ティアみてみて!メタビーだよ!いま私メタビーを動かしてるよ!」

そつと廊下と部屋との境界線を閉じる高町さん。私達取材陣にニコニコと笑顔を浮かべながら、コンコンと扉をノックする。

そのノックはまるで、アイシテルのサインならぬシニタイカのサインに聞こえてしまったのは私だけだろうか。コホンと可愛らしく咳払いをする高町さん。先ほどよ

りも声を大きな声で私達に話しかける。

「さて、ではわたしたちが普段使うお部屋を紹介します。ここではいつも書類仕事や、教導の資料、座学や雑務などを行っています。ではご案内します」

編集点すらも理解している高町さん、先ほどの光景はなかったことにしたいのか初めて入りますという体で話を進める。

高町さんのあとから部屋の中へ入った私達が目に飛び込んできたのは、部屋の隅に二つ置いてあるゴミ箱にすっぽりと収まる二人の男性の姿だった。

「にゃくん」

「貴様ら空気が汚れるから無呼吸を維持しろと命令したはずだが」

ゴミ箱を蹴りながら男性二人を脅すのは騎士道を体現していることとで有名なシグナムさんだ。

「ん?なんだこのテレビカメラは?」

私達の様子に気がついたのか、シグナムさんがこちらに近づいてくる。いまにも吸い込まれそうなほど力強いその瞳、長髪をポニーテールに結んだその髪からはシャンプーのいい香りが鼻腔をくすぐってくる。

はじめましてシグナムさん。テレビミッドの取材班です。本日は皆のアイドルである六課の面々を取材に来ました。



「ふむ、取材か。あまりそういうのは好きではないが……頑張ってるらしいな」

先ほどまでの表情とは一点、やわらかい笑みで私達取材陣をねぎらってくれるシグナムさん。彼女のこのギャップに弱いという男性職員・女性職員は多いだろう。

『あのメス豚、朝から香水ついたりチユールスカートはこうしたり一番浮かれてたよな、スカさん』  
『うむ。デリヘルかと勘違いした』

ゴミ箱が壊れるかと心配になる勢いで蹴りだしたシグナムさん。男性二人の顔が真っ青まである。

「あ、気にしないでください。近くにいると穢れが移りますのでさっさと場所を移動しましょう。さ、こっちが六課の代表者八神はやてのデスクになります」

男性二人の関節があらぬ方向に曲がっていることなどお構いなしに、私達取材陣の案内を続ける高町さん。

あ、あの高町さん？そちらの男性二人は……

「え？なんのことですか？」

いえ、先ほどからヘルプを出してきているあちらの男性二人について……

「テレビ関係者の方々もお仕事大変ですよ。きっと疲れて幻覚でもみえているんですよ」

「いや六課には昔から自縛霊の噂もあるし、もしかしたらその霊をみている可能性もあるで」

うわあッ!?!ビ、ビックリしました。もう驚かさないてください八神さん！

「あはは、ごめんな。みながちよつと六課の空気に慣れてないかなおもて」

そういつて笑うのは六課の代表者、八神はやてさんである。

「けどなあ六課の様子なんてテレビにおさめても面白くないとおもうんやけど」

いえいえ、六課のアイドルである皆さんが働いている姿をみるだけ

で嬉しいというのが総意ですから。

「まあわたしやなのはちゃんにフェイトちゃんは9歳のころから働いてるし、そうした感情をもつ人がおってもおかしくないか。……いや管理局の上層部って大半がそんな人やつけ」

なぜかげんなりとした表情を浮かべている八神さん。なにか悪いことでも考えてしまったのでしょうか。

それでは八神さん、さっそくお仕事の紹介をよろしくお願いします。

「ええよー。みなのお働きぶり、ちゃんと撮っておいてな?」

こうして私達テレビミッドは八神はやてさんの先導の下、六課の仕事のカメラに収めることとなった。

『最近寒くなってきたな。こたつですか。よいしょつと』

『までひよつとこ。寒く感じるのはお前がパンツ一枚だからだ。そしてパンツの中からこたつを平然と出すのはやめろ。理が乱れる』

『ロヴィータたんみかん食うか?』

『お前通信簿に人の話をきかない類人猿って書いてあつただろ』

だから後ろにいる男性はいつたいたいだれなんだ?

☆

なぞの男性二人がいる部屋の紹介を終えて、私達取材陣が連れてこられたのは『イベント準備中』と名札が書いてある部屋の前であった。

あの、八神さん。ここは?」

私の質問に八神さんは満足そうに微笑みながら、

「ここは今月末に控えるイベントの準備室や。ほんとは公開しちゃいかんけど……今日は特別にちよつとだけ案内してあげるで」

そういつて口元に指をもつていき、私達に静かにするように合図を送る。そしてそつと開かれる扉、そこを通り抜けた室内には様々なコスプレ衣装ともいうべき衣類と、衣装の一つを身にまとった金髪の女性立っていた。

「うーん、あんまり魔女っ娘ぽくないな。やっぱりとんがり帽子とかぼちやのアクセサリーは必要だよね」

「ガーくんハカボチャノイヤリングガイトオモウナー」

アヒルと会話をしながら立っていた。

ん？あれ？おかしいな？アヒルってしゃべるんだっけ？

思わず後ろにいたスタッフに確認を取るもスタッフも絶賛混乱中のようだ。混乱中の私達にいち早く気づいたのはまさかのアヒル側だった。

「ロウカデシラナイナイケハイヲカンジタケド、コノヒトタチダーレ？」

「んー？この人達はテレビマンっていうて、今日は六課を取材にきたんよ」

「へー。ジャアガーくんアッチデミカンタベテクル」

「ガーくんまつたく興味なさそうやな」

「ガーくんはテレビよりあの子と一緒にいる時間のほうが大事だしね。こんにちは、テレビミッドの皆さん。フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。こんな格好ですいません」

魔女っ娘衣装に身を包んだハラオウンさんがくると回りながら照れたようにポーズを決める。六課一といわれるボディにもかかわらず、黒ニーソにガーターベルト、そしてミニスカートととてもきわどい格好をしている。私達取材陣はテストロッサさんを見て思わず前かがみになる。

「あ、あれ？どうされました？」

「あーフェイトちゃん。いますぐいつもの制服に戻ってくれるか？ちよつと刺激が強すぎたみたいや」

取材陣のこの状態を察してくれたのか、八神さんがそつとフォローをいれてくれる。なにもわかってなさそうなテストロッサさん。頭にクエツシヨンマークを浮かべながら着替えのために室内へと引き返す。一緒にいる女性のスタッフから冷たい視線が突き刺さる。

そんな私達に八神さんはそつと耳打ちする。

「いいもんみれたやろ？その代わりといってはなんやけど、キミらがみた男二人のことは他言無用の放送禁止にしてほしいんよ」

そ、それはなぜですか？ま、まさかどこかの国の王子とかでしょう

か？だからこそ、放送できないように――

くすりと含み笑いを浮かべる八神さん。私達取材陣はそれだけでなんとなく察してしまう。この業界にいれば、いやでも一度は耳にしてしまう、目にしてしまうこと。

この世には決してカメラにおさめてはいけない存在がある。あの男性二人がその世界の住人ということなのか。

わ、わかりました。

「うん、ありがとな。（存在が猥褻物陳列罪やから、決してカメラにおさめてはいけない存在なんよね、二人とも）」

ちょうどそのとき、扉が開く音と同時に制服に着替えたテストアロツサさんが顔を出した。

「おまたせはやて。皆さんもすみません。お時間いただいて」

い、いえ！そんなことはありません！

「そうですか？それならよかったです。ではここからは私が皆さんを案内しますね」

あれ？八神さんは案内されないのですか？

「わたしはちよつとやることがあつてな。これから上の人らと話し合  
いや」

「というわけで、皆さんわたしについてきてくださいね」

バスガイドのように旗をもったテストアロツサさんに連れられる取材陣一同。金髪の髪が揺れるたびに、男性陣の体が前のめりになる。

『あ、ティアーユ先生だ』

『今日はこけないみたいだね』

無言で男性二人に魔力弾をぶつけるテストアロツサさんに、取材陣は彼女に対する考え方を改める必要があるそうだ。

☆

同時刻、訓練室にて

「いい？みんな？今日はものすーつごくやさしい難易度にするから、全員倒れないでね」

「ふむ。普段の教導ではダメなのか？」

「普段の教導なんて公開したら誰もわたしの教導を受けたいなんて思

わないですよ、シグナムさん」

「まー目標がAランク以上だからな。こいつらの能力的に地獄の拷問になるのはしょうがない。目標下げればなのはもそれにあわせて下げてくれるが……」

「快感を捨てるなんてとんでもないツ!!」

ヴィータの言葉に声を大にして力説するスバルとティアナ。そんな二人に呆れた様子でジト目を向けるヴィータ。

「でも初期に比べたら動けてるし問題はないかな。むしろみんな成長速度が速くて驚いてるよ」

「なのはさんの胸の成長速度も早いですよ」

「え!?それほんと!」

「ええ。上にまたがって上下していたときに母乳が顔にかかりましたから」

『一番絞り生』ができるくらいには成長しているかと」

「からかってるよね!?二人とも直属の上司をからかっているよね!」

自分の胸を抱きながら涙目で怒るのは。まだだもん……まだなのはでないもん……。と小声でつぶやくその姿はあまりにも愛くるしく、男性がみたら一瞬のうちに虜になること間違いなしだ。

そんな光景をみているヴィータの携帯にフェイトから取材陣がもうすぐ来ることを知らせるメールが入ってきた。

「おーい、そろそろくるぞー。配置につけー」

『はーいー』

ヴィータの言葉に全員がいつせいに配置につく。今日のなのはたちに課せられた使命——それは教導に対して悪い印象をもたれないことだ。

「わたしたち管理局員は常に危険と隣り合わせな職業です。常日頃から自分たちに訓練を課して昨日より一步でも強くなることを心がけています。その中でもわたしは戦技教導官として、各地を飛び回り局員の技能向上のため教導をしまわっています。いまは六課に所属しこの子たちの教導を一年間担当しています」

横に体をずらしながら新人四人を紹介するのは。さきほどは案

内役としてカメラに出演したはずだが、本業の教導している姿をカメラに収められると思うと、さきほどまでとは違ったプレッシャーが襲い掛かる。もちろん、案内役なんかとは比べ物にならないほどの重圧だ。

自分が管理局にいる理由、それが問われるわけなのだから。

『いやなのはただのオカズだろ』

男性の断末魔が訓練室に響いたことはいうまでもない。

☆

普段よりもやさしい内容の訓練を視界に映しながら、自身は黒ひげ危機一髪の黒ひげ役になっているひよつとこ。タルにいれられ、シグナムの武器レヴァンティンで体を刺されながらなのは表情を観察する。

「なんかやりにくそうだな、なのは」

「そりや普段の訓練とは違うからな。カメラの前だと緊張もするだろう。あたしとしてはなのはがハマしないか気が気じゃない。あたしがヘルプに入れればいいんだけど……」

「テレビが撮りたいのは高町なのはであって、八神ヴィータじゃないからな」

その事実のため息を吐くヴィータ。今回の取材、テレビミッドの目的は大人気の管理局員、八神はやて、高町なのは、フェイト・テストア・ハラオウンの映像であって六課の映像ではない。だからこそ、高町なのはが案内役となり、八神はやてが橋渡しをし、フェイト・テストア・ハラオウンがイベントのPRを行ったのだ。

ぼんやりとなのはをみる、ひよつとこはつぶやく。

「二トの俺にはよくわからんが、あいつもあいつで大変そうだな」

その言葉にヴィータが鼻で笑う。

「そりや大変に決まってるだろ。なのはの地位は特殊で、本来ならお前という存在がいることがバレたら炎上どころの騒ぎじゃないからな」

「なのは達、俺のことを周囲に人間に突然変異した犬って説明してる

みたいだから大丈夫。その証拠にいまでも近所の子どもに骨つこもらうから」

「レヴァンティンで何度刺しても死なないところをみるに、生物兵器が妥当かもしれんな」

「いや、痛みで感覚マヒしてるだけだから」

不思議そうに眺めるシグナムに、タルが真つ赤に染まっている箇所を示すひよつとこ。嬉々としてそこを集中的に刺していくシグナム。

「俺もう八神家と縁切るわ。竿役のワンチャンしか信じられない」

そのザフィーラはというと、都合によりテレビに映すことができないヴィヴィオのお守りを買って出ている最中である。さきほどフェイトからアヒルと狼に囲まれてプリンを食べているヴィヴィオの写真が送られてきたばかりだ。

教導中のなのは達を眺めながら、またもやひよつとこが口を開く。

「なのはってさ、天使じゃん?」

「はいはい」

また面倒な幼馴染自慢が始まったよ。ヴィータがシグナムが顔を見合わせてめんどくさそうな表情をする。その後によく言葉はきつと『やっぱ俺の幼馴染ってかわいい、俺って勝ち組だな』こうだろう。そう予想していたのだが――

「どうして自分からその翼を捨ててしまうのかな」

その後によく言葉は予想外なものだった。

呆然とした表情をみせる二人を横目にひよつとこは言葉が続ける。「あいつ、料理は下手だけどお菓子づくりがうまくて、しかも幸せそうな顔して作るんだよ。空を飛ぶときも同じ表情をするんだよ。自分では気づいてないかもしれないけど。だからもったいないなと思う。せつかく空に愛されてるのに」

さびそうにつぶやくその表情は真剣そのもので、ついシグナムはレヴァンティンをひよつとこの尻から引き抜くことを忘れてしまう。

ひよつとこの言葉に様々な感情が混ざり合っている。自分にはなかった力に対する憧れ、そしてそれを捨てることを決断したなのにはに対する想い。それらをしっかりと読み取り、嚙下して、ヴィータは答

えた。

「あいつが空を飛ぶことが好きなのはあたしよりもよく知ってる。空に愛されてることも知ってる。ただ、それ以上に愛したい子にできたってことなんだろう」

「ひよつとご、お前はこれからが大変だぞ。空に浮気されないように、なのはをしつかりとつなぎとめておかないといけないからな。テストタロツサにしてもだ。お前はテストタロツサの運命を変えた。男ならばその責任をしつかりと果たすことだ」

そして主はやてのこともな。その言葉は口の中に飲み込んだ。いまいくべきことではないし、主の考えを聞かずに自分達だけで判断するのはマズイ。二人ともそう考えた。

高町なのはの心が変化したのは、とある少女と出会ってからだ。そして考えに考えた末、出した結論をひよつとごは尊重することにした。しかし、自分の中の整理をつけたくて、自分の中の考えを誰かに聞いてほしくてヴィータとシグナムに話した。それは間違ってたなかつたと思う。

「さすがは俺の肉便器共。いいこというな。あ、ちよつとまってシグナムさん！それ以上したら漏れちゃう！大腸の中の排泄物が漏れちゃうのおおおお！んほおおおおおおおおおおおッ！」

汚い男のアクメを真正面してみたヴィータは盛大に吐いた。

☆

高町テストタロツサ家のリビングにて、高町なのはは盛大に打ちひしがれていた。

「なんで……後半ばつさりカットされてるの……」

それもそのはず、なんせ自分の教導シーンの後半が丸々バツサリカットされておりその代わりに八神はやてのお料理コーナーが追加されていたのだ。あんなに効果があるかわからないぬるい教導をやった意味がまるでない、といわんばかりになのはは右隣にいるその元凶に肩パンを喰らわせる。

「しようがないだろ。アクメした俺が悪いんじゃない。あそこでレヴァンティンを引き抜いたシグシグが悪いのだ。たしかにアクメし



て遊んだのは悪かったが、俺なん

てロヴィータの吐しゃ物を顔面に浴びたんだぞ?」

「でも俊からしたらご褒美でしょ?」

なのはとは反対側でヴィヴィオを膝にのせながらテレビをみていたフェイトが話しかける。

「当たり前だろ。キレイになめとっておかわりを所望したわ。絶縁宣言されたけど。『お前の顔が頭から離れない。頼むから死んでくれ』という熱いラブコールつきで」

「まーたわたしとフェイトちゃんが謝りにいくのかー……」

「いや俺だって被害者じゃね?」

「そもそも俊くんが取材日に遊ぶのが悪いんですよ」

「だって暇だったもん。スカさんも最後はハロウインの打ち合わせではやてのところにいったし」

子どものように頬を膨らませるひよつとこにかわいくないと一蹴するなのは。

「パパよしよし。いいいいいい」

大人の会話を聞いていたヴィヴィオはとくになにも理解していなかったが、とりあえずひよつとこの頭をなでた。理由はもちろん、パパが一番いいこいいこしないと

いけなそうだったからだ。そんなヴィヴィオの考えに気がつくこともなく、ひよつとこは得意気に二人に顔を向ける。

「ありがとうヴィヴィオ。やっぱりヴィヴィオだけがパパの味方だな。それにこの家族の中で誰が一番いい子なのか理解している」

カチンとくるのはなのはとフェイトである。

「ないいつてるの俊くん。この中で一番いい子なのはわたしだよ? ヴィヴィオが一番わたしにいいこいいこするに決まってるじゃん」

「違うよなのは。なのはは学生時代も俊とは別ベクトルで問題児だったでしょ?この家で一番のいい子は私だよ」

「いや、なにいつてるのフェイトちゃん——」

「まあまあ、二人とも嫉妬はよくない——」

「そもそも、いつだって被害を被るのは——」

段々とヒートアップしていく口論の中、ヴィヴィオはガーくんを抱きかかえながらフェイトの膝から飛び降りた。そして三人に向かつて怒ったように口を開いた。

「ごらー！けんかはだめ！ヴィヴィオおこるよ！」

いまにもガーくんを投擲しそうなヴィヴィオに三人はピタリと口論をやめて、ヴィヴィオのほうに向き直った。

腰に手を当てて、いかにも怒っていますとアピールするヴィヴィオ。そんなヴィヴィオを前にして三人は無言で床に正座する。

「いい？これからヴィヴィオがいいこいこするから、それでフェイトママもなのはママもパパもがまんすること！けんかしちゃだめ！」  
『はい……ごめんなさい』

娘に叱られた三人はそれから一時間、なのは・ひよつとこ・フェイトの順番にいいこいこされ続けた。

その光景を家にやってきたリンディにムービーで録画され、親の間で笑いの種になったことはまた別のお話である。